

公益社団法人 日本青年会議所

明日への黎明

創立70周年記念誌

The Creed of Junior Chamber International

We Believe :

我々はかく信じる

That faith in God gives meaning and purpose to human life ;

真理は人生に意義と目的を与え

That the brotherhood of man transcends the sovereignty of nations ;

人類の同胞愛は国家による統治を超越し

That economic justice can best be won by free men through free enterprise ;

公正な経済は我々の自由な経済活動によってこそ果たされ

That government should be of laws rather than of men ;

政府には人治ではなく法治が必要であり

That earth's great treasure lies in human personality ;

人間の個性はこの世の至宝であり

and That service to humanity is the best work of life

人類への奉仕が人生最大の使命である

JCI Mission

To provide development opportunities that empower

young people to create positive change

青年会議所は青年が社会により良い変化をもたらすための成長と発展の機会を提供する

JCI Vision

To be the leading global network of young active citizens

青年会議所が行動を起こす青年の国際的ネットワークを牽引する

1970年JC宣言

理性と法による社会の秩序を確立し
個人の創意と公正な競争を通じて
経済の発展を実現し
隣人の幸せを願う者が正しく報われる
民主主義社会の達成を誓い
民族の気概を結集して
日本の平和と独立を守り
人間性への信頼こそすべての国を結ぶ
きずなであることを確信する

2001年JC宣言

日本の青年会議所は
混沌という未知の可能性を切り拓き
個人の自立性と社会の公共性が
生き生きと協和する確かな時代を築くために
率先して行動することを宣言する

綱領

われわれJAYCEEは
社会的・国家的・国際的な責任を自覚し
志を同じうする者 相集い 力を合わせ
青年としての英知と勇気と情熱をもって
明るい豊かな社会を築き上げよう

1988年JC宣言

変革の能動者たらんとする青年として
個人の真に豊かな生活の実現を通して
自立した快適で活力ある地域を創造し
自由と公正を保障する国家を基盤として
世界の平和と繁栄に貢献し
地球上のすべての人と
共に生きることを誓う

2020年JC宣言

日本の青年会議所は
希望をもたらす変革の起点として
輝く個性が調和する未来を描き
社会の課題を解決することで
持続可能な地域を創ることを誓う

青年会議所とは

青年会議所（JC）は「明るい豊かな社会」の実現を同じ理想とし、次代の担い手たる責任感をもった20歳から40歳までの指導者たらんとする青年の団体です。青年は人種、国籍、性別、職業、宗教の別なく、自由な個人の意志によりその居住する各都市の青年会議所に入会できます。

60年の歴史をもつ日本の青年会議所運動は、めざましい発展を続けておりますが、現在704の地域に約4万人の会員を擁し、全国的運営の総合調整機関として日本青年会議所が東京にあります。

全世界に及ぶこの青年運動の中核は国際青年会議所ですが、124ヵ所の国及び地域に110NOM（国家青年会議所）があり、約17万人の会員が国際的な連携をもって活動をしています。

日本青年会議所の事業目標は、「社会と人間の開発」です。その具体的事業としてわれわれは市民社会の一員として、市民の共感を求め社会開発計画による日常活動を展開し、「自由」を基盤とした民主的集団指導能力の開発を押し進めています。

さらに日本の独立と民主主義を守り、自由経済体制の確立による豊かな社会を創り出すため、市民運動の先頭に立って進む団体、それが青年会議所です。

日本青年会議所 設立趣意書

全人類の光明は、われわれ青年会議所の純粋な正義感と、目的完遂の確固たる実行力にうらづけられて初めてその輝きを見出し得る。

日本経済の建設にたずさわるわれわれ青年が、同志相寄り、相互の啓発と社会への奉仕とを通じて、広く全世界の青年と提携し、経済社会の現状を研究して、その将来進むべき方向を明確にし、経済界の強力な推進力となり、日本経済の発展に寄与せんとして設立した青年会議所は、日本においても現在までに10以上の都市にその成立をみた。

ここに志を同じくする日本各地の青年会議所が、相寄って全国的な組織を持ち、相互の連絡を図り、更に国際青年会議所に加入することによって、一層力強くその理想達成に邁進せんが為、ここに日本青年会議所の設立を企画した次第である。

1951年2月

大阪青年会議所
東京青年会議所
名古屋青年会議所
西宮青年会議所
函館青年会議所
広島青年会議所
前橋青年会議所
(50音順)

ごあいさつ



公益社団法人 日本青年会議所 第70代会頭

野並 晃

平素より公益社団法人日本青年会議所の活動に多大なるご理解とご協力を賜っておりますことに心より御礼申し上げます。そして、1951年（昭和26年）に創設された青年会議所が創立70周年を迎え、公益社団法人日本青年会議所創立70周年記念誌「明日への黎明」を発売する運びとなりましたこと、重ねて厚く御礼申し上げます。

今日も全国各地で光を放つ、青年会議所活動の起点となった若き55名の同志。そして、先輩諸氏と各地青年会議所による「明るい豊かな社会の実現」への尽力により紡がれた歴史は、私たち一人ひとりが日本全体を光り輝かせる礎となっています。これまでの青年会議所に対するご指導とご支援に対しまして、心より御礼申し上げます。

私たちにとって当たり前だった青年会議所活動は、未曾有のウイルスにより見直しを余儀なくされました。いわゆる常識であったFace to Faceのコミュニケーションや、それに伴う移動が制限されたことで思考が停止し、もがくように活動する過程で持続不能の危機に直面した青年会議所も少なくありませんでした。しかしながら、青年会議所創始の精神を受け継いできた私たちだからこそ、利己主義ではなく利他主義で、常識を疑い、主体的なアイデアを掛け合わせ、本気のアクションを起こし続けることで、確実に前進していく必要があります。

過去を振り返ると、私たちは、リーマンショックや東日本大震災等、不定期に訪れる危機を乗り越え、レジリエンスを高めていくことで確実に強くなってまいりました。今回の危機により、リアルにおける人的交流が制限され、オンライン会議やテレワークが台頭し、ボーダレスな社会が訪れました。かつての常識であったリアルと新しい常識であるオンラインが融合することで生み出される質的価値は光を放つ起点の一つとなりました。

数々の危機を乗り越えた先には「真に持続可能な国」が実現します。この機を前向きに捉え、一人ひとりのJayceeが「輝く個が切り拓く 真に持続可能な国 日本の創造」に向けて、この先も歩みを止めることなく、青年会議所が常に光を放つ起点となることをお約束致します。

結びに、この記念誌の発売を機として、過去の歩みを振り返り、素晴らしい未来へ向けた歩みをさらに強く進めてまいります。皆様におかれましては、引き続きご指導、ご鞭撻をお願い申し上げますとともに、益々のご健勝、ご多幸を心よりご祈念申し上げ、発売の御礼とさせていただきます。

Idea& Action 光を放つ起点となろう！

2021年度 国際青年会議所
会頭

小嶋 隆文



この度、公益社団法人日本青年会議所が70周年を迎えられますことを、心からお慶び申し上げます。平素よりJCI(国際青年会議所)に対し多大なるご理解、ご協力をいただいておりますことにも深く感謝申し上げます。

1951年の創設以来、日本青年会議所は、社会変革をもたらすために共に活動する若きアクティブシティズンの先導的機関へと成長を遂げてこられました。そして、コロナ禍の現在におかれましても決して歩みを止めることなくSDGsの達成や地域課題の解決に妥協することなく運動を推し進められておりますことに心からの敬意を表します。そして、そのような日本青年会議所の姿には世界中の国家青年会議所や各地青年会議所が勇気づけられております。

世界は今、分断されたグローバル社会となっており、それは、新型コロナウイルス感染症の影響により一層加速し、深刻なものとなっています。Withコロナ時代に必要となる新しい考え方や行動変革、いわゆるニューノーマルは全ての人に優しく、全ての人を幸せにするものでなければなりません。本年JCIのスローガンに掲げさせていただきました“ONE FUTURE”は、そのような想いを込めたものになります。

JCIでは「新型コロナウイルスの影響に直面する中で、経済と働く人の意欲を維持し再建する」ことをミッションにJCI RISEという取り組みを行っていますが、コロナ禍を乗り越える上で大切となってくることは、地域に住み暮らす人々が自分たちの地域をより良くしていくという平素からの青年会議所活動と何ら変わることはありません。JCIでは今後も深刻化、複雑化し続ける課題をJCIミッション／ビジョンを推進し具現化する最大の機会だと捉え、SDGsという枠組みを通して持続可能な解決策を生み出す使命があります。日本青年会議所の皆様には、これからもJCIアクティブシティズンフレームワークを活用し、協力団体と連携して、新たな時代の創造に邁進頂き、模範的な国家青年会議所として世界を牽引していただきますようお願い申し上げます。

結びに、日本青年会議所がこの創立70周年を契機に、より一層のご発展を遂げられますことを祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

A handwritten signature in black ink, which appears to be the name Ryūmon Oshima, written in a cursive style. The signature is positioned above a horizontal line.

内閣総理大臣
岸田 文雄



日本青年会議所が創立70周年という節目の年を迎えたこと、心よりお祝い申し上げます。

日本青年会議所の創立から70年。昭和、平成、そして令和と、時代は移り変わってきました。そして、この間に、社会・経済、そして人々の暮らしも大きく変わりました。

他方JCI日本が掲げてきた「修練」「奉仕」「友情」の三つの信条は、時代が変わろうとも、全く色あせることなく、基本的な考えとして、JCI日本の中に根付いています。

こうしたぶれることのない骨太な方針の下、JCI日本は、時代に合わせて、「持続可能な地域の実現」や「環境問題などSDGsの推進」など、新たな挑戦を続けられているものと承知しています。変化をチャンスと捉え、新たなチャレンジを続けるJCI日本の活動に心から敬意を表します。

そして、昨年から続く、新型コロナウイルスの感染拡大は、これまでに経験したことのないほどの大きな嵐となり、日本を直撃しました。新型コロナウイルスによりお亡くなりになられた方々、そして御家族の皆様方、厳しい闘病生活を送っておられる方々に対して心よりお見舞いを申し上げます。

新型コロナとの闘いは、今もなお続いています。厳しい経営環境にある中、地域経済を支え、雇用を守るため、事業継続に奮闘されている若手経営者の皆様を最大限お支えするため、政府としては、引き続き、資金繰り支援や事業再構築・生産性向上支援など、様々な施策を講じてまいります。

新型コロナウイルスだけでなく、少子高齢化、環境問題、デジタル化の遅れなど、日本を取り巻く状況は決して楽観視できるものではありません。しかし、日本青年会議所の皆様の、日本を背負って立つという強い責任感、あふれんばかりの情熱に触れるたび、未来に向けた希望の灯火は失われることはないと信じております。日本経済の更なる成長や国民生活の安定は、皆様の肩に掛かっていると言っても過言ではありません。政府としては、「成長戦略」と「分配戦略」を車の両輪として、成長と分配の好循環を実現し、皆様とともに、新しい時代を切り拓いてまいります。引き続き、御協力をよろしくお願い申し上げます。

私自身も、OBとして日本JCシニアクラブに所属させていただいております。日本青年会議所の皆様の思いを胸に刻み、内閣総理大臣としての職務に邁進してまいります。

最後になりますが、関係者の皆様の御健勝と、日本青年会議所のますますの御繁栄をお祈り申し上げ、私の祝辞とさせていただきます。

令和三年十月吉日

一般社団法人 日本経済団体連合会
会長
十倉 雅和



この度、公益社団法人日本青年会議所が創立70周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

日本青年会議所は、「新しい日本の再建は我々青年の仕事である」という決意のもと、1951年の設立以来、「修練」「奉仕」「友情」の三つの信条に基づいて明るい豊かな社会の実現を目指し、社会貢献や社会的課題への取り組みを推進してこられました。2020年代行動指針においてSDGs推進を掲げ、社会、経済、環境等、様々な分野で積極的に取り組んでおられることは、「Society 5.0 for SDGs」を目指す経団連の方向性とも軌を一にするものと存じます。さらに、日本青年会議所は長年に亘り、わが国政財界を中心に優れたリーダーを輩出してこられました。この間の皆さまのご努力と熱意に対しまして、深く敬意を表したく存じます。

昨年来の新型コロナウイルス感染の世界的な拡大により、私たちの生活、あらゆる社会経済活動は一変いたしました。ワクチン接種が進む国・地域では、感染対策を講じながら社会経済活動の正常化が進むなど、一部で明るい兆しもありますが、非常に感染力の強い変異株の流行を背景に、コロナとの戦いは引き続き厳しい局面を迎えております。感染防止と両立させる形で、早期にグローバルな社会経済活動の回復を実現させるためには、あらゆる世代が連携・協力して、この難局を乗り越えていく必要があります。

そうした中、日本青年会議所の皆さまの若いエネルギーと高い志には、大いに期待しております。20歳から40歳までの会員の皆さまが多様なネットワークを築き、互いに研鑽を積みながら社会課題の解決に貢献していくという日本青年会議所の活動の重要性は、今後、より一層高まっていくものと存じます。

経団連は、これまでの成長戦略の路線に一旦終止符を打つ新たな構想として、2020年11月、「新成長戦略」を公表いたしました。その中で新しい資本主義の形として、「持続可能な資本主義」を掲げ、コロナ禍を乗り越えて持続可能な成長を実現するために、多様化・複雑化するステークホルダーの要請に応え、多様な価値の包摂と協創によって資本主義を進化させていくことの必要性を強く訴えました。次世代を担う皆さまが、新しい発想と真摯な情熱で、わが国と世界が現下の困難を乗り越えてさらに飛躍・発展していくための方向性を示してくださることを願っております。

日本青年会議所のさらなるご発展と、ご関係の皆さまのますますのご健勝をお祈り申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます。

公益社団法人 経済同友会
代表幹事
櫻田 謙悟



このたびは、日本青年会議所が創立70周年の節目を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

1951年の設立以来、青年経済人の英知と行動力によって、国内の各種課題に取り組まれる一方で、国際的な交流活動を積極的に展開されています。また、各地青年会議所では、地域社会の活性化に貢献する多くのリーダーを輩出されました。青年会議所の活動全般が生んだ長年の成果は、皆様の献身的なご尽力の賜物であり、ここに深く敬意を表します。

私が代表を務める経済同友会も、皆様と同様、高い志の下でさまざまな活動を行っております。1969年に貴会議所会頭に就任した牛尾治朗氏(ウシオ電機取締役社長、当時)が、その後本会の代表幹事(1995～1999年)を務めるなど、皆様にもゆかりのある多数の諸先輩に参画いただいております。最近では、特に若手経営者や起業家の参加促進に注力しています。これは昨今の状況で、「若さ」が生み出す創造力や行動力といった価値に、改めて大きな期待を寄せているからに他なりません。

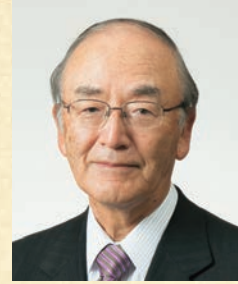
現在も続くコロナ危機は、先行きが不透明な状況となっています。他方、世界を見渡すと、超大国の対立激化、破壊的なイノベーションの進展、気候変動リスクの高まりなど、コロナ危機発生以前からの問題も重くのしかかったままです。

このように極めて不確実性の高い状況の下で、我々は環境変化に順応していくことだけでは十分ではありません。今後の軸となるようなビジョンを自ら打ち出し、自ら関与できるものは、主体的に実行することが重要になると考えます。経済同友会は、これまでも「行動する政策集団」として実現・実践という点を重視しておりましたが、今後は一層その必要性を感じております。私はこれを「“Do Tank”への進化」という新しい軸として打ち出し、私自身のミッションの一つとしています。また、進化を遂げるためには、会員の「若さ」や「若返り」は大切な要素です。

この点において、貴会議所の特長は際立っており、他の団体には見られない運営を行っております。今後も皆様が高い志の下、互いに切磋琢磨され、新たな時代において日本のみならず世界に向けた活躍を期待申し上げます。

この栄えある創立70周年を契機に、貴会議所の輝かしい歴史と実績を礎として、ますますご発展を遂げられることを祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

日本商工会議所
会頭
三村 明夫



～コロナ禍を克服して日本経済を再生する先駆者として～

公益社団法人日本青年会議所が創立70周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。1951年の貴会議所創立以来、意欲あふれ、果敢な行動力を持つ青年経営者が地域での活動を大事にしながら、誇り高い志と青年としての英知、勇気、情熱をもって日本、そして世界の社会発展に貢献されていることに対し、心から敬意を表します。

さて、わが国経済は、長引く新型コロナウイルス感染症の影響により、未曾有の危機に直面しており、深刻な打撃を受けた中小・小規模事業者は大変厳しい状況にあります。コロナ禍からの再起に向け、感染防止と経済活動の両立が必要であり、ワクチン接種や検査体制、医療提供体制の充実をはじめ、各種支援策の継続・拡充が極めて重要です。

コロナ禍は我々に様々な困難を与えましたが、同時に多くのことを学びました。デジタル化の遅れや大都市集中リスクなど、課題の大部分は以前から指摘されていたことですが、コロナ禍はそれを誰の目にも明らかにし、またそれに対処すべき時間軸を劇的に短縮させました。

国民全体で克服すべき課題を共有した今こそ、デジタル活用による生産性向上やビジネス変革、地方分散化などへの取り組みを加速させていくことが重要です。また、今回のコロナ禍のみならず、新たなパンデミックや激甚化する自然災害などの不確実な将来に備えるためには、国全体としてのレジリエンスすなわち「戦略的ゆとり」を持つ必要があります。

こうした危機に直面している今こそ、わが国を真に持続可能な国とするために、経済の主役である貴会議所や商工会議所をはじめとする民間の力を結集して、挑戦していくことが極めて重要です。

貴会議所では、コロナ禍克服のための政策提言やオンラインを活用した商談会、生産性向上のためのITツールセミナー、テレワーク普及を促進する体験セミナーなどの開催に積極的に取り組まれており、誠に心強い限りです。また、2010年に貴会議所、日本商工会議所青年部、全国商工会青年部連合会、全国中小企業青年中央会は友好関係を締結して以来、災害被災地の支援や事業承継サミットなどを連携して実施するなど、組織の垣根を超えた若手経済人の活躍は時宜を得たものであり、今後もこうした活動を心より期待しています。

日本商工会議所も、全国515商工会議所のネットワークを最大限に活用しながら日本経済の再生に全力で取り組む所存です。貴会議所におかれましても、引き続き野並会頭のもと、一層結束を深められ、積極的な活動を展開していただきたいと存じます。

結びに、貴会議所のさらなる活躍を心から祈念申し上げまして、お祝い、そして激励の言葉とさせていただきます。

JCIクリード	2
JCIミッション	
JCIビジョン	
JC宣言	3
綱領	
青年会議所とは	4
日本青年会議所 設立趣意書	5

ごあいさつ

公益社団法人 日本青年会議所 第70代会頭

野並 晃	6
------	---

祝辞

2021年度 国際青年会議所 会頭

小嶋 隆文	7
-------	---

内閣総理大臣

岸田 文雄	8
-------	---

一般社団法人 日本経済団体連合会 会長

十倉 雅和	9
-------	---

公益社団法人 経済同友会 代表幹事

櫻田 謙悟	10
-------	----

日本商工会議所 会頭

三村 明夫	11
-------	----

JCI日本物語 15

プロローグ

真に持続可能な輝ける未来へ	16
---------------	----

第1章 廃墟に響く青年の足音 (1948~1950)	17
----------------------------	----

第2章 ボランティアにかける若い情熱 (1951~1953)	19
--------------------------------	----

第3章 世界会議を軸に組織拡大 (1954~1959)	22
-----------------------------	----

第4章 高らかに謳う「明るい豊かな社会」(1960~1963)	24
---------------------------------	----

第5章 奉仕から開発へ軌道修正 (1964~1968)	27
-----------------------------	----

第6章 変革の嵐に挑む (1969~1971)	31
-------------------------	----

第7章 若者と未来を拓くヤング・ブルー (1972~1973)	34
---------------------------------	----

第8章 新しい社会秩序を求めて (1974~1977)	37
-----------------------------	----

第9章 国益を論じ、国家社会に貢献 (1978~1980)	40
-------------------------------	----

第10章 行政改革の先頭に立つ (1981~1983)	43
-----------------------------	----

第11章 来たるべき日本の時代に (1984~1987)	46
------------------------------	----

第12章 規制緩和、地方分権に立ち向かう (1988~1991)	49
----------------------------------	----

第13章 地球市民の時代 (1992~1994)	54
--------------------------	----

第14章 阪神・淡路大震災、NPO元年! (1995)	81
-----------------------------	----

第15章 「新人間社会」の創造 (1996~1998)	93
-----------------------------	----

第16章 個と公の調和を求めて (1999~2001)	120
-----------------------------	-----

第17章 新たな半世紀の歴史に向けスタート (2002~2004)	148
-----------------------------------	-----

第18章 新たな日本の夢に向かって (2005~2007)	170
-------------------------------	-----

第19章 「気高き日本」の創造に向けて (2008~2010)	190
---------------------------------	-----

第20章 「尊敬される日本」に向けて (2011)	212
---------------------------	-----

第21章 「凜然とした誇りある国」日本の創造へ (2012)	220
--------------------------------	-----

第22章 勇敢なる日本へ! (2013)	230
----------------------	-----

第23章 「たくましい国」日本の実現へ (2014)	240
----------------------------	-----

第24章 すべては未来を生きる人のために (2015)	250
-----------------------------	-----

第25章 あらゆる価値の根源となれ! (2016)	260
---------------------------	-----

第26章 世のため人のためが自分のため (2017)	270
----------------------------	-----

第27章 万物に感謝の心を以て、公に誠を尽くす (2018)	280
--------------------------------	-----

第28章 誰もが挑戦できる幸せな国 日本の創造に向かって (2019)	290
-------------------------------------	-----

第29章 軌跡を紡ぎ、奇跡を起こそう! 真に持続可能な国 日本へ (2020)	300
---	-----

第30章 Idea&Action 光を放つ起点となろう! (2021)	310
-------------------------------------	-----

エピローグ

「理念が浸透していた状態」への原点回帰	314
---------------------	-----

第60代—69代 会頭インタビュー 315

第60代会頭(2011年)	福井 正興氏	316
第61代会頭(2012年)	井川 直樹氏	318
第62代会頭(2013年)	小畑 宏介氏	320
第63代会頭(2014年)	鈴木 和也氏	322
第64代会頭(2015年)	柴田 剛介氏	324
第65代会頭(2016年)	山本 樹育氏	326
第66代会頭(2017年)	青木 照護氏	328
第67代会頭(2018年)	池田 祥護氏	330
第68代会頭(2019年)	鎌田 長明氏	332
第69代会頭(2020年)	石田 全史氏	334

歴代会頭所信と目で見ると 各年代の歩み 349

トピックス

SDGsへの取り組み 506

JC宣言文の改訂について 510

2020—2024

JCI JAPAN Strategic Plan 516

JCと災害とのかかわり 526

JC期待論

落合 陽一 336

小巻 亜矢 337

三浦 瑠璃 338

安田クリスティーナ 339

ダイヤグラムガイド

JCI日本ストーリー篇 341

データ篇 491

10年先のこの国のかたち 536

JC用語・キーワード解説 542

あとがき 544

JCI日本物語

—— プロローグ

真に持続可能な輝ける未来へ

1948年、我が国の未来を憂いた日本の一人の青年が、行動を起こした。その後、その青年の思いに共感した多くの若者たちが「新日本の再建は、我々青年の仕事である」と志し、青年会議所運動の灯をともした。その後瞬く間に活動と運動は拡大し、70年間に渡り多くの成果を残してきた。では、なぜ青年会議所はこんなにも活動・運動を拡大させてきたのか。もちろんそれは、先達のご尽力の賜物である。そしてそれに合わせて、努力の先に、達成したい「明るい豊かな社会を築く」というビジョンがあるから、私たちはこれほどまでに拡大を続けることができたのである。もしビジョンがなければ、それは灯台を失った人のように道を見失い、その場に立ちすくむことだろう。しかし私たちにはビジョンがあるから、団結し、前に進んでいくことができるのである。

2021年度は新型コロナウイルスの感染拡大が一向に収まらない中で、ほとんどを緊急事態宣言もしくはまん延防止等重点措置が出ている状況において活動を行わなければならず、なかなかリアルな環境で事業を行なうことが叶わなかった。しかし、私たちは、この2021年という時間を通じて間違いなく、どんな状況であったとしても、なすべきことを実行できる力を積み重ねてきた。青年会議所は「実践する組織」「(シンクタンクではなく) Doタンク」であり、知識だけを深めるのではなく、その知識に基づいて具体的なアクションを起こしていかなければならない。

2021年度はアイデアとアクションを積み重ね、一人ひとりが輝く個となって運動を起こせた。「輝く個が切り拓く 真に持続可能な国 日本」からまちにより良い変化が訪れ、愛が溢れる国へと間違いなくこの組織は引き継がれていけよう。ただ、70年積み重ねてきたから80年、90年、100年目も間違いなくあるのかというと、決してそんなことはない。一日一日をたゆみなく歩むからこそ、未来が訪れるのだ。

JAYCEEは絶えず前を向き考え、信念を持って行動してきた。誰もが経験したことのない事態の中での挑戦は、地域の、そして日本の未来を明るく照らすきっかけとなったに違いない。

第1章 廃墟に響く青年の足音

1948-1950

■ 青年経営者の使命

日本における青年会議所運動は、ひとりの青年実業家の「ある挫折」に端を発した。それは、戦後間もない1948(昭23)年の夏のことであった。

占領軍による公職追放の嵐は産業界にも及び、財閥解体、大企業分断と経済界は骨抜き同然になった。他方、民主化の名のもと労働攻勢は日増しに激しさを加えていた。2・1ゼネストはマッカーサーの指令で回避されたとはいえ、打ち続く大ストライキの鎮圧に戦車まで出動する状況だった。日本はどうなるのか。戦争という代償で得た自由経済体制は本当に定着するのか。このまま社会主義への道をつっ走ってしまうのか。事態は混沌としていた。

そんな頃、28歳の青年経営者・三輪善雄は、手弁当をぶらさげて物価庁に通っていた。勤めの合間をみて会社にも顔を出していたが、これからどうやって自分の会社を守っていけばいいのか、考えれば考えるほど、自分が頼りなく思えてくるのであった。

そんなある日、父が親しくしていた財界の大立者を丸の内の事務所に訪ねた。この時代の経営者として進むべき道について、先輩に教を乞いに行ったのだ。ところが、答えはこうだった。

「我々はパージで、どこにも出られない。これからは君達の時代だ。私達、年寄り君達の後からついて行く」。この、意に反した言葉は、血の気の多

い青年にとってはショックだった。先輩、頼むに足らず、責任を回避するばかりか、自分のパージの解けることしか考えないのか、と。

だが青年の若い血は、そのままでは収まらなかった。ここで挫けてなるものか。挫折を乗り越え、何かを創り出そう、というエネルギーに煮えたぎっていった。もう、お偉方のご厄介にはなるまい。会社を再建し、祖国を救うのは我々青年以外にないのだ。自分達の世代で、新しい組織をつくろう。

■ ニュートラルな青年の団体

まず三輪は、東京商工会議所の藤岡清則総務課長に心を打ち明けた。藤岡もまた、内部分裂を起こしていた商工会議所の前途を憂え、健全な発展のために青年部的なものをつくろうとしていた。藤岡は首を縦に振り、「まず友達を集めなさい」とアドバイスした。三輪は黒川光朝を引き入れた。話は進展し、藤岡に青年商工会議所というのはいかがか、と言われ、わが意を得たり、とばかり飛びついた。

ところが、進展していくうちに両者の話に食い違いが生じてきたのだ。藤岡は、当初から商工会議所の青年部的な組織をつくろうとしている。しかし、三輪や黒川は馬場先門(商工会議所)にも工業クラブ(同友会、経団連)にも偏しないニュートラルな青年達の団体を意図していたのだ。商工会議所の青年部

では話にならない。せつかくの構想も、ここに至って一時ストップを余儀なくされてしまった。商工会議所の役員の中には、この建物から追い出しにかかる動きすら現われた。

しかし、藤岡は三輪達の意を汲み、青年達の純粋な組織をつくっても商工会議所にマイナスにはならないと、説得役を引き受けてくれた。そればかりか、外国にもそうい



東京青年商工会議所創立総会(東京'49.9.3)

う団体があるようだから、と資料を取り寄せてくれたのだ。これが、JCIの存在を知るキッカケとなったのである。

■ 青年会議所運動の灯ともる

三輪、黒川は外国の資料集めをする一方、同志を募り歩いた。小坂俊雄、堀越善雄、丸晋といった旧来の友人を集め、7名の同志で具体的な準備に入った時は1949年の2月になっていた。4月には戦後インフレを終息させるためドッジラインの大手術が施された。社会面では下山事件、三鷹事件、そして松川事件と暗黒の事件が続き、戦後日本は物情騒然たる空気に包まれていた。日本は、必死になって「戦後」から立ち直ろうとしていた。なればこそ、先輩頼むに足らず、と立ち上がった有志達は、祖国再建の使命感がみなぎってくるのを覚えたに違いない。

1949年9月3日、東京商工会議所講堂において、東京青年商工会議所創立総会が開催された。集まった同志は48名。初代理事長には三輪善雄が選ばれ、ここに日本における青年会議所運動の灯がともされた。

■ 設立趣意書

新日本の再建は我々青年の仕事である。

更めて述べる迄もなく今日の日本の実情は極めて苦難に満ちている。この苦難を打開してゆくため採るべき途は国内経済の充実であり、国際経済との密接なる提携である。

その任務の大半を負っている我々青年は、あらゆる機会をとらえて互いに団結し自らの修養に努めなければならぬと信ずる。

既に欧米の各地においては青年商工会議所が設立せられ一九四六年にはこれらの世界的連絡機関として国際青年商工会議所さえ設置せられておる。われわれはこれ等の国際機関との連携は素より、青年の持つ熱と力とを以って産業経済の実勢を究め、常



第1回日本青年会議所設立準備委員会
(名古屋 '50.12.16)

に認識を新たにして、その責務の達成を期したい。

ここに政治経済の中心地、東京に在る我々青年はその使命の極めて重大なるを思い、同志相寄り東京青年商工会議所の設立を企図した次第である(原文のまま)。

■ 修練・奉仕・友情

東京でJCの地固めがすむと、メンバーは各地に呼び掛けを開始した。1950年3月には大阪JCが設立され、前橋、函館、西宮、名古屋、広島、旭川……と、JCの灯は点火されていった。それに伴い、相互の連絡を密にする必要が生じ、1950年5月1日に第1回JC懇談会が東京工業クラブで開かれた。懇談会には東京、大阪、前橋、函館、神戸、大宮、千葉、芦屋から21名が参集した。そして、この懇談会で「修練・奉仕・友情」の三信条が決まったのだ。

■ 日本JC設立を決定

全国JC懇談会は、その後も引き続き開催された。第2回は同年8月、東京で26名の参加で開かれ、JCバッジの制定、年齢制限35歳等が決まった。

同時に、日本JCの設立にも論議が及んだ。東京は時期尚早論だったが、大阪、特に森下泰の「全国的に運動を起こすには、一日も早く統一体をつくるべきだ」との強硬論に影響され、11月に大阪で44名の参加で開かれた第3回懇談会で、日本JCの設立が決定し、設立準備委員が任命された。12月には第1回日本JC設立準備委員会が名古屋で開かれるというスピードで、事は進んでいった。

なお、先に商工会議所法の制定に伴う改称問題により、1950年9月1日から東京青年商工会議所は東京青年会議所と改められていた。したがって、名称は日本青年会議所と決まった。

第2章 ボランティアにかける若い情熱

1951-1953

■ 日本青年会議所創立総会

1951年2月9日、東京商工会議所2階大会議室で日本青年会議所創立総会が開かれた。午後1時、開会。丸晋設立準備委員(東京)が東京JC設立から今日に至る経過を報告し、次に満場一致で東京JC理事長黒川光朝が、議長に選出された。定款、役員選任は原案通り可決。初代会頭には弱冠32歳の黒川光朝が就任し、副会頭には徳永博太郎(大阪)、大隈孝一(名古屋)の両名が選ばれた。ここにJC運動の要ともいべき日本青年会議所は10JC、506名をもって誕生した。

設立趣意書の全文は、次の通り。

全人類の光明は、われわれ青年会議所の純粋な正義感と、目的完遂の確固たる実行力にうらづけられて初めてその輝きを見出し得る。

日本経済の建設にたずさわるわれわれ青年が、同志相寄り、相互の啓発と社会への奉仕とを通じて、広く全世界の青年と提携し、経済社会の現状を研究して、その将来進むべき方向を明確にし、経済界の



日本青年会議所創立総会(東京 '51.2.9)

強力な推進力となり、日本経済の発展に寄与せんとして設立した青年会議所は、日本においても現在までに10以上の都市にその成立をみた。

ここに志を同じくする日本各地の青年会議所が、相寄って全国的な組織を持ち、相互の連絡を図り、更に国際青年会議所に加入することによって、一層力強くその理想達成に邁進せんが為、ここに日本青



日本青年会議所創立総会(東京 '51.2.9)

年会議所の設立を企画した次第である。

1951年2月

大阪青年会議所、東京青年会議所、名古屋青年
会議所、西宮青年会議所、函館青年会議所、広
島青年会議所、前橋青年会議所

(50音順)

■ JCI 会頭ロザリオの名演説

初年度の日本JCの事業は、組織づくり、勢力拡大、JCIとの提携の3点にしぼられるが、なかでもJCIとの提携は大事業だった。日本JC発足早々に開催された香港での第1回JCIアジア会議は、ビザの関係で出席できなかった。しかし、5月にカナダのモントリオールで開催された第6回JCI世界会議には6名の代表団を派遣し、JCI正式加盟を果たした。

幸先の良いスタートとはいえ、代表団の苦労は並大抵のものではなかった。講和条約調印の前のごとで、海外渡航は厳しく制限されていた。黒川会頭以下、三輪、森下の各理事と岡谷(東京)、八木(西宮)、丹波(横浜)の6名は商社の囑託になってパスポートの交付を受ける、という時代だったのだ。

世界会議についての知識も乏しいままの参加で、珍談・奇談の多い旅ではあったが、日本代表団にとって強烈な印象に残るのは開会式、なかでも時の会頭、フィリピンのラモン・デル・ロザリオの冒頭演説である。

「JCには国境も民族もない。それは、全世界の

青年のものである。その誇りにおいて、我々は今ここに、かつての敵国・日本のJC代表団を、心からなる歓迎をもって迎えようとする」。ウワーッという拍手、まばゆいばかりのスポット・ライトが日本代表団に浴びせられる。全員が立ち上がって我々の方を向く……。 「あの光景、あの感動は、今もって忘れることはできません」と、森下は回想している。

■ 日本で最初の国際会議

1952年、講和条約が発効された。その年の4月20日から4日間、日本JCは東京で第2回JCIアジア地区会議を主催した。大人も子供も含めて、日本で開かれる国際会議の第1号である。創立1年2カ月にして国際会議の主催とは冒険だ、という慎重論があった。他方、困難な目標に挑戦するのがJCだ、という積極論もあった。その急先鋒は、大阪の森下泰である。第2年度の小坂俊雄会頭(東京)は「強行論も時期尚早論も、JCを思えばこそその議論。早く皆の気持ちが一つにならないか」と悩んだものだったが、大勢は実施論に傾き実施の運びとなった。

JCIのバグスレー会頭はじめアジア各地から31名が来日し、日本JCからは311名が参加した。東商をはじめ政財界からのバックアップ、各報道機関の応援が得られ、会議は予期以上の成果をあげることができた。

■ 日本JC、世界会議で初の表彰

日本JCは1年2カ月にして、JCI加盟、第2回アジア会議招致という難事業を成し遂げた。国内においてもJC運動は拡大していった。第2年度末には13JC、1525名、第3年度末には44JC、1970名に達した。この急速な拡大はJCIの驚嘆するところになり、1952年9月メルボルンで開催された第7回世界会議で表彰されるに至った。日本からは、外貨割当などの理由で大竹敬太郎(札幌)の単独参加となり、総会では盛大な拍手のなか銀板に刻み込まれた表彰額が手渡された。



第2回アジアコンファレンス(東京 '52.4.20)



第1回全国会員大会
(名古屋 '53)

■ 内部体制の充実

日本JCの量的拡大に伴い、第3年度の堀越善雄会頭（東京）は内部充実という課題に挑戦した。主な事項を列挙しておく。①35歳の年齢制限を40歳に引き上げ。②常設の8委員会制度を採用（活動、国際問題、経済問題、教育・社会改良、財務、定款決議入会許可、褒賞、拡大）。③全国を9ブロックに分ける。

堀越会頭から、第4年度の服部礼次郎会頭（東京）に移行する寸前、1953年6月25日、北九州を中心とする西日本一帯に豪雨が襲った。61年来という豪雨は700ミリに達し、被害は100万人を超える大災害に発展した。福岡JCは救援活動に立ち上がり、救援の電報を受けた日本JCも動き始めた。これが、日本JC初の統一事業になったのだ。

統一事業といえば、1953年11月7～8日に第1回全国大会が名古屋で開催され、30JC、153名の参加をみた。九州の水害救援に活躍した福岡、北九州、飯塚の3JCには表彰状がおくられ、名古屋の中心地・桜通りにプラタナスの記念植樹を行なった。第2回全国大会は翌年5月に富山JC主管で開催され、地区大会は近畿、九州、東海、北海道、北海道道東で開催された。

■ 議事法の研修

この頃から既に、ロバート・ルール・オブ・オーダー（議事法）の勉強会が始まっていた。三輪善雄が次の一文を『JCニュース』に記している。「何百年かの中にデモクラシーの名の下で数知れぬ無秩序、混乱、乱闘の討論を経験してきた西欧の先輩が、あらゆる会議の成功・不成功の可能性を分析し慎重に組み立てたのが、この議事法テキストである。各地の国際会議に出席された方は、事前に勉強しておけば、もっと会議内容が理解できたのに、と残念がられることと思う」と。議事法はJC活動だけでなく、経営にも役立てるべく勉強に励む熱心なメンバーがみられた。

第3章 世界会議を軸に組織拡大

1954-1959

■「JCソング」と「若い我等」

第5年度会頭は大阪の森下泰が就任した。創立以来の論客、積極派だ。森下は6年度も歴任したが、6年目には従来の年度（7月1日～6月30日）を暦年制に改正したため通算2年半、会頭職についた。この記録は後にも先にも森下一人である。

この時代は「歌に明け、歌に暮れた」時代でもあった。前年度にJCの歌をつくろうという提案があり、第5年度早々の1954年8月、函館の第3回会員大会で、松田基（岡山）作詞・奥山勝太郎（岡山）作曲の「JCソング」が発表された。このメロディーはJCIにも採用される榮譽を得ている。更に、森下会頭の任期終了の直前、1956年10月には「若い我等」が発表された。行進曲ふうな歌もほしいという要望から、桐朋学園の入野義郎の作詞・作曲で生まれた。ちなみに、入野は日本JC初代事務局長咲山文男の友人で、咲山の語るJC論に基づいてつくられたという。



JCソング作成者 表影式（'54）

■会頭選挙制度を制定

1956年9月、第8回臨時総会で会頭選挙規定を設け、公選に踏み切ることが決まった。従来、会頭人事は役員の上層部で選考していたため、各地JCから疑惑の眼で見られる恐れもあった。それは公正であるべきJC運動の精神にもとる、ということで公選に踏み切ることになった。翌第7年度から施行された。

この選挙規定には日本JCへの会費を完納したJCに選挙権が与えられるという一項が付されたため、これを機に会費が続々と納入されるようになったという。ただし、第7年度の会頭立候補は三輪善雄一人だったため、無投票で決まった。

■内外1500名の東京世界会議

1957年10月16日、落成間もない産経ホールには当初の予想をはるかに上回る海外30カ国の代表400名と、国内会員1100名が参集した。ステージには加盟50カ国の国旗が立てられている。来賓の石井副総理、藤山外相、前尾通産相、足立日商会頭、そして駐日40カ国大公使の出迎えを受け、満場の拍手を浴びながら日本の若い象徴・皇太子殿下の入場である。皇太子様も一人の青年として初めて国際的な会議にご出席になられた。

開会式は君が代の吹奏で始まり、三輪会頭が日本JCを代表し、歓迎の辞を述べた。「世界会議の意義、その第1は次代を担う青年達が、互いに未知の国を知り、相互理解に基づく青年達の協同行動が人類の福祉、世界の平和に貢献すること。第2に開催国の人々に会議を通じて青年会議所への理解と期待が得られることにある」。2年間にわたる準備活動、否、自分が東京で蒔いた一粒の種が、9年目にして世界会議を主催するまでになった感慨を、心から噛み締めるような演説だった。

■LT委員会の新設

1958年度の橋上保久会頭（福岡）は内部充実に力を注いだ。後に指導力開発委員会の母体になった

左：第12回JCI世界会議
(東京 '57.10.17)

右：千会頭とラザク マレーシア首相



リーダーシップ・トレーニング(LT)委員会が設置されたのはこの年である。日本生産性本部と提携し第1回派米チームを実現したり、第1回軽井沢セミナーに参加したのもこの年である。

よりポピュラーな話題では、新しいバッジの制定がある。前年、世界会議を経験して従来の日本独特のバッジでは具合が悪いということになり、JCIと共通のデザインに改められた。

社会奉仕の面でも、見落とせない事業があった。前年、旭川JCが辺地教育でJCIローカルJC賞を受賞したのがきっかけで、辺地教育委員会が新設され、主に東北、北海道を中心に活動していた。ちなみに、旭川の辺地教育の歴史はかなり古く、3代目理事長の頃からという。「辺地の子供達に明るい陽をあてよう」という運動は、旭川市民に受け入れられただけでなくJCI褒賞の対象にまでなり、日本JCの事業としても取り上げられた。

■ 初の会頭選挙

1959年度会頭の選出は、初の選挙になった。候補は戸田英夫(広島)、千宗室(京都)である。両者の立候補演説に対し、フェアプレーと健闘を念じる熱狂的な拍手がおくられた。肝心の両者の所信はさほどの相違点がなく、結果はヒト桁の僅差で千候補の当選となった。所信に違いがなく、しかも二人は仲良しだった。立候補に至るいきさつを、千は次のように語る。

「両方の関係者に薦められて出た。考え方も似ているし、友情も熱いのならジャンケンか、どちらかが引込むという方法もあるが、あえて投票で決めようとしたところにJCの体質があると思う。妥協でなく、きっちり所信を表明して問う。友情は友情とし、その上で選挙を通じてトレーニングしよう。それがJCの一つの在り方だ、ということを見せた」。フェアに戦った両候補は、小差とはいえ敗れた戸田は泣き、勝った千も「戸田君にすまない」と涙を流した。

■ 「文武両道を修めよ」

千会頭は、経済人の多いJCでは異色の文化人である。入会の動機からして「その昔、武士の要諦は文武両道を修めることにあった。現代風に言えば、真の社会人は経済と文化の領域をとともに深める、ということだろう。まず、自分自身で味わってみよう」と。事業計画の基本方針は「社会的責任を十分に自覚し、いついかなる場所でもJCメンバーとしての誇りをもって行動しなくてはならない。ヒューマニズムを基調に人間的な教養を高め、同時に青年としての勇氣と情熱をもって行動することが必要」と述べた。

■ 初の全国理事長会

経済活動を精力的に展開する一方、内部整備も推進していった。最たるものが、全国理事長会の発足だ。規模の拡大に伴い、日本JCとローカルJC、あるいはローカルJC相互のコミュニケーションが滞りがちになってきた。このため、4月初め2日間、東京に全国の理事長が集まり理事長オリエンテーションや、日本JC役員との意見交換を行なった。この試みが非常に効果的であったため、毎年、全国理事長会議が開かれることになった。また、従来の委員会をJCIの委員会制度に準じて、体系的に整備したことも見落とすことのできない改革であった。

■ 次年度会頭、再び選挙に

10月、仙台の第8回全国会員大会では、昨年に引き続き次年度会頭選挙が行なわれた。東京の石川六郎と静岡の桜井尚二。東京の大企業経営者・副会頭と、地方都市の中小企業経営者・日本JCLT委員長と、二人は立場を異にする。

これまで、会頭は東京と大阪・京都勢が代わる代わる出ていたが、桜井はローカルの考え方・感じ方を掲げて名乗り出たのだ。ローカルJCの台頭を反映した動きである。だが、結果は石川候補が圧倒的な票差で当選した。

第4章 高らかに謳う「明るい豊かな社会」

1960-1963

■ JC 綱領なる

安保条約をめぐる怒号と叫喚の巷と化した1960年。日本JCも無縁ではあり得なかった。内部的にも、8000名に拡大した幅広いメンバー層の意思統一は充分とは言えなかった。このような内外の情勢から、石川六郎会頭（東京）は、数年前から研究されていた日本JC綱領の作成に踏み切った。定款委員長石川保治（尾鷲）はじめメンバーの協力のもと、年初から綱領の作成に入った。

同委員会はJC三信条、定款、JCIクリードをベースに論議を重ね、また広く意見を求めるなど努力を重ねた。議論百出、原案作成までに1年近くを要した。

最初の原案では「社会的・国際的……」となっていたが、石川会頭は「国家的」という言葉を入れるべきだ、と強く主張した。「日本JCはJCIに属しているが、日本はアメリカとも違う独自の見解を持つべきだ」という考え方だった。これに対し「国家的という言葉はナショナリズムの復活と見られる」という反対論が強く出された。しかし、石川会頭の強い要請により、年末の総会で決定をみるに至った。

■ ハガチー事件、京都 JC 声明発表

1960年は綱領作成の1年だったが、この間、揺れる安保闘争は6月10日、「ハガチー事件」を起こした。北陸信越地区大会の前日であり、石川会頭は地区大会の所信表明で遺憾の意を表した。その後、京都JC（小谷隆一理事長）は「民主主義のルールを逸



創立10周年記念祝典（東京 '61.5.17）

脱した議会政治と秩序を失った一部民衆の行動を放置すれば、国民が営々と築き上げてきた我国の経済と成長しつつあるデモクラシーの基調は一瞬にして崩壊するであろう」と、声明を発表した。政治問題に関する声明発表は初めてだった。日本JCとしても検討したが、安保に関するローカルの意見は分かっていたため、声明発表の権限はないと判断した。しかし、翌年の全国大会で京都JCの声明は高く評価され、最優秀JC賞がおくられた。

■ 10周年に5項目の実行提案

1961年5月17日、東京・上野に落成した東京文化会館で10周年記念祝典が行なわれた。池田首相はじめ来賓400名、全国からメンバーと家族約1000名が集まった。山崎富治会頭（東京）は所信表明で、5項目の実行提案を行なった。①一党一派に偏せず、若さと良識から是々非々主義で当たる。②貿易自由化に打ち勝つ調査・情報収集機関を確立。③道徳教育に注目し地域社会で教師との懇談の機会をもち、教師の海外研修派遣も行なう。④身体不自由者の雇用、貧しい人々の救済を今まで以上に実行。⑤若い世代を代表し平和部隊構想を研究する。

■ 三信条は誤解されている

1962年、古市実会頭（大阪）は、年初の全国理事長会議の挨拶で、「JCの三信条は誤解されている」と、重大発言を行なった。「三信条という抽象的スローガンを行動目標として掲げるのはよくない。地区大会、全国大会を設営する場合にも三信条は掲げないことにしよう」というのだから大変だ。かなり抵抗があった。同発言は「JC運動の行動方向について」と題する統一見解として発表された。キーワードを拾ってみる。

修練・奉仕・友情はトレーニングを基調とする精神面の目的を抽象的に要約したもので、行動目標ないし事業ではない。綱領に掲げられている「明るい豊かな社会」とは「近代化された福祉社会」を指す。

現代人は、職業の区別を問わず経済から逃避できない。その意味で我々は広く経済人と呼ばれる。経済活動には、国際的視野に立った政治感覚が要求される。政治経済を研究し、積極的に青年経済人として発言することが、JCの使命とする社会への奉仕である。日本JCは具体的事業の実行団体というよりも、統合調整機関としての任務を充分に果たすべき

だ。実行団体は全国各地JCである。JC運動を論議する場合、自ら垣根を巡らせた内面的な運動に立て籠もってはならない。外部へのアクションに発展しなければならない。

古市会頭は、統一見解の徹底を図るため全国を飛び回った。「考えるJCから、発言し実行するJC」のスローガンを地でいったのだ。そのため企画室が設

けられ、政治問題、経済問題、社会問題の3委員会が発足。政治問題に関する委員会(柳沢昭・東京)が初めて正式に設けられた。

■ 日本青年会議所 新聞の創刊

1963年、瀬味保城会頭(東京)も、統一見解の徹底を図った。「志を同じうする者の集団」として、確固たる連帯感に欠けるという認識に立った活動だった。内部的な意思統一には、行事が重要な役割を果たすものだが、今年イベントがなかった。

そこで瀬味会頭は、新聞発行を決意した。「私は新聞会頭と言われてもいい。JCほどの若さと英知と行動力に富む全国組織が、発言し実行する行動を確認している現在、ジャーナリズムに取り上げられないような活動は無きに等しい。よってJCの存在・目的・活動を広く社会に訴え、かつ内部のコミュニケーションの徹底を図るため新聞の創刊を決意した」と、



創立10周年記念祝典(’61)懇親会



JCI世界会議（テルアビブ'63）
社会改良計画最優秀賞を受賞する貝塚JC

固い決意を表明した。

1963年1月19日、『日本青年会議所新聞』第1号一面トップは、池田勇人首相と瀬味会頭の対談記事が写真入で飾られた。「青年の海外交流を」「JCは人づくりの場」「国際的視野を持って」……といった見出しが、当時の社会情勢とJCの在り方を表現している。

■ 社会改良計画へ第一歩

8月15日、一面トップは「札幌、唐津、貝塚、姫路JCでJCI推進事業の社会改良計画を推進」と、報じた。従来の単なる社会奉仕から一歩前進し、積極的に社会の問題点を調査し基本的な欠陥を探し当て改善していこう、という事業だ。後の社会開発事業・CDのはしりである。

例えば貝塚JC(岸本仁八理事長)の事業だが、貝塚市の問題点を徹底研究した結果、まちの問題点は

環境衛生問題にあるとの結論を得たため、下水道を改良することによって、し尿処理等の改善を市に要請した。市当局も率直に応え工費4億円を計上し、都市環境衛生の向上に努めることになった。「JC水道」と呼ばれるこの事業は、テルアビブの第18回世界会議で社会改良計画最優秀賞という日本JCにとって初の金的を射止め、賞金1000ドルが瀬味団長に手渡されたのであった。

第5章 奉仕から開発へ軌道修正

1964-1968

■ 創始の精神、創造の精神

東京オリンピックの1964年、人々は平和の祭典に胸を膨らませていた。だが、この華やかな年の日本JCは、「深い反省と沈痛なる自戒」の幕開けだった。小谷隆一会頭（京都）は、年頭所信で「自らに厳しく創始の精神に返れ、創造の精神を発揮せよ」と、万余のメンバーに訴えたのだ。先輩達の「青年の力で国を救おうという激しい情熱と勇氣」を呼び戻し、「単に古いものを受け継ぐのではなく自ら新しいものを創造する努力をしよう」と呼び掛け、そのために「近代的共同社会の確立と福祉国家とは何か、について考察しなければならない」と提案した。

そして、企画室を中心に福祉国家の研究に当たさせた。企画室担当理事には牛尾治朗（東京）、小野正孝（長野）、佐々木春海（長崎）の名が連なっていた。

彼らは、日本の社会における近代的共同社会、いわゆるコミュニティの欠如という問題点を摘出した。我々には家族・国家という観念はあるが、社会という観念に乏しく共同社会の一員たる市民としての訓練が欠如している。だから、民主主義の機構はもっていても、その運動が正しく行なわれない。真に近代的国家であるためには、その基盤である近代的共同社会の確立に、我々が率先して努める必要がある、と提案した。

■ 運動の連続性

小谷会頭は近代的な福祉国家建設という大目標を打ち立て、国家・社会に貢献すべく強力なリーダーシップを発揮しだした。具体的事業として①地域経済開発、②公共精神高揚運動、③社会改良計画（CDプラン）の三本柱を打ち出し、地区大会、全国大会と精力的に全国を駆け巡って創始の精神を説き、福祉国家を論じた。

小谷会頭のもう一つの事業は、事業運営の連続性と定款の変更、組織改正だった。小谷会頭は前年度全国大会の決議文を、全面的に引き継いで本年度方針とした。そして、9つの地区大会が同じテ-

マで分科会を開くこととした。全JCが同テーマを取り上げることにより同志的結合を強固にし、更に年度最後の全国大会の分科会で同テーマを再度取り上げ、深く検討を加えたうえで決議とし、翌年の事業活動の基本とする。こうして、非連続な事業活動を連続させて実行することとした。

■ 鈍角の傘の下に

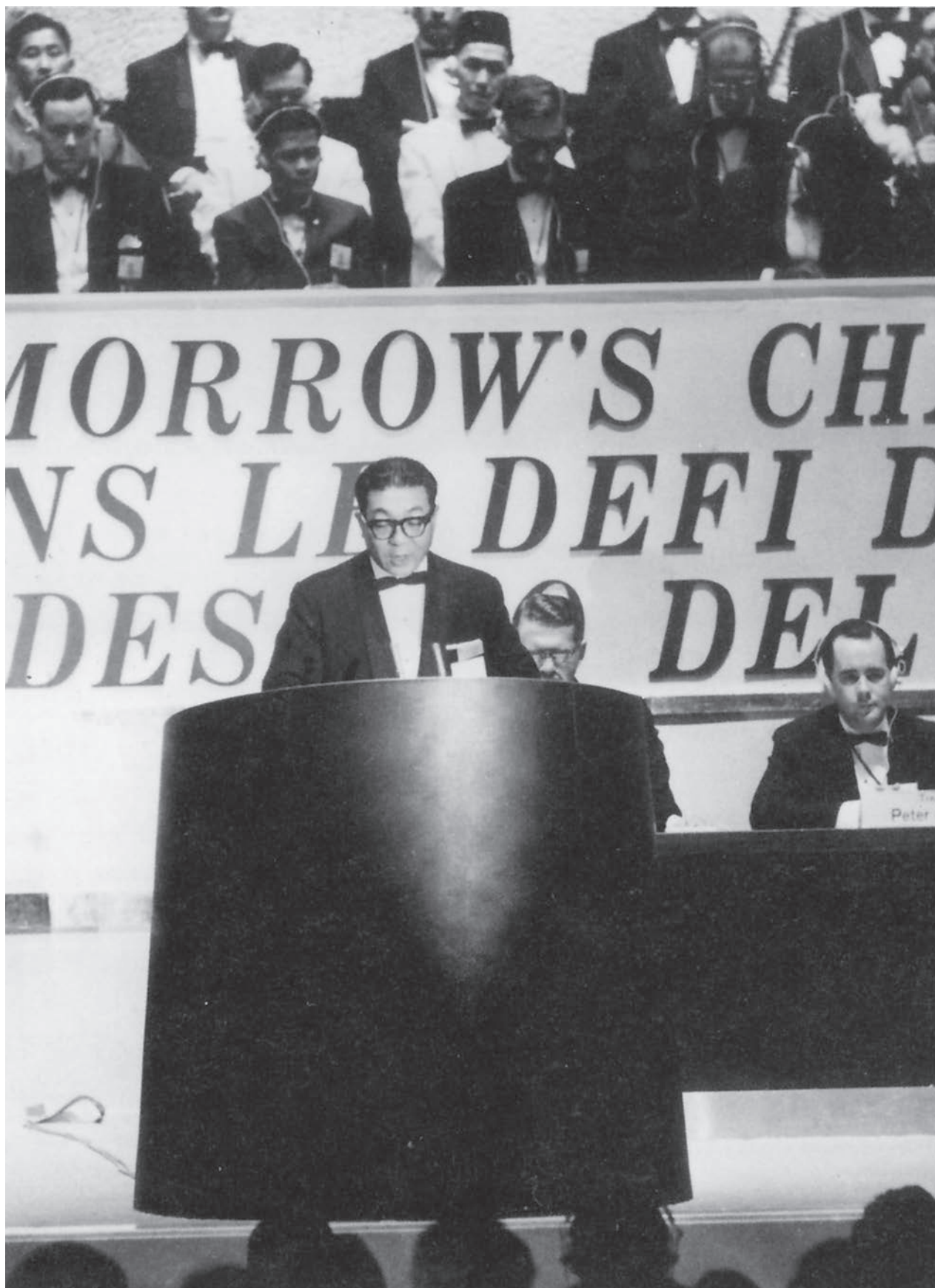
1965年、日本経済は大転換期に直面した。従来の封鎖経済体制から国際的な開放経済体制の中で、いかに基盤を確立していくか。量的拡大から質的充実の時代が変わったのだ。

遠山直道会頭（東京）は、「鋭角論と鈍角論」なる考え方を示した。「主張を旗幟鮮明に鋭角的な団体として突き進むことは簡単だが、振るい落とされる人が必ず出る。それよりも、鈍角の傘の下で一人でも多くの仲間と一緒に運動を進めるべきだ」。人によって主義主張は異にしても、JCが求めるギリギリの一点においては一つになれる。そういう集まりでなければならない、という趣旨だ。

■ 動き出した勤労青少年問題

遠山会頭は、勤労青少年問題に力を投入した。生活に恵まれない勤労青少年達が、単調な職場と寮や家庭との往復の生活の中で、ともしれば豊かな人間性を失っていないか。そして、彼等にイデオロギー的な目的をもって働きかけてきた労働者音楽協議会活動に、勤労青少年を委ねることはできない。とすれば、自由世界、自由な企業活動を通じて自由人としての誇りの上に立つJCが、彼等に新しい方策を打ち出さねばならない。

この危機感の背後には、70年問題があった。他の団体は指摘していなかった70年問題を、JCは強くアピールしていたのだ。使命感に燃えた遠山会頭は小坂徳三郎、鹿内信隆、石川六郎、坪内嘉雄ほか数名の講師を全国24カ所に派遣し、青少年問題の重大性について警鐘を鳴らした。題して「勤労少年



第21回JCI世界会議（京都 '66.11.7）
演説する社会頭

対策懇談会」。具体的な行動としては、労働者音楽協議会に対する音楽文化協会を立ち上げた。音協を思想問題から離れた文化活動の推進と意義づけ、JCを中核に組織拡大を図る都市も現われた。

■ 「われらが会頭」の名スピーチ

1966年11月7～12日、第21回世界会議が、皇太子・同妃両殿下ご臨席のもと国立京都国際会館で開催された。海外63カ国1157名、国内2358名が集まった。落成間もない京都国際会館を全館使用する国際会議は、これが初めてだった。ローカルから就任した初の会頭・辻兵吉（秋田）が演壇に進む。「我々は、常に進歩を求めてやまぬ人間性に無限の信頼をよせ、その共感の上にある我々の友情を貴ぶ。信頼と友情こそ、お互いに理解し合うためには絶対に欠かすことのできない前提だ、と信じるからである」。

自称「田舎者」の会頭が、国際会議場で名演説をぶったのだ。会議の成功は、日本JCメンバーにJCI意識を植え付けることになり、地方都市出身でも会頭を務められるのだ、という空気づくりに役立った。

■ 初の日米青年会議所会議

世界会議では、初の日米青年会議所会議が開かれた。辻会頭が「合同会議が開放的で自由な討議の場になり、創造的、建設的な考え方や活動がもたらされ、日米両国が再び戦争の悲劇を繰り返さないよう希望する」と語れば、米JCのサトル会頭も「この会合によって理解を深め、明日への挑戦に応じることもできる」と述べ、協議に入った。

岡崎恒雄代表（大阪）は、米国の小学校教科書で日本について誤記したものと指摘し、誤りを正しお互いの理解を深めるため日米JC間で教科書の交換をしたい、と述べた。牛尾治朗代表（東京）は、貿易上の障害は情報交換、各国商慣習の相違を理解することによって克服できる、と述べ、辻代表はアメリカタルサと東京を情報交換の根拠地とし

て、できるだけ早く実現することを提案、米側も賛同した。

■ 政治の季節

1966年は京都の世界会議というビッグイベントがあったが、その他の事業は従来事業を精選する方針で進められた。特筆すべきは、第1回政治問題セミナーである。辻会頭は政治問題研究特別委員会（牛尾治朗委員長・東京）を設置し、8月24日から3日間、軽井沢晴山ホテルで開催した。

講師は大平正芳、松野頼三、石田博英、中曽根康弘、宮沢喜一の5氏。ゲストに藤山愛一郎、田中角栄の両氏が出席、会員は120名の参加をみた。当面の政治を担当する閣僚、与党の幹部、若手議員が一堂に会し、おぞなりの外交辞令抜きに、それぞれの政治信念を訴え、わが国のビジョンを語った。

■ 昭和の世代へ

1967年、この年からメンバーは全て昭和の世代になる。柳沢昭会頭（東京）は昭和3年生まれ、昭和の会頭トップバッターだ。1月22日、世界会議の思い出も新たな京都・国立国際会館で、第1回全国理事長会議が行なわれた。前年12月27日、国会は「黒い霧解散」に追い込まれ、年明けに総選挙が持ち越され、柳沢会頭は総選挙、そして続く統一地方選挙に取り組みねばならなかった。

そのため、本年度から常設の政治問題研究委員会（大森修委員長・豊橋）を設置した。理事長会議で柳沢会頭は、次のように語った。「常設の政治問題研究委員会は、今後の運動に貴重な示唆を与えてくれると思うが、誤ってはならないのは政治はJC運動の目的ではない、ということだ。地域住民にプラスとなり、地域を盛り立てていく手段としての政治を知り、勉強していくことが基本でなければならない」。

■ 社会奉仕から社会開発へ

この年は、政治と同時に社会開発が重点事業とし



第1回政治問題セミナー（'67）

て取り上げられた。社会奉仕はJC運動の要の一つであったが、JCはロータリーやライオンズのように奉仕のみを目的にしているものではない。貧しい人にお金を寄付する、という奉仕に対して、貧しい人を解消しよう、というのがJCの社会開発計画・CDの思想である。このCDが重点事業として打ち出されると同時に、LT委員会はLD委員会と名称が変わった。その頃からCDかLDか、という論争が続くことになるのである。

■ 4つの提言

1968年度会頭は、神野信郎（豊橋）が就任した。第一声は、前年の広島大会で行なった「4つのビジョン」である。①1970年代の新しい産業社会における指導者理念の創造。②日本の安全と防衛についての討論。③21世紀の文明を創る教育ビジョン。④若い世代と共に、あなたの町のビジョンをつくる。

第1、第2の提案は指導力開発、第3、第4は社会開発に属す提案だ。特に、話題を呼んだのは安全と防衛問題だった。防衛問題を叫ぶのは右翼団体だけの頃であり、他の団体に先駆けて提唱したのは勇氣ある決断だった。教育問題を取り上げたのも、まだ東大医学部紛争を起点とする大学問題が発生する以前のことであり、いち早く警鐘を鳴らした先見性は、始動団体としての面目躍如というべきか。

神野会頭は4つの提言を全国JCに浸透させていくため、初めて100名の講師団を編成して全国各地のJCに派遣した。江藤淳、高坂正堯……といった錚々たる論客が、一名平均5回として年間500回の講演を行なったのだから、毎日どこかで1回は熱っぽい討論が行なわれていたことになる。

■ 難航した万博参加の決定

神野会頭の重要な意思決定の一つに、万博参加があった。そもそも石坂泰三、鈴木事務総長から「是非、やってくれ」と言われた時に始まるのだが、これが難航した。第1回全国理事長会議で、大阪の秋保盛一理事長は「日本万国博が2年後に迫っているが、国内の認識はさほど盛り上がりをみせていない。大阪JCは日本が世界に約束した万博の成功のため、2年来万博特別委員会を設けて討議している。日本JCの意見を聞きたい」と質問した。

牛島一雄副会頭（久留米）は「足取りが早くないことを反省している」と答えた。JCの万博に対する意識は、当時の国民の関心度と同じだった。常任理事会でも、数千万円の資金を投じる事業として万博が最上なのだろうか、というのが反対論であった。

これに対し、終始「やるべきだ」と主張したのが米原正博（鳥取）だった。山崎会頭時代から6年間専務理事を務めた米原は、JCきってのJC通で、それだけに慎重居士で通っていた。が、万博については初めから賛成を主張していた。神野会頭は「ヨネさんが絶対にやる、最後まで頑張る、と言う。そこまで言うなら、と決心した」と語った。

第6章 変革の嵐に挑む

1969-1971

■ 体制内の革新運動

安保改訂を翌年に控えた1969年。日本に青年会議所運動の灯がともされて20年、この記念すべき年の会頭に就任した牛尾治朗（東京）は、旧年、札幌の全国大会で第一声を放った。

「風雪に耐えぬ情熱、青年の若々しい英知、大地に生き抜く男らしい勇氣。このフロンティアの精神が、社会を開発し、人間の指導力を高め、全体に繁栄をもたらす。このJC運動の精神に疑いをもつ人があれば、北海道の歴史を見ればいい。北海道開拓の歩みは、男の勇氣と青年の英知と、あらゆる風雪に耐えぬいた情熱のつくった百年の歴史である……」。

全国382青年会議所、2万4000名の会員を代表する5968名のメンバーを前に、青年の英知と勇氣と情熱こそ、JC運動の基盤であることを強調した。

■ 勇氣をもってタブーに挑戦

この所信表明で、牛尾会頭は5つの重点事業を発表した。①市民意識を高揚し集団指導能力を開発。②まちづくりのため市民の組織化と行政への積極的な運動を展開。③日本の安全と防衛についての国民的合意の担い手に。④進んで青年と対話し明日の日本のための広場をつくる。⑤経営意識の刷新と企業体質の改善を敢行。

1月19日、京都の第1回理事長会議で牛尾会頭は「地域社会には数多くのタブーがあり、市民と青年の挫折感を深めている。私は会頭としてタブー視され

ていた体制の問題、国防と安全に触れた。皆さんは勇氣をもって地域社会のタブーに触れ、傷だらけになっても行動しよう」と、激しく語った。

その頃、東大では安田講堂をめぐる攻防戦が展開されていた。「数多くの青年は体制に対する不信感、疎外感を抱いている。将来への不信をなくすことが大学問題の基本的問題だ」と、東大問題にも論及し、さらに経済界、政界にも、あるいは市民社会にもそのようなことが起こる可能性は充分にある、と警告を発した。

牛尾会頭が終始口にする言葉、「青年会議所運動とは、明日のために今我々が犠牲を払う気概を持った運動、今日を明日の黎明と考える、未来に挑戦する運動」を、まさに地で行くスタートだった。本年度のJC統一事業は「国防と安全」に決まり、9月上旬に全国各地で市民集会を開くことになった。大変に難しい問題ではあったが、全国で約150のJCで何らかの行動を実施した。

■ JC宣言、制定へ

この年の重要決定事項の一つに長期5カ年計画の策定がある。特に、綱領にある「明るい豊かな社会」、定款第3条の「日本経済の正しい発展と福祉国家の実現を図る」という文言を再検討し、現代に要請される目標を明確に打ち出そう、ということになった。そうして作られたのがJC宣言文である。ただし、性急に事を運ぶべきではないという意見を尊



熱く語る牛尾会頭（'69）

重し、まず新潟の全国大会決議文とすることにとどめた。そして、翌1970年1月の理事長会議において宣言文に採択された。

■ First President from Japan

69年度の悼尾を飾るイベント、第24回世界会議は全世界50カ国、1500名のメンバー参加のもとトリニダード・トバゴで開催された。日本からは牛尾団長以下45名とアメリカに次ぐ大代表団を送った。ほかでもない、日本から前田博（東京）がJCI会頭に立候補したからだ。

日本JCデリゲートの合言葉はファースト・プレジデント・フロム・ジャパン。英語をしゃべれない者も、これだけは唱えた。対抗馬のギブソン（スコットランド）有利、前田有利と、めまぐるしく選挙戦情報が変わる中で、前田は第1回の投票で決まった。日本JCの歴史20年にして、国際青年会議所の会頭を送り出したのだった。

■ 万博会場にJCソング

1970年、万博の年の会頭は米原正博（鳥取）である。3月15日午前10時、会場西南に位置する野外劇場からファンファーレが鳴り響いた。開場式には坂田文相、左藤大阪府知事、中馬大阪市長ら来賓を迎え、米原会頭が挨拶した。「我々全国の会員が心を込めて施設参加した野外劇場は、183日間にわたって青少年の心の通い場として使用されます。数多



日本青年会議所が施設参加した「野外劇場」（'70）

くの立派な施設があるものの、青少年の広場としての施設はここ以外にはないと、誇りに思っています」。

開場式に続いて日本JC企画のオープニングショー「躍動する若い力」が催され、坂田文相は最後まで席を離れなかった。昼食会で坂田文相は、米原会頭に感想をもらした。「万博会場の中で、最も心のもった施設として注目されるだろう。舞台の袖に、周囲に、隅々まで野外劇場の運営に尽くす青年会議所の人々の姿を見て、本当にいいことをしている、と改めて再認識した」と。

■ 初の北方領土視察

華やかな万博、野外劇場の活動に目を奪われがちだが、5月13、14の両日、初の北方領土視察団が根室に派遣された。一行は、北方の島々を洋上視察し、現地住民と懇親した、と記録に残っているが、以来、この事業は日本JC創立70周年を迎えた今日まで継続されてきたのである。

■ 18年振りの地で1万人大会

名古屋JC主管、豊田、大垣、四日市を副主管とする1970年度・第19回全国大会は、空前の1万人大会となった。正確には9652名だが、初めての試みとして式場正面の壇上に450JCの理事長と日本JC役員が勢揃いした。思えば18年前、服部礼次郎会頭の1953年に全国のJCを代表する153名のメンバーにより初の全国大会が開催された、ゆかりの名古屋である。今、ここには全国450JC、3万人を代表する1万人が集まったのだ。壇上には黒川光朝初代会頭はじめ11名の元会頭が居並び、更に前田博 JCI会頭（東京）も加わった。前田は「いまや日本は国際場裏で傍観的態度をとることは許されなくなった。責任と自覚をもって、ノーとイエスをはっきりすべき認識が必要だ」と訴えた。

■ 創立20周年式典

1971年2月9日、東京・有楽町の日生劇場で日本



創立20周年記念式典（東京 '71.2.9）

青年会議所創立20周年記念式典が行なわれた。多数の来賓、歴代会頭・役員など1300人余が出席。秋保盛一会頭（大阪）は「20年を迎えた若々しい団体が青年の使命を自覚し、次なる20年、国家社会のために貢献すべく、かつて経験したことのない困難にも進んで挑戦することを誓う」と挨拶した。

既に、秋保会頭は前年の名古屋全国大会で本年度の重点事業として「アジアの繁栄と平和のために、アジア人としての連帯感を確立しよう」と、提案していた。

■ アジア青年の船、400名の夢運ぶ

6月21日朝、横浜大棧橋を JCアジア青年の船『さくら丸』が出帆した。全国から応募した青年男女298名、JCメンバー46名、東南アジアからの招聘青年42名ほか講師・本部要員37名が15日間の研修に旅立ったのだ。洋上では同行講師によるアジア問題、経済問題などの研修やクラブ活動を行ない、寄港地（基隆・香港・マニラ）では現地視察や現地青年と交



第1回JCアジア青年の船（'71）

歓しアジアへの関心を高め、青年指導者としてのトレーニングを行なった。

日本JCとしても、事業費6300万円を投じた本年度最大の事業だった。団長・立石孝雄副会頭（京都）は「団員は、アジアに関する認識を持ってくれたと思う。今後、各地で若い世代の間で日本人としての取り組みや、共感が盛り上がることを期待したい。今後2回、3回と続けてゆくべきだ、との声が強かった」と語った。事実、アジア青年の船は継続事業になったばかりか、これをモデルに各地区で独自の青年の船が企画された。

■ 沖縄青年会議所と合体

1971年度の悼尾を飾る事業は、日本JCと沖縄JCの合併である。10月15日、長崎市公会堂で行なわれた日本JC第47回臨時総会で、秋保会頭と古賀正雄沖縄JC会頭により調印された。沖縄返還（72年5月15日）より一足早く、72年1月1日から那覇など6JC、約350人のメンバーが日本JCに合体することになった。日本のJC運動においても「戦後が終わった」のである。

第7章 若者と未来を拓くヤング・ブルー

1972-1973

■ 3万人対話集会始まる

1972年会頭には小野正孝(長野)が選出された。12年振りの選挙で立候補は立石孝雄(京都)、勝治信(横浜)、小野正孝。投票は立石、小野の決選投票に持ち込まれ、結果は小野1086票、立石780票であった。小野は立候補所信で「私の体を流れる真紅の血。同志会員のこの血を一人ひとりの諸兄のもとへ、心をこめて返す道は、私が育てられたJC運動へ返すほかはない。会頭として諸兄と共に行動する以外の道はあり得ない」と、決意を語った。70年春、四国地区大会で講演中に倒れた小野は、会員の友情の献血によって一命をとり止めたのである。

小野会頭は「3万人対話集会」を企画し、日本列島を駆けずり回った。それも、原則として「地区大会、全国大会を行なったことがなく、将来もその可能性のない地方」と、いわば草深いローカルを選んで話し合ったのだ。壇上に、どっかと腰をおろして約4時間、300名の若者と対話を繰り返し広げた。どんな話題でも対話の肴にしてしまう。要は、若者と未



72年度会頭選挙('72)

来を拓くための徹底的な動機付けであった。

■ 沖縄は豊かでないといけない

6月10～11日、復帰後まだ日の浅い那覇市で「明日の沖縄・豊かなアジア」を大会テーマに沖縄復帰記念大会が開催された。地区内外から2000人を越す会員が参加、本土から参加した全会員は郷土の石を持参し、寄贈する国旗掲揚塔の土台に供した。小



第21回全国会員大会「トーク・イン・コウフ」('72)



沖縄復帰記念会員大会（那覇市民会館前 '72）

野会頭は「新しい仲間である沖縄地区の積極的、勇気ある活動を期待し、ともに前途に横たわる諸問題に取り組み、明るい日本の建設に手を取り合って進もう」と所信を述べた。

■ 25名参加の台北世界会議

第27回世界会議は台北市で開かれ、日本代表団は25名と最小限の人数で編成された。日中国交回復の中で、わが国は台湾との外交関係の断絶があった。「二つの中国問題」だ。JCに国境はなく、中華民国JCとの友好関係を無視することは全く考えられない。多数の代表団を考えたが、諸般の情勢から最小限に絞られたのだった。華やかな72年度の運動に比して、寂しい世界会議への参加が惜しまれた。



田中新首相と懇談する小野会頭（'72）

■ カテゴリー制度を導入

1973年の会頭は立候補者が出なかったため、佐藤助九郎（東京）が理事会推薦という初のケースで選出された。佐藤会頭はJCIのカテゴリー制を導入し、カテゴリー No.1プログラム（全国規模で3年間継続）に組み込まれた事業は①社会開発事業、②LIA（=リーダーシップの向上を目的としたプログラム）、③AOY（=アクセント・オン・ユース：Accent On Youth 青少年開発のこと。頭文字をとってAOYという）、④新しい経営理念の探求と実践の4事業であった。

■ 動き出した中国訪問の旅

6月12日、関西各界訪中団に加わって中国各地を視察していた神戸JCの寺本滉理事長ら8名が帰国した。同JCの創立15周年記念事業の一環で、JCグループとしては最初の訪中団だった。日本JCの統一解説文、綱領、JCソングなどを中国語に翻訳した文書を携行し、中国青年層に配布してJCの理解に努



国家問題会議（'73） 講演する中曽根通産大臣

めてきた。

その後、9月には鳥取・島根青年友好訪中団が3週間の旅程で訪中した。こうして、JCの訪中は軌道に乗り始めてきた。ただし、日本JCとしては中華民国JCと従来通りの関係を保っているため、対中国問題には微妙な問題が残されていた。

■ 私権の制限を提言

本年度は行動指針の第4項に「内外の国家的重要課題への挑戦」を掲げ、陣内孝之国家問題室長（豊田）を中心に国家問題会議を開催した。会頭提言では「総合的な国民福祉を確保向上させ、自由社会を維持発展させるためにも、思い切った既得権や私権の制限をあえて行なう。土地の有効利用を図るためには、土地に対する絶対私有制の概念を改め、一定期間の地価凍結を直ちに断行する」と、既得権や私権の制限を大胆に提起した。

■ 史上最大の宝塚全国大会

全国大会は阪神宝塚競馬場を主会場に、全国532JC、1万3150人の会員・家族が集まった。年末の会員数は3万8290名、ざっと3人に1人の参加だ。その動員力は計り知れない。反面、次第に物理的に全国大会の開催が難しくなってきた。そこで、従来の自由参加形式の大会は5年に1回に止め、4回は代表参加制の形式をとることになった。宝塚は自由参加の最後の年だったのである。

主管の宝塚JC正司泰一郎理事長の心のこもった歓迎挨拶の後、佐藤会頭は「今こそ社会の期待に報いるため、自らの姿勢を正し、隣人の幸せを願って自ら犠牲を払う意気込みが最も必要である」と所信を述べた。



第22回全国大会（宝塚 '73）開会式

第8章 新しい社会秩序を求めて

1974-1977

■ 緊急事態宣言

オイルショックの渦中、1974年を迎えた。本年度の会頭は再び選挙となり、前田完治（東京）1211票、三浦道明（大津）904票の得票で前田が会頭に就任した。1月の通常総会で前田会頭は、4項目の緊急事態宣言を発表した。①JCの全組織は、当面の危機事態に対処・対応する行動の先頭に立つ。②全会員・企業は大多数国民の犠牲の上に自己の利益を図るようなことがあってはならない。③全会員・組織はムダを省くのは勿論、事業の総点検を行ない緊急性・重要度に従って事業活動を選別する。④JCは全国民的省資源運動推進の範となるべく行動する。



資源環境シンポジウム（'74）
挨拶する前田日本JC会頭



第23回全国会員大会（山口 '74）開会式

■ 参院選を控え、高まる政治意識

今年は参院選の年で、JC関係でも8名が立候補した。参院選をはさみ地方首长選も行なわれたため、JCと選挙についての議論が再燃。1月の全国理事長会議においては、「定款第4条を改正して直接政治にタッチすべきだ」という意見が、約3分の1に達した。このような状況の中、前田会頭は「本組織を特定の政党のために利用しない」という定款第4条の規定は尊重する立場を明らかにした。

■ 「日本人の心」を取り戻そう

第23回全国大会は初の代表制により、山口で開催された。参加者は6500名余。オイルショック、狂乱物価、悪徳商人……といった言葉に明け暮れた1974年、橋本宗利副会頭（広島）は分科会の結論として「現代は人間性喪失の時代になっている。資源問題、モノ不足、これらのために人間は混迷の淵に自己を見失っているのではないか。今こそ、日本人としての心を取り戻さなければならない」と総括した。

■ 大不況下、JCか企業が

戦後最大の不況で明けた1975年、「人間への期待」を基本理念にスタートした佐藤敬夫会頭（秋田）は試練の年だった。メンバーの9割が中小・中堅企業の経営者という団体に、不況は容赦なく直撃。倒産に追い込まれる企業も現われた。JCか、企業か。1月の全国理事長会議で佐藤会頭は「1975年度は変革や革新の時代ではない。真の意味で新しい時代なのだ、と自覚することから運動をスタートさせてほしい。JC運動は、地域社会の運動であることを信じて疑わない。お互いの手づくりの価値観を認めあって地域社会の中に運動を確立していくならば、JCという組織は未来としっかり手を結ぶことができるだろう。この混乱の中で573があえて400に減っても、JCは必ず未来に、この運動の精神と成果を繋いでいくのだ、という気概を結集してほしい」と、まさに悲壮な決意を全国理事長に強く訴えかけた。

■ 中国問題に、JCI原則貫く

6月11日から4日間、JCI札幌コンファレンスが開催された。だが、そこに中華民国青年会議所(ROC・JC)が200名の代表団を送り込み、青天白日旗を掲げる、という噂が飛んだ。このため、中国在日代表部から外務省にクレームがついた。だが日本JCとしては、「日中共同声明は尊重する。しかしROC・JCとの関係は断絶しない」との態度を表明した。一見、矛盾するようだがJCI原則によれば、国家単位でない一地域でのNOMの存在が認められるのだ。国旗については、問題があるならば「札幌では一切、国旗を使用しない」と、JCI会頭との協議のうえ決定した。かくて、札幌コンファレンスは盛大に挙行された。

■ 小野元会頭、逝く

11月14日、小野正孝逝去。11月30日、小雪のちらつく冷たい日だった。長野善光寺での葬儀には、折からの国鉄スト権ストによる全国的な交通マヒの中を、北海道からも沖縄からも故人を偲ぶ現役・OBが多数集まった。

弔辞を読む佐藤会頭の声は震えていた。「小さな成功の積み重ねが大きな成功を導く、JC運動は人間の可能性への挑戦なのだ、と教えてくれた小野先輩、あなたが立派になし遂げられた3万人対話集会の手ごたえは確かです。私がローカルを歩き、肌で感じ取ってきました。小野先輩、聞こえますか、全国4万5000余の声が……」。



小野正孝君を偲ぶ会（'75）
海外からも弔問客が続々と来場



ひめゆりの塔へ献花（'75）
佐藤会頭、小沢・田口副会頭

■ 自立と連帯

1976年、厳しい現実の中で田口義嘉寿会頭(名古屋)は「依存人の多いこの社会に、自分のことは自分でやり抜く。そうした個人が地域のため、国家のため、世界のために連帯する。自立と連帯を基本理念として、次なる四半世紀を切り開く」と、所信を表明した。

■ 創立25周年式典

2月9日、日本JCは創立25周年を迎えた。21日、NHKホールの記念式典には約3000名の会員が集まった。

セレモニーに続いて、河野洋平(衆議院議員)、加藤寛(慶大教授)、矢島鈞次(東工大教授)を講師にトークイン「1980年への日本、変革のポイント」が行なわれた。河野議員は「健全な議会制民主主義の確立」を訴え、加藤教授は「日本も英国病にかかるおそれがある」と警鐘を鳴らし、矢島教授は「勇気ある正論を吐け」と提言した。

■ 自民党と決別もあり得る!

3月27～28日、76国家問題会議が「新しい秩序を求めて——自由社会における公と私」をテーマに開催され、日本JCは3つの提言を行なった。①公労協スト公聴会、②福祉徴用制度、③自民党体制への決別。マスコミも報道した。



創立25周年記念パーティー(東京 '76.2.9)
挨拶するオズJCI副会頭

①は国労が賛同したため大阪、都城、長野、名古屋で開催した。②は青年期のある時期、公共奉仕に徴用するという事業で、評価は大きかったが問題提起にとどまった感がある。③は反響が極めて大きかった。ロッキード事件にみられる自民党の腐敗構造を指弾した提言で「自民党が責任をもつて改革に当たらなければ、自民党に決別の辞をおくらねばならぬ」という趣旨であった。自民党からかなりのプレッシャーがかかったが、田口会頭の考え方は変わらなかった。85%が自民党を支持し、その90%が自民党に不満をもつJCメンバーの純粋な提言だったのだ。

そして約3カ月後、河野洋平を中心とする6議員が自民党を離脱し、新党結成に走った。とまれ、政治刷新に勇気ある正義感を発露した一年だった。

■ 21世紀の新しい住民自治を

1977年、会頭に就任した小沢一彦(横須賀)は、重点テーマに地方自治を取り上げた。会頭所信は「市民の不満を正しく反映し、地域のエゴは正しく克服する。21世紀の新しい住民自治を目指す我々は、権利の主張をする代わりに義務の履行も遂行する成熟した市民として、人生ドラマが展開される我が町を愛し、我が町の良さを理解していこうではないか」と。更に「これからのJCは始動団体の役割から一歩進んで、促進団体としての役割を付加する必要がある」と、結んだ。



自民党体制への決別
76国家問題会議で採択した提言を中曽根
自民党幹事長に手渡す田口会頭('76)

■ 日本語、5万人突破でJCI公用語に

JC会員が5万人を突破した。年初から日本JC拡大委員会(森村藤雄委員長・川西)は、次なる25年の初年度になる今年目標に5万人突破を設定した。年初、605JC・4万8257人でスタートし、10月12日の理事会で617JC・5万215人が確定したのだ。年度末は623JC・5万591人だった。ヨハネスブルグの第32回JCI世界会議では表彰の榮譽に浴し、また5万人突破により、日本語が公用語と認められた。

■ PLO幹部を招聘

6月8日、PLO幹部ハレド・ハッサンを招聘するという事業計画にない事業が実現した。同氏が訪日を希望しているという情報を入手し、理事会で慎重に検討した結果、実現した。「JCには人種、国境を越えて国際友好を高める精神がある。このPLOの首脳を招聘できるのはJCしかない、という判断で実現した」と小沢会頭は語る。同氏は政財界の表敬訪問、企業視察、講演会などに出席し、公式ルートでは欠落しているPLOとの理解を深めるのに役立った。



福田首相と会議する小沢会頭('77)

第9章 国益を論じ、国家社会に貢献

1978-1980



経済四団体新年祝賀パーティー（'78）
桜田日経連会長を囲む正副会頭

■ 醒めた目で国益を

1978年の会頭は麻生太郎（飯塚）と、望月成二（広島）両副会頭の選挙になった。両候補は福岡、神戸、仙台、東京の立会演説会を経て投票に入り、麻生1508票、望月1239票で麻生が選出された。麻生会頭は、5つの提言を行なった。①政治に対し主体性を。②企業を立派に経営し、余力でボランティア活動としてJC運動に参加。③勇気と責任ある対外的発言を。④国際社会への責任を自覚。⑤自分自身の価値観を。

■ 第1回青経人会議

日本の国益を考え、発言する青年経済人を標榜する麻生会頭は、7月29日、第1回青年経済人会議を開催し、「21世紀、日本の生存条件」を討議した。



第27回全国会員大会（神戸市 '78）

会議には政府、与野党の政策責任者を招き、麻生会頭の提言について意見を開陳した。会頭提言は次の通り。

①中央官庁の分散。②国際経済情報省の設立。③日本文化センターの設立。④地方都市に外人教師を配属。⑤地方自治体、企業、個人の各レベルで石油備蓄。備蓄目標は倍増し180日分。⑥毎年、各県持ち回りで国民博覧会を開催。この提言に対し政府、与・野党代表が意見開陳したが、①については地方への機能分散を行なうことにおいて意見は一致し、⑥に関しては全員賛成で、注目された。

■ JC 会館建設に第一歩

1979年の会頭は、井奥貞雄（松戸）と佐藤栄佐久（郡山）の選挙となり、井奥1765票、佐藤1001票で井奥が会頭に選ばれた。井奥会頭は運動の主眼を次の4点に置いた。①中小企業の存立。②開かれた教育。③1000分の1拡大運動。④JCの本質を語り合う。

本年度、特筆大書すべきはJC会館建設の決定がある。前年末の理事会でJC会館建設が諮られ、賛成20、白票1で可決された。この決定に基づき1月の総会にかけられ、賛成2084票、反対467票、棄権311票で、長年の夢だったJC会館の建設が決まったのだ。井奥会頭は年内着工の大方針を下したが、近隣問題等が難航し、12月28日に第1号杭が打ち込まれたのだった。



第2回青年経済人会議（'79）
左端は議長の井奥会頭

■ 沖縄で「安全と防衛」誓う

10月4～8日、第28回全国大会が那覇で7705名の参加で行なわれた。井奥会頭は「今日の日本の平和と繁栄は、沖縄の犠牲の上にあることを忘れてはならない」。そして「今なお残されている北方領土の問題を国民的課題として、一層の決意をもって取り組むべきである」と訴えた。

■ 侵略には自衛隊とともに戦う

1980年、鴻池祥肇会頭（尼崎）は重点事業として①日本の安全と防衛で5万人アンケートを実施。JCデー・青年経済人会議でも討議。②JC会館の完成と運営。③大阪JCI世界会議の成功の3点に絞った。

5万人アンケート調査は3月28日に公表した。翌朝、朝日新聞は「日本は侵略される恐れがあるので、防衛力は強化すべきだ。核武装もいつかすべきで、学校では愛国心教育が必要だ」とまとめ、「若い経営者の平均像はかなりタカ派的である」と論評した。

読売新聞は「強い国防意識を持ち外国から侵略された場合は自衛隊とともに戦うが6割を占めるなど、自民党支持の会員が7割に達する会議所らしく勇ましい意見が大勢を占めた。徴兵制については、その対象となる可能性の高い若い層ほど反対意見が多いなど、本音をのぞかせている」と指摘した。

日本経済新聞は「安全確保対策の重要度では外交31%強、政治23%、資源・エネルギー22%等が上位を占め、重要度の第2順位で防衛力が29%となっており、防衛力を重視する総合安全保障の考え方が出ている」と報じた。

■ 傍観者であってはならない

10月1～5日、札幌で第29回全国大会が開催され式典には1万452名が参加した。「安全と防衛」を重点テーマとする運動の総括が行なわれ、鴻池会頭は「90%のJCが運動を起こし、50ブロック、10地区協会は100%運動を起こしてくれた。JCの基本は地域の運動であるが、大きく世界を直視し日本の国益を考



JC会館棟上式（'80）
鎮入れする井奥会頭

える運動を興すことを提唱したい。

JCメンバーは、したたかな自信を持とう。JC会館の完成で、商工会議所の青年部と言われなくてすむようになった。自民党の下請けでもない。国会議員は74名、地方議員は800名、市長町長は40名を数える。我々の潜在力は大きい。我々は、もう傍観者であってはならない」と、所信表明した。

■ JCの魂こめて、会館落成

10月29日、東京・平河町にJC会館が落成した。初代会頭の黒川光朝は「我々の会館を作った。涙が出るほど嬉しい。仏画でも仏像でも作っただけでは駄目で、魂を入れなくてはいけない。皆さんも、40までに自分に魂を入れるための会館にしてほしい」と語った。

■ 長尾源一、JCI会頭に

11月、大阪で第35回JCI世界会議が開催された。



第34回JCI世界会議でのジャパンナイト
(スウェーデン・ゴテンバーグ)

世界70カ国から1万1500名が参加、史上最大の規模だ。日本JCにとってハイライトは14日の会頭選挙だった。長尾源一JCI常任副会頭（東京）が立候補、フランスのポール・オバディア候補との一騎打ちだ。5時過ぎ、投票が始まった。やがて、イズリエタ会頭は「フロム・ジャパン……」、湧き上がる大歓声、フットライトは長尾に、電光掲示板にはコングラチュレーションG・ナガオの文字が輝く。

記者会見で長尾は「1981年は南北問題をからめて資源問題に取り組む。JCI内部の問題としては財政の再建にチャレンジする」と決意を述べた。鴻池会頭は「日本は各国から尊敬され、頼りにされていることを肌で感じた。我々は、その期待に応えていかなければならない」と語った。

第10章 行政改革の先頭に立つ

1981-1983



行革推進運動始まる経団連会館で対談する森会頭（'81）



第11回JC青年の船（'81）
中国難民船の救助

■ 日本JC30周年記念

1981年、日本JCは創立30周年を迎えた。1月25日、京都国際会館で行なわれた記念式典で約4500人の参会者に森輝彦会頭（大阪）は、「JCには活動と運動の2つの側面がある。活動は自らのトレーニング、友情という属人的側面であり、もしJCがこの活動の分野に止まっていたら、組織の社会性が問われていたと思う。JCの運動とは、活動で鍛えた足腰を基盤に地域社会や国家、そして国際的社会に向かって組織的な運動を展開するところに真髄がある」と、内にこもらず社会貢献を打ち出す運動論を強調した。

■ 返り血を浴びる行革推進運動へ

本年は、日本が大きく転換しようとする年であった。その最大の課題が、行政改革である。3月16日、第2次臨時行政調査会（第2臨調）が発足した。日本JCは直ちに検討に入り、4月の理事会で審議を諮った。森会頭は「行革に積極的に対応しなければ、JCの社会性が疑われる。行革は日本の安全と防衛の各論にもなり得る課題だ。これまで行政に参加するJC運動が多く見られたが、今後は参加しながら効率を求める運動に進まなければならない。日本JCが、何故行革に取り組むのか、それはJCが何のために存在するのか問い直したいからである」と訴えた。審議は、全員一致で可決された。

だが、この決断がいかに勇気が必要とするものであったか。例えば、地方への補助金カットが言われているがJCメンバー企業の約4割は公共事業関連とみられ、公共事業の削減は多少の差こそあれ、誰もが身を削ることになるかもしれない運動への決断だった。

6月12日、臨調の土光敏夫会長が臨調委員の牛尾治朗元会頭を伴って、JC会館で開催中の日本JC理事会を訪ねてきた。孫ほども年の離れた理事達に「私はあと10年生きるかどうか分からない。行革は将来の日本のためのものであり、皆さん若い世代に是非やって頂きたい。JCが取り組むというなら、もう大丈夫」と、語った。

翌日の新聞は一斉に「土光会長、JCで行革推進を訴える」と、報じた。もうJCは後戻りできない舞台



頑張れ土光さん 国民がついている（'82）

に上がったことを意味していた。

7月3日、十日町JCは「使途の明確でない補助金は辞退しよう」と、市からの10万円の補助金返上を表明。同市に対し補助金について見直しを要請する文書を提出した。この勇気ある運動は、全国JCに先鞭をつける形になり、次々と行革推進運動が動き出した。

■ 各地で続々と上がる草の根パワー

1982年、黒川光博会頭（東京）は、ただ一つ行革推進運動を最重点運動に据えた。そして、行革が議論のみに終わらないように、一步踏み込んだ運動の在り方を提示した。地方版「臨時行政調査会」の設置運動、行革のための「市民、県民会議」の推進運動、市民主導型による「行政監視制度」の導入運動等である。



ライシャワー博士と正副会頭との昼食会（'83）

春まだ浅き頃、日本JCには「高砂JC、二戸JCが議員定数削減運動を開始」、「川越JC、長井JCが行革市民会議を組織」、「敦賀JCも補助金返上」など、ローカルJCの素早い活動報告が飛び込んできた。それは、痛みに躊躇する各地JCを促すかのような遅しくも、また爽やかな報せであった。

こうしたローカルJCの運動を援護するため、日本JCは関連事業を打ち出した。行革無料講師の派遣、行革広報誌コンクールの実施、更に本田宗一郎・井深大を世話人とする民間の行革推進組織「行革推進



鈴木首相と懇談する黒川会頭（'82）

全国フォーラム」の支援と続く。

他方、全国を休む間もなく辻説法行脚をするJCメンバーもいた。行政改革推進会議議長・太田博光（松本）はじめ加藤玄静（本庄）、増田大三（大阪）は、行革三人衆と呼ばれるようになった。3人が歩いたJCは全国3分の2に及び、後は地区、ブロック大会で接触した。太田議長の企業は建設業で、受注の4割近くが行政からの発注だった。父親の抵抗、行政の圧力を受けながらの行革行脚だった。だからこそ、説得力があったのかもしれない。土光さんをはじめ、行革は人が人に打たれて動く側面があった。

■ 全国一斉ウォッチ・ザ議会

1983年3月、臨調は行革最終答申を提出し解散する予定になっていた。榎本一彦会頭（福岡）は所信で「地域連合国家日本の基礎は、地方分権の確立にある。地方の自治力を強め、高めていくためにこそ行革は推進されなければならない」と指摘した。

主な運動の主眼は議員の姿勢にメスを入れる企画で、第一は「ウォッチ・ザ議会」。50都道府県議会と700市町村議会を対象に議員定数、陳情・請願内容、議員の発言・行動等々。第二に統一地方選挙候補者に対する「全国一斉行革公開質問運動」だ。この運動の最中、3月15日に臨調は解散した。しか



第32回全国会員大会「美の親善大使」
ミス・オーストラリアをもてなす芸妓（秋田 '83）

し、行革が終わったわけではない。答申を実行に移す番で、これは民間に委ねられる部分大きい。

■ 中曽根総理、JCを評価

日本青年会議所新聞4月10日号、創刊20周年記念号だが一面トップで、土光敏夫が「行革の推進は青年の肩にかかる」と訴えた。また、臨調委員の牛尾元会頭は「土光委員会（行革監視組織）設置の提唱をテレビで見た。提唱する榎本さんの姿を見ながらJCはここまで晴れの舞台に登場するようになったのか、と本当に感慨深い思いでした」と語っていた。

真夏の青年経済人東京会議には、過去最高3000人超の会員が集まった。高崎JC・OB中曽根康弘首相の講演会場は、立錫の余地もない。首相はJCの



83年度青年経済人マルチ討論
平松・大分県知事と対談する榎本会頭

行革推進運動を高く評価した後、「今秋半ばまでに、行革法案をつくる」と言明した。そして、「政府・政党への提言」では榎本会頭が「市議削減だけでなく、次は国会議員削減まで踏み込んで取り組みたい」と、強い調子で表明した。

第11章 来たるべき日本の時代に

1984-1987

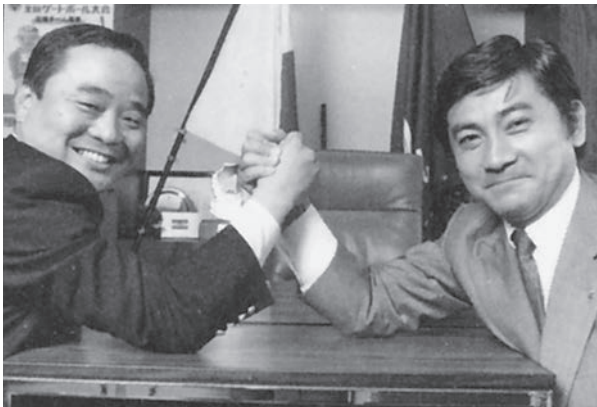
■ 教育制度の改革に

1984年、斉藤斗志二会頭（富士）は重点事業に、行革と新3K（教育・高齢化・国際）を取り上げた。行革は議員定数配分の検討、市町村合併の推進。3Kは教育サミット開催、小中学生作文コンクール、三世代交流ゲートボール大会、在日留学生ホームステイなどが計画された。

ここ数年、校内暴力、登校拒否、受験制度など教育問題がクローズアップされてきた。政府は昨年から臨時教育審議会の設置に動き、JCも教育制度の見直しに強い関心を抱き、今年は教育改革特別委員会（小笠原昇一委員長）を新設した。アンケート調査「子どもの学校どなたどこ運動」を実施したうえで、4月に「教育サミット」を行なった。出席者は2300人、森喜朗文相は挨拶で「JCの皆さんは三世代の中心世代で、戦前・戦後の良き物を知っている。新しい教育制度を一緒に作り上げようではないか」と述べた。

教育問題の取り組みは、青年経済人会議での緊急提言の中の第1項として結実した。「臨教審に次の論議が展開されるよう強く要望する。①生涯教育の視点から教育理念、目標の検討並びに多様な教育機会の創出を機軸とした総合的な教育体系のあり方について、②地方教育行政の制度の見直しと時代の変化に対応した教育委員会のあり方について」。

8月20日、森文相から斉藤会頭に電話があり、臨教審委員就任が要請され快諾した。斉藤会頭はJCの意見を、極めて影響力の強い場で発言する絶好の機会を得たのだ。



野津会頭予定者と手を組む斉藤会頭（'84）

■ アフリカ難民救済活動に着手

1985年、戦後40年にして初の戦後っ子会頭が誕生。野津喬（岡山）、45年9月19日生まれである。野津会頭は、本年の重点テーマを①国際平和への貢献、②地域活性化の推進、③人づくり、の3点に絞り込んだ。

そんな矢先、1月京都会議の初日、理事会に国連難民高等弁務官事務所の法務担当官が姿を見せた。異例のことだ。同担当官は「アフリカ難民の惨状は緊急を要する。日本JCにも力を貸してほしい」と訴えた。国連からの緊急要請とあって、理事会は即座に義援金募集を審議、決定した。

野津会頭は以前から独自に、金銭ではないアフリカ難民救済について模索していたこともあって、田舞徳太郎副会頭（川西）を伴って2月、ソマリアへ飛んだ。2人は、難民18万人を抱えるキャンプを視察し、日本から来ていた3人の青年に出会う。アフリカの遊牧民を農耕民族に変えようと、農業指導に来ていたのだ。異国での彼等の活動に、本当に頭が下がる思いがした、とは野津の弁である。

何か、お役に立ちたい、と持ちかけたところ、彼らは開墾に必要なブルドーザーを贈ってほしい、と。帰国した野津会頭は、早速ブルドーザー募金を全国に呼び掛けたところ、大きな反響を呼び、約8カ月で浄財は約3600万円にもものぼった。12月5日、JCの願いをこめたブルドーザーは横浜港からソマリアに向けて出港した。



ソマリア難民キャンプ（'85）



日本JC訪中団（'85）
野津会頭・田舞副会頭ら



世界青年サミット（'85）
世界17カ国が参加

■ 初の日本JC公式訪中団北京へ

12月初め、野津会頭を団長とする訪中団が北京を訪問した。先の世界青年サミット出席のお礼ということで、中華全国青年聯合会の劉延東主席と会見、日中青年交流の覚書を交わすことができた。日本JCの公式訪中団は、これが初めてであり、これから新たな日中関係が開かれていくのである。



86東京青年経済人東京会議
挨拶する河村会頭

■ 地方から日本をつくり変える

1986年の会頭河村忠夫（八戸）は京都会議で、「自分が変われば仲間が変わる、仲間が変われば地域が変わる、地域が変われば日本が変わる。私は本年度、地方から日本をつくり変える、というテーマで全力をつくす」と、所信を語った。運動の主眼は①魅力あるまちづくり、②魅力ある人づくり、③魅力あるJCづくり、の3点に据えた。

青年経済人東京会議は「地方から日本をつくり変える」のテーマで、4400人の参加のもと開催。「講師の下河辺淳（総合研究開発機構理事長）さんに、地方からの挑戦的発想が出てきたことは良いことだ、と評価して頂いた」と、河村会頭は満足そうだった。

■ 燈燈無尽、全国一斉に6万人例会

この年、最大のイベントは、JCデーに全国のJCが同時開催する6万人例会だ。JCの誕生日に各地JCが出席率100%を目指して一斉に例会を開きJCの原点を見つめる、河村会頭が早くから描いていた構想

だった。

9月3日午後7時、「いま再び創始の精神を、JC運動を語り合おう」と、6万人例会が始まった。ラジオたんぱ第1放送を利用し、15分間を「JCアワー」として開会宣言、JCソング、宣言文朗読、会頭挨拶を放送。JC会館内には専用電話を架設し、会頭と電話対談する「プレジデントコール」も企画された。他方、各地JCは市民公開例会、スポーツ例会、家族例会、イベント等と普段とは趣向を変えて100%例会に臨んだ。河村会頭は、東京JC例会会場から第一声を放った。「37年前の今日、48人の青年によって東京で点されたJC運動の灯が、いま赤々と燃えている」と語りかける会頭の声は、電波に乗って全国に送られた。そして、一JC・2分のプレジデントコールを開始した。次第に、各地JCは盛り上がっていった。何よりも、この数字が如実に物語る。100%例会達成LOM数、736JC中366JC、出席会員数6万4875人中6万1034人。



第41回JCI世界会議
開会式（名古屋 '86.11.09）

■ 円高不況の日本列島

1987年、深刻な円高不況で明けた。浅利治会頭（横浜）は京都会議で「昨年の全国大会以来、全国10地区を訪問したが経済環境の厳しさを身にしみて感じた。我々は国家のため、地域のため、企業のため、自分のために役立つJCとは何か、共に考え行動していこうではないか」と、所信表明した。運動の基本方針は、①国際理解、②地域活性化、③青少年育成、④役に立つJCづくり、の4点を挙げた。

■ 国際平和基金適用第1号

浅利会頭は、国際理解の推進を運動のトップに掲げた。まず手掛けたのは国際協力事業で、ネパールからの要請で「ストップ・ザ・日本脳炎」運動の支援と、バングラデシュの幼児の下痢性脱水症を半減させる「アクアエイド運動」の支援を決定した。事業は、国際平和基金を初めて適用し進められた。

■ 中国技術研修生、来日

9月中旬、2年間にわたって準備を進めてきた中国技術研修生第1陣30人、続いて第2陣16人が来日した。研修生はメンバー企業で1年間研修する。その後、訪中した浅利会頭は、国務委員に「国家体制に違いはあるが、人間個人にたって考えれば、青年の夢や希望は同じはずだ。日本の良い点を学ばれ、日本人を理解されることを願っている」と挨拶した。



第36回全国会員大会（和歌山 '87.10.4）
開会式で挨拶する浅利会頭・主賓席には常陸宮ご夫妻

■ 相生JCからの「一通の速達」

第36回全国会員大会が和歌山市で、1万2000人の参加で開催された。浅利会頭の挨拶は、年初の京都会議で訴えた言葉を結ぶ内容だった。

「一通の速達が相生JCから届いた。『ご心配かけました。相生のまちも、ようやく平静を取り戻しました。相生JCはもう、自己満足的な運動は止めました。今こそ、地域のために、企業のために、自分のために役立つJCにならなくては、と思うからです。周囲がどんなに暗くなっても、JCらしい明るさだけは消さぬよう努力していきたい』という内容だった。そして、私は相生を訪問した。そこでは、新しい相生のためにJCはもとより、官民挙げて活発な活動を興していた」。

浅利会頭のスピーチは、まさに円高不況に揺れ動いた、この一年のJC運動を結ぶにふさわしいエピソードであった。



中国技術研修生第1陣来日（'87）
歓迎挨拶する浅利会頭

第12章 規制緩和、地方分権に立ち向かう

1988-1991



日本JCI日中友好の会設立総会（'88）
挨拶する野津会長



ダイアログ88「関東地区」（'88）
挨拶する川越会頭

■ 新宣言を採択

1988年、団塊世代の会頭・川越宏樹（宮崎）は、重点事業として宣言文の改訂、ダイアログ88、全国一斉公開研修、国際アカデミー、日米青年21世紀会議、規制緩和を挙げた。

宣言文は69年の牛尾会頭時代につくられ、70年初頭に宣言文として採択された。川越会頭はその後、巨大化し、硬直化し、保守的になってきた組織を案じ、新しい時代に合った宣言文の策定を決意し、各地で「青年は変化に対応するのではなく、変化を起こすべきだ」と訴えてきた。「変革の能動者たらんとする青年として」の1行は、新宣言の原案が諮られた際、川越会頭が最後に付け加えた文言だった。

■ ダイアログ88、全国一斉公開研修

会頭はじめ日本JCI役員が、各地JCI理事長と直接対話するのがダイアログ88。2月の四国を皮切りに始まった。巨大化した組織の意思疎通を改善する試みで、約4時間の対話で理事長の質問が途切れることはなかった。また、新時代のJCIメンバー育成のため、地区ごとに全国一斉公開研修を実施した。講師陣は過去10年の歴代会頭。対象は入会3年未満の若手会員で2000人が参加した。

■ 国際アカデミーを創設

4月に1週間、国際アカデミーを開催した。世界

51カ国の次代を担うJCIリーダー54人を集め、英語の堪能な国内メンバー62人と共に、将来に対する責任やリーダーシップを中心に討議した。外国人メンバーの内9割は、将来自国の会頭になるであろう顔触れだった。

事業を提案した川越会頭は、「内外共に、JCIリーダーの質的低下が感じられ、このままではまずいと思った。財政に苦しむJCIに代わって世界のリーダーを育成できるのは日本しかない、という思いもあった」と。同事業は創立70周年を迎える今日まで続いている。

■ 規制緩和の提言

青年経済人東京会議で川越会頭は、新潟県中条町に開校した南イリノイ大学日本分校の例を挙げ「本国では伝統ある有名校が、日本では大学設置法という国の規制で各種学校としか認められない。規制の変革を見守りたい」と、行政の制度的な改善を提案した。この発言でJCIは「こんな規制いらぬ運動」を推進することになった。各界識者は、JCIに盛んなエールを送った。元NHKニュースキャスター木村太郎氏「いい運動を始めた」、高坂正堯京大教授「是非、本気で頑張ってもらいたい」、加藤寛慶大教授「まさに自立の心だ」。



日本JC日中友好の会 訪中ミッション（'88）
陳暮華女史と会見する野津団長（元会頭）

■ 幸福社会を求め「つくりかえ運動」

1989年、更家悠介会頭（大阪）は「地球的視野に立ち地域で活動する青年として、活力・生きがい・思いやりのある21世紀の幸福社会を求めて、創造的破壊の精神で『つくりかえ運動』を推進する」と、基本理念を発表した。

新事業はJC四全総の策定、こんな規制いらぬ運動、グローバル・プロジェクト89。更に運動として「こんな規制（もの）いらぬ運動」、「グローバル化推進」、「21世紀ビジョン推進」を実施した。

■ グローバル・プロジェクト

6月22日、2台の四輪駆動車で世界を走り環境問題を訴える「グローバル・プロジェクト」が、西ドイツのケルンから始まった。3年計画で、初年度はヨーロッパ23カ国49都市。下水処理プラント、原子力発電所、ゴミ処理場などを訪問し環境問題について意見交換等を行なった。

■ 規制緩和で、新しい地域革新の波

京都の全国理事長会議で、更家会頭は「まちに住む生活者としての市民レベルからの発想で行動を起こし、中央集権的な画一的な行政を改革し、規制を緩和して、地方自治体の自立を促さなくてはならない」と、運動の重要性を訴えた。

今井一雄「こんな規制いらぬ運動」推進委員長

（宮津）は「規制の数は各省庁を合わせて1万件を超す。この運動は独自性をもった地域活性化を目指し、障害となるあらゆる規制を変えていくものだ。各地JCから新しい地域革新の波を起こそう」と呼び掛けた。

11月末、更家会頭と今井委員長は森山真弓官房長官を訪ね、海部俊樹総理宛の「要望書」を手渡した。官房長官は「こういうことは民間にサポートしてもらわないと……。具体的に、はっきり言ってもらうことが重要」と歓迎され、「総理に伝える」と約束した。

■ 地方分権で取り組む地域活性化

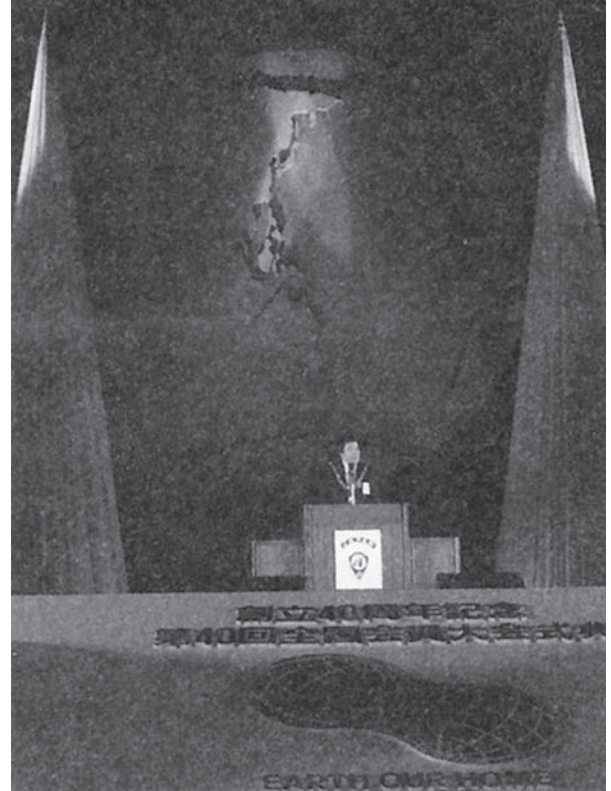
1990年、藤田公康会頭（広島）は重点事業に「地方分権」と「こんな規制いらぬ運動」を掲げた。目的は①地域活性化、②世界貢献、③内部充実である。藤田会頭は年頭所信で地域活性化について訴えた。「地方の発展・活性化は、地方自治法のいう均等な底上げではない。自由と公正な競争原理の中で、力強く自立した地域社会の新たな創造である。自らの責任において決定するという地方の自立なのだ」。地方分権は「しあわせ列島推進」と「こんな規制いらぬ運動推進」の2特別委員会が推進した。

■ パラグアイに日本JCの森

We Love The Earthをテーマにランドクルーザーを走らせ「地球市民の時代」を訴えるグローバル・プロジェクト。2年目はアメリカ大陸だ。特に、南米の



関東地区 しあわせ列島対話集会（'90）



創立40周年記念式典（東京 '91.10.3）
挨拶する川島会頭

パラグアイで皇居の約3倍にあたる約40ヘクタールの土地に4万本の植林をし「日本JCの森」をつくる大事業に挑んだ。苗木の購入など植林に必要な約700万円の資金調達は、全国のJCに募金を呼び掛けて実現した。国境を越え地球を愛するこの運動は、発想・情熱・行動力ともにJCらしい壮大な運動だ。

資金といえば、今年は国際協力資金の値上げが諮られ、実現した。同基金は1970年に「JCアジア青年の船」事業の基金として、1人1ドル（360円）の募金に始まった。1人1日1円として会費と同時に徴収するようになったのは76年。それを1円から5円に値上げするという案件だ。

藤田会頭は非を浴びるのを覚悟で臨時総会決議にかけ、値上げを決めた。同時に、基本財産5億円を当初予算とする「地球市民財団」設立構想を発表した。藤田会頭は全国大会（豊橋）挨拶で「これからの日本は、戦後敗戦国として他国から受けた恩恵を、その国に返すのではなく、発展途上国が自立できるための援助をすることで、世界に返していくべきだ」と語った。90年代の国際協力事業の財政的足場を築いたのである。

■ 地方分権推進宣言

90年度の総仕上げとして、臨時総会で地方分権推進宣言が採択された。①地域に権限と財源を委譲し、住民に最も身近な自治体の地域主権を確立せ

よ。②地方自治体及び地方議会は自立した政策自治体を目指せ。③代償を求めぬ地域活動に積極的に参加し、行政・政治家に頼らぬ自立した市民たれ。（骨子）

■ 黒川光朝・初代会頭、逝去

11月19日、黒川光朝日本JC初代会頭が逝去された。享年72歳。創立40周年の目前であった。哀悼。

■ 至誠をもって一生を貫く

1991年、日本JC創立40周年である。40年前に10JC・506名で誕生した日本JCは、752JC・6万1964名（2月17日現在）の団体に成長した。

■ 「1LOM・1物語」発進

第40代会頭の川島偉良（岐阜）は、年頭所信で吉田松蔭の生涯を語った後、今年度の提唱事業を説明した。重点テーマは①1LOM・1物語、②地方分権・規制緩和、③「ふるさと地球」運動、④素敵な個人主義、である。メインテーマの「1LOM・1物語」について川島会頭は「地方が自立するには受け皿の整備が必要。その土地の歴史や先人とか、現存する企業など、その土地独自のカードを何枚持っているか、その土地柄をどう耕していくか。それはストーリーしかない、という発想で物語と表現した」と。2月11日の九州大会を皮切りに始まった。

■ 日本JC日ソ友好の会設立

EARTH OUR HOMEと銘打った「ふるさと地球」も年初から活発な取り組みとなった。1月の正副会頭会議で、飢えとチェルノブイリ原発汚染に苦しむソ連市民に1000万円相当の緊急援助を国際平和基金と募金によって実施することを決定し実施した。

すると、ゴルバチョフ大統領の訪日を前に3月20日、『プラウダ』など報道関係者12名が日本JCに來訪し、日本JC役員に対し北方領土への日本人のこだわり、今後の日ソ協力のあり方など質問を投げ掛けてきた。また、昨年に続いて「訪ソ・ミッション91」が川島会頭を団長に訪ソ。

こうした交流が実り、7月21日、日本JCとコムソモールによる「日本JC日ソ友好の会」が設立し、会長には日ソ交流に尽力した更家悠介89年度会頭が就任した。

■ 21世紀青年国連を開催

7月29～8月2日、国連本部で「21世紀青年国連」が開かれた。テーマは地球市民の時代。JC加盟79カ国、NGO12カ国の代表が参加し、それぞれ自国の国連席に着いて経済開発、環境、子供の将来について話し合った。会議では効率のよいエネルギー活用により化石燃料消費を減少させる、自由貿易合意の監視システムの実現を呼び掛ける、世界子供サミットの目標を支持実行する、など110項目の決議を採択。「ふるさと地球」という地球市民宣言も採択された。日本JCは1億4000万円を負担した。

この模様はCNNが収録、日本では衛星放送の番組として放送され、朝日新聞は「国際協力、民間が知恵を絞った」と報道。

■ 創立40周年記念全国会員大会

「地球市民の時代」をテーマに10月4～6日、東京で開催された。全LOM参加、登録者数は史上最高の3万3500名。「環境を考える地球市民会議」、「1LOM・1物語フォーラム」なども開かれた。「まちづく



川島会頭JCI会頭と語る（'91）

り市民財団」の設立は正式に決定、「地球市民財団」も近く認可される見通しになった。

5日の式典会場は東京ドーム。常陸宮・同妃両殿下ご臨席のもと、海外70カ国500名のメンバーの参加を得た。40年の歴史を振り返り、「東京宣言」の朗読で締め括られた。以下、その一節。

一人の青年の情熱が、6万5000の大きな流れを作ったように、地球を愛する我々青年の情熱が、地球市民として、自分の目的を見直し、互いを認め合い、そして行動する時、子供達の未来のために、豊かな地球を、創り上げて行けるのです。

喜多郎のテーマ音楽が、静かに流れてゆく。

プレジデンシャルリースは、川島会頭から西村予史男41代会頭（静岡）に引き継がれた。

■ 北欧の空に、地球の応援歌響く

今年度最後の事業であるJCI世界会議は、11月2日から8日間にわたってフィンランドはヘルシンキ市で開催された。川島会頭夫妻をはじめ本部団820名（登録）は、更家JCI常任副会頭、王子JCI副会頭らとともに続々ヘルシンキ入りした。参加国は77カ国、参加者総数は3300人を数えた。世界会議のスローガンは「新時代への大いなる挑戦」だ。日本JCは、数々の栄誉を手中にした。

副会頭に立候補した21世紀青年国連・JCI連絡会議議長吉田純也（三国芦原金津）は見事第7位で



JCI世界会議、神戸に決定（ヘルシンキ '91）

当選。94年度世界会議開催地は、神戸に決まった。実に、11年間にわたって努力を払ってきたもので、この世界会議には約100名のメンバーが参加していた。正式決定がアナウンスされた時、彼等は肩をふるわせて男泣きした。その姿は非常に印象的だった、とJC PRESSは報じた。94年度はJCI創立50周年であり、神戸JCは“第49回50周年ゴールデン・アニバーサリー”という名誉を勝ち取ったのである。

さて、「地球市民の時代」を内外にアピールし続けてきた日本JCだが、この世界会議で日本が提案した“地球の絵画”活動プランはJCIのエンドレスプログラムに決定した。IMUNや国際アカデミーが大成功を収めるなど、JCIの屋台骨を支える日本JCのプランニング力やスポンサー力が高く評価され、「地球市民の輪」を世界に広める運動がJCI全体に認められた証左といえよう。

この他、褒賞部門では4部門で受賞。来年6月にブラジルで開催予定のUNCED環境会議に、日本JCがNGOの若者を招待することが決まり、また川島会頭はJCI会頭首席常任補佐という特別職に任命された。

*第1章～第12章の記述は「40年史」の要約

第13章 地球市民の時代

1992-1994

■ 地球市民の時代、元年

1992年——。前年、40周年という節目を迎えた日本JCにとって、新しい幕開けの年である。年初から、西村予史男会頭（静岡）は「今年は川島偉良直前会頭（岐阜）の掲げたEARTH OUR HOME・ふるさと地球運動の理念を実行に移す年、地球市民の時代元年という新たな気持ちでスタートしよう」と、檄を飛ばしていた。

恒例の京都会議は1月23～26日である。春を思わせる暖かい日差しに恵まれ、全国から総勢2万人のメンバーが集まってきた。

23日早朝、西村会頭ら役員は下鴨神社を参拝し、今年一年のJC運動の成功を祈願した。京都府庁に荒巻禎一知事を表敬訪問した後、記者会見を行なった。西村会頭は「本年は、地球の住民から一歩進み、地球への義務と責任を遂行する地球市民としての考え方が必要と考え、それを実行するため政治やイデオロギーにとらわれない現実的な行動を行ないたい」と語った。

ふるさと地球とは……

26日、新年式典である。西村会頭は所信演説でこう語りかけた。

「皆さん、目を閉じて“ふるさと”のイメージを思い浮かべてください。次に、地球を思い描いてみてください。……眼を開けてください。ほとんどの皆さんは、別々の物を思い描いたのではないのでしょうか。“ふるさと”のイメージは極めて心情的であり、地球のイメージは極めて物質的です。“ふるさと”は一人ひとりの心の中にあるのに対し、地球は私たちの頭の中にあるということだと思う。“ふるさと地球運動”とは、頭の中にある地球を、一人ひとりの心の中にもってくる運動だと言えます。かけがえのない地球を、“ふるさと”と呼べる“こころ”をもつ運動なのです。

決して“ふるさと地球”は、遠きにありて想うものではありません。私たちは“ふるさと”に対する義務と責任を果たしてこそ、単なる住民ではなく市民になり得るのです。義務と責任を果たさなければ、地球

の市民権は得られません。地球をすっぽりと“こころ”の中に納めてしまう地球市民が一人でも多くなれば、ちょっと素敵な時代、それは地球市民の時代だと思うのです」。

ふるさと地球は遠きにありて想うものではない、とは名言である。このコンセプトは今年度6項目の運動指針に具体化された。①創造力あるまちづくり、②世界への貢献、③地球市民としての意識高揚、④地球的規模の個人運動の実践、⑤JCの自己革新、⑥日本JCはLOMの応援団。

■ ふるさと地球の詩・絵画・応援歌を公募

「ふるさと地球運動」とは、次代を担う青少年に①地球の現状を伝える、②詩・絵画・応援歌を募集する過程で地球について考えてもらい、③子供たちにも簡単にできる地球を救う方法を広めていく、運動である。地球の詩特別委員会原田信隆委員長（札幌）は、次の一文をJC PRESSに記している。

「私はアメリカ国民ではなく、地球市民として帰還する」

「月へ向かう時は技術者であったが、帰ってきた時はヒューマニストになっていた」

宇宙飛行士たちが宇宙空間へ飛び出し、青く輝く地球を見た時、地球と自分との強い絆を感じ、その感動の瞬間を「地球意識」と呼びました。彼らにとってボーダレス、グローバルという概念は、自らの体験からごく自然になっています。21世紀は、我々すべてが宇宙というフィールドから地球を見つめ直す時代と言えます。そこで今年度は「私たちの地球を考える」をテーマに、次代を担う子供たちが詩を創作することにより、ふるさと地球を想い、ふるさと地球と対話する機会をもってもらい、この青く美しい地球をいつまでも誇りに思えるよう、自分たちも何かしなければならぬという意識を醸成し高揚したいと考えます。

推進グッズ3点セット

この運動がLOM活動の一環として広く行なわれる

ように、推進グッズとしてパンフレットにクレヨンまで添えた「ふるさと地球運動3点セット」を制作した。応募作品は審査選考のうえ、詩からは地球市民の憲章を、絵画からは地球市民の旗を、応援歌からは地球市民の歌をつくり、それらをシンボルとして地球のCIに取り組むことになった。

3点セットの注文が動き始めた。3月25日現在、ブロック単位で4件、LOMで27件、合計4万9150個の発送が完了。具体的な活動報告も入ってきた。

〔長崎ブロック発〕

雲仙普賢岳災害支援として、避難地域の子供達500名を対象に地球（自然）に対する思いや考えを絵にしてもらい、ふるさと地球運動として全国に発信していく。

〔海部津島JC発〕

「ナマズイキイキ運動」（海拔ゼロメートルの当地域を水郷に住むナマズにたとえたJC運動）に連動させて実施した。キーワードは共生。全ての生き物が共に生きることが、人間に残された唯一の明るい未来を築く方法と考える。募集キットを全小中学校3万3000人に配布した。日本JCの運動が、当LOMにとって素晴らしい応援になっていることに感謝の意を表したい。

〔北九州ASPAC発〕

5月24日より4日間、北九州で92年度ASPACが開催された。テーマは「地球にハートが生まれる日」。JCIの会議史上最大という1万8000余の登録を得た。開会式には秋篠宮・同妃両殿下のご臨席を賜り「人と自然が共存、共栄できる未来を求めて、多くの意見交換が行なわれることは意義深い」とのお言葉を頂戴した。会場には「地球の絵画コンテスト」に応募のあった作品2238点が展示された。子供達の描いた地球の姿はバラエティに富み、お国柄が窺える。

西村会頭は「地球への関心喚起が目的」と強調し、イリバロンドJCI会頭は「46カ国でこの意義を強調してきた。力強い手応えを感じている」と述べた。ふるさと地球運動は、国際的にも広がりを見せ始めてき

たのだ。

■盛り上がる「ふるさと地球運動」

TOYP大賞

7月24日、東京新高輪プリンスホテル国際館パミールで第6回TOYP大賞セレモニーが開かれた。テーマは「ふるさと地球運動の実践」。受賞者10名の活動が、大型スクリーンに映し出される。最低限の食料さえ手に入れることができない人達、水さえも不足している地域、教育の場もない……。そんな国が、地球上には数多く存在する。だが他方、地球では自らの青春を捧げ、勇気ある行動を起こしている若者も多いのだ。

グランプリを受賞した上田敏博さんは、4年前に青年海外協力隊員としてフィリピンを訪れ、洗濯板の製作指導と普及に努め、「奇跡の板」として注目された。その後、マニラ市のスモーキーマウンテン地区に住む子供達の生活を知り、支援を決意して同地区に移り住み活動を開始した。上田氏は「受賞の喜びをフィリピンの子供達と分かち合いたい」と語った。

なお、今回は特に1名の少女・坪田愛華ちゃんに特別賞（環境庁長官賞）が贈られた。「一人の力は小さいけれど、一人ひとりの小さな力が重なれば、やがて美しい平和な地球ができる」という思いを得意の漫画で、『地球の秘密』という一冊の本にまとめた。だが、完成して間もなく愛華ちゃんは病のため帰らぬ人となった。12歳の生涯だった。

表彰式に出席したご両親は、「愛華の作品が少しでもお役に立てば嬉しい。本人もきっと喜んでいるでしょう」と語った。この作品は、本年5月ニューヨークで開催された国連子供会議に展示され、6月にリオデジャネイロで開かれた地球環境サミットで配布され、各国の多くの人々に感動を与えた。哀悼。

少年少女国際使節団

7月28日から2週間、夏休みを利用して少年少女国際使節団121名がニュージーランド、オーストラリアを訪問した。この事業は、日本と訪問国の子供達

の「ふるさと地球」を大切にすることを育み、次世代のリーダーとなるべく国際人の誕生を願う企画だ。子供達はホームステイや本場のラグビーを体験し、記念植樹祭や地球の絵画大会に参加した。

なかでも、絵画大会で見せてくれたニュージーランド・マオリ族の子供達たちの絵は「素晴らしい色彩と大胆な構成で目を見張るばかりだった」、と事務局の報告記にあった。

北方四島の子供達と

8月1～2日に納沙布岬で開かれた第23次北方領土現地視察・現地大会では、根室支庁の招きで来日した北方四島に住む子供達(12～16歳)50名を招待し、交流・対話の場が設営された。ここでも、四島の子供達の作品40点を含む140点の地球の絵画が展示され、交流が図られた。

日中青年友好会議でも

9月13日、訪中ミッションが「日中青年友好会議」出席のため北京を訪れた。国交正常化20周年ということもあり、西村会頭を団長に総勢60名と大規模になった。当会議は『ふるさと地球の絵画展』テープカットによって開幕した。

各界代表の挨拶・講演で西村会頭は、「かけがえない地球に夢を描いてゆくために、中国と日本の青年が果たすべき役割は非常に大きなものがある。そのために、両国の友好をもっと深めていく必要がある。素敵な鳥のさえずりを頭で理解しようとする人がいないように、互いに心から好きになること。その気持ち、その感動を地球の隅々にまで広げたい」と語った。そして最後に、サウジアラビアの宇宙飛行士の言葉「最初の1～2日は、みんな自分の国を指していた。3～4日目には自分の大陸を指した。そして5日目、私たちの念頭には、たった一つの地球しかなかった」を引用し、盛大な拍手を浴びた。

子ども星空サミット

10月3日、北海道は七飯町の大沼国際セミナーハウス。「子ども星空サミット」が、「地球の詩92」入選者と函館市近郊の子供達を対象に開催され、様々な

問題を抱える地球に対する子供達の熱いメッセージである詩が紹介された。

宇宙飛行士の毛利衛氏からメッセージが寄せられたほか、国立天文台の池内了教授とアポロ14号で月面着陸したエドガー・ミッチェル氏をゲストに迎え、宇宙から見た地球や地球の未来について語り合った。ある男子が「宇宙人が地球にやってきたら、人間を地球から追い払うのではないかと心配です」と質問すると、ミッチェル氏は「宇宙人はきっと精神文明が発達しているので、優しい心をもっているのではないかと答え、ほっとさせる一幕もあつた。池内教授は「青い地球が茶色になりつつある。一番の問題は森林の伐採で、その大きな原因である紙の消費を減らす努力をしなければならない」と説明した。

会場の子供達からは、いま取り組んでいる空き缶やビンのリサイクル活動の報告があつた。会場でのアンケート調査によれば、今のままでは地球は死んでしまう、と思っている子供達が半数以上もおり、子供達の地球環境への意識の高さに驚かされた。

その後、選考委員代表の今野由梨氏が「今日のこと、そしてこの詩を作ったことを覚えてほしい。一人ひとりの地球への思いは小さいけれども、それは日本だけではなく世界にも通じること」と述べ、グランプリ4作品を紹介した。「子ども星空サミット」の様子は、10月10日NHKテレビで1時間番組として放映された。

「地球の応援歌」コンテスト

10月18日、東京新宿ルミネアクトホールで「地球の応援歌」コンテスト入賞作の中の23曲が、応募者本人の歌唱・演奏によって披露された。750点の応募曲から選ばれた作品で、一般への発表の場としてコンサート開催の運びとなった。

最後の発表は、グランプリ曲『FOR THE EARTH』。作詞・森ユキさん、作曲・坂本祐介さんがオリジナル曲を披露。歌の後半に入るや、銀賞に輝いた京都のちびっこ達も壇上に姿を現わして合唱、花を添えた。演奏終了後、この曲をCD発売するピンク・サ

ファイアが登場し、アレンジを変えたグランプリ曲を含む数曲の熱唱だ。

5時間に及ぶコンサートの締めは、JC役員と出演者全員が登場しグランプリ曲を全員笑顔の大合唱となった。会場は、地球に対し何か自分でやれることがあるに違いない、という優しい思いに包まれてゆく……。感動のフィナーレであった。小原嘉文副会頭（佐賀）は、こう語った。「この事業を通じて地球に対する認識を深めて頂き、地球市民としての意識が広がってくれば、と思います」。

■ 日本JC、地球サミット公認NGOに

3月3日、日本JCに朗報が飛び込んできた。国連環境開発会議UNCED事務局発「参加NGOとして認定する」との電報だ。昨年のJCI世界会議で決議された「世界青年環境会議開催」の案件は、より重みを増して実現の運びとなった。岡田伸浩副会頭（横浜）は「JCが提唱している地球市民の理念を全世界に訴える絶好の機会」と語った。

3月6日、経団連ホールで開かれた地球環境日本委員会（地球サミットへの提言をまとめる日本側の代表団体）主催のフォーラムで西村会頭は、「地球市民という理念を世界中の人々がもつことが大切だ。地球への義務を果たして、はじめて地球から豊かさを享受できる。我々は子供達にもこういう意識をもってもらうため、地球の絵画コンテスト等の企画を実施し、その最優秀作品をモチーフに地球の旗やシンボルマークができれば素晴らしい」と提言、会場から盛んな拍手を得た。



日本JC地球サミットの公認NGOに決定（'92）

■ 世界青年環境会議に参加

さて6月2日、リオ郊外の地中海クラブで開かれた世界青年環境会議は、まず議長にイリバロンドJCI会頭、副議長に西村日本JC会頭が指名され議事が進行した。3日間の討議を終え、会議は地球市民憲章や環境問題に対するJCIやNOM、LOMのアクションプランを採択した後、UNCEDの決議を政府が遵守するよう督促する決議案を採択した。更に、この実り多い会議を単発に終わらせることなく、今後も連絡を取り合う国際組織の設立を小原副会頭が提案し、満場一致で可決され、代表には小原副会頭が就任した。

小原副会頭は「環境の専門家も出席し、非常に内容の濃い会議だった。先進国と途上国の対立よりも、共存の可能性を探る方向に重点が置かれ実務的な会議だった。今後、JCメンバー全員が1年に1本の植樹をするなどの目標を具体化していきたい」と語った。

■ リオと日本をHOTFAXで結ぶ

この会議には、欠かせない余話が一題ある。HOTFAXだ。リオと日本をFAXで結び、情報を共有しつつことを進行させた。12時間という時差の関係で、担当者の苦労は想像に絶するものがあったと思う。リオから日本向けに発信した環境アンケートに対し334通、2回目236通の回答があった。754LOMの3、4割以上が参加したことになる。各国代表からも驚嘆の眼で見られ、回答のコピーを要求する代表すらあった。担当の檜畑直尚国際室長（和歌山）は、「皆さんがリオに居るような臨場感を、と頑張りました。多数の回答有難うございました」と日本側の協力に感謝していた。

■ グローバル・トレーニング・スクール新たに登場

これまでの洋上スクールに代わって、今年度からは新たにグローバル・トレーニング・スクール（GTS）を実施することになった。本年度の基本方針である

「世界への貢献」「地球市民意識の高揚」「地球規模の個人運動の実践」を達成するため、地球市民としての自覚をもった人材育成を図る企画だ。

GTSの目的は、従来の見る・聞くという受動的な基礎トレーニングに加え、環境問題や人権問題を抱えている地域や、被災を受け復興が進展していない地域において、自ら奉仕活動を実践することにより現地民と触れ合い、その体験を通じて地球市民として行動できる人材育成を図ることにある。テーマは「自ら挑戦 ふるさと地球のつくりかえ かいいた汗は嘘をつかない」。

フィリピンで3事業(研修)

4月20～26日、山本博史副会長(大阪)を団長に484名がフィリピンに向かい、次の3事業(研修)を行なった。

①公衆衛生システムの作成。ピナツボ火山噴火により、家を無くした現地住民(アエタ族)に対し、フィリピンJC等との共同事業でトイレを作り、感染症予防や衛生観念の向上を図ると共に、参加者には地球市民としての意識を植え付けた。この時期は乾季のピークで、日中は35度以上にもなり、現地人ですら木陰で休むという炎天下、しかもシッカロールのような火山灰にまみれての作業だった。

②マングローブ植林事業。ピナツボ火山噴火は、同地域のマングローブを含む熱帯森林にも大きな被害を与え、深刻な環境問題を引き起こしている。この植林事業を通し、身をもって地球環境問題を感じ



GTS子どもとのふれあい(フィリピン'92)

取り、「地球規模の個人運動の実践」「世界への貢献」を考える研修だった。マングローブの植林は、干潮時でなければできないという制約があり、メンバーは繁殖するクラゲに刺されるのも忘れ、心を込めて1本ずつ植樹していった。

③総合研修。地球市民意識の高揚と各人の資質向上のために、外部講師(戸井十月、上田敏博、喜田寛、澤木孝夫、外崎玄の各氏)による研修と、研修室各委員会による研修を実施。

GTS運営委員会山口斉委員長(浦和)は、「全参加メンバーが研修を終了し、全員無事に帰国できたことにより、所期の目的は充分に果たせたと考えます。各方面にひとかたならぬお世話をかけましたが、特にSCJ(セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)の上田敏博氏とケソンJCのプッチ理事長との出会いが、この事業を成功に導いたものと思います」と総括していた。

■青年経済人会議、 政治改革推進を緊急提言

7月25～26日、第15回青年経済人会議が開催された。連日30度を越す猛暑の中、東京新高輪プリンスホテル国際館パミールに約7000人(登録)が集まり議論をたたかわした。テーマは「地球市民としての国際貢献を通して、ちょっと素敵な“ふるさと地球”を創る」。

来賓として迎えられた石川六郎・日商会頭(第9代日本JC会頭)は、「真の日本を創り上げるには青年の力が必要だ。地球市民という意識をもってグローバルに活躍してほしい」、そして「戦後、政治の舞台が変わったのだから憲法も変わって当然だ」と、JCの政治改革運動を支援する言葉を述べた。

その後、アクションプランが発表された。JC政治討論会の推進、2010年の連邦国家に向けて自立生活圏を考えよう、エコを核として考えよう……。そして、緊急提言の発表である。「政治に不満を感じている今こそ政治改革に取り組むべきである」とし、次

の発議がなされた。①政治改革の必要性と方法について地域での議論を活性化しよう。②政治改革におけるボランティア活動をJCが積極的に応援しよう。③クリーン選挙の実践を目指し、政治改革を積極的に推進する政治家をJCが公表しよう。

この会議に併せて、国づくりデザインフォーラムが開催された。本年発足した「国づくりデザイン会議」は、通常の単年度事業ではなく3年間の継続事業としてスタートした。政治、経済、学術など各方面で活躍される42名の方々(内JCメンバーは3名)が参加しており、JCの枠を越えた外部組織として今後各LOMおよびブロックでの活動を応援していく。その第一歩として約2時間にわたる会議がもたれた。今後の地域活動の起爆剤として、大きな期待が寄せられている。

■ 国境なき奉仕団、人的貢献に出動

1992年からスタートした運動で、もう一つ大書しておきたいのが「国境なき奉仕団」である。日本JCのメンバーを中心に、民間の国際緊急災害援助活動を目的として企画された国際貢献だ。この活動には、実に感動させられる。よくぞ、やったりと思う。

国境なき奉仕団特別委員会梅澤重雄委員長(甲府)は、次のように記している。「開発途上国において緊急災害発生の際、人的・物的貢献を目的としたもので、政府と連携した民間の国際緊急援助組織である。その基本理念は単なる慈善ではない。人類愛による人道上的配慮からくるもので、困っている国や人が必要とする援助を行なえる奉仕の精神をもった人材をつくることと、社会人が気軽に奉仕活動を行なえる社会システムづくりを目指す。そのために、JCメンバーが地球市民としての自覚をもって行動しなければならない」と。

彼らは、かっこよく抱負を語るだけではない。既に前年12月10日、10名のメンバーがタイの難民キャンプ地での実態調査と、バングラディシュにおけるNGOの活動状況視察のために出発していた。人的



国境なき奉仕団スタディツアー(’92)

貢献とは全く初めての試みだけに、まず自分たちの目で被災地を見聞し、現地側の要求とはどんなことなのか、具体的な活動としては何ができるのかを、把握しなければならないと考えたのだ。

年明け2月にはインド、マレーシア、3月にはカンボジアへと調査団を派遣した。

ミャンマー難民救済

そうした事前調査の手順を踏んだ上で、いよいよ第1陣がバングラディシュに飛び立つことになるのだが、その2週間前には長野県の青年海外協力隊駒ヶ根訓練所において3日間の国内研修を受講した。研修には青年海外協力隊のOB・OGと梅沢委員長、窪田雅則駒ヶ根JC理事長はじめ200余名のJCメンバー、それに全国から集まった約60名の一般研修生が参加した。

研修内容は、開発途上国の現状説明に始まり、NGOによる海外援助活動のあり方等の講義を受けた後、野外トレーニングについて駒ヶ根JCメンバーから、テントの張り方や飯の炊き方など基本的な野営方法を教わった。

5月6日、「国境なき奉仕団」第1班団長山本博史副会頭はじめ7名が成田を出発。第2班5名は7日、名古屋を発った。今回の行動は昨年3月よりバングラディシュに大量流出しつつあるミャンマー難民救済が目的で、生活必需物資を現地調達し配布することにより、主に子供達の生命を確保する目的だ。

7日、バンコク経由でダッカ到着。直ちにダッカ子

供病院を訪ね、日本から持参した注射針1万本を寄付。一路、チッタゴンへ向かい、同地で山田一功総括幹事ら4名が救援物資を調達。山本副会長、梅沢委員長は日本国名誉領事ミハメッド・ヌルル・イスラム氏を訪ね、今後の対応策等について面談した。その後、一行は物資を満載したトラック2台とワゴン車1台に分乗しコックスバザールへ。

翌朝、遅れて到着した第2班と合流し、難民キャンプ地に向かった。現地ではボランティア団体・赤心月社と共に、粉ミルク2.5トン、衣類7500枚、ランタン2400個、モスキートネット1500枚を、少しでも多くの子供の命が救えるようお願いつつ、難民に手渡していった。物資調達資金は、日本JCの国際協力資金より拠出され800万円が充当された。一行は、14日までに無事帰国した。

インド多目的小学校建設へ

次いで、インドで多目的小学校の建設に協力することになった。マハラシュトラ州タレヤルカーン首相からも強力な要請があった事業だ。この学校は子供達の教育だけでなく婦人教育、職業訓練など幅広い分野での教育を行なう学校で、地域の発展に大きく役立つ事業と考えられるため、現地NGOと協力して推進することになった。

建設資材の発注や運搬・輸送も現地手配を原則とし、また建設開始から終了までのあらゆる監視ならびにチェックはKNSSおよびNIRID(NGO)が行なうこととした。本事業は本年8月に開始し、来年3月までに終了する予定で同地域185カ村の約20村に1校の割合で、全10校の建設を同時に開始する。同事業は、失業救済に大きく役立つものと期待されている。

第1次隊は9月3～10日、現地視察を行なった。「国境なき奉仕団」黒川勲副委員長を隊長とし、日本ハンガープロジェクト有川聡氏をアドバイザーにメンバーおよび隊員6名、合計8名が参加した。

4日、現地に到着した一行は市内スラムまちを視察。5日、ボンベイで現地子供達に贈呈する文房具(鉛筆1万本、ノート3000冊)を購入。6日、早朝

よりバスにて100キロ離れた建設予定地などを視察。道路混雑のためホテル到着は夜11時過ぎ。参加者はクーラーなしのバスに長時間揺られてダウン。7日、州首相に会見。インド中央政府に今回の目的を説明し、青年海外協力隊の派遣を要請する。NGO関係者委員会の席上、現金の贈呈式と契約書にサインをもらうことができた。

山田総括幹事は、JC PRESSに次のよう記している。「私たちのプロジェクトも日本で計画したようには進んでおらず、本当に来年3月までに完成するの不安だ。しかし、ボンベイの経済界、政界のトップにサポートを要請し快諾を得たことが、せめてもの救いだった。本日(10月15日)、10カ所のうち6カ所で着工され、進んでいるとの報告が入り、ホッとしているところである」。

■ 国防の厳しさ実感

ペルシャ湾岸への掃海艇派遣、国連PKO活動への自衛隊派遣など、今年には自衛隊について考え論議する機会が多くなった。国づくりデザイン推進会議(中央官庁とJCのパイプ役)としても、果たして自衛隊に関する知識は充分なのだろうか、という素朴かつ重要な問題意識から、自衛隊を知り防衛についての理解を深めるべく10月5日から2泊3日の日程で、北海道の防衛庁視察研修を実施した。以下、岩崎常吉(堺)の体験記(要約)。

「千歳駅に到着。自衛隊員の笑顔に迎えられ、航空自衛隊基地に向かう。アラート(領空侵犯機に対するF15のスクランブル発進など行なう)現場を見学。夕方、自衛隊員との懇談で『私達は自衛隊に反対する人達のためにも、命をかけて国を守ります』、『PKOに反対する人達がいるからこそ、健全な国家と言えるのではないだろうか。誰ひとり反対しないことの方が恐ろしく、危険なのではないか』との話には考えさせられた。翌日は、陸上自衛隊の最新鋭の部隊装備を見学。

百聞は一見にしかず。自衛隊を身近に感じ、国防、

PKOなどを考えるきっかけとなった。いろいろな場面で日本が国際問題に関わらざるを得なくなった時、一番危険なことは、取りあえず自分には関係ない、という無関心さではないか。20歳前後の自衛官のキビキビした態度、キラキラと輝く目は印象に残った。自分の仕事が日本の安全・国防を担っているという誇りと、愛国心から出るものなのだろう。最近になく感動した」。

■ でっかくおがれ地球市民 〈函館全国大会〉

第41回全国大会は10月1～4日、函館市で開催された。前日までの寒空は嘘のように晴れあがり、人口31万の函館に全国から約1万8000人のメンバーが集まってきた。

会頭記者会見にはテレビ・新聞など約15社が集まり地球市民の意識高揚、地球的規模の個人運動の実践といったテーマに、質問が飛んだ。西村会頭は、地球の絵画コンテストや国境なき奉仕団、1人1日5円運動などの例をあげながら、「日本人は団体ではよく実践するが、個人レベルでは難しいことが多い。我々は青年らしく個人の運動として環境問題や国際貢献に取り組んでいきたい」と力説した。

第91回臨時総会では、ふるさと地球運動の核、「地球の絵画」「地球の詩」「地球の応援歌」コンテストの表彰式が行われた。ビデオ映像で紹介される「地球の絵画」入賞作の10点は、それぞれが素晴らしく優劣つけ難い作品だった。そして、全応募作品をモチーフに、アートディレクターの野口久光氏監修による地球の旗が披露された。

■ アワード、白馬JCにグランプリ

2日21時、LOM活動を顕彰するアワードセレモニーがホテル函館ロイヤルに約2000名のメンバーが集まり開催された。最優秀賞は北上JCと塩釜JCが受賞。注目のグランプリ(会頭賞)は、規定部門「JCづくり」推進賞を受賞した白馬JCの国際山岳観

光都市への「まちづくりひとづくり」事業に輝いた。人口1万6000人の小さな村の認証番号752という若いJCだが、JC運動にかける情熱は素晴らしいものがあった、というのが選考理由だった。

白馬山麓はアルペンスキーはじめ山岳観光のメッカで、年間500万人の観光客を迎える山岳リゾートである。だが、村部だけに古くからの年功序列の地域社会が温存されていた。そこに、強烈なインパクトを与える人物が現われた。事業の関係で、白馬に移ってきた鶴見増朗(1980年度日本JC社会開発委員長)の「白馬の若者は青年らしい汗を流していないね」の一言に触発され、ふるさと白馬にJCを、との機運が高まり、1989年に村を単位とする全国初のJCが、44名で設立された。

設立以来、国際山岳観光都市「白馬」の構築をJCの理想として掲げ、特に1998年長野冬季オリンピック招致運動に際しては、主競技会場の一つとして常に運動の最先端に立ち、地域住民とオリンピック開催の感激を共有すべく運動を展開した。「我々は、小規模LOMだからこそできるキメ細やかなまちづくり、人づくりの運動を展開し、白馬山麓の地域創造の旗手となる覚悟を胸に、青年会議所運動の継続に今後より一層の情熱を傾注する」と、抱負を語る。そして、目下(当時)、大山桜の植樹による21世紀に向けた地域ぐるみの景観整備事業「白馬山麓2001桜満(ロマン)計画」を推進中ということであった。

■ いけば、まぶいど! 記念式典

10月4日、函館ドック大会場で記念式典が挙行された。ちなみに「いけば、まぶいど」とは、行くと素晴らしいことがある、の函館弁。常陸宮・同妃両殿下ご臨席のもと開催され、西村会頭はこの一年を振り返って「京都会議で地球市民時代の幕開けを宣言して以来、全国のLOMのご協力で数々の事業を展開してきた。約7万枚の応募があった地球の絵画コンテスト。地球の応援歌も10月にはCD発売。海外でも沢山の貢献活動ができて、でっかくおがった地

球市民を実感している」と語った。

プレジデンシャルリースは第42代岡田伸浩会頭へ。岡田会頭予定者は「いつの世でも時代を動かすのは青年である。皆さんと一緒に爽やかな汗を流したい。LOM応援団から、まちの応援団を目指したい」と抱負を語り、会場を埋めた1万余のメンバーから、盛んな激励の拍手を浴びた。

そして、卒業式は上田徹監事(栗原)が代表挨拶を行ない、卒業生は壇上で肩を組んでの大合唱で、思い熱きJC運動に別れを告げた。

■ マイアミで、村田敦生ちゃんグランプリ

第47回JCI世界会議は11月9～14日、JC運動のメッカとも言うべきマイアミで開催された。世界会議場のジェームス・ナイト・センターには、世界60余カ国から寄せられた6万4000点以上にものぼる「地球の絵画」から選ばれた優秀作500点が展示され、2000名を越すJCメンバーが鑑賞した。

審査は来場者の投票によって行なわれ、優秀作10点が決定、その中から最高得票を得たグランプリには日本の村田敦生ちゃん(12歳・防府市)の作品が選ばれた。『みんながすみたくなる地球』と題するこの作品は、アイデアも色彩もユニークで、見る人を勇気づけるパワーに満ちた作品であった。

また、日本JC地球の絵画特別委員会は、応募作品から約70点を収録して絵本を制作し世界会議場で披露した。子供達の描いた絵を鑑賞しながら地球環境問題について考えよう、という趣旨で制作されたもので、会場で5ドル以上という価格で販売さ



西村会頭、雲仙普賢岳視察(’92)

れた。その収益は、8月末にマイアミを襲った超大型ハリケーン・アンドリューの復興対策基金として寄贈された。地球を救う運動の成果が、災害復旧に活用された。

日本は3賞を獲得

注目のアワードセレモニーは40カ国より約370事業のエントリーという激戦だ。日本JCは15部門に20事業がエントリーし、3部門で栄冠を手にした。

最重点テーマ賞=グローバル・トレーニング・スクール(GTS)。他人のために行動し、それを自己の研修にあてた初の試みが高い評価を得た。主宰した大本宗司研修室長(八幡浜)は「大袈裟な国際貢献ではなく、ちょっと素敵な体験をする、という全く新しい事業だった」と企画の斬新さを語った。担当の山口委員長は「エントリーは当初から考えていた。世界から評価されて本当に嬉しい」と。

NOM対象の社会開発賞=国際協力資金運営会議。91年よりJCメンバーは1人1日5円の募金運動を行ない、その資金は各種の国際貢献事業に投入されている。本年度は世界青年環境会議や国境なき奉仕団などを支援した。担当の鏑一郎議長(金沢)は「少しのお金でも一年集めれば沢山のことができる、ということが理解していただけたのではないかと。各国JCに対しても有益な示唆を与えたと思う」と、受賞の意義を語った。

LOM対象の社会開発賞=城址活用アイデア募集事業・金沢JC。金沢大学が城址より移転した跡地約22万平方メートルの活用アイデアを国際的に募り、市民の関心を喚起しようという事業に内外から10件を超すアイデアが寄せられた。これを金沢JCは立体モデルやビデオ化して市民に紹介し、関心を高めることに成功。これが評価され、今回の受賞となった。

93年度のJCI役員選挙では、会頭にロビー・ドーキンス(アメリカ)が選ばれ、日本担当副会頭にはマルコ・マルテリ・カルベリ(イタリア)、愛称マルコちゃんと決定。熱い汗をかいた92年度のJC運動は幕を下ろした。

■ 輝け! まちの地球市民

「さわやかな汗で笑顔の星づくり 輝け! まちの地球市民」。

1993年、JCのスローガンだ。岡田伸浩会頭(横浜)のイメージにぴったりではないか。バブル経済が崩壊して1年、わが国の多くの企業・産業は厳しい状況に直面している。政治改革も一向に進まない。日本列島は重苦しい閉塞感に覆われていた。その暗雲を吹き飛ばせ、と言わんばかりの勢いを感じる。

1月21~24日、全国から2万人を超えるメンバーが京都に集まってきた。前日までの好天が嘘のように冷え込み、恒例の下鴨神社の参拝は雪に見舞われた。京ではこれを吉兆というが、身の引き締まるようなスタートであった。

22日は、理事会、評議員会等の諸会議で1年間の活動計画が討議された。午後6時、新年名刺交換パーティーだ。2名のガールスカウトが手旗信号で「さわやかな汗で笑顔の星づくり……」と描いた後、岡田会頭はじめ役員が紹介され、鏡割り、乾杯で大懇親会となった。

最終日、24日のハイライトは、岡田会頭の所信表明である。

「旧年、暮も押し詰まって訪れたスモーキー・マウンテンで出会った苦境にめげず夢を描いて生きている子供達、あるいは雲仙・普賢岳の被災者である島原のJCメンバーが希望をもって復興に励む姿などに、私はJCの原点を見出した。

変革の能動者たらんとするならば、まず私達が行動しなければならない。敢えて、今ここでJCらしい政治改革への取り組みについて問うてみたい。また、景気が悪くてJCどころじゃない、とよく耳にする。だが、果たしてそうだろうか。私は敢えて、こういう時だからこそ今まで以上にJC運動に取り組もう、と言いたい。何故なら、企業はまちに支えられ、人は人に活かされているからだ。私の提唱する“もったいない運動”の基本的な考え方は、全てをそれぞれらしく活かすことにある。

JCは素晴らしい機会を与えてくれる。一度しかない人生を、豊かにしてくれる。しかし、JCは所属するだけでは何も与えてくれない。様々な機会を、活かすも殺すも自分自身なのだ。活かさなければ、もったいない。まず、できることから始めよう。肩の力を抜いて、しかし青年らしく、あくまでも前向きに……。さあ、上着を脱いで、腕をまくって、汗をかこう! 机の上で考えているのは似合わない!」。

93年度のJC運動はキックオフした。今年度の運動は、新設を含む5室によって展開される。①国際室長樋口信治(大阪)「世界とJCIを身近に」。②国際貢献室長岡崎重彌(山形)「顔の見える国際貢献を志向する」。③環境室長原田信隆(札幌)「持続可能な経済発展を考え、あらゆる方向から環境問題に取り組む」。④まちづくり応援室長永田隆(東京)「まちづくりに関する総合的な支援/推進・調査・研究」。⑤総務室長才門正男(岸和田)「分かりやすく、参加しやすい組織づくり」。

■ 随所に「もったいない」精神

岡田会頭の提唱する「もったいない」精神が反映され、京都会議でもユニークな試みがなされていた。従来、各委員会等が独自に制作配布していたPRツール類を、京都会議プログラムが収録されているJC PRESS 1月号に集約して配布したところ、大好評で用意した1万部は全て参加者に持ち帰られた。

会場各所には「もったいない箱」が設置され、再利用可能なゴミは回収された。新年名刺交換パーティーも、LOM相互訪問等を簡素化しようとする「もったいない」精神溢れる企画だった。JC PRESSには、「もったいない運動」情報交換コーナーが開設された。「知らないなんてもったいない」情報や、「使わないなんてもったいない」用品や、「参加しないなんてもったいない」イベント情報などを集め、広く紹介していくことになった。

「もったいない」ベスト3

同紙には、使用済みテレカがミルクに変わる、と

いう情報も掲載されていた。日本では価値のない使用済みテレカも、ヨーロッパ各国では収集家がいるので1枚20～50円で売れる。その収入で医療品など援助物資を購入し、存在が危ぶまれる少数民族の支援を行なっているボランティア団体を紹介していた。テレカ100枚で子供一人一年分のミルク代に、1000枚でマラリア予防の錠剤3万5000錠が購入できる、と。「国際貢献できることを知らずに捨てていてはもったいない。日本JCのテレカ係まで送って下さい」とあった。

6月15～7月10日に実施されたブッシュホンアンケート「もったいない運動」の調査結果によると、「もったいないもの」ベスト3は「食べ残してしまう食事」、「もったいないの心が忘れられつつあること」、「まだ使えるのに捨ててしまう衣類・家具・電化製品」。また、生活の中で「もったいない」を意識している人は8割にも達した。そして、子供達に「もったいない」の心を伝えていく必要性を感じている人は、実に98%に達していた。

■ 地震の釧路へ、 空港問題を抱える八重山へ

1月15日、釧路市を中心とする道東地区をマグニチュード7.8(推定)の地震が襲った。最大断水265戸、停電9000戸、ガス供給停止9265戸に達し、被害総額は313億円(2月2日現在)を超えた。2月1日、岡田会頭は釧路市役所災害対策本部を訪ね古谷助役にお見舞いを述べた後、釧路JC例会に出席。「親身になって心配する多くのJC仲間がいることを再認識し、これを転機にJCらしく活躍してほしい。釧路JCのスローガン原点・変革・実践のもと、奮励尽力を」と、激励した。

4月26日、新空港建設に揺れる八重山に飛んだ。現空港が手狭になったため、十数年前に新空港建設を図ったことがある。しかし、予定地が全国でも有数の珊瑚の生息地であったことから中止となり、その後3カ所の候補地も様々な問題で決定に踏み切れ

ていない。JCは現空港の拡張を提案したが、現空港の恒久化を懸念する周辺住民の反対で進展できない。岡田会頭は例会で「具体的な指示は何もできません」と前置きした後、「JCは個人の利害関係にとらわれず、政治的にも左右されることなく行動する唯一の団体であることを忘れず、行動してほしい。我々も大いに応援する」と激励し、参考までに同じような問題を抱えているLOMの事例を紹介した。

会頭ホットラインで情報共有を

翌朝、出発までの短い時間に岡田会頭は、ホットFAXで八重山の現況を全国理事長宛に発信し、「八重山JCに参考になる事例があれば、是非差し上げて下さい」と、書き添えた。そこが凄い。ホットFAX情報システムは、昨秋、岡田会頭予定者の強い要望で創設されたものだった。第1弾として「あなたの声を聞かせて下さい」を合言葉に、93理事長予定者ミーティングで会頭ホットラインに繋がるオートダイヤルテレカを手渡し、11月までに約70件の理事長の声が寄せられた。「まちの応援団」を標榜し、情報を共有すべく共に受・発信できる組織づくりを目指す、その熱意と知恵が響いてくる。

■ まちづくりアドバイザーを派遣

まちづくりデザイン会議は、今年度もアドバイザーの派遣事業を推進している。住友生命の助成によって運営されている事業だが、3月の沼田に続いて4月は串木野に派遣された。串木野JCの「愛とロマンを求めるまちづくりを市民一人ひとりの手で実現しよう!」との呼び掛けで実現した。行政・市民の参加のもとに開かれ、行政や専門家の講演に引き続き参加者全員の1分間スピーチで本音の意見交換が行なわれ、予定の4時間を過ぎても誰も席を立たなかったという。川崎弘一理事長の「市民こそが、まちの活力源。後戻りできないまちづくり運動を、焦らずじっくりやり続けます」との決意表明で終了した。

同会議は10月までに60カ所の市民団体並びにJCに専門家を派遣する、という。それにしても、4時

間以上の1分間スピーチに誰も席を立たなかった、とは驚く。

■ 英国の「トラスト運動」を訪ねて

他方、まちづくり市民財団の阿部芳三理事長ら3名は、真のまちづくりとは何か、の答えを求めて、英国トラスト社会の視察に旅立った。以下に、JC PRESS掲載の報告要旨を紹介する。

「トラスト運動」という言葉は、英国では公益的な市民活動の総称を言う。19世紀末、産業革命によって世界を制覇した英国では、無秩序な開発から美しい自然景観や歴史的建造物を守るため、市民の手によって買い取る「ナショナル・トラスト運動」が始まった。あのピーターラビットの絵本の収入が、初期の運動を支えたという。

50年ほど経つと、この運動は「シビック・トラスト」のもとに集い、各地で展開されるようになった。最近では、荒廃した土地や都市環境を再生するために、企業や行政も巻き込んだ「グランドワーク・トラスト」が設立され、多くの成果を上げ始めている。

驚いたことに、英国の地方自治体には自治権がほとんどなく、そこに住む住民の手中にあった。英国の人々は、まちづくりを義務・正義感・宗教心からではなく、生活の楽しみの一つとして捉えており、気軽に楽しそうに活動していた。私達の探し求めていた回答は、この国の市民活動の中に、発見することができた。



(財)まちづくり市民財団
英国トラスト社会視察 ('93)

■ 北方領土現地大会に 北方四島の少年が初登場

2月7日、日比谷公会堂で「北方領土返還要求全国大会」が宮沢喜一首相、鹿野道彦総務庁長官北方対策本部長、渡辺美智雄外相はじめ各政党代表を来賓に、約2500名の参加者を得て開催された。

主宰の実行委員会は約100団体で構成され、JCも一団体として参加した。吉田純也副会頭(三国芦原金津)は、「各地JCおよび日本JCが北方領土返還のためロシア視察、全国大会、その他各種の交流事業を精力的に展開している」ことを報告した。渡辺外相は「政府としても協力していく」との意向を示し、行政に対しても北方領土返還への国民的機運の高まりを印象づけることができた。

そして、日本JCの第24次北方領土視察・現地大会は7月31～8月1日、根室・納沙布岬で開催された。30日から根室入りしていた北方四島の少年少女ビザなし訪問団51名を含む、延べ約500名が参加。岡田会頭は記者会見で「当事業は、北方領土問題を現地の視点で四島住民と共に考えていくことを狙いとし、今後とも継続していくつもりだ。また、来年はロシアJCのメンバーを大会に招きたい」と抱負を語った。

大会式典は約250名の参加のもと行なわれ、会頭は「日ロの交流を更に実のあるものとするため、北方四島の一括返還を早期に実現することが必要」と挨拶した。続いて、初の試みとして、2名の北方四島少年が登壇した。「北方領土は僕達が大人になるまで残る問題だと思う。その時に合理的、理性的に解決できるよう、お互いが理解し合わなければならない」と挨拶し、満場の拍手を浴びた。

JC使節団、モスクワへ

4月27日から5月2日まで、日本JC吉田副会頭、樋口国際室長、並びにCIS関係委員長吉田大造(尾道)はじめメンバーによる使節団がモスクワを訪問していた。JCIへの正式加盟を目指すロシアJCの支援、および政府要人に対するJCのPRが目的だった。

一行は、ミッションに同行したモジブルホックJCI副会長とともにロシアJCを公式訪問。歓迎の挨拶に立ったコピョフ・JC会頭は「92年に8つのLOMでスタートしたが、いまや40以上を数えるまでになった。日本JCおよび各国NOMの援助と、今回のミッション参加者に心から感謝する」と述べた。

吉田副会長は「私達は世界中に37万人の仲間がいる。今後、ロシアJCの皆さんが加わることは、大変に嬉しい」と語った。JCI副会長は「今回の日本JCとロシアJCの努力が、ロシアJCのJCI加盟に向けての重要なステップになることは間違いない」と、ミッションの重要性を示唆した。

■ 国境なき奉仕団、 ソマリア難民緊急援助へ

国境なき奉仕団は2年目を迎えた。4月19～27日、山本潤副会長（伊丹）を団長とするソマリア難民救済プロジェクト第1次隊24名が、ジブチ共和国へ向かった。ジブチは人口50万人の小国であり、そこへ約13万人のソマリア難民が流入している。人口の25%にも達する難民は、この小国にとっては過重で、国際機関やNGOに援助を望んでいた。

現地入りした奉仕団は、AMDA（アジア医師連絡協議会）に頼まれた医薬品等を現地側AMDAに引き渡す。AMDAは現地における日本で最初のNGOで、その場で情報交換を行なった。現地で活躍している日本人医師によると「日本政府に薬品を送ってもらっても届かない。どこかで消えてしまう」と、直接



国境なき奉仕団ソマリア
難民救済プロジェクト（'93）

的な物資援助の必要性を強調していた。

奉仕団は、市内近くの難民キャンプを視察する。臭気が凄い。雨が降れば汚物で一带が汚れ、環境衛生は極めて悪い。もちろん、衣服や靴もなく、子供は裸同然だ。一行は、物資配布班と物資数量確認班に分かれて行動を開始する。

キャンプでの物資配布はONARS（難民救済委員会）の配布プログラムを混乱させるので、形式的な少量配布に止めた。物資確認班は業者の車で港の物資貯蔵庫へ。ジブチ市内で購入した砂糖100トン、米80トンのほか小麦粉、パスタ、食用油、毛布を確認したうえ引渡し式を行ない、ONARS代表者に譲渡した。貯蔵倉庫には救援物資が備蓄されており、定期的に配布するとのことだった。

「今回の援助は非常に歓迎され、時宜を得たものと思われた。この事業は、全国メンバー6万4000名の1日5円寄付による国際協力事業費の一部を有効に活用したと確信する。貯蔵庫に入れられた救援物資を眺め、今後は衛生環境の整備と井戸を掘るなど飲料水の確保が課題であるように感じた」と、奉仕団の報告記にあった。

ハブニング！ ソマリア難民救援隊

10月9～14日、第2次ソマリア難民救援隊12名がジブチを訪問した。ところが、ハルゲイサ病院でハブニングが生じた。カメラを持ち込もうとした一行に、一人のソマリア人医師が立ちはだかり「院内にビデオを持ち込む人は大勢来たが、誰も患者に何もしてくれなかった。冷やかし半分なら、すぐ出て行って



GTSフィリピン（'93）

くれ」と。西村予史男団長（静岡）は「救援物資を直接手渡すことと、今後どのような活動が必要なのか視察に来たのだ。ビデオは私達の活動への賛同者を募る目的がある」と訴えたところ、件の医師は非礼を詫びたということだった。

その後、一行は北部ソマリアで、ソマリランドと称して独立運動を継続している副大統領に会見した。同氏は「自動車もラジオも日本製なのに、日本人に会うのは初めてです。これからも、日本からの援助に期待します」と言われたという。一行は、この言葉に、日本は顔の見える国際援助をしなければならない、と痛感させられたのだった。

■ GTS、フィリピンに根付け日本人の心!

4月11～17日、93年度グローバル・トレーニング・スクール（GTS）がフィリピンで開校した。このGTSは、難民自立のための貢献活動ならびにスラムの子供達との交流を通し、地球市民としての自覚をもつ「人づくり研修」のプログラムだ。この1週間、山本潤副会頭を団長とする参加者350名は、アエタ族自立のための植林事業とスモーキーマウンテンの子供達との交流に汗を流し、そしてインドア研修も行なった。

11日、全国からの参加者がフィリピンに到着。多発するゲリラに備える警察のものものしい警備の中、宿泊地に向かった。12日、植林事業のためアエタ族の再定住地バジブルを訪れる。メンバーがアエタ族と共に汗を流すことにより、メンバーには国際貢献の本質を、アエタ族には単なる物資の供給ではないことを理解してもらい、アエタ族が自立への道を歩み始めるのが狙いだ。植林は700名によって行なわれ、マンゴ、ココナツ、ナラ、竹、マドレカカオ等、目標を上回る約3500本を植え付けた。植林事業の資金は日本自転車振興会、苗木の提供はセイブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）の協力によるものであった。

役に立つ木材部会

この植林事業には、もう一つの協力者がいた。日

本JC木材部会だ。本多一義業種別部会運営会議議長（豊川）、大高多恵男木材部会副部長ら調査隊7名がGTSの植林事業に先立つ3月18～20日、技術指導のため現地に入っていた。

一行は、植林予定地の地形、水系、土壌など自然条件のほか住民の状況など社会経済的要件についても調査した。予定地のほとんどが斜面で、雨季には水路になってしまう所が多い。乾季には井戸もないので給水源が心配、など問題点を把握し助言を行った。

植林は雨季に行なうのがベスト。今回は乾季なので悪条件の土地は除外すること。土壌はピナツポ山の火山灰に覆われているので掘穴の深さを検討し、できれば火山灰を除去すること。アエタ族は焼畑農業を行なうため、火が植林した木に移らないようにすること。植林は長期的な事業だから、目先の利益にとらわれないこと等々の助言を残して帰国した。

まことに、頼もしいアドバイスではないか。「役に立つJC それ業種別部会」とは会員募集のキャッチフレーズだが、ビジネス以外の社会開発運動にも本当に役に立つ木材部会だ、と感心させられる。

2日目はインドア研修だ。グレゴリー・クラーク上智大学教授、上田SCJ現地駐在員、現地の学生、NGO、フィリピンJCメンバーを交えて、国際感覚を実感し体得する学習を行なった。そして3日目、NHKマニラ支局長が同行し再び植林事業に携わった。このアエタ族との植林事業はNHK総合テレビ『おはよう日本』で放映された。

一日父親・母親に

4日目、いよいよスモーキーマウンテンの子供達との交流事業だ。ゴミの山、悪臭、メタンガス、栄養失調、皮膚病……、ゴミ運搬トラックに今日の糧を求めて群がる子供達。その子供達の手をとってバスに乗り込み、フィリピン大学サンケンガーデンに向かった。メンバーと子供が1人ずつペアになり、メンバーが一日父親・母親を務める。クレヨン、スケッチブック、凧などをプレゼントして昼食後、凧揚げ、

ヨーヨー、フォークダンス等を楽しんだ。子供達は笑顔で応えてくれた。

子供達を帰りのバスに乗せ、手を振るメンバーの目には熱いものがこみ上げてくる。ホテルに戻ったメンバーは、満天の星の下、岡田会頭を囲む懇談会が夜更けまで続いた。

5日目、総合研修としてグループ討論・発表会等が行なわれ、全プログラムは終了した。総括として、このGTSの報告記には次のように記されていた(抜粋)。

「気温40度を超える灼熱の下の植林で、メンバー3名が作業中に担架で運ばれ1名が入院した。講演中に停電する等のハプニングは連続だった。しかし、団員の理解と協力で多くのことを得ることができた。

特に、スモークマウンテンの子供達との交流は、私達が忘れかけていたものと呼び覚ましてくれたのではないか。あの子供達の歌声は、生涯忘れることはないだろう。いつの日か、また、あの輝く瞳の子供達に会えることを祈らずにはいられない。

今回の事業を通し、参加者一人ひとりが国際貢献の意義を見出し、NGO元年を標榜するJCメンバーの一人として何をすべきか、何ができるのかが見えてきたのではないだろうか。

■ キャプテンクック来島以来の感謝

ここで、国際貢献事業の話題をもう一つ、書き添えておきたい。

アジア国際貢献委員会は7月10～19日、南太平洋はメラネシアに属するバヌアツ共和国政府の要請により訪問した。1980年にイギリスから独立したばかりの、80余島からなる島嶼国家だ。JCは物資供与に伴って技術移転を行なう、というコンセプトに基づき主に保健衛生教育と学校・社会教育用ビデオの制作・指導を行なった。

例えば、マラリア対策として顕微鏡の使用・修理・管理方法等マイクロスコピストの養成から環境衛生の知識(歯の磨き方、手の洗い方等)、蠅取り紙や

モスキートネットの使用法、裁縫技術などである。

地元の長老は、「キャプテンクック来島以来、イギリス、フランスが交互に統治してくれたが、これほど子供達のために一生懸命にやってくれたのは、あなた方が初めてだ」と、しみじみ語ったという。

■ JC東京会議、地域主権運動を推進!

従来の青年経済人会議を「JC東京会議」と改称し、7月24～25日に新高輪プリンスホテル国際館パミールで開催した。台風4号の影響で豪雨に見舞われたが、7000人を超える登録者が集まった。

「輝け! まちの地球市民、地域が JAYCEEが創り出す『地域主権社会』の到来」をテーマに、政治改革・地方分権・国際貢献・環境等の問題にできることから取り組もうと、「全国理事長会議」「会員セミナー」「まちの応援見本市」を3本柱に開催された。

理事長オープンセミナーでは、牛尾治朗元会頭が「日本の新しい変革への対応、不連続のメリットを求めて」と題する講演を行なった。選択型会員セミナーは23コース開催され、参加者は延べ5000名に及んだ。

本年、「まちの御用聞き」を標榜する日本JCは、2日間にわたって崑崙の間で「まちの応援見本市」を開催、元気印の約70LOMはじめ業種別部会など計160のブースが設けられた。特に注目を集めたのは、会場に設けられたステージ。代わる代わる我がまちの伝統芸能や祭りを披露し賑わっていた。

最終日は、小野曜運営会議副議長より「それぞれのまちで、それぞれの地域主権運動を勇気をもって推進する」との行動宣言が朗々と発表され、割れんばかりの喝采が沸き起こるなか、2日間の会議は幕を閉じた。

■ ^あ愛つ晴れ、地球市民〈岡山全国大会〉

9月29～10月3日、第42回全国会員大会が岡山で開催された。「日本一のおもてなし」に「もったいない」精神が加味された本大会には1万7000名が集ま



TOYP大賞
'93受賞記念式典

り、簡潔にして、かつ感動的に、全日程は進行していった。

TOYPグランプリ、小島あずささん

10月2日、岡山市民会館で第7回TOYP大賞の受賞記念式典が行なわれた。149名のエントリーから10名選ばれたが、共通点は気負うことなく地球市民として当然のごとく活動に取り組んでいる点に見られた。グランプリに輝いた小島あずささん（茅ヶ崎推薦）は、「海をきれいに」「地球をきれいに」という考え方で、誰でもできるゴミ拾いからと3人で始めたところ、今や数万人も参加するイベントにまで至った、という活動である。

褒賞グランプリは高知JC

2日午後9時、LOM活動のオリンピック・褒賞アワードが岡山国際ホテルで2時間にわたって行なわれた。準グランプリ・最優秀規定部門賞は帯広の「STOP! AIDS in 十勝キャンペーン」に、同最優秀自由部門賞は島原の「普賢岳噴火災害における緊急支援および復興事業」に与えられ、グランプリは「ひとづくり推進賞」を受賞した高知JCの「はばたけ天使の翼運動」に輝き、岡田会頭から賞状と副賞100万円が手渡された。高知の事業は、在宅の重症心身障害者の戸外活動を支援するとともに、広く市民にそれぞれの生活の中で無理なく参加できるボランティアを提案したもので、障害者の東京ディズニーランド

旅行が実現し、後に高知ブロックの運動にまで発展していった。概要は、項を改めて叙述しよう。

記念式典、『思い出の渚』

最終日の3日、コンペックス岡山で開催された記念式典には、常陸宮・同妃両殿下がご臨席になり「JCの活発な活動には、いつも感銘している。今後もまちづくり、国づくりに精進してほしい」とのお言葉があった。岡田会頭は、横浜での全国大会以来、毎年欠かすことなく全国大会にご臨席頂く両殿下に謝辞を述べた後、「今日は私の生涯最良の日である。生涯一JAYCEEであり続けるし、卒業するメンバーを含めた全メンバーにも、その精神を期待する」と挨拶。

第43代会頭に決まった小原嘉文（佐賀）に、プレジデントリーフが引き継がれた。小原次年度会頭は「普通の生活者の目線でJC活動を行ないたい。JCの自己革新にも積極的に取り組む」と、力強く決意を語った。

そして、式典の最後は卒業式だ。毎年、涙、涙の感激シーンが演出されるが、今年は2000名を超える卒業生が登壇、ゲストのワイルドワンズと『思い出の渚』を大合唱し、JCライフに別れを告げた。

■ 高知JCの「はばたけ天使の翼運動」

高知JCは本事業に取り組むに際し、まず障害者を取り巻く問題点を調査した。行政は、障害者にも“ゆとり”や“いきる目標”づくりは必要と認めているものの、手が届かない、万一の責任は負いかねる、という姿勢が見られる。社会はどうか。例えば、航空機を利用する場合には車椅子利用者の人員制限とか、診断書や誓約書の事前提出が義務づけられる。ホテルの宿泊では食事や排泄等の問題がつきまとう。一般市民は、何とかしなければと考えている人は多いが、具体的な行動に移せる人は少ない。障害者本人や家族は、高齢化によって外出が困難になりつつある。

重症の娘をもつ母親の言葉

だが、一番の問題はJCにあった。いわく、単年

度制では継続が最優先される福祉活動は展開しづらい、労働だけを継続する事業にはしたくない、と。何よりも、メンバーの障害者に対する認識が余りにも低い、という現実だった。そんな中、JCが行動に移す決心をしたのは、ある重症の脳性麻痺の娘をもつ母親の言葉だった。「たとえ、この娘が途中で死んでも構わない。一度でいいから、ディズニーランドに連れて行ってあげたい。ただ家の中で生かされているだけでは、この娘があまりにも可哀想……」。ディズニーランドは、彼女達親子にとって一生に一度の、しかも娘の元気なうちに、親の元気なうちに、という時間限定の夢だったのだ。

高知JCは1年間にわたる調査とメンバーへの啓蒙活動の結果、次の提案をした。①より多くの人が少しずつ、それぞれのパーツを受け持つボランティア。②すべてを手伝うのではなく、足りない部分だけを支援する。③最も重い障害者が飛行機や一般ホテルを利用して旅行し、楽しめる体制を整えること。

東京ディズニーランド旅行を

そして、具体的な事業としては、①在宅重症心身障害者が、毎年、東京ディズニーランド旅行を実現できるシステムづくり。②その過程で、緊急時の医療体制や交通機関、宿泊、食事、排泄、休憩等の問題に対する対策。③マスコミの告知広告やJCが参加する祭りの場等で、目的の見える募金活動を実施する。その資金は、旅行に同行するボランティアの旅費、宿泊費に当てる（障害者と家族の費用は全て個人負担）。



褒賞グランプリ、高知JC（'93）

こうして、翌年度には高知ブロックの統一事業として取り上げられ、この運動を全県下的な市民運動とすることを目指した。その結果、JCシニアクラブやベンチャークラブほか多くの団体、個人を巻き込み、新たにボランティア市民団体「天使の翼会」の発足に至った。この事業に対し、東京都庁や全国重症心身障害者を守る会等、県内外から問い合わせが殺到、今後この事業をきっかけに全国で障害者の社会参加、戸外活動が積極的に行なわれ始めることを確信するに至った。

なんとスケールの大きい事業ではないか。感動させられた。

■ 自衛隊見学、沖縄へ

今年も11月10～11日、自衛隊見学が行なわれた。まちの応援なんでも相談室の岩田恒典委員長（会津喜多方）はじめ25名のメンバーと関係者数名が参加した。その取材記録を抜粋してみよう。

埼玉県の入間基地から自衛隊特別機（C-1輸送機）で航空自衛隊那覇基地に着陸・見学。隣接地の海上自衛隊那覇基地に移動。翌日、陸上自衛隊那覇駐屯地を見学の後、沖縄本島の北150キロにある航空自衛隊沖永良部基地にヘリコプターで移動した。沖縄の青い海、美しい山々を眺めながら北のサイトに到着。領空侵犯で侵入した機体を捉えるレーダーサイトがある。まさに、南の守りを支える要だ。

基地には珍しく外柵がない。全体員の24%に当たる43名が、この島の出身者とのことだった。島と一体化した感がする。自衛隊に対する一般的なイメージである固い・怖いという感じがほとんどない。おそらく、自衛隊が求めている方向性は、この基地と島民の在り方のようなものだろう。

研修に随行してくれた山下3等陸佐は、「こうして国のために汗する人々がいることを、知ってもらうだけでも研修の意義は大きい。すべては、自衛隊を知ってもらうことから始まる」と、語った。

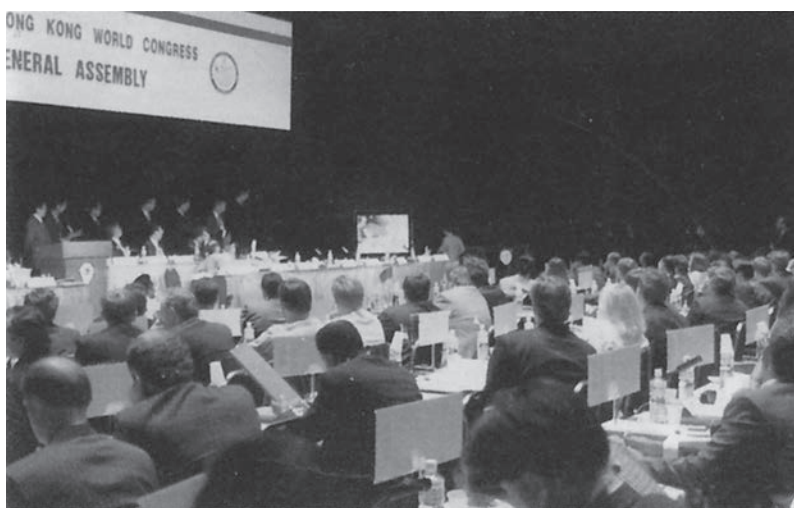
■ MOTTAINAI、 1994JCI公認プログラムに!

11月21～27日、JCI世界会議が香港で開催された。岡田会頭の提唱によって日本列島各地で開催された「もったいない運動」を、是非とも世界の舞台にまで拡大しようという意気込みで臨んだ日本JCは、香港会議でJCI公認プログラムとするよう提案した。このため、次年度担当の鈴木雅博副会頭（江南）、もったいない運動推進特別委員長仲浩（中津）らは17日より香港入りして準備に当たり、各エリア会頭会議等に出席して理解を深める活動をしたうえで、総会に提案した。その成果があって、満場一致で可決され、晴れて「MOTTAINAI」は1994JCI公認プログラムとして世界で展開されることになった。

役員選挙では、日本から立候補した佐藤嘉信（宮崎）が満票で副会頭（USJC担当）に当選した。財政顧問には、王子英法制顧問（横浜）が決まった。

日本JCに、新設のNOM賞

世界会議のハイライト、アワードセレモニーは27日午後6時、カルチャーセンター・グランドシアターに正装の各国代表が勢揃いした。日本は27件エントリーし、初めて聞いた日本JCのコールは笠岡JCの青少年活動賞だった。子供達と無人島に渡り、原始体験しながら「もったいない」精神を学ぶ事業。会員49名という小LOMの山名照知理事長と岡田会頭に満面の笑みが浮かぶ。



世界会議 もったいない運動 JCI公認プログラムへ（'93）

今年度唯一の女性理事長川村恵美子率いる塩釜JCもコール。自分達のまちの歴史に誇りをもとうと企画した薪能等の事業が評価され、広報活動特別賞が授与された。

褒賞は順調に進行し、日本は10個のトロフィーを獲得。その中には、新設の賞として最後にコールされた最優秀NOM賞に、日本JCが選ばれた。正副会頭らは壇上に駆け上がる。受賞の大きな力となったJCIプロジェクト委員会藤村委員長（盛岡）もステージへ。応援席からは万雷の拍手。日本JCの興奮は最高潮に達した。

「この賞は、メンバー全員で頑張ろうという岡田会頭の指導力の賜物だと思います。本当に良かった」とは吉田副会頭の弁。こうして、1993JC運動の幕は引かれた。

■ 自己改革、京より始めよ

1994年、建都1200年を迎えた京都。

1月20日、好天には恵まれたものの、かなりの冷え込みに身の引き締まるのを覚える。小原嘉文会頭（佐賀）は年頭記者発表で「京都会議は自己改革の第一歩です。JCと一般社会の常識の差をなくし、市民とともにボランティアとして市民運動を進めて行きたい」と語った。

正副会頭会議はじめ理事会、評議員会等の各会議は、完全ペーパーレスになった。各種セミナーの

チラシやパンフレットの配布は廃止。新年名刺交換会は、宝ヶ池プリンスホテルから国際会館に換え、缶ビールと乾き物だけという簡素な形になった。華やかなアトラクションはなく、LOMナイトの相互訪問も一切廃止。小原会頭は「京都会議期間中、常に“自己改革と、もったいない”を念頭に過ごして下さい。名刺交換会の意義を原点に戻って考え直した結果、こうなった」と語る。

午後から降り出した雪は夕方には本格化し、辺りは一面の銀世界となった。交通機関にも影響が始めてきた。そんな中、約1万8000人のメンバーが集まり、会場は今年一年にかける熱い思いに満ち溢れていた。

■ 白鳥芦花に入る

23日、大会議場での会頭所信表明はイベントホール等のスクリーンにも写し出され、同時にJC-NETを通じて全国に発信された。

小原会頭は、地元・佐賀が生んだ青年教育家で、後に青年団の父とまで呼ばれた田沢義鋪の教えを紹介した。

「田沢は青年達に、錦を着て故郷に帰ることを願う前に故郷を錦にすることを願え、と地域主義を説いた。平凡な道を非凡に歩め(当たり前のことを、人一倍入念にやれ)とも言っている。

田沢が目指した生き方とは、白鳥芦花に入る(白鳥が白い芦の花の中に飛び込むと姿は見えなくなるが、その時に起きた花のそよぎは波紋として広がっていく)という禅の教えであった。存在を誇示する生き方ではなく、しっかりと周囲に影響を及ぼしつつも自らは目立たない、そういう生き方を青年に説いた。これこそ、青年会議所の目指すべきものではないか。この田沢の生き方に触れ、私は答えの一つを発見した。それぞれの持ち場において自己を最大限に活かす生き方をせよ、ということだ」と、力強く語りかけた。

最後に、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の一節を引用した後、「さあ、共に歩き出しましょう! 今、私達地球市民が、まちを、国家を、世界を変えるのです!」と呼び掛け、テーマソングとするマライア・キャリーの『ヒーロー』が会場に響き渡ると、場内は万雷の拍手に包まれていった。

■ JC臭いことは止めよう! JCらしいことをやろう!

94JC運動の基本方針は、①地球市民としての国

際貢献、②ネットワークを活かした環境問題への取り組み、③日本JCはまちづくりの応援団、④JCの自己改革の実践、⑤JCIにおける日本JCの役割、の5項目である。具体的な事業は、基本的には昨年を引き継ぐ。

小原会頭は「各地のLOMで話を聞いて悔しく思うのは、毎年、組織がコロコロ変わり、運動の名称も変わってしまうことです。今年は、徹底して継続していきたい。もちろんGTSを4つに分けて強化したり、日本JCの研修系の委員会を各地区・ブロックに移管するなど、若干の修正は行ないました。環境室が、ふるさと地球(環境)室に名称変更したのは、ふるさと地球という考え方を活動理念としつつ、もったいない運動を更に推進しよう、という狙いからです」と語る。

「臭いか、らしいか」、大いに議論を

やはり「JCの自己改革」が、新しい目玉として浮かび上がってくる。小原会頭は「既に、日本全国津々浦々でJC臭いことは止めてJCらしいことをやろう、と改革を始めていると聞きます。LOMによってJC臭いか、らしいか、の判断基準は違うでしょうから、この1年、大いに議論して頂きたい。今、求められているのはエリート集団としてのJCではなく、市民団体としてのJCです。求められている方向に一度、振り子を振り切ってしまう。そして、誰でも参加できるJCに変えてみようと思う。誤解しないでほしいのは、43年というJCの歴史、精神を否定するものではない、ということです。むしろ、原点に戻ろう、創始の精神を思い出そう、と申し上げているのです」と、抱負を語った。

■ 会頭LOM訪問で、自己改革の徹底を図る

2月7日、会頭LOM訪問は鹿沼JCから始まった。新幹線で宇都宮に到着。美野輪弘之理事長ら5名の出迎えだ。かつての大名行列と称される面影はなかった。出席率は83%、栃木ブロック内の12LOM

の理事長以下が参加し、250余名の参加で賑わった。例会ではJC宣言の朗読に加えて、「LOVE EARTH宣言」が唱和された。「地球市民として、自然と生活の共存する豊かな地域づくりに向けて運動する」という内容で、3年前の関東地区大会で採択されたもの。地球市民が世界を変える、と所信を述べた小原会頭にとっては、最高の歓迎の辞ではなかったか。

会頭はJCの自己改革について、「自分達の事業なのに人集めにチラシやプレゼントで釣るのはおかしい。京都での主な会議はペーパーレスで行なった。名刺交換会は簡素化し、1000円の登録料にした」ことの意義を話し、加えて「国際会館周辺と早朝の先斗町でゴミクリーンアップ作戦を実施し、収集したゴミの内容を分析・発表したところ、例年は騒ぐばかりのJCが良い事もするじゃないか、と話題になった」ことにも触れた。

ゴミの分析については、筆者も知らなかった。罪滅ぼしの勤労奉仕ぐらいにしか思っていなかったのだが、大違いだった。

早朝、先斗町清掃の意義

京都会議の「ふるさと地球クリーンアップセミナー」で、きくちゆみ(クリーンアップ全国事務局)講師は、「ただの美化運動ではない。データを取ることに一番の重点がある。どんな材料で出来ているゴミがいくつ、というデータを事務局に送ってほしい。これは世界的な運動で、去年は約60カ国が参加した。データはアメリカに送られて集計・分析され、業界や行政に資料として提出されて全世界の環境保全運動に活用される。地球を守っていくことほど、尊い仕事はないと思う」と、力説されていたのだ。先斗町の清掃作業には、こういう意味があったのだ。

小原会頭との熱い語らいは懇親会、2次会へと続く。約200人収容するカラオケハウスの2次会費は2000円。自己改革スピリッツに満ちた集まりは、夜の更けるまで盛り上がり続けた。

■「もったいない」、世界のトレンドに

「ありがたい」「恐れ多い」「惜しい」という心を「もったいない」の言葉にこめ、地域に根差した社会運動として全国に広めていくため、6月を強化月間とすることが決まった。

全国一斉に地区・ブロック・LOMでは例会、大会、各種行事などで「もったいない」運動に取り組む。そのために、「もったいない」グッズを製作した。①PRビデオ(日本語版・英語版)、②MOTTAINAI小鳥とハートのシール(JCI公認マークをシールに)、③もったいない度チェックシート、④アクションプラン(もったいない例会、日本語弁論大会、ディベート大会)、⑤もったいない講師リスト、⑥世界「もったいない」アイデア宝探しコンテスト応募用紙(1万ドル相当の航空券が当たる)。

俄然、もったいない運動に弾みがついてきた。ランダムに紹介してみよう。**[長崎]**外国人の弁論大会。**[北九州]**父親と子供が語り合うキャンプ。**[九州地区]**区内の全小・中学校の授業で取り上げてもらう。**[盛岡]**アイ・腎バンク登録推進運動。物のリサイクル・節約運動から一歩進めて2つの瞳に光を、2人の腎不全患者に快復を願う運動になった。**[茨木]**環境教室(市内31小学校の5・6年生対象に第2土曜日)を開催。**[東予]**懇親会時の食べ残しを透明の「もったいないパック」に詰めて2次会や家庭に持ち帰る運動。

鈴木雅博副会頭(江南)は「個人レベルで、家族も含め小さいことから大きな運動にしてほしい」と願い、村岡兼幸ふるさと地球室長(由利本庄)は「ただ思うだけでなく行動を起こすことが大切」と訴え、仲浩推進特別委員長(中津)は「色々な資料を送っているので、是非活用してほしい。捨ててしまっは、もったいない!」と強調する。

小原会頭は「2年目にして、これだけ定着してきたのは、皆さんにその心があったからでしょう。海外でも100近い国で取り組んでおり、いまや世界のトレンドです。JC運動は世界の流れを先取りする運動で

す。会社で扱う商品も、そういう配慮をしなければいけない。そこまで考えられないようではJCメンバーとは言えません」と厳しい。

海外初のMOTTAINAIセミナー

5月3～7日、海外初の「MOTTAINAIセミナー」（エリアA会議で開催）に参加するため、森下矢須之国際室長（岡山）を団長に31名がマダガスカルの首都・アンタナナリブを訪問した。日本JC団は到着後、連日夜遅くまで準備に励んだ。

セミナーをより分かりやすくするため、急遽、前日に日本語説明を英語に変更する芸当をやった。その努力の甲斐あって、エリアAメンバーも50人強の参加をみた。事例紹介では、モーリシャスJCのメンバーが飛び入りで「紙のリサイクル」についての発表があり、会議は大いに盛り上がった。

強化月間に、7割が実施

7月後半に実施したプッシュホン・アンケート調査によると、6月の強化月間中に約7割のJCが実施していたことが判明した。更に、この運動の将来について次のような回答が得られた。①個人レベルの精神運動にしていく32%、②日本JCの永遠のテーマとして継続26%、③JCIネットを活かしてMOTTAINAIが世界の共通語になるよう拡大26%、④よく分からない12%、⑤ケチケチ運動としか思えず中止3%、と極めて前向きな意見が得られた。次に、全国で展開された運動の中から、城陽JCの事業を紹介しておこう。

「わたしだけ」と思う心がゴミの山

9月18日朝、JCを含む10団体で構成される城陽環境協議会のメンバー約350名が「ビューティフル城陽」と銘打って主要幹線道路の清掃作業を実施。回収した空き缶は1万個以上になった。午後は「もったいない宣言」をテーマに公開例会を開催した。北野大講師は1時間半にわたる講演を、「もったいないの心は、地球を救うキーワードの一つだ」と、結んだ。

講演に先立ち、環境標語コンクールの表彰式が行われた。大賞を受賞したのは近藤麻奈さん（小学

5年）の作品で、「わたしだけ」と思う心がゴミの山。城陽JCは、この標語を看板にして、最も交通量の多い国道24号線沿いに設置した。この日は「JCのもったいない運動と城陽市民の心が一つになり大変有意義な一日だった」と、総括された。

■ 新趣向のサマコンに集う7400余名

7月23～24日、猛暑の中で東京青山学院大学をメイン会場に「サマーコンファレンス」が開催された。昨年の「JC東京会議」の名称が変わり、会場も従来のホテルから大学キャンパスに、服装はカジュアルで、と自己改革のJCサマーセッションだ。テーマは「今こそ始めよう！地球市民としての行動を！」。地球市民会議、まちの応援見本市、各種セミナーの3本を柱に実施された。

「地球市民会議」は、国づくりデザイン会議（若手官僚、学識経験者等約40名）の3年にわたる調査・研究を経て最終答申「21世紀の新国土計画—地域からの国づくり」を発表。国づくりのキーワードを地域とし、地域と地球・国家・個人の関係を捉え直してビジョンを描いたもの。「地方分権・住民主役の地域社会を実現させるには、地域に根差したLOMの活動が非常に重要な意義をもつ」と、第1部会長の大西隆東大助教授は強く訴えた。

「まちの応援見本市」にはJCや各県などから160を超えるブースが出展。まちづくり・環境・国際貢献・自己改革のゾーンに分かれてPRした。同大教室や周辺施設では「29の各種セミナー」が開催され、40度を超える暑さにもめげず、各会場はどこも満室だった。

■ 北方領土返還運動、新局面へ

7月30～31日、根室・納沙布岬で第25次北方領土視察・現地大会が開催され、小原会頭はじめ300名のメンバーが集まった。

30日の前夜祭での討論会「日口の恒久的友好関係の確立を目指して」で、パネリストのガルージン在日



北方領土返還運動（'94）

ロシア連邦大使館参事官は「日本と四島との交流が、もっと活発に行なわれるようになってほしい。日本JCに対しては医療をはじめ援助を期待している」と語った。佐藤敏三根室JC理事長は「近年、北方領土問題の運動がマンネリ化してきている。日本JC全体として、見つめ直す時期ではないか」と率直な意見を述べた。

小原会頭は記者会見で「本年、日本JCは初めて北方四島ビザ無し交流に参加し、新たな運動の切り口を見出した。今後、我々はJCしかできない、JCらしい運動を行なっていきたい。来年もビザ無し交流を続け、できれば全国のプロック会長に参加して頂き、全国的にこの運動を展開したい。なお、本年JCIに正式加盟したロシアJCを通じ、全世界に北方領土問題を訴えたい」と語った。

山本潤95年度会頭予定者（伊丹）は「25年間、日本JCが続けてきたこの運動は、本年、一大転換をした。来年は地球市民という意識のもと、人道的見地に立った民間交流を行ないたい。そして、次回はビザ無し交流の出発日に現地大会を開催したい」と、意気込みを語った。

31日は小雨の中、納沙布岬で行なわれた現地大会式典には総務庁、北海道知事、根室市長はじめ多くの来賓が出席。小原会頭は「北方四島ビザ無し交流、ロシアJCとの交流を通して北方領土返還運動は、更に推進できるものと確信している」と力強く発

言した。続いて、竹中薫CIS・北方領土関係委員長（宝塚）が「日本国民の返還要求運動に寄せる情熱を一つにし、北方四島との交流を通じ相互理解を更に深め、あくまでも粘り強く、そして基本姿勢を曲げることなく、更に力強く運動を展開していくことを決議する」と、決議文を読み上げ式典は幕を閉じた。

■ 国境なき奉仕団、3年目へ

ミャンマー難民カレン族を救援

今年で3年目になる国境なき奉仕団と同特別委員会を中心とする25名が団長・飯沼寛雄副会頭（小田原）、アドバイザー・長谷川豪男監事（浜松）、隊長・柳楽克人特別委員長（倉敷）の陣容で5月5～12日、タイ北部のミャンマー難民（カレン族）キャンプ13カ所を訪れ、食料、医薬品、学用品を贈る等の救援活動を行なった。

ミャンマー北部、タイ国境に接するカレン州に住む少数民族カレン族は、1988年の軍事クーデターにより政権を獲得したミャンマー政権と対立し、独立を決意した。しかし、彼等は政府側の攻撃や迫害を受け、タイ北部のメソト周辺に流出し、その人数は増え続けている。その数5万6028名に達し、16カ所の難民キャンプを形成している。

しかし、タイ政府は難民と認めないため農地開拓や森林伐採はできず、国連等からの公的援助も受けることができない。そのため食料や医薬品等は各国NGOからの援助に頼らざるを得ない。国境なき奉仕



国境なき奉仕団 タイ国内ミャンマー難民支援（'94）



GTS 子供たちと一緒に（'94）



GTS 貢献事業（フィリピン '94）



GTS 交流事業（フィリピン '94）

団は、総額1300万円相当の援助物資を贈るため派遣された。この資金は、全国メンバーの1日5円の寄付による国際協力事業費の一部で賄われた。

バングラデシュの病院に救援物資

8月20～25日、同奉仕団7名がバングラデシュを訪問した。日本の本州ほどの国土に1億1000万人が生活する世界有数の人口過密国で、一人あたりGNP約180ドル、平均寿命52歳という最貧国だ。奉仕団はサトゥキラ子供病院とダッカ子供病院の救援要請により、医療物資等350万円相当を届けた。

「死に直面する多くの子供達の悲惨な姿を目の当たりに、援助の継続が必要なことを痛感した。なぜ自分達が生まれてきたのか、その意味も分からぬまま小さなベッドで死んでいった子供達の一人でも二人でも、貧困の輪から抜け出す手助けができれば、そしてそんな子供達が世界中に沢山いることを日本の人々に気づいて貰えれば、我々の活動は素晴らしいものになるだろう」と、特別委員長柳楽克人（倉敷）の報告記にある。

なお、一行は両病院訪問の合間を縫って孤児院を



国境なき奉仕団 タイ国内ミャンマー難民支援（'94）

訪ね、文房具などを現地で購入し寄贈した。この資金は、特別委員会メンバーがドネーションで集めたものだった。

クロアチアの子供達に遊戯施設を

10月15～25日、同奉仕団および特別委員会4名がクロアチア共和国内（旧ユーゴスラビア）ガッシンシー難民キャンプを訪問、子供達と遊戯施設を建設するなどの援助活動を実施した。7月の第1次隊に引き続き行なわれた事業で、親日的な大勢の子供達が積極的に参加してくれた。

この事業は、完成した施設で遊んでもらうだけが目的ではない。完成までの過程も大切な情操教育の一つと考えて企画したものだけに、子供達の自主的な参加には団員一同大変に喜んだ。また、救援物資を寄付した学校の一つから、「第3次（11月5～16日）の団員が子供劇に招待された」との朗報が舞い込んだ。まさに、国境なき奉仕団冥利につきる話題ではないか。

■ GTS、4地区の独自事業で拡大・強化

今年3年目を迎えるGTSは、4地区が独自の企画で実施することになった。事業や実施地区もバラエティに富み、参加人員も増加する。国際貢献をしながらトレーニングを積むという研修プログラムは、JCに定着・強化しつつある。

[北海道・東北・北陸信越]

第1班＝ニューライフプロジェクトチーム。ドゥアン・プラティープ財団が家庭崩壊や麻薬常用等で精神的・肉体的に歪んだ子供達を自然環境（タイ・トゥン



GTS (ネパール '94)



GTS (ミャンマー '94)



GTS (タイ '94)

カーワット村)の中で更正させる活動をしている。同チームは草刈、肥料散布等を子供達と一緒にこなす。

第2班=ワットサーキャオ孤児院(タイ・バンサデット)チーム。同寺院が慈善事業の一環として運営している。殆どの子供が親に捨てられ、心に深い傷を負っているはずなのに、瞳は輝き明るく礼儀正しい生活をしている。当チームは子供達と真の心の交流をし、JCらしい国際貢献をする。

[関東・東海]

フィリピンのパラワン島はジャングルと未開の地で、47部族の先住民が生活している。しかし、文明の影響はここにも現われ、不法伐採や不法焼畑が行なわれている。同プログラムは植林活動等により貢献し、地球市民として大切なものは何かを見つける旅とする。

[近畿・四国]

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン主催のグリーンホーム(比ケソン州セルナ市)でストリートチルドレンの自立のための教育事業の拡大、施設充実を支援する。

[中国・九州・沖縄]

A班=ミャンマー・ヤンゴン地区。ワールド・ブディスト・メディテーション・インスティテュート(僧院)は、国からの援助も受けられず7名の先生がボランティアで2000名の子供達に外国語を教えている。当チームは図書館の増築と教材等を援助すると共に子供達との交流を深める。

B班=ワットサーキャオ孤児院。バンコクより車で2時間の所にあり、2000名の子供達が共同生活を営んでいる。当チームはブロック製造機を寄贈し、子供達と彼等の財源の一つであるブロックを製造し、

共に汗をかく。

C班=ウドンタニ地区。タイ国内で最も貧しいと言われる地区の1中学2小学校でランチプロジェクトを計画している。また鶏や豚を寄贈し子供達と家畜小屋を作り、彼等の自立を助ける。

■ 常夏のバリ、JCI初のビジネス会議

9月7~10日、バリでJCI初のビジネス・コンファレンスが開催された。JCマンの多くはビジネスマンであり、世界中で40万人にもものぼるネットワークがある。この特性に注目し、JCマンの利点を拡大することを目的に開催された。会議に先立って、日本JC本部団結団式で小原会頭は、「全力でインドネシアJC800名のサポートをしたい。また自己改革を忘れず、愛され、信頼される日本人を目指して行動しよう」と決意を表明。

議長を務める王子英JCI財政顧問(横浜)は、「登録は1900名を超える模様で、インドネシア最大の国際会議になる。この会議は、地球市民の時代3要素のうち経済発展に的を絞ったもので、この稀有なチャンスを最大限に活かして頂きたい」と述べた。

会議は基調講演、分科会、セミナー、そしてビジネス・ブースも開催され、最後に王子議長が総括しバリ宣言を発表した。「自由で公正な経済体制を希求し、自由貿易システム構築への努力を要請し、青年実業家のビジネス戦略を促進するために動機づけ、刺激、インセンティブを与えるよう世界中の指導者達に要望する(要旨)」。アルノー・ゴードルJCI会頭は「世界60カ国以上を回りビジネス・ネットワーク



バリ宣言、王子議長（'94）

の構築を訴えてきたが、この会議はその集大成となる。神戸に向けて、GO FOR GOLD!が加速された」と締め括った。

■ 地球市民が銀河を翔ける 〈盛岡全国大会〉

9月28～10月2日、第43回全国会員大会は盛岡で「地球のやさしさに出会うとき—地球市民が銀河を翔ける」のスローガンのもと開催された。本大会では、まず日本JCの運営上、極めて重要な意思決定が行なわれたことを記しておかねばなるまい。

財政再建も自己改革

9月30日、台風が吹き荒れる中、第95回臨時総会が開かれ、「会費の見直し」と「共済会の設立」が審議された。両案とも日本JC財政の危機的状況を取り切る施策で、財政再建も自己改革の一つとして取り上げられた。質問、意見が続出し、充分な討議の結果、両案とも可決された。

結果は会費値上げ（2倍）賛成2959票、反対176、棄権28。共済会賛成2808票、反対324、棄権46。次年度から実施されるが、会費の改訂は実に22年ぶりのことであった。

TOYPは全盲の石川准さん

TOYP大賞授賞記念式典は、盛岡市民の方々にも素晴らしい若者達を知って頂きたいという趣旨に基づき都南会館で市内の中高生や市民約500名を迎え

て実施された。大賞には105名の推薦から10名が選ばれ、グランプリ・科学技術庁長官賞は石川准さんに輝いた。15歳で失明し、20歳で全盲では初めて東京大学に合格。自分が開発したプログラムでコンピュータを駆使して新聞を読むほか、翻訳作業を行っている。石川さんは、全盲をハンデとしている風は全くない。必要なのは意志なのだ、ということを教えてくれる。

■ 古川JC、 緊急医療センターでグランプリ

さて、注目のアワード。盛岡グランドホテル・ウェルカムプラザは、午後9時の開会を待たずして満席だ。やがて、申請事業を写真で紹介するイメージ映像がスタート。規定部門66、自由部門22の事業から、規定部門7、自由部門10の事業が優秀賞を受賞した。

グランプリは、本年度から申請した全事業から選ばれることになった。注目の中、準グランプリは茅ヶ崎JC、士別JCに、そしてグランプリは古川JC、と発表された。

茅ヶ崎JCの準グランプリ、モデルビーチ事業（ほのぼの共和国）は、安全にゆったりとくつろげる海浜づくりを目指し、市民・行政・企業が一体になって行なった美化運動で、本年で5年目になる継続事業。士別JCのサフォーク運動は、サフォークという羊を士別のコミュニティー・アイデンティティーと位置づけ、これを核としたまちづくりを行なった。新しい士



古川JC 緊急医療センター設置運動でグランプリ（'94）

別文化の創造へと拡大している。

古川JCのグランプリ事業は、緊急医療センター設置運動である。安心して暮らせるまちづくりを目指し、緊急医療センターの必要性を提言した。地域住民を巻き込んだ署名運動で、地方都市として全国に先駆ける運動を展開している。地方の命の不公平を解決するのが目標というテーマ設定は、まさに壮絶というほかない。成功を祈りたい。

自己改革は生き方の問題

2日、秋晴れの岩手産業文化センターで開かれた大会式典には、常陸宮・同妃両殿下がご臨席になり「真の国際人としての自覚をもち、地球市民として世界の繁栄と平和に貢献することは青年に課せられた大きな役割である」とのお言葉があった。

小原会頭は「JCの自己改革は組織や仕組みの変革ではなく、一人ひとりの心の持ちよう、生き方を変えることであり、そこから地域・日本・世界を変えることができるのだ」と1万5000人の参会者に訴えた。

第44代会頭に選任された山本潤副会頭(伊丹)にプレジデントリーフは伝達され、山本95年度会頭予定者は「これからは、それぞれの個の良さを発揮させながら、地球社会全体・全人类的利益とのハーモニーを図るバランス感覚を大切にする新しい地球市民の時代である。この意識をもって、次年度の事業を進めていきたい」とアピールした。

どんな志を抱いたかに注目を

式典の最後を飾る卒業式は、1500名が登壇。卒業スピーチは一卒業生から選ばれた異例の木村高寛(二ツ井)がマイクを取った。「我々29年生まれの午年には、サラブレッドもいればダバもいる。それぞれ己の信念のもと、明るい豊かな国のため力の限り走り続けてきた。もし、君達が我々のことを思い出す時、何をやったかではなく、どんな志を抱き何を見つめて走っていたかを考えてほしい」。素晴らしいスピーチではないか。そして、卒業生達は、それぞれの思いを胸に「いい日旅立ち」を大合唱し、JCライブにピリオドを打った。

本大会では、後世に残る事業の一つとして「地球市民の森」事業を実施した。盛岡市外山森林公園内の1ヘクタールの区域に、ブナの木1000本を植樹した。また、盛岡JCが全国大会を機にスタートさせた「アイ・腎バンク」登録事業は、大会終了までに全国から1000名を超える登録があった。

■ 王子英、神戸世界会議で JCI会頭に当選

「1にOJI、2にHIGUCHI、3にMOTTAINAI」と言い続けて、海外のメンバーと握手して下さい。小原会頭は、JCI世界会議・神戸大会の本部団結団式で、こうスピーチした。

このJCI設立50周年という記念すべき神戸大会には、過去最高の1万5500名、海外からは2500名が参加し、グローバル・コミュニケーションのテーマどおり、様々な交流が繰り返された。

11月17日午後6時からの総会で、注目の選挙が行われた。会頭選挙には王子とアイルランドのレティ・ベーカーが立候補していたが、ベーカーの棄権により王子が圧倒的な支持を得て当選した。日本からの会頭は、81年の長尾源一(東京)以来14年振り、70年の前田博(東京)以来25年、3人目である。

王子は「横浜JC他のメンバーに感謝します。来年は、子供の将来にスポットを当てた活動をしたい。今から一緒に一歩前へ進みましょう」と抱負を語った。「王子を補佐したい」と副会頭に立候補した樋口信治(大阪)も、最高票で当選した。

ロシアJC、JCIに正式加盟

この総会では、参加者にとって忘れることのできない重要事項があった。議長のゴデル会頭は「本日、ここに歴史的瞬間を迎えました。ロシアJCの皆さん、JCファミリーにようこそ!」と、声高く歓迎の意を表したのだ。旧東側諸国で初めて、ロシアJCがJCIに正式加盟を果たしたのだ。全員総立ちの中、ロシアの旗が悠々と翻った。国境を越え、人種を越えた友情の、更なる広がりを予感させる一瞬であった。

MOTTAINAI宝探し賞

日時は前後するが、16日の総会では、MOTTAINAI運動の実践例が報告された。モンゴルJCでは、42名のメンバーが学校で直接説明をするなど普及に努めている、という発表もあった。そして、18日の総会では「MOTTAINAIアイデア宝探しコンテスト」の表彰式が行なわれた。

審査委員長のゴデル会頭夫人が発表したグランプリは、日本の大学に留学しているリトアニア人、クディーズ・アルギダスさんに決まった。約4500のアイデアから選ばれたクディーズさんには、記念の楯と1万ドルのエアチケット（日本航空提供）が贈呈された。

テーマは、「ゆとりある時間を過ごし、家族の絆を取り戻そう」だ。趣旨は「多くの人が家庭を犠牲に、夜遅くまで働いている。しかし、そういう仕事はそれほど効率的ではない。残業を止めれば、暖房費や電気代が節約できるし、家庭で両親揃って家族の絆を取り戻すことができる」と。

2年連続、最優秀NOM賞を受賞

アワード・セレモニーは午後5時、国際展示場2号館でスタート。会場の後部座席は応援団が陣取



JCI世界会議神戸（'94）
王子JCI会頭当選

る。どの顔にも期待と不安が入り混じり、同通イヤホンに聞き耳をたてる。

第Ⅲ部門LOM賞の日本の一番手は、環境改善賞の広島だった。1000人以上が参加してゴミを拾い、分別し、アルミ缶を換金して植樹するという事業。しばらく途絶えた後、骨髄バンク普及啓蒙活動が評価されて旭川にコール。続いて横浜。セブJCを通じてフィリピンの子供達に斜視を治す手術費用や眼鏡、書籍等を寄贈した事業。続いて岐阜が、国際アカデミーの参加者と地元高校生の交流を図った事業に国際関係賞。最後は泉、ラオスでの小学校建設が評価され国際関係賞に輝いた。

第Ⅱ部門NOM賞では、日本が最優秀出版賞を獲得。『50億、JC PRESS』が世界で評価された。そして、最後の賞は、昨年から新設されたNOM賞だ。「最優秀NOM賞を、この神戸大会のホスト国でもある日本JCに」という発表と同時に大歓声が上がリ、万雷の拍手と共に場内は総立ちとなった。2年連続の受賞だ。ゴデル会頭から日本JC正副会頭に、「日本JCには各エリア会議においても、大変に協力して頂きました」と地球儀が贈られた。

アワード・セレモニーの後、1995年度JCI会頭に就任した王子英の就任式が行なわれ、世界会議は全日程を終了した。

翌日、本部団解団式で小原会頭は「全て、目的を達成しました。海外からの参加者からも大きな評価を貰っています。円高の厳しい条件のもと、実行委員会は本当に良くやってくれました。この会期中に味わった気持ちを忘れることなく、明日からの活動に取り組みましょう」と、実行委員会メンバーの労をねぎらった。

第14章 阪神・淡路大震災、NPO元年!

1995

■ 阪神・淡路大震災で京都会議延期

1995年1月17日午前5時46分、兵庫県南部を震度7という大地震が襲った。一瞬にして5400人を超える命を奪い、15万戸の家屋を破壊し、その数30万という人々を路頭に迷わせた。その中には、95年度会頭山本潤（伊丹）の愛息も含まれていた。西宮の自宅が崩れ落ちていく中、幼い命は失われたという。痛ましい。哀悼……。

例年、JC運動は1月の京都会議をもってスタートとする。この年は、19日からであった。なか1日しかない。東京のJC会館には、首脳部が集まってきた。山本会頭は、とても上京できる状態ではなく、電話で「実施」の意向を伝えてきた。今日中に結論を出さなければ、全国のJC幹部は京都へ出発してしまう。急がなければならない。

鳩首対策を練るが、なかなか議論はまとまらない。会頭の実施論は、いかに大震災とはいえJC運動をおろそかにはできない、という責任感溢れる意志に相違ない。しかし、会頭は被災地から動けない事情にあり、必ずしも全体の状況把握は充分ではなからう、という懸念があった。

結局、この大災害の真っ只中に、1万人余のメンバーが京都に集まることの社会的影響を鑑み、「延期」との決断を下した。日付は変わり、18日午前1時頃であった。

■ 間髪を入れず、救援活動始まる

京都会議は異例の延期になったが、「救援活動」というJC運動は間髪を入れず始まっていた。京都JCのメンバーは京都会議延期に伴う諸々の会場キャンセルに、一軒ずつ足を運ぶ。その一方で、正副理事長達は直ちにヘリコプターをチャーターし救援物資を運んだ。JC-NETには南部地震専用ボードが設置され、必要な救援物資やルート情報は、実況中継しながらに続々と寄せられてきた。日本JCの義援金口座も開設……。

各地JCから寄せられる救援物資を現地に繋ぐネッ



阪神・淡路大震災被災状況（'95）



西宮市役所で被災者にパンを配るJCメンバー（'95）

トワークも構築される。東は大阪・三田、西は姫路・岡山が手を挙げた。そこまで運んでくれば、その先は勝手を知った地元のJCが運ぶ、という態勢が自然に生まれたのは、震災の翌日だった。20日には米穀部会が白米2トン、水1000リットル、軽油100リットルを持ち込み、別に食糧庁と提携し長田区の避難所におにぎり1万食を届けた。茶業部会は

缶ドリンク1500本、ファッション部会は衣類と肌着2966点を新品の状態被災地に届けた。さすがは業種別部会、お見事と言うべきではないか。

パニック回避の知恵と行動力

全国JCの熱意が同時に同じ行動を取ったとすれば、それはもうパニック以外にない。JCには、大渋滞・行政の大混乱、2次災害の危険という状況下、効率よく支援活動を進める順序だてを整える知恵と行動力があつたのだ。まず輸送ルートの確保、物資援助、次は足りない物、余った物を分けしながら人的支援を進める。状況に応じて対応していった。

震災の数日後だったと思う。NHKのテレビ報道を見ていたところ、「温かい食べ物を初めて届けてくれたのは、大阪の青年会議所の人でした」という被災者の生の声が飛び込んできた。JCを30数年も見守っていると、テレビや新聞・雑誌で各地のJC活動が報道される機会が増えてきていることを実感していた。この大震災でも、すばやい対応をしているに違いない、と思っていた矢先の画面であった。

2月13日、たまたま筆者は東京JCの公開例会に誘われた。その席で、山本会頭の録音テープによるメッセージを聞き、ご令息を失われたことを知った。同時に、「いつまでも、我が身を悲しみの中に置いておくことはできない。私達はまちを復興し、家族を守り、経済活動を続けなければならない。今こそ、JCの真価が問われている。私達はJCメンバーの誇りと自信をもって、真っ先に立ち上がらなければならない」との決意を耳にしたのだった。

■ 豊かな未来は、きっと実現できる

2月17～19日、京都会議は約1000名の参加のもと開催された。山本会頭は所信で「地震発生に対し、間髪を入れずに申し出られた世界各国からの援助、特に貧しい国々のお国柄あふれる援助に深く心を打たれた。こういう行動に、新しい地球市民の時代の在り方が示唆されている」、「この災害が避けることのできないものならば、この年に会頭を命ぜられて

良かったと思う。被災地でありながら、被災地のみならず日本全国の復旧と復興の陣頭指揮を取ることが、私の使命だったのでらう」と、語り始めた。

「新しい地球市民の時代を具体化する運動として、まちづくり、国際協力、環境問題等に取り組む。これらを総括するテーマは『こどもの未来』、キーワードは『地球市民ジュニア』である。具体的な運動の一つに、JCIとの協力で『地球市民ジュニア・フォト・コンテスト』がある。地球市民ジュニアを育成する運動を展開する中で、その象徴として『こどもの笑顔』の写真を集めよう、という企画だ。このコンテストが、世界に希望というエネルギーを与えてくれるようお願いつつ、取り組んでいきたい」。

「豊かであるはずの日本で、昨年、いじめによる子供の自殺が相次ぎ、子供にとっては必ずしも幸福な時代ではないことが判明した。残念ながら、未来は子供達にとって夢や希望ではないようだ。環境問題、民族紛争、食糧や資源の枯渇。どれをとっても、その足許では子供が犠牲になり、暗い未来を暗示している。今こそ、私達は、やり遂げなければならない。

人間としての英知と力を結集して行動すれば、新しい地球市民のための、希望に溢れた豊かな未来は、きっと実現できる。新しい地球市民の時代は、まだ始まったばかりであり、新しいゼロからの出発なのだ」と宣言するや、しばし、拍手は鳴り止まらなかった。

復興支援の3本柱

所信発表に続いて開かれた通常総会では、緊急課題として村岡兼幸専務理事(由利本荘)より「阪神・淡路大震災復興本部設置」の案件が諮られた。支援のための3本柱の提案である。①全メンバー参加による中・長期的な組織的人的支援の要請。「国境なき奉仕団」による人的支援活動。②被災地の「こどもの未来」のための事業の実施。「阪神、鐘の鳴る丘」事業で、「世界のこどもの未来」をテーマとしているJCとして、被災によって肉親を亡くしたり、精神的なダメージを受けた子供達を救済するのが目

的。③被災地の経済的復興とまちづくりを支援する「Buy Made in 阪神」運動。この案件は、棄権1名を除く全員賛成により採択された。

JC 共済会元年

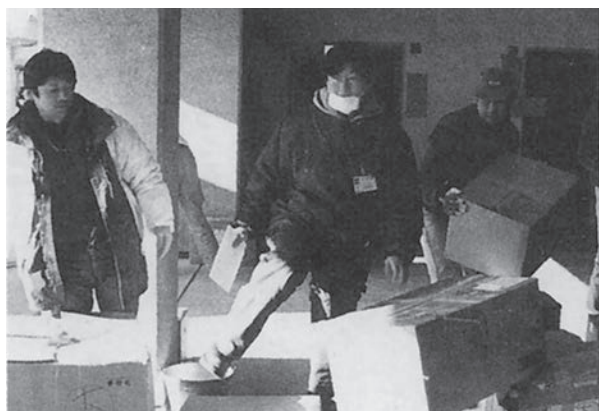
総会の後、懸案事項であった日本青年会議所共済会の第1回総会（設立総会）が開かれ、趣旨・役員・事業計画は満場一致で承認された。ここに、財政基盤強化という使命を担うJC共済会元年は、歴史的な第一歩を踏み出すことになった。

■ 国境なき奉仕団、阪神へ

当初、95年度の基本方針は次の6本の柱が立てられていた。①個と地域を生かした自立したまちづくり、②地球規模での資源リサイクル社会の創造、③これからの日本に適したJCらしい国際協力、④未来を担う「地球市民ジュニア」の育成、⑤JCIにおける日本JCの積極的な実践、⑥原点に戻り自己改革を加速。だが、大震災により緊急援助という新たな活動が発生したのだ。先に決定をみた支援6本柱だけでも、目一杯の事業である。

後に、山本会頭に質問したところ「両方やってほしい、と言いました。実際に、メンバーは2年分の事業をやってくれました」と。この辺りが、またJCの凄いところだ。以下、順を追って2年分の事業を1年分のスペースに記述すべく努力してみる。

1月21日、国境なき奉仕団梅沢重雄本部長（甲府）、同特別委員長松山政司（福岡）が現地調査を開始。23日、市内の平木中学校にテント張りの前線



国境なき奉仕団 阪神・淡路大震災での活動（'95）

本部を設置。その後、西宮JC事務局内に移動。各地区各支部単位で1～2週間のローテーションが組み立てられ、1日に50～100人の動員が決定。人的援助活動システムを数日で構築。「ひとえにJCのネットワークと国境なき奉仕団の短期緊急援助活動に学ぶところが大きかった」と、国境なき奉仕団の古賀健一幹事（福岡）。

2月5日午後5時過ぎ、西宮市内で援助物資の仕分けと配布に当たっていたメンバーが戻ってくる。各チームリーダーによる報告・反省を行ない、翌日の作業を確認。その頃、今まで手付かずだった全国から西宮市に寄せられた「ゆうパック」の仕分け、配布作業が始まっていた。翌朝、物資の保管場所・真砂中学校体育館に山積みのダンボールを開封し、種類別に分け・運搬・配布する作業と、「善意の袋」制作作業（品物を男女別、大人・子供・乳児別に仕分けしメッセージを同封）に取り組む。

2月6日朝、西宮JC大川雅司理事長は「今日も雪のため悪戦苦闘しながら、こちらに向かって下さっているメンバーがいます。今日も一日、どうか全国からの心を届けて下さい」と挨拶。松山特別委員長は「ここでの体験を、帰ったらLOMのメンバーに伝えて下さい。そして、長期戦に備えて頑張りましょう」と。

以下、参加した各地メンバーの声の一部を、JC PRESSから取り上げてみよう。

各地JCメンバーの声

「被害のひどさを実感。とても他人事とは思えない。もう一度来たい」（石橋久美恵・東村山）。「菊岡まちづくりデータバンク推進会議議長を中心に、近隣ネットワークメンバーと情報交換しながら、何が必要とされているのか伝えています」（中嶋啓二・大阪狭山）。「伊豆で地震の怖さを知っているが、改めて随分周りから助けて貰っていたんだ、と思った。生の情報が入ったので、帰ってから必要な物資を送る」（高瀬雄司・下田）。

「指令や引継ぎがきちんとしており、効率よく働きやすい。ただ、もっと人手を必要としているんじゃないか、

心配」(伊藤人支・葦崎)。「いい教訓になった。実際に来なければ分からなかった」(水島陽子・館山)。

■ 西宮には 「修練・奉仕・友情」が揃っていた

「善意の袋、8カ所での配布は2月12日で終了し、市内10万世帯全戸に届ける活動に入った。14日から国境なき奉仕団は、芦屋市内への救援活動にもに入った。委員会メンバーの尽力に改めて敬意を表したい」と広報渉外特別委員長川口正徳(大津)は語っている。

日本JCの人的支援活動は3月末まで続いた。1月21日から現地入りしていた松山特別委員長は「市民の方からお礼の電話が、ひっきりなしに西宮JC事務局にかかってきた時、全国からの善意を被災者の方々に少しでも伝えることができれば、という我々の願いが通じたような気がした。全国から毎日50～240名ものメンバーに参加を頂いた。西宮には修練・奉仕・友情の全てが揃っていた。全国メンバーのご協力に感謝し厚くお礼申し上げます」と語った。

この2カ月間、現地入りしたメンバーは延べ1万2000人。今後、人的支援活動は「阪神、鐘の鳴る丘」、「Buy Made in 阪神」の事業に傾注されていく。

■ 「阪神、鐘の鳴る丘」事業立ち上げ

鐘の鳴る丘、この言葉には昭和ヒトケタ世代の筆者にとっては思いがある。昭和22年7月5日より週2回の連続放送劇として発足。好評につき週5回に



阪神、鐘の鳴る丘プロジェクト(’95)

なった。当時、中学生だったが、戦後の暗い世相の中で流れてくる“緑の丘の赤い屋根、尖がり帽子の時計台、……”の明るい歌声は、本当に世の中が明るく希望に満ちたような気分させてくれたものだった。もともと、戦争浮浪児救済をテーマにしたヒューマンイズムに裏打ちされた世論喚起のキャンペーンドラマである。その鐘の鳴る丘がJCの事業として、被災により精神的ダメージを受けた子供達の健全な育成を図る事業の一環として、登場したのだ。下校後や休みの日、被災した子供達のところに出向いて一緒に遊びながら元気快復を手助けするのが目的だ。つくづくJCには知恵者がいるものだ、と思う。

巡回バス『鐘の鳴る丘号』、出発進行

4月3日、『鐘の鳴る丘号』が避難所になっている芦屋市の精道小学校に向かった。グラウンドには、自衛隊の車や大きなテントが並んでいる。ちょうど支援物資の配給の日で、列をつくっている大勢の人達に迎えられるように到着。「地球市民ジュニア」育成特別委員長武藤均(常陸太田)率いる同メンバーに、大阪総合大学教育研究会附属こども心身医療研究所の山口氏とボランティア派遣の看護婦さん、それに埼玉の幼稚園の保母さん2名が加わった。

好奇心旺盛な子供達が集まってくる。まず、綿菓子づくりが始まると、きちんと整列して出来上がりを待つ。隣には、ポップコーンの屋台が組み立てられた。笑顔の子供達が集まってくる。アニメ映画の上映が始まる。ペンギン姿に変身した永山久人副委員長(岡山)が現われるや、笑顔で飛び付く子供達と大格闘だ。他方では、スタッフと風船でチャンバラが……。子供達の明るい笑顔、笑い声の中、楽しい時間はアツと言う間に過ぎていった。この事業は7月7日まで実施され、延べ34校を訪問した。

夏休みリフレッシュキャンプ

7月29～31日、沼津JCでは2泊3日の日程で「鐘の鳴る丘」リフレッシュキャンプを実施した。参加したのは神戸市立二葉小学校の5年生男女9人。夜空いっぱいに咲く狩野川花火大会、コバルトブルーに

輝く海水浴、そしてバーベキューだ。キャンプ中に笑顔を見せなかった女兒が、帰り際に「お兄ちゃん、ありがとう」と、言ってくれた。「花火がきれいだった」、「お魚が一杯いたよ」……と、子供達が目を輝かして話してくれたのが印象的だった、とスタッフのレポートに記されていた。

夏休みリフレッシュキャンプは103のブロック・LOMで実施され、約2500人の子供が参加した。JC PRESSに報告された事例の見出しを列挙しておく。「紙の伝統文化を満喫した神戸の小学生」(川之江)、「久し振りに汗を流した神戸の女子サッカーチーム」(長野)、「友情と思いやりの心を育んだ青少年セミナー」(千葉・徳島)、「自然体験の中で芽生えた地元小学生と芦屋の子供達との友情」(岡谷)、「ドッジボールとお神輿に見た神戸っ子の元気な姿」(倉敷)。

この「鐘の鳴る丘」事業は、今年度JCIのテーマ「こどもの未来」に対応する事業として実施された。先に、今年度は本来の事業と震災救済という2本の事業を抱え込んだ、と記したが、当事業は本来の事業テーマと震災救済をドッキングさせた事業展開であった。

■ 「Buy Made in 阪神」で早期復興、自立へ

被災地の経済基盤の早期復興と自立のために、被災地周辺企業の生産物の使用・購入の促進と、流通正常化を促す企業行動の推進を図る運動である。端的に言えば、阪神に来る、泊まる、モノを買う、ビジネスをする、イベントを開催する……ということだ。

隼より始めよ！ というが、日本JCは理事会を2回神戸で開催し、各会議、各委員会も続々と阪神・淡路地域で行なわれ、約3000人が参加した。被災地LOMメンバーの企業リストも作成し、第1報を4月末に全LOMに発送した。6月には現地の経済活動に弾みがつくようにと、企業リストや淡路JCが作成した物産品の通信販売カタログの会員送付などを実施した。

6月10～11日、神戸JC主催による「神戸元気復

興祭」がメリケンパークを主会場に開かれた。初日の特設ステージは若者待望の元気復興コンサート、2日目はファミリー向けの様々なイベントだ。プロのミニコンサート、素人のど自慢大会、キャラクターショー(重甲ビーファイターショー)が、またメリケンパーク会場では150店のブースが立ち並んだ。ブースは全国のJCやボランティア団体などに出演を呼び掛けたもの。三木JCブースではウナギの掴み取りや木工教室、高知JCブースはカツオたたきの実演販売や日本酒大盃飲み競争などが盛り上がった。会場入り口付近のAグラウンドでは、地元神戸の少年サッカー4チームのフットサルトーナメント。

復興祭は初夏を思わせる晴天にも恵まれ、延べ5万7000人の来場者で賑わった。団秀和理事長は「例年、五月祭りで賑わう頃だが、今年は震災の影響から抜け出せない。何とか元気を取り戻して明るいまちにしたい、と思って提案した。ボランティアの方々へのお礼も一つの理由だ。これは、一つの通過点に過ぎない。長い道程だが、元気なまちになる起爆剤になればと思う」と語っていた。

■ 「ゼロ・エミッション」への挑戦

4月6～7日、東京青山の国連大学本部において「ゼロ・エミッション(廃棄物ゼロ)」計画に関する初の世界会議が、国連大学とJCIおよび日本JCの共催で開催された。同会議は、このプロジェクトに参画している各国首脳、企業オーナー並びに長年研究に携わっている学術研究者の研究発表を中心に、討議が行なわれた。

初日、王子JCI会頭(横浜)がJCIの沿革・組織・活動を紹介し、特に力を注いでいる「MOTTAINAI」と「こどもの未来」事業の理念について力説し、更に「ゼロ・エミッション」の理念は21世紀に向けて実現すべき我々若い世代の挑戦課題だ、と強く訴えた。

江戸時代の資源リサイクル

翌7日、山本会頭のスピーチである。まず、日本JCの環境問題への取り組みについて触れ、92年の

「地球サミット」へのNGO参加、93年からの「もったいない運動」を説明。その後、95年度テーマの一つである江戸時代の「閉鎖系資源リサイクル社会システム」を例に、日本では「ゼロ・エミッション」社会が数百年前に存在していたことを明らかにした。

当時、江戸は世界最大の都市であったが、市民は「ゴミを出さない、モノを徹底的に使いきる工夫」をしていた。そういう努力を見習い、「環境保全」と「経済発展の持続」を同時に取り組むことは、21世紀を担う我々の最重要課題だ、と決意を述べた。

「ゼロ・エミッション」会議は、まだ第一歩を踏み出したばかりで世界的な知名度は低い。しかし、地球の生存にかかわる最も緊急かつ最重要課題である。そのため、日本JCリサイクル社会システム推進委員会のメンバーが、同会議の裏方として活躍したことは大変に意義あることだ。

なお、同会議の第2回が96年3月31～4月3日、アメリカエネルギー省、国防総省等の全面的な協力のもとアメリカ国内で開催される、と発表された。

■ リサイクルモデル都市を訪ねて

環境問題は、今年度重要事業の一つである。日常的なJC運動における関わり方について、点描してみよう。

都城市は「ゴミまつり」で市民啓発

1月26～27日、リサイクル社会システム委員会は、93年リサイクルモデル都市に選定された都城市を視察した。市では資源ゴミの分別回収、生ゴミ処理機（コンポスト）の普及に努め、また小学生に環境教育等を行っており、市民の意識は高まっている、という。生活科の時間に市の環境課スタッフが出向いて授業をするということだった。他方、事業者の取り組みはまだまだで、今後は市民・事業者・行政が一体になって運動を拡大していきたい、とされていた。資源ゴミを常時持ち込めるリサイクルステーションの整備を進行中で、ゴミ袋の指定と有料化を検討していた。

JCは行政・市民団体と共にリサイクル推進協議会

の一員として事業に取り組むと共に、「ゴミまつり」というイベントを通じて、言葉だけでなく行動を伴う市民啓発を行っていた。どんな会合にもこまめに出掛けた、という課長補佐の「設備や規則よりも、一人ひとりの意識が最も重要だ」という言葉が印象に残った、と視察報告に記されていた。

■ 甘木市は「みずと緑」がキーワード

3月23～24日、同委員会は94年リサイクルモデル都市の甘木市を訪ねた。甘木では資源の有効利用を、「みずと緑」をキーワードに取り上げていた。現在、市を流れる一級河川のほとんどに水が流れていない。福岡市の水源として2つのダムを建設したため、放水期になっても取水が優先されるからだ。

平成元年、甘木を愛する市民23名は市長に提言書を提出した。これを受けて市民・企業・行政が三位一体の「三者懇談会議」を組織した。JCは三者のパイプ役として「みずと緑」を基調に人と自然が共生する「環境と文化都市の創造」のための環境ビジョンを策定し、「わたしたちの緑のダムをつくろう」と、植林事業を呼び掛けた。

植えられた山の木々は「緑のダム」となって雨水を貯め、大地にしみ込んでいった水が水源地より湧き出て川となる。この自然の恵みの大きさ、そして美しい郷土を子供達に伝えよう、という事業であった。

本年2月、市民参加のまちづくりが評価され、甘木市は『毎日地方自治省大賞・奨励賞』（毎日新聞社主催、自治省後援）を受賞した。甘木市視察報告には、「いま、私達が生活している自然は、先祖からの預かり物です。住みよい環境を、子孫に返す義務があります」と、指摘されていた。

本年度のテーマ「こどもの未来」に対する一つの回答ではないか。

■ サマコン、新しい地球市民の未来に向けて

7月22～23日、95サマーコンファレンスが「新し



地球市民会議（サマコン）（'95）

い地球市民の未来に向けて」のテーマのもと、パシフィコ横浜で開かれた。地球市民会議、新しい地球市民セミナー、まちの応援見本市の3ステージが用意され、全国から約7800名のメンバーが参加した。

午後1時30分、全体会議・地球市民会議パートI「新しい地球市民の時代に向けて」が始まった。少子化や国民負担率の増加、地域主義といった課題を解決しながら、いかに新しい地球市民の時代を実現するのか、という筋書きが主な流れである。

行革国民会議の並河信乃理事は「市民は責任感と節度をもって行政依存から自立すべきだ。そのうえで自治体と住民が共に試行錯誤しつつ新しいコミュニティーを形成すべきだ」と、地域主義の重要性を強調した。現役JCマンで枚方市の中司宏市長は「JCの中だけでなく、PTAなど地域活動にも積極的に参加しながらJC活動を展開しよう」と、市民公益活動の実践を説き、地域の中心として幅広く活動することを促した。

この後、パートII「輝け！ まちの伝統の継承者」、翌日にはパートIII「今、子供たちの未来がもったいない」が議論された。

小学生の「世界のおひさま」展

地球市民会議と並行して、会議センター内の各小ルームでは32コースの各種セミナーが開催され、展示ホールでは「まちの応援見本市」が公開されていた。各LOMはじめ団体・企業、政府官公庁など合計126のブースが設置されていた。

今回は、初の試みとして小学生による「世界のお

ひさま」の絵が3100点、場内に展示され一般市民にも開放され活気づいていた。

阪神・淡路大震災関連のブースも設けられ、「Buy Made in 阪神」運動も実施された。初日には、場内特設ステージで東京コンサルパトワールのチャリティーコンサートが開かれ、募金10万5000円は震災義援金として山本会頭に手渡された。

エンディングセレモニーでは、7月9日に764番目のLOMに認証された射水JCの上田理事長が「地方のメンバーも、もっと積極的にこうした事業に参加して、何かきっかけを掴んでほしい」と感想を述べた。最後に、山本会頭が「ここで聞いた提言をLOMに持ち帰って、地球市民の時代に基づいたまちづくり、人づくりに取り組んで下さい」と、2日間にわたるサマコンを締め括った。

■ 国境なき奉仕団、 ルワンダ難民に帰還センターを

アフリカ中央部・ルワンダ共和国で大量虐殺！ 世界最多の難民流失！ この世界の耳目を驚かす大事件は、94年4月に起こった。この報道に、直ちに国境なき奉仕団特別委員会は行動を起こした。スタッフ並びに委員会メンバーは打ち合わせを重ね、12月16日から9日間にわたり現地を視察した。

ニャルブイエの小さな医療センター横の教会には、大惨事を忘れぬため2000体にも及ぶ死体が放置されていた。約200万人もの難民が国外に流出し、国内被災民は約200万人、虐殺された人は100万人に及んだ。紛争前、730万の人口だったルワンダにとって、難民や被災民が戻らなければ国の復興はできない。新政府と国連は周辺諸国と連携し、難民の帰還を促している。そして、「大量の帰還が始まれば、疲れきった難民のレセプションセンターが重要な役割を果たすので、是非協力してほしい」との現地の事情を確認した。

人命への価値観が違い過ぎる

松山委員長は、視察報告に次のように記している。

「人間一人が亡くなっても、何も騒がれることもないルワンダと日本を比べると、同じ地球市民でありながら、人命に対する価値観が違い過ぎることに寂しさを覚える。我々はテレビや新聞ニュースの傍観者に終わることなく、一歩進んで行動を起こすことが一番大切であることを痛感させられた」。

4月15～24日、岡崎重彌副会頭（山形）を団長とするルワンダ帰還難民救援団13名が現地入りした。17日、首都キガリより活動の中心地ニヤカレンビのレセプションセンターに向かう。完全な舗装道路だ。バナナ畑や木々で一面緑の丘や谷間を走る。片道2時間の道程だった。センターは、数日中にタンザニアから難民が多数帰還する予定とあって、当初予定の規模より拡大していた。救援団は、生後6カ月の幼児から15歳までの帰還民に予防接種する診療所1棟を7割方建設した。

18日、約1年前の虐殺現場を保存しているニャルプイエの教会見学と、AEFのキレヘ医療センターでの給食サービスの実施と医薬品や子供服の贈呈式を行なった。19日、タンザニアとの国境・アカゲラ橋やAEFルスモ医療センターの見学の後、ニヤカレンビの予防接種診療所を完成させた。丁度、1家族の難民が到着したため、我々はトウモロコシ、毛布、ゴザ等を手渡すことができた。毎日、数名から数十名の帰還があり、21日には約400名が帰還予定とのことだった。

短期緊急援助のシステムづくりを

松山委員長は、「刻々と変わる国内・近隣諸国の治安・政情変化に伴い、プロジェクトの内容変更を余儀なくされる問題や、急激な物価上昇、救援物資・資金等の盗難防止や管理方法、帰還難民の病状に合わせた医薬品の購入や有効期限の問題等々、国情が安定している国への国際協力とは全く異なる対応が必要なことを痛感させられた。当初の目的は達成できたものの、改めて我々のできうる短期緊急援助のシステムづくりが必要なことを全員再確認した。これが、最大の収穫だった」と、活動報告を結

んでいる。

■ 日中交流10周年

中華全国青年聯合会との交流10周年を迎え、日本JCの訪中ミッションが6月14～17日、北京を訪問した。日本側は山本会頭、小原直前会頭、そして野津、川越、更家、岡田の元会頭が参加し総勢165名。中青聯側は季克強・全国人大常務委員会常務委員、劉鵬・中青聯主席はじめ多くのメンバーが参加し、各種行事が盛大に行なわれた。人民大会堂の「歓迎レセプション」では熱烈歓迎を受け、どの円卓も日本と中国のメンバーが囲み、片言ながらも意思の疎通が図られ賑わった。

2日目、長富宮飯店で開かれた日本JC日中友好の会主催の「中国技術研修生大同窓会」では、日本JC側の温かい出迎えに研修生は感激したようで、終盤で披露した研修生の「日本にいた時に『北国の春』を聞くと中国のことを思い出しましたが、いま『北国の春』を聞くと日本のことを思い出します。日本は第2の故郷です」との思い出話を聞き、日本側メンバーは改めて研修生受け入れ事業が素晴らしいことだったことを実感した。最後に、全員『北国の春』を大合唱し、清々しい余韻のなか、お開きとなった。

■ 北方領土、返還まで力強く続行

7月29日、「北方サミットin根室95」で山本会頭はこう挨拶した。「戦後50年、日本は経済的發展を続けてきたが、戦争の傷跡はあちこちに残っている。その一つが北方領土問題で、日本JCは1970年から今年で26年間、返還運動を続けてきた。この問題は、日ロ二国間だけのものではない。アジアの平和、世界の平和に繋がる地球市民意識に基づく問題なのだ。この運動は、北方領土が返還されるまで、毎日力強く続けていくものと捉えている」と。

30日、午前9時に始まった第26次北方領土現地大会式典には、大矢根室市長はじめ関係省庁、諸団体など数多くの来賓が出席した。その後、俵孝太

郎氏をゲストに山本会頭とのトークが行なわれ、俵氏は「東西冷戦の崩壊後、世界がめまぐるしく変化する中で北方領土問題の解決は、今のロシア政権の現状から見て、新しい枠組みが必要だ。世界の平和に日本が果たす役割を、世界国家での日本、地域国家での日本、また軍事小国である日本、という観点から考えなければならない」と、指摘された。

式典に先立ち、納沙布岬での根室JC早朝例会では、昨年10月の北海道東方沖地震で被害に遭った北方四島住民への人道的支援として、ワゴン車2台を贈ることになった。全国のLOMより道東ブロック協議会に寄せられた支援金から供出されたものである。

■ GALSで、「MOTTAINAIセミナー」大盛況

戦後50年、ニューヨークでは8月19～22日の4日間にわたり国連創設50周年記念会議（GALS）が開催された。

このグローバル・アフェアーズ・リーダーシップ・セミナーは、もともと62年から毎年開催されているアメリカJCのリーダーシップ・セミナーで、50周年の年にバージョンアップされ、今回はUSJCだけでなく各国JCの役員・メンバーやJCI役員を一堂に集めて開催された。日本JCは、山本会頭以下86名が参加した。

19日午後6時の歓迎レセプションに始まり、翌日は国際グループと環境グループによる日本JC「MOTTAINAI」セミナーが開催された。会場は立ち見が出るほどの大盛況となった。午後7時から、日本JC主催記念レセプションがUN本部内ウエストテラスで行なわれた。イーストリバーに夕日が映える絶景をバックに、山本日本JC会頭、王子JCI会頭は阪神・淡路大震災に対する励ましと支援に対する感謝を述べ、レセプションが始まった。

翌日からは諸会議だ。日本JCとしては小和田国連大使を招聘、大使は「国連の未来像」を語った。「平和」、「環境」、「こどもの未来」に関する各セッ

ションも順調に進み、JCIと国連は今後とも協調しながら未来に向かって進んで行くことを確認し、GALSは幕を閉じた。

■ 南太平洋に、バヌアツJC誕生す

7月8日、バヌアツJC設立ミッションが成田を出発した。9日、首都ポートヴィラ到着。現地スタッフとの打ち合わせや、物資の買い出しなど準備に入った。12日、岡崎副会頭はじめ役員、福島ブロック隊その他オブザーバー参加者が到着、総勢48名の参加者が集まった。午後5時、南太平洋大学で「APDCセミナー」を開催し、続いて「日本JC主催レセプション」に移った。支援物資の目録贈呈式で、岡崎副会頭と政府高官が贈呈書にサインの交換をして固く握手。ここに輝かしい両国友好の一ページが開かれた。

13日、いよいよバヌアツJCの設立総会だ。初代会頭ナディア女史、役員、会員の承認、事業計画の承認と滞りなく議事は進行し、ここに18歳から40歳までの会員64名のJCが誕生した。総会后、岡崎副会頭は「バヌアツJCの創立を、日本JC 6万5000人のメンバーを代表し、心よりお祝いします」と祝辞を述べ、祝宴に入った。

フィナーレを迎える頃には、参加者の目に感激の涙が光り、言葉につまるほどの熱い思いが込み上げていた。思えば、初ミッションより3年という歳月が流れていたのだった。

この華やかな祝宴と同時に、離島では日本JCの国際協力活動である物資供与・医療活動・スポーツ交流等が行なわれていたことを付記しておこう。

■ 「自立・共生」を胸に〈堺全国大会〉

10月3～7日、「新しい地球市民が未来を創る—自立と共生をめざして—」をテーマに、第44回全国会員大会が開催された。古より自由・自治都市として栄えた堺に、相集うJCメンバー1万6500人。阪神・淡路大震災に始まるJC運動であったが、傍目にも「震

災復興の3本柱」を、本来の既定事業と共に、よくこなしたものだと考えさせられる1年だった。その総決算が全国大会なのだ。

4日夕、大浜公園の大テントで開催された「地球市民コンサート」は、市民参加のイベントとして大盛況。被災地の市民1000人が招待され、人気アーティストのライブを楽しんだ。6日、同会場に設けられた灯台大夜市では、震災支援チャリティーオークションが行なわれた。「Buy Made in 阪神」のコーナーも登場し、それぞれに訪れたメンバーは、できる形で被災地の復興に一役買っていた。オークションの収益金330万円は、日本JC「鐘の鳴る丘」プロジェクトに寄付された。

TOYPグランプリは国井修さん

5日、じばしん南大阪のホールでTOYP大賞授賞記念式典が開催された。全国から102名の若者が推薦され、その頂点に輝くグランプリ・外務大臣奨励賞を獲得したのは国井修氏だった。この瞬間も、国井さんは外国人医療の体制準備を訴え、ブラジルで献身的な活動の真っ只中だった。代理出席の国井夫人は「他人のために生きることは、自分のために生きるより幸せ」という手紙を代読した。

■ グランプリは 小矢部「メルヘン 夢をかたちに」

6日夜は、アワードセレモニーだ。今年は16年ぶりに見直しが行なわれ、自由部門が廃止された。エントリーは60団体66事業で審査の結果、17事業が受賞した。

準グランプリには石巻と磐田の2JCが選ばれた。石巻JCの事業は「地域から文化の発信を—市民創作劇『夢回帰線物語』—」と題して、サン・ファン・パウティスタ号復元の喜びと感動を再現した。市民を巻き込んだ「劇団」という形で石巻、仙台と公演を重ね、地域との繋がりを深めた。

磐田JCは、桶ヶ谷沼の保護から始まった生態系への開眼運動が10年目を迎えた。ラジオドラマ、ア

ニメ化と運動が拡大し、95年度はミュージカルに挑戦した。桶ヶ谷沼がある限り運動を続けて行く、という。

褒賞の頂点・グランプリは、小矢部JCに輝いた。湧き上がる歓声の中、舞台上上がるメンバーの表情には、喜びと誇りが満ち満ちている。小矢部の事業名は「メルヘン 夢をかたちに」。5年前に始めた企画で、市民がJCと共に運営に当たり、毎年、イベントを開催してきた。イベントを通してまちを考え、活動する真の市民を育成するのが目的である。参加団体は、現在14を数える。イベント内容を洗練させると同時に、参画する市民・団体・行政の相互理解と連帯感を育てる場に成長してきた。そして本年、小矢部市のまちづくりについて意見交換しよう、という趣旨で市民ネットワーク委員会が誕生した。

イベントを通じての人づくり、人づくりによって形成されたネットワークによるまちづくり。小矢部JCは、イベントを支え・人づくりを支援する、という本来の意味での地域に根差した活動を展開してきた。地域の夢を形あるものに作り上げていく活動を、小矢部JCは実践してきたのだ。

■ 未来を照らし続ける

大会最終日の7日、それまで曇りがちだった堺の空はすっきり晴れ渡り、爽やかな秋晴れとなった。山本会頭はJC運動を「地域にしっかりと根付き、世界的な視野で物事を考え、未来を照らし続ける」灯台にたとえ、「力を合わせて、この堺の港から未来へ出港しよう」と、メンバー一人ひとりを勇気づけるスピーチで締め括った。

プレジデンシャルリースを伝達された次年度会頭予定者の檜畑直尚副会頭(和歌山)は、「時代のキーワードは絆。それぞれの人生を絆で結ぶことによって、ドラマが出来上がる。96年度、日本JCは最高のドラマをあなたと私に与えてくれるだろう」と語った。

そして、卒業式。代表の富澤善和副会頭(北九

州)の、詩を朗読するかのような挨拶に、壇上の卒業生達は涙、涙、涙……。

終幕は、杉田二郎氏を囲んで『戦争を知らない子どもたち』、涙を拭いながらの大合唱で、それぞれ思い深きJCライフに別れを告げていった。

最後のLOM訪問

全国大会は終わったが、まだ今年のJC運動は終わっていなかった。11月の世界会議は別として、会頭のLOM訪問が一つ積み残されていたのだ。被災者でもある山本会頭が震災直後、「震災の復興事業とともに、予定された事業は全て実施する」と断言したことは、冒頭に記したとおり。だが、当初、2月に予定した羽咋JC訪問が残っていたのだ。

10月17日、最後の訪問を名残惜しむように、所定の時間を30分オーバーする講演に、メンバーの拍手は鳴り止まらなかった。「自分の思いを伝えるには、実際に会うのが一番だと思っている。特に今年は、新しい地球市民の意識を伝えたかったのと同時に、震災援助のお礼と大震災復興対策事業の説明に、どうしても回らなかった。50ブロックを回って、改めて各地のJC運動に対する意識の高さと、素晴らしいまちづくりが実施されていることに感銘を受けた」と、山本会頭は述懐していた。

■ワン・ステップ・アヘッド!

11月5～11日、第50回JCI世界会議が北緯56度に位置する歴史と伝統のまち、スコットランドはグラスゴーで開かれた。登録は約4200名、日本からは約1020名だった。

9日、総会で「地球市民ジュニアフォトコンテスト」の表彰式が行なわれた。JCIプロジェクト特別委員長の戸須昭雄(東京)が、800点を超える応募作品から選ばれたグランプリを発表する。トルコのエスキセニールJCが実施したリサイクル関連事業で、「一枚の古紙はそれだけではただの古紙だが、集めれば金に換えられて木々を育てることができる」ということを子供達と考え実践した事業だった。この事

業は、写真も解説文も分かりやすく、見る人の感動を誘った。

また、96年度は「もったいない絵日記コンテスト」の開催を、JCIプロジェクト特別委員長大平晋也(岐阜)が提案、決定をみた。

「浜松・広島・個まち」に栄冠

待望のアワードセレモニーは、10日午後6時半よりロイヤル・コンサートホールで開催された。合唱団が美しい音色を響かせ始め、いよいよオープニング。

アワードの発表は続くが、日本のコールはない。と、来た! 広島JCの特別事業賞(次点)だ。核兵器廃絶と平和を訴えた事業で、被爆50周年・広島JC45周年記念事業だった。葉袋で鶴を折り、被爆による障害の快復と平和を祈った少女の話(佐々木貞子作)を劇化した米国人舞踏家を日本に招き、日米各50人の子供達で3回の公演を立派に行なった。最終公演の後、人文字で鶴の形やPEACEの文字を描き、メッセージを書いた折り紙で折った鶴を風船につけ、大空に放った。

次のコールは浜松JCの国際人道的援助賞。カンボジアへの援助活動が評価された。使用済みテレカを収集し、金銭に換えてカンボジアでの農村開発やコメ銀行の設立に役立てようという事業である。

表彰は続き、NOM対象のカテゴリーで日本JCは経済活動賞を受賞した。ゲットしたのは日本JC個と地域を生かしたまちづくり推進会議。自らが住む地域の特性を生かすことが、まちづくりにおいて最も大切な要諦、と精力的な活動を全国的に展開した。山本嘉一郎まちづくり室長(東京)、山本会頭、同夫人と3人の山本さんが壇上に上がり、王子JCI会頭からトロフィーを受けた。その後、会員拡大賞も獲得し、山本会頭、檜畑・富澤の両副会頭、そして村岡専務理事が壇上へ。王子JCI会頭とガッチリの握手だった。

この1年、ワン・ステップ・アヘッドを掲げ世界中を飛び回った王子JCI会頭、そして副会頭の樋口信治の責務は終わろうとしている。次年度の会頭には

トーマス・クリア (USJC) が決定した。副会頭に立候補した新田八朗国際協力室長 (富山) は、バヌアツJCの設立に関わった経験に触れながら、全てにポジティブ・チェンジの精神で臨みたい、と力強く語り上位当選している。

成功、それは旅の途中だ

全ての表彰を終えた王子JCI会頭は、最後のスピーチを行なった。「阪神・淡路の震災に始まる1年だった。国連での会議、エリア会議、多くの国家元首にも会った。活動を支えてくれた日本の友人、JCメンバー、そして家族に感謝する。成功とは到達点ではなく、旅の途中だ。可能性に限界はない。JCIでのトレーニングや体験が、我々を現実へと導いてくれる。我々は、世界というコミュニティの中で、共に生きていかなければならない。そのことを子供達に伝えていかなければならない。

私の会頭としての旅は今日で終わるが、皆さんが新しい夢やゴールを目指す時、ワン・ステップ・アヘッドを忘れないでほしい。JCIの会頭、それは私にとって本当に大きな冒険だった」と語って壇上を去ろうとするや、惜しめない拍手は、しばし鳴り止まなかった。

11月11日、王子英JCI会頭の招待晚餐会をもって、全日程を終了した。

第15章 「新人間社会」の創造

1996-1998

■ 愛のライトメッセージ、 祈りと感謝を光に

1996年1月17日の夕刻、神戸の商業ビルや家庭の照明が一斉に消えた。そして1分後、全市で愛をテーマに光が一斉に放たれた。

震災から1年、神戸JCは「神戸復興の礎たらん」を基本テーマに掲げ活動してきた。その一環として、神戸で亡くなられた方々のご冥福を祈り、世界中の支援者に感謝の意を表し、併せて震災体験を思い起こしライフラインの重要性、人間愛の尊さを確認する機会として企画したのが、この愛のライトメッセージであった。

点灯式典には、事業の提案者・照明デザイナーの石井幹子氏が出席され、震災当日に生まれた4名の子供達には点灯合図として、ハーバーランドの遊園地のメリーゴーラウンドや観覧車等の始動スイッチを押してもらった。諸団体や企業の賛同を頂き、各ホテルでは窓の光でメッセージを表現したり、神戸のシンボル・市章などの点灯も行なわれた。

神戸市民の祈りと感謝を、光に託すひと時であった。

■ 3年目の自己改革

1月18日、今年で30回を迎える京都会議が約1万8000名の参加により開催された。自己改革を唱えて3年目、今年も虚礼廃止の姿勢がアピールされた。新年名刺交換会は、山本潤直前会頭の音頭による缶ビールの乾杯で始まった。儀礼的なLOMナイトの訪問や祝儀などは自粛、懇親会等の会場キャンセルは極力さける、ゴミは拾うのではなく出さない、など基本的なエチケットの順守が訴求され、全体を通じて自己改革の精神に貫かれた京都会議となった。

初の専務理事セミナー

各種セミナーでは、初の試みとして専務理事セミナーが開かれた。岡本安明専務理事(大阪)は「JC運動は45年を経過し、根本的に考え直す時期にきている。運動論はできつつあるが、ここでは運営を担当する専務理事にお越し頂き運営論を考えたい。

専務理事の役割は非常に大きい。是非、いろいろな議題を進めてほしい」と挨拶、自己改革の推進・定着、財政基盤確立など日本JCのLOM支援サービス機能に関する多くの情報が提供された。

行動のキーワードは愛・夢・絆

21日、春を思わせる陽気に恵まれ、式典には8000名を超えるメンバーが参集した。96年度スローガン「絆を生かし助け合い、創ろう愛ある新人間社会」の表彰が終わるや、照明が落とされ、いよいよ檜畑会頭の所信発表である。

「あの大震災は多くの命を奪い、まちを一瞬にして崩壊させる悲しい出来事だった。しかし私達は、いろいろなことを学んだ。生きることの意味、夢と希望、家族のぬくもり、助け合い、そして絆。『新人間社会の創造』は、愛、夢、絆を地球規模で広げ、また次の世代に引き継いでいこうというものだ」。

「21世紀まで後5年。私達の手で、地球市民の時代、人類共通の夢を共有できる時代を実現しようではないか。新人間社会は、よりよい地球社会を目指す私達JCのイマジネーションと行動から生まれる。

皆さん、明日のために手に手をとって頑張ろう。一歩外に出て、私達の元気を社会に与え続けようではないか。行動のキーワードは愛、夢、そして絆」。

割れんばかりの拍手の中、思わず立ち上がるメンバーの姿も見られた。

今年度の運動基本方針は、次の5項目である。①「新人間社会」実現へ向けたくにづくり。②「たすけあい」のあるまちづくり。③「おたがいさま」のひと(地球市民)づくり。④「世界との絆」を求めてスプラッシュ。⑤「すなお」なところで自己改革。

■ 復興へ、新事業の3本柱を発表

4月4～5日、日本JC出向者を対象とする「神戸会議」がポートピアホテルで開かれ、約2100名のメンバーが集まった。

同会議は、復興支援「Buy Made in 阪神」の実践でもある。会議に先立つ記者発表では、「鐘の鳴る

丘プロジェクト」田中茂特別委員長（加古川）が、今年の新事業3本柱を発表した。

①ハートネットワークセンター

震災で心にダメージを受けた子供達の心のケアを行なう施設で、精神科医、臨床心理士、教師らの専門家がスタッフとして参加し、子供や父母、教師を対象に出張を含むカウンセリングを行なう。また、仮設住宅内に週1～2回の臨時学習塾「ワイワイ塾」を設け、学習指導や触れ合い活動を行なう。同日、神戸市中央区に事務局がオープン。

②ふれ愛コミュニケーションキャンプ

昨年の「リフレッシュキャンプ」の流れを汲み、今年「自立・交流」をキーワードに全国4000人の臨床心理士の協力のもと、2100～2300名の子供を受け入れる予定。

③まちに元気・復興支援事業

震災により中止や縮小を余儀なくされた兵庫ブロック内9LOM(明石、芦屋、尼崎、淡路、伊丹、川西、神戸、宝塚、西宮)の住民参加イベントに資金援助を行なう。今年が踏ん張りどころという9LOMを、資金面で支援する。

記者発表の後、夕方からはメインイベント「すなおな心でオークション」が開かれ、収益金約180万円は「ハートネットワークセンター」ほか、阪神地区の復興に全額寄付されることになった。

翌日は「絆 再発見—たすけあいのあるまちはここから始まる—」と題する全体会議だ。開催地LOMを代表し伊田昌弘神戸JC理事長は歓迎と感謝の意を述べ「この一年、夢中で足元の瓦礫を片付けてきた。最近では、厳しい現実を感じるようになった」と、経済的打撃の大きさを語った。檜畑会頭は「地震は大きな教訓を与えてくれた。潰れた家の中から命を助け出してくれたのは、社会のシステムだけではなかった。それは隣りの人であり、全国から飛んで来てくれた人の心だった。人と人との絆を、もう一度強く意識し、自分達の地域社会を結んでいく努力を始めよう」と語った。

人は、人が助ける

パネルディスカッションで、貝原俊民・兵庫県知事は「人間は結局人間が助ける、と実感した。行政はもっと住民を信用していい、と思った。高齢化社会における大災害という意味では、自ら回復していく力は弱い。だからこそ、皆で助け合っていくしかないのではないか」と、3点を指摘した。

作家の落合恵子氏は「自立した市民であるためには、沈黙を破る勇気があるか、違いから学ぶ姿勢をもっているか、結縁のゆるやかな絆を成長させていけるか、人権意識をもっているか、ということが必要」とし、「これからはネットワークよりも、必要に応じて編んでは解けるという意味でネットワークの時代」と提案した。

医療評論家の行天良雄氏は「誰もが他人の手を借りなければならないのが死に際だ。生きていて良かったという国をつくるのは、今40代前半までの人」と、メンバーの社会への積極的な取り組みを促した。

最後に檜畑会頭は「我々の世代に課せられている義務も多いが、権利も多い。是非、これからの社会を我々の手で、光のあるものにしていかなければならない」と結んだ。

■ ふれ愛コミュニケーションキャンプ

7月19日、昨年が続いて「ふれ愛コミュニケーションキャンプ」が全国82LOM、2ブロックの計84カ所で開催された。リフレッシュ・交流・自立をキーワードに約2500名の子供達が、2泊3日のキャンプで心地よい汗を流した。ここでは、11JCの事業を紹介する。

[大分]神戸明親小50名・地元小80名のキャンプ他ホームステイ。2泊3日。地球ともっと仲良くなろういっしょけんめい遊び隊。

[加賀]芦屋地区の子供20名・地元子供22名のキャンプ。ふれあいキャンプ、元気いっぱい遊んだよ!

[小田原]西宮の小18名。JCの国際交流委員会の事業ハートフルキャンプに合流した。地場産業と箱根の

自然を満喫。

[山形] 芦屋の子供24名・地元のボランティア学生。自然の脅威に傷つき、自然の素晴らしさに癒された子供達。

[石川] 宝塚市西谷小10名・沖縄県石川市の子供10名。真夏の沖縄・大空と海のキャンプ。沖縄の風土を満喫した子供達。

[福山] 神戸の二葉小12名・来福中のアジア子供大使16名・福山グリーンリーダーズ68名の合同キャンプ。

[帯広] 淡路の子供達を、96十勝地球村キャンプに受け入れ。JCの家族と食事を作ったり寝たり、同世代の子供と触れ合う。

[勿来] 芦屋の子供21名・地元21名。JCの継続事業ドリームサマーキャンプに招待。夢を分かち合う子供達と地元市民。

[江南] 尼崎の子供30名・地元71名。「地球市民の思いやる心」の一環としてキャンプ。心の痛みを分かち合い、共生の心を育む。

[美馬] 明石、神戸の子供10名・地元の子供、ボランティア、メンバー。四国一の清流で遊ぶ。地域ぐるみで子供達と交流。

[加古川] 神戸76名・明石34名・地元71名。臨床心理士1名を加えボランティア・メンバー合わせて300名余、17班のHOP・STEP・キャンプ。疲れるほど遊んでも元気いっぱいの子供達だった。

■ ASPAC金沢、バランスのとれた発展

5月23～26日、古都・金沢では海外77カ国から3000余名の参加者を集め、ASPAC金沢が開催された。テーマ「バランスのとれた未来への発展」のもと、各種セミナーやイベントを通じ、新たな「絆」が結ばれた。

初日、午後4時30分の開会式（石川県産業展示館）には約8000名が集まった。小京都・金沢らしく素囃子、長唄連獅子といった日本の伝統文化が披露され、ご臨席の紀宮さまは「互いに異なる文化の共存が、調和のとれた未来を創る」と、お言葉を述べ



ASPAC金沢大会（'96）

られた。

ホストNOMを代表し榎畑会頭が、金沢出身の詩人・室生犀星の詩を引用し友情の素晴らしさを語れば、トーマス・クリアJCI会頭は、この4日間を有効に過ごし、各自が「未来への虹の架け橋」を架けてほしい、と述べた。

日本JCの成功事例紹介など

翌日からは各種セミナーの開催だ。日本JCの成功事例を紹介する「日本JCの秘密」、「MOTTAINAIⅢ」、本年度JCIの方針を反映した「LOM理事長サミット」、「レインボーブリッジ分科セミナー」などが注目を集めた。またASPAC最大の催しとなるジャパンナイト（産業展示館1、2号館）は、1万人が集まる盛会だった。榎畑会頭、トーマス・クリアJCI会頭が鎧姿で入場したり、各LOMの趣向を凝らしたユニークなアトラクションで、会場は大いに盛り上がりを見せた。

他方、2日間にわたる石川県主催の特別事業『国際ベンチャービジネスメッセ石川96』では樋口廣太郎アサヒビール会長、立石信雄オムロン会長などがゲストに招かれ、時代を先取りする独創的な経営戦略が、一般市民を含む約1500名に紹介された。なかでも出席者の関心を引いたのは、パネルディスカッションで、マイクロソフト社成毛真社長は「インターネットの出現が、ベンチャー精神を復活させた」と、

情報通信分野でのベンチャービジネスの大きな可能性を示唆していた。

■ 市民主役「NPO支援セクター」を提言

7月27～28日、サマーコンファレンスがパシフィコ横浜で開催され、7833名が集まった。テーマは「『絆』の時代—共に創ろう 愛ある新人間社会—」。

12時30分、オープニングセレモニーが大ホールで始まった。1966年の辻会頭(秋田)時代、初めて提言が行われた軽井沢の政治問題セミナーから現在に至るサマコン30年の歴史がビデオで紹介された後、檜畑会頭が谷川俊太郎の詩『生きる』を朗読し、挨拶に入った。

「今、日本は構造転換の真っ最中で、これまでの福祉、政治、経済システムの見直しが迫られている。私達が全てのシステムをどう変えていかなければならないのか、その成果をやっと皆様に発表することができます」と述べ、提言内容をコンパクトにまとめたビデオが上映される。

橋本総理の高い評価

サマコンに先立つ23日、檜畑会頭が首相官邸で橋本龍太郎首相に提言書を渡した時の映像も映し出された。首相は「この提言書は問題提起として大きな意味がある」とし、次のように語った。「提言書をまとめるに当たって、様々なメディアを駆使して全国のメンバーと意見交換し、共創してきた事実に驚かされた。その行動力とチャレンジ精神に期待するところは大変に大きい。市民の意見を反映した地域からの国づくりは、若く既成の体質に縛られない斬新な発想で、十分に社会を支えていける責任世代の皆さんが積極的に取り組んでほしい」。

この提言書は、コンピュータ・ネットワークにより全国のメンバー同士が意見交換して生まれた発想・アイデアが反映されている。

「政治でも行政でもない、民意を反映する第3システムの構築」をテーマに、市民主役で社会を支える「新人間社会」創造のために何をしなければならず、

何ができるのかが盛り込まれ、「NPO(非営利市民活動組織)支援セクター制度の確立」を中心に、具体的な提言が行なわれた。

人と社会の新しい関係

午後1時30分、ヒューマン・ルネッサンス・フォーラムが開始され、人と社会の新しい関係を中心に議論が進められた。

菅直人厚生大臣「高齢化社会問題を即、福祉問題と考えるのではなく、まちづくりを含む生産活動以外のことに従事しやすい環境づくりを考えねばならない。その切り口として、NPOは可能性があると思う」。

星野進保総合研究開発機構理事長「世界は市場化の弊害に気づき始めた。資本主義の欠点は、モノで代価を払うこと。無償の報酬システムや仕組みができれば社会も変わる。NPOは、そのツールの一つだ」。

本間正明阪大教授「市民参加型社会が根づくには、行政は何もしてくれない、と言い続ける市民が公的問題に関心をもち、周りとは協調して組織を組み、活動する黒子市民になり切れるかどうかにかかると」。

白石徹副会頭(新居浜)「個人の自発的な気持ちを繋ぎ合わせられれば、継続的な活動はできる。社会の仕組みさえ変えられるのではないかと。全国のLOMは、それぞれの地域で様々な役割を担っている。是非、この提言書を活用して奥の深い、幅の広い活動をしてほしい」。

最後に、コーディネーターの経済評論家田中直毅氏が「21世紀には市場と政府が覆う領域以外に、市民の自立性に基づく領域の研究が極めて盛んになる」と語り、今後の社会は市民の自立性、ひいてはNPOの活動が更に注目されることを示唆し、フォーラムは終了した。

今年のサマコン・セミナーは35コースあり、会議センターの各ルームは参加者で埋め尽くされていた。特に目をひいたのは、2日間コースの「環境教育ファシリテーター養成講座」だった。受講者は、ここで

環境問題を学んだ後、LOMに戻り各地でセミナーを行なうことになっている。最終的にはファシリテーターの資格が得られるとあって、真剣に取り組んでいた。

■ 国境なき奉仕団、ケニアで緊急援助

4月22日、国境なき奉仕団特別委員長佐藤長巳（静岡）率いる本隊40名が成田を出発、一路ナイロビへ向かった。先遣隊10名と合流し、緊急支援事業が始まった。既に、昨年12月の現地調査で政府よりコミュニティ建設のため7エーカー（28,382.09平方メートル）の土地の使用許可を得ていた。今回の目的はナイロビ市最大のンジェングスラムの子供達に、緊急かつ長期的ビジョンに立った援助活動を行なうことだった。

一行は、現地NGOコーディネーターのサンデ氏の案内で、ンジェングスラムを視察した。面積は120エーカーで工場排水は流れ、粉塵公害ありと劣悪な環境に住居が密集、一度迷い込んだら出られなくなってしまう迷路同然だ。ここに2万人の子供達が生活している。1日1食の食事のままならず、多くはストリートチルドレンで路上で食べ物を求め、女子は家族の生活費稼ぎに売春せざるを得ない状況。

1週間に3人の子供達が亡くなり、6割がエイズ感染している。だが、子供達の目は輝き、真っ白な歯を見せながら、こぼれるような笑顔で一行を迎えた。「子供達の差し延べた小さな手を握っていると、スラムに入った時の不安もいつの間にか消え、この子らのために一日も早くコミュニティの完成を祈念せずにはいられなくなってくる」と、副委員長林伊佐雄（入間）の報告に記されていた。

サッカー場完成！

24～25日の2日間、コミュニティセンター内で奉仕活動を行なった。子供達にサッカーボールを与えた時の目の輝き、ボールを追いかける時の生き生きとした姿を見て、それまでにいくつかの奉仕活動案を考えていたのだが、即座にサッカー場を作ること

に決定。早速、その作業に入った。グラウンド予定地の石の除去、サバンナ特有のアカシア科の刺のある樹木の抜根、整地等だが、思ったより地面が固く、スコップも歯がたたない。日差しの強い炎天下、おまけに標高1700mの高地とあって空気が薄い。作業は思うようには進まなかった。だが、子供達の手伝いもあってサッカー場は完成した。メンバーの手による記念プレートや国旗掲揚台のポールも立ち上がった。一步一步、コミュニティは完成に近づく。

ケニア最大の施設に

26日午前10時、贈呈セレモニーが行なわれた。ナイロビ市長はじめ地区区長、コミュニティセンター理事会メンバー、NGO関係者、そして同センターに通う子供達500名。日本側からは堀内伸介日本大使、JC関係は檜畑会頭、JCI会頭、ケニアJC会頭が出席した。

団長・光田敏夫副会頭（名古屋）が今回のこの事業、救援物資の目録をコーディネーターのサンデ氏に贈り、記念植樹、記念撮影を行なって閉会となった。その後、JCメンバーと子供達の試合が行なわれた。この施設が完成し機能を開始すれば、5年後には1000名の子供達が学校に通うことができ、80名のストリートチルドレンが宿泊施設で生活でき、家畜、菜園活動の資産総額は300万円を超え、コミュニティの運営に役立つことになる。

NGO関係者は「ケニア最大の施設になるだろう」と語っていた。

■ ナイロビで第2回ビジコン開催

国境なき奉仕団の活動と同時期、ナイロビでは第2回ビジコンが開催された。4月24～27日の日程で、世界中から500名を超える参加があった。日本からは檜畑会頭はじめ300名を超えるメンバーが出席。開会式ではトーマス・クリア会頭ならびに役員、各国会頭の紹介に続きケニアの子供達や、マサイ族など少数民族による踊りが花を添え、華やかに繰り広げられた。セミナーでは、日本JCが

「MOTTAINAI Ⅲ」セミナーを開催し、会場はあふれんばかりの大盛況であった。

■ ビザ無し交流、北方領土四島へ

6月18日、第27次北方領土現地大会が根室市総合文化会館大ホールで開催された。大矢根室市長の挨拶、政治活動家浜田幸一氏の基調講演に市民多数が耳を傾けた。

そして19～24日の日程で、北方領土四島交流推進全国会議の平成8年度第1回北方四島交流訪問が、樫畑会頭を団長に45名の参加で実施された。日本JCからは森下矢須之副会頭（岡山）、岡本安明専務理事（大阪）ら13名が同行した。

日本からビザ無し交流で北方領土に向かう船は、コーラルホワイト号354トンという小さい船で、定員は50名ほど。94年度小原会頭が団長を務めた時もこの船だった。最初の訪問は国後島で、通常6時間の航海だ。この小さい船でも岸壁に接岸できず、島から錆ついた骨董品に近い船が迎えにきた。広場には壊れたレーニン像が放置されている。行政府や島民は温かく迎えてくれた。現島民には日本人との共存の希望も聞かれ、「返還運動に対するJCとしての取り組み方について、考える必要を感じさせられる訪問だった」と、報告記にあった。

■ TOYP10年、閉塞社会に一条の光

9月20日、今年で10年になる「傑出した若者」を顕彰するTOYP大賞授賞式が東京商工会館で行なわれた。この3年間は全国大会に合わせて開催県で実施していたが、今年は4年振りに独立した催し物として記者会見も設営し、賞の理念・意義、受賞者の活動がJCメンバーだけでなく、広く世の中に知られるよう配慮された。

山中理TOYP大賞特別委員会委員長（久居）の開会挨拶に続き、受賞者10人の活動がVTRで紹介された。一人ひとりが

樫畑会頭から表彰の楯とトロフィー、副賞に活動支援金として30万円が授与された。選考委員を代表して文教大学国際学部の高野洋教授は「大学で教えていて日本の将来、これで大丈夫なのかという気がしないでもないが、選考にあたり傑出した若者の活動に触れることにより、少し安心した。激動の世界の中で、JCが青年の核として行動力・組織力を発揮し、こういう事業を行なうことは、日本の閉塞した社会に一条の光を射し込むことになる」と締め括った。

■ グランプリは鎌田裕十朗さん

この後、グランプリの発表だ。AMDA（アジア医師連絡協議会）のメンバーとして数々の災害、難民に対しての緊急救援医療、長期保健衛生活動を精力的に行なっている鎌田裕十朗氏に輝いた。

同氏はルワンダで難民の襲撃を受け自衛隊に救出されるなど、数々の危険な目に遭いながらも医療活動に従事してきた。現在、国内民間救援団体、72時間ネットワークの代表も務めている。受賞後のインタビューで「思いがけない気持ちでいっぱい。今こうしている間にも、世界の53地域でAMDAメンバーは頑張っている。私は常にそのことを忘れず、彼等を物質的・精神的にバックアップしていきたい」と語った。

記者会見では、数多くの質問が寄せられた。グランプリの鎌田氏は、これまでに印象深かったこととして、北サハリン大地震での緊急医療活動に従事した際に出会った残留邦人の婦人から「この50年間、日本人であることを恥じてきたが、今回初めて援助に



TOYP10年目（'96）

来てくれたのが、あなたが日本人だった。初めて、日本人であることを誇りに思えた」と、感謝されたエピソードを披露していた。

また、視覚障害者でありながらロックバンドを結成し、コンサートを行なっている熊野伸一氏は「自分に負けたくない、これが自分の原動力だ。ゆくゆくは、福祉放送の中で障害をもつ者から見た報道を試みたい」と抱負を語った。他の受賞者からも、人と人の絆を感じさせられる話、これからの課題などが語られ、TOYPと受賞者の活動への理解が深められる記者会見であった。

■ 改革の源流は我にあり! 〈長野全国大会〉

10月1～5日、第45回全国会員大会が長野で開催された。「改革の源流はJCにあり 共生の心で創る新人間社会」のテーマを掲げ、冬季オリンピックを目前に急ピッチで整備が進む長野に、約1万5000名のメンバーが集まった。1日の記者発表会で「大会期間中のメンバーの移動、交通アクセスは大丈夫なのか」との記者団の質問に、檜畑会頭は「十分な対策を練って準備していると聞いているので、心配はしていない」と、キッパリ胸を張った。

2日、早朝の出陣式。実行委員長荒井久也は「今後の幸せな結婚、運、ラッキーを犠牲にしてまでも、10月4日、5日の晴天を勝ち取ることを誓う。いまだ治りきらぬ風邪をこじらせ、大会後の物故者法要に名を連ねようとも構わない」と、言った。この命がけの誓いに、会場はドッと湧いた。誰しものが、実行委員長の熱意に脱帽。

その5日、爽やかな秋晴れだった。完成間もないホワイトリンクで大会式典が行なわれた。オリンピックではフィギュアスケートの会場になる。東京フィルハーモニー管弦楽団の演奏に合わせて長野の祭り、まち並み、善光寺のイメージ映像が放映された。と、映像は一転、近代的な都市の風景に。建設中の道路やビルが映し出され、変貌する長野が紹介さ

れた。

ご臨席の常陸宮・同妃両殿下は「この大会を契機に会員相互の友情と理解を深められ、更に有意義な青年会議所運動を展開されることを祈念してやみません」と述べられた。

■ JCの元気を地域、日本、地球に

檜畑会頭は「長野には全国の青年会議所に大きな影響を残した小野正孝先輩がいる。先輩は常々『メンバーはLOMの枠を越え、手を取り合って社会運動を進めるべきだ』と、口にされていた。これからの日本は青年人口が減少していくが、地域の若者が減ることによって伝統文化が破壊されてはならない。活動の範囲を地域中心としながらも少しずつ外に目を向け、全国のメンバーが手を取り合って連携しなければならない。JCの元気を地域の元気に、JCの元気を日本の元気に、そして地球の元気に変えていこう」と挨拶した。

ムーチョ小野、同い年の筆者にも鮮やかに印象の残る人物だ。議論もした。酒も飲み交わした。JC青年の船で同室したことも。病に倒れてもJCに尽くした。無念だったろう。その法要の日、寒い日だった。国鉄のストで、全国の鉄道はマヒしていた。にもかかわらず、善光寺には全国から大勢のメンバーが集まってきた。そして、その遺志は、こうして受け継がれているのである。

檜畑会頭からプレジデンシャルリースを伝達された村岡兼幸次年度会頭(由利本荘)は「本大会テーマ『改革の源流は我にあり』は、偉大なる小野先輩の心であり長野JCの精神的な支柱だ。その長野で改革をテーマに97年度会頭としてスタートを切ることに、震えるような感動を感じる。改革の源流はJCにあり。『小さなデモクラシー』の風を一緒に起こそうではないか」と、強く訴えた。

そして、卒業式。卒業予定メンバーはステージに集まり、代表して光田敏夫副会頭(名古屋)が「JCの卒業は青年を卒業することではなく、青年としての



次年度スローガンは小さなデモクラシー（'96）

レッスンを終えたことだ。これからも人のために汗を流し、仲間と感動を共にし、情熱をたぎらせていく」と挨拶。『翼をください』を全員が大合唱し、卒業生を見送った。

■ 銀色に輝くアワードカップを新設

待望のアワードセレモニーは、長野県県民文化会館で行なわれた。今年は62団体、66事業がエントリーし、9月に行なわれた公開審査で各地区推薦の理事長経験者が新たに審査員に加わった。竹井崇利褒賞委員会委員長（宮崎）は、挨拶でその点に触れ「褒賞が真に開かれたものであることを心掛け、そして各地に戻った審査員には、情報発信の役目を果たして頂いた」と説明した。

また、今年から新たに銀色に輝く大きなグランプリ杯（アワードカップ）が設けられ、LOM名が刻まれ次年度以降も引き継がれていくことになった。

準グランプリは倉吉、仙台がコールされた。倉吉の事業は、打ち吹き天女伝説「心のふるさとづくり」。倉吉に古くから伝わる『打ち吹き天女伝説』をもとに、打ち吹き天女大壁画などを制作した。この事業は、市民や行政を巻き込んだ展開になったこと、更に来年度以降も引き継がれていくという事業の継続性が評価された。新藤祐一理事長は「天女のまちとして世界へ、未来へ力いっぱい発信していきたい」と喜びを語った。

仙台の事業は、「生活情報交換会～大井戸端会

議」。仙台に住み始めて間もない、地域社会に接する機会の比較的少ない女性を対象に、仙台を好きになってもらうことを目的にした事業である。評価のポイントは、女性だけを対象にしたユニークな視点と、助け合いや絆といった今年のテーマに沿っていたこと。仙台はエントリーして6年目の初受賞が、準グランプリとなった。佐藤章治理事長は「これが発火点になって全国のLOMで、この井戸端会議が開催されることを願います」と、喜びを語った。

■ 帯広JC、「高校生サミット」にグランプリ

準グランプリ発表の後、檜畑会頭は審査基準について「アワードの目的は、それぞれの事業に優劣をつけることではない。審査基準は今年のテーマに沿っているかどうか、その事業が他のLOMでも参考になるかどうか、ということ」と述べ、満場注視のなかグランプリの封を切った。

栄冠を手にしたのは帯広の「高校生サミット—共生の時代へ向けて—」だった。この事業の目的は、「ボランティア・シティー帯広」を実現すべく、21世紀の地域・地球を担う青少年の社会教育の一環として取り組んだ。事業内容としては、高校生に様々なボランティア活動に企画段階から参加してもらった。高校生の「自立」と「共生」の気付きを目的とした事業で、今後、高校生が運営主体になっていくことを期待し、JCがネットワークづくりから自主訓練まで全てをプロデュースした点が高く評価された。

田守順理事長は「感謝の気持ちでいっぱいです。この事業を数年前から始められた先輩、参加してくれた高校生、それから我々の考えに同調し協力してくれた多くの市民の皆さん、行政の方々へ、この感激を伝えたい。これからも自信をもって、この事業を続けていきたい」と語った。

■ JCI、「新しい世代への架け橋」を採択

JCI世界会議は11月10～15日、韓国の釜山で開

催された。登録者数は100NOM、約7000名（日本は約2130名）。市内の高級ビーチリゾート・海雲台地区で、世界会議は幕を開けた。開会式の会場となったサジック体育館は、各国代表の色とりどりの衣装が雰囲気を盛り上げる。檜畑会頭夫妻は、紋付き袴と着物姿で登場。日本JCの一般メンバーは、ハッピー姿だ。

会議は順調に進行し、13日の総会で「地球市民の時代」に続く1997年から2001年まで5年間の最重要テーマとして「JCI：新しい世代への架け橋」が採択された。日本JC97年度JCIプロジェクト特別委員会は、「もったいない運動」を引き続きJCI公認プログラムとして提案し、可決された。「MOTTAINAI IV」が3年間、JCI公認プログラムとして継続されることになった。人事面では、97年度JCI副会頭に立候補した檜畑直尚は有効評決数685票中672票を獲得しトップ当選した。JCI副会頭新田八朗は、その職務を全うした。なおJCI会頭にはクリスピン・ディー（フィリピンJC）が選出された。

最優秀特別NOM賞を獲得

注目のアワードセレモニーは、グランドホテルのグランドボールルームで行なわれた。ドレスアップした各国代表が続々と入場してくる。日本からのエントリーは29件で、6個の賞を獲得し、最後にトマス・クリア会頭は「最優秀特別NOM賞を岩のように堅固な力で結ばれているワールドクラスのレインボー、日本JCに贈ります」と発表した。

湧き上がる喚声の中、檜畑会頭が満面の笑顔で壇上に上がり、クリア会頭と握手を交わした。

「もったいない絵日記」表彰式

アワードセレモニーの合間には、「MOTTAINAI III」の事業として実施された「もったいない絵日記」コンテストの表彰式が行なわれた。コンテストには世界各地から5万2000点が寄せられ、「JCI会頭賞」はフィリピン、「日本JC会頭賞」はドミニカ共和国、そして「Mrもったいないシン・オーヒラ賞」にはベネズエラの子供達の作品が選ばれた。



JCIもったいない絵日記
表彰式（'96）

JCIプロジェクト特別委員長大平晋也（岐阜）は「今年1年、世界中を回って『もったいない』をアピールし続けた。本当に、委員会のメンバーがよく助けてくれた。『もったいない』は3年目にして、やっと定着してきたな、という手応えを感じている」と語った。

11月15日、日本JC本部団の解団式で檜畑会頭は「いろいろなエピソードが沢山生まれた会議だった。今年、架けられた多くの国との架け橋を来年以降も続けていきたい」と語った。そして、新田JCI副会頭の労をねぎらい、この釜山でJCライフを終える王子JCI直前会頭には「王子さんを通じて、日本JCは高い評価を頂くことができました」と、感謝の言葉を贈った。

■ 正月の北の海、重油に汚される!

1997年、年明け早々の7日、日本海沿岸に重油が漂着した。島根県隠岐島沖の日本海で、ロシア船籍タンカー・ナホトカ号が座礁。流れ出した重油は次第に広がり、日本海沿岸のほとんどを汚染する大事故になった。なかでも、事故で分断された船首部が漂着した福井県三国町の海岸は、大量の重油で最も被害の大きい地域となった。

阪神・淡路大震災から、まる2年。再び、日本列島を災害が襲ってきたのだ。日頃、傍観者を戒め能動者を指向するJCである。どう動いたか。項を改めて検証することとし、まずは、京都会議を振り返る。

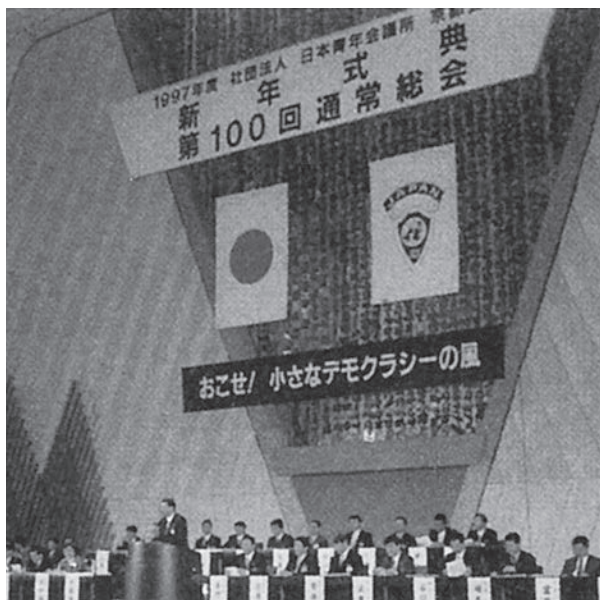
■ 京都から「小さなデモクラシー」の風

1月23～26日、恒例の京都会議である。新人間社会創造に向けて「小さなデモクラシー運動」をテーマに、約1万2000人のメンバーが集まった。今年から、新たに地区運営専務連絡会議とブロック運営専務連絡会議が設けられた。LOMへの支援サービスに関する情報など、LOM-ブロック-地区-NOM間の、より緊密な連携を構築しながら運動を進めることを確認した。

新年式典は、全国理事長を中心とするメンバーで満員となり、入れなかったメンバーは4カ所の別会場で同時中継のスクリーンに見入った。インターネットでも発信され、各地ではリアルタイムで京都会議に接するメンバーも多かった。事実、早速JC-NETに意見が寄せられ、それに対する発言も入ってきた。

村岡兼幸会頭(由利本荘)は、所信表明で小さなデモクラシーの実現を語った。

「私達が目指すものは、国民が責任をもって参加することによって政策がつくられる、そういう国の形と、私達市民の自治精神の構築にある。その延長線上に、地方分権や行政改革、そしてNPOがあるのだ。我々は国際協力事業での学習や阪神・淡路大震災での体験をもとに『意識の改革』、『システムの変革』を感じ取り、行動を起こさねばならない。



京都会議
第100回通常総会('97)

既に、福井では青年会議所を中心に重油災害ボランティアセンターが設立・運営され、行政に頼らない『市民の新しい力』を発揮している。従来の社会システムに頼らず、多様な地域が多様な人材によって未来を切り開こうとする実践が始まっている。

寒風吹きつける中、重油の匂いが重く立ち込める海岸で、全国の青年会議所が国民として、否、人として行動を起こしている姿は、まさに小さなデモクラシーによる変革の能動者たる青年会議所の姿だ、と心が揺さぶられた。

小さなデモクラシー、それは一人ひとりの意志が社会をつくる運動である。それは、私達のコミュニティから始まる幸福な世界の実現だ。それは、頑張る人それぞれに等しくチャンスのある世界である。私達の私達による私達のための地域、地域の地域による地域のための社会、その実現を推進できるのは、国民一人ひとりの、私達一人ひとりの責任ある参加と行動なのだ。そこから、新しい人間社会創造の第二章が始まる」。

堂々たる所信表明である。

初の“対話総会”を試行

会頭所信の余韻が残る中、第100回通常総会が開かれた。総会では初の試みとして、討議事項が導入された。「小さなデモクラシーは、一人ひとりの自覚・対話から始まる」という理念に基づき、会頭の発案で参加者との対話の場が設けられたのだ。

この試みは、時間延長の動議が出るほど熱の入った討議となり、今後の総会のあり方を示唆するものとなった。

なお、阪神・淡路大震災の被災に対し個人で1000万円もの義援金を集め、JCを通じて寄付された藤井妙法師に感謝状が贈られ、また東角操福井ブロック協議会長(丸岡)には重油流失災害への義援金が託された。

■ 日本海沿岸重油災害支援活動

さて、重油流出事故だが、現地メンバーの先頭に

立って活動した杉原博司(三国)のレポートに基づいて、活動を振り返ってみる。「船首部漂着の時点で三国町は現地対策本部を設置し、5漁協と連携を取り重油回収が始まった。しかし、重油の漂着が予想以上に広範囲なため回収作業は困難を極め、大量の海戦術が必要なことが分かってきた。

1月10日、福井ブロック協議会は重油漂着除去対策本部を設置し、平日50名・休日100名対策を実施した。同時に、大量のボランティア対策が急務になった。そこで、ボランティアの呼び掛けを起こしていた神戸元気村(代表・山田和尚氏)と共同で、重油対策ボランティアセンターを設置。JCメンバーは回収作業のかたわら、センターを訪ねるボランティアの対応に当たった。

徐々に、現場活動の運営体制が整っていった。その間、重油の漂着範囲は鳥取県から新潟県へと広がっていった。センター長を兼務する東角福井ブロック長は、三国町の現場を三国本部とし丹後本部、若狭本部、珠洲本部の4本部を支援する体制を構築した。

行政は混乱をきわめ、ボランティアへの対応までは手が回りかねていたと思う。その中で、センターが機能したのは神戸元気村によるボランティアのノウハウ、日本財団による活動資金、JCの機動力と秩序ある組織力、この三者のバランスがうまく生かされたからではないか。

住民生活とボランティア受け入れ

海岸では、あらかた回収を終えた。船首が漂着し



原油回収部隊(’97)

た三国町安島の海岸も、当時の惨状が嘘のように澄んだ日本海の波が打ち寄せている。長期ボランティアの宿泊のため公民館が開放されていたが、葬儀など地元民の生活に影響が出始めたので、2月15日で閉鎖された。民間企業の保養所などが提供されたが、絶対数が足りない。住民の生活を正常に戻すことと、ボランティアの受け入れという両立が難しい段階に入った。

3日間の休養

2月末、一部のマスコミが収束を報じた。だが実際には、これからが大変だったのだ。重油が岩の隙間や玉砂利や砂浜の下に階層化しているため、これまで以上に除去は複雑化し、重労働になると予想された。しかも地元住民には、かなり疲労がたまっている。『地元住民は、ボランティアが作業していると休めない』という情報が得られたため、ボランティア活動を3回休止し、3日間の休養を取った。この休養がマスコミの収束報道と重なったため、3月に入るとボランティア登録が激減してしまった。

3月末、重油回収が順調に進んだため三国本部は撤収することになり、後は現地作業場所で活動を続けることになった。

集まったボランティアは2万人以上、平均年齢は22.5歳だった」。

全国各地から集まったボランティアの活動を紹介する紙幅がないのは残念だが、支援活動の総括として、東角会長がJC PRESS 9月号に寄稿した『よみがえれ日本人、ボランティアで考えたこと』と題する問題提起を収録しておきたい(要旨)。

『よみがえれ日本人』(東角操)

「97年1月の出来事は私にとって、またJC福井ブロックにとって一生忘れられない日々の連続だった。戦後、わが国は護送船団方式で目覚ましい経済発展を遂げた。しかし、東西冷戦の終結による世界の枠組みの変化や、自由経済社会の拡大による価値観の多様化により大きな変革の時代に入った。

その中で、もはや政府・自治体は価値観変化への

対応についていけなくなってきた。あくまで均一で、公平な対策しか望めない。今回、多くの行政機関は全体の把握を行なった後、公平な対応を図ったうえで活動したため、後手後手に回る対策や救済措置のまずさに、批判を浴びることになった。

ボランティアが評価されたのは、行政の対策に比べ迅速かつ機動的な行動を取ったからだ。ボランティアは自分の思いで行動できる。一人ひとりの多様な考え方があるため、被災された方、汚染された自然に対しても多様な対応ができる。

JCの活動で特筆すべきは、JCの枠内で行動するに止まらず広く他団体と合体し、重油災害ボランティアセンターの名のもと、全国のJCはもとより各企業・団体の支援を得て活動したことである。また、行政の下請けではなく、対等の立場でコーディネートを進めたことに大きな意義があった。

われわれ（企業人）は災害をマーケットとして捉え、いかに効率よく人・もの・金・情報を動かして成果をあげるか、と考えた。更に、多くのボランティアの善意をいかに善行に変えるか。自分で考え、自己責任の行動を取る多様な価値観の人達の思いを、いかに遂げさせるかが大きなポイントだった。

災害ボランティアコーディネーターは地球益を土台に、常にバランス感覚を持ち続けて対処することが大切だと思った。そして若者には、自分の存在意義と足下の地球益を考える人が沢山いることを知った。『この海は、三国の人達だけのものではない。地球に住む人達全てのものです』と語った若者の言葉は忘れない。

国の下に県、県の下に市町村、その下に市民という主従関係で成り立つ行政システムを変えない限り、地球益を考える21世紀の主人公は生かされない。考えてみてほしい。上の人の意見や指示を待つ中央集権社会で、どれだけのことが進むのか。自分の責任を回避しているに過ぎないのではないか。主権国家日本の枠内で考えるだけでは、世界は、地球は見えてこない。よみがえれ日本人!」。

災害復旧体験をベースに、地球益を軸に市民意識の高揚を説く東角発言は、まさに地に足をつけた「小さなデモクラシー論」ではないか。説得力がある。他LOMにおいても、こういうリーダーが輩出しているであろうことを思うと、JCの底力に拍手をおくりたいのは筆者だけだろうか。

■ 福井ブロックに、環境庁長官から感謝状

9月5日、日本海沿岸重油災害におけるボランティア活動に対し環境庁長官から感謝状が贈られ、福井ブロックの東角操会長と三国町社会福祉協議会の田畑克佳事務局長に、代表として授与された。

この事故に際し、災害地は全国各地JCから沢山の救援物資や人的支援を受けた。阪神・淡路大震災の被害が残る兵庫ブロックは、いち早く人的支援に駆けつけ、国境なき奉仕団も立ち上がりから参加した。長野ブロックは住民の意識調査という地味な仕事を、東京JCは交替でトイレの清掃に当たった。京都会議に出たつもりでこっちに来た、というラストイヤーのメンバーもいた。

東角会長は、「福井ブロック協議会が受賞したというより、私達と志を同じくして活動した全国会員が頂いたと思う」とし、感謝状はJC会館に掲示した。

■ 「小デモ」精神、 合併に取り組む清水・静岡

2月27日、清水JC(風間重樹理事長)は臨時総会を開催し、住民発議制度に基づき清水・静岡両市の合併可否を検討する合併協議会の設置を市に請求する「住民発議を全体事業として実施する件」を賛成多数で可決、採択した。住民発議制度とは、平成7年度の合併特例法の改正により、有権者の50分の1の署名があれば、住民が市長に協議会設置を直接請求することを認めたものである。

両市の合併問題は30年来の懸案事項で、多くの市民団体や経済団体が取り組んできたが、今ひとつ現実感に欠けるものがあった。その間、清水JCも合

併シミュレーションを行ない報告会を開くなど努力を重ねてきた。

だが、「不毛な議論を続けるのは、両市の将来にとって大きなマイナス」と判断、今回の決議となった。その背景には第1、両市の新総合計画が遅くとも清水市2002年、静岡市2005年に始まるため、本格的な合併論議を開始すべき時期にきたとの判断。第2、市民主役の地域の自立こそ地方分権の核心、という「小さなデモクラシー」精神である。

風間理事長は「まちづくりは、そこに生きる人達が次の世代に申し送っていくものだと思う。今の利益を考えるのではなく、子供達の視点、未来の視点に立って豊かなまちとは何かを考える。そして、今できることをやる。責任をもって判断する。そういう活動をしなくてはいけない」と語る。筆者は、1969年度牛尾治朗会頭（東京）の「JC運動とは明日の黎明のために、犠牲を払う運動だ」という至言を思い出した。風間理事長の談話は続く。

「今回の住民発議では、JC内部で決議して合併賛成反対を打ち出す必要はない。まず協議会の設置を目指し、合併の賛否を市民自らが考えるのが大事なのだ、ということを一一人ひとりに話しかけて理解して頂く。JCの役割は、あくまで協議会を設置し、賛否の意見がガラス張りの中で議論できるように監視することだと思う」。

他方、静岡JCの織田高行理事長は「清水JCが民意を高めるために起こした行動なので、我々が何かを声高に言うことはない。しかし、次の世代のために残すまちづくりの重要性については認識が一致している。清水JCの署名運動と時期を同じくして、署名運動を行なう計画だ。市民一人ひとりの意思を尊重し、小さなデモクラシーの精神を生かして共に運動を進めていきたい」と語っている。

■ グランドワークトラスト使節団、イギリスへ

同じ頃、3月10～16日の旅程でグランドワークト

ラストの先進国イギリスを訪ねるミッションが出発した。西釜茂文副会頭（熊本）を団長に村岡会頭、金井宏彰専務理事（伊丹）、金光憲正理事長（福山）ら25名は、住民主導型まちづくりの実態を視察した。

一行がミッションを通じて感じたことは、「自分達のまちは自分達が責任をもち、自分達で創り上げていくんだ」という住民の心意気だった。そして報告書によれば、いまイギリス社会が執着していることとして、次の4点が指摘されていた。

①自由社会の確保・深化・洗練。市民が社会生活、つまり市民セクター、ボランティアセクターに参加することにより、民主主義の基本を実践している。

②60年代から70年代にかけて、近代化の中で人々は個性を喪失し画一化したという反省から個性尊重の重視。個性を伸ばす教育を大切にしている。

③ヘリテージ（遺産——地域の人々が自分のアイデンティティとして感じるもの）を社会全体で守る。農村的なものを保全し、それを豊かさの源泉としている。

④特筆すべきことだが、最近の日本では行なわれなくなった実験とイノベーションを繰り返し行なっている。福祉国家も実験であり、現在実施している小さな政府の実現によって民間活力を活かそうとしていることも、実験なのである。

イギリスにおける市民活動のシナリオは、個人の思いから仲間が形成され、その団体がチャリティー登録を行なうことにより公益的な団体となり、活動を拡大し、行政や企業とパートナーシップを築くことにより身近な環境改善・まちづくりを行なう、というものだ。

こうして生まれたボランティアセクターが、市民感覚からの問題の発見・提示をし、行政にはできないような、より人間的なサービスを提供して、公的なサービスの担い手ともなる。行政や企業がやりにくいことをボランティアセクターが行なうことで、自由と民主主義のための、一種の社会装置として機能しているわけだ。

このケースを勉強し、日本の文化・風土に合った形で導入することが、日本における住民主導のまちづくりを実現する一つ的手段ではないか、と報告書は結んでいる。必読文献だと思う(『海外先進地ミッション報告記』・「信頼の環がつくるまちづくり特別委員会」発行)。

■ 始動! 「穂の国森づくり」

東三河は、昔「穂の国」と呼ばれ、豊川の流域圏として運命共同体を形成していた。だが、その源である奥三河地域は過疎化や林業不振のため、林の手入れが行き届かず土地は保水力のない痩せたものになり始めていた。東三河流域の森林面積は約11万9000ヘクタール。その8割近くが杉や桧などの人工林で、木の生長に合わせて下草刈りや間伐などを定期的に行なわなければ、水源涵養能力は著しく落ち、下流域での水不足や洪水の原因にもなる。

この水の危機に対し、森を再生し水系の環境をより良く創造しようという、流域の人々の地域への心が、この運動を生み出した。この運動とは何か。

4月12日、豊橋勤労福祉会館で「穂の国森づくりの会」の設立総会が開かれた。来賓や多数の市民が見守る中、松井孝悦理事長(豊橋)は熱い思いを語った。

「JCの枠から一歩出て、企業も行政も含め地域の人々とまちづくりをしていきたい。事業計画が先にあつたのではなく、豊川流域の現状に対する活動の中から生まれたテーマだけに興味が得られたのだと思う。これからは、6LOMが同じ活動を一緒にするというのではなく、2LOM共同とか色々な活動があつて継続的に森づくりが進めばいい。現在、約100人の一般市民会員を1000人にするのが目標。そこから本格的にパートナーシップのある地域づくりが始まると思う」。

昨年、豊橋JCの提唱によって、東三河6LOM共同で始まったこの運動は、公益性が高いため立ち上がりの段階から行政や経済界、森林組合や農協、更

には市民団体や住民個人にも連携を呼び掛けた。

当初は、立場による葛藤もあったが、運命共同体としての「穂の国の再生」という意識が浸透するにつれ、市民・行政・企業のパートナーシップが出来上がってゆき、日本版グランドワークトラストのモデルとなる運動として期待されている。

■ このまち・くに・ほしの未来を誰に託す

7月26～27日、サマーコンファレンス(パシフィコ横浜)に8500名(登録)を超えるメンバーが集まった。12時10分、大ホールでメイン会議「地域主権フォーラム」が開会。この会議では、地方6団体の特別協力というJCの枠組みを越える初の試みが実現した。

村岡会頭は主催者挨拶で「このまちの、このくにの、この惑星の未来を誰に託しますか?」と問い掛けた。地方6団体からは岡崎洋神奈川県知事が挨拶。続いて、24日に収録した橋本総理への提言書謹呈のビデオが放映された。総理は「地域の声を生かしたJCの提言書をいつも楽しみにしており、今後も未来の地球ジュニアのため、提言に基づく実践活動を期待する」とメッセージを届けた。

田原総一郎氏の司会で進められたメイン・ディスカッションのテーマは「地域主権と市民意識」。まず、諸井虔地方分権推進委員長が「地方分権は、国と地方の単なる権力争いではない。住民自治は民主主義の原点」と力説。水野清行革会議事務局長は「国と地方の債務は500兆円に達し、国民一人当たり400万円にもなる。分権と行革を推進しなければ21世紀は越えられない」。高秀秀信横浜市長は「官民の役割分担をさらに進め、民の手による行政施策が是非とも必要だ」。清原慶子ルーテル学院大学教



サマコンで熱弁する村岡会頭(’97)

授は「時代は、利益や利害で動く時代からNPOなどの市民活動を通じ自己実現を求める時代が変わった」と、それぞれ発言した。

村岡会頭は「未来の日本を救うためには、公のことを全てお役所に任せるのではなく、自分達のはできるだけ自分達ですることが求められている」と、行政と市民の対等なパートナーシップに基づいた自己責任相互補完型地域社会の創造について、JCの果たす役割を主張した。

メイン会議後の記者会見には、新聞・テレビ29社が詰めかけた。JCの提言書にある全国を339市に再編する提案等について質疑が行なわれた。また水野事務局長は、行政改革をより具体的、適切に推進するため地方分権推進省(仮名)や特命大臣の設置など首相支援強化策を意図する発表があった。

2日間のサマコンは瞬く間にエンディングを迎え、村岡会頭は総評で「一人ひとりの問題解決姿勢が小さなデモクラシーの精神であり、この流れは間違いなく新しい人間社会の創造に結び付く」と、確信に満ちた挨拶をした。最後に、間宮茂横浜JC理事長に導かれJC宣言・綱領を唱和、全日程を終了した。

■ 第10回国際アカデミー、北九州市で開校

国際アカデミーが10年目を迎えた。川越宏樹88年度会頭(宮崎)が提唱した事業で、第1回は88年4月18日から1週間実施されている。内外のJCリーダーの質的低下という危機感を抱いた川越の「財政に苦しむJCIに代わって世界のリーダーを育成できるのは日本しかない」との思いが、発端だった。

外国人メンバーのほとんどは、将来自国のNOM会頭になるであろう顔触れで、国際アカデミーはJCIで高い評価を受け、グローバルな研修プログラムとして確実な地歩を占めている。川越元会頭の卓見だと思ふ。

第10回国際アカデミーは7月19～27日、世界各地のNOMより80名の代表、国内JCからは60名の

メンバーが集まった。今回は、地球環境を踏まえたリーダーシップの重要性を学ぶことになった。まず、当初の会場となった北九州市で2泊のホームステイプログラムで始まった。人・もの・まちについてグループセッションを行なうワークショップの他、黒崎祇園見物やウェルカムパーティ in 小倉城など、北九州JCは多彩な企画・設営・実行力を発揮した。JCIプログラム委員会のダニエル・ミラー(福井)によるライフプランニングセミナーも好評を博した。

22日、開講式の後、ブレン・バートレット氏による3日間のエクセレントリーダーシップセミナー。過去に5回も開講された実績あるプログラムだ。期間中は毎夜、ビールにダンスにと夜遅く(朝早く?)までフレンドシップサロンが続く。25日は、目前のスペースワールドで楽しんだ後、北九州JCシニアメンバー主催のインビテーションボール。

26日の早朝、横浜へ出発しサマコンと合流。国際アカデミーの参加者を中心に企画された小田全宏地球市民会議代表によるグローバルネットワークフォーラムに参加。地球全体に関わる環境問題を切り口に、講演とグループセッションを織り交ぜて地球市民としての意識を高揚させる狙い。

最終日は環境政策委員会との共催セミナーで、高木善之先生の地球環境セミナー「地球は今」を受講。電磁波の影響やダイオキシンの問題、オゾン層の破壊、地球温暖化、紫外線による皮膚ガンの増加など、環境への危機感をもたざるを得ない内容であった。

卒業式ではクリスピン・ディーJCI会頭と村岡会頭から卒業証書と、アカデミー卒業生だけに渡されるグローバルネットワークピンが授与された。続いて開かれたグラジュエーションボールは、寝食を共にした仲間達との別れを惜しみ、ハワイ世界会議での再会を約束し握手、抱擁、乾杯の嵐となった。

■ 北方領土問題、思いを共有し国民的運動へ

8月2～3日、根室で第28次北方領土現地視察大

会が、北海道地区道東ブロックの第23次視察と共同開催の形で実施された。本年度、北海道地区では潮日出夫会長（旭川）の「北方領土問題を道東ブロックに留めず積極的に推進する」という基本方針のもと、鈴木達裕道東ブロック会長（北見）は新たに北方領土特別室を設置し、改めて北方領土返還運動が国民的領土問題であるとの認識を確認した。

現地視察は、北海道を含む日本国内での北方領土返還運動に対する認識低下に歯止めをかける目的もあり、全国から1050名を超える登録を受けて実現した。

納沙布岬の現地式典には大矢根室市長はじめ来賓多数が出席し、新しい試みとして地元中心に小学生や市民約250名を船上に招待し、自分の目で北方四島を見る機会を提供した。

思えば昭和20年、終戦直後の8月18日、ソ連は日ソ中立条約を一方的に破棄、9月5日までの短期間に日本固有の領土である択捉・国後・色丹・歯舞の四島を不当占拠したのだった。

その歴史の事実を現地の貴重な資料により再確認し、さらに実際に北方領土の住人だった親族をもつ浜西伸二根室JC副理事長の語る、高齢化が進むなか今なお故郷の島に帰ることを夢見る人々の思いは、参加したメンバーの胸に痛切に響くものがあった。

根室JCでは「北方四島—マリノ・フリーズン」構想にも取り組んでおり、資源豊かな北方四島を領土問題以外の視点からも積極的に活用することを提言している。馬立重根室JC理事長からは「今回の大会を契機に、長年根室JCが取り組んでいる北方領土返還運動を、全国のメンバーに国民的運動として認識し、思いを共有してほしい」とのメッセージが寄せられた。これを受けて中田隆宏次年度道東ブロック会長予定者（釧路）は、「ややもすると根室JC中心の限定的な運動にとられがちな北方領土返還運動を、より広い多くのメンバーの理解を得て、継続的かつ積極的な運動にしていきたい」と語った。

■ TOYPグランプリ、小川寿美子さん

7月25日、東京ビッグサイトで97TOYP大賞授賞式が開催された。来賓を代表して小泉純一郎厚生大臣が同賞の意義と若者達の活動を称えた後、10人の受賞者が一人ずつ登壇し、活動がビデオで紹介され表彰される。

グランプリは、那覇JC推薦の小川寿美子さんで、外務大臣奨励賞を受賞。活動分野は国際医療教育。大学時代に仏文を専攻した小川さんは、ピースボートで訪れた東南アジアに関心を持ち、卒業後医学を学び直した。92年、JICAプライマリヘルスケア専門家としてラオスに派遣され、3年半滞在。地域保健向上への貢献により、ラオス政府から叙勲された。フィリピンなどでも活動。日本の国際保健医療分野で期待される人材である。

■ 元気のマグマ^{つな}環がる〈熊本全国大会〉

9月24～28日、第46回全国会員大会が熊本市で行なわれた。26日、総会の討議事項では、日本JCの提言「339市・日本再編案」が反響を呼んだとの報告を受け、JCとして市町村合併とどう向き合っていくかなど議論が展開した。

27日午後、熊本テルサ大ホールではアワードセレモニーだ。会場には500名以上の褒賞申請LOMのメンバーが駆け付け、立ち見が出るほどの盛況だ。そのクライマックス、グランプリの発表は山口JCの「アートふる山口」に（後述）。登壇した山本龍隆理事長は、「40年生きてきた中で一番幸せな時」と感謝・感激の挨拶をした。

28日は大会最終日。澄み切った秋空が広がり、パークドーム熊本には続々とメンバーが集まって来る。午前9時、開場と同時に1万2000の椅子席は埋まった。熊本JCの野々口弘基理事長は「10年の歳月をかけて実現した熊本大会から、より大きな元気をもち帰ってほしい」と、全国のメンバーに感謝の意を表した。

村岡会頭は、一年の活動を樹木に例えて語っ

た。「新人間社会の創造を打ち出した96年を幹とするならば、小さなデモクラシーをテーマに地方分権とNPOを推進した97年は、枝葉を付け大地に種子を蒔いた年であり、98年はその種子を育てる年になる」。そして、「このまちの、この国の、この惑星の未来を誰に託しますか?」と、静かに問いかけた。

村岡会頭から引き継いだプレジデンシャルリースを胸に、新田八朗98年度会頭予定者(富山)は「同世代すべての若者に、挑戦する気概と行動する勇気をもたらすJCを目指し、我々一人ひとりが社会に不可欠な存在とならなくてはならない」と、決意を語った。

式典は大詰めである。98全国大会の開催地・徳島JCに大会の鍵が手渡され、いよいよ卒業式の時を迎えた。ステージ一杯に並んだ卒業予定者を代表し、西釜副会頭の挨拶だ。JCの思い出を語り、そして「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし」と、吉田松陰の言葉を引用し、後輩達に悔いのないJC活動への檄を飛ばす。次第に涙声になる西釜副会頭につられ、感慨にこらえきれず涙を拭う卒業生の姿も……。『あの素晴らしい愛をもう一度』のサウンドが流れるなか、卒業生は退場していった。

■ アートふる山口～ 一の坂大路小路を遊ぶ

グランプリの「アートふる山口」は、地域に認められたまちおこし活動が、高く評価されたもの。事業名は『アートふる山口～一の坂大路小路を遊ぶ』。事



全国大会大懇親会役員団(熊本'97)

業目的は、地域に根差した市民手づくりの文化・芸術活動の場を設け、過去から未来へと続く文化の流れを展示やイベントを通して伝え、誇りのもてるまちづくりを目指した。

一の坂から堅小路筋にかけての民家・喫茶店・公共施設等に手づくりの展示場を設け、気軽に日本画・洋画・古美術などアートを楽しめるようにした。地域の人々から「おもてなしの温かい、心のしみるイベント」との反響があり、JCといえばアートふる、と期待されるようになった。

この事業は美術・芸術を素材にした「文化性」、高校生を主な対象にした「ひとつづくり」、草の根運動で盛り上げた「まちづくり」の3本柱で成り立っている。

最初に実施したのは96年10月。来場者は数万人を数え、展示場になった地域の住民全員は心一つにして、来場者を暖くもてなしたという。来場者は地域住民の心のこもったおもてなしに感動し、携わった地域住民スタッフは感極まり、ボランティア参加の高校生は山口の歴史を肌で感じ、故郷を誇りに思うようになった、という。

その後も事業は継続し、21世紀を迎えた今日ではJC主体の事業ではなく、NPO法人「山口まちづくりセンター」内に事務局が設置されている。

準グランプリ もとみやJC、つくしJC

準グランプリの2JCは以下の通り。もとみやJCの『新もとみや方式 映画「秋桜」製作事業』は、創立10周年に際し運動の集大成として地域の豊かな自然を舞台に郷土愛、人間愛を映像を通して表現し、21世紀のまちづくりに生かす企画。32年前に本宮方式として実施された映画製作の精神を受け継ぎ、エキストラ出演、ボランティア協力、施設・備品の提供など延べ8000名の住民参加で実施した。地域社会への問い掛けの素材として、JCだけでなく多方面での活用が期待されている。

つくしJCの事業は『国博・合併 つくし文化圏の創造』。国立博物館を地域文化のシンボルとして誘致し、市民による運営を国に提案した。さらに4市1町

の合併提案を通じて歴史的にまとまりのあるエリアを「つくし文化圏」として確立し、自然・歴史・人間の調和のとれたまちづくりを目指した。JCを中心とする市民運動の努力と情熱が国を動かし、国立博物館の誘致を実現した。

■ 世界に浸透する“もったいない”

11月16～21日、JCI世界会議がホノルルで開催された。登録人数は5200名、日本JCからは1550名の参加だった。ニール・ブレイズデル・センターで行なわれた開会式は、民族衣装をまとったハワイアン・ダンス・チームの演技などでハワイアン・ムード一色に染まった。

翌日から各種会議とセミナーが始まり、20日の第4回総会では「もったいないアワード」セレモニーが開かれた。正式プログラムに承認されて4年、「MOTTAINAI IV」の責任者・土方慶之JCI特別委員長（茨木）に、クリスピン・ディー JCI会頭より感謝の言葉が述べられた。土方委員長は「“もったいない”は、大きな可能性を秘めた運動であることを再認識した。今年は38カ国で独自の運動が展開され、そのうち20カ国がNOMの事業だった。“もったいない”という言葉は、かなり浸透したと実感する。香港では新聞記事になり、TVで取り上げられた国もある。今後とも“もったいない”精神を、よりPRしていきたい」と語った。

第5回総会では役員選挙が行なわれ、98年度JCI会頭にはペトリ・ニスカネン（フィンランド）が選出された。日本JCからは松本耕作（金沢）、西尾長幸（札幌）が初めてVPに2名同時当選となった。

アワード、日本JCかつてない快挙

アワード・セレモニーで日本JCは、かつてない快挙をあげた。6LOM、2委員会、1業種別部会が受賞し、最優秀JCIVP賞には檜畑VPが、最優秀NOM賞には日本JCが選出された。会場内の熱気は最高潮に達し、「香港、フィリピンを数の上で上回ったのは初めて。快挙ですよ、快挙!」と、木下英司

国際室長（大阪）の顔は紅潮。

日本JCサンクスパーティでは、ディー会頭、ニスカネン次年度会頭はじめJCI幹部を招き、心温まる交流が繰り広げられた。村岡会頭は、檜畑VPの受賞のお祝い、日本JCから2人のVPが選出されたことへのお礼、そして2000年札幌世界大会の開催祈願が述べられた。21日、日本JC本部団の解団式をもって、ハワイ会議は成功裡に終了した。

■ 心のスタンダードが、明日をつくる

1998年1月25日の『北日本新聞』に、「世界を舞台に—日本JC会頭活動報告」という連載コラムが始まった。第1回は「京都で緊張の所信表明」。著者は富山から初めて選出された1998年度会頭新田八朗で、毎月第4日曜掲載とある。書き出し部分を紹介する。

「一日付けで日本JC第47代会頭に就任し、一か月近くたった。本稿が掲載される25日は、一年間で最も緊張する日だ。毎年、全国から約八千人のJC会員が京都に集まる。厳寒の京都にやって来る目的は、会頭の所信表明を聞くためだ。演説は数え切れない程してきたが、あの格調高い京都国際会館大ホールで数千人の聴衆を前に、物音一つしない厳粛な空気の中で行なうスピーチは、心臓が飛び出してしまうのではないかと思えるほど緊張するものだ、と先輩から聞かされている」。

毎年、日本JCの頂点に立ち1年間の運動を統帥する新会頭は、皆この試練に挑戦するのだ。

■ 美しい心・善なる心・良なる心

1月22～25日、京都会議には延べ1万人のメンバーが集まった。今年は初めて、京都会議のスローガンが作られた。「京都は日本の心 ここから始まる『心のスタンダード』—さわやかなJC 徹底した挨拶運動」。

25日、新田会頭の所信発表が始まった。

「戦後50年、日本は世界に冠たる経済大国になった。しかし、バブル崩壊の後遺症と金融システム不

安により、日本経済は先進国で最悪の状況に直面している。しかし、より深刻なのはバブル崩壊を契機に、日本人のアイデンティティが根底から揺らいでしまったことにある。昨年は、官僚や一流企業の経営者、悲しいことに14歳の少年まで、様々な階層の人達が精神の荒廃から引き起こした事件により、私達の心は暗い雲で覆われてしまった。

コア世代は自覚を

近代日本の中で、今ほど大変革が必要な時はない。変革とは社会や他人に求めるものではなく、まず自らを変える勇気と実行力をもてるかどうかにかかると。一人ひとりが自らを見つめ直し、心の規範を、心のスタンダードを確立する必要性を強く感じる。日本人が本来もっていたにもかかわらず、急激に風化しつつある美しい心・善なる心・良なる心を思い起こし、これから約30年間、中心的な役割を果たすコア世代である我々一人ひとりの自覚において、この日本人の心を後世に残していこうではないか。

一人の強大なリーダーが号令一下、大組織を引っ張っていく時代は終わった。数多くの、新たな価値観をもつリーダーが登場する時代である。今まさに、リーダーの集合体であるJCの出番と確信する。我々一人ひとりが、心のスタンダード確立に向かって地道な努力を積み、同時に社会システム変革への様々な実践行動にチャレンジすれば、日本の夜明けは必ずやってくる。日本を覆う閉塞感に突破口を開き、清々しい朝風を吹き込もう。我々は、そんな存在になろうではないか」。

新田会頭の所信表明は、大会議場のほか大スクリーンが設置されたイベントホールでも放映された。メンバーは、水を打ったような静けさの中、心のスタンダードが明日をつくるんだと語るメッセージに聴き入った。

■ 3部作の JC 運動を継続展開

この3年間を振り返って、新田会頭はJC PRESSの新春インタビューで、こう語った。「95年は阪神・



京都会議（'98）

淡路大震災という物理的な意味だけでなく、NPO、ボランティア運動の高まりという次代を象徴する意味ある時代でした。その体験から、96年のテーマとして『新人間社会の創造』が提起された。我々はどんな社会を目指しているのか、何のために生きているのかを問い掛ける運動でした。その壮大なテーマのもと、97年は本当の民主主義、地域主権型社会の実現を目指し『小さなデモクラシー』運動を、そして98年はJCメンバー全員が意識を共有し、行動する総仕上げの年として『心のスタンダード』を提起した。

この3年間は川上から川下へという流れよりも、3つの輪が重なり合いながら大きな輪をつくっていく、とイメージした方が適切かも知れません。その大きな輪に明かりを灯し、皆が見える形で次代に手渡す。その成果が試されるのが今年だと思います」。

あの阪神・淡路大震災の国民的な復興運動の高まりから、この3部作が構想され立ち上げられてきた、という指摘である。

■ 相手を尊重してますか？

1月31日、会頭LOM訪問が愛知ブロックを皮切りに始まり、3月25日には浦安JCに姿を現わした。以下、その寸描。岡根重雄千葉ブロック会長（銚子）、堀井猛志浦安JC理事長の「心のスタンダードのスローガンのもとLOM事業に、日本JCの事業に、

一丸となって邁進していきたい」との決意表明の後、新田会頭の講演が始まった。

まず「相手を尊重していますか?」、「途中で諦めずに頑張っていますか?」という心のスタンダードの精神をアピールしながら、次第に核心に迫っていった。一人ひとりが変革と行動を実践していくことの重要性、個人・国・世界というステージで物事を考え行動することの大切さ、JC活動を通じて学んだことを実生活やコミュニティ、ビジネスの中で実践していくことの必要性を説いた。

そして、「今後、ビッグバンは金融界だけでなく、全ての業界で起こる。海外で鍛えられた人々が、どんどん日本に流入してくる。変革・チャレンジ・創造というポリシーを大切に、鋭意努力して頂きたい」と結んだ。

新田会頭は、起業家新時代を唱える会頭である。メンバーは、青年経済人としての会頭の力強いメッセージとして受け止めていた。

■ コア世代が担う世代責任

4月3～4日、神戸で日本JC出向者会議・神戸会議が開かれた。コア世代が創る新たな地球社会、「心のスタンダード」の確立を目指し、全国から集まったメンバーはメインフォーラムや委員会における議論を通じ、今すべき事を心に刻み込んだ。

メインフォーラム・パート1「コア世代の担うべき世代責任」で、新田会頭は「我々一人ひとりが心のスタンダードを確立し、意識改革を図ってシステムの変革を進めることが、コア世代に課せられた責務で

ある。一人ひとりが、この会議を通じて気づきと覚悟をLOMに持ち帰り、コア世代の中核として地域で積極的にJC運動を推進してほしい。自分はそのための勇気を与える存在になるよう努力したい」と述べ、激励した。メインフォーラムは、ばばこういち氏をコーディネーターに3人のパネリストが参加した。識者の一言を紹介する。

田中秀征元経済企画庁長官「今までのような急速な発展は、歴史上ほんの束の間の出来事だ。これからはGDPには換算できない人のために働くボランティアや、自分のために働く自給経済の見直しが必要だ。JCだからではなく、地域の中で一人ひとりとして頑張してほしい」。

高木善之ネットワーク地球村代表「成長には限界がある。価値観や意識を転換し、グリーンコンシューマーになれ。何を求めているかを見極め、自分の存在の意義を問い、未来の人達にとって必要な人間になることこそが大切だ」。

ばばこういち氏「これからは地球環境から家族のことまで、あらゆることを考えて行動しなければならない。未来とは、今のつけが回るといこと。本音と建前の中でいかに活動していくか、JCの意味も問われている」。

新田会頭「子や孫に何を残せるのか。いや、果たして孫が生まれるのか。危機感をもっている。モア&モアを改め、足るを知ることが大事だと思う。本当の豊かさ、幸せとは何か、一人ひとりが考え続けることが必要だ」。

■ 教育問題は、待ったなし!

日本列島では、憂うべき事象・事件が頻発した。相次ぐナイフ事件、幼児虐待、援助交際、いじめ、不登校、犯罪の低年齢化など、青少年を取り巻く環境は激しく揺れ動いており、大きな社会問題になってきた。この待ったなしの教育問題、とりわけ徳育について考えるため、JCシンクネット推進委員会フォーラムは「次代の教育を考える」を実施した。フォーラ



コア世代出向者全体会議 (神戸 '98)

ムは、シンクタンク『構想日本』加藤秀樹代表のコーディネートで進行した。以下、5人の専門家が指摘した論点を紹介。

弁護士・小笠原彩子氏「学歴社会による受験戦争が思春期と重なり、子供に多大な影響を与えている。学校で教育論議を行なう時間や場がなく、公教育への理念が失われている」。

弦本英一文部省大臣官房政策課長補佐「過度の受験戦争。いじめ、不登校。子供達のゆとりのなさ」と生活体験・社会体験の不足。モラルの低下。創造性の涵養」。

永井芳和読売新聞大阪本社論説委員「進学校～有名大学～一流企業・高級官僚・医師というコースを唯一の価値観とする社会の多様性のなさ」。

横井匡教育困難児指導校アンデルセン学院講師「学歴偏重。何でも横並び主義により個性の強い子や、集団について行けない子は異端・お荷物とみなされる」。

世取山洋介新潟大学教育学部助教授「不登校・いじめ等は、当たり前の人間関係が存在しないため。その背後には、いびつな競争主義が」。

置き忘れた「心の文化」

戦後50年、日本社会は経済偏重の物質文明を追い求め、心の文化を置き忘れてしまった。家族やコミュニティで支え合ってきた暮らしが、少子化・核家族化・コミュニティの欠如などライフスタイルは大きく変わり、子供を取り巻く環境も変貌した。本来、社会全体で担うべき大切な教育を学校など一部に任せ、不満ばかりを唱えてはいはしないか。まさに、JC



次代の教育を考える（'98）

メンバーは子育てエイジだ。このフォーラムは、誠にタイムリーであった。

■ 日米地球市民会議1、アメリカ3都市で開催

世界で最も重要な2国間関係といわれ、政治・経済・平和など全ての分野で地球的な影響力をもつ日本とアメリカ。その両国の様々な分野でのコア世代の人間が、共に知恵を出し合って21世紀の地球・世界の在り方について話し合い、世界に発信する目的で計画されたのが「日米地球市民会議」である。

年初からアメリカJCの協力により全米各地で、日本の魅力、日米が協力して取り組むべきテーマ等々についてアンケート調査を実施し、問題点を抽出してきた。むろん日本でも同じ調査を進め、その結果をベースに4月17～22日、「日米地球市民会議パート1」をサンノゼ、ワシントンDC、ヒューストンの3都市で開催した。この「日米コア世代対話集会」への日本側参加者は、新田会頭を団長に約70名であった。

更に、その成果を踏まえヒューストンの名門・ライス大学ハマンホールを会場に200人を超える聴衆が参加して、メインシンポジウムを実施した。基調講演は元駐日大使のマイケル・H・アマコスト氏（ブルッキングス研究所理事長）で、「21世紀の日米関係は、問題点を抱えながらも世界をリードする重要な2国間関係だ」との認識を明らかにし、「両国のコア世代であるJCメンバーは責任を自覚し、新しい日米関係の主演となるべきだ」と提案した。

続いて、上島一泰グローバルネットワーク室長（大阪）とセス・サルキン氏（パシフィック社長）のコーディネートでパネルディスカッションが、日米のJC世代6名（弁護士、ホワイトハウス、NASA研究員、企業人等）をパネリストに進められた。日米相互の魅力、21世紀の日米関係、コア世代の役割、国益を越えた地球益への貢献などをテーマに議論し、最後に日米両JCの取り組みを盛り込んだ「ヒューストン宣言」を取りまとめた。

新田八朗日本JC会頭

「21世紀における日米両国は、地球全体の利益を考えて世界をリードしていく使命がある。その実現のため、コア世代として市民の代表として、枠にとらわれず様々な声を集めて、新しいパートナーシップを築いていきたい」。

エリック・サイデルUSJC会頭

「日米両国JCが互いに長く手を携えていくという素晴らしい夢が、今、現実のものとなった」。

すると、参加者の一人、在米40年になる地球物理学者の松本利松氏（テキサス大学教授、第1次南極観測隊員）が、新田に寄って来て嬉しそうに話しかけた。「日本の若者がアメリカに乗り込み、堂々と持論を展開し対等に議論する姿を見て、本当に心強く思う」。この72歳の先輩の言葉によって新田は、自分達がやってきたことが間違っていなかったと確信し、7月に横浜で開催するパート2に向け、ヒューストン宣言をより具体化していくことを心に誓った。

■ サマコン、地球市民フォーラム

立ち上がれ！市民の「歴史」が始まる!! ~「心のスタンダード」を胸に いま、行動のとき!~

7月25～26日、「サマコンファレンス98地球市民フォーラム」がパシフィコ横浜で開催された。今回は、JCメンバー9240名に加え3000名を超える市民が参加し、共に市民主体の社会をつくるビジョン・行動を語り合い、確認し合い、共有することによる



サマコン会頭選挙所信演説会（'98）

新たな共創の第一歩を踏み出した。

大ホールでは、メイン会議第1部「一人ひとりが創る地球市民社会」が開催された。多くのJCメンバーと市民の参加で、急遽2階席まで開放する盛況。基調講演の堺屋太一氏は「“人・情報・金・もの”の循環で真の地球市民社会の実現を」と題するテーマで、社会システム変革の必要性と、その方向を明確に指し示し、参加者の意識の変革を促した。

第2部では、日米地球市民会議パート2、市民が主体のコミュニティづくりセミナー、新しい地球市民意識セミナー、心のスタンダード・セミナー等が開講した。

日米地球市民会議2

4月、ヒューストンで開催されたパート1に続き、パート2は「市民から創造する日米交流」のタイトルで実施された。国際政治学者舩添要一氏をコーディネーターに7名（公務員、弁護士、企業家、JC等）のパネリストにより、日米関係の今後について議論した。

まず、民間レベルの政策提言の必要性と、その核として両国JCの重要性が確認された。グローバルな問題に取り組む人材育成に関しては日米教育制度の違いの調整、留学経験を生かす場を提供し一人でも多くの留学経験者を増やすよう応援する。民間レベルの提言を実現するには、NPOなどを更に活性化させねばならない。法的基盤を整備し、組織同士の情報交換や交流がスムーズに流れ、世界的にも広がる必要がある。

こうした交流が、より価値あるものとなるためには両国JCが日米を繋ぐコアとなり、その機能を十分に発揮して行動するシンクタンクとなるべきだ。多くのNPOの意見を反映できる機関として、組織形態の整備を早急に進めよう、との意見も出された。

最後に、新田会頭とサイデル会頭が「日米パートナーシップ21宣言」を発表し、日米関係の更なる発展が約束された。

初のミッドナイトセッション

中華街では、サマコン初の「ミッドナイトセッション

ン98」が開かれた。日本JC役員とメンバーが膝を交えて語り合い、今後の行動に向け新たな勇気を生み出そう、という企画だ。会場は立錐の余地もなく、看板どおりのミッドナイトまで熱気あふれるトークセッションとなった。

■ 20年ぶりの会頭選挙、投票率98%!

7月26日、サマコン終了後の国立国際会議場大ホールは、99年度会頭選挙会場に変わった。立候補は副会頭の松山政司（福岡）と佐藤章治（仙台）。松山の意見書タイトルは「日本は動く。限らない明日を実践するために、限りある今日を行動する」、佐藤は「一しあわせのムーブメント『感動』・『情報』・『行動』を共有化しパートナーシップを発揮しよう」とある。

会頭選挙は、1978年度の井奥貞雄（松戸）と佐藤栄佐久（郡山）以来、実に20年ぶりだ。所信演説会と意見交換会が始まる午後1時30分を待たず、会場には続々と投票人の理事長はじめオブザーバーが詰めかけ、3階席まで満席となった。

河内誠選挙管理委員長（京都）は「全メンバーにとって初の会頭選挙だが、直接、候補者の意見を聞き、公平公明に会頭を選ぶのは素晴らしい。投票人はフェアな気持ちで真剣に耳を傾け、判断してほしい」と挨拶。それぞれ20分の所信演説、その後、質問1分・回答2分の規定で、同じ質問に2人が答える意見交換会が行なわれた。

投票は約1時間15分で終わり、即日開票の結果、有効投票数3333票、松山候補1813票・佐藤候補1520票で、松山候補が293票の差で当選が確定した。最前列の席から立ち上がった松山候補は、会場に向かって深々と一礼。即座に佐藤候補が歩み寄り、抱き合うように互いの健闘を称え合った。

河内委員長が松山候補をステージに呼び上げ、認定証を授与。ここに99年度日本JC会頭予定者が確定した。続いて新田会頭が登壇、「松ちゃん!、章ちゃん!」と2人の登壇を促し、「1人の当選者を選

ばなければならなかったが、JCらしく爽やかに堂々と戦った2人の、どちらもが勝者なのだ」と両候補を称賛し、「20年ぶりの選挙が、JCの在り方を問い直す大きな機会になった」と、その意義を改めて訴え、会場から大きな拍手が沸き起こった。

松山候補は「この選挙で得た全国JCメンバーの想いをしっかりと受け止め、753のLOMと手を取り合い、素晴らしい日本をつくっていききたい」と、力強く受託演説を行ない、このJCの一番長い日は、その幕を下ろした。

当時を回顧して新田会頭は語る。「会頭として調整は可能だったが、敢えてしなかった。全国の理事長はじめ多くのメンバーと意見交換しているうちに、どうも日本JCが一人歩きし、各地のJCから遊離しつつあるのではないか、という危機感をもった。原因はいくつか考えられるが、一つには会頭を選ぶための理事長の投票権が長く行使されていないことにあったと思う。本来、次代の担い手を自負する団体のトップは選挙で正々堂々と決めるべきだ、という気持ちもあった」。

■ 地球市民の日、思いやりトーク

日本JCは「心のスタンダード」実践の場として8月を地球市民月間、8月8日を地球市民の日に設定し、地球市民意識を育むため全国的規模で運動を推進した。当日、各地のLOMとコア世代の仲間達の協力のもと、学生や親子、高齢者や障害者の誰もが気軽に参加できる事業に、全国約500の地域で約10万人が参加した。

人と人、人と地域の繋がりを

東京では、お台場の東京ビッグサイトで記念式典を挙げる。河内長野の幼稚園児から中学生まで、可愛らしくも凛々しい総勢50人以上で編成された威勢のいい錦溪太鼓の響きで開幕した。三藤治喜地球市民づくり室長（津）が「行動を通じ思いやりと優しさを育みたい」と開会挨拶を述べ、新田会頭は「地球市民の日を思いやりのある人と人との繋がり、人と地域

との繋がりをつくるきっかけにしたい」と語った。

メインイベント「地球市民の日、思いやりトーク」では、わらべうたと音楽療法によるまちづくり活動で93TOYP大賞とサントリー地域文化賞を受賞した、奈良市音声館長荒井敦子さんが登場。歌による障害者や高齢者の心の癒しや、子供の心に文化を伝えるわらべうたの大切さなどについて新田会頭と意見交換した。荒井さんは「歌うまちには福来たる」と、トークに交えてピアノ伴奏で美しい歌声を披露され、会場は優しく暖い雰囲気に包まれていった。

プログラムは「98TOYP大賞」授賞式を挟み、全国10地区のパートナーシップ事業の会場と東京会場がテレビ会議システムで結ばれた。釧路の「98エコプラント」、秋田「子供達とカヌー体験」、駒ヶ根「長野県国際協力キャンペーン・駒ヶ根青年海外協力隊開所20年の集い」、千葉「地球市民・環境アクション」、伊勢「伊勢っこ劇場」、守口「ピースリーダー守口の育成」「キッズネットもりぐち」、津山「わんぱくYOKOHACHI共和国」、徳島「広げようおもしろいの輪」、小郡「ボランティアスタッフの育成」、沖縄「98クリーンデー in おきなわ」。達成感と更なる意欲が感じられる「地球市民の日」であった。

松山政司副会頭は「飢えや病気で、今も世界中では1日に4万人もの子供が命をなくしている。こんな状況をなくすためにも、毎日が地球市民の日となるよう努力しよう」と締め言葉述べた。式典は、荒井さんのリードで『翼をください』を全員、心を一つにして合唱し、幕を閉じた。

TOYPグランプリ、半田好男氏

98TOYP大賞は、全国JCから寄せられた48名のエントリーから10名の若者達が受賞。グランプリ&衆議院議長奨励賞は、駒ヶ根JC推薦の半田好男さんが受賞した。栃木県立高校の教師で、駒ヶ根青年海外協力隊訓練所を経て、理数科教師とし

てネパールのトカルパ村に赴任。親の教育への無理解から不登校の子供が多い点に注目、大人のための識字教室を開校するなど、教育状況の改善に取り組んだ。

識字教室は女性達の自立意識を芽生えさせ、縫製教室など職業訓練活動にまで発展。半田さんは活動を継続的にするため、トカルパ村周辺に「ディーヨフォーラム」、長野県伊南地域に「トカルパのひかり」と2つのNGOを結成。「交流は一方通行や支援だけではなく、双方が学び合っていくことが大切」との理念で、日本からはミシン技術指導や中学生の訪問、ネパールからは先生や生徒の来日など交流の橋渡し役として活躍している。

■ 訪中ミッション、更なる発展を

6月29日、新田会頭を団長に岡田元会頭を名誉団長とする訪中ミッション97名が北京を訪問した。日中友好の会、第10回中国技術研修生選考会も同日程で実施された。巴音朝中華全国人民常務委員との首脳会談では、中青聯に過去14年の友情を感謝すると共に、今後の更なる発展を約束した。

新田会頭、北京外大で対話

30日、初の試みとして北京外国語大学を訪問。前日には、クリントン大統領が北京大学で講演していた。新田会頭は「戦後の日本の歩み」のテーマで講演、その後ディスカッションに入った。熱心な、質問



地球市民の日記念行事（'98）

が飛んで来た。「クリントン大統領は中国の後、日本に寄らずに帰るが、無視されたと思わないか」、「日本映画『プライド』は東條元首相を美化していないか」、「男女の雇用機会が公平でないのは何故か」……と。

真剣な学生達に、会頭も一生懸命に応じた。将来、中国の対日外交の担い手になるであろう学生達との対話は、実り多いものがあった。

当時を振り返って新田は語る。「非常に有意義な試みだった。それにしても、天安門事件から10年足らずで、20歳の学生から日本円の先行きに強い懸念を感じる、などと言われようと誰が想像しただろうか。中国はこの10年で、一定の制約の中ではあるが大変革を成し遂げ、朱鎔基首相は更なる国家改造に取り組んでいる。それに引き換え、わが国はこの10年、いったい何をしてきたのか」。厳しい指摘だが、納得せざるを得ない。

■ 技術研修生受け入れ10年

中国技術研修生受け入れ事業は、10周年を迎えた。今年の選考には全国から600名以上がエントリーし、中青聯の厳正な審査に残った100名が北京に集まり、受入企業が直接面接し29名が選ばれた。新田会頭、岡田会長ら本部団役員は共産党の羌春伝副委員長と要人会見を行ない、日本JCの研修生受入事業に対する感謝の言葉を頂き、更なる事業の発展を約した。その後、釣魚台迎賓館特別室で日本JC主催の答礼宴を開き、互いの友情を確認し合った。

■ 北方領土返還、地球益創造の視点で

8月1～2日、根室で第29次北方領土返還運動現地大会が開かれた。道東LOM主管、外務省・総務庁などの協賛を受けた今大会は、全国から約1400名のメンバーに加え一般市民も約350名が参集。

初日、記者会見で新田会頭は「JCとしては確かな歴史観と心のスタンダードを身に付け、それぞれの国益を越えた地球益の創造という視点に立ち、同運動を地球市民運動として捉え、問題解決の日まで返還

運動を継続する」との決意を表明した。

2日、式典の前に根室JCは8月早朝例会を開催。目前3.7キロに北方領土・歯舞を眺望する納沙布岬で、新田会頭は「我々が願う方向に潮は向いている」と力強く挨拶。大矢快治根室市長は「2000年に向けてJCメンバーほか国民の世論と熱い思いが、更に必要である」と挨拶した。

昨年10月のクラスノヤルスク会談を受け、2000年の日ロ平和条約締結に向けて正念場にさしかかった、とも言える返還運動だ。新田会頭名により「JCでは問題解決に向けて返還後の四島の在り方を模索し、その解決方策が国際平和への貢献の一助となることを目指す」とする決議文を採択し、閉会した。

■ 心のスタンダードを胸に 〈徳島全国大会〉

9月23～27日、徳島市で第47回全国大会である。登録者数は、予想を越える1万5000人以上となった。大会式典は、隣接の2会場を生かす初の試みで行なわれた。「アスティとくしま」を1998年度の会場として会頭挨拶やプレジデンシャルリースの伝達に、「徳島文理大学」を1999年度の会場として次年度予定者のスピーチや次年度開催地への鍵伝達など、と両会場を使い分けて進行した。この模様はインターネットを通じ、ライブの音声&映像情報として世界に同時発信した。2会場を使う運営は、今後の地方都市での大会開催に有効な手法となる可能性を示唆した。

65年の横浜大会以来、全国大会でお言葉を頂いている常陸宮様・華子様をご臨席になり「JCが真の地球市民として、世界平和に貢献することを期待する」とのお言葉を賜った。引き続き両殿下は、今年から式典で実施することになった褒賞アワードセレモニーや、会頭挨拶、プレジデンシャルリースの伝達などをご覧になられ、ご理解を深められた。

リーダーの心構え

新田会頭は、社会を変革する視点として「中央か

ら地方へ・官から民へ・男から女へ」と3つのキーワードを挙げ、「JCメンバーは勇気をもって『新人間社会の創造』に取り組んでいこう」と語りかけた。そして「何度も投げかけられた、心のスタンダードとは何か、という問いの答えとして、心のスタンダードとはリーダーの心構えである。リーダーとは一握りの人のことではなく、状況やテーマに応じて私達一人ひとりがリーダーにならなくてはならない。6万人のJCメンバー一人ひとりがヒーローであり、21世紀のリーダーとして行動してほしい。胸いっぱい愛と、心のスタンダードにのせて、勇気を君に……」と締め括った。期せずしてスタンディングオベーションとなり、様々な思いの拍手が鳴り止まなかった。

徳島大会の新機軸

松山次年度会頭予定者にプレジデンシャルリースの引き継ぎが行なわれた。そこから、徳島大会の新機軸が始まる。松山予定者は走って文理大会場に駆けつけ、次年度理事長予定者達を前に、息切れを見せることもなく第一声を放つ。「青年の前向きな信念と積極的な行動が、必ずや日本の明日を変えていく。JCが、その一石を投じよう」。新田会頭ら役員も文理大会場に移動し、「大会の鍵」が山形JCの鈴木隆男理事長に伝達された。

その一部始終をスクリーンで見守っていたアスティ会場のステージには、元チューリップの財津和夫が登場、『青春の影』・『サボテンの花』と、まさに卒業生にとっては青春の歌が演奏される。余韻の中を卒業生が登場、ステージを埋め尽くした卒業生を代表し金井宏彰副会頭（伊丹）が挨拶。日頃クールな工学博士の金井が感涙にむせびながらJCへの尽きせぬ思いを語り、後輩に更なる前進を託した。最後のメモリアルソングは、チューリップの『心の旅』。感動渦巻くまま、徳島大会の幕は閉じた。

■ アワード、グランプリは矢板 JC

アワードセレモニーは、全国大会の記念式典で行なわれた。エントリー 61事業から選考の結果、準

グランプリは北見、湯沢が獲得した。北見JC(金田泰治理事長)の事業名は「P3(ピーキューブ)(プリティ・ポケット・パーク)」。都市計画法にある公園引当地区を活用し、市民が企画に参画することにより、個性ある快適で地域の人々の心のこもった空間を作り上げよう、という運動。1996年に2カ所の手づくり公園を完成。それが、年2カ所の公園を整備する契機となった。参加した市民は約300名、市民意識は高まり、まちづくり運動に積極的に参加するようになった。

湯沢JC(和賀幸雄理事長)は「FMゆーとぴあin七夕」。1996年に身近な情報ツールとして「コミュニティFM」の常設を提言したのを受け、まず「イベントFM」の開局を計画。JCが募集した市民200名がスタッフとなり、倉庫とゴルフ練習所を借りて本部と収録用スタジオに改造、8月の七夕絵灯籠祭に市内ホテル前にサテライトスタジオを設け、オリジナル番組やCM、迷子情報などを放送した。FM局常設への社会的責任の大きさを自覚している。

高原山トライアスロンin矢板

グランプリの矢板JC(和田安司理事長)の事業名は「高原山トライアスロンin矢板」。日光国立公園内の高原山、全国育樹祭会場の県民の森、日本名水百選の尚仁沢など、矢板は自然の宝庫である。海のない地域だが、あえて本格的なトライアスロンを実施することにより、全国から集まる参加者や観客に矢板周辺をPRすると共に、市民にも「わがまちの良さ」を認識してもらい、「わがまちを愛する心」を抱いてもらおうと企画した。同時に、大会の企画運営を通



全国大会徳島('98)

じて、各種団体や地域市民との新たなネットワークの構築ができる、とも考えた。

全国からトライアスリートを募集。スイム1.5キロ、バイク40キロ、ラン10キロ、合計51.5キロのオリンピックスタンダードコースを市内に設定し、競技を行なう。コース内には寺山ダム、りんご園、城の湯温泉等の名所が点在している。レースの後、りんごジュース、矢板牛のバーベキュー等、地域の名産を使ったパーティーを開催。矢板を広く全国にPRできる名物大会の開催を目指した。本大会は、手づくりの運営と地域に根差したハートフルな雰囲気がポイントだ。これを継承していくことが事業の継続性を高め、地域のネットワークを強化し、次の世代に「素敵なわがまち」を引き継ぐことになるものと確信している。

■ 2000年世界会議、札幌に決定!

11月15～20日、建国100周年のフィリピンは首都マニラで、第53回JCI世界会議だ。世界100カ国から約4000人、日本からは1550人が参加した。日本JCにとっては、目標の多い世界会議だった。

まず2000年世界会議の札幌誘致。札幌JCのメンバーは揃いのハッピー姿で会場入り、マスコットの「雪だるま君」も駆けつけて、「SAPPORO」を強力にアピール。総会ではメンバーが勇壮な踊りを披露し、札幌のエネルギーを印象づける。吉野重幸理事長が開催地としての自信を語り、ハッピー姿の新田会頭は日本JCあげて札幌を支援する、と力強いスピーチ。圧倒的な得票数で札幌が選ばれた。

更に、1999年度JCI副会頭に立候補した3人は全員当選。常任副会頭には西尾長幸(札幌)、副会頭に藤沢太郎(倉敷)と五十嵐信(山形)が選ばれた。日本から3人の副会頭を出すのは史上初の快挙だ。1999年度JCI会頭には、韓国のヨン・スク・チョイが選出された。最重点テーマは「未来への創造」である。

JCIアワードでは6LOM、1業種別部会、2個人が受賞。新田会頭はニスカネン会頭より「全エリア会



JCI世界会議 札幌に決定 (マニラ '98)

議参加」の表彰を受けた。

■ チュニジアでの、もったいない問答

新田会頭は『富山新聞』の連載コラム「八朗が行く -日本JC会頭日誌」の最終回(12月21日)を、次の文章で締め括った。

「通常は、世界会議が会頭として最後の海外活動になるが、今年はもう一つ残されていた。チュニジアJCの全国大会である。この国では、『MOTTAINAI』運動が非常に盛んだ。メルキ会頭からは是非、メンバーを励ましてやってほしいと依頼があり、行くことにした。

本当にメンバーの意識は高く、講演の後は質問攻めにあった。遠いチュニジアで、全く違う民族が『もったいない』という言葉をごく自然に使うのを聞いて、感慨深かった。環境問題が深刻化する今日、日本では死語となりつつある『もったいない』が、海外で生き残っていくのかもしれない」。

第16章 個と公の調和を求めて

1999-2001

■ 戦後最悪の不況に直面

絶頂の80年代、転落の90年代——。その90年代も最後の年を迎えた。昨98年10月9日、株式市場は12,879.97をつけるなど、戦後最悪の不況が日本列島を直撃していた。10月から12月にかけて、1999年度会頭予定者松山政司(福岡)は地区対話集会で全国を飛び回った。現地の声は「深刻な不況でJCどころじゃない」、「会員数が減少している」、「倒産も出始めた」など状況は深刻化していた。金融機関の「貸し渋り」は企業活動を阻害し、まさに経済・産業界は厳冬の季節だった。

この状況は正副会頭会議で報告され、直ちに「全国会員に対する不況対策緊急アンケート1」の実施(12/16~1/15)が決まった。事業予算は、既にゼロ。手弁当で、6036名の生の声を集めることになった。

■ 貸し渋り緊急対策など、緊急提言

1999年1月21日早朝、京都は粉雪が舞った。松山会頭はじめ役員団は、会頭記者懇談会で新聞・テレビなどマスコミ13社に、本年度の活動方針を説明。特に、アンケート調査に基づく「不況対策緊急提言」に質問が続出した。

京都会議3日目の23日、政治経済・教育・行政(地方分権)の3部構成によるメインフォーラムの開始に先立ち、田守順副会頭(帯広)が「不況対策緊急提言」を発表した。提言は、同フォーラムの講師である野中広務官房長官、樋口廣太郎経済戦略会議議長に手渡され、両氏はそれぞれ閣議、戦略会議で討議すると確約した。提言は次の10項目。

●政府への緊急提言=①保証協会の特別保証制度を悪用した資金回収に対する監視強化。②中小企業融資を中心としている信用金庫への資本注入実施。③中小・中堅企業向けの直接金融市場(株式・債券市場)の育成。④BIS基準8%の見直し。

●銀行への緊急提言=⑤バブル期の銀行役員の総退陣。⑥「銀行取引約定書」など、貸し手である銀

行の立場を利用した専横的な取引慣行の見直し。⑦海外業務取扱い銀行の絞り込み。

●JCからの緊急発信=⑧中小企業の銀行離れに対する警告。⑨「銀行サポーター運動(仮称)」の提唱。⑩貸し渋り銀行ワースト5の発表。

提言は、「貸し渋り銀行ワースト5」の記事を中心に朝日、産経の全国紙はじめ25紙で報道された。

戦後最悪の不況、いかに乗り切るか

フォーラム第1部のテーマは、ずばり「戦後最悪の不況をどう乗り越え、日本経済が元気を取り戻すにはどうすればいいのか」だ。

野中官房長官は「経済における国家存亡の危機にあり、金融機関の認識不足を糺す努力を続ける必要がある。また、日本経済の基盤を支えているのは中小企業であり、地域においてJCの若い力で元気を注いでほしい」と要請。

樋口議長は「G7の中で開業率が廃業率を下回っているのは日本だけ。これでは経済が伸びるわけではない。最大の問題だ。他国では50歳を過ぎても積極的に起業しており、40歳以下のJCにできないわけがない。逆境こそチャンス」と激励された。

■ 日本は動く、その小さな勇気から

24日、松山会頭の所信表明である。

「私は重大な決断をしようとする時、鹿児島島の知覧特攻平和館に行く。特攻隊員の御霊を祭り、遺品が集められている。平和は数多くの、かけがえのない青春の上に築かれていることを忘れ、自分の利害だけで権利ばかり主張し、責任を果たさなくなっていることを恥じなくてはならない。日本のために、誰かがでなく、自ら動き出さなければならない。

昨年12月、下関市吉田町に高杉晋作が眠る東行庵を訪ねた。高杉は長州藩のエネルギーを日本の未来のため倒幕にかけようと、たった一人で兵を挙げ、僅か80名で2000名もの相手に戦いを挑み快進撃を見せた。研ぎ澄まされた感性で時代を的確に読み、今が勝負と思えば身命を投げ打って動く。私は、高

杉のこんな所に強烈に惹かれる。

特攻隊や高杉晋作の話で、玉砕精神を美化しようとする気持ちは全くない。お伝えしたいのは心意気と行動だ。今、JCは必ず動くべき時、私はそう考え、そう信じている。高杉の墓前に手を合わせ、会頭として一年間、みずから動き必死で頑張ることを誓ってきた。

たった一人きりだった高杉に比べ、私には全国に6万人もの仲間がいる。100名を超す国会議員、1900名を超す地方議員、そして多くの首長を輩出しているJC、全国約35,000の小・中学校のPTAを通じて教育にかかわっているJC、JCIを通じて100を超える国と地域、30数万というネットワーク、NPOの草分けとも言えるJC、そして何と言っても若いJC、こんなJCが動き始めれば地域は、日本は、時代は動かないはずはない。

そんな思いを伝えていくことが、私の会頭としての役目だ。だから、私は動く。そのちょっとした思い切りから、その小さな勇気から、私達の地域は、日本は必ず動く」。

■ 動く松山会頭、北から南へ

1月30～31日、動く松山会頭の公式訪問が始まった。まず、日本で一番早く太陽が昇る地域、北海道は中川郡幕別町で開催された道東ブロックの「ウィンターコンファレンス in 十勝」だ。山本英明道東ブロック会長（帯広）、佐直範繁帯広理事長はじめ多数のメンバーが集まった。会頭は「自らをコア世代



松山会頭公式訪問（'98）

と呼ぶ我々が、本気で動けば日本は必ず変わる。今のJCは、まだまだ本気になっていない」と、行動を喚起した。

2月10日、九州は田川市福寿会館に姿を現わす。福岡ブロック協議会に併せての会頭訪問だ。由地俊広九州地区担当常任理事（日南）、池上秀一福岡ブロック会長（北九州）はじめブロック内21LOMから約300名の出席だ。

会頭は、青年が本気で動かなければ世の中は決して変化しないという、自身の体験を交えながらアピールした。懇親会では一人ひとりと握手を交わし、親交を深めた。

自ら犠牲になる気持ちで

西座聖樹理事長（田川）は「小さなまちでは、動きだすことに様々な障害がある。しかし、自らが率先してやるという勇気をもたなければ、まちを変えていくことはできない。今日はLOMメンバーのほとんどが参加しており、会頭の話聞いて自分だけが生き延びようとするのではなく、自分から犠牲になるという気持ちをもってくれたと思う。その思いを胸に一年間、動いていきたい」と語った。

■ 「ダイオキシン測定問題」で、緊急提言

3月4日、松山会頭は埼玉県庁に土屋義彦知事を訪ね、ダイオキシン測定問題等について会談した。問題は「所沢市産の野菜から高い濃度のダイオキシンが検出された」とのテレビ報道を発火点に、同市産の野菜が大幅に下落したことから始った。後に誤

報と判明したが、所沢産野菜の販売中止という事態に発展した2月11日、冷たい雪が降りしきる中を所沢JCのメンバーは「野菜の不買をしても、何の問題解決にもならない。日本のゴミが減らない限り、ダイオキシン問題の本当の解決にはならない」と、所沢駅前でチラシ配付とハウレンソウの無料配布をし



ダイオキシン問題（'99）

て問題提起を行なった。3月1日、隣接の飯能JCと共に飯能駅前と高麗駅前でも実施した。

5日間で調査、緊急提言へ！

報告を受けた日本JCは、ダイオキシンの問題は所沢だけの問題ではないと判断し、全国750LOMのネットワークを生かし2月24日から3月1日まで、各地の大規模ごみ処理場の操業形態やダイオキシン等の数値の情報開示の実態などについて「所沢産野菜のダイオキシン測定問題に関する緊急アンケート」を実施し、それに基づく緊急提言を発表した。

なんと、5日間という短時日に全国449の市町村で実態調査を完了し、「緊急提言（対政府・地域行政・市民・報道機関）」、並びに「JCからの緊急発信」を発表したのだ。まさに、「動く」と言うべきか。

提言を記述する紙幅はないが、JCからの緊急発信を紹介しておく。「全国のメンバー6万社は、それぞれの分野で環境問題解決に関わる新商品開発を行なう。日本JCは全国750の地域で、子供達だけでなく大人の啓蒙を含め環境教育運動を進めていく。JCIのネットワークを使い、アジア地域の環境観測ネットワークを設立する」。JCは政府、地域行政、市民、報道機関に注文するだけでなく、自分達も汗をかく行動計画の発信を忘れなかった。アジアでのネットワーク設立など、スケールの大きい事業も構想されている。

■ 土屋知事、JCの取り組みを評価

土屋知事との会談だが、松山会頭は「ダイオキシ

ン問題は特別の地域で起こっているのではない。地球のあちこちで悲鳴を上げている。この所沢での小さな動きを、やがて全国に、そして地球全体に広げて問題解決に努力したい」と述べたのに対し、土屋知事はJCのダイオキシン問題への取り組みを高く評価し、1996年度から実施している埼玉県独自のダイオキシン問題の取り組みの概要や、今回の問題に対する県の対応について、説明された。

横山正所沢JC理事長は土屋知事に、県のダイオキシン対策費の一助にと、10万円を手渡した。先の所沢駅前でハウレンソウ1600束を無料配付した際、市民から寄せられた募金4万4534円に、県内のJCメンバーが上乘せしたものであった。

■ 追加景気対策、 税制改革緊急提言を連打

5月20日、年初の「不況対策緊急アンケート1」に続き、「同アンケート2」を実施し、政府に対する「追加景気対策」と「経済再生のための税制改革」の緊急提言をまとめ、松山会頭から小淵首相に手渡した。今回の提言はメンバー2万8399名の声を集計したもので、翌21日に記者会見で発表した。

更に6月5日、経団連会館において「日本を動かせ 不況対策緊急討論会」と題する円卓会議を開催。堺屋太一経済企画庁長官の基調講演に続き、有力政財界人、マスコミ関係者らと共に熱い議論を交わし、緊急提言を強くアピールした。読売、産経、日経はじめ全国各紙、並びにフジテレビで報道された。提言は、以下の通り。

●「追加景気対策に関する緊急提言（本年度）」＝
①5兆円規模の情報インフラ中心型の公共事業投資の追加。②10兆円の保証協会の特別保証枠の追加（審査基準の強化）。

●「経済再生のための税制改革緊急提言（3年後より実施）」＝①所得税の最高税率を40%に引き下げ。②所得税の最低課税限度額を年収200万円に引き下げ。③法人税の実効税率を40%に引き下げ。④相

統税の最高税率を40%に引き下げ(事業用地に関する評価は農地なみに引き下げ)。⑤4年後には所得税の最高税率、法人税の実効税率、相続税の最高税率を、それぞれ30%に引き下げ。⑥5年後には所得税の最高税率、法人税の実効税率、相続税の最高税率を、それぞれ20%に引き下げ。⑦財源として消費税の段階的引き上げ(最終的に10%)と遊休地の固定資産税引き上げ。

中小企業国会に向け緊急提言

緊急提言は、秋の臨時国会(中小企業国会)に向け各党の政策責任者に提出。11月4日には松山会頭、田守副会頭らが自民党本部に亀井静香政調会長を訪ねた。亀井政調会長は、「これだけ全国の中小企業経営者の生の声を集めたアンケートはこれまでなかった」と述べ、改めて会頭と突っ込んだ対話をしたいと希望され、後日、実現の運びとなり『We Believe』11月号に掲載された(以下、抜粋)。

亀井 提言は、しっかり拝見した。法人税の実効税率と所得税の最高税率引き下げのシミュレーションは、歳入・歳出のバランスは問題ないんじゃないか。相続税の廃止は、過重負担のため事業承継できないとすれば、思い切った改革に着手する必要がある。

それから、お聞きしたいのだが、アンケートに答えた約8割が規制改革に賛成というが、ここ10年くらい規制緩和と称して弱者を強者から守る、小を大から守る、そういうものまで嵐にさらしてしまった。JCで対象になる業種の方は本当に困らないのか、業種別部会が39あるそうだが、業種ごとに規制改革に対するご意見を頂けると非常に参考になる。

松山 メンバーが規制改革を前向きに捉えているのは、起業に対する意欲と考える。確かに、規制改革を正しく進めていくためにも、業種別部会を有する組織として、具体的意見を取りまとめてご報告させて頂く。

亀井 期待している。中心市街地の活性化についても提言されているが、本当に今、全国の商店街は悲鳴をあげている。決して、スーパーが悪いとは言わな

いが、効率だけの世界が果たして人間にとって幸せなんだろうか。JCの皆さんには、どうすれば商店街を活性化できるのか、全国からの声を具体的に聞かせてほしい。皆さんは、儲かればいいという発想ではなく、地域社会に対して責任をもつ、という意識をもっておられる。それを大事にして、祭りなど地域の伝統文化の担い手として活躍してほしい。いつか、自分の商売に返ってくるんじゃないか。

この対談で、改めて亀井政調会長のJCへの評価・期待が高いことを確認させられた。

■「心の教育」と取り組む

連日のように、青少年の犯罪が報道されている。不登校、いじめの問題、学級崩壊などに関連し学校教育の在り方も問われている。この状況下、日本JCは1999年度の最重要テーマの一つに「心の教育」を取り上げた。まさに、必須のテーマだ。「心の教育」創造実践会議の完賀浩光議長(土浦)は「教育は、必ず変えることができる。教育が変われば、日本の未来も変わると確信する。本年、当会議体は常に心の汗をかき続け、ひたすら動く。未来を創造していく主体でありたい」と語る。熱い声援をおくりたい。

福井JCマン、教壇に立つ

JC PRESS 8月号に「公立中学校の教壇に立とう! ~福井JCの取り組み~」という報告が載っていた。「全てを学校教育者に依存し、家庭での教育が空洞化しているのではないか。地域人、家庭人として学校と隔たるのではなく、むしろ我々一人ひとりが教壇に立ち、教育の現場に参加してゆくことも必要ではないだろうか。地域の先生を育成していくことは、我々青年経済人が担うべきことであり、今すぐ始めなければならないことではないか」。この問題意識で、福井JC(揚原安磨理事長)「心づくり委員会」の事業が紹介されていた。

「偏差値重視に陥りがちな学校教育の中で、生徒自身が自分の将来を意識し、普段の学習目的を確認

してもらおう、という発想だ。進路学習の一環として「職業別選択講座」を開講し、JCメンバーが教壇に立ち生徒の進路アドバイザーになる。メンバー以外の一般企業からも約20名、20業種の現場で働く者が教壇に立つ。生徒は興味のある業種を自由選択し、1回2時間の学習を受ける。授業は単なる職業紹介にとどまらず、その職業に携わる人の熱意や情熱を伝える。社会人から子供達へ、夢や思いを社会教育の立場から伝える」と、西村友一(福井)の報告にあった。

横浜 JC の寺子屋

10月、山形全国大会のセミナーに「心の教育」シンポジウムが登場した。「これでいいのか日本の歴史」をテーマに西部邁先生の基調講演で「歴史の中の誰もが認める平凡な真実こそ、自由と秩序のバランスをとるポイントであり、人としての当たり前の価値観を与えてくれる」という指摘に、歴史の本質と、心の教育の根っこを見る思いがした、と報告されている。

歴史教育も大事な事業だ。旧聞に属するが、横浜JCでは97年に「横浜寺子屋」を実施していた。間宮茂理事長(当時)は、次のように記している(要旨)。

「私達が、しっかりとした自国の歴史観と世界観をもつことが、子供達に一番大きな教育になる。一部のマスコミや進歩的文化人と称される人達の間違った歴史観を信じてはいけぬ。そこで、横浜JCの地球市民室・地球の子供達委員会では、子供達が歴史に興味をもってもらうため『横浜寺子屋』を実施した。

横浜の歴史は幕末からなので、まず江戸後期の人物・二宮尊徳を学ぶ。ペリー来航の場所でペリー上陸記念碑、記念艦・三笠を見学し時代考証する。横浜開港記念日には咸臨丸に乗船し勝海舟を学び、坂本龍馬を題材に当時、西欧の植民地化を阻止するため、どんな思いで日本という国を考えていたか学ぶ。最後に、親子歴史討論会を開催する」。

■ 99サマコン、市民主役の新時代!

7月24～25日、パシフィコ横浜はサマーコンファレンス。テーマは「動き出した日本 市民が主役の新時代!」。JCメンバー9010名の登録と、4000名超の市民が参加した。ブースは130団体からの出展で、連日、賑わった。NPO団体の参加も、昨年を上回る45団体である。

メインフォーラムで松山会頭は「1万1000人以上のメンバーと握手を交わした公式訪問を通じ、地域は決して閉塞感だけにとらわれず、熱い勇気をもって行動していることを実感した」と述べた後、参加者に対し「今年JCが行なっている活動を確認し、自信と勇気を持ち帰ってほしい」と訴えた。

石原慎太郎、日本の可能性を語る

基調講演は石原慎太郎氏。テーマは「日本の可能性」。「今日は都知事ではなく、作家として話したい」と前置きした石原氏は、次のように語った。「日本の現状について悲観するのは無理ないが、現在の不況だけを見て日本を見限ってはならない。悲観論に傾く日本の知識人もいるが、外国には日本の可能性を認めている識者もいる。若い人、とくにJCのようにリーダーたらんとする人は、日本が近代世界史に与えた影響を、もっと勉強すべきだ。気負う必要はないが、もっと自分の国に誇りを持ち、ノーと言うべき時は言える日本であってほしい」。

TOYPグランプリ、長有紀枝さん

99TOYP大賞の授賞記念式典にも、多数の市民が集まった。受賞者が地球を舞台に様々な分野で活動する紹介ビデオや、率直な受賞の言葉は、参加者に大きな勇気を与えた。

今年は長有紀枝さん(春日部JC推薦)がグランプリ外務大臣奨励賞を受賞。活動分野は国際協力。長さんはNGO「難民を助ける会」のメンバーとしてコンゴ紛争に赴き、援助の空白地帯のセルビア系難民の支援を行なった。また、日本人の関心が薄かった対人地雷廃絶運動では、その恐ろしさと悲惨さを根気強く訴え、小淵首相を対人地雷全面禁止条約締結

に導くなど、国境を越えた地球益のための活動を続けている。

さて、真夏のイベントは全て終了し、参加者はエンディングセレモニー会場に集まってくる。そして、サマコンで得た成果を地域に持ち帰り、明日からの運動に活かすことを確認し、小さな勇気をもって動き続けよう、と決意を胸に会場を後にした。少女達の奏でる美しいベルの音、それは新しいミレニアムへの序曲のように、いつまでも響いていた。

■ 外国語の声援飛び交う、地球市民の日

8月8日、「第2回・地球市民の日」を迎え、各地で様々な活動が展開された。日本JCは、「2002年サッカーワールドカップ決勝戦」の会場に決定した横浜国際総合競技場を舞台に、フェスティバルの開催だ。日本と韓国の少年チームを中心に「ジュニアサッカー大会」、日韓両国・往年の名選手による「日韓代表OB戦」、そして「Kiroroのミニコンサート」が主なプログラムである。

猛暑の中、スタンドでは日本語、ハングル語、英語、ポルトガル語などが飛び交い、さながら会場は地球市民のイベントにふさわしい雰囲気包まれていた。

ジュニアサッカー大会には全国、そして韓国から13の少年チームが出場し、当日の国際総合競技場では横浜市選抜対ソウル選抜の決勝戦と日韓選抜選手

によるエキシビジョンマッチが行なわれた。子供達は、試合だけでなくサッカークリニック、懇親会などで交流の時間を共有し、お互いの文化に触れ合った。

そして、グランドフィナーレ。Kiroroのミニコンサートは、フェスティバルのイメージソング『僕らはヒーロー』で、一人ひとりが主人公となって、いつまでも輝いていこう、と歌い上げ、99年8月8日「地球市民の日」はフィナーレとなった。

少女達のつづやき

「帰途、10代の少女達が『地球市民って何だか知らなかったけど、一人ひとりがもっと思いやりの心をもとうということだったら、いいよね』と話しているのを耳にし、8月8日を地球市民の日として、広く国民全体が地球市民意識をもてるようにしたいというJCの思いが、一歩前進したように感じた」と、日本JC広報渉外特別委員長富沢克司(大和)は、8月8日の報告記を結んでいた。琴線に触れる、胸が痛むような感動を覚える一文である。

■ 北方領土、返還を求めて30年

日本JCが北方領土返還運動を始めて30年を迎えた。単年度制のJC運動が、30年にわたって継続した単一事業は例を見ないのではないか。北方領土問題は日本民族の魂からの叫びであり、それを支え続けてきたJC運動は、称賛されるべきものと思う。

第30次「北方領土返還現地大会」に先立ち、5月9～16日の日程で北方領土・CIS関係委員会主催による総勢50名以上の「ロシア、ウズベキミッション」が現地訪問した。

松山会頭を団長とするロシアミッションには、衆議院議員・1984年度会頭斉藤斗志二(富士)が名誉団長として加わり、ロシア要人との会談を行なった。日ロ友好団体の21世紀委員会副議長ロパーチン議員は「ロシアでは70%の国民が日本に好意をもっているのに、日本では4%しかロシアに好意をもっていない(朝日新聞調査)。この国民感情を解決しない限り、北方領土問題は前進しない」と、このJC交流プログ



地球市民の日シンボルマーク



ウズベキスタンミッション（'99）

ラムのような民間外交の重要性を示唆した。カラーシン外務次官は「ビザなし交流や漁業協力など、北方四島解決の作業は進んでいる。今後の日口関係は、各分野において一層の協力が必要」と、民間交流促進の意義を述べた。

他方、土屋龍一郎グローバルネットワーク室長（長野）を団長とするウズベキスタンミッションは、ウズベキスタンJCのJCI正式加盟のためのサポートや、ビジネス講演会など共同事業を通じて、より親密な友好関係の樹立を図った。

日・口の子供達の言葉

7月31～8月1日、第30次現地大会は根室市で行なわれた。初日、根室総合文化会館の現地大会と東京JA会館を2元中継で結び、より幅広い国民運動を展開した。渡部昇一上智大学教授の「法と正義に基づいた領土返還」についての基調講演に続き、パネルディスカッション「心のふるさと北方」が行なわれた。北方領土で生まれた児玉泰子さんは「日本側から返せ返せと言うのではなく、ロシア側から返すという雰囲気をもっていくのがベスト。現実に島民がいるのだから、彼等の権利も尊重した上での返還でなくては実現しないのではないか」と発言、印象に残った。両会場で、21世紀初頭の返還を願って締め括られた。

1日、根室市納沙布岬では第30次モニュメントの除幕式などが行なわれた。札幌在住のロシアの子供と根室の子供達による、それぞれの国に対す

る作文の朗読があり、「お互い隣国として仲良くしよう」という子供達の言葉に、日口友好新時代の間近さを感じた。

■ 野津喬元会頭、 中国政府より「国家友誼賞」

建国50周年の中国では、国慶節の祝典が盛大に実施された。9月29日には、中国政府が外国人に贈る最高の榮譽賞「国家友誼賞」の授与式が行なわれ、日本JC「日中友好の会」名誉会長の野津喬34代会頭（岡山）が受賞した。同賞は社会発展、経済、科学技術、文化教育、人材育成などの事業に特別な貢献をした外国人に贈られるもので、世界から100人が選ばれ日本では19人が受賞。野津名誉会長は次のように語った。

「最高の賞を頂き光栄です。民間外交こそ最大の安全保障で、同じ漢字圏の日本と中国が仲良くすることがアジアの平和につながると思い、活動してきました。その基はJCの理念であり、長く活動できたのもJCの支援と感謝している。今後とも、JCと共に日中友好のため頑張りたい」。

■ トルコ大地震! 緊急支援調査活動へ

8月17日午前3時1分、トルコ北西部でマグニチュード7.4の大地震が発生。死者、負傷者の人的被害を含め未曾有の被害をもたらした。発生後、半月近く経っても被害の全容は掴めない。阪神・淡路大震災の記憶も生々しい日本からは様々な支援活動が始まっており、日本JCとしても松山会頭、五十嵐信JCI副会頭らを中心とする緊急支援調査団が現地へ赴いた。

29日午前1時30分、調査団は医薬品と義援金（日本JC 1万ドルと山形JC1000ドル）を携え、イスタンブール空港に到着。早速、医薬品をトルコ保健健康省に手渡した。30日、トルコJCと協力して復興活動を行なうコーチ社を訪問。松山会頭は阪神・淡路大震災支援の経験から、市民と企業が一体となって復

興活動を行なうことの重要性とノウハウについてアドバイス。被災市民からの聞き取り調査を行ない、それに基づいてトルコJCと今後の対応について協議。

トルコJCは、日本JCの迅速な視察に感謝の意を表すると共に、トルコ国民の危機管理意識の希薄が被害を大きくしたとの認識から、各種コンファレンスにおいてJCIまたは日本JCによる地震の危機管理教育セミナーの開催を要請。松山会頭はカンヌ世界会議での検討と、2000年札幌世界会議での開催を約束するなど、9月1日の帰国まで精力的に動いた。動く、日本JCの面目躍如！

■ 日本は、動く〈山形全国大会〉

10月6～9日、第48回全国会員大会が山形で開催された。大会キーワードは「日本は動く。～共に創ろう！ 持続可能な地球社会～」「共生共創のころ～あらたなる行動を今山形から～」。山形市民会館で午後3時から始まった開会式は、常陸宮様ご夫妻のご臨席のもと、厳粛かつ華麗なる雰囲気の中で進化した。常陸宮様は、JCの理念と活動への理解と、21世紀に向かって青年の活動に大いに期待する旨のお言葉を述べられた。

9日、山形市総合スポーツセンターで開催された記念式典で、松山会頭は自らの行動で推進してきた1999年のJC運動を総括した。全国会員の約5割に当たる2万8399社からの回答が寄せられた「不況対策アンケート」、心の教育の復活を目指して進められた「地域の先生づくり」等の活動報告に加え、「全国50ブロックを回って感じたJCメンバーの本気の情熱が、必ず地域を、日本を、地球を動かしていく原動力になる。これからも、まず自分が一歩を踏み出す勇気を、一人ひとりがもち続けてほしい」と訴えた。

プレジデンシャルリースを引き継いだ上島一泰次年度会頭予定者は、「2000年というミレニアムの節目の年に、会頭としてJC運動をリードしていくことの意味を深く自覚し、若くはつらつとした日本を創造するための力の源となる、たくましいJCとして動き続ける」



全国大会（山形 '99）

と約束。全メンバーに向かって「エトバスノイエス」、何か新しいことを一緒に始めよう、と呼び掛けた。

卒業生の登壇をうながすアナウンスが流れる。ステージは、あっと言う間に埋めつくされた。1999年、JCを巣立つ卒業生は6072名。ステージ中央には松山政司、長谷部亮平、田守順、中川好大、三宅清嗣、佐藤章治……。日本JCをリードしてきたメンバーも一人の卒業生として、あふれる思いに胸を詰まらせているに違いない。声援に笑顔で手を振っていた卒業生たちも、田守副会頭の挨拶が進むにつれ、こみあげる涙に堪えきれなくなる。

入会した頃、夢中になった頃、そして社会的責任、家族や会社への負担……。JCの日々は走馬灯のように駆け巡る。会場を去る彼等の胸には、JCでの経験を糧に未来に飛び立つ勇気が漲っていたに違いない。

■ グランプリは、川口の「地域の先生づくり」

今年度のアワードは、準グランプリが函館JCの「函館クリスマスファンタジー」と、南陽JCの「南陽夏の陣」に、そしてグランプリは川口JCの「川口共生環境プログラム（3Kプログラム）」に輝いた。

創立35周年を迎えた川口JCは、本年の基本理念である共創社会の実現に向け環境問題推進都市ナンバーワンを目指し、様々な取り組みを行なった。

川口市は鋳物のまち、植木のまちとして伝統産業が発達してきたが、近年は都市化が進み地域に対する愛着心が希薄になる傾向が見られてきた。犯罪や青少年問題が多発し、様々な環境問題も生じるようになってきた。

その状況下、地域で子供達を育てる重要性から、まずJCメンバーが教壇に立つことを行動目標に掲げ、2002年から始まる教育改革や松山会頭の所信を基に、環境プログラムの作成を決意し3項目のコンセプトを確定した。①「自ら学び・考え・生きる力を育む」ため子供達の主体性を引き出す。②誰にでもできるマニュアルを作成する。③学校の授業時間に合わせ、一度に学年全体で実施する。

こうして5月18日に市立原町小学校、6月15日には青木小学校でJCメンバーが教壇に立った。平日の昼間の実施であったが、多くのメンバーの協力によって無事終了した。実施後、子供達から返ってきた「ふりかえりシート」には、文字がいっぱいに埋め尽くされていた。環境に対する意見や提案、また予想もしない内容が沢山書かれており、子供達の豊かな発想に驚かされ、子供達と一緒に学べたことの喜びを噛み締めることができた。この行動は、「地域の先生づくり」という目標に拡大する可能性があり、教育現場においてプログラムの運用が拡大し、新しいプログラムの作成が必要になるものと思われる。

地域の先生づくり、誠に素晴らしい運動だ。

■ カンヌを舞台に、第54回世界会議

11月6～13日、世界を代表する高級リゾート、フランス・コートダジュールのカンヌを舞台に世界会議が開催された。カンヌは世界中から集まったJCメンバーであふれ、例年にも増して多数のプログラムで賑わった。

本年、JCIの各エリア会議ではチェ会頭推薦のビジネス・セミナーが行なわれ、多くの青年経済人の関心を集めた。カンヌでは新経済システム創造実践グループ担当の田守副会頭がパネリストとして参加し、



JCI世界会議最優秀
NOM賞受賞 (カンヌ'99)



台湾JC新年総会 (台中 '00)

日本の経済状況についての報告と共に、不況対策アンケートに基づく首相への提言など、日本JCの取り組みを報告し注目された。

震災救援セミナーを開催

トルコ大地震の際、松山会頭に要請された地震災害救援活動に関するセミナーは、国境なき奉仕団によって実施された。講師を委嘱された檜畑直尚96年度会頭は、「JCの行なうべき支援は、初期には支援物資の仕分け・適所への搬送等を行なうが、全国組織で意識の高い多くのメンバーをもつJCが最も力を発揮するのは、被災地復興に向けての組織だった計画的な中長期支援だ。特に被災者の心のケア『鐘の鳴る丘プロジェクト』や、地域経済への支援『Buy Made in 阪神』などが大変効果的な支援だ」と語った。

様々な質問・意見が続出する充実したセミナーであった。

TOYPセレモニーでは、日本からは半田好男氏（98年度TOYP大賞受賞）が、国際交流に果たした貢献によって選ばれ、松山会頭から記念の盾が贈られた。

総会では「グローバルMOTTAINAI運動」が、JCIアワードとして正式に承認された。これにより、1993年度に岡田伸浩会頭の提唱した同運動は、カンヌを起点に5年間継続されることになった。その栄えある第1回MOTTAINAIアワードは、マレーシアのLOMに授与された。また、ウズベキスタンJCが正式にJCI加盟が承認された。2000年度の役員選挙は、会頭にニュージーランドのカレン・ビスディーが当選。副会頭には21名が立候補し、17名が当選、日本からは稲数則光（東京）が選出された。

■ 松山会頭に最優秀NOM会頭賞

注目のアワードだが、日本は7部門で栄誉に輝いた。その中には、カンヌ世界会議を担当しJCI関係委員会委員長として活躍し、バリASPAC直前に亡くなった故平沼淳一氏の業績を称え「ホアキン・ゴンザレス賞」が授与された。褒賞は続き、西尾長幸常任副会頭が優秀常任副会頭に、藤澤太郎副会頭と五十嵐信副会頭が優秀副会頭に選出された。そして、松山政司会頭には「最優秀NOM会頭賞」が贈られた。松山会頭は「大変名誉ある賞を頂き感動しています。この受賞は日本の750LOM、6万人のメンバー一人ひとりが勇気をもって、それぞれの一步を踏み出した、その行動に与えられたものであり、それだけに喜びもひとしおです」と語った。

■ 2000年1月1日、台湾で始動

ニューミレニアム、2000年のスタートである。その記念すべき年、上島一泰会頭（大阪）の公式行事は、台中で開かれた台湾JC新年総会で始動した。旧臘30日、台湾入りした上島会頭一行18名は、韓国JCの崔鏤濬会頭はじめ各国VIPと精力的に交流を図り、新年総会のスピーチで上島会頭は「阪神・淡路大震災の経験を活かし台湾大地震の復興支援

に協力する」と述べ、アジアの友人として一層の友好促進を呼び掛けた。

台中市こそ、前年9月21日の地震により2000余名の尊い命が奪われた地域であり、あえて台湾全土から復興の意味を込めて集まったのだ。上島会頭は日本全国から寄せられた台湾地震義援金を手渡し、両親を失った子供達の心のケアのためのプロジェクトのこと、医療部会が計画している日本の子供達からの「癒しの絵を送る」プロジェクトのことについても伝えた。

この会頭一行とは別に、訪台しているグループがあった。東北地区会長福内浩明（郡山）、大曲JC理事長挽野実之はじめメンバーと市民で、元日に台北で復興支援を目的に花火を上げるため台湾入りしていたのだ。

今年のキーワードは、「エトバスノイエス 新しいことを始めよう」。まずは1月1日、会頭はじめJCメンバーが行動で示したエトバスノイエス、新年行事の点描である。

■ 若くはつらつとした日本へ

1月20～23日、登録者1万1000名を超えるメンバーが京都に集まった。例年より暖かい日が続いていたが、会議の開催と共に寒気が訪れ、日程の後半に入ると宝ヶ池周辺はうっすらと雪化粧に包まれていった。

■ 国の衰退は人心にあり

22日午後、メインフォーラム「若くはつらつとした日本へ・ニューミレニアムの挑戦」の開催である。第1部・基調講演は「21世紀日本の将来像」と題し、中西輝政京大教授の講演だ。中西教授は、「国の衰退の原因は人々の心の中にあり、まさに今の日本はその危機にある。戦後50年、崩壊してしまった日本の倫理の根本である美意識を甦らせ、モノと心、進歩と伝統のバランスを取り戻すことが重要だ」と語った。

第2部・座談会は上島会頭の進行により「誇りあ

る国家・日本創造をめざして」のテーマで論議が展開した。

渡部昇一上智大教授から「太平洋戦争がなかったら、アジアはすべて植民地になっていた」などと刺激的な発言が飛び出し、会場は賛否のどよめきに何度も揺れた。小林よしのり氏の「自分も含めて戦後教育で育った世代が本当に国家を愛するには、心の中の38度線を乗り越えなければならない」との発言は、同じ教育で育ったメンバーに重く響くものがあった。金美齢氏は「自分の国を愛せない人間は、絶対に信用しない」と、かつて軍事政権に追われながら故国を思い続けた体験を語りつつ「日本人はもっと真剣に、国を憂えなければいけない」との訴えは、メンバーの心を揺さぶった。

■ 国家目標が見えなければ、我々が創る

23日の新年式典、上島会頭の所信表明は自然体の語り口ながら、その強い意志を感じさせるものがあった。

「日本青年会議所の新しい挑戦、それは2000年代運動指針の策定を通じ、国家青年会議所として『若くはつらつとした日本』へ向けての国家・国民生活・経済社会・国際のビジョンを創り上げていくことだ。日本の国家目標が見えないのなら、次の世代に生きる、次の世代に責任をもつ我々が創っていけばいい。かけがえのない地球社会の平和と安寧に貢献し、顔の見える日本として、誇りある独創的な文化・文明を育み、市民主体の成熟した社会を築き、自由闊達にして活力と公共心あふれる『若くはつらつとした日本』を築き上げていく。

我々6万人が、その『力の源』になろう。皆さんと不撓不屈の精神で、JCの未来のために懸命に努力することを誓う。二度とない人生だから、志を高くもとう。二つとない祖国だから、未来をこの手で創ろう。二人とないあなただから、共に歩もう。エトバスノイエス 共に新しいことを始めよう!」。

静かに聞き入っていた会場は、一斉に鳥が飛び立

つように拍手が舞い上がった。

式典終了後は恒例の通常総会だが、その後新たに今年も、全国理事長座談会が行なわれた。議事録が取られる総会と同等の位置付けで、「2000年代運動指針の策定」と「財務運営」について活発な議論が展開された。

■ 日本JCの父・三輪善兵衛氏逝く

京都会議が終わり、会頭のブロック訪問が始まって間もなく、悲しむべき訃報が流れた。2月17日、三輪善兵衛(元・善雄)氏逝去、79歳。戦後の混乱いまだ収まらぬ1948年、28歳の三輪善雄(当時)がJC創立に情熱を燃やしたことは、『明日への黎明』の初めの部分に記してある。せめて、あと一年、50周年を迎えたかったことだろう。悔やまれてならない。

護国寺へ行った。喪服の列の最後尾について小一時間、思い出が巡った。出会いは30年ほど前、東商ビルでの『明日への黎明』20周年記念誌取材座談会で黒川、小坂、堀越、服部、森下元会頭と共にお目にかかった。草創の頃の思いを、熱っぽく語られていた姿が浮かぶ。風呂敷に書類を包んで持参され、必ず返すことと念を押され拝借した。

10年ほど前、横浜岡田屋のパーティーで「黒川が逝ってしまい、一人になっちゃったよ」と、寂しそうに言われた(黒川光朝氏は1990年11月19日、40周年を待たず72歳で逝去)。1991年の京都会議で講演を依頼された筆者は、三輪さんが最前列に座っておられるので、びっくりしたことも。思い出は尽きない。ご冥福をお祈り申し上げます。

9月21日、ホテルオークラで三輪記念フォーラムが開催された。三輪善兵衛氏の熱い志、高潔な人間性、偉大な足跡を偲び、JC運動への新たな気概を燃やすフォーラムであった。

■ 九州はひとつ! 9年振りの洋上スクール

4月14日(金)、『おりえんとびいなす号』が博多港を後にした。「九州洋上スクール2000」の船出だ。

井上貴博九州地区副会長(福岡)を団長に、九州各地から集まった約500名のメンバーは、16日に那覇で開かれるシンポジウム「九州・沖縄青年サミット2000」を目指し、「九州はひとつ」を合言葉に洋上研修を実施した。井上団長は、次のように語る。

「経済人として、地域人としてプラス思考に考えられないとか、前向きになれない人が多い現在、もう一度自分を見つめ直す時間を設けるため、日本JCが91年まで実施し、評価が高かった洋上スクールにチャレンジした」。

洋上研修は、まず九州出身歴代会頭によるパネルディスカッションが、野々口弘基地区元会長(熊本)のコーディネートにより行なわれた。出席できなかった麻生太郎(飯塚)、榎本一彦(福岡)、川越宏樹(宮崎)元会頭はビデオレターでエールを送ってきた。

松山政司直前会頭(福岡)は「大変革期を迎えようとしている中、行政・市民・企業がパートナーシップで横の繋がりを強め、力を合わせれば1つの力が3つになる。それぞれ発想の転換を図り、もっと政治に関心をもって地域に貢献していこう」と、檄を飛ばす。

小原嘉文元会頭(佐賀)は「事業での失敗を通して多くのことを経験し、それをバネに今後賭ける」と抱負を述べ、「物事から逃げずに最後までやり通すという時、JCでの経験が非常に役立った」との話には皆、真剣に耳を傾けた。

鈴木健二青森県立図書館長は「21世紀へ飛躍する企業家たれ」と題する講演で、「自分の経験を元に、人間は努力すればやれないことはない。謙虚な気持ちで人に接すること」など、いつもの柔らかな語り口で、心温まる話に熱いものが込み上げてくるメンバーも少なくなかった。

15日(土)、前線を伴った低気圧が直撃。2万2000トンの客船は揺れに揺れる。まさに、船酔い地獄との闘いに、体調をこわす団員が続出。だが、船内行事は進行した。昨日に続く鈴木健二講師のセミナー、太平洋戦争末期の沖縄の子供達の本土疎開を

描いたアニメーション『対馬丸さよなら沖縄』の上映、船長招待パーティー、各班のシンボル旗制作などに熱中し、やっとの思いで那覇港に到着。4時間だけの自由時間が与えられ上陸した。

九州・沖縄青年サミット2000

16日(日)午前5時起床。バスで沖縄戦没者慰霊式典に向かう。午前10時、ロワジュールホテルオキナワで開催の「九州・沖縄青年サミット2000」に、沖縄のメンバーと共に参加。松山直前会頭のコーディネートで明石康国連人道問題事務次長、金美齢JET日本語学校長、ゆたかはじめ元東京高裁長官、そして鈴木館長の4氏によるパネルディスカッション「日本はアジアのリーダーになりえるのか」が行なわれた。MN特別委員会の報告は、以下の通り。

「日本は、自ら言い出さなくとも、アジア各国からリーダーになるよう依頼される国にならなくてはいけない。また、その責任がある。そのヒントの一つは、かつて琉球王国が武力を放棄することによって、その豊かな文化と繁栄を築いたことではないか。もっと日本人は、沖縄はじめ近代の歴史を勉強することが大切だ。特に、これからを担うJCメンバーには、必須の課題であろう」。

17日(月)、4日目、最終日にしてやっど好天に恵まれ、デッキで朝の集いが行なわれた。セミナーは「終の住みか、創造に向けて」、講師は荻原茂裕日本ふるさと塾主宰。企業経営者に対して「儲けるとは金銭的に儲かるだけでなく、自分のもとに人がどれだけ集うか、リーダーシップをとれるか、ということだ。自分の人格形成が大事であり、企業もまちな品格(伝統)をもつべきだ」などと強調し、4日間の洋上スクールは終わった。

参加者の感想は、如何

「参加者全員が同じ立場で共同生活し、勉強し、自分のことは自分でやり、自分達の場合は自分達で決めてやるという、地域のコミュニティそのものだと感じた。一番の感想は、最初から最後まで乗船してこそ洋上スクールだということ。この機会を与えてく

れた九州地区スタッフに感謝」(土井孝信・中津)。「初の試みということもあり、運営はぎこちないままスケジュールが進んだ。愚痴も増え、途中下船する人さえいた。しかし、このスクールの本当の目的は何か。頼もしいリーダーを発掘するものであり、決して受け身で学ぶものではない。運営がうまくいかなければいけないほど、リーダーの真価が問われる。本当に自尊心を試せるスクールだった。意義深い4日間であったこと、初の試みを実行された九州地区の皆さんに大感謝。後は、来年に繋げていくことが、我々研修させて頂いたメンバーの使命と考える」(林辰大・国分)。「勉強は勿論、船の過酷を体験する絶好の機会だった。真のリーダーとは寛容と選択のできる人間……、私も船に対して寛容な気持ちを持ち、参加したことを、とても良い選択と思う。しかし、船はもういいかな……、というのが正直な気持ち。でも、この船で育んだ友情は永遠です」(大江恵子・豊前)。

■我々が「若くはつらつとした日本」を!

7月22～23日、パシフィコ横浜で「サマーコンファレンス2000」がオープンした。テーマ「創造的破壊」への挑戦～よみがえれ! 誇りと活力。今我々が「若くはつらつとした日本」を創るのもと、9000名以上のメンバー(登録)に加え1000人に近い市民の参加を得て、活気あふれる展開となった。

カルロス・ゴーンの挑戦

今年が目玉は、メインフォーラムでのカルロス・ゴーン日産自動車CEOの基調講演だ。「多くの努力、痛み、犠牲が必要なことは分かっている。しかし、他に選択肢はない」と、日産リバイバルプランNRPを掲げて日産復活に挑むゴーン氏は、次のように語った。

「リーダーとして、何かを本当に変えようとするなら、トップダウンとボトムアップの両方が必要だ。トップの何人かで意思決定するのではなく、提案し、多くの人と直接話し、人の話に耳を傾けることが大切だ。階層はできるだけなくし、全社員が参加できる

ようにすれば、積極的な関心を呼び起こし、問題点は明確になり、自分達の会社にとって良い決定だというコンセンサスが生まれる。情報は社内外に公開し、透明性を増すこと。言ったことと行動を一致させること。

そうして1年、日産では社員に誇りが生まれ、やる気が表に現われ企業風土が変わった。リーダーにとって、最も大切なのは勇気だ。本当に社会に必要とされることに、勇気をもって臨めば、不可能はない。皆さん、たった一度きりの人生に、勇気をもって挑戦してください」。

2000年代運動指針の中間報告

メインフォーラムの後、京都會議に続く「全国理事長座談会」が開かれた。12稿にもなる「2000年代運動指針」の中間報告は、概略において理事長の異論はなく、より良い指針づくりのための建設的な意見が大半を占めた。「財政問題」は、会員数減少の問題等からみ会費値下げとそれに伴う組織形態の在り方が議論され、各問題については担当の委員会等で検討、具体的改善策の公表が約束された。

「ベンチャービジネスフェア2000」

会議センター各室では27のセミナー・フォーラムが開催された。展示ホールでは中小企業家に有効なビジネスネットワークの構築を図る試みとして「ベンチャービジネスフェア2000」が設営され、経営革新セミナーの開催や各種企業・団体のブースが展示された。

東ちづるさん、TOYP厚生大臣賞

女優の東ちづるさんが、TOYP大賞厚生大臣賞を受賞した。ドラマから司会、舞台、ラジオ、エッセイ、着物デザインなど幅広く活躍されるなか、9年前から「骨髄バンク」や「あしなが育英会」などのボランティア活動を続けている。ドイツNGO「国際平和村」の支援活動や日頃のボランティア活動の体験を綴った『わたしたちを忘れないで～ドイツ平和村より』(ブクマン社)は、日本図書館協会選定図書となった。本の売上金の一部は平和村に寄贈するなど、ボ

ランティア活動が高く評価された。

東さんは「受賞と聞いて、初めはちょっと躊躇した。でも、活動仲間に私達みんなの代表でもらうんだからと言われ、嬉しくて、亡くなった患者さん達や遺族の方の顔が浮かんで、思わず泣いてしまった。受賞は、本当に励みになりました」と語った。

■「ゆいまーる」の心が、地球を繋ぐ

7月22～25日、G8サミット（主要国首脳会議）が終了したばかりの沖縄で、「2000青年会議所G8サミットミーティングin沖縄」（後援：読売新聞社／協賛：トヨタ自動車（株））が開催された。G8サミット参加国のアメリカ、フランス、カナダ、ドイツ、イタリア、イギリス、ロシア、日本の8カ国のNOM会頭が沖縄に集まった。

22日、各国会頭は相次いで来日し、横浜で開催中のサマコンに出席。翌日、沖縄入りし、外務省から沖縄サミットのブリーフィングを受ける。24日、宜野湾市の沖縄コンベンションセンターをメイン会場にオープニング。カリン・ビスディ JCI会頭は「政府とは違うJCIネットワークを生かした素早い取り組みで、世界平和に貢献したい」と語った。

21世紀、かけがえのない地球を守る5大テーマ「IT革命・教育・保健衛生・環境・グローバリゼーション」に関し、各国JCは何をすべきか、JCIはどんな役割を果たせるか、それぞれの取り組みを交えながら具体的事例を提示し合い、共有できるビジョンを模索した。最終日には平和と繁栄をキーワードに19項目の行動計画を盛り込んだ「JC-G8共同宣言」を採択、世界に発信した。

ゆいまーる2000

同宣言には「ゆいまーる2000」の副題が付された。「ゆいまーる」とは、古来、沖縄に伝わる島の人々の心とも言える言葉だ。皆で助け合って生きていこうという心が国を越えて地球を繋

ぐ時、そこに文化的、精神的、経済的な環境の差異を超越し、互いの文化を尊敬し理解することによる真の協調関係が生まれるという、青年らしい率直な意志が込められている。議長国の重責を果たした上島会頭は「共同宣言のテーマは、どれも地球規模の問題だ。文化の違いを認め合い、青年らしく、できることから実行していく」と語った。

共同宣言の前文（骨子）

「JC-G8は、21世紀を迎える世界の平和と繁栄を実現するため、JC世代としていかに世界に貢献できるか、沖縄の地に集い議論を重ねた。JC-G8は、未来に責任をもつ世代として『グローバル化時代における新たな文化の多様性』を重視し、21世紀の国際社会におけるルール、倫理、価値観確立のイニシアチブを取っていく。

IT革命の負の側面である『デジタルデバイド』の克服のために、各国内における様々な課題に対処すると共に、途上国での人材育成やインフラ整備などを支援する。教育、保健衛生、環境といった課題にも、それぞれの国での取り組みに積極的に関与しながら、国際的な協調体制を構築していく。更に、国際的なNGOとしてのJCが、世界各国のNGOと、より一層のネットワークを構築する。

JC-G8は、今後とも緊密なコミュニケーションを通じて具体的な活動を進めるために、次の5項目についてアクションプログラムを策定した。IT革命、教育、保健衛生、環境、グローバリゼーションの5つである」。



JC-G8サミット in 沖縄（'00）

JC-G8は初の試みとしてニューミレニアムの年、成功裏に終了した。討議されたテーマが21世紀にどう繋がられていくのか、気になるころであったが、進んでイタリアJCが手を挙げ、次年度の開催が約束された。

■ 地球市民の日、 3年目を迎え多彩な展開

8月8日は、地球市民の日。今年で3年目を迎えるが、全国各地で多彩な事業が展開された。その一端を紹介してみよう。

[枚方] JCメンバーが地域の先生(オッチャン)になって、子供達と接するイベントを開催した。総合福祉会館に200名の小学生が集まり、JCメンバーと高校・大学生のサポートによって『ジュニアワールドゲーム』を開催。普段は漠然としか考えていない自分達の周りの世界のことを考えてもらった。会館の外では『心のふれあい広場』を設け、メンバーのリードで廃ペットボトル利用のロケット作りやケナフの紙すき、ダンボールでの工作など参加型イベントを行なった。

[井原] 7月28～29日、記念事業『わんぱく共和国』を実施。「感じる、つながる、つくりだす」をテーマに、地域の小学生46名と広島県神石郡伊勢村農園で、電気もガスも水道さえない素顔の自然を体感した。その過酷な状況の中でも子供達は遊びを見つけ、創り出し、共に楽しんだ。限りあるエネルギーや水の大切さを身をもって知り、みんなで分け合った。共に生きる喜びが、美しく豊かな自然の姿が、明日を担う子供達の胸に深く刻み込まれたことだろう。

[横浜] 8月5～8日、横浜・香港合同企画、環境を通じた国際交流事業：ジュニア環境大使育成プロジェクト「飛翔(はばた)け! エコフレンズ!」を実施した。横浜は、香港女青年商會との姉妹JC締結25周年を機に、意見交換・交流を図った結果、地球市民意識について共通の認識を得た。そこで「互いの価値や文化を認め合い、思いやりの心をもって共に生きることを目指す」、「家族や友人を思うのと同じ心

で、地球を共通のふるさととして愛する」という視点から、合同企画することになったもの。

■ 望郷の岬公園、日本語と ロシア語でシュプレヒコール

9月30日、根室市総合文化会館などを会場に「21世紀を迎える日口関係と返還要求運動の役割～北方4島の一括返還を求め～」をテーマにフォーラムが開催され、都甲岳洋前ロシア大使、藤原弘根室市長などが参加した。

第2分科会では小崎学北方領土・日口関係委員長(京都)がパネリストとして参加。ロシアミッションやビザなし交流の経験を踏まえ、「遅れている建築技術等の向上を図るため、技術者の派遣等を考えてはどうか」と提案し、友好的アプローチの大切さをアピールした。

10月1日、根室市納沙布岬の望郷の岬公園では日本JC(第31次)、北海道地区道東ブロック(第26次)の北方領土返還運動現地大会と、北方領土返還要求国民集會が開催された。国民集會で上島会頭は「北方四島の返還は全国民の願いであり、日本JCでは今世紀に起こった問題は今世紀中に解決したい、と運動してきた。8合目まで来たところで、あと一歩が大切だ。この岬に燃える『祈りの火』が一日も早く『喜びの火』となるよう、皆で頑張っていこう」と熱く語った。これに応じて、道民会議や元島民の方々が決意を表明、全員が日本語とロシア語でシュプレヒコールを行ない、返還運動の思いを確認し合った。

■ 2000年代運動指針を採択! 〈福山全国大会〉

10月5～8日、福山市で第49回全国会員大会が開かれ、全国から1万人以上のメンバーが集まった。本大会が特別な大会と意義づけられたのは、「2000年代運動指針」の最終討議が行なわれたからにほかならない。

6日、福山リーデンローズで開かれた第107回通

常総会において、2000年代運動指針策定会議の伊藤三之議長（山形）より「個と公の調和」と「活力と知力」の2つのキーワードを基にした人間力開発と、4つの政策ビジョン（国家・地域・経済・地球）が上程された。日本と青年会議所の可能性を切り拓く方向を示す運動指針は、慎重な討議の結果、議決権をもつ全国理事長による全会一致で採択された。以下、その骨子を紹介する。

個と公の調和

私たちが考える明るい豊かな社会とは、個と公の調和している社会であり、個の重要性と共に自分の生まれ育ったまちや国に対する帰属感、誇り、すなわち公の重要性にも十分配慮された社会なのではないか。個と公の調和こそ、2000年運動指針の基本的哲学の一つだ。個の重視、国や公の軽視は戦後日本の大きな特徴であり、この戦後日本を総決算する時を迎えている。

活力と知力

もう一つの哲学は、活力と知力。戦後、我が国は経済立国という国家目標のもと、行政による過度の

規制と護送船団方式による集団主義的経済運営、中央官僚による計画市場経済運営がなされてきた。自由な競争を抑制し、自己責任を曖昧にする弊害が至る所で顕在化し、結果的に日本の活力を乏しいものにした。活力ある日本を創造するには、社会のあらゆる場面で競争と自己責任の原則を共通認識しなければならない。まちづくりや国づくりも、自らのことは自らで判断し実行し責任をもつ、という発想に基づかなければならない。

人間力の開発

新しい価値観をもって新しい社会システムを創造していくのは、一人ひとりの人間にほかならない。まちを創るのも人、歴史を創るのも人。時代を切り拓いていけるのは、一人ひとりの人間以外あり得ない。大変革期の今こそ、青年会議所は変革を実現していく人間の力に注目すべきだ。だとすれば、JC運動の機軸は、自らに活力と知力とを兼ね備え積極果敢に社会改革運動を实践できる人間、そんな人間力の開発に求められるべきではないか。

JC運動が理想とする「まちづくり」とは、すべての



2000年代運動指針採択の瞬間（福山'00.10.4）

市民を視野に入れた「人づくり」、すなわち「人間力開発」運動であるべきだ。「2000年代運動指針」は、国家・地域・経済・地球という4つの具体的政策ビジョンごとに、運動の具体的方向性を示している。JC運動を展開する際には、それが「人間力開発」というJCの機軸に合致しているか否かを、常に検証してみる必要がある。

■ 活力あふれる21世紀を創造しよう!

8日、ローズアリーナで大会式典である。隣接する緑町公園芝生広場には屋外会場が特設され、大型スクリーンにアリーナでの式典が同時中継された。今年も、JC運動に深いご理解を示されている常陸宮・同妃両殿下がご臨席になり、JCへの期待を述べられた。

式典のハイライト、プレジデンシャルリースの伝達式で、上島会頭は「ニューミレニアムが始まった本年、若くはつらつとした日本を目指し行動を始めた全国JCメンバー一人ひとりの勇気を結集し、活力あふれる21世紀を創造していこう」と檄を飛ばし、全員でエトバスノイエスを唱和、2000年度の成果を確認し合った。プレジデンシャルリースを胸に土屋龍一郎次年度会頭（長野）は「人間力開発を軸に、様々な社会問題にコミットし新世紀の源流となるために、皆さんの力を貸してほしい」と、全国のメンバーに呼び掛けた。

そして、式典の悼尾を飾る卒業式である。JC PRESSは次のように報じた。「開始のアナウンスと同時に、数え切れない卒業生がステージを埋めつくした。ステージ前はもちろん、1階2階を問わず、後輩達の振る幟旗が揺らめ

く。代表のスピーチにつれ、ステージの卒業生の中に泣き声が波のように広がっていった。……この熱気と涙、そして決別の覚悟を忘れずに、JCで学んだことをこれからの人生に、地域に、仕事に活かして行ってほしい。これまで巣立って行った多くの優れた先輩達のように」。

■ グランプリは、大曲JCの花火節!

アワードセレモニーでグランプリに輝いたのは、大曲JC(挽野実之理事長)の「台湾花火節『がんばれ台湾』復興へのエール」だった。台湾大地震被災復興支援のため、台北で花火節を実施して現地の人々の心に希望を与え、さらに会場での秋田の特産品販売による売上金を義援金として寄贈するなど、国境を越えた人道的な活動が評価された。この事業の経緯を紹介しよう。

姉妹交流10年に及ぶ中和JCのメンバーが公式訪



全国大会(福山'00)
式典と大懇親会

間で来日された際、「この大曲の素晴らしい花火を台湾の人達に見せたいね」とのつぶやきから、この事業はスタートした。姉妹締結当時のメンバーは、ほとんど卒業してしまい、温泉や地域の名所旧跡も案内しつくし、これからの国際交流をどうしたものか思案するなかで、花火という共同事業に新たな展開を期待し準備を進めた。

開催3カ月前、突如、大地震に見舞われたが、復興に前向きな台湾の国民性に助けられ、2000年の夜明けを復興支援と共に祝福することができた。

■ 未間の観客動員で、アンコール

1回限りの単発事業として企画したところ、30万人という台湾では未間の観客動員（10万人以上の動員イベントは皆無）を記録し、台湾の人々や企業から第2回の開催を強く要望された。台湾企業の（PRの）期待が大きいことを考慮し、大曲JCは老朽化が著しく倒壊の危険すらある日本人学校の再建という願いをこめてスポンサーを募集し、10月には第2回台湾花火節の開催にこぎつけた。

振り返ってみると、第1回開催前の地元の反応は冷たく、なぜこの忙しい正月に？、またJCが好き勝



全国大会福山（'00）
上島・土屋両会頭

手なことを……、という反応や無関心の人が多かった。しかし、マスコミに取り上げられたことで評判は一変し、不況下に明るい話題を提供してくれたと市民や自治体に喜んでもらえたため、第2回は非常にスムーズに事が運んだ。

台湾花火節の事業を行なってから、大曲JCは一躍注目されるようになり、メンバーは心地よいプレッシャーを感じるようになったという。事業を通じて感じたことは、これからのJCは若々しくフットワークを生かして、地域社会にかかわる必要がある。大きな成果だけを望むのではなく、小さな成果を積み重ね、JCのみではなく市民と共に、我々がこのまちをつくるんだ、という意識を広めていきたい。そのためにも目下、仲間を増やし会員拡大を心掛けている、とのことだった。

以上、創立50周年記念誌特別委員会石田伸（鶴岡）の取材レポートに基づいて記した。

■ 内外のJC8000余、 北の都・札幌に集う

11月6～11日、いよいよ第55回JCI世界会議札幌大会だ。日本では6番目の開催になる。内外合わせて8000名を超えるメンバーの参加で、「Spirit of Collaboration(共に作る心)」のテーマのもと世界を繋



JCI世界会議札幌（'00）

ぐ青年のネットワーク、JCの意義を確認し合い、友情を深め合った。

6日、開会に先だって行なわれた会頭記者会見でカリン・ビスディ JCI会頭は「札幌は息を飲むように美しいまち、人々の温かいもてなしに感激した。札幌で多くのことを学び、多くの人と出会いたい」と語り、日本JCについては「今大会開催までの10年間にわたり、JCIに貢献してくれた非常にプロ意識の高い組織」と称賛の言葉を惜しまなかった。

開会式には秋篠宮様・紀子様をご臨席になり、「世界中から札幌に集う若者達が素晴らしい21世紀を創ることを期待する」とのお言葉を述べられた。

7日14時、パークホテルの第1回総会では、ロバート・F・ケネディ Jrが基調講演を行なった。「我がケネディー族にとってJCは身近な存在であり、伯父ジョン・F・ケネディはTOYPアワードを受賞している」と前置きし、かつてハドソン川やロングアイランド海峡の汚染防止など、環境保護運動で指導的役割を果たした経験から「人間は自然によって保護されている。環境を守ることは長期的に見て経済の発展に繋がるものだ」と発言し、大きな拍手を呼んだ。

「心を、手を、仕事も、地域も、すべてを繋ごう！」

環境といえば7～12日、札幌メディアパーク・スピカで「エコ&フューチャーメッセ」を開催したが、開幕式には生物にご造詣の深い秋篠宮・同妃両殿下もご来場になり、地球環境保全をテーマにした展示を興味深くご見学になられた。

上島会頭は開催国・日本の代表として多くの会議、セレモニーでスピーチしたが、世界中のメンバーに向けて青年が『力の源』となって明るい21世紀、豊かな世界を創っていこうと呼び掛け、「心を繋ごう、手を繋ごう、仕事も繋ごう、地域も繋ごう、すべてを繋ごう」と、メッセージを送り続けた。

TOYP、俳優アンディ・ラウ氏

9日、世界会議で最も華やかで人気の高いプログラムTOYPセレモニーが、札幌コンサートホール・キタラで開催された。札幌で、世界中から傑出した若

者として選ばれたのは香港の俳優・歌手のアンディ・ラウ氏など11名だった。受賞者には大リーグのサミー・ソーサ氏（ドミニカ共和国）やパソコンOS「リナックス」の開発者ライナス・トルバルド氏（フィンランド）も選ばれていたが、欠席だった。ラウ氏は「私は特別な人間ではない。諦めずに努力すれば、誰もがTOYPになれる」と喜びを語った。

他方、JCIアワードで日本の受賞は合計14個の獲得で、最優秀NOM賞、最優秀NOM会頭賞、最重点テーマ賞（業種別医療部会）などを受賞した。

困難に負けず、夢の実現を

カリン・ビスディ会頭は、ブヴェラ新会頭に明日を託した後、ラストスピーチで「未来はビジョンある人達のもので。皆さん、自分がどうありたいかを自分自身で決め、どんな困難にも負けず、夢を実現してください」と語り掛けた。彼女の、この1年間の不屈の意志と、勇気ある行動を知る満場の参加者の拍手は、いつまでも鳴り止まなかった。

7日間の会議も大詰め、いよいよ11日は会頭主催晩餐会だ。大会旗が札幌から来年開催のバルセロナに伝達されるや、会場からは大きな喚声拍手が巻き起こった。生バンド演奏にのって、今や遅しとダンスタイムに変わり、札幌大会最後の夜を満喫していった。

「北方見聞録」

「札幌の7日間が終わった。今まさに札幌を後に、飛行機が飛び立とうとしているなか、北海道全体の開拓者精神と月並みな言葉になるがクラーク博士の『ボーイズ・ビー・アンビシャス』が頭から離れない。連日の取材で睡眠不足なのに、興奮さめやらず眠れぬフライトとなった」。MN特別委員会・JC PRESS特別取材チームによる「北方見聞録」（12月号）は、こう結ばれていた。

■ 21世紀のJC運動キックオフ

2001年1月18日早朝、土屋龍一郎会頭（長野）はじめ日本JC役員団は、恒例の下鴨神社での新年初

祈願を行なった。底冷えする神殿で玉串を奉典、21世紀、2001年度JC運動の成功を祈願した。

一行は京都府庁に荒巻禎一知事を表敬訪問した。知事は「青年の力で21世紀を創造してほしい」と新世紀JCへの期待を述べ、併せて「大いに、京都を満喫して行ってほしい」と語った。記者会見では、全国紙、地方紙などマスコミ各社の記者から、メインフォーラムのテーマや創立50周年を迎えたJCの21世紀の目標など、鋭い質問が投げ掛けられ、改めて京都会議への関心の深さが感じられた。

宝ヶ池プリンスホテル高砂の間で行なわれた榊本頼兼京都市長招待による歓迎レセプションで、市長は「1967年以来続いている京都会議は、すでに冬の京(みやこ)の風物詩で、市民に最も親しまれているイベントである」と、歓迎の意を表した。市長歓迎レセプションには、スイスから来日したジョージ・ブヴェラJCI会頭が関空から直行。「車窓から見た京都の美しさに触れ、この歴史の都から1年の活動をスタートするところに、世界で最もパワフルな日本JCの力の源泉がある」と、祝辞を述べた。

豊田章一郎名誉会長 JCの起業家精神に期待

1月18～21日、京都会議には1万人を超えるメンバーの登録を得た。そして20日、メインフォーラム第1部は、「魅力ある日本の創造」のテーマで豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長の講演である。

「日本の社会システムは行き詰まり、大きな転換期を迎えている。問題の先送りは、益々閉塞感を招くばかりだ。今こそ、創造的・魅力的な経済社会のビジョンをつくるチャンスだ。ビジョンを単なる理想と捉えることなく、行動目標として実践する。手が届きそうになったら、新しいビジョンを構築する。この繰り返し、社会を発展進歩させる。それができるのは青年であり、とりわけJCのような起業家精神溢れる青年経営者に、大きな期待を抱いている」と語った。

第2部は、鼎談「創始の精神に学ぶ」。千宗室第8代会頭(京都)、山崎富治第10代会頭(東京)に土屋会頭が加わり、角田宝一副会頭(城陽)の軽妙

な進行で行なわれた。両OB会頭は、ときに辛辣、ときにはユーモアを交えて語ったが、その根底には常に「新日本の再建は我々青年の仕事である」という気宇壮大な決意、創始の精神があったことを、改めて認識させられた。

第3部はパネルディスカッション「新世紀LOM進化フォーラム」。横山英子東北地区担当常任理事(仙台)、野澤慎吾新潟ブロック協議会会長(新潟)、谷村則幸理事長(古河)、竹内雅浩理事長(東海)の4名が、福内浩明副会頭(郡山)のコーディネートにより、新世紀のLOMとNOMの関係、地区・ブロックのあり方などについて議論した。このフォーラムには会頭公式訪問地50LOMと公募による100LOM、合計150LOMの理事長が客席で操作する端末によって、同時モニター調査が行なわれた。質問に対する答えが瞬時にスクリーンに映し出され、そのデータを基に各パネリストが意見を述べるという、ライブ感覚あふれる議論が展開された。

■ 土屋会頭、3つのコミットメント表明

21日、いよいよ新年式典である。所信表明で土屋会頭は、フランスの作家ジャン・ジオノの『木を植えた男』を引用し、JCメンバー一人ひとりが木となって地域という林を作り、日本という森を豊かに繁らせていこうと呼び掛けた。そして、自らも今年1年を出発点とし、遠い道程をたゆまず歩み続けていくことを誓ったうえで、新世紀への3つのコミットメントを表明した。

「2001年、この京都で21世紀最初のコミットメントをします。それは、2001年JC宣言文の起草です。普遍の青年会議所精神を引き継ぐために、慣れ親しんだ今のJC宣言から、現在の日本とJC運動を取り巻く環境に合わせることで『変革の能動者たらんとする青年』の使命だと思えます。21世紀の始まりにふさわしい、10年、20年、30年先にも時代を切り拓く先覚者であるための心意気を表わすものにしたいと思います。」

第2のコミットメントは、創立50周年を迎えた本年の事業を通じて、大きな森（日本のJC運動が刻んだ精神のしるし）を体感できる一年とします。4月22日に予定している記念事業では、全国の理事長と出向者により、日本社会に新世紀の行動提案を投げ掛けます。

第3の、そして私自身へのコミットメントは、現在の厳しい経済状況から逃げることなく、また家庭の尊さを忘れずに一年を送る、ということです。私は、次の世代が30年後の未来にも変わることなく木々を植え続けていてくれるために、一年間の職務に人間力すべてをかけることをお誓い申し上げます。

新世紀へのコミットメント、一年間よろしくお願ひします」。

■ JCI、最重点テーマに 「社会起業家」

京都会議が終わって早々、JCI法制顧問・日本JC直前会頭上島一泰（大阪）がマイアミに飛んだ。今年最初の常任理事会に出席するためである。常任理事会では、世界中のLOM約900カ所で一斉に活動できるテーマ等について議論された。そして、全世界のJCメンバーのアイデンティティとして「ソーシャルアントレプレナー・イン・アクション、行動する社会起業家達」が決定した。

上島JCI法制顧問は「従来の青年経済人という言葉より、はるかに明確に自分達の思い、立場を表わしている言葉だと思う。かつて、日本が提唱したMOTTAINAIは世界中のJCの共通テーマとなったが、これから向こう5年間は、JCって何だ？ という問いに対して、行動する社会起業家達と答えよう」とインタビューに答えた。

日本JCの選択

ここ数年、日本JCにおいても自らの進むべき方向について活発な議論が行なわれてきた。NPOのような市民団体に進むべきか、青年経済人の色を濃くし経済団体の道を選択するのか。一時、議論は日本最

大のNPOという方向に落ち着いたが、いざNPO法が施行されてみると、単年度制のJCにはNPO法人に比べて活動するうえで壁があることが分かってきた。では、どの道を選択するのか。その辺の事情について、土屋会頭は次のように語る。

「JCには、単なる経済団体ではない、という創始の精神があり、全国各地には50年間培ってきたまちづくりのノウハウがある。全国に展開できるネットワークもある。そういうJCの特性を最も生かせる方向として、社会起業家という考え方に集約されました。

NPOの活動が活性化してきた背景には、医療や福祉、環境など様々な分野において、行政や企業だけでは担いきれなくなってきた事情があります。しかし、それらが有機的に結ばれているかという点、いまだし、というのが現状でしょう。

JCは、専門知識では各分野のNPOには及ばなくても、行政との対応、企業の実態、NPOへの理解という他にはない知識とノウハウをもっている。それらを有効に活用し、それぞれの活動を結びつけることで、私達はインターメディアリーと言っていますが、社会全体をより良い方向に向けていこうと考えました。

大事な点ですが、JCは単なる仲介者ではない。単年度制とはいえ、JCは常に社会のあるべき姿を考え、それを踏まえて今何をすればいいのか、判断し実践するのが社会起業家だと思っています」。

■ 社会起業家ミッション、アメリカへ

4月25～29日、「元気あふれる社会起業家育成グループ」を中心とする「社会起業家育成米国ミッション」がサンフランシスコを訪ね、社会起業家について研究してきた。

一行は、ジェッド・エマーソン特別講師（ハーバード・ビジネススクール講師）のレクチャーを受けた。素晴らしい講義なので、「アントレプレナー挑戦委員会」委員長善林隆充（宇都宮）の講義レポートに基づいて、社会起業家の実像を描いてみよう。

社会起業家の成功条件

「舞台は、モンタナ州ビュート。1920年当時、人口10万人強の平均的な都市だった。それが、60年代後半になる頃には、なんと3万人程度にまで激減してしまっただ。まちの基幹産業だった巨大な鉱産会社が、閉山に追い込まれたからだ。長年の掘削による巨大な窪地の残骸は放り出されたままで、水質・土壌など環境汚染の温床となった。5%だった失業率は20%にまで上昇した。

悲惨なエピソードだが、まちのほとんどを焼き尽くす大火災が発生した時、住民達は燃え盛る炎を前に喝采を浴びせたという。

そのようなまちに、一人のソーシャルアントレプレナーが現われた。名はドナルド・ピープルズ。教育に携わる熱意溢れる青年だった。

一般に、社会起業家の成功条件として『先見の明・明確なビジョン・ビジョンを実行に移す戦略』が必須なのだが、彼にはこの全てが揃っていた。

故郷に絶望し将来を悲観した彼は、敢然として市長に立候補する。断末魔のまちに対抗馬など現われる訳もなく、市長の座を手にする。まず彼が目にしたのは、このまちが唯一もっている負の資産、環境問題だった。モンタナ経済研究開発所を設立し、環境汚染のまちをいかに立て直すか、身を挺して調査・研究した。そこで生み出された利益は、奨学金制度の創設など人材育成に振り向け、経済的・社会的価値を創造していった。

そして今日では、環境問題に敏感な企業・環境ビジネスを事業とする企業群が、このまちに移ってくるようになり、まちは以前のような活気を取り戻すまでになった。

いまやモンタナ経済研究開発所は、NPOとして最大規模の就労者200人以上を抱え、年商3000万ドルの組織になった。その存在は、まちの税収や人口増大に飛躍的な効果をもたらしている」。

社会起業家の役割・6箇条

最後に、同レポートに記されている「ソーシャルア

ントレプレナーの役割・6箇条」を紹介しておこう。

①チェンジ・エージェント(変化の促し手)になる、②ソーシャル・バリュー(社会的価値)の創造、③新しいチャンスを追いかけていく、④継続的に革新を図る、⑤今これしか資源がないから、ということに制限されず大胆に活動する、⑥より高く広い意味での責任感をもつ。

■ 日本JC50周年記念フォーラム

4月22日、東京赤坂のホテルニューオータニ鶴の間において、日本青年会議所50周年記念フォーラムが開催された。全国から集まった理事長、メンバーに加え国会議員、省庁など行政関係者、経済団体、NPO団体など約2000人が参集した。

森喜朗総理は主賓挨拶で「初めて立候補した時、党の公認を受けられなかったが、当時の牛尾治朗会頭はじめJCの仲間が応援してくれ当選できた。以来、自分はJC党だと思い、常にJC活動を意識してきた。50周年を契機に青年としての思いと行動で、745の地域から大きなうねりを起こし、21世紀の日本のあるべき姿を創造してほしい」と、エールをおくった。

中曽根康弘元総理は基調講演で「指導者に必要なものは正しい歴史観と哲学、明確な国家戦略、己を顧みる宗教心である」と明言。ご自身も昭和28年入会のOBであることから、熱い思いでまちづくりに取り組んだ過去を語りつつ、「和魂洋才という言葉の意味を考え、各々が足元を照らしたJC活動を展開することが大切なのだ」と結んだ。

「新日本創世紀」

引き続き、パネルディスカッション「新日本創世紀」が行なわれた。市民の意識・視点を明確にもった「新経済市民団体」としての方向性を見出すために、樋口廣太郎アサヒビール名誉会長、成毛眞インスパイア代表取締役、土屋会頭をパネリストに、角田副会頭のコーディネートで行なわれた。

日本経済の再建を考えるに当たり、向かうべき



50周年記念フォーラム（東京 '01.4）

ターゲットは「地域主権型社会の確立」である。そのためには、それぞれの地域が自立し活性化しなければならない。そこで最も重要なのが自主財源の確保であり、その政策として「市町村合併・広域連携」の推進、「教育システム」の改革、積極的な「政治への参加」を促すことが求められている。それらの政策について、JC運動の役割と機能について議論が交わされた。

■21世紀日本の最大キーワードは？

樋口「現在は経済だが、教育も大切」

■日本経済再生に最優先の政策？

成毛「個別の企業が個別に。国の世話になっている企業が多過ぎる」

樋口「自己責任。国民の志と同じで当たり前」

■地域経済再生と地域主権について？

樋口「地方の銀行が地元でお金を貸すより、国債や中央銀行債券を買っていないか。JCでチェックすることが大事」

成毛「IT革命は一段落。非IT企業がITを使ってどう再生するか。パラダイムを変える必要がある」

土屋「地域主権のポイントは2つ。権限の委譲と税財政の委譲。3割税制の現状では、地方での歳出が多くなっている。地方での財源の確保が重要」

■市町村合併について？

成毛「合併には賛成。道州制も議論すべきではないか」

樋口「JCが本年を合併の年と位置付けたことに感謝

する」

土屋「日本再編絵巻を策定した。市町村に先駆けて合併するJCもある」

■教育改革について

成毛「若い人が、どう教育に携わるかが鍵。インターネットによるアメリカの教育市場は46億ドルと言われ、オーストラリアではインターネット・ハイスクールの卒業生が20%を超えた。企業よりも、インターネットが有効に使える」

樋口「競争なくして活力ある教育はありえない。向上心のない教員をなくし、社会より教員を登用。もっと校長に教材選択と人事権限を与えるべきだ」

土屋「JCでは『地域の先生づくり』やPTCA運動を推進しており、日本型チャータースクール制度の構築や、企業と連携した『社会体験実習』の実施などにも取り組んでいる。行政・学校・企業・家庭・住民が一体になった連携が必要」

■積極的な政治への参加

樋口「JCも最近、極めてオープンになってきた。今後も頑張してほしい」

成毛「日本人全体が文句ばかり言っている中、JCは自己責任に加えて、正しい方向の議論をしている。この方向で活動を続けてほしい」

■21世紀行動宣言、『日経』に意見広告

50周年フォーラムは終盤に入り、「JCアクションプラン21」の骨子が発表された（詳細は7月に発表）。昨年、日本JCは「2000年代運動指針」を策定し、国家・地域・経済・国際の4つのビジョンで「個と公の調和のとれた、活力溢れる成熟した社会の創造」を目指し活動する、と発信した。そして本年は、目標設定を30年後の2030年に定め、望むべき「日本の現形（かたち）」をより具現化して運動を展開していくため、「JCアクションプラン21」を発信したのだ。同プランは、国家・地域社会・経済・国際社会における21世紀アクションプラン21項目からなる。

そして、4月24日の『日本経済新聞』には1ページ

の意見広告を公表した。「私たちが創ります。あしたの日本を」と、大きな活字が飛び込んでくる。本文コピーには「JCアクションプラン21」が掲載されているが、ここではトップで紹介されている3項目、いわばJC運動の3本柱を記しておく。

①市町村再編を含む「地域再生プラン」を構築します。

②PTAからPTCAへー学校・家庭・地域が一体となったPTCA運動を推進します。

③「社会起業家」として、地域から日本経済の活性化を目指します。

■「チャータースクール」のすすめ

5月30～6月3日、地域の先生づくり運動推進委員会は狩野牧人委員長(尾道)を団長に、日本型チャータースクール制度導入の一助とするため訪米、見聞を広めてきた。一行は、次の施設・学校を訪問した。CANEC(チャータースクールに関する情報提供NPO)、Gateway High School(学習障害をもつ10代のための進学校)、River School Charter(行動を通じ知識構築を目指す学校)、Napavalley Language Academy(メキシコからの移民のための英語とスペイン語の2カ国語教育)など。

アメリカでは手作りの公立学校が素晴らしい成果を挙げていた。既存の学習カリキュラムにとらわれず、いろいろなタイプの教え方、学び方を実践し、子供達に多様な学習機会と選択を与えていた。

その後、狩野委員長は、『We Believe』10月号「LOM主権で創る地域の未来」シリーズ欄に、「あなたも手づくりの公立学校を創ってみませんか」という一文を公表した。要旨を紹介しておく。

教える自由・学ぶ自由

1992年、アメリカで第1号校が誕生して以来、2001年現在で全米38州においてチャータースクール法が制定され、開校は2000校を超えている。既存の学校教育に満足できない教師や父母達により、自分達の教育理念による自前の教え方と、州政府から支給され

る公的資金で運営する公立学校を創っているのだ。

州の学習カリキュラムに捉われず、色々なタイプの教え方で「教える自由」を実践し、子供達に多様な学習機会「学び方」と、選択肢「学ぶ自由」を提供している。例えば、学習障害児と健常児と一緒に学んでいる学校、芸術中心に展開している学校など、特色のある学校が開校されている。チャータースクールは行政が上から設置したものではなく、下(現場)からの学校づくりである。既存の公立学校に公平な競争原理が導入され、相乗効果を上げている。

教師の創意工夫と結果責任

規制から逃れる代わりに、チャータースクールは結果責任を負わねばならない。3～5年という契約期間内に、認可申請時に計画した通りに子供達を教育できなければ閉校になってしまう。既存の公立学校では負わなくて済む教育責任を、チャータースクールは自ら引き受けている。公的資金を受けて運営している以上、結果責任は当然という考え方に立っているのだ。

そこで、教師の教え方には創意工夫が必要とされ、また親や地域社会の学校運営への協力が、重要な役割を担うことになってくる。教育に希望や使命感をもつ教師にとっては、教える自由が与えられるので、自らの技能・才能・情熱を発揮することができる。そこでは質の高い教え方、学び方が展開され、子供達の学力向上はもとより、豊かな感性や創造力が育まれる。

ハドソン研究所のチャータースクールに関する報告書によると、学力が向上した、学ぶ意欲が高まった、など良い結果が報告されている。閉校になったスクールは4%程度で、原因は資金難などの運営面にあるという。

日本への導入

昨年12月に発表された教育改革国民会議の最終報告の中に、「新しい時代に新しい学校づくりを」と題し、「新しいタイプの学校(コミュニティスクール等)の設置を促進する」という項目があった。明らか

に、アメリカのチャータースクールをモデルにしたもので、国会議員の間や日本全国各地でも色々な動きが出てきている。

我々JCメンバーの責務は、数年後に「チャータースクール法」が制定された時、JCメンバーや教育に希望と使命感をもった教師を中心に、チャータースクール申請ができる土壌を創り出しておくことにある。「どうです。あなたも手づくりの公立学校を創っていませんか?」と、狩野委員長の文章は結ばれていた。

JCメンバーは、まさに子育て世代の中核である。全国3万5000にのぼる小・中学校のPTAを通じて、教育に関わっている世代なのだ。JCの教育改革運動には、期待するところ極めて大きい。

■ サマコン、新世紀コミットメント

7月21～22日、パシフィコ横浜でサマーコンファレンスが開催された。

新世紀コミットメントフォーラムは、国立大ホールに石原伸晃行政改革・規制改革担当大臣を招きオープンした。石原大臣は「民間でできることは民間で、地方でできることは地方に任せる」と原則論を語り、「これまでの行政、税金の無駄をなくし、本当に国民に役立つようにしていく」と語った。続いて、松本秀作副会頭（枚方）の進行によるリーダーズトークでは、石原大臣と土屋会頭が意見交換し「変化を恐れず、先送りせず、痛みが伴ってもやり抜く覚悟で、課題を次世代に残さず、自分達の責任として行動し、解決を図る」ことを確認した。

新宣言第1案発表

今年のサマコンで注目すべきことの一つに、「新宣言第一案発表—新宣言へのコミットメント」があった。新宣言策定会議により年初から議論されてきたが、その第一案は「日本の青年会議所は 混沌の状況を打ち破る 個人の強い自立性と社会の高い公共性が 生き生きと協和する確かな時代を切り拓くために 一人一人が率先して行動することを宣言する」とあった。成田治新宣言策定会議長（仙台）の文意

解説の後、質疑応答では20人以上の理事長が発言した。

現在の宣言が採択された88年以来、13年ぶりの改訂である。JCの立場を社会に対して鮮明に示すものだけに、理事長の発言を参考に次案策定の会議に入るようになった。土屋会頭は「一つの言葉、一つの表現について、これだけ活発な論議を交わすことができる。それがJCの価値だと思う」と積極的な参画を称え、第1案に対し全国メンバーからより多くの意見が寄せられるよう要請した。

■ 日中友好交流、訪中経済ミッション

6月17～20日、「日中友好の会」シニア・現役と、経済ミッション参加者など160名余のメンバーが北京を訪問した。

松本副会頭の「沢山のメンバーに集まって頂き有難うございます。必ず、何かを見つけて帰って頂きたい」の一声の後、中華全国青年聯合会（全青聯）倪部長の歓迎挨拶に続いて贅沢な「オリエンテーション&全体食事会」が始まった。翌18日はIT、繊維、食品、建設の4コースに分かれて現地企業訪問。各コースとも内容充実のスケジュールで、「大変ためになった」との声が聞かれた。

夕方、結団式で土屋会頭は「中国の活力に驚かれましたと思いますが、今回は71社の中国企業家の参加も予定されているので、積極的な参画をお願いします」と、力をこめて挨拶した。

「要人会見」、中国企業家との「ランチョンミーティング」、中国企業家71名とマンツーマンで行なわれた「業種別テーブルディスカッション」、学識経験者による「日中ビジネス交流推進シンポジウム」など、多彩にして充実した経済ミッションだった。

■ 第32次北方領土現地大会

8月4～5日、根室市で第32次北方領土現地大会が開催された。20世紀に起こったことは20世紀に解決するという意気込みは、残念ながら世紀を越して

しまった。しかし、今回は初めて実行委員会を組織して大会の成功を期し、北海道から九州まで約1800名の登録となった。

4日、根室市総合文化会館で増田再起氏脚本・演出による演劇「9月5日」が開幕。ソ連に不法占拠された北方領土の当時の様子を、年老いた元島民が回顧する物語で、出演者のほとんどが根室市在住のエキストラだ。その迫真の演技を通して伝わってくる「北方領土への思い」が、歴史の奥深さを伝え観客に大いなる感動を与えた、と米屋慎一（黒部）はJC PRESSに報じた。

続いて、元島民の北連協事務局長児玉泰子氏が、講演会で返還運動に対するJCへの期待を述べた。実際、本大会には土屋会頭はじめ8名の日本JC役員が参加しており、JCがいかに重要な位置付けをしているのか、実感されたことと思う。

5日早朝、根室市納沙布岬の会場で根室JC早朝例会、座談会「真世紀返還要求運動」、第32次北方領土現地大会式典が行なわれた。座談会は藤木茂大会実行委員長（八女）をコーディネーターに土屋会頭、上野昌也副会頭（大阪）、濱屋正一理事長（根室）をパネリストとしてJCの返還運動について討議され、これを基に式典において「真世紀返還要求コミットメント」を発表した。

これに先立つ7月9日、東京・麻布台の駐日ロシア大使公邸で大使招待の昼食会が開かれた。出席者はロシア側がパノフ大使、ドubroボリスキー公使など5名、日本側は土屋会頭、宮林雄彦専務理事（横浜）など6名。ロシア大使招待による昼食会は日本JCとしても初のことであったが、アットホームな雰囲気の中で進められた。

話題は土屋会頭、樫畑直尚ロシア友好の会会長（和歌山）を中心にJCの組織から教育問題、小泉政権にまで及んだ。パノフ大使は「日口の学生交流等の事業をされているそうだが、ロシアの学生は北方領土問題についてどう思っているか」との質問が飛び出し、ロシア側が同問題をしっかり考え始めた感触

を得た、と同席の藤木委員長は語っていた。

■ 日本JC、国連DPI登録NGOへ

待望の報せが、国連DPI(広報局)から届いた。日本JCを国連DPI登録NGOとして認可する、という吉報である。ちなみに、NGOという名称は国連が認可した団体にしか使われない言葉なのだ。この認可により今後、国連のグローバルスタンダードに関する情報が定期的に日本JCに入るようになった。同時に責務として、国連が発信した情報を国内で広報すると共に、協力できることは可及的速やかに実践することになる。

土屋会頭、上野副会頭ら一行28名は、9月10～12日に開催予定の国連NGO総会に参加する目的で、ニューヨークへ旅立った。特に12日には、土屋会頭が国連でスピーチすることになっていた。日本のNGOとしては初のことで、極めて名誉な機会を与えられての訪米だった。

そして、9月11日早朝。土屋会頭は、同行の上野副会頭からの電話で起こされた。世界貿易センタービルが燃えている。テレビや新聞で生々しく報じられた、あの情景の中に土屋会頭一行は巻き込まれていたのだった。

予定のスケジュールは、全てキャンセル。一行は、国連ビルから数百メートルという宿泊先のホテルに缶詰状態になり、精神的、肉体的にも極限に近い状態に追い込まれてしまった。ホテルの一室では、刺々しい議論をする状況もあったと聞く。災難、というほか言葉はない。残念無念！

■ おもろしまっせ新世紀〈大阪全国大会〉

10月11～14日、第50回全国会員大会 大阪大会がリーガロイヤルホテル、国際会議場、大阪城ホールを舞台に練り広げられた。大会スローガンは「おもろしまっせ新世紀-活力・知力を呼び起こせ!!」。

また、本年は日本JC創立50周年に当たり、記念式典や記念事業が全国会員大会行事に組み込まれ

た。式典の様子はプロローグで叙述したので、ここでは3つの記念事業について記録しておこう。

21世紀・エコロジーとビジネスの構想

グンター・パウリ氏(1982年度TOYP大賞受賞、ジュネーブ・ZERI財団代表)が基調講演で「20世紀は破壊の時代だったが、21世紀は環境を大切にす時代」と明言された。続いて、同氏と東大生産技術研究所山本良一教授、土屋会頭が、環境ジャーナリスト枝廣淳子氏の司会でパネル討議に入った。中小企業とエコの問題などが語られ、経営者としてもJC運動の方向性を探るためにも有意義なセッションであった。

NPOアワード in おおさか

105組のエントリーから第1次審査を通過した10団体を一堂に集め、活動内容を紹介すると共に日本NPO学会、各地NPOセンター等の協力によりグランプリ1団体、優秀賞9団体を表彰した。グランプリには日本聴導犬協会(長野県)が選ばれた。同協会は聴導犬障害福祉と動物福祉の2つの福祉を実践し、全ての人と動物が共存できる優しい人・まち・環境づくりを目標にした活動が評価された。

聴導犬はアメリカに約4000頭、イギリス約700頭、日本は81年から育成されて20数頭という。JCの地道な活動が聴導犬の社会的認知度を高め、明るい豊かな社会への一助となることを期待したい。

我が家の価値観を考えるミュージカル

大阪府立青少年会館文化ホールで2回公演。我々が失ったものを取り戻すため、コミュニティの最小単位・家族に焦点を絞り、家庭における個と公を考えるミュージカルだ。

筋書きは「現代を象徴するバラバラ家族の3人兄弟が、天使に導かれて理想の家族パーフェクト・ファミリーを探す旅に出る。自分達の過去、そして先祖を辿っていく。戦争で死んだお婆ちゃん、野球選手で一軍昇格試験の日、妻に輸血するため夢を捨てたお爺ちゃん。そんな家族を紐解いていく間に家族って何だろう、と考えさせられ、最後に有難う、と感

謝の気持ちを抱かせる」。

出演者はJC現役・OBの子供達からオーディションで選び、劇団四季OBの杉田氏の指導を仰いで、「我が家の価値観創造会議」の提言をミュージカルで表現した。

公演当日の夕方、大阪は南港、ATCでの大懇親会会場に駆けつけたJC役員の一部が、ステージに上がるや「いま、ミュージカルを見てきました。ただ涙、涙、涙で帰ってきました」との絶叫スピーチが印象的だった。

■ 第50回全国会員大会式典

14日9時30分、大阪城ホールで第50回全国会員大会大阪大会式典「今輝けるものとの出会い」が挙行された。大会テーマは「人間力で彩り地域から描くこの国の現形(かたち)」。演出コンセプトは「感動」。新クロニクル初年度のJC運動の集大成・大会式典において、様々な輝けるものとの出会いを「感動」という形で演出し、体感した人間力を胸の奥深く刻み込み、21世紀の地域(LOM)の運動へ繋げていく。

式典の冒頭、志半ばにして亡くなられた物故会員、並びに先の同時多発テロによる犠牲者に対し黙祷を捧げる。続いて、平和と生きる喜びを謳うゴスペルシンガーの歌声で開会である。

今年で36回にわたって全国大会にご臨席頂く常陸宮・同妃両殿下をお迎えする。太田房江大阪府知事、磯村隆文大阪市長の挨拶に続き、殿下からは、創立50周年という記念すべき全国大会で2万名余のメンバーに会えたこと、今までに青年会議所が果たしてきた運動に対する評価、青年としてわが国の時代を担っていくことへの期待など、お言葉を頂いた。

今年度活動報告、褒賞授賞(後述)発表に続き、2002年1月1日から使用される新宣言が発表された。

2001年JC宣言

日本の青年会議所は



第50回全国会員大会
(大阪 '01.10)

**混沌という未知の可能性を切り拓き
個人の自立性と社会の公共性が
生き生きと協和する確かな時代を築くために
率先して行動することを宣言する**

土屋会頭の総括スピーチは、新宣言の策定はじめ京都会議でのコミットメントに対する「謎解き」から、この1年間、会頭として全国のJCメンバーに託したメッセージを再確認したうえで「全国メンバー一人ひとりの心の中に、木を植えることができたとすれば、私は幸せであります。そして私は、この年の会頭を務めさせて頂いたことに感謝すると共に、これからの新世紀へのコミットメントを宣言します」と語り、高らかに新宣言文を朗唱し、ラスト・スピーチを結んだ。

土屋会頭の熱い思いが込められたプレジデンシャルリースは、松本秀作次年度会頭予定者に伝達された。

松本予定者は、「信じてきたものが崩れ去っていく中、社会は様々な方向性とエネルギーをもった混沌とした時代になりました。我々は、この混沌の時代から、夢と希望を胸に飛び立たねばなりません。今こそ青年としての勇気を振り絞り、混沌を打開することが我々の大なる使命と確信し、全国のメンバーと共に邁進することを誓います」と、力強く抱負を述べた。

フィナーレは卒業式。4521名の卒業生が壇上に並ぶ。客席からは、盛んな声がかかる。佐藤栄一監事(宇都宮)が、卒業スピーチをした。「それぞれのJCライフを噛み締める顔の中で、志半ばに旅立った三木明義君はじめ物故会員の遺影に、JAYCEEとして、人間として、私達の心に残された思いの大きさを改めて感じる」と語る。ユーミンが、『卒業写真』を歌う。会場内の盛り上がりは最高潮に達し、大会式典は終了した。

■ 褒賞グランプリは、「ぐうっとのしろ」

13日21時、国際会議場はアワードバンケットだ。夕方5時半から始まった大阪南港のATCで開かれ

た大懇親会の酒気が抜けぬ勢いで続々と詰め掛け、定刻には満杯の状況になった。申請167事業の中から36事業に絞られ、今夜、授賞発表となった。まず、50周年特別賞だ。角田副会頭の歯切れの良い声が響く。稚内、とнами、土岐、鳥取、草津の5JCが獲得した。続いて、優秀賞・準グランプリは2JCである。駒ヶ根「青少年の育成～地域の大人とともに～」、穂の国「穂の国農園」と決まった。そして、最優秀賞・グランプリは能代JC「ぐうっとのしろ一本の心あふれるまちづくり」に輝き、佐々木利顕理事長に土屋会頭からカップが手渡された。能代の事業内容は、以下の通り。

目指すべきまちの姿を5つのビジョンとして表わし、木の心推進事業を展開している。その中核となる次世代育成事業『子どもふるさと塾』ではコメ物語、ドキ土器工房、わくわく冒険スクール、そば蒔きそば打ち体験の他に『モクモク花いっぱい運動』のフラワーボックス製作や花植え、『日本一の黒松並木づくり』の植樹にも参加した。また『市民が選ぶ新能代八景』の選定や、『木の心ネットワーク会議』なども開催している。

■ 新たなる半世紀に向けて

9.11アメリカ同時多発テロ後に、テロに屈しないという思いからJCI世界会議バルセロナ大会が11月4～10日の7日間、約1万人が集まって開催された。アワードでは、最優秀会頭賞に土屋隆一郎会頭が、最優秀NOM賞に日本JCが選ばれた。

創立から50周年。戦後の復興を目的とした成果は後世に受け継がれてゆくだろう。そして、51年目を迎える2002年、次なる半世紀がはじまる。60周年を迎える10年の日本JCの活躍に期待する。

*第13章～第16章の記述は「50年史」より

第17章 新たな半世紀の歴史に向けスタート

2002-2004

■ 混乱と低迷の中で

2001年、日本JCは創立50年という節目を越え半世紀におよぶ歴史の重さを痛感していた。折しも、自由民主党、公明党、保守党を与党とする第1次小泉内閣が発足した。「構造改革なくして景気回復なし」をスローガンに、特殊法人の民営化など小さな政府を目指す改革と、国と地方の三位一体の改革を含む「聖域なき構造改革」を打ち出し、政治の世界は大きく変化を遂げようとしていた。

一方、9月11日に米同時多発テロが発生。国際情勢は不安定の様相を濃くした。小泉内閣はアメリカ軍などNATO軍のアフガニスタン侵攻を支援するテロ対策特別措置法を成立させ、海上自衛隊を後方支援に出動させるなど、ブッシュ大統領が進める「テロとの戦い」を支持した。2000年後半から見られた減速の兆し、米国経済の景気後退、世界的な情報通信技術（IT）需要の減退に同時多発テロが追い打ちをかけ、日本経済の減速感がいっそう深まった。

■ 新時代への決意

2002年、国民は不安定な情勢、景気の低迷を危惧しつつも新しい年を迎えた。第36回京都会議が、「混沌からの出発（たびだち）」をテーマに幕を開けた。日本JC役員をはじめ、全国747LOMの理事長らが、全体会議や各セミナーを通じて、2002年度の基本理念や方針を確認し、次代に向かうJCの新たな旅立ち、存在意義と指針を知らしめる会議となった。

初日の1月24日は、冷気が身に沁みる朝9時前か



京都会議（'02）全体会議

ら、役員団が恒例の下鴨神社に新年の祈願。その後、京都府庁を訪問し、4日間におよぶ会議開催の挨拶と日本JCの決意を伝えた。京都商工会議所会館で行なわれた会頭記者会見にはマスコミ17社が集まり、京都会議の趣旨説明、今年度のスローガン、4つの協働事業などを、本年度の主なスケジュールに載せて説明した。

京都市長レセプションで役員団とともに出席した第51代松本秀作会頭は、京都市長ならびに京都商工会議所会頭からの歓迎のごあいさつに応え、役員を代表して謝辞を述べた。京都JC千宗之先輩による乾杯の発声とともに、にぎやかな懇談へと続いた。

■ 「混沌から旅立とう」

26日のメインフォーラムを前に、松本秀作会頭が「今が混沌の時代だからこそ、我々の存在意義を見極め、JCメンバーとして自らが行動するのだ。それが、家族、地域、国を創っていくことにつながり、夢をかたちに、かたちを現実にしていく力となるはずである。私とともに混沌から旅立とう」と力強く語った。

日本JCの政策アドバイザーであり、シンクタンク・構想日本の加藤秀樹代表が、JCへのアドバイスとして「官僚的にならず常に斬新な発想を持つこと、構造改革をJCから発信すること、自ら夢を持ち真に豊かな生活を実現できるよう努力すること」の三つを挙げた。

国際日本文化研究センターの川勝平太教授が、21世紀の日本国のあり方について講演を行なった。「過去50年、日本はアメリカンドリームに向かってまい進してきた。アメリカンドリームは自らの名誉、力、強さを誇る個人のサクセスだった。しかし、日本人にとってそれが真の目的になるのだろうか。日本人のジャパニーズドリームは、個人のサクセスではなく、広く地球社会の幸福を願うところにこそある。自己の生活や地域に根ざしたところから、地球社会の幸福を目指すことこそ、真の夢になり得るのだ」と、日本の歩むべき方向性を示した。

すがすがしくも凜と張り詰めた冷気が漂う中、京都国際会議場で新年式典が行なわれ、2002年度への期待と仲間との再会に目を輝かせ、会場は熱気に包まれた。

開会宣言の後、荒巻京都府知事、榊本京都市長から祝辞をいただき、JCI役員から日本JCの活動に期待する声が、また海外LOM役員からは今年の意気込みをうかがわせる力強い言葉が、我々に向けて贈られた。

2002年度、日本JCのスローガンが発表され、埼玉中央JCの金子一夫君の「時代を超えて時代を創る。今、始まる『新JC創世記』」に決定した。

また、2002年度の協働事業である「日本経済再生プラン」「746から創める日本再生絵巻」「10%会員拡大運動」「『教育改革地域会議』の実践」をテーマにしたセミナーが開かれた。

「日本経済再生プラン」セミナーでは、「これからのJCは、リーダーシップを学ぶだけでなく、仲間たちと積極的にビジネスも行なっていこう」という藤田徳之委員長の呼びかけでスタート。プランは「JCメンバーの活力の源は、家庭であり企業であり、そして地域である。その中の地域の特色を再検討し、その財産・ポテンシャルを再認識することが大切である。地域経済の再生なくして日本経済の再生なし」という柱のもと、地域経済の主体者たる中小零細企業者としての声を国家に提言しようという試み。そのためLOMとの多様なコミュニケーションを通して「日本経済の再生プラン」を作成していく。工程表は、参画LOMとNOMとの協働事業により、3カ月間3回の地域経済懇談会を通して議論および意見交換会を行ない、7月のサマコンにおいて発信されることになった。

「『教育改革地域会議』の実践」セミナーでは、高く大きな視点を持ち教育を考え、各地域でそれに基づく行動を起こし、文部科学省が音頭をとった「教育改革国民会議」とは一味違った「子を持つ親の世代である」JAYCEEの特色を生かした発信をするという趣旨が確認された。具体的には「全国版教育改革

地域会議」を開催し、日本JCならではの「教育における個と公の調和」の確立を目指す。セミナーでは、協働事業の指針の説明の後、意見交換会が行なわれ、不登校、いじめ、学級崩壊など現状の教育システムの問題点が次々に指摘された。教育問題の一つの解決策が喚起され、よりよい未来を目指して活動を続けていくことが確認された。

■ “豊かさ”と“幸せ”を明確に

27日、松本会頭の所信表明が行なわれた。

「小泉首相の『改革』が尋常とも思われるほどの高い国民的支持を得て着手されている。この改革には地方への資金のばら撒きに代表される、国と地方との関係の改善や、ハコモノ行政中心の公共事業や、補助金・交付金事業の見直しなど、高い期待を集める事項が含まれている。ところが、改革が進めば進むほど人々の不安を掻き立ててしまう。単に『痛み』が具現化してきたからなのだろうか？ 私はそうではないと思う。いま国民は少々の『痛み』は覚悟の上、今を変えることのできる可能性に賭けてみようという選択をしているのだ。ではなぜ、不安になるのか。改革の目指す方向性が明確とはいえないことに原因がある。よく小泉改革は掛け声ばかりで具体的中身がないと言われるが、私はまったく逆を感じている。個別の具体的論点は出ているが、問題はその個別論点に対する『将来像』（ビジョン）が結べていない点にある。改革を支え、成就させたのちにあるはずの国家像が見えない。だからこそ不安を感じているのではないだろうか。もし、この『明確な国家像』がないとしたなら、改革の取捨選択を決める基準は、



京都会議（'02）会頭所信表明

経済を“市場競争”という資本の流れにゆだねることになる。そして、あらゆる大切な決定は『民意』という世論の流れにゆだねられ、曖昧な判断の中、揺れ動く時代がまだまだ続くことになり、混沌の状況から脱しきれなくなる。そんな中、現代を生きる我々の意思表示を明確にし、はっきりとした意思決定をしようではないか。まず、青年が唱える『明確な国家像』を世に問うことから始めよう。私はその『明確な国家像』とは、同じ志を持つ仲間を信頼し、賞賛することのできる社会の確立であると思う。官僚、銀行、証券、食品、医療などすべての領域で信頼が失われている現在、悲しいことに、誰かが骨を拾ってくれることを信じ、命をかけて仕事に取り組むことが割に合わないという価値観が蔓延しているのが現状だ。しかし、一生懸命がんばる姿は、少しもかっこ悪いことではなく、必ずや厚い信頼と、頼もしい人間として讃えられることを実践していこう。日本独自の歴史、文化からなる『自前の国家像』をつくる。社会の公益のために行動する社会起業家精神にのっとり、痛みを恐れない、志を基準としたメンバーとともに、古来の武士道の世界にも通じる『人はどう行動すれば美しいのか』ということを常に意識し、自分の生き様を一個の道具として、社会に貢献するかを求めていきたい」と述べた。

■ 日本経済の構造改革提言に向けて

日本経済に閉塞感が漂う中で、松本会頭は「日本の青年会議所の特性を活かし、地域に根ざした全国747の青年会議所の意見を集約し、それを基に日本経済の構造改革を提言提案してゆきたい」と述べ、その思いを具体的に行動に移すべく「経済の協働事業」に着手した。これまで、日本JCが経済に切り込むのはタブーともされる中での覚悟を持った取り組みとなった。プロセスは「参画LOM理事長懇談会」を通じ、各地域から現場の生の声を拾い上げながら再生プランを練り上げた。

5月31日にJC会館で開かれた第3回地域経済懇談



第3回地域経済懇談会（02）

会で、松本会頭は「協働事業を進めていく中で、特に、地域の声を重視して運動を進め、国家提言をつくる中で、その地域からの問題点を収集してきた。これからはこの提言を、いかに地域で進めていくか。市政などへ働きかけていくか。夢をかたちに、かたちを現実にしていく。その真価を問われている」と述べた。

各LOMの理事長からは「再生プランは汎用性のあるもの以上に、地域の事情に合う情報に期待している。参考プランを取捨選択していけるようになればいいと思う」（奈良JC、小林茂樹理事長）、「JCで商売はご法度とされるが、LOMではだんだんとなくなりつつある。というのもLOMで“I LOVE JC”という企業、家族、社会に価値を認められる団体になるよう運動を進めてきた効果だと思う。一般的に、利益を出していくことに後ろめたい気持ちになる場合があるが、きちんと適正な利益を出し、社会へ貢献するという考えで協働事業に賛同し、再生プランに協力していきたい」（福井JC、西尾研二理事長）、「まじめにがんばっている企業を助けられるような融資ができるようになればと考えている。また、中小企業に公平な政策をやっていただくことが大事だと思う」（宇和島JC、伊勢家勝正理事長）といった考えが示された。

■ 悲願の開催、JCI-ASPAC 仙台大会

5月16日から5日間、第52回JCI-ASPAC仙台大会が開かれた。先輩方の「大会誘致」という夢を引



第52回JCI-ASPAC仙台大会（'02）
アワードセレモニー

き継ぎ、17年という長い歳月をかけて開催にこぎつけただけに、関係者の思いもひとしおであった。

大会テーマ「Entrepreneurs in Action—行動する社会起業家」、大会スローガン「しあわせ、仙台」のもと、「しあわせ」の定義を見つける会議がスタートした。冒頭の記者会見では、サルバドール・バトレJCI会頭、マルセロ・フェルナン・ジュニアJCI-ASPAC仙台会議議長から「革命の時代に生きている私たちが創造的、革新的にならなくてはならない」とのメッセージが強調された。

2日目の総会は、各国から400人のメンバーが集う中、省資源の観点からJCI国際会議で初めてとなるペーパーレス会議が試みられた。3日目にASPAC開催記念事業として開かれた仙台JC主催のCOCセミナー「社会起業家が目指す戦略的企業改革」は、経営者をパネリストに迎え、起業家として企業経営に取り組む姿勢、精神、また社会の価値観が変化を遂げる中で今後どのように経営に取り組むべきかといった発言、意見交換がなされた。

■ 日本再生に向けて

サマコン2002が、7月27、28日にパシフィコ横浜を舞台に行なわれ、約1万人のJCメンバーが集まった。

初日の冒頭を飾るメインフォーラムの「日本経済再生フォーラム」では、西川りゅうじん氏をコーディネーターに迎え松井証券代表取締役の松井道夫氏、

鳥取県知事の片山善博氏、サンブリッジ代表のアレン・マイナー氏ら各界のリーダーの、日本経済再生への手がかりについて辛口ながらも的を射た発言が相次いだ。

午後からは「役立つ」をキーワードにした各種セミナーが開かれた。「JCビジネススクール」として「日本経済再生コース」「真・青年経済人コース」「新たなビジネスチャンスコース」、「JCサマースクール」として「市民（シチズン）の未来創造コース」「国家のあり方探求コース」「輝く地域コース」「みんなで考える教育コース」「JC運営コース」などの目的ごとにくられたコースが用意され、1コマ1時間半のセミナーを同じ会場で続けて受講できるという工夫が凝らされた。



サマコン（'02）
日本経済再生フォーラム

■ この国のかたちづくりを熱く議論

2日目の国家フォーラムは、「日本の真価確立」をテーマに、自由民主党の麻生太郎氏、中馬弘毅氏、町村信孝氏、民主党の鳩山由紀夫氏、岡田克也氏、渡辺周氏を迎え、「教育」「地域」「経済」の各協働事業をもとに掲げられたテーマについて「個と公の調和する社会」の確立を目指し議論された。

「教育」は、「教育基本法の是非」「平等、みな同じでなければいけないのか」「文部科学省の解体をすれば地域の教育がよくなる」などの意見が出され、「地域」は、「合併問題、何のための合併か」「国の主体

で平等にするか、地域主体の競争にしていくか」「国の方針を明確にすべきである」と議論され、「経済」は、「競争になったとき、JC、JAYCEEとして弱音を吐かない覚悟があるのか」などの意見が相次いだ。

フォーラムを通じ、混迷を続ける日本的民主主義から真の意味での民主主義へ。重要な局面であることが共通認識として浮かび上がった。



サマコン('02)
日本の真価確立フォーラム

■ 人間力大賞に加藤三彦氏

2002年度人間力大賞授賞式が7月26日、ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテルで開かれ、受賞者10人に人間力大賞ならびに各奨励賞、特別賞が授与された。

大賞は、東北地区秋田ブロック能代JC推薦の秋田県立能代工業高校バスケットボール部監督を務める加藤三彦氏。加藤氏は、1990年に同校バスケットボール部監督に就任以来13年間で20回の全国大会優勝を数え、98年には前人未だの3年連続3冠王(インターハイ、国体、選抜大会すべてで優勝)を達成。能代市ではその活躍を称え、「バスケのまち構想」を展開中で、まちづくりに誠心誠意協力して取り組んでいる点が評価された。

■ 第15回国際アカデミー開催

第15回国際アカデミーが7月23日、神奈川県藤沢市で6日間の日程で開催した。日本を含む世界各地約70カ国から121人が参加、会場は大変な盛況に包

まれた。

地域を率いるグローバルネットワーカーとして育っていくためのプログラムは、1992年度JCI会頭を歴任したアルベール・イリバロンド氏がメイン講師を務めた。「和—知力、活力あふれる多様な個性の調和」「志—JCIクリードに通ずる力強い武士道精神の理解」「革新力—個人の独創力の開発」「コミュニケーション—コミュニケーション力に磨きをかけ、相乗効果として組織のエンパワーメントを図る」の4つのキーコンセプトを共有することができるよう再構築されている。

27日午後からはサマコンに合流し、「JCの持つ地球的使命とは何か?」をテーマに200人を超える参加者とともにEIAフォーラムに臨んだ。JCの持つ国家を映す鏡としての役割などの問題意識を確認し、国家を超えた地域共同体実現の可能性について考えた。



第15回国際アカデミー(湘南'02)

■ 北方領土返還事業の重要性を再確認

日本JCが北方領土の早期返還を求める運動を始めて以来、継続的に実施されてきた北方領土現地大会の第33次大会が8月3、4日、根室市内で開催された。JCメンバーの中でも、意識の温度差があることは否めないが、今事業を通じて、返還要求運動がいかに重要な事業であったかを再度確認し、新たに作成する北方領土返還プランを通じてLOMとNOMとの役割を明らかにした。

大会前日に根室JC事務局に大会本部が開設され、インターネットでアンケートを実施。次から次に送られてくるアンケートに実行委員会メンバーのモチベーションも上がった。

大会初日は、北方領土の現状を収録したビデオが上映された後、パネルディスカッション「これからの北方領土～国家アイデンティティー確立のために」が開催された。

コーディネーターは北海道新聞論説副主幹の山谷賢量氏。パネラーは外交評論家の澤英武氏、北方領土返還要求運動連絡協議会事務局局長の児玉泰子氏、作家の上坂冬子氏、根室JC理事長の鈴木新一君、北方領土・日露関係委員会委員長の刑部祐介君が参加した。日露両国に存在する領土の存在がいかに国益に結びつくか議論され、さらにビザなし渡航を経験しているすべての壇上メンバーが北方四島返還後を含め、過去から将来への展望が討議された。

2日目の大会式典では、返還運動発祥の地である根室市を含め、北方四島を取り巻く環境が変化しつつある中、今一度30年余りにわたって継続した今事業の重要性を再確認し、新たな展望に向け返還要求運動の意思統一を図ることが提起された。

■ 第51回全国会員大会、旭川で開催

第51回全国会員大会が、第10回大会以来41年ぶりに旭川で9月26～29日の4日間にわたって開催された。第10回開催時に記念植樹が行なわれたナナカマドの赤い実がたわわに実る中「新JC創世記 新しくにつくりのために」を大会テーマに、「Jaycees, Be Ambitious! 抱け、次代への大志」が大会スローガンに掲げられた。

メインフォーラムでは、逢坂誠二ニセコ町長が「21世紀は微量成分に支配される世紀であり、リアリティある議論が必要だ」と講演。それに基づき4つの協働事業の成果確認が各担当委員会から報告された。そして「夢を現実へ…そして未来へ～協働事業の検証～」をテーマに、構想日本の加藤秀樹代表



全国会員大会（旭川'02）
メインフォーラム

をコーディネーターに、逢坂町長と西川りゅうじん氏をパネリストに迎えて座談会が行なわれ、JC運動の現状とこれからについて議論が交わされた。

29日には、常陸宮殿下ならびに同妃殿下ご臨席のもと大会式典が行なわれた。02年度の集大成となる本大会には、メイン会場そして第2会場とも全国各地から集まったメンバーにより活気に溢れた。

松本会頭より揚原安磨次年度会頭予定者へプレジデンシャルリースの伝達が行なわれ、揚原会頭予定者が力強く挨拶した。卒業式では、卒業生たちが壇上に上がり、詰め掛けたメンバーからこれまでのJC活動に対する感謝の言葉を受け、涙を流す卒業生の姿も見られた。

続いて行なわれた解団式で、松本会頭は「この1年はやはり短かった。地方都市で行なう全国大会のモデルにしたいという思いから始めたこの大会が、5



全国会員大会（旭川'02）

年後10年後に、本当の現実になってその思いが表れてくるだろう」と挨拶。主管LOMとして並々ならぬ苦労とともに誘致運動を繰り返してきた旭川JCの歴代理事長をはじめ川村寿裕理事長と水野弘敏大会実行委員会委員長より最後に感謝の言葉が表明された。

■ アワードセレモニー最優秀賞に佐久 JC

2002年度アワードセレモニーの優秀賞は、まちづくり部門に尾道JCの「尾道寝たきりになら連～心が動けば体も動く～」、教育・青少年部門に鳥尻JCの「久高島“沖縄留学”」、人間力開発部門に佐久JCの「信州SAKU音楽祭佐久ミュージカル“夢さく物語”」、国際関係部門に磐田JCの「ホップ・ステップ・キャンプ Be Friends 世界で囲もうキャンプファイヤー」が選ばれた。

また、会頭特別賞には松山JC「第4回俳句甲子園全国高校俳句選手権大会」が選ばれた。そして、その中から佐久JCが最優秀賞の栄誉を勝ち取った。



全国会員大会 (旭川'02)
アワードセレモニー

■ 世界のNGOの方向性を学ぶ機会に

日本JCは2001年12月、永年の夢であった国連DPI(広報局)にNGOとして正式認定を受けた。日本JCが、JCIという枠を超え、まったく新たな公組織とのかかわりの中で、世界のNGOが考える方向性やスタンダードを学ぶことができる貴重な機会となると期待している。9月9～11日にニューヨーク国連本部で開催された「第55回国連NGO/DPI総会」に

土屋直前会頭を筆頭に前年度国連担当委員会メンバーの一行12人が出席した。

NGOは、地域、国家あるいは国際レベルで組織された、非営利の市民ボランティア団体を指し、明確な使命遂行を目指し、さまざまな役務と人道的役割をこなし、市民の関心事を政府に提示し、政策を監視するとともに、コミュニティー・レベルの政治参加を奨励している。総会に参加するNGOは特に国連が定めたカテゴリーのどれかに特化して参加し、活動したことを発表すると同時に他団体への協力と支援を呼びかけるスタイルを取っている点が特徴といえる。

総会では、さまざまなNGO団体がその考え方や取り組みに関して積極的な意見交換をしながら、真の世界平和のためにNGO、市民一人ひとりが何をすべきなのか、互いがどのような活動を行なっていくべきなのかを話し合う機会となった。

日本JCグローバルネットワーク委員会では、国連から得られる情報の提供を心がけ、LOM運動の一助としてもらえるよう努めてきたが、今後も国連DPIとの連携の可能性を追求しつつ、かたちになるものを探っていく必要がある。

また、ニューヨーク同時多発テロからちょうど1年を迎えた時期の開催となり、JCメンバーから預かった義援金を土屋直前会頭がニューヨークコミュニティ・トラストへ寄贈した。

■ 日韓パートナーシップ宣言に調印

2002年は、日韓共催のサッカーW杯が開催された。アジアネットワーク委員会では日韓JCが両国の関係にどのように貢献していくべきかを提示するという命題が与えられた。

日韓JCは、日韓国交正常化前年の1964年から交流が始まっており、現在まで両国で205のLOMが姉妹関係を結んできた。こうした歴史を踏まえ、5月のASPAC仙台大会において、日韓56人の代表による「日韓理事長フォーラム」を開催し、これまでの交流の意義を再認識するとともに、現在の問題点、未来に向



日韓パートナーシップ宣言（'02）

けての展望などを約700人の来場者とともに考えた。

この意義深い交流の取り組みを後世に伝えていくために、そして日韓のパートナーシップの現在・過去・未来を確認することを目指し、宣言文の策定作業が進められた。

互いを取り巻く環境の違い、歴史背景に根ざした考え方の違いなど作業には多くの苦勞も伴った。しかし韓国JC国際室との侃々諤々の議論を経てけんかしては仲直りを繰り返しながら少しずつ問題を解決し、ついに「2002年日韓パートナーシップ宣言」が完成をみた。

宣言文の内容は以下の通り。

我々日韓の青年会議所は
JCIクリードを掲げる仲間として、
友好的な未来を志向し、
互いを尊敬し合い、
開かれた国益を求めて、
世界平和を願い
率先して行動することを宣言する

松本会頭、揚原次年度会頭予定者をはじめ委員会メンバーを合わせ総勢30人が10月18～20日の日程で、韓国JC50周年式典・第51回大会に参加した。調印式では、韓国JCメンバー3千人が見守る中、松

本会頭と朴中央会長が互いにサインを行ない、両手でがっちり握手を交わした。日韓JCにとって新しいかたちが現実になった瞬間を迎え、大きな感慨に浸ることができた。

■ 奥本君が次年度 JCI 副会頭に

第57回JCI世界会議ラスベガス大会が11月23～29日に開かれ、日本JCは、東広島JC奥本松樹君の次年度JCI副会頭就任と2004年世界会議福岡大会の実現を胸に参加した。

奥本君は26日の立会演説会において見事な演説で大きな拍手を受け、翌日の投票では無事トップ当選で就任が決定した。また、後者については、九州地区協議会の結束により、250人もの「赤（い半纏）の軍団」がチャーター便で乗りつけ、27日の総会では威勢のよい祭りの掛け声とともに現れ、圧倒的な迫力を見せ付けて開催誘致をアピールし、開催地に決定した。

注目のアワードセレモニーでは、枚方JCの故和泉圭祐君にホアキン・ゴンザレス賞が、大阪JCに国際関係賞が、そして今回、本場米国JCを300人ほども上回る約900人の登録者数を誇った日本JCが最優秀NOMを獲得した。

JCI会頭招待晩餐会では、世界的な指導力を持ち、社会開発組織を謳うJCI構成員が、地球社会の発展に寄与すべく友情を深め、次年度のコペンハーゲン大会、また長野で行なわれる国際アカデミーなどでの再会を願いつつ乾杯した。



第57回JCI世界会議ラスベガス大会（'02）

■ 2003年、「誇り高き、人の時代へ」 新体制始動

1月16日から19日の4日間にわたり、2003年度京都会議が開催された。開催テーマは「誇り高き、人の時代へ」。全国から約1万1000人のJCメンバーが集まった。

初日は下鴨神社の新年初祈願から始まった。第52代揚原安麿会頭をはじめとする日本JC役員、ならびに平井誠一京都JC理事長ら総勢18人が参詣した。

続いて、揚原会頭、西野晃透副会頭、朝比奈秀典近畿地区協議会会長、下川和馬京都ブロック協議会会長、平井誠一京都JC理事長が京都府庁を訪ね、山田敬二京都府知事を表敬訪問。地方分権、教育問題などについて意見を交わした。恒例の京都商工会議所での記者会見では、揚原会頭が本年度の会頭所信、基本理念、基本方針を発表。さらにJC活動の重点分野として、国民の意識改革、教育問題、JC会員の経営者研修、JC運動の情報発信の4つを掲げた。

日本JC役員団歓迎・京都市長レセプションでは、

榊本頼兼京都市長の挨拶の後、伏見工業高校ラグビー部総監督の山口良治先生からJCへの力強いエールが送られた。

18日は、イベントホールで雅楽の音色が響き渡る中、会員同士が交流を深める場である「名刺交換会」が開かれた。揚原会頭は「緊張感を持って集まっている京都会議だが、温かいものを持って帰ってほしい」と縁の大切さを強調。「日本JCの運動の発信」をテーマにした、経営コンサルタントの大前研一氏を迎えた基調講演、大前氏と揚原会頭との対談が続いた。大前氏は、日本JCが掲げる「日本改新」を捉えるに当たり、「まず国や経済、会社と何でもそうだが、よくするためには悪いところを直そうとしてもダメだ。その原因の元を抜本的に直すか、まったく別のことをやり始めないと良くはならない。日本の悪いところは中央集権。1億2000万人を超える人口が一つの答えを求めるという前提は成り立たなくなっている。世界を見ても今までの繁栄の方程式とまったく異なっている。日本は地方自治へ振り子を振り、世界経済と相互作用する単位として道州制を取り入れ、5



京都会議（'03）
第112回定時総会・第17回共済会総会

年間の任期が担保された知事が政策提言する。こういう突破口を開くしか道はない。各地方に組織を持ち、若い人たちが構成されるJC運動こそ期待でき、日本の大改革へと導いてもらいたい」と述べた。

同日、「公開討論会のすすめ」「地域主権実践への第一歩」「三つ子の魂」育成運動などの各セミナーも活況を呈した。「公開討論会のすすめ」セミナーでは、統一地方選挙を控え政策重視型の政治の実現と民意を反映した政治システムの構築に向けて、公開討論会の具体的な効果や実践方法などが発表された。その後、長野ブロック協議会会長の林勇次先輩を迎えて、2000年長野県知事選挙での開催実例が紹介された。候補者の争点を明らかにし、投票率をアップするためにも各地域での積極的な活動に期待が膨らんだ。

「地域主権実践への第一歩」セミナーでは、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科の金子郁容教授を迎え、「地域における市民主体の問題解決型コミュニティ構想」について語っていただき、「三つ子の魂」育成運動セミナーでは、子どもの成長に多大な影響を与える幼少期の教育改心を目指す「三つ子の魂」育成運動について議論が行なわれた。子を持つ親世代であるJCメンバーたちの関心を集め、多数の立ち見が出るほどの盛況となった。



京都会議（'03）
「三つ子の魂」育成運動セミナー

■ 「価値ある結果を出すために 自分の限界と闘う」

最終日は、新年式典が開催され、来賓には前田完治第23代会頭、麻生太郎第27代会頭、鴻池祥肇第

29代会頭ら歴代会頭のほかブルース・レクター 2003年度JCI会頭らも参加いただいた。

来賓を代表して山田京都府知事が「地域の力と個性を発揮して前進しなければ未来はない。この京都から始まり、成果を収められることを祈る」、また梶本市長が「逆境の時代にあつてこそ、閉塞した時代を打ち破る若い力が必要。これを好機と捉えて果敢に立ち向かってほしい」と挨拶された。

揚原会頭の所信表明では、「通常、人間は弱いものだ。時には自分の人生のために、他の人を犠牲にすることさえもしかねない。その反対に、自分の人生を、他の人のために生きることは、実際には、人としての『強さ』が必要だ。一人ひとりの『貢献する心』を活かしてくれる可能性、一人ひとりに自分の『貢献の形』があり、今の自分の精一杯があるはずだ。一人ですべてのことはできないが、同志が集まって、その『心』を結集して、『志』を『力あるもの』にすることができるのだ。『貢献する心』から生まれる行動とそれに対する誇り。そんな気持ち呼び覚まし、集め、育み、やがて社会を動かす力に変えていく運動。それがJCだと思っている。

かつてより、経済的にも時間的にも、JC運動のしやすさは確実に変わった。逆に、たとえ経済環境が厳しくてもがんばっているという点では、むしろより純粋で気高いものになっているかもしれない。余裕があるからするJC運動ではなく、心の豊かさを集めるJC運動を、目指さなければならない。数々の修練の結果得られる自分自身の成長だけでなく、人生を通して得られる充実感として、自分の視野を大きく広げ、40歳の卒業を終わりとすることなく、人生一生の「幅」を広げてくれることが、結果的にJCが与えてくれる『心豊かな人生』という報酬なのだ。これが、これからのJC運動の進むべき方向だと感じている。新次元へのBreakthrough!「日本改新」～誇り高き、人の時代へ～。

時代は非常な勢いで加速している。新しい時代のJAYCEEとして、新しい時代の経済人として、時代

に合った、時代を先取りするいろいろな能力をお互いに磨き、身につけ、自分の可能性に挑戦していこう。リーダーは常に一步先を一段高い視点を持ちながら、行動で示していかなければならない。自らの『貢献する心』と『内なる基準』を確立し、『公共心』と『アイデンティティ』を両立させた、期待される社会の一員として応えることを、人生の誇りとして励みとしよう。

自分自身を見失わず、『夢』を目指してがんばろう。大切な一度限りの人生だ。あなたの周りのすべての人と、一緒に『感動』できる社会にしよう。一人ひとりのがんばる気力が社会を幸せに導く原動力。『誇り高さ、人の時代へ』

力強い言葉には2003年への希望があふれ、JCメンバー5万人の思いを運ぶ新たなる船出となった。

■ 全国縦断「日本改新」会議がスタート

日本JCが創立以来初めて全国の都道府県知事を訪問する全国縦断「日本改新」会議が、2月12日、国松善次滋賀県知事との会談を皮切りにスタートした。揚原会頭は「全国には元気な知事が多い。日本改新のために、知事が当選したら国政の議決権の一票を持ってもらいたいと考えているがどう思うか」と提案。国松知事は「実に大胆な提案。可能性は別にしてもおもしろい。地方が国を変えるということは

はっきり言える」と答えた。さらに国松知事は独自の県版特区の研究費を03年度予算に盛り込んだことなどを詳しく説明するなど「日本改新」の手がかりを探るべく活発な会議となった。

揚原会頭は「知事という仕組みを活用し地方から中央を変えるという、日本JCの考え方について、全国の知事をお願いしていきたい。知事本人から考え方の裏づけを取るのが狙いだ」と会議の目的を語った。5月までの3カ月間で全国47都道府県の知事との会議を目指して始動した。

3月20日には、石原慎太郎東京都知事を都庁に訪ね会談。揚原会頭はまず「国政が停滞する中にあって、全国の知事たちは非常に活発な活動をしている。その知事のパワーで国政に風穴を開けることができないものか」と切り出し「全国の知事に国政の議決権一票を持たせる」という提案に対して意見を求めた。石原都知事は「国会議員が多すぎて、750人に対して知事47人というのは意味がない。フランスのように地方自治体の長と国会議員、閣僚が兼任できるシステムがあれば、まだ知事が議決権を持つ意味はあると思うが」と知事への議決権付与に対しては否定的立場を明らかにした。さらに「JCメンバーは若いだからもっと突飛なことを考えたらどうか」と発奮を促し「政治的にニュートラルな組織であるJCだから

こそ、自由な立場で国会議員の定数削減と一院制への移行など国会議員では言えない問題を取り上げるべき」と強調した。

話題は憲法にまでおよび「今の憲法は政治的生き立ちからいって歴史的正当性がないことを国会で提唱したらいい」と憲法改正問題にも取り組むようアドバイス。「国会が現憲法に歴史的正当性のないことを認定すればもっと物事



日本改新（'03）
石原慎太郎東京都知事と対談

は動いていくはず。憲法を変える、変えないではなく、ゼロから出直しすればいい。それならすぐに新憲法ができてしまう。今の憲法のいいところは残せばいい」とその意味を熱く語った。揚原会頭は「我々が提言する“自主再制定”で、4月の沖縄フォーラムで発信する予定」とJCの方針を説明した。

3月30日には福島市で、かつて日本JC副会頭を務めた佐藤栄佐久福島県知事と会談し、地方分権や教育改革、安全保障などについて幅広く意見交換した。佐藤知事は教育改革について「全員が一方向に行こうとした時にノーと言える、シラク大統領のような子どもが育ってほしい」と指摘。安全保障問題では「平和はガラス細工のようなもの。JCもそういうことを冷静に考えるリーダーの養成に力を入れてほしい」と要望した。

■ ネットコンファレンスを初めて開催

ブロードバンド環境の整備が進展する中、日本JC初の試みとして、会場の講義の様子をインターネットで中継する「JCネットコンファレンス」が5月11日、六本木ヒルズ内アカデミーヒルズで開かれた。従来の集合型コンファレンスのように会場、宿泊施設、交通手段などのインフラに左右されずに開催でき、参加者の移動時間や参加費用を軽減できるメリットを探る目的も検証された。

第1部は、講師にハワード・ベーカー(アメリカ)、武大偉(中国)、ヘンリク・シュミーゲロー氏(ドイツ)、各駐日特命全権大使を迎え、「外から見た日本、内から確立する基準」をテーマに講演。

第2部では、第2回ビジネスアカデミーとして、講師に三優監査法人統括代表社員公認会計士の杉田純氏を迎え「21世紀のリーダー像—成功するリーダーと社会企業家精神—」をテーマに講演された。会場では130人のメンバーが参加。また、宜野湾JC、札幌JC、神戸JCのメンバーは双方向カメラでアクセスがあった。

当日は800件のアクセスがあり、放送終了後は、

再放送の要望も寄せられ、5月20日から始まるオンデマンド放送の意義を再確認できる結果となった。都合のいい時間に参加でき、簡単に記録保存できるというメリットも確認された。



JCネットコンファレンス（'03）

■ サマコン、「日本改新」へ

7月19、20日、JCメンバー約1万人を集めてサマコンが開催された。テーマは「『日本改新』へのソリューション」。

初日の「国家構想フォーラム」が、「立国は公にあらず私なり!!」—依存型からの脱却!!真の自立による地域主権型社会の創造—をテーマに開かれ、3つのセッションに分かれて開かれた。セッション1の「地方分権改革の方向」では、総務大臣の片山虎之助氏が「市町村合併がスムーズに進んだのは、その地域のJCが先頭となって運動を起こしてくれたことが大きい」とJC活動を評価するとともに、「三位一体の改革」について、その制度・政策改革ビジョンを示し、「権限・財源だけでなく人材も国民の一番身近にある市町村に集まるようになればこの国は大きく変わる」と地方中心の新しい国づくりの必要性を説いた。

セッション2の「青年会議所の主張」では、日本JCの西野晃透副会頭が、JCからの地域主権型社会への実現に向けた8つの提案、①地方行政の財政的自立、②地域首長の国政議決権保有、③地域間の自由



サマコン '03

貿易協定、④市民本位のPFI活用、⑤地域独自の教育制度、⑥税1%を投じるNPO選択制度、⑦市民会議の導入、⑧公職選挙法の改正、を発表した。

セッション3では「地域主権型社会の創造に向けて」をテーマに、総務大臣の片山虎之助氏、岩手県知事の増田寛也氏、早稲田大学大学院教授の北川正恭氏、日本政策フロンティア代表の小田全宏氏、揚原会頭が参加して行なわれた。三位一体改革について、地方行政の立場から、増田知事は「課題は人の問題。権限と財源だけでなく人も国から地方へ移すべきだ」、北川教授は「この改革もおまかせ民主主義に陥っている。国民もこの改革で生活が変わることを知ってほしい」と問題点を挙げた。マニフェストについて小田代表は「各地で公開討論会を開いているが、今マニフェストを掲げた首長を選ぶ運動も進めている。その検証をJCの皆さんの力で実現してほしい」と期待を表明。揚原会頭が「JCでは公開討論会と運動の実践を踏まえて、選挙期間中のマニフェストの自由配布も含めた公職選挙法の改正を法務省に提言している」と述べたのに対して、片山大臣は「選挙運動の抜本的な見直し、マニフェストの法的な位置づけなどを含む公職選挙法改正を検討している」

と国の動きを説明した。

2日目は、日本JCと内閣府による「規制改革による日本経済及び地域の活性化」をテーマにした「日本改新タウンミーティング イン JCサマーコンファレンス 2003」が開かれた。出席者は、行政改革担当・規制改革担当大臣の石原伸晃氏、構造改革特区担当大臣の鴻池祥肇氏と揚原会頭。JCメンバーに加え一般来場者を合わせ2335人の参加者で会場は活気にあふれた。

規制改革について石原大臣が「日本には優れた能力、テクノロジーがあり、志の高い経済人が多いのに国の活性化につながらないのは、国の行き過ぎた規制があるからだ。規制緩和への取り組みは進んでいるものの、技術の進歩に追いついていない点もある。民間の叡智を持って新しいデファクトスタンダードを押さえれば、世界でも通用する。祖父、父の代と違った経営をしようとしているJCメンバーが若き経済人の感性で新しい事業へとつなげてほしい」と語った。揚原会頭は特区政策について「これまで29人の知事を訪問し会談したが、特区政策に対して積極的な方、様子を見ています方、まだまだ熟してから考えるという方などいろいろおられた。しかし、特

区は社会システムの変化をもたらしたはずだ。JCとしては地域主権社会の実現にもつながるこの政策を後押ししていきたい」と述べた。

鴻池大臣は「命にかかわることはしっかりと規制してもらいたい」との意見に対し、「医薬品の中でも、目薬のようなものであればコンビニで24時間販売できるようにするのはいいと思うし、病院の株式会社化も医師が経営するというかたちであれば特長のある病院経営が実現するだろう」と答えた。石原大臣も「消費者が自己責任を負う社会を規制改革でつくっていくことが大事。そのためには巨大企業の独占を排除することや、経済的規制を緩和することが必要だが、一方で命にかかわることや社会を維持していく上で必要な規制は強化しなければならない」と主張した。

■ 人間力大賞グランプリに柴田氏

従来の各奨励賞に、内閣総理大臣奨励賞および全国知事会会長奨励賞が加わった17回目人間力大賞グランプリは、癒しロボット開発の柴田崇徳氏（となみJC推薦）が選ばれた。柴田氏はギネス認定の「世界一の癒しロボット」であるアザラシ型ロボット「パロ」君を抱えて壇上に上がり、その癒し効果を存分に披露した。

他の受賞者は、利き酒師のセーラ・マリ・カミングス氏、スリランカで国際交流支援活動続けるTBS



人間力大賞（'03）授賞式

アナウンサー秋沢淳子氏、バドミントンだけでなく全スポーツの普及活動を進める陣内貴美子氏、自ら作詞・作曲する歌「gift」で自殺撲滅運動を展開する沢田千可子氏、中学2年生の時からボランティア活動を続ける22歳の山本有紀氏など。終始華やかな雰囲気包まれた。

■ 第52回全国会員大会、福井で開催

福井は、1945年の大空襲、23年6月の大震災とその1カ月後の大水害と、短い期間に相次ぐまちの破壊という苦難に見舞われながらも奇跡的な復興を遂げてきた。不屈の気概とフェニックス精神のまち福井で10月2～5日、第52回全国会員大会が開かれた。大会スローガンは「越えろ。そして、前へ。—今日とは違う自分に会おう—」。全国から集まった1万4000人のJCメンバーが福井のまちと一体になった。

出陣式では社殿に揚原会頭をはじめ役員および本大会関係者一同が打ちそろい、厳かに大会開催期間の安全と成功を祈願した。結団式では、揚原会頭が「大会に向かって準備したものをいかに発揮してほしい」と挨拶。続いて福井JCの水野直人理事長が「3年の準備活動を経て夢を実現することができたが、今日から4日間でその夢をしっかりとかたちにしていきたい」と述べた。その後、福井県の西川一誠知事、酒井哲夫福井市長を表敬訪問した。

福井ワシントンホテルで開かれた記者会見には、



第52回全国会員大会（福井'03）
宮様歓迎レセプション



第52回全国会員大会（福井'03）

揚原会頭、福井ブロック協議会の岸本正之会長らが出席。揚原会頭から報道陣に、大会の内容と2003年度に取り組んでいる重点テーマを説明した。

4日には、フェニックスふくいまちづくりシンポジウムが開かれ、「The政権選択—その時^{まち}地域が動く—」をテーマに、福井県知事の西川一誠氏、21世紀臨調代表・早稲田大学大学院教授の北川正恭氏、経済同友会代表幹事・日本IBM会長の北城格太郎氏、そして揚原会頭が参加した。

北川氏が「マニフェストによって、破られるはずの公約が守るための公約へと変わる。数値目標、期限、財源などを明確にし、選挙後にその実施状況を確認できるものでなければならない」とその意味について説明。経済界の立場から北城氏は「これまで選挙では“口約”と文字通り口約束だけになっていた。国の政策は迅速に意思決定されなければならないのに、政治の仕組みがリーダーシップを発揮できない形になっている。経済は少しずつ回復の兆しを見せているが、活性化するには政治のリーダーシップとスピードが必要だ」と期待を語った。マニフェストを実行する西川知事は「仕事のスピードが速くなった。職員の意識も高まった。しかし、地方では財源の問題

もある。国としてやる部分と地方、県、市でやることとの分担が必要だ。とりわけ首長選挙の場合、政策と人物をどう結びつけていくかも焦点になる」と判断材料となるリーダーシップについても言及した。また、揚原会頭は福井のまちづくりに向けて福井JCが行なってきた「市民会議」に触れ、「住民の声を発表できる場、議論できる場があれば、そこから出てくる意見やアイデアを市長や立候補者が組み入れることができる。民意とマニフェストとの連携が必要だ」と語った。

メインフォーラムは「“激論”日本を愛する心」をテーマに、月刊「発言者」主幹・評論家の西部邁氏、AERAシニアスタッフライターの田岡俊次氏、評論家



第52回全国会員大会（福井'03）
フェニックスふくいまちづくりシンポジウム

の宮崎哲弥氏、揚原会頭がパネリストとして出席した。

田岡氏は「日本では公的な精神というか、愛国心が欠けている。組織への忠誠心が過剰で、国全体の利益を考えない。だが、よその国と対決するような愛国心、ナショナリストは問題だ」と指摘。西部氏も「排外主義的な愛国主義、民族主義はいけない。いろいろな経緯の中で自分の国ができたことを認めることが大事」と同調し、「国家は自分の中にある。日本の風土、歴史、伝統、言語、人の振る舞い方、感情などに影響を受けて自分が成り立っている」と語った。宮崎氏は「国民は国依存してばかりではなく、自分が国に対して何ができるか考えていかなければこの国の未来はない」と苦言を呈し、最後に揚原会頭は「個人主義になりすぎて、本来我々の心にあるべきものがなさすぎるように思う。今の日本に必要なアイデンティティとは何か。そして自分と自分の周りの社会との関係をもっと深く考えてほしい」と呼びかけた。

爽やかな秋晴れの中、常陸宮殿下、同妃殿下ご臨席のもと、西川福井県知事、酒井福井市長、歴代会頭など多数のご来賓の方々にご出席を賜り、サンドーム福井で大会式典が行なわれた。

福井市民の不屈の精神「フェニックス精神」を語る映像が流れ、福井JCの水野理事長が「あきらめない勇気と新しく生まれ変わる覚悟を持って、越えろ。そして、前へ。今日とは違う自分に会おう」と開会を宣言。揚原会頭は「一人ひとりが自分と相手の夢を大切にしたら、社会はもっとよくなる」とスピーチした。途中降壇し、客席に座る各議長、委員長にねぎらいの言葉をかけ、最後は山田専務理事とかたい握手を交わした。その後、「一人ひとりの頑張る心が社会を幸せに導く原動力になる」とゆっくり1年を振り返り、会場からは大きな拍手が沸き起こった。

■ アワードセレモニー、 最優秀賞は小樽 JC に

福井市文化会館の大ホールに詰め掛けた大勢のメ

ンバーが注目する中、2003年度アワードセレモニーが開催された。優秀賞に輝いたのは、教育青少年部門が新宮JCの「夢の学校」、まちづくり部門が小樽JCの「小樽雪あかりの路」、人間力部門が秋田JCの「いのちがつながる輝きのち」、そして国際関係部門が黒部JCの「北方四島交流青少年受入事業」。会頭特別賞には、名寄JCの「チームジャンプ in NAYORO」、小田原JCの「Bit Guide ～まちの小さなガイドさん～」が選ばれ、小樽JCが最優秀賞に選ばれた。

■ コペンハーゲンで JCI 世界会議

11月3日から7日までの5日間にわたり、デンマークのコペンハーゲンで「More than a Fairytale (童話の世界よりすばらしい会議!)」をテーマに第58回 JCI世界会議が開催され、日本からも多くのJCメンバーが参加し、各国メンバーと深いフェロシップを築いた。

初日の3日には、日米合同常任理事会、日韓合同常任理事会などが開かれ、夕方に日本JCの結団式が行なわれた。4日は、総会1が開催され、午後の2004年度JCI役員立会演説会では奥原祥司君が熱弁をふるった。5日の総選挙では、日本JCからは奥原君が副会頭に、JCI会頭にはベネズエラJC出身のフェルナンド・サンチェス・アリアス君が選出。夜には、日本JCの会頭招待レセプションが開かれ、正装した役員一堂が並んで各国のお客様をお迎えした。



第58回JCI世界会議コペンハーゲン（'03）

■ 2004年、「スローソサエティ」の 実現へ

2004年の京都会議は1月22～25日の日程で始まった。テーマは「大きな環と小さな環とが響き合う『スローソサエティ』の実現へ～『破格』作法と『創格』の気概を胸に」。全国739LOMからJCメンバーが集まったの盛大な開催となった。

今冬一番の寒さを記録した氷点下の冷え込みの中、下鴨神社で新年初祈願が行なわれた。第53代米谷啓和会頭はじめ日本JC役員、岡本正京都JC理事長ら総勢17人が厳かに新年度JCの成功を祈願した。

続いて米谷会頭、高竹和明専務理事ら6人が、山田啓二京都府知事を表敬訪問。「米谷会頭が掲げるスローソサエティは京都そのもの」と今年のJC運動に大いに興味を示され、スローをキーワードに活発な意見交換がなされた。

会頭記者会見で米谷会頭は、今年の日本JC運動における4つの重点テーマ、「新しい国家アイデンティティの確立」「スローソサエティの実現」「日本JC“発”教育基本法改正運動の実施」「世界の中で日本が取り組むべき行動の提言」について説明した。さらに南昭彦副会頭が4つのテーマを日本JC運動の公約とした「日本JCマニフェスト2004」を発表、その目的を述べた。

午後には、日本JC役員団歓迎・京都市長レセプションが開催され、榊本頼兼京都市長、村田純一京都商工会議所会頭、川崎純性先輩、山口良治先生より歓迎のご挨拶をいただいた。

24日には第114回通常総会が開かれた後、加藤登紀子氏が基調講演。「739の地域で活動するJCはものすごい力だと思う。今までは大きな容れ物がまず大事だった。国家や政治が変われば、小さい容れ物も変わるんじゃないかと。もちろんそれも大切だが、今私が千葉の鴨川で生活して思うのは、自分の手足で小さなチェンジをすること、家族でできるチェンジ、住む町や市、県で変えていく時代になったこと。地

球環境の活動をしていると、地球規模で考える必要性を感じる。でもそれを変えるのはグローバリズムではなく、小さな地域に分けたローカリズム。日本は古い時代の文化、暮らしが残る地域を持つ珍しい先進国。価値観をチェンジするということは、今までマイナスだったことをプラスに変え、プラスだったことがマイナスだと気づくことなのだ」と、地域から物事を見る視点の重要性を強調した。

「ニューイヤー・ कांग्रेस春の語らい」では、米谷会頭と加藤氏がスローソサエティの目指すべき価値観について語り合った。最後は加藤氏の歌声が響くミニコンサート。会場が盛り上がったのは言うまでもない。

その後、各セミナーが開催された。「マニフェスト型地域創造セミナー」では、飯田成寿議長が「マニフェストの考え方を浸透させていくことで、自分たちの地域を自らつくり上げる」ことを呼びかけた。

「日本のJC“発”教育基本法改正運動セミナー」では、第1部で「教育基本法成立過程の再検証」をテーマに、GHQ監視の下でつくられた教育基本法を改正する必要性が説かれ、道徳教育や愛国心、日本の伝統・文化の継承について、現行の基本法では規定されていないことを問題とした。第2部の「日本のJC“発”教育基本法改正運動の概要」では、「道徳やマナーという基本をもう一度見直し、充実させて育成事業に取り組んでいただきたい」と、LOMでの「次世代育成事業」の推進を訴えた。

また、「スローソサエティ推進セミナー」では、2004年度日本JCと全国のLOMメンバーがともに取り組んでいくスローソサエティ推進運動を、効果的に強く進めていくため参加型セミナーの形式が取られた。スローソサエティの政策的側面の解説と1年間の運動の流れが説明された後、地区ごとに分かれたテーブルでディスカッションが行なわれた。「あなたの地域特性を表現するものは何か」「あなたのLOMで行なわれた事業の中でスローソサエティの推進に当たる事業はあるか」「あなたにとってスローとは何か」をテーマに活発な議論が繰り広げられた。



京都会議 ('04)

■ 自分自身の内なる声に 素直に生きる社会を

25日の新年式典では、米谷会頭が所信表明。「多様なつながりに生かされている社会、これがスローソサエティであるとすれば、その対極にあって現在の社会を息苦しく覆っているファストソサエティとはどのような社会であるといえるのだろうか。それは人々をまず大地から引き離し、次に人々を互いに引き離し、ついには自分を自分自身から引き離してしまった、人間が三重に疎外された社会であるといえる。遺伝子学者のリチャード・ドーキンスは、かつて『利己的な遺伝子』という本を著した。人間は、実は遺伝子の乗り物に過ぎないという衝撃的な説を唱えるものだったが、その表現を借りれば、現在の社会において人間は貨幣の乗り物にしか過ぎないのではとさえ思えてくる。スローソサエティとは、お金や時間というものさしを手放し、つながりと循環のものさしへと取り替えようという、大胆かつ素直な提案なのだ。

では、この失われたつながりをどう取り戻すのか。まず大地とのつながりを取り戻すには、食糧やエネルギーを自給する生活を始めることだ。いわゆる自立した小さな循環社会の確立である。地方自治体においては、法人や個人に自給を義務付ける自給条例の制定が待たれる。また私たちのライフスタイルにおいては、半分農業の生活、半農半工・半農半商・半農半NPOといった「半農半×」という生き方を徐々に選択していくことである。次に人と人とのつながりを取り戻すには、職住一体や職住近接といった都市計画の見直しとともに、まちを車から人に取り戻すグラン



京都会議 ('04)
会頭所信表明

ドデザインにより、家族や地域社会のつながりをハードの面からも紡ぎ直す政策が不可欠だ。自分と自己とのつながりを取り戻すこと。それには自分の外にあるものさしを手放し、内なるものさしを持つことでもある。日々の生活を受身から能動へ、消費から創造へと変えていくことだ。子どもたちへの教育においても、自分の外にある一つの正解を追い求める勉強だけでなく、自分の中にある内なる答えに向かって自分の頭と体と心とで答えをつかみ取る体験が必要だ。このような、人間が大地とつながり、お互いにつながりあい、自分自身の内なる声に素直に生きる社会=スローソサエティとは、実は『懐かしい未来』であるのかもしれない

ゆっくりと語りかけるように説かれたスローソサエティ実現への訴えに会場は大きな拍手で包まれ、米谷会頭が牽引する2004年度の日本JCが本格的に動き出した。

■ マニフェスト検証大会で注文

マニフェストが徐々に定着する中で、2003年11月の衆院総選挙で各党が掲げた政権公約(マニフェスト)の進捗状況などを検証し評価する「政権公約検証・第1回大会」(主催:新しい日本をつくる国民会議=21世紀臨調)が5月12日、東京都千代田区のキャピトル東急ホテルで開かれた。

米谷会頭は、自民党「小泉改革宣言」の進捗度の検証・評価とマニフェストそのものの検証・評価について発表した。評価方法は全国739LOMのJCメンバー約4万6000人のネットワークを生かし、メンバーから直接データを回収した。

まず、自民党「小泉改革宣言」の進捗度の検証については、宣言1~4の中で青年経済人にとって関係の深い「宣言4、思い切って経済を活性化させます」を深く検証している。2006年度GDP名目2%成長を実現します、だが、取り組みが進んでいると『思う』が41%、『思わない』が47%となった。思ったよりひどい評価ではないが、これについてはGDPとい

う評価のものさし自体が実態とそぐわないものになっているのではないかと考えている。最近ではGPIという、真の幸福のものさし、進歩のものさしという指標で測ろうという動きもある。もう一つ。今年度中に中小企業主の個人保証からの脱却を整備します、だが、取り組みが進んでいると『思う』が36%、『思わない』が49%となっている。これは本当に身につまされる話であり、正しい事業をするにも実際のところ個人保証をしないと融資してもらえない。いくらその事業をアピールしても最後には個人保証をといわれる。法としてはいろいろな取り組みが進んでいるとは思いますが、実感としてはまだ遠く及ばないというところだ、と述べた。

マニフェストの評価については「今回参議院選挙前ということでマニフェストのバージョンアップをする時期だという21世紀臨調の提言もあったが、その材料提供として話をしたい。今回のマニフェストを見ても、どのような国を目指すのか、どのような国をつくっていくのかというビジョンが不在であることが最初に目に付いた。各党がマニフェストを提示する際にあらためてこの国が進んでいく方向、形を明示した上で、各論のマニフェストを書いていく流れが必要だと思っている。また、マニフェストで曖昧にしている部分、年金問題もそうだが、今国会で成立する見通しの有事関連7法案を含めた国民保護法についても議論が紛糾することが予想され、やはり書きにくいところほど、このマニフェストをつくるに当

たって十分に政党内で議論し、明確に提示をして選挙に臨む形が望ましいと思う。

前回の衆議院選挙は、初めてのマニフェスト選挙ということで私たちもつかず離れず、地域の人間として自分なりの支持政党、あるいは支持候補者をもってかかわっていたわけだが、そういう中で残念ながらそのマニフェストという単語が候補者の口から出てきていなかったことが、特に地方では顕著だった。マニフェストをきちんと掲げて各候補者が選挙を戦うことによって、官僚主導から政治家主導へ、そして国民主導の政治が実現できるというメリットを十分に意識した選挙が行なわれるよう、今後も更なる運動を推進していきたいと思っている」と述べ、現状への注文とともに、改めてJCとしてのマニフェストの定着に向け意欲を示した。

日本JCのマニフェスト検証の反響は大きく、主要新聞のマスコミにも大きく取り上げられるなど十分な成果が得られた。

■ 2006年 ASPAC、高松誘致が決定

5月22～35日、東洋の真珠といわれるマレーシア・ペナン島で第54回JCI-ASPACペナン大会が開催された。「Brand-new Asia!! from japan (新しいアジアは日本から)」の日本JC参加テーマのもと、エリアブロックから集まった仲間との絆を深めた。

最終日の総会2で、多くの日本JCメンバーの応援のもと、高松JCが2006年度ASPAC高松大会誘致に向けて羽織袴・歌舞伎・ハッピー姿で日本らしいPRを行なった。高松JCは1995年にASPAC開催誘致を決議して以来、約10年間にわたる様々な誘致運動を繰り返してきた。決議に際しては、①海外から多くのJCメンバーを高松に招いて交流することで日本の中での各地域の役割を再認識できるまたとない機会としたい、②高松、香川などの四国の伝統文化に改めて触れることで、地域のまちづくり、まちおこしを再考するきっかけにする、③地域的にも国際的にも、これまで以上の交流と団結が促進され、四



政権公約検証第1回大会（'04）



第54回JCI-ASPACベナン大会（'04）

国地方の発展の一助になる、④大会の運営には多数の市民のボランティア協力をお願いすることで、通訳・運営などを通じた海外メンバーと積極的な交流を促し「地球市民」としての自覚を芽生えさせ、国際社会で活躍できる土壌をこの地域に築く、という4つの目標を掲げた。

高松JCによるPRは盛大な拍手で迎えられ、満場一致で2006年度国際BIDを獲得した。

■ ナチュラル・ステップ運動の本場、スウェーデンへ

スローサエティ実現への一翼を担うナチュラル・ステップ運動の本質を知るべく、運動の発祥地で体感するスウェーデンミッションが、5月30～6月1日に開かれた。米谷会頭をはじめ日本からは40人が参加し、現地でスウェーデンJCメンバー20人と合流した。

ナチュラル・ステップの創設者であるカール・ヘンリク＝ロベール博士の基調講演では「この運動は従来の自然環境の破壊を抑制し、天然資源の効率的な利用やリサイクル、公平な分配などを通して、具体的な目標を設定し実行しながら、持続可能な社会に転換していこう、という考え方に立脚している。考え方を個人・家庭・企業、そして行政の各場面で取り入れ、実際に行動している事例も増えてきている」と述べた。

まちづくりの実践例として首都のストックホルムの中で世界の模範となる持続可能な社会に向けた実践を行なうハンマービー地区を訪ねた。工場・港湾の

跡地を開発してデザインされたこの地区は、すべての物質が循環している。例えば、生活廃水が浄化され、その時に発生する熱エネルギーが暖房に利用され、汚泥は植物の堆肥として活用される事例や、エタノールやバイオガスを利用した交通機関、すべてがリサイクル可能な建築物、雨水を浄化し酸素を含ませて湖に帰すシステムなど、様々な取り組みを知ることができた。

ストックホルム市内は夜になると、高寿命の無水銀ランプの暖かい光がまちを包み込み、レストランではキャンドルの灯を囲む静かな食事が提供されている。スローフードもまた魅力の一つ。遠くから食材を運ぶことは化石燃料の浪費となり、農薬を使用した家畜の飼育が不可能なため、地産池消、しかも安全で健康的な食事が可能になっている。

3日間という強行軍ではあったが、スウェーデンが国として、そして各都市が持続可能な社会に向けたグランドデザインを描いていることを大いに学ぶことができた。



スウェーデンミッション対談（'04）

■ ナチュラル・ステップ運動の取り組みを世界に発信

第2回JCI-UNリーダーシップサミットが7月8日～11日、ニューヨーク国連本部を舞台に開催された。世界50の国と地域から約250人が集い、日本からは米谷会頭をはじめ61人のメンバーを送った。こ

のサミットは、2001年アナン事務総長の提唱で制定された国連新世紀開発目標（MDG）の達成に向け、これまでのJCIの運動を集約し、国連に対しJCIの有益性を認知してもらうこと、そしてJCIの参加者自身がこれまでの活動を共有し、世界平和に向けたわれわれの運動をいっそう躍進させていくことを目的に開催された。

日本JCは、これまで各地区協議会を中心にのべ75回にわたり派遣を続けてきたGTS事業や、本年運動発信を続けているナチュラル・ステップ運動、フェアトレード運動などを発表した。中国地区の診療所建設、東海地区の図書館建設、東広島地区のコミュニティホール建設、医療部会の医療プロジェクト、ナチュラル・ステップ運動が紹介された。

■ スロー色豊かにサマコン開催

1966年に軽井沢において政治懇談会としてスタートしたサマコンが、政治研究・意見交換・提言発表に「経済」という切り口を加えて、東京青年経済人会議を経て、1994年から横浜で開催されてきた。本年度のサマコンは横浜での開催が10回目という節目となり、「FUN to TRY Slow Society! ～スローソサエティを楽しもう」をテーマに市民やNPO、企業などに開かれた大会として行なわれた。

例年のサマコンとは異なり、パシフィコ横浜を中心としたフォーラム・セミナーでスローソサエティを学ぶエリアのほかに、スローハウスの展示、スローカフェの出店をはじめクイーンズスクエア、横浜港大さん橋国際客船ターミナルではスローソサエティを実際に体験してもらうエリアも設けられた。

初日のスローソサエティフォーラムでは、作家でC・W・ニコル・アファンの森財団理事長のC・W・ニコル氏が「日本は美しい曼荼羅の国」のテーマでキーノートスピーチを行なった。「24年前黒姫に移り住んだ時、森の破壊を目の当たりにした。日本に対して自分は何ができるかを考えるようになり、財産をすべて森にした。森は20年の間に様々な生物の育つ、美

しい姿に変わっていく。人間を大きな曼荼羅の一部だと考えてみてほしい。日本の環境が日本人の性格をつくる。漁師が海を守るために山奥で木を植えたり、川の掃除をしたり、東北ではハタハタが増えるまで獲らないように協力し合っているという明るい話題も多い。こういった活動は勇敢で失敗を恐れない一人の人間が仲間と協力して活動を始めている。この国を良くするために、それぞれの地域で自分ができることを考えてみてほしい」と述べた。

パネルディスカッションでは、明治学院大学教授の辻信一氏をコーディネーターに迎え、C・W・ニコル氏、環境ジャーナリストの枝廣淳子氏、積水ハウス環境推進部環境企画課課長の佐々木正顕氏、米谷会頭がパネリストとして参加し、「スローソサエティがもたらす新たなアイデンティティ」をテーマに討論した。米谷会頭は「前提として、企業、地域、家庭を分けていない。私のものさしは循環する時間が流れる場所だ。その場にいたい、作りたいという観点から物事を考えると、すべてどの場においても自然に無理なく行動できる。全国を回ってJCメンバーに、スローなものに大事なものが隠されていて、それが一番の宝物になることがある。今こそ自分のものさしの転換を図ろう、という話をしている」と述べた。

また日本JCによるスローソサエティの取り組み事例が2つ紹介された。瑞浪JCは、「瑞浪のスローフードを喰らふ!」をテーマに、穂の国JCは「穂の国農園」という全国初の循環型市民農園をつくり、ごみ処理に取り組む様子を発表した。

「739ネットワークフォーラム」では、「キャンドルナイトから国民保護法まで」をテーマに739のLOMのネットワーク、4万6000人のJCメンバーのつながりの可能性を探った。

このほか、各委員会が主催するフォーラムも開かれた。経営資質開発フォーラムでは、第1部でトヨタネッツ南国社長の横田英毅氏が「顧客満足No.1経営の実践」というテーマで講演。また、国境なき奉仕支援委員会が主催するナチュラル・ステップセミ



左: サマコン ('04)
スローソサエティフォーラム

右: 第53回全国会員大会
(水戸'04)



ナーでは、国際NGOナチュラル・ステップインターナショナル日本支部代表の高見幸子氏を講師に迎え環境先進国スウェーデンの事例を中心に日本がどのような取り組みをしていかなければならないかについて話をした。

■ 第53回全国会員大会、水戸で開催

9月30～10月3日の4日間にわたり、第53回全国会員大会水戸大会が「奏でようスローソサエティ。スローなものさしを胸に」を大会テーマに開かれた。

30日のナチュラル・ステップセミナーでは、ナチュラル・ステップ・インターナショナル創設者のカール・ヘンリック＝ロベール博士がキーノートスピーチを行ない、「ナチュラル・ステップ運動は15年前にスタートしたが、われわれの活動は環境の持続可能性からさらにビジネスの戦略へと変わってきた。市場は大きく変わっており、生き残るためには戦略を持つ必要がある」と述べた。この後、ロベール博士と米谷会頭が対談。システム思考を学ぶためのワークショップのスキルについての米谷会頭の質問に対し、ロベール博士は「まずはトップマネジメントがフレームワークを理解すること。それからきっかけになるような最初の変革を行なう。それを行なうことによって組織の他の人がついてくる。そして教育プログラムを進んで行なう。組織の一人ひとりがフレームワークを理解すると、ブレインストーミングを行なうことによって新たな意見、アイデアが出てくる、その中から一番いいモノを使っていく。チーム力を活用する一つの方法だ」と述べた。

3日の大会式典では、常陸宮殿下よりお言葉を賜り、橋本昌茨城県知事、加藤浩一水戸市長と来賓の挨拶が続き、その後、「国家の環創造」「地球の環創造」「地域の環創造」「組織の環創造」「JCの環創造」の5グループの活動について各担当役員が報告。アワードセレモニーは沼津JCの「狩野川コリドー」が最優秀グランプリに輝いた。

■ 大いに盛り上がった JCI世界会議福岡大会

第59回JCI世界会議福岡大会が、11月21日から26日にかけて、よかばい“ふくおか”で開かれた。大会スローガンは「We are the BRIDGE.」、大会テーマは「行動する社会起業家」。約100カ国の国・地域から1万2000人に上る国内外のJCメンバーが集まった。

開会式では迫力ある絆太鼓が披露され、秋篠宮殿下ならびに同妃殿下をお迎えし、厳粛なムードの中、式が執り行なわれた。

24日のジャパンナイトでは、「新価値発信」と題し、日本の新しい価値を国際的に知ってもらうことを目的に日本各地の伝統工芸や食文化を広く世界のメンバーに発信した。オープニングでは、大きなスクリーンに日本のアニメ、ゲーム、JPOPを紹介する映像が映し出され、各国メンバーは興味深くスクリーンを見つめていた。

25日の総会セッション5では、2005年度JCI常任副会頭に鷺澤幸一君が選出され、選挙の結果JCI副会頭に小田與之彦君が選出された。また、2004年度アワードセレモニーが開かれ、日本JCは米谷会頭に最優秀NOM会頭賞が授与されたほか、多くの褒章を受章した。最終日に行なわれた日本JC解団式では、米谷会頭より本大会関係者に対し労いの言葉がかけられた。JCI世界会議福岡大会は大成功のうちに6日間の日程を終えた。



第59回JCI世界会議福岡大会 ('04)

第18章 新たなる日本の夢に向かって

2005-2007

■ 景気回復の流れの中

2004年6月に、「米軍と自衛隊の行動を円滑かつ効果的にする法制」、「国際人道法の実施に関する法制」、国民保護法等の有事関連七法（有事法制）が成立した。7月の参議院議員通常選挙は年金制度改革が争点となった。小泉内閣は参院選直前の6月に年金改革法を成立させたものの、選挙では自民党が改選50議席を1議席下回り、民主党が勝利する結果となった。この後、小泉首相は持論である郵政民営化に本格的に乗り出していく。国内景気は2004年度に入り企業部門の改善にも広がりが見られ、遅れていた家計部門のマインドも改善し個人消費が増加する好循環となった。景気はいっそう回復の足取りを強めていく中で2005年を迎えた。

■ 新JC世代がつむぐ夢

2005年1月20日から23日にかけて、京都会議が「JC New Generation 新たなる日本の夢に向かって」をテーマに開催された。「意気と力あふれる新JC世代が創る新たなる日本の夢」に向かう思いを全国のJCメンバーに発信し、2005年度JC運動への熱い思いを共有した。

20日は第54代高竹和明会頭はじめとする日本JC役員及び岡本光弘京都JC理事長ら総勢17人が下鴨神社で新年の初祈願を行なった。その後、高竹会頭、竹村光史専務理事ら5人が山田啓二京都府知事を表敬訪問。記者会見で高竹会頭は、「本年度は



京都会議（'05）

様々な政策を打ち出し、日本JCそのものが社会を変革するリーダーとなっていきたい」と抱負を述べるとともに「JC版ローカルマニフェスト型公開討論会推進」「JC版ナチュラル・ステップ協働運動」などを具体的な政策として挙げた。また、日本JCの憲法改正案を年度内に発表することも表明した。

22日のキーノートスピーチでは、シスコシステムズ代表取締役兼CEOの黒澤保樹氏、早稲田大学大学院教授・21世紀臨調代表の北川正恭氏の二人が登場された。黒澤氏は「GNC（Gross National Cool）」という格好良さを測る指標があり、日本は世界でダントツだ。ところが日本の中にいるとそれがわからない。経済的価値も非常に大事だが、文化的、歴史的、人間的価値観、もしかしたら宗教的価値観もまとめて一緒にやらなければならないのではないかと思う。日本は非常に素晴らしいものを持っているが、もうすこしたたかになって、世界に尊敬されることを目指すことが、私は大事だと思う」と述べた。北川氏は「今までの国と地方は上下、主従の関係だった。それが地方分権一括法で、対等、協力の関係に変わった。そうになると、地方は管理するというアドミニストレーションから、経営するというマネジメントのイメージが変わる。トップリーダーの力量、見識によって地域に格段の差が出てくる。地域の問題を発見する能力、それらを解決する能力のある指導者が出なければ、その地域は後れをとってしまう。パラダイムを変えられるのはトップリーダー、つまり知事や市町村長しかいない。トップにパワーを与えられるのは唯一有権者だけだ。政策を中心とした選挙に変えることによって地域に活力が生まれる。だからぜひとも公開討論会を最大限、皆さんのご努力で開催していただきたい。さらにもう一步、政策に踏み込んでマニフェスト型の公開討論会を開いてほしい」と日本JCの果たす役割に期待を述べた。

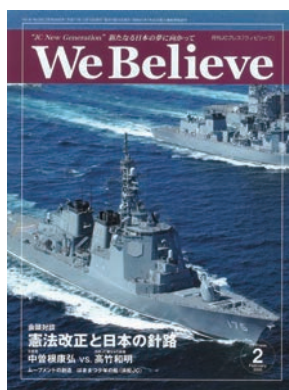
■ 平和とは自分たちでつかみ取るもの

23日の新年式典。会場のメインホールは新たな1

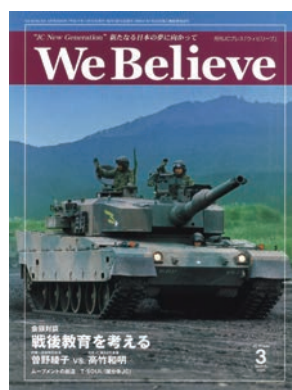
年への期待感でいっぱいとなった。

「日本は今、イラク戦争への対応や自衛隊の派遣を契機に大きな岐路に立っている。戦後の長い一國平和主義という殻を破り、アメリカを中心とした国際社会の一員として平和建設に舵を切ろうとしている。この状況は100年前、ロシアという大国の脅威を前に、その恐怖におびえながら極東の殻の中に閉じこもって生きるのか、またはそれを跳ね除けるために戦うのかとの決断に迫られた時と似ているともいえる。今、100年前の日本から学ぶべきことは、国民一人ひとりがいかに国際情勢を冷静にそして的確にとらえて自らの国の将来を考え、決断を下したかということだ。戦後の民主主義教育を受けた私たちは深い眠りについていた。国家や民族という言葉は使うべきではないと教えられた。気付かないままに、今は与えられた平和の中で暮らしている。平和とは誰かから与えられるものではなく、自分たちが自分たちの努力でつかみ取るものなのである。憲法というものはその国の国柄を表すのである。そして今の日本国憲法のように、過去を全面否定して過去はひたすら悪かったのだという憲法を持っている国はない。その国柄を自発的につくり世界に知らしめる。その根本がなければ何事も自発的に、自分たちでつくりあげる『創造』というものはできない。戦後60年という節目に『JC発日本国憲法改正案』を提案する」と高竹会頭が所信表明をまとめた。

高らかな宣言のもと、高竹会頭率いる05年度の新



話題を呼んだ
機関誌の表紙（'05）



たなる日本JCがスタートした。

■ スマトラ沖地震の復興支援

2004年12月26日、スマトラ島沖に大地震が発生し、インド洋周辺国に未曾有の被害をもたらした。JCIは迅速に対応し、「JCI OPERATION HOPE」を立ち上げた。

高竹会頭は京都会議出席のため来日したケビン・キュリネンJCI会頭とスマトラ沖地震の復興支援をメインテーマに対談を行なった。ケビン会頭は「JCI OPERATION HOPE」について「20万人以上の人々が亡くなり500万人以上の人々がホームレスになった状況にあって、JCIとして世界各国に広がるメンバーが力を合わせて何かできるのではないかと考え立ち上げた。長期間継続していきたいし、NOMやLOM単位だけでなく、個人でも協力できる方法をとりたいと思っている。日本JCの阪神・淡路大震災での支援活動が非常に参考になった。貴重なノウハウを持っている日本JCにはリーダーシップを発揮してほしい」と期待を述べた。これに対し「日本JCには、国境なき奉仕団と地球市民財団の2つの関連団体がある。すでに国境なき奉仕団は現地調査を行ない、この京都会議で報告があった。義援金も募っている。JCIと国境なき奉仕団、地球市民財団、日本JCで連携をとりながら友好的かつ機能的に支援していきたい。今年、国際アカデミーは神戸で開催する。阪神・淡路大震災から10年目ということもあり、そこで災害



スマトラ沖地震の復興支援をテーマに
ケビン・キュリネンJCI会頭と対談（'05）

支援セミナーの開催も計画している。神戸JCメンバーは大震災時の教訓を知っている、そのノウハウを提供したい。復旧の支援だけではなく、その後の自立のためのプログラムも提供しようと考えている」と高竹会頭は協力を約束した。

■ フォーラムで憲法改正を議論

年度内の「JC発日本国憲法改正案」の公表に向けた作業が始まり、早速、高竹会頭は、第2回衆議院憲法調査会公聴会で公述人として意見を述べた。2月18日に第1回JC-JIフォーラムが開かれ、「憲法改正を議論する」をテーマに衆議院憲法調査会会長の中山太郎氏、構想日本代表の加藤秀樹氏らを招き国民にとっての憲法改正を考える場を設けた。



第1回JC-JIフォーラム('05)

議論に先駆けて中山氏は「皆さんの中で憲法を読んだことがある人はどれくらいいますか」と会場に問いかけをした。半数ほどしか手が挙がらなかったメンバーに対し、中山氏は「憲法を読むことから憲法問題が始まる」と述べた。加藤氏は「憲法改正に至る経緯をよく知ることが大切だ。憲法の歴史的経緯を見ると、権力者が暴走しないように見張ってそれを抑える役割を果たしてきたことがわかる。自分たちが権力を見張る側の観点を持ってほしい」と注文をつけた。憲法改正には国会議員の総数の3分の2以上が発議しなければならない。しかし、その発議によって主権者に告知し、国民投票を行わなければ

ならないのだが、そのための国民投票法は存在しない。まず憲法調査会に法案の審議権を認めるという国会法改正案を提出し、新しい権限を付与する。そこで初めて国民投票法を各党が議論できるので、これを採決し、衆参両院で成立させたい。そして皆さんの主権者としての権利が保障される日がやってくる」と中山氏がアドバイスした。

■ ローカルマニフェストの意義を確認

自治体を広域化することで行財政基盤を強化し、地方分権の推進に対応することなどを目的とし1999年から政府主導で行なわれた市町村合併はピークを迎えている。2005年は市町村合併の影響などもあり400を超える地方選挙が予定されている。政治離れが懸念される中、有権者と候補者とのコミュニケーションをどう築くかなど選挙の手法にも注目が集まっている。

日本JCでは、政策本位の選挙制度に向けた運動を推進し、5月13日に、「選挙と地方分権」をテーマに第4回JC-JIフォーラムを開き、宮城県知事の浅野史郎氏と構想日本の加藤秀樹氏をゲストに迎えた。

浅野氏は地方分権に関して「地方分権という言葉は美しいが、これは国と地方がお金を巡って綱引きをやっているようなもの。補助金により支配からの脱却を図るか、従前どおり補助金に頼り続けるか、有権者自身が選択を問われている」と、意識変革を求めた。高竹会頭は「中央集権から地方分権への流れの中で、格差がないように行動できる首長を有権者は選ばなければならない。JCではその環境を整えるべく、マニフェストによる選挙を提唱している」と述べた。

マニフェストという言葉掲げるだけでなく、内容の検証とともにそれ自体が実際の世の中に必要なか検証することも大切である。

■ 医療部会の「空飛ぶ車椅子事業」

日本JCは業種別部会の活動も活発で、同じ業界



業種別部会運営会議（'05）
中央：武蔵泰弘医療部会長

のメンバーが集まるからこそできることにも取り組んでいる。医療部会も長年医療の立場で社会貢献事業を継続してきた。その一つに、2004年からスタートした「空飛ぶ車椅子事業」がある。

日本社会福祉弘済会や全国の工業高校が参加して行なわれている取り組みで、国内で廃棄される予定だった車椅子を引き取り、世界各地へ空輸して相手国のボランティアやNGOの窓口を通して、必要としている人に届けている。すでに10年間で約1600台を修理し空輸している。

武蔵泰弘医療部会長は「カンボジアをはじめ他の発展途上国でも車椅子はまだ足りないのが現状。この事業は集めた車椅子の数だけ、送った数だけ、確実に車椅子を必要としている子どもの笑顔を見ることができる。これからは各部会のネットワークを広げ、それぞれのスキルを発揮していただくことにより、よりよい事業に継続的に発展していけるよう目指していきたい」と話し、その活動は今日に継承されている。

■ エリア会議で日本をアピール

グローバルネットワーク委員会は、世界に広く日本の文明力を発信することを目的に、JCI各エリア会議で「ジャパンフェア」を出展。2005年度は、「音楽」をキーワードにエリア会議参加者と交流しながら相互理解を深める内容となった。併せて日本JCが提唱す

るグローバルモラリティの小冊子を配布した。

アメリカ大陸をカバーするエリアC会議は5月4～7日にブラジル・サンパウロで開かれた。「ジャパンフェア」ブースでは、古来より伝わる神社をモチーフとし、その中心に和太鼓、三味線、竜笛などの和楽器と神棚を据えて日本らしい演出を行なった。ブース両脇には特殊なスクリーンを配置して映像で現代のテクノロジーも表現。ゲームソフトも取り入れ、来場者が楽しめる工夫も凝らした。参加者の目に止まったの



エリアC会議（'05）

は和楽器で、和太鼓を気軽に叩いてもらったほか、ゲームソフト「太鼓の達人」には多くの参加者が夢中になって楽しむ姿が見られた。アワードセレモニーではエリア外最多出席NOMとして表彰も受けた。

続いて11～14日にはベナン共和国コトヌーで開かれたエリアA会議（アフリカ&中東コンファレンス）に出展。和太鼓演奏のDVDと「太鼓の達人」のデモが引き金となり、終日来場者でにぎわった。エリアA会議においてもエリア外最多出席NOMとして表彰を受ける榮譽に浴した。コトヌーには、ビートたけし氏の付き人をしていることでも知られるゾマホン・



エリアA会議（'05）

ルフィン氏が運営するたけし日本語学校があり、郊外には、たけし小学校、明治小学校、江戸小学校も設立されている。事前にゾマホン氏と連絡を取り、それぞれの小学校に鉛筆を寄贈した。また、14日の「JAPAN DAY」では次期大統領候補者らと会合を持ち、テレビ、ラジオの取材も受け、しっかりと日本をアピールした。

さらに、エリアB会議のJCI-ASPACマカオ大会でも26～29日に「ジャパンフェア」を開催した。各エリア会議におけるジャパンフェアの出展を通じて、多様な価値観、多様な文明を受け入れ合い、国際交流を実践するとともに、日本の文明の優秀さを認識し、本年度提唱している「グローバルモラリティ＝OMOIYARI(おもいやり)運動」を各地で実践することができた。

■ 交流20周年で訪中ミッション

日本JCは1985年以来、中華全国青年聯合会との交流事業を継続してきた。本年は交流が始まって20周年の節目に当たり、6月20～23日に訪中ミッションを北京で開催した。全国からシニア・現役メンバーを合わせ過去最大規模となる387人が参加し、両国青年経営者の絆を確認した。

4月には中国各都市で反日、抗日デモに端を発する大規模な暴動が発生するなど両国間に緊張が伴う中での開催となったが、「進化と継承のバランス型信頼社会の創造—意気と力あふれるJC New Generation—」をテーマに日中関係の新しい可能性を民間外交



訪中ミッション(05)

の視点から見出すべく準備を進めてきた。

期間中は同聯合会幹部との会談をはじめ互いのイデオロギーや政治背景、両国民の価値観が異なる中でも真摯に話し合い、意見をぶつけ合って議論を交わすことの大切さを改めて学んだ。

20周年の節目に当たり、「平成奨学金」を創設し、奨学金、助学金の給付事業を始めることも決定した。ミッション中の各事業には報道関係者が多数来場するなど、日本JCの取り組みが広く報じられ、多くの人たちに運動や活動を認識していただく機会となったことも成果の一つといえる。

■ 愛・地球博に出展

時代が直面するグローバルな課題の解決策を模索し、地球の新しいあり方を提示する—この万国博覧会の理念のもと、21世紀初となる愛知万博「愛・地球博」が3月25日から始まった。テーマは「自然の叡智」。

愛・地球博連携特別委員会では、「日本人のこころ」の美徳を掘り起こし、来場者の魂に日本人としての誇りの火をともしべく出展内容を考えた。次世代へ受け継ぐことの重要性を踏まえ、これからの日本を担う子どもたちをターゲットとし、ストレートに訴えかけるアニメーションを作成することとした。宮崎駿監督アニメ「風の谷のナウシカ」などをプロデュースした和田豊氏を迎えて「『学の夏休み』～伝えよう 日



愛・地球博に出展(05)

本のこころ～」を制作。都会で育った10歳の男子が夏休みに母の実家である田舎を訪ね不思議なことを体験しながら成長していく物語となっている。出展期間の7月14～25日は、上映を楽しみにする子どもたちで大いににぎわった。

■名古屋でサマコンを開催

サマコンは例年の横浜から会場を移し、「愛・地球博」開催地である名古屋を舞台に開催した。メインテーマは「New Generationが日本を変える」。全国からのべ約1万人のメンバーが集まり、多種多様なプログラムがそろった「学びのテーマパーク」から参加者それぞれが問題意識を持つテーマを選択し、社会変革の道を学んだ。

オープニングでは、阪神タイガースシニアディレクターの星野仙一氏をゲストに迎え、高竹会頭とのトークセッションが開かれた。話題は若者論からリーダーシップ論に及んだ。JCメンバーに対し「皆さんは政治を動かすようなパワーを持っているのだから、仕事や次世代に対して意気を抱いて、社会を変える挑戦をしてほしい」と星野氏から熱いメッセージをいただいた。

メインフォーラムは、上智大学名誉教授の渡部昇一氏による基調講演を行ない、「外国の元首と違い日本の皇室はルーツをたどると神話になり、さらには神様につながる」「日本の和歌に代表されるように、外国語に翻訳できない独自の言語感覚を持っている」「国境を越えてさまざまな宗教が入ってきた時に、独自の解釈で受け入れ、共存させてしまう」という3点を引き合いに出しながら、日本人としての誇りを訴え、その誇りが国家力創造につながる、と渡部氏は述べた。

また、国家安全保障フォーラムでは、「国防を考える～あなたは愛するものを守れるか?～」をテーマに、前防衛庁長官の石破茂氏、拓殖大学海外事情研究所所長の森本敏氏、沖縄県知事の稲嶺恵一氏を迎え、日米安保体制、日米地位協定について論じた。

日米地位協定について、稲嶺氏は「沖縄県議会で話されるのは7～8割が基地問題。それだけ身近な問題で、沖縄で何かあるたびに日米地位協定に引っかかってくる。日米安保を認めないといっているのではない。何十年もそのまま国力が上がった時代にそぐわなくなった協定そのものを変えてほしい。そして米軍再編に伴って沖縄の負担軽減を日本国の問題



サマコン（'05）星野仙一トークセッション

として考えてほしい」と訴えた。

「JC版ナチュラル・ステップ」協働運動を展開している循環型社会創造委員会では、循環型社会が地球を救うセミナーを開いた。セミナーは「節電分の料金を積み立て、幼稚園に太陽光発電機を寄付するNPO」「有機廃棄物を減容化し、その際に発生するバイオガスエネルギーを活用する工場」「徹底した生ゴミリサイクルと食器・制服などの素材にも安全や環境にこだわる飲食企業」「休耕田で菜の花を栽培し、活用する玉野JC主導の取り組み」「リユース食器をレンタルするNPO」の実例をもとにディスカッションを行なった。

■7年ぶりの会頭選挙

2006年度の会頭選出は、1998年以来7年ぶりに候補者が2人立ち、会頭選挙に持ち込まれることになった。サマコン期間の7月24日に、池田佳隆君、平将明君の両候補者による所信演説会および意見交換会が行なわれ、選挙会場には投票人である全国LOM理事長が2人の主張に耳を傾けた。20分ずつの所信演説を終えた後の40分間の意見交換会では、会場からLOM主体を実現するための具体的な政策、ローカルマニフェストの取り組み方、次年度JC運動のイメージ、社会変革およびJC変革の具体策、アジア地域との問題に関する行動など、次々に質問の



終戦六十年国民の集い（'05）

手が挙がった。場所を移しての投票が行なわれ即日開票された結果、有効投票数2486票のうち、池田候補が1320票を獲得し、1166票を集めた平候補に154票の差をつけて当選した。最前列の席から立ち上がった池田候補が深く一礼すると、大きな拍手が沸いた。そして平候補が歩み寄って池田候補の手を取って持ち上げ、抱き合うようにしてお互いの健闘を称え合った。

■ 終戦60年、靖国参拝を考える

終戦記念日になると靖国神社への参拝問題にメディアが注目する。終戦60年の記念日の8月15日、内外から多くの参拝者が訪れた靖国神社で、戦没者追悼行事「終戦六十年国民の集い」（主催：みんなで靖国神社に参拝する国民の会・日本会議・英霊にこたえる会）が開催された。

歴史認識の問題がクローズアップされ、国内のみならず中国、韓国をはじめとする諸外国が注目する中、会場となった参道の特設テントでは、各界の有志が様々な提言を行なった。日本JCの高竹会頭が「終戦60年、日本への提言」をテーマにスピーチし、「靖国に代表されるわが国の歴史を継承せねばなら

ない」と訴えた。

第二部は「靖国のこころ―追悼と感謝の集い」と題し、各界からの提言と英霊に捧げる歌の数々で構成された。各界からのメッセージが伝えられた後に、司会者から日本JC高竹会頭が紹介され壇上に上がった。

「私は昭和40年生まれで、いわば終戦から20年経ち、豊かな社会になってから生まれた世代だ。しかし、世界にはいまだに戦争が終わらない国もある。自分や家族を犠牲にしている様を見ると、戦争はしてはいけない、自分の子どもにはそういう体験をさせたくないを考える。それでは、ここ靖国に眠っている英霊はどんな気持ちでその体験をしたのだろうか。時代背景はあれど、この国を守る、この国のためだと思ってわが身を差し出したのに違いない。そのような英霊に、個人であろうが公人であろうが手を合わせるべきだと私は思う。それが普通の国、普通の国民だと思っている。靖国は日本のこと、日本人のことなのだ」と述べ、会場からは大きな拍手が沸き起こった。

靖国神社の存在意義や、公人が参拝することの是非といった問題にとどまらず、日本人の誇りや道徳力



第54回全国会員大会姫路大会（'05）

の創造など、高竹会頭の意味は、日本JCが提唱する活動についても考えさせられる機会となった。

■ 全国会員大会、姫路で開催

9月29日から10月2日にかけて、兵庫県姫路市で第54回全国会員大会が開催された。全国から述べ1万5000人のメンバーが集まり、「社会を変革するJAYCEEの意気と力」を全国に伝播すべく、様々な催しが行なわれた。

9月30日の通常総会では、「JCマーク変更承認の件」が審議された。2004年1月にJCI常任理事会において新JCIマークの浸透と普及を進めることが採択され、世界のNOMがほぼ新マークに移行する中で日本JCもこの流れに対応しようとするものだ。マーク変更に伴う各地LOMへの浸透スケジュールは3年間で目標で、LOMの財政負担を少しでも軽くするために、マーク入りの各物品の新たな購入に際して新マークの物品を採用し順次変更していくこととした。

最終日の大会式典は、メイン会場となった姫路市立中央体育館とサブ会場の兵庫県立武道館で開催され、両会場は中継で結ばれた。祭りのまち、姫路にふさわしく、神輿のアトラクションでオープニングを迎え、その後、来賓代表として井戸敏三兵庫県知事、石見利勝姫路市長が挨拶。続いて、アワード「2005年度最優秀グランプリ」の発表が行なわれ、9月30日に発表された優秀賞の中から、郡山JCの「こ

ころのサミット」が最優秀グランプリに輝いた。

会頭メインスピーチで高竹会頭は本年度、2005年度版日本国憲法改正試案を出したことに触れ「私はこの国の人たちは今一度普通の人に戻るべく、目覚めなければならないと考える。自分たちのことは自分たちで考える。自分たちの国は自分たちで守る。すべての国民が国の根本である憲法について議論できる土壌を築くことがJCの使命だと思う」と述べた。来年に55年を迎える日本JCのブランディングも含めて、これからのJCは『第2創業精神』が必要だと考える。単なる創始の精神に立ち返るのではなく、受け継ぐべき伝統は受け継ぎながらもその伝統に甘えることなくもう一度初めからやる覚悟を持つ気概が必要だ」と新たなJCブランディングの必要性を説いて、スピーチを締めくくった。

■ ウィーンでJCI世界会議

10月24～29日、オーストリアの首都・ウィーンで第60回JCI世界会議が開かれた。27日のジャパンナイトでは、日本各地の伝統工芸や食文化を広く世界のメンバーに発信。プロの指導を受けたJCメンバーによる激しい和太鼓の演奏から始まり、餅つき、ダンスタイムと大いに盛り上がった。28日のアワードセレモニーでは、福岡JCが最優秀国際開発プログラム賞を受賞した。また、29日の総会において、日本JCからは奥原祥司君（呉JC）がJCI常任副会頭に、後藤隆博君（仙台JC）がJCI副会頭に選出された。



第60回JCI世界会議ウィーン大会（'05）

■ 2006年、「日本の魂^{こころ}が未来を拓く」

2006年度のJCの方針を確認する場でもある京都会議が1月19～22日の日程で開催された。開催テーマは「精神ルネッサンス 美しき日本への回帰『日本の魂(こころ)が未来を拓く』」。その方向性を共有し「世界平和を導きうる自立国家日本の創造」に向けて06年度JC運動の熱い思いが発信された。

初日は第55代池田佳隆会頭をはじめとする日本JC役員、山下隆子京都JC理事長らが雪舞い降る下鴨神社に集まり、新年初祈願が執り行なわれた。拝殿での祝詞奏上など一連の儀式を通じ、06年度JC運動の成功を祈願した。その後、山田啓二京都府知事を表敬訪問。池田会頭は「毎年のことだから京都で開くというのではなく、日本の魂の復興という面から京都で開催することに意義がある」と会議の役割を説明。山田知事も「東京への一極集中は単なる社会問題ではなく、日本人の心の問題やアイデンティティとして考えなくてはいけない」と語った。京都商工会議所で恒例の記者会見に臨んだ池田会頭は、LOMとの協働事業と2006年度日本JC活動のトピックスなどについて説明した。

宝ヶ池プリンスホテルで京都市長レセプションが開かれ、榊本頼兼京都市長から「日本が美しく品格があり、活力あふれる国家になるように若い力を結集し、JCの社会的存在価値を高めてほしい」と期待の言葉をいただいた。

21日の京都会議理事長セミナーの第1部は「真の自立国家創造セミナー」において、国家統治システム創造グループの加藤久智常任理事の挨拶の後、真の自立国家創造会議の糺川英毅議長が海洋国家日本の自覚を促し、守ることは知ることという市民意識変革に向けた大いなるうねりを発信した。第2部では、読売テレビ解説委員の辛坊治郎氏を進行役に、元法務大臣で自民党衆議院議員の保岡興治氏、05年度日本JC憲法問題・地位協定関係委員会の小沼俊広委員長によるディスカッションで、昨年度に発表した日本国憲法JC草案をベースに、憲法問題について

議論が交わされた。

また、「伝えよう 日本の魂(こころ)」「ローカル マニフェスト普及推進運動」をテーマに協働運動スタートアップセミナーがそれぞれ開かれた。前者では、倫理・道徳教育による社会変革実現の意識を高めるプレゼンテーションを実施。小学校の総合学習へのアプローチを念頭に置きながら、各LOMの事業にも取り入れやすく、各地域にある素材や地域独自の文化を織り込むことが可能な道徳教育プログラムを解説した。後者では、マニフェスト説明プレゼンテーションと実際にマニフェスト型公開討論会を実施した3LOMのパネラーと委員会メンバー池田健三郎(大和JC)コーディネーターによる具体的内容や問題点の報告、セミナー「今日からあなたもコーディネーター」の3部構成で、マニフェスト型公開討論会の実践が手ほどきされた。

JAYCEE拡大セミナーでは、古谷真一郎2005年度常任理事を講師に、拡大運動についての説明があった。ポイントは「目標を明確にすること」「全員で拡大すること」「入会条件を見直すこと」の3つ。漠然としたものではなく、目標設定や連帯意識を持つことの必要性を説いた。

来賓の方々からの挨拶が終わると舞台は暗転。映像と音響がフェードアウトすると同時に、池田会頭の第一声が響いた。

「日本人は、戦勝国から与えられた自由主義や民主主義を、目に見える物質的な側面からのみ捉え



京都会議 (06)

た。物質的繁栄ばかりを追い求め、戦後60年経った今、日本の政治、経済、安全保障、教育、福祉、外交など様々な分野で多くの難題が噴出している。社会には、世界でも類を見ないほどの自殺者の増加、うつ病患者の急増、親子の断絶、家庭内暴力、ニートの増加、人口の減少など、物質的な豊かさだけでは解決できない問題が大きく膨らんできている。病んでしまった日本社会に施す処方箋は、優れた政治家たちをもってしてもなかなか見出せないでいる。拜金主義や利那主義といった価値観が蔓延した今日の日本社会を前提にして、『明るい豊かな社会』の実現は非常に困難である。残された最後の手段は『価値観の変革』である。それはかつての日本人が伝えてきた精神性、いわゆる古き良き日本の価値観を復興すること。日本人特有の高潔にして勇敢な大和魂、指導者の規範であり自己犠牲をもいとわない武士道精神、思いやり溢れ、利他の心溢れる許容性豊かな道徳心といった伝統的な日本の精神性を復興し、こころ美しき民による、かつての『美しき日本』を再興するのだ。精神ルネッサンスによって『美しき日本』への回帰を図る。中庸の美徳溢れる『美しき日本』への回帰を図ることこそ、真の世界平和を導きうる自立国家建設にまい進する」

最後に「明るい日本の未来のために！ 真に平和な世界のために！」という言葉とともに両手を突き上げガッツポーズする姿に、会場に参集したメンバーも力強いメッセージを感じ取った。

■ JCI-ASPAC大会、高松で開催

5月25～28日の4日間、香川県高松市で第56回 JCI-ASPAC 高松大会が開催された。期間中はラース・ハシュランドJCI会頭を始め、JCIエリアBのメンバーを中心に世界各国からJCIメンバーが集結し、国内のLOMメンバーと合わせ1万人の参加者でにぎわった。諸会議、セミナーなどを通じて交流を深め合い、意義深い大会となった。

25日の結団式では池田会頭、ハシュランドJCI会



JCI-ASPAC高松大会（'06）
スコット・グリーンリー高松大会議長（中央）と日本JC役員ら

頭らが挨拶し、大会への期待が語られた。開会式は、和太鼓と踊りのアトラクションで始まり、「ナマステ」「アンニョンハセヨ」など、エリアB各国の会頭が自国の言葉で挨拶。スコット・グリーンリー高松大会議長、王参実行委員長、池田会頭、真鍋武紀香川県知事、増田昌三高松市長らの紹介などに続き、韓国出身のユン・ソナ氏の歌、市民コーラスとのコラボレーションで盛り上がった。

世界平和推進フォーラムでは、ジャーナリストの落合信彦氏による基調講演の後、「OMOIYARIのこころをもって」と題したパネルディスカッションが開かれ、前国連広報センター所長の野村彰男氏、外務省外務副報道官の谷口智彦氏らが加わって、世界に通じる日本人の精神性の重要性について議論が交わされた。

総会では、APDCカウンセラーとして選出された5名の中に国際アカデミー委員長の原田憲太郎君（福山JC）が選ばれた。大会最終日のアワードセレモニーでは、各NOM、LOMに褒章が贈られ、日本からはLOM褒章として京都JC、大阪JC、横浜JC、豊田JCが、特別賞として大阪JC、日本JCがそれぞれ表彰され、世界最大



JCI-ASPAC高松大会（'06）
阿波小松島花火

級のNOMである日本JCの存在感が示された。

ジャパンナイトでは、全国から100を超える郷土食のブースが立ち並び、内外メンバーがともに語らった。小松島JCが企画した「阿波小松島花火」が打ち上げられ、高松の夜を彩った。

■ 市民意識変革へ サマコン開催

サマコンが、7月22、23日の2日間、パシフィコ横浜を舞台に開かれた。JCメンバーを中心に約1万1000人が参加。「まきおこせ！ 市民意識変革のムーブメント」～志の波が『美しき日本』を呼び覚ます～というスローガンのもと、これからの日本を探求するフォーラム、セミナーが行なわれ、参加者一人ひとりが学び、議論し、情報交換する場となった。

22日のオープニングで、タレントの上戸彩氏が開会を宣言。国歌斉唱に引き続いて「美しき日本」をテーマにトークセッションが開かれた。アナウンサーの有賀さつき氏が司会を務め、上戸氏、スキーのノルディック複合オリンピック金メダリストで参議院議員の荻原健司氏、元プロサッカー選手の北澤豪氏、トリノパラリンピック金メダリストの大日方邦子氏をゲストに迎え、アスリートの立場、またアスリートを間近で取材した立場から日本人としての誇りや使命感について語り合った。

メインフォーラムでは冒頭、池田会頭が「JCの力だけでは世の中がよくなるはずはない。政治が変わっただけでは世の中は変わらない。主権者である市民の意識が変革してこそ成果が生まれ、世の中が変わる。このサマコンはそのための起爆剤の一つだと挨拶した。

フォーラム第1部では、北朝鮮による拉致被害者家族の横田滋・早紀江ご夫妻による基調講演が行なわれ、「娘のめぐみが拉致されてから20年経つが、いまだにどうしているかわからない状態です。この問題は世論の力がなければ進展は期待できないので、引き続き関心を持って見守っていただきたい」と訴えた。第2部では真の自立国家創造会議の籾川英

毅議長が司会を務め、「真の自立国家創造に向けて～今問う！ この国のあるべき姿」をテーマにしたパネルディスカッションが行なわれた。京都大学大学院の中西輝政教授、自民党の中川秀直政務調査会長、民主党の松本剛明政策調査会長がそれぞれの意見を述べた。

23日は安倍晋三官房長官による特別講演が行なわれた。安倍氏は「人口減少社会に入ると経済は縮小すると言われているが、イノベーションによって生産性を高め、女性や高齢者をもっと働きやすい環境を整え、さらにはアジアの成長を取り込んでいけば、日本はまだ成長できる。その原動力になるのがJCの皆さんのような若くてやる気のある人たちだと思っている」と話し、JCメンバーへ期待を託した。講演の後は、池田会頭が加わっての対談。拉致問題のほか、近現代史を検証する観点から、東京裁判、靖国問題が話題に上ったほか、格差社会の問題、さらには夫婦円満の秘訣まで様々な話題が取り上げられ、予定時間をオーバーして話が膨らんでいった。

■ 人間力大賞に病児保育支援の駒崎氏

第20回人間力大賞受賞式典及び祝賀会が横浜グランドインターコンチネンタルホテルで開催された。グランプリ（内閣総理大臣賞、TOYP倶楽部会長特別賞）は全国で病児保育の立ち上げ支援活動をしている駒崎弘樹氏が受賞した。

駒崎氏は、2003年に病児保育支援のための「フローレンス・プロジェクト」を開始。共働き家庭が増



サマコン（'06）
安倍晋三官房長官と対談

加し、病児保育の必要性が増大しているにもかかわらず社会的認知の低い病児保育の解決に奔走し、人手不足の解消や地域、自治体への働きかけを続けている。準グランプリの衆議院議長奨励賞・全国知事会会長奨励賞には、すがやあゆみ氏、同じく準グランプリの参議院議長奨励賞・NHK会長特別賞には村田早耶香氏が選ばれた。

■ 総勢21人でロシアミッションへ

8回目を迎えるロシアミッション事業が9月17日から25日までの期間、サンクトペテルブルグとモスクワで開催された。松本秀作会長をはじめとする日本JCロシア友好の会メンバー7人、日本派遣学生7人、日本JC小田副会頭、加藤常任理事をはじめとする領土・領海問題委員会メンバー7人の総勢21人で参加した。

ロシア外務省表敬訪問では友好、外交、経済、そして北方領土問題ならびに、8月16日に発生した銃撃・拿捕事件について会談をし、今年度行なっている運動展開や日本JCとしての目指す方向性をしっかりと主張してきた。

ミッションの参加により、目覚ましい経済発展を遂げようとするロシアの歴史と現在を知ることができ、今後の運動に生かせる有意義なミッションとなった。



■ 全国会員大会、「音楽の都」郡山で

10月5～8日に福島県郡山市で第55回全国会員大会が開催された。「音楽の都」郡山を舞台に、全国から1万5000人のメンバーが集まった。日本の伝統的価値観である「日本の魂(こころ)」を取り戻そうと、これまでの活動を再確認し、成果を全国に持ち帰った。

5日はまず、池田会頭をはじめとする大会役員が郡山市役所を訪問し原正夫市長に挨拶。記者会見では池田会頭と石橋秀郎郡山JC理事長の挨拶に続き、5つの委員会が事業報告を行なった。憲法問題委員会の本多保彦委員長から「日本国憲法JC草案発表」、近現代史検証委員会の小瀬川学委員長から「近現代史教育プログラム発表」、「日本の魂」育成特別委員会の谷岡樹委員長から「倫理・道德の協働運動報告」、日本経済復興委員会の鈴木隆太委員長から「日本経済復興プラン発表」、国民主権確立特別委員会の相澤弥一郎委員長から「ローカルマニフェスト普及推進協働運動報告」がされた。

市民文化センターで6日開催されたアワードセレモニーでは、優秀賞と会頭特別賞が発表された。優秀賞(各部門)は、鎌倉JC(教育・青少年関係推進)、仙台JC(環境開発)、八幡浜JC(ビジネス開発)、当別JC(地域開発)、日田JC(福祉関係)、町田JC(ローカルマニフェスト・行政関係)、稚内JC(国際開発)、豊田JC(会員開発)、奴奈川JC(WEB・広

報開発)、栗原JC(会員拡大=スタート時の会員数1～50名)、寝屋川JC(同51～100名)、那覇JC(同101名以上)が受賞。また、会頭特別賞は富士JC、調布JCが受賞した。受賞LOMのメンバーはそれぞれ登壇し、池田会頭から各理事長に賞状と記念品が手渡された。なお、最優秀グランプリは8日に発表され、当別JC(事業者=町民劇「石狩川」)が受賞した。

ロシアミッション('06)

7日のメインフォーラムは「呼び覚ませ！われらの『美しき日本』精神ルネッサンスで蘇る『日本の魂（こころ）』を礎に」をテーマに開かれた。まず台湾出身の黄文雄氏が基調講演を行なった。黄氏は講演の中で戦後日本とアジアの近代化を対比させながら、戦後のトラウマが60年以上経っても払拭できないことを問題にしたうえで「新しい歴史認識のもとで、いかにして“美しき日本”にするか考えなくてはならない。私が日本に来て発見したのは、美が道徳を超えるということだったが、今の日本はこの“美”を失ってしまったのかもしれない。道徳を超えた“美しき日本”を世界にアピールしてほしい」と語った。

講演に続き、池田会頭と川前光徳副会頭が参加し、黄氏を交えて鼎談が行なわれた。池田会頭は訪中ミッションの経験を踏まえつつ「反日教育の現実を確かめ、同じ人類として悲しい思いだった。しかし隣国が中国という現実は変えられない。友好をあきらめてはいけない」と述べた。川前副会頭は「中国の反日教育がある半面、日本人も中国に対して、腫れ物に触るような接し方をしていなかったか」と話し、日中友好の取り組みや日本の世界平和への貢献について意見を述べ合った。

最終日はビッグパレットふくしまで、常陸宮殿下ならびに同妃殿下ご臨席のもと、川手晃福島県副知事、原郡山市長、JCI役員ら多くの方々にご出席いただき、大会式典が盛大に開催された。「音楽の都」郡山らしく、オーケストラの演奏でオープニングを迎え、オペラ歌手、星洋二氏の歌とコーラスに続き石



第55回全国会員大会郡山大会（'06）

橋秀郎郡山JC理事長が「この大会は私たちの心の限りを尽くした渾身の大会だ」と開会を宣言した。

池田会頭はメインスピーチであらためて日本の魂（こころ）について言及。「中でも特に武士道は、リーダーの規範として、いさぎよく、威厳ある、美しい振る舞いを大切にしてきた。明治維新の頃、欧米を見聞した武士たちは外国語を話すこともできず、近代政治はおろか、欧米の文化もマナーもまったく知らなかった。彼らが身につけていたものは、日本の古典と武士道精神だけだったのだ。それでも彼らは欧米人からたいそう尊敬された。近代化している欧米の文化に驚きつつも、武士としての威厳と、日本人としての品格を常に失わず何事にも堂々と振舞っていたからなのだ。日本人であることの誇りを胸に、相手が外国人であろうと、主張すべきを主張していたのだ」と武士道精神の美学を強調。

そして、最後に戦争の世紀と呼ばれた20世紀が生んだ天才科学者、アルベルト・アインシュタインが日本人に遺した言葉でスピーチを締めくくった。「近代日本の発展ほど世界を驚かせたものはない。万世一系の天皇をいただいていることが、今日の日本をあらしめたのである。私はこのような尊い国が、世界に1カ所くらいなくてはならないと考えていた。世界の未来は進むだけ進み、その間、幾度か争いは繰り返されて、やがて最後の戦いに疲れる時が来る。その時人類は、真の平和を求めて、世界的なリーダーをつくり出さねばならないだろう。リーダーは、軍事力や経済力ではなく、あらゆる国の歴史を抜き超えた、最も古き、また尊き国柄でなければならない。世界の文化は、アジアに始まってアジアに帰る。それは最も尊き精神文化を有した『日本』に立ち戻らねばならない。神に感謝する。人類に『日本』という尊い国を創っておいてくれたことを…」

■ 「OMOIYARI」運動が褒章受ける

11月12日から17日にかけて、韓国・ソウル市内COEXコンベンションセンターを主会場に、第61回

JCI世界会議が開かれた。日本JCからは2千人余りのメンバーが参加し、各国メンバーと友情を深めた。とくに日本独特の精神である「OMOIYARI」の魂を世界の人々と共有し、「OMOIYARI運動」の“わ”を世界に広げた。

15日に行なわれたアワードセレモニーで、日本JCからは最優秀NOM会頭賞に池田会頭が選ばれたほか、JCI会頭特別賞に「OMOIYARI運動」、「JAPAN and KOREA World Peace Project」が、Most Outstanding Appointeeに松原史尚君（各務原JC）が、最優秀会員拡大プログラム賞に大阪JCが、最優秀UN・MDG賞に横浜JCが、ホアキン・V・ゴンザレス記念賞に大谷真司君（白浜田辺JC）がそれぞれ選ばれた。また、総会では07年度JCI役員選挙が執り行なわれ、日本からはJCI副会頭に長谷川浩一郎君（山形JC）が当選し、エリアB担当に任命された。

■ 日韓平和推進共同宣言に調印

日本JCは11月15日、JCI世界会議ソウル大会で「韓日合同世界平和推進委員会」の1年間の活動を総括し、日韓両国の永久的な平和構築に向けた「日韓平和推進共同宣言」に調印した。

日本JCと韓国JCは、互いから選出したそれぞれ6名の代表によって構成される「韓日合同世界平和推進委員会」を組織し、JCIの究極の目的である「世界平和の実現」を目指し、活動してきた。今後は、両国間の歴史認識の違いや領土問題などから生じる摩



第61回JCI世界会議ソウル大会（'06）

擦を相互認識した上で、民間外交の担い手として両国のJCメンバー同士が合同委員会での事業を通じて友好関係をより深め、そこから真の信頼関係を創出し、両国間のあり方の規範となることを目指している。

各NOM会頭の立ち会いのもと、日韓平和推進共同宣言の調印式が行なわれた。池田会頭が登壇し、宣言文を発表。両国の会頭が調印すると、会場内のすべてのメンバーによる祝福のスタンディング・オベーションが起こった。

調印式に臨んだ池田会頭は「日本に一番近い隣国、韓国とは幸いにも戦争をした経緯はないものの、併合（合併）政策という、両国民感情にとって複雑な歴史が存在している。日韓のJCIメンバーは、世界平和創造のために、すべての戦争を否定し、過去のしがらみを乗り越え、日韓の真の平和友好を確立していくことを決めた。JCIメンバーが本気になって運動すれば、殺戮や貧困のない真に平和な世界を、必ずや実現できるものと確信している。日本固有の伝統的価値観である「おもいやり」や「武士道」が、とても友好であると自負していることも付け加えておく」とスピーチした。

調印式が行なわれた翌16日には、日韓歴史認識セミナー&ツアーが行なわれた。

■ 日韓平和推進共同宣言

殺戮や貧困の無い恒久的世界平和を実現しようとする
国際青年会議所に属する会員会議所同志として
お互いを愛し、敬い、認識し合うことから醸成される
国家を超越した、信頼関係を礎に
日本JCと韓国JCのメンバーが
日韓相互の真の平和構築に向け
永久に協働していくことをここに誓う
今後、両国間の歴史的認識の違いから生じる摩擦を
相互認識した上で、民間外交の担い手として、
友好関係を深め、真の信頼関係を創出し、
両国間のあり方の規範となることを目指していく。

■ 2007年、OMOIYARI運動が 本格始動

2007年度京都会議が1月18～21日、国立京都国際会館で開催された。テーマは「OMOIYARIの心あふれる『日本の力』発信!」。1万人以上が参加し、運動理念や事業目標が共有された。

恒例の下鴨神社での新年初祈願を終え、京都商工会議所で開かれた記者会見で第56代奥原祥司会頭は「JCIへの出向経験を生かし、日本JCですべきことを推し進めたい。真の世界平和の実現が最終的な目標だが、まず足下の日本、それぞれの地域でしっかり役割を果たしたい」と抱負を述べた。記者からは、本年夏の参議院議員選挙や統一地方選挙に向けたJCの取り組みや「OMOIYARI」運動についての質問があった。

20日のメインフォーラムは、独立総合研究所社長兼首席研究員の青山繁晴氏と星聡副会頭の対談が行われた。青山氏は硫黄島の過去と現在を題材にしながら日本人の精神性や問題点について熱く訴えかけた。星副会頭は「日本に生まれたことを誇りに思う心を取り戻そう」と語った。

市民意識変革セミナーは、第1部で「マスメディアの現状」と題したトークセッションを行ない、情報支援担当グループの安里繁信常任理事を進行役に、同志社大学社会学部教授の浅野健一氏、元保育士の山田悦子氏をゲストに迎え、74年に起きた甲山事件を事例に、報道のあり方、メディアとの向き合い方について議論が交わされた。第2部は、会員拡大、褒



京都会議（'07）

賞、人間力大賞をテーマに、受賞経験のある郡山JC、当別JC、那覇JCの理事長をパネリストに、今後の運動に役立つアイデアが語られた。

また、国内版「OMOIYARI」運動プログラム体験セミナーでは、世界に発信してきた「OMOIYARI」運動を国内で浸透させていく手法が紹介された。いじめや少年犯罪、法を無視した企業の不祥事が多発する日本。これらの問題を解決するのが「OMOIYARIの心」と前置きし、「OMOIYARI」とは何か、どういう行動を起こすべきかを考えた。また、この言葉から何を思い浮かべるか、どんな時にOMOIYARIを感じるかなどについてグループ内で議論。それを受け、コーチは「一人ひとりが持つ思いやりの心をそのままに出してほしい」と語った。

■ 高潔で徳高い公共心や愛国心

新年式典は開場と同時にメンバーたちで賑わった。まもなく奥原会頭の会頭所信発表が始まった。奥原会頭は、JCIと日本JC発足の経緯と理念を紹介するとともに、出身地である呉で1910年に起きた潜水艦の遭難事故を例に挙げながら話を進めた。

「日本初の潜水艦の艇長に就任していた30歳の佐久間艇長と乗組員13名は艇を浮上させようとあらゆる手段を尽くしたが、うまくいかない。やがて乗組員全員が呼吸困難のために窒息死するという痛ましい事故だった。事故の翌日、第6潜水艇は発見され、引き揚げられた。第6潜水艇のハッチを開けると、佐久間艇長は司令塔に、機関士は電動機の傍に、操舵手は操舵席に、空気手は空気圧搾管の前にと、乗組員全員はそれぞれの部署を離れず、艇の修復に全力を尽くし、毅然とした態度で見事な最期を遂げていたのだ。収容された佐久間艇長のポケットから遺書が発見された。沈没後、電灯が消え、酸素は刻々となくなっていく。そしてガソリンによるガスが艇内に充満しているという苦しい状況の中で、佐久間艇長は将来の潜水艦技術発展のために沈没の原因及び沈没後の処置を記し、艇を沈め乗組員を

京都会議（'07）
新年式典



死なせることに対する謝罪、部下が最後まで沈着に任務を尽くしたこと、さらには明治天皇に対して部下の遺族の生活が困窮しないよう配慮を望むなど、死に直面してもいささかも冷静さを失っていなかったのだ。その遺書に答えるべく、明治天皇が遺族に相当の見舞金を届けるという特別の計らいがとられた。

佐久間艇長は、歴史の中の一人かもしれない。将来の国のため、自分の家族のために死んでいった人たちは佐久間艇長のみならず、大勢いる。そしてそんな先人たちが死に代えてでも守ろうとしていた国や、夢見ていた社会が、今の世の中だろうか。殺伐とした人間関係、利他の精神の欠如、利那主義、国のために働くという崇高な公共心や日本という国家や国土を愛する心を持たない無国籍意識の人々の増加……。戦後、わずか60数年で日本人が持っていた高潔で徳高い公共心や愛国心を、本当に失ってしまったのだろうか。いや、私は失っていないと考えている」

日本人の精神性と「武士道」に見られる価値観の復興、「OMOIYARIの心」の伝播、そして真の世界平和をゆっくりとかつ力強く語る奥原会頭の言葉を受け止め、会場から万雷の拍手が沸き起こった。

■ アワード受賞 LOM を紹介

今年度はモデルとなる取り組みを広く紹介する目的で、広報誌「We Believe」でアワード受賞となる LOM の取り組みを毎号紹介した。1月号は、2006 年度のアワードセレモニーにおいて町民劇「石狩川」でグランプリを受賞した当別 JC の取り組みである。原作の小説「石狩川」は、当別町出身の作家・本庄陸男氏が、戊辰戦争に敗れ所領を減らされた仙台岩出山藩主・伊達邦夷が家臣らとともに北海道への移住を決意し、自然の猛威と格闘しながら「トウベツ」の地を見出すまでの開拓の歴史を著したベストセラー小説。上演の経緯について2005 年度理事長の武田龍太郎氏は、本庄陸男氏の生誕100年、当別 JC 創立25周年の節目が重なったことが後押ししたことを説明した。劇の上演によって新旧住民の交流の

きっかけが芽生えたという。これにより、町民に「顔の見える JC」として存在感が増したことは言うまでもない。そして、2006 年度のアワード各部門の受賞 LOM を毎号誌面で取り上げ話題を呼んだ。

■ 統一地方選前の公開討論会が 200 を超える

LOM によるローカルマニフェスト運動が浸透し、選挙前の公開討論会も定着してきた。とくに統一地方選挙と参議院選挙が開かれる本年は各 LOM の取り組みの真価が問われる年であった。奥原会頭は3月16日、東京の総務省記者クラブで、日本 JC が LOM に働きかけ公開討論会を開催することを表明した。会見では4月の統一地方選挙を皮切りに、LOM がかわる公開討論会の数は200 を超えると思定しているとの見通しを示した。また、「政策本位」「国民（市民）主権」の大切さを訴え、単なる「公開討論会」ではなく、「マニフェスト型公開討論会」の開催にこだわり、各 LOM に働きかけていくことを説明した。

また若年層を中心に選挙に無関心な人が多いことから、「公開討論会」の開催だけでなく、「投票率向上5%キャンペーン」に取り組むことを訴えた。会員4万余名からなるスケールメリットを生かし、身の回りの人々（家族、会社の従業員、取引先など）に選挙があることを伝え、選挙に行こうと呼びかける「一票一声」運動などを提唱した。

最後に、市民一人ひとりが社会に参画できる仕組みを作り、真の国民主権を確立するために、まずは「自らの一票」を投じるとともに、周囲の人たちに運動を広めていく必要性を強調した。

■ 自民、民主双方の主張を確認

3月18日に開催された通常総会会場で、後藤茂之自由民主党政務調査会副会長、松本剛明民主党政務調査会長らによる講演とパネルディスカッションを開催した。講演で後藤氏は「これからは構造改革を進め、イノベーションを起こすことが必要だ。『国の

かたち』として、多面的な価値観が認められ、すべての人が誇りを持って生きていける国。伝統文化が大切にされ守り継がれる国。多くの国家戦略、国際戦略のツールを持つ国など、その実現のためには『人づくり』、教育再生が根本課題だ』と述べた。一方、松本氏は「この国はどの方向に進んでいくのか、選択の時期に来ている。教育問題、株主至上主義の問題などがある。医療や介護などセーフティネットの問題、そして経済。政治の役割を整理し、具体的な政策を議論する必要がある」と述べた。

その後のパネルディスカッションでは地域格差について、後藤氏が「地域で誇れる資源が何であるかを問いかけ、自分の地域の夢の実現のための手助けとして、成功例の提示、多様なメニューの構築など積極的なプログラムを提示している」とし、松本氏は「不公平、不公正なルールは直し、ある一定の水準から下は助けなければならない。社会のあり方として、上下に広がりすぎた時にどうするかという問題もあり、これを見直す必要もある」と述べた。

■ 各地で JC 主催の公開討論会を実施

4月に知事選、市長選をはじめとする首長選挙や参議院議員補欠選挙など、全国各地で選挙が実施された。マニフェストの周知徹底による政策本位の選挙を実現し、国民が主体的に政治に参加できるよう、各地のブロック、LOMでは公開討論会開催や合同・個人演説会を主催、共催のかたちで開催した。

福島ブロック協議会では、「現状を変革し、国民が主体的に政治参画できるようなシステムの構築が必要である。そのための一歩が公開討論会であると位置づけ、開催した」と経緯を説明した。日本JC「日本の力」実践グループ、国民主権確立委員会が主体となって、投票率5%向上に向け「みかん箱作戦」を展開したが、一般の有権者の参加は20人程度にとどまった。

沖縄ブロック協議会は、宜野湾JCとの共催で宜野湾市長選挙における選挙告示前の公開討論会を開

催した。春日部JCは、杉戸町長選挙立候補予定者における公開討論会を開催し、市民意識変革運動の一環として、活動エリアである杉戸町の公開討論会を企画し、埼玉ブロック協議会およびNGOリンカーンフォーラムの協力を得ての開催となった。



公開討論会 ('07)
春日部JC

■ 人間力開発協会を設立

人間力大賞事業を「青年版国民栄誉賞」として位置づけることを目指し、広く社会に運動を展開できるよう「特定非営利活動法人・人間力開発協会」が設立された。設立に伴い、4月27日、赤坂プリンスホテルで式典が開催された。

当日は、歴代TOYP大賞・人間力大賞受賞者、各LOM理事長、各ブロック協議会会長、奥原会頭をはじめとする日本JC役員、橋本聖子理事長をはじめとする「特定非営利活動法人・人間力開発協会」理事など約200人が参加し、盛大に開かれた。

■ JCI-ASPAC チュンリー大会開催

台湾のチュンリーで5月31日～6月3日、第57回JCI-ASPACが開催された。エリアBを構成するアジア・太平洋地域のメンバーのほか、スコット・グリーンリーJCI会頭ら、5千人余りが参加。日本からは奥原会頭をはじめ2600人が参加し、「OMOIYARI運動」の発信や、真の世界平和に向けた連携を確認する場となった。

ニューヨーク国連本部で開催された
JCI-UNリーダーシップサミット（'07）



「OMOIYARI運動」は、総会や各セミナー会場などでの事前PRにより多くの参加者をセミナー会場に動員することができた。アンケートによるセミナーへの評価は上々で、今後、世界会議に向けブラッシュアップを重ね、当プログラムがJCI公認プログラムとして選択されること目指した。

アワードセレモニーでは長野JCが最優秀地域開発プログラム部門、大阪JCが最優秀会員開発プログラム部門および青少年活動賞部門のアワードを獲得した。



JCI-ASPACチュンリー大会（'07）

■ 「OMOIYARIキャンペーン」 国連でも発信

JCI-UNリーダーシップサミットが6月27～29日、ニューヨーク国連本部で開催された。世界各国のJCIメンバーが一堂に会し、MDGs（国連ミレニアム開発目標）達成のためのセミナー、意見交換、競技が行なわれた。その中で日本JCは1時間の「OMOIYARIキャンペーン」の枠をいただき、積極的にコミットした。

2005年度から始まったOMOIYARI運動の集大成として、また国連の場でJAYCEEとして、日本人として、何を世界に発信できるのかを考え、キャンペーンでは、世界に20万人を超える青年経済人団体であるJCIにしかできない「OMOIYARI」の心を切り口としたMDGs達成方法、特に経済に関連のあるCSR/グローバルコンパクトにかかわる提言を行なった。締めくくりの言葉では「国・民族・文化・経済・すべてを超えて、今よりもう少し優しさを示していこう。人

と人とを結ぶのは『優しさと思いやり』。そして『あと一歩踏み出して手を差し伸べる勇気』です。明るく豊かな社会を目指して、今日より一歩を踏み出しましょう」と呼びかけた。

■ 日本の力発信 サマコン開催

サマコンが7月21～22日の両日に開催され、JCメンバーを中心に約1万人が参加した。テーマは「『日本の力』発信！～祖国を愛する心と高潔なる精神で導く理想国家日本創造に向けて～」。市民意識改革に導き、理想国家日本、そして真の世界平和を実現するためにさまざまなフォーラム・セミナーが開催された。

オープニングではスペシャルゲストとして招いた女優の佐藤藍子さんと奥原会頭によるトークセッションが開かれ、互いの立場から日本の役割、魅力について語り合った。

メインフォーラムでは、独立総合研究所社長兼首席研究員の青山繁晴氏をコーディネーターに、日本教育再生機構理事長の八木秀次氏、帝京大学教授の志方俊之氏、帝京大学短期大学准教授の潮匡人氏をパネリストに迎え、「理想国家日本の創造のために！」と題してパネルディスカッションを行なった。青山氏は参議院議員選挙を題材に、外交・安保問題が争点になっていないことに対して指摘や問い合わせが外国から寄せられたことを挙げ、メディアのあり方について問題提起した。また、八木氏は安全保障の前提となる国家意識について触れ「教育は文化防衛につながる。教育に対する不当な支配は教育行政ではなく、教職員組合など特定のイデオロギーだ。国家意識を持たせないようにしてきた教育のあり方を変革する必要がある」と述べた。

さらに、上智大学名誉教授の渡部昇一氏が「OMOIYARIの心と祖国愛を礎とした〈日本の力〉の復活に向けて」をテーマに基調講演。「日本は独立した文明国家であり、その精神、文化はいまや世界の若者の感受性、意識を変えつつある。21世紀の今、世界は日本を手本として平和へと向かっている。日本

人は、歴史を正しく理解し、そして誇りを持ち、愛国の精神と自信をもって日本の力を世界に発信していくべきである」と、JCメンバーの責任を強調した。



サマコン ('07)メインフォーラム

■ 人間力大賞グランプリに金城氏

第21回人間力大賞授賞式典・祝賀会が7月1日に開催され、全国から305人ものエントリーを受けた。

TBSアナウンサーの秋沢淳子さんの司会で進められ、10人の人間力大賞受賞者の中から金城浩二氏(沖縄県)がグランプリに選ばれた。金城氏は、海洋環境の保全及び地球温暖化防止を図り、普及啓発活動を通じて環境保護活動の向上を図ることを目的とし、沖縄の海を守るためサンゴ移植に取り組んできたことが評価された。

■ 盛岡で第20回国際アカデミー

第20回国際アカデミーが7月7～14日、岩手県盛岡市で開かれた。

海外参加者はまずホームステイを行ない、日本の文化を体験してもらった。さらに国内参加者を加え10日からメインセミナーが行なわれ、「KAKEHASHIプログラム」では、全国最年少知事で盛岡JCOBの達増拓也氏の講演を皮切りに、海外参加者の学校訪問、手づくり村での体験、世界遺産に登録申請している平泉中尊寺を訪れたほか、新渡戸稲造の足跡を顧みるプログラムなど、盛岡JCならではの素晴らしい企画で参加者を楽しませた。スコット・グリーン

リーJCI会頭によるラストセミナーを経て、卒業式で参加者は晴れてグローバルネットワークカーとなった。

■ 日本JCロシア友好の会 創立15周年記念式典

日本JCロシア友好の会が発足して15周年を迎え、ロシア友好の会の歴史を振り返るとともに時代への起点とすることを目的に、創立15周年記念式典が9月13日、ロシア大使館で開催された。

式典では松本秀作会長、奥原会頭が挨拶。15周年を機により一層、日露交流を推進して信頼を深め、民間外交の一翼を担うことを誓い合った。

■ 帯広で全国会員大会

9月27～30日にわたり、北海道帯広市を舞台に第56回全国会員大会が開催され、全国から1万2000人のメンバーが集まった。

28日のアワードセレモニーでは、各部門優秀賞と会頭特別賞が発表された。司会に元フジテレビアナウンサーの千野志麻氏を迎え、スペシャルゲストとして登場した小柳ゆき氏が3曲の歌を披露し華やかなセレモニーとなった。優秀賞は、「日本の力」推進部門が広島JC、地域開発部門が八代JC、教育・青少年関係推進部門が長野JC、会員開発部門が豊田JC、国際開発部門が都留JC、環境開発部門が小田原JC、WEB・広報活動部門が横浜JC、ビジネス開発部門が新潟JC、福祉開発部門が立川JC、ローカルマニフェスト・行政関係部門が枚方JC、会員拡大部門(スタート時の会員数1～50名)が南但JC、(同51～100名)は上越JC、(同101名以上)は山形JCが受賞した。会頭特別賞は東京JCが受賞した。最優秀グランプリは30日の大会式典で広島JCの「広島国際平和会議2006」事業の受賞が決定した。

翌日、メインフォーラム「理想国家日本創造フォーラム」が開かれた。第1部で、評論家の宮崎哲弥氏による基調講演が行なわれた。「安倍晋三首相の辞任にはがっかりしている。安倍前首相は先に辞任し



第56回全国会員大会（帯広'07）

た民主党の前原誠司代表とともに純然たる戦後世代。この2人は戦後民主主義の矛盾点に気づき、向きあい、変革しようとしていた。しかし2人とも志半ばで辞任し、古い世代に主導権が移ってしまったことに強い閉塞感を覚える。この失意の中から立ち上がらなければならない」と宮崎氏が訴えた。

「情報発信で地域活性化を目指せ」をテーマにしたマスメディア改革推進セミナーや「日本の商道徳再興セミナー」も開講した。高潔で徳の高さが宿った出来事、行動やその背景についての事例紹介があり、聖路加看護大学名誉学長の日野原重明氏、裏千家第15代家元の千宗室氏、イエローハット創業者の鍵山秀三郎氏らのエピソードに注目が集まった。

30日の大会式典は北愛国交流広場に設営された巨大テントで行なわれた。奥原会頭が壇上に登り、あらためて07年度の「日本の力」を根底にした運動展開を振り返った。「日本が有史以来、脈々と受け継いできた日本固有の美しい文化・伝統からなる道徳心や愛国心・利他の精神あふれる OMOIYARI の心。人間が生きるための規範とした武士道精神。これら『日本の力』を、常に意識し続けなければならない。『日本の力』…それは美しい日本の精神性。『日本の力』…それは古来より受け継いできた精神性。『日本の力』…それは忘れてはならない精神性。そして我々はこの美しい精神性である『日本の力』を根

底に、これからも地域の明るい豊かな社会を創造していく」と、未来の指針を示した。

■ OMOIYARI のトレーナー養成コースも開催

11月5～10日、トルコ・アンタルヤ市内クレムリンパレスを主会場に第62回 JCI 世界会議が開かれた。日本 JC からは 721 人が参加し、日本の高潔なる精神・OMOIYARI を世界の人々と共有した。総会においては、「OMOIYARI 運動」が3年間の JCI エンドーストプログラムに承認された。

6日、7日には、JCI 台湾、韓国、ドイツ、アメリカ、イギリス、フランス、ハンガリーの各国役員との合同常任会議が開催された。会議で、日本は OMOIYARI 運動と相互理解プログラムについて説明し、真の世界平和推進に向けた理解を求めた。また、6日には、トプカパレスにて、一般メンバーを対象に OMOIYARI セミナーを実施。また、9日にはトレーナー養成の OMOIYARI セミナー・トレーナーズコースを開催し、運動のさらなる拡大に取り組んだ。

2008 年度 JCI 役員選挙では、JCI 副会頭に原田憲太郎君（福山 JC）が当選し、エリア D 担当に任命された。また奥原会頭から 2010 年度世界会議開催地として大阪 JC が立候補することが紹介され、大阪 JC 理事長の高野哲正君および大阪 JC メンバーが立候補表明を行なった。また、アワードセレモニーでは、最優秀 NOM 賞と NOM 部門・最優秀国際開発プログラム賞に日本 JC が、LOM 部門・最優秀国際開発賞に大阪 JC が、JCI 会頭特別賞に高名啓介君（JCI 国連事業担当役員）、後藤隆博君（JCI 財政顧問）が選ばれた。



第62回 JCI 世界会議
トルコ・アンタルヤ大会（'07）
アワードセレモニー

第19章 「気高き日本」の創造へ向けて

2008-2010

■ 不況の兆しが到来

内閣総理大臣に就任した安倍晋三首相が在任1年を迎えることなく突然辞任した。後任として福田康夫氏が第91代内閣総理大臣に就任した一方で、民主党の小沢一郎代表が大連立構想に対する党役員会からの猛反対を受け、辞任を表明（2日後に撤回）する。政治の世界は混迷を極めた。世界経済は原油・原材料価格の高騰、サブプライム住宅ローン問題に端を発するアメリカ経済の減速などにより、低迷の兆しをみせはじめた。内外ともに先行きへの不透明感が漂う中で2008年を迎えた。

■ 国民参加型 憲法タウンミーティングの浸透

京都会議が1月17～20日の4日間、「高い志と使命感によるローカルコミュニティ復活!『気高き日本』の創造!」をテーマにはじまった。

山田啓二京都府知事に対して、第57代小田與之彦会頭はJCの本年度のテーマの一つである「日本のアイデンティティの確立」に触れ「京都は日本のアイデンティティそのもの」と開催意義を述べた。それに対し、山田知事は「国家や国民の進むべき方向性を真剣に考えるべき現代にあって、JCへの国民の期待は大きい」と語った。

京都商工会議所で開かれた会頭記者会見で、冒頭小田会頭は2008年度の活動方針を発表。JCが取り組む選挙マニフェストの検証、JC活動における各地の観光への取り組みについて質問を受けた。



京都会議（'08）

19日のメインフォーラムは、ノンフィクション作家の上坂冬子氏を講師に迎え講演の後、小田会頭と対談。「明るい日本の将来を構築するにはJCメンバーの若さと行動力が必要不可欠。JC活動がさらに活発になってもらいたい」と期待を寄せた。小田会頭は日本JCが取り組んできた北方領土問題や憲法問題などを説明し上坂氏から高い評価を受けた。

また、国民参加型憲法タウンミーティングを全国的に開催するにあたり、JCメンバーが「今なぜ憲法論議が必要なのか」を理解し、その手法を確認するためのパネルディスカッションを開催。中島和生副会頭のコーディネートのもと、パネリストに社会民主党の辻元清美氏、自民党の葉梨康弘氏を迎え、熱い憲法論議が交わされた。

■ 先頭に立って市民の意識と 行動を変革しよう

20日の新年式典では、小田会頭が会頭所信を表明。「現在の日本は座標軸を失い、国家目標も戦略もなく、ただ漂流を続けている。近年、日本JCは、国家ビジョンや日本人としてのアイデンティティを言い続け、議論を重ね、社会に問題提起を行ってきた。しかしながら、社会はますます望ましくない方向へ進んでいる。これまで築き上げてきた『信頼』が一気に崩壊し、この国の将来や方向を決める政治は混迷を極め、グランドデザインを持つこともできず政局に振り回され続けている。結果、外交や安全保障、経済、財政など国の姿を決める大切な問題の議論は先送りされている。諸外国から嘲笑され続けているのだ。ではこのような状況に陥ってしまった最大の原因は何か。最大の元凶は国民の無関心、無責任にほかならない。今こそ市民のリーダーであるJCが強い危機感を抱き、この状況に対して楔を打ち込み、社会を創り上げている市民の意識と行動を変革しなければならない」

JCが気概を持ち先頭に立って地域社会の復活に本気で挑む。その決意が表れたゆるぎない言葉に会



第127回通常総会（'08）

場から万雷の拍手が沸き起こった。

■ 公益社団法人格取得をサポート

2008年12月に新しい公益法人制度が施行され、2013年11月末までに公益社団法人格か一般社団法人格への移行が求められることになる。小田会頭は所信表明で「この変更は、JCの社会的な信頼を高めるチャンスと捉えられる。公益は官だけが担うべきものという固定的な考え方から、民も公益を担うことができる。つまりJCの活動のフィールドがこれまで以上に広がるのだというプラス思考への発想の転換が求められる。LOMにおいても『現在LOMは地域社会から何を求められているのか』『青年会議所という名のもとに、ローカルコミュニティに対して何を提供していかなければならないのか』を考えた時、公益社団法人格の取得を目指すことは自明の理である」と明言した。

日本JCは本年、LOMと社会の信頼と負託にこたえるべく、公益社団法人格の取得に向けて必要な準備をすべて行なうと同時に、全国の会員会議所に対しても必要なサポートを提供していくことになり、さっそく京都会議で「公益社団法人格取得推進フォーラム」が開かれた。

■ 地球温暖化防止 アクションプランを発表

3月23日、東京・有明の東京ビッグサイトで開かれた第127回通常総会は、「地球温暖化に向けた一人ひとりの取り組み」と題してC・W・ニコル氏による特別講演を開催。「若いころ初めて来日し日本の美しく豊かな自然に魅了されたが、現在日本の自然は危機に瀕している」と、一刻も早い環境対策の取り組みの必要性を訴えた。

その後、「地球温暖化防止アクションプラン」の選考結果が発表された。全国から391件のプランが寄せられ、その中から「自転車でマイナス6%」（大東JC 尾崎洋一君）、「月ほたる」（柏崎JC 石口浩和君）、「OTONANOSENKA」運動（応募者多数）の3件が選ばれた。「自転車でマイナス6%」は、自動車の年間走行距離を自転車などの利用で昨年比6%減らすという市民参加型のアイデアであった。

来賓の鴨下一郎環境大臣は「洞爺湖サミット議長国として日本が世界から注目されている重要な年に日本JCが環境問題に積極的な行動を示していることを高く評価したい」と述べた。



憲法タウンミーティング開催（'08）

■ 各地で憲法タウンミーティングを開催

日本国憲法の施行から61年が経過した。日本JCは、2007年に成立した国民投票法などを踏まえ、国民一人ひとりに憲法について考えてもらおうと全国約60カ所で市民参加型のタウンミーティングを企画した。憲法記念日の5月3日に、北海道、関東、東海の各地区協議会および愛知ブロック協議会主催によるタウンミーティングが開かれたほか、5月末までに全国12カ所のブロック協議会、地区協議会などで順次開かれた（最終的に2008年度は60カ所で開催）。

東京・新宿の日本青年館では5月3日、関東地区協議会、8ブロックネットワーク会議が主催する「憲法フォーラム」が開催された。小田会頭は挨拶で「近年、社会は激動している。これからどういう国をつくっていくべきか。今こそその根幹である憲法を考えなくてはならない。そのためには幅広く、深い論議が必要だ。国民投票法（憲法改正手続法）が施行される2010年までの2年間、国民一人ひとりが議論できるような場を提供していかなければならない」と述べた。パネルディスカッションでは、民主党の小宮山泰子氏が「生存権を規定した25条が裁判で問われるなど憲法と私たちは常に密接な関係にある。心に

余裕を持って判断できるような環境を整えることが憲法を考える上できわめて大事だと考えている。憲法は国民一人ひとりのためにあるもの。国民が参加した上で憲法論議が広がっていくよう努力していきたい」と述べた。

一方、全国で地区やブロック、LOM主催のタウンミーティングが続々と開催された。神奈川ブロック協議会が主催したタウンミーティングでは、中学生を含む市民ら210人が来場し、「憲法とは基本的人権を守るための国家権力を縛るもの」という国民に義務を負わせるような改憲論に疑問を呈した。最後に神奈川ブロック協議会の柴田正隆会長は「今後とも、より多くの人にわかりやすく憲法について考えてもらえる場をつくっていきたい」と挨拶した。

■ JCI-ASPAC大会、釜山で開催

アジア最大級の貿易港で、約370万の人口を持つ韓国第2の都市・釜山。国際会議場「BEXCO」をメイン会場に5月29日から6月1日までの4日間、第58回JCI-ASPAC大会が開催された。JCIのエリアB（アジア・太平洋地域）からメンバーが参加。日本からは小田会頭をはじめ多くのメンバーが参集し、参

加登録者2949人を記録し、日本のメンバーの意識の高さを示した。

29日の日本JC結団式では、「OMOIYARI」運動の普及、2009年ASPAC長野大会のPR、2010年JCI世界大会の大阪招致というミッションをメンバー全員で確認した。30日には、第1回日韓合同世界平和推進準備会が開かれ、日本側からは「同日同時刻に電気を消し、ろうそくで過ごして地球温暖化防止アクションを合同で開催したい」との提案が、韓国側からは「中国の災害被災者を寄付で支援したい」という提案があり、日韓共同の取り組みに合意した。

最終日の6月1日には大阪JCによるJCI世界大会招致プレゼンが行なわれ、総勢260人余りが壇上に上がり壮観を呈した。優れた活動をしたNOM、LOM、個人が表彰され、日本JCが国連のミレニアム開発プログラム賞、大阪JCが国際開発分野とパブリックリレーション分野、長野JCがエリアBでのベストLOM賞をそれぞれ受賞した。



JCI-ASPAC釜山大会（'08）

■ 地域コミュニティの復活を目指す

サマコンのテーマは「『気高き日本』創造へのコミットメント！～市民の活力（ちから）が地域を創る、ローカルコミュニティの復活！」。地域コミュニティの復活により新たな社会づくりを目指す機会の提供の場となり、全国のメンバー1万人と一般市民約5千人が集まった。



サマコン（'08）メインフォーラム

小田会頭とUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）のスペシャルサポーターを務めた菊川怜氏の対談でオープニング。菊川氏はケニアの難民キャンプで厳しい環境の下でも将来の夢を語る子どもたちの実情を紹介したほか、「ローカルコミュニティの復活」に関しても発言。「一人ひとりがまず自分ができることは何かを考え、それを他者と共感してやっていけるようにしたい。そうした姿勢が大事だと思う」と問題解決への基本的なスタンスを明確に語った。

メインフォーラムでは、神戸大学名誉教授の野尻武敏氏、京都大学大学院教授の中西輝政氏、ジャーナリストの櫻井よしこ氏をパネリストに迎え、「気高き日本を語る」をテーマに討論。日本のアイデンティティを明確にしていくことの重要性が提起された。

■ 人間力大賞グランプリに大野氏

22回目を迎え、320人のエントリーの中から人間力大賞12人、日本青年会議所会頭特別賞8人を選出した。

小田会頭は「地域の中で高い志を持った若者たちの活動が周囲の人を変え、地域を変え、社会を変えるパワーになっている。日本JCとしてもそうしたすばらしい活動をそれぞれの地域に持ち帰り、よりよい地域づくりに生かせるよう努力し、ローカルコミュニティの復活につなげたい」と挨拶。

人間力大賞グランプリには、全国の小学校やホスピス、児童養護施設などでライブを重ねているシン

ガーソングライターの大野靖之氏、準グランプリにはアテネパラリンピック（50m平泳ぎ）銀メダリストの鈴木孝幸氏、カンボジアでラジオ放送を通じて日本文化などを紹介している門倉若葉氏が選ばれた。

■ JCI-UNリーダーシップサミットで 日本JCの存在感発揮

2008年JCI-UNリーダーシップサミットが、7月28、29日、ニューヨークの国連本部で開かれ、約100人のメンバーが参加した日本JCの存在感がひときわ目を引いた。

「UNグローバルコンパクトを通じてCSRを進化させよう」をテーマに、JCI国連事業担当役員である日本JC顧問の横田貴次君がサミットの議長を務めたほか、日本JCが提唱する「OMOIYARI運動」による提言が盛り込まれるなど、日本JCのリーダーシップが期待される大会となった。

1日目はCSRについての「JCI認定プログラム」を完成させるためのセッション。2日目は、世界各国のLOMとUNグローバルコンパクトのローカルネットワークが協力して行動していくためにはどうするべきかが議題となった。またJCIとICC（国際商工会議所）はどのように協調していくべきかなどについて、グループごとの討論が行なわれ、踏み込んだ発言が相次いだ。

日本JCが提唱し、JCIのエンドスプログラムに



JCI-UNリーダーシップサミット（'08）

なっている「OMOIYARI運動」についての報告もあり、OMOIYARI運動推進会議の北龍照正議長による説明の後、会議体メンバーが「OMOIYARI運動」でどのようにMDGs（国連ミレニアム開発目標）を達成していくか、その方法論についてプレゼンテーションがされ、2001年度日本JCの会頭を務めた長野JCの土屋龍一郎先輩が世界平和への提言を行なった。

■ 浜松で全国会員大会

10月9～12日の4日間、静岡県浜松市で第57回全国会員大会が開催された。今回は地元浜松の方言で、勇気を持って行動する果敢なチャレンジ精神を意味する「やрмаいか」の言葉に、ローカルコミュニティ再生の願いを込め、「やрмаいか!日本!気高きこの国の未来のために」を大会テーマとして掲げた。

開会数日前にニューヨーク株式市場の暴落に端を発した世界同時金融不安が世界中に広がりつつある中、自動車やオートバイ、楽器などの分野で世界的企業を生み出した浜松で会員大会を開くことについて、小田会頭は「今、世界経済が大変な時期にさしかかろうとしている。世の中を元気にする起爆剤となる全国大会を目指してみんなの力を結集したい」と力強く訴えた。

11日のメインフォーラムは、「ローカルコミュニティの復活が『気高き日本』を創造する」をテーマに、ハマキョウレックス会長の大須賀正孝氏、精神科医の和田英樹氏、拓殖大学学長の渡辺利夫氏の3氏を招き、パネルディスカッションを開いた。渡辺氏は「現在の日本を取り巻く情勢は日清、日露戦争前後のきわめて緊迫した社会情勢に酷似している。テーマをしっかり持ったリーダーが求められる」とリーダー論を展開。和田氏は教育の観点から「日本人の価値観の質が悪くなっている。フィンランドのように『質で勝負しよう』という戦略を込めた気持ちが日本にも必要だ」と述べた。大須賀氏は「やрмаいか」スピリッツを発揮する一人として「『できない、無理、だめ』を言わない。必死に考えみんなで考える。



第63回JCI世界会議
インド・ニューデリー大会（'08）

やらまいか精神とはそういうことだ」と述べ、その真髓を語った。

■ 2010年の世界会議開催地、 大阪に決定

インドの首都・ニューデリーで11月4～9日に、第63回JCI世界会議が開催された。世界中から約

3500人が参加し、日本JCからは約1千人が集まった。OMOIYARIセミナー、OMOIYARIトレーナーズセミナーはいずれも定員を大幅に超える参加となり、OMOIYARI運動が確実に世界に広がっていることを実感した。

7日の選挙で、2010年の世界会議開催地として大阪での開催が満場の拍手で可決された。午後、小田会頭は「日伊合同常任理事会」「BRIC s (+新興国) 合同常任理事会」に出席してNOMレベルの国際交流を積極的に展開。「日本は世界のパワーハウス。平和を愛する国民だから期待している」（南アフリカ代表）、「国土の東部はアジアに属する。長野ASPACに参加したい」（ロシア代表）など、日本は世界から熱い視線を送られた。

日本への期待は一般参加者も同じ。ジャパンナイトでは、メンバーがゴミ袋を手に清掃を開始しきれいに片付けて紙くず一つ落ちていない状態にした。これもまた日本らしさ、日本のOMOIYARIである。



第57回全国会員大会浜松大会（'08）

■ 2009年、世界中が チェンジに期待する

「やさしくあるためにつよくあれ！リアリティと説得力を伴う『JCプライド』の実践！」を胸にJC運動へのまい進を心に誓う、2009年度の京都会議が1月22～25日に、国立京都国際会館で開かれた。

第58代安里繁信会頭をはじめとする役員、松井雄雄京都JC理事長らが下鴨神社を参拝した後、山田啓二京都府知事を表敬訪問した。山田知事から「今年1番の狙いは何ですか」との問いに、安里会頭は本年度のテーマである「真日本建国」の意図を説明した。京都市長レセプションでは、門川大作京都市長から「日本人の誇りを持って、徳高く生きるというスローガンがすばらしい。ピンチの時こそチャンスのお気持ちで活動にまい進していただきたい」と激励の言葉をいただいた。

メインフォーラムの第1部は、第18代会頭を務めたウシオ電機会長の牛尾治朗先輩が基調講演し、アメリカのオバマ大統領の就任演説は、強い者が強くなりすぎず、困った人にも適切な配分を許容する精神の大切を説いた素晴らしい内容であったことに触れ、「JCでも学ぶべきことがたくさんある」とのアドバイスをいただいた。第2部は、牛尾先輩と安里会頭が対談。牛尾先輩は「政治・経済が厳しい状況を迎えている今こそ、若い人に自信を取り戻させることが大事。JCメンバー一人ひとりが100人の若者に思いを伝えれば、400万人の若者の希望につながると、日本JCの持つ影響力の大きさに期待を寄せた。

新年式典では、安里会頭の生き様をつづったドキュメント映像が流れ、ホール後方からスポットライトを浴びて安里会頭が登場。所信表明が始まった。

「不安定な政治・経済によって若い世代が路頭に迷い、この国を築いてきたお年寄りが何に頼ればいいのかかわからない、悲しい時代が訪れている。しかし、そんな時こそJAYCEEが運動を広げるチャンスだ。我々と同じDNAを持った内閣総理大臣が誕生した。行政改革がもたらした地域間格差はますます



京都会議（'09）
メインフォーラム
牛尾治朗先輩との対談

広がり、その本来の目的が大きく揺らぎ始めている。だからといって、別に今の政治を批判するつもりはない。なぜなら、有権者の選択で世の中は動いているからだ。一時の感情に任せて反対運動をしたり、嘆いたりしてはしょうがない。様々なことに対して、お互いがわが事としてしっかりと受け止め、真の日本建国に向けてスタートを切りたいと思う。2009年の幕開けは最高の環境を与えてもらった。後はどう終わるかだ。今年1年、精一杯皆さんの愛する地域を見せてほしい。伝えていくべきことをしっかりと伝えてほしい。お互いのプライドをかけて、日々精進を怠らず、胸を張ってともに王道を歩いていくことを誓い合い、締めくくりとしたい」

自分の言葉で会員一人ひとりに語り掛けるような、心の奥底に響く所信表明に、会場はしばし感動の余韻に包まれた。

■ 東国原宮崎県知事の マニフェスト検証大会を実施

日本JCが主導し、全国に広がりを見せるマニフェスト型公開型討論会で事前の討論会とともに重要なのは、事後にいかにかマニフェストが実行されたかを見る検証のプロセスといえる。

宮崎ブロック協議会は2月18日、東国原英夫宮崎県知事マニフェスト検証大会を開いた。東国原知事



東国原英夫宮崎県知事
マニフェスト検証大会（'09）

は2007年1月、宮崎県で初めてとなるマニフェストを掲げた選挙で当選し、県内外で大きな注目を集めた。同協議会では、このマニフェスト型選挙にいち早く注目。宮崎県内の首長選挙において、各LOMが公開討論会を開き、政策論重視型のマニフェスト型選挙が一気に普及した。県内ではブロック協議会、LOMが一体となり、公開討論会、検証大会を実施するいわゆるマニフェストスパイラルの確立に貢献している。

この日の検証会はまず外部からの視点として早稲田大学マニフェスト研究所の林紀行氏から検証結果の報告がなされ、総合評価では100点満点で84点というまずまずの評価だった。東国原知事からは、検証結果を受けての進捗状況の説明があり、その後参加者からの質疑応答が行われた。

■ 自民、民主両党代表者による 緊急討論会を開催

解散または任期満了に伴う国政選挙が行なわれる年となった。有権者の無関心が引き起こす内容のない選挙をするのではなく、自分たちが何をしなければならぬのかを考えるきっかけとしなければならない。

そのような思いをもとに、3月21日、東京ビッグサイトで「2大政党代表者と日本JC会頭による緊急討



2大政党代表者と日本JC会頭による
緊急討論会（'09）

論会」が開かれた。安里会頭がコーディネーターを務め、自由民主党から園田博之政務調査会長代理が、民主党から前原誠司副代表が参加。日本JC役員や709LOMの理事長、報道関係者など約1千人の来場者が注目する中、来るべき衆議院議員総選挙に向けて、日本のあるべき姿や今後の政策について討論が繰り返された。

安里会頭はまず、JCメンバーに対して行なったアンケート結果で現状の業績について「非常に悪い」「悪い」を合わせた数字が57%に達したことを紹介し、中小企業の実態をどう受け止めているかを質疑した。前原氏は「世界全体の景気が悪化しつつあるが、今の状態は山登りにたとえるとまだ2、3合目でしかない」と認識している。この2、3年は財政再建を横に置いてかなりの財政出動をして総需要政策を高め、経済の底抜けを防ぐことが大切」と述べた。一方、園田氏は「昨年夏から第1次補正、第2次補正、さらに成立しようとしている21年度本予算で経済対策を打ってきた。経済成長率の落ち込みが先進国でももっともひどいことがわかり、外需依存型の経済構想に頼らず、緊急的な財政出動を大規模にやらなければいけないと思っている」と述べた。

討論会の最後に安里会頭は「このような中小企業の生の声を持って帰っていただき、政策に反映していただくようお願いしたい。民度以上の政治は生ま

れないという認識のもと、政治に関心を持ち、選択していききたい」と締めくくった。

■ 日中中期ビジョン5カ年計画を合意

日本JCと中華全国青年聯合会（全青聯）による「新たな日中関係構築会議」が5月29～30日、中国・北京で開かれた。両国の現状や課題を踏まえ、講演のほかグループディスカッションなどのプログラムが実施され、具体的な交流に向けた一歩を踏み出した。

全青聯の万学軍副秘書長が「中国の経営者は改革・開放が始まって以降30年しか市場経済を体験していない。皆さんと比べて危機対応の経験、教訓が少なく、今回の交流を心待ちにしていた」と歓迎の挨拶を述べた。日本JCは「70年代以降の日本経済と政策対応」と「日本的経営」について発表。松下幸之助の「商売人の心得」や渋沢栄一の「論語と算盤」の考え方を紹介した。

日本JCと全青連はこの日の議論を踏まえ、「日中中期ビジョン5カ年計画」を発表。「伝統を受け継ぎ、未来を切り開き、友好かつ実務的」の原則に則って、2005年6月に締結した覚書に沿って、今後5カ年の中期的ビジョンを共有した。

- ① 青年を主体とした交流事業
- ② 商業や農業などの多方面の分野での人的交流
- ③ 災害対策や災害時のネットワークなどの情報の交



新たな日中関係構築会議（'09）
交流晩餐会

換、相互支援

- ④ 地方の見聞をお互いに広め、地方都市同士の交流を促進
- ⑤ 省エネ・環境保護の分野における相互交流の5つの交流事業を積極的に推進していくことで合意した。交流晩餐会には日本JC第27代会頭を務めた、麻生太郎首相がサプライズゲストとして参加。各テーブルを回って両組織の参加者と交流を深めた。

■ メディアを通じ情報、思いを発信

日本JCの運動や政策を世に広く知ってもらうには、様々なメディアを通じて情報を発信していかなければならない。09年度は例年にも増してメディアを通じた広報戦略の強化に努めた。

京都会議のメインフォーラムで行なわれた牛尾先輩と安里会頭の対談を日本経済新聞紙面に掲載し、大阪よみうりテレビの製作で、タレントのやしきたかじん氏が司会を務める「たかじんのそこまで言って委員会」などに出演した。

青年世代が公に発言できる
政治・経済の大転換期を
我々の世代で牽引していきたい。

企業の未来を切り拓く「知」と「行動力」を培う

会員（20歳～40歳まで）の平均年齢 **35歳**

全国709の青年会議所で活躍する会員 **約4万人**

あなたのまちの青年会議所から、さあ、始めよう!

<http://www.jaycee.or.jp>

2009年2月13日 日本経済新聞朝刊掲載記事より（'09）



第59回JCI-ASPAC長野大会（'09）

■ 憲法タウンミーティングを 全都道府県で同時開催

2010年から憲法改正の要となる国民投票法が施行されることを踏まえ、日本JCは、2008年1月31日に憲法審査会がルールどおり運営されるように「憲法審査会規定の制定に関する国会請願書」を提出した。

また、2008年度より開催している憲法タウンミーティングで憲法の論点を解説する冊子「5分でわかる私たちの未来～憲法はじめの一步～Ver.2」を発行した。子どもも読めるように工夫を凝らし、国民の関心を高めた。

5月3日の憲法記念日に、憲法タウンミーティングを47都道府県で同時開催し、全国で1万人あまりの国民やJCメンバーが参加。秋田では、ショッピングセンターで主婦や家族連れの方々に、各大学では学生とコラボレーションしながら憲法について語り合ってもらった。

この国民運動を日本JCが全国に広く伝播し続けることで、国民一人ひとりに自分の意見が形成され、来るべき国民投票の準備ができ、憲法が改正される日に「自分たちの憲法を自分たちで考え、選択し、創った」と胸を張って言えるようにしたい。

■ JCI-ASPAC長野大会が開かれる

1400年もの歴史を刻む古刹、善光寺の門前町として栄えてきた長野市で6月3～7日に、第59回JCI-ASPAC長野大会が開かれた。長野JC、日本JCが一丸となってアジア・太平洋地域約30カ国からのゲストを「OMOIYARI」の心でもてなし、メンバー同士の絆と友情を深めた。

スローガンは「和～Making Smiles & Cherishing Harmony」。安里会頭は、APDCミーティングやNOM会頭会議、4部にわたり開催されたJCI総会などの会議に出席。日本JCの「OMOIYARI」運動が世界各国に広まり、各地で実践されるようメッセージを発した。「これまで相違点ばかりをクローズアップした対話がなされてきたが、2009年度はお互いの共通点を認め合い、未来を築く年にしよう」と挨拶した。韓国JCのジェン・ホン・ユウ会頭も同意し、さらなるパートナーシップの強化を誓い合った。

また、「JC青経塾」では百年に一度とされる不況下で、地域や社会から必要とされる企業のあり方を検証。青年経済人として目指すべき方向を模索する充実したプログラムとなった。

■ 人間力大賞グランプリに中岡氏

23回目を迎えた本年の選考会には、173人の申請が寄せられ、グランプリにはNPO法人希少難病患者支援事務局SORD創設理事の中岡亜希氏が選ばれた。

75歳でエベレスト登頂に成功した特別選考委員・三浦雄一郎氏から「自分自身の限界や可能性にはいくつになってもトライできる」という言葉で会場は大いに盛り上がった。

注目の人間力大賞グランプリに選ばれた中岡亜希氏は、「私は7年前に『遠位型ミオパチー』という進行性の難病の告知を受けた。難病生活を続ける中で、実は私のように国から難病指定を認められていない病気が数千種類も存在する事実を知った。2009年1月31日に希少難病患者支援事務局SORDの設立に参加させていただいたのは、何の情報も得られずに孤立し、病気と向き合うだけの厳しい毎日を過ごしておられる患者さんとご家族の皆様を支援する必要性を強く感じたからだ。せっかく生まれて生きているのだから人生を精一杯楽しみ、やりたいことに挑戦できる環境づくりまでできるような幅広い活動を目指したい」と挨拶した。

■ 「真日本建国」へ向けて舵を切れ! サマコン開催

サマコンが「『真日本建国』へ向けて舵を切れ! ~開港の地から無限の可能性ある未来に向けて」を



サマコン ('09)



サマコン ('09) オープニングにて
麻生太郎首相が登壇

サマコン ('09) メインフォーラム
パネリストの櫻井よしこ氏

テーマに開催された(7月25、26日)。全国から約1万人のJCメンバー、さらには一般市民も参画し、一人ひとりが国づくりとは何かを真剣に考える、まさに「真日本建国」の実現に向け大きな一歩を踏み出す2日間となった。

「政治家を馬鹿にしても、政治を馬鹿にしてはいけない。今こそ正面から、この国のことを考えよう」。安里会頭の力強い挨拶で始まったオープニングには、先輩である麻生太郎首相が登壇。日本各地に潜む最先端の技術や、映画・コミックなどの芸術コンテンツをはじめとする日本の底力に目を向け、それらを成長させることの重要性を説いた。

サマコンの中核となったのが6つのフォーラムと8つのセミナー。中でも一般市民に公開したメインフォーラムの第1部は、「開港150年から問うこの国の在り方」をテーマとした。櫻井よしこ氏は、「日本人が持つ日本人としての自覚と、独立自尊の国家観だった」と指摘。松本健一氏は「身分や藩の壁を超え、意見を持った人々が集まって議論する処子横議が変革を生んだ」と述べた。「自らが進んでグローバル・スタンダードのつくり手になるべき」との手嶋龍一氏の提言に続き、高橋史朗氏が「この国を動かすのは名もなき若者。人間力を育てるために家庭の教育を見直すべき」と指摘した。

フィナーレを飾るクロージングで安里会頭は「天の時、地の利、人の和がそろった時、はじめて社会が



JCI-UNリーダーシップサミット（'09）

動く。自分が変わらなければ、国づくりは始まらない。今回、受け止めた事実を踏まえ、来る解散総選挙に自分の意見を投じてほしい」と強調。スペシャルゲストの藤原紀香氏とのトークライブでは、世界各国で戦争や貧困に苦しむ人たちの人道支援を行なっている藤原氏の体験談をうかがった。

■ 「気候変動」テーマに JCI-UNリーダーシップサミット

JCIのリーダーが一堂に会し、世界を取り巻く課題について議論をする2009年JCI-UNリーダーシップサミットが7月28～30日、スイスの国連ジュネーブ事務局で開かれた。今年で5回目を迎えるサミットのテーマは「気候変動」。日本JCの橋本淳君が議長を務め、「気候変動」がもたらす影響やビジネスチャンスについて世界各国から集まった約200人のメンバーによる活発な討議が行なわれた。

まず、国連グローバル・コンパクトのエグゼクティブ・ディレクター、ジョージ・ケル氏は、京都議定書の2012年以降の温室効果ガス排出の枠組みを決めるコペンハーゲン会議（COP15）に向けた議論の現状を紹介。「ビジネスセクターは低炭素問題に対する新しい技術開発に力を注ぎ、そのための働きかけを政府にしていく必要がある」と、行動を促した。



防衛省部隊見学（'09）
八戸駐屯地にて

■ 「国防の現場」をつぶさに見学

7月15～17日、防衛省大臣官房広報課のご協力で青森県の三沢、大湊、八戸の各部隊見学ならびに表敬訪問が行なわれた。日本JCから「真日本建国」創造グループ、JC運動発信特別委員会から24人のメンバーが参加し、普段見ることのできない「国防の現場」をつぶさに視察した。

1日目は航空自衛隊唯一の日米共同使用基地であり、北部航空方面隊の司令部が置かれるなど重要な役割を担う三沢基地を訪問。「何をしても離陸命令が出て5分後にはスクランブル発進をしなければいけないが、苦ではない」との言葉が印象的だった。

2日目は海上自衛隊の大湊基地へ移動。大湊地方総監部、第25航空隊などが設置され、艦艇や航空機に対する後方支援、災害派遣、危険物除去などの任務を行なっている。

3日目は、陸上自衛隊八戸駐屯地に入った。広場ではミサイルやレーダーなどの装備を搭載したヘリコプターやトラックの詳細な説明を受け、一概にミサイル迎撃といえども緻密な作業で日本が守られていることがわかった。

有事の際には短時間で任務に就き、災害発生時には迅速に人命を救助するなどさまざまな役割を持つ自衛隊員の真剣なまなざしを目の当たりにし、日本、国防に関心を持つ大切さを感じさせられる3日間となった。

■「北方4島ビザなし交流」に参加、 返還への思い新たに

日本JC北海道地区協議会の主催で第40次北方領土返還要求現地視察大会が7月11、12日に開かれた。これに先立って国防問題検証委員会のメンバーが、北方領土返還要求運動連絡協議会主催の「北方4島ビザなし交流」に5泊6日の行程で参加した。

択捉島で私たちに対応したラズミシキン択捉島地区長の言葉は「ロシア固有の領土へようこそ」という領土死守を前面に出したものであった。かつて日本人が在住していた象徴ともいべき日本人墓地の清掃活動を行なったが、とても墓地と呼べるものではなく、かろうじて墓石・墓標が立っているほどの荒れ果てた地であった。清掃後、訪問団全員で御霊に手を合わせ、鎮魂とあわせて必ず個々に日本人が帰ってくることを誓った。

つい先日、ロシア当局は今後一切の訪問を拒否す

るとの声明を出した。経済的にも潤沢になった大国の意図は日本に頼らずとも国家運営できるという自負の表れであり、日露両国には領土問題などないというスタンスの表明と見て取れる。領土問題に関心の低い国民と時間の経過を克服していかなければならない。

■チャレンジ300 実施率64%

第45回総選挙に向けて、約半年にわたって日本JCと全国のブロック、LOMとが協働し、全国300の小選挙区でマニフェスト型公開討論会の開催を目指す「チャレンジ300」プロジェクトを続けてきた。結果は、全国192カ所での開催にこぎつけ、実施率64%という高率に達した。

衆議院の解散時には、安里会頭と各連携協力団体との共同記者会見をJC会館で実施。24社40人のメディアが集まり、効果的に情報を発信した。直後



第58回全国会員大会沖縄那覇大会（'09）

のサマコンでは、マニフェストサイクルの持つ意味と重要性を確認し、総選挙の争点を発進するセミナーも開催した。

45回総選挙は、政権選択、マニフェスト型選挙として大きな注目を集め、結果は民主党の躍進により、政権交代が現実のものとなった。今回の総選挙の最大のポイントは、これまでよりも格段に強い国民一人ひとりによる意思表示と選択が行なわれたことである。

日本の政治のターニングポイントにおいて、私たちが推進したチャレンジ300は大きな意義を持っていたと確信している。一方で、3分の1の選挙区で開催できなかったという課題も残されている。今回のチャレンジはあくまでもスタート。国民一人ひとりが身近に政治を感じ、日本に真の国民民主権が根付くその日までチャレンジは続く。

■ 全国会員大会、沖縄那覇で開催

10月15～18日の4日間、沖縄県那覇市と宜野湾市を中心に第58回全国会員大会沖縄那覇大会が開かれた。大会テーマは「やさしくあるためにつよくあれ!～アドマイヤー型社会の実現こそが『真日本建国』を導く～」。およそ1万2000人が参加。「ゆいまーる」の精神あふれる温かなムードでメンバーたちはさらなる自立した地域の創造に向けて心を新たにしました。

アワードジャパン2009グランプリ授賞式では、会員拡大部門の会頭特別賞に、国分寺JCと西尾幡豆



第58回全国会員大会
沖縄那覇大会（'09）
アワードジャパン富士五湖JC



JCI世界会議ハマメット大会チュニジア（'09）
最優秀NOM賞、最優秀会頭賞史上初のダブル受賞を成し遂げた日本JC

JCが、そして最優秀グランプリに富士五湖JCの「富士五湖WISH 伝えよう 僕らの未来予想図」事業が選ばれた。

メインスピーチに臨んだ安里会頭は「真の日本建国をスローガンに掲げ、憲法を論議し、国防や外交を考え、自立した地域創造、内需拡大のためにローカルファストの推進など今日まで運動してきた」と今年の活動を振り返った。そして「60余年におよぶ先輩方が築き上げた信用の上になわれわれの運動が成り立っていることを決して忘れてはならない」と諸先輩方に敬意を表した上で「今こそ、JC運動を現役の現役による、現役のための社会変革運動に昇華させる」と力強く決意表明した。多くのメンバーが立ち上がり賛成の拍手が沖縄の空に響いた。

■ 史上初、最優秀NOM・会頭賞をダブル受賞

北アフリカ、チュニジアのハマメットで第64回JCI世界会議が11月16～21日に開かれた。

総会では、2010年度JCI役員の選挙が行なわれ、原田憲太郎君が常任副会頭に、池田雅一君が副会頭に選出された。アワードセレモニーでは、日本JCが最優秀NOM賞、安里会頭が最優秀会頭賞に選ばれ、史上初のダブル受賞を成し遂げる快挙となった。日本JCの存在感を改めて世界にアピールする最高の場となった。



京都会議（'10）新年式典

■ 2010年、「陽はまた昇る” 地域を照らす光明たれ」

新春の幕開けを飾る京都会議が2010年1月21～24日、「陽はまた昇る” 地域を照らす光明たれ！」をスローガンに、国立京都国際会館で開かれた。

恒例の下鴨神社での成功祈願を終え、京都商工会議所での記者会見に臨んだ第59代相澤弥一郎会頭は、2010年度の方針として「日本再生に貢献しうる輝く地域の創造」など5つのマニフェストを表明した。

全国のメンバーが続々と会場入りした3日目は、第8代会頭であり裏千家前家元である千玄室先輩と相澤会頭によるメインフォーラムが開かれた。青年世代の行動力と情熱とパワーで、JCの礎を築いた仲間たちとは今でも強い絆で結ばれているという千先輩。

「日本をよくするんだ、日本を変えるんだとJC活動に明け暮れたあの気概が今のメンバーたちにもありますか。今この瞬間もどこかで紛争が起き、世界平和が脅かされている現実をしっかりと受け止めてい



京都会議（'10）メインフォーラム
千玄室先輩との対談

ますか」など、メンバーたちに厳しいメッセージも。また、「今JCメンバーに必要なのは、地域社会とどのように結びついているのかをもう一度考え直すこと、そして恥ずかしがらずにもっと大きな声で運動を発信していくことだ」とアドバイスをいただいた。

地域のデザイン創造セミナーには、元内閣総理大臣の小泉純一郎氏が登壇。日本では売れない商品が海外で大人気商品となった事例など、世界から見た「made in JAPAN」の価値、需要から見る観光立国日本のあり方などについて講演をいただいた。

■ 心の中に眠っている 青年としての魂を呼び覚ませ

京都会議のフィナーレである4日目の新年式典では相澤会頭が1時間に及ぶスピーチで熱く思いを語った。

「私はこの場に立たせていただくに当たり、徹底して日本JCとしての職務を遂行したいと思った。各地会員会議所の発展、各地の発展のためにいったい何ができるのだろうか。この国の未来とか、自分のまちの将来とか、子どもの未来だとか、もう他人に任せていく時代は終わった。未来を誰も思い描いていないのだ。誰も今つくっていないのだ。地域の未来

を、日本の未来を自分たちだけで描けるのだ、もう一度あなたたちの心の中に眠っている青年としての魂を呼び覚ましていただきたい。わが国の復興は地方にかかっている。たくさんの文化、たくさんの子どもたちを育む土壌は、故郷にある。青年が一日休んでしまったらわが国の進歩は一日遅れる。あなたが一日休めばあなたの地域の進歩が一日遅れる。それが坂の上の雲の本懐だ。皆さんならできる。私は皆さんをまず信じることから始めたいと思う。不安だらけの世の中を明るい希望を持って温めてあげてほしい。本当の日本国を、本当の自分たちの故郷を取り戻すために、日本JCは全身全霊をもって、各地会員会議所のために尽くす。多くの声を聞かせてほしい。多くの困ったことを教えてほしい。日本JCをもっと使ってやってほしい。ボトムアップしよう。自ら今持ちえる情熱を最大限用いてわが国のエンジンになろう」

京都会議に参画したメンバー一人ひとりが青年世代のプライドと気概と可能性を胸に、それぞれの故郷へと戻っていった。

■ JCIデザイナーコースを日本初開催

JCIでは1990年にJCIトレーニングインスティテュートを創設し、数々の自己探求のための個人開発プログラムを提供している。その後、JCIトレーニングインスティテュートはJCIトレーニングと改称し、新たなプログラムの実施に取り組んでおり、JCIミッションとビジョンと年間計画に沿ったコースの実施と開発を行っている。

日本JCではこれらのプログラムのうちJCIデザイナーコースを2月5～7日、日本で初めて開催した。



JCIデザイナーコース修了証書授与

JCIデザイナーは、すでにプレゼンテーション研修の実績を認められている個人が、研修開発の新たな次元に進むためのプログラム内容で、受講した学習者が新たな研修コースを開発できる環境をつくり出すことを目的に考案された。

研修には12人が受講し、受講後にJCI公認国家トレーナーとして認証された。

■ 参院選控え、全国一斉マニフェスト型公開討論会を開催

7月に第22回参議院選挙が開かれる。前年の衆議院選挙後初の大きな国政選挙であり、政権交代後初めての国民の審判となる。鳩山政権にとってはこれまでの政権運営が問われ、一方の自民党は政権復帰を狙いつつも有力議員の離党が相次ぎ、存在意義をかけた選挙となる。ところが注目の選挙であるにもかかわらず政治に対する無関心層は増える一方で、このままでは民主主義の危機ともいえる状況だ。そこで、停滞した現状に風穴を開けるべく、全国一斉マニフェスト型公開討論会を開催した。

参院選の争点としては、いまだ不振にあえぐ日本経済の成長戦略・景気対策や、過去最大の国債発行を余儀なくされた財政問題、繰り返される“政治とカネ”の問題、米軍普天間飛行場移設問題などに起因する外交政策などが挙げられる。そのほかにも外国人参政権、地方分権、年金改革、消費税、領土問題、教育、郵政改革など先送りできない問題が山積しており、それらを解決へと導く各党のマニフェストが前回の衆院選に引き続き注目されている。

日本JCは各団体と連携しながら、市民が政策本位で政治選択を行なうことを目的に、全国47選挙区43選挙区60会場で公開討論会（合同個人演説会を含む）を開催、7380名が参加した。より多くの有権者が参加しやすい形式で展開し、各政党や立候補者が有権者にどのような約束を交わすのかを見極め、国民が政治に対してどう向き合っていくのかを考える機会を提供した。

また、「e国政」や「公開討論会の開催動画配信」などWEBを活用した新たな試みを行なった結果、市民の政治参画意識醸成へ効果的に寄与。無関心が蔓延する社会に市民が身近な課題から社会参画する機会をつくり、社会に積極的に関わる市民を増やしていくことができた。

■ JCI-ASPACシンガポール大会

第60回JCI-ASPACシンガポール大会が6月3～6日に開催された。「Gotong Royong (相互扶助)」の精神のもと、アジア・太平洋地域の約30カ国・地域からJCメンバーが集い、日本からは2214名が参加。南国シンガポールの暑さを凌駕する熱気であふれかえった。

3日の各国会頭会議は、大会議長を務めた原田憲太郎JCI常任副会頭の挨拶で開始。相澤弥一郎会頭、福井正興副会頭が出席し、各国の状況把握に努めた。4日には「OMOIYARIセミナー」が開かれ、各国のメンバーが参加し、白熱した討論が行なわれた。

5日の日韓合同常任会議では韓国会頭より、11月の世界会議大阪大会で日韓姉妹LOM一斉交流会の実施の提案がなされた。日本マカオ合同常任会議ではビジネス交流の必要性も話し合われた。

ジャパンナイトでは、50を越えるブースで日本各地の特産品を紹介し、ハッピー姿のメンバーが元気いっぱい各地の見所、名所を紹介した。



第60回JCI-ASPACシンガポール大会（'10）

6日の日台合同常任会議では、さらなるビジネス交流の促進について話し合われた。また、総会では、原田憲太郎JCI常任副会頭の2010年度会頭への立候補が正式に表明された。アワードセレモニーでは、NOM褒賞、LOM褒賞、個人褒賞と全カテゴリーで受賞した。

■ 1万5600人が来場した横浜の夏

夏恒例のサマコンが7月24、25日、横浜で開催された。9110人のメンバーと6500人の一般参加者で、会場は大いに盛り上がった。現役の横須賀JCメンバーである小泉進次郎衆議院議員と相澤会頭のトークセッションで幕を開けた。「国民が主役であり、政治が後からついてくる世の中になるべき」と提唱する相澤会頭に「次の時代の扉を開けるのは政治家ではなく国民一人ひとりだ」と応えた小泉氏。国民主体の世界に輝く日本へ向けて2人の熱いトークが続いた。

メインフォーラムIは、「世界に輝く『NEXT STAGE』へ!～ニッポンの危機を打ち破り、輝ける未来(あした)を創る～」をテーマに開かれた。国防のスペシャリスト、田母神俊雄氏は「悪いのは国や経済ではなく、国民一人ひとりの自立意識の問題」と指摘。政治・経済評論家の徳川家広氏は「地域一人ひとりの努力なくして国の未来はない」と参加者たちに呼びかけた。衆議院議員の細野豪志氏は「JCと連携して何とか国民の皆さんに政治に協力してもらえよう努力したい」と述べた。

また、メインフォーラムIIでは「輝く地域の創造!～NEXT STAGEへの確かな光～」をテーマにパネルディスカッションが行なわれ、まちづくりに焦点を当てて、様々な角度からパネリストが具体的な事例を紹介した。三重観光大使であり「ナスカの地上絵」の保護活動にも取り組んでいる楠田枝里子氏からは、まちの景観やたたずまいを守る歴史保存の観点から海外、国内のまちづくりの事例が紹介された。キャスターの木村太郎氏は、マスメディアの中でも地



サマコン（'10）
メインフォーラムI

元の新聞・ラジオの重要性を指摘。市の職員として小樽のまちおこしを成功させた木村俊昭氏は、埋没する地域の宝の可能性を語った。スペシャルゲストとして登場した辰巳琢郎氏は「話を聞くだけでわかったつもりにならず、一つでもひらめくことがあればまずは挑戦してみしてほしい」とエールを送った。

このほか、説得力あるJAYCEE育成セミナーでは、人として親として社会人としてどう生きるべきかを学ぶ「真の日本男児育成プログラム」、日本JCの各種プログラムの内容や実施風景などを紹介展示した「日本JCプログラム推進スクエア」、日本を知り、日本を愛し、日本人であることに誇りを持つことが、真の国際人になるための近道であると呼びかけた「真の国際人育成プログラム」など多数のセミナーが開催

された。また、「なんでも解決！LOM・協議会運営お悩み相談スクエア」では、公益法人格取得や公益会計基準、コンプライアンスおよび規則やアジェンダシステム・デジタルアーカイブ、外部資金導入や情報発信についてなど多数の相談ブースが設置された。

■ 公益社団法人格を取得

日本JCは、2010年7月1日に、公益社団法人格を取得した。これは、2006年の通常国会において、社団法人・財団法人のあり方を抜本的に見直し、公益法人制度改革関連3法（一般社団・財団法人法、公益法人認定法、関連法案整備法）が成立したことを受けてのことである。日本JCの取り組みを参考に、各LOMでの取得に向けたサポートを行なった。公益社団法人は、公益性のある団体であることを、総理大臣や都道府県知事から認定され、公益社団法人・公益財団法人の名称を用いることができ、税制上の優遇措置を受けることとなる。

■ 災害支援活動推進プログラムの実施を呼びかけ

自然災害が頻発していることを受け、地域から頼られるJC確立委員会は、組織的な対応をシミュレーションできる最長210分の災害支援活動プログラムを開発し、各LOM、ブロック単位での実施を呼びか

災害支援活動推進プログラム実施パターン別解説書								
		パターンA	パターンB	パターンC	パターンD	パターンE	パターンF	
セッション1	モジュール1 災害全般に対する意識の高揚を図りたい	90分	90分	24分 ディスカッション	90分			
	モジュール2 被災地支援における現状、問題点、課題を理解したい	モジュール1～3、 ディスカッション1～3	モジュール1～3、 ディスカッション1～3	—	モジュール1～3、 ディスカッション1～3	—	—	
	モジュール3 社会関係資本を活用した復興の大切さを理解したい							
セッション2	セクション2 イントロ+クロージング	20分	20分	20分		20分	20分	
	地震編	災害に対する政府や行政の一連の流れを理解したい	50分					
		災害発生時の住民の動きを理解したい	カードワーク 答え合わせ 復習	50分	50分		50分	30分
		社会福祉協議会の動きを理解したい		カードワーク 答え合わせ	カードワーク 答え合わせ	—	カードワーク 答え合わせ	答え合わせ
	水害編	被災者支援のためのJCの動きを理解したい	50分	(地震or水害)	(地震or水害)		(地震or水害)	(地震or水害)
		災害に対する政府や行政の一連の流れを理解したい	50分					
災害発生時の住民の動きを理解したい		カードワーク 答え合わせ 復習				(地震or水害)	(地震or水害)	
	被災者支援のためのJCの動きを理解したい							
実施時間		210分	160分	94分	90分	70分	50分	

※その他、様々な組み合わせで実施可能。

けている。

プログラムは、セッション1、2に分かれており、セッション1では、災害全般に対する意識の高揚、被災地支援における現状、課題の理解、社会見解資本を活用した復興の大切さの理解など活動の方向性を示す内容となっている。また、セッション2では、JCメンバーが地震や水害といった災害被災地で起こりうることを、カードを使って疑似体験し、全体像について理解できる内容となっている。

プログラムの研修を通じて、災害が発生した場合、早急に被災地地域住民の生活を復旧し、生活支援、経済を手助けすることで安定した、地域の自主、自立につなげる。

■ アワードジャパンに 「地域のたから」発掘部門を新設

第59回全国会員大会が9月30～10月2日に、小田原・箱根地区で「襷で繋げ！報徳の精神（ここ

ろ）」をテーマに開かれた。

30日の開会式では、小田原JCの吉澤理事長が「10年来、全国大会をこの小田原・箱根の地に誘致する活動を続けてきた。大都市でなくても全国大会ができることを感じていただきたい」と挨拶した。

1日は、アワードジャパンが開かれた。本年度から「地域のたから」発掘部門と「OMOIYARI」特別賞が新設された。優秀賞には、地域開発部門に黒石JC、会員開発部門に長野JC、国際開発部門に甲府JC、環境開発部門に広島JC、広報部門に糸魚川JC、福祉関係部門に周南JC、地方自治・行政関係部門に調布JC、「地域のたから」発掘部門に宮津JCが選ばれた。会頭特別賞は今治JC、陶都有田JC、桑名JCが受賞した。最優秀グランプリは教育関係部門で「手紙～少しの未来へ～」の事業を行なった美作JCに決まった。美作JCは、20数人のメンバーで頭をひねり、低予算で人手もかからず、かつ最大限に地域貢献を図れるところが評価された。



第59回全国会員大会（'10）



第59回全国会員大会（'10）
アワードジャパン グランプリに輝いた佳作JC

2日は、田原総一郎氏を講師に迎え、「国家問題フォーラム日本再生計画～TVでは絶対聞けない本当の話～」をテーマに講演、パネルディスカッションが開かれた。中国との尖閣諸島問題や憲法改正、国民投票法などの話題について議長・委員長の発言に鋭く斬り込む田原氏の言葉に会場が沸いた。

「まちの笑顔デザインフォーラム～地域から描く我が国のグランドデザイン～」では、後藤素彦常任理事をコーディネーターにパネルディスカッションを開催。「小田原手形」や「小田原どん」の仕掛け人の一人である小田原市商店街連合会の栗田康宏副会長、「会社は社員の幸せのためにある」をモットーに地域貢献にも努める伊那食品工業の塚越英弘専務、高校生が運営し今や行列のできる人気レストラン「まごの店」を立ち上げた多気町農林商工課の岸川政之氏を迎え、成功事例や考え方を紹介いただいた。

■ 人間力大賞2010に渡辺氏

青年版国民栄誉賞「人間力大賞2010」の授賞式典が9月18日、表参道ヒルズで開催された。本年度は「人間力大賞2010 ジュニア版U18」も加わり、式典には歴代受賞者、来賓を始め444人もの参加者が詰め掛け、会場は熱気にあふれた。

史上初めてとなるサマコンでの公開最終選考会を経て授賞式に臨んだ。冒頭、相澤会頭から「日本のそして世界の平和のため、日々ご尽力いただいている名もなき人たちがいる。私たちは、自分たちの活動

だけに埋没することなく、そのような多くの、まちの輝く星たちに目を向け、しっかりとアンテナを張って、探し当てていくことを誓う」とメッセージを発した。

特定非営利活動法人アイ・エス・エル（代表・野田智義氏）との共催のもと新設された「人間力大賞2010 U18」は、地域社会、あるいは日本、世界の現状と行方に強い問題意識を持ち、問題解決や未来の実現に向けて小さくとも一歩を踏み出し、自ら行動している20歳未満の高校生、中学生を対象とする。46人の申請者の中から最終9人が「U18チャレンジ賞」を授賞し、その中から3人に「NHK未来賞」が贈られた。

人間力大賞は、20人のファイナリストの中からまず10人に会頭特別賞が贈られ、その中から準グランプリに全国の小学校で「夢授業」を行なっている田中文氏、難病と戦う児童たちのために自然体験できる施設を運営する佐々木健一郎氏が選ばれた。グランプリにはバングラデシュでストリートチルドレンの支援を行なっている渡辺大樹氏に決まった。渡辺さんは「自分ひとりの人間力なんて1%もなくて、99%の応援し支えてくださった方々の力で賞をいただくことができた。僕はバングラデシュにとどまり、彼らとともに生きる中で生まれてくる感動が皆様の気づきとなるようがんばる。今すぐバングラデシュに戻りたい」と、ほとぼしするような熱い思いで受賞の喜びを語った。

■ JCI世界会議を大阪で開催

世界91の国と地域から9185人のJCIメンバーが集い、第65回を迎える世界会議が11月2～7日、大阪で開催された。「RESPECT ALL～As Citizens of One World～」の大会テーマのもと、JCIメンバーたちが祖国や故郷、そして人々に与える影響力を高めるためにどのような方法があるのか、ファンクションを通じて話し合った。

2日の日本JC結団式では、近藤康之大阪JC理事長が「世界中から寄せられたとても叶えられないようなご要望も、メンバーが知恵を出し合い実現した。



第65回世界会議大阪大会（'10）
総会



第65回世界会議大阪大会（'10）
ジャパンナイト

どうか、メンバーの勇姿を最後まで見てやってください」と挨拶した。

開会式は各国の会頭が民族衣装で登場。和装タップダンスとチェロの競演など、趣向を凝らしたさまざまなステージが繰り広げられた。ウェルカムナイトでは、近畿地区ブロック協議会のLOMがブース出展でメンバーを迎えた。滋賀名物「ふなずし」や和歌山名物「鯨の竜田揚げ」、京都名物の「宇治茶」など、関西だからこそ味わえるおもてなしの品々が並んだ。

総会では、2009年度JCI財政顧問、2010年度JCI常任副会頭を務めた福山JCの原田憲太郎君が見事2011年度JCI会頭に当選を果たし、15年ぶりの快挙を成し遂げた。また、清水利春君が満票で副会頭にトップ当選し、日本JCからすばらしい人材を世界に輩出した。

世界版人間力大賞「TOYP」には、2009年の人間力大賞受賞者で、難病を抱えながら患者会を発足し治療方法の開発のための署名運動などを行なっている中岡亜希氏が受賞した。中岡氏は受賞スピーチで「死なないということと生きるということは違う。私は生きていたい」と締めくくると、会場はスタンディング・オベーションの大喝采となった。

4日の夜に京セラドームで開催されたジャパンナイトには4700人もメンバーが参加。会場には100を超えるブースが出店し、日本全国の名産品を味わった

ほか、中央の舞台ではサンバや阿波踊り、藤田恵美氏による「OMOIYARIのうた」のミニコンサートなど、華やかなステージが繰り広げられ、参加者全員が日本の祭を楽しんだ。

6日のJCIアワードセレモニーでは、最優秀青年活動賞に日本JC（北陸信越地区）の「Chopsticks with OMOIYARI」が、最優秀国際協力事業賞に日本JC（近畿地区）の「Happy Smile GTS2010」が、最優秀地域開発LOM賞に大阪JCの「Evolution of "Gift"」が選ばれた。日本JCは最優秀NOM賞の榮譽にも輝いた。また、日本JCの「OMOIYARI」確立会議の呼びかけで今年から「OMOIYARIアワード」が新設され、Best of the Bestとして香港のLOMが受賞した。

■ 対馬の現場を見て、 領土の問題を考える

北方領土、尖閣諸島、竹島…。周辺諸国との領土・領海問題は、日本にとっての国防や外交にも関わる国の施策であるのみならず、私たちの暮らしにも大きな影響を及ぼしている。九州地区協議会は、国境問題を自分自身の目で見て考える機会にしたいと11月13、14日、「防人の島・長崎対馬の未来を語ろう」をテーマにしたフォーラムを長崎県対馬で開催した。



離島フォーラム2010

対馬は、日本人が暮らす日本の国土でありながら、その立地や歴史的背景などから、日韓国との間にさまざまな問題を抱えている。初日は、ごみ問題、韓国資本による土地の買収問題、漁業問題など、対馬の現状をしっかりと理解するための勉強会を開き、対馬の背景、歴史を学んだ。海上自衛隊対馬防備隊本部の隣接地は、韓国資本に買収されている。日本の防衛の要といえる自衛隊のすぐ隣の地が買収され、外国の建物が建っているという安全保障上大きな問題がある状況を、どう考えたらいいのだろうか。

対馬問題は解決の糸口すら見つかっていない。JCメンバーがこの問題を捉え、積極的に行動すること、また、実際に見て考えたことを周囲に伝え、問題意識の輪を広げることが重要だと、思いを新たにしました。

■「離島フォーラム」で 領土・領海を考える

また、11月26日には、日本JC主催の「離島フォーラム2010」が、東京都港区の明治学院大学白金キャンパスで開かれ、領土、領海問題の解決に向けて国民一人ひとりにできることは何なのか、会場に集まった市民とともに考えた。

冒頭、相澤会頭が「日本は国土の小さな国だが、離島や海洋面積まで入れると世界で第6位に匹敵する。この美しい国を守るために今日この場で得た気

づきを心の中に留めるのではなく、何らかのアクションを起こしていこう」と訴えた。

第1部の基調講演は、「国のかたちを考える～領土・領海の現状」をテーマに、東海大学海洋学部教授の山田吉彦氏に解説していただいた。日本には6852もの島があり、排他的経済水域が沿岸国にもたらす権利について「海底資源の開発」「海水の利用」「漁業権」の3つの要点にまとめて語っていただいた。そして「私たちが日本国民として誇りを持ち、国の発展のために海底資源や水産資源を有効に活用すること。そして、人が居住して経済活動を活発に行なうことが島々を守ることにつながるのだ」と呼びかけた。

第2部では、対馬市内で行なわれたフォーラムに参加した東京海洋大学大学院生の山本琢郎氏と早川溪子氏が現地レポートを発表。第3部では、大樹総研所長の池田健三郎氏をコーディネーターに、山田氏、民主党衆議院議員の松原仁氏、日本JC吉村武大副会頭の3人によるパネルディスカッションが開かれた。

政府が行なったある調査によると、国民の6割近くが領土問題に「かかわりたくない」と答えている。そうした無関心状態が国益を大きく揺るがし、ひいては私たちの生活を脅かすことになる。他人事とは受け止めず、国民一人ひとりが領土問題を考えていかなければならない。

第20章 「尊敬される日本」に向けて

2011

3月11日14時46分、かつて経験したことのない被害をもたらした東日本大震災が発生。大津波が福島第一原子力発電所を直撃し、原子炉が緊急停止。深刻な放射能汚染をもたらし、その収束には数十年かかると予測された。大震災後の復興の遅れ、ギリシャに端を発するユーロ危機、長引く円高の影響を受け、日本の先行きが不安視される一方、新エネルギーの開発や省エネ技術など、日本が世界に誇れる技術革新に期待が高まった。

■ 公益社団法人としての始まり

1月20日。雪が残る大寒の国立京都国際会館で、本年も4日間にわたる京都会議が始まった。本年は公益社団法人として初めて迎える新しい年。全国から集まった1万2000人のメンバーも気持ち新たに「尊敬される日本」への第一歩を踏み出した。

初日の京都商工会議所での記者会見に臨んだ第

60代福井正興会頭は、今後のJC活動のあり方を問われ、「自分たちの立ち位置をしっかりとさせ、政治・経済を盛り立てていきたい」と力強く語った。

2日目には公開会議・委員会が開かれ、OMOIYARIネットワーク確立委員会による「OMOIYARIセミナー」、地域防災確立委員会による災害支援活動推進プログラムの説明、「地域の誇り」復活推進会議による、「地域の誇り」復活へ一挙に情報大公開！会議が行なわれた。公開ということでオブザーバーも参加する中、2011年の方針などが幅広く発信された。

3日目は、メインフォーラムが開かれ、京都大学大学院人間・環境学研究科教授の佐伯啓思氏が基調講演で、今年60年目に当たる日米安保条約によって日本がいかに他力本願的に平和を維持し続けていたのか、そして、今後日本が恒久的な平和を得るためにはどのような意識改革が必要なのか、という二つのテーマで話をした。続く福井会頭との対談では、日本人特有でありながら失われつつある「徳や義」といった精神性に改めてスポットを当て、「尊敬される



京都会議（'11）



東北地方太平洋沖地震が発生、
日本JCによる支援対策本部を設置

日本」を創造するための秘訣を伝授、日本の精神性を取り戻す道筋が見えた有意義な時間となった。

地域の文化力再生フォーラムでは、脳科学者の茂木健一郎氏が「これからは心の底から沸きあがってくるような、日本人の感性を大切にしたい内発的な発展において、日本の誇りや価値を取り戻す時代だ。他地域の成功モデルを真似するのではなく、自分たちの故郷のありのままの姿を受け入れ、その中に隠された地域の輝きを掘り出し成長させましょう」と語り、多くのメンバーが、噛みしめるように深く聞き入った。

第135回総会で福井会頭は「公益社団法人として新たに歩み出した。公益を考え、組織を根本から見直す絶好の機会になる」と公益社団法人としての意気込みを述べ、会場は熱気に包まれた。

そして、記念すべき60周年を迎えるにあたり、福井会頭が所信表明演説を行なった。

「『尊敬される日本』をつくるのは、果敢に挑む私たち青年、諸問題にもしっかりと立ち向かう青年、未来をつくるのは私たち、10年後の未来をつくっていけるのは、今を生きる私たち青年しかいないのである。世界から『尊敬される日本』をつくるために、

どうか皆さんの力を貸していただきたい。役員の方々の力、全国で活躍されている十数万名の先輩諸兄の力も借りたい。本年、公益社団法人日本青年会議所は60周年を迎える。この60周年は一つの節目かもしれない。ただ、この60年目を単なる節目にとらえるのではなく、そこから始まる61年目を考え、10年後を見据えた確かな一歩を踏み出していきたい。すべての皆さんの力を借りてでも、地域を、日本を元気にしていきたい。だからこそ4万名の誰一人も欠けてはならない。一人ひとりの力が必要なのだ。私たちがこの10年先という遠いようでもう目の前に来ている未来に向けて、しっかりと絵を描き、現実の確かな一歩を踏み出していこう」

「私と一緒に歩いてほしい」と真剣なまなざしで語る福井会頭の言葉に、会場のメンバーも胸を熱くし、10年後に向けた一歩を踏み出すべく1年のスタートを切った。

■ 東日本大震災発生

3月11日、14時46分。東北地方を中心に大地を突き動かすような激しい揺れが襲った。そして巨大な

津波が東北沿岸部のまちをのみ込んでいった。震源は三陸沖。マグニチュードは9.0。「未曾有の災害」ともいわれる東日本大震災に直面し、日本JCは翌12日に福井会頭を本部長とする対策本部を立ち上げ、被災地支援に乗り出した。

対策本部は全メンバーに対し、義捐金、支援物資、人的支援などの方向性を提示するとともに、震災の掲示板を開設し、福井会頭のメッセージをアップした。安否確認を急ぐ。3月に予定されていた日本JCのすべての事業中止を決定。全国社会福祉協議会（全社協）の園崎氏、中央共同募金（中央共募）の阿部氏と情報交換し、今後のボランティア、義捐金の対応について協議を行なった。また、50団体（2011年12月）からなる災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P会議）に参加、今後は連携をとって活動を展開することを確認した。同時に携帯電話やメールを使って現地の安否確認を断続的に進める。22時45分、東北地区メンバー3415人中245人の安否が確認できた。災害支援用Facebookのアカウントやメールアドレスを開設。ツイッターと併用し、メンバーおよび一般向けの情報発信力の強化も図った。

震災から3日後には義捐金口座を開設し、日本JC物流サービス部会、埼玉ブロックの協力のもと、支援物資を羽生市内の物流センターに集約し、仕分け作業を開始した。15日、午後10時40分。東北地区メンバー3415人中1509人の安否を確認。18日には日本JC対策本部新潟支部を立ち上げ、辻本議員ほか民主党議員3名と会談。

22日には、福井会頭が直接被災地を訪問し、メンバーへの激励に奔走する。被害の甚大さを目の当たりにして、さらなる人的・物的支援の強化を約束。正副会頭・専務理事・会務常任による会議を実施し、支援のあり方（物から人へ）、対策本部の組織図の見直しなどを急いだ。

「このメッセージを書いている、私の心は重いです。JCI韓国のメンバーを代表し、このたび日本の東北地方を襲った地震と津波によって失われた貴重

な命や、多大な損傷を受けた多くの家屋など、日本の皆様に心よりお見舞いとお悔やみを申し上げます。JCI韓国は皆様の災害からの一日も早い復興を願っております。皆様は、この災害から必ずや立ち上がるであろうと信じております。私たちは互いによりき隣人で、温かい心で友情を保っていることをお伝えしたいと思います。このとても困難な時期にある日本の皆様のために、祈っております（JCI韓国会頭、Lee,YongHoon）」など各国のJCIからお見舞いや激励のメッセージが届いた。

■ 世界最大級の大型客船で 心づくしのサービス

東日本大震災から2カ月が過ぎ、支援物資などの急を要する「命の支援」は落ち着き始め、人的支援とともに傷ついた心を癒す心の支援の重要性が増していった。日本JCは三井造船と共催で5月17日から31日までの間、宮城県石巻市でテクノスーパーライナー（TSL）受け入れ事業を実施。TSLは、世界最大の超大型貨客船で全長140m、全幅30mで重量は1万4000トン。最大旅客収容数は740名を誇る。TSLを石巻港に浮かべ、石巻市の避難所で生活されている被災者を対象に、船内で1泊2日を過ごしていただいた。船内で温かい食事とシャワーで心と身体を解きほぐしていただき、プライバシーを確保したベッドで十分な睡眠をとっていただいた。

三井造船から石巻市への全面的な協力の申し出から始まったこの事業は、日本JCが共催となって、清掃、調理補助、受け入れ補助のボランティア（一般、JCメンバー含む）の募集、参加を担当。述べ2400人の被災者を受け入れ、多くの方から感謝のメッセージが届けられた。2ヵ月ぶりの安らぎの時間を届けたこの事業は、新聞にも大きく取り上げられ話題になった。

■ 日本JC災害対策全体会議を開催

5月19日、福島県郡山市の福島県看護会館みらい

で、理事会及びブロック会長会議、日本JC災害対策全体会議が行なわれた。東日本大震災からわずか2ヶ月。被災地はもちろん、東北では災害対策に追われ、関東では計画停電に悩まされる日々が続いていた。震災による影響が日本中に広がりはじめ、全国各地でさまざまな問題点が噴出していたこともあり、交通手段を駆使して約200名のメンバーが集まった。放射能汚染による風評被害、経済活動の低下、輸出制限など、現状の確認と今後の取り組みを確認する場となった。

■ 人命を脅かす放射能汚染

東日本大震災は東京電力福島第一原子力発電所に甚大な被害をもたらした。メルトダウン、放射能漏れ。原発の安全神話が一瞬で消えた。長年にわたる周辺地域への生活、農業や産業への影響が日ごとに現実となった。

日本JCは、原発の警戒区域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域内に拠点を置く福島ブロック8LOMの理事長を迎え、JC会館で5月20日、座談会を開いた。福井会頭は「今後、長期にわたる継続事業を構築していこうと考えている。ともに歩みともに乗り越えていきましょう」と挨拶。その後の座談会では、現場で対峙している厳しい現実がメンバーから語られた。

「まちの多くが立ち入り禁止区域になり経済がストップしている中、地域に密着した職種は今後いつ戻れるのかが一番の不安。中には見切りをつけ仕事を畳むメンバーもいる」(南双葉JC理事長、小野田洋之君)。「原発からの距離で様子は違うが、原発から20kmライン内は工場にも入れず自動的に閉鎖になるか、保証金を頼りに事業主ががんばるしかない状況だ。20kmライン外でも、会社としては再開したいが従業員がいなくて加工もできない、よしんば製品をつくったとしても風評被害で鉄鋼製品や材木でさえ納品できない。実被害と風評被害のダブルパンチだ」(原町JC理事長、田中章広君)。「従業員にとりあえ

ず失業保険の給付をと考えていったん解雇すると、再開のめどがつき呼び戻そうとしてもすぐに返ってくる人は少なく、従業員不足に悩む事業主も多い」(浪江JC理事長、齋藤重宗君)と苦しい現実が浮きぼりとなった。

一方、風評被害の影響も甚大だった。「風評被害で経済が動かない。いわきには車が入ってこないし、出荷しようにもいわきナンバーの車は受け入れてもらえない。輸出部品もメイドイン福島は止められる。われわれは復旧、復興のスタートラインにさえ立てない生殺しの状況だ」(いわきJC理事長、吉田憲一君)と、原発事故後の周辺地域は半年以上も混乱が続いた。

その後、対処的な支援よりも未来を見据えた活動をという声が高まり、「日本はイメージに動かされている。被災地の苦しみイメージ、日本はどうなるのかという不安のイメージ…。そこでJCがこんな日本をつくろうとビジョンを掲げ、そのための行動プランを立てて実践してほしい。まず自分たちのまちをよくすれば日本もよくなり、最終的には被災地にもつながっていく」(だてJC理事長、松浦繁光君)とメンバーの多くから日本JCへの期待が述べられた。

■ JCI-ASPAC マニラ大会で感謝の気持ちを伝える

日本JCのJCI加盟60周年記念の年に、スポンサー NOMのフィリピンが舞台となって開催されたJCI-ASPACマニラ大会。日本から駆けつけた約2千人のメンバーは、東日本大震災の影響で参加がかなわなかったメンバーの思いを代弁し、アジア太平洋地域のJCIメンバーに日本の元気と感謝の気持ちを伝えた。

1951年に5月28日に念願のJCI加盟を果たした日本JC。その時のJCI会頭がJCIフィリピンのラモン・デル・ロザリオ氏であった。かつて日本はアメリカ植民地のフィリピンに侵攻し多くの犠牲者を出した。そうした歴史を抱えながらも「JCには国境も民族も

ない。それは全世界の青年のものである。その誇りにおいて我々は今ここに、かつての敵国日本のJC代表団を心からなる歓迎を持って迎えようとする」と演説し、いち早く国際社会へ迎え入れてくれた。サンフランシスコ講和条約よりも約100日早い、異例の迎え入れであった。

28日に開かれたジャパンナイトでは、スポンサーNOMとなってくれたJCIフィリピンへ、そして東日本大震災に支援の手を差し伸べてくれたアジア・太平洋の全メンバーに全力で感謝の気持ちを表した。折しも5月28日は、日本JCがJCI加盟を承認された歴史的な記念日。60周年とナイトの成功を祝し「乾杯!」で熱気冷めやらぬ夜を締めくくった。またメッセージボードいっぱい励ましや祈りの言葉が書き込まれ、大きな勇気を受け止めることができた。

総会では、東日本大震災へのJCIオペレーションホープの説明があり、震災の映像が流れると会場は静まり返って深い悲しみに包まれた。エジソン・コダマJCI事務総長からは「日本JCの震災への取り組みはJCIがどうあるべきか行動で示してくれた」と賛辞を送られ、日本JCからの感謝の弁に会場から惜しめない拍手があがった。JCIインド、JCIインドネシア、JCIモンゴルなどからは義捐金が届いた。



第61回JCI-ASPACマニラ大会（11）

■復興を胸に、2011サマコン開催

「サマコンで何かが終わったのではなく、ここで心

を一つにして、地域をひいては被災地を明るく元気にするために力を発揮してほしい。ここからがスタートだ」。2011年のサマコンの意義は、この福井会頭の言葉に集約されている。8千人を超えるメンバーが、フォーラムやセミナーで大きな気づきを得て帰っていった。約500人の東北から参加したメンバーの胸のうちには、より熱いものがあっただろう。

「10年先の日本へともに歩もう確かな一歩!～進取の精神とクオリアの追求による『尊敬される日本』の創造～」をテーマに開かれたメインフォーラムIには、野田佳彦財務大臣、自民党参議院議員の林芳正氏、政治アナリストの池田健三郎氏、福井会頭が参加してパネルディスカッションが行なわれ、震災を通して財務問題、原発と次世代エネルギーの展望、少子高齢化の弊害、地方分権まで幅広く議論。福井会頭は、被災地支援について自立支援へシフトさせることの必要性など青年経済人の立場から発言した。また、メインフォーラムIIでは、東京都副知事の猪瀬直樹氏、北海道知事の高橋はるみ氏、女優の紺野美沙子氏が参加。橋本淳副会頭が「3.11は今まで以上に国をよくしようという契機になるのでは」と口火を切ると、猪瀬氏も「これで戦後社会が終わり、新しい公共、モラル、ライフスタイルをつくる時が来た」と呼応した。また、主権国家確立フォーラムでは、「ニッポンを護るのは誰だ!—領土・領海問題、東日本大震災から日米同盟を考える—」のテーマで、パネリストとして「Sengoku38」こと尖閣諸島沖の中国漁船衝突をめぐる映像流出事件で、国家公務員法（守秘義務）違反容疑で書類送検され、起訴猶予処分となった元海上保安官の一色正春氏が出席したことも手伝って開場前から長い行列ができた。

国立大ホールでは、「がんばろうNIPPON 東日本応援ブース」が出店。福島ブロック物産販売ブースでは農作物から伝統工芸品まで風評被害で苦しんでいる物産が並んだ。神奈川ブロックは東北産の食材を使った弁当を販売し用意した1千食分が早々に売り切れ、壁面には震災と日本JC対策本部の取り組み



サマーコンファレンス（'11）

を紹介する写真が展示され、全国のメンバーから注目された。

■ 被災者の求職支援サイトを開設

東日本大震災の被災3県で仕事を失った人は約12万人といわれる。日本JCでもシニア・現役あわせ多くのメンバーが仕事を失った。しかしその中で再就職できた方は約4500人とどまっている。そこで、全国各地の青年会議所、日本JCシニア・クラブ、日本JC各部会が連携し、求職支援サイトを8月1日に立ち上げた。

企業の掲載料は無料で、求職者は希望の就職先を検索し、サイトから応募する。被災地域の求職、就業支援に取り組むことは、震災からの復興、日本再生にとって不可欠。現役、シニアを含めたオールJAYCEE約20万人のスケールメリットをフルに活用し

て経済復興を目標に立ち上がった。

■ 60年を経て再び 第60回全国会員大会名古屋大会

「がんばろうNIPPON 愛知る地から 明るく元気な日本へ」をスローガンに、第60回全国会員大会名古屋大会が9月29日から4日間にわたって開催された。日本JC創立60周年の節目に名古屋に戻った全国大会。まさに、還暦の思い、新たな歩みの一歩にふさわしい舞台となった。第1回の全国大会の参加者はわずか150人だったが、今年の全国大会は、東日本大震災、台風や集中豪雨の被害が多いなか、1万5000人が参加し、60年で100倍に成長した日本JCの力強さを実感でき、今後の日本の成長を勇気づけるものとなった。

熱田神宮で成功祈願。その後、河村たかし名古屋



第60回全国会員大会名古屋大会（'11）

屋市長を表敬訪問。市長から激励をいただく。愛地球博記念公園で開催された開会式では、「がんばろうNIPPON」の文字をローソクの明かりで描き、犠牲者への冥福を祈り、未来への輝きを灯した演出に胸の高鳴りを覚えた。

2日目の理事会・ブロック会長会議では、屋久島JC、八尾JC（ともに仮称）の新設LOMが報告された。東日本大震災で甚大な被害を受けた13LOMに「JCIオペレーションホープ」の義損金で用意したJC旗などが贈呈された。

60年の尊い軌跡を胸に語られた福井会頭のスピーチは、静寂の会場に響き渡る、魂が宿る熱いメッセージとなった。

「この全国大会で一つだけやりたかったことがあります。それは、地域活性化から市でみんなと一緒に旨い酒を飲むことでした。名古屋でみんなと乾杯し、元気を出してもらい、それぞれの地域でより一層活

躍してほしい。実現できて本当に嬉しく思っております」と、福井会頭の想いが凝縮された言葉からはじまった。

「2011年は、宮崎を中心とした新燃岳の噴火降灰被害、東日本大震災と原発事故、新潟・福島での豪雨被害、さらに台風12号などによる水害被害など国民生活を脅かす出来事や災害が次から次に続きました。そんななか、それぞれの地域で防災文化を確立し、常に震災や災害に備え、被害を減少させるように努めていただきたいと思います。今が一番厳しく苦しくても、みんなで力を合わせ踏ん張って、一年二年と続けなければなりません。そのためにも、日本青年会議所は、決してこの運動を止めることなく、歩み続けることを誓います。『世界から尊敬される日本』を目指し、ひたすら果敢に歩み続けることを誓います。今年、JCI会頭に原田憲太郎君を輩出しました。彼は世界に誇れる、自慢できる世界一の人間で

す。同じように世界一がたくさんあれば、地域と日本は明るく元気になると信じています。どうか日本青年会議所60年の尊い軌跡から、さらに新たなる飛躍に向かって歩んでいただきたいと願います。本年度をともに歩んでいただいた皆様、本当にありがとうございました。61年目、10年先の未来まで、ひたすらに現実の一步を歩み続けることを誓い合った。

■ 日本 JC 創立60周年を盛大に祝う

第60回全国大会の地、名古屋で開催された記念式典・祝賀会では、麻生太郎先輩ら多くの諸先輩方から激励の言葉をいただいた。振り返れば、1951年「新しい日本の再建は我々青年の仕事である」と立ち上がり、その後、諸先輩たちの運動の足跡が60年という歴史を刻んできた。それは、2012年度会頭候補者の井川直樹君の宣言、「60周年を迎え、当時の青年の運動への敬意を胸に、確かな一步を踏み出すことをお誓い申し上げます」に表されるように、毎年毎年、受け継がれ続けているJAYCEEの心の証。そして、その心はこれからも受け継がれ、日本の未

来を牽引していくことになるのだろう。

■ 日本の元気、復興を世界にアピール

第66回JCI世界会議が11月1日から5日間、ベルギーの首都ブリュッセルで開催された。日本JCから1279人が参加し、原田JCI会頭のサポート体制とともに、東日本大震災からの復興の状況を世界に伝える絶好のチャンスとなった。震災からの復興、原発事故の状況や安心、安全性の説明を各国のメンバーに繰り返し、日本が元気であることを日本JCの参加者一人ひとりがアピール。同時に、震災直後から寄せられた支援に対する感謝の気持ちを伝え、今後の協力体制、友好関係、絆の深まりを約束した。JCIアワードセレモニーでは、福井会頭が最優秀NOM会頭賞に選ばれ、日本JCはもちろん、日本国民の代表としての榮譽を持ち帰った。

世界に類をみない震災と原発事故。未曾有の被害からの復興を世界中が注目している。第二次世界大戦からの復興を成し遂げた先輩たちを誇りに思うように、私たち現役青年世代の絆を深め、互いに切磋琢磨し、元気な日本に向けて歩み出そう。



日本JC 創立60周年祝賀会（11）

東日本大震災、原発事故の爪痕が未だ色濃く残る2012年、前半は民間消費などに震災復興に向けた動きがみられ、実体経済にも回復の兆しが現れた。しかし欧州債務問題の再燃や中国経済の景気悪化懸念などにより、次第に景気の足踏み感は強まっていく。後半は日中関係悪化やエコカー購入補助金制度終了などを機に景気減速感が一段と強まる。そんななか開催された衆議院議員選挙では自民党が大勝し政権交代が実現、第二次安倍内閣が発足した。

■ 「変わらないために変わる」

会員数約3万3千人でスタートした2012年度。「呼び覚ませ 日本のプリンシプル!」をテーマに、1ヵ月ぶりの慈雨に潤う京都で、1月19日～22日、京都会議が催された。結団式では会場に入りきれないほど集まったメンバーを前に、今年の日本JCのスタンスである「いつもLOMの隣の日本JC」と書かれた幕が用意され、井川直樹第61代会頭の署名の後、心意気を示さんとばかりに高々と掲げられた。

全国から多くのメンバーが集う21日にはメインフォーラムが開催。第一部はアサヒビール名誉顧問の中條高德氏による基調講演が行なわれ、中條氏は日本の歴史をなぞりながら「自国の歴史を忘れた民族は滅亡する」と現状を憂い、

教育しかこの国を救うものはないと力説した。続いて行なわれた第二部の対談では井川会頭と青山社中(株)代表の朝比奈一郎氏が国家観の欠如や無関心などを問題に挙げ、変革の必要性を訴えた。朝比奈氏は「JCは唯一無二の利他の団体。曲がり角の今こそ、大胆な手を打ってほしい」と期待を寄せた。

同日には理事会・ブロック会長会議や総会、一般公開のセミナーやフォーラムも数多く開催された。安



中條高德氏（アサヒビール名誉顧問）



京都会議（'12）メインフォーラム第二部対談



京都會議（'12）新年式典



京都會議（'12）新年式典

倍晋三氏を招いての自主憲法制定フォーラムなどには多数の一般参加者が駆け付け、注目度の高さを物語っていた。

最終日の22日に新年式典が開催。小林総務委員長の高らかな宣言ののち、日本JC歴代会頭はじめ多くの来賓が見守る中、福井直前会頭がスピーチ。東日本大震災で延べ2万人のメンバーが自発的に支援に参加したことに触れ「JCがあれば、青年が頑張れば、世界から尊敬される立派な国になる」と力強いメッセージを贈った。

そののち、井川会頭が所信表明スピーチを行なった。「東日本大震災と原子力発電所事故で日本国は今、瀕死の状態にある。しかしそれ以前から日本には構造的な課題が山積みだった。日本青年会議所は東日本大震災からの復興支援を継続的に行なうと共に、強い国家のプリンシプルを創造し、また、サステナブルな地域を実現し、未来志向の民間外交を推進しなければならない。今、私たちは国難に直面して、これを克服するには奇跡を起こさなければならない。奇跡は私たち自

身が自己変革することによって起こる。変えたくないものを守るために、変化を起こさなければならないのだ。平時でもしっかりと雄雄しさが発揮できる、凜然とした誇りある国をつくらう。それが今、輝きを失いつつあるわが国の多くの問題や課題を解決する原動力になるのだ」。井川会頭のみみなぎる演説にメンバーは「変わらないために変わる」決心を新たにし、自らの使命を胸に故郷へと戻っていった。

■ 復興支援フォーラムが開催

東日本大震災発生の復興を支援すべく、日本JCは被災地が社会的・経済的に「自立」し再生する真の復興へ向け、さまざまな復興指針を打ち立てた。そのうちの一つ、「復興創造フォーラム」が震災から丸一年を経て、震災当日同様に雪が舞い散る寒さのなか、岩手産業文化センターで3月10日、11日に開催された。

10日、まずは第139回総会が開かれた。井川会頭



復興創造フォーラム（'12）東日本大震災合同慰霊祭



岩手県宮古市の「災害廃棄物破碎・選別場」でガレキ処理の実情を視察

は「JCは復興のその日まで尽力する」と誓い、盛岡JC石川啓理事長は「どんどん風化していき焦りを感じるが、JCの同志が集い復興を考えてくれることには大きな意味がある。不屈の精神で頑張っていく」と感謝と今後の意気込みをスピーチ。審議案件としては震災関連の収支などがあがり、全会一致で可決された。

続いて開催されたグローバルリーダー創造フォーラム、エネルギー選択フォーラムには、櫻井よしこ氏、鳩山由紀夫氏、細野豪志氏らをゲストに招聘。注目のテーマと人選もあってのべ4,100名を集客、うち600名が一般客という、内外から関心を集める結果となった。その後、午後2時46分に合わせて慰霊祭が開式。井川会頭は静かに語りかけた。「生きたかった人たちの想いに報いるには、これからも決して変わらず、正面から向き合い、歩まねばならない。そのためには皆さんのまっすぐな想いと勇気と行動が必要だ」。

11日の早朝には、会頭はじめ総勢100名弱で津波被害が甚大だった宮古市にある「災害廃棄物破碎・選別場」へガレキ処理の視察へと向かった。



航空自衛隊視察見学（'12）青森県の三沢基地にて

■ 国防の重要さを改めて実感

5月17日～18日、航空自衛隊三沢基地（青森県三沢市）と海上自衛隊大湊基地（同むつ市）にて基地視察見学が行なわれた。

領土・領海を脅かす事態も増えた昨今、自衛隊の役割はますます増しているが、予算の削減・自衛隊員の減少など今後の日本を脅かす問題が蓄積している。

東日本大震災において人命救助と国土復旧に全力を尽くした2基地の視察により、国防上の役割、兵器・設備の説明、米軍との連携、地元との協力体制など、自衛隊の役割や現状について意見交換し、理解を深める多くの機会を得ることができた。

■ JCI-ASPAC 香港大会

アジア太平洋地域のJCメンバーが一堂に会し、情報を交換し友好を深める「アジア太平洋エリア会議」（ASPAC）が、6月7～10日、香港にて開催された。結団式での「元気な顔を見せることが復興の証であり、感謝を伝えること」との井川会頭の挨拶を体現するかのようになり、日本から2,782名もの登録があり、震災支援の感謝を伝える絶好の機会となった。特に総会2では、オペレーションホープの報告として井川会頭が「踏み出す勇気を皆さまにいただきました」と感謝の気持ちをスピーチ。復興の様子が映像で流れ



第62回JCI・ASPAC香港大会（'12）開会式

ると会場はスタンディングオベーションの嵐になった。総会3では原田JCI直前会頭による昨年度報告などがなされた。日本勢はアワードセレモニーで計10もの賞を獲得し熱気は最高潮に達する。会場で揺れる何百もの日本国旗は、一致団結して立ち上がる日本の力強さを示すようだった。日本各地の物産や魅力を紹介する50超ものブースが出展する「JAPAN NIGHT！」では、地域色豊かな日本文化を紹介しながら各国メンバーがふれあいを楽しんだ。

また、本年は5年に1度の地域開発戦略会議



第62回JCI・ASPAC香港大会（'12）総会2



第62回JCI・ASPAC香港大会（'12）JAPAN NIGHT!

（SPCフォーラム）が開催され、国境を越えてJCIの未来についてディスカッションがなされた。

■ドイツ エネルギーミッション2012

6月14日～20日、ドイツのフライブルク市とベルリン市へ、環境先進地からエネルギーの考え方や取組みを学び、メンバー一人ひとりがエネルギーリテラシーを確立し、安全・安心で持続可能な社会を創造するために、総勢25名による視察旅行が企画された。フライブルク市のエコステーションでは、環境・エネルギーの体感学習・教育が幼少期より行なわれていることを知り、またヴォーバン団地では、木質バイオマスと天然ガスを併用するコジェネレーションシステムとその建物の造りや街並みを視察。エネルギー主要問題として次の4点、①エネルギー転換政策を大企業だけでなく、中小企業の考えも反映する ②連邦政府と州とのコミュニケーションをとる ③送電網の拡大が必要 ④時代に合った法律の改訂が必要を確認するとともに、エネルギー産業においては生産の安定、価格・量、環境に対する影響を同時に実現することが必要という学びを得た。省エネや教育、法律など、生活全体の問題として捉えなければエネルギー問題は解決せず、まちづくりを支えるひとつづくりもまた大切である。幅広く今後のエネルギー転換・問題について学ぶ機会となった。



ドイツ エネルギーミッション（'12）エコステーション視察



第25回国際アカデミー in 札幌（'12）卒業式

■ 第25回国際アカデミー in 札幌

「Activating the Principle ～プリンシプルを持って行動しよう～」というテーマのもと、第25回国際アカデミーが7月5日から12日まで開催され、国内72名、海外65名、合計137名の参加者（デリゲイツ）が札幌の地に集った。

国際アカデミーとは、日本JCの主催する事業において、唯一JCI（国際青年会議所）から公認されたプログラムである。海外参加者は前半3泊を開催地の一般家庭でホームステイし、開催地でのエクスカージョンなどで市民との交流を深める。

開催期間中、国内参加者は日本語を使わない環境の中で海外の参加者と寝食を共にし、多くを議論することで相互の理解をはかりつつ、世界平和実現に向けての議論をした。多くのNOMの会頭候補とのかかわりあいのなかで、他人を尊重し、さらに日本の文化を伝えることによって多くの学びを得られた。国際アカデミーを卒業しグローバルネットワークとなった会員には、より良い組織、地域、そして世界を創る変革の能動者として、恒久的世界平和の実現に貢献することが期待される。

■ 北方領土返還に向けた運動を継続

7月14日、第43次北方領土返還要求現地視察大会が開催。北方領土が間近に見える北海道根室市に全国から青年会議所会員と行政関係者、市民そして報道関係者が参加し、北方領土返還に向けた運動を継続していくことを確認した。

本年からは洋上での北方領土視察を行ない、四島交流等事業使用船舶「えとびりか」に乗船し、根室港からロシアが一方的に決めた中間ライン（現時点で日本としていくことができる北方の最東端）まで船を進めた。至近距離で見ることによって我が国の領土と領海、そして不法占拠されている現状を肌で実感した。船内では元島民による当時の体験談を聞き、当時の島での生活が豊かだったこと、戦後ロシアの侵略により生活が一変し、先の見えない恐怖に肉親とも離れ離れになったこと等を聞き、北方領土は紛れもなく日本人が暮らしてきた土地であると感じると共に、我が国固有の領土であることが再認識された。



第43次北方領土返還要求現地視察大会における洋上視察（'12）
「えとびりか」の前で



四島交流等事業使用船舶「えとびりか」



サマーコンファレンス（'12）対談 井川直樹会頭と北康利氏

■ サマーコンファレンス2012レポート

7月21日、9,200名もの登録があったサマーコンファレンスがスタート。今年のテーマは「呼び覚ませ日本のプリンシプル!」。オープニングに、敗戦直後の日本でプリンシプルを貫いた白洲次郎の伝記を著した北康利氏をお迎えし、井川会頭との対談で幕を開けた。北氏が「日本にはプリンシプルが無いと批判するだけでははじまらない、昔の日本から学ぶことは学び、誇りと自信を取り戻すことが大切」と述べ、井川会頭は「我々世代が気概を持って凜然とした国家をめざそう」と訴えた。

同会では翌22日にわたって22ものフォーラムとセミナーが開催され、メインフォーラムⅠの第一部では、小和田恒氏（国際司法裁判所判事）が外から見た日本について講演。世界が日本を見直しつつある震災後の今、昔から日本にある思いやりなどの価値観を元に、グローバル社会を前提にした再生シナリオを世界に示していくことが急務と説いた。第二部では民主・自民両党の議員に猪瀬直樹東京都副知事をまじえ、尖閣諸島問題からエネルギー、増税問題など、差し迫った課題について議論がなされた。

メインフォーラムⅡでは、インテルの吉田和正社長が「日本は各地域に特色があるたからの山。ここからイノベーションがとれる」と激励。ほか世界中で



小和田恒氏（国際司法裁判所判事） 池田健三郎氏（大樹総研所長）
津村啓介氏（衆議院議員） 城内実氏（衆議院議員）
猪瀬直樹氏（東京都副知事）

評判の爪切りを作る製作所社長や地域おこしの伝道師などが、各々の立場から「地域のたから」への想いや期待を語った。

また理事会では、回答選挙報告において次年度会頭に小畑宏介副会頭が当選したことが報告された。



小畑副会頭



サマーコンファレンス（'12）理事会



第26回人間力大賞（'12）グランプリの伊藤史哉さん（右から3人目）

■ 人間力大賞2012グランプリ

9月28日、東京都内赤坂のサントリーホールにおいて、人間力大賞2012「授賞式典」が開催された。本年は171名の申請があり、上位10名のファイナリスト（人間力大賞受賞者）による最終選考ののち、グランプリ・各種奨励賞が発表。グランプリは一般社団法人つくば青年会議所推薦の伊藤文弥さん。伊藤さんは、「担い手不足の農業と働く場のない障がい者を結びつけ、誰もが生きがいを感じながら働くことのできる社会をつくる」という信念に基づいた活動が評価され、内閣総理大臣奨励賞と農林水産大臣奨励賞も授与された。その他、ファイナリスト以外の中から特に評価の高かった4名へ会頭特別賞授与、新たに創設された復興創造特別賞についての報告映像放映も行なわれた。10月にはグランプリの伊藤さんと井川直樹会頭らで、総理官邸と農林水産省に受賞報告の表敬訪問を行なった。会談では野田佳彦総理より伊藤さんに労いと励ましの言葉が送られた。

■ 第61回全国大会 北九州大会

10月11日～14日の4日間、北九州にて第61回全国会員大会が開催された。理事会



第61回全国大会北九州大会（'12）井川会頭のスピーチ



第61回全国大会北九州大会（'12）



第61回全国大会北九州大会（'12）AWARD JAPAN2012グランプリに輝いた熊谷JC

の国難に直面している。戦後復興、高度成長のように4度目の奇跡は起きるのか。そのためにはこの国を良くしようと強く思い、私たち青年が勇気をもってくじけず、継続により確実に仲間を増やし、自信と誇りを取り戻すこと。互いに高め合える仲間と出会えたことこそが奇跡だ」と述べ、万雷の拍手を浴びた。



第61回全国大会北九州大会（'12）大会式典・卒業式

では選挙の末に2015年全国大会主管が八戸JCに決定し、続く総会の席では、塩竈JCとあぶくまJCが、復興の歩みに目途がついたことにより被災地年会費免除を辞退するという明るい知らせももたらされた。

また、アワードジャパン2012グランプリには熊谷JCの「クールシェアくまがや」（環境啓蒙部門）が選出。「日本一暑い町」の異名を逆手に取った節電を楽しむ取り組みが高評価を得た。

大懇親会、麻生元総理大臣などを招いた注目のフォーラムなど充実のファンクションを経て、大会式典・卒業式では1万5千人の熱気が最高潮に達する中、感謝とエールの言葉に送られ4,881名は旅立ちの時を迎えた。

井川会頭はメインスピーチにおいて、「いま、4度目

■ 平和とは。国を護るとは。 激戦の地・硫黄島で考える

10月28・29日、自衛隊の協力のもと、先の大戦の激戦地・硫黄島を訪ね慰霊祭を執り行なった。硫黄島は本土防衛の最後の砦。米軍が上陸した1945年2



荒涼とした風景が広がる硫黄ヶ丘



戦争当時のまま残された摺鉢山水平砲台



慰霊祭



慰霊祭が行なわれた天山慰霊碑。
硫黄島戦の最後の拠点の一つ、天山壕のあった場に立つ

月19日から約1ヵ月間死闘が行なわれ、日本軍の戦没者はのべ21,900人、米軍戦の死傷者はのべ29,000人を記録している。

日本軍は地下10～30mに総延長18kmもの地下壕を築き持久作戦を準備したという。故郷のため、どれだけ苦しい思いをして戦いに挑んだのか、厳しい自然環境を目の当たりにしそれを肌で実感することができた。硫黄島を離れ本土へ戻ってからは意見交換会が開かれ、平和への誓いを新たにした。

■ 第67回 JCI 世界会議台北大会

11月18～23日、台湾・台北にて第67回世界会議が開催。歴史的なつながりも深く、東日本大震災では多くのサポートをいただいた台湾での開催とあって、日本からは昨年を大きく上回る2,267名の登録があった。

井川会頭は結団式で「世界の仲間と交流を深め、自分の言葉で感謝を伝えてほしい」と挨拶。海外メンバーと一番多く交流(名刺交換)した人が「ベストコミュニケーション」として表彰される取り組みが始まり、



第67回JCI世界会議
台北大会('12)開会式



第67回JCI世界会議 台北大会（'12）開会式・太鼓のパフォーマンス



JCIアワード、Best Community Empowerment Program賞を受賞した仙台JC

いつにも増して感謝と交流の輪が広がった。

総会の場では、2013年JCI会頭にキアラ・ミラニ氏が当選。女性会頭の選出に会場は大いに盛り上がり、女性が活躍できる社会づくりに力を入れてきた日本JCも大きな刺激を受けることになった。

JCIアワードでは最優秀NOM会頭賞に井川会頭が輝き日本勢の熱気は最高潮に達する。また仙台JC、藤井俊成氏（大阪JC）も受賞するなど日本勢は3冠を達成。さらに、2013年度のJCI副会頭には半田JCの天木一貴氏が立候補、見事当選を果たした。



第67回JCI世界会議
台北大会（'12）日本JC
会頭招待レセプション

第22章 勇敢なる日本へ！

2013

この年、56年ぶりにオリンピックが東京で開催されることが決定。暗いニュースが続くなか、富士山の世界文化遺産決定に続いての明るい話題に、日本中が大いに盛り上がりを見せた。

経済面では、デフレ脱却に向けた動きが本格的に始まる。黒田新総裁のもと日銀は「異次元の金融緩和」＝量的・質的緩和を実施。また年々増大する社会保障財源を確保するため、消費税率の引き上げが決定された。

日本がデフレ脱却に向けた動きが始まった年と位置づけられる一方、国際関係、安全保障問題では、TPP交渉や対中国関係など課題を残すこととなった。

■ 「無関心の魔物」を 払拭した先の国づくりへ

時折雪がちらつく京都において1月17～20日、2013年度京都会議が催された。恒例の下賀茂神社での新年初祈願から始まり、表敬訪問や記者会見を経て、18日には第一回目の理事会・ブロック会長会議が行なわれ、小畑宏介第62代会頭は理事メンバーとブロック会長に向け「皆さんの胸に付いているバッジをさらに輝かせてほしい」と改めて要請。続いて初の試みとなる「出陣式」では出向メンバーが一同に集結、特設の神棚を前に一年の成功を祈願した。

翌19日にはメインフォーラムを筆頭に10を超えるフォーラムやセミナーが開催。メインフォーラムの第一部では京都大学名誉教授の中西輝政氏が講演を行なった。中西氏は日本の資源である精神性が戦後から大きくずれつつあると危惧し、「今ならまだ間に合う。自信を失った日本に希望を植え付け、各地で心をよみがえらせるのが、若い皆さんのなす



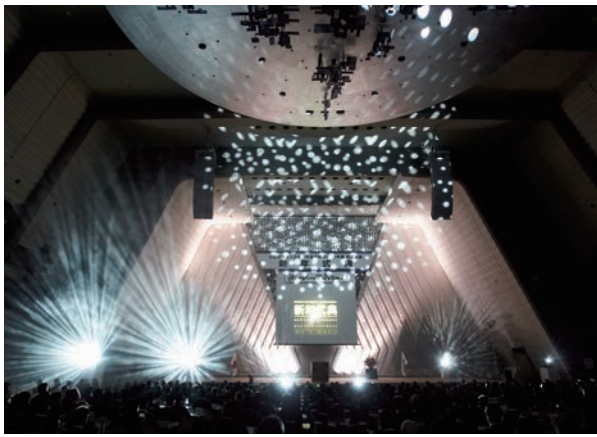
新年初祈願をすませ朱の下鴨神社楼門前で

べきことと思う」とメンバーを鼓舞。続く第二部では小畑会頭との対談が行なわれ、過去、危機に際し各地で立ち上がった侍を引き合いに出して「現在の侍たち」に対し期待を寄せる中西氏に、会頭は「地域から日本へ、勇壮なる日本を目指し運動を始めたい」と力強く答えた。

会は大変な賑わいを見せるなか、その勢いは最終日20日の新年式典で最高潮に。小畑会頭は所信表明演説において、「震災から2年、未だ混迷を極める中、暗闇の中を照らす光となれるのは私たち青年し



京都会議（'13）新年式典



京都会議（'13）新年式典



小畑会頭と中西輝政京大名譽教授

かない。私は勇壮なる日本を作りたい。国家観を失わせ、当事者意識を剥ぎ取り、悲しい災害の記憶さえも風化させる、無関心という魔物がはびこる時代から抜け出した国を作りたい。私たちの行動一つひとつが未来を創るのだという気概を持って、日本、そして世界のために、前進を続けよう。私は改めて宣言する。勇壮なる日本の実現のために、私は燈火になる。燈火が私から皆さんへ、皆さんから地域へ、地域から日本そして世界へ。ともに歩んでいこう」と力強く演説。それを受け、会員らは新しい時代を自らが描く覚悟を新たにしました。



所信表明演説を行なう小畑会頭

■ 米軍基地を抱える LOM 理事長座談会が開催

1月19日、京都会議の会期中に、領土・領海委員会の呼びかけで、「米軍基地を抱えるLOM理事長座談会」が開催された。

委員長の武重大輔氏は「日米同盟の重要性、住民と基地との良好な関係が今の日本には重要とご理解いただきながら、こういった話を全国にも発信したい」と挨拶。会場に来られていた軍事ジャーナリストの井上和彦氏も交えて行なわれた座談会において、井上氏は「身銭を切って公益のために地に足のついた活動をされているJCのような団体しかこの国を変えることはできない」と期待を述べ、日米同盟の重要性、軍事的戦略の観点、歴史の経緯などを解説。一方、日々現実問題として基地と接する地域に暮らす各地の理事長からは理想通りにいかない実状の話なども述べられ、活発な意見交流の場が持たれた。



米軍基地を抱えるLOM理事長座談会（'13）



武重大輔委員長



北方領土返還要求全国大会（'13）

■ 北方領土返還要求全国大会

2月7日、北方領土返還要求全国大会が開催され、日本JCからも小畑会頭をはじめ多くの会員が参加。第一部では元島民の方々が島での生活や思い出などを話し、望郷の想いを訴えた。第二部では安倍総理大臣が出席、問題解決に向けた取り組みへの決意が述べられた。また、代表として小畑会頭も「日本の青年として、次世代に引き継がずに済むよう、全力で取り組んでいく」という強い意志表明を行った。

■ 復興創造フォーラム2013

東日本大震災から丸二年となる3月10・11日、宮城県仙台市において、「決して忘れない～復興の先にある未来を見据えて～」をテーマに、復興創造フォーラム2013が開催、全国から3,000名を超えるメンバーが集った。

まず、同テーマを掲げてのパネルディスカッションが行なわれ、復興副大臣の秋葉賢也氏、アイリスオーヤマ株式会社代表取締役社長の大山健太郎氏、モンベルグループ代表の辰野勇氏、コーディネーターの日本JC顧問・植松悟氏が登壇。復興に向けなすべきこととして、辰野氏は心のケアを続けることを謳うと共に、自社で開発したライフジャケット



復興副大臣 秋葉賢也氏
アイリスオーヤマ株式会社
代表取締役社長 大山健太郎氏



モンベルグループ代表 辰野勇氏
日本JC顧問 植松悟氏

トを装着し会場を沸かせた。大山氏は「全国のJCが分担して被災地とビジネスネットワークを構築しコラボレーションし、新しい事業を進めてほしい」と期待を寄せ、秋葉氏は「国も自治体も被災地の自立を目指し活動している。若い皆さんの力がもっと必要だ」と呼びかけた。それを受け植松顧問は、「全力で邁進し続けていきたい」と被災地・日本の未来への意気込みを語り、会を締めくくった。



復興創造フォーラム（'13）パネルディスカッション



復興創造フォーラム（'13）小畑会頭と根本匠復興大臣のトークセッション

次いで、復興大臣の根本匠氏と小畑会頭によるトークセッションが行なわれた。根本大臣は「現場主義を徹底し、それに対応できる規制やルール変更なども辞さず、スピード感を持って復興を進めていく。自身の力を惜しみなく注いでくれるJCの存在は大きく、日本の希望と思っている」と期待を寄せ、小畑会頭は「我々青年が手を取り合って被災者とながりをもち、創意とチャレンジ精神で復興を進めていきたい」と述べられた。

翌11日は、宮城県多賀城市で東日本大震災追悼式が行なわれ、小畑会頭の追悼の辞に続き、献花をする会員の列が続く。被災地の完全復興を目指して今後50年、100年の歩みを続けていくことが祈念された。



11日の東日本大震災追悼式で献花する小畑会頭

■ JCI-ASPAC 光州大会

アジア・太平洋エリアから6,000名、日本からは2,500名が韓国・光州に集結し、第63回JCI-ASPAC大会が6月13～16日の4日間にわたり開催された。

初日の日本JC結団式において小畑会頭と柴田剛介副会頭が挨拶、開会式ではJCI役員、各国NOM会頭に続き、小畑会頭が家族と共に日本国旗を掲げて登壇。続くウエルカムパーティで各国からの参加者との親睦はいっそう深められた。

翌14日、韓国とマカオとの合同常任理事会で交流を深めたのち、総会Iがスタート。APDC選挙が実施され、日本JC総務委員会委員長でもある池田祥護氏が議長に選出、ほかにも日本から多数の評議員が選出された。



結団式で語る小畑会頭

国際グループ担当の柴田剛介副会頭



第63回JCI-ASPAC光州大会（'13）開会式

3日目の15日にはJCI姉妹都市締結式が開催、守口門真JCと静岡JCを含む計10組が姉妹JCの絆で結ばれた。また、日本JC主催でアジア太平洋エリア女子会を初開催。キアラJCI会頭がスピーチを行なった。同日夜には恒例の「JAPAN NIGHT!」が開催。地域の味覚や文化を紹介し、メンバーをもてなした。

締めくくりとなる最終日は総会Ⅲが開かれ、2015年ASPACがマレーシアのサバ・ボルネオJCに決定。日本JC解団式で小畑会頭は「ASPACが終わっても国際交流に終わりはない」と締めくくった。続くアワードセレモニーでは日本から3LOMが受賞、世界の仲間たちとの語らいは遅くまで続いた。



第63回JCI-ASPAC光州大会（'13）解団式

■ 第26回国際アカデミー in 福山

世界に広がるJAYCEE同士が、共に学び成長する中で未来への方向性を享有し世界平和の実現へ貢献できるリーダーを育成し続けている国際アカデミー。第26回目となる今回は7月7～12日、広島県福山市で開催され、世界約70カ国からメンバーが集まり、日本各地から集まったメンバーと寝食を共にして、「つながり」のテーマのもと、恒久的世界平和に貢献・寄与できる人材育成の場が設けられた。

■ サマーコンファレンス2013

JCメンバー 9,882名が登録、一般市民を含め2万人を超える参加者を集め、7月20・21日に横浜で開催された2013年のサマーコンファレンス。「震災後」の転換期にある日本の抱えるさまざまな課題に対して議論を重ね、解決に向け意識を共有する場となった。

会頭記者会見の冒頭において、林文子横浜市長が「サマコンは夏の横浜の風物詩」と期待を寄せ、小畑会頭は「サマコンには無関心の打破のカギがある」と強調。横浜JCの高見澤理事長の熱弁に続き、サマ



サマーコンファレンス（'13）成功祈願祭

ーコンファレンス委員会の佐藤委員長が概要や見どころについてPRした。

初日に開かれた結団式においては、成功祈願ののち、小畑会頭、高見澤理事長、稲毛関東地区担当常任理事らが意気込みを挨拶した。そして横浜総鎮守の伊勢山皇大神宮においては、サマコンで初めてとなる成功祈願祭が開催。理事長・ブロック会長会議では、第62回全国大会奈良大会の審議などがすべて承認可決。全国大会主管立候補の各JCによる全国大会招致PRも行なわれた。また、2014年会頭当選者の鈴木和也副会頭が演説を行ない、たくましい日本の創造を誓った。

2日間の会期のなかで、多数のフォーラムとセミナーが開催され、メインフォーラムIでは池田健三郎氏のコーディネートのもと、憲法学者の竹田恒泰氏、外交評論家の岡崎久彦氏、地雷問題に取り組む雨宮清氏らが登壇。先送りのできない日本の課題の整理と解決へのヒントが提示された。また、例年と趣向を変え「乃木坂46」のメンバーがフォーラムに参加し、若い世代代表としての感想発表も行なうなど、参加者と共に学びを深めた。乃木坂46はミニライブ



サマーコンファレンス（'13）メインフォーラムII



ウエルカムレセプションにて、左から小畑会頭、林文字横浜市長、高見澤理事長

も披露、会を大いに盛り上げた。

メインフォーラムIIでは、グローバルリーダー育成塾の代表者による研究結果発表があり、塾頭の櫻井よしこ氏が基調講演を行ない、「外交・国家観の二つが日本のリーダーに必要」と述べた。次いで、外交評論家の田久保忠衛氏、政治学者の福岡政行氏、掲載評論家の三橋貴明氏、塾生代表の北村孝寿氏らを加えたトークセッションも開催。「外交・領土・領海」「経済・防災」「教育」の3テーマについて議論が交わされた。

解団式においては、大成功をおさめた会の報告と御礼が会頭より述べられ、運営委員会の佐藤委員長も涙ぐみながら御礼を述べると、会場からは割れんばかりの拍手が送られた。



グローバルリーダー育成塾塾頭の櫻井よしこ氏



サマコンサポーターの乃木坂46



第44次北方領土返還要求現地大会（13）

■ 第44次北方領土返還要求現地大会

7月13・14日の両日、北海道根室の地で、44回目となる北方領土返還要求現地大会が開催された。13日、開会式に続いて根室港から船舶「えとびりか」に乗り込み、洋上から北方領土を視察。上陸できないやさしさ、もどかしさを胸に、改めて北方領土返還を強く訴えるべきとの決意を新たにした。

翌14日は、北方領土に縁の深い金比羅神社に参拝後、大会式典が開催。北方領土を望む^{のさっぶ}納沙布岬にて小畑会頭がスピーチを行ない、日本JCロシア友好の会理事長の松本秀作歴代会頭が民間外交の成果とJCへの期待を語った。

■ 自衛隊九州部隊の視察

7月29・30日、防衛省大臣官房広報課の計らいにより、航空自衛隊築城基地（福岡県築上郡築上町）と春日基地（福岡県春日市）の視察見学が行なわれた。武重大輔領土委員会委員長をはじめとする参加メンバーは、埼玉の入間基地からC-1輸送機にて九州の基地まで移送され、まずは基地について基礎知識の講義を受けたのち、F-15戦闘機やF-2戦闘機、戦車の視察、装備の説明などを受け、国防に当たる隊員の責任の重さや覚悟の一端に触れた。

■ 「笑顔デザインプロジェクト」各地で開催

本年の夏から秋にかけて、東日本大震災で被災し心に傷を負った子どもたちを、全国のLOMで開催される青少年育成事業に招き、PTSD症候群の軽減や発症を予防する取り組みが各地で行なわれた。

北海道・小樽JCは夏祭りへの参加プラン、山形・鶴岡JCは花火大会、東京・三鷹JCはサッカー大会、東京・青梅JCは大自然でのレクリエーション、静岡・大府JCでは富士山登山、大阪の堺高石JCは被災地視察、大阪・枚方JCは柔道を糸口にした交流事業、岡山・津山JCは宮古島の子どもらとの交流、徳島・阿波池田JCは沢登りなど、全国各地で企画開催された催しは大好評を博し、多くの子どもたちの笑顔を生み出した。



阿波池田JC主催の沢登りイベントに参加した子どもたち



第27回人間力大賞グランプリの長屋宏和さんを囲んで

■ 人間力大賞2013グランプリ

9月20日、第27回人間力大賞受賞式典が東京のサントリーホールにて開催され、グランプリ等各賞が発表された。見事グランプリに選ばれたのは、土浦JC推薦の長屋宏和さん。レース中の事故で車いす生活を余儀なくされるも、のちにレーシングカートでサーキット復帰。さらに車いすファッションブランド「ピロレーシング」を設立するなど、様々な分野での活躍が評価され、内閣総理大臣奨励賞とまちづくり市民財団奨励賞もあわせて送られた。

■ 世界遺産のまち・奈良で感じたつながり

10月4～7日の4日間にわたり、第62回全国大会が古都・奈良の地で開催された。春日大社への成功祈願から始まった大会には、約1万5千人のメンバーが登録。ウエルカムレセプションを経て、総会にて次年度の役員人事が承認・可決され、会頭への宣誓が行なわれた。また理事会では、2016年の全国大会主管選挙が行なわれ、広島JCと埼玉中央JCの一騎打ちに。両理事渾身のスピーチののち、広島JCの当選が決定した。

また、AWARDS JAPAN2013も開催。4日に13の各部門賞と会頭特別賞が、翌5日に部門賞の中から最優秀賞が発表され、最優秀賞「グランプリ」に岐阜JC（青少年育成【体験】部門「キッズドリームワークス★子どもたちによるファッションショー★」）が選出された。

メインフォーラムでは政治評論家・コラムニストの屋山太郎氏が安倍政権の内閣人事や政策を紐解き、



第62回全国大会奈良大会（'13）会場となった東大寺

続く東大寺長老・東大寺総合文化センター総長の北河原公敬氏と小畑会頭の対談では、「つながり」をテーマに、これから求められる日本型のリーダー像が語り合われた。

大会式典は、東大寺を会場に、特別に大仏殿が開帳され、盧舎那仏像を拝顔しながら行なわれた。奈良JC増尾理事長の開会宣言ののち、小畑会頭はスピーチにおいて、「『新しい時代への燈火となれ!』」を合言葉に、この一年、皆さまと共に旅をしてきた。一貫して伝えてきたのは『つながり』の大切さである。



AWARDS JAPAN2013最優秀賞グランプリの岐阜JC



メインフォーラムで対談する北河原公敬氏と小畑会頭



大会式典、小畑会頭から鈴木次年度会頭予定者に
プレジデンシャルリースが渡される

あなたのひたむきさに憧れ心に灯をともしられた人がいる。それが始まりとなり、地域、国家とつながることで社会は動き始める。先人から未来を託されたように、私たちは日本の希望を、過去から未来へとつなぐ必要がある。今を生きる私たちは可能性そのものであり、日本の前進は皆さまの可能性にかかっている。私たちは新しい時代の燈火になるのだ」と熱く語り、2013年度を締めくくった。



大会式典でスピーチを行なう小畑会頭



第68回JCI世界会議
リオデジャネイロ大会（'13）開会式



■ 第68回 JCI 世界会議 リオデジャネイロ大会

全登録3,054名のうち、日本の登録者は1,120名。11月4～9日にブラジルのリオデジャネイロで開催されたJCIの第68回世界会議には、多くの日本会員が海を渡り参加した。結団式で小畑会頭が「2015年世界会議をぜひ金沢に誘致し、また次年度のJCI副会頭を稲葉崇浩君（横浜JC）に」とスピーチされたように、2つの大きな目標を持って臨んだ本会議。リオのカーニバルさながらの賑々しい開会式で幕開けし、翌日から各国との会議や交流が始まった。

7日、総会において、金沢誘致も稲葉氏の当選も決まり日本勢の意気は最高潮に達し、そのままの勢いで行なわれた「JAPAN NIGHT」も大盛況。各国メンバーを日本流おもてなしで迎え、交流のひと時が持たれた。



第68回JCI世界会議リオデジャネイロ大会（'13）開会式



第68回JCI世界会議リオデジャネイロ大会（'13）JAPAN NIGHT

世界中からエントリーされた、この1年で優れた事業を褒賞するJCI AWARDSにおいては、最優秀NOM賞に日本JC、最優秀NOM会頭賞に小畑会頭が輝くなど、日本勢が6冠を獲得。日本のJC運動の力強さを見せる絶好の機会となった。

また、JCI AWARDSと同時に発表されたJCI TOYP（世界の10人の傑出した若者をJCIが表彰する事業）では、日本代表としてエントリーしていた伊藤文弥氏（人間力大賞2012グランプリ受賞者）が見事受賞。ジョン・F・ケネディら多数の著名人が連なる栄誉ある受賞者の一員となった。



JCI AWARDS 「最優秀NOM賞」に輝いた日本JC



JCI TOYPを受賞した伊藤文弥氏



第68回JCI世界会議リオデジャネイロ大会（'13）総会



2015年JCI世界会議開催地は金沢に決定

第23章 「たくましい国」日本の実現へ

2014

細川護熙元首相が小泉純一郎元首相とのタッグで反原発を掲げ東京都知事選挙に出馬するも大敗、理化学研究所の小保方晴子氏らが発表したSTAP細胞の論文不正など慌ただしい幕開けを見せた2014年。4月には消費税の税率が、1997年以降続いていた5%から8%に引き上げられる。ただし2015年10月に予定されていた消費税率10%への引き上げは先送りが決められた。

また政府は憲法9条の解釈を変更し、集団的自衛権の行使を容認することを決定。国家機密の漏えいに厳罰を科す特定秘密保護法も施行され、「政権に都合の良い法解釈」と批判も出るなか、第47回衆議院選挙では与党が大勝、政権はその足元を盤石に固めた。

■ 京都会議から発信、 「日本の矜持を取り戻す」

1月23～26日、2014年度の京都会議が催された。23日は下賀茂神社での新年初祈願から始まり、表敬訪問や会頭記者会見を経て、翌24日から本格的にスタート。まずは出陣式で日本JCの各グループが一年の活動を力強く宣言。年末の風物詩、「今年の漢字」で知られる清水寺の森清範貫主が「矜持」の字を書きメンバーに捧げた。続く理事会で鈴木和也第63代会頭は「皆が作った計画を信じて突き進む」と議長・委員長へ期待を寄せ、議長・委員長はその信頼に応えるべく、意義をみなぎらせて議案上程に挑んだ。



出陣式に臨む鈴木会頭、小畑前会頭ら



出陣式で清水寺森清範貫主が揮毫した「矜持」

25日は早朝会議を経て、拡大セミナーでは拡大達成祈願に47ブロック会長が力強く檄を飛ばす。メンバーは次々と開催される各フォーラムや総会に臨んでいく。「たくましい国」日本創造フォーラムでは、経済評論家の渡邊哲也氏を迎え、第一部は基調講演。実際のデータや事例を元に詳細に話され、その感想



京都会議（14）出陣式



岡田副会頭の檄に拳を突き上げて応える会員

を随時ツイッターで発信する新たな取り組みも。第二部は笹島潤也副会頭との対談で、地方経済のアドバイスなど、気づきに満ちた時間となった。

最終日には鈴木会頭の所信表明演説が行なわれた。鈴木会頭は、「『全ての出会いは偶然ではなく、必ず意味がある。二度とないこの一瞬を大切にしたい』。これは先輩からいただいた言葉で、このおかげで私は人生の最も多感な時期を充実したものにできた。

本年、696名の理事長の皆さまと共に、一步一步着実に歩んでいく。不透明な現代社会にあっても、全国のメンバーとともに、行動的で意気あふれる人材を育て、人が集い、活気に満ちあふれた地域を創造することで、『たくましい国』日本を実現していこう。

地域や国を変えていくには、まずは国民の意識改革が必要だ。それは家族を愛し、友を助け、地域を思い、国を思うことから始まる。我々の行動から、水面を走る波紋のように地域や国が変わっていくと信じている。

その次に、活気に満ちあふれた地域を創造するための仕組みづくりが必要だ。地域の活性化は、人が集うことから始まる。人口減少や高齢化などの喫緊の課題の解決のため、人が集う仕組みを提供し、活気に満ちあふれた地域づくりを実現しよう。

さらに、日本の精神性による民間外交を推進した

い。世界中の紛争や貧困、環境問題などの多くの課題を解決できるのは、我々日本人ではないか。伝統や文化、アイデンティティ、日本の素晴らしさを今一度再確認し、これからも世界のメンバーとともに、民間外交を進めていきたい。

この三つの重点事項を中心に、日本青年会議所の会頭として、3万5千人のメンバーの中心で、日本の青年の運動を進めたい。真に明るい豊かな社会へと導くのは、我々青年の責務である。活気に満ちあふれた『たくましい国』日本を次世代に引き継ぐ青年たちよ、須らく奮起せよ。そして、取り戻すのだ、日本の矜持を」と力強く語り、万雷の拍手を浴びつつ壇上を後にした。

■ 米軍基地を抱えるLOM理事長座談会

京都会議に合わせ、「主権国家確立委員会」の主催で、米軍基地の立地地域LOM理事長による座談会が開催された。尖閣諸島をめぐる問題などで国防や日米安保がクローズアップされるなか、同会委員長の清宮貴弘氏がコーディネーターをつとめて会は進行。平和に慣れた日本で危機意識を高める方法、基地の街が掲げる経済的問題、米兵による事件の扱いの問題、自衛隊のあり方などについて、各自が忌憚ない意見を交わし合った。



復興創造フォーラム('14)メインフォーラム

■ 復興創造フォーラム2014

震災から丸3年を迎える3月8・9日の両日、3回目となる復興創造フォーラムが開催された。まず8日は2つのコースが設定され、「復興記念植樹と視察コース」では、復興途上の被災地の現状視察と植樹活動が行なわれ、植樹後には東電福島本社代表による廃炉作業の進捗状況などの報告を兼ねた講演会が開催された。また、「防災フォーラムコース」では次なる災害に備えて協働型災害ボランティアセンターについて学びの時を得た。



鈴木会頭と、「桜プロジェクト」を行なうNPO法人ハッピーロードネット理事長の西本由美子氏

翌9日は、総会と合同追悼式に続いてメインフォーラムが開催。清水いわき市長や、いわき出身の森まさこ議員の「子どもたちのために復興せねばならない」との涙をにじませた来賓挨拶の後、討論はスタート。パネリストの櫻井よしこ氏が国の線量の規定について疑問を呈すると、同じくパネリストの小泉進次郎氏は県内での廃炉と再生エネルギー構想を掲げて応じ、ハッピーロードネットの西本由美子理事長は福島の本音を涙ながらに吐露し、山下憲太郎副会頭はJCの継続支援を宣言するなど議論は白熱した。



東日本大震災合同追悼式



第64回JCI-ASPAC山形大会（14）

その興奮冷めやらぬ内に、締めくくりとして鈴木会頭がサプライズ発表したのが「未来へつなぐプロジェクト」。歌で被災地域の人々とつながろうと、エイベックスの人気プロデューサーの多胡邦夫氏が楽曲を制作、それを地元の中・高生が合唱。必死で前を向いて生きてきた彼らの歌声に、この2日間で復興への想いを新たにされたメンバーは再度奮起を促された。

■ 第64回 JCI-ASPAC 山形大会

東日本大震災以来初になる、日本そして東北での開催となるASPAC山形大会が6月4～7日に行なわれた。

日本JC会頭招待レセプションでの市川昭男山形市長の「市政125年来でこんな国際的な会議が開かれたのは初。感激だ」との言葉通り、各ファンクションには取材陣が詰め掛け、ニュースでも多く取り上げられるほどの注目度の高さ。海外メンバーが行き交う市内にはJC専用の循環バスが走り、市全体がハレの日の賑々しさに包まれた。

東北の元気と支援への感謝を伝える機会でもある



日本JC国際フォーラム第2部パネルディスカッション

今回の大会。「絆コンサート」などで心尽くしの感謝を伝え、「JAPAN NIGHT」では日本に漲る力や元気で海外メンバーをもてなす。アルタンバガナJCI副会頭は解団式で「温かいもてなしに感謝する。海外メンバーは帰国したら東北は安全で親切な所だと広めるだろう」とスピーチし、日本からの有言無言のメッセージは1211名の海外メンバー全てに伝わったと手ごたえが感じられた。そして最後を締めくくるGALAパーティーで鈴木会頭は「これまでの支援に感謝！ 私たちは“たくましい国”になる！」と力強く宣言。熱い4日間は幕を閉じ、「たくましい国」日本へ向けた歩みが加速を始めた。

日本JC国際フォーラムの第1部では、日経BP未来研究所アドバイザーの川口盛之助氏がクールジャパンを斬新な視点で解説。第2部は2014ミス・ユニバース日本代表の辻恵子氏、原田憲太郎JCI歴代会頭を加えてパネルディスカッション。日本人の精神性や強み、期待されていることなど、それぞれの立場から多様な意見が飛び出した。



茶業部会によるもてなしの一幕「茶話会」

また、2011年度福井会頭はじめとする茶業部会の協力により茶道体験できる場が設けられ、多くの海外メンバーの好評を博した。

「アワードセレモニー」においては、1年の優れた運動が表彰され、日本勢は19部門中で8冠を達成（その内大阪JCが3冠）。半数近くを日本が占め、運動の質の高さが改めて認められた。

■ 王貞治氏も登場、 第28回人間力大賞グランプリ

185名のエントリーがあった本年度の人間力大賞。3度の選考会で10名のファイナリストが決まり、6月21日、東京ミッドタウンで最終選考会が行なわれた。ファイナリストたちは自分の活動や想いを熱くプレゼンし、選考委員によってグランプリが決定。7月20日のサマーコンファレンスにて授賞式が開催された。プレゼンターには王貞治氏が登場し、サプライズに会場がどよめく中、グランプリには安武隆信さん（伊都JC推薦）が選出された。

授賞式後は安武さんと王氏によるミニ対談が開催。「こどもの寺 童楽寺」住職である安武さんは、主に虐待のために成長に偏りがある子どもたちと共に生活し、長いスパンで見守る活動をしている。王氏は「子どもたちに“やればできる”ということを教えていってほしい」と語り、安武さんは「子どもの特技、できることを伸ばしていきたい」と応え、今後も

長く続くであろう活動への抱負を語った。

■ 安倍総理も出席、 サマーコンファレンス

本年のサマーコンファレンス2014は、696LOMすべてのLOMから登録があり、1万名を超えるメンバーの参加を記録。岐路を迎える日本の課題と向き合い、解決策を議論・提示する場となった各セミナー・フォーラムは、ほとんどが満員御礼となり、立ち見が出る会場も。最終日には安倍晋三内閣総理大臣を迎え、「強い経済」に向け責任世代である私たち青年がなすべきことについて指南を受けた。

例年とは異なり、8会場で開催された初日の各種セミナー・フォーラムでは、活気に満ちた地域を作るための解決策や、地域ひいては国を牽引するリーダーを育てるヒントが詰まった様々なプログラムが実施された。

「たくましい国」日本創造フォーラムでは、安倍総理が「今最大の問題は、日本人から自信が失われたこと」と説き、そのための「強い経済」に向けた改革について、地産地消や外交のあり方、女性の活躍など様々な観点から講演をした。

続いて安倍総理と鈴木会頭との対談が行なわれ、安倍総理が「世界の中で日本がいかに高い存在感を持ち、期待を背負っているのかを自覚し、その役割を果たそう」とメンバーに投げかけ、鈴木会頭が、

「日本が世界を平和に導く、という意気込みをもって世界をリードせねば」と呼応。人材育成の問題については、「学力調査は、指導者たちが自らの課題を明らかにし、個々の能力を高めていくためのもの」と訴え、加えて今後の教育には、「日本を愛し、地元を愛する気持ちの醸成が重要」と、偉人から日本の文化や誇りを学ぶ方法を提唱。最後には、JCメンバーに向け、2020年の東京



第28回人間力大賞授賞式 プレゼンターの王貞治氏から表彰を受けるグランプリの安武隆信さん



サマーコンファレンス（'14）「たくましい国」日本創造フォーラム

オリンピック・パラリンピックにおいて、日本の素晴らしさを、東京だけでなく全国各地で発信して欲しいと期待を寄せた。

締めくくりに、鈴木会頭より「東日本大震災復興指針」と書籍『新・日本風景論』の刊行が発表され、全国約3万5千人の力を結集させ、共鳴し合い、「たくましい国」日本を次代に引き継いでいくことが誓われた。

赤レンガ倉庫特設ステージでは、サマーコンファレンス2014の発信基地として、「サマステ！」が開催。小雨の中、まずは学生団体によるパネルディスカッションがスタートし、少子化対策や国家観について議論が交わされた。その後、夕方より「サマステ！セ



赤レンガ倉庫 特設ステージ「サマステ！」学生団体によるパネルディスカッション

レモニー」が行なわれ、メンバーと一般来場者が一体となってメッセージライブを楽しんだ。

■ 第27回国際アカデミー in 半田 レポート

7月4～11日にかけて、愛知県半田市にて国際アカデミーが開催された。日本JCが主催し、JCIからの公認も受ける「次世代リーダー育成プログラム」事業である本アカデミーに、海外メンバーが続々と集結、3泊4日の一般家庭へのホームステイがスタート。ホストファミリーとともに半田の文化を楽しんだ。

7～11日は、ラース・ハシュランド先輩（2006年



第27回国際アカデミー in 半田（'14）

JCI会頭)をコースリーダーに1~9のモジュールを受講。メインテーマである「共鳴」をもとに、様々なアクティビティやディスカッションが行なわれた。同時に「フレンドシップサロン」として日本の縁日や盆踊りを体験してもらい、半田・知多半島の豊かな海産物での「食体験プログラム」、歴史や伝統を学ぶ「半田プログラム」なども開催。日本の文化を学びながら互いに交流を深めた。参加者には今後も、恒久的世界平和に貢献するグローバルネットワークワーカーとして一層の活躍が期待される。

■ 第45次北方領土返還要求 現地視察大会

7月12・13日、北海道根室市にて、第45次北方領土返還要求現地視察大会が開催された。12日、根室市総合文化会館にて開催された開会式から始まり、根室港より「えとぴりか号」に乗船し、ロシアによって設定されている中間ライン付近まで船を進め北方領土を視察した。その船中で、択捉島民の得能宏氏より北方四島について説明を受け、島民の高齢化が進んでいる中で、国民全体で問題解決に向けた意識醸成の必要性を強く感じさせられた。

翌13日には納沙布岬にて大会式典が開催された。北方領土返還要求現地視察大会がなくなる日まで、主権者として領土・領海の正しい知識を広め、早期解決に向けて当事者意識を深めていくと同時に、問題解決後の北方領土の未来を今から描いていくことで、北方領土が身近なところであることを広く発信していく。

■ JCIグローバルパートナーシップ サミット報告

7月23~25日の3日間、ニューヨークにて、第10回目を迎えるJCIグローバルパートナーシップサミットが開催された。大会初日にはニューヨークを代表するレセプション会場であるチプリアーニにて、国内外から300名を迎えての議長招待レセプションが開催さ

れ、国連日本政府代表部からは梅本全権大使、在ニューヨーク領事館からは草賀総領事、JCIからはシャイン・バスカラン会頭も参加した。

ルーズベルトホテルにて開催された2日目には、日本人のキーノートスピーカーによるセッションや各分科会も開催され、国際社会が抱える課題に対して理解を深めた。

国連にて開催された最終日には、JCI Japan 少年少女国連大使によるUN-MDGs(国連ミレニアム開発目標)の発表や、橋本龍生議長により本サミットでの決議文が採択され、2015年度に期限を迎えるUN-MDGsの達成に向けて、国際社会の一員として、課題解決に向けて取り組む意識を向上させる機会となった。

■ 日本JC自衛隊部隊見学

毎年恒例となっている自衛隊部隊見学行事が7月29・30日に開催。本年は24名が参加し、陸上・海上・航空、各自衛隊の部隊を訪問した。

29日は航空自衛隊入間基地からヘリコプターに搭乗し、最初の見学地である航空自衛隊小松基地(石川県小松市)まで移動。小松基地は日本海側唯一の戦闘機部隊が配備されている。防空の要であるF15型戦闘機を見学した。

次に訪れたのは海上自衛隊舞鶴地方総監部(京都府舞鶴市)。旧海軍時代からの建物見学ののち、護衛艦「しらね」を見学した。

2日目は海上自衛隊第23航空隊(京都府舞鶴市)の哨戒ヘリコプター部隊を訪問。最後に戦車隊の拠点である陸上自衛隊今津駐屯地(滋賀県高島市)を訪れた。参加者は砂埃を上げて猛進する74式戦車に試乗した。日頃近づくことのできない防衛の最前線にふれ、改めて防衛や自衛隊について考える機会を得られた。



日本JC自衛隊部隊見学、護衛艦「しらね」前にて



第63回全国大会松山大会（'14）

■ 第63回全国大会松山大会

まぶしいほどの晴天の中、全国大会松山大会が開催された。伊豫豆比古命神社での成功祈願、松山市と愛媛県への表敬訪問、多くのメディアを集めた会頭記者会見を終え、開会式では眼下に松山市街を見渡しながら鈴木会頭が「1年の成長を確認し合い、共に共鳴し合う大会にしたい」とスピーチし、4日間の日程が本格的に幕を開けた。

翌10日は理事会に続き総会が開催。多くのオブザーバーが見守る中、次年度役員が無事に選任された。続いて拡大褒賞とAWARDS JAPANの優秀賞が発表。LOMの名前がコールされると、メンバーの歓声が続いて祝福する拍手が会場を包み、鈴木会頭の掲げる「共鳴」を体現するような時間となった。

3日目午前には全国理事長パワーセッションとして星野リゾートの星野佳路代表の講演と、JCI JAPAN 少年少女国連大使の修了式が行なわれた。その後、本年度の運動を総括するべく、6つのフォーラムとセミナーを開催。一般市民の関心も高く列を成すほどの盛況ぶりで、夕方からは大懇親会で全国のメンバーはその交流を深めた。

最終日は1年を締めくくる大会式典。松山城のふもとにて、寛仁親王妃信子殿下のご臨席のもと会は進行。続く卒業式では卒業生全員が赤絨毯の花道を晴れがましい笑顔で渡り、現役メンバーに見送られ、JCという青春の場を後にした。

8千名もの登録があった大懇親会。太鼓を合図に、人力車で鈴木会頭が登場すると、会場の盛り上

がりは最高潮に。80を超えるブースで舌鼓を打ちつつ、全国の仲間と心ゆくまでJCを語り合う姿があちこちで見られた。

松山城のふもとにホラ貝が唸り、独特の高揚感で満たされる中、鈴木会頭はメンバーに向けて最後となるスピーチを行なう。「夢の実現に向け全身全霊で努力を続ける時、我々は人間として大きく成長することができる。この一年、47ブロックの会員会議所と共に、“たくましい国”日本の創造に向けた様々な事業も開催できた。我々が進める運動は、砂漠の一滴



AWARDS JAPAN2014グランプリの広島JC（青少年育成体験部門）



第63回全国大会松山大会（'14）大懇親会

かもしれない。ただ諦めたら何も変わらない。全国会員ネットワークを活用し、この青年運動をあきらめずに推進してほしい。この活動が必ずや未来の子どもたちに誇ってもらえる、日本の矜持と思ってもらえる、そんな時が来ると信じている」と、1年の活動を振り返った。



式典で統括スピーチを行なう鈴木会頭



第63回全国大会松山大会（'14）大会式典

■ グローバルリーダー育成塾 2014

今回3回目を迎えるグローバルリーダー育成塾が本年も3月から半年間にわたり開催された。自国を誇れる歴史観と確かな国家観、柔軟な発想力と行動力を併せもち、グローバル化する時代の中で活躍できる人財を育成することを目標にする本塾は、1泊2日または2泊3日の研修で学び、仲間と討議し、グループごとに発表を行なっている。

初回から櫻井よしこ塾頭を筆頭とする講師陣より、教育から防衛まで幅広い講義を受け、全7回の塾がスタート。第4回には伊勢神宮での国内研修が敢行、礼儀作法講習や童心行など体験し、早朝の伊勢神宮特別参拝や鷹司大宮司からの特別講義などで、日本の伝統と精神を学んだ。また海外研修として台湾へ。台湾講師陣による講義など充実の研修の場がもたれた。

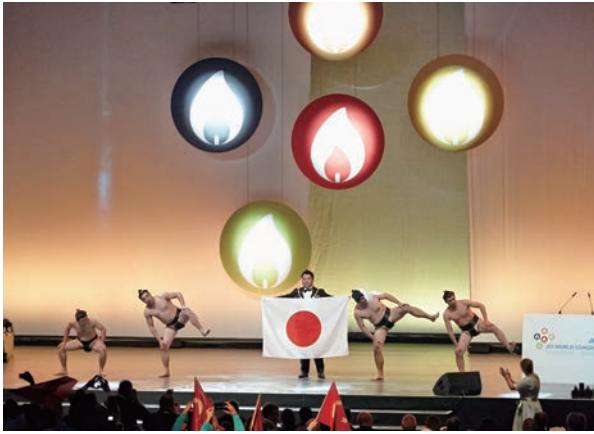
■ 第69回 JCI 世界会議 ライプチヒ大会

JC運動100周年が始まる記念すべき今大会が、ドイツのライプチヒで開催された。ヨーロッパでの大会で最多となる4,407名が参加し、厳しい寒さのドイツにおいて、熱い6日間が繰り広げられた。

今回日本からは1,187名が参加。1年後、JC運動100周年記念の集大成となる金沢大会に向け大いに盛り上がりを見せた。

様々な報告や案件が審議・採択される中、4か国の正式加盟（ブルガリア、コンゴ、ベトナム、ザンビア）も歓迎をもって採択され、同志が増える喜びに包まれた。

毎朝、いろんな切り口でJCIの取り組みなど紹介するモーニングショーにおいて、26日にはマラリア撲滅運動の一環であるJCI Nothing But Netsの募金額の上位NOMが表彰され、日本JCは17万7686ドルで見事1位を獲得した。



第69回JCI世界会議ライブチビ大会（'14）

また、各国からこの一年の運動を持ち寄り称えあう褒賞「アワードセレモニー」においては、日本からは24LOM48エントリーがあり、最優秀理事長、最優秀会頭、最多登録者の賞などにも輝き、改めて日本の存在感を世界に示した。

シャインJCI会頭と次年度のイスマイル会頭予定者が揃って参加するなか、最多登録の大阪JCの紹介やJCI基金の報告のほか、国際グループメンバーのこの1年の国際の場での奮闘が労われた。今大会の成功を祝い次年度へとつなげるパーティーにおいては、大会旗の伝達に続きシャイン会頭のラストスピーチが終わると、イスマイル次年度会頭予定者の肩へプレジデンシャルリースが渡る。ドレスアップした参加者は夜が更けるまでこの6日間を語り合い、1年後の金沢での世界会議での再会を誓った。



フェアウェルパーティにて大会旗が次回金沢世界会議に受け継がれる

■ JC 現役の国会議員による「JC 議連」

現役JCメンバーの国会議員で構成する超党派の連盟であるJC議連では、JCの取り組む政策を受け

止め国会議員としてできるJC活動を進めている。2014年は筆頭代表幹事の佐々木紀氏（小松JC、自民党）のもと、憲法、領土・領海、復興支援などをテーマに活発な議論がもたれた。

3月17日、本年第1回目の政策懇話会テーマは「憲法問題について」。JCの憲法運動をより広く知らしめ、関心をもってもらう方法について議論が交わされた。

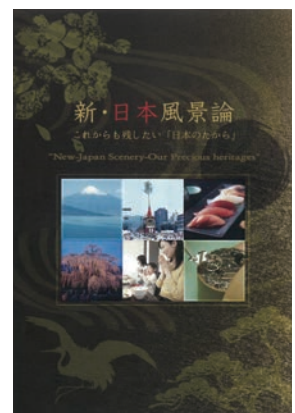
5月30日の第2回目は「領土・領海」がテーマ。主権国家確立委員会の清宮貴弘委員長の問題提起のもと、JC議連メンバーが党派を超え語り合った。

10月31日の第3回懇話会のテーマは「東日本大震災からの復興について」。複雑な事情を抱える福島に焦点をあて、ブロック会長、理事長を招き、貴重な生の声を聴く機会とした。佐々木代表幹事は「復興支援に野党も与党もない。一丸となって取り組んでいきたい」と結び、復興に向け協力を誓いあった。

■ 『新・日本風景論』を刊行

1894年（明治27）、志賀重昂により書かれ大ベストセラーとなった『日本風景論』。日本の風土がいかにかに欧米に比べて優れているかを情熱的に綴り、日本人の景観意識を一変させた書物である。

日本人のアイデンティティの確立がままならない現在、日本の素晴らしさを感じてもらうため、日本青年会議所は鈴木会頭の指導のもと、『新・日本風景論』を電子書籍として刊行。日本人として大切にしたい歴史、伝統、文化や美しい精神性を学ぶことで、日本の矜持を取り戻し、「世界のたから」と昇華した日本の誇りを次の世代へつないでいく。



第24章 すべては未来を生きる人のために

2015

年明け早々、安倍晋三首相が中東各地を歴訪し、過激派組織「イスラム国」(IS) 対策支援を表明する中、邦人人質殺害という痛ましい事件が勃発。国内においては、集団的自衛権の限定的な行使容認を含む安全保障関連法案が可決成立。その内容が憲法違反との声も挙がり、「SEALDs」などの学生グループによる抗議活動も活発化した。辺野古埋め立てをめぐる政府と沖縄県の対立も激化する中、TPP交渉の大筋合意、「大阪都構想」の否決、「マイナンバー法」の施行などが世を賑わせた。

経済においては4月、日経平均株価が約15年ぶりに一時2万円台に回復。アベノミクス政策への期待感、円安などを背景にした国内企業の業績回復への期待感が膨らんだ。

■ 京都会議

～底知れぬ力による日本再興～

2015年、日本JC活動のスタートとなる京都会議が今年も開催された。22日の下鴨神社新年祈願では、柴田剛介第64代会頭をはじめとする日本青年会議所役員、小山理事長をはじめとする公益社団法人京都青年会議所のメンバーが下鴨神社を参拝、京都会議の成功と2015年度日本青年会議所が掲げる『文化と文明が生み出す底知れぬ力による日本再興』の実現を祈願した。



京都会議（'15）下賀茂神社新年祈願

京都府知事表敬訪問、京都商工会議所での会頭記者会見、京都市長レセプションを経て、翌23日から国立京都国際会館にて本格的にスタート。開会式では、新年の成功祈願祭を、太宰府天満宮権宮司であり日本JC総務委員会委員長である西高辻信宏氏が執り行なう。続いて理事会・ブロック会長会議での議案上程、各会議・委員会に入った。

24日には拡大セミナー、各フォーラムや総会、セッションなどのスケジュールが各所で開かれ、メンバーは積極的に参加。拡大セミナー第1部では、未来予測のエキスパートである川口盛之助氏がJCの未来を外部の視点から予測。第2部では、「ブロック協議会を主体としたLOM拡大支援」をテーマに川口氏、東北地区協議会の佐藤一尚会長と東北の6ブロック協議会の会長を迎えパネルディスカッションが行なわれた。立ち見が出るほど盛況で、会員拡大に対する意識の高さが現れていた。

日本再興フォーラムでは、OBで神職の田中恆清氏を講師として招き、メンバー増員に伴う今後行なうべき活動とその責務について話がなされた。

最終日の新年式典では柴田会頭より所信表明演説が行なわれた。会頭所信、基本理念、基本方針の発表とともに、「地方分権推進」「交流人口拡大」「歴史教育改革」の3つの戦略が挙げられたうえで、「一度しかない人生。リスクヘッジはやめ、あなたが決めたこと、それにすべてを賭けようではないか。この潔



京都会議（'15）拡大セミナー



京都会議（'15）新年式典 会頭所信表明演説



京都会議（'15）日本再興フォーラム

動指針の周知、協力依頼のため来日。京都会議の各会場で日本JCメンバーと交流を深めるとともに、茶道を学ぶなど日本への理解を深めた。

会頭は京都会議総会でのスピーチにおいて、「JC運動発祥100周年記念である2015年は重要な一年となる。過去100年で若き能動的市民が生み出した良い変化に着目し、これからの100年、青年が持続可能なインパクトを生み出すために行動する良い機会を得ること。地域、国家、そして国際的な舞台でこの機会を活用し、JCIの影響力を示そう」と挨拶をした。

い思い切りこそ青年らしい。失敗してもいい。どうせなら派手に失敗しようではないか。全てが成果であり、だからJCは面白い。そこにJAYCEEがいる限り、底知れぬ力をもつ日本は必ず再興できる。すべては未来を生きる人のために。美しく先駆けよう」と力強く述べ、盛況のうちに会を締めくくった。

■ イスマイル・ハズネダー JCI会頭来日

本年度JCI会頭のイスマイル・ハズネダー氏（JCIトルコ）が、日本JCへの挨拶と会頭としての2015年運



京都会議（'15）第147回総会にてスピーチするイスマイル・ハズネダー会頭

■ 日本サッカー名蹴会賀詞交歓会

2月5日、一般社団法人日本サッカー名蹴会主催による賀詞交歓会がJC会館で開催され、柴田会頭はじめ多くのメンバーが参加した。

名蹴会は、日本サッカー界の功労者が中心となり2010年に発足。スポーツを通じた地域再生の想いに共感した日本JCは運営協力を約束、両者は「協力宣言書」を交わしている。

金田喜稔名蹴会会長の挨拶にて開会、JCカップU-11少年少女サッカー大会を通じて、スポーツを通じた地域の再興について展望が示された。続いて柴田会頭による乾杯の挨拶ではJCカップの優勝トロフィーが披露され、本年第1回大会を迎えるJCカップ開催に向け、一同気持ちを高めた。



JCカップ優勝トロフィーを掲げる柴田会頭と金田名蹴会会長

■ 北方領土返還要求全国大会

2月7日、東京都千代田区の日比谷公会堂において「平成27年北方領土返還要求全国大会」が開催、参加者約1,600人のうち、日本JCからは60人が参加した。

安倍晋三首相をはじめ、多くの各界の代表から北方四島返還に対する決意表明が発信されるなか、柴田会頭は青年経済人代表として挨拶。また日本JCが2014年度に策定した「北方四島未来ビジョン」が配布された。戦後70年という節目の年を契機とし、日ロ両国間の交渉が加速されることを強く望み、今後も北方領土問題を全国、世界へ発信していくことが確認された。



北方領土要求全国大会（'15）

■ 「竹島の日」式典にJC70人参加

2月22日、島根県松江市の県民会館で、第10回となる「竹島の日」記念式典が開催され、柴田会頭をはじめ全国から約70人のメンバーが参加した。政府、自治体関係者、各党の国会議員や地元住民など約500人の参加者全員で、竹島問題に対するこれまでの取り組みを振り返りながら、竹島が日本固有の領土であることを国内外に向けて力強く発信した。

竹島は、江戸時代にはすでに朝鮮への中継地、漁の拠点として日本人が利用してきた。1905年、当時の日本政府が他国による統治がない無主地であることを国際的に確認し、日本の領土として先占。「竹島の日」は、竹島が島根県に編入されてから100年目となる2005年、島根県条例により制定。以来、編入が告示された2月22日に、島根県、島根県議会、竹島・北方領土返還要求運動島根県民会議の主催により式典が開催されている。本年は領土問題を担当する内閣府の松本洋平政務官や国会議員と並び、柴田会頭も来賓として臨席。「不法占拠」が続く竹島の問題に対する取り組みを振り返り、竹島問題を含めた領土問題の解決に向けた運動を全国で力強く推進していくことを改めて決意する一日となった。



「竹島の日」記念式典（'15）

■ 全国各地での視察会が開催

2月から5月にかけて、柴田会頭は全国のプロック協議会を訪問、LOM 理事長とひざを突き合わせて語り合う視察会「居酒屋の青春」が全国42ヵ所で開催され、会頭および日本JC役員らが忌憚ない意見交換を行なった。

また、「底知れぬ力による地域再興事例」「先進的事例による地域再興事例」と題して、全国20ヵ所の視察訪問。日本のものづくりを支える高い技術と揺るがぬ信念を持つ製造業や、地域資源を生かした観光施設等を訪問し、これからの地域再興について学ぶ機会を設けた。

■ 第65回 JCI-ASPAC コタキナバル大会

6月11日から14日にかけて、第65回 JCI アジア太平洋会議 (ASPAC) コタキナバル大会が、マレーシア・コタキナバルのステラハーバーリゾートにおいて開催された。大会テーマは、現地語・カタザン語で「ARAMAIII TIII」(アラマイティ／一体感の意)。また、日本JCとしては「縁」をテーマに参加し、全国から1,876名が参加登録した。大会期間中は総会などの会議やセミナー、そしてジャパンナイトをはじめとする各国ナイトなどが盛大に開催された。

大会期間中は3日間にわたり総会Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが開催。ナタリー・ヴィセリ大会議長の挨拶、APDC 活動報告、ネパール大地震に対する各国支援、グローバルパートナーシップなど各報告が行なわれ、スピーチコンテストの決勝も開催。また15-16年度 APDC カウンシラーの議長として波多野まみ氏(東京JC)が選出された。

更に、2017年度のASPAC開催地としてモンゴルの



第65回 JCI-ASPAC コタキナバル大会 ('15) 総会Ⅲ

ウランバートルが決定、次年度会頭立候補者の紹介が行なわれたのち、次回総会が11月に金沢で開催されることが確認され、感謝の言葉とともに閉会した。

12日には日本JC会頭招待レセプションが開催。在コタキナバル日本領事、各国NOM会頭、JCI役員、歴代役員が招かれ、JCI イスマイル・ハズネダー会頭は「日本JCが次の100年に向けJCIを先導してくれると確信している」と挨拶した。

13日開催のジャパンナイトは、「縁」のテーマどおり、各国メンバーとの友情を深め、心の通った民間外交が行なわれた。殺陣パフォーマンスのオープニングアトラクションから始まり、会場内では各地会員会議所、地区協議会、プロック協議会から41ブースが出展、特産品などを提供したほか、書道やおもちゃ遊びなども披露された。後半にはJCI イスマイル会頭をはじめとするJCI役員が登場、日本JCメンバーと一体となってステージを盛り上げた。フィナーレでは皆で大きな輪を作り踊り、会場は一体感に包まれた。

14日開催のアワードセレモニーでは、JCI JAPANよりエントリーされた事業から、多数のノミネートと3つの部門賞の受賞が発表され、会場は歓喜の声に包まれた。日本JCからの受賞は大阪JC、仙台JC、福山JCの3LOM。

大会の最後を飾るGALAでは、大会実行委員長、大会議長らの挨拶があり、各国NOM、JCI役員が囲んで祝うなか、次年度 ASPAC 高雄大会へ大会旗が引き継がれ、4日に渡る大会は無事幕を閉じた。



第65回 JCI-ASPAC コタキナバル大会 ('15) ジャパンナイト



第65回 JCI-ASPAC コタキナバル大会 ('15) GALA

■ サマーコンファレンス2015開催

横浜にて毎年恒例のサマーコンファレンスが7月18・19日に開催。両日を通し多くのフォーラムやイベントが開催され、多数の熱意溢れる参加者を集めた。



サマーコンファレンス('15)
地域再興フォーラムで講演する大前研一氏

「イノベーションを起こす思考」をテーマに、「日本再興フォーラム」では内閣官房長官・菅義偉氏が国家の現状と目指すべき理想の国家像について、「地域再興フォーラム」では大前研一氏が地域の競争力を高めるイノベーションについて、「Innovate NIPPONフォーラム」では中田英寿氏が日本の価値観を世界に広める活動についてそれぞれ講演した。

18日、サマーコンファレンスステーション「サマステ!」と題した特設ステージにおいて、『国際社会とのつながり～私たちに出来ること～』が4部構成で開催。第1～3部では応援団長として高田延彦氏が招かれ、国連ミレニアム開発目標の啓発活動、カンボジアでの医療ミッション、JCI NOTHING BUT NETS キャンペーンの推進について発信が行われた。

第4部では女優の中江有里氏による朗読に続き、日本財団の南里隆宏氏とのトークセッションで、ハンセン病についての啓蒙発信がされた。「サマステ! ライブ」ではMay J.さんが登場、会場は大変盛り上がった。

18日の「歴史教育改革フォーラム」第1部では、女優であり國學院大學客員教授である浅野温子氏によ



サマーコンファレンス('15)第29回人間力大賞授賞式典



サマーコンファレンス('15)地域再興政策コンテスト表彰式

る神話の読み語りが行なわれ、第2部では教育専門家と文部科学大臣政務官らによる、日本の歴史教育問題を語るパネルディスカッションが行なわれた。

また、サマコンのイベントの一環として、29回目を迎える「人間力大賞授賞式典」も開催。グランプリには、子供・地域・企業を対象とした地域貢献活動を行なっている丸幸弘さんが選ばれた。上位入賞者や各奨励賞の発表も行なわれ、サマコンを熱く盛り上げた。

19日には「地域再興政策コンテスト」の表彰式が開催。地域の活性化に向けて立案された多数の政策が審議されるなか、グランプリ内閣府特命担当大臣賞は留萌青年会議所(北海道)に贈られた。

19日のクロージングでは、LOM支援グループ担当大関副会頭、国際グループ担当青木副会頭、地域グループ担当遠藤副会頭、国家グループ担当森本副会頭が大会テーマについて語った。また、柴田会頭からも2日間を通じた総括のメッセージがあり、最後にはサマーコンファレンス2015の2日間を振り返る映



サマーコンファレンス('15)クロージング



握手を交わす柴田会頭と山本樹會頭当選者

像が流れ、大会の成功を参加者全員で共有した。

会にさきがけ、17日には理事会・ブロック会長会議も開催。全国大会東北八戸大会などのすべての議案が審議可決され、公益社団法人八戸青年会議所類家理事長、全国大会実行委員会 石黒大会実行委員長より、真の復興を感じて貰う意義ある大会にするという想いが語られた。

また、2016年度会頭立候補者の資格認定並びに会頭当選者に、山本樹育氏が当選した旨の報告がなされ、山本樹育会頭当選者より来年度へ向けた力強い挨拶があり、柴田会頭と固い握手が交わされた。

■ JCI運動発足100周年の年、国際アカデミー開催

第28回国際アカデミー in 東京が、7月3日から10日、東京浅草を中心に開催された。本年度はJC運動発祥100周年を記念し、歴代OB、歴代JCI会頭によるトークセッションが行なわれ、東京オリンピック・パラリンピック体験などが実施された。また、日本の風呂文化体験や浅草の街並散策、ゲーム交流やダンスタイムが実施、楽しい交流のひとつがもたれた。約1週間に及ぶプログラムを終えグローバルネットワークとしての新たなスタートが全員で誓い合われた。

■ 日中友好交流30周年記念 訪中ミッション・招聘事業

日本JCと、中国の青年を代表する組織である中華全国青年聯合会（全青聯）の交流は1985年に始まり30周年を迎えた。そこで5月26～30日にかけて日本JCおよび日本JC日中友好の会から120名が参



訪中ミッション（'15） 中日合同晩餐会

加した訪中ミッションが行なわれ、7月14～21日にかけて中華全国青年聯合会が訪日した招聘事業と、30周年記念式典が実施された。

招聘事業においては、中華全国青年聯合会の李青副秘書長を団長に、各地の青年聯合会の幹部など59名の中国青年代表団が来日。日本の環境・エネルギー問題と経済についての講演会、企業見学、サマーコンファレンス2015「サマーステーション」見学、日本文化を体験するプログラム、地方団体マッチング、経済交流プログラムが行なわれた。

訪中ミッションにおいては、日本大使館セミナーが行なわれ、在中国日本大使館の山本恭司公使による講演、山本公使と中国社会科学院准教授の趙剛氏、日中友好の会会長・揚原安磨先輩によるパネルディスカッションが行われた。

そして首脳会談が開かれ、柴田会頭、揚原会長と全青聯の徐曉副主席、万学軍主席補佐が出席。徐副主席からは、日中関係における青年交流の重要性と経済人交流を軸とした今後の交流の展望が、揚原会長からは、両団体の30年間の友好関係を高く評価し今後の交流への期待が、そして柴田会頭からは、2014年に締結された日中未来友好協定に基づく交流を進めていくことが話された。

また、地方間交流勉強会や若手リーダー交流団と中国の若手の環境関連の若手の公務員、企業経営者らによる懇談会も行なわれた。

7月19日には、横浜ロイヤルパークホテルにて、日本JC・全青聯「日中友好交流30周年記念式典」が開催。李青副秘書長をはじめとする59名の訪日団、日本JC日中友好の会の先輩など170名余が参加した。柴田会頭のご挨拶の後、中華全国青年聯合会主席の祝辞などが行なわれた。また、会に先立ち、今後の日中の友好交流事



30周年記念式典・祝賀会（'15） 記念品を交換する柴田会頭と李副秘書長

業を推進するために日中友好交流推進覚書の締結が行なわれた。祝賀会では訪日団の参加者とともに30周年が祝われ、さらなる交流を深めた。

■ 南九州方面自衛隊部隊見学会

7月21、22日、防衛省の協力のもと、日本再興会議 中島議長をはじめとする21名のメンバーで、南九州方面自衛隊部隊見学会を行なった。1日目は新田原基地(宮崎県)を訪問、航空自衛隊の役割や防空に関する現状について解説を受け、戦闘機・ヘリなどを見学。その後、海上自衛隊鹿屋航空基地(鹿児島県)のある鹿屋市へ移動し、現役の自衛隊幹部の皆様と懇親会にて意見交換を行なった。

2日目は海上自衛隊航空隊を見学。海上自衛隊の役割や、現在日々起っている領海侵犯に対する防衛の最前線について解説を受け、哨戒機や海上救難ヘリの機内なども見学した。2日間の見学会を通じ、隊員の命がけの活動を知るとともに、日常感じにくい危機の現実を知る機会を得た。

■ 「すべては未来を生きる人のために」 全国大会東北八戸大会

9月24～27日にかけて、第64回全国大会東北八戸大会が開催、「美しく先駆けよう すべては未来を生きる人のために～市民先導のまちづくりから日本再興へ～」を大会テーマとし、4日間を通じ1年間の集大成となる運動が発信された。青森県八戸市の自然、歴史、文化、郷土料理を満喫しながら、市民先導のまちづくりを体感できた大会となった。

24日、開会宣言は全国大会運営会議・井上議長、続けて青森県・佐々木都夫副知事、八戸市・小林眞市長がそれぞれ挨拶に立ち、風光明媚な種差海岸をはじめとする八戸市の魅力を発信する大会の成功に期待



第64回全国大会東北八戸大会('15) 開会式



第64回全国大会東北八戸大会('15) メインスピーチを行なう柴田会頭

を寄せた。八戸JC類家理事長は「東日本大震災から立ち上がった市民の姿をぜひ見てもらいたい」と力強い挨拶を述べた。

25日の理事会・ブロック会長会議では、2018年度全国大会主管LOMとして宮崎JCが当選。宮崎青年会議所の大平理事長が感謝の意を述べた。

また、2017年の第66回ASPACの国内誘致権を鹿児島JCに決定する審議等が可決承認された。総会では2016年度の役員についての審議がなされ、公益社団法人日本青年会議所2016年度役員が選任された。

同日夜の大懇親会では、会場内に地元東北、八戸をはじめ全国各地から出展された飲食ブースが集結。参加したメンバーは、全国の味覚を味わうとともに八戸市を代表する文化のひとつ「横丁



第64回全国大会東北八戸大会('15) 大懇親会



第64回全国大会東北八戸大会('15) AWARDS JAPAN 2015



第64回全国大会東北八戸大会（'15）閉会式



第70回JCI世界会議金沢大会（'15）オープニングセレモニー

文化」を体感した。

ステージでは開会に先立ち、24日に開催されたJC全国野球大会の表彰が行なわれ、優勝の福井JC（福井）、準優勝のいわきJC（福島）などがそれぞれ表彰された。

開会アトラクション、地元JAZZピアニストの演奏などが披露され、「おもてなし食」堪能タイムでは高田延彦氏が登場し、地元八戸を含む東北の各ブースを巡った。アーティストLIVEではMAXが登場、会場の盛り上がりは最高潮に達した。

26日の大会式典では、柴田会頭が1年を振り返っての統括スピーチを披露。「この全国大会のテーマは『美しく先駆けよう!』。やり直しのきかない今この一瞬に命を感じ丁寧に生きることが大切だ。我々青年は自らが時代の先頭に立ち、誰よりも先に駆け抜ける志が求められる。いつの時代も、たった一人の本気から世界は動き始める。JAYCEEがいる限り、底知れぬ力を持つ日本は必ず再興できる」と締めくくった。26日の卒業式冒頭にはTRFが登場し会場は大いに盛り上がりを見せる。卒業生を代表して森本副会頭がスピーチし、最後に現役メンバーが拍手と歓声で見送る中、卒業生がランウェイを通過して退場し閉会の時を迎えた。

そのほか、会員拡大褒賞授与式も開催。目標を達成したLOMが表彰され、7年連続退会者ゼロの玉野JCには拡大特別賞が贈られた。そして会員拡大褒賞「真の日本一拡大LOM賞」には隠岐JCが輝いた。さらに「AWARDS JAPAN 2015」では、優秀賞として11部門ごとに表彰が行なわれ、最優秀賞グランプリとして苫小牧JCが表彰された。

27日最終日の閉会式では柴田会頭が主管の八戸JC、副主管の東北地区のLOMを労う挨拶をした後、八戸JC石黒大会実行委員長の閉会宣言で終了した。

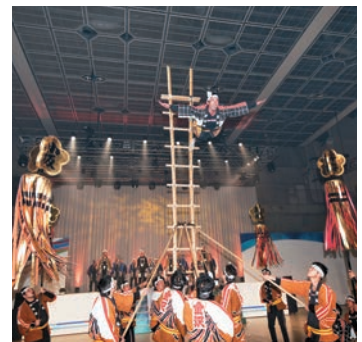
■ 世界会議金沢大会 JCI発足100周年を祝して

11月3～8日、JCI世界会議金沢大会が金沢市内各所で開催された。JC運動発祥100周年を彩る大会に、国内外のJCメンバーが集い、総会やフォーラムに参加するとともに交流を深めた。

3日、オープニングセレモニーでは、眞子内親王殿下ご臨席のもと、各国NOM会頭をはじめとする国内外メンバー、JCI役員が参加。柴田会頭は「世界中の希望となるよう、日本JC、金沢JCが一丸となって本大会に全身全霊を捧げよう」と力強く挨拶。眞子内親王殿下は「私たちの未来を育むような交流を深められますようお願いしております」とお言葉を述べられた。

4日、兼六園時雨亭において、金沢JC主催記念茶会が開催。イスミルJCI会頭、柴田会頭、山野金沢市長、千宗室裏千家家元、金沢JC北村理事長らが参加。お点前は不室康昭先生が務めた。

4日の総会Iでは、JCI関係者による活動報告、JCI基金寄付者表彰などが行なわれ、ネパール大地震に対して日本JCからJCIネパール



第70回JCI世界会議金沢大会（'15）
ウェルカムナイトで披露された
加賀鷹の梯子登り



第70回JCI世界会議金沢大会（'15）
金沢JC主催記念茶会 兼六園時雨亭にて



第70回JCI世界会議金沢大会（'15）総会I



第70回JCI世界会議金沢大会（'15）総会III

に対して寄付金の贈呈も行なわれた。そして日本財団の笹川洋平会長が登壇し、ハンセン病に関する活動報告の後、日本JCを立会人としてJCIと日本財団との間でグローバル・アピール締結が行なわれた。



第70回JCI世界会議金沢大会（'15）
グローバル・アピール締結

6日の「ジャパンナイト」は迫力ある和太鼓の演奏で盛大に幕開け。会場内ではLOM、協議会から100のブースが出展。各地の料理や地酒の提供、書道や射的の体験など多彩で、参加者を楽しませる。各国NOM会頭も揃ってステージに登壇。イスマイル



第70回JCI世界会議金沢大会（'15）ジャパンナイト

JCI会頭がご家族を伴って登場、日本JCへの感謝と柴田会頭への賛辞を贈った。

7日の総会IIIではイスマイルJCI会頭より「金沢宣言」が発表され、UN SDGs (国連の持続可能な開発目標) 達成のために「すべての人々の水



第70回JCI世界会議金沢大会（'15）
JCI TOYP /アワードセレモニー

と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保することに向けた運動の推進が誓約され、採択後に柴田会頭をはじめ各国会頭が署名した。また、グランド



イスマイル会頭よりプレジデンシャルリースを伝授されるディケ JCI
2016年度会頭

スラム達成者の表彰とJCI基金寄付者表彰において、柴田会頭をはじめ多くの日本人が表彰された。

7日に開催されたJCI TOYP、アワードセレモニーにおいては、日本からは柴田会頭が最優秀NOM会頭賞に選出。また大阪JCにはスマイルJCI会頭特別賞が贈られた。

8日の解団式では、柴田会頭の挨拶ののち、主管の金沢JC北村理事長がすべての人への感謝の言葉を伝えた。最終イベントGALAにおいては、次年度世界会議開催地のケベックに世界会議旗が引き継がれ、スマイルJCI会頭が1年間の総括と御礼を述べ、100周年記念の会は大盛況のうちに閉幕した。



JCI世界会議金沢大会（'15）GALA

第25章 あらゆる価値の根源となれ!

2016

東日本大震災から5年が過ぎた2016年。年初明けの1月29日、日本銀行は日本初となるいわゆる「マイナス金利」の金融緩和策実施を決定。アベノミクス政策を続行するなか、新興国の経済落ち込み等が懸念され、消費税10%への増税は再延期が決定される。4月には熊本地震が発生、大きな被害が出た。5月、米国のオバマ大統領が現職の大統領として初めて被爆地・広島を訪問。8月には天皇陛下が「生前退位」を望むメッセージを公表された。

オリンピックイヤーの本年、リオデジャネイロ五輪が開催。閉会式の安倍晋三首相による「安倍マリオ」の扮装も話題を集め、2020年大会開催地の東京に五輪旗が引き継がれた。

■ パラダイムシフトの提示 京都会議

本年も恒例の京都会議で幕を開けたJAYCEEの新たな一年。1月22日の開会式、理事会・ブロック会長会議に続いて、23日にはセミナー&公開委員が開催。また会期中の21日から24日には、地域再興フォーラム、一輪の花が届ける世界の幸せフォーラムなどさまざまなフォーラムが開催された。

24日、新年式典において所信表明演説に立った山本樹育第65代会頭は、本年度の基本理念「独立自尊の精神と良心が織りなす『心』ある国 日本への創造」に向けて、思いを出席者に語りかけた。「人の心が国をつくる。日本は大きな国難のたびに進化を繰り返してきた。今後の進化のためには、民間防衛力と新しい資本主義の概念が必要だ。国民一人ひとりが確かな国家観を持ち、今より少しでも国を良くしていこうとする行動力と、知識や関係、信頼、評判、文化といった見えざる資本。この二つの運動を広げるべく、大げさな政策でなく、小さな実践や試行錯誤を繰り返し、人々を巻き込んだ運動をつくりだしていこう。すなわち、知行合一、である。知識と行為は一体で



京都会議（'16）新年式典 会頭所信表明演説

なければならず、思い立ったのであれば、それを行なわなければならない。青年、それはあらゆる価値の根源である。我々が進化の起点となろう。強く 優しく しなやかな『心』ある国 日本の実現に向けて。

23日のパラダイムシフトフォーラムでは、多摩大学大学院教授の田坂広志教授の講演が行なわれ、①目に見えない価値、②ボランタリー経済、③民間主導の草の根運動、④異業種提携による地域振興、⑤個人のネットワーク力、計5つのパラダイムシフトが示された。知識や関係、信頼や評判、文化や共感といった「目に見えない価値」を大切にする社会の実現に向け、田坂教授は「JCが動けば日本が変わる。今こそ全国的な運動を」と呼びかけた。講演後、元サッカー日本代表監督の岡田武史氏との対談が行なわれ、未来の世代に「目に見えない価値を大切にする社会」を贈ろうと呼びかけた。

地域再興フォーラムでは、石破茂



京都会議（'16）新年式典



京都会議（'16）岡田武史氏



京都会議（'16）パラダイムシフトフォーラム



京都会議（'16）田坂広志教授

内閣府特命担当大臣が「やりっぱなしの行政、頼りっぱなしの民間、無関心の市民。この3つが一体となったとき、地方創生は失敗する」と説く。講師の間宮淑夫氏、白石智哉氏からは青年会議所への期待が語られた。

一輪の花が届ける世界の幸せフォーラムでは、講師の「アフリカの花屋」代表の萩生田愛氏が、ケニアで栽培されるバラを日本で販売し、現地雇用の創出から自立支援につなげる活動を通し、日々の買い物の世界への貢献につながることを講演した。

■ 「平成28年熊本地震」が発生

2016年4月14日午後9時26分、熊本県熊本地方でマグニチュード6.4、震度7の地震が発生。九州地区協議会、熊本ブロック協議会、各地会員会議所と

情報を共有し、翌朝4時59分、山本会頭が哀悼の意とともに熊本への支援を表明。「九州地区熊本ブロック協議会災害対策本部」が設置された。さらに日本JCは「平成28年熊本地震災害支援口座」を開設。被災したLOMには全国同志から支援申し入れがあったが、16日に震度7の「本震」が発生。強い揺れがより広範囲で起こり被害が拡大した。本震でも多くの被害を受けたが、複数のLOMで水や食材をかき集め炊き出しを実施。余震が続く中、地元JCによる果敢な支援が行なわれた。一方、東京のJC会館では「平成28年熊本地震日本JC対策本部」が設置された。

24日には山本会頭が被災地を訪問。被災地LOM、熊本ブロック協議会の災害対策本部などを訪れメンバーを激励した。熊本への復興支援活動は続く。



京都会議（'16）閉会式



熊本地震直後、支援物資を運び入れるメンバー

■ 女性活躍サミット2016

4月17日、三重県の津センターパレスホールにて、日本青年会議所主催の「女性活躍サミット2016」が開催された。基調講演には安倍晋三総理夫人の安倍昭恵さんが登壇。子どもをいつも連れて働ける環境の実現が理想だと語り、文化の変革には女性のやわらかな行動力が不可欠だと、体験談を交えつつ持論を展開した。

基調講演に続くパネルディスカッションで安倍昭恵さんは、鈴木英敬三重県知事、恩師である立教大学大学院21世紀デザイン研究科の萩原なつ子教授とともに、今後の女性のあり方を討論した。また、「女性活躍サミット2016」第2部では、参加者同士で女性のワークライフバランスなどを議論するワークショップが開かれた。



女性活躍サミット（'16）

■ 日本の元気を発信 ASPAC台湾大会

6月2～5日にかけて、世界有数の国際港をもつ港町である台湾・高雄港にてASPAC高雄大会が開催。高雄エキシビジョンセンター内の開放的な会場で開かれた2日の開会式に、山本会頭をはじめとした日本JCメンバーが各国メンバーとともに参加した。台湾の伝統的な太鼓のエネルギッシュなステージパフォーマンスに始まり、大会実行委員長ならびにJCI台湾会頭の挨拶が続き、来賓の蔡英文台湾総統と陳菊高雄市長による歓迎のスピーチが執り行われた。開会宣言は、高雄大会議長のジェニファー・グレイシー君によって行なわれ、4日間にわたるASPAC高雄大会の幕開けとなった。

同じく2日に行なわれた日本JC結団式では、全国LOM理事長ならびに日本JCメンバーが一堂に会し、

パスカル・ディケJCI会頭を始めとしたJCI役員など多数を迎えた。アジア太平洋地区の会員が集う世界大会に次ぐ規模の国際会議であるASPACへの参加にあたり、山本会頭は「日本の元気を世界に発信し、共感でつながるネットワークを世界中に広げる」ことを日本JCが果たすべきミッションとし、参加者の士気を高めた。

3日の日本JC会頭招待レセプションには各国NOM会頭、JCI役員ならびに歴代役員を招いた食事が開催。各国への日ごろの感謝の気持ちを込めた日本流のもてなしに、会場は和やかな空気に包まれた。

4日に行なわれたジャパンナイトでは、各地会員会議所から個性豊かなブースが出店され、日本の魅力をアピールした。また北九州JCのサブカルチャー紹介や大阪JCの駄菓子紹介など、オーソドックスな文化紹介の枠を越えたPRも注目を集めた。



第66回JCI-ASPAC台湾大会（'16）開会式



第66回JCI-ASPAC台湾大会（'16）日本JC結団式



第66回JCI-ASPAC台湾大会（'16）日本JC会頭招待レセプション



第66回JCI-ASPAC台湾大会（'16）ジャパンナイト

JCI役員による報告会を中心に行なわれた総会では、鹿児島JCによる2018年JCI ASPAC誘致プレゼンテーションがなされ、開催が決定した。総会Ⅲには鹿児島県副知事と鹿児島市長も参加、快挙を祝福した。

5日に行なわれたアワードセレモニーにおいては、アジア太平洋地区の各LOMの活動の中から優れた事業が表彰された。日本JCは6部門にノミネートされ、最優秀LOM企業の社会的責任（CSR）プログラム賞に横浜JCのゴミ問題改善プロジェクト「クラウドファンディング」、ほか最優秀LOM組織間協働プロジェクト賞、最優秀LOM理事長賞の3部門にて最優秀賞に輝くという素晴らしい結果となった。

同5日の解団式には、JCI役員および日本JCの歴代役員が招かれ、本大会での日本JCの活動を締めくくった。山本会頭は「日本の存在感を示すことができた」と大会を振り返り、「一つのLOM、一人のメンバーだけでは成し遂げられなかった」と、全ての参加者に対して感謝の意を示した。



第66回JCI-ASPAC台湾大会（'16）総会



第66回JCI-ASPAC台湾大会（'16）アワードセレモニー

■ 第29回国際アカデミー in 水戸

第29回国際アカデミー in 水戸が、6月末から7月半ばにかけて、茨城県水戸市において開催された。

世界各国より76名の参加者、日本全国より90名の参加者を集め、「共感」をテーマに、コースリーダーであるラース・ハシュランド先輩（2006年度JCI会頭）による9つのモジュール、16年度JCI会頭パスカル・ディケ君によるJCI会頭セミナーや、17年度JCI会頭候補者ドーン・ヘッツェル君によるプレゼンテーションなどを受講。世界中で共感を呼びおこし国際社会で活躍するグローバルリーダーになるべく学びの時間を過ごした。

また、海外からの参加者は2泊3日のホームステイ、ご当地ならではの水戸プログラム、食体験プログラムを通じて日本の文化に触れることで、日本文化の



第29回国際アカデミー in 水戸
コースリーダーによるモジュール

理解を深めた。その他、国内外の参加者同士がコミュニケーションを深め、バディーとしてチームで寝食を共にしながら様々な課題に取り組むことで、固い絆を育んだ。

■ 日中友好事業 訪中ミッション

日本と中国の若手リーダーが環境問題をテーマとして交流する日中友好事業として、6月26日～29日の4日間にわたり北京にて訪中ミッションが実施された。中国国際交流協会や在中国日本国大使館によるレセプション、また環境問題に関する勉強会を開催するとともに、最先端の環境技術を導入した地方都市を訪問。両国の協力の重要性と可能性を理解し、今後の協力体制の強化を図った。

結団式では団長の山本会頭が「『国を支えて国を頼らず』との言葉のように、行政に頼らずメンバー一人ひとりが高い意識をもって民間外交を進めていこう」と語った。日本大使館で行なわれた日中友好セミナーでは、中国の環境問題やこれからの取り組みなどの講演があり、日本大使館レセプションでは、現在の中国の情勢や日本と中国の関係性などの話を聞く。首脳会談では中華全国青年聯合会からは于騰群副主席や協会役員、公益社団法人日本青年会議所からは山本会頭や役員、日本JC日中友好の会からは相澤弥一郎会長と役員が終結した。

その後、中国共産党静海区委員会の冀書記と山本会頭との首脳会談が開催。日本が誇る優れた環境技術に対する期待を感じるとともに、隣国同士協力関係を続ける必要性を双方が認識した。



日中友好事業 訪中ミッション ('16) 結団式



サマーコンファレンス ('16) オープニングイベント

■ 「アウフヘーベン」(止揚)をテーマとしたサマコン

7月16・17日、パシフィコ横浜にて第23回サマーコンファレンス2016が開催。オープニングには臨港パーク上空にブルーインパルスが飛行し、大きな歓声が上がった。

大会全体のスタートとして行なわれた「アウフヘーベンフォーラムI」では、国家と国民という相反する2つを融合して民間防衛力を高めていくにはどうすべきかをテーマにパネルディスカッションが開催。国家代表として一億総活躍担当大臣で衆議院議員の加藤勝信氏、国民代表として明治大学文学部教授の齋藤孝氏の二人が登場した。国民が夢や希望を持てる社会をつくっていく政策を行



サマーコンファレンス ('16) アウフヘーベンフォーラムI



サマーコンファレンス ('16) アウフヘーベンフォーラムII



サマーコンファレンス（'16）吉本興業との包括提携協定報告会見

なうことが国家の役割であり、そのためには雇用の創出が有効であると加藤・齋藤両氏が討論。これら全てが循環し始めたとき、個と公が調和した新たな価値とシステムが構築されていくと展開され、後に続く各フォーラムへの導入となった。

次に、「アウフヘーベンフォーラムⅡ」に田坂広志氏と岡田武史氏が登壇、日本JCの今年度の重要課題「VSOP運動」（本業を通じた社会貢献活動のこと）の具体例として、サニーライフサポートの「アレルギーを持つ子どもをふとんのダニから守ろう運動」（蒲郡JC）などが、申請JCの理事長とともに紹介された。

第二部の田坂氏の講演では、「青年経済人こそが、VSOP運動を通じ資本主義の姿を変えていくべき」と語られた。一見、相反する「社会貢献」と「経済活動」を一つに統合し、日本社会を共感経済社会へ導くこと。それこそがテーマ「アウフヘーベン」そのものであると力強く宣言した。

7月17日には、日本JCと吉本興業が包括提携協定を結ぶことが発表された。吉本興業のエンターテインメントや情報発信力、47都道府県住みます芸人のお笑いによる地域活性活動と、JCの全国697LOMが持つ地域ネットワークや実行力を組み合わせ、新たな形で地域から日本を元気にしていく試みである。



サマーコンファレンス（'16）地域再興政策コンテスト



サマーコンファレンス（'16）山本会頭と西川きよし氏

西川きよし氏は「吉本も総力をあげてやります」と決意を語り、山本会頭も運動を続けていくことを宣言して、会見を締めくくった。

7月16日に行なわれた地域再興政策コンテストでは、全国から寄せられた109件の地域再興政策の審査が行なわれ、17日の表彰式で小野加東青年会議所の「小野加東+5歳成人式」がグランプリを受賞。受賞LOMの松井大典理事長が喜びの言葉を述べた。

最後のクロージングにおいては、山本会頭が「個」と「公」の調和という価値観のもと、公のために個々が独立した人間になる重要性を再確認して幕を閉じた。

■ 第47次北方領土返還要求 現地視察大会

7月9日・10日、北海道根室市にて「第47次北方領土返還要求現地視察大会」が開催された。

開会にあたり、国家グループ担当寺尾忍常任理事が挨拶。続くパネルディスカッションは国防、領土問題、国民意識、憲法についての理解を深める場となった。翌日の式典は、根室市納沙布岬・望郷の岬公園野外特設会場にて開催され、主催者挨拶に立った青木照護副会頭は「この大会を、一刻も早い北方領



第47次北方領土返還要求現地視察大会（'16）

土返還の一期一会の機会にしましょう! 日本を変えるのは俺たちだ!」と力強く宣誓。続いて「北方領土を考える高校生弁論大会」も行なわれた。

■ 第30回人間力大賞

9月17日、今年から事業連携協定を締結した大正大学の礼拝堂にて、「第30回人間力大賞授賞式典」が開催された。社会が抱える課題を解決しようと、強い情熱と豊富なアイデアで活動している傑出した若者を称える目的で設置され、節目の30回目を迎えた同賞。応募総数198名の中から勝ち抜いた10名のファイナリストたちへ授与する各賞が発表され、グランプリには富山JC推薦の川原隆邦さん、準グランプリには、横浜JC推薦の門田瑠衣子さん、相模原JC推薦の福本塁さんが輝いた。

グランプリの川原隆邦さんは和紙職人で、400年の歴史を持ち、最盛期には120の村で紙を漉いたという「蛭谷和紙」の技術を伝承している唯一の存在だ。式典では授賞の喜びとともに、「蛭谷和紙には、地域固有の価値観や、地域独特の文化を育んできた歴史があります。私の役割はそれを次世代につなげること。伝統を守るだけではなく、自ら率先してこの深遠なる世界の魅力を伝えたい」と展望を語った。



第30回人間力大賞（'16）グランプリの川原隆邦さん

■ 第65回全国大会広島大会

10月6～9日、第65回全国大会広島大会。世界



第65回全国大会広島大会（'16）大会成功祈願

に誇る平和都市として復興・発展を遂げたこの地での大会に多くのメンバーが参加した。

6日、広島を象徴する世界文化遺産である厳島神社に、山本会頭はじめ日本JC役員、広島JC高見仁理事長、沖本頼政広島大会実行委員長らが集結。瀬戸内海に面した社殿で大会の成功祈願が執り行なわれた。また同日の開会式では、「我々のふるさとを



第65回全国大会広島大会（'16）開会式



第65回全国大会広島大会（'16）
「AWARDS JAPAN2016」
事業褒賞グランプリの糸魚川JC



第65回全国大会広島大会（'16）
「AWARDS JAPAN2016」
拡大褒賞グランプリの大阪JC



第65回全国大会広島大会（'16）山本会頭の統括スピーチ

える起点となる4日間にした」との山本会頭の宣言が広島に響き渡り、大会の幕開けを告げた。

翌7日、第152回総会において、次年度役員選任が審議され、すべての議案が全会一致で可決。代表理事には会頭当選者の青木照護氏が選任された。同氏は「教育再生と経済再生による誰もが夢を描ける日本への回帰を目指す」と次年度の抱負を語った。

7日には「AWARDS JAPAN2016」も開催。拡大褒賞「真の日本一拡大LOM賞」に大阪JCが輝いた。事業褒賞の最優秀グランプリは、糸魚川JCの「白馬VALLEY+糸魚川SEA広域連携事業糸魚川シーフードシャトルバスプロジェクト」に贈られた。

8日の大会式典では、寛仁親王妃信子殿下に褒章の言葉を賜り、広島県知事の湯崎英彦氏、広島市長の松井一實氏が挨拶。山本会頭の総括スピーチに続いて、2017年度会頭予定者の青木照護氏が登壇、会頭の証であるプレジデンシャルリースが青木会頭予定者に受け渡された。青木会頭予定者は「自己成長を求め共に『日本道』を歩もう。日本を変えるのは俺たちだ」と力強く決意を表明した。また全国大会の主幹であることを示す「大会の鍵」が、広島JCから山本会頭を介し、次年度の主管である埼玉中央JC



第65回全国大会広島大会（'16）大会式典

へと託された。

山本会頭は統括スピーチにおいてこのように述べた。「被爆地である広島という特別な地を起点とし、我々は新たな物語を織りなす必要があると改めて実感した。今年度の活動は『民間防衛力の確立』と『新しい資本主義の確立』の二語に集約される。国を頼らず有事を生き抜く自助の力を持つこと。質的成長に重点を置き、社会全体が潤う共感経済社会をつくること。日本は必ず進化した新しい資本主義を確立できるはずである。我々は全国のメンバーの協力により、社会実験・社会貢献活動を通して共感経済社会の確立、地域の再興を推し進め、起点になることができた。これからも共感経済社会の担い手としての活動を共に続けていこう。

本年は平成28年熊本地震という大きな災害に見舞われたが、助け合い支援し続けたJAYCEEたちに敬意を表したい。日本には青年会議所が必要である。一年の一瞬一瞬を皆様とともに最高に輝いて生き続けることができた。強く優しくしなや



第65回全国大会広島大会（'16）卒業式



第65回全国大会広島大会（'16）閉会式



広島大会記念事業（'16）

かに、皆様とともに歩み続けたこの一年に、一片の悔いもなし」。

9日の閉会式においては、山本会頭が主管・副主幹のLOMに労いの言葉を送り、広島JCの高見理事長が感謝の言葉を述べた。解団式では、大会の成功を祝い、山本会頭がだるまの目を塗り終えると盛大な拍手が起こった。最後に広島大会実行委員長の沖本氏が大会を総括し、本大会は終了した。

■ 広島大会記念事業 世界に広がり 平和への思い

10月9日、第65回全国大会の最終日に、広島から平和への思いを発信する広島大会記念事業「世界に広がりピースイズポッシブル・デklarেশヨン」が開催。パスカル・ディケ会頭をはじめとしたJCI役員や各国会頭が、山本会頭、広島JC高見理事長らとともに広島平和記念資料館を視察。その後、広島平和記念公園の原爆死没者慰霊碑に揃って献花し、戦没者への追悼と平和への祈りを捧げ、広島国際会議場に移ったディケ会頭は「恒久的な世界平和の実現は我々の行動にかかっている」と訴えた。

■ 第71回 JCI世界会議 ケベック大会 レポート

フランスの交易都市として発展したカナダ随一の古都・ケベックにて、10月30～11月4日にかけて開催さ



第71回 JCI世界会議ケベック大会（'16）



第71回 JCI世界会議ケベック大会（'16）開会式



第71回 JCI世界会議ケベック大会（'16）

れた第71回JCI世界会議。30日の日本JC結団式では、「共に最高の世界会議をつくり上げよう」との山本会頭の宣言で日本JCメンバーは思いを一つにした。JCIのパスカル・ディケ会頭の挨拶に続いて2017年度JCI副会頭に立候補する清藤洋介氏を国際グループが激励した。

同日の開会式では、各国NOM会頭が自国を表すコスチュームで登場。JCIカナダのクリス・カートラ会頭は日本のメンバーに向け「カナダの人々の優しさに触れられることを願っています」と日本語で歓迎し、JCIのパスカル・ディケ会頭の開会宣言で幕が開いた。

31日夜には日本JCの山本会頭がJCI会頭、役員な

らびに各国NOM会頭を招いてレセプションを開催。招待客は日本流もてなしを堪能した。

日本JCは大会期間中、イギリス、韓国、フランス、アメリカ、台湾、ドイツの各NOMと合同常任理事会を開催。日本JC役員は各国の役員と、お互いの事業について2国間で活発に意見交換を行ない、より緊密に連携できる関係を築いた。また2017年に熊本で開催する第30回国際アカデミーなどのPRも行なわれた。

11月1日のジャパンナイトでは、“Trip to JAPAN”をテーマに、日本各地のLOM、地区・ブロック協議会が30ものブースを出展。地域の銘菓や焼酎を味わい、紙相撲や輪投げを楽しみ、着物を着て写真撮影ができるなど、日本文化のテーマパークとなった会場には大勢の参加者が詰めかけた。

総会ⅠのJCI基金寄付者表彰では、2011年度のJCI会頭、原田憲太郎氏がプレゼンターを務め、17人の日本人を含め各国の寄付者が表彰された。パスカル・ディケ会頭は冒頭で積極的に意見を表明すること求め、活発な議論が行なわれた。またJCI直前会頭のイスマイル・ハズネダー氏（現JCIセネター議長）が「これからは現役のメンバーのために協力していきたい」と語った。

総会Ⅱの選挙では、2017年度のJCI副会頭に清藤洋介氏をはじめとする21人、常任副会頭にはフィリピンのマーク・ブライアン・リム氏ら4人、会頭にはアメリカのドーン・ヘツェル氏が選出。2018年度の世界会議の開催地はインド・ゴアに決定。また水戸



パスカル・ディケ JCI会頭



イスマイル・ハズネダー JCI直前会頭



第71回 JCI世界会議ケベック大会（'16）JCIアワード&TOYPセレモニー

で開催された第29回国際アカデミーの報告があり、日本JCと水戸JCに大きな拍手が送られた。

総会Ⅲにおいては、山本会頭から、昨年度の世界会議で採択された金沢宣言の報告があった。その具体的な施策であるSMILE by WATERキャンペーンを、世界に貢献する日本創造会議の野村晃充議長が紹介した。このキャンペーンでは飲料水が不足しているバングラデシュの農村に200もの雨水タンクを設置し、多くの人を救っている。

グランドスラム達成者表彰では日本のメンバーが11人、JCI基金寄付者表彰では30人以上が表彰された。

3日に開催されたJCIアワード&TOYPセレモニーにおいては、仙台JCの「Together In Sendai ～世界から愛される仙台へ～」が最優秀LOM地域社会向上プログラムに輝き、広島JCの2015年度理事長、荒谷悦嗣君が最優秀理事長に選ばれた。

最終日の日本JC解団式では、日本JCが世界でリーダーシップを発揮できることを証明した世界会議だったと山本会頭は統括し、公式行事での最後の挨拶を締めくくった。



第71回 JCI世界会議ケベック大会（'16）日本JC解団式にて統括する山本会頭

第26章 世のため人のためが自分のため

2017

いわゆる「モリカケ」問題（森友学園、加計学園問題）が世を賑わせるなか、全国瞬時警報システム（Jアラート）発令など北朝鮮問題も緊迫。6月には天皇陛下の生前退位が正式決定され、19年5月1日に新天皇即位と発表された。

東京都議選では都民ファーストの会が第1党に躍進、自民党は惨敗した。第48回衆院選では自民党が大勝。憲法改正の国会発議に必要な3分の2議席を上回った。

9月に安倍首相はロシアのプーチン大統領と会談。北方四島での共同経済活動で、観光や養殖など5項目で事業の具体化を目指すことで合意した。

経済においては、日経平均株価終値がバブル期以降最高となる2万円超を記録。アベノミクス効果の株高がこの年も続いた。

大きな災害としては7月、九州北部で総降水量500ミリ超の豪雨が発生。福岡・大分を中心に被害が出た。

■ 「運命共同体」として何をすべきか ～京都会議～

恒例の下鴨神社による新年初祈願で幕開けした2017年の京都会議。青木照護第66代会頭は役員らと共に京都府知事の表敬訪問、記者会見を経てレセプションに参加。先行き不透明な時代に、運命共同体として、自分たちが何をすべきか。並々ならぬ思いを秘めての門出となった。

新年式典の所信表明演説の壇上で青木会頭は、「茶道や華道など日本伝統文化の『道』の概念には、『世のため人のためが自分のため』という考えが通底している。目先の利益より未来への投資を重んじる利他の生き方。それが日本人が目指すべき『日本道』である。我々がやるべきことは2つ。1つ目は子供たちに投資をする教育再生。2つ目は、未来を見据え、ヒト、モノ、技術に投資をする経済再生である。青年経済人である我々が声を上げ、経済を再生させよう。そして今の日本に欠ける、主権者としての自覚と



京都会議（'17）開会式



京都会議（'17）第153回総会



京都会議（'17）メインフォーラム

責任を培う教育を実現させ、国史、憲法、安全保障、道徳心などの知恵を伝えていく。共に『日本道』を歩もう。66代目のバトンを引き継いだ青木会頭は、本年度の重点施策として教育再生・経済再生を挙げつつ、原点回帰の「和」の心、それを体現する「道」の重要性をこのように示した。

1月19～22日の会期中、多数のフォーラム、セミナーが開催。メインフォーラムの第1部は「教育再生フォーラム」。下村博文衆議院議員が講演を行ない、AI社会に向けた早急な教育改革の必要性を訴えた。第2部は「経済再生フォーラム」。経済評論家の三橋貴明氏、実業家の原文人氏が、デフレ脱却の施策を進めるためにもJCが政府に声を上げ続けることの必要性を説いた。その他、地域再興フォーラム、デフレ完全脱却実現フォーラムなども開催。メンバーは自らが手本となるべく知識を高め、青年経済人としての自覚や責任を養った。

また、京都会議の期間中、全国JCなでしこ女子部会の5周年記念事業も開催。JAYCEE活動においても重要なチャレンジと位置づけられる女性経済人の育成活動は順調に進んで着実に会員数を増やし、その役割はますます大きくなっている。京都会議には2017年度JCI会頭ドン・ヘツェル氏も登場し、体験談を交えたその講演でなでしこ女子部会員を大いに勇気づけた。



京都会議（'17）新年式典



京都会議（'17）全国なでしこ女子部会5周年記念事業、左からアレイ・オペンソン事務総長、矢崎友規部会長、ドン・ヘツェルJCI会頭、ランジュリー・バージェ日本担当副会頭

■ 金沢で、世界の今を考える ～金沢会議～

2015年の「金沢宣言」から2年、本年も国連が掲げた持続可能な開発目標（UN SDGs）の達成に向け、アジア・太平洋地域の各国青年会議所の代表が一堂に集まる国際会議である金沢会議が開催された。

本会議では、SDGsを広めるための方法を、パネルディスカッションやグループワークを通し各国リーダーたちが検討し合った。

日本JCIはSDGsの17の目標のうち【目標6：全ての人に対する、持続可能な水源と水と衛生の確保】を選択、「JCI JAPAN SMILE by WATER」事業を推進しており、その活動報告がなされた。2016年度は、バングラデシュ農村部に雨水貯留タンクと水質浄化剤の配布を実施。JCI JAPANは計200基の雨水貯留タンクを設置し一人1日2リットルの安全な飲み水が確保できる環境を整備。約400～500人に貢献した。2017年度もバングラデシュへの支援を継続



JCI金沢会議（'17）公式記者会見



JCI金沢会議（'17）フェアウェルパーティー

しつつ、新たにカンボジアに井戸建設、魚の養殖事業支援を行なう。

■ 第154回総会／全国理事長サミット

第154回総会と2017年度全国理事長サミットが3月25日、東京ビッグサイトにて行なわれ、全国の理事長が集まった。総会では各種決算審議や事業報告を実施。2017年度予算案に続いて、新規・成長NOMの支援やブータンでの仮設トイレ設置事業などを行なったアジア太平洋開発協議会（APDC）の活動中間報告、障害者スポーツ支援事業についてなどが報告された。

総会後には「移民受け入れ」をテーマにクロストークが実施。一部の外国人による社会保障制度の悪用問題にも触れつつ、現行の制度の穴を埋めないまま、移民の受け入れを進めるべきとの意見が示された。会場でもアンケートを実施、反対6割に及び、サミットが来場者の移民問題意識に大きく影響を与えた結果となった。



第154回総会（'17）

■ 日本青年会議所・日本国政府協同 障害者支援総合プロジェクト

障がい者がスポーツや文化、芸術などにおいて活躍する環境の整備が喫緊の課題となっている今、JCは本年度より日本国政府と連携し、障がい者がより活躍していくための総合的な支援プロジェクトの実施を決定した。このプロジェクトは2020年まで継続し、誰もが夢を描ける共生社会の実現を目指す。

例えば障がい者スポーツにおいては、運動設備や用具、監督者を集める資金が慢性的に不足している。この問題を各地LOMや会員が、企業と障害者アスリート・団体をつなげる橋渡し役となることで解決していく。障がいに関する社会的障壁をなくし、障がい者と健常者が隔たりなく互いに支え合いながら生きていくための事業を展開していく。

■ 全国一斉インフラ投資 促進プロジェクト

5月9日、国土交通省で記者会見を行ない、「全国一斉インフラ投資促進プロジェクト」を発表、青木照護会頭が概要を説明した。「デフレからの脱却のためには、公共投資、中でも全国の高速度道路や高速鉄道といったインフラ投資を行なうことが最も効果的と考える。年間15兆円ずつ少なくとも3年、計45兆円のインフラ投資を行なうことで需要不足を埋め、また副産物として防災面の強化が期待できる。さらに渋滞解消により無駄な渋滞待機時間がなくせ、結果的に労働力と生産性が向上する。これが本来政府の行なうべき真の働き方改革といえるのではないか。インフラ整備はデフレ脱却、防災安全保障、働き方改革という一石三鳥の政策である」。今後もインフラ整備の促進を目指し、全国でシンポジウムの開催や、陳情のための署名活動を行なっていくことが示された。



国土交通省にて、「全国一斉インフラ投資促進プロジェクト」を発表する青木会頭



■ ASPACウランバートル大会

6月8～11日、2017年度のASPAC（アジア・太平洋地域会議）がモンゴルのウランバートルで開催され、アジア・太平洋地域の各国から約3,600名が集結。日本からも1,800名超の参加者が集まり、会議やイベントを通じてJC活動に対する意識の向上を図った。

開会式はドーン・ヘツェルJCI会頭、バトヒシグ・プレヴドゥーJCIモンゴル会頭らが登壇、銅鑼を高らかに鳴らして開会を宣言。モンゴルの伝統打楽器が奏でる音色と共に騎馬隊が現れ会を盛り上げた。

日本JC結団式に出席した青木会頭は、アジア・太平洋地域に残る教育、貧困、治安、インフラ整備などの課題に日本JCが積極的に向き合い活動を広めるとともに、ASPACを通し他国メンバーと交流することで、問題解決のヒントを一つでも多く故郷に持ち帰ることが重要と説いた。



第67回JCI-ASPACウランバートル大会（'17）JCI会頭招待レセプション



第67回JCI-ASPACウランバートル大会（'17）総会I

JCI会頭招待レセプションでは、ゲルと呼ばれる移動式住居の中でもっとも格式が高いゲルがレセプションの会場として用意され、民族音楽と伝統食でもてなされた。遊牧民の奥深い文化やモンゴルの歴史に触れながら、青木会頭も各NOM会頭と談笑し、和やかに交流が図られた。

総会Iでは、アジアでの活動報告に続き、APDCカウンシラー選挙が行なわれ、日本JCから鎌田長明君（高松JC）が議長に選出。総会IIでは、日本JC「SMILE by WATER」プロジェクトが発表され、JCI基金への寄付者の表彰も行なわれた。このほか、鹿児島開催の2018年度のASPACや熊本開催の第30回国際アカデミーを発信、会場は終始熱気に包まれた。

ジャパンナイトは「夏祭り」をテーマに、日本JCメンバーがはっぴや浴衣姿などで各国メンバーを歓待。各LOMのブースでは、日本の地酒、日本茶、ラーメン、たこ焼きなどご当地グルメも登場。盛大に花火も打ち上げられ、和の魅力を存分に伝えた。



第67回JCI-ASPACウランバートル大会（'17）アワードセレモニー



第67回JCI-ASPACウランバートル大会（'17）フェアウェル・ホール



サマーコンファレンス（'17）「サマコンTV」

恒例のawardセレモニーでは、アジア・太平洋地域で優れた活動を行なったROMを表彰。日本からは最優秀新入会員を徳島JCの岡田圭祐君が授賞した。

日本JC解団式では、青木会頭より謝意が述べられ、ドーンJCI会頭は「小さなインパクトを起こし世界を変える大きな波を作ろう」と呼びかけた。

大成功に終わったASPACウランバートル大会。会場の巨大スクリーンに4日間の模様が映し出されると、あちらこちらで歓声が響き渡った。ASPACのフラッグがウランバートルJCから鹿児島JCへと受け渡され、閉幕を迎えた。

■ 日本を変えるのは俺たちだ !! サマコン'17

開催24回目となる今回のサマコンのテーマは「日本を変えるのはオレたちだ!!」。7月22～23日の両日、全国の会員と一般市民が横浜に集結し、より良い日本の実現に向けて日本JCの政策を共有した。

登録者数1万603人を記録したこの年のサマーコンファレンスの特徴は、例年より多くの政策を打ち出し、全ての政策を明確にパッケージ化し

たこと。各委員会・議会の政策キットはサマコン終了後もサマコンHPからダウンロードできるようにし、さらにメディア戦略にも注力。サイバーエージェントの映像配信プラットフォーム「FRESH!」を使い、開催期間中に生放送番組「サマコンTV」を配信。吉本興業の人気芸人をゲストに迎え、「JCとはどのような団体か」「サマコンをより楽しむには」などのテーマについてトークセッションを実施し、視聴数は26万人に達した。

オープニングでは注目の若手役者・中村隼人氏による歌舞伎が披露され、また、ドローンを使って撮影した映像を会場に映し出し、「和とテクノロジー」の世界観を表現した。



サマーコンファレンス（'17）デフレ完全脱却実現フォーラムII



サマーコンファレンス（'17）日本再生フォーラム

期間中に数多くのフォーラム・セミナーが開催。「日本経済を再生！デフレ完全脱却実現フォーラムⅡ」では西田昌司参議院議員、松本晃カルビー株式会社代表取締役会長、経済評論家の三橋貴明氏が登壇し、インフラ投資促進に関する政策の策定・提言や、経世済民に繋がる規制・制度改革の推進、技術投資を促進するセミナーの実施など、いかにしてデフレ完全脱却が図れるかを討論した。

中でも注目を集めたのは「日本再生フォーラム」。安倍晋三総理を招き、現政権が考える「日本再生」ビジョンと、日本JCが目指す「誰もが夢を描ける日本への回帰」について青木照護会頭が対談。外交問題や憲法改正、財政出動や教育政策について熱く議論を交わし、安倍総理は「地域や国のことを真剣に考え、自分たちの力で良くしていこうとすること、皆さまの活動が国を動かす力になります」とJCに大きな期待を寄せ、その様子は多くのメディアでも報じられた。

会期中には第31回人間力大賞授賞式典も開催され、20名のファイナリストから、グランプリには川口加奈さんが選出された。

■ 第30回国際アカデミー in 熊本

世界的な視野で相互理解を深め、人的ネットワークを構築する貴重な機会を提供し、数多の国際社会で活躍する指導者を輩出してきた国際アカデミー。2017年は世界79カ国と日本全国47都道府県から総勢172名が集結。7月初めの熊本を舞台に、30回と



第30回国際アカデミー in 熊本（'17）食文化体験プログラム

いう節目の大会を過ごした。

10日間の期間中、世界各国から参加したデリゲイツが、開催地・熊本の人々と交流を深める多くのプログラムが開催。学校訪問やホームステイ、熊本地震の被災地・阿蘇見学が行なわれた。そのほか、ドン・ハツェルJCI会頭やマーク・ブライアンリム次年度会頭の講演なども行なわれた。締めくくりには卒業式や、熊本市長らを招いて開催地・熊本に感謝と別れを告げるための会が開催。異文化交流のまたとない機会となった。

■ みんなのNIPPON 共生社会プロジェクト

日本JCと文部科学省は7月7日、同省で「タイアップ宣言調印式」を行なった。障がい者が地域の一員として豊かな人生を送ることができるようにするため、教育やスポーツ、文化、就労などを支援していく。タイアップにより実施する事業は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会も見据え、「みんなのNIPPON 共生社会プロジェクト」として全国展開していく。

日本JCでは、障がい者支援事業の参考となるような難度別の政策キットを作成。全国の青年会議所に発信し、都道府県・市町村や関係団体などとの連携プロジェクト実施を促すとともに、プロジェクト推進に向けた体制の構築を目指す。

一方、文科省は日本JCとの連携により、各地域の課題や必要な支援を的確に抽出し、地域に合った永続的な支援を全国で推進していくことが期待される。松野博一文部科学大臣は今回の取り組みに大きな期待を示した。

■ 4省に政策提言、夢を描ける日本へ!

日本JCの青木会頭と役員らは、経済産業省、農林水産省、国土交通省、文部科学省の4省を歴訪し、各大臣と対談。本年度の基本理念である「教育再生と経済再生による誰もが夢を描ける日本への回帰」に向けた政策を提言した。

8月1日、農林水産省での山本有二農林水産大臣との会談では、農協改革の維持を柱とする農業の体質強化に向けた取り組みを要請。青木会頭は農協の株式会社化に反対し、現行の協同組合制度の維持を求め、山本農相も株式会社化を否定。農家の所得向上を図るため農協の機能を見直し、日本の農業を成長産業にしていきたいとの考えを示した。

8月24日には国土交通省で石井啓一国土交通大臣と会談、インフラ投資整備に向けた全国一斉署名活動の中間報告と陳情を行なった。青木会頭は陳情の趣旨について、デフレ脱却のためインフラ投資への積極的な財政政策が重要と述べ、全国から集めた署名が34万筆に至ることを報告。石井国交相はその成果を評価し、さらなる署名数の増加を求めた。

8月31日には経済産業省を訪れ世耕弘成経済産業大臣と面談。サマーコンファレンスで行なわれた「超生産性向上大賞」が成功裏に終えたことを報告した。

9月12日には文部科学省を訪問、林芳正文部科学大臣と会談。「みんなのNIPPON共生社会プロジェクト」の進捗と、次年度の推進方法を提案した。林文科相はスポーツ交流事業の実施に期待を示したう



山本有二農林水産大臣に提言する青木会頭らメンバー

えで、難度に合わせた教育支援と就労支援の拡充の重要性を示した。

また11月17日には、青木会頭や役員、「強い産業構造創出委員会」のメンバーが、国家公安委員会で小此木八郎・国家公安委員会委員長兼内閣府特命担当大臣と会談し、生産性向上へ向けた道路交通法関連制度の改革を要請。免許制度の改正や郵便物配送車両の駐停車禁止の見直し、高齢者の運転免許の規制強化、一般道路の速度規制の緩和を訴え、小此木大臣は安全第一を前提に前向きに取り組んでいく姿勢をみせた。

■ 「日本道」を歩もう

～第66回全国大会埼玉中央大会～

2017年度を締めくくる政策検証結果報告の場として、9月28～10月1日にかけて、第66回全国大会埼玉中央大会が開催。15,300名以上の参加者が埼玉の地に集結した。

武蔵一宮氷川神社での大会成功祈願、市長、県庁表敬訪問などを経て、開会式とウェルカムレセプションは埼玉スタジアム2002にて開催。翌29日の第155回総会には各LOM理事長が集まり、次年度の日本JC役員らを選出された。第10回理事会では憲法改正に向け政府に提言書を提出したことが青木会頭から報告された。

大会式典の部では、寛仁親王妃信子殿下、麻生太郎氏も来賓として出席。青木会頭から池田祥護次年度会頭予定者にプレジデンシャルリースが受け渡され、「大会の鍵」は来年度主管である宮崎JCへと託された。



第66回全国大会埼玉中央大会（'17）
大会式典



第66回全国大会埼玉中央大会（'17）
第155回総会



第66回全国大会埼玉中央大会（'17）AWARDS JAPAN 2017
グランプリの久喜JC

一年を統括する会頭スピーチにおいて青木会頭は、『運命共同体』という大会テーマに触れつつ、侘び寂びに美を見出し、和を重んじる国柄を有する経済大国である日本が「世界の公器」となるべきと強調。すべての元凶であるデフレから脱却すべくJCとして年間を通し提言を続けてきたインフラ投資、技術開発投資、教育投資の三つの施策を挙げ、「地方創生、働き方改革につながるインフラ投資。真の成長戦略としての技術開発投資。そして教育無償化を実現すべく、教育国債の創設をめざす教育投資。この三つを軸にデフレからの脱却を実現し税収を上げる。これが自覚と責任をもった真の主権者のあるべき姿である。

JCは政動社変の団体である。我々はどうのような社会をめざすか、それは日本の伝統を護る『保守』、そして国民を豊かにする『経済』の二語に集約される。日本という同じ船に乗った運命共同体として、共に一期一会の覚悟をもって、自己成長を求めて『日本道』を歩もう。日本を変えるのはオレたちだ!!』とメンバーに熱く語りかけた。

9月29日には、AWARDS JAPAN 2017をはじめとする褒賞事業の授賞式が行なわれた。「真の日本一拡大LOM賞」の栄冠は呉JCが獲得。AWARDS JAPAN 2017のグランプリに輝いたのは久喜JC『『みんなのいえ』プロジェクト』。閉園した保育園（空き家）を無償で借り受け、メンバーの手でリノベーションし、孤食や欠食に悩む児童に食事を提供



第66回全国大会埼玉中央大会（'17）青木会頭の統括スピーチ

する「子供食堂機能」、児童が持ち寄った宿題などを教える「学習支援機能」、地域の多世代の市民が相互理解を行う「地域交流室機能」、この3つの機能を備えた施設運営事業が評価された。

■ 憲法を考える！ 学生・若者フォーラム

11月2日、東京の憲政記念館にて、「憲法を考える！学生・若者フォーラム」が開催。約500名が集まるなか、日本国憲法に自衛隊の存在を明記すべきかについて議論の場がもたれた。パネリストとして中谷元議員、細野豪志議員、山添拓議員、福島みずほ議員、山尾志桜里議員と各党の著名議員が揃い、多数の報道機関も詰めかけた。自民党は憲法第九条への自衛隊明記などの実現に向けて議論を進める考えを示した一方、野党側からは否定的な意見も上がる。会場では憲法改正の賛否についてJC会員、その他学生ら来場者へアンケートも行なわれ、憲法改正に向け多くの意見を吸収する場となった。



憲法を考える！ 学生・若者フォーラム（'17）



第72回JCI世界会議アムステルダム大会（'17）JCI会頭レセプション



第72回JCI世界会議アムステルダム大会（'17）
開会式

■ 第72回 JCI世界会議 アムステルダム大会 レポート

世界をより良くするために、私たちJCIは、何ができるのか。そんな命題を掲げ、世界116カ国4,000人が議論を重ねる本年の世界会議は11月6～10日、オランダ・アムステルダムにて開催。日本からは1,358人が登録、現地入りした。

6日の開会式では各国会頭が自国の文化を表現したコスチュームで登場。青木会頭は2人の忍者と現れ

て会場を沸かせ、ドーン・ヘツェルJCI会頭の開会宣言で大会の幕が開く。日本JC結団式では、挨拶に立った青木会頭が「他国のメンバーと一期一会の素晴らしい出会いを経験してほしい」と呼びかけた。

7日の総会Iでは、JCI基金の寄付者発表で多くの日本JCのメンバーが表彰され、7月に熊本で開催された国際アカデミーの報告もなされた。総会IIの選挙では、2018年度JCI会頭にフィリピンのマーク・ブライアン・リム君、JCI副会頭には日本の小嶋隆文君ら17人が選出された。総会IIIとIVにおいては、2018年度JCI事業計画の予算案が承認可決され、JCI基金寄付者表彰とグランドスラム達成者表彰では多数の日本人が登壇。また日本JC UN関係委員会の仲泉拓郎委員長とグローバルユースアンバサダーが、SMILE by WATERキャンペーンの活動を報告した。

8日の基調講演には国連の第7代事務総長のコフィ・アナン氏が登壇。SDGsの運動について、「若い人がもっと積極的に参加してほしい。世代間の対話と寛容の精神が平和への



第72回JCI世界会議アムステルダム大会（'17）総会



第72回JCI世界会議アムステルダム大会（'17）JCI会頭就任式& GALAパーティー

解決策になる」と話した。

日本JC解団式で青木会頭は「自己成長を自らつかみ取ること」の大切さを説き挨拶を締めくくった。ドーンJCI会頭やアービング・ケルコフ実行委員長は、今大会をリードした日本JCメンバーに感謝の意を表明。次年度国際グループからは各大会に向けた意気込みが聞かれた。

9日開催のアワードセレモニーでは、世界各国のLOMがエントリーした事業やプログラムを審査するJCIアワードが開催。日本からは東京JCの「Smokey Mountain Baseball Project 2017 in Tokyo（スモーキーマウンテン・ベースボール・プロジェクト）」が、「最優秀組織間協働プロジェクト」を受賞。マニラのスラム街の子どもに野球を教え、奨学金を経て大学進学をめざす事業内容で、JCIマニラや名球会の協力を得て実現、高い評価を受けた。

JCI会頭就任式&GALAパーティーでは、プレジデンシャル・リースが

ドーンJCI会頭からマーク・ブライアン・リム君へと受け渡され、続いて行なわれたGALAパーティーでは、正装した3,000人のメンバーが、光と音楽に包まれながら歓談を楽しみ、今年度の世界会議も盛況のなか閉幕を迎えた。



第72回JCI世界会議アムステルダム大会（'17）JCIアワードを受賞した東京JC

第27章 万物に感謝の心を以て、公に誠を尽くす

2018

森友・加計学園問題を横目に、9月の自民党総裁選で3選を果たした安倍政権は更に地盤を固める。通常国会では「働き方改革」関連法、成人年齢を18歳に引き下げる改正民法、カジノを核とする統合型リゾート（IR）実施法などが可決成立。また、沖縄の米軍普天間飛行場の辺野古移設を巡り、辺野古沿岸部の埋立工事を国が再開。国と県の協議は平行線をたどった。

安倍首相は11月にプーチン大統領と会談、歯舞群島・色丹島の引き渡しを明記した1956年の日ソ共同宣言を基礎として、平和条約締結交渉を加速させることで合意した。

6月には大阪府北部で最大震度6弱の地震が発生。7月の西日本豪雨では死者200人超の被害が出た。9月には台風21号が近畿、東海地方に上陸、関西国際空港は滑走路が水没した。また最大震度7の北海道胆振東部地震も発生した。

■ 公に誠を尽くす ～京都会議～

2018年度京都会議は、日本JC役員らメンバーによる恒例の下鴨神社参拝からスタートした。京都府知事を表敬訪問した池田祥護第67代会頭は今年度の目標を「人財育成」と報告。後継者不足という社会的な課題解決に対処する。続く記者会見では、本会議のテーマ「公に誠を尽くす」の意義が説明された。



京都会議（'18）下鴨神社での成功祈願



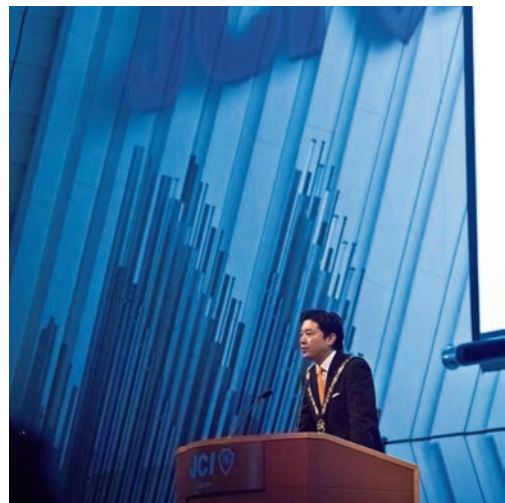
京都会議（'18）日本創生フォーラム

日本創生フォーラムでは、JC卒業生であるスノーピーク代表取締役社長の山井太氏による「事業創造の仕掛けづくり」をテーマとする講演が行なわれた。

未来を切り開く人財フォーラムの第1部は衆議院議員・石破茂氏による基調講演が行なわれ、「日本創生は地域活性化から始まるもの」と語った。第2部では、前半の石破茂衆議院議員の講演を受け、JCによる地域活性の参考事例が紹介された。

第156回総会では、青木直前会頭の功績を称え、池田会頭より表彰された。また、2018年度の日本JCのスローガン「感謝の心を以て、誠を尽くそう～限りなき可能性を信じて～」(豊橋JC村井裕一郎君が考案)が発表された。

新年式典では、青木照護直前会頭より挨拶と謝意が伝えられた。続いて池田会頭から「生きることに



京都会議（'18）新年式典



京都会議（'18）閉会式



日本JC2017年度政策を安倍首相に提言

満足したいなら、自らの運命を愛そう。自らが愛した運命は、己の道となり、未来を切り開いていく力へと柔軟な変化を遂げる。世界すら変えられるその力を、私は希望と言う」と力強く語りかけ、各地会員会議所の理事長をはじめとするメンバーは今年度の基本理念や方針を再確認した。さらに池田会頭は「万物に感謝し、世のため、人のため、覚悟をもって挑戦すること」が大切であると語った。そのうえで、大きな目標として「経済大国としての復権」「自主自立国家の確立」「国際社会との日本的融合」の3つを掲げた。

閉会式では、池田会頭が京都会議に参加したメンバー全員に感謝の意を述べ、各国のメンバーや各地会員会議所らの席を個別にまわり、笑顔で握手し友情を深めた。

■ 日本JCの政策を安倍首相に提言

池田会頭は青木照護第66代会頭らと共に2017年12月26日、首相官邸を訪問し、安倍晋三内閣総理大臣と会談。17年度に日本JCが策定・実行した2つの政策を提言した。

第1の提言はデフレ完全脱却に向けた「真の財政政策」。総額15兆円規模の追加予算を公共事業、教育投資、技術開発投資の3つの投資に充てるべしとした。日本経済はいまだに総需要不足を原因としたデフレからの完全脱却が実現せず、経済再生は果たされていない。安倍総理はこの財政政策を「大変高い志」と評価。「デフレから脱却できなければ財政は健全化しない」と語り、その実現に向けて積極的に取り組んでいく姿勢を示した。

第2の提言は「憲法改正」。自衛隊の存在を日本国憲法に明記することを主張した。安倍首相は「自衛隊の存在を明記し違憲・合憲論に終止符を打つことではじめて、憲法改正の具体論に進める。皆さんの活躍に注目している」と述べた。自主自立国家をめざしたJCの活動は引き続き行なわれていく。

■ SDGsの達成に向けて ～2018 JCI金沢会議～

2015年、国連本部において開催された「国連持続可能な開発サミット」。その国際会議の成果文書として発表された目標がSustainable Development Goals (SDGs)である。

JCIと日本JCはSDGsの趣旨に賛同し、その達成に向けて尽力することを宣言、これを「金沢宣言」として採択した。金沢宣言を受け2020年まで毎年日本で開催されることになった国際会議には、世界のメンバーが一堂に会し、発起の地金沢にてこの3年間、活動の進捗報告等が行なわれてきた。同会議初回では日本JCが各国に先駆けてSDGs目標の6番目「安全な水とトイレを世界中に」を推進することを宣



JCI金沢会議（'18）オープニングセレモニーの池田会頭



JCI金沢会議（'18）「あすチャレ! Academy」

言。グローバル市民の一員として自国だけではなく世界に対してアプローチしていくことを決定した。

今年の会議は2月16～18日に開催。アレイ・オベソンJCI事務総長の開会宣言のあと、マーク・ブライアン・リムJCI会頭、アレクサンダー・ティオ議長、池田祥護日本JC会頭らが、金沢宣言の意義と行動を加速させていく必要性を説いた。続くオープニングセレモニーでは寛仁親王妃信子殿下、谷本正憲石川県知事、山野之義金沢市長から激励のメッセージが寄せられた。

「日本JCプログラム」の1部では、NY国連本部でSDGs推進活動の研修を体験した5名の少年少女国連大使が研修内容を英語でプレゼンテーションした。第2部では吉本クリエイティブ・エージェンシーがSDGsの理念をもと制作した作品を上映。「世界の課題に笑いの力で貢献する」同社の企業精神を重ね合わせた。

「金沢JCプログラム」は、「あすチャレ! Academy」からスタート。障がい者と健常者のさまざまなコミュニケーション法が検証された。続いて特別対談として、「身近なところから始めるSDGs」をテーマに、寛仁親王妃信子殿下、マーク・ブライアン・リムJCI会頭、サラヤ代表取締役の更家悠介氏が参加し活発に議論を交



JCI金沢会議（'18）
講演する原田武夫氏



JCI金沢会議（'18）
講演する更家悠介氏

わした。そのほか、ワークショップ「SDGsビジネス」、「映画から始めるSDGs」と題した映画上映会も開催。真のSDGsを達成するためには何が必要なのかを深く考えさせる場が提供された。

17日の「JCIプログラム」は原田武夫国際戦略情報研究所代表取締役が基調講演を行なう。18日にも行なわれた基調講演では、サラヤ代表取締役の更家悠介氏が、日本JCがいかにして国際社会に貢献してきたかを語った。

一般にも公開されたイベント『「食」と「遊び」のSDGs体験広場』では、SDGsを意識し作られた料理が振る舞われ、来場者も出店者も楽しみながらSDGsを認知できる場となった。

クロージングとして、アレイ事務総長とティオ議長が3日間のセッションを包括。金沢宣言の原点に立ち返り、全LOMと全JCメンバーのSDGs達成に対するコミットメントを求め、会議は終了した。



JCI金沢会議（'18）体験プログラム『「食」と「遊び」のSDGs体験広場』にて



第157回総会・全国理事長パワーセッション（'18）



第157回総会（'18）

■ JCI世界会議立候補届出書署名式／ 総会／全国理事長パワーセッション

3月24日、東京ビッグサイトで開催された第157回総会。総会に先立ってJCI世界会議立候補届出書署名式が行なわれ、池田会頭と横浜青年会議所理事長の草島治郎君が登壇、署名を執り行なった。

総会本編では、2017年度の事業報告と決算の承認がなされ、前年度に多大なる功績を残した青木直前会頭に感謝の拍手が送られた。続いて「APDC（アジア太平洋開発協議会）」「JCI ASPAC鹿児島大会」など各種行事報告がなされた。

「2018年全国理事長パワーセッション」は3部構成で開催。第1部基調講演は、地方創生担当内閣府副大臣を務め、東京青年会議所OBでもある平将明氏による「地方創生におけるヒト、モノ、カネ、情報を集める仕組みについて」。アベノミクスの恩恵はグローバル企業のみという現状を明らかにし、東京一極集中の是正のために地域が需要を生み出す必要があると語った。第2部は、全国の商店街をつなぐネットワークを構築し、地方創生事業の開発を手がける木下斉氏が登壇。地方創生会議の議長・河合洋典君をコーディネーターに、講演に引き続き平将明氏とともに



JCI世界会議立候補届出書署名式

にパネルディスカッションが開催。「公人にはできなくても、民間企業経営者の多いJCメンバーだからできることがある」との熱い期待が寄せられた。



全国理事長パワーセッション（'18）
講演する将明氏

■ 熊本の被災地小学校に スクールバス贈呈

2016年4月に起きた熊本地震。いまだ復興途上にあるなか、熊本の子どもたちがいち早く震災のショックから立ち直れるようにとの願いを込め、3月11日、熊本県益城町の広安西小学校に人気漫画「ONE PIECE」のイラストが描かれたスクールバスが贈られた。

震災以来、現地青年会議所、熊本県商工会議所青年部連合会、国際ロータリー第2720地区、ライオンズ国際協会337-E地区らが団体の垣根を越え復興活動を行ってきた。これら団体が関係各所に呼び



贈呈されたラッピングバスに乗り込む児童ら

かけて資金を集め新車バスを用意。さらに熊本県出身の漫画家・尾田栄一郎氏に協力を仰ぎ、代表作「ONE PIECE」のイラストでラッピングしたスクールバスが完成した。

贈呈式では同校の井手文雄前校長が公募によって決まった新バスの名前を発表。作品にちなんで「ゴーイングましき号」と名付けられたバスを用いて、被災した児童は新たな日常の一歩を踏み出していく。

■ チェスト! 大胆に前に進もう ～ ASPAC 鹿児島大会～

西郷隆盛や大久保利通など日本を動かした偉人を多く輩出した鹿児島。明治維新150周年である記念すべきこの年に、アジア各国をはじめ53の国と地域から、約8200名ものリーダー的存在であるJCIメンバーが登録。「チェスト! 大胆に前に進もう!」というテーマのもと集結し、5月24～27日にかけて、80を超えるプログラムが実施された。

記者会見での山ノ内元治大会実行委員長、マーク・ブライアン・リムJCI会頭らの挨拶、幕末の名君島津斉彬を祀った照国神社での成功祈願祭、招待レセプションなどに続き、鹿児島アリーナで開会式が開催された。タップダンサーや和太鼓によるパフォーマンスに続き各国会頭が入場。セレモニーには秋篠宮同妃両殿下もご臨席になり、ご挨拶のお言葉も賜った。開会式後はウェルカムナイトも開催。日本の祭



第68回 JCI-ASPAC 鹿児島大会 ('18)



第68回 JCI-ASPAC 鹿児島大会 ('18) JCI 会頭招待レセプション



第68回 JCI-ASPAC 鹿児島大会 ('18) 総会I

りがテーマとなった会場で、各国メンバーは郷土料理を楽しんだ。

25日の総会Iにおいて、本大会の中心となる会議が開催。JCI副会頭4名によるアジア地域での活動報告では、精力的なプロジェクトを次々に立ち上げていることなどが報告され、JCI基金への寄付者も発表。同日には鹿児島の環境アドバイザーを務める末吉竹二郎氏の基調講演なども行なわれた。

26日には総会II、合同常任理事会などが開催。

「ジャパンナイト」では各地のLOMが地域の名産をブースで振る舞い、大会は最大の盛り上がりを見せた。

最終日には総会III、JCIアワードセレモニーなどが開催。日本からは「Best Long Tern Local Community Program」を東京JCが受賞した。解団式においては、池田会頭からが全ファンクションの終了を告げ、感謝の言葉とともに、日本JC本部団の解団が宣言された。



サマーコンファレンス（'18）記者会見



サマーコンファレンス（'18）地方創生フォーラム



サマーコンファレンス（'18）サイバーセキュリティ経営フォーラム

■ サマコン

「日本創生への奇跡」をテーマに、今年もパシフィック横浜をメイン会場に、7月21・22日の両日にわたって開催されたサマーコンファレンス。LOMの新しい事業のヒントを得ようとする多くのメンバーが終結した。

21日、林文字横浜市長との記者会見に続き、結団式では池田会頭と草島治郎横浜JC理事長がスピーチ。オープニングでは鎌田長明副会頭らが登場、地方の再生こそ日本創生につながると宣言した。

各セミナーには多数の有識者が招かれ会を彩る。21日の「地方創生フォーラム」に登壇した筑波大学学長補佐の落合陽一氏は、超少子高齢化社会で必要なイノベーションについて鎌田副会頭とトークセッションを開催。また、「サイバーセキュリティ経営フォーラム」では、元総務大臣で国家政策としてセキュリティ対策を推進する高市早苗氏と、セキュリティエンジニアの名和利男氏が防衛体制の基礎を解説した。その他「世界が変わるSDGsフォーラム」「国家戦略フォ

ーラム」「人財育成・拡大支援セミナー」など多数のフォーラム・セミナーが開催された。

第32回人間力大賞の受賞式典も開催。国内外問わず、地域のために挑戦する若者に贈られる本賞の今回のグランプリは、聴覚に障がいのある児童向けの学習塾「デファアカデミー」を主宰する尾中友哉さんが受賞した。また、地域創生につながるビジネスプランの実現をサポートする目的の「地域未来投資コンテスト」の最終審査もあわせて開催され、障がい者のために「選択肢のある日常」が当たり前になる社会を目指し、障がい者向けセレクトショップを運営するMana'olanaがグランプリと内閣総理大臣奨励賞を受賞した。

酷暑の2日間、会場内では日本創生に向けた熱いディスカッションが各地で繰り広げられ、大盛況のうちに閉幕の時を迎える。解団式では池田会頭が「横浜は成長を見極められる定点観測地だ」と感慨深げに述べ、一致団結の余韻が残るなかフィナーレを迎えた。



第32回人間力大賞グランプリの尾中友哉さん



地域未来投資コンテスト受賞者

■ 日中青年経済フォーラム

7月18～21日、日中友好事業招聘ミッションが開催。「文化を基軸とした青年経済人の交流」をテーマとして掲げ、企業や研究機関の視察、晩餐会等の交流事業が催行された。

18日の歓迎晩餐会では、池田祥護会頭、岡部栄一副会頭ら日本JCメンバー、相澤弥一郎会長をはじめとする日本JC日中友好の会会員らと中国代表団を歓待、親交を深めた。

20日、中華全国青年联合会（全青聯）副主席が20年ぶりに来日し、池田会頭との要人対談が行われた。その後開催された日中青年経済フォーラムにも汪副主席は参加、汪副主席は「日中の青年経済人がお互いを尊重し発展していく」よう期待を寄せた。

今回の招聘事業中に開催された中華全国青年联合会、中国青年企業家協会代表との要人対談においては、今年の結果を一過性のものにとすることなく、日中関係をさらに強固なものにするべく、次年度以降も継続し、未来志向で交流を続けていくことが約束された。



日中青年経済フォーラム（'18）

■ 日本の領空防衛の現状を知る

8月7日、防衛省の協力を得て本年も開催された、日本JC自衛隊部隊研修。九州南方面自衛隊部隊を見学するため、一行は宮崎県の新田原基地へ。基地では航空自衛隊の役割や活動、日本を取り巻く領空領海の現状について説明を受け、また戦闘機や救



日本JC自衛隊部隊研修（'18）

難ヘリコプターの視察など有意義な時間を過ごす。たとえ他国の領空侵犯があっても先制攻撃はできないというエピソードからリアルな現状を知り、その責務の重みを肌で実感するひと時となった。現在の日本が置かれている状況、環境を知り、政治や行政の在り方を再考するきっかけとしていく。

■ 第67回全国大会宮崎大会

平成最後の年。プロ野球キャンプ地、サーフィンの聖地としても知られる温暖なスポーツ県・宮崎において、10月4～7日にかけて、第67回全国大会宮崎大会が行われた。この地に伝わる日向（ひなた）神話は、万物に感謝する心を今に伝える伝説。その中心には「和」の精神を象徴する「ひなたの心」があり、JCの本年活動のテーマにも通じる。台風直撃というトラブルに見舞われるなか、全国から多数のメンバーが駆けつけての盛大な開催となった。

大会テーマは「愛と希望のあふれる国 日本へ」。地方創生、超高齢化社会など、山積する問題へのアクションの結果をまとめ、次代へバトンをつないでいく。2018年度の事業検証の集大成であり、最終年を迎えたJAYCEEの卒業、次代への継承の場としての大会が幕を開けた。



第67回全国大会宮崎大会（'18）第158回総会



第67回全国大会宮崎大会（'18）
大会式典



第67回全国大会宮崎大会（'18）大会式典 卒業式



第67回全国大会宮崎大会（'18）
池田会頭の統括スピーチ

スタートは神武天皇ゆかりの宮崎神宮神殿での大会成功祈願から。開会式・ウェルカムレセプションは台風のため中止に。5日には第9回理事会と第158回総会が開催され、2021年の全国大会の地に宇都宮が決定したことなどが報告された。その夜には大懇親会も開催。台風による急な会場変更も宮崎JCの結束、JAYCEEの協力により大きな混乱なく会は進化した。

6日のメインフォーラムに登壇したのは元Apple Japan CEOでの山元賢治氏。「社会に価値を創造できるリーダーについて」をテーマに講演し、「世界のリーダーの共通点は物事に猛烈に好奇心を持つこと」「目の前には平等にチャンスがある」といった言葉をJEYCEEに向けて投げかけた。

6日開催の大会式典は、宮崎JC理事長の長友剛君の発声により開幕。日本太鼓財団宮崎支部による和太鼓演舞に会場が沸いた後、寛仁親王妃信子殿下によるビデオメッセージが届けられた。そして麻生太郎氏をはじめとする歴代会頭が見守るなか、池田会頭から次期会頭予定者の鎌田長明氏へプレジデンシャルリースが伝達され、最後に大会の鍵が富山JCへ渡された。

式典のクライマックス、会頭スピーチにおいて池田会頭は一年をこう統括した。「地方創生と事業創造による経済大国の復権、自主自立国家の確立、そして

国際社会との日本的な融合に取り組んだ一年だった。組織の活性化には一人ひとりの成長と営みの発展が不可欠。人として成長するため、何かを擲擲する前に、己自身の襟を正し、自己研鑽に努めよう。当事者意識の欠如が蔓延している世の中だからこそ、すべての責任は己にあるということの大切さを伝えたい。

平成が終わり、新しい日本の再建は我々青年の仕事である。すべての根源は人にある。人は限りない可能性を秘める。JCよ、王道を歩もう。感謝の心を忘れずに、覚悟をもって生涯挑戦し続けよう。和の精神性が導く、誰もが挑戦できる幸せな国、日本の創造へ。

式典後半は40歳を迎えるメンバーの卒業式が行なわれた。台風という波乱の上に行なわれた宮崎大会は、伝説として語り継がれる大会となった。

大会中、「AWARDS JAPAN 2018」も開催。事業グランプリを勝ち取ったのは横浜JC。独自の循環型社会課題解決プロジェクトとして展開し、世界に蔓延する水資源枯渇問題に文字通り一石を投じた「横浜版UN SDGs推進プロジェクト～AQUACTION！～」が受賞した。また、拡大褒賞も続けて執り行なわれ、桶川JCがグランプリを受賞した。さらに、「3年連続純増LOM（手法部門）」を、準グランプリにも輝いた東京JCが受賞した。



第67回全国大会宮崎大会（'18）「AWARDS JAPAN2018」
拡大褒賞グランプリの桶川JC



第67回全国大会宮崎大会（'18）「AWARDS JAPAN2018」
グランプリの横浜JC

■ インド・ゴアで第73回 JCI世界会議が開催

世界各国からメンバーが終結、今年度の成果報告と次年度の活動方針を定める第73回JCI世界会議が10月30～11月3日にかけて、連日30度を超えるインド・ゴアの地で開幕した。

会議のテーマは「Jai Ho (万歳) — BE VICTORIOUS (勝利をつかもう)」。開催国インドは、近年その経済成長率が毎年7%を超え、まさに勝利をつかむべく躍進し続ける国のひとつである。

30日の開会式では、池田会頭がこの会議を日本の魅力を発信する最高の場にしてほしいと祈念し、2020年の世界会議開催地に立候補する横浜JCらを激励した。また総会Iでは、各NOMの会頭よりJCI会頭に1年間の感謝の気持ちが伝えられ、姫路JCが「第31回JCI国際アカデミー in 姫路」の成功を無事に報告し、大きな拍手が送られた。



第73回JCI世界会議ゴア大会（'18）



第73回JCI世界会議ゴア大会（'18）総会II



第73回JCI世界会議ゴア大会（'18）アワードセレモニー

31日の日本JC会頭招待レセプションでは、餅つき体験を実施するなど終始和やかな雰囲気にも包まれた。11月1日の総会Ⅱでは、2019年から23年までの5年間のJCI中長期戦略計画が話し合われた。そこで白熱した議論が交わされた後、横浜JCが20年の世界会議誘致のための最終PRを実施。見事、開催都市として承認された。さらに19年度のJCI会頭、JCI副会頭の当選者が発表され、次年度会頭にはJCIインドネシアのアレクサンダー・ティオ君が、副会頭には日本の川崎精人君をはじめとする17名が当選を果たした。

最終日の前夜には、2018年度の各国のLOM、NOM、そしてメンバーたちの活躍を称えるアワードセレモニーが開催。池田会頭が見事最優秀NOM会頭賞を受賞するほか、「最優秀LOM 経済開発プログラム」には横浜JCが、「最優秀企業の社会的責任

（CSR）プロジェクト」には大阪JCが、「最優秀LOM長期型地域社会開発プログラム」および「最優秀LOM持続可能な開発目標プロジェクト」には東京JCが、それぞれ最終ノミネートを果たした。

2日の夜に催された「ジャパンナイト」には、日本各地からLOMや協議会が出展し、大いに会場を盛り上げた。日頃の活動で培った「結束力」と「判断力」でその場を切り抜けた。

3日の日本JC解団式においては、池田会頭から謝辞が贈られ、5日間の成果を称え合った。

Jai Ho！ バトンを受け取った次代のJAYCEEたちの希望に満ちあふれた次の1年が、またここから始まる。



第73回JCI世界会議ゴア大会（'18）日本JC解団式



第73回JCI世界会議ゴア大会（'18）クロージングセレモニー／GALAパーティ

5月に新天皇陛下が即位し、新元号「令和」への改元がなされた節目の一年。

安倍総理の通算在職日数は歴代最長となるも、「桜を見る会」問題で内閣支持率は低下。10月には消費税率が上がった。外交面では、韓国を輸出管理上の優遇措置対象「ホワイト国」から除外するなど日韓関係は悪化、中国・アメリカとは良好な関係を保つも、北方領土問題には進展がなかった。

9月の台風15号では千葉県や神奈川県に、10月の台風19号では福島県、宮城県、長野県などで大きな被害が出た。スポーツではアジアで初開催となるラグビーの第9回ワールドカップ日本大会が開かれ、日本代表はベスト8に躍進。また米メジャーリーグのイチローが引退を表明したのもこの年だった。

■ 持続「不能」な世界をどう生きる？ ～京都会議～

2019年度の京都会議のテーマは「持続不能」。現代社会に山積する課題は人類の未来を疑うほどのレベルまで達しているなか、持続可能な世界を実現できるかどうか、日本JCの活動のターニングポイントにもなりうる本大会は1月18～20日にかけて開催された。

鎌田長明第68代会頭は山田啓二京都府知事、門



京都会議（'19）市長レセプション



京都会議（'19）第159回総会



京都会議（'19）ゴール4セッションに登壇した竹内郁雄東京大学名誉教授と実業家の前田裕二氏

川大作京都市長を表敬訪問。JCのSDGs推進活動に対し賛同と期待の意が示された。

第159回総会決議では、大会直前に行なわれた外務省との「SDGs推進におけるタイアップ宣言」を受け、満場一致で「SDGs推進宣言」が採

択された。

本会議中、SDGsの17の大目標に合わせたフォーラムやセッションが多数開催。基調講演はSDGsと地方創生の連携について、片山さつき地方創生大臣が行なった。片山氏は、科学技術イノベーションや地方創生、次世代女性のエンパワーメントを推進することで、“誰一人取り残さない社会”を実現するための日本型のSDGsモデルをつくっていききたい、地方に



京都会議（'19）SDGs推進フォーラム

におけるSDGs推進の原動力として、JCの地域ネットワークと事業展開に大きな期待を寄せていると述べた。

そのほか、「ゴール3セッション 社会保障からつくるあなたのまちの未来」と銘打ち、各地域に合った社会保障制度をテーマにしたセッションが行なわれたほか、「ゴール4セッション 異能ベーターが輝く社会に向けて」、「ゴール8セッション 価値デザインの創出に向けて」、「ゴール9セッション 未来への挑戦、地域経済復興の道」「ゴール10セッション

日本人絶滅の危機！」などが開催。活発な議論の場がもたれた。

新年式典の会頭所信証明においては、麻生太郎氏ら歴代会頭が見守るなか鎌田会頭は、超少子高齢化が進む日本においては、1) 社会を発展させ経済を活発化させる、2) JCでビジネスの機会をつくる、3) 多子社会の議論を進める、この3つの発想転換が必要だと提言。日本を、JCを良くするためにも、メンバー一人ひとりが考え続けていくことを力強く鼓舞し、新たな一年が幕を開けた。



京都会議（'19）新年式典 鎌田会頭の所信表明

■「ジェンダー平等を実現しよう」 JCI金沢会議

今年で第4回目を迎えたJCI金沢会議。日本JCでは、2015年の金沢宣言からいくつものSDGsの達成に向けた施策を行なってきた。本会議は2月22日の記者会見で開幕し、JCI事務総長のアレイ・オベンソン氏を司会に、鎌田長明日本JC会頭らが登壇。さらにSDGs推進に向けたタイアップ宣言に署名をした外務省関係者も出席し、SDGsのゴール5「ジェンダー平等を実現しよう」を中心テーマとした本会議の趣旨が説明された。続くオープニングセレモニーの鎌田会頭の開会宣言による熱気に満ちた幕開けとなった。

日本のSDGsゴール5への取り組みは、ジェンダーギャップ指数で110位（149カ国中）と火急の課題になっている。本会議ではJCIの各国メンバーが集い、サミットスタイルで「ジェンダー平等」について議論が行なわれた。



JCI金沢会議（'19）公式記者会見／オープニングセレモニー



JCI金沢会議（'19）河野太郎外務大臣と

基調講演は河野太郎外務大臣が行なった。河野大臣は「日本政府が考えるSDGs推進について」をテーマに、MDGsからつながるSDGsの経緯やその意義を自身の体験談を交え話した。

多数設けられたプログラムの中で、寛仁親王妃信子殿下を講師としてお招きしたプログラム「日本の女性力フォーラム」の第1部では、殿下より、女性の健康に注力した活動の報告がなされ、また会場の男性たちに向け、女性の健康を慮ることへの理解と協力の必要性を話された。第2部では「女性活躍」をテーマとしたパネルディスカッションも開催。殿下はコミュニケーションやダイバーシティの重要性を説かれた。

■ 「Peace in Action!」 JCI-ASPAC 韓国・済州島大会

日本から一番近い海外リゾートとも呼ばれる「韓国のハワイ」、済州島を舞台に6月17～20日にかけて開催された2019年ASPACには、アジア・太平洋エリアを中心とした63国と地域から約6,300名のデリゲイッが集結。今大会のテーマは「Peace in



JCI金沢会議（'19）日本の女性力フォーラム



第69回JCI-ASPAC 濟州島大会（'19）ワークショップ



第69回JCI-ASPAC 濟州島大会（'19）APDCミーティング

Action!」。北朝鮮に対して支援物資を送るなど、「平和への行動」を積極的に起こしてきた濟州島で、世界中に向け平和への行動を発信していく。

結団式では鎌田会頭の多子社会実現に向けた発言に会場が湧く。開会式は、韓国の伝統舞踊や国技・テコンドーの演舞とともに開幕、文在寅韓国大統領から祝辞が寄せられた。ウェルカムパーティでは韓国各地から集結したLOMがブースを出店。日本からも韓国大阪JC、南長野JCが出店し大いに会場を賑わせた。

総会Iでは、JCI基金の途中経過についての報告があり、また2019-20年度のAPDC議長、および評議員の選出も行なわれた。総会IIでは、各JCI副会頭より担当するそれぞれの地域における活動報告が行なわれ、日本JCについても、ジェンダー平等の改

善に関する取り組みなどが紹介された。総会IIIでは、2021年のASPAC開催地が台湾・台中に決定。その後、基金への募金協力者の発表が行なわれ、今年度も日本からは鎌田会頭をはじめとした多くのメンバーがバッジを授与された。さらに、2020年度のJCI会頭候補者として、Fanuel Nyamayaro君（JCIジンバブエ）から、次代に向けて力強いメッセージが発信された。

ジェンダー平等を考えるワークショップ「Act For Gender Gap」では、2017年JCI会頭ドーン・ヘツェルを筆頭に、JCI香港、韓国、モンゴル、インド、台湾、日本から代表者が登壇し、国ごとに抱える男女の格差について討論が行なわれた。

APDC結成45周年目を迎えた本年、2018-19年度のチームにとっては最後のミーティングが濟州大会初



第69回JCI-ASPAC 濟州島大会（'19）総会I



第69回JCI-ASPAC 濟州島大会（'19）ジャパンナイト



第69回JCI-ASPAC 濟州島大会（'19）総会II



第69回JCI-ASPAC 濟州島大会（'19）総会III

日に開催。ベトナムやラオスをはじめとする開発対象国での充実した活動報告がなされた。

解団式ではシニア代表の歴代会頭小田與之彦先輩らから、今大会参加者への寸言と感謝が述べられ、互いを労いあった。最後には石田副会頭から、世界大会への抱負が語られた。

済州島大会は、とくに日本JCと韓国JCの結束の強さを再認識する意義深い舞台となった。

■ すべての人の幸福を目指して ～サマコン～

梅雨明けを待たずに夏の暑さが訪れた7月20日、21日の両日。パシフィコ横浜で恒例のサマーコンファレンス2019が開催され、来場者は4万人を超えた。今回のテーマは「World SDGs Summit」。日本JCが本年度の最重要課題に設定し、数々の企業・団体と進めてきたSDGsへの積極的な取り組みの成果が、フォーラムや工夫を凝らしたイベントで表現された。



サマーコンファレンス（'19）「ハマビーチ」

数々のファンクションは、すべての人々の幸福を目指すSDGsにふさわしく、家族全員で楽しめるようなプログラムが多数設けられた。テーマパークのような「SDGs Park」には子供向けの体験型ワークショップやVRゲームによる環境問題の疑似体験など、楽しみつつSDGs体験を可能にするイベントが行なわれ、また老若男女が気軽に楽しめるストリートラグビーも



サマーコンファレンス（'19）SDGsと関連の深いピコ太郎のプロデューサー・古坂大魔王氏が登壇

開催。さらに、障がいのある人もない人も一緒に楽しめるeスポーツが催されるなど、多様性を前提にしたプログラムが用意された。ほかにも、青年経済人の集まりであるJCならではの、ビジネスとしてのSDGsについても語られた。これらイベントには2日間で延べ約1万4千人が参加し、多くの子供たちの歓声や笑い声が満ちあふれた。

有識者によるセミナーフェスティバルは今年も白熱。オープニングフォーラムでは実業家のピーダーセン氏、東京大学教授の鈴木寛氏、鎌田会頭が登壇し、ピーダーセン氏からはSDGsへの取り組みが進むデンマークの政策が紹介された。鎌田会頭は「今こそ、業種や年齢の枠を超えたつながりをもつJCの強みを活かすとき」と応え、鈴木氏も「JCメンバーが人類の歴史のエポックメーカーになってほしい」と期待を述べた。

クロージングイベントは「Beyond2030」と題され、テクノロジーの力で、誰もが多様な才能を発揮でき、人と自然が共生して安心して暮らせる社会を実現する方法を模索していくべき」と、AIと人との理想的な



オープニングフォーラム、
(左)ピーター・D・ピーダーセン氏、(下)鈴木寛氏、(右)鎌田会頭

共存法について意見が交わされた。

■ 中国との長期的な パートナーシップを築く 日中青少年育成交流事業

7月21日、日中青少年育成交流事業の一環として、横浜にて日本JCと中国各種団体との合同会談が開催。中華全国青年聯合会を代表し、中国国際青年交流センターの馬興民主任と王希宏公益合作部部长、中国青年企業家協会からは張華副秘書長と王麒活動部部长の4名が参加した。

会談では、鎌田長明会頭から今年度の各事業へのご協力に対する感謝の言葉に始まり、「両国の将来を担う若い世代の双方向の交流を皆様と共に推進していきたい」という意が伝えられた。

青少年育成事業では、日中両国の課題解決と発展を目的とし、視察やワークショップを通じて相互理解を深めている。長期的なパートナーシップを構築することで、世界平和へ向けたアジアの平和と安定を目指す活動をこれからも続けていく。



日本JCと中国各種団体との合同会談（'18）



JCI TOYP 2019 受賞式典（'19）グランプリ・内閣総理大臣奨励賞の永山由高さん（推薦：鹿児島JC）。左はプレゼンターの歌手 hitomiさん

■ JCI JAPAN TOYP 2019 詳報

7月21日、サマーコンファレンス2019が行なわれたパシフィコ横浜で、JCI JAPAN TOYP 2019の授賞式典も同時開催された。この賞は全米の若き才能を発掘することを目的に設立され、今もJCIでTOYPとして継承されている。本年度はSDGsを補完する人材の発掘を目指し実施された。

SDGsに関連する事業が多く評価されるなか、グランプリには、地方創生を担う人材の獲得を目指した「移住ドラフト会議」を展開する永山由高さんが選出。準グランプリには、社会問題をツアーにして発信・共有するプラットフォームを構築した安部敏樹さんと、拾った段ボールから財布をつくるアーティストの島津冬樹さんが選ばれた。

■ 令和元年度 北海道方面自衛隊部隊見学

毎年実施している日本JC自衛隊部隊研修が8月6～7日に実施され、メンバー24名が参加した。まずは埼玉県にある航空自衛隊入間基地からC-2輸送機で北海道・千歳基地へと移動。基地到着後は、航空自衛隊の活動や日本を取り巻く領空領海の現状などについて説明を受ける。続いて陸上自衛隊丘珠駐屯地へ移動し、災害派遣などで使用されるヘリコプターや航空機を見学。翌日は海上自衛隊余市防備隊へと向かい、海自や余市防備隊の活動について説明



北海道方面自衛隊部隊研修（'19）

を受け、ミサイル艇の内部も見学。C-1輸送機に乗り帰路についた。

研修を通じ、多くのメンバーが、いかに我々が自衛隊員によって守られているかを実感。国際情勢を適切に把握し、国民の暮らしを守るための最善法を考え行動していく機会となった。

■ 第68回全国大会富山大会 レポート

本大会のテーマは「新陳代謝」。開催地・富山は、「コンパクトシティ」「SDGs未来都市」として世界からも注目される地域。「日本でいちばんSDGsを推進する民間団体」というスローガンを掲げて活動してきた2019年度の集大成にふさわしい地に全国からメンバ



第68回全国大会富山大会（'19）成功祈願祭



第68回全国大会富山大会（'19）オープニング

ーが集まり、一年間の活動のなかで築いた実績とネットワークが次年度に継承された。

英霊を祀る富山縣護國神社にてまず行なわれた成功祈願祭で、鎌田長明会頭をはじめとする日本JC役員、主管LOMの在田吉宏富山JC理事長らが大会の成功を祈願。オープニングイベントでは、地域の名店がブース出展し、富山の豊かな魅力を全国メンバーに伝えた。

記者会見では、富山大会開催趣旨に加え、日本JCが今年度で全国で1,578件、総事業費17億3,879円（※10月時点）ものSDGs推進に向けた事業を展開してきたことが発表された。また総会において、日本JCとUN Women（国連女性機関）がジェンダー



第68回全国大会富山大会（'19）総会



第68回全国大会富山大会（'19）大会式典

平等に向けた活動協力への覚書を締結したことが発表された。

10月10～13日の会期の真っ只中である10月12日、過去最大規模とも言われた台風19号が日本列島に上陸。いくつものファンクションが中止を余儀なくされるなか、メンバーたちの「卒業式だけでも」という強い気持ちが実を結び、式典と卒業式は決行。富山市、富山JC現役・シニアメンバー、行政関係諸団体、各地会員会議所メンバーらの協力のもと、無事に式典を開くことができた。



第68回全国大会富山大会（'19）大会の鍵伝達式



第68回全国大会富山大会（'19）大会式典



第74回JCI世界会議タリン大会（'19）オープニングセレモニー



第68回全国大会富山大会（'19）大会式典 鎌田会頭統括スピーチ

式典では歴代会頭らの手により、鎌田会頭から石田全史2020年度会頭予定者へとプレジデンシャルリースが託された。会頭はスピーチにおいて、「式の中止も頭をよぎったが、出向者の熱き思いと、この国は変えられる、というメッセージをどうしても皆様に伝えたかった。現在、この国の未来を悲観する人も多いが、希望はある。一年前、私はJCを日本でいちばんSDGsを推進する団体にすると言出し、事業数でも予算でもそれを実行した。我々はさまざまな変化を起こすことを提唱してきた。変化は何より楽しい、面白い。必要なのは『世界をより良くしよう』という強い意志である。皆がワクワクし、心躍る未来を目指して発想の転換を進め、共に行動していこう」と一年を統括した。

台風という予期せぬ事態に見舞われるなか、現役メンバーに加えて歴代会頭や多くの来賓もこの地に集結、JCのネットワーク力を証明する大会となった。

■ 第74回JCI世界会議タリン大会

バルト三国の一国・エストニアの首都タリンは、世界遺産にも登録される美しい中世都市である。11月4～8日、JCI世界会議の舞台となったこの地に日本JCメンバーも多数参加した。

オープニングセレモニーは、エストニアの伝統的な踊りや音楽が披露されるなか、ユリ・ラタス首相らによる開会宣言とともに盛大に開催された。各国会頭

が国旗とともに挨拶する場面では、鎌田会頭が着物姿の子供たちとともに登場。ウェルカムナイトでは各国JCIメンバーが参加、国際交流を深めた。

会頭会議においては、各地の活動報告や地域の持続的な発展に向けたディスカッションが行なわれ、鎌田会頭は「NOMが発展するにはインパクトのあるプロジェクトと継続的なトレーニング、国際イベントへの参加、政府との関係強化などの10の要素が不可欠」と発表した。

APDCミーティングでは、アジア太平洋地域のJCIの新規設立状況や会員の拡大支援について議論がなされた。鎌田会頭は、日本JCが「SMILE by WATER」の事業の一環として行なわれたミャンマーでの井戸掘削が完了したことを報告。「JCIミャンマーの人たちとの交流を深めた、素晴らしい機会となった」と報告した。

日本JC主催の会頭レセプションには各国会頭や来賓約200名が参加。鎌田会頭は本年度の金沢会議や国際アカデミーへの参加の御礼を述べるとともに、石田全史2020年度日本JC会頭予定者を紹介。おもてなしのエンターテインメントとして生け花体験を行ない海外メンバーと交流した。

総会Iでは、国際アカデミー委員会委員長の渡部雄一郎君が登壇。来年の福岡大会開催を告知した。総会IIでは、2020年度の世界会頭にJCIジンバブエの



第74回JCI世界会議タリン大会（'19）日本JC会頭招待レセプション



第74回JCI世界会議タリン大会（'19）横浜ナイト



第74回JCI世界会議タリン大会（'19）会頭就任式& GALA

イタイ・マニャレ氏が選出。日本から立候補した小嶋隆文君は常任副会頭に、青木孝太君は副会頭に当選を果たした。総会Ⅲでは、JCIイランのJCI正会員加盟申請が議題にあがり、本年度の承認が決定した。また、2020年度VPの担当発表があり、インド・フィリピン・マレーシア・シンガポール・カンボジア担当に青木孝太君が選ばれた。

JCI会頭就任式では、プレジデンシャルリースが次年度JCI会頭予定者のイタイ君の首にかけられた。また世界会議伝達式で、大会フラッグを最後に受け取った横浜大会実行委員長の眞鍋デニス大介君は、来場者たちに来年の再会を呼びかけるように、壇上でフラッグを力強く振った。

持続可能な世界の実現に向け、JCIの各国が様々な取り組みを進めているなか、日本JCのSDGs推進に向けた取り組みが注目され、合同常任理事会やAPDCミーティングなどいくつかのファンクションでその話題が取り上げられた。

11月7日、大会内で開催されたアワードセレモニーにおいて、鎌田会頭が最優秀NOM会頭賞を受賞した。鎌田会頭は「規模も大きく活動も盛んな日本JCが社会に与えるインパクトやJCIへの貢献は、加盟国のなかでもいちばんであるべきだ」という自負がある。今後も胸を張ってナンバーワンだと言える事業を構築

し続け、持続可能な社会を実現したい」と挨拶を述べた。

また、JCI Awardsの最優秀地域人材開発賞の部門で、名古屋青年会議所の「オンラインでのいじめによる子供の自殺撲滅キャンペーン」が受賞した。社会問題となっている子供のLINEいじめを根本から解決することを目的に構築されたこのキャンペーンは、名古屋市内小学校を対象に、道徳心向上を目指してテキストを無料配布し、各校を訪問してグループワークを実施。名古屋市内小学校7校、トワイライトスクール12校、学童保育所3カ所にて開催され、合計約8,500名を動員した。



第74回JCI世界会議タリン大会（'19）JCI AWARDS 最優秀NOM会頭賞を受賞した鎌田会頭



第74回JCI世界会議タリン大会（'19）ジャパンナイト



第74回JCI世界会議タリン大会（'19）JCI AWARDS 最優秀地域人材開発賞を受賞した名古屋青年会議所

第29章 軌跡を紡ぎ、奇跡を起こそう! 真に持続可能な国 日本へ 2020

全世界が新型コロナウイルス感染症に振り回された激動の2020年。

日本では1月に国内初の感染者を確認、2月には国内初の死亡例が確認された。クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号では集団感染が確認され、感染者700人超、うち13人が亡くなった。安倍晋三首相は2月27日、全国全ての小中学校、高校などに臨時休校を要請。4月、東京、埼玉、千葉、神奈川、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言を発令。5月には全国を対象を拡大した。東京五輪・パラリンピックは延期となった。年末までに国内感染者数は累計20万人を突破し、死者数は3000人を超えた。

安倍晋三首相は8月、持病再発を理由に辞任の意向を表明。菅義偉官房長官が自民党総裁に選出され、第99代首相に指名された。

■ 真実一路が世の中を変える ～京都会議～

テーマに「アップデート」を掲げた2020年度の京都会議には全国から約1万人が参加。すべてのJAYCEEのアップデートのヒントとすべく、4つのフォーラムと2つのセミナーが開催された。石田全史第69代会頭は、JCI日本をアップデートしたその先に、「すべての人びとが笑顔と生きがいを持てる国 日本の創造」があると発信した。

開催前日の1月16日、JCI役員陣が集結し、下鴨神社で恒例の成功祈願祭を行なう。続いて、京都府知事を表敬訪問。夜の京都市主催のレセプションでは門川大作市長が歓迎の辞を述べた。

17日から3日間にわたって国立京都国際会館で開催された京都会議はバッジ貸与式からスタート。第1回理事会は石田会頭の挨拶、鎌田直前会頭から組織の拡大と改革についての話ののち、各議案の審議と採決が進められた。18日の第162回総会では2020年から2024年における5カ年戦略の方向性な



京都会議（'20）新年式典 石田会頭の所信表明演説

どが示された。

2020年度のJCI日本は重要政策に「組織改革」を掲げる。会員一人ひとりが成長を実感し、社会により良い変化をもたらす組織へとアップデートするために行なわれた「組織改革フォーラム」では、プロノイア



京都会議（'20）バッジ貸与式



京都会議（'20）第162回総会

グループ(株)の代表取締役を務めるピョートル・フェリクス・グジバチ氏を招へい。Googleで活躍した同氏の組織論、人材育成論を学んだ。

「国家フォーラム」第1部では、「日本経済の現状と今後の課題」をテーマに、西村康稔内閣府特命担当大臣が講演。中国や日本の各地を視察して得た知見が披露され、目まぐるしいイノベーションが続くデジタル化・スマート化についての先進事例が聴講者と共有された。第2部では(株)ワーク・ライフバランスの代表取締役小室淑恵氏が加わり、「持続可能な成長戦略による国家経済の再興に向けて」をテーマにしたパネルディスカッションが行なわれた。

石田会頭は新年式典の所信表明演説において、自身の東日本大震災での経験から「生きることは当たり前ではなく、奇跡の連続だ」と語り出した。「生き抜く力、未来を描くことの大切さを教えてくれたのが青年会議所の仲間であり、故郷は唯一無二の心の拠り所である。そして、故郷を守ることができるのは、そこに住み暮らす人々だけであることを震災が教えてくれた。青年会議所は大きな運動を巻き起こすことができる、無限の可能性を秘めている」。結びには「青年らしく大きな夢を描き、共に活動する仲間を集め、全ての人々が笑顔で生きがいを持てる国を築いていこう。真実一路が世の中を変える起点になると私は信じている。2020年、軌跡を紡ぎ、奇跡を起こそう!」とメッセージを力強く発信し、会頭と同じ思いで埋め尽くされた会場は盛大な拍手で包まれた。



京都会議（'20）国家フォーラム

■ AWARDS JAPAN 2019

台風19号の影響で第68回全国大会富山大会において中止を余儀なくされた「AWARDS JAPAN 2019」褒賞式が、京都会議2日目の1月18日に開催された。各褒賞にノミネートされていたメンバーの多くが見守るなか、グランプリはJCI徳島が受賞。「行政を動かした徳島スポーツSDGS ～すげえ・でっかい・ごっつい・スポーツコミッション～」というその事業内容は、「する・観る・支える」をテーマにし、スポーツが地域にもたらす好循環を目指し、行政や企業、マイナースポーツも含めて県内のほとんどの協会と共に事業を行なってきた。代表の18年度理事長の藤川修誌君は「褒賞をとる事業は地域を変える。絶対にLOMの力になると信じてやってきた」と涙ながらに挨拶した。

また、拡大褒賞グランプリとして、JCI海老名が「真の日本一拡大LOM」に輝いた。



AWARDS JAPAN 2019 褒賞グランプリのJCI徳島



AWARDS JAPAN 2019 拡大褒賞グランプリのJCI蛸名

■ 「NO EARTH NO LIFE」 ～金沢会議～

2015年に採択された「金沢宣言」。これは国連本部にて「持続可能な開発サミット」の成果文書として採択されたSDGsの趣旨に賛同するJCIが目標達成に向けて積極的に取り組むことを誓ったものである。進捗状況や成果、今後に向けての課題を共有すべく16年から5カ年計画で始まったJCI金沢会議は、本年で遂にフィナーレを迎えた。

SDGsに対する国民認知度がようやく30%に近づくなか、JAYCEEが今年も冬の金沢に集結。新型コロナウイルス感染症が拡がり中止となるプログラムも出て開催も危ぶまれるなか、かつてない緊張感のなかで行なわれた最終年度のプログラムはどれも意義深いものであった。

公式記者会見にはイタイ・マニャレJCI会頭も臨席。今年のテーマ「NO EARTH NO LIFE」について所見を語った。石田会頭は「金沢宣言」以降の経緯を説明し、「金沢会議が終わっても、JCIは次の目標、2030年に向けSDGsに積極的にコミットメントしていく」と力強く述べた。

開催された各種プログラムの一部を紹介する。「ESG投資を呼び込むSDGsピッチコンテスト」では、SDGsの達成に向けてすでに取り組んでいる、またはこれから挑戦していく事業を募集。ファイナリスト5組の中から最優秀賞に輝いたのは、「金沢から生まれた最先端の草木染」を発表した(株)ククルス取締役・北陸先端科学技術大学院大学講師の増田貴史



JCI金沢会議（'20）公式記者会見／オープニングセレモニー



JCI金沢会議（'20）基調講演を行なうイタイJCI会頭

氏。審査委員は「全国的に見ても、かなり高いレベルにある発表だ」と総評した。

基調講演にはイタイJCI会頭が立つ。「この会議をきっかけに、SDGsへの理解は深まった。次にすべきはアクション。それぞれの地域でこれから10年間、行動することが重要だ」と熱く語りかけ、ともに学んできたJAYCEEから喝采を浴びた。

クロージングの第1部は、石田JCI日本会頭とイタイJCI会頭、鶴山JCI金沢理事長が登場してクロストークが繰り広げられた。初めに「SMILE by WATER」の成果をまとめた映像が流れ、「IMPACT（影響力）」「MOTIVATE（意欲）」「INVEST（投資）」「COLLABORATE（協力）」「CONNECT（つながり）」という5つの視点に基づいて事業を総括。第2部ではEXILEのUSA氏とJCI日本がSDGs推進パートナーシップ協定の締結式を行ない、未来に向けてのアクションプランが発信された。

こうして5年間の集大成となる会議が終了。日本のSDGsのターニングポイントは金沢にあったと胸を張って言える日を迎えるべく、今後も活動は続く。

■ 感染拡大に関する政府への 緊急政策提言

日本青年会議所は3月27日、参議院自由民主党政策審議会長の松山政司氏（JC第48代会頭）を通じて緊急提言書を提出。そして同30日には自由民主党政務調査会長の岸田文雄氏、松山政審会長を石田会頭はじめメンバーが訪問し、緊急提言書をもとに、主に経済対策、個人支援対策、収束後の対策について意見交換を行なった。



自由民主党政務調査会長 岸田文雄氏への緊急政策提言

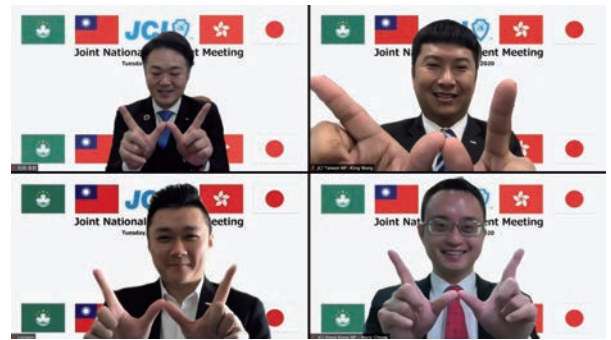
岸田政調会長からは「対策の第1フェーズとして企業の生き残り策を講じること、収束後は大胆な景気刺激策を行なうことが重要。またテレワークの充実、サプライチェーンの多様化も図りたい。ぜひ我々の政策とも連動して政府に届けたい」と感謝を述べ、石田会頭は「全国の青年会議所が一丸となり、率先してアクションを起こしていきたい」と応えた。

また、5月27日には西村康稔経済再生担当相に「新型コロナウイルス対策に関する緊急提言II」を提出。これは同月、主に中小企業経営者メンバーを中心に実施した「あなたの声を国に届ける！新型コロナウイルス対策に関するアンケート」に寄せられた4,871名もの声をもとに作成したものである。西村再生相は提言を受け、「提言書にある消費税の凍結や減税はなかなか難しいが、地方税の減免または徴収猶予については中小企業の意見として金融庁に強く伝えたい」と回答、今後の連携を約束した。

未曾有の危機であるコロナショックを一致団結して乗り越えるべく、今後も活動を続けていく。



西村康稔経済再生担当大臣へ緊急提言書を提出



JCI台湾、JCI香港、JCIマカオ各会頭とWEB対談を行なう石田会頭

■ 石田会頭、各国会頭と緊急WEB対談

新型コロナウイルスの感染が世界中に広がるなか、世界各国のNOMではどのような取り組みがなされているのか。国境を越えて協力しウイルスに立ち向かうべく、石田会頭と各国会頭による緊急WEB会議が数回にわたって開催された。写真で各国会頭が表しているのは、昨年の国際アカデミーのテーマでもある“Work Together”のポーズ。旧交を温めつつ活発な情報交換が行なわれた。

4月14日には日本・香港・マカオ・台湾の4カ国の会頭WEB会議が開催。パンデミックの状況、各国の課題と解決へのアプローチ、景気回復に向けての取り組みについて議論が交わされた。

4月16日にはJCIフィリピン会頭、JCIバングラデシュの会頭とも会談。マスクや消毒液、ハンドソープなどの寄付活動が報告された。

4月22日にはJCIベトナム会頭、JCIモンゴル会頭と対談。それぞれの近況を情報交換した。

5月12日にはJCIインドネシア会頭、JCIシンガポール会頭、JCIマレーシア会頭、JCIカンボジア会頭との対談が行なわれ、相互理解、友好関係の構築を図った。

5月15日にはJCIイギリス会頭、6月8日にJCIインド会頭との対談が実現。6月9日にはタイJCI会頭の代理としてケビン・ヒンJCI事務総長と石田会頭とのWEB会談が行なわれ、JCの価値をどのように新しくしていくのか、また、コロナ禍をどのように会員拡大の機会に変えていくのかについて活発な情報交換が交わされた。コロナ禍という困難への対峙を機会と捉えることが会員拡大につながり、JCIの本質である「リーダーを育てる組織」にもつながることが確認された。



第4回価値デザインコンテスト 勝ちデザグランプリ2020
内閣総理大臣賞のWHATNOT (イトー)

■ 第4回価値デザインコンテスト詳報 ～ 勝ちデザグランプリ2020 ～

日本に活力を与える可能性を秘めたビジネスプランに焦点を当てることを目的とし、第4回目の開催を迎えた価値デザインコンテストの最終選考会と表彰式が、本来ならサマコンが開催されるはずの7月18日に行なわれた。

応募総数102の中からファイナリストに残った5事業のなかから内閣総理大臣賞を受賞したのは、伊藤史晃さん[事業者名:WHATNOT(イトー)]による「廃棄物×DIY×デザインによる価値創造プロジェクト」。「買う」から「つくる」へというコンセプトのもと、廃材を使ったアップサイクルを通して、暮らしを豊かにする「つくる」喜びを提供するという事業内容が高評価を得た。

受賞した5つの事業はどれも近い将来、日本の市場に新しい価値を提供する可能性を秘める。JCI×新しいビジネスモデル、その最適解をみちびくためのフォローアップ活動が今後も期待される。

■ JCI AWARDS 2020

2020年度JCI ASPACのAWARDセレモニーが7月19日にオンラインで行なわれた。本年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響があるにもかかわらず、アジア地域の2,640のLOMから約300のエントリーがあった。JCI日本からは41LOMからのエントリーがあり、6LOMがノミネート(JCI花巻、JCI東京、



JCI AWARDS 2020
最優秀LOM地域社会向上プロジェクト受賞の東京JC

JCI豊田、JCI呉、JCI名古屋、JCI大阪)され、うちJCI東京が最優秀LOM地域社会向上プロジェクト、JCI呉が最優秀組織間協働プロジェクト、JCI名古屋が最優秀会員会議所を受賞した。

最優秀LOM地域社会向上プロジェクトのJCI東京は、タイトル「先生ありがとう」と銘打ち、ユネスコが制定した10月5日「世界教師の日」を日本でも普及させることを模索。保護者や地域住民に教師の現状への理解を深めてもらい、教師への感謝と尊敬の念を喚起し、家庭と地域に子供の教育負担の分散を啓蒙するという事業を展開した。

最優秀組織間協働プロジェクトのJCI呉の事業タイトルは「災害からの復興、そして活力を取り戻す」。2018年7月の豪雨で大きな被害を受けた呉市で、当時の理事長が自らボランティアセンター長を務め、市長、35LOMらと協働し、総数4万人弱のボランティアを率いて復興活動を1年近く継続。2年目には復興記念ダンスを地元高校13校と呉市の港まつりで開催するなど、災害から復興へと歩んだ事業が評価された。

最優秀会員会議所に輝いたJCI名古屋は国内でも有数の会員数を誇り、行政など諸団体と連携し、地域が抱える課題解決に向けた活動を国際規模で展開している。



JCI AWARDS 2020 最優秀組織間協働プロジェクト受賞のJCI呉



JCI AWARDS 2020 最優秀委員会議所受賞のJCI名古屋

事業実施後、いかに地域を巻き込み波及させられるか。世界でも大きく評価されるJCI日本の事業運動が地域に果たす役割は大きい。

■ JCI JAPAN TOYP 2020 詳報

8月16日、万全の感染対策のもと、東急プラザ銀座を会場に、「JCI JAPAN TOYP 2020」の授賞式が行なわれた。本賞は「環境、医療、経済、政治、科学技術、文化・芸術、スポーツなどのあらゆる分野において、社会に持続的なインパクトを与えることのできる可能性を秘めた傑出した若者を発掘し、さらなる活躍を期待して国民全体で応援する機運を広める」という趣旨のもと授けられる。会頭に加え、NewsPicks Studios CEOの佐々木紀彦氏もプレゼンターとして参列。応募総数205名のなかから本年度のTOYP受賞者が選ばれた。

グランプリ（内閣総理大臣奨励賞、NHK会長奨励賞）の荣誉に輝いたTATSUさんは、歌とダンスに手話を融合させたパフォーマンスグループ「HANDSIGN」のメンバーとして活動。受賞挨拶では壇上で手話を交えつつ、「この賞を糧に、世界をつなぐアーティスト活動を続けていきたい」と感謝の意を示した。



JCI TOYP 2020 受賞者 中央がグランプリ（内閣総理大臣奨励賞・NHK会長奨励賞）のTATSUさん（JCI横浜推薦）



第69回全国大会北海道札幌大会（'20）北海道神宮での成功祈願祭

■ 第69回全国大会北海道札幌大会 「真実一路」の先に、奇跡は起こる

新型コロナウイルス感染拡大の猛威は夏を過ぎても収まらず、石田会頭ら役員のみ札幌の地に集まり、大会はオンラインにて全国各地のメンバーに配信されることとなった。

9月26日、札幌の会場と全国692LOMをつないだオンライン開催による第164回総会で大会は幕を開けた。「決して何もできなかった1年ではなく、かつてない成果を残すことができた」と2020年を振り返る石田会頭の挨拶から始まり、2021年度のJCI日本を牽引する会頭や理事の選任を可決。小嶋隆文君のJCI会頭立候補などの報告もなされた。

同じくオンラインで行なわれたメインフォーラムの第1部では、アイリスオーヤマ会長の大山健太郎氏が組織グループ担当常任理事の佐藤友哉君と対談。大山会長は、「組織維持を目的化せず、“誰のために何をするのか”という理念に立ち返るべき。世の中の変化に則し、仕組みそのものをブラッシュアップすることも必要だ」とJAYCEEを激励。第2部では、「組織グループの総括ならびに提言」が行なわれた。

式典の部に登壇した石田会頭は総括スピーチで「現実を受け止め、悲観的に捉えず、この変化を起



卒業者に赤、残る者に青のマスクが配られた



第69回全国大会北海道札幌大会（'20）メインフォーラム

点に、進化した新しい社会を切り拓いていこう」との言葉を皮切りにして、静かに、しかしながら熱く語りかけた。「コロナの有無に関わらず、山積する課題解決のため、本年もさまざまな活動が続けてきた。たとえばSDGs達成に向けて様々な企業・団体とパートナーシップを結び、また、ICT、デジタル変革、価値デザインを通じて、企業の価値と生産性を高めるために支援を行ってきた。また、子供を産み育てることが幸せと感じられる社会を目指し、希望出生率の実現に向け、成長戦略としての人口政策・少子化対応への提言を届けた。新型コロナウイルス感染症に関する緊急提言においては、『感染機会8割減』への移行、経済政策と財政出動についての提言を届け、約6割の政策が個人・企業支援策に実際に反映されるという大きな成果を得た。さらに、障がい者の地域雇用促進のための職場体験事業の実施、労働力確保のための基準指標策定も行なった。

この一年を、何もできなかったと振り返ってほしくはない。我々は誰もが、コロナという国難を正面から受け止め、誠実に対応してきた。一つの判断と決断の繰り返しは、私たちに間違いなく成長の機会を与えてくれた。2020年をやりきったと胸を張り、その歩んできた軌跡に誇りをもってほしい。自分の信じる道を貫くことが『真実一路』であり、努力と挑戦の連続の先に、奇跡は起こる。

真に持続可能な国・日本の創造に向けて、すべて



第69回全国大会北海道札幌大会（'20）大会の鍵伝達式



第69回全国大会北海道札幌大会（'20）大倉山ジャンプ競技場で行なわれた大会フィナーレ

の当事者としてアイデアとアクションをもって精進していくことを誓う」との宣言でスピーチを締め括った。

開拓者精神の根付く、僅か150年余で世界に誇れる都市へと奇跡的な発展を遂げた北海道の地からの発信により、コロナ禍の逆境に屈することなく、全国各地で奮闘を続けてきたJAYCEEの心魂はひとつにつながった。

そして、石田会頭から野並晃次年度会頭に、プレジデンシャルリースは受け継がれた。



第69回全国大会北海道札幌大会（'20）大会式典
石田会頭統括スピーチ



JCI JAPANグローバルユース国連大使育成事業（'20）オンライン研修

■ JCI JAPANグローバルユース 国連大使育成事業

8月1～8日、「JCI JAPANグローバルユース国連大使育成事業～Youths, be ambitious! world web summit GOAL.6～」を実施。本事業は日本が持続可能な社会を実現するために、次代を担う若者を対象にSDGsに対する認識を深め、目標達成に向けて自発的に行動できる人材育成を目的とすべく2011年から開始されている。本年度の参加者は日本のグローバルユース国連大使12名と、5カ国からの計14名の学生。コロナ禍の中、初の“完全オンライン全編英語”での実施となり、放課後オンラインタイムなどを活用しながら親睦を深め合う。研修ではカンボジアでのSMILE by WATER事業の持続可能な現地支援策についてディスカッションやプレゼンテーションを行なった。

さらに、SDGs推進のパートナーシップ協定を締結しているEXILE ÜSA氏もゲスト講師として登場。国連WFPサポーターとしての活動内容などを話していただき、最後にはÜSA氏考案の「おいしいダンス」を参加者全員で踊った。大使たちは研修で学んだ内容をもとに各地域での啓蒙活動を実施する。

■ 第75回 JCI 世界会議横浜大会 WITHコロナ時代のJCのあるべき姿を示す

新型コロナウイルスの感染拡大により、世界中の青年会議所の活動も大きな変化を迎えているなか開催された本年のJCI世界会議横浜大会は、現地とリモートのハイブリッドで開催。「The Crossroad of Innovation」（イノベーションの交差点）というテーマのもと、WITHコロナ時代におけるJCI活動の試金石ともいべき大会が幕を開けた。

ウィーク1と2、合わせて12日間開催された本大



第75回JCI世界会議横浜大会（'20）合同記者会見

会。合同記者会見にはイタイJCI会頭が登壇し、「JCIにとっての新時代の幕開けを横浜で迎えられうれしく思う」と挨拶。多数行なわれたセミナー、講演プログラムのなか、ソフトバンクグループの孫正義氏は「情報革命×世界平和」をテーマに講演。日本を代表する経営者は、「人生で何を成すのか。登る山を決めることで、人生の半分が決まる」と語り、経営者に必要なものは「自分の人生を捧げて悔いのない理念」であり、「登るべき山を見失ったり、誤ってはならない」と説いた。さらに「情報革命で人々を幸せに」という自身とグループの理念についても熱く述べ、最後は「熱狂せよ、己の夢に」との言葉で締め括った。

神奈川県知事の黒岩祐治氏が登壇した「ウイズコロナ時代のME-BYO」フォーラムでは、「未病」という独自コンセプトを進めるヘルスケアニューフロンティア政策の現状と未来について説明がなされた。

また、ウイズコロナ時代の新たなビジョンを各地会員会議所に発信することを目的に、「JCI JAPANフォーラム」を開催。「WORLD CRISIS～新たな可能性～」をテーマに掲げ、コロナ以後の資本主義など、今後の国家のあり方を模索。2030年に向け何をすべきか、そのヒントを多くのメンバーにもたらした。「次世代と考えるwithコロナの資本主義」では、経済学者のジャック・アタリ氏がWEBで講演。「これから



第75回JCI世界会議横浜大会（'20）講演する孫正義氏

は次世代の利益を考えるポジティブな企業でなければ長期的な存続は難しい」と説き、「命の経済」の発展を求めた。

「SDGs NEXT ACTION」では、環境大臣にして現役JCメンバーの小泉進次郎氏が、脱炭素社会、循環経済、分散型社会への意向に向けた政府の方針を報告した。

そして菅義偉内閣総理大臣の講演「ミライ国家のカタチ」が、JCI JAPANフォーラムの掉尾を飾る。「コロナ禍で日本のデジタル化の遅れが浮き彫りになったが、政府としてはデジタル化を徹底的に進めていきたい。また、2050年までに温室効果ガスの排出をゼロにする脱炭素社会へと攻めの姿勢で取り組んでいく。これが産業構造や社会、経済の変革につながり、新たな成長へとつながる。青年会議所の若い皆さんの力を借りることができたら心強い」と語り、イノベーションに向けての決意を新たにした。



第75回JCI世界会議横浜大会（'20）「ウイズコロナ時代のME-BYO」



第75回JCI世界会議横浜大会（'20）「JCI JAPANフォーラム」

この世界会議でJCI大阪の小嶋隆文君が2021年度のJCI会頭に選出。小嶋氏は発信したいメッセージのひとつに「OYAKUME」の語を掲げ、「世界17万人のメンバーに『あなたの役目は何ですか』と問いたい。加えて『OKAGESAMA』の心。支えてくれる人たち、さらには地球のおかげという感覚があればこそ、より深い感謝の気持ちが生まれる」と語った。

こうして幕を閉じた本大会。今後も起こりうる様々な脅威に対し、人、企業、行政がレジリエンスを高め、パートナーシップを通じて新たな可能性を追求し、真に持続可能な社会を実現していくために。たとえ集えなくても、世界には17万人の仲間がいる、誰もがそう実感する大会となった。



第75回JCI世界会議横浜大会（'20）「JCI JAPANフォーラム」に登場したジャック・アタリ氏



2021年度JCI会頭に選出された小嶋隆文君（左）とJCI副会頭に選出された佐々木隆浩君



第75回JCI世界会議横浜大会（'20）「JCI JAPANフォーラム」でのJCI日本と環境省による「SDGsパートナー宣言」締結式



第33回国際アカデミー in 福岡（'20）

■ 第33回国際アカデミー in 福岡

10月27日～11月2日まで、第33回国際アカデミー in 福岡がオンラインで開催された。モジュールのコースリーダーは今年もJCI歴代会頭のパスカル・ディケ先輩。デリゲイツはグループワークを重ね、チームで考えたプレゼンテーションを行なった。開催期間中には、イタイJCI会頭らによる講演もあり、主管LOMであるJCI福岡では、開催地モジュールや開催地の魅力を伝えるプログラムを実施した。70を超える国と地域から参加した約120名の参加者は距離を超えてつながり、これまでに前例のないオンラインによる国際アカデミーは成功のうちに幕を閉じた。

■ 第4回日本アカデミー 開催報告

9月19・20日、オンラインで行なわれた第4回日本アカデミー第1部に続き、第2部が十分なコロナ感染症対策のもと、11月6日に横浜の崎陽軒本店にて開催された。全国から集まった受講者は、ブラインドサッカー体験や価値デザイン委員会によるLOMデザインシートの策定演習、受講者同士のアフターセッション宣言など、リーダーとして必要となるスキルを学ぶと同時に、受講者同士のネットワークの構築を図った。閉校式においては、石田全史会頭から受講者へ熱いメッセージが伝えられ、卒業証書と日アカバッヂの授与が行なわれた。オブザーブした多くのLOMの理事長は、すべてのプログラムを終えた受講者を祝福した。



第4回日本アカデミー（'20）

■ JC宣言文改訂報告

2001年の最後の改訂から時勢は大きく変化し、会員の平均在籍年数の低下もあって、本質的な意味の理解に及ばないケースも見られる中、新たなJC宣言文を策定し、より質の高い社会変革組織となることをめざした活動は本年度の重要施策の一つであった。7月17日開催の全国692理事長シンポジウムではJCI日本の外部アドバイザー・田坂広志多摩大学大学院名誉教授を招いて講演会を開催するなど、慎重かつ大胆に、議論と検討の場を重ねてきた。

そして11月5日に開催された第165回総会において、JC宣言文改訂についての審議が行なわれ、力強い言霊を宿した新しいJC宣言文は、議決権をもつ692のLOM理事長の満場一致で可決。2020年代のJC運動を貫く新たな指針がここに誕生した。

時代に合った宣言文はビジョンが明確になり、共有しやすくなり、斬新なその宣言内容は印象に残りやすく、それはブランドイメージの獲得にもつながりうる。新たな宣言文を基に、世の中を更なる良い方向に変えていくべく、行動する人間集団になることが期待される。

（宣言文と解説の詳細は510ページ～）



第165回総会（'20）

「アフターコロナ」への糸口が未だ見えない2021年。政府は緊急事態宣言を幾度となく発令するも、「宣言慣れ」により人流の抑制効果は期待できない状況に。中止を求める声も上がるなか、2020東京オリンピック・パラリンピックは予定通り開催された。

アメリカでは第46代大統領にジョー・バイデン氏が就任、カマラ・ハリス氏が女性・黒人・アジア系として初の副大統領となった。また8月、アフガニスタンにおいて反政府武装勢力タリバンが政権を掌握、アメリカは軍の撤退を決定した。東日本大震災から発生から10年となる本年、各地で黙祷が捧げられた。国内災害としては関東、東海地区において記録的豪雨が発生、熱海で大規模な土砂災害が起きた。

■ 輝きのはじまり ～京都会議2021～

新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言下で行なわれた2021年度の京都会議は、感染拡大防止策を徹底した上での収録やライブ配信による“完全オンライン”という、史上初めての開催方式となった。

新年式典の冒頭、小嶋隆文JCI会頭はビデオメッセージにて「このような情勢の中でも歩みを止めることなく挑戦する姿勢に、全世界の青年会議所メンバーが勇気づけられる」とエールを送った。激動の2020年に会頭を務めた石田全史直前会頭は、「様々な制限の中、試行錯誤を繰り返しながら何とか職務を全うすることができた」と、2020年度の開催事業を振り返った。

野並晃第70代会頭の所信表明演説は、「生命の安全か経済の再生、どちらを選びますか?」という問いかけから始まった。

「昨年までは約1万人ものメンバーが京都を訪れ、会場は熱気にあふれ、街に賑わいをもた



京都会議（'21）新年式典 野並会頭の所信表明演説



京都会議（'21）新年式典

らし「経済の再生」を具現化していた。そこに「生命の安全」をどう具現化するのか。我々が目指す、誰も取り残さない社会づくりのためには、「AかBかの選択ではなく、AとBを両立させる」思考が今求められるのではないか」と、今年のスタイルが生まれた経緯を説明した。そして、この社会情勢下での取り組みはイノベーションだったと未来のメンバーに評価されるに値する変革を生み出す好機なのだと続け、「勇気を持って大きな変革を起こしていこう」と呼びかけた。

変革の一つとして、所信表明も今までにない2部構成で行なわれ、副会頭たちを交えて「未来の青年会議所へのアイデア」などがディスカッションされた。

会期中に行なわれたメインフォーラムにおいては、「地域イノベーションプロジェクト ～地域とつながり共に創ろう 日本の底知れぬ可能性を～」と題したオンライン対談会が開催。2021年度のJCが掲げる重要施策である「地域や人の力をいかに活性化させるか」というテーマのもと、PHP 総研主席研究員の亀井善太郎氏とヤマガタデザイン株式会社代表取締役の山中大介氏を講師に招き議論を深めた。

また、本年度の第1回理事会は、会頭、副会頭の出席する京都国際会館と全国ブロック会長らをオンラインでつないで開催。野並会頭は「コロナ禍のような社会が曇っている今こそ、逆に光は一層輝きが目立つ。一人ひとりが輝き、周囲を照らそう」と力強く挨拶。全国社会福祉協議会とのパートナーシップ締結の報告や、各議案の審議と採決が進められた。



京都会議（'21）新年式典

第166回総会では、今年度の各大会の概要などが報告された。SDGs推進連携協定としてパートナーシップを締結した株式会社サンリオエンターテインメントの小巻亜矢代表取締役社長もオンライン出席し、「キティちゃんなどのキャラクターのソフトさを生かしたい」と挨拶。2020年度会頭の石田全史君への表彰が行われたほか、京都府知事の西脇隆俊氏、京都市長の門川大作氏から寄せられた祝福ビデオメッセージも流された。

AWARDS JAPAN 2020もオンラインにて受賞者の発表が行なわれ、グランプリにはJCI七尾の「がんばろう七尾！プロジェクト」が選出。新型コロナウイルス感染症に対し、社会と経済の視点から解決策と対応策を構築し地域に大きな影響を与える事業が評価された。



京都会議（'21）第166回総会



京都会議（'21）第1回理事会

■ WEBとのハイブリッドによる 第167回総会開催

3月27日、京都国際会館にて、WEBを併用したハイブリット設営で第167回総会が開催された。各会議所理事長、数多くのLOMが参加し、WEBによる投票も併用して、2020年度事業報告ならびに2020年

度決算が承認。また、今年度のJCI-ASPAC台中大会、第70回全国大会とちぎ宇都宮大会、JCI世界会議ヨハネスブルク大会等の開催法などについての報告も行なわれた。総会後には2つのフォーラムも開催。フォーラムIでは『里山資本主義』の著者である藻谷浩介さんが「自立した地域の創造は地域内経済循環を高める!」と題して講演。フォーラムIIでは「Recruit for Future ~ VISIONの共感が組織の未来にもたらすもの~」と題し、講演や対談が行なわれた。



第167回総会（'21）

■ 2021年度ブロック協議会 会頭公式訪問

本年度の最重要テーマの一つ、「持続可能な地域の創造」。その実現に向け、野並晃会頭は各地域が抱える課題や現状を把握し、JCI日本に求められている運動を理解するための意見交換を目的に、日本全国のブロック協議会を訪問。各地域における新型コロナウイルスの感染状況を見極めつつ、4月24日現在までに計24道府県を訪問した。



■ JCI JAPAN TOYP2021 授賞式を挙行

7月3日、NewspicksGINZAにて、第35回TOYP2021授賞式が執り行なわれ、Circular Initiatives&Partners代表の安居昭博氏がグランプリを受賞。サーキュラーエコノミー（「循環型経済」：廃棄されるはずだった物を資源とし循環させる経済の仕組み）の普及実践活動が高く評価されての受賞となった。



サマーコンファレンス（'21）オープニング

■ 2年ぶりの開催 サマコン2021レポート

2020年の中止をはさんで2年ぶりに開催された2021年のサマーコンファレンスは、現地パシフィコ横浜に加え一部オンライン配信というハイブリッド形式により、7月17・18日の両日に行なわれた。

今回のテーマは「彩の結節点」。「彩」を地域独自の価値、「結節点」を全国各地とのつながりと定義し、真に持続可能な日本の創造に向け、期間中に数多くのフォーラム・セミナーが開催。コロナで激変した社会において、時代に即した価値を発見し、新たなイノベーションを起こすためのアイデア溢れる2日間となった。

オープニングに



サマーコンファレンス（'21）結団式



サマーコンファレンス（'21）アンバサダーのハローキティも登場
© 2021 SANRIO CO., LTD. APPROVAL NO. SP620321



サマーコンファレンス（'21）体験ブース



サマーコンファレンス（'21）第5回価値デザインコンテスト

は内閣府特命担当大臣の河野太郎氏よりメッセージが届けられ、サマーコンファレンス2021アンバサダーのハローキティも登場。各グループの議長やブロック会長が年間の運動を発信した。会場では各委員会の事業PRや学生団体によるSDGsプロジェクトの紹介がなされ、また体験・展示ブースも多数設けられた。

「JCI JAPAN Space Forum」では、宇宙飛行士の向井千秋氏らが登壇、「宇宙のリアルを感じる」をテーマに未来の宇宙進出の夢を語った。「DREAMS COME TRUE ～デジタルが実現する未来予想図～」フォーラムでは、台湾のIT担当大臣オードリー・タン氏がオンラインで登場し、地域から始まるデジタル変革が社会に大きな変革をもたらすと言及。「Stand up for future ～生き残れ！SDGsがあなたの会社を持続可能にしていく～」と題されたフォーラムでは、小泉進次郎環境大臣からカーボンニュートラル実現に向けたメッセージが寄せられた。

会期中には、地域経済のロールモデル支援を目的とする「第5回価値デザインコンテスト」も開催。最高賞の内閣総理大臣賞には、中谷内美昭氏（株式会社バイオマスレジソールディングス）の「農業×テクノロジーで明日のプラスチックをつくる」が輝いた。



サマーコンファレンス（'21）クロージング

■ 第70回全国大会とちぎ宇都宮大会 “アイデアとアクション”のキセキ

記念すべき節目の年、栃木県宇都宮市で開催された第70回全国大会。新型コロナウイルスの影響が懸念されるなか、奇跡的にも開催直前に緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置が一斉解除となり、徹底した感染対策のもと、現地とWEB配信の「ハイブリッド形式」での開催が初めて実現。“アイデアとアクション”をテーマに、熱き想いを胸に秘めたJAYCEEたちが4日間、宇都宮の地に集結した。

10月7日、宇都宮市内の二荒山神社での大会成功祈願で幕を開けた本大会。県知事・市長表敬訪問を経て、オリオン市民広場を会場にオープニングセレモニーが開催。プロジェクションマッピングやVRアートパフォーマンスなどが会を彩った。

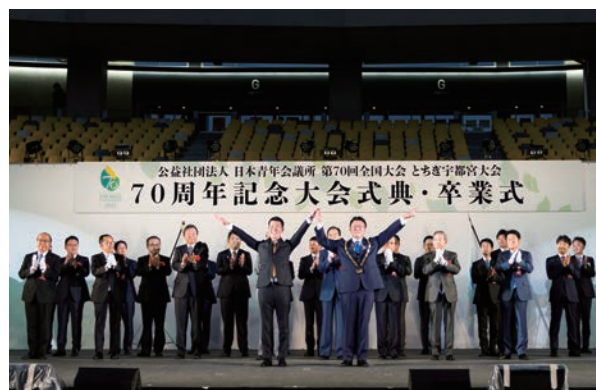
第9回理事会は現地とオンラインで開催。2021年度会員数が3万人近くに増加したことの報告等が行なわれた。また第168回総会ではすべての議案が全会一致で可決された。

メインフォーラムの第1部では、JCI日本の地域・国家・国際・組織グループの各議長4名が登壇し成果報告などがなされた。第2部ではボストンコンサルティンググループの御立尚資氏が登壇し、「真に持続可能な輝ける未来」の開拓をテーマに講演。また70周年記念フォーラムでは、多摩大学大学院名誉教授の田坂広志氏による講演「我々がこの国を変える～日本青年会議所の覚悟と使命～」が行なわれた。

カンセキスタジアムとちぎを会場に行なわれた70



第70回全国大会とちぎ宇都宮大会（'21）第168回総会



第70回全国大会とちぎ宇都宮大会（'21）大会式典
野並会頭から中島士第71代会頭予定者へプレジデンシャルリースが継承

周年記念大会式典においては、野並会頭が70周年記念事業の「理念共感拡大グランドデザイン」を宣言。本事業の3代目標である「①理念教育システムの再構築」「②行動化のための良質な情報」「③多様性のある組織の確立」について、ブロック会長らからそれぞれの内容が発表された。式典はプレジデンシャルリース継承、大会の鍵 伝達式、卒業式を経て、野並会頭の総括スピーチへと移行。「2021年、我々はいかなる状況でも実行力を発揮してきた。青年会議所は「最後の学び舎」と言われるが、テストはない。すべては自分次第、実践がテスト代わりなのである。卒業後、“アイデアとアクション”を発揮するテストを自ら受け続けてこそ、地域に明るい未来が訪れる。一日一日をたゆみなく歩むからこそ、未来が訪れる。一人ひとりが輝く運動を起こせたことに改めて感謝申し上げたい」と締め括った。

この一年、様々な制限に悩みながらも、JAYCEEは絶えず前を向き考え、信念を持って行動してきた。解団式において野並会頭は改めてそれを本年度の一つの成果と称賛、誰もが経験したことのない事態の中での本年度の挑戦は、地域の、そして日本の未来を明るく照らすきっかけとなったに違いない。



第70回全国大会とちぎ宇都宮大会（'21）解団式

エピローグ

「理念が浸透していた状態」への 原点回帰

創立70周年を記念して、第70回全国大会とちぎ宇都宮大会の会期中である10月9日に記念式典が開催された。過去を振り返り、70年連綿と受け継がれてきた私たちは時代に即した組織として形を変え続けて今日があることが示された。

しかし、過去10年間、連続して会員数は減少している。時代の変化が激しい現代において、上質な情報ほど価値がある一方で、各LOM間での情報交換が一部の会員に限られており、LOM間における情報格差が生じている。LOMが持続可能な組織へと発展するために、地域特性に合わせた、理念共感型の質に焦点を当てた、単年度制の枠を超えた中期的な会員を増やす計画が必要とされている。

戦後の焼け野原から、高い志と理念を併せ持った青年たちが立ち上がった、設立当初の「理念が浸透していた状態」へと原点回帰を果たすときがきたと、理念共感拡大グランドデザインが宣言され、3つの重点項目が設定された。

【重点目標1】理念教育システムの再構築

今、JCに入会して卒業するまでの平均在籍年数が4.2年。さらには、新入会員セミナーを開催していないLOMが40%以上ある。何のためにJCをやっているのかを、わからずにJCの運動活動をしているメンバーもいる。そのために「理念教育システムの再構築」が必要である。

【重点目標2】行動化のための良質な情報

JCをやっている、全国で他のJCがどんなことをしているのかわからない。メンバーが何人いて、どんな職業の人が多いのか？何歳の人が多いのかわからない組織戦略に必要な「行動化のための良質な情報」を各地青年会議所へ提供する。

【重点目標3】多様性のある組織の確立

多様性のある組織とは、あらゆる人財の個性を輝かせる組織である。多様な人財を受け入れ、組織内の新陳代謝を活性化することで、その時代や地域に即した組織体質へのアップデートを実現するため「多様性のある組織の確立」を目指す。

この3つを柱とした理念共感拡大グランドデザインのもとに新しい始まりとして、地域とLOMの中で抱える多くの問題に対し、今一度改めて向き合い、未来のためアイデア&アクションを起こしていくことが高らかに宣言された。

第60代－69代 会頭インタビュー



公益社団法人 日本青年会議所 2011年 第60代会頭

福井 正興氏

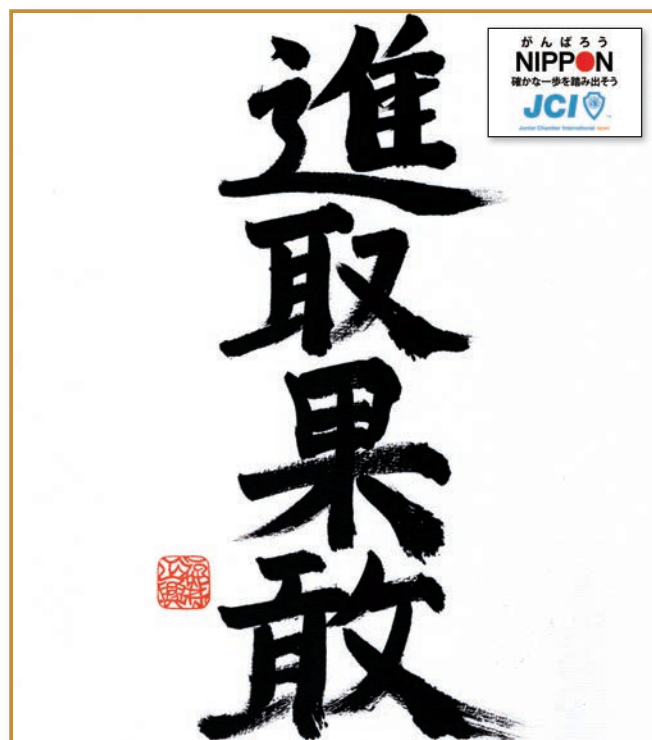
株式会社福寿園 代表取締役社長

がんばろうNIPPON 確かな一歩を踏み出そう

3月11日、東日本大震災が発生した当時は、私たちに何が出来るのか、何をすべきなのかを繰り返し考える毎日でした。課題は多岐に渡りましたが、JCの得意とする地域に密着した地道な行動に徹しました。全てが正しい決断であったかは未だに自問自答していますが、被災者一人ひとりが自立し、その上で共助していけることが真の復興であるとの考えを持ち、常に判断するように心がけました。日本JCとしては、60年続いてきた運動を止めるのではなく辛くても継続することが、被災しているLOMにとっても、JCを続けることが困難なメンバーにとっても、JCを辞めずにいる勇気になると考え活動し続けました。被災地域と深く関わったことで、自身の役割が明確になりました。それは、自分の小さな手で出来る支援を長く続けることでした。難しく考える必要はなく、復旧が進み足を運べるようになれば、何度か行ってみれば良いのです。

1000円のお土産を出来るだけ沢山買って帰れば良いのです。今、私たちは未知のウイルスと遭遇し大きな試練の中にいますが、同様の行動が大切だと思います。地道に取り組むことが、生きる幸せへの近道だと私は信じています。

生活様式や価値観が変化し続ける現代。10年先の日本は、SF映画の世界が現実化しているでしょう。生活はさらに激変し、人生設計を見直すことになるでしょう。青年会議所のあるべき姿を見直す機会も度々訪れるでしょう。何かを成し遂げようとするときには、その目標を具体的に描くことが大切です。優れたリーダーは錬金術師であり、未知のものに対する恐れを、未来を信じる気持ちに変えることができなければなりません。リーダーがすべきことは、未来を鮮やかに描き出し、それを追う人がどこに向かっていくかを明確に示すことです。明確さは



不安の解毒剤です。私は幼い頃、空飛ぶ車で世界を飛び回ったり、ガンダムのようなロボットを操縦したりする未来を何度も想像しました。夜空を眺めながら宇宙のことを考えるととてもワクワクしました。輝く星に行ってみたいなどと思うことは、ひと昔前だと空想として笑い飛ばされていたでしょうが、今では空飛ぶ車は夢ではないし、他の星に行くことも現実になりつつあります。行動は夢を描いたときから始まります。ワクワクする夢を描き続けたいと思います。

誰かがやってくれると胡坐をかいていた瞬間はなかったでしょうか。新たなことに挑戦する人や組織であるための条件は二つ。一つは過去の体験にとらわれ過ぎないこと。もう一つは視野を広げてものごとを見る大局観を持つことです。習慣や成功体験にとらわれていては時代から遅れてしまいます。一人ひとりがどう歩み、挑戦し続けるかが大切です。考えを行動に移した

時から試行錯誤が始まります。そこから新しいことが次々と見えてくるようになります。JCI日本は設立以来、常に進取の精神により果敢に挑戦を続けてきました。これからも歴年の尊い軌跡に感謝と敬意の念を抱きつつ、新たなる飛躍へ向けて、愛する日本を元気にするために、かけがえのない地球を守るために、確かな一歩を踏み出してくれることを願います。

結びに、復旧作業のトラックが行き交い土埃が舞う陸前高田市で執り行われた追悼式が忘れられません。尊い命を落とした仲間の写真を前に、私はどんなに辛くても生きて国民のために力を尽くし、様々な困難に立ち向かうと誓いました。それぞれの家族や会社の従業員、メンバーの命を守ることが大切であり、日頃からあらゆる災害への対策を怠らず、愛する地域を守ってほしいと思います。そして世界各地の被災地にも心を寄せていただければ幸いです。がんばろうNIPPON。



公益社団法人 日本青年会議所 2012年 第61代会頭

井川 直樹氏

愛媛パッケージ株式会社 代表取締役

変わらないために変わる。 新たな未来を描くために

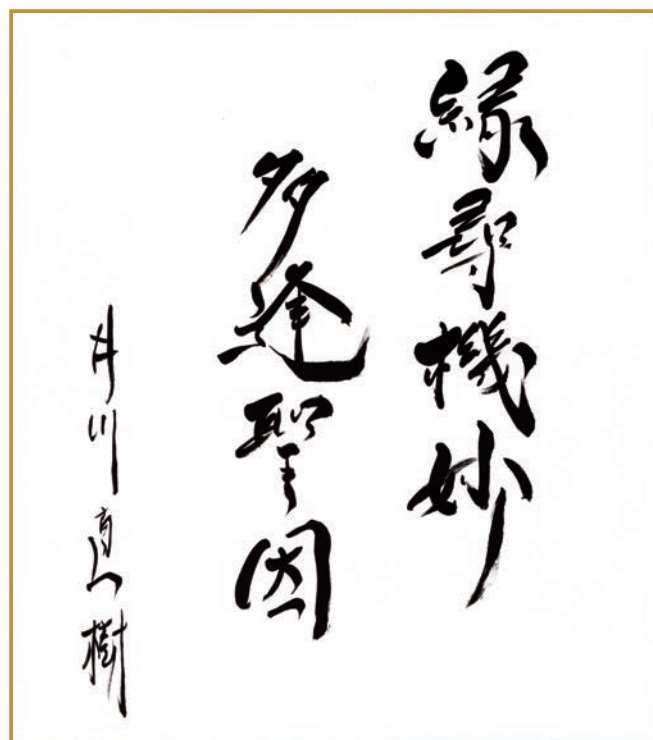
「青年会議所しか無かった時代から今は青年会議所もある時代になった」

私が青年会議所に入会して、その素晴らしさや魅力に気づき始めたころ、その様に話す先輩の言葉を耳にし、その言葉に強烈な違和感を覚えた。私は青年会議所の創始の精神を学び、用意されている様々な機会に向き合うなかで、素晴らしい先輩、同輩、後輩に出会い、刺激され、積極的な意識変革の機会こそが青年会議所の存立意義であるとの確信に至り、掴める機会は全て掴むことで青年期を駆け抜けた。

青年会議所は今、社会の構造と環境の変化により、70年の歴史の中でも最も厳しい存続の危機に直面している。会員数の減少に歯止めがかからないばかりか、平均在籍年数の短期化等により、青年会議所に用意されている多くの意識変革の機会にも恵まれず、その結果、自らの組織の存立意義すら希薄になってしまっている。

ないだろうか。さらに、国家青年会議所として果たすべき役割と住み暮らす地域における青年会議所の役割、それぞれの目的がしっかりと整理できているだろうか。これは決して批判ではなく、青年会議所が幾多とある青年の団体とは一線を画した唯一無二の団体として、存立し続けるための問題意識の共有である。運動や事業は、時代によって変化すれども、組織としてのプリンシプルは変わらないはずである。私たちは、謙虚に自分たちを見つめ直し、本気の気概で守るべきものは守り、変えるべきものは変えていく積極的な自己変革に取り組むとともに、意識変革の機会を提供する団体として、愚直に歩みを進めるべきではないだろうか。

10年後の日本を考える時に、わが国が抱えている構造的な問題と解決しなければならない課題に加え、一昨年からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、傷んだ社会経済の



修復と財政再建は日本のみならず世界共通の課題であり、10年後にも大きな影響を残していることが予見される。一方でポストコロナ社会に適応した新常态（ニューノーマル）に移行しなければならないという新たな課題により、持続可能な社会への転換に向けてイノベーションが期待される。そんな未来が予見されるからこそ、今の時代を生きる青年に大きな期待が寄せられる。言うまでもなく、日本における青年会議所運動の創始の精神は、時代の必要に応える青年による日本の再建である。今こそ、会員一人ひとりが日本を再構築するとの気概と覚悟をもってその未来と向き合い、高い意識と確かな志によって切磋琢磨し、社会が大きく変化する先頭に立ち、時代の必要に応じていくことが求められているのだ。

結びに、卒業して約10年、50歳を目前にして、未だ到達できていない自分が思い描いていた未来を現実化するために、残りの人生をどの

様に生き、どの様に死んでいくのか？という死生観の中で、あの頃よりも謙虚に、誠意と熱意をもって精進している。

青年の学び舎と呼ばれる「青年会議所」において、幾多の意識変革の機会とかけがえのない仲間に出会えたことは私の人生の財産である。時が流れても、「青年会議所は意識変革の機会を提供することで、参画したそれぞれが人間的に豊かに成長するとともに、プリンシプルをもった義気凛然とした人間形成に資する団体」であってほしいと心から願っている。たった一度だけの与えられた人生、一切の妥協を排してプリンシプルを持って行動し続けることこそが「勇気」であり、「本物」へと昇華する原動力となるのである。守るべきものがあるからこそ変わり続けなければならない。そう強く信じて挑戦し続けるならば、私たちは決して錆びることは無い。変わらないために変わる。未来に向かって挑戦の旅は続く。



公益社団法人 日本青年会議所 2013年 第62代会頭

小畑 宏介氏

株式会社友愛ビルサービス 専務取締役

未来を照らす^{ともし}燈火^びに

今がそうであるように、日本はこれまでも戦争や自然がもたらす災いと闘い、幾度となく困難を乗り越えてきました。そうした先人がいる以上、私たちは諦めるわけにはいきません。

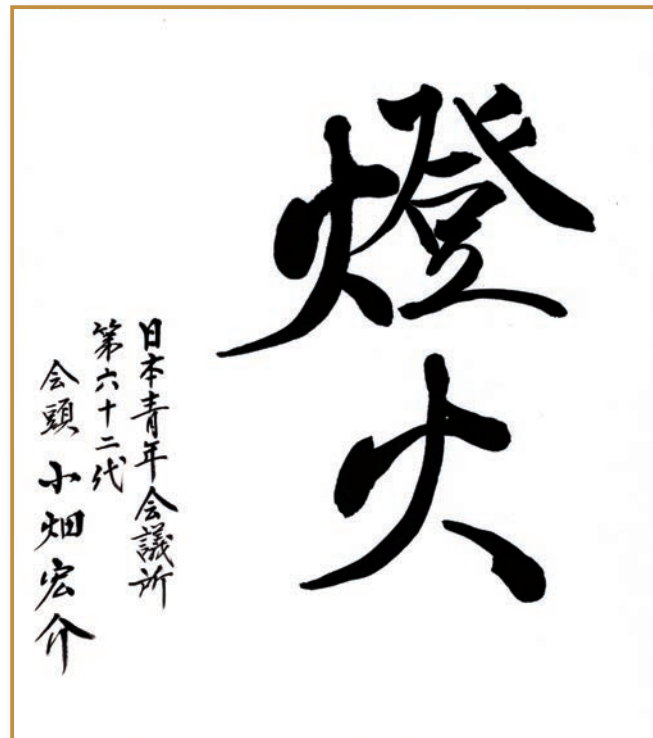
私たちも、如何なる困難にも立ち向かい乗り越えていかななくてはなりません。

今、現役の皆さんにおかれましては、この状況下にあっても未来を力強く描き、日本の希望となり苦難を乗り越えていく、全国の仲間と手を携え青年会議所の使命を果たしていくという試練の渦中にあると思います。

青年会議所の始まりを辿ってみます。戦後の焼け野原から、日本を再建するという志をもって青年たちが立ち上がりました。それが青年会議所の誕生であり出発です。戦後の混乱期、先行きの見えない時代に私たちの先輩は、我が国の未来を強く信じることで、自らが暗闇を照らす光となったのです。その運動の灯をともし

た時から、青年会議所は、次の世代のためにと未来への願いを強く込め、我が国、そして全国のそれぞれの地域のあるべき姿を描き続けてきました。その灯りは絶えることなくともされ続け、時代がもたらす困難に今日も創始の志をもって挑み続けてきました。

もう一つ、青年会議所が今日までの世の中に果たしてきた役割を考えてみます。青年会議所は「明るい豊かな社会」を創り上げようと、自らがその社会の一員として「明るい豊かな人間」になるために、運動や事業を通じて研鑽、修練を積み、学び得たことを行動で表現しながらそれぞれが互いに切磋琢磨している場、「明るい豊かな人間」への陶冶を目指す、つまり「人づくり」の場であります。そして、卒業してから世の中の役に立てる人材を社会に輩出する役割を果たし続けてきました。青年会議所は運動体であり、運動とは「人々の意識を変えること」と



定義づけると、組織がそうであるように、個人においても運動を起こせるよう40歳まで学ぶのが青年会議所であるとも言えます。ですから自分が誰かに最良の変化を及ぼす、自分の発した一言が誰かの心を前向きに変えていく、意識を変えていく可能性を信じてほしいと思います。そして、この学びにおいて何よりも大切なことは、そばにいる人を変えることから社会は少しずつ動き始めると知ることです。大きな変化はいきなり訪れません。どんなに苦しい時代にあっても社会とは自分自身であり、大切な家族や会社、かけがえのない友人といった自分の身の回りのコミュニティーのことなのです。まず、自分を変えること、そして、自分が身を置く小さな社会を変えることから始めることが、世界を変えることにつながる。水面に小石を投げた時のように幾重にも輪が広がるように世界が少しずつ動きはじめるような、空間軸を超えていく可

能性を信じてほしいと思います。その可能性を信じる会員がたくさんいる組織こそ、自らが光となる青年会議所だと思うのです。

「青年」は自らを信じなくてはなりません。混沌、閉塞感という暗闇の中で、自らの可能性を見失ってもいけません。青年会議所が未来を力強く描く限り、その希望が消えることはないのですから。青年は挑戦し開花します。いつの時代も、日本とそれぞれの地域の未来を照らす燈火であってほしいと思います。

「一燈を掲げて暗夜を行く。暗夜を憂うことなかれ、ただ一燈に頼め」 佐藤一斎

その一燈が青年会議所だと確信しています。



公益社団法人 日本青年会議所 2014年 第63代会頭

鈴木 和也氏

株式会社オーフ 代表取締役 CEO

一つひとつ積み重ねるそのすべての 経験を、自身の成長へつなげよう

「2014年、新成人を対象とした意識調査アンケートにおいて『日本の未来は明るい』と回答した新成人は44%と、前年の調査に比べ22ポイントも大幅に増加した。この国の未来に期待する回答が多く得られたという調査結果となった。また、2013年9月8日早朝、2020年オリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決定し、日本の輝かしい未来に向けての希望が生まれた」。

これは私が会頭という重責を拝命した2014年、京都會議での年頭あいさつにおいて引用したデータです。長引く経済低迷、東日本大震災からの復興に向けて歩む現状に多くの国民が希望を抱き、世界中の人々が日本に注目し訪れる、そんな活気ある日本が目前にあると発信させていただきました。

あれから7年、2020年の幕開けとともに新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい、国民

一人ひとりの生活は一変しました。経済活動もストップし、多くのイベントの延期や中止、そして東京オリンピック・パラリンピック2020までも延期となり、私たちは今もなおコロナ禍での生活を強いられています。数年前に描いた未来が一変するという、歴史の中でも大きな岐路に今立たされています。

数か月先、数年先がどのように変化するか分からない現在において、未来を描くことは大変難しい状況だと感じています。このような状況下だからこそ、過去を検証し、過去から学び今の立ち位置を明確にすることで、これからどうなっていくのか、どうしていきたいのかを考える節目の年にしていただきたいと願っています。

先人たちは何を大切にし、必要としてきたのか。未来の子どもたちのために何を変えていくべきなのか。様々なものが見えてくると思います。



青年会議所は多様な価値観をもち、かつ見識の高いメンバーが集っている団体で、常識にとられない新しい発想が生み出される強みがあります。その組織力を活かし、若さを活かし、行動力を活かし、この岐路に立った日本、さらには世界を導いていける団体であると私は確信しています。

日本JCは、自己の成長と世界の発展のために、物事を多種多様な価値観、多面的な視点で捉えることのできる人材へと成長できる場です。大きなフィールドであなたの力を存分に発揮してほしいと強く願っています。日本JC本会・各協議会には、出向するメンバー一人ひとりが必ず成長する契機となるよう組織を運営していただきたい。役職を担うものは、次なる人材を育てることを忘れず、全国各地の次代のリーダーを発掘し育ててほしいと考えます。

そして何より、すべての活動・運営は各地会

員会議所やメンバーのためであることを忘れてないでほしい。青年の運動は間違いなく各地会員会議所が原動力であり、日本JCには全国の地域が抱える課題に対して、協働して取り組むべき課題を抽出し応援していただきたい。

そして、全国の会員会議所の強固なネットワークを活かした運動をこれまで以上に力強く押し進めてほしい。青年経済人の声を頼りに、組織力を活かし社会にインパクトを与える「本気の市民意識変革運動」を展開するために、LOMと共鳴する団体であり続けてほしいと心から願っています。

これからの青年の運動に期待しています。



公益社団法人 日本青年会議所 2015年 第64代会頭

柴田 剛介氏

グランファルマ株式会社 代表取締役

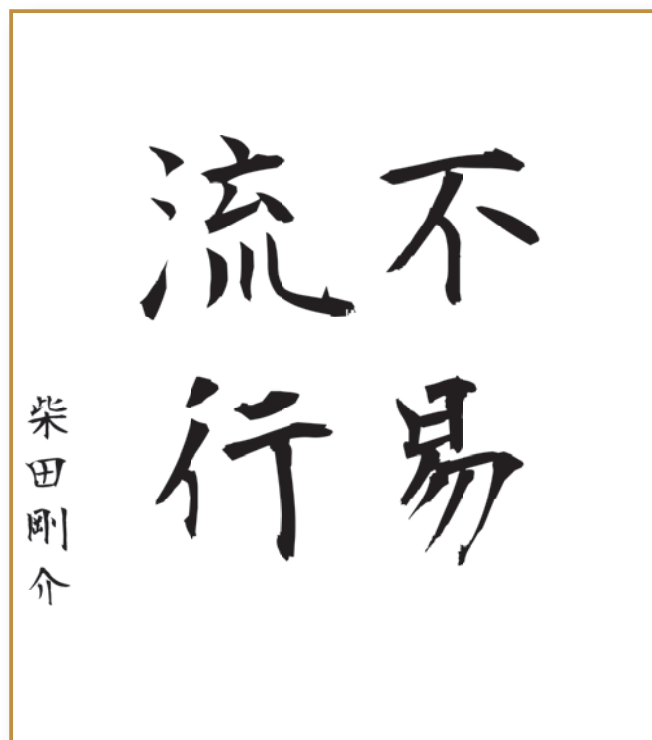
レジリエンスを考える

近年「レジリエンス」という言葉をよく耳にします。「回復する能力」を意味するこの言葉は、テロや自然災害、感染症蔓延など社会全体が経験した危機から少しずつ回復し、更にこれまで以上に強くなる課程で世界中で活用されている言葉ではありますが、実際日本ではどうでしょうか？ 過去10年を振り返ってみても、幾多の自然災害に見舞われた日本は、未だ仮設住宅で暮らす方や止む無く故郷から離れた場所で不自由な生活を送っている方が存在します。その多くは回復を待ち望む状態が続いており、日本全体がレジリエンスを実感するにはもう少し時間が掛かりそうです。

しかし一方では、そんな日本を勇気づける若者を目にする機会が増えてきました。特に20代のプロスポーツ選手の活躍が世界を席巻していることに驚かされます。彼らは様々な競技で世界を代表する選手となり、その言動が世間に大

きなインパクトを与えていることは、我々日本人にとって誇りでもあります。更には終身雇用という神話が崩壊した今、起業する若者が増えていると聞きます。DX(デジタルトランスフォーメーション)等の後押しもあり、卓越した行動力と先駆的な創造力で自分のアイデアを様々な形で具現化できるようになったことがその理由なのでしょう。そのような若者たちには、産業構造の変化だけではなく、世界を取り巻く課題を解決へと導いてくれると期待してやみませんし、本当の意味での日本のレジリエンスは、彼らの台頭であり、今がそのターニングポイントなのかもしれません。

このような背景を鑑みると、若者たちが更に活躍できる環境を整えることが不可欠であり、そのためには人種や民族に対する人権について自分事として考える段階に入ってきたと感じています。例えば、日本人女性のプロテニス選手



が全米オープンで優勝した時、多くの日本人は彼女を日本人代表として称賛しましたが、BLM運動支持を表明した瞬間、まるで日本人ではないかのように距離を置きました。今から一世紀前の1921年には、心理学者ユングが「内向型」「外向型」という言葉を軸にした性格理論を世間に知らしめましたが、時代が変わり多様性を認める現代社会においては、表現の自由と平衡して、少数派へのいわれなき差別やヘイトへの議論は避けては通れません。

青年会議所という組織は、人によって受け止め方に違いがあり、様々な価値観が混在します。青年会議所に入会していない人でも、この組織に対して熱弁を振るうことができるのは世間への浸透度と寛容度の高さを物語っています。また、年代によってその味わいが違ってくるのも階層の重厚さを示しており、ある意味日本の伝統工芸品のような組織でもあります。そんな組織

だからこそ、先に示した新たな課題に挑戦する優位性と潜在力を兼ね備えているのです。

また、JAYCEEとは何かと問われるとその答えは違ってきます。ヘンリー・ギッセンバイヤー Jr. が1915年にムーブメントを起こし、その一人の青年の志が世界中にJAYCEEを誕生させました。今でも世界中でJCIクリードが唱和され、同じ志を有しています。これは日本においても何も変わらず、その志は不変であり、改めてそのクリードに刻まれた志に真摯に向き合っていただきたいと思います。その覚悟さえあれば、青年会議所という組織は形や規模を変えながらも未来永劫存続するからです。

時代を映し出す鏡として、そして本質を理解する青年として、議論の中心で旋風を起こし日本のレジリエンスを賦活させる、そんな存在であり続けることを切望します。



公益社団法人 日本青年会議所 2016年 第65代会頭

山本 樹育氏

YAMAKIN株式会社 代表取締役社長

パラダイムシフトと アウフヘーベン

世界では、行き過ぎたグローバリズムと投機マネーの暴走という濁流が渦巻き、資本主義ひいては民主主義の秩序にさえも懐疑の目が向けられつつあり、大国の自国第一主義と覇権争いがその動きに拍車をかけています。そんな中起こった新型コロナウイルスの世界的なパンデミック。

日本においても、感染症対策に加え、少子化、高齢化、人口減少、財政問題、自然災害、エネルギー問題に継続して取り組んでいかなければなりません。私たちは、時を同じくして降りかかってきた世界的・国家的課題に取り組む新時代への岐路に立っているのです。

そんな中、我々はパラダイムシフトを起こしました。目に見えるものから目に見えないものに価値を見出すパラダイムシフト。幸せの本質はこれまでの日常にこそあったというパラダイムシフト。世の中には当たり前モノなどなく、自分たちで守り築き上げていかなければならないというパ

ラダイムシフト。

矛盾し、対立している二つの問題に直面したとき、一方が正しいと考え、一方を否定するのではなく、その矛盾をアウフヘーベンしなければなりません。対立したものを共に包含し、統合し、超越することによって、より高い次元に向かわせるのです。

課題先進国である日本。日本はそれぞれの地域で成り立っています。現場はそれぞれの地域にあり、そのカギを握るのは地域の企業です。

地域の企業がこれを実践することが日本の再興に直結しています。地域の企業経営者こそがこの国の未来を担っているのです。道徳と経済、社会貢献と利益追求、企業がこのアウフヘーベンを起こしていなければならないのです。

そのために、まずは足元を見つめ、それぞれの地域にある資源に目を向けることが必要とされます。都市部と地方に拠点を持ち、企業活動



をしている私は、優秀な人材の確保、行政とのコミュニケーション、産学官の連携は、地方の方が優位にスピード感を持って行うことができると確信しています。

地方の優位性を活かして、独立自尊を果たしながらさらに公に貢献している企業が地域に多く存在している。独自に資本主義を進化させ、世界に貢献している。それが10年後の日本の姿です。

各課題に特化した社会起業家やNPOなども多く生まれ、企業もCSRやSDGsなどに当たり前に取り組む時代となりました。さらに、社会的課題が複雑化しています。

今後は、青年会議所においても、課題解決のための仕組みづくりが必要とされてきます。そこに、「経済」という持続可能性を組み込むことが重要だと考えます。そして、課題解決のための社会実験を繰り返し行うことができるのが青

年会議所です。そのような先進的で面白い運動を構築し、成功事例をロールモデルとして日本全国に広める役割が日本JCには求められます。最強のプロボノ集団であるネットワークももっと利用すべきです。

日本の課題は地域という現場にあります。我々は、現場で課題に向き合い、愚直に前に進んでいくことしかできません。しかし、これは、自らは独立して生計を立てながらさらに公に貢献しようとするJAYCEEにしかできないことであり、JAYCEEがやらなければならないことです。

何時の時代にも、世の中を変えてきたのはたった一人の想いと行動です。個の意識の変革は、地道な教育と強烈な原体験によってもたらされます。JCはその両方を与えてくれます。

常に世の中を変える運動を行い、リーダーを生み出している。そんな組織であり続けてほしいと思います。



公益社団法人 日本青年会議所 2017年 第66代会頭

青木 照護氏

株式会社ノーリツイス 代表取締役社長

政治を動かし、 社会を変える!!

JCとは、20歳から40歳までの青年に与えられた道具です。道具は使うものであって決して道具に使われてはなりません。JCという道具を使いこなすために必要なことは唯一つ。目的意識を持つことです。目的なきままJCに関われば、時間とお金と労力ばかり奪われて何も残りません。しかし、目的さえ持っていれば、自分づくり、まちづくり、国づくり、JCは何にでも役に立つ万能の道具となります。

「あなたは何のためにJCをやっていますか?」現役の皆さんに問いかけると明確な答えを返してくれる方はごく僅かです。新入会員ならば致し方ないと思いますが、数年間JCに所属し、副委員長として、委員長として、理事として、大なり小なりJCという道具を預かった経験のある方に答えがないのは大変残念なことです。かく云う私も入会当初から明確な目的をもっていただけではありません。昨年度よりも少しだけ重い役

割を担おうという好奇心だけで毎年取り組んできました。しかし、その道程で出逢う豪傑の方々に感化され、日本JCという大海でそのスケールの大きさを感じながら、少しずつ高く、明確にJCの目的が見えてきたというのが実感です。

JCを最も切れ味鋭く使うための究極の目的。それは社会変革です。社会を変革するアプローチは様々ありますが、JCを使えば最短距離で最も強力にアプローチすることが可能です。つまり、政治を動かすという方法です。市民、県民、国民の代表者が、行政と相談しながら法整備や予算執行を決定していくのが日本の政治体制ですが、この仕組みは国民の声によって動き出します。ただし、たった一人で声を挙げてもなかなか政治に届くものではありません。そこでJCを使うのです。地域や国家の課題解決の政策を立案し、事業や例会を通して国民に信を問い、必要に応じて政策をブラッシュアップし



ていく。このPDCAサイクルを回しながら、集めた市民、県民、国民の声を政治に届けさえすれば良いのです。民の声つまり輿論が集まれば必ず政治は動き、社会は変わっていきます。この一連の活動こそが、JCにしかできない「運動」そのものなのです。

JCの使い方さえ理解できれば、これほど有益で魅力的な団体は他にはないという期待が膨らんでいきます。この期待感をそのままJCの入会候補者に伝えることが、会員減少の解決策だと私は感じています。なにしろ、国民の声を政治に届け、政治を動かし、社会を変えることのできる「政動社変」の団体はJCしかないのですから！

そこで現役の皆さんに期待するのは、やはり経済です。経済といってもお金儲けのことではありません。経済とは「世を経め、民を濟う」という「経世済民」の略語であり、「国民を豊か

にする」という意味です。日本経済は1998年以降デフレーションに突入し、2021年現在もそれは続いています。そして、東京圏一極集中、少子化、安全保障、格差拡大などの国家的課題は全てデフレに起因しています。国民が豊かになり気持ちに余裕があれば憲法改正論議だってもう少し前に進んでいるはずですが、デフレ脱却に向け、国民が声を挙げ政府を後押しすれば、さらなる財政出動も可能になるのです。今こそJCがデフレ脱却の必要性を訴え、国民輿論を政治に届けることで、誰もが夢を描ける日本へと導いていかなければなりません。

今という一瞬は二度とやってこない。自分という人間は一人しか存在しない。全てが一期一会です。「今しかできないことがある、自分にしかできないことがある、だから今自分がやるんだ」という「一期一会」の覚悟をもって共に保守経済を貫いて参りましょう。



公益社団法人 日本青年会議所 2018年 第67代会頭

池田 祥護氏

株式会社 NSG ホールディングス 代表取締役

万物に感謝の心を以て、 公に誠を尽くそう。

長期化するコロナ禍は、人類社会にかつて経験したことの無いほどの負の影響をもたらし、未だ先が見えない状況の中、不安と焦燥を感じています。そんな状況においても、会員相互で同じ志を共有するとともに、今できる最善を追求し続ける現役の皆様には、心からの敬意を表します。

思えば2011年の東日本大震災をはじめ、私たちが取り組むべき社会課題は山積しています。根源的な問題を簡単に解決できた事象などひとつもありません。課題に取り組む一人ひとりが、不平不満や出来ない理由を並べたてるのではなく、状況に応じた最適解を模索し、懸命な選択をして行動に移してきたからこそ、乗り越えていくことができたのです。青年会議所が思考停止せず行動し続ける団体である限り、コロナ禍も、そして未来に待ち受ける様々な困難も必ず乗り越えていけると、私は信じています。

感謝。卒業して3年が経ちました。私は、青年会議所という世界中にネットワークがある奥深い組織に所属し、多くのことを学ぶことができ、心から感謝しています。青年期に1年という有限の時間の中で、与えられた立場において、当事者意識と責任感をもって目の前の社会課題に全力で取り組んだことは、個人に大きな成長を促します。その結果、多様な分野で活躍し、地域の活性化へと繋がっていくのだと思います。しかし、70周年を迎える組織を俯瞰してみると、残念ながら会員の減少に歯止めがかかっていないことに懸念を抱いています。何故なのでしょう。私は、社会に青年会議所の魅力を伝えきれていないことが一因と思います。組織は人で成り立っている以上、私たち一人ひとりの魅力が足りていない、または伝えきれていないとも言えるかもしれません。現役の皆様、青年会議所での学びを活かすとともに、弛まぬ研鑽に



より魅力ある人財へと成長し、地域社会で活躍してください。そうすれば、自ずと青年会議所の魅力が伝わるはずです。

戦後、荒廃した焼け野原の中、日本の未来を憂いた先人が先進的な氣勢と大きな志をもって青年会議所を設立されました。未曾有の危機に立たされている今こそ、あの頃と同じ創始の精神をもって、時代をリードし、社会にインパクトを与え続ける団体であって欲しいと願っています。そして、失敗を恐れず挑戦し続けましょう。英知と勇気と情熱をもって為した真摯な挑戦は、結果の如何にかかわらず、大きな学びが必ずあり、今後の人生に必ず生きていくものだと確信しています。

「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」。天地人で有名なこの一節は、孟子の言葉であり、天の与える好機も地勢の優位がなければ活きず、地勢の有利も人の和がなけれ

ば成就することはなく、人の和は何よりも重要であるということです。人が一人でできることは限られています。しかし、多くの人と信頼関係を結び、志を共有すれば、地域に変化を起こし、世界すら変えることができます。青年会議所に所属していれば、信頼できる同志に必ず出会えるはずです。どのような状況でも他を慮る心や利害関係なく課題に取り組む真摯な姿勢こそが、信頼関係構築につながっていくのだと思います。

結びとなりますが、現役の皆様の益々の御清祥と御多幸を心から祈念いたします。そして、私も一人のJAYCEEとして、堂々と青年会議所で学んだことに誇りをもち、明るい豊かな人生を送れるよう今後も研鑽を積み共に歩んでいければ幸いです。

万物に感謝の心を以て、公に誠を尽くそう。
この時代を生きるすべての人たちのために。



公益社団法人 日本青年会議所 2019年 第68代会頭

鎌田 長明氏

鎌長製衡株式会社 代表取締役社長

長い下り坂を 面白く下っていこう

「みんな夏が来たって浮かれ気分なのに
君は一人さえない顔をしてるネ」

(『夏色』作詞：北川悠仁)

衰退の原因はなんだろう。少子化の原因はなんだろう。

東京でさえも人口減少が始まる2020年代において、私たちは日本全体の「衰退」の二文字から目を背けることはできません。高度経済成長という急坂を登り、平成という名の通り平らかに進んできた日本は、いよいよ本格的な下り坂に差し掛かります。10年後にはアジア諸国が発展して浮かれているのを後目に、私たちは否応なく衰退と直面し、さえない顔を迫られるでしょう。

2019年の京都会議のテーマは「持続不能」でした。日本には持続的に成長する力が無くなってきているのではないかと訴えかける必要を感じたからです。日本の衰退を避けることができなくても、私たち自身が成長することは可能

です。日本がもっとも失ってはならないのは一人ひとりが成長する力なのです。

では、成長する力を磨くには、何が必要なのでしょう。それは、「面白さ」だと私は思います。暇つぶしのお笑いではなく、「目の前がぱっと明るくなる」という意味の「面白さ」です。地方の衰退の原因は若い人ならみんな分かっています。地方は「面白くない」のです。少子化の原因も、男女関係が「面白くなくなった」ことに帰結すると私は思います。

現役の皆さん、JC活動で「目の前がぱっと明るくなる」体験をしていますか。JCはJCIミッションにある通り「成長と発展の機会を与える」組織です。JC活動が「面白い」ものでなければ、「成長と発展の機会」はありえません。各地域から人が集まるJCI日本はなおさら「めっちゃくちゃ面白い」ものでなければなりません。

そして、もし衰退を乗り越えたければ、生物



界の掟では新陳代謝をするしかありません。新陳代謝はmetabolismの訳で、その語源はmeta(超える)とballein(投げる)に由来します。過去のを投げ捨て、超えていく覚悟が必要なのです。JCには卒業と単年度制という素晴らしい新陳代謝の仕組みが既にあります。批判を恐れずに成果を求めましょう。あなたが1年間何をやろうと、JCの70年にわたる歴史はびくともしません。たった1年間で成果を出すことは容易ではありませんが、できた例はたくさんあります。過去の過ちから学び、限られた時間の中で成果を出していくために皆で知恵を絞るのです。過去の事業で培われた実績と人材とパートナーシップは新たな成果の役に立つはずです。それは昨日今日できた組織にはないものです。JCという巨人の肩の上に立ち、遠くを眺める体験をしてみてください。

JCI日本はNOMであって、LOMではありません

せん。単体の力は限られていますが、全国のLOMの力を合わせることができれば非常に強力です。2019年にSDGsという枠組みで全国のJC活動を統合したところ、総事業数約2100件、総事業費約30億円、総動員数推定200万人と当時日本で最もSDGsを推進している団体であると言っても過言ではない結果となりました。この膨大なパワーがどの方向に向かうのかは、日本の未来にとって重要なはずです。

自転車で下り坂を一気に下れば危険なだけですが、ブレーキをしっかり握ってゆっくり下ればまんざら悪いものではありません。衰退の寂しさを乗り越え、「面白さ」を感じて一人ひとりが成長していく、寛容で多様な社会は実現可能だと思います。まっすぐ前を見て進んでいきましょう。

「この長い長い下り坂を 君を自転車の後ろに載せて ブレーキいっぱい握りしめて ゆっくりゆっくり下ってく」(『夏色』)



公益社団法人 日本青年会議所 2020年 第69代会頭

石田 全史氏

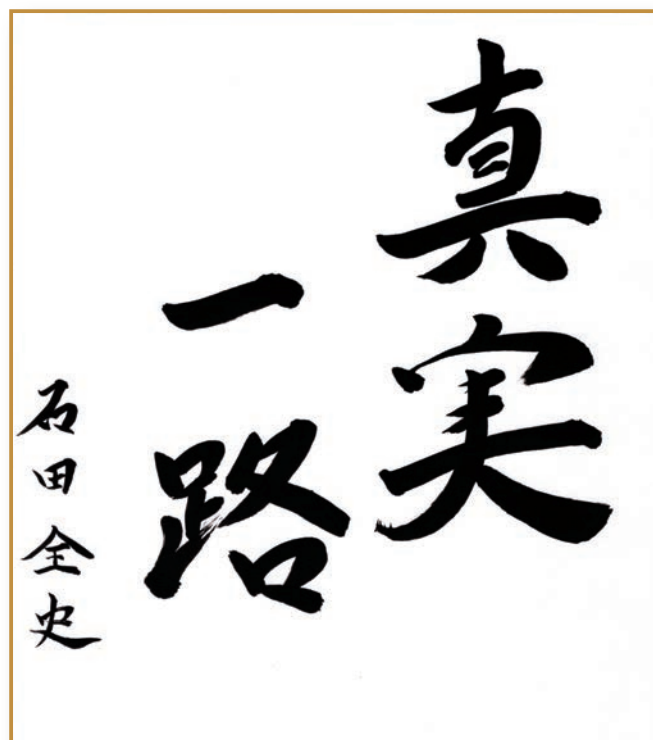
株式会社双葉不動産 代表取締役社長

努力と挑戦の連続の先に、必ず奇跡は起きる！

1 993年、日本の青年会議所の期首会員数は67,309人。1998年、戦後最悪の経済不況に陥った翌1999年、国内の中規模・小規模事業者の数は約483万社、2008年、リーマンショックの後、約418万社、現在では約330万社まで減少しました。2000年、20代から39歳までの人口は約3,500万人、2020年では、約2,600万人と高齢化が進んでいます。出生数を見れば、私が生まれた1980年には、157万人を超えていました。しかし2020年度の出生数は、約87万人と過去最低を更新。そして現在の会員数は26,432人に至ります。このような状況下でも、全国各地の会員会議所は、日夜新規会員の獲得に向けて努力を続けています。青年会議所は、運動があるからこそ、共に活動する仲間が必要です。あらゆる機会の中で、その役目に真摯に向き合い、如何なることにも挑戦するからこそ、成長という果実を掴み取ることができ

ます。この組織の魅力や可能性を目に見える形で社会に示すことで、組織の存在価値は高まり、共感する仲間が集まるという持続可能な組織への回帰が必要であり、2020年は政策・運動・運営に関する組織改革に挑戦してきました。そして我々の組織の役割を明確に表現し、運動の方向性を示したJ C宣言文改訂にご理解をいただき採択されました。

日本に青年会議所が設立された1949年、中華人民共和国の建国した年でもあり、我が国のこれからの政治・経済体制が混迷を極める中、将来に対して不安を抱えていたのではないのでしょうか。敗戦によって焼け野原となり、人々が苦難に満ちていた頃、自分の家族を、商売を、まちを、なんとかしなくてはならない、その熱意のもとに仲間が集い、この組織は誕生しました。「新日本の再建は、我々青年の仕事である」という志を立て、国内経済の充実と国際経済との密



接なる提携であると組織の運動の方向性を示しています。そして相互の啓発と社会への奉仕を通じて、全世界の青年と提携し、経済社会の現状を研究して進むべき方向性を明確にし、経済界の強力な推進力となり、日本経済の発展に寄与すると明記されています。その当時設立されていた会員会議所の主導により、全国的な組織と連絡調整機関の確立、国際青年会議所への加盟を目的として、日本青年会議所が設立されました。その志は、全国各地に地域を愛する青年経済人の組織として自然発生的に広まったのです。この青年会議所という組織の主体は、地域つまり会員会議所に他なりません。上記に記された日本経済の発展とは、会員とその身近な方々の経済的、且つ心身の豊かさ、会員の社業の成長・発展とそこに働く方々の生きがいの実現こそ、地域の活力となり、それぞれの地域経済が潤うことであると私は捉えています。

近年では、経済格差による貧困、大規模の自然災害への対応、感染症に関する対策、諸外国との往来の規制など、如何なる時代でも課題は尽きないものです。世の中が、どのような時代に変化するのかをただ待つよりも、先輩方のように、どのような時代にしたいのかを青年の視点で、未来のために汗を流し真正面から解決に向けて挑戦する組織であり続けて欲しいと願っています。さらには青年会議所のさまざまな機会を通じて、経済・政治・行政・文化・教育など、あらゆる分野で活躍する人財を一人でも多く輩出する組織へとさらなる発展を遂げることと、40歳までの限られた貴重な青年期、もっとしたたかに、全てのことに意味があると信じて、全力で職務を全うされますことを期待しています。

一人ひとりの努力と挑戦の連続の先に、必ずより良い変化「奇跡」が起こると私は信じています。



© 蛭川実花

お
ち
あ
い
落
合
陽
一
い
ち

メ
デ
ィ
ア
ア
ー
テ
ィ
ス
ト

分散化・孤立する社会へ対抗するため 「祝祭」の力の積極活用を

サマーコンファレンス等のイベントに参加する機会をいただき、JCの皆様は若くパワーがあり、地域に根付き横のネットワークを大切にされている印象を受けました。連綿と受け継がれている伝統が、実際に現役で機能している組織であることに大きな強みがあると思っています。個人的にも「ローカルの経済をどのように回していくか」という点に高い関心があるので大いに学ぶところがあります。ローカルで戦う際、大切なのはなんといっても横のつながりです。地域を盛り上げるには地域全体でその課題に向け取り組まなければならない、それは会員の皆様がいちばん良く知り、また普段から実践されていることだと思います。

COVID-19の流行により、大都市に一極集中する「密集の社会」から「分散の社会」へと移行する過渡期に我々は直面しています。今後ますます生活スタイルの多様化は進み、必要とされるモノ・情報は細分化されていく。タワマン暮らしがステータスだった2000年代から、「地方で自分らしく暮らし、地域貢献しつつ家族と自然を愛でながら生活する」ことに価値を見出す人も多くなっている。多様性を認め合う、まさにSDGsの理念に沿った社会が目前に広がっていると感じます。

ただ、分散により失われていくものにも目を向ける必要があります。その最たるものの一つが、「コンヴィヴィアリティ」(conviviality, 「自立共生」)です。これは思想家イヴァン・イリイチ(1926-2002)が唱えた概念で、人がその置かれた環境のなか、他者と交わるなかで自分本来の自由を享受できる状態になること、簡単にいえば皆がワイワイ楽しく、生き生きとしている社会状態を表します。「たとえ生産性が上がっても、コンヴィヴィアリティが落ちると社会を形成する欲求が起こらない」という指摘もあるように、どんなにリモートワークの環境が整えられても、人は社会への帰属意識、他者との結びつきを実感できなければ、満足感を得ることはできません。たとえば一斉休校により運動会や文化祭が中止され、そこで生まれたはずの結びつきが弱くなってしまった。もちろん大人も同様です。他者との関わりを積極的に持ちづらい現状が続くと、社会の一員として役割を為さなければならないという考え方が希薄になってしまいます。

その対抗手段として最も効果的なのは、コミュニティを維持する伝統的なお祭りなどのイベントと考えます。集団に社会帰属性をもたらす、人類の生み出したプリミティブな装置としての「儀礼、祝祭」。東日本大震災後もお祭りは学術的にも注目されました。地域の有志が集まり、花火を上げたり地域の祭りを復活させたりといったコミュニティデザインが、分散型社会への一途を辿る今後の日本において、改めて大きな意味を持つのではないのでしょうか。

青年会議所が果たすべき役割はまさしくそこにあると考えます。地域に根差し地域を盛り上げ、横のつながりにより多くの力を結集すること。日本各地で同世代による活躍が見られることを楽しみにしています。



小巻亜矢

株式会社サンリオオエンターテイメント代表取締役社長

「ジェンダー平等」の実現に向け 日本社会に一石を投じる活動を

創立70周年、心よりお祝い申し上げます。

JCの国内外におけるネットワーク力は素晴らしいと常々思っています。会員の一人ひとりが自らの役割をよく理解し、そのフィールドで実績を残すべくまい進し、実際に多くの実績を残しておられる。皆さまの多くは代々続く家業の経営者で、また一家の大黒柱世代ですから、なおさら何かを成し遂げようという強い責任感と気概が生まれるのだと思います。

先日、世界経済フォーラムから発表された、世界各国における男女格差を測る指数「ジェンダーギャップ指数2021」において、日本の総合スコアは0.656、順位は156か国中120位でした(内閣府広報誌『共同参画』より)。JCの女性会員の比率は全体の9%と伺いました。これは国会の男女比率とほぼ同数です。SDGsの掲げる目標「ジェンダー平等を実現しよう」の実現のためにも、もっと女性の活躍する場をつくっていく喫緊の必要性に迫られていると言えるでしょう。

サンリオピューロランドでは、若い女性社員が活躍できる環境を整えようと努力し続けています。メインターゲット層と同じ若い女性社員が活き活きと働ける環境でなければ、顧客満足は実現できませんから。ですが管理職となると女性の数はぐっと減るのが眼前の課題です。結婚・出産でいったんキャリアをリセットする・せざるを得ないケースが多いからです。その社会構造を変えるには時間がかかりますが、一企業のできることで、ジェンダーに関わらず個々の適正能力に見合った役職を与える、産休後の復帰制度を整える、復帰後のキャリアアップにも支障が出ないようにする。そのような当たり前のことをしっかり実行していくことが、ひいては大きな企業利益につながると思っています。

JCの女性会員が少ないのも、現代日本の男性中心社会と同様に構造的問題に因るところが大きいのですが、やみくもに人数集めに走るのではなく、入会後に女性がどんな役割を果たし活躍できるか、ビジョンを示す必要があると思います。そのためには何よりディスカッションを行なうべきです。先輩が培ってきた70年の歴史と伝統は引き継ぎつつ、今後のJCの存在意義を真剣に考え議論し合い、JCの果たすべきミッション、それを遂行するためには女性の力が必要だと皆が得心して同じベクトルに向かっていくことができれば、次の80、90周年に向けた新たなビジョンが見えてくるのではないのでしょうか。

皆さんは一人ひとりが家族・地域・家業を背負っているわけで、その視点からジェンダーについて意見を出し合ってほしいと思います。「日本の男性社会の縮図」というイメージのあるJCが率先して女性活躍の場を創出することは、社会全体に大きな一石を投じることになる。私はその影響力に期待します。



三浦 瑠麗

国際政治学者

意識改革を促すリーダーとして、 個人の「当事者意識」を どう育てていくか

日本青年会議所(JC)は、国内に存在する中間団体の中でもとりわけ、所属する一人ひとりが独立した看板を背負っている印象を受けます。早くから社会的責任を負うことで同世代より社会意識も高くなり、社会課題に対して先見的な問題意識を持っている方が多い。また一方、JCほど年代の縛りがある中間団体は稀で、その同質性も際立っており、横のつながりがこれほど重視される組織も少ないと思います。欧米とは違い、日本社会でエリートを自認するのはやりづらく、批判も受けやすい。その責任を正面から背負う活動を続けるJCは、大変ユニークかつ稀有な団体と言えるでしょう。

アフターコロナの国際社会は、中国との競争がポイントになります。ただ、中国に通常のビジネス手法で経済的勝機を見出すのは難しく、日本としてはクリーンさやフェアネス、SDGsとの親和性などの面で国際的な立ち位置を確保しつつ、インドなどアジア各国の成長を促し、「中国一辺倒でないアジア」を成立させるのが今後10年間の大きな目標になります。

経済力のみならず、アメリカありきの自衛力しか持たない我々は、中国と比べるとはや小国なのだとまず自覚する必要があります。社会サイズは縮小の一途をたどるなか、このままでは子世代が健康で文化的、安全で豊かな生活を送ることが望めなくなってしまう。親世代の我々にとって、それは大いに危機感をもつべきことだと思います。日本国民は、「当事者意識」が低すぎるのです。人任せで国が成り立っていたのは単に運が良かっただけで、今後状況は一変します。

そこに今回のコロナショックです。自国の対応の不味さや機能不全を目の当たりにした我々が味わっているのは、終戦時と同様の敗北感のようなものかもしれません。言葉を選ばずに言えば、このような「敗戦の疑似経験」が、人々がより自分ごととして、国の行く末に危機感を持つきっかけにつながればと思います。

現在の国民感情としては、政治への不満、不信感は高まっており、中でも「エリートに対する不信感」は根強いといえます。メディアも大企業も官僚も政治家も信頼できない、とはいえ自分で責務を引き受けるつもりはない。そんな中で、当事者意識をもった有権者をどう育てていくかが大きな課題であり、それはJCに限らず、我々世代の責務であると思います。

まさにこれからは、社会課題の解決に対し、ダイレクトに影響力を持ちうることを率先すべきだと思います。狭い世界での短期的な視点でなく、中長期的に、将来世代に対する投資という視点を示せる役割が必要です。意識変革を促すリーダーであると同時に、なおかつ一市民としての感覚も忘れない。今の日本社会の中でそのコアの役割を担える団体は、JCをおいて他にないのではないのでしょうか。



やすだ
安田
クリスティーナ

マイクロソフト・コーポレーション所属
NGOディレクター／「MyData Global」理事

若者に寄り添い頼られ、 地域と共に悩み考え抜く 「パイオニア」に

「地域に根付き、地域から頼られる団体」というのが、私の抱いているJC像です。

具体例を挙げると、コロナ禍で修学旅行に行けなかった市内の小学生(保護者含む)のため、ある地域のJCが主導し、オーストラリアのJCIイースタンのメンバーとアボリジニアートのアーティストとオンラインで触れ合うプロジェクトが行なわれたと聞きました。このご時勢のなか、海外の同世代とコミュニケーションした経験は、小学生たちにとってかけがえのない思い出となったことでしょう。これはJCの強みである人脈と実行力あつてのことだと思います。ただ、その活動内容や存在が、一般の若者にまで浸透してない点は今後の課題かと思っています。

私は今、これまでの途上国支援活動等を通じて、貧富の格差拡大、気候変動への対応、脆弱なサイバーセキュリティ対策など、世界が抱える地球規模の大きな課題をひしひしと実感しています。それに今後日本がどう関わり、どういう役割を果たしていけるでしょうか。日本人には「勤勉」という強みがありますが自己表現が苦手な人も多く、以前参加したとある国際的な会議では、誰よりも万全に準備していた日本人参加者が、ほとんど発言しなかった場面を見たことがあります。私が通っていたパリ政治学院は世界各地から生徒が集まり、政治的な話題もタブーとせず、自分の意見を言い合うのが日常でしたので、もどかしさを感じることもあります。

もちろん日本人には日本人の良さがあり、すべてを欧米に倣う必要はありませんが、世界で活動するにはそれだけでは足りません。今後世界が求める日本人の育成という点において、JCにも一役買っていただきたいと思っています。

JCは構造として各々の地域に裁量が与えられ、比較的自由度が高いとお聞きします。そうした強みを生かして、たとえば未来を担う若者が自由に集える「セーフスペース」的な役割を担うことはできないでしょうか。アクションを起こしたいものの、学校や家庭では実現しにくいと考える若者のための受け皿になるのです。「相談に乗ってもらえる」「誰かを紹介してもらえる」「資金調達を手伝ってもらえる」という思いを胸に若者がJCの門を叩く。JCに頼ってみよう! と思ってもらえる存在になり、彼らとパートナーシップを築くことができれば、現代日本において、とても先駆的な試みとなるのではないのでしょうか。

気候変動など世界規模の問題はすぐに解決できることではありません。全国700ものLOMがあるJCの皆様には、地域の人々と共に悩み考え、人口減少問題や医療問題など、まずは目の前の課題を一つずつ解決し、地域の魅力を高めていくことに貢献してほしい。他団体や行政、識者の意見に囚われすぎず、常にパイオニアであってほしいと願っています。

ダイヤグラムガイド

JCI日本ヒストリー篇

日本青年会議所 ロゴマークの移り変わり

最初のJCロゴマークの制定は、1951年の日本青年会議所設立よりも前のこと。49年に東京で青年会議所運動が始まり、全国各地へと運動が拡大されていくなか、50年より日本で独自に考案した、統一ロゴマークが制定されたのである。

51年には、JCI世界会議で日本青年会議所のJCIへの正式加盟が決定した。すると、日本青年会議所が独自のJCロゴマークを使用するのは具合が悪くなり、さらに56年に日本が国際連合に加盟したことから、58年、JCIと共通のデザインに改められた。表現しているのは、「日本青年会議所は、国連も認めるJCIの一員である」ということと、「メンバーは、恒久的平和を願い活動を続けている青年たちである」ということ。ロゴに含まれている地球儀は、JCIと国連との関係の深さを表している。第二次世界大戦終結直前、アメリカのJC会員で後の合衆国副大統領となったロックフェラー・ジュニアが国連創設のために約22000坪の土地を寄付するなどして尽力したことから、JCIは国連関係機関以外の世界的NGOで唯一、国連ロゴの使用を許可されたのだ。

JCIにおいて国際情勢の変化やそれに伴う価値観の多様化から、JCIロゴマークのリニューアルが議論され始めた。これを受けて日本青年会議所も、2005年に新JCIロゴマークに変更。また、10年に日本青年会議所が公益社団法人格を取得すると、ロゴにも一部修正が加えられた。



第1期 1950～1958年



第2期 1958～2005年



第3期 2005～2010年



第4期 2010年～現在

世界会議の歴史

開催都市 [開催国]	年
ブリュッセル [ベルギー]	1949
マニラ [フィリピン]	1950
モントリオール [カナダ]	1951
メルボルン [オーストラリア]	1952
サンフランシスコ [アメリカ]	1953
メキシコシティ [メキシコ]	1954
エジンバラ [スコットランド]	1955
ウェリントン [ニュージーランド]	1956
東京 [日本]	1957
ミネアポリス [アメリカ]	1958
リオデジャネイロ [ブラジル]	1959
パリ [フランス]	1960
サンファン [アメリカ]	1961
香港 [中国]	1962
テルアビブ [イスラエル]	1963
オクラホマシティ [アメリカ]	1964
シドニー [オーストラリア]	1965
京都 [日本]	1966
トロント [カナダ]	1967
マルデルプラタ [アルゼンチン]	1968
ポート・オブ・スペイン [トリニダード・トバゴ]	1969
ダブリン [アイルランド]	1970
ホノルル [アメリカ]	1971
台北 [台湾]	1972
ニース [フランス]	1973
オークランド [アメリカ]	1974
アムステルダム [オランダ]	1975
セントルイス [アメリカ]	1976
ヨハネスブルグ [南アフリカ]	1977
マニラ [フィリピン]	1978
ゴッテンブルグ [スウェーデン]	1979

全国会員大会の歴史

開催地 [主管LOM]
名古屋 [名古屋JC]
富山・函館 [富山JC・函館JC]
京都 [京都JC]
広島 [広島JC]
東京 [東京JC]
福岡 [福岡JC]
仙台 [仙台JC]
高松 [高松JC]
旭川 [旭川JC]
岐阜 [岐阜JC]
金沢 [金沢JC]
岡山 [岡山JC]
横浜 [横浜JC]
神戸 [神戸JC]
広島 [広島JC]
札幌 [札幌JC]
新潟 [新潟JC]
名古屋 [名古屋JC]
長崎 [長崎JC]
甲府 [甲府JC]
宝塚 [宝塚JC]
山口 [山口JC]
松山 [松山JC]
浜松 [浜松JC]
仙台 [仙台JC]
神戸 [神戸JC]
那覇 [那覇JC]

大阪 [日本]	1980	札幌 [札幌JC]
ベルリン [ドイツ]	1981	鹿児島 [鹿児島JC]
ソウル [韓国]	1982	伊勢 [伊勢JC]
台北 [台湾]	1983	秋田 [秋田JC]
モントリオール [カナダ]	1984	千葉 [千葉JC]
カルタヘナ [コロンビア]	1985	広島 [広島JC]
名古屋 [日本]	1986	富山 [富山JC]
アムステルダム [オランダ]	1987	和歌山 [和歌山JC]
シドニー [オーストラリア]	1988	高知 [高知JC]
バーミンガム [イギリス]	1989	福岡 [福岡JC]
サンファン [アメリカ]	1990	豊橋 [豊橋JC]
ヘルシンキ [フィンランド]	1991	東京 [東京JC]
マイアミ [アメリカ]	1992	函館 [函館JC]
香港 [中国]	1993	岡山 [岡山JC]
神戸 [日本]	1994	盛岡 [盛岡JC]
グラスゴー [イギリス]	1995	堺 [堺JC]
釜山(プサン) [韓国]	1996	長野 [長野JC]
ホノルル [アメリカ]	1997	熊本 [熊本JC]
マニラ [フィリピン]	1998	徳島 [徳島JC]
カンヌ [フランス]	1999	山形 [山形JC]
札幌 [日本]	2000	福山 [福山JC]
バルセロナ [スペイン]	2001	大阪 [大阪JC]
ラスベガス [アメリカ]	2002	旭川 [旭川JC]
コペンハーゲン [デンマーク]	2003	福井 [福井JC]
福岡 [日本]	2004	水戸 [水戸JC]
ウィーン [オーストリア]	2005	姫路 [姫路JC]
ソウル [韓国]	2006	郡山 [郡山JC]
アンタルヤ [トルコ]	2007	帯広 [帯広JC]
ニューデリー [インド]	2008	浜松 [浜松JC]
ハマメット [チュニジア]	2009	沖縄那覇 [那覇JC]
大阪 [日本]	2010	小田原・箱根 [小田原JC]
ブリュッセル [ベルギー]	2011	名古屋 [名古屋JC]

台北 [台湾]	2012	北九州 [北九州JC]
リオ・デ・ジャネイロ [ブラジル]	2013	奈良 [奈良JC]
ライブチヒ [ドイツ]	2014	松山 [松山JC]
金沢 [日本]	2015	八戸 [八戸JC]
ケベック [カナダ]	2016	広島 [広島JC]
アムステルダム [オランダ]	2017	埼玉 [埼玉中央JC]
ゴア [インド]	2018	宮崎 [宮崎JC]
タリン [エストニア]	2019	富山 [富山JC]
横浜 [日本] (※COVID-19によりWEB+一部現地開催)	2020	札幌 [JCI札幌] (※COVID-19によりWEB開催)
ヨハネスブルク [南アフリカ]	2021	宇都宮 [JCI宇都宮]

⋮

2002-2020 褒賞受賞

【最優秀賞】「グランプリ」受賞団体一覧

年	部門	受賞LOM	事業名称
▶ 2002	人間力開発部門	北陸信越地区 長野ブロック 佐久JC	信州SAKU音楽祭 佐久ミュージカル「夢さく物語」
▶ 2003	まちづくり部門	北海道地区 道南ブロック 小樽JC	おたるゆきあかりの路
▶ 2004	行政・産業・ 経済関係部門	東海地区 静岡ブロック 沼津JC	狩野川コリドーサイクリング & ウォーキング 2003・2004
▶ 2005	青少年関係部門	東北地区 福島ブロック 郡山JC	こころのサミット
▶ 2006	地域開発部門	北海道地区 北海道ブロック 当別JC	町民劇「石狩川」
▶ 2007	「日本の力」推進部門	中国地区 広島ブロック 広島JC	広島国際平和会議
▶ 2008	「気高き日本」創造部門	関東地区 山梨ブロック 甲府JC	「教育の魂(こころ)」 創造事業(全体事業)
▶ 2009	地域開発部門	関東地区 山梨ブロック 富士五湖JC	富士五湖WISH 伝えよう僕らの未来予想図 ～地域を愛する心～
▶ 2010	教育関係部門	中国地区 岡山ブロック 美作JC	手紙 ～少し未来の私へ～
▶ 2011	OMOIYARI実践部門	関東地区 埼玉ブロック 久喜JC	こどもバザー ～せかいの子どもに愛を～
▶ 2012	国際開発部門	関東地区 埼玉ブロック 熊谷JC	クールシェアくまがや ～エアコン消して涼しいところに集まろう～
▶ 2013	地域開発部門	東海地区 岐阜ブロック 岐阜JC	キッズドリームワークス ☆子どもたちによるファッションショー☆
▶ 2014	地域開発部門	中国地区 広島ブロック 広島JC	ヒロシマ ハート ワン ピース フェスティバル
▶ 2015	WEB・広報活動部門	北海道地区 北海道ブロック 苫小牧JC	苫小牧児童虐待防止市民集会及び 諸団体との協働による政策提言書提出事業
▶ 2016	地域政経活性化部門	北陸信越地区 新潟ブロック 糸魚川JC	白馬VALLEY+糸魚川SEA広域連携事業 糸魚川シーフードシャトルバスプロジェクト
▶ 2017	Peace Project部門	関東地区 埼玉ブロック 久喜JC	「みんなのいえ」プロジェクト
▶ 2018	組織間協働 プロジェクト部門	関東地区 神奈川ブロック 横浜JC	横浜UN SDGs推進プロジェクト ～AQUACTION!～
▶ 2019	地域活性化部門	九州地区 福岡ブロック 山門JC	ひとりのポスト(投稿)でこのまちを変える #1万件ポストプロジェクト
▶ 2020	最優秀LOM地域 社会向上プログラム	九州地区 福岡ブロック つくしJC	5つの心を育む教育の実践運動 ①実践モデル作り 「つくし寺子屋2019in春日市」②教育メソッドによる伝播 「郷土の未来を担う地域教育プログラムつくし寺子屋メソッド」

1997-2020 歴代人間力大賞(旧TOYP)受賞者一覧

年	受賞者名	分野	活動内容	推薦LOM
1997	小川寿美子	医療・福祉	琉球大学医学部医学科助手。JICA「ラオス国公衆衛生プロジェクト」の委託を受け、3年間、保険ボランティアの養成、必須医薬品回転方式の開発等、保健医療に従事、ラオス政府から功労勲三等を授与された。1996年には日本赤十字社のフィリピン・プライマリヘルスケア事業評価を外来コンサルタントとして担当。	那覇 JC
1999	長 有紀枝	国際交流・協力・貢献	国内及び国外(主にユーゴなど)の難民支援と対人地雷撤去・廃絶キャンペーン活動を通じて、対人地雷の恐ろしさやその被害の悲惨さ、そして除去・廃絶の必要性を地道に根気強く訴え続けてきた結果が、小淵首相の対人地雷全面禁止条約締結へと導く。	春日部 JC
2001	岡崎 康司	医療・福祉	「遺伝子資源解析研究チーム」のリーダーとして、ゲノムに関する研究に従事、英ネイチャー紙上や、ホームページ上で、マウス新遺伝子の塩基配列の研究結果を一般公開した。	横浜 JC
2002	加藤 三彦	まちづくり・地域貢献	昭和62年能代工業高校に赴任。3年間コーチを努め、平成2年秋田県立能代工業高校バスケット部監督就任以来13年間で20回もの全国大会優勝を数える。平成10年には前人未到の3年連続三冠王(インターハイ優勝・国体優勝・選抜大会優勝)を達成。毎年、選手がかわる高校のクラブチームを率いてこれだけの全国優勝を遂げることは稀。能代市においては能代工業高校の活躍をたたえ「バスケのまち構想」を展開するに至った。	能代 JC
2003	柴田 崇徳	医療・福祉	1992年に弱冠25歳で史上最年少の工学博士となり、以来、人と共存するロボットの研究に取り組んでいる。2002年には「世界一癒し効果のあるロボット」として「ギネス」に認定され、福祉分野、人道的分野での21世紀型のロボットを開発中。	となみ JC
2005	植松 努	まちづくり・地域貢献	環境に配慮した流体力学を、土木、航空機設計、ハイブリッドロケット開発といった宇宙科学技術開発など、さまざまな分野で活かし、各方面より高く評価され、「夢と希望を与える大人」として活躍。	赤平 JC
2006	駒崎 弘樹	まちづくり・地域貢献	持続可能な新しいビジネスモデルによって病児保育問題を解決し、「誰もが子育てと仕事を両立できる社会」を創ることをスローガンに、東京23区に自分たちで事業を拡大しつつ全国で病児保育を立ち上げたいという方々の起業支援を行ない、病児保育を当たり前のインフラにしていこうことを目指して活動している。	自薦
2007	金城 浩二	環境	沖縄の海を守るためサンゴの移植に取り組む。海洋環境の保全及び地球温暖化の防止を図り、普及啓発活動を通じて環境保護意識の向上を図ることを目的としている。	沖縄 JC
2008	大野 靖之	文化・芸術	自身の歌で愛や命の尊さを伝える。	小田原 JC
2009	中岡 亜希	医療・福祉	病気に対する治療法、治療薬がなく、公の支援態勢・制度もない難病指定されていない希少疾患患者として、すべての希少疾患患者が治療法、治療薬の研究がなされることを強く願う「希少疾患に関する研究機関の設置」を最大の目標に、希少疾患患者の所在、疾患情報、医師や研究の進捗状況などを一元化するためのシステム(SORDシステム)をスタッフらとともに開発し現在稼働中。	京都 JC
2010	渡辺 大樹	国際協力	バングラデシュという異国の地で、ストリートチルドレンという貧困層への社会的援助の仕組みを構築。	東京 JC
2011	田中 千草	国際協力	2007年1月より2年間、カンボジアのマンモス校でJICA青年海外協力隊小学校教諭を務める。任期より3カ月後、現地の声に応える形で個人として無償で再び赴任。ポルポト政権下での大虐殺で教育システムが崩壊した同国において、音楽の授業を開始すべく教育カリキュラムの作成や楽器の手配、教員の研修などを実施。学校に通えない子供たちのための里親基金も創設している。	石狩 JC

年	受賞者名	分野	活動内容	推薦LOM
2012	伊藤 文弥	医療・福祉	遊休地を活用し、障害を持つ人達の働く場を創造。活動理念は障害を持っていても生きがいを感じながら働く事のできる社会を創造すること。高品質な野菜を社会に届けることで、「障害者は働くことができない」という既存概念を変えていき雇用を促進し、ていく存在を目指す。農業以外には、野菜販売をしているごきげんカフェ、週末体験農園のごきげんガーデンなども展開中。	つくば JC
2013	長屋 宏和	医療・福祉	チェアウォーカー(車椅子ユーザー)の生活向上に取り組む。銀座三越の改装時にバリアフリー化をアドバイス。トイレやエレベーターの車椅子対応を可能にし、銀座線改札口から直接入店できるようエレベーターの設置や駅ホームにもエレベーターの設置を実現。ユーザー目線での普段着、仕事の際のスーツ、一生の思い出となるウェディングドレスまでノウハウを元に開発や製作販売。	土浦 JC
2014	安武 隆信	医療・福祉	結婚を機に子ども達を取り巻く教育環境に懸念を抱き、次世代を担う子ども達の活動も、僧侶として大切な役割ではないかと感じ、現代版寺子屋活動を開始。児童虐待などの社会問題に危機し、過疎化が進む山村を何とか活性化させたく、里親活動として被虐待児童の養育、ひきこもり、震災避難者との滞在型支援活動を展開し、孤立社会といわれる現代社会に「つながり」を取り戻すため「居場所づくり」を継続中。	伊都 JC
2015	丸 幸弘	その他	2002年に日本初、民間による「先端科学の出前実験教室」を開始。企業や大学の先端科学・技術を次世代に伝える、民間主導型の新しい教育のしくみを立ち上げ、100社以上の企業とともに科学教育活動を展開する。また、世界310研究機関とのネットワークを活かし、企業や大学に眠る資源や技術を組み合わせて新事業のタネを生み出す「知識製造業」を営み、世界の知を集めるインフラ「知識プラットフォーム」を構築している。	東京 JC
2016	川原 隆邦	文化・芸術	400年前から伝わる蛭谷和紙の製法を唯一継承。原料栽培から全て個人の手作業で行うこだわりの製品づくりとともに、生活の中に和紙を取り入れるための新用途開発にも力を入れ、伝統工芸の新たな価値を生み出している。さらに140年ぶりに復活させた謹符づくりによるコミュニティの再生、豊かな里山の再生を通じて子ども達に希望を持ってもらう活動を展開している。	富山 JC
2017	川口 加奈	医療・福祉	ホームレス問題に出会った14歳の時から炊出しや講演活動を開始。そして、19歳の時にHomedoorを設立。ホームレスの人の7割が自転車修理を得意とすることを発見し、シェアサイクルHUBchari事業等で雇用を創出。誰もが何度でもやり直せる社会を目指し、のべ500名以上を支援してきた。	大阪 JC
2018	尾中 友哉	青少年育成・世界平和・人権	2014年から聴覚障害者の聞こえないからこそ身についた伝える力を活かした企業向け研修プログラ「DENSIN」や、聴覚障害・難聴のある就学児向けの総合学習塾「デファアカデミー」を展開し、聴覚障害者の強みを生かす社会の実現に向けて活動。	大阪 JC
2019	永山 由高	ビジネス・経済・企業	鹿児島市の中心市街地天文館を拠点に、県内各地のコミュニティデザインを手掛ける法人にて、人口減少に向き合う地域のビジョンを住民と一緒に描き、その最初の一步を踏み出す後押しをしている。2016年からは、県内の有志と連携して都市と地方の前向きなつながりの舞台として「移住ドラフト会議」を開催し、移住と観光の間をつなぐ仕掛けを作っている。これまでに4回開催し、20名を越す移住者を生み出してきた。	鹿児島 JC
2020	TATSU (HANDSIGN)	文化・芸術	手話を交えた独自の表現方法でメッセージを届け、音楽とパフォーマンスで全ての人達が楽しめるライブ空間を追求し続けている。聴者とうろう者の架け橋になりボーダレスな社会実現を目指している。ニューヨークで開催されている「アマチュアナイト」で優勝を重ね帰国後、様々な現場で活躍中。実話を基に制作した「僕が君の耳になる」のMVはYouTubeで再生回数が600万回を突破し話題を集めている。	JCI 横浜

歴代会頭所信と 目で見える 各年代の歩み



会頭就任挨拶

第1代会頭 黒川 光朝

東京JC 1918年生 50～51年東京理事長 51年会頭 元・(株)虎屋取締役社長 90年逝去

顧みますれば、一昨年(1950年)の9月東京青年会議所が発足いたしました。わが国における青年会議所の運動はめざましい進展をみせて、現在の15都市に青年会議所の誕生を見、設立準備中の都市も10カ所以上を数える現状になっております。

今から36年前アメリカの一都市セントルイスにおいて無名の一青年を中心として発足した青年会議所運動すなわちJC運動が全アメリカ、カナダ、オーストラリア、さらにはヨーロッパ、アジアへと広がり、戦後それらを統合する国際青年会議所が誕生いたしました。現在参加国35カ国を数えております。

このようなめざましい発展を遂げたわけは何でありましょうか。一言にしていえば、将来の世界を背負って立つものは、われわれ青年である。また真に世界の平和と人類の幸福とを純粋に熱望し、理想の達成に強固なる意欲を持つものはわれわれ青年である、ということにつきますと思います。

すなわち、われわれ青年会議所は、その3大原則、トレーニング、サービス、フレンドシップの三つを掲げています。この三つは、われわれ青年にして初めて真に純粋に考えられ達成しようと思えます。われわれは青年であるという点からしてまず自己の修養練磨、勉強に努めねばならぬことは青年たる者何人も真剣に考えている共通の点であります。

そして青年なるがゆえに全く自我を忘れて社会公共のために奉仕する烈々たる意欲に燃えております。さらに青年同士の友情は一つの小さな町より全国に、そして世界へと求めてやまないのもまた申し上げるまでもありません。

この原則のもとにわれわれは、相寄り合って青年会議所の誕生を見たのであります。世界の青年の共通なるこの念願こそ真の平和達成への努力として、全世界にJCの運動が拡大した大きな原因と考えるのであります。

第二次大戦、さらに第三次大戦の危機というこの現実と直面して、この理想この念願により国際連合にも比すべき青年会議所の世界的組織たる国際青年会議所が第二次大戦後誕生したのは、必然的であると思われるのであります。

ダレス特使の来朝により、対日講和の締結近きを思わせる現在、本日ここに各地青年会議所を代表する日本青年会議所の創設を見たことは、全く意義深いものがあると思えます。

われわれの青年会議所は一日も早く国際的な組織の下に加入し、世界各国と共に、青年にしてのみ出来る高い理想の実現へと努力したいと切に熱望する次第であります。そしてきたるべき5月カナダ・モントリオールにおける第6回世界会議に代表を送り、われわれの熱望を述べる機会をかなえられることをねがってやまぬものであります。

来賓各位におかれましては、われわれ日本青年会議所の発足に際し、公私共々に多用中にもかかわらず、多数ご来臨を賜りまたご激励のお言葉を賜わり、会議所一同を代表いたしまして心よりお礼を申し上げますと共に、本日のご来臨ご激励に対しましては、われわれの今後の活動と実行とによって必ずやご期待にこたえうるものと確信いたすものでございます。なにとぞ、今後絶大なるご支援ご鞭達を賜りますようお願い申し上げます。

私のごあいさつといたします。(全文)

JCの会議

東京JC設立のため真夏隔日夜遅くまでやった準備会、毎週1度の理事会、東京、大阪、名古屋の日本JC創立準備委員会、毎月の日本JC役員会、モントリオールの世界大会、東京のアジア地域会議、その準備委員会、各地の役員会、ブロック大会、総会など会議の連続で4年間は夢のように過ぎてしまった。

一体何回会議をやったことだろう。すべて真剣に熱心にお互いに納得のいくまで、しかもその間、時には失敗も、失言もしながら、なごやかな雰囲気の中に徹底的にやった愉快な思い出の残る会議だった。われわれの会議はわれわれのJCのためにわれわれでやることの問題を話し合うための会議であり、会議を通じて自己のトレーニングをなし、いかに社会へサービスするか、討論によってお互いを理解してフレンドシップを増すような会議でなければならぬ。それが戦後の誤まった会議の方法の指導によって、われわれの団体でありわれわれの愛するJCの会議に、すべてにわたっていたずらに表決権を用い多数決の原則を強行したり、政治的な裏面工作をやったりしたら、全くJCの本来の主旨に反するものといわねばならない。

要はお互いによく知り合い、自分の本当の気持を青年らしく正直に表わし、全員が全部よく理解し合うまで、そして一人の反対もなく一致して事を決し、全員で完全に実行するように運営することこそ、わが愛する会議のあり方であると思う。

『会報』創刊号所載(抜粋)

1951

日本青年会議所

- 2.9 日本JCが設立され、会頭に東京の黒川光朝が就任(6月まで)
設立メンバーは東京、大阪、前橋、函館、西宮、名古屋、旭川の各JC
- 1 各地JCに関する資料の収集
 - 2 各地JCの規格の調整
 - 3 JCのPRと拡大
 - 4 JCIとの提携
- JCI会頭にはRamon V. Del Rosario (フィリピン)が就任(1950年7月～51年6月)
- 1.15 JCI第1回アジア地域会議がホンコンで開催される(17日まで)
- 3 一宮、岡山、浜松、甲府入会
- 4 仙台、福井、青森、横浜入会
- 5.27 JCI第6回世界会議がカナダ・モントリオールで開催され、日本JCから6名の代表が参加(6月1日まで)
- 日本、ホンコン、ニュージーランドJCIに入会
- 6 豊橋入会
- 7.1 日本JC第2年度会頭に東京の小坂俊雄が就任(52年6月まで)
- 7 JCI会頭にPhilip T. R. Pugsley (カナダ)が就任(52年6月まで)

内外の動き

- 1.25 ダレス米講和使節団来日
- 4.24 日本開発銀行発足
国電桜木町駅で電車発火、107名焼死
I・O・C日本五輪参加正式決定
GHQ、ニューヨーク定期航路の開設計可
商法改正施行
- 7.10 朝鮮休戦会談開かる
- 7.31 国内民間航空開始
- 9.8 対日講和条約、日米安全保障条約調印
相互銀行と信用金庫発足
日・インドネシア賠償会議開催



思い出のアジア会議

第2代会頭 小坂 俊雄

東京JC 1918年生 51年東京理事長 51年会頭 元・(株)小松ストアー取締役社長 90年逝去

終戦時の日本の状況、それはその後の日本ではとても想像もできないような、精神的にも物質的にも全く荒廃の極であったのでありまして、当時のわれわれ若い者は、そのほとんどが、特別の事情のない者以外は、海に、陸に、空において、直接戦いというものを、身に感じてきた者が、ほとんどであったのであります。

当時の青年たちは種々の苦悶の中にあって、彼らがそうすることによって、祖国を、両親を、兄弟を守ることができるという気持であった人が多かったと思います。

それが敗戦というきわめて熾烈な現実を身をもって体験したのであります。それら若い者が再び祖国の地を踏みしめたとき感じたことは、われわれのごとき経験をもってきた者こそ、この日本を復興せしめなければならないと思っただけであります。

それは、決して単なる「センチメンタル」なものではなく、純粹にして、しかも強烈なものであったのであります。

かかる気持の同志相集まって発足したのが東京におけるJC運動、日本におけるJC運動の始めであったわけですから。すなわち、われわれは、みずから手で、この社会を、日本をよりよくすることを実行していくものであります。それゆえにこそ他から押しつけられてきた団体ではなかったわけです。

かかるJC運動は各地に発展し、1951年(昭和26年)2月に日本JCの結成をみたわけです。そうしてこの青年らしい意欲は、終戦後間もない時期にもかかわらず、初代会頭の黒川光朝君を団長として、数名の代表団を「カナダ・モントリオール」の第6回JCI世界会議にオブザーバーとして派遣したのであり

ます。ところが、われわれの予想しなかったことが、現実となって現われたのです。それは、この会議で、満場一致で日本JCがその国際加入を認められたことでもあります。留守番役の私は、この報を聞くや、おどろきと共に大きな喜びをかくすことができず、大きく胸一杯に空気を吸った感じを忘れることができません。

これが、日本のJC運動が国際的に認められた第一歩であり、いまだ占領下の日本としては異例のことであったと思います。その後JC運動は各都市に加速度的に進み、同年の7月に、私は第2代目会頭(東京JC 3代目理事長)に就任しました。私の会頭時代、副会頭として、私の仕事の支えをしてくださった大阪の原田誠一君、名古屋の神野三男君の友情は終生忘れ得ぬものです。

この私の会頭時代に、一つの大きな試練として出てきた問題、それが日本におけるアジア会議の開催でありました。

これは、当時の日本の状態、すなわち占領下でアメリカのリッジウェー大將が連合軍総司令官であり、国際的会議の開催は、きわめてむずかしい時代であったのであります。かような状況にあつて、今こそ、かような困難を除去してJC運動発展のため会議を開催すべきとする論と、なお時機尚早とする論とあつたことは当然で、そのいずれもが真に日本を愛する心から出たものであることは事実であります。このような意見の中にあつて、私は開催地である東京JCの状況、各地の意見、協力態勢等、その動きを見ておまして、次第に開催への盛り上がりが強くなってくるのを見て、しかもそれが完全に近いものになってきましたので、正式に日本にお

ける第2回アジア会議の開催を引き受けたのであります。

かくして、1952年(昭和27年)4月20日より4日間、旧日本商工会議所の建物ほとんど全部を借り受け、第2回アジア会議を開催した次第です。JCI会頭、カナダのバックスレー氏も来日(数年前物故、実に立派なよきJC MANでした)。JCIアジア地区担当副会頭の欠席のため、主催国たる日本JC会頭の私は、会議の議長として、この会議の「開会」を宣しました。

出席国は「ホンコン」「インドネシア」「フィリピン」「タイペイ」それにオブザーバーとして「ニュージーランド」「USA」「ハワイ」から代表団が来日されました。この中であつて、当然対日感情が悪い国があることは想像しておりましたが、現実にはその想像以上でありました。しかしわずかの期間中であつて、これらの対日感情は、JCという場を通して、あたかも水に熱湯をそそぐがごとくとけ、きわめて深い友情を交わすことができるようになったわけです。

かくして、第2回アジア会議は、各国代表団よりの絶大な賛辞の中に終わり、ここに各国と大きな理解と友情を深めることができたのであります。これによって、日本JCの存在は広く認められ大きくその運動は前進しました。その後の日本におけるJCI第12回世界会議、大阪の会議、京都の世界会議、福岡の会議等……その先駆をなした第2回アジア会議開催の意義は実に大きいものがあつたと思います。

この第2回会議の成功は、日本JCに加入していた当時の各地のメンバーの一人一人の力によってなし得たものであることを私は強く感ずるものであります。

1970年9月記(要約)

1952

日本青年会議所

- 2 会津入会
- 3 大垣、網走入会
- 4 八幡浜、富山、宮崎入会
- 4.20 JCI第2回アジア地域会議が東京で開催され、外国JC31名、日本JC311名が参加(24日まで)。なお日本、ホンコン、フィリピン、インドネシア、台湾の代表とアメリカ、ニュージーランド、カナダからオブザーバー合計342名が参加
- 5 横須賀、塩釜入会
- 6 秋田、高崎入会
国内JCの急速な発展をみ、当年初め14JC、789名が当月末31JC、1525名となる
- 7.1 日本JC第3年度会頭に東京の堀越善雄が就任(53年6月まで)
JCI会頭にRoberts Villaneuva(フィリピン)が就任(53年6月まで)
- 7.19 第18回日本JC役員会を東京で開催(役員会は各地持回り開催となる)
- 8 桑名入会
- 8.4 第19回役員会、東京で開催
- 8.24 第20回役員会、能代で開催
- 9.3 JCデーを9月3日とする
- 9.6 JCI第7回世界会議がオーストラリア・メルボルンで開催され、400名あまりが参加(13日まで)
日本JCからは札幌JCの大竹敬太郎が参加、アジア室の飾付などに一人で大活躍
- 9.21 第1回ブロック連絡大会、仙台で開催
- 10 月刊『JAPAN J.C.NEWS』創刊
- 10.25 第21回役員会が広島で開催され、日本の国連加入促進運動に関する件を可決、JCIならびに全世界JCにメッセージを送る
- 11 青年層を対象とする世論調査実施
朝鮮難民救済物資醸出
これまで35歳までとなっていた年齢制限を延長し、40歳までを正会員としている各地JCの日本JC加入を認める
常設委員会制度を採用し8委員会を設置

内外の動き

- 1.18 韓国、李承晩ライン設定宣言
- 2.28 日米行政協定調印
- 4.9 日航機「もく星」号、大島三原山に墜落
- 4.28 日米講和・安全保障条約発効
日本再建連盟結成
公職追放令廃止
二重橋メーデー事件
IMFへの日本加盟承認
会社更生法公布
日・印平和条約調印
戦後初の北洋捕鯨船団編成終わる
- 7.1 全国住民登録実施
- 7.21 衆議院、参議院修正通り破壊活動防止法案可決成立
- 7.23 エジプトに、ナセルを指導者とする自由将校団のクーデター起こる
航空法公布
地方公営企業法公布
電源開発株式会社発足
- 10.30 第4次吉田内閣成立
日米艦船貸与協定調印



JCニュース発刊に際して

第3代会頭 堀越 善雄

東京JC 1918年生 52年東京理事長 52年会頭 元・丸文(株)名誉会長 10年逝去

1949年9月、日本においてJCが初めて設立されてからちょうどまる3年を経過いたしました。この間を振り返ってみますと、JCの誕生は、敗戦後の混沌とした世情もようやく冷静に返り、まさに復興の気運に向かわんとした時に当たっておりました。

その目標とする理想主義的旗印は、戦争というもの、さらには人類の本質というものに対する深い反省に基づいて、そこから立ち上がらんとする情熱に燃えていた青年の心からの共感を喚起するところとなりました。この運動は全国に広がり、現在35都市のJC1700名の会員を擁し、すでに国際JCにも加入し、国際的にも進展している次第であります。

青年の特徴は、自分たちが置かれている現実の生活を絶えずより高い立場(理想)から批判して向上を図る努力(熱情)をなしているという点にあると考えます。この若さの象徴である「理想」と「熱情」を有する各人がお互いに切磋琢磨することによってよりよい完成を図ることが、JCの第1目標トレーニングであり、この「理想」と「熱情」をもって社会に対して積極的に働きかけることが第2目標サービスであり、この各人の持っている「理想」と「熱情」をお互いに尊敬し合うことによって結ばれる人間の範囲を広めていこうとするのが、第3

目標フレンドシップであると考えます。

『JCニュース』はかかるJCの動きの反映であり、そこに盛られた内容はとりも直さず、われわれ自身の姿であります。『JCニュース』を充実させ、完全なものにすることは、われわれ自身の充実、完成を待って初めて期待しうるものであると考えます。

われわれJCの会員の心を結ぶこの『JCニュース』をぜひお互いの努力によって立派なものに育てていきたいと切望する次第であります。

『JAPAN J.C. NEWS』創刊号所載(全文)

会報発刊に寄せて

このたび『日本青年会議所会報』第1号が発刊されたことは、まことに慶賀にたえない。

従来各地JCとしての機関誌は各JCにおいて発行され各その特色を発揮して効果をあげていたのであるが、40に余るおのおの地区の連絡機関、全国メンバーの意思の発表ないしは交換機関に欠如するところがあったが、本誌はこの空白をみたく創刊されたものであって、本誌の使命もまたこの点にありと信ずる。

本誌の消長はただちにわれわれの精神の消長でもある。会員諸君の議論、文芸、時評に縦横の活躍を期待してやまない。しこうしてその立論の根拠はあ

くまで公明正大なものではなくてはならない。日本国内においては民族も同じく、風俗、習慣もほとんど同じであるから仮りに常識的には通用するとしても、一歩外国に踏み出して人種や風俗習慣が異なるがためにその公正の観念に疑義を生ずる態のものであってはならないのである。

要は広い視野に立って世界に通用する日本の意思の発表機関でもあり、またそれを培養する研究機関でもあらめたい。ここにも楽しい研究と努力が要求されるのであるが、かくしてこそ個人の完成がみられ、またよりよい社会が育成されるのではあるまいか。われわれが現在抱懐する思想を率直に記載しておくことは、われわれの経過を批判し回顧するのに至便であるとともに、またお互いの思索に益するところ大でなければならぬと信ずるのである。

ゆえにわれわれは大いに奮ってここに青年の純潔と熱情のこもった青春の精神的記念塔を打ち建てんとするものである。偽りのないわれらの意思を文字につづったものはわれらの心の写真である。

われらは将来この写真に接して、青春に悔いを残さざらんがためにも本誌をして健全なものたらしめ、またその発展を念願してやまないものである。

『会報』創刊号所載(全文)

1953

日本青年会議所

- 2 福岡、長崎、盛岡、松山入会
- 2.7 第22回役員会、福井で開催
- 3 呉入会
- 3.28 第23回役員会、大垣で開催
- 4.9 JCI第3回アジア地域会議がフィリピン・マニラで開催され、600名が参加(11日まで)
日本JCからは26名の代表が参加、モンテンルパ戦犯を慰問し、会議終了後、日本JCヨーロッパ視察団一行15名が各国を訪問
- 6 『日本青年会議所会報』創刊
JCIクリード採択
セネタ制度確立
- 6.6 第24回役員会、大阪で開催
- 6.20 JCI第8回世界会議がアメリカ・サンフランシスコで開催される(27日まで)
日本JCから東京の井口俊次団長以下10名の代表が参加
- 7 JCI会頭にDouglas L. Hoge(アメリカ)が就任(54年12月まで)
オクラホマ・タルサに最初のParmanent Secretariat決定
『JCI World』発刊
広島、札幌、京都、金沢、津、下関、飯塚、北九州入会
- 7.1 日本JC第4年度会頭に東京の服部礼次郎が就任(54年6月まで)
6月末北九州を中心に西日本一帯を襲った豪雨に対し、日本JC内に水害救援本部を設け、救済に万全の努力を払う
日比親善児童画交換会開催
- 7.3 第25回役員会、東京で開催
- 9 岐阜、北見、釧路、大分、別府、中津入会
- 10 川崎入会
- 11 能代、佐世保、清水、水戸、日田入会
- 11.7 第1回全国会員大会が名古屋で開催され、30JC、153名が参加(8日まで)
- 11.14 第1回東海地区JC懇談会が名古屋で開催され、地区会員大会の始まりとなる

内外の動き

- 3.5 ソ連首相スターリン死去
- 3.14 吉田茂の「ばかやろう解散」
東京証券市場、軍需株を中心に一斉に暴落
国鉄、京都・博多間に特急かもめ号運転開始
日本婦人団体連合会結成
- 4.2 日・米友好通商航海条約調印
- 5.21 第5次吉田内閣成立
北九州各県61年ぶりの大水害
- 7.27 朝鮮休戦協定調印
国際民間航空機構、日本の加盟を承認
世界銀行からの外貨の受入れに関する特別措置法公布
離島振興法公布
港湾整備促進法公布
- 8.7 スト規制法成立
学校図書館法公布
日米行政協定改定調印
ベトナム・ラオス・カンボジアの3国、対日国交回復を通告
ガット総会、日本を準加盟国に承認
アメリカ副大統領ニクソン来日
- 12.1 初の有料道路(松阪市外櫛田橋~宇治山田市外渡海橋間)開通
- 12.25 奄美群島返還の日米協定公布



28年度の基調方針

第4代会頭 服部 禮次郎

東京JC 1921年生 53年東京理事長 53年会頭 59年副会頭 元・セイコーホールディングス(株)名誉会長 13年逝去

わたくしはさきごろの総会に、大要次のごとき「日本JC運営基調方針」を提示し、諸兄のご賛同を得ました。

1. 日本におけるJC運動の望ましい姿は、国内主要都市に正しい性格のJCが分布し、その各々が堅実な基盤の上に活発な活動を行ない、しかも諸JCが日本JCの旗のもとに協調交流一致し、必要に応じてその力を結集することにある。

2. 日本各地JCの統合体としての日本JCは、各地JCの発生、発展、交流を促進し、かつそれらの足なみを調整することを主目的とするのであるから、各地JCが日本JCへの応接のために、その本来の活動を妨げられるおそれのないよう十分留意し、また一面日本JCとして外部に対して行なう活動については、各JCの活発な自主的協力を期待する。

3. 国内におけるJC運動の普及については、未設立地のうち、いくつかの都市に重点を指向し、それぞれの地に名実ともにJCらしい性格を持つJCが誕生するよう、積極的に育成する。

4. 国際JCの一環としての日本JCは、今後遠からぬ将来に世界会議が日本において開催されることをも予想し、ますます各国JCとの交流連絡を密にし、国際JCの中で主動的な立場をとるよう努めたい。しかしながら、わが国の現在の国力、情勢、立場および日本JCの現状をよくわきまえ、いたづらに国際JCへの応接追隨に奔命これ努めることを避け、自主的な態度をもってこれ

に臨む。

5. 日本JCの内部の運営については、各種の上部構造機関にみられがちな形式的議論倒れ、総花の名目倒れ、事大主義的内部自己満足等を受け、その組織は簡素なものとし、その会議は思いつきの議論の繰り返し、形式上の不備の過度追求等による時間の空費、議論の空転、議場の混乱を避けて実質的建設的なものとし、議事の決定は明確にし、決定事項の実施には全関係者が終わりまで関心と責任を持つ。

諸兄のご協力によって、以上の基調方針を堅持していきたくと念願するものであります。

『会報』創刊号所載(全文)

JC精神の日常化と 会員大会のあり方

わたくしたちは、今日の時勢に処して、経済の繁栄・社会の安寧をねがうとき、単に、商売営利の道に熟達し、あるいは、かけひき世渡りの術にたけただけでは、全体のためにも、また、ひいては自分一個のためにも、大なる貢献をなし得ぬことを思えばこそ、あるいはTRAINING(自己の責務の大なること、自己のなしうることの大なるべきことを思い、自尊自重、自己の職責にふさわしい人物に自分自身を高めるべく、知徳の研鑽実践に努める)、FRIENDSHIP(友愛協同)、SERVICE(まず、他人や社会一般の迷惑厄介にならぬよう心がけ、進んで

は狭い利己心を捨て世のため他人のためになることを考え実践する)を目標に掲げ、あるいは「全国の見地に立って事物を判断しよう」「国際的世界的視野の中で事象を把握しよう」と叫んでいるのであります。

しかしてわたくしたちは単にこれを口に唱えるのみでなく、家庭に、職場に各会員が日常実践し、さらに一つの団体としての力を発揮して、各地JCの行事の中にこの3目標2見識が具現実践されるよう努めているのであります。全国大会は実にこの運動の全国的結集の一場面であるはずのものであります。

全国大会は、単なる物見遊山でもなければ酒宴でもありません。いわんや、ソレをダシにしてハメをはずしたりするためのものではありません。

主催者側は、遠来の人を遇する法をよく研究し、地元の内部事情・慣習情勢にとらわれることなく新しい集会のあり方、人と人の接し方を検討し、参加者は異域の旧習にある程度の寛容を示しつつその改善を示唆し、ともに相たすけて、(1)人の迷惑厄介にならず人のためになる集会(会場の出入集散等、すべて外部の人から見てなるほどJCの人たちは違うなあという印象を持たれるような集会)、(2)散会したあとで、参会者一同の胸の中に、心の成長を感じるような集まり、(3)散会したあとで、ながくその土地の人によき感銘を与えるような集まりを持ちたいと思います。

『JAPAN J.C. NEWS』No.9所載(抜粋)

1954

日本青年会議所

- 1 彦根、大津、美幌入会
- 2.24 JCI第4回アジア地域会議がホンコンで開催され、12カ国JC、300名が参加(28日まで)
日本JCから三輪善雄団長以下23名が参加
- 4 静岡、沼塚入会
- 5.8 第2回全国会員大会が富山で開催され、150名が参加(9日まで)
- 7 日本JC第5年度会頭に大阪の森下泰が就任(55年6月まで)
労働問題に関する懸賞議文の募集
国際親善児童画の募集交換
ベトナム救済品の募集
JCソング制定
鹿児島、松阪、苫小牧入会
- 8 三次、瀬戸入会
- 8.14 第3回全国会員大会が函館で開催され、156名が参加(15日まで)
- 10 新潟入会
- 10.24 JCI第9回世界会議がメキシコで開催され、大阪の加藤栄一団長以下4名が参加(29日まで)

内外の動き

- 1.2 二重橋事件
- 2.23 造船疑獄拡大
- 3.8 日・米相互援助協定(M・S・A)調印
自衛隊法公布
企業資本充実のための資産再評価等の特別措置法公布
- 防衛庁・自衛隊発足
- 6.9 警察庁・都道府県警察発足
- 11.5 日・ビルマ平和条約と賠償経済協定調印
- 12.10 第1次鳩山内閣成立



「JC運動の本質」に関する一小見

第5代会頭 森下 泰

大阪JC 1921年生 52～53年副会頭 54～56年会頭 元・森下仁丹(株)取締役社長 元・参議院議員 87年逝去

I. JCの概念

1. JCはいわゆる社交団体ではない(社交親睦は運動の結果の一つである)。
2. JCは修養機関の一種ではない(JCは合目的な自立機関である)。
3. JCはいわゆる経済団体ではない(もとより政治・宗教団体ではない)。
4. JCは社会団体であり、実行機関である(対象を広く社会一般の諸問題に設定し、これに働きかけることをもってその本質とする)。

II. JCの目的

1. JCの精神支柱はヒューマンイズムに存する(JCI Creed, No.5, No.6)。
2. JCの目的は、知識ある青年たちの「社会的権威の実現」にあり、それは「対社会的義務」でさえある。
3. 社会的権威の実現、すなわち「社会奉仕」の内容は歴史的社会的に決定せられ、その実現の過程において「修練」と「友情」は達成せられる。

III. JCの性格

1. 進歩性

かたよった意見、あるいは勢力にとらわれることなく、常に客観的に認識し、判断し、建設しようとする勢力を進歩性という。恵まれた環境に置かれているということは、それだけそうでない人々のために努力せざるべからざる義務を負っている。

2. 積極性

ことなかれ主義はJCのものではない。とはいえ、若いから無茶をやっていい、というのではなく、青年たる権威の自負の上に立ってなさざるべからざること。

JCは坊ちゃんの老年会議所ではない。

3. 国際性

今日、人間の一切の営みは世界の場合においてのみ解決せられる。かつて銃をとっていくさの場に戦った青年同士の握手から真の世界の安定と平和がもたらされるであろう。JCIは既に厳然として吾々の前に存在している。

IV. 結語

(具体的方法論に関する一試案)

第1に指摘したいことは、「若く知識ある青年の社会的責任の自覚こそJC運動の起点である」ということであります。現在のわれわれメンバーが、いわゆる知識ある階層に属し、かつ自ら世の指導的青年と自負していることは、明らかな事実であります。それならば、自負に値するだけの努力をわれわれは真剣に払うべきであります。そして、この努力の必要を自覚すること、それこそJC運動の出発点であり原動力ではないでしょうか。

第2の問題は、「団結による社会的勢力の把握」ということであります。どのようないい考えを持っていても、これを実践する能力を持ち合わせないでは、せっかくのアイデアもただそれだけに終わってしまうであります。

戦争の前後に、あるいは、先般の各種の選挙の最中において、われわれはいろいろの事を見、感じ考えました。そしてまた折りにふれて有志相集まっては、あれこれと意見を述べ批評をしたことでした。けれども、このような第三者的な立場における批判は、一体社会の進歩に対して何程の効果がある

でありましょうか。居酒屋的批判がアクションに転化する重大な要素は「力」の問題であるように思われます。有志の雑談が雑談として終わらず、個々が相集まった全体のものとして発言せられる時、それは一つの勢力を持つに至ります。

第3に、「いかなる事柄をわれわれの直接の対象となすべきか」ということにおいて、「理想と現実の止揚」という、はなはだむずかしい命題について言及したいと思います。

「慈善事業は決して意味のないことではないが、個々の慈善事業よりもそのような慈善が必要とされないような社会の建設をこそ、われわれは考えるべきだ」という主張が、過般の近畿地区大会において発言されました。まことにごもっともな意見であります。

かような言葉は何かゴマカシのように聞こえます。私はもっと容易に、個々の身近ないわゆる慈善事業をもとより大いに実践しながら、しかしわれわれの認識の底においては、けっしてそれをもって満足しない心的態度を失わないこと、そうすることによって一歩一歩所期の目的に近づくであろう、と申したいのであります。

第4に、会員の質の問題として「広く社会各層の有識青年を結集すべきだ」と私は考えてまいりました。「JCは坊ちゃん・クラブである」という批評を耳にしてまいりました。坊ちゃんだから会員になれるのではなく、有識有能であるから会員であるということではなければならぬはずで。

『会報』No.3, No.4所載(要約)

日本青年会議所

- 1 久留米、長岡入会
JCI会頭にPeter B. Watts (ニュージーランド)が就任(12月まで)
JCI事務局、フロリダ・マイアミビーチに移転
『JCI World』スペイン語版発行
- 2 会員を対象とする世論調査実施
- 3 芦別、熊本入会
- 5.3 JCI第5回アジア地域会議がバンコクで開催され、15カ国JC、140名が参加(7日まで)
- 7 直方、尾鷲、小樽、四日市、島原、山形、稚内、深川、斜里入会
日本JC第6年度会頭に大阪の森下泰が就任(56年12月まで)
- 10 中津川、多治見、一関入会
- 10.15 第4回全国会員大会が京都で開催され、52JC、358名が参加(16日まで)
- 11.5 JCI第10回世界会議がイギリス・エジンバラで開催され、34カ国JC、750名が参加(11日まで)
日本JCから東京の赤田務団長以下4名が参加

日本青年会議所

- 1 JCI会頭にArnaldo de Oliveira Sales (ホンコン)が就任(12月まで)
オペレーション・ブラザフッド採択
「若い我等」制定
日本JCスローガン「青年の力で新しい社会を」
- 2 堺、倉敷、富良野、名寄、室蘭、紋別、長浜、大牟田入会
- 4 山口入会
- 4.8 JCIオペレーション・ブラザフッドの一環として南ベトナムに医療団派遣、日本JCから医者1名、看護婦3名が参加(6カ月間)
- 4.17 JCI第6回アジア地域会議が開催され、旭川の山崎賢二団長以下11名が参加(21日まで)
- 5 神岡、熱海、観音寺、大洲、岩国入会
- 8 宇部、遠軽、高知、高山、児島、留萌入会
- 9 第8回臨時総会で「日本青年会議所会頭選挙制度」制定
- 11 佐賀、松江、柳川入会
- 11.4 第5回全国会員大会が広島で開催され、430名が参加(5日まで)
- 11.9 JCI第11回世界会議がニュージーランド・ウエリントンで開催され、東京の赤田務団長以下1名が参加(14日まで)

1955

内外の動き

- 2.14 日本生産性本部発足
- 3.19 第2次鳩山内閣成立
- 4.18 アジア・アフリカ(AA)会議開催
米・英・仏、西独の占領状態停止を宣言
- 6.1 日・ソ交渉、ロンドンで開始
- 7.8 日本住宅公団法公布
- 7.20 経済企画庁発足
- 9.10 ガット(関税および貿易一般協定)加盟
原子力研究所発足
- 11.22 第3次鳩山内閣成立

1956

内外の動き

- 原子力委員会発足
- 1.1 弥彦神社で124名圧死
- 1.17 日・ソ交渉無期休会となる
日・比賠償協定調印
- 7.26 ナセル大統領、スエズ運河国有化を宣言
原子力燃料公社発足
スエズ動乱発生
- 11.8 南極観測船宗谷、東京港出発
- 12.18 日本の国連加盟、総会で可決
- 12.23 石橋内閣成立



日本JCのあり方

第6代会頭 三輪 善兵衛

東京JC 1920年生 49年東京理事長 57年会頭 元・ミツワ本舗(株)取締役会長 00年逝去

8年前、東京が必要としたがために東京JCが発生したのがごとく、その後各JCは各都市において、それぞれの存在価値に基づいて生成発展して参りました。しかもこれらの存在価値の最大公約数を発見し、その実行活動を容易ならしめる目的をもって、日本JCが設けられました。

日本においてJCがその発生からローカルにその根をもつという全く理想的な形態をとって発展してきたことは、われわれの永遠に誇りとする所のひとつであります。

しからばJCの存在価値とは何か。申すまでもなく、それは各地それぞれ質量ともに、多様性をもつものではありませんが、それを論ずるに先だち、われわれが深く考えねばならぬ三つの点があります。

すなわち、この存在価値は、他人が決めるものではなく、自分自身が決めるべきものであるという反面、またJCを社会が必要としているか、また必要とされるべくわれわれは十分に活動しているかという問題であり、そしてまたその活動の質において、青年ならずともできるような仕事でお茶を濁しているJCがまだあるのではなかろうか、等の諸点であります。

私は、ひとたび人間生をうけ、それを全うするまでに、「青年」のみに与えられ、JUNIORである間でなければできない使命が何かあるような気がいたします。ある町ではJUNIORが政治面に

出てくることをSENIORがおそれ、ある都市ではJUNIORが経済界に出現することにイヤな顔をするという例があります。なぜでしょう。

これは、青年がSENIORでもできる仕事を、大人の手口をそのまま拝借して口をぬぐうことが多いからではないでしょうか。誰でも自分の領域に新顔が闖入してきた場合、一応警戒することはもともとであります。

しかしやがてその闖入者が、自分たちのためになる存在価値を備えていることを知ったときには喜んでその分野を開放するであります。

JCは、青年に与えられた使命を自ら発見し、青年でなくてはできぬ方法でこれを遂行すればこそ、そこにその存在価値を創造いたします。逆にその使命を青年でなくともできる方法で妥協するならばその存在価値は発生しません。ここに、年齢制限がJCの最大特徴たるゆえんがあると信じます。

かくして、発生したJCの存在価値は、常に次元の存在価値を包蔵しておるということを次に強調したいと思います。

この価値の多元性こそJCのまた一つの特徴であるといわねばなりません。すなわち今日、ある会員がJCにおいて価値創造のために前述のような仕事に没頭すると仮定します。その際「青年は社会の宝」という諺が画餅にも似て、社会の目の青年に対する無関心、冷たさを誰しもが経験するであります。

この青年は、社会の青年に対する冷たさのもとに青年自分自身にあるのだと考えると同時に、自分ならば後輩をこのような目に会わずまいと考えるに違いありません。

かくして現在のJCは、その「活動」を通じて将来の社会人を「訓練」し、将来のJCのバックグラウンドとなるべき社会人を刻々と生み出す使命を負わされ、かつそれを果たしつつあります。次代を背負う青年を大切に育て上げ、青年に活躍の余地を与えぬ組織は、国家といえども退歩することは天下の原則であります。

かく訓練された社会人が世に出てバックアップすることにより、JCその他の青年運動は活発化し、社会は活気を与えられそして発展するであります。その時を予想してJCの真の価値は討議されるべきではないでしょうか。いたずらにJCの概念規定に、あるいは性格判断に時をあせり、直の価値判断にあやまりがあつてはならぬと思います。現在の会員の社会的地位のかたよりや活動の色彩をもってしては、将来を含む現在のJCの価値づけは困難であります。特に創造期である今日、さらにしっかりと申さねばなりません。

JCの存在価値は青年そのものの価値にも似て、きわめて含み多いものといわねばなりません。その探求なしにJCの性格目的を断ずることは、悔いを千載にのこす結果となるであります。

『会報』No.6所載(要約)

1957

日本青年会議所

- 1 日本 JC 第7年度会頭に東京の三輪善雄が就任(12月まで)
巡回講師の派遣
世論調査の実施
日本 JC スローガン「世界を結ぶ青年の力」
「技術革新と日本経済の針路」について論文募集
JCI会頭に Ira D. Kaye (アメリカ)が就任(12月まで)
『JCI World』フランス語版発刊
- 2 舞鶴、伊東、岩見沢、出雲、玉島入会
- 2.2 第10回定時総会で、役員名称中、常任理事を理事、理事を評議員とする定款改正案可決
- 3 桐生、十和田、伊勢入会
- 4.16 JCI第7回アジア地域会議が南ベトナム・サイゴンで開催され、16カ国 JC、188名が参加(20日まで)
日本 JC から東京の小林敦団長以下16名が参加
- 5 徳山、蒲郡、萩、姫路、十日町、新津入会
- 5.14 国際親善児童画展を東京・高島屋で開催(19日まで)
- 7 士別、柏崎、西尾、関、碧南、尾道、徳島、宇和島、高松、玉名、弘前、花巻、五所河原入会
- 8 東大阪入会
- 9 長野、笠岡、和歌山入会
- 10.14 JCI第12回世界会議が東京で開催され、海外30カ国 JC、400名が参加(20日まで)
日本 JC から1100名が参加
- 10.15 第6回全国会員大会が東京で開催され、800名が参加
- 12 延岡入会

内外の動き

- 1.29 南極予備観測隊オングル島上陸、昭和基地と命名
- 1.16 政府、対米綿製品輸出自主規制措置を発表
- 2.25 岸内閣成立
日・英新通商協定調印
ガーナ共和国成立
1000億減税の税法改正法成立
特定多目的ダム法公布
スエズ運河完全に開通
瀬戸内海で定員の3倍を乗せた第5北川丸沈没、死者、行方不明93名
国土開発縦貫自動車道建設法公布
輸出検査法公布
水道法公布
- 7.6 東京谷中天王寺の五重塔焼失
- 8.27 東海村原子炉に初の原子の火ともる
日本、国連に核実験停止案を提出
- 10 5000円札発行
- 10.4 ソ連、世界最初の人工衛星打上げに成功(スプートニク第1号)
日本原子力発電会社、東海村に発電所着工



1958年度日本JC活動方針について

第7代会頭 橋上 保久

東京JC 1918年生 55～57年副会頭 58年会頭 元・日商興産(株)代表取締役 00年逝去

私は今年度会頭として皆さんに訴えたいことは、JCができて10年、世の中も大きく変わり、JCも内容外観ともに大きくなったのでありますが、かような状況のもとで日本JCはいかにあるべきか、ということでもあります。

すなわち昨年の世界会議でJCづくり第1期を終わったと考え、さて第2期にはいるJCがこれからさき一体どんな方針と形で伸びていくべきであるか、私は以下6項にわたる方針のもとに今年度JCの活動方針を立てるべく考えたのであります。

第1に、ここで大いにお互いに反省すべきである。そして新しい角度からこのJCを主観的に、あるいは客観的にも眺めて、6000名145都市に散在するJCの人々の運動が、どういう形で指導され、まとめられていくべきかということを再考しなければなりません。

第2に、JC運動の現況分析、すなわち自己診断であります。自分の実力を知るための調査、JCの第2期運動を始めに当たり、まずJCの現状勢力を詳しく分析して確認することから始めようとしたのであります。

第3に、JCの国際性を強調したいと思えます。昨年東京における世界会議で親しく日本を目のあたりに見た人々の、日本に対する考え方はまさに信頼感にみちたものがあり、日本の産業経済の振興ぶりを見て、アメリカや西欧のそれに比して大なる希望をもち、アジアの中心たる日本を考え、むしろ温かい気

持でわれわれを迎え入れてくれます。われわれは大いに目を四界に向け、特にアジアに関心をもち、平和親善を基礎とする経済外交、青年外交を大いに進めるべきであります。

第4に、日本JCの指導性の確立と事務局の強化であります。8月初めで日本のJCはチャプターの数145都市となり、今年末には160～170ぐらいにはなるものと想像されます。こうなりますと、この一大社会団体が行動するためにはある程度の指導が必要であります。日本JCはすでに連絡機関としてのみではこの大世帯をまとめることができなくなりつつあり、指導的立場が必要であります。

第5に、PRの強化。外部へわれわれがなしたる、なさんとする行動、意思をはっきりと発表して世論を喚起し、また批判を求め、内部にあってはJCのメンバーにJCのいこうとする道を明示して、より活発な運動を期待しようとしたのであります。

第6に、JC運動を推進するための背景の拡大であります。JCの運動が拡大すればするほど行動半径も大きくなり、そのBack Groundはますます大きくなっていかねばなりませんし、いろいろな意味での抵抗もまた大きくなってまいります。そこで私は、JCをBack Upする、いわゆる背景の拡大の必要を考えました。その方法として、まず(1)JCを認識する社会的指導層の増加、(2)他諸団体との積極的な結びつき、(3)JC卒業生、すなわちOB会員を強固に結び

つける運動、の3点にしぼってJCの背景的地域を拡大することに努める必要があると考えております。

以上、反省——自己診断——国際性の強化——日本JCの指導性の確立——PRの強化——JCの背景の拡大強化、と一連の方針のもとに今年度日本JCは活動をしておるのであります。

私はこの六つの基本方針に基づき、その行動方法として従来の広く浅くの運動方針から、深く鋭く、いわば広角から鋭角への行動方針の転換をとりました。

すなわち、その深く突っ込んだ過程において新しい抵抗を体得し、それによって新しい収穫をつかむ、すなわち、新事態を見出してこれから異なった意味のJCの方針が生まれ、自覚の根拠が新しく生ずるという考え方をとったわけであります。

またJC運動は実社会と結びついた運動でなくてはなりません。社会と遊離した運動であってはならないのであります。その意味で特に自己訓練を中心とした経済的活動に焦点をしばり、これにたとえば能率協会とのタイアップによるセミナー開催、また生産性本部のセミナー参加、アメリカ派遣チームをJCのメンバーをもって編成派遣する等の具体性をもたせ、また社会奉仕の面では最も現代社会の悩みである、僻地教育問題と不良化防止という2点をかかげて、特に青少年を対象とする運動に挺身したいのであります。

『会報』No.7所載(要約)

1958

日本青年会議所

- 1 日本JC第8年度会頭に東京の橋上保久が就任(12月まで)
日本JCスローガン「若い力で経済建設」
JCI会頭にAlberts Philip(メキシコ)が就任(12月まで)
五所河原退会
津山入会
- 2 泉佐野入会
- 3 玉野入会
- 4.14 JCI第8回アジア地域会議が台北で開催され、日本JCから東京の橋上保久以下30名が参加(18日まで)
- 5 足利、熊谷、土浦、赤平、神戸、小田原入会
- 7 上野、恵那、浜田入会
- 8 米子、富士入会
『JCI World』日本語版発行
- 9 栃木入会
- 10 泉大津入会
- 10.20 第7回全国会員大会が福岡で開催され、787名が参加(20日まで)
- 10.30 会頭選挙が行なわれ、千(京都)、戸田(広島)候補のうち千宗興当選
- 11.16 JCI第13回世界会議がアメリカ・ミネアポリスで開催され、日本JCから服部禮次郎(東京)団長以下22名が参加(22日まで)

内外の動き

- 1.20 日本・インドネシア平和条約、賠償協定調印
- 2.1 エジプト・シリア合邦、統一アラブ共和国成立
- 3.9 関門国道トンネル開通
- 5.10 長崎の中国国旗引き下ろし事件発生、中共政府は日中貿易全面的中止通告
- 6.12 第2次岸内閣成立
- 9.27 狩野川台風で伊豆地方大水害
- 11.1 ビジネス特急こだま号運転開始
- 12 1万円札発行



JCに望むこと

第8代会頭 千宗室(現・玄室)

京都JC 1923年生 57年副会頭 59年会頭 63年JCI副会頭 前・(財)茶道裏千家今日庵家元

日本青年会議所も1年ごとに拡大され組織体としての進み方が判然としてきておりますが、いまだ社会一般のJCに対する認識は組織体の大きさから比較すると薄く感ぜられるという声も、会員のなかから聞かれます。しかし私は、かりにJCに対する社会一般の認識が薄くとも、JCの歩むべき目標は定まっております。地道な活動を確実にし得、集約された結論が初めて社会にJCとしての価値を納得させるものだと信じております。

従来のわが国のあり方として財界・政界・学界・文化界などとことさら界という狭い、そのみのものに拘泥して、自らセクショナリズムを構成していたことが、外国に比べてわが国のすべての活動状態を伸張させなかったのだと思います。現在のわが国は戦後の急速なる産業開発と経営合理化によって、社会のあらゆる水準が高揚してきたのですが、いまだ各界のセクショナリズムが根を張っており、十分展開されるべきものがされていないと痛感するのは私のみではありません。

かかる時に将来を背負って立つべき責任をもつJCのメンバーこそ、あらゆる面に向かって今の間にトレーニングを真剣になすべきであると思います。40歳と限られたことも、40歳までに自己の視野を十分にひろげることが、40歳以上よりもなしやすいからなのであります。JCのメンバーとなった以上は、JCという場を通じて「よく学ぶ」「よく聞く」「よく思う」この三つのことを実行しなければなりません。JCの理想としている目標は実にここにあると私は信ずるのであります。

私の修業道のことを申し上げてはなはだ恐縮ですが、茶の道の深遠なる目標である和敬清寂を体得するた

めには、道の上における技(実)学(道をつらぬく教典)道(心がまえ)を十分に練らなければならないのであります。しかし一歩前進して反省をなし、次にきたるべきものに対する信念を固めることは何ものにも必要なことではありませんまいか。そうした意味からJCは実践団体である、そしてその実践は外にあってはどんな小さなことでもやろうと決意したらそれを実現さすというファイトと、内にあっては日々の反省であると、私は過去のJC運動を通じて思うのであります。そこに青年としてヒューマニズムを基調とした人間的な教養を高められると同時に、勇氣と情熱をもってことに当たることもできるのです。

かかる時にこそ何々界と自らを狭くとしこめるものもなく、経済人すなわち文化人、文化人すなわち経済人というがごとき幅の広い進展が生まれ、それによりわが国の将来ものびのびとしていくのではありますまいか。私はそうした点から特にメンバーの拡大も望みました。最大公約数の中からあらゆる人々をJCメンバーとしてお互いに切磋琢磨していくことが望ましい、と。各地チャプターも多士済々のメンバーとなり、郷土愛から出発した地域社会の高揚と産業開発、生産文化の向上に最大の努力を払っておられるのであります。そこに、他の団体とは見比べられない特異な存在価値が発揮されていると思います。

一度JCのメンバーとなるや、JCを大いに自分の人間完成の手がかりとなるように活用することが必要であります。単にJCメンバーとしての籍だけを置き、会合にも出ない人も見受けられますが、JCだけは他の団体のごとく利害関係ありませんし、そのメンバー一人一人によ

て構成されているということを忘れずに、どしどしJCを積極的に自分にとけこませなければ何にもなりません。自分がそれにとけこんでこそ、あらゆるメンバーと友情を結ぶこともできますし、その友情は同時代という年齢的に結ばれた仲間同士であることが基となっているので、お互いに真実のつき合いができるのであります。この友情こそ将来それぞれの立場になった時にも、あらゆる角度から社会的信用を高めることにもなり、何よりもかえ難いものなのであります。

特に私がいま痛感しますことは役員任期であります。1年交替は最もフレッシュで、団体が生々とすることは申すまでもありませんが、176のJCと約8000名の会員をもつ現在では、会頭の方針なり、委員会の任務なりを1年間で決定づけることは困難であるのです。せめて2年あれば、1年の上半期を準備とチームワークに用い、下半期で方針、任務、活動方針などを徹底的に普及させ、外部にもPRし、残る1年でみっちり活動展開ができるのであります。もちろん、賛否それぞれあると思いますが、JCをよりよき自己のトレーニングの場とするために役員、会員の意識なく、幅広く活動する方向にもっていくことが大切な点なのであります。

私たちはいつも素直に事を判じ、JCというもっともトレーニングができる場を最大限に活用して、わが国の経済、文化の発展高揚のために大いに努力しようではありませんか。それによってこそ、従来の何々界というセクショナリズムは解消し、世界にも真の価値を発揮できるのであると私は信じ、JCに限りなき期待をもつのであります。

『会報』No.9所載(抜粋)

1959

日本青年会議所

- 1 日本JC第9年度会頭に京都の千宗室(玄室)が就任(12月まで)
日本JCスローガン「JCの力で築こう明るい社会」
JCIの統一事業である経済論文の募集に参加
エグゼクティブ・ディベロプメント専門視察団を派遣(橋上保久団長以下12名)、日本生産性本部と初めての提携事業となる
日本JCマネジメント、国内視察団派遣
日本生産性本部、軽井沢セミナーに参加
業種別部会の育成、名簿の作成を図る
「社会の谷間」写真展を開催
ブラザーJCの縁組開始、岡山JCとアメリカ・サンノーゼJCが第1号となる
福井JC退会
JCI会頭にMaurice C. Sexton(ニュージーランド)が就任(12月まで)
JCIアジア地区担当副会頭に服部礼次郎が就任
加古川、岸和田、帯広、人吉入会
- 3 三木、鳥取、八尾、鹿島入会
- 4.3 全国理事長会議が渋谷・東急文化会館で初めて開催され、103JC理事長が出席(4日まで)
- 4.20 JCI第9回アジア地域会議がマラヤ・クアラルンプールで開催され、15カ国JC、184名が参加(24日まで)
日本JCから千団長以下12名が参加
- 6 茂原、留辺蘂、黒石、大館、八戸入会
- 7 八代、白河、柳井、男鹿入会
- 9 小千谷、貝塚、奈良、尼崎、小松入会
- 10 豊川、大村、新発田、平塚入会
- 10.6 第8回全国会員大会が仙台で開催され、114JC、800名が参加(7日まで)
会頭選挙が行なわれ、石川(東京)、桜井(静岡)候補のうち石川六郎が当選
- 11.15 JCI第14回世界会議がブラジル・リオデジャネイロで開催され、日本JCから千団長以下20名が参加(22日まで)

内外の動き

- 1.1 カストロ指揮のキューバ革命軍、バチスタ政権を打倒
欧州共同市場(E・E・C)発足
ソ連、宇宙ロケット発射に成功、人工衛星となる
イギリス・ギリシア・トルコ間にキプロス独立協定調印
わが国最初の金属ウラン完成
- 4.10 皇太子殿下御成婚
首都高速道路公団法公布
農林漁業基本問題調査会設置法公布
- 5.13 日本・南ベトナム賠償協定調印
- 6.3 シンガポール独立
- 6.18 第3次岸内閣成立
亀山-和歌山間の紀勢線全通
- 9.26 伊勢湾台風(台風15号)により大被害を受ける
アメリカ民政府、琉球開発金融公社設立の布令公布
- 11.27 デモ隊国会乱入事件



日本青年会議所 1960年度事業計画

第9代会頭 石川 六郎

東京JC 1925年生 59年副会頭 60年会頭 元・鹿島建設(株)取締役名誉会長 05年逝去

発足以来8カ年、JC運動は修練、奉仕、親睦を事業活動の3大支柱として、おおむね健全に発展してきました。

しかし我々はJCの現状に満足することなく、冷静な自己反省と周到な計画により、この際、日本JCの発展的脱皮ならびに、体質の改善を積極的に図る必要があると思います。われわれは日本JCを真にローカルJCを基盤として有機的、行動的な組織体としてその力を十二分に発揮させるため、来年度は後述する諸方法により運営したいと考えます。

1. JCの基本問題の研究

日本JCは現在種々の基本問題の解決を迫られております。すなわち急速な技術革新並びに資本主義体制の変容、国際・国内政治情勢などにより生ずるヒズミのしわよせなど、外部よりの影響、並びに174JC、8000名の幅広いメンバー層を持ったことによる思想不統一の脳み等々により、日本JCのあり方の再認識、再検討に迫られているのであります。したがって、具体的な問題を通じて日本JCの基本問題の徹底的な究明が必要であると考えるのであります。

2. 国際的視野における良識の涵養

明日の日本を担うには高度の国際的視野によりこの良識を備えることが肝要であり、この良識に基づいて経済、政治、文化上の諸問題を皆で大いに研究し、基本的判断に誤りがないようにする必要があります。

3. 経済活動を主とした指導者訓練に重点

大資本、大企業による市場の独占化

が世界的傾向である現実を直視し、かかる情勢下でJCメンバーの大多数を占めるわれわれ中小企業がいかんして成長繁栄していくかを研究することは、われわれにとって最重要、焦眉の急を要する問題であります。大企業と中小企業の共存共栄の形こそ、中小企業はもちろんのこと、大企業が発展しうる唯一の途であります。

したがって日本の資本主義体制の将来の姿を予見し、大企業の正しいからみ合い方を研究、あわせて日本JCのあり方を再検討しつつ日本経済の正しい発展をはかることこそJCメンバーに課せられた重大な課題であると考えます。したがって各地の経済商工諸団体その他との連携も強化し、情報の収集分析に努めるとともに、われわれの属する事業体に直接役立つ具体的な訓練、基礎的な近代経営法の研究などを各自の事業を通して、日本の経済社会の発展に寄与したいと考えるのであります。

4. 事業活動の弾力性化並びに地区協議会の強化

現在の日本JCの構成内容は、幅が広く、各ローカルの特殊事情もあるので、事業活動には弾力性をもたせ、全国画一の取扱いはせず、地方により事業の重点を変え、地方の特異性を生かすよう努力したいと思ひます。元来事業活動の3大支柱たる、修練、奉仕、親睦は相互に因果関係があると考えられるのであります。

かかる意味で委員会活動は企画、ならびに連絡機関としての使命をもたせ、地区協議会を強化して事業活動の中心を地区協議会に移したいと考えておりま

す。そのために予算の一部を地区協議会に還元いたします。

5. ローカルとの連携強化および事務局の強化

事業活動の活発化に伴い事務が繁忙化するので、事務局を強化し、ことに地区協議会ならびにローカルJCとの連携を緊密にしていきたいと考えます。内外の広報活動を強化し、中央、地方相互の思想を統一し、一貫した思想で、皆の納得のいく事業活動を行ないたいと考えます。そのために新たに専務理事制をしきます。

6. メンバー層の拡大

JCのマンネリズム化を防ぎ、将来の拡大発展を期するためJCの本質を失わない範囲においてメンバー層を拡大したいと考えます。ことに各種企業の有能少壮の人材を積極的に入れ、新しい血と頭脳を加え、明日の日本のリーダーであらんとするJCの一段の飛躍発展を図りたいと考えます。

7. JCの新生活運動

JCの拡大、活発化に伴い、会員相互の親睦交歓が盛んになるのは結構であります。度がすぎると本末転倒した社交クラブ化し、かつ各自に過度の負担がかかり、ひいてはあたり有為の材を失うことにもなりかねないのであります。JCの親睦は常に清潔、簡素かつ健康的な活力に溢れたものでなければならぬのであります。

『会報』No.9所載(抜粋)

1960

日本青年会議所

- 1 日本JC第10年度会頭に東京の石川六郎が就任(12月まで)
専務理事制度を創設、初代専務理事に坪内嘉雄(東京)が就任
日本JCスローガン「JCの一人一人が社会の希望」
日本JC綱領制定
JCI会頭にMilton Zapata(プエルトリコ)が就任(12月まで)
初の長期計画委員会開催
余市、鳥栖入会
- 2 安城、新城、日南入会
- 3 滝川、福山、防府、八女、明石入会
- 4.26 JCI第10回アジア地域会議がマニラで開催され、日本から石川団長
以下38名が参加(30日まで)
- 6 高砂、松本、七尾、富士五湖、八日市、倶知安、大宮入会
- 8 敦賀入会
- 9.20 日本JCシニア・クラブ発足(箱根・小涌園)
- 10 千葉入会
- 11.9 第9回全国会員大会が高松で開催され、900名参加(10日まで)
- 11.14 JCI第15回世界会議がパリで開催され、日本JCから東京の石川六
郎団長以下51名が参加(20日まで)
アジア地域会議をJCIコンファレンスと変更
- 12 西大寺入会
- 12.25 日本JC事務局、新東商ビル3階に移転

内外の動き

- 5.24 小牧空港で全日空機、自衛隊機と衝突
チリ地震津波、三陸・北海道中心に大平洋岸を襲
い大被害発生
- 6.23 新安保条約発効
- 7.19 池田内閣成立
自民党、高度経済成長・所得倍増計画を発表
- 11.8 アメリカ大統領選挙、ケネディ当選
日本海側一帯に豪雪



世界を結ぶ若さの力 理想に向かい 前進する青年会議所運動

第10代会頭 山崎 富治

東京JC 1925年生 57年東京理事長 61年会頭 元・(財)山種美術財団理事長 山種美術館館長 14年逝去

若いわれらの 心を集め
つくる集いに未来をかけて
JCの仲間 皆信じあう
足なみそろえて 行こうじゃないか
これは私の最も好きなJCの歌詞の一節である。ほんとうにあすの社会を築こうとする青年の意気が高らかに響いてくるようではないか。

私はJCこそ若さと可能性のかたまりであると大きな自信を持っている。満20歳から40歳までの品格のある青年であれば、人種、性別、思想、宗教、職業の別を問わずだれでも加入することができ、毎年1回全国大会、アジア地区会議、さらに世界会議に参加して、同じ目的のもとに討論し、切磋琢磨する人間と人間の結びつきができる。

この強い力を無視することはできない。いまや自由世界には66の国30万名のメンバーを擁する国際青年会議所がその威容を誇っている。毎年の世界会議における会頭選挙、開催地決定戦が年を追うごとに激しさを加えていくのも無理からぬことであろう。世界の青年の心と心が若さの力で結ばれ、ともに語り、ともに喜び励まし合いながら、新しい平和な世界創造の理想に向かって歩む足音を聞く時には、まさに国連ジュニアの力強さを痛感する。

青年会議所運動はつねに奉仕、修練、友情の原則を基調として実行されている。そして公正な批判者であっても特定の政党を支持することなく、不偏不党の自主的立場から最も正しい歩みを続け、青年の良識の代表たらんとしているのである。

(イ) 社会への奉仕=われわれはJCメンバーは、つねにそれぞれの地域社会に対して積極的な協力者であらねばならない。みずからの手をよごし、足を運んで、恵まれた団結の力を発揮するところにその理想が生かされてくるのである。

道徳の高揚運動や都市の美化作業も、交通対策、社会福祉事業、奨学金、辺地教育、青少年不良化防止等々の一つ一つが着々とあすの明るい社会建設に役立っている姿をみるなら、ほんとうにやりがいのある社会奉仕だ。またわれわれの市民税がいかなるルートを通して、どんな方法で使われているか、などの国民生活の一端を見つめようとした独自の仕事ぶりが、当局者から重視された一例もある。

国際的にはチベット難民救済に全世界から浄財が集められ、その人類愛の結晶は輝いている。JCマンは社会の批判者としてではなく創造者としての勇氣と実行力を一段と発揮していこうとしている。

(ロ) 自己の修練=実践のための勇氣を養い、次の時代を背負って立つには、なみなみならぬ実力識見を身につけなくてはならない。なんといっても若い、未熟だという謙虚な立場に立って自己の修練につとめ、あらゆる指導者訓練の場で鍛えるべきである。「経営研究会」と名士講演、国内産業見学、論文募集などのいずれもが血となり肉となつてその良識を養ってくれる。日本のみならず世界の政治経済の動きに対して、正しい判断力と強い意見発表がJC

活動の一つとして訴えられつつある。同時に自己の企業を合理化し発展させ、堂々と自由競争に打ちかかっていくだけの底力を発揮するようになければならない。そこに2代目、3代目の新しい方向づけも生まれてくる。

(ハ) 限りない友情=やあ、とひとこと、堅い握手によって限りない友情が世の中を楽しくする。社会奉仕の実践を通じ、苦しい団体訓練や、楽しい会合の中からお互いを知り、兄弟以上の友情へと発展する。

アジア地区の指導的立場のJCとして、多数の留学生を招き、技術者を出向させ、災害対策に協力する。利害を超越し、人種的差別を無視したJCの交際は清潔である。外国との兄弟JCのちぎりも、つきつぎと結ばれていく。大阪はサンフランシスコと、名古屋はロサンゼルスとそれぞれ経済交流を促進し、京都はパリと文化使節の交流を、岡山はサンノーゼと農業技術を相互に交換しながら、友情から兄弟愛にまでその暖かさを一段と強めようとしている。

こうして激動する国際情勢に対処し、国際緊張をやわらげていくのに、青年会議所運動の理想は徐々にではあるが力強く、各国の青年実業人の若き血潮の中にいきいきとして脈打っている。JCマンの良識と勇氣、世界を結ぶ若さの力をもっともって国家的、社会的に活用していただくよう、新しい方向づけに力をつくすことが、私に課せられたこの一年間の使命であろう。

『会報』No.11所載(要約)

1961

日本青年会議所

- 1 日本JC第11年度会頭に東京の山崎富治が就任(12月まで)
日本JCスローガン「JCは明日の世界の道しるべ」
JCI会頭にPeter Frankel(ブラジル)が就任(12月まで)
JCI会員、15万4000名となる
初のMid Year Executive Meeting開催
塩釜JC、仙台JCに合併
- 2 郡山、西脇入会
- 3 臼杵、飯田入会
- 4.29 JCIカルカッタコンファレンスがインド・カルカッタで開催され、日本JCから京都の小谷隆一団長以下19名が参加(5月1日まで)
- 5 刈谷、岡崎、砂川入会
- 5.8 日本JC政策審議会発足
- 5.17 日本青年会議所創立10周年記念式典が東京上野の東京文化会館で挙行され、来賓400名、会員1000名が参加
池田首相、公開質問状に答えて特別講演
- 6 豊田、豊岡、茨木、綾部入会
- 8 倉吉入会
- 8.20 第10回全国会員大会が旭川で開催され、152JC、1500名が参加(21日まで)
- 10.1 JCI第16回世界会議がプエルトリコ・サンファンで開催され、日本JCから東京の山崎富治団長以下40名が参加
- 12 坂出入会
会費値上決定
①入会金1万円から5万円へ
②付加金600円から1000円へ
役員増員
①副会頭4名から6名以内へ
②理事20名以内から25名以内へ
- 12.18 第21回定時総会が神田・学士会館で開催、61JC、150名が参加

内外の動き

- 3.15 日光東照宮の薬師堂焼失
福岡県上清炭坑火災、死者71名
ソ連、世界最初の間衛星船打上げに成功
フランス、サハラで核実験に成功
- 通産省、輸出貿易管理規則改正公布
- 4.28 沖縄の那覇で祖国復帰県民総決起大会開催、参加2万名
- 5.5 アメリカ、シェパード中佐を乗せた弾道ロケット打上げ、回収に成功
- 5.16 韓国に軍事クーデター、軍事革命委員会が実権を掌握
- 6.12 農業基本法公布
スポーツ振興法公布
- 6.21 小児マヒ流行
選挙制度審議会設置法公布
- 7.15 (財)国民協会設立
インドと借款協定に調印(2年間に8000万ドルを供与)
- 9.16 第2室戸台風(台風18号)により大被害
OECD発足
日銀、アメリカの3市銀から2億ドル借款に調印
- 11.24 国連総会、核兵器使用禁止宣言とアフリカ非核武装宣言を可決
- 11.29 児童扶養手当法公布
伊豆急行電鉄(伊東-下田)開通



明るい豊かな社会 —理想像に邁進せよ—

第11代会頭 古市 実

大阪JC 1922年生 60年大阪理事長 62年会頭 元・プライミクス(株)会長 20年逝去

私はまず本年度の出発に当たり三つの基本的考え方を着実に実行しようと考えました。

その第1は、年間計画の発表であります。昨年のうちに本年度の主要行事を決定し、それに沿って予定どおり着実に事業を実施しようと考えました。これによって各地JCにおける行事との重複を避けることができると考えます。その2は日本JCと各地JCとのコミュニケーションの重要性の強調であります。各地JC協議会あるいは記念事業などに参加して数多くの会員諸君と語る機会を得て、統轄機関としての日本JCの存在意義の理解につとめました。第3に、日本JC役員間の見解ならびに行動の統一を図ったことでもあります。本年度、充実した日本JCの運営がなされたのも、常に熱意ある役員が行動が発揮されたからであります。

以上三つの基本的考え方の上に立ってさらに本年度の運営大綱を3段階に分けて考えました。

第1段階は、4月に行なわれた国際青年会議所大阪会議の成功を期しての準備とともに本年度の運営方針の徹底であります。

第2段階にはいって、地区会員大会が各地で盛大に開かれ、また委員会活動も活発に動き出しました。代表的なものとして、EECに対する視察団の派遣、日韓・日華経済交流青年会議、本土・沖縄経済青年会議、各地で実施された移動マネジメントセンター、労働問題セミナー、身体障害者の雇用促進運動、青少年に対する道徳教育の問題などがあります。

第3段階として、「JCデー」の統一行事、岐阜における全国大会、ホンコンにおける11月の世界会議、12月の年度末総会等があります。JCデーの統一行事は社会教育問題、地域経済問題などにつき、各地JC、それぞれ市長を囲んで懇談会を開催し、日本JCも荒木文部大臣に社会教育の重点実施を建言するなど積極的意見の交換を行いました。

また世界会議では、大阪会議の体験を生かし、国際青年会議所の運営に積極的な発言をなし、日本JCから2名の役員を立候補させるとともに、近隣諸国との強力な経済交流を図り、また世界における麻薬の撲滅運動を提案いたしました。

このような体験から、われわれが考えねばと感じた点を次にあげますと、

1. われわれJCマンは、常に広い視野の上に立って時代の推移を予測し、未来図を描いて、計画的な運営を図らねばならないと思います。ものごとを考える時、とかく過去の風潮に捉われるかあるいは現実のこののみを見て判断する性格は、社会におけるリーダーとして最も注意しなければならない点でありましょう。

日本民族の優秀性と勤勉・努力が戦後十数年にして世界に驚異を与えるほどの経済成長を遂げたことは、われわれの潜在能力を示すものであり誇りを持つべきでありましょうが、しかし真の民主社会としての発展ではなく幾多の不均衡が生じていることは皆の認めるところであります。このようなアンバランスは道徳の問題についてもみられるが、

これはあまりにも自己本位に、あるいは現実のこののみに目を向けて考えられている結果がもたらしたことであり、未来の国民生活を考え真剣に取り組んでいる政治家や指導者の少ないことにもよるが、われわれの考え方自体も大いに考え直す必要があると考えます。

2. 長期計画を立てよう。われわれは広い視野で5年、10年、15年先のJCの理想像をさがして進むべきであります。明るい豊かな社会の実現を目標として、実現の問題をその方向に向かって、解決していかねばなりません。

とくに年々役員が変わるJCにおいては、計画的運営こそ団体としての組織力を発揮しうる唯一の道であると考えます。

私は本年一年間いろいろと考えましたが、実行できなかったことに5年後のJC実体図があります。

日本JCに長期計画特別委員会を設け、現役員と全く切り離して、各地の有力JCマンによって組織し、そこで討議した委員会計画を総会が認め、これに従って役員が運営の任に当たるとするのが私の私案であります。

もちろんこの計画の中には、対社会また対内的になすべき事項を細部にわたり検討し、たとえば内部的には5年後のJC数、会員総数、財政的措置、事務局の規模等、現社会が国際的に変わりつつある現況を予測して、計画を立て、その方針に会員が理解をもって進んでいくべきだと思います。また対外的には政府の諮問機関として有力な存在となる等、いろいろのアイデアが収集された計画がつくれると思います。

『会報』No.12所載(要約)

1962

日本青年会議所

- 1 日本JC第12年度会頭に大阪の古市実が就任(12月まで)
日本JCスローガン「経済の正しい成長になえJC」
企画室を設置
理事長バッジ、日本JC役員バッジ制定
移動マネジメント・センターが9地区で実施され、54JC、数百名が受講
山鹿JC退会
JCI会頭にLeslic M. Perrott Jr. (オーストラリア)が就任(12月まで)
JCI会員、19万2000名となる。
- 4 御殿場入会
- 4.3 JCI大阪コンファレンスが大阪で開催され、13カ国JC、1700名が参加(7日まで)
- 4.7 初の青年経済交流会議を開催
第1回日・韓経済交流青年会議
第1回日・華経済交流青年会議
第1回本土・沖縄経済青年会議
- 5 亀山入会
- 6 下呂、常滑、米沢、川越入会
- 6.8 EEC視察チームとして小谷団長以下11名(講師内田忠夫教授)を派遣(35日間)
- 8.22 労働問題セミナーが山梨・河口湖ホテルで開催され、92名が参加(25日まで)
- 9 三島、山中、むつ、三原、枚方、上田、日向、田川、平、光、唐津入会
- 9.3 JCデーの統一行事を画一化し、「市長を囲む懇談会」を開催
- 9.23 第11回全国会員大会が岐阜で開催され、ライシャワー・アメリカ大使夫妻招聘のもと2874名が参加(24日まで)
- 10 根室入会
- 11 浦和入会
- 11.4 JCI第17回世界会議がホンコンで開催され、51カ国JC、1026名が参加(10日まで)
日本JCから古市団長以下104名が参加、席上古市団長がJCI財務委員に指名され、千(京都)が地区担当副会頭に、白木(名古屋)が会務担当理事に当選
この世界会議で次のことを決定
①JCの誕生した日、1915年10月13日
②JCIの誕生した日、1944年12月11日

内外の動き

- ガリオア・エロア返済協定付属交換公文調印
大蔵省、対外支払現行15通貨の制限撤廃を公布
- 2.2 アメリカと相互関税引下げ協定調印
- 2.15 臨時行政調査会初会合
日・米ガット関税取決め調印
日本・ニュージーランド修正通商協定議定書調印(対日ガット35条援用の撤回など)
国税通則法公布
商法一部改正公布
日本宗教者平和協議会結成
日本婦人会議結成
- 3.18 フランス・アルジェリア臨時政府間で停戦協定(エビアン協定)調印(アルジェリア民族解放戦争終わる)
- 5.3 常磐線三河島駅構内衝突事故(死者160名、重軽傷322名)
公職選挙法改正公布
- 6.8 奥只見発電所完工
- 7.10 世界最大のタンカー日章丸(13万重量トン)進水
- 8.12 堀江謙一、日本人で初めて小型ヨットで太平洋を横断、サンフランシスコ着
- 8.24 三宅島大噴火
- 8.30 国産旅客機YS-11の1号機、試験飛行に成功
原研の国産第1号大型研究用原子炉に原子の灯ともる
アルジェリア制憲議会、民主人民共和国を宣言
防衛施設庁発足



JC運動の課題

第12代会頭 瀬味 保城

東京JC 1923年生 60年東京理事長 62年副会頭 63年会頭 元・オフセット(株)取締役社長 07年逝去

「日本のJC運動」は、あくまで各地青年会議所にその運動の根拠をもち、それぞれの地域に密着した活動の総和が評価されるものであることは論をまたない。

しかしながら、日本全土にくまなく拡大発展したJC運動には、いくつかの条件の格差を発見できるのである。その(1)は全国運動として、北から南まで組織された地域的格差であり、(2)は大都市と小都市の格差、(3)は最高限40歳より20歳の年齢差の起因する「物の見方考え方」の格差、(4)JC運動に対する「意識」の格差等々である。

この日本JCの体質的現状は、われわれが、綱領の中で唱える「志を同じうする者」の集団として、疑いのないものであると考えた場合、運動の精神的背骨たる「共通の思想」がいまだ確固たる連帯感をささえていない現実を認識しなければならないであろう。しからばここにいう「志」とは何であろうか。

JC運動は「明るい豊かな社会」を築くため「過去のよきものをとり、よりよき未来のためにする現在の運動」を展開するものであることは明確であるが、その前提にはわれわれ自らに「新しい自己創造の場」であるJCにおいて、新しい倫理、新しい精神に裏づけられた修練を課しているのである。

運動の出発は「新しい指導的経済人としての自覚」に始まり、その成果は「新しい指導的経済人としての自覚」に、さらに積み上げられていくものでなければならない。人間形成の算式は、自覚・意識+環境ではなく、自覚・意識×環

境であり、一方がゼロなら、他がいくらあっても、結果はゼロなのである。かく考えなければ、青年会議所の環境は生き生きとしてこないと思えるのである。

経済問題の一環としての人間能力の開発が叫ばれる折から、われわれは大いに反省すべきであると思う。

また、運動とは「理想の前進」である。どこにでも当てはまる公約数に妥協したり、単に総和を数で割った算術平均値を目標にすべきでないことは自明の理である。

日本JCは、本年度活動の重点として、地域開発に積極的に参加することを呼びかけてきた。この「地域」ということについて少し論じてみたいと思う。

JCにCommunity Service Committee (CSC)がある。日本語では社会福祉委員会と訳している。またJCIのMain ProjectにCommunity Development Programがあり、社会改良計画と訳されている。

このコミュニティとは、共存、共通社会のことを称し、Societyの意味の社会とは画然たる区別をしているのであるが、日本語に西欧諸国でいうコミュニティの適訳がないことは、いうなれば、「健全な近代市民社会」が日本にはいまだ建設されていない、ということにも通じよう。戦前は国家と家が重要視されたが、敗戦を契機として、国家も家もなく、個人のみが重要になったと極論する向きもある。

占領軍の指導的憲法に裏づけられた「自由平等」は、権利のみ過大で義務観念の希薄なものになり下がり、加えて個

の利害は全体の利害と一致するという共通観念のヒズミをもって、醜く浸透してしまった。

「社会を構成している人間は、みんなで責任を分担する」という民主主義の第一義につまずいている現状では「道徳心の高揚などは賽の河原の石積みにもひとしい」かもしれぬ。われわれは「地域」を考えると「物理的な地域」だけではなく、つねに健全な近代市民社会の育成を指向しなければならない。

正しい経済の発展も、正しい社会の育成に対する正常な努力なくしては、「正しい発展」はあり得ないと信ずるとともに、あくまでも跋行的であってはならない。われわれはこの社会の健全な拡大発展のためにこそ、その地域における「さわやか」なオピニオン・リーダーとしての矜持をもって、若い英知と情熱を傾倒する価値を発見しうるのである。

「JCの若さで結べ、世界は一つ」——本年度スローガンにもわれわれJCマンに国際性の高揚を適切に訴えている。近代人としての必須要件に、国際感覚の涵養があげられるのは当然のことであろう。

日本には戦前極端な民族的優越感があった。それが敗戦という現実につかり、また極端な民族的コンプレックスに転落した時期を思い起こす。

幸か不幸か神州不滅を誇った日本には初めての経験であったが、それから18年、わが国もようやく先進諸国をめざして雄飛する、いや、広く世界に突破口を見出さなければならない時点に立っている。

『会報』No.13所載(要約)

1963

日本青年会議所

- 1 日本JC第13年度会頭に東京の瀬味保城が就任(12月まで)
日本JCスローガン「JCの若さで結べ世界は一つ」
JCI会頭にEric H.Stevenson(スコットランド)が就任(12月まで)
JCI会員、28万1000名に達す
『JCI World』がアメリカJCの会報『US Jaycee's Future』と合本
男鹿退会
『日本青年会議所新聞』創刊
- 2 水沢、行田、三浦、府中入会
- 3.26 「JCの入会金・会費等の損金算入を認める国税庁通達」発令
- 5 古川、秦野、名張、井原、奄美大島、淡路、秩父、鹿屋、本渡、池田入会
- 6.12 日本青年会議所の中小企業経営開発視察団として名古屋の吉村吉太郎団長以下12名を派遣し、アメリカの名地のJCを訪問(35日間)
- 7 津島、福井、岩内、美唄入会
- 9.16 JCI沖縄コンファレンスが千JCI副会頭を議長に開催され、10カ国JC、600名が参加(20日まで)
日本JCから瀬味団長以下335名が参加
- 10 福島、武生、安芸、真庭、小野田、伊丹入会
- 10.16 日本青年会議所ヨーロッパ視察団として甲府の矢崎実団長以下11名を派遣(1カ月間)
- 11.18 JCI第18回世界会議がイスラエル・テルアビブで開催され、50カ国あまり1200名が参加(23日まで)
日本JCから東京の瀬味保城団長以下32名が参加
地区(日本、韓国、沖縄、フィリピン、台湾、南ベトナム、ラオス)
担当副会頭に名古屋の白木信平が就任、札幌の西尾長光がJCI教育青年委員会の担当理事に当選

内外の動き

- 日ソ貿易協定調印
- 2.10 北九州市発足
ビルマ賠償協定調印
夢の超特急256キロ達成
株式会社の貸借対照表および損益計算書に関する規則制定
アメリカ投資団来日
青空駐車を追放する自動車の保管場所に関する法律実施
アメリカ大統領、ドル防衛政策を発表
- 8.5 米・英・ソ3国核実験停止条約調印
- 8.17 沖縄離島定期航路客船転覆(死者84名、行方不明28名)
- 9.16 マレーシア国誕生
日本郵船と三菱海運合併、以後、海運会社の合併あいつぐ
- 11.22 ケネディ・アメリカ大統領、ダラスで暗殺さる



所信

第13代会頭 小谷 隆一

京都JC 1924年生 60年京都理事長 61・63年副会頭 64年会頭 元・(株)イセトー取締役名譽会長 06年逝去

近年、わが国のJC運動が飛躍的に発展しつつあることは、まことに喜ばしいことであります。しかし、JCは国民の大多数にその存在を知られ、わが国の社会、経済に貢献する団体として、広く認識されているでしょうか。率直に言って、確信をもって「然り」といえるほど、JCは必要な存在となっております。では、なぜでしょうか。

日本におけるJC運動が、団体として何か迫力の欠けるもののあるのは、1万5000名のメンバーの、JCの目的と存在に対する意識が完全に統一されていないからであります。全国の会員は、同じ旗印のもとに集まっていますが、JC運動の方向については、同床異夢であるといつては、いい過ぎでしょうか。少なくとも会員の意識には相当の幅があることは認めざるを得ないと思います。

われわれは「創始の精神」を忘れてはなりません。

われわれの先輩がJCを結成した時、祖国を救うものはわれわれ青年以外にないという、激しい使命感と責任感が沸々としてたぎっており、「祖国日本の復興」という一致した目標がかかげられておりました。

今、われわれはどうでしょうか。創始の当時に比べ何か一本足りないものがあるような気がしてなりません。JCメンバーはどんどんふえています。果たして一つの目標をめざして理想に燃えて進むひたむきさがあるといえることができるでしょうか。それは運動の目標がややあいまいなことからきていると思われます。

青年が理想を高くかけ、共通の目標に向かって手を取り合って進む時、そ

れは同志的結合と呼ぶことができます。

しかし、同じ目的のもとに集まっても、そこに理想の火がともっておらず、一つの目標をめざす共通の意味がなく、勇気にみちた実行力が伴わなければ、それは単なる集団にすぎないというべきでしょう。

JCは、二世のサロンであるといわれることがあります。それが理想のない、そして共通の目的意識のない、実行する勇気をもたない集団に対する批判の言葉であるとすれば、われわれは静かに反省しなければならぬと思います。

われわれの理想は「明るい豊かな社会を築き上げる」ことであります。しかしこれははなはだ漠然としたイメージで、その内容をもっと具体的に規定する必要があります。この未来図の不明確さが、JC運動に対する意識の幅となって表われているのであります。未来図をさらに明らかにするために、「近代的社会の確立」と「福祉国家とはなにか」について考えてみたいと思います。

わが国では戦後、制度として民主主義が確立され、近代国家の特色は形式的には備わっているのですが、果たして、「近代化された国家」として、満足すべき状態にあるでしょうか。たとえば、政治は国民の信頼を百パーセント得ているとは思えませんし、法の支配は確立されていても遵法に乏しく、言論の自由および労働者の団結権は乱用されているのが現状であります。

なぜ、このように制度として整いながら、満足すべき状態にならないのでしょうか。それはわが国には「近代的共同社会」（いわゆるコミュニティ）が十

分に育っていないからであります。われわれは、家族や国家という観念はもっていますが、社会という観念に乏しく、共同社会の一員たる市民としての訓練が欠けています。だから民主主義の機構はもっていても、その運営が正しく行なわれないうらみがあるのであります。

したがって「近代社会」の確立に、われわれが率先して努める必要があるのであります。

ここで、われわれ自身の問題について考えなければならぬことがあります。というのはわれわれは近代的な共同社会の確立を叫ぶ前に、まず自らが良識をもった市民として恥ずかしくないか、反省してみる必要はないでしょうか。

われわれは日常生活態度、行動において自らを持することにもっともっと厳格にならなければならぬと思います。すなわち、ローカルJCメンバーの一人一人は、その地域における共同社会の担い手として自らを律するとともに、さらに人々を指導する心構えと実行力をもつべきでありますし、ローカルチャプターは、その地域共同社会のさわやかなリーディンググループとして、社会規範の確立に勇気をもって臨むべきであります。

またいかなる社会的権威であっても、われわれのこの理想に立ち向かう者があるならば、正邪を明らかにすべく、声を大にして叫ばなければなりません。

いたずらに理論のみに走って現実を目をつぶること、また古きものに単純に妥協することは、若いリーダーのとるべき態度ではないと確信するものであります。

〔30億〕64.4所載（要約）

1964

日本青年会議所

- 1 日本JC第14年度会頭に京都の小谷隆一が就任(12月まで)
日本JCスローガン「新時代築く若さと指導力」
JCI会頭にConra O'brien(西インド諸島)が就任(12月まで)
JCI会員、29万名に達す
- 2 北上、五所川原、高田、直江津、岡谷、伊勢崎、館林入会
- 4.1 日本JC会報『30億』-JC・LIFE-創刊
- 4 小野、羽咋、長門、三沢、中村入会
- 5.6 JCIソウルコンファレンス、白木信平JCI地区担当副会頭が議長と
なって開催され、7カ国から380名が参加(10日まで)
日本JCから小谷団長以下165名が参加
- 7 逗子、都城、所沢、富岡、天龍、和泉、小松島、千歳、輪島、
相生、鯖江、磐田、美濃、小諸、赤穂入会
- 9 常枝、勿来、内郷、磐城、深谷、銚子、明智、藤磐、須崎入会
- 9.26 第13回全国会員大会が岡山で開催され、3000名が参加(27日まで)
- 10.19 JCI第19回世界会議がアメリカ・オクラホマで開催され、日本JCから
小谷団長以下31名が参加(26日まで)
JCI第21回世界会議の開催地が京都に決定
JCI副会頭に札幌の西尾長光当選
- 10.21 中南米経済視察団として大垣の河合達雄団長以下5名を派遣
- 12.11 日本青年会議所セミナー「JCのめざす福祉国家」が東商ビル・国際
会議場で開催

内外の動き

- 2.27 富士航空機、大分で墜落炎上(死者20名、重
軽傷者22名)
- 3.23 日本鉄道建設公団法公布
初の対アメリカテレビ宇宙中継送信実験に成功
産業構造審議会令公布
- 4.1 日本、IMF8条国へ移行
- 4.28 日本のOECD加盟正式成立
第1回戦没者叙勲を発令
- 5.14 日・ソ両国議員団の相互訪問実現、ソ連最高会
議議員団来日
国際捕鯨委、南氷洋捕鯨80%の削減を勧告
アメリカのロケット、月面近接撮影に成功
漁業災害補償法公布
三井物産、木下産商の吸収合併調印
- 8 東京都異常高温
- 9.17 東京モノレール羽田線完工式
- 10.1 東海道新幹線開業
- 10.10 東京オリンピック大会開かる
- 10.16 中国、初の核爆発実験を行なう
- 11.9 佐藤内閣発足



会頭所信

第14代会頭 遠山 直道

東京JC 1925年生 63～64年副会頭 65年会頭 元・日興証券(株)取締役副社長 73年逝去

すべての面に、戦後20年間の歴史から一段階を画すべき時を迎えた今日、新しいビジョンが古いビジョンに、そして新しい指導理念が古い指導理念にとってかわるべき必要をわれわれは痛感するのであります。この局面にあって、全国の青年指導者1万6000人を集めた青年会議所としては、単に「われわれはいかにあるべきか」をもとめるのみでなく、さらに一步すすめて、「われわれは何をなすべきか」という問題に積極的に取り組んでいかねばならないと考えます。

この大きな責任の担い手として、われわれは、われわれ自身の現状を正しく認識する必要があります。日本青年会議所は今や全国各地に283JC、1万6000余人の同志を持った世界で2番目の会員を擁する大国家JCとなりました。その拡大は恐らく過去の経過から見ましても、さらに毎年相当高いテンポで続けられていくものと考えられます。さらにこの青年会議所の量的拡大のみならず、そのメンバーの大半が3年、4年以内のJC歴のメンバーであるという質的な変化を、私たちは新たに認識したいと思います。

まずこの量的拡大についてはそれに対処するに必要な施策を立てることと、その量の意味する偉大なエネルギーをいかにして効率の高い一つの大きな運動に導いていくかを考えたいと思います。すなわちまず第1にコミュニケーションの確立ということであります。米国の民主主義理念の一つに、故ケネディ大統領の「正しい速い正確なコミュニケーションの存在しない社会に、正しい理解に立った民主主義は存在しない」という言葉が

ありますが、私はこの言葉を深くかみしめ理解して、正しいコミュニケーションの重要性を認識し、その確立を推進したと痛感するのであります。

そしてさらにこの量からもたらされる偉大な力というものの運用に関しましても、われわれが全会員のエネルギーを単にJCの内部的なことがらのみに消費することなく、一丸となってこれを社会に貢献する方向に向かって発揮する時、若き指導者の大集団としての力は、はじめて真に社会的なものでありうることを忘れてはなりません。

次に「新しい会員層の拡大による会員の質的变化」と「量的拡大そのものがひき起こした質的变化」の事実を私たちはどう評価し、どう対処しなければならぬでしょうか。JCの世代が今や大正から昭和に移りつつある事実は、端的に前者を物語り、後者については少数の人々によって始められたJC運動が、その巨大化によって今日、われわれの自覚のいかにかわらず、すでに押しも押されぬ社会的存在となっていることでもあります。この変化は直ちに内部的にも対外的にも、十分に機能しうる新しい組織を求め、われわれはそれに応じて、本年度より実施される大きな組織改正に踏み切ったのであります。さらに組織そのもののみならず、その運営においてもこの変化を率直に認めて、新しい青年会議所運動に反映させていかねばならないのであります。

われわれは、近代的福祉国家を創造するという大目標をかかげ、昨年一年間討議をつづけてきました。そして全国会員大会では、それは単なる富め

る社会、すなわち患者の楽園のごときもの実現ではなく、高い倫理ときびしい社会的規範にささえられた国際性のある平和な社会でなければならぬと決議しました。この目標達成の大事業は決して1年、2年の問題ではなく、むしろ人類とともに永遠につづく課題であるといえますが、われわれはこれをつねにわれわれ自身の身近な問題としてとらえ、一步一步その目標に近づいていくべきであります。

またわれわれのめざす福祉国家は、封鎖的・非協力的なものではなく、豊かな国際性につながるものであり、またそうした観点からみても十分に高い倫理性——個人の自由と尊敬を基盤とした——にささえられるものでなければならぬとすれば、それはおのずからわれわれ自身、つねに自らにきびしくあることを要求され、さらにその上に国際的水準において指導的な立場に立つ必要があります。

最後に改めて青年会議所運動について考える時、それに対する端的な答えはJC綱領にあると信じます。この綱領の精神こそは、急速に発展しつつある青年会議所の、その人数がいかにふえても、そしてその一人一人がいかに多岐な考え方に分かれていようと、常に変わらぬ基本精神であり、考え方や行動の最大公約数であると信じます。

すなわち、それは青年会議所の「社会的役割」を示し、活動における国家や地域社会とのつながりを強調し、そしてそれらのすべてが、青年会議所の最大の特質である若さの自覚のもとにあらねばならぬことを明確にしています。

『30億』65.1所載(要約)

1965

日本青年会議所

- 1 日本JC第15年度会頭に東京の遠山直道が就任(12月まで)
日本JCスローガン「福祉国家 創るさきがけ果たせJC」
常任理事・ブロック制度誕生
勤労青少年対策委員会が発足し、全国24カ所で勤労青少年問題懇談会を開催
国際文化交流委員会設置
JCI会頭にJohn L. Ruhde (オーストラリア)が就任(12月まで)
World Economic Conferenceがアイルランド・ベルファストで開催
直江津JC、高田JCと合併し高田・直江津JCとなる
- 2 須賀川、川口、石巻入会
- 3 庄原、福知山、境港、半田、福江、諫早入会
- 4.27 JCI台北コンファレンスが開催され、15カ国JC、449名が参加(30日まで)
日本JCから納屋団長以下260名が参加
- 5 太田入会
- 7 新庄、立川、土岐、白浜、田辺入会
- 9 益田、森、笠間、加賀、加茂、春日部、鎌倉入会
- 9.25 常陸宮ご夫妻ご臨席のもと第14回全国会員大会が横浜で開催され、276JC、4356名が参加(26日まで)
- 11.17 JCI第20回世界会議がオーストラリア・シドニーで開催され、48カ国から1600名が参加(24日まで)
日本JCから小谷団長以下52名が参加、西尾長光(札幌)が法制顧問、松添壮(大阪)が地区担当副会頭、小野正孝(長野)がプログラム担当副会頭に選任
- 12 瑞浪、木更津、江南、佐野、佐賀関、燕入会

内外の動き

- 伊豆大島の繁華街元町で大火(焼失340戸)
日本証券保有組合発足
ILO調査団来日
- 2.1 原水爆禁止国民会議結成
全日空貨物機、知多半島上空で行方不明
大蔵省、日銀法改正案決定
農村労働組合全国連合会結成
- 2.20 日韓会談、漁業・請求権・在日韓国人の法的地位の合意事項に仮調印
日本原子力発電会社東海原子力発電所、火入れ開始
- 公害防止事業団法公布
港湾労働法公布
農地報償法公布
- 6.1 福岡県山野炭鉱で大爆発事故発生(死者237名)
日・韓文化協定調印
首相官邸で日・韓基本条約、漁業・請求権・在日韓国人の法的地位・文化協力の4協定など調印
完成乗用車の自由化実施
- 10.21 朝永博士ノーベル賞受賞
OECD、日本を常任理事国に選任
漁業水域設定法公布



1966年度 日本青年会議所運営について

第15代会頭 辻 兵吉

秋田JC 1926年生 61年秋田理事長 64～65年副会頭 66年会頭 元・辻不動産(株)相談役 08年逝去

近代国家としての今日の日本にとって、最大の課題は、精神的基盤と物質的基盤とのアンバランスとされます。民主主義が個人の自由と尊厳を強調するあまり、ともすれば誤れる無責任な個人主義におちいり、確固たる道徳的基盤を見失った社会悪の横行や、自己のみを主張するがゆえの政治的ないがみ合い、にくしみ合い、企業の社会的意義を無視した無秩序な過当競争など、社会的連帯感の欠如と市民社会意識の欠乏が日本国家の健全な歩みに大きなブレーキとなっていることはいなめない事実であります。

この時に当たって、われわれは、青年会議所会員であるというたてまえからも、きびしい現状を自ら進んで打開しなければならぬ。若い企業経営者として、あるいは地域社会の若きリーダーとして、こういった一連の跋行的な国家の進み方を正しい姿に戻すために、福祉国家実現を目標とする新しい国民意識、国家意識を確立して新時代の担い手にならなければならないと信じます。

従って青年会議所運動も、真に青年らしい良識と英知をもって、既成の社会団体ではなし得ない改善と、前進の原動力になるという青年会議所が自ら求める社会的役割を深く理解し、上すべりな題目でない、具体的な事実を積み重ねるといふ方向へ進むことが要請されるべきであります。

このためには、たんに量的な組織のみに偉大さを求めず、質的充実をより高めるため、各地青年会議所と日本青年会議所は、さらに密接な意思疎通を図り、全会員をあげて、高邁にして崇高な「福祉国家実現」という大目標を達成しうる社会的土壌をつくり出す速度を早めなければならないことは、論をまたないところであります。

本年は、特にこのような意識の上に立って、新しい組織の効果的運営、日本青年会議所委員会の専門化、各地青年会議所の質的向上、広報活動の活発化など、青年会議所運動の理論武装と団結力の強化を図り、われわれに課せられた社会的責任を十分に果たしていきたい所存であります。

昨年度より日本青年会議所は新しい組織によって運営されております。しかし、はじめての組織運営であったため、いくつかの問題点が指摘されました。

委員会の専門化もその一つで、スタッフとしてのあり方に、いろいろな障害がありました。本年はこれをさらに整理いたしました。これは日本青年会議所と各地青年会議所の活動分野を明確にし、その独自性と相関性によって、青年会議所集団のエネルギーをいっそう高からしめるためであります。たとえば「福祉国家問題」をより具体化するために福祉国家研究委員会、福祉国家推進途上での大きな課題である社会開発については社会開発委員会、そして、次代を担う青少年について研究する青少年問題委員会などと、青年会議所運動展開に伴う問題点を解明するとともに、各地青年会議所の活動をより活発にするための専門的研究部門として、日本青年会議所委員会を完全に専門化しました。

これは日本青年会議所が各地青年会議所の活動について、具体的な方針の決定や実施が可能であるように、しかも、その存在する地域社会の特殊性を十分に考慮してプロジェクトを検討し、青年会議所運動を幅広くよく浸透しうるようになるために、その核心となるべき重要事項を掘り下げて解明し分析するのがねらいであります。

各地青年会議所の活動は、地域社

会を通じて国家へ、日本青年会議所の活動は国家を通じて地域社会へと、常に密接なコミュニケーションによってささえられるものでなくてはなりません。1966年度における日本青年会議所の新組織は、このコミュニケーションを明確に、かつ統一的にすることを主たる目的にして採用実施されるもので、換言すれば青年会議所運動の浸透をさらに促進するために、日本青年会議所と各地青年会議所の密接なコミュニケーションを助けるものとしてブロック協議会を設置されました。本年度は、このブロック協議会を地区運営の中心に考えるよう、さらに一歩前進させていきたいと思っております。

広報活動とは、会員の一人一人が、会員同士あるいは会員外の人たちと語り合うことから始まります。語り合いから運動が理解され、活動しやすい素地が醸成され、大きな方向性をもった運動として社会へ浸透するのではないのでしょうか。これまでの青年会議所運動は単なる内部活動のみに終わっていないのでしょうか。青年会議所運動が社会に浸透しかねているのは、広報活動の基礎ともいべき理論の解明が完全になされていないことに端を発し、高邁な理想を掲げているにもかかわらず青年会議所運動の本質が理解されていないと断じ得ます。

青年会議所理念の展開と、青年会議所運動の浸透には広報活動が活発化しなければならず、よりよい広報活動を行なうために会員全部が理論武装しなければなりません。このためには、会員の意見や行動についての共通の討議の広場として、新聞や機関誌の役割は重要であり、全会員が購読し、これを大いに活用されんことを望みます。

『30億』66.1所載(抜粋)

1966

日本青年会議所

- 1 日本JC第16年度会頭に秋田の辻兵吉が就任(12月まで)
日本JCスローガン「Jayceeの若さで創ろう明るい未来」
JCI会頭にEdward A. Merdes(アメリカ)が就任(12月まで)
- 2 小谷、遠山両元会頭、アメリカJC政治セミナーに招待され出席(ワシントンJC)
- 2.15 辻会頭ら佐藤首相と歓談
- 4 相模原、長井、伊万里、上尾、荒尾、宿毛、勝浦入会
- 5 島田、美称、土佐、清水、宝塚入会
- 5.27 JCIホンコンコンファレンスが開催され、16カ国、358名が参加、日本JCから秋田の辻兵吉団長以下105名が参加
- 7 草津、新居浜入会
- 8 橋本・伊都入会
- 8.24 第1回政治問題セミナーが軽井沢・晴山ホテルで開催され、120名が参加(26日まで)
- 9.7 マーティスJCI会頭、日本を公式訪問
- 10 八王子、丸亀、三条、下松入会
- 11 市川、藤沢、駒ヶ根、峰山、佐久、竹原入会
- 11.5 第15回全国会員大会が神戸で開催され、5200名が参加(6日まで)
- 11.7 JCI第21回世界会議が京都で開催され、海外から63カ国JC、1157名、日本JCから秋田の辻兵吉団長以下2358名、合計3515名が参加(12日まで)
この会議で札幌の西尾長光が会員拡大担当常任副会頭に、名古屋の加藤嘉紀が運営担当副会頭に当選

内外の動き

- 物価懇談会初会合
- 2.4 全日空ボーイング727機、羽田空港着陸前に東京湾に墜落(死者133名)
公社債市場4年ぶりに再開
- 3.4 カナダ航空DC8型機、羽田空港着陸失敗、激突(乗客・乗員中64名死亡)
- 3.5 イギリス海外航空ボーイング707型機、富士山上空で空中分解(死者124名)
- 8.18 北京で起こった紅衛兵運動、中国全土に波及
- 11.13 全日空YS11型機、松山空港沖に墜落(乗客・乗員50名全員死亡)



1967年度 日本青年会議所基本方針

第16代会頭 柳沢 昭

東京JC 1928年生 65年東京理事長 66年副会頭 67年会頭 元・グレラン製菓(株)取締役社長 03年逝去

本年度の運営の基本といたしましては、過去毎年のように新しい分野を開発し活動を広めてまいりましたわれわれの青年会議所運動を集約すると共に、年々蓄積してまいりましたわれわれの力を「社会開発計画の推進」に結集し、若い力をもつ革新者(イノベーター)として力強い一年の歩みを印したいと存じます。

われわれがわれわれの活動を通じて社会に働きかける場合、そのよって立つ精神的基礎、すなわち青年会議所の活動理念が必要であります。

ここ数年来、表明してまいりました近代福祉国家建設という旗じるしは、明日の日本を「明るく豊かな社会」であるとし、物質的問題ばかりでなく、高い倫理ときびしい社会的規範にささえられた国際性のある平和な社会をめざす国家でなければならぬと定義づけており、ビジョンとして追求すべき大いなる課題であります。

明るい豊かな社会の建設をめざす青年会議所運動の枢軸をなすものは、社会開発計画であります。これはわれわれの住んでいる、そして事業を営んでいる地域社会の発展向上を図り、技術と文明の恩恵を最大限に享受しつつ、正義と秩序の中に生きようとする人類最大の命題を実現しようという計画であります。

過去数年来、日本青年会議所はこの問題を積極的にとり上げ、全国各地のローカル青年会議所におかれましてはこの事業の重要性、有効性をよく認識され、意欲的に運動を展開してまいりましたことは周知の事実で、地域住民

の関心と期待を呼び、為政者の共感をさえ獲得してまいりましたことはまことに喜ばしいことであります。

しかしながら、かかる重要にして有効な事業も全ローカル青年会議所の過半数は、いまだに着手し得ない現状でありますし、またこの運動の解釈の幅により、あるいはそれぞれの地域の直面する問題の多様なることによって、十分な進展をなし得ない場合も見受けられます。そして今後各地に展開される運動も多岐にわたることが予想されますし、各部門の調査分析結果の実施段階では、自主財源に乏しい地方財政の壁を破らなければならず、このため政治の分野にまで関連を及ぼさずにはおかない広範な事業になりつつあります。

1967年度も、この事業を各地青年会議所におきまして積極的に採用実施していただくためには、地域およびそのローカル青年会議所の特性に応じた、きめの細かいアドバイスが要求されることは当然であります。いかなる特性をもった地域であれ、333の都市で全ローカル青年会議所が必ず実施していただくよう推進していきたく考えております。

以上のごとく、社会開発計画の推進を主軸としてわれわれの運動を展開した場合、当然多岐にわたる課題がわれわれに与えられてまいります。住民福祉、環境整備、教育の充実、文化向上等、関心のもたれる分野の中で「次代を担う正しい青少年の育成」は、われわれの運動が過去に幾多の貴重な蓄積を残してきました。青少年は明日の日本の希望であり、世界と将来を築

く力であります。その健全な身体をもとに、広い視野と正しい見識をつちかい、豊かな情操と高い徳性をみがき、健全な社会人として成長させることは、わが国の発展に直結する重要な課題であります。身近なわれわれの企業の中に働く勤労青少年の健全なグループづくりを重点に、さらに家庭教育、学校教育及び社会教育についての研究を強力に推進していきたく考えます。

社会開発を考えると、一方において経済開発を忘れることはできません。

産業の盛衰、企業規模の変遷、人口問題、あるいは流通問題等から各地における経済構造の変遷は、その地の社会問題に発展します。均衡のとれた経済、社会両面の開発を理想とすることは地方自治をたてまえるとする地域行政の重点的課題であります。

われわれ青年会議所会員は、経済人として地域社会における経済的構造変革と、その影響を受けざるを得ない企業の変遷に対し、きびしく現実を直視し、洞察と対策を考えなければならぬと思います。

また同時に企業経営者としての社会的責任、すなわち企業経営を通じての社会への貢献にさらに研究を重ね、あわせて企業の体質改善と今後の日本における経営のあり方について、密度ある研鑽を重ねたいと思います。

このような経済開発の問題として「経営者能力の開発」ならびに「企業経営者としての社会的責任の究明」をとり上げた次第です。

『30億』67.1所載(抜粋)

1967

日本青年会議所

- 1 日本JC第17年度会頭に東京の柳沢昭が就任(12月まで)
日本JCスローガン「Jayceeの勇気で築こう正しい社会」
JCI会頭にClifford E. Myatt(プエルトリコ)が就任(12月まで)
- 2 日立、今治入会
- 2.11 日本JC共催のもと日本航空世界一周記念が開催され、ミス国際親善が来日
- 2.23 衆議院、JC関係者13名を招いて激励会を開催
- 3.10 柳沢会頭ら佐藤総理と懇談
- 4 酒田、鶴岡、安来入会
- 4.13 JCIソウルコンファレンスが開催され、日本JCから柳沢団長以下260名が参加(16日まで)
- 6 備前、近江八幡、熊野入会
- 7 大野、鹿沼、高槻、珠洲、南陽、村上、豊中、箕面入会
- 8.9 台中JC児童親善団、日本JCを訪問
- 9 宇都宮、藤岡、河内長野入会
- 9.3 JCデー総一行事「交通戦争から市民を守ろう」行なう
- 9.27 第2回政治セミナー、東京で開催(29日まで)
- 10 旭入会
- 10.7 第16回全国会員大会が広島で開催され、353JC、5663名が参加
- 10.28 JCI第22回世界会議がカナダ・トロントで開催され、80カ国JC、1500名が参加(11月4日まで)
日本JCから柳沢団長以下60名が参加
この会議で東京の前田博が地区担当副会頭に当選
- 12 水口、阿南、糸魚川、武雄、寒河江、掛川、平田、川西入会

内外の動き

- 4.16 東京都知事に美濃部亮吉当選
- 6.5 アラブ各国とイスラエル軍、各地で全面的戦闘にはいる
- 6.30 ケネディラウンド、48カ国調印
日本、資本の自由化措置実施(第1次)
IMF総会、SDR(特別引出し権)創設を可決
- 10.8 羽田空港で三派全学連と警官衝突
YS-11型機、対米輸出決定
日米首脳会談終わる、小笠原返還決定、沖縄の返還問題は継続協議
- 11.18 イギリス、ボンドの平価切下げを公表
ロンドン・パリの金相場高騰
- 12.3 南ア連邦ケープタウンの病院で世界初の心臓移植手術成功
- 12.9 東京都電の銀座線など9系統廃止
中央高速道路一部(調布-八王子間)開通
東京コンテナターミナル会社、神戸コンテナターミナル会社設立される



新しい時代の夜明け

第17代会頭 神野 信郎

豊橋JC 1930年生 64年豊橋理事長 65～66年副会頭 68年会頭 元・中部ガス(株)相談役 18年逝去

本年度の基本プログラムは、昨年広島における臨時総会の席上、前年度と同様「指導力の開発」と「社会開発の推進」の二つにおくことが採択されました。

私は昨年、会頭立候補に当たって、当面の「社会開発の推進」の基本的な考え方について次のように述べました。「私たちのめざす福祉国家は、人間の尊厳が確立し、自由であり民主主義に裏づけられた社会であって、愚者の楽園ではありません。それは一人一人の個性ある人間性が開花し、自分たちが国家や地域に貢献している誇りと生きがいを感じ共感する社会であります。これこそ、私はJAYCEEの理想とする国家であると考えます。私たちは、このような新しい国家を築いている最も基礎的な社会単位を、新しいコミュニティ(市民共同社会)と名づけ、このコミュニティなしに新しい国家はあり得ないと確信して、その創造にとりかかったのです。もちろん、新しいコミュニティを創造し、開発を推進していくには、まずコミュニティを形成する個人個人の開発が第1に必要でありましょう。

当面の青年会議所運動において、「指導力の開発」と「社会開発の推進」のプログラムが2本の柱といわれるゆえんがそこにあると私は考えております。JAYCEEの社会開発計画の真の行動目標は、単に地域の利害問題の解決をめざすのではなく、全市民の希望をさぐり、良識をゆり動かし、その共同参加と理解を得てリードする新しい社会に対する挑戦でなければならぬと考えています」

また、JAYCEEと「指導力の開発」

については次のように述べました。「日本の青年会議所運動は、自らの考えに発してこれを世に問い、自らの行動によって具現してきました。これを推進したものは、たゆまぬトレーニングによって鍛えられたすぐれた指導力であります。青年会議所の指導力とは、権力と結びついた古いヘッドシップではありません。それは誠意をこめた説得と理解の上に立った民主的な指導力であるべきで、それは大衆生活の潜在的なエネルギーと意思を、盛んな気迫をもって顕在化し、先導する、真に創造的な能力だといえましょう」

私は、創始以来18年間にわたって、黙々と地域社会の信頼を勝ち得て成長した青年会議所運動が、このような基本プログラムを採択する姿で結集していることに、深い感激と自信をもつものであります。

「指導力の開発」こそ「新しい人間の創造」であり、「社会開発の推進」こそ「新しい社会の創造」であると私は考えています。

このとらえ方は、重大な転換期にある日本社会と、新しい指導者としての若い世代とを、歴史的、有機的に考えようとする立場です。現在の日本において、どのような型の「新しい人間、新しい社会」が待望されているか——これに回答を与え、日本をリードしていくものこそ、若い世代の知性と勇気と情熱であって、現在における青年会議所運動とJAYCEEの存在意義は、この期待に応えることであり、もしそれができないならば、他の若い世代のグループが新しい指導者として、私たちにとって代わるのでありましょう。

私は全国のJAYCEE諸君が、「指導力の開発」と「社会開発の推進」のもつ現代的意義を十分考え、新しい指導者の姿を明確につかむことを望みたいのです。

それでは、現在、新しい指導者に何が必要でしょうか。どのような指導力の開発、どのような社会開発の推進が必要なのでしょう。日本の未来のために私たちは何をすべきでしょうか。

私は、JAYCEEの一人一人が「意識革命」に取り組むことを提案いたします。新しい時代の指導者には、ケネディのように、清新で強烈なリーダーシップをもち、高いビジョンをかかげながら、現実即して常に第2の案を備えるたくましい行動力が必要だといわれています。その前提として、しっかりした自分自身の理念をもつことが大切であります。

古来から、大きな夢や勇敢な行動力は、自信にみちた見識から生まれるといわれます。国際経済の見通しと経営に対する確固とした哲学をもたずに、どうして指導的経済人となり得ましょうか。自分の住む地域社会に対する関心なしに、どうして地域発展のオピニオン・リーダーたり得ましょうか。明確な国家に対するビジョンなしに、どうして国民の指導者たり得ましょうか。

私が広島大会において、「4つの提言」を呼びかけたのは、JAYCEEが新しい指導者として自覚し、自分なりの意見をもち、自信をもって、当面の基本プログラムである「指導力の開発」と「社会開発の推進」に取り組む場合の、方向づけにさせていただきたいと考えたからです。

『30億』68.1所載(抜粋)

1968

日本青年会議所

- 1 日本JC第18年度会頭に豊橋の神野信郎が就任(12月まで)
日本JCスローガン「日本の正しい行手 しめせJaycee」
JCI会頭にPhilippe Abrauel (スイス)が就任(12月まで)
- 1.11 日本JC事務局の効率的運営のため四部制を採用
- 1.19 全国理事長会議で100名の講師団が決定
- 2 久慈、有田、青梅入会
- 2.9 神野会頭ら日商影山専務らと懇談
- 3 渋川、五泉、都留入会
- 3.7 日商との相互連携を推進するために事務局ベースによる第1回連絡懇談会を開催
- 4.30 JCIマニラコンファレンスが開催され、日本JCから神野団長以下140名が参加(5月4日まで)
- 6 因島入会
- 7.16 神野会頭が日高第154回常議員会に出席し、青年会議所運動の現況を報告
- 8 新見、茅野、御坊、大竹、高島入会
- 8.9 第3回政治問題セミナーが東京で開催され、「世界の中の日本・アジアの中の日本」を討議(参加211名、11日まで)
- 9 町田入会
- 9.3 JCデー統一事業「21世紀の日本の文明を創る新しい教育について」の座談会が各地で開催
- 10 松戸、鈴鹿、伊那、諏訪、上砂川、行橋、小林、加西入会
- 10.5 第1回極東アジアJAYCEEシンポジウム、札幌で開催
第17回全国会員大会が札幌で開催され、382JC、5968名が参加(6日まで)
- 11.10 JCI第23回世界会議がアルゼンチン・マルデルプラタで開催され、51カ国JC、550名が参加(16日まで)
日本から神野団長以下33名が参加
この会議で前田博(東京)が財務担当常任副会頭に指名され、また斎藤滋(東京)が地区担当副会頭に当選
日本JCのPR映画「日本を築く」を制作
- 12 勝山、香柱、高津、鳴門、三田、須坂、草加、羽島、富田林、総社、守口入会
- 12.13 日商との第1回幹部懇談会が開催され、共同事業の一つとしてサンフランシスコセミナーの開催を検討

内外の動き

- 1.1 アメリカ、ドル防衛策を強化
日・英新原子力協定に調印
- 5.13 アメリカと北ベトナムのパリ和平会談開かる
- 5.16 十勝沖地震発生(死者行方不明者47名、家屋全半壊約2000戸)、政府対策本部を設置
- 6.6 R・ケネディ上院議員、ロスアンゼルスで狙撃され死亡
横須賀線電車内で時限爆弾爆発(死者1名、重軽傷者28名)
国連総会、核防と南ア非難の両決議を可決
フランス総選挙第一回投票開票の結果、ドゴール派が圧勝
- 6.26 小笠原諸島復帰、現地と東京で返還式典行なう
日本・イラン貿易協定調印
- 7.1 交通反則金と郵便番号制スタート
対ドル円相場、3年半ぶりに360円割る
- 7.7 参院選の結果、社党惨敗、自民は現状維持、タレント候補の上位当選めだつ
住民基本台帳の登録人口、3月末現在で1億198万8020名となる
42年度簡易生命保険発表によると平均寿命男68.9歳、女74.2歳に伸びる
日通事件の捜査終わり、政界の起訴2名、政治献金の46議員は不問
- 8.8 札幌医大で日本初の心臓移植手術
- 8.20 ソ連・東欧軍がチェコへ抜き打ち侵入し首相らを連行
ブラジルで臓器移植法発効
- 8.24 フランス、初の水爆実験に成功
東北本線の全線複線化完成
- 10.21 新宿騒乱事件起こる
- 11.6 アメリカ大統領選でニクソン当選
- 12.10 三億円強奪事件起こる



正義ある繁栄を

第18代会頭 牛尾 治朗

東京JC 1931年生 67年東京理事長 68年副会頭 69年会頭 現・ウシオ電機(株)代表取締役会長

「人間の小さな第一歩も人類には巨大な歩みである」と月への第一歩をししたニール・アームストロングは月から第1信を送ってまいりました。このはなばなしい快挙がその幕開けを象徴するであろう、栄光の1970年代を目前にひかえ、この1年間の充実した青年会議所運動に強い確信をもちながら、私は4つの問題を提起いたしました。

その1つは、「変革する1970年代を歓迎しよう」という提起であります。1970年代の変革は科学の発達、技術の革新、経済の繁栄、社会の多元化、世代の断絶、価値観の変化と、あらゆる変革を中心に、ドラッカーの言をかりれば、かつての知識や体験がまったく想像し得ない非連続の変革の時代である、といわれております。しかるに現状は、このような変革に拒絶反応を示し、あるいは70年代の進歩へ抵抗を示す体制の力、社会の底流があることをわれわれは知るのであります。そのような社会の底流にもかかわらず、青年会議所会員は1970年代の変革を歓迎すべきである。この変革こそ新しい時代、新しい人間、新しい社会の繁栄をつくる入口であるからであります。変革の嵐を先取りする決意こそ、1970年代の変革を歓迎すべきすばらしいJAYCEEの姿勢であると思うのであります。

第2の提言は「新しい指導力を率先して実行しよう」という提起であります。新しい指導力とは、古い権力と結んで新しい変化の中に指導権のヘゲモニーをとろうとするものではありません。新しい指導力とは、新しい世代におもねり、新しい力と組んで変革の中に権力体制を取ろうという態度ではありません。JAYCEEのいう新しい指導力とは、みんなが参加できる指導力なのであります。共通の目標、共通

の実行方法に対する合意、システムへの共感、このようなものを中心にわれわれはみんなで考え、みんなで議論し、みんなで行う参加のリーダーシップを確立しなければならないと思うのであります。

いまや同一の文化、同一の価値観、同一の生活感情を前提としたホモニアスなリーダーシップの時代は終わりました。いろいろな考え方、さまざまな価値観、そして多彩な能力を融合しながら目標への共感と方法への同意によって、力強いチームワークをつくるヘテロニアスなリーダーシップこそ、70年代のリーダーシップであると思うのであります。

3番目の提起は「正義ある繁栄をつくろう」ということであります。戦後20数年の繁栄をみると、この繁栄が「患者の楽園」ではない、といい切る自信があるだろうか。繁栄によってつちかわれたマイホーム主義、住民の間に横行する無関心、ことなかれ主義、全体を考えない個人主義、このようなもの氾濫が、この社会に欺瞞、不正、おもねりをはびこらせているのではないだろうか。70年代の繁栄は、正義ある繁栄でなければならない。隣人の幸福を願うものが正しく報われるような、正義あるものが正しく報われるような、正義なきものは去らなければならないような社会の確立こそ、「社会と人間の開発」をめざす青年会議所運動のいちばん大きな使命であると私は思います。そのときこそ、この街はわが故郷、この国は守るに値する美わしきわが祖国、という民族の共感が、青年にも胸を打つに違いありません。

最後は「アジアの中の日本について考えよう」という提起であります。われわれはかつての大東亜戦争でつくられた、アジアの各民族の日本に対する不

信感を払拭するという自信があるだろうか。つねにエコノミック・アニマルといわれ、ビジネスライクな立場で1970年代のアジアの中の日本を考えると、私は慄然たる姿を想定するのであります。アジア民族に対する共感、もっとも進んだアジアの中のこの国が、アジア全体の繁栄のためにあえて犠牲を払う精神をもつことによって、アジアの中で歓迎される日本をつくろうではないか。そして1970年代を通じて、アジアの中で歓迎される日本になってこそ、この国の経済の成長を約束する道であり、この民族の生きがいと幸福をもたらす道であると確信するものであります。

以上4つの提言を申しましたが、いずれも現実的には非常にむずかしいものであります。しかし、われわれは変革に対するいかなる亀裂があろうとも、未来への挑戦を続けなければなりません。

1970年代の変革は、予測のつかない霧におおわれております。しかし、科学の進歩によって人間が歴史をつくる時代になりました。いまこそ私は「未来は人の手の中にある」というキューリー夫人の言葉を思い起こすべきだと思います。科学の時代なればこそ、技術の革新があればこそ、1970年代こそ人間の英知と勇気と情熱がもっとも大きく必要とされる10年間であろう。われわれはそういう意味で、1970年代は「青年の英知と勇気と情熱の手の中にある」ことを確信するものであります。

青年会議所運動は今日を明日の黎明と考え、未来に挑戦する運動であります。われわれはあらゆる各地の社会で進歩への抵抗、変革への拒絶をもともせず、あらゆる挫折感を乗り越えて青年のための運動を続けようではありませんか。

『30億』69.11所載(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第19年度会頭に東京の牛尾治朗が就任(12月まで)
日本JCスローガン「Jayceeの総意で示せ日本の姿勢」
JCI会頭にThomas E.Gates(アメリカ)が就任(12月まで)
『JCI World』季刊となる
JCIの会員40万명에達す
- 1.10 牛尾会頭ら大平通産大臣と懇談
- 1.20 牛尾会頭、東大入試中止について経団連記者に談話を発表
- 2.21 日本生産性本部主催の財界新春トップマネージメントセミナーに牛尾会頭が講師として出席
- 3 袋井、佐原入会
- 3.1 日商幹部と懇談会を開催
- 3.27 沖縄経済振興懇談会が那覇で開催され、日本側団員に米原副会頭、桧山法制顧問が参加
- 3.29 LDインストラクターセミナー、京都で開催(30日まで)
- 4.5 栃尾、伊達、茅ヶ崎、善通寺入会
- 4.5 万博野外劇場の起工式挙行
- 4.11 ベピンJCI副会頭、日本各地を公式訪問(22日離日)
- 4.25 JCI高雄コンファレンスが開催され、22カ国JC、1200名が参加(29日まで)
日本JCから牛尾団長以下366名が参加
1970年コンファレンスの福岡開催が決定
- 5 新宮、鴨川、春日井、高荻入会
- 5.5 ゲイツJCI会頭、日本各地を公式訪問(13日離日)
- 5.9 ゲイツJCI会頭、牛尾会頭らと佐藤首相を訪問
- 6.7 JCI新事務局ビル完成
- 6.22 牛尾会頭ら17名の沖縄視察団が訪沖し、沖縄JCと共同コミニケを
発表(26日まで)
- 7 東海、夕張、鳥羽、栗山、八日市場入会
- 7.15 日本生産性本部主催の軽井沢トップセミナーに牛尾会頭が講師として出席、「企業内ゲバ論」を語る
- 7.18 第4回政治問題セミナーが東京で開催され、安保、沖縄を中心に討議(参加265名、20日まで)
- 8 本庄入会
- 8.6 アメリカ流通機構研修視察団が日商と共催で渡米(157名)
- 8.21 沖縄、安保、国防をテーマに、牛尾会頭が愛知外相と対談
- 8.29 ボンベイコンファレンスに秋保団長ら7名が参加
- 9.3 東京JC創立20周年記念式典が開催され、JCデー統一行事「日本の平和と安全について」の討論が各地で開催
- 10 湯沢、原木、塩尼、大船渡、那賀、羽幌、甘木、気仙沼入会
- 10.4 第18回全国会員大会が新潟で開催され、6500名が参加
- 11.2 JCI第24回世界会議がトリニダッド・トバゴで開催され、50カ国JC、1400名が参加(8日まで)
日本JCから牛尾団長以下44名が参加
この会議で東京の前田博がJCI会頭に当選
- 11.22 牛尾会頭、沖縄返還で談話を発表
- 11.24 日本・沖縄青年会議所一体化を協議(那覇)
- 12 泉南、真岡、海南、小山、館山、大川、三鷹、宇治入会(全国425JC、2万6937名となる)
- 12.27 衆院選でJC関係者18名が当選

内外の動き

- 4.28 ドゴール・フランス大統領退陣
- 5.26 東名高速道路全線開通
- 6.15 フランスの大統領にポンピドゥー前首相当選
- 7.20 アメリカの「アポロ11号」が人類初の月面着陸に成功、月の石を持ち帰る
- 8.3 大学運営臨時措置法案成立
日歩1銭6厘(年利5.84%)の公定歩合を年利建
てに改め、6.25%に引上げを決定
- 9.3 ホー・チ・ミン北ベトナム大統領死去
日本商工会議所は総会で新会頭に永野重雄富士
製鉄社長を選出
第24回国連総会開会
政府、ボリビア新政権を承認
閣議でココム大幅緩和決定
自由化促進閣僚協で輸入自由化55品目を公表
- 9.28 西独首相にブランド選出
公取委、八幡・富士両製鉄合併に同意審決「新
日本製鉄」来春発足決まる
佐藤内閣は、39年11月9日に成立してから満5年、
6年2カ月続いた吉田内閣につぐ歴代二位の長期
政権となる
宇佐美日銀総裁の後任に佐々木直副総裁が昇格
就任
衆議院解散
日本の有力企業約20社が協調して、アメリカのコ
ングロマリット、ナトーマス・グループに資本参加
を決定
政府、今年度の輸出見通しを167億2000万ドル
(通関ベース)に決定
44年産米の収穫は1400万3000トンで一昨年、
昨年に次ぐ豊作
アメリカ政府は、駐アメリカ日本大使館を通じて繊維
自主規制を新しく提案
- 12.27 衆院総選挙の結果、衆院の新勢力分野は、自民
288、社会90、公明47、民社31、共産14、
無所属16と確定
わが国の電力・鉱山・石炭業界、フランス原子力
庁およびイタリア炭化水素公社と手を結んでウラン
の共同開発に乗り出す



会頭所信

第19代会頭 米原 正博

鳥取JC 1932年生 61～66年専務理事 69年副会頭 70年会頭
元・HOTEL NEWOHTANI 鳥取取締役名誉会長 09年逝去

大衆社会の正義のために、勇気をもって決断し行動しよう。

青年会議所は、永遠に若さを保っていく団体であります。若さの最大の特質は常に純粹であり、清新であり、そして行動力に富んでいることであります。この若さによってくる豊かな創造性と、社会の期待にこたえようとする切なる心情は、われわれ青年会議所の真髄であります。それは、一般の社会常識では考えられない度合いで、着実に社会正義を実現していくものなのであります。

現在のわが国の高度経済成長のヒズミとされる「人間疎外の現象」は、生活環境、教育、行政などの各分野において数多く露呈されてまいりました。このヒズミの是正を一つ一つはかるには、すべての事象にたいする「人間性の回復」による以外にないと考えられています。

この「人間性の回復」こそ、われわれJAYCEEが理想とする心豊かな明るい社会の実現につながるものであります。そのためにわれわれ青年会議所は、地域社会の世論に立脚した勇敢な提言と果敢なる行動力を着実に起こし、つねに、大衆社会の正義と青年会議所にたいする信頼にこたえなくてはなりません。

われわれ青年会議所の同志的結合による組織体としての全国的な行動は、各地域においてますます高く評価され、より多くを期待されてまいりました。しかしながらわれわれは、資本の自由化を始めとする国際化、新旧世代のゼネレーションギャップ、そして情報革命の

進展のなかにあつて、ただちにそれらに対応できるだけの能力、変革を読みとる洞察力、加えて勇敢なる決断力の研鑽が急務であることを忘れてはなりません。

これが青年会議所運動にみずからの意思で参加し、参画した会員の責務でもあります、われわれは、日常の青年会議所運動を通じて近代的な共同社会の確立に腐心しつつ、みずからをとりまく社会環境のなかでたゆまざる自己開発を続けて新時代に即応する頭脳と行動力をたくわえなければなりません。もし青年会議所がその一人一人にささえられた組織に成長しなければ、1970年代においてわれわれの運動は消滅してしまうと断言してもはばかるものではありません。

私はきたるべき1970年は、JAYCEEの一人一人があらゆる変革に挑戦する具体的な行動を開始する初年度であると確信しております。

1970年という歴史的な年度に立たされるわれわれJAYCEEとしては、JCI福岡会議、万国博覧会、さらに1970年安保という三つの大きな事象をいかにとらえ、いかに対処するかによって、その存在意義を問われようとしております。とくに1970年安保がこれからの日本の歴史に大きな影響をもたらさずにはおかない事象であることは論をまちません。

ことしの牛尾会頭に至るまでの青年会議所運動によって積み重ねられた数々の業績の燦然たる金字塔にたいして、私は深い尊敬とこの上ない評価を捧

げることを躊躇するものではありません。

この積み重ねがもたらした実りをより豊かなものとし、この光輝ある成果をより大ならしめるために、私は同じ土壌に立脚することの価値の大なることを認め、1970年こそ各地青年会議所が着実に実りを収穫する意義ある年としたいものであります。

このため1970年の青年会議所運動は、われわれにますます泥にまみれることを要求するでありましょう。白いハンカチから汗にまみれたタオルへ変貌することを命ずるでありましょう。

いまこそわれわれがたくましく参画し、たくましく行動するときであり、険しい目標に向かって、敢然と挑戦するときであります。

青年会議所がいかなる利害にも結びつくことを期待しない純粹の奉仕と、創造的な建設を社会開発計画に展開することこそ、主義思想を超越して、全市民の共感と信頼をうる運動の基盤であることを、われわれはあらためて想起しなければなりません。

われわれの運動は着実なものでなくてはなりません。根気よく、誠実に、寛容をもって市民への浸透を図り、もって密着化を推し進める、たゆまざる前進を続ける運動であります。

理想に溢れるわれわれは、全国2万7000人の同志会員とともに、明日をよりふさわしい明日にするための行動を起こして、1970年代への歩みを力強く踏み出そうではありませんか。

(抜粋)

日本青年会議所

- 1 日本JC第20年度会頭に鳥取の米原正博が就任(12月まで)
日本JCスローガン「豊かな心 厳しい自覚 貴け社会の正義」
JCI会頭に前田博が就任(12月まで)
『日本青年会議所新聞』月3回発行となる
月刊誌『30億 JC LIFE』B5版になる
第44回総会で「JCアジア協力資金」を設置
- 1.16 第1回理事会で「日本宣言」を採択
- 2 柏原入会
- 2.7 日本JC事務局の分室を設置
- 2.13 「日本の防衛庁、自衛隊を診断する会」のメンバーに米原会頭が委嘱される
- 2.14 マイヤー駐日大使らと日本JC役員が懇談夕食会
- 3 見附入会
- 3.6 JC関係代議士を囲む懇談会を開催
- 3.9 万博野外劇場の施設引渡し
- 3.31 日本JC職員がマクドナルド神父・ハイジャック事件に遭遇し、4月3日解放される
- 4 二戸、下田入会
- 4.13 JCI福岡コンファレンスが開催され、日本JCから1900名、海外19カ国JCから400名、合計20カ国JC、2300名が参加
アジア問題特別シンポジウム開催
- 4.17 万博野外劇場でオークション開催、参加3000名(18日まで)
- 4.19 JCIカーシー副会頭、日本各地を公式訪問
- 5.15 日経連幹部と教育問題で意見交換
- 5.13 初の北方領土視察団を根室に派遣、北方の島々を洋上視察し現地住民と懇親(14日まで)
- 6.9 米原会頭ら佐藤首相と会談
- 6.13 古井代議士、日中覚書交換の真意を常任理事会で講演
- 6.20 沖縄問題研究のため現地視察(22日まで)
医療視察団も派遣(19日～21日)
- 6.28 JCデー統一行事セミナー開催(東京)
- 7.8 国家問題セミナー開催(東京で10日まで)
- 7.10 常任理事会で沖縄JCの統合問題は72年1月よりと決定
- 7.30 ナイジェリアへ救援物資を空輸
- 8 吹田、犬山、篠山、三国芦原、むさし府中、相馬、釜石、更埴入会
- 8.9 第2回アメリカ流通機構視察団を派遣、総員129名(日商と共催、18日まで)
- 9.3 JCデー統一行事「混迷の危機70年代に取り組み～家庭・学校・職場における教育のあり方を正そう」
- 9.13 万博野外劇場閉幕、183日間の出演者数約2万名、出演団体数は海外を含めて440団体
- 9.18 第1回経営者開発シンポジウム開催(犬山で20日まで)
- 10.14 筑後、伊予三島、松原、羽曳野、中野、となみ、高岡、魚津、調布、船橋、原町、佐沼、江刺入会450JC、2万9552名に拡大
- 10.17 第19回全国会員大会が名古屋で開催され、9652名が参加(18日まで)
- 10.20 日本商工会議所、日本青年会議所共同主催によるヨーロッパ経済視察団に久保団長、仁井・松田副団長を含め55名を派遣(11月7日まで)
- 11.1 JCI第25回世界会議がアイルランド・ダブリンで開催され(7日まで)、日本JCから米原団長以下70名が参加
この会議で中野貴司(川崎)が地区担当副会頭に当選

内外の動き

- 1.14 政府はチクロ食品の回収を9月末まで延期と決定
第63特別国会で佐藤首相三たび首班に指名
「沖縄住民の国政参加特別措置法案要綱」がまとまる
- 2.11 東大宇宙航空研のラムダ4S型5号機、鹿児島県内之浦から発射、人工衛星となる
政府、閣議でブドウ酒、毛織物、ブタのあぶら身など9品目の輸入自由化を決定
- 3.14 アジアで初の日本万国博開会(9月13日閉幕)
- 3.31 日航機「よど」号乗取り事件発生
北京で行なわれていた日中覚書貿易の政治会談妥結
農林省食糧研究所などの検査で古古米の一部に発ガン物質を出す有毒カビを発見
対アメリカ繊維輸出規制問題について政府は「1年程度の暫定規制後、ガットの場で多国間協議につなぐ」という最終案決定
- 6.23 日米安保条約、自動延長にはいる
世界銀行、11月から東京に事務所新設
食糧庁、汚染米を配給停止
- 7.18 東京に新型公害の光化学スモッグ発生
ニクソン・アメリカ大統領、記者会見で繊維以外に輸入制限を波及させた法案は拒否権を行使すると言明
放送大学準備調査会は入学資格、放送時間、授業料、教員の任期制度などについて基本構想をまとめる
7月末で「昭和」が元号として日本歴史上最長記録となる
政府、佐藤首相を本部長とする中央公害対策本部を設置、発足させる
- 8 日曜、祝日に銀座、新宿、池袋、浅草の4地区に「歩行者天国」実施
ソ連、無人月探測機ルナ16号を打ち上げ、自動装置で岩石を採取し帰還
- 10.13 カナダ、中国が国交樹立
国府は直ちに断交
- 12.18 「公害罪法案」の概要決定



栄光ある少数派

第20代会頭 秋保 盛一

大阪JC 1934年生 68年大阪理事長 70年副会頭 71年会頭 元・エヌビーエスエンジニアリング(株)代表取締役 14年逝去

時あたかも、日本青年会議所は創立20周年を迎えんとしています。日本青年会議所にとって、1971年は20年の歴史の単なる延長の1年であってはならず、21世紀へ向かっての新しい次なる20年の第1年目でなければなりません。

「変革の時代といわれる1970年代をスタートして、青年会議所は果たして変革に耐え得るだろうか」という反省にはじまり、「われわれは社会の変革に勇気をもって取り組み、日本の新しい時代を、深い反省の中から創造しなければならぬ」と結んだ、名古屋における第19回全国会員大会の決議文を深く胸に刻みながら、青年会議所の新たな20年に思いを馳せる時、“変革”とはいったい何かという掘り下げた命題をふりかえてみる必要があるのではないのでしょうか。

従来、われわれが“変革”と呼んでいたものは、率直に言って、実は単なる軌道修正にほかならなかったのであります。しかし、本年を第1年とする、われわれの次なる20年に挑戦する青年会議所運動においては、単なる軌道の修正に終わってよいものでは決してありません。豊かな先見性と、それに基づく新しい軌道の“創造”にとりかからなければなりません。

ところで、1971年の日本社会は不況への予測に明けました。しかもこの不況感は、戦後25年間に体験したものとはまったく異質のものであり、あらゆる意味で前例を見ない未知の世界にわれわれは足を踏み入れたといえるのです。高度経済成長がその短所を露呈しながら、従来の通念なり規範とされていた座標は根底からくつがえされようとしている。そのような時代にはいったのであります。

このように国内問題一つ取りあげる

だけでもきわめて複雑な現在の時代において、われわれ青年会議所が今年から何故に「アジア開発」問題に取り組まねばならないのか、という素朴な質問が、等しく3万人の会員の胸に抱かれても、当然かもしれません。いうまでもなく、日本の経済、社会がこれほどまでに拡大化され、国際化されつつある今日、そして、国際的に日本という一つの国が、ただ一国だけで存在することがもはや許されなくなった時代、そうした現実を見る時に、われわれがアジア問題に根本的に取り組む姿勢は、「アジアの繁栄なくして日本の真の繁栄はあり得ない」、「アジアの安定なくして日本の安全、世界の平和はあり得ない」という真理を、日本国民自身のものとする運動を展開しなければならぬところにあるのです。

これは、われわれの隣人の経済的繁栄や生命の安全を守るための打算としてではなく、すべての人類が平和に豊かに生活するための原理であり、すべての人類、すべての隣人の幸せを願うことに心の潤いを感じるところから、われわれの重点事業は発想しております。この運動は、しばしば指摘されるように、1年や2年で完結するものではありません。まず本年は、われわれ自身がアジアの実情をじゅうぶんに認識するとともに、われわれの心の開発を図っていかなければなりません。

このたび発表する一連のプロジェクトは、その意味において、アジア人としての意識をわれわれ自身の中に開発することにあります。いうまでもなく、これらプロジェクトは決して容易に実現するものではありません。しかし、われわれ青年会議所は、安全と防衛に市民意識を喚起せしめ、国防に関する国民的合意のいない手にならうという目標を掲げ

ながら、地道な、そして、会員各位の熱心な努力が、ついには青年会議所をして社会的に高く評価せしめたという、大きな実績をもっております。

そして、新たな決意をもって、再度、われわれがその情熱を結集させ得るならば、かならずやこの70年代に、日本が、日本人が取り組まなければならない“アジア開発”の問題を、青年会議所にとって実り多い、意義ある事業として成功させることに疑いをさしはさむ余地はないでありましょう。ここにおられる453の全国青年会議所理事長諸兄は、今こそ、そのリーダーシップを発揮され、全国3万名の総意と、そして、われわれの周囲にある地域社会の市民の関心をアジアに向けるという、崇高な事業への足がかりを築く共同の使命を、ここでもう一度確認しようではありませんか。

昨年10月、会頭受諾演説の中で私は、「会頭として選ばれ、その期待に応える道は、常に多数の意見に迎合することが本分ではない。もっとも深い問題意識をもった会員が少数であり、問題意識の乏しい多数の会員から孤立化することになるとしても、私は、あえて少数の会員とともに孤立化することに栄光を見出す会頭でありたい」と誓いました。

もっとも大きな問題意識をもち、もっとも深く悩む453人の理事長諸兄にお願いしたいことは、あなた方こそが青年会議所運動の先頭に立って、言わなければならないことを発言し、なさなければならぬことを実行する、ほんの一握りの“次なる20年に挑戦する”少数会員であってほしい。そうあってこそ、私は、会頭として孤立化することによって栄光を見出すことができるのだと考えております。

『30億』1971年2月号所載「京都・会頭所信」(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第21年度会頭に大阪の秋保盛一が就任
日本JCスローガン「豊かな心 厳しい自覚 築こうアジアの連帯感」
JCI会頭にニュージーランドのグラハム・シンクレアが就任
日本JC、アジア開発3大プロジェクト方針を発表
- 2.9 日本JC創立20周年記念式典が東京で開催され、1300名が参加
創立20周年記念の歌『明日のために』を発表
創立20周年誌『明日への黎明』を発行
- 2.10 青年の船でアジア協力基金制度を設ける
- 3 松任入会
- 3.1 政治選挙でJCの統一見解を発表(国家問題室)
- 4.2 JCIシンガポール・コンファレンスが開催され、日本JCから団長秋保盛一会頭以下327名が参加
4班から成るアジア問題研究チームが現地でシンポジウム
- 5 恵庭、江別、天童、大月、葦崎、矢立入会
- 5.15 日本JC第1回広報セミナー開催(東京)
- 6.10 第1回JCアジア青年の船が出港、団長・立石孝雄副会頭以下438名が参加、船内で「アジア問題特別シンポジウム」を開催(7月5日まで)
- 6.19 JCデー統一行事シンポジウムが東京で開催され、テーマ「明るい豊かな街づくりに市民の創意を結集しよう」に268名が参加
- 6.21 社団法人青年会議所と沖縄青年会議所が合併覚書に署名
- 7 栗原、柏、田原、守山入会
- 7.16 経営者開発シンポジウムが東京で開催され、318名が参加(18日まで)
- 7.27 政治選挙で統一見解を発表確認(日本JC)
- 8.5 北方領土視察団を派遣、団長立石孝雄副会頭以下70余名が参加(6日まで)
- 8.11 次年度会頭予定者を選挙で選ぶ
- 8.12 東京～八丈島間往復洋上セミナー・黒潮学園が開催され、420余名が参加(14日まで)
- 9.5 JCデー統一行事・ビジョンTV討論会「立ち遅れる環境保全」を開催
- 9.15 特別シンポジウム「ドル・ショックと日本経済」を東京で開催
- 10 焼津、裾野、各務原、阿波池田、山鹿入会
- 10.16 第20回全国会員大会が長崎で開催され、8128名が参加
- 10.31 JCI第26回世界会議がホノルルで開催され、日本JCから団長秋保盛一会頭以下432名が参加
第3回米国産業視察団を派遣(日商との共同事業)
- 11.5 ホノルルで第6回日米JC会議が開かれる
- 12 遠野、那珂湊、美濃加茂、大東、水俣入会
- 12.3 JC関係の衆・参議員を招き、懇談会を開催
- 12.11 全国の青年会議所数474JC、会員数3万2067名

内外の動き

- 4.17 第一銀行と日本勧業銀行合併、第一勧銀誕生
バングラデシュ独立を宣言
大久保清による連続婦女暴行殺人事件発生
全国に約70万人の会員を集めた「ネズミ講」、脱税で国税局から告発される
- 6.17 沖縄返還協定調印式、宇宙中継で東京とワシントンで挙行
- 6.30 富山のイタイイタイ病訴訟と阿賀野川有機水銀中毒訴訟で原告の被害者側が勝訴
ソ連の史上初の有人宇宙ステーションの乗員3人、帰還の途中船内の気圧低下で死亡
日本一の高層ビル、京王プラザホテルオープン(47階、地上170m)
- 7.1 環境庁発足
- 7.30 岩手県栗石町上空で自衛隊機と全日空機が衝突し墜落、乗客乗員162名死亡
- 8.16 東京株式市場、アメリカのドル防衛策発表でドル売り殺到、ダウ株価は史上最大の暴落
- 9.21 竹入公明党委員長、暴漢に刺され重傷
- 9.27 天皇、皇后両陛下、ヨーロッパ7カ国を親善訪問
- 9.28 東大宇宙観測所、初の科学衛星打ち上げに成功、「しんせかい」と命名
- 10.25 国連総会で「中国招請・団府追放」の提案を可決
ニューヨーク・タイムズ紙、林彪失脚を報道
1971年産米は1088万トンで17年ぶりの不作
- 12.19 ワシントンの10カ国蔵相会議で多国間通貨調整に決着、1ドル=308円に
- 12.27 韓国与党、国会で朴大統領に非常大権を与える特別法案を抜き打ち可決
中教審の最終答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策」がまとまる
赤軍派による金融機関強盗多発



心の色ヤング・ブルー

第21代会頭 小野 正孝

長野JC 1932年生 66年JCI副会頭 67年長野理事長 70年副会頭 72年会頭
元・(株)甲州屋常務 75年逝去

社会は変化しております。私の所信にも申しあげている通り、これからの社会は参加社会であります。今までは、参加することにのみ意義があるという合言葉で、われわれは会員大会や会合を進めてきました。しかし、これからは、真の参加とは何か、ということをお互いに一日一日の行動の中に、何のために青年会議所運動に参加しているかの哲学を、自分の心の中につくりだすことこそ真の姿ではないか、と思うわけであります。

私は、この参加する運動を、“ヤング・ブルー”という合言葉で、皆さまに呼びかけたいと思います。“ヤング・ブルー”とは私の心の色、皆さんの心の色です。青年会議所の第一文字は“青”からはじまっています。この“青”を“真の青”にするために、“ヤング・ブルー”という合言葉でいきたい。

皆さんは、それぞれの街でそれぞれの運動を進めていらっしゃる。それを、ただ単に青年会議所という組織の中の運動だけでなく、その組織から広がり、地域社会、日本、アジア、地球に向かって、この運動を起こそうではありませんか。わが国の中にも、同世代で将来の発展を願っている若ものが3600万人もおります。この3600万人の若ものとともに、本当に青年会議所運動が進められたならば、まさにわれわれは、その地域社会のコミュニティ・リーダーとなることができる可能性があります。うし、また地域社会の中において、本当に尊敬される青年会議所運動として、われわれの運動を進めることができるのではないか、と思うわけです。

来年の運動は、どんな運動一つでも結構です。たとえば、自分の企業の中で、自分の企業の将来はどうあるべきか、または、自分の企業と地域社会との関係はどうあるべきか、皆さんひとりで考えずに、むしろひとりでも多くの企

業の中の若ものとともに、膝を交えて語りあい、考えあって、そして、実践していただきたいと思います。

コミュニティの中においても同じことであります。また、国家問題にしても同じです。さらに、アジアの問題、世界の問題にしても、まさにこのことがわれわれに求められ、そして、われわれがなさなければならない一番大切な目標であろう、と私は思うわけです。

その意味で、誰彼となく若ものと、自動車の中、レストランの中でも、どこでも結構です。若ものと会ったら、自分のもっている問題、若ものもっている問題を、ともに語りあい、ともに考えあって、そして、できることは実践していこうというアクションこそ、“次なる20年への青年会議所”のもっとも大切な目標ではないか、と信ずるわけです。

私は、青年会議所はそれぞれのローカルで、まさに素晴らしい個性をもっている、と願っております。目標は一つ——「明るい豊かな社会」を築くことであります。

しかし、その目標に到達するためには、皆さまが各地の青年会議所にお帰りになった時に、それぞれの地域社会がもっている問題を解決するところに、はじめて青年会議所の価値が生まれるものなのです。その価値は多様化しています。その多様化している価値は、お互いに求めあうことが必要であると思えます。

私たちは、いままで多くの問題を提起し、その解決をするために具体的な論理的手法を創ってきました。たとえば、社会開発計画や実践指導力開発計画や青少年開発計画などが、各地の青年会議所において積極的に展開されるべく準備されてきました。

これらの諸事業を推進する折りに、

青年会議所会員のみによる運動に終わることなく、市民の立場に立ち、同じ生活基盤から行動を起こし、地域に密着した運動を展開するため、〈まち〉の若者たちとともに考え、ともに行動しようという計画の愛称がヤング・ブルーであり、その対象となる事業計画は従来からの皆さんが推進してきた事業計画です。

どのように具体的に〈まち〉の若ものたちとともに考え、行動するかについては、各地の青年会議所の事業計画の現状と見合わせて、自発的にかつ積極的に思考することこそ真の運動の原点であると信じます。

私たちはこの1年、成人を迎えた青年会議所らしく、堂々と胸を張って歩もうではありませんか。今ここで、20年の運動の反省のなかから、私たちは少し大人に気を使い過ぎてはいなかったか……。確かに青年会議所は各界から賞賛と拍手をおくられてきました。しかし本当にそうなら、本当に青年会議所が期待されていたのなら、あなたの〈まち〉のもっとも重要な政策決定に、もっと青年会議所は招かれて意見を求められたはずで。結局は、私たちが大人たちに顔を向け気を使ったほどには、大人たちから問題にされなかったのではないのでしょうか。

私たちはこの辺で、私たちの運動の仲間が誰であるかについてははっきりした認識をもつべきです。

私たちは若者とともに、青の計画、ヤング・ブルー計画に勇気をもって取り組み、行動に移しましょう。私達はジュニアなのです。「ジュニア・チェンバー」なのです。だから、いっしょにできるのです。

『30億』1971年12月号所載「長崎・会頭予定者所信、及び事業計画会頭方針」(要約)

1972

日本青年会議所

- 1 日本JC第22年度会頭に長野の小野正孝が就任
日本JCスローガン「考える 行動する 若い力が未来をひらく」
JCI会頭にオーストラリアのロイス・R・ペビンが就任
3万人対話集会・ヤングブルーの計画推進
沖縄の石川、コザ、名護、那覇、宮古、八重山入会
- 3 八千代、新湊、小浜、神崎、陶都有田入会
- 3.17 ヤングブルー作戦に基づく青少年開発セミナーを東京で開催
- 4 登別、由利本荘、常陸太田、飛騨古川、川内、中間入会
- 4.5 JCI香港コンファレンスが開催され、日本JCから団長小野正孝会頭以下498名が参加
- 4.9 ネパールの岩村博士支援、全国的に浄財集まる
- 4.22 日本JC第2回広報セミナーを東京で開催
- 6 与野、成田、小牧、丸岡入会
- 6.1 第2回JCアジア青年の船が出港、団長佐藤堯副会頭以下494名が参加(14日まで)
アジア各国21名の青年を招聘
- 6.10 沖縄復帰記念会員大会、那覇市で開催
- 6.11 第1回アジア青年会議が沖縄那覇市で開催され、アジア各国から530名が参加
- 7.15 初の「JC国際大都市会議」、東京で開催
全国的風水害で日本JCが義援金を募集
- 8 白石、国分寺、熊野、島根太田、川之江、豊前入会
- 8.20 第4回米国産業視察団を派遣(日商と共同事業)
- 9.14 第3回経営開発シンポジウムが東京で開催され、711名が参加(16日まで)
- 9.15 JCI事務総長・R・スタインパワー来日、首相訪問
- 10 沼田、武蔵野、富士宮、篠ノ井、氷上入会
- 10.13 会員資格規定を改正、長期5カ年計画一部修正
- 10.14 第21回全国会員大会が甲府で開催され、小野会頭提言発表、7299名が参加
- 10.29 第2回欧州流通視察団を派遣(11月9日まで)
- 11.12 JCI第27回世界会議が台北で開催され、日本JCから団長小野正孝会頭以下25名が参加
- 12 陸中宮古、勝田、竜ヶ崎、氷見、橿原、五条、桜井、大和高田
御所、吉野、つくし、浦添入会
日本JCは517JC、3万5746名に拡大
JCI正式加盟78カ国、準加盟2カ国
- 12.5 日本芸術部会初の部会展を開く(東京・伊勢丹で10日まで)

内外の動き

- 国立大学授業料を3倍アップ、年額3万6000円に引上げ
- 2.2 グアム島の密林で太平洋戦争生き残りの元日本兵横井庄一発見され帰国
- 2 郵便料金と医療費の値上げ実施
- 2.3 第11回冬季オリンピック札幌大会開催
- 2.19 連合赤軍の浅間山荘事件起こる、取り調べからリンチ殺人事件が判明、12遺体発掘
- 2.27 ニクソン大統領訪中、共同声明の中でアメリカは平和5原則をはじめて承認
- 3.15 山陽新幹線、新大阪ー岡山間開通
- 3.21 奈良県橿原考古学研究所、同県明日香村高松塚古墳から極彩色の壁画を発見
- 3.27 沖縄返還交渉に関する外務省公電漏えい事件
- 5.13 大阪千日ビル火災で118人死亡、これを機に雑居ビルが問題化
東京の石神井南中学校で授業中の生徒111人に光化学スモッグ症状
- 5.15 沖縄施政権返還、沖縄県発足(5月15日)
- 5.30 イスラエルのテルアビブ国際空港で日本人ゲリラ、自動小銃で無差別殺傷
- 6.5 「かけがえのない地球」をスローガンに国連人間環境会議、ストックホルムで開催
- 6.11 田中通産相「日本列島改造論」を発表
ワシントン・ポスト紙、米国防総省ベトナム秘密報告書の未発表文書掲載
- 6.17 佐藤首相は連続最長2797日の在任記録を残して退陣、後任に田中角栄選出
- 8.26 オリンピック・ミュンヘン大会開催、期間中アラブ・ゲリラがイスラエル選手団を襲撃
- 9.29 日本と中国、共同声明に調印し外交関係樹立
- 10.9 閣議と国防会議で第4次防衛力整備計画正式決定、予算総額4兆6000億円余
ロンドン・ニューヨーク・パリ・モスクワ・東京の5大都市代表により、世界都市会議東京で開催



創造と建設の時代

第22代会頭 佐藤 助九郎

東京JC 1933年生 70年東京副理事長 72年副会頭 73年会頭 元・佐藤鉄工(株)最高顧問 08年逝去

激動する70年代……まさに今日の社会で起こりつつある諸問題は、かつてわれわれ人類の経験したことのない分野にかかわるものであります。その変革や、あるべき姿を明確に律しうる原理や理念をとらえることは、きわめて困難な時代であります。

今日の経済現象は、従来の経済学の定義のワクには全く当てはまらず、また世界の政治動向も、まさにイデオロギーの終焉を迎えつつあるといえましょう。

終戦から今日まで、わが国の欧米の物質的水準に到達しようとするあまり、すべての発想の基本が生産第一主義であり過ぎました。その結果、この経済効率中心の風潮に、国民は次第にわが国の国家像や社会像に対し、疑問と失望の色を濃くし、疎外感を生み、さらには国際社会の中では次第に孤立化の方向をたどる結果をもたらすに至りました。また、このような発想は地域社会において、都市の無秩序な膨張や村落の過疎を招き、さらには著しい環境汚染や自然破壊を発生する結果をもたらしました。

これからは、社会と人間と自然の調和のとれた経済成長に転換してゆくための方策がとられなければなりません。そのためには、街や企業やあらゆるコミュニティにおいて、次代を担う青年が明日への第一歩を考え直すことから始まると確信します。

青年会議所20余年の歴史と伝統は、われわれ青年会議所会員にこのような困難な問題解決に挑戦する勇気と自信を与えてくれました。これからの社会発展は、単に国家や企業だけでなく、コミュニティを形成する個々の人々が自ら考え、自らの手で国民正義に基づいた行動をすることが肝要でありましょう。

そして、そのためには歴史を見通す冷徹な目と、現状に 대응する柔軟な姿勢に裏付けされた青年のもつエネルギーこそが、その起爆剤として貢献すべきであります。

青年会議所運動の旗印のもとに集まった青年が、その若々しい英知と男らしい勇気と情熱、そして若者なるが故に持ち得る優れた行動力によって、より明るく、より豊かな未来の創造と建設のために明日に向かって挑戦する運動こそが、われわれの基本姿勢でなければならぬと思うのです。

このような基本的認識に基づいて、私は5つの行動指針と事業計画について皆さまのご賛同を得てまいりました。

その1つは「豊かな未来を創造すべく青年とともに行動しよう」、次には「新しい国際時代の経営理念と指導力の涵養を図ろう」、第3には「模索領域への挑戦と、その実践による新しい価値観の創造を進めよう」、第4には「内外の国家的重要課題に積極的に取り組もう」、そして最後に「各地青年会議所への事業活動の移行と、国家青年会議所としての機能の充実を図ろう」であります。

そして、また次年度から機能の効率化と事業計画の明確化を図るために、国際青年会議所が採用しているカテゴリ制を導入し、先に述べた5つの行動指針と各地青年会議所の総会採択によるカテゴリ No.1からNo.3までのプログラムを中心に、国家青年会議所としての機能と各委員会の機能を十分に生かして、73年度の事業計画を推進して行きたいと思います。

最初の「青年とともに行動しよう」は、いうまでもなく本年度小野会頭の提唱された「ヤング・ブルー」の継承であります。第2、第3の指針は、今日変革

し多様化する社会の中で、また近年急激に起こってきた環境問題について、従来われわれが取り組んできたいわゆるハードな問題に加えて、ソフトなものについても積極的に取り組むべきであるという基本認識に立つものです。次に第4は、国家青年会議所の機能として最も重要な「国の内外の重要課題」への取り組みについてであり、それには青年会議所として常にユニークな対応とフレッシュな提言を行なうこととし、最後の指針は、青年会議所内部の問題として、必然的な組織の拡大とともに、社会からの注目と期待は次第に高まってきているという認識から、より効率的な組織の検討と運営を推進しようということでもあります。

皆さん、わが国の直面している困難な、しかしわれわれの手に解決を託されている問題は数々あります。われわれは、その困難さを考えると、ある時は暗澹たる気持ちにならざるを得ません。しかし、困難であればあるほど、挑戦を試みるに値するのではないのでしょうか。

わが国の進むべき道について、われわれは喜んで未知の海原で、新しい航路を見つけなければなりません。それに従って行けば、絶対に安全というような青写真は無いと私は断言したい。新しい、そしてユニークなことに挑戦する勇気こそが、最もわれわれ青年に必要なのであります。

今後、われわれは、このような問題解決のための計画を決定するについて、①もっと適切に、②もっと意味あるように、③もっと魅力的に、④もっと効果的に、⑤そしてもっと反応を素早くしなければならぬ! と私は確信します。『30億』1972年12月号所載「甲府・会頭予定者所信」(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第23年度会頭に東京の佐藤助九郎が就任
本年度から事業計画にカテゴリー制度(No.1～No.3)を採用
日本JCスローガン「若人と創ろう 築こう 豊かな未来」
JCI会頭に西インド諸島のL・A・ロイ・バナシーが就任
本年度から全国大会褒賞にもカテゴリー基準の導入を決定
- 2 朝霞、小矢部入会
- 2.8 JC関係国会議員とシニア・現役会員との懇談会を開催
- 2.23 JCデー統一行事シンポジウムを東京で開催
- 3 日野入会
- 3.5 遠山直道氏(65年度会頭)フランスのナント上空で航空事故死
- 3.17 第3回日本JC広報セミナー開催
- 4.6 『30億』『日本青年会議所新聞』創刊10周年記念パーティーを開く
全国主要都市で交通安全教育運動(タフティなど)を推進
- 4.10 JCIケソン・コンファレンスが開催され、日本JCより団長佐藤会頭以下457名が参加
- 5 佐渡、高梁、小豆島入会
- 6 第3回JCアジア青年の船が出港、第1船団長土屋磯司副会頭以下481名が参加(6月15日～6月26日)、第2船団長新田精一副会頭以下473名が参加(6月24日～7月5日)、アジア各国青年28名、講師2名を招聘
- 7 八雲、大曲、大田原、稲沢、門真、田条啜、西条入会
- 7.15 '73年国家問題会議が東京で開催され、358名が参加
- 7.19 第2回アジア青年会議が東京で開催
- 7.21 東京など主要都市でCRAセミナー開催
- 7.29 次年度会頭予定者を選挙で内定
- 8.4 第1回都市問題シンポジウムが東京で開催され、「住みよい都市づくり」へ249名が参加
- 8.5 北方領土視察団を派遣、団長三浦道明副会頭以下240名が参加
- 8.7 米国へ2視察団が出発(産業視察と独自の新業種開発)
- 9 芽室、安中、野田、芦屋入会
- 9.1 沖縄那覇市で交通シンポジウム
- 9.3 JCデー「若人と共に(教育・青少年・環境問題を)考え行動しよう」、「若人の日」またの呼称「青年の日」のもとに各地で活発に
- 9.7 第4回経営開発シンポジウムが東京で開催され、945名が参加(9日まで)
- 9.11 日本JCビジョン策定アンケートの結果を発表
- 10 桶川、東村山、西都入会
- 10.11 日本青年会議所新聞が発刊300号に
- 10.20 第22回全国会員大会が宝塚で開催され、1万3150名が参加
- 10.21 会頭提言発表(私権制限など6項目)
- 10.28 第28回世界会議がフランスのニースで開催され、日本JCより団長佐藤会頭以下311名が参加、斎藤正信が次年度JCI副会頭に当選
- 12 陸前高田、蕨、飯能、矢板、山梨、天理高石、小郡入会
日本JCは545JC、3万8290名に拡大
- 12.5 日韓両国の青年交流計画による訪韓チーム出発

内外の動き

- 1.1 イギリス、アイルランド、デンマークを加えた9カ国による拡大EC発足
- 1.27 バリでベトナム和平協定調印
- 3.20 水俣病裁判で患者側全面勝訴
住友別子銅山閉鎖、282年の歴史に幕
国際通貨投機で為替市場混乱、主要国通貨は変動相場制へ移行
- 6.16 ソ連のブレジネフ書記長訪米、核戦争防止協定に調印
- 6.24 水銀、PCBの汚染魚問題、社会不安を呼ぶ
ゴミ処理問題深刻化
閣議、新しい「当用漢字音訓」、「送りがなのつけ方」の決定
アメリカでウォーターゲート事件が政治的事件に発展、ニクソン大統領弾劾の声高まる
田中首相、アメリカ・ヨーロッパ・ソ連を訪問、各国首脳と意見交換
- 8.8 金大中事件起こる
- 8.24 中国共産党第10回全国大会開催、林彪事件に公式に決着をつける
- 9.7 長沼ナイキ基地訴訟と尊属殺人罪訴訟で違憲判決
チリで軍事クーデター、社会主義政権倒る
- 9.11 北ベトナムと国交樹立
徳山、市原などの石油コンビナートで爆発事故続発、安全性が問われる
州知事時代の汚職が原因でアグニュー・アメリカ副大統領辞任
タイのタノム軍事政権、学生革命により崩壊
江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞
- 10 第4次中東戦争を契機にアラブ石油輸出の攻勢強まり、世界的に異常な「エネルギー危機」に見舞われる
- 11.2 主婦ら各地で品不足のトイレットペーパー・洗剤・砂糖の買いだめに殺到
経済政策を転換、総需要抑制型の49年度予算を編成



見直せ精神の原則を

第23代会頭 前田 完治

東京JC 1934年生 72年東京理事長 73年副会頭 74年会頭 元・(株)三修社代表取締役社長 11年逝去

私は昨年10月、宝塚で開催された第22回全国会員大会の席上、本年度日本青年会議所運動の基本方針として3つの会頭提言を行ないました。

その第1は、全国4万2000名会員の一人ひとりが取り組むべき目標として、「新しい時代にふさわしい新しい価値観を創造しよう」という提言であり、第2は、全国568青年会議所がその地域社会における運動目標として、「市民意識を高揚し、企業の社会的責任と役割を明確にしよう」という提言であり、第3に、日本青年会議所が取り組むべき課題として「国際新時代下におけるわが国の進むべき道とわが国の安全について国家的立場から討論を起こそう」と提言を行ない、多くの会員のご賛同を得たのであります。

そして11月下旬以降、中東・北アフリカの産油国が打ち出した石油戦略、とくに供給制限と価格の値上げ攻勢により国家的、いや国際的に引き起こされた経済体制の危機に対処するため、本年1月の京都総会において全国理事長の合意のもとに、緊急事態宣言をいたしました。

さて、振り返ってみますと、本年は実に多くの歴史的できごとの続発した年でありました。

1974年——それは日本と日本人にとって、まったく誰もが切り札を持っていない、まさしく1億1000万国民が、人間として幸せに生きていくことはなんであるかを模索してきた年であり、また国際的にも、かつての甘えがまったく通用しない、完全に独立を迫られた“独立元年”であったと思うのであります。

そして、いまや20世紀最後の四半世紀の生き方を左右する歴史的転換点

で、明治維新、終戦という昭和維新に次ぐ第3の開国の必然性は疑う余地のないものであります。

現在の社会では多種多様な主張が混在するなかにあって従来の慣習、あるいは価値観では解決の困難な問題が続出してきております。

しかし、もはやいつまでもこの混乱状態を続けることは許されません。有力な、かつ効果的な手段が早急に講じられるべきであります。この混乱を解決していくためには、国民の合意が必要であることはいうまでもありません。しかし、それは迎合であってはならないのであります。

多くの諸団体、諸機関との協力は絶対的に欠くことのできない条件であります。しかしそれを求めるのを急ぐあまり、媚びてはならないのであります。

いまから25年前、敗戦によるショックのため、ほとんどの指導者が正しい指導力の発揮を忘れていたとき、これからの日本を再建するのは、われわれ青年の仕事であると決意したわずか48名の青年によって、これほど全国的規模を誇る団体に成長してきた青年会議所の歴史を考えると、複雑多岐にわたり、いかなる困難な時代にあっても、国を発展させる唯一のものは国家のなかに流れる青年の燃えるような「精神の原則」である、と思うのであります。

われわれの社会環境にあって、目を大きく開き、真実を見きわめ、時代の変化と必然性を先取りし、1億1000万国民の合意をつくりあげていくための「指導者の精神」が、いまこそ求められているのであります。

青年の責任——それは冷徹に現実を見つめ、社会が青年に期待するところのものに、無限大の責任を負う役

割意識と、その使命感に雄々しく、男らしく応えていくことであると信じます。そしてこのことが、時として、必ずしも多数の賛同をえられなかったとしても、われわれは決してひるむことなく、喜んで、ブリリエン・マイノリティ(輝ける少数派)の称号を受けようではありませんか。将来のわれわれの子孫のために！そして将来のわれわれの愛する祖国のために！

会員諸君、どうか思いだしていただきたい。

私は本年、10地区の会員大会で、これからの社会が迎える最も大きな問題は、世界の、とりわけ開発途上国の人口爆発であることを、訴えてきました。

人類が人間としての価値を自らに求めはじめて約5000年の月日を経て、現在の文化・文明を持つことができたといわれております。そしてこの文化・文明の恩恵に浴しているのは、世界人口39億のうちわずか12億であります。

今後33年以内に、さらに39億の人口がこの地球上に増加してくることを考えるときに、われわれは、過去5000年間に徐々に変化してきた文明の質と量が、今後33年間に一度に起こるであろうことを覚悟する必要があり、同時に開発途上国に激増する人々の生活の質について、彼らが日本人なみの生活水準まで追いつくであろうその間に起こってくる諸問題に対処していかねばならないことを申し上げたいのであります。

そのときの問題解決の困難性に比較するならば、現在われわれの社会がかかえている諸問題は、はるかに容易に解決されるでありましょうし、また当然、迅速に解決されるべきであります。

『30億』1974年11月号所載「山口・会頭所信」(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第24年度会頭に東京の前田完治が就任
日本JCスローガン「模索する英知 挑戦する勇氣 若さで担え日本の未来」
JCI会頭にアメリカのA・ジェイ・スミスが就任
京都会議で緊急事態宣言「省資源運動」採択
本年度褒賞から会員会議所提供も加える
日本JC定款を改正、評議員会制を理事会と2本建てに
- 3 習志野、宇佐入会
- 3.5 中近東へ親善視察団を派遣
- 3.16 日本JC第4回広報セミナー開催
- 3.23 首相を囲む朝食会が開催され、1524名が参加
日本JC定款を大幅改正(通産省認可)
- 4 二本松、小金井、滑川、指宿入会
- 4.21 本年度も全国10都市で交通問題シンポジウム
- 4.27 JCI台中コンファレンスが開催され、日本JCより団長前田完治会頭以下392名が参加、平和・繁栄・進歩がテーマ
- 4.28 日本JCが節約10カ条を全国から公募
- 5 黒磯、那須入会
5月を北方領土復帰の強調推進月間とする
- 5.4 JCI資源環境シンポジウムが東京で開催され、海外JC42名、他560名が参加
- 5.16 第4回JCアジア青年の船が出港、団長久我三郎副会頭以下498名が参加(30日まで)、アジア各国青年36名を招聘
- 5.18 南伊豆沖地震の被災地救援運動を開始
- 6 洞爺、浦河、寒川、久居、南宇和入会
- 6.8 第3回アジア青年会議、東京で開く
- 6.21 政治選挙で前田会頭がJC統一見解を強調
- 7 越谷、塩山入会
- 7.1 アジア開発協議会設置で申し合わせ(23カ国)
- 7.18 JCアカデミー、山形の蔵王でサマーセミナー(20日まで)
- 7.26 '74国家問題会議が東京で開催され、486名が参加
- 8.4 第5次北方領土視察団を派遣、団長米田篤穂副会頭以下215名が参加
- 8.20 JC関係国会議員を招き現役・OBと懇談会を開く
- 9 泉、多摩、保谷、日光、大和郡山、法隆寺、鴨島入会
- 9.1 ADC(アジア開発協議会)の活動でレポート
- 9.3 JCデー、各地で独自の企画と動きみられる
東京JC創立25周年で人口問題シンポジウム
- 9.7 第5回経営シンポジウムが東京で開催され、1763名が参加
- 10 江津、本部入会
- 10.1 初の日ソ青年交流会議、東京で開催
- 10.6 ジャパン・アウトワード・バウンド・スクールが鹿児島県こしき島、下こしき島で開催され、青少年18名が参加、英王室から祝電届く
- 10. JAYCEE-ETTE(婦人会員)クラブ活動
- 10.12 第23回全国会員が山口で開催され、6513名が参加
- 11 加須、岩槻、知多、摂津入会
- 11.1 教育問題で「4万2000人のプログラム」が好評
- 11.10 第29回世界会議がニュージーランドのオークランドで開催され、日本JCより団長前田完治会頭以下161名が参加、この会議で日本語が公用語に決定、斎藤正信がJCI常任副会頭に当選
- 12 戸田入会
573JC、4万2465名に拡大
- 12.10 第2回日韓青年交流計画の親善チームを派遣(16日まで韓国へ)

内外の動き

- 1 電力・石油の使用節減強化で国電の暖房時間カットやテレビの放送時間短縮
- 3.10 フィリピンでルバン島で元日本陸軍兵小野田寛郎発見され帰国
公労協などゼネストに突入、空前のマヒ状態
日中航空協定調印、台湾は日台路線を閉鎖
インドが初の核実験
- 5.18 参議院選挙で保革伯仲、議席差7となる
- 7.7 ニクソン大統領は任期を2年7カ月残して辞任、フォード副大統領が大統領に昇格
- 8.8 在日韓国人による朴大統領狙撃事件で日韓関係緊迫
- 8.15 三菱重工、三井物産などで爆破事件相次ぐ
合成殺菌料AF2の製造・販売禁止、食品添加物への関心高まる
- 9.1 原子力船「むつ」、放射線もれ事故を起こす
- 9.10 アメリカ議会で退役軍人ラロック、日本への核持ち込みを肯定する証言
イギリス、フランス、西ドイツ、イタリアで政権交代相次ぐ
国鉄運賃・私鉄運賃・消費者米価などの公共料金続々値上げでインフレ加速
- 10.7 森永ヒ素ミルク訴訟、サリドマイド訴訟で和解成立
- 10.8 佐藤栄作元首相、ノーベル平和賞受賞
- 10.14 パレスチナ解放機構のアラファト議長、国連の招聘を受け、総会本会議に初登場
- 11.18 フォード大統領、日米修好史上初の現職大統領として来日
- 12.9 「金脈問題」で田中首相退陣、三木政権発足
ソ連、反体制作家ソルジェニーツインを国外へ追放
- 12.18 水島コンビナートで重油の大量流出による汚染事故発生、沿岸漁業に壊滅的打撃
海洋法会議、世界人口会議、世界食糧会議など全人類的な問題を討議する大規模な国際会議が数多く開かれる
独禁法改正論議高まる
金融引締め、公共事業抑制で不況業種拡大、倒産・失業急増



扉の外に黎明がある

第24代会頭 佐藤 敬夫

秋田JC 1935年生 71年秋田理事長 74年副会頭 75年会頭 元・衆議院議員 20年逝去

『転機に立つ人類』というのは、ローマ・クラブ第2レポートのタイトルであります。いま、波乱の年の会頭として任期の終わり近くに立ち、この1年を顧みようとすると、私は、はからずもこのタイトルを思い起こします。

高度成長の終わりについては、もはや言及する必要もない。それに続くこの1年、私たちのまわりにはいったい何が起きたのかということをおぼろげに思い出してほしい。

政治、経済、文化、あらゆるジャンルにおけるできごとが、まさに人類がターニングポイントにあることを語っています。人類といわず、私が、あなたが、そしてJAYCEE自身が、身をもって転機にあることを感じてきたのがこの1年であったのではないのでしょうか。

青年会議所はそのような時期にどう対処してきたのでしょうか。私は、この5日間にわたる大会のなかで、皆さんの積極的な参加のなかで、どこかいい知れない、青年会議所運動への期待と不安、いらだち——あえて言葉でいえば、「あるいは青年会議所運動は危機にあるのではないか」という感じをどこかしらで受けとっていました。会員の一人ひとりが、何か知れない不安と、いらだちをもっていたのではないのでしょうか。

何であったのでしょうか。8500件に及ぶ倒産の数、1兆2000億円を越える負債総額、この青年会議所によって立つところの企業基盤が、大きな危機に瀕していることに役立つためでしょうか。

真に内発的な行動こそ青年会議所にふさわしいというのが、私の一貫した考え方です。もちろん、内発する情熱

が行動に結実するには、時間を要するでしょう。一つの情熱が大きな行動に成熟するには、一つの契機も必要です。それならば、その時間を待とうというのが、私の本年度のもう一つの考え方でありました。人間はかならずやそうして立ち上がるというのが、私の「人間への期待」なのです。青年会議所に限らず、あらゆる行動は、内発的な情熱とその成熟とをまっぴらして、はじめて強く、また、したたかなものになり、生き生きとしたものとして存在するはずなのです。

ひるがえって、青年会議所会員はそのような行動をなしているだろうかというのが、私の絶えざる内心の指標でもあります。私は、そのような行動の、より具体的なあらわれを、原点である各地青年会議所に期待していました。そのひそかな指標と期待を抱いて、私はこの1年、可能な限り各地を訪問しました。その数は100を越えます。札幌コンファレンスや各種セミナーでも一堂に会し、また、地区大会でも皆さん方多くの会員と接することができました。

あらゆる機会に示された熱烈な歓迎に、私は謝意を表さなければならないと思います。「教育」を、「国際」を、真の「国防意識」を、そしてその底に脈打つべき「人間の期待」を、私の貧しい言葉で語ったにすぎない。その私にしてみれば、大変に過分な歓迎でありました。

だが同時に、その一方では、私はできるだけ冷静な目で、今日の青年会議所運動の実像を把握したいと考えていたことも事実です。しばらくのあいだは、各地青年会議所の運動の原点は、青

年会議所運動は企業にプラスになるということで歩まなければならない。たとえその数が50人になっても、われわれはこの各地域社会に点在する600の数をつぶしてはならない。

社会の大勢と同じように、われわれは質の高い自己研鑽を、こしはばらくは勇気をもって続けてみようではないか。「知るがゆえに愛し、愛するがゆえに愛する」——この気持をもった青年が横溢したときに、青年会議所は、改めて「運動の歴史は拡大の歴史である」ということができるのではないかと思うのです。

「新しい時代の重い重い鉄の扉は、若者によってのみ開かれる」と坂本龍馬はいいました。いま、この6300人のうしろには、4万人のわれわれの同志の力があります。さらにその背後には、数百万にのぼる、まだ力を出しきっていない青年の力がある。われわれは、この当面する時代こそ若者の力によって開かれなければならないことを知っています。

その扉の外にある黎明は、われわれが望んだ社会の夜明けであることを確信して、重い重い鉄の扉に手を押しつけてみようではありませんか。

日本とは、地域社会とは、あるいは転機にあるわれわれの文化とはという問題が、確実に、そしてリアルにそこで問い始められているのです。私は、それが燎原の火のごとく燃え広がり、未曾有の転機を切り拓く力となることを祈ってやみません。

『30億』1975年11月号所載「松山・会頭所信」(要約)

1975

日本青年会議所

- 1 日本JC第25年度会頭に秋田の佐藤敬夫が就任
日本JCスローガン「人間への期待 明日への行動 創ろう正しい日本の心」
JCI会頭にフランスのジャン・クロード・フェローが就任
本年度から褒賞に業種別部会提供賞も加える全国都道府県別のブロック体制確立
本年度は報道関係パブリシティを基調にJCアカデミー、東・中・西3地区に拡大
- 2 山門、美作入会
- 2.1 日本JC新聞でグリーン・キャンペーン実施
- 2.21 初の全国青少年開発委員長会議、東京で開催
- 3 会津喜多方入会
- 3.10 教育問題で全国的アンケートを実施
- 3.11 日本JCが自民、社会など5党へ公開質問状、同時に会員1500人に対し政治意識調査を実施
- 4.11 日本JC会員8000人を対象に会員意識調査実施
- 4.19 初の公式訪問報告会を地区大会に加え開催へ
- 4.24 アフリカ親善視察団を派遣(5月8日まで)
- 5 串本入会
- 6.1 JCI札幌コンファレンスが開催され、アジア太平洋地域から18カ国462名、国内より3344名が参加
- 6.21 第5回JCアジア青年の船が出港、団長吉田宏副会頭以下500名が参加(7月20日まで)
- 7 敦賀、能登川、湖西、軽井沢入会
- 7.12 第4回アジア青年会議、横浜で開催
- 7.18 全国青少年グループリーダー会議(20日まで)
- 7.20 日本JC第5回広報セミナー開催(東京)
沖縄海洋博開幕に具志堅沖繩地区協会長が代表で列席
- 7.25 '75国家問題会議が東京で開催され、三木首相が出席、600名が参加(27日まで)
- 8.1 第2回OBS(アウトワード・バウンド・スクール)、長野県終池で開催
- 8.3 第6次北方領土視察団を派遣、団長吉田宏副会頭以下391名が参加
- 8.31 ブラジル移民60周年を記念し親善団派遣、団長喜連義昭総務室長以下48名が参加(26日まで)
- 8.17 台風5、6号対策支援募金を開始
- 8.21 佐藤会頭が、教育問題などで会頭提言を発表
- 9 石岡、飯山入会
- 9.1 日本JC創立25周年記念企画・写真コンテスト「青年・若さ」公募
- 9.2 日本JC、農業問題で提言(農業問題委)
- 9.6 第6回経営開発シンポジウムが大阪で開催され、2600名が参加(7日まで)
- 10 棟方、二ツ井、山辺、新井入会
- 10.8 第24回全国会員大会が松山で開催され、6429名が参加
会頭選挙規則を一部改正
褒賞・JCデー統一行事で初の公開審査制採用
- 11 第10回日米、第2回日独合同JC会議、東京ヒルトンホテルで開催
- 11.2 第30回世界会議がオランダのアムステルダムで「人間と環境」をテーマに開催され、団長佐藤敬夫会頭以下70名が参加、長尾源一がJCI副会頭に当選
- 11.14 小野正孝氏(72年度会頭)、高松で病没
- 11.20 衆・参議院関係者「青年会議所議員連盟」を創立
- 11.20 日韓定期青年交流訪韓団が出発(29日まで)
- 12 塩釜、栗原、鴻巣、稲城、大府、中標津、可児、別府入会、595JC、4万5928名に拡大

内外の動き

- 2.11 中国人民大会で憲法改正、新人事を発表
チツン・公害補償で開銀融資39億円を申請
イギリス保守党首にサッチャー女史、女性として初の当選
- 3.25 ファイサル・サウジアラビア国王暗殺される
- 3.10 新幹線、岡山～博多間開通
- 4.30 南ベトナム政府無条件降伏、解放軍サイゴンに入城、ベトナム戦争終結
プノンベン陥落、王国政府がカンボジア全域を支配
蒋介石台湾総統死去
- 5.7 エリザベス・イギリス女王ご夫妻来日
連続企業爆破のアナーキストグループ8人逮捕
- 5.16 日本女子登山隊、エベレスト登頂に成功
- 6.3 佐藤栄作元首相死去
- 6.5 中東6日戦争以来閉鎖されていたスエズ運河8年ぶりに航行再開
- 6.19 国際婦人年世界会議、メキシコで開催
日台空路再開に関する民間取決め調印、日本航空の子会社により路線再開
- 7.19 沖縄国際海洋博覧会開催
- 8.23 「興人」の戦後最大の倒産、負債総額は関連会社も含めると2100億円
東京などで六価クロム禍明るみに
- 9.30 天皇・皇后両陛下、初のアメリカ訪問
エジプトとイスラエル、シナイ新協定に正式調印、事実上の不戦宣言
- 10.9 ソ連の反体制物理学者で「水爆の父」と呼ばれるサハロフ氏にノーベル平和賞
塩化ビニールモノマーによる肝臓障害で初の犠牲者が出、新しい公害として問題化
スペイン領サハラへの領有を主張するハッサン・モロッコ国王は平和大行進を命令、スペインはサハラ譲渡に合意
高校進学率91.9%、大学・短大は37.8%(文部省調べ)
- 11.11 アンゴラ、500年にわたるポルトガル植民地支配から独立
- 11.15 世界経済に関する主要先進6カ国首脳会議、フランスのランブイエ城で開催
ミンダナオ島で末広丸と日比合弁漁船スル4号、相次いで武装ゲリラに襲われる
- 11.20 フランコ・スペイン総統死去
大阪空港公害訴訟で住民側が全面勝訴
- 11.26 スト権奪還をめざして公労協8日間にわたるスト
- 12.2 ラオス、王制を廃止し人民共和國樹立
私鉄運賃平均24.6%値上げ
総人口は10月1日現在1億1193万人、この5年間に6.9%増加(第12回国勢調査)
- 12 酒・たばこ・郵便料金の値上法案成立



次なる四半世紀を切り拓こう 〈自立と連帯〉

第25代会頭 田口 義嘉壽

名古屋JC 1938年生 74年名古屋理事長 75年副会頭 76年会頭 元・西濃運輸(株)取締役社長 16年逝去

はじめに

これまでの4半世紀が、戦後日本経済の再出発とともに始まったのは対照的に、「次なる4半世紀」は、近年にない深刻な不況とともに開幕した。高度成長がもはや望めなくなった現在、過去の経験にすべてを頼ることは許されない。成長の波に乗っていればよかったこれまでとは異なり、これからは各人の能力と意欲と創意とが、まさに問われる時代である。甘えた相互依存や責任転嫁は、もはや通用しえない。自己責任の原理に立脚した逞しい人間同士の協調と連帯のみが、21世紀にいたるこの25年間を切り拓いて行くことができるのである。したがって私は、「自立と連帯」を、本年度の基本方針として提唱したいと思う。

自立と連帯を出発点に 新しい経済成長政策を推し進め、 企業を、地域をそして日本を 発展させよう

自立とは、責任を他に転嫁せず、他人の援助や好意を期待する前に、まず自ら最善をつくして努力することである。弱者の救済も福祉の向上も、たしかに必要ではある。しかし、「自分のことは自分でやる」という自己責任の原理がまず確認されていなければ、福祉の向上は、「弱者」をいたずらに増大させるのみに終わってしまう。自分は社会から援助を受ける権利のある「弱者」であると考えた人が多数を占めるならば、財政は破綻し国家は解体せざるをえない。自由な産業国家としての日本を守るために、私たちは独立自尊の原則に絶えず立ち戻る必要がある。その自立の基礎は、自由な市場経済を前提にした企業にあると確信する。

新しい経済発展の必要性の自覚

「自立と連帯」の原則の上に、活力の

ある福祉社会の建設を促進し、国際社会に対する相応の責任を全うしつつ、豊かな市民文化を育てるというわが国の使命を果たすためには、終極の安定的発展が不可欠である。まさに、私たちに課せられた責任がそれである。

非常事態にも耐えられる 全天候型経営の確立

現在、経営的自立が特に困難な厳しい環境の中にある。しかし、このような時間は経営革新の好機である。私たちは創意工夫を一段と発揮し、経営の各側面に根本的な再検討のメスを加えて、いかなる環境条件の下でも逞しく生き抜くことのできる全天候型経営を確立しようではないか。

企業内連帯の強化

すべての従業員が職場で働くことに生きがいを見出し、能力開発の機会を十分に与えられ、さらに市民としての社会的責任を果たしうようになった時、つまり全従業員が自己実現と自立を目指して連帯する時、企業も真の自立経営を確立しうるのである。

企業人としての 社会的責任の自覚

人びとの無責任さを助長するような福祉ではなく、独立自尊の気概を育む連帯を、私たちの力で下から築き上げて行こうではないか。これこそが、自立した企業人としての私たちの社会的責務である。

「草の根文化」を見直し、 育成しよう

現状では、日本の未来を背負う逞しい自立した子供たちの育成が十分になしとげられない。青年会議所運動がいまなすべきは、文化創造の原点に立ち

戻った「草の根文化」運動の推進である。「草の根文化」運動は、次の2点を重点としたい。

1. 「郷土文化」の再発見の推進
 - (I) 郷土史の編纂、出版
 - (II) 文化財の再発見
 - (III) 方言の保存活動
 - (IV) 祭りや民俗芸能の保存と創造
 - (V) 人類史的視野で郷土の変化と日本の近代化を考え直す運動
2. 新しい文化の創造と普及
 - (I) 良書センターの設立と普及
 - (II) 各種文化運動の支援と秀れた芸術家、文化人の招聘

自立と連帯の精神で 国際社会に貢献しよう

これまでの日本は、先進国から優れた文化、技術を学ぶという点では、きわめて積極的であった。しかし、日本の優れた「草の根文化」を世界に紹介し、人類の文化をより豊かにするという努力は、ほとんどしてこなかった。また、いわゆる発展途上国の優れた文化遺産に学ぶという態度にも、きわめて欠けていたことは否定しえない。このような文化的依存主義と偏見とは、ともに自立の精神の不足に由来するものである。「草の根文化」の再発見と創造的発展の運動は、たんに国内にとどまることなく、世界に対して開かれていなければならない。

むすび

地域に密着するとともに、全国的、地域的視野を持ち、分権的、多元的であると同時に、連帯し統合されている青年会議所運動の長所をさらに発展させよう。自立を基礎にした連帯は、まず私たちの組織内部で十分に実現されねばならない。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第26年度会頭に名古屋の田口義嘉壽が就任
日本JCスローガン「自立の心、拓こう未来築こう われらの連帯を」
JCI会頭にフィリピンのソナリー・ベルモンテが就任
自立と連帯、「草の根文化」の見直しを事業活動の中心に
- 2 日本JC創立25周年記念事業の一環として「青年・若さ ― 写真コンテスト」を実施
- 2.14 社会開発委員会が日本武道館でセミナーを開催され、568人が参加(15日まで)
- 2.21 日本JC創立25周年記念式典が「明日を求めて」のテーマのもと東京NHKホールで開催され、4473名が参加
- 3 日本JC創立25周年を記念して「ビジョン討論会」をフジTVをキーステーションに放映
- 3.27 76国家問題会議が東京で開催され、「新しい秩序を求めて ― 自由社会における公と私」のテーマのもと460名が参加、3つの提言を行なう(28日まで)
- 4 寝屋川入会
日本JCシニアクラブが分離独立
APDC(アジア太平洋開発協議会)使節団をバングラデシュ、ネパール、パキスタンへ派遣
- 4.11 広島市で第25回中国地区会員大会を開催
- 4.17 阿南市で第23回四国地区会員大会を開催
- 4.25 浦添市で第5回沖縄地区会員大会を開催
- 5.9 姫路市で第24回近畿地区会員大会を開催
- 5.12 JCIアジア・コンファレンスがソウルで開かれ、日本JCは1300名が参加。米子が最優秀国際活動賞(15日まで)
- 5.15 佐賀市で第23回九州地区会員大会を開催
- 5.22 上田市で第20回北陸信越地区会員大会を開催
- 5.30 立川市で第24回関東地区会員大会を開催
- 6.12 八戸市で第24回東北地区会員大会を開催
- 6 郡上入会
- 6.7 第6回JC青年の船が出航、476名が参加
- 6.12 日本JC資源問題委員会と青森ブロック協議会共催で「第1回青森青年食糧会議」を八戸で開催、続いて「愛知県青年食糧会議」を開催
- 6.17 保守新党結成に田口会頭が声明を発表
- 6.20 高山市で第27回東海地区会員大会を開催
- 6.22 国鉄スト権ストに関する公聴会を大阪で開催
- 7 佐倉入会
- 7.10 旭川市で第25回北海道地区会員大会を開催
- 7.17 日本JC経営スクールが東京で開催され、350人が参加
- 8 尾張旭、牛深入会
- 8.29 第7次北方領土視察団に1000名参加
- 9 取手入会
- 9.14 第2回日ソ友好訪ソ視察団を派遣、22名が参加(21日まで)
- 10 中島武三郎事務局長退任、稲垣毅夫局長就任
- 10.16 第25回全国会員大会が浜松で開催され、7677名が参加(17日まで)
- 11.6 第31回JC世界会議がJC発祥の地米国セントルイスで開催され、世界80カ国、2000人が参加
- 11.20 業種別部会が初の合同会議を仙台で開催(21日まで)
- 12 東予、さつま出水、宇城、串木野入会

内外の動き

- 2.4 米上院外委多国籍企業小委公聴会でロッキード社の海外での違法政治献金暴露される
日本初の実用衛星「うめ」打ち上げ
- 3.1 韓国で金大中ら12人が「民主救国宣言」を発表
- 4.5 北京で天安門事件。4月7日華国鋒首相の就任と鄧小平副首相の全職解任公表
- 4.25 ベトナムで再統一総選挙。7月2日ベトナム社会主義共和国樹立宣言
自民党内の三木退陣工作が表面化
- 6.25 河野洋平ら自民党の国会議員6人が離党、新自由クラブを結成
パレスチナ・ゲリラが仏航空機をアテネ離陸後に乗っ取り、6月28日ウガンダエンテベ空港着陸。7月4日イスラエル奇襲部隊がゲリラ全員射殺、人質救出
- 7.17 第21回オリンピックモントリオールで開催。アフリカ17カ国参加
- 7.27 東京地検が口事件(丸紅ルート)にからみ田中角栄前首相を外為法違反で逮捕。8月16日収賄罪(5億円)で起訴
- 9.6 ベレンコ・ソ連軍中尉が函館空港強行着陸
9月29日米亡命
- 9.9 中国の毛沢東党主席が死去(82)
三木改造内閣が発足
口事件で検事総長の名をかたった首相へのニセ電話事件が判明
- 10.12 中国で華首相の党主席就任と江青ら「4人組」反党グループの陰謀摘発公表
- 11.10 天皇在位50年式典開催
第34回総選挙。初の任期満了総選挙
OPEC第48回総会開催。12月17日、52年1月からの原油価格の2本立て値上げ実施を決定
- 12.24 福田内閣発足



地方自治への挑戦

第26代会頭 小沢 一彦

横須賀JC 1937年生 72年横須賀理事長 75年副会頭 76年監事 77年会頭
現・日本水産観光(株)代表取締役

はじめに — 青年への期待

いくたの変革の嵐をくぐりぬけてきた政治が、今日ほどはげしく不信をもって見られている時期はない。昨今の政治からは、政治的無関心層の増大や政治家不在の現象が生み出されている。そして、政治不信を根に持ち、政治に絶望して背を向け、新たな指導者の出現の希求がさげばれている。これは、政治不信の時代の象徴である。

では、この政治不信の施策としてどんな妙案があるのか。私はその糸口としては、政治の過程の中に、“人間性の政治”を注入し、政治の過程そのものを試金石にすることだと考える。“人間性の政治”とは、最大限に人間を政治に参加させることを重視するものである。

そこで、私たち青年は理想の政治の方向をさぐり出すために、第一歩を力強く踏み出そうではないか。

地方自治を見直し、自治意識の高揚を

本年度の課題として、私はぜひ地方自治の問題をとりあげたい。いうまでもなく、青年会議所運動はこれまで、地域社会で多くの役割を果たしてきた。

ところで地方自治の観点からみると、かつては政治とあまり関係のない中央と結びついた官僚的自治のあり方が、いま厳しく問われている。さらに、地域社会での直接参加型の民主主義の進展は、地域エゴイズムの対立を生み出している。ここに、公と私の間問われている。地域エゴイズムは、正しく克服されなければならない。

また、高度経済成長時代に生じた生活基盤の立ち遅れ、都市問題としての住宅、交通、教育、育児などの改善すべき多くの諸問題がある。

こうした身近な生活の問題を政治的課

題として認識したとき、われわれは1個人として市民としての自治意識に目覚め、自立し、連帯感を深めることができる。そこで私は、各地の会員会議所が改めて地方自治を見直し、自治意識を高揚する運動に取り組むことを、強く提唱するものである。

安定成長の時代に歴史の推進を

低成長社会は、ひとつの時代の終わりであると同時に、新しい時代の始まりである。底流では、新しい真実を求めてエネルギーが蓄積され、多くの転回がなされる時でもある。

高度成長時代が量の変化に乗って伸びれば良い時代であったとすれば、低成長時代は質の変化によって生きていく時代となろう。私たちは、新しい時代を築く先鋒として、力強く生きなければならない。

文化を見出し、次代のために

これまでの地域開発は、文化を忘れた経済開発と同義語的に考えられていた。私は田口直前会頭が提唱された“草の根文化”の見直しと育成の問題を継承し、歴史的環境と文化の保存を強調したい。

国際社会で対話と協調を

資源を武器とする第3世界の発言権の増大や、南北問題への積極的とりくみが、新しい世界の秩序をつくりつつある。石油危機で明らかになったように、国際的つながりなくして、私たち日本人がかかえている問題は、なにひとつ解決できない。

今後、私たちにも求められているのは、あらゆる国々との対話と協調を通して、世界平和への道をさぐることである。したがって、国際青年会議所の組

織を通じて、より積極的な対話と交流を推進していくことが、私たちの責務である。

終わりに — 始動団体から促進団体へ

新しい青年会議所運動とは、どのような性格のものであるのか。

まず第1に、変革への勇気を持つことである。直面している課題に勇敢に取り組む覚悟がなければならない。変革には厳しい試練が伴うのである。

第2は、政治の動きを注目することである。最近の政治意識の高まりに敏感でなければならない。つまり、新しい形での政治参加が起こっており、その声に応えていかねばならない。

第3は、多元性を認める幅を持つことである。それは、意見の対立の中にこそ本来の力がひそんでいるという認識であり、同時に対立する意見を調整しながら、ひとつの調和のとれた全体像へとまとめあげる手腕でもある。

日本青年会議所は、各地会員青年会議所運動の基盤に立って、一層の努力と会員会議所への期待に応えなければならない。これからの青年会議所運動は、始動団体の役割から一歩進んで、促進団体としての役割をつけ加えていくことが必要である。

私たちはここで、安易な希望や悲観的危機に偏することなく、ただ課せられた任務の大きさと重さを十二分に認識し、次の世代のために真の価値ある遺産を引き継がなければならない。

私たちの世代が、平和の中に暖衣飽食し食いつぶした世代といわれたいために。明治維新以来の近代化が、多くの血と汗の上に築かれているように、私たちもまた、将来に誇るべき遺産を残そうではないか。

(要約)

1977

日本青年会議所

- 1 日本JC第27年度会頭に横須賀の小沢一彦が就任
日本JCスローガン「築こう 日本の礎 はかろう 自治意識の高揚」
JCI会頭にアメリカのロナルド・G・S・アウが就任
地方自治への挑戦、自治意識の高揚を基調に
奥河入会
- 2.11 マニラでAPDC会議開催
- 3 山城入会
- 3.20 韓国青年会議所創立25周年式典に小沢会頭、榎谷国際室、アウ
JCI会頭とともに出席(現役の日本JC会頭の参加は初めて)
- 3.28 3年来の日独会議の成果で60人のドイツJC会員が来日
- 4 鎌ヶ谷入会
- 4.10 宮古市で第6回沖縄地区会員大会を開催
- 4.21 陣内孝之氏('75日本JC専務理事)が福岡市で客死
- 4.24 新居浜市で第24回四国地区会員大会を開催
- 5 あぶくま入会
- 5.8 徳山市で第26回中国地区会員大会を開催
- 5.14 七尾市で第21回北陸信越地区会員大会を開催
- 5.16 JCIアジア・コンファレンスがバンコクで開催され、日本から650人が
参加(19日まで)
APDC会議を合わせて開催
- 5.22 別府市で第25回九州地区会員大会を開催
- 5.29 田辺市で第25回近畿地区会員大会を開催
- 6 上山、狭西、吉南入会
- 6.3 富士吉田市で第25回関東地区会員大会を開催
- 6.12 蒲郡市で第28回東海地区会員大会を開催
- 6.8 PLOの幹部ハレド・ハッサン氏が日本JCの招きで来日
- 6.17 第1回JCアカデミー洋上スクールは「道標への出航」のテーマのもと
に433名が参加(23日まで)
- 6.23 第7回JC青年の船(横浜-香港)、495名が参加(7月2日まで)
- 6.26 秋田市で第25回東北地区会員大会を開催
- 7.9 釧路市で第26回北海道地区会員大会を開催
- 7.23 '77国家問題会議「活力ある自由社会をめざして」を東京で開催、
1000名が参加
- 7.24 会頭選挙で麻生太郎が望月成二を破る
- 8 市原、入間、南国入会
- 8.21 第8次北方領土視察団を根室に派遣、1000名が参加
- 9 池田彰孝副会頭を団長に第3回日ソ親善友好視察団を派遣、350
名が参加(10日まで)
- 10 下諏訪、糸島入会
- 10 福祉問題委員会が「福祉徴用制度の実践プログラム」を提言
- 10.12 第26回全国会員大会が仙台市で開催され、7524名が参加(16日
まで)
- 11.12 第32回JCI世界会議がヨハネスブルグで「世界は一つ、地域社会は
一つ」のテーマのもとで開催され、小沢会頭を団長に130名が参加。
広瀬武が副会長当選、長尾源一が財政顧問に内定。また、日本語
が公用通信語に採用(19日まで)
- 11.26 第3回理事予定者会議で、日本青年会議所新聞を明年からタブロイ
ド版化することを決定
- 12 村山、東根、高浜、北摂、東広島、出雲大社入会

内外の動き

- 1.20 米で民主党のカーター大統領就任
- 3.1 米、ソが200カイリ漁業専管水域実施
公定歩合引き下げ、年6%。4月と9月も引き下げ、
年4.25%に
衆院予算委が「日韓ゆ着」問題で初の集中審議。
ソウル地下鉄疑惑など
日本初の高速増殖実験炉「常陽」が臨界点に達
し、「原子の火」ともる
米・ベトナム国交正常化第1回交渉開始
新東京国際空港が反対派の鉄塔2基を抜き打ち
撤去
- 6.15 和歌山県有田市で集団コレラ
東京外国為替市場で円急騰。1ドル=268円60
銭に
- 7.10 第11回参議院議員選挙。与野党逆転ならず
小・中学校の新学習指導要領告示。原案通り
「君が代」が国歌に
第10回米韓定期安保協議開催。在韓米地上軍
の撤退決定
- 8.6 福田首相が東南アジア6カ国訪問。東南ア外交3
原則発表
北海道洞爺湖畔の有珠山が32年ぶりに噴火
ケルンで西ドイツ赤軍派(RAF)が経営者連盟会
長シュライヤーを誘拐
ベトナムが国連に加盟
- 9.28 日本赤軍がボンベイ上空で日航機をハイジャック
閣議で第3次全国総合開発計画(3全総)を正式
決定
- 11.19 サダト大統領がイスラエルを初訪問。イスラエル国
会で演説(中東和平交渉開始)
- 11.28 福田改造内閣発足。対外経済担当相(新設)に
牛場信彦
- 12.13 社会党第41回定期大会開催。飛鳥田一雄委員
長らを選出
- 12.31 カンボジアがベトナムと断交
昭和52年の企業倒産数は1万8471件、負債総
額は2兆9780億円で51年をこえて史上最高(構
造不況業種が中心)



会頭所信

第27代会頭 麻生 太郎

飯塚JC 1940年生 77年副会頭 78年会頭 現・衆議院議員

みなさんが、もし青年とよばれたいならば、自分の理想の現実化に悩むべきであり、けっして安易な妥協に流されるべきではないと思う。これは私の信条である。

青年が既存の秩序に封じこめられ、前例を重んじ、平凡かつ墮性に満ちた生活を望むことは、開かれた活力ある日本という国家にとって、最も大きな病根になることを、われわれはつねに自戒しなければならない。今後、ますます厳しくなっていくであろう国際環境下で、日本という国家が生き残っていくために、たえずわれわれ青年の英知と情熱を必要としている。

政治に対し主体性を

今年、国家青年会議所としてなすべき最も重要なことの一つは、青年会議所運動の健全な発展のために、自民党にも新自由クラブにも、あるいはわれわれの綱領に矛盾しない人の他の政党に対しても、青年会議所としての主体性をとり続けていくことだと考える。

新しい時代のJC運動をめざそう

日本の青年会議所運動は、次の3つの時代に分けられる。「3信条の時代」「綱領の時代」そして「宣言の時代」——の3つである。いずれも、それぞれの時代を反映し、あるいは先取りしながら青年会議所運動の変遷をみごとに特徴づけてきたと思う。

しかし、われわれは、いまさらに新しい時代のフシ目に立っている。青年会議所運動を大きく飛躍させた高度成長の時代は終わり、1億2000万の国民が資源・エネルギーと財政の制約を受けながら生きていかなくてはならない時代が始まった。青年会議所運動のあり方も、新しい展望に立った転換を求め

られている。

われわれの青年会議所運動における情熱と力の源泉は“企業”にあるといえるが、その企業の存立基盤が、急変する時代の波に洗われている。

私は、優秀な青年会議所の会員は、企業でも優秀な経営者でなければならないと信じている。立派な企業経営をしている青年経済人が、その余力をもってボランティア活動である青年会議所運動に参加するのが、われわれ会員の本来の姿勢である。

もし、各地会員会議所のかかえている事業が、今日の経済環境下で負担になりすぎているのであれば、私はこの際、継続事業を見直し、思い切って身軽になるべきだと思う。各地会員会議所のもつ事業がかりに1つしかなくても、なんら恥じることはない。事業が多くなって会員の企業経営が著しく阻害されたり、スリーピングメンバーが増加し、事業の質の低下することこそ、むしろ恥じるべきである。

発言する青年会議所になろう

青年経済人の集まりである青年会議所の動向は、世間から期待され注目されている。私は、国家青年会議所の勇気と対外的な発言力をいっそう強めていかななくてはならないと痛感している。その対外的な評価の向上が、各地会員会議所の運動にとって大きな支えとなる。

国際社会への責任を自覚しよう

日本青年会議所が、運動の質量ともに国際青年会議所の指導的立場にあることを疑う人はいないであろう。

しかし、アジアコンファレンス等に参加した会員諸兄から、「アジアの会員とは運動のレベルが違いすぎて何も学ぶものがない」との意見がある。私は違うと思

う。われわれが国際青年会議所に入った頃を思う時、今度はわれわれがそのお返しをするという立場で接するべきだと考える。

野に咲く花にたずねてみよう

今日、日本人の求めるテーマは、これまでの物質一辺倒から精神的なものへと、大きく変化しつつある。

振り返ってみると、われわれ日本人は、つねに「他人と同じであれば幸せのはず」という原理で行動してきた。このため、充実感の少ない、心の安まらない生活に追われてきた気がする。しかし、他人様と同じであれば幸せのはず、という原理から、われわれの心の充実感は一切得られない。つまり、自分自身で、自分自身の価値観を割り出さなければならないのである。

足もとの小さな自然に気づき、豊かな心をもつことの重要性に、みなさんは共鳴を覚えられると確信している。他人の心の痛みを感じ、他人の悲しみに涙することのできる心の美しさを、私は高く評価したい。本来、日本人の誰にでもある“察しの美学”を、われわれは毎日の忙しさと騒がしさの中で、ともすれば忘れてきているという感じがする。

私は会員諸兄に、そのことを気づいてほしいと思い、一言で説明する言葉として、「バスを降り、野に咲く花にたずねてみよう」と申し上げたい。

今年、みなさんの町で、みなさんの青年会議所運動を展開させる時、私のいう「豊かな心の町づくり」という言葉を、心のどこかに憶えておいてほしいと願う。

そして、その上にたって、前例や形にとらわれない思い切った発想を、各地に開花させてほしいと期待するのである。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第28年度会頭に飯塚の麻生太郎が就任
日本JCスローガン「厳しい自覚 明日への飛躍 世界に示そう 日本
の心」
JCI会頭にパシフィック(グアム)のカール・ピーターソンが就任
「誇りある街づくり」を合言葉に、発言する青年会議所として自治体
に、国に意欲的提言を続ける
- 3 河北、美浜三方入会
- 3.3 在日韓国人青年会議所問題について、大阪で第1回日韓両国青年
会議所会議(5日まで)
- 4.6 JCIからブシャー事務総長が来日(11日まで)
- 4.14 日本担当のリュー JCI副会頭が各地を公式訪問(20日まで)
- 4.15 宮崎で九州地区会員大会を開催
- 4.23 第5回APDC(アジア太平洋開発協議会)3カ国派遣(5月2日まで)
- 4.29 高松で四国地区会員大会を開催
- 4 会津坂下、浜北入会
- 5.7 浦和で関東地区会員大会を開催
- 5.14 富山で北陸信越地区会員大会を開催
- 5.21 泉大津で近畿地区会員大会を開催
- 5.24 JCI台北コンファレンスが開催され、日本から800名が参加(28日まで)
- 6 オホーツク枝幸、園部入会
- 6.11 四日市で東海地区会員大会を開催
- 6.18 山形で東北地区会員大会を開催
- 6.25 第2回JCアカデミー洋上スクール(7月1日まで)
- 6.30 第8回JC青年の船、487名が参加(7月10日まで)
- 7 串間、枕崎入会
- 7.2 岡山で中国地区会員大会を開催
- 7.5 次年度会頭に佐藤、井奥両副会頭が立候補
- 7.9 苫小牧で北海道地区会員大会を開催
- 7.16 第7回世界青年会議所開催
- 7.18 ソウルで第2回日韓両国青年会議所会議開催
- 7.29 東京で「青年経済人会議」開催。テーマは「日本の安全のために」、
250名が参加
- 7.30 次年度会頭選挙の結果、井奥が当選
- 8 宜野湾、岩倉、八潮、波崎、神栖、黒部、久喜入会
- 8.20 根室へ第9次北方領土視察団派遣、1316名が参加
- 8.21 麻生会頭ら、全ソ青年団体委員会の招きで訪ソ(27日まで)
- 9 福生入会
- 9.8 JC経営スクール(全国経営開発委員研修会)開催(9日まで)
- 9.10 日ソ友好使節団が訪ソ(17日まで)
- 9.17 東京で第3回業種別全国大会開催。観光事業部会10周年式典
臨時総会で、次年度から「重点テーマ」制度採択を可決
- 10 第27回神戸全国会員大会が開催され、1万288名が参加(15日まで)
- 10.21 商工会議所百周年式典、記念事業参加(22日まで)
- 11.5 マニラで第33回世界会議、明後年の大阪世界会議開催などを決定
(11日まで)
- 12 伊勢原入会

内外の動き

- 伊豆大島付近でM7の地震、伊豆半島に大被害
ソ連の原子炉衛星カナダに落下
永大産業倒産。負債総額1800億円
- 3.5 中国で第5期全国人民代表大会第1回会議開催。
4つの近代化を明記の新憲法採択
三里塚・芝山連合空港反対同盟が開港阻止の総
決起集会。開港延期
東京外為市場で1ドル=220円の台高を割る
昭和53年予算案成立。景気浮揚を旨とし大赤字
予算。国債依存率32%
- 4.9 京都府知事選。28年の革新府政に幕
特定不況産業安定臨時措置法(構造不況対策
法)施行
- 5.20 成田空港(新東京国際空港)開港
- 5.23 国連軍縮特別総会開催
- 6.12 宮城県沖でM7.5級の地震
日・米・ECなどの東京ラウンド閣僚級交渉開催。
年末までに実質妥結
- 7.16 第4回先進国首脳会議開催(ボン)
- 7.19 栗栖統幕議長が、緊急時に自衛隊の超法規的な行
動はありうると言明、更迭(有事立法論争始まる)
3年ぶりに日中平和友好条約締結交渉再開。反
覇権・第3国条項で難航
- 7.25 英で世界初の体外受精児誕生
- 8.12 日中平和友好条約調印
- 9.8 イランで戒厳令布告。数十万人が王制打倒デモ
12月26日石油輸出停止(イラン革命)
- 9.17 カーター米大統領、サダト・エジプト大統領、ペギ
ン・イスラエル首相の3国首脳会談開催。3カ月以
内の単独平和条約調印で合意(キャンプデービッ
ト合意)
- 10.31 東京外為市場で円高騰、1ドル=175円台。以後
続落
- 11.26 自民党総裁決定選挙。大平幹事長が大差で1位
12月6日福田内閣総辞職
米政府が緊急ドル防衛策を発表
- 12.7 大平内閣発足
- 12.15 米中両国が54年1月1日からの国交正常化を同時
発表(米台条約破棄)
第52回OPEC総会開催、14.5%引き上げを決定
昭和53年の完全失業者数は124万人で21年以
来最高



会頭所信

第28代会頭 井奥 貞雄

松戸JC 1939年生 71年松戸理事長 78年副会頭 79年会頭 前・衆議院議員

私たち5万会員を結ぶ絆は「青年」であり、共通の目標をもつ「運動者」としての連帯にある。私たちの運動が「青年」を名乗り、自らの組織を「運動体」と規定する意味を改めて考え、1980年代の青年会議所運動の可能性を追求したいと思う。

さらに「運動体」である以上、社会との密接なかかわり合いを持つのは当然であり、量的にも質的にも大きな影響力を及ぼしていく必要がある。そのためには、5万人会員に「運動者」としての確固たる規律と責任感を要望したい。「運動者」は、なによりも時代を先駆けるリーダーとしての要件を満たさねばならないからである。

私は、新しいリーダーの条件をこう考えている。

まず明確な信念を持つことであり、次には自分の言葉で語ることである。借りもので共感を得ることはできない。さらに大切なのは人間愛であり、限りない人間愛こそすべての行動の出発点となると思う。

国際協調へ具体的行動を —— 国際社会と日本

今日、日本を取り巻く国際環境は、きわめて複雑で流動的である。と同時に、私たちは外国から影響を受けるだけでなく、私たち自身が世界に大きな影響を与える存在になっている。「民族の気概を結集して日本の平和と独立を守る」というJC宣言文の立場をここで再確認するとともに、世界平和に向けての日本の役割を明確にする任務があると思う。

このため、国家の安全と国益のあり方について、早急に国民的合意をつくりあげる必要がある。そのためには、会員会議所の運動を基盤に、国家青年会議所は勇氣ある発言、責任ある行動を起こしていきたい。

主体性をもち、 勇氣ある行動を —— 国内政治

この社会の仕組みや制度の変革が、政治を通じて行なわれること以外にないとするれば、長期的展望にたつて青年会議所が政治に取り組むことは当然である。主体的な態度を保って、政治にかかわる問題に勇氣と責任ある発言をしていくべきである。

ただ、会員諸兄が「政治問題」を「選挙問題」に矮小化することなく、地域の実情を考慮した英知ある行動を期待したい。

中小企業発展の 基盤をつくらう —— 経済・経営

いま、全く中小企業の存在しない社会を想定することができるだろうか。産業貿易構造の変化に揺れ動く地場産業、大型店進出に伴う商業核の変動に苦悩する商店など、それぞれの地域の特性を踏まえた地域経済のあり方について、われわれは地域に根ざす青年経済人として明確な意思表明を行なっていかなければならない。「統制」あるいは「集中」の対極をなす「自由」を抛り所に、中小企業が日本経済の一翼を担っていることを、また担っていかななくてはならないことを明らかにしたいと思う。

「心のぬくもり」と 「ふれあいの社会」 —— 地域・文化・教育

戦後の日本は、西欧の個人主義をきわめて底の浅い受けとめ方で浸透させてしまった。日本に昔からあった相互扶助の地縁的關係も、安定した人間関係も、そうしたもろもろをもっていた「ふるさと」も失ってしまった。

法さえ犯さなければ、何をやってもよいという風潮がある。弱者に対する福祉でも、制度や金だけで解決するのに

は限界がある。私たちは、よりよい社会をつくりあげるために、信頼で結ばれた人間関係、眼には見えない相手の心を尊重し、ゆとりとふれあいのある生活の意味を考え直す必要がある。

「個」と「全体」の調和ある 発展を —— JCとJAYCEE

会員拡大について、一部には拡大限界論がある。しかし、私たちの運動が「層」としての若者の運動である以上、人間集団のもつエネルギー、あるいは活力が絶えざる拡大によって補充、強化されるものと確信する。

真に成熟した社会をつくるのが私たちの運動であり、影響力を及ぼしていくのが正しいとするならば、より多くの同志を獲得する必要がある。

次に古くて新しい議論に、LDかCDか、企業かJCか、がある。これらは二者択一の問題ではない。指導力開発をベースに企業の場合には経済開発を、地域にあっては社会開発を全面的に展開すべきである。地域で事業を展開する時、街の人びとの関心は、企業活動のあり方、個人の生き方であり、それがJC運動への信頼と説得力の基盤となっていることを知るべきである。

推進すべき4つの運動 —— むすび

これまで述べてきた基本的な考えにたつて、私は次の4つの運動を提案したい。

- (1) 中小企業の存立をかけ、議論の輪を拡げよう!
- (2) 「開かれた教育」に挑戦し、豊かな連帯社会をめざそう!
- (3) 1000分の1拡大運動を推進しよう!
- (4) 「ディスカッション'79」に集い、JC —— その本質を語り合おう!

(要約)

1979

日本青年会議所

- 1 日本JC第29年度会頭に松戸の井奥貞雄が就任
日本JCスローガン「勇気ある挑戦 厳しい自覚 世界に翔け 青年の力」
JCI会頭にインドのクマ・P・ゲラが就任
①中小企業問題に議論の輪を、②「開かれた教育」に挑戦、③1000分の1拡大運動の推進、④「JC—その本質」を語ろう—を四本柱に
総会で「青年会議所会館」建設および資金計画を承認
- 2.26 中華全国青年連合会の招待で井奥会頭ら6人の代表団が中国を訪問(3月6日まで)
- 3.1 「会館」建設のための「債券」「寄付」の受け付け開始(最終的には「債券」は予定の5億円を突破)
- 4 統一地方選で約700名当選(含OB)
- 4.8 沖縄市で第8回沖縄地区会員大会を開催
第6回APDC(アジア太平洋開発協議会)使節団が、ネパール、パキスタン、バングラデシュに(18日まで)
- 4.21 高知市で第26回四国地区会員大会を開催
- 5 猪苗代入会
上越市で第23回北陸信越地区会員大会を開催
- 5.20 日立市で第27回関東地区会員大会を開催
- 5.27 奈良市で第27回近畿地区会員大会を開催
- 5.28 香港JCIコンファレンスに井奥会頭ら590名が参加(6月1日まで)
- 6 毎日新聞社との共催で「若手経営者・管理職体験記コンクール」
- 6.3 出雲市で第28回中国地区会員大会を開催
- 6.9 長崎市で第26回九州地区会員大会を開催
- 6.19 第3回JCアカデミー洋上スクールに469名が参加(25日まで)
- 6.24 福島市で第27回東北地区会員大会を開催
- 6.24 第9回JC青年の船が香港、マニラへ。481名が参加(7月4日まで)
- 7.1 伊東市で第30回東海地区会員大会を開催
- 7.6 次年度会頭に鴻池祥肇副会頭(尼崎)が立候補、予定者に決定
- 7.8 函館市で第28回北海道地区会員大会を開催
- 7.10 東京で第8回世界青年会議開催
- 7.28 東京で第2回青年経済人会議開催。テーマは「日本の真の発展とはなにか」
- 8 吉川、北広島、高島、白老、さがみ大和入会
- 8.19 根室市へ第10次北方領土視察団を派遣、1518名が参加
- 8.23 東京・平河町の「会館」建設予定地で地鎮祭
- 8.26 ソウル市で日韓両国青年会議所の合同特別委員会が開催、在日韓国人青年会議所問題を討議
- 9 第1回若手経営者・管理職体験記コンクールを毎日新聞と共催
- 9 新大隅、下館、玖西入会
- 9.7 京都市で'79経営開発シンポジウム開催、1355名が参加(8日まで)
- 9.9 第5次日ソ友好使節団を派遣(17日まで)
- 9.24 水戸市で第4回業種別全国大会
- 10 下妻入会
- 10.4 那覇市で第28回全国地区会員大会が開催され、7705名が参加(8日まで)
総会で「80年代の青年会議所運動“指針”」を採択
- 10.7 第35回総選挙で青年会議所関係47人が当選
- 11.4 第34回ゴッテンブルグ(スウェーデン)JCI世界会議が開催され、80カ国から2000名が参加(10日まで)
- 11.26 東京で次年度ブロック会長の懇談会(27日まで)
- 12 三郷、座間、古河、尾西、乙訓入会
- 12.8 本年度の最終数は655青年会議所、5万4722名

内外の動き

- 1.7 カンボジアで反政府軍首都を制圧
- 1.13 初の大学共通1次試験実施
- 2.14 航空機疑惑、国会で追及
3月期の企業業績、過去最高に
- 2.17 中国軍、ベトナムに侵攻
イラン王制崩壊
IEA理、石油5%節約で合意
中東和平条約やっと調印
- 4.8 統一地方選、保守・中道が勝つ
松野氏、5億円受領を認める証言
- 6.18 SALT II、米ソようやく合意
- 6.28 東京サミット、石油輸入抑制で合意
- 6.28 OPEC、石油大幅値上げ
新自由クラブ内紛、西岡氏ら離党
経審、新経済社会7カ年計画を答申
衆院解散、増税を争点に総選挙へ
金高騰、一時400ドルに乗せる
総選挙で自民敗北、政局は混乱へ
- 10.26 朴韓国大統領射殺される
“大福紛争”は投票で決着、大平内閣が発足
円続落、1ドル250円台に
イラン学生、米大使館を占拠。米・イラン経済断交、国際金融は混乱へ
OPEC総会、価格調整できず
- 12.27 「アフガニスタン」にソ連介入



会頭所信

第29代会頭 鴻池 祥肇

尼崎JC 1940年生 77年尼崎理事長 79年副会頭 80年会頭 元・参議院議員 18年逝去

真に平和なのか

私たちは、いま平和の中にいる。物質的にも恵まれている。既に、物質的な「豊かな社会」は実現されている。そうした状況の下で、私たちはどのような未来を選択すべきか。

それは、“物”に対する限りない欲望だけでなく、地域の特性をはぐみながら、そこに隣人の幸せを願う、心豊かな社会を実現することではないかと思う。こうしたことが、真に平和を確認する時である。

平和の中であって、繁栄を享受するだけでなく、平和と民主主義を維持発展させるために、それを脅かすものに敢然と立ちむかう姿勢が要求される。もちろん、その際「公を優先する」精神に徹する気概を貫くことが重要である。それは、企業のリーダーであり、地域のリーダーであろうする私たちに求められている資質の条件である。

「安全と防衛」の議論を

真に平和なのか、を考えた時、いま取り組まなければならない問題は、「日本の安全と防衛」である。青年会議所の現役会員は、いわゆる“戦争を知らない”世代である。しかし、現在の平和は、太平洋戦争で数百万人の犠牲の上で手にした貴重なものである。「再び戦争を起すことはならない」と叫んで尊い命を捧げられた人たちの悲願に応えるためにも、この議論が必要である。

資源が乏しく、貿易によって生活を維持し、発展させるしかない「平和の日本」にとって、外交こそが安全確保の最大の武器といえる。もしも、東京サミットでエネルギー節約の合意が得られなかったら、まさに世界の安全は大きな危機に直面していたと考えられる。

国際社会の中で

日本の安全のために、いま急がねばならないことは国際化への努力である。日本が国際社会で経済的な面では一定の成果をおさめたにもかかわらず、決定的に不十分なのは、私たち民族が何をめざし築こうとしているのかが、はっきりしないからである。

政治、この避けてはならないもの

1991年には、自治体首長、地方議員の実に25%以上が、私たちの関係者によって占められるであろう。そうした状況が出現するとするならば、いまから政治的対応力を練りあげておく必要がある。それは、選挙そのものを指しているわけではない。政治を即選挙と狭義にとらえるのではなく、大きくわが国のあり方を考える政策集団として、積極的な政治参画を検討すべきである。

1980年度重点事業

1. 日本の安全と防衛で「5万人アンケート」を実施、あわせてJCデー、青年経済人会議もこれを主題に

戦後の日本は、国の体質——すなわち自分たちがどのような体制の社会を創り、所属しようとしているのか深く考えることなく今日に至った。むしろ、国益を論ずることがタブー視されていた。いま、国のあり方、国の基盤を総合的に分析することから、80年代における日本青年会議所の方向性を見いだすことができると確信する。

明るい豊かな社会を築くためにも、わが国の安全と防衛は欠くことができない。地区による青年経済人会議、あるいはJCデーなどあらゆる機会に、このテーマをもとに議論の輪を広げて欲しい。また5万人会員の安全と防衛に対する意識

を集大成するため、全会員を対象にアンケート調査を実施する。調査結果は、政府・政策当局に提言したい。

2. 青年会議所会館の完成と運営
待望の会館が完成する。しかし、建物を建てるのが目的でなく、いかに機能的に運動へ貢献するかである。私は、関係者の納得のいく運営に努めたい。

3. JCI世界会議の成功
いよいよ11月に大阪で開かれる、世界80数カ国から集まるこの会議は、貴重な国際交流の場である。この大会の意義を各地会員会議所で理解してもらいたい。と同時に、国家青年会議所としても、明日への運動の大きな原動力となることを期待している。

「一期一会」のころ

一期一会——私はこの言葉を好む。たまたま出会った人間同士が、互いに認めあい、確かな手応えを感じる……、この一瞬の感動を覚える。私はこれまで、人と人との出合いをこよなく大切にしてきた。「君にとって青年会議所とは?」と問われれば、私は躊躇なく「友との出合いの場」と答える。青年会議所は自己を磨くところであり、修練に始まり、修練に終わるところである。会員一人ひとりが「礼儀正しい男」「信頼できる男」と頼りにされることが大切である。そうした集まりが青年会議所なのである。

青年会議所は、「奉仕」を標榜してきたが、いま奉仕というものを、もう一度見直す時期に来ているのではないかと隣人に、できることをしてあげる。それが奉仕である。私は、ここで改めて青年会議所運動の原点である「奉仕」と「修練」を諸兄に問い直してもらいたいと思う。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC30年度会頭に尼崎の鴻池祥肇が就任
日本JCスローガン「ひろげよう地域の輪 たかめよう国際意識
問いかけよう日本の安全」
JCI会頭にエクアドルのパトリシア・イスリエタが就任
「安全と防衛」に関して「5万人アンケート」を実施
- 1.23 自民党大会に鴻池会頭が出席、「日本の安全」を主張
- 3.1 第4回日韓合同特別委員会を東京で開催。在日韓国青年会議
所が日本JC加入に努力するとの決議書に調印(2日まで)
- 3.11 第7回APDC視察団21人がパキスタン、ネパール、バングラデ
シュを視察
- 4 浪江入会
- 4.13 武生市で第24回北陸信越地区会員大会を開催
- 4.20 池田町で第27回四国地区会員大会を開催
- 4.27 名護市で第9回沖縄地区会員大会を開催
- 4.29 鴻池会頭を団長に欧州へ防衛視察団(スイス、仏、西独)を派遣
(5月8日まで)
- 5.8 東京JCと中華全国青年連合会との実務交流第1弾として、18
人の研修生が来日
- 5.9 横浜市で第28回関東地区会員大会を開催
- 5.17 宝塚市で第28回近畿地区会員大会を開催
- 5.24 関市で第31回東海地区会員大会を開催
- 5.29 アジアコンファレンスがシンガポールで開催され、日本から812名
が参加(6月1日まで)
- 6 浮羽入会
- 6.6 熊本市で第27回九州地区会員大会を開催
- 6.13 第10回JC青年の船に500人が参加(25日まで)
- 6.15 福山市で第29回中国地区会員大会を開催
- 6.21 気仙沼市で第28回東北地区会員大会を開催
- 7 豊明、東八入会
- 7.1 「JC青年の船」10周年を記念し、横浜で「9回世界青年会議」
が開催され、一般団員など150名が参加
- 7.5 網走市で第29回北海道地区会員大会を開催
- 8.24 第11次北方領土視察団を根室に派遣
- 9 中条、綾瀬入会
- 9.15 '80経営開発シンポジウムが京都で開催され、1600名が参加
(16日まで)
- 9.30 第29回全国会員大会が札幌で開催され、1万人が参加。テー
マは「道 — 確かな歩み、今」(10月5日まで)
- 10 当別入会
- 10.29 JC会館が東京・平河町に落成、政・財界から700人が出席、
落成を祝う。
- 11.4 JC会館オープン
- 11.9 第35回JCI世界会議が大阪で開催され(15日まで)、中心テー
マ「21世紀への英知 — エネルギー・明るい未来に向けて」の
もとにヒース元英国首相、ガルブレイス・ハーバード大教授が講
演。皇太子殿下ご夫妻、鈴木首相を招き、70カ国から2500
名が参加、国内と合わせて出席者1万1500人、長尾源一が
JCI会頭に当選
第5回業種別全国大会が世界会議と同時開催され、初の試み
として「国際見本市」を大阪国際貿易センターで開く
- 12 尾花沢、阿蘇、亀岡、北本、結城、羽生、狛江入会
本年度の最終数は669JC、5万6226名

内外の動き

- 1.4 「アフガン」で対ソ批判強まる
- 4 電力8社、64.4%の値上げを申請
防衛庁元高官ら、ソ連へ機密流す
公定歩合上げ、7.25%に。卸売・消費者物価と
も大幅上昇
KDD疑惑、ついに強制捜査
公定歩合、過去最高の9%に
- 4.25 米、イラン人質救出作戦に失敗
地価6年ぶりに2ケタの急騰
日産自動車、米国進出を発表
- 5.4 チトー大統領死去
華国鋒首相が来日
- 5.24 JOC、モスクワ五輪不参加を決定
- 6.12 大平首相死去。自民、衆参同日選挙で圧勝
卸売物価、1年7カ月ぶりに下落
- 7.17 鈴木善幸新首相指名
パーレビ元イラン国王死去
- 7.19 モスクワ・オリンピック開幕 — 参加81カ国
マッコウ鯨34%削減 — IWC決定
ソ連原潜、沖縄沖で火災
ポーランド首相更迭
- 9.9 イラン・イラクの戦火拡大へ
新幹線訴訟、住民側が事実上の敗訴
- 11.14 米レーガン候補、カーター大統領を破る



会頭所信

第30代会頭 森 輝彦

大阪JC 1941年生 78年大阪理事長 79年副会頭 80年監事 81年会頭
元・丹平製薬(株)代表取締役会長 21年逝去

〈プロローグ〉

今、より困難な時代の到来を遥かなる海鳴りのごとく感じる。80年代はまさに次代への曲がり角である。この転換期に立ち考えるとき、私達青年こそ自らを鍛え、人間の尊厳を大切にする気持ちをベースに今日を強く生き、明日の人々のためにもたくましく踏み出さねばならないのである。

〈国際社会における日本と日本人の役割〉

今日ほど国際社会に複雑、かつ密接に絡まっている時代はなかった。元来、国際関係は相互依存を原則とするが、今日の日本は果たすべき役割と責任を充分になしえないままに、国際社会に依存する度合いがどんどん先行している状況ではないだろうか。

もし、日本が国際社会で孤立するようなことが起これば、たちまちにして国家機能は麻痺してしまうであろう。80年代は個人と地域社会と国家と国際社会が完全に連動する時代に入っている。したがって、私達は国際社会における日本と日本人の役割を自覚し、真剣に責任を果たすことを考えなければならない。政府レベルに望むこと、中央や地方の行政レベルに望むこと、また私達民間人が自らなさねばならぬことを明確にし、それぞれが役割を分担して、ときには互いに足りないところを補いながら、一体となって日本外交を推し進めなければならない。

一方、諸外国の歴史、文化、言語、生活、風習、習慣、ものの考え方など、進んでそれを理解しようという姿勢を忘れてはならない。

以上の視点に立ち、私達の国および私達自身がこの国際社会の中でどう生きのびていくか、会員とともに懸命に模索してみたいと思う。

〈日本の安全と防衛〉

国家の安全と防衛、これは私達の身近な日頃の企業経営と相通ずるものがある。すなわち、企業をつぶしてしまえば、そこで働く者達が路頭に迷うように、国家が危険にさらされたり、滅亡の道を歩むとその国民は生存しえなくなり、流浪の民となってしまう。したがって、国家の発展や国民の生存は、企業の存続・成長と同じく、まさに外部環境への適応を怠ったとき、さまざまな危機にさらされるわけである。ところが、一般には私達の国は私達で守るという自立国防の精神はおろか、個人—地域—国家—国際社会という構図の中で、国家の概念さえ欠落してしまっているのはどういうことであろう。まず、国家は個人や家族、地域団体や企業、組合などさまざまな単位を活動させる基盤となっているという、いわゆる国家意識を高揚させる必要がある。外交、防衛、資源エネルギーなどの諸問題を奥深く掘り下げ、より広がりをもった議論や主張を行なっていきたい。

それには日本の座標軸を再確認し、中長期にわたっての国家的、国民的意図がどこにあるのか、つまり国家目標をより明確にしなければならない。同時に憲法問題に至るまで、整合性に満ちた議論を重ね、世論形成に役立ちたいと思う。

〈政治・経済と文化〉

地域社会や国家の消長は政治や経済、そして文化の程度にかかわっているといっても過言ではない。これはそれぞれの機能を持ちながら、互いに密接な作用をし合う側面を持ち合わせる。とりわけ、地域や国家、国際社会において今日のように利害が相対立する状況下では、政治・経済・文化がより多くの重なり合いを持ち、複合的にその機

能を発揮する時代となってきた。例えば、政治は本来、ビジョンの確立機能と調整機能が最も重要な役割だといわれているが、これを実現しようとした場合、いまや経済や文化を無視できない。経済においても、国内的には文化を商品化する産業が台頭し、国際的には日本と欧米との経済摩擦も、純粋な経済理由よりも、ものの考え方や文化の違いがその原因になっていることを多く見受けける。私はこれらの機能と役割を個別に、また総合的に探求し、私達の青年会議所運動に新たな気持ちをもって深く組み込むことを提案する。

〈私の青年会議所論〉

私がかねがね、青年会議所には二つの側面があると考えてきた。それは運動と活動である。活動はメンバーに関するきわめて属人的な、トレーニング、友情の側面である。しかし、JC運動がもしこの運動の範囲にとどまるとするならば、あるいは活動に重点がおかれるとするならば、組織の社会性が問われることとなる。JC運動とは活動で鍛えた足腰を基盤に、地域社会や国家、そして国際社会に向かって組織的な運動を展開するところに、その真髄がある。

〈エピローグ〉

青年の青年たるゆえんは何か。それは理念へのあくなき追求と純粋性、そして冒険心と行動力を持ち合わせ、ものごとの改革に勇気をもって取り組んでいく…、まさにこれが求められる青年像であろう。私達は、本業において重要な役割と責任を担いながら、地域や国家にも貢献をしたいという強い願望が内からわき出てくる。だとすれば、私達は本物の運動を追い続けることを絶えず心しなければならない。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第30代会頭に森輝彦が就任
日本JCスローガン「見つめよう国際社会 考えよう日本の役割 示そう青年の気概」
JCI会頭に日本の長尾源一が就任
- 1.20 森会頭、マンスフィールド駐日アメリカ大使と懇談
- 1.24 81年度京都会議が国立京都国際会館で開催され(25日まで)、期間中、日本青年会議所創立30周年式典併催、4500名が参加
国際障害者年行事として、日本で初めて開催されるアビリンピック(障害者の技能五輪)に1000万円の資金協力を呼びかける
- 1.27 森会頭、東京・有楽町の外人記者クラブで「日本の安全と防衛」について記者会見
- 3.15 インドシナ難民調査団を派遣(25日まで)
難民キャンプを訪問し、学用品、日本の民芸品を贈るとともに、今後の支援体制について現地関係者と意見交換
- 3.27 土光行革審会長がJC会館で講演、日本JC「行革運動」協力を約束(7月「行政改革基本資料」マニュアル作成)
- 3.31 森会頭がフォード米大統領と懇談
- 4 機関誌「30億」を「50億」に誌名変更
- 4.21 日韓合同特別委員会をソウルで開催。テーマは「在日韓国人青年会議所問題」
- 4.25 第8回APDC使節団がインドネシア、パキスタン、バングラデシュ、タイを視察(5月5日まで)
- 4 大泉、東白川、交野、阿久根、清瀬、保原入会、675JC、5万5794名となる
- 5.28 JCIアジア・コンファレンスがメトロマニラで開催され、「アジアの平和」のテーマのもとに日本から1030名が参加(30日まで)、82年度開催地を宮崎に決定
- 6.14 第1回JCオリンピックがフランスのカヌで開催(17日まで)
- 6.19 第11回JC青年の船(横浜-香港-基隆)(30日まで)
第10回世界青年会議を開催。テーマは「日本の安全と防衛」
- 7.25 第4回青年経済人会議が東京で開催され、「日本の安全と防衛」のテーマのもとに1778名が参加
元米国務長官ヘンリー・キッシンジャー氏記念講演
- 8.2 第12次北方領土視察団を派遣
「北方領土返還祈念シンボル像」建設の募金活動
- 9.1 京都で経営開発シンポジウムを開催。テーマは「あらたなる創造」、1560名が参加(2日まで)。トヨタ自販加藤誠之会長が「国際化時代を迎えた日本の対応」の基調講演
- 9.5 「80年代JC運動指針」改定版作成、10月総会で承認
- 9.17 第2回日ソ青年代表者会議開催(22日まで)。全ソ青年団体委員会(KMO)の副議長S・A・ウーリン氏の一行が来日し、北方領土問題等率直な意見交換
- 10.1 第30回全国会員大会が鹿児島で開催され、「熱くなれー維新の心」のテーマのもとに1万1203名が参加(5日まで)、エドモンド・S・マスキー米上院議員記念講演「アジアの平和と青年の役割」、牛場信彦元対外経済担当大臣記念講演、長尾源一JCI会頭記念講演
- 11.1 日本JC会館オープン1周年記念パーティー
- 11.8 第36回JCI世界会議が西ドイツ・ベルリンで開催される

内外の動き

- 1.8 鈴木首相がASEAN 5カ国訪問。フィリピンに420億円の円借款、インドネシアに189億円の追加資金供与等を約束
- 1.19 イランが米大使館の人質を444日ぶりに解放
- 1.25 中国、四人組裁判で江青らに死刑判決
- 2.19 米下院、日本製自動車の輸入制限法案を提出
- 3.2 中国残留日本人孤児47人、初の正式来日(26人が身元判明)
- 3.11 国鉄経営再建特別措置法施行令公布、赤字ローカル線77を廃止
- 3.16 第2次臨時行政調査会(会長・土光敏夫前経団連会長)初会合
- 3.20 神戸で「ポートピア'81」開幕
- 3.23 EC首脳会議、対日貿易摩擦を討議
- 5.1 乗用車対米輸出自主規制、168万台で合意
- 5.4 鈴木首相が訪米。鈴木・レーガン会談(ワシントン)の共同声明に「同盟関係」を明記
- 5.10 フランス大統領選挙、社会党のミッテラン当選
- 6.15 バリ警視庁、オランダ人女性留学生殺害暴行容疑でバリ大学日本人留学生逮捕
- 6.29 中国共産党、文化大革命を批判的に総括
- 7.20 先進国首脳会議開催(オタワ)。ソ連の「脅威」をめぐって論議
- 8.20 日韓外相会談(東京)、韓国、総額60億ドルの政府借款を正式要請、日韓定期閣僚会議で日本拒否台湾で旅客機墜落、作家の向田邦子ら日本人18人死亡
- 8.22 新自由クラブ・社会市民連合、衆議院に新しい統一会派「新自由クラブ・民主連合」を結成
- 10.6 エジプトのサダト大統領暗殺(後任にムバラク)
- 10.16 北炭夕張新鉱でガス突出事故(救援隊を含め93人死亡)
- 10.19 京都大学教授福井謙一、ノーベル化学賞受賞
- 10.28 東京地裁ロッキード裁判丸紅ルート公判で榎本被告の前夫人三恵子証言、「蜂の刺し」発言で話題となる
- 12.13 ポーランド戒厳令施行、「連帯」弾圧、ワレサ軟禁



会頭所信

第31代会頭 黒川 光博

東京JC 1943年生 80年東京理事長 81年副会頭 82年会頭 現・(株)虎屋代表取締役会長

青年の使命

われわれ青年の使命は、新しい歴史を創造していくという気概を持ち、世におもねることなく、信じることを堂々と主張していくことだと、私は確信している。青年は“機会さえ与えられればその実力を発揮する”とよくいわれる。しかし、今は与えられるのを待つのではなく、機会が得られるよう、自ら道を切り開いていくことが必要である。

21世紀へのかけ橋

近代の夜明けといわれる明治維新にはじまり、敗戦という国家としての最大の試練をも克服し、今や、アメリカに次ぐ経済的地位を固めつつある日本。この僅か1世紀余りを通して日本の道標であり、行く先を照らす灯であったのは、“近代化”“工業化”“欧米化”された高度産業社会への限りなき憧憬だったのではないだろうか。そして今や、日本は世界に誇り得る自由と経済的豊かさを、国民が享受することを可能にした。しかしながら、高度産業社会の実現は、同時に、これを維持し発展させるため、さらに次の大いなる課題へひきつがなければならない。それは、物質的豊かさと精神的豊かさ、人間社会と自然、現代文化と伝統、人間の自立化と連帯感がほどよく調和した理想社会の実現へ向けての挑戦ともいえよう。今、私達日本人は、「経済の時代」を超えた「文化の時代」という視点を持ち、21世紀へ向かっての新しい国家像と人間像を求めていくべき時代にさしかかっている。

世界の平和と安定のために

日本の安全と防衛に関する2年間の継続した運動は、単に「国家の問題」としてだけでなく、「地域の問題」として深く掘り下げてきたことを見逃すことはできない。世界の不安定要因の除去

は、米ソ2大国が圧倒的な影響力を持ち得ない現在、自由主義経済の恩恵を受ける諸国の多面的相互協力に負うところが大きくなってきた。とりわけ、自由主義諸国の中で、アメリカに次ぐ経済的地位を占める日本に課せられた責任は重大である。こうした国際環境の変化を踏まえ、当面何をすべきか、また将来に向けて何をなすべきか、われわれは真剣に問い続けなければならない。真の国際交流とは、他国の文化を理解するとともに、日本の文化に対する正しい認識を持つことである。今日のように諸外国の日本を見る目が経済という眼鏡を通したものに留まっていることを思い合わせれば、今こそ、われわれ若い世代が新しい視野に立って真の国際交流の担い手となり、国際社会の中で、平和的文化国家としての我が国の地位を確固たるものにしていく、それが日本の安全と防衛を支える強い力につながっていくものと信じる。

身の回りの行政に新しい灯を

戦後の日本の社会をリードし、高度経済成長の達成に寄与したものに行政の力がある。しかしながら、行政が肥大化し、国家財政が逼迫し、硬直化した行政システムが問題となりはじめたために、“小さな行政”、効率のよい行政のあり方が問われ、現在、国をあげての行政改革が進められている。その中で、われわれはこの行政改革について何をなさなければならないだろう。端的に言えば、自由で創意に満ちた活力ある市民主導型社会をつくりあげることに他ならない。さらにわれわれが目指すものは、中央から与えられたものでなく、あくまでも自分達の地域のための、手づくりの行政改革を行なうことにある。このためには、国民一人一人が社会の根幹にかかわる問題としてその必

要性を理解し、自立、自助の精神に立ち返って、官民等しく責任を遂行しようとする決意が何にもまして必要となる。青年会議所もそのノウハウを生かし新しいロマンを構築すべく、今や国家や地域社会の存立にかかわる基本的問題に取り組む時期に来ているのである。

未来への使者のために

21世紀は「生命の世紀」であるといわれる。満ち足りた物質文明が社会と人間から奪いつつある人間らしさを取り戻すこと、すなわち人間性豊かな社会の実現が、求められている。次の時代へ青少年の教育という問題はゆるがせにできない重要な課題である。戦後一貫して続けられてきた教育そのものの中に、個人の自由な権利を強調するあまり、人間が社会生活を営む上で必要な、責任や約束事を軽んじる傾向があったことは否めない。さまざまな恩恵をもたらした経済の発展や社会の成熟化が、その反面として生みだしたひずみが青少年にも押し寄せてきている。今こそ心の教育を原点として学校教育のあり方、家庭教育の役割について真剣に熟考し、運動を発展させていかなければならない。

素晴らしき人間集団

日本青年会議所が誕生して30年。この間、全国680余の会員会議所が各地で展開してきた運動は、今や地域社会に深く根をおろし、青年会議所はすでに欠くべからざる社会的基盤を築き上げてきた。地域毎を母体とする全国組織である、という考え方が成功を取めたのだと明言できる。さて、青年会議所は人間集団以外の何ものでもない。常に想いを一つにし、新しい運動の展開に全力を尽くそうではないか。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第31代会頭に黒川光博が就任
日本JCスローガン「わたしのまちから日本へ世界へ」
JCI会頭にアメリカのバリー・ケネディーが就任
- 1.7 黒川会頭、鈴木総理と懇談。自立自助の精神によるJCの行政改革運動を説明
- 1.21 82年度京都会議が国立京都国際会館で開催され8000名が参加(24日まで)、黒川会頭所信発表、第1回理事長サミット開催
- 2.7 東京・銀座の街頭で北方領土返還の署名を呼びかける
- 3.13 第9回APDC使節団がインドネシア、フィリピン、台湾に(21日まで)
帰国青年海外協力隊員の就職に全面協力を表明
- 4.5 アフガニスタン難民視察団を派遣(11日まで)。パキスタン、クウェート等の難民キャンプを訪問、学用品の提供や絵画の展示等で交歓
- 4.11 第2回理事長サミットを東京で開催
- 4.25 「総合安全保障」アメリカ視察団を派遣(5月6日まで)。国務省、国防省、サンディエゴ海軍基地等を訪問
- 5.18 82年度JCIアジア・コンファレンスが宮崎で開催されテーマ「地球時代－新しい調和を求めて」のもとに各国から6000名が参加(22日まで)
- 5.29 全国各地「行政改革シンポジウム」が福岡を皮切りにスタート
- 6.15 第12回JC青年の船(神戸－香港－基隆－沖縄－神戸)、500名が参加(26日まで)
- 6.16 全国一般市民対象に行政改革についてアンケート実施(7月10日まで)
- 6.24 沖縄復帰10周年を記念し、第11回世界青年会議所を沖縄で開催
- 7.3 経営開発シンポジウムが京都で開催。テーマは「新たな創造」(4日まで)
- 7.17 第1回全国城下町シンポジウムが松本で開催され、全国130城下町から400名が参加(18日まで)
- 7.23 1987年までに実現すべき組織改革の「基本答申」発表
- 7.24 第5回青年経済人会議が東京で開催され、「行政改革・総合安全保障」のテーマのもとに2100名が参加、渡辺大蔵大臣が基調講演
- 7.30 第13次北方領土視察団を派遣、1600名が参加
- 7 帰国子女問題・外人教師受け入れなどのレポート発表
- 8 在日留学生25名をホームステイに招待
- 10.1 第31回全国会員大会が伊勢で開催され「語りつごう永遠のこころ」のテーマのもとに9500名が参加(4日まで)
- 10.6 第6次日・ソ・東欧交流使節団を派遣(16日まで)、モスクワでKMOのメンバーと北方領土について議論、チェコスロバキア、ハンガリーで政府・青年団体幹部と意見交換、北方領土がわが国固有の領土であることを主張
- 10.11 日ソ青年代表者会議がモスクワ・レニングラードで開催される(16日まで)
- 11.7 第37回JCI世界会議がソウルで開催され、「南北協力」のテーマのもとに5500名が参加
- 11.27 流山、田村入会、699JC、6万242名となる

内外の動き

- 1.11 NATO外相会議、ポーランド問題で対ソ制裁宣言
- 1.26 東京地裁、ロッキード事件全日空ルートの若狹会長・渡辺元副社長ら6被告に執行猶予付き有罪判決
- 2.8 東京・永田町のホテルニュージャパンで火災、死者33人
- 2.9 日航福岡発羽田行DC-8型機、羽田空港着陸寸前に海に墜落、24人死亡、150人負傷(機長の逆噴射操作が原因)
- 2.10 第2次臨調答申、許認可の整理合理化等を提言
- 4.2 アルゼンチン軍、フォークランド諸島占領
- 4.9 西ドイツ、反核大行進、欧米諸都市で反核運動盛り上がる
- 5.20 イギリス軍、フォークランドのアルゼンチン占領軍を攻撃
- 5.23 反核・軍縮の「平和のための東京行動」、40万6000人が参加
- 5.28 政府、215品目の関税率引き下げなどの市場開放措置を決定
- 6.7 第2回国連軍縮特別総会開催、反核運動頂点に達する
- 6.8 東京地裁、ロッキード事件全日空ルートの元運輸相橋本登美三郎・元運輸政務次官佐藤孝行に有罪判決
イギリス軍、フォークランド奪回
- 6.23 東北新幹線開業(大宮－盛岡間)、上越新幹線開業(大宮－新潟間)
- 6.26 新聞各紙、社会科の教科書検定で「侵略」が「進出」と書き換えさせられたと報道、問題となる
- 7.30 第3次臨調答申、国鉄・電電・専売3公社の分割・民営化、省庁の統廃合などを提言
- 8.18 公職選挙法改正案、可決成立。全国区に拘束名簿式比例代表制度の導入を決定
- 8.28 三越本店の古代ヘルシャ秘宝展、ほとんどが贋物と判明。岡田社長、取締役会で解任、岡田社長と納入業者竹下みち、脱税容疑で逮捕
- 8.30 日米安保事務レベル協議会開会、アメリカ、3海峡封鎖とシーレーン防空の役割分担を要請
- 10.9 北炭夕張炭鉱閉山
- 11.10 ブレジネフ書記長死去、後任にアンドロポフ元KGB長官
- 11.12 ポーランド、ワレサ釈放
- 12.20 参議院無党派クラブ結成(代表・美濃部亮吉)
- 12.22 中曽根康弘内閣成立



会頭所信

第32代会頭 榎本 一彦

福岡JC 1943年生 79年福岡理事長 81～82年副会頭 83年会頭
現・福岡地所(株)代表取締役会長

広大な宇宙の中で……

地球上には、貧困と豊かさ、戦争と平和という人類の存続にかかわる大きな問題が横たわっている。現在、世界情勢はいつ、どこで、なにが起こり、どういう結末を迎えるか、まったく予断を許さない状況である。こうした状況の中で、私は人間としての個の自覚と任務とを6万会員に問いかけたい。人類の存続と尊厳を脅かしているものがあるとすれば、それは誰だろう、私たち一人ひとりではなかるうか。私たちの尊厳は保たれているだろうか。私たちの家庭は…、企業は…、地球は…、日本は…、そして、世界の人類は…。これは生涯のテーマであり、一朝一夕に解決のつくものではない。だからこそ6万の若者が、それぞれの立場でその任務と可能性を考え、日本の存続と尊厳についての議論を展開していただきたいのである。

地域から

「地域連合国家日本」を……

日本の存続を考える時、全国699地域にしっかりと根ざした運動をベースに、地域を超え、21世紀の日本を構想するプランを大胆に提起していくべき時である。それは、おのおの特色ある自立した地域の連合と連帯を基盤とする地域のイニシアティブによる「地域連合国家日本」という方向である。「地域蘇生」をキーワードに、各地会員会議所が地域づくり、地域連合国家建設の核となる運動を展開すべき時であろう。そして、その基本的方向は、小さな政府と活力ある地方自治体の確立(行革推進)、活力ある地域経済の達成、人的交流を中心とする国際化の推進、次代を担う青少年の育成などによって、しっかりと骨組みをつくり上げていかなければならない。

さらに

「行政改革の推進」を……

私は改めて「行政改革」に結集された会員諸兄のエネルギーの大きさを感じた。そして、大いなる可能性を確信した。行政改革は次の段階に進展させなければならない。つまり、地域連合国家日本の基礎は、真の意味で地方分権が確立されることにある。地方の自治力を強め、高めていくためにこそ、「行政改革」は推進されなければならない。今、必要なことは「国が国民のために何かをしてくれるかではなく、国民が国のために何を貢献できるか」という言葉を市民と共に確実に理解することである。自立・自助の精神を浸透させることによって、行政サービスへのただ乗りを潔しとしない市民を一人でも多く増やしていくことが、真の「行革」運動であると思う。

地域経済の担い手として……

巨大都市への限界が語られ、「ゆとり」や「生きがい」を求めて、移動より定着・定住を選択する人々が増えつつある状況を踏まえるならば、「活力」と「ゆとり」を両立させる「生涯ステージ」としての地域社会の存続と発展が、より重要なものとなる。しかし、産業・貿易構造の急激な変化、苛烈な企業間・国家間競争のはざまに、私たちの多くがその拠り所とする中堅・中小企業は、その「存続と尊厳」の基盤を大きく揺り動かされている。だからこそ私たちの青年経済人としての任務はこれまで以上に重要であり、またJAYCEEの本領を発揮しうる場があるのではないか。自立した地域をつくるために、私たちは個別経営の枠を超えて、連帯し行動しなければならない。経済人としての哲学を、「地域へのサービス」の姿勢の中に表現すべきである。

世界の一員として……

民族の尊厳をもって、人類のために、世界平和のために尽力することは、青年の務めである。自分の利益のみに走らず、グローバルな視野を持った時、初めて世界の平和と日本の安全が語れる。各国との共存関係を平和裡に、また安定的に持続させる努力を払わねば、日本の将来はありえない。そして、国際化はこれまでのように地方都市が中央を経由して世界につながるというのでは不十分である。真の地方分権化、活力ある地域の集合としての地域連合国家日本をつくりあげるために、中央に集中する情報を地域が獲得し、人、文化、技術、産業のそれぞれの分野で、それぞれの独自の力で世界と直接つながっていかなければならないのである。

未来を託す子供らに……

現代の日本では「個」の部分が極端に強調され、人との触れ合いなど「こころ」の部分がおろそかにされ、教育の荒廃を招いている。人びとの公共的関心を持続し、発展させるために、家族、企業、そして身近に機能するコミュニティとしての一連の団体の役割、とりわけ私たちの任務は重大である。活力ある地域社会の大きな柱である、人づくり＝教育こそ、自ら問題解決能力を持つ地域をつくりあげるための前提である。

そして、いまこそ行動を!

明日への黎明を確信する青年は、若さの持つ特権をフルに発揮し、まず行動しなければならない。個の確立を図り、地域の、ときには国家的、国際的課題に全力で対応する、行動的な若者の団体として自らを鍛えあげ、可能な限り広い分野に躍動していきたい。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第32代会頭に榎本一彦が就任
日本JCスローガン「切り拓こう活力ある地域の時代」
JCI会頭にスウェーデンのシェル・ピーターソンが就任
「日本青年会議所新聞」が創刊20周年を迎える
- 1.21 83年度京都会議を国立京都国際会館で開催(23日まで)
- 3 社会開発・行革を唱え、議会傍聴運動「ウォッチ・ザ・議会」、全国700JCでスタート、各地で「地域行革フォーラム」実施(50会場)、市民会議設置への協力(10JC)
- 3.12 「行革実行断固要求3・12代々木大集会」、行革推進の宣言を採択し、土光臨調会長と中曽根首相に手渡す
- 4.24 第2回理事長サミットが東京で開催される。テーマは「切り拓こう活力ある地域の時代」
- 4.10～24 統一地方選。首長・都道府県・市町村議会議員にJC関係者が769名に達する
- 5.28 83年度JCIアジア・コンファレンスがニュージーランド・クライストチャーチ市で開催され、18カ国、1500名が参加(6月1日まで)
- 6.8 北方領土返還要求リレーマラソン、那覇市・沖縄県庁前をスタート、3480キロメートル延べ4500名のランナーに引き継がれ、根室市・納沙布岬にゴールイン(8月7日まで)
- 6.12 第13回JC青年の船、香港・高雄での寄港活動を行う。550名が参加(24日まで)
- 6 筑波学園、えびの、中伊豆入会、704JC、5万8893名となるAPDC発足10年目を迎え、日本への期待高まる
- 7.22 峡南、大河原、小出、大町入会、708JC、5万9513名となる
- 7.27 83年度青年経済人会議が東京で開催され、「日本の存続と尊厳—切り拓こう活力ある地域の時代」のテーマのもとに3000名が参加(28日まで)、
テーマ別理事長サミット・経営開発シンポジウム等が開かれ、中曽根総理大臣が基調講演
- 7 国際平和基金のカード発足(住友VISA)、民間クレジット会社と提携し、売上高の1%を日本JCが「国際平和基金」に
- 9.29 第32回全国会員大会が秋田で開催され、「北緯40度発、大地のやさしさに魅かれて」のテーマのもとに9000名が参加(10月3日まで)
- 9 石狩、余目、松山、上福岡入会、712JC、6万947名となる
- 10.23 シェル・ピーターソンJCI会頭来日、日本JC役員と懇談
- 10 帰国した青年海外協力隊員の就職斡旋
- 11.6 第38回JCI世界会議が台湾・台北市で開催され、「人的資源—それは世界発展の鍵」のテーマのもとに15カ国、5205名が参加
- 11 政策室がインストラクター制度を採用、行革運動の具体的な行動や提言をするため、各界より研究者の協力を得ようというもの

内外の動き

- 1.11 中曽根首相、韓国を訪問、全斗煥大統領と会談、総額40億ドルの経済協力と教科書問題に決着
- 1.17 中曽根首相、訪米、レーガン大統領と会談、「日米は運命共同体」と表明
- 1.26 ロッキード裁判丸紅ルートで、田中角栄元首相に受託収賄・外為法違反で懲役5年の求刑
- 2.13 青木功、ハワイアンオープンで逆転優勝
- 2.27 黒岩彰、ヘルシンキの世界スプリント選手権で総合優勝
- 3.23 中国自動車道全線開通(吹田—下関間542.7キロ)
- 4.10 第10回統一地方選挙
- 4 浦安市に東京ディズニーランド開園
- 5.16 テクノポリス育成を目指す高度技術工業集積地域開発促進法公布
- 5.19 大蔵省、中期国債の銀行窓口販売を認可
- 5.24 政府、行革大綱を決定、当面の課題は71特殊法人の整理と141件の許認可整理等
- 5.26 日本海中部地震(震源地秋田沖、M7.7)
- 5.28 第9回先進国首脳会議、アメリカ・ウィリアムズバーグで開催
- 6.13 愛知県警、戸塚ヨットスクール校長戸塚宏を傷害致死容疑で逮捕
- 6.26 第13回参院選
- 8.21 フィリピン有力野党議員アキノ暗殺
- 9.1 大韓航空機、サハリン沖で領空侵犯、ソ連軍機に撃墜される
- 10.9 ビルマのラングーンで爆弾テロ、韓国閣僚4人を含む16人死亡
- 10.12 東京地裁、ロッキード裁判の田中角栄被告に懲役4年・追徴金5億円の実刑判決
- 10.14 東北大で日本初の「試験管ベビー」
- 11.9 米レーガン大統領来日、新たな多角的貿易交渉の実現など討議、日本の市場開放と防衛努力を要請
- 11.20 佐々木七恵、東京国際女子マラソンに日本人として初優勝
- 12.18 第37回総選挙



会頭所信

第33代会頭 齊藤 斗志二

富士JC 1944年生 80年富士理事長 83年副会頭 84年会頭 元・衆議院議員

はじめに

戦後39年が経過した。この時間を青年会議所の尺度で測ると、来年からは「昭和10年代が去り、戦後生まれの会員の時代が来る」。この間、わが国は自由世界で米国に次ぐ経済大国に成長した。しかし、例えば世界平和の旗手ともいべき国際連合の舞台ではどうか。日本の国連分担金は米ソに次いで3位、全体の約10%を担っている。しかし、国連に派遣している事務局員は、ようやく100人、米国の5分の1、ソ連の半分、英仏より少なく第6位である。世界はわれわれ若い力が活躍するよう待望している。多くの困難を乗り越え、大いなる未来を切り拓いていくのは、われわれの若い力である。そして、その時こそ真の『日本の時代』の到来といえる。同時に人間性の回復を訴えたい。激しく変化する技術革新への対応を余儀なくされる一方で、大自然への憧憬、万物の霊長である人間への慈しみの必要性を痛感するのは私ひとりではないであろう。今求められるのは、よりヒューマニティーに富んだ人と人との触れ合いである。その意味で、私は今新たなルネッサンスの時代の実現を待望している。ルネッサンスとは復興、つまり人間と社会が生まれかわることを意味する。すばやい変化に対応した正義感あふれる社会制度の創造が待たれるのである。そのためには、私たち自身が新たに生まれかわらなければならない。

人間社会にルネッサンスを

青年会議所が行政改革に取り組んで、すでに3年が経過した。土光臨調によるプログラムもできあがり、まさに行政改革の機は熟している。しかし、さまざまな立場の利害が対立し、その実行には大きな困難が待ち受けている。今こそ勇気ある行動が求められて

いる。社会正義に基づいた行政改革は、各地青年会議所がその中心的役割を担わなければならない。人間社会におけるもう一つの大きな問題は「高齢化社会」の問題である。20～30年後には必ず到来する高齢化社会、すなわち私たちJC世代による高齢化である。莫大な国家予算をしいられ、未曾有の社会的混乱と摩擦が惹起するであろう。今からその対策と準備をしなければならない。私たちは、経験豊富な高齢者との社会的役割分担を認識し、企業、および社会全体の生産性向上を目的とした新たな雇用の場を創造すること、そして社会的活力向上のために、老人と子供たちの触れ合いの場を提供することが、その対応の第一である。

教育にルネッサンスを

少年非行、校内暴力に代表されるように、青少年の教育問題がクローズアップされている今、私たちは良識ある社会人として、また、子を持つ親として、教育問題に真剣に取り組まなければならない。これからの青年会議所の取り組みは、PTA活動などを通じて学校の内にも入っていかなければならないであろう。さらに教育問題と密接なかかわりがあるのは「地域の文化」である。音楽、美術、芸術などの文化の向上に、あるいは地域のまつりの振興に、子供たちと一緒に取り組む——。このようなところに教育の切り口があるのではないだろうか。

国際化にルネッサンスを

青年会議所運動を時間的に見ると、ある時期は短期的な運動が主であった。しかし今日、われわれの運動は長期的かつ継続的でなければ社会から認知されない。また空間的な見方をすると、身近な問題からその対象が国、

および世界まで広がってきている。今日「世界から見た日本」は経済大国としての評価は充分あるものの、国際相互主義に基づいた応分の役割と責任を果たしていないと、非難を受けているのが現状である。現在の日本に求められていることは、自己都合主義を排除して、世界との相互依存関係を確立することであり、ここから日本が正しく認知、評価されなければならない。そのために私たちは、地域でできる民間外交をより活発化しなければならないのである。

地域経済にルネッサンスを

高度成長時代が去った今、地域経済はまさに曲がり角にきている。情報化時代の現在、地域産業の確立は、産業基盤の整備そのものに加え、製品や技術の開発基地づくりが必要不可欠なものとなってきている。商品開発、技術開発などすべての開発は、他の地域、他の企業に対し、独自性と優越性を持たなければならないのである。貿易立国であるわが国は、依然として新たな輸出産業の振興に努めなければならない宿命を負っている。地域経済のルネッサンスは、「移出産業」の確立が急務である。地域性と独自の情報を背景として、国内で強い競争力を持つ産業、つまり「移出産業」の育成と整備が、地域経済の切り口なのである。私たちはその先鞭をつけ、若者たちが好んで定住するような「明るい豊かな地域社会」の実現に努めようではないか。

おわりに：JAYCEEに期待する

JAYCEEに、間違いを恐れることなく、信念と正義感に満ちた勇気ある発言、行動を期待する。今、私たち自身のルネッサンスが必要なのである。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第33代会頭に齊藤斗志二が就任
日本JCスローガン「今こそソルネッサンス 創ろう新しい日本の時代」
JCI会頭にアイルランドのジョー・マーフィーが就任
「新3K」教育・国際・高齢化社会は次の世代のための運動
- 1.19 84年度京都会議が国立京都国際会館及びロイヤルホテルで開催され、5000名が参加(22日まで)、会頭が所信発表、鹿内信隆サンケイ新聞社長が記念講演
- 1 三世代交流全国ゲートボール大会に総理大臣杯
- 2.7 北方領土返還要求全国大会(東京・九段会館)に日本JC代表が参加し、昨年のリレーマラソンの経過と成果報告
- 2 「ウォッチ・ザ・行政」スタート、予算審議の各市町村三月定例議会議を傍聴、議会傍聴調査及び重点項目調査
- 3 日本青年会議所新聞創刊500号
- 4.21 会頭選挙管理委員会が発足
- 4.22 教育サミットが東京・国立競技場代々木第一体育館で開催され、2300名が参加、森喜朗文部大臣が挨拶、教育改革で活発な論議
- 5 '84会員実態調査、日本JCに対するイメージとして「国家問題への発言」に陰り「LOMサービスの充実」を求める声が高まる
- 5.16 洋上スクールを4年ぶりに開催、(大阪ー沖縄ー大阪)、550名が参加(20日まで)、研修活動や平和をテーマに討論会
- 5.23 84年度JCIアジア・コンファレンスがマレーシアのクアラルンプールで開催され、23カ国、1400名が参加(27日まで)、日本JCは2分科会を担当
- 5 全国小・中学生作文コンクール・作文募集、テーマは「私の学校、こんな学校」、表彰は10月全国大会
- 6.19 第14回JC青年の船(29日まで)、洋上で平和宣言
- 7.5 「内閣総理大臣杯三世代交流全国ゲートボール大会」の総理大臣杯が総理官邸にて中曽根総理より齊藤会頭に手渡される。青年経済人会議を目指してまとめた「行革と国際に関する提言」を総理に手渡す
- 7.5 日本JC、海外技術協力・国際友好活動などの実績が認められ外務大臣表彰を受ける
- 7.28 84年度青年経済人会議が東京で開催され、「来たるべき“日本の時代”に備える」のテーマのもとに3540名が参加(29日まで)、中曽根総理が「産業国家から世界の金融センターへ」の挨拶、初の3元TV討論
- 8.2 在日留学生ホームステイ、168都市で493名を受け入れ(6日まで)
- 8.4 内閣総理大臣杯三世代交流全国ゲートボール大会を東京・駒沢のオリンピック記念公園第2球技場で開催。全国から50チーム、1000名が参加(5日まで)
- 8.11 第15次北方領土現地視察団を派遣。テーマは「祖国の四島(しま)ー親と子で見よう」(12日まで)、親と子で祈る折り鶴20万羽運動実現、世界の有名人サイン掲額運動
- 8.11 臨時教育審議会の委員に齊藤会頭就任
- 9.22 田無、幸手、あしがら、榛南、豊栄入会、725JC、6万1720名となる
- 10.4 第33回全国会員大会が千葉で開催され、「興せ未来を拓く若い波」のテーマのもとに1万2000名が参加(7日まで)
- 10.10 第7次日ソ友好使節団を派遣(14日まで)
- 11.11 第39回JCI世界会議がカナダのモントリオールで開催され、「今育てよう、明日のリーダー」のテーマのもとに75カ国、2800名が参加(17日まで)
- 12.1 我孫子、庄和、野洲入会、728JC、6万2318名となる

内外の動き

- 1 『週刊文春』の記事「疑惑の銃弾」から、三浦和義「ロス疑惑」騒動始まる
- 1.25 米レーガン大統領、一般教書で「強いアメリカ」を強調
- 2.9 ソ連、アンドロポフ書記長死去、後任にチェルネンコ
- 2.12 植村直己、世界初のマッキンリー冬季単独登頂に成功、下山途中で消息を絶つ
- 3.18 江崎グリコ社長、自宅から2人組に誘惑される
- 3.23 中曽根首相、中国訪問、胡耀邦中国共産党総書記、鄧平党顧問委主任らと会談
- 3 アフリカで飢饉深刻化
- 4.1 国鉄の赤字ローカル線に代わる初の第3セクター「三陸鉄道」が開業
- 4.19 長谷川一夫・植村直己に国民栄誉賞
- 4.26 米レーガン大統領訪中
- 5.10 グリコ製品に毒物混入との脅迫状が報道機関に郵送される
- 5.18 日本山岳会隊、ネパールのカンチェンジュंगाの3峰縦走に成功
- 7.28 ロサンゼルスで第23回オリンピック開催
- 8.10 国鉄再建監理委、初めて分割・民営化の方向を明示
- 8.21 臨時教育審議会設置
- 8.24 警視庁、中江滋樹主宰の投資コンサルタント業「投資ジャーナル」グループを摘発
- 9.6 韓国全斗煥大統領来日、「日韓の両国に關係の新しい章を開くもの」とする共同声明発表
- 9.12 グリコ事件犯人「怪人21面相」、森永製菓も脅迫
- 9.28 山下泰裕に国民栄誉賞
- 10.31 第2次中曽根内閣、新自由クラブとの連立を継続
- 11.3 中曽根首相、インドのガンジー首相の国葬に参列、ソ連首相チーホノフと11年ぶりの日ソ首脳会談
- 11.16 東京・世田谷電話局付近で地下通信ケーブル火災、世田谷・目黒両区の8万9000回線不通、三菱銀行オンライン・システムなどもストップ
- 11 15年ぶりに、1万円、5000円、1000円の新札発行



会頭所信

第34代会頭 野津 喬

岡山JC 1945年生 82年岡山理事長 84年副会頭 85年会頭 元・カバヤ食品(株)代表取締役社長 17年逝去

戦後40年——私たちは戦争を知らない世代である。日本から硝煙は消えた。しかし、この間、世界で200を超える紛争・戦争があり、なんと5億の人が飢えに苦しんでいる。こうした揺れ動く現実を冷静に受けとめた時、私たち青年の果たす役割があまりにも多く、かつ、一つ一つの課題に対する選択と対応のむずかしさに気がつく。しかし時代は私たち青年に21世紀への道標を構築するよう待ち望んでいる。

青年の役割を自覚し、行動を起こそう

戦後生まれの私たちは、物心ついたころ神武景気を、さらに高度経済成長を体験してきた。そして今や、有史以来、もっとも物質的に恵まれた“飽食”の時代に生きている。しかし、わが国経済の成長と繁栄は、激動する国際社会の中で転機を迎え、内外の環境条件の変化への適合と調和をはかりながら、新たな生存への道を探らねばならなくなっている。極めて困難な予測である。ただ、個々の変化は別として“歴史の潮流”ともいべき環境変化の特徴については予測ができる。その潮流は「国際化」「高齢化」「成熟化」「高度化」の4点である。これらの潮流を乗り切るためには、次の各項で「国民的合意」が必要であろう。

- (1) わが国は平和で安定的な国際関係の中にしか生きる道はない。
- (2) 急速に進む高齢化社会に対応するには、わが国独自の“住みよい社会”を創る以外はない。
- (3) 経済の成熟化にともない、社会主体のダイナミズムの衰えを防ぎ、問題解決能力の源泉である“活力”を失ってはならない。合わせて、技術開発能力と環境の適応力を持ち合わせなければならない。

以上は、そのまま、私たちが取り組むべき運動の方向を示しているといえる。

①国際平和への貢献、②地域活性化の

推進、③人づくり、の3点を重要課題に選び、青年の役割としたい。

青年の役割〈1〉 国際平和に貢献する道を探ろう

わが国の生存は、世界とのバランスのとれた“貿易構造”の上に成り立っている。この“生存のしくみ”は、世界の平和と自由を前提に、はじめて正常に機能する。わが国が国家として毅然と存立し、国民が今日よりも、より質の高い繁栄と文化的生活を望み、しかも人権や自由が抑圧されない“国家”で、21世紀へつなぎたいと願うのであれば、私たちは国の安全確保について考えるとともに、進んで国際平和の維持・実現に貢献する道を真剣に模索し、行動しなければならない。

青年の役割〈2〉 地域の活性化に立ち上がろう

私たちは地域の運動家として、それぞれの〈まち〉において多くの実績を積み重ねてきた。しかし、青年会議所会員は、地域社会に対し、始動の役割を担っているとすれば、その運動は常に時代の潮流に対し先見性と柔軟な適応力を持ち、経営的な観点から地域の発展を考えなければならない。それぞれの地域がそれぞれの歴史・風土・文化を基盤としながら、“地域を経営する”という観点で、自立の方向を考えてゆくことが、国全体の活性化と繁栄を築き上げることに繋がると確信する。地方行政もしかりで、そこに地域の行政改革がある。内外の様々な問題に対応しながら、企業の存立をかけ、地域の活性化に取り組むところに青年会議所の真髓があり、同時に青年会議所の新しい展開があると思う。

青年の役割〈3〉 教育への対応を強めよう

青年会議所が提唱した教育臨調が審

議会として発足した。どのような結論を導きだすか注目したいところである。人づくりは人類永遠の課題でもある。すべてのものの根底を支えるものは教育であろう。私たちも、これまで、教育の問題に多方面からかかわってきた。しかし、ここで21世紀を見すえ、改めて青年会議所のかかわり合う教育の分野は何か、その方法はいかにあるべきか——じっくり考えてみるのも意義がある。家庭教育、学校教育、社会教育、どれ一つとっても定型はない。時代により、環境により、そのあり方は千差万別。だからこそ、私たちは社会人としての資質を磨き、それを子供に投影できる存在にならなければならない。教育への対応は、案外、身近なところにあることを忘れてはならない。

次代の担い手をふやし、あわせて思い切った事業の見直しをしよう。

次に青年会議所内部の課題にふれたい。会員拡大である。1984年9月現在で、720会員会議所、60,572会員のうち、団塊の世代と呼ばれる人が実に33%に達している。今後5年間に現会員数の半分が卒業していくことになる。会員拡大に一層の努力を傾けるとともに、人材育成に力を入れ、青年会議所全体の活力を高めなければならない。さらに加えて、青年会議所運動の名のもとに拡大を続けてきた多くの“事業の見直し”を勇断をふるって実行すべき時が来た、あえて提唱したい。

自信をもって 21世紀に挑戦しよう

1985年は「国際青年年」。日本青年会議所では、世界各国の青年と膝を交え、国際平和に関する「世界青年サミット」を開催する。21世紀に向けて、日本の進むべき道は、世界の平和と人類に貢献する“信義あつい自由国家”を建設することである。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第34代会頭に野津喬が就任
日本JCスローガン「めざそう私たちの21世紀 果たそう青年の役割」
JCI会頭にフィリピンのビクター・ルチアーノが就任
一村一品運動が大阪・釧路・静岡などを皮切りに各地で開始
- 1.24 85年度京都会議が京都国際会館で開催され(27日まで)、野津会頭が所信発表、「時代の変わり目を認識し、自らを敢えて、試練の旅に立とう」と呼びかける
- 2 10月の広島「世界青年サミット」開催に当たり、アクチノフ・ソ連青年団体連合会議長に参加要請
- 2 気仙沼JC、会津坂下JC、柏崎JC、唐津JC等「アフリカ支援」の救済活動開始
- 2.10 野津会頭らローマ経由でソマリアのルーク地区難民キャンプを視察(13日まで)、野津会頭、バチカン宮殿でローマ法王と謁見
- 2 野津会頭、日本国際ボランティアセンター(JVC)事務局長・星野昌子さんとソマリアの現状について対談、理事会は、JVCヘブルドーザー1台緊急贈呈を承認
- 2 卒業と退会によるメンバーの激減を重大とみて、会員拡大を本年度の最大課題とする
- 3.16 韓国北陸青年会議所の創立総会開催(福井市内ホテル)
- 3 JCIビクター・ルチアーノ会頭「100万人会員を目指す」を提言
- 4.21 EXPO'85つくば会議を関東地区協議会が主催、野津会頭・竹内茨城県知事が講演
- 5.23 西村光弘八戸JC現役理事長急死
- 5.24 JCIアジア・コンファレンスが台湾の高雄市で開催され、25カ国、2400名が参加(28日まで)、会員拡大特別賞・最多登録NOM賞・最多参加NOM賞を日本JCが受賞
- 6.7 第15回JC青年の船(横浜－香港－基隆－横浜)(17日まで)
- 7.21 国際青年年(IYY)中央記念式典が東京・日本武道館で開催。テーマは「21世紀へ躍動の祭典 始めよう今、見つめよう未来」
- 7.26 南双葉入会
- 7.27 85年度青年経済人会議が東京で開催され、「時代は青年の挑戦を待ち望んでいる」のテーマのもとに4200名が参加(28日まで)、中曽根総理が挨拶
- 7.28 三代目交流全国ゲートボール大会、第2回内閣総理大臣杯は、鹿児島県志布志町大黒会Aチームが全国優勝(日本JC主催、紀文後援)
- 8.2 洋上スクール(東京－根室－東京)(8日まで)
- 8.5 第16次北方領土現地視察団を派遣、納沙布岬で視察と集会
- 8.12 日航ジャンボ機墜落で現役6名、家族4名、OB3名が遭難死亡
- 9.21 隠岐入会
- 10.3 北松浦、杵築入会
- 10.3 第34回全国会員大会が広島市で開催され、「リフレッシュ・JC・フォー・2001」のテーマのもとに1万3000名が参加(6日まで)
- 10.4 世界青年サミットが開催され(5日まで)、世界17カ国、32名が世界平和を討論。ベスト・オブ・ベスト賞に気仙沼JC、会頭賞に八王子JC
- 11.17 第40回JCI世界会議がコロンビア・カルタヘナ市で開催され(22日まで)、86年度JCI会頭にチュニジアのモハメド・バルニ、副会頭に海野恵一(浜松JC)を選出。JCI褒賞に34点エントリー、14部門獲得
- 12.3 野津会頭団長の訪中団、北京で劉延東中華青年連合会首席と会談
- 12.5 アフリカ難民救済のためのブルドーザー、横浜港よりソマリアのモガデシュに向け出航
- 12.7 蓮田入会、735JC、6万3000名となる

内外の動き

- 1.2 ロサンゼルスで日米首脳会談、中曽根首相、SDI研究に理解
- 1.8 ジュネーブで米ソ外相会談、包括軍縮交渉に合意
- 1.27 竹下登を中心に創政会発足
- 2.13 新風俗営業法施行
- 2.26 経団連、関税撤廃の拡大・残存輸入制限27品目の自由化など提言
- 2.27 田中元首相入院、政界に動揺
- 3.10 ソ連チェルネンコ共産党書記長死去、後任にゴルバチョフ
- 3.16 国際科学技術博覧会(科学万博)開幕
- 4.9 政府、経済摩擦等の対策の包括的な対外政策を決定
- 5.2 ボンで第11回先進国首脳会議
- 5.31 自民党、定数は正問題で「6増6減案」の公職選挙法改正案を衆院に提出
- 6.6 自民党、国家秘密法(スパイ防止法)案を議員立法として衆院に提出
- 6.18 「純金ファミリー」契約で老人・主婦から2000億円を集めた豊田商事の永野一男会長、自宅で刺殺される
- 8.10 服部道子、全米女子アマチュアゴルフ選手権で日本人初の優勝
- 8.12 羽田発大阪行の日航ボーイング747ジャンボ機が群馬県御巢鷹山山中に墜落、520人死亡、4人が奇跡的に生存
投資ジャーナルの中江滋樹元会長ら、詐欺容疑で逮捕
- 8.13 三光汽船、5000億円の負債で戦後最大の倒産
- 9.22 日・米・英・仏・西独の蔵相、中央銀行総裁、ドル高修正のため為替市場への協調介入で同意
- 10.11 政府、国鉄の6分割・民営化を骨子とする「国鉄改革のための基本方針」を決定
- 10.29 奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳から石室と家型石棺発掘
- 10 プロ野球セリーグで阪神タイガースが21年ぶりに優勝
- 11.9 ジュネーブで米ソ首脳会談(レーガン・ゴルバチョフ)
- 12.23 内閣制度百周年記念式典



会頭所信

第35代会頭 河村 忠夫

八戸JC 1946年生 80年八戸理事長 85年副会頭 86年会頭
元・(株)ライケット代表取締役

昭和20年の敗戦から40年、今、日本はつくり変えの時代を迎えている。国際関係、行政、教育、あらゆる制度や体制につくり変えが求められ、それが滔滔と進む技術革新の流れと、着実に進行する高齢化という相矛盾した潮流が交錯する中で対応を迫られているところに難しさがある。しかし、私たち青年は、21世紀を準備するものとして、この困難を克服していかなければならない。“21世紀への挑戦”とは、将来に夢を描くことではなく、当面の課題である“つくり変え”に身を挺して取り組み、熟年段階に達した日本の体力のリフレッシュをはかり、将来に明るい展望をひらくことではないだろうか。私たちは時代の流れにただ押し流されている若者であってはならない。歴史の流れを読み、次代への道を構築するプロモーターであり、それには困難にじっと耐え得る忍耐力と企画力、調整力を備えたコーディネーターとしての力量が要求されている。

地方のつくり変えから始めよう

日本のつくり変えを地方から起こしていくところに、青年会議所の特色と根強さがある。“地方の時代”がいわれ出してからかなりの年月を経たが、多くの地方自治体は、依然“3割自治”をかこっている。事業量からすれば国1に対し地方3と地方が圧倒的に多い。しかし、その資金の多くを国からの交付金や補助金に頼っているのが現実である。つまり、地方独自の判断による事業の範囲が狭められているのである。私たちはこのような現実を率直に受けとめ、地域経営に関する研究を行ない、自らの実力と地方の実力を着実に高める運動を展開しようではないか。その第一歩としては、地方行革を議論の中心に据え、簡素で合理的な地域経営のシステムを考えよう。

教育は大人社会の反省から

“いじめ”や校内暴力の問題に強い関心を持たれている。なぜなら、それは人権の問題だからである。教育基本法にいう「個人の尊厳」が、「人格の完成」が、これほど具体的なかたちで否定され、破壊されている今日、私たちは親としても、次代を担う青年としても見逃すことはできない。その原因について明解に提示できる自信はない。しかし、痛感するのは、いじめや暴力を容認し、抵抗力を失った大人社会、しつけや徳育の乱れを自由とはき違えた大人社会、このような大人社会の実相が、子供社会に正直に反映されているのではないかということである。現実を直視し、その反省を出発点とした大人社会のつくり変えを、自分自身の問題として取り組んでいかなければならないと思う。また、精神文化を育む努力は、地域社会におけるわれわれ青年に課せられた大きな課題といえよう。

一人一人が外交特使となろう

民間人のなしうる平和外交とは、いたずらに「平和」を連呼することではなく、できるだけ多くの国の人々に接し、相互理解を深めることにある。すでに各地青年会議所においては、姉妹提携、青少年の文化交流、あるいはホームステイの受け入れなどによって努力している。しかし、今年名古屋においてJCIの世界会議が開催され、国際交流に絶好の機会が提供される。そこで日本人同士で握手するよりも、一人でも多くの海外青年と握手をし、挨拶を交わそうではないか。これからの地域開発にとって、地球的視野と国際感覚を持った人材を育てることが、欠くことのできない要件である。同時に、海外の青年に日本と日本人の理解を深めてもらうことが、国際間の不信感を取り除く

ための第一歩であり、平和共存の道であらう。

魅力度で勝負しよう

現会員の約半数が、ここ5年間に卒業するという現実を踏まえて、会員拡大の必要が急務である。しかし、私たちは、この未曾有の事態を前に、いまこそ「時代に即応した青年会議所のあるべき姿」を問い直し、「魅力ある青年会議所」を、これから入会しようとする人たちの前に提示しなければならない。団体として入会意欲をそそるような組織的魅力と、この組織を経験した会員の人間としての成長度を、提示し得る存在にならなければならない。青年会議所もまた、つくり変えの時代に入ったといえよう。

燈燈無尽（むすび）

昨年度、日本青年会議所は、①国際平和への貢献、②地域活性化の推進、③人づくり——の3つを青年の役割として提唱した。しかし、これは単年度の運動方針というよりは、戦後40年の節目に当たって、21世紀を準備する戦後世代が取り組むべき役割を示したもので、いわば中期的な運動指針といふべきものである。したがって、本年度もまた、この指針を基本にしつつ、「日本のつくり変え」をテーマとする、一歩踏み込んだ運動展開を提唱する。

『燈燈無尽』

私達が思い続けている「明るい豊かな」社会実現のための全ての思いを、今こそ燃やそう。人から人へ、地域から国家へ、日本から世界へ、そして心から心へ——。青年が行動すれば、必ず風がおこる。その風は、炎を赤赤と燃やすことだろう。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第35代会頭に河村忠夫が就任
- 1.12 日本JCスローガン「おこせ青年の風 つくり変えよう 人 まち 地球」
ソウルで開催された韓国JC新年総会に河村会頭ら初参加(13日まで)
- 1.23 86年度京都会議が京都国際会館で開催され(26日まで)、河村会頭が「地方から日本をつくり変える」と決意表明
- 3.7～10 JC出身の市長・議員等の割合が高まる、国会議員11.7%、市長6.7%、商工会議所会頭10%、都道府県議9.4%、市議4.2%
- 3.13 洋上スクール事前調査団が北京・天津を訪問(16日まで)
- 4.5 国際合同セミナー開催(6日まで)
- 5.6 第3回洋上スクール、博多港より北京に向け出航(12日まで)
- 5.22 JCIアジア・コンファレンスが韓国・釜山で開催され、17カ国、3400名が参加(25日まで)、日本JCが最多登録賞等10賞を受賞、APDC議長に、更家悠介が選出される、APDC事務局が日本JC内に常設されることが正式決定
- 5 APDC使節団(秦伊知郎委員長)は、パプア・ニューギニアの国会議事堂に、チャン副首相兼大蔵大臣を訪ね、現地でのJC活動に支援・協力を要請。現地で青年海外協力隊の活動を支援
- 6.8 国際平和ミッションをソ連・東ドイツに派遣(15日まで)
- 6.10 フィリピンのラモン・デル・ロザリオ氏(元JCI会頭)、駐日フィリピン大使として来日。皇居での認証式前に河村会頭と懇談
- 6.10 第16回JC青年の船ニューユーとびあ号(1万トン)が出航(21日まで)
- 7.6 衆・参同日総選挙等でJC関係者84名が当選
- 7 JC子弟が約2週間にわたって人形交換使節として訪米
- 7.25 東かがわ入会、736JC、6万3150名となる
- 7.26 86年度青年経済人会議が東京で開催され、「地方から日本をつくり変える」のテーマのもとに4400名が参加(27日まで)
- 7.27 第3回内閣総理大臣杯三代交流全国ゲートボール大会は、大分ブロック代表大分春日Bチームが優勝
- 7 日航ジャンボ機墜落事故の慰霊碑が完成(藤岡JC中心)、8月25日の除幕式に河村会頭ら出席
- 8.3 第17次北方領土現地視察、根室半島納沙布岬で開催
- 8.3 第2回わんぱく相撲全国大会を両国国技館で開催。山形酒田チームが昨年に引き続き連続優勝
- 8.6 「中国技術研修生受け入れ」協議書調印のため、河村会頭を団長とする一行が中国に派遣
- 9.3 青年会議所の誕生を祝い、創始の精神を確認しようと企画された「全国6万人例会」がJCデーに、全国736JCで行なわれ、6万4875名の会員中、6万724名が出席
- 9.9 日本最南端、八重山JC現役会員2名が市議選に初当選
- 10.2 第35回全国会員大会が富山市で開催され(5日まで)、「定款」など諸規則を大幅改正
- 11 オフィスコンピューターを導入、第1次事務局OA化に着手
- 11.9 第41回JCI世界会議が名古屋で開催され、「21世紀への挑戦ーいまグローバルコミュニケーション 地球・技術・人間愛」のテーマのもとに63カ国より2000名、国内1万1000名が参加、最大規模の会議となる(15日まで)
- 87年度JCI会頭にフィリップ・R・ベリー(米)が、副会頭に川島啓一(京都JC)が選出された。同会議で、世界青年サミット開催
TOYP大賞に7名の若きリーダーが決まった
- 11.26 ニューヨークタイムズ紙に意見広告を掲載

内外の動き

- 1.28 米のスペースシャトル、打上げ直後に爆発
- 2.14 フィリピン大統領選でマルコス当選、国軍、反マルコスへ、アキノ大統領就任宣言
- 2 東京・中野の中学生がいじめを苦に自殺、葬式ごっこが問題化
- 4.1 男女雇用機会均等法施行
長江裕明さん一家の世界一周のヨット、4年9カ月ぶりに蒲郡港に入港
- 4.23 臨教審、第2次答申で「生涯学習体系」への転換を提案
- 4.26 ソ連、チェルノブイリの原子力発電所で重大事故、放射能汚染拡大
- 4.29 天皇在位60年記念式典開催
- 4 ハレー彗星が地球に大接近
- 4 アイドル歌手岡田有希子が飛び降り自殺、少年少女の跡追い自殺が続く
- 5.4 東京サミット、リビア名指しのテロ反対、チェルノブイリ事故の情報要求声明採択
- 5.7 国立大学協会、国立大2次試験の複数化とグループ分けを正式決定
- 5.21 8増7減の衆院定数は正法案、衆院通過
- 5.31 慶大医師グループ、人工受精で女児生み分け6例成功と発表
- 6.19 ベトナムの二重体児、治療のため来日
- 7.6 衆参両院同時選挙、自民党圧勝
- 7.7 ショパンコンクール優勝のソ連ピアニスト、スタニスラフ・ブーニン来日
- 7.22 第3次中曽根内閣成立
- 7.30 東北自動車道、浦和ー青森間全通
- 8.15 新自由クラブ、総選挙敗北から解党、田川誠一を除いて自民党に復党
- 9.6 社会党委員長選で、土井たか子が上田哲を大差で破り当選、日本初の女性党首誕生
- 9.22 中曽根首相、自民党研修会で「黒人などのいるアメリカは知識水準が低い」と発言、米国内で激しい批判
- 10.1 住友銀行、平和相互銀行を吸収合併、預金高国内2位となる
- 10.11 レーガン大統領とゴルバチョフ書記長がアイスランドのレイキャビクで会談
- 10.27 北海道で初の日米共同統合実動演習
- 11.10 アキノ大統領来日、中曽根首相、対比援助拡大を約束
- 11.15 マニラ市郊外で三井物産若王子マニラ支店長の誘拐事件発生
- 11.15 伊豆大島三原山が209年ぶりに大噴火、島民と観光客に避難命令
- 11.25 三菱銀行有楽町支店前で現金輸送車が襲撃され、3億3000万円を強奪される
- 11.28 国鉄分割、民営化関連8法案成立
- 12.9 ビートたけしら、「フライデー」編集部に抗議、暴行・傷害で逮捕



会頭所信

第36代会頭 浅利 治

横浜JC 1948年生 85年横浜理事長 86年副会頭 87年会頭 元・(有)アサリエンタープライズ代表取締役 19年逝去

いま日本人が問われている

最近、日本に対する諸外国の評判はかんばしくない。いうまでもなく、先進国の国際収支悪化や失業の悩みを尻目に稼ぎまくる日本の輸出依存体質に根ざしている。内需振興が叫ばれるのもこのためであり、青年会議所が各地で取り組んでいる地域活性化の運動は、こうした国際的視点からも、ますます重要性を帯びてきているといえよう。しかし、今、日本に問われているものは、こうした量的転換だけであろうか。私にはそれだけでない、もっと本質的なものが問われているように思われる。それは、日本が国際社会の一員として生きていくための考え方であり、行動の仕方である。つまり、“日本人”の生き方が問われている。豊かになった日本は、それにふさわしい生き方をしなければならぬのである。

心に神を、手には仕事を

米国のコロラド州にデンバーという都市がある。この町の至るところに“心に神を、手には仕事を”と書かれたポスターが貼られている。「神」はこの国ではキリスト教でいう神であり、心の支えをいうのだろうが、同時に助け合う心、温かい心を意味するのであろう。「手には仕事」は、自立を意味する。私はこの言葉に、人の生き方の真理を感じるし、日本人の新しい生き方の指針が端的に示されているように思う。国の内外において、立場や事情の違いを越えて人間の共存を願いつつ、かつ、人として成すべき事業に全力を尽くす。解釈は人によってそれぞれあろうが、難しい基本論を展開するより、多様な解釈を残しつつも、短く、鮮烈な、このスローガンのもとに、日本人の生き方を実践的に探求したいと思う。そして、JC三信条の新しい展開を試みたいと思う。

謙虚な国際“受信”能力を

国際交流の重視は、JC創立以来のテーマであり、幾多の先輩によって提唱されてきた。しかし、今、日本は、もっとも大胆な国際化をめざして、日本人の体質改善をはからねばならない時にきている。明治以来、日本は欧米の科学技術や文化を効率よく吸収する“受信型”でやってきた。加えて高度成長以降においては、経済的に市場拡大や資源確保のための積極“開発型”あるいは“攻撃型”の国際化を進めてきた。しかし、日本が今後、目指すべき国際化の方向は、①日本の科学技術や文化を諸外国に伝える“発信”能力と、②諸外国の期待や要望に応える新しい“受信”能力の2面がある。中でも後者は当面の重要課題である。相手を理解すること、この難問に取り組んでこそ、その謙虚で真摯な態度を通しての“友情”が広がり、新しい日本人が海外から理解されるのではないか。

日本の体質を変える地域活性化

昨年4月、「前川リポート」の発表から、内需振興について、その方策はいろいろな角度から論ぜられている。しかし、今だに従来の中央集権的発想から出ていないものが多く見受けられる。この壁を突き崩すには、中央集権的発想そのものを転換するしかない。行政や諸団体と一体となって進めなければならない運動であり、それだけに、地域の個性と可能性をしっかりと見据える英知と、これを実践化するねばり強い組織力が私たちに要求されている。さらにもう一点、急激な円高に伴う輸出関連産業の危機がある。多くのメンバー企業が、この渦中で苦しんでいる。被害の実情を把握し、行政その他による対策に反映しなければならぬ。

青少年にふれ合いの喜びを

学校教育については、臨教審の答申が出され、これを軸に行なわれる今後の改革を十分に見守る必要がある。一方、学校外教育という観点からは、私たちが中心になって積極的な役割を果たしていかねばならない。友達とふれ合う楽しさ、自然とふれ合う喜びを教え、社会に生きるルールやシツケを教える場をつくるのは、地域の私たちの役割ではないだろうか。知・徳・体の教育を、すべて学校に押しつけるのではなく、たくましい体力、豊かな情操を育むために、すでに各地で行なわれている青少年育成事業を、より積極的に推進し、次代を担い、世界に通用する立派な日本人を育てよう。

役に立つJCを育てよう

JC創始の精神は不滅である。しかし、その時代適応は私たちの責任である。この時代適応を着実なものにし、JCのさらなる発展をはかるために、私はあえて「役に立つJC運動」を提唱したい。「役に立つ」とは、社会のため、そして企業のためにする、という意味である。JC運動とは、自分の利益を求めず、企業を離れ奉仕する運動である。しかし、例えば、地域活性化の運動は、単なる奉仕活動ではない。自分たちの企業と生活を維持・発展させるための基盤を確保・充実させようとする運動である。それをボランティアとして、英知と勇気を傾けてやろうとする奉仕であって、自己犠牲の上に立った他の奉仕ではない。

JC運動を、私たちが手にする“仕事”とするところに、新時代に向かったの活力が生まれると確信する。

“心に神を、手には仕事を”

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第36代会頭に浅利治が就任
日本JCスローガン「受けとめよう世界の心 創ろう新しい日本の生き方」
- 1.11 JC総合研究所の開所式、運営会議議長に山本洋一
- 1.22 87年度京都会議が国立京都国際会館で開催され、5000名を超える会員が参加(25日まで)、会田雄次氏が記念講演
- 1.25 87年度全国理事長会議が開催。「役に立つJCづくりー変化への予見と対応」のテーマのもとに約900名が参加、NHK解説委員大山晃人氏講演「産業構造の変革と税制改革」
- 2 「国際平和基金」適用の第一号として、300万円を支出。ネパールに日本脳炎ワクチン、バングラデシュに経口補水塩の医療協力。4月下旬APDC使節団が現地機関に寄贈
- 2.21 肥後大津入会、737JC、会員数6万1443名となる
- 3.19 教育に関する懇談会。文部省にて塩川文部大臣他
- 3.21 牛久入会、738JC、6万1494名となる
- 4.17 「香港JC青年の船」一行185名が鹿児島港に入港。城山観光ホテルで国際交歓会、ホームステイ(20日まで)
- 4 統一地方選挙で、JC関係者950人が当選、首長は全国で77人
- 4.22 APDC使節団を派遣(29日まで)
- 5.15 ビー・エム・ダブリュー(株)の協賛を得て「TOYP大賞」を創設。社会開発・国際交流に貢献した青年経済人を表彰
- 5.18 「国際平和基金」の交付先が決まる。4団体に1150万円
社会福祉法人日本国際社会事業団=330万円
マダガスカルのススター本間を助ける会=425万円
曹洞宗ボランティア会=330万円
シャブラ・ニール市民による海外協力の会=65万円
- 5.21 87年度JCIアジア・コンファレンスがシンガポールのオーキッドJCの主管で開催され、21カ国、2300名が参加(24日まで)、89年度開催地に横浜が選出
- 6.13 洋上研修スクール(横浜ーグアムー成田)(18日まで)
- 6.17 日本・パシフィック両青年会議所、戦争の激戦地グアム島に慰霊碑を合同で建立。日米合同慰霊祭に1000名が参列
- 6.17 第17回JC青年の船、500名が参加(29日まで)
- 7.25 87年度青年経済人会議が東京・新高輪プリンスホテルを主会場で開催され、「いま私たちが問われている! 変化への予見と対応」のテーマのもとに4169名が参加(26日まで)
- 7 会員意識実態調査を実施
- 7.26 第4回内閣総理大臣杯三代交流全国ゲートボール大会は静岡の焼津チームが優勝
- 8.9 第3回わんぱく相撲全国大会は大阪Bが団体優勝
- 8.17 総務庁・北方領土対策協議会等の後援を得て、全国小・中・高校生を対象にした“北方領土について考えよう”作文コンクール
- 8.22 アジアニクス青年経済人沖縄会議を沖縄地区大会のメイン事業として開催。テーマは「沖縄は、アジアの架け橋になれるか」
- 9.6 第18次北方領土現地視察、根室の納沙布岬で開催。記念モニュメント「きぼうの鐘」の除幕式
- 9.11 中華全国青年連合会からの中国技術研修生受け入れ事業開始
- 9.30 第36回全国会員大会が和歌山市で開催され、「海を越える夢を見た」のテーマのもとに1万2000名が参加(10月4日まで)
- 10.2 TOYP大賞を和歌山ターミナルホテルで開催
- 11.14 第42回JCI世界会議がオランダ・アムステルダムで開催され、72カ国、3200名が参加(20日まで)、88年度JCI会頭に史上初の女性会頭が誕生、ジェニファー・ユー(香港JC)
- 12.10 元会頭森下泰氏(森下仁丹社長)心不全のため死亡
- 12.5 「日中友好の会」設立される。会長野津喬

内外の動き

- 1.16 中国共産党総書記胡耀邦、辞任、後任に趙紫陽
- 2.9 初上場のNTT株に買いが殺到
- 2.21 パリの主要先進国蔵相・中央銀行総裁会議、ドル安定、日本の内需拡大等に合意
- 3.1 売上税反対の動き拡大
- 3.20 安田火災海上がゴッホの「ひまわり」を53億円で落札
- 3.26 国公立大、初の複数入試で約9500人の定員割れ
- 4.1 国鉄が114年の歴史を閉じ、分割民営化、JR6社等発足
- 4.1 国土庁の地価公示、東京の住宅地、商業地の前年比上昇率76%で過去最高
- 4.12 第11回統一地方選、知事選
- 4.23 防衛費5.2%増でGNP1%枠を突破
- 5.3 西宮市の朝日新聞阪神支局が覆面男に襲撃され、記者2名が死傷
- 5.10 帝銀事件の死刑囚平沢貞通、再審請求実現せぬまま死亡
- 5.28 西独青年ルスト、セスナ機でモスクワ赤の広場に着陸
- 6.13 プロ野球広島の衣笠祥雄、連続2131試合出場、世界新記録、国民栄誉賞
- 6.23 米国、86年末の対外債務2636億ドルで世界一の債務国に
- 6.26 日本、4月末の外貨準備高696億2000万ドルで世界一の債権国に
- 7.3 自民党竹下派が経世会を結成
- 9.9 首都高速葛飾川口線が開通、青森一八代間の2000キロの高速自動車道が連結
- 9.22 天皇陛下、腸通過障害で手術
- 10.12 マサチューセッツ工科大学利根川進教授にノーベル医学・生理学賞
- 10.19 ニューヨーク株式市場の下落率22.6%、史上最大(魔の月曜日)
- 10.20 東京株式市場、前日のニューヨーク市場での史上最大の暴落を受け、前日比3836円安、下落率は14.9%と過去最大を記録
- 10.20 中曽根首相、自民党総裁に竹下登を指名
- 11.6 竹下内閣発足
- 11.8 岡本綾子、全米女子プロゴルフ初の外国人賞金女王
- 東京外為市場で1ドル122円の最高値



会頭所信

第37代会頭 川越 宏樹

宮崎JC 1948年生 85年宮崎理事長 86～87年副会頭 88年会頭 現・学校法人宮崎総合学院理事長

変革の時代のJC運動

40年になろうとしている日本の青年会議所運動。そこには輝かしい伝統がある。しかし、伝統とは過去を継承することによって出来るのではなく、革新の積み重ねによって創るものである。いやしくも青年と呼ばれたいならば、『変革の思想と行動』の意味を改めてかみしめ、今を守ることに汲々とするのではなく、明日に向かって今日を変革して行く勇気と行動が必要である。「原点に帰ろう」を「変革の時代」の青年会議所運動の基本認識とし、次の提言をしたい。

地球新時代

1987年にイタリア・ベネチアで開催された「先進国首脳会議」は一つの時代の終わりを告げ、新しい変革の時代の方向を示していたように思う。「地球的に思考・行動・協力して行く」という「地球新時代」の幕開けを象徴しているといっても過言ではない。この「地球新時代」にあって、わが国が存在感を持ち、世界に貢献して行こうとするならば、その起点は地域にあると思う。なぜなら、現在起こっている貿易摩擦などの問題は、中央一点集中型の社会・産業・行政などの構造に深く根ざしており、地域の活性化と自立なくして、その解決はないと思うからである。具体的には中央集中型から、地方分散型へと社会構造を転換させ、地域の自立に根ざした地域連合国家としての日本を創造して行くことである。地域を基盤とする地球主義を推進する「地球新時代」の担い手になろうではないか。

地域新時代

日本の繁栄は個人のアメニティを忘れた繁栄であるといわれる。日本の経済構造を外需型から内需型へと質的に転

換しようとしている今日、生活関連社会資本の整備を基本とした「生活の質的充実」を目標とする「ハイ・アメニティ」社会の実現に向けて政策的努力をするべきである。それには新しい価値目標のもとに、東京一点集中型の国家運営を地方主導型に機能転換させ、地域の自立と連帯をベースとした地方分散型の社会づくりを実現していくことが、内需振興型の経済構造への転換につながるばかりでなく、「豊かさ」「活力」「生き甲斐」のある新しいまちづくりにも大きな効果をもたらすであろう。と同時に、今日、国際活動も世界の国と国の活動から、世界の都市から都市の活動へと転換させて行くことが必要である。青年経済人としての立場から地域企業・地域産業の振興に努力を傾注する一方で、地域社会の新たな発展に貢献して「まちづくり」を推進して行くことは青年会議所に課せられた大きな責務である。ハイ・アメニティ社会の実現に向けて政策を提示し、行動し、地域新時代の担い手になろう。

JC新時代

青年会議所も従来の価値観にとらわれない、斬新な発想と行動力が求められている。地球的・国家的・地域的な諸問題に対して、新しく、そして大胆な発想・視点からJCの役割を提示し、行動していくことが、「JC新時代」に向けての私たちの基本的任務といえる。具体的には、以下の課題について積極的に取り組んで行くべきである。

1. 地域の声を代表した対外的発言の強化

中央集中型から、地方分散型の国家運営へと転換が叫ばれている今こそ、日本JCは全国の声我代表して、対外的発言を強化して行きたい。

2. 地域党の立場から政治への参加

JC独自の地域社会の政策・ビジョンを積極的に行政に提示して行くことが必要になってきている。しかし、地域社会が政治・行政システムから成り立っている以上、地域・市民の立場から政治に主体的に関わって行くことも求められる。「JCと政治活動のあり方」について広く議論を喚起して行きたい。

3. 青年経済人としての資質の向上

経済人としての資質向上は、それが正しい認識のもとに行なわれた場合、単に本人やその企業に貢献するだけでなく、それを通じて地域社会に貢献するものであり、またそうしなければならない。

4. JCIへの積極的貢献

JCIは現在、会員数の伸び悩み、NOM間の格差、会費の未収、アイデンティティの不統一などの課題が指摘されている。こうした中で、日本JCは世界70余りのNOMの中で最も活力を有し、社会の発展に貢献する運動を展開しているといつてよい。日本と諸外国との関係が「地球的相互主義」へと移行しつつある今こそ、日本JCはアジア、そして世界のJC運動の向上のために積極的な努力をすべき時ではないだろうか。

人間新時代

ハイ・アメニティ社会の実現とは、一人ひとりの生活を質的に豊かにすることであると同時に、一人ひとりが真に豊かな人間性を確立するということでもある。私たちは、幸いにして青年会議所運動をやらせていただいている恵まれた環境にある。このことへの感謝と喜びを片時も忘れてはならない。人間一人ひとりの真に豊かな社会を実現して行くために、「人間新時代」の担い手になろう。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第37代会頭に川越宏樹が就任
日本JCスローガン「今 変革のとき 自ら拓こう 新時代」
「団塊の世代卒業」幕開きで、今後の課題として会員拡大が急浮上
- 1.21 88年度京都会議が国立京都国際会館で開催され、5000名が参加
(24日まで)、日本商工会議所会頭石川六郎氏が講演
- 2.7 日本JC役員が全国を縦断して、各地理事長に直接対話する「ダイア
ログ'88」が四国高松を皮切りにスタート
- 2.20 川越会頭が竹下登総理を訪ね、ふるさと論について歓談
- 3.14 日本JCシニア・クラブ会員1万人突破祝賀会
- 3.26 各地区で将来を嘱望される若手会員の公開研修(27日まで)
- 4.8 「日本JC日中友好の会」誕生。会の規約、事業計画等を取り決
め、会長に85年度会頭野津喬氏が就任、交流継続への受け皿に
- 4.17 第1回国際アカデミーが沖縄・東京で開催され、51カ国、116名が
参加(23日まで)
- 4.18 ダイアログ'88を総括するかたちで大阪国際交流センターで理事長サ
ミットを開催
- 4.24 ネパール・バングラデシュ・ミッション。国際平和基金で購入したワ
クチン600ユニットをネパールJCに引き渡し、各地で医療セミナーと
MG講座を開催(5月2日まで)
- 5.12 日本JC日中友好の会が訪中(14日まで)
- 5.19 日米青年21世紀会議が名古屋で開催され、「日米新時代の活力ある
産業交流の途を求めて」のテーマのもとに1500名が参加(22日まで)
- 5.30 JCIアジア・コンファレンスがマカオで開催され、「平和は自由で調和
のとれた経済の下に」のテーマのもとに22カ国、3600名が参加(6月
2日まで)
- 6.7 第18回JC青年の船コーラルプリンセス号(香港・グアム)、513名
が参加(19日まで)
- 6.18 洋上スクール開催。JC歴3年未満のフレッシュマン451名が参加(24
日まで)、リーダーの条件－国際性と感性を磨く
- 7.23 第2回TOYP大賞を新高輪プリンスホテルで開催
- 7.23 第5回内閣総理大臣杯三世代交流全国ゲートボール大会を東京・駒
沢オリンピック公園第2競技場で開催(24日まで)
- 7.23 88年度青年経済人会議が東京・新高輪プリンスホテルで開催され、
「新・明るい豊かな社会を求めて－挑戦! 地域新時代」のテーマのも
とに4600名が参加(24日まで)、「こんな規制(もの)いらない運動」
の提唱発表、竹下登総理が「税制改革」を中心に記念講演
- 7.25 ヤングアンバサダー人形使節団をオーストラリア建国200年祭に派遣
(8月7日まで)。
小・中学生が、人形を交換、オーストラリアの少年・少女らと交流
- 7.31 第4回わんぱく相撲全国大会を両国国技館で開催
- 8.3 北方領土返還運動をPRする特別列車「ベルトレイン'88」が上野・
根室間をリレー走行(6日まで)。延べ600名が乗車
- 8.7 第19回北方領土視察を実施
- 9.28 第37回全国会員大会が高知市で開催され、「ふりーじゃきにーここに
人あり。自由あり」のテーマのもとに1万1800名が参加(10月1日ま
で)、総会で「新宣言」を承認、ジミー・カーター前米国大統領が記
念講演
- 10.12 日本JC友好訪中団を派遣。中青連と懇談、視察(17日まで)
- 10.22 宮沢喜一大蔵大臣が理事会で講演
- 11.14 第43回JCI世界会議がオーストラリア・シドニーで開催され、「豊か
な明日をわれわれの手で!」のテーマのもとに80カ国、3500名が参加
(20日まで)

内外の動き

- 1.12 竹下首相初の訪米
- 1.12 日本医師会の生命倫理懇談会、脳死を認める決定
- 2.13 カルガリーの冬季オリンピックで、黒岩彰・橋本聖
子ら活躍
- 2 アグネス・チャンの子連れ出勤で論争
- 3.13 世界最長の青函トンネル開業
- 3 東京ドーム開場
- 4.1 マル優制度廃止、預貯金利子に20%課税
- 4.1 国土庁、88・1・1現在の地価公示、東京の地
価は前年比68.6%上昇、史上最高
- 4.10 世界最長の道路・鉄道併用の瀬戸大橋が開通、
海峡部9368メートル
- 6.10 明電工の中瀬古功元相談役が株操作による所得
25億円の隠匿が発覚、同社幹部らを含む5人が所
得税法違反で逮捕
- 6.18 川崎市助役、リクルート社未公開株取得による不
当利益が発覚(リクルート事件の発端)
- 7.5 中曽根首相・宮沢蔵相・安倍幹事長らの秘書のリ
クルート社の未公開株取得判明
- 7.6 江副浩正リクルート社会長、引責辞任
- 7.23 横須賀沖で自衛隊の潜水艦なだしおと釣り船第一
富士丸が衝突、30人死亡
- 8.8 7年間続いたイラン・イラク戦争で停戦協定成立
- 8.25 竹下首相訪中、李鵬首相と会談、8100億円の第
3次円借款に合意
- 9.17 第24回オリンピック(ソウル)、斉藤仁ら活躍
- 9.19 天皇陛下吐血して容態急変、閣議、全国事行為
の皇太子殿下への委任を決定
- 10.21 国債ネズミ講の「国民利福の会」会長平松重夫ら
逮捕
- 10 プロ野球の南海と阪急が身売り、ダイエーホークス、
オリックスブルーブスとなる
- 11.8 米国大統領選挙で、共和党のブッシュ当選
- 11.10 自民党、衆議院税制問題等調査特別委員会で、
消費税等税制改革関連6法案を単独強行採決
- 11.10 東京地検、「ロス疑惑」の三浦和義起訴
- 11.17 1ドル=121円52銭の戦後最高値を記録
- 11.21 衆議院リクルート問題調査特別委員会、江副リク
ルート前会長・高石前文部事務次官・加藤前労働
事務次官を証人喚問
- 11.29 竹下首相、「ふるさと創生」政策のため、全市町村
に一律1億円の交付金配布方針決定
- 12.27 竹下首相、リクルート疑惑一掃のため内閣を改造、
長谷川法相、疑惑で辞任



会頭所信

第38代会頭 更家 悠介

大阪JC 1951年生 86年大阪理事長 88年副会頭 89年会頭 現・サラヤ(株)代表取締役社長

はじめに

——意志と創造力で

歴史的な大転換の時代に生きる

今、「第三の開国」といわれる国際化・自由化の動きや、また新しい社会秩序をもたらす情報化・多様化・高齢化への進展は、明治維新や戦後の民主化をもしのご勢いとスピードで産業構造の改革や人々の意識改革を促している。21世紀を目前にひかえ、また歴史的な大転換の時代の変化の中にあって、私たちは幸福の意味をもう一度見直し、生きがいと活力があり、思いやりのある幸福社会の達成を目指すべきではないだろうか。個々の人間が「いかに生きるべきか」「幸福とはなにか」を追求し、自分の意志で新しい価値観の創造や新しい社会システムづくりに参加する時代である。そして、今までの因習にとらわれない新しい社会システムをつくることである。その達成には私たち自身の意識改革はもちろんのこと、あらゆる既存の社会システムの「つくりかえ運動」が必要である。

人と地域の連帯をめざす

——波をうねりに

うねりを潮流にかえる

多極分散型ネットワークづくり

「地方の時代」といわれながら、行政システムは中央集権型であり、各省庁が縦割り行政で自らの既得権益を守りながら地方自治体を管理・監督しているために、地方自治体は自らの主権・個性を進めることができない。そのような中であって、われわれ青年会議所は行革審のような、上からの行革ではなく、まちに住む生活者としての市民レベルからの発想と行動を起こし、「個性とゆりのまちづくり」のため中央集権の画一的な行政を改革し、規制を緩和し、地方自治体の自立を促さなくてはならない。四全総の目的としている

多極分散型の国づくりを本当に目指すならば、自立自助の精神をふまえ、陳情になれてしまった地方行政の能力の向上、既得権益の打破や規制緩和などを強力に訴えていく必要がある。また、「ネットワーク社会」においては、地域と中央の関係を地球的な視点から見直し、つくりかえる必要があるのではないか。今まで多くの地域は、国というフィルターを通してのみ外国を見、接触をはかってきた。しかし、これからは地域が直接世界へ飛び出し、また、世界の中に地域をどう位置づけ、「まちづくり」を考えていくかという時代である。発想を転換し、地域が国を飛びこえ世界の地域と直接交流することを、推進してゆくべきである。

私は、新たな青年会議所運動を効果的・効率的に行うために、各地の人と貴重な情報のネットワーク化を図りたいと考えている。各地青年会議所の持っている、情報・ノウハウをデータベース化し、単年度で消えてしまわないストックとして蓄積し、その膨大な情報を有機的に活用させたい。そして、日本青年会議所を情報拠点としたい。

積極派地球人になろう

——未来を演出する

創造的破壊の精神

幸福の最も重要な基本は、「世界全体が幸福にならないかぎり個人の幸福はありえない」という原則である。そして、スケールも世界全体に広がっている。国際とは、国と国の相互のあり方や関係だが、今や地球の中に日本や地域や企業、個人を考え、位置づけるといった「国際」から「地球」への発想の転換の時代である。まさに地球人として「地球的に考え、地域的に行動する」という視点からの、「幸福社会づくり」が求められているのである。

今、世界のGNPの13%を占める日本が非軍事国として、世界の中でどのような貢献ができるのか。われわれは、日本が「地球コミュニティ」の中で真の尊敬と名誉をうける立場でありたいと願っているし、その役割を担う覚悟を持つべきであろう。市場開放策を、世界各国は心より望んでいる。ODA増額、日本版マーシャルプランの実施もなくてはならない重要な援助であるが、さらに海外協力において、青年会議所のような民間組織の役割はますます増大すると認識すべきである。

そして、何よりも重要なことは、21世紀の世界において、東洋文化と西洋文化にこだわらない、自然と人間が融和し、いろいろな民族が共存する、新しい文明の「価値観」や「社会のモデル」を築く気宇壮大な精神が求められているのではないか。

「創造的破壊」の精神は、環境の変化がもたらす変化を新たな価値につくりあげるといった、現状に甘んずることのない現状否定の精神である。われわれは人間によってつくりあげられた全てのものが、時代とともに硬直化し、時代遅れとなり、存続の理由を失い、かつての恵みが悩みの種になることを知っている。21世紀の幸福社会を目指し、今社会は変革を求めている。積極派地球人として、創造的破壊の精神による「つくりかえ運動」に、勇気をもって果敢に取り組もうではないか。

「夢をビジョンに、ビジョンを行動に」

われわれは未来社会に大きな理想と夢を持っている。その夢を実現可能なビジョンにおきかえようではないか。その第一歩が、未来に向かって踏み出す、今日の第一歩である。「大きな夢をもとう。そして夢をビジョンに、ビジョンを行動に」

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第38代会頭に更家悠介が就任
日本JCスローガン「地球時代のデッカイしあわせ つくりかえよう人間と地域」
JCI会頭にスリランカのイスファファニ・サミンが就任
JC諸会議、会員大会で「JC宣言」に代え「新宣言」を朗読することを決定
- 1.12 全ソ共産青年同盟(KMO)訪日団(団長バンチヒン副議長)が日本JC会館を表敬訪問。岩倉副会頭らと懇談、ゴルバチョフ書記長との会談を要請、今後の中長期計画による意見交換の場を設置する努力を確認しあう
- 1.19 89年度京都会議が国立京都国際会館で開催され、更家会頭が「こんな規制いらぬ」運動をテコに21世紀の幸福社会実現のための新しい社会システムの確立を提起、グローバル・プロジェクトの実施を表明
- 1.25 米マサチューセッツ工科大学教授レスター・サロー氏が日本JC会館で講演「貿易不均衡の解消と実施金利低下へ」
- 3 APDC使節団、インドネシアミッションを派遣、インドネシアJCの今秋JCI正式加盟に支援する文書に調印
- 4.5 KMO議長訪日、東京、大阪、名古屋など訪問
- 4.25 イタリアとドイツを中心に「欧州まちづくりミッション」を派遣(5月8日まで)
- 5.25 JCIアジア・コンファレンス「ASPAC横浜」を開催。テーマは「アジア・太平洋時代 21世紀のパートナーシップを求めて!」(28日まで)
- 5.30 日本JC訪ソ団(団長、更家会頭)がグルジア共和国、カルパチア自治共和国などを視察(6月5日まで)
- 6.5 日ソ青年交流3カ年計画の合意書を締結、調印
- 6 JC日ソ関係委キャンペーン「10円玉で有線放送大賞を。そして北方領土返還を!」(北方領土の歌ノソップ岬を制作)
- 6.7 洋上スクール(大阪-釜山-大阪)(13日まで)
- 6.7 企業のグローバル化促進のため、アメリカミッション実施(17日まで)。企業家グループACEと今後の交流について調印
- 6.11 アメリカまちづくり視察ミッションを派遣(23日まで)
- 6.15 米国テネシー州・メンフィスで開かれた全米大会で、セント・ジョージ・チルドレン・リサーチ・ホスピタルに募金600万円を贈る
- 6 APDC使節団、ネパールミッションを派遣。ネパールJCと共同事業「ストップ・ザ・日本脳炎」を推進。予防ワクチン600ショットを贈呈。アイシュワリア王妃に謁見
- 7.8 89年度TOYP大賞を赤坂プリンスホテルで開催
- 7.22 89年度青年経済人会議が東京・新高輪プリンスホテルで開催され、「地球時代のニッポン幸福社会へのカウントダウン-創造的破壊による「つくりかえ運動」への挑戦-」のテーマのもとに6000名が参加(23日まで)、宇野宗佑総理に提言書を渡す
- 7.28 福岡JCが「アジア太平洋子ども会議イン福岡」を開催。海外35カ国から、1034人を招く(8月2日まで)、ホームステイ先730家庭
- 9.29 第38回全国会員大会が福岡で開催され、「波立つ日」のテーマのもとに1万7000名の大会史上最高の参加者(10月1日まで)
- 10.13 中国技術研修生受け入れ進展のため、中国ミッションを派遣
- 11.5 第44回JCI世界会議がイギリス・バーミンガムで開催され(11日まで)、90年度JCI会頭にホルヘ・スカー(ドミニカ)、副会頭に更家悠介(大阪JC)を選任、次回開催地は、サンファン(プエルトリコ)、91年はヘルシンキ(フィンランド)に。TOYP大賞にインド子供村「ハッピーバリー」の設立者大神のりえさんが「世界平和への貢献」で受賞
- 12.8 志摩入会、747JC、6万620名の会員となる

内外の動き

- 1.7 天皇陛下、十二指腸部腺癌で死去(昭和天皇と追号)、明仁皇太子殿下即位、平成と改元
- 2 金融機関の完全週休2日制開始
- 2.6 前年8月から行方不明の入間市の幼稚園女児宅に、箱に入った人骨等が置かれる、新聞社宛に女性名の犯行声明
- 2.24 昭和天皇大喪の礼、新宿御苑で実施、163カ国の元首級55人、28国際機関の代表・使節ら9800人が参列
- 2.28 佐賀県の吉野ヶ里遺跡で、銅剣・ガラス製管玉など発掘、弥生時代最大の環濠集落・墳丘墓と推定
横浜博覧会開幕
- 3.25 新日鉄釜石製鉄所、130年来の溶鉱炉の火が消える
- 3.18 伊藤みどり、パリのフィギュアスケート選手権で日本人初の優勝
- 4.1 消費税スタート、年収約6兆円の見積もり
- 4.11 川崎市の竹やぶで1億円余の札束発見、東京の商事会社社長の金と判明
- 4.18 東京地検、リクルート事件で高石前文部事務次官を収賄容疑で起訴、国会空転状態
- 4.25 竹下首相、政治不信の責任をとり辞意表明
- 5.18 中国、天安門事件
- 5.22 東京地検、リクルート事件で藤波孝生元官房長官・公明党池田克也前代議士を収賄容疑で起訴
- 5.29 五島列島にベトナム難民107人を乗せた漁船漂着、以後相次ぐ
- 6.2 宇野内閣組閣
- 6.24 歌謡界の女王美空ひばり死去、国民栄誉賞
- 7.23 参議院議員選挙で与野党逆転
- 7.24 宇野首相、参院選惨敗と女性問題で退陣表明
- 8.9 海部内閣組閣
- 8.10 八王子の強制わいせつ容疑の宮崎勤、入間市の幼稚園女児殺しを自供、アニメビデオマニアの殺人事件として問題化
- 8.19 東独市民約1000人、オーストリアに脱走
- 8.25 天皇陛下の御次男礼宮様と学習院大学大学院生川嶋紀子さんの婚約発表
- 9.27 ソニー、米映画社コロビアの買収を発表
- 9.29 大相撲横綱千代の富士、965勝の史上最多記録を達成、国民栄誉賞
- 11.9 東独、ベルリンの壁を実質的に撤去
- 11.13 島根医大で初の生体肝移植手術
- 12.3 米ソ首脳のマルタ会談、新時代の到来を宣言
- 12.22 ルーマニアのチャウシェスク独裁政権崩壊



会頭所信

第39代会頭 藤田 公康

広島JC 1950年生 88年広島理事長 89年副会頭 90年会頭 現・(株)ビーアールホールディングス代表取締役社長

はじめに

経済のグローバル化と価値観の多様化により、国家という概念が陳腐化しつつある。この社会の変化は常にテンポを早め、広がりを増している。このまま進むと21世紀は想像をはるかに越えた社会状況が出現するであろう。このような変化に対し、私たちの意識はどうであろう。また、地球上には国家という単位では解決できない問題が山積している。アジア、アフリカ諸国を中心とした爆発的な人口の増加とそれに伴う食料不足、酸性雨やオゾン層を破壊するフロンガス、森林伐採による砂漠化など挙げれば切りがないほどである。

一方国内では、国政として対応できない地域の問題が山積している。産業の空洞化や人口の減少、近づきつつある高齢化社会、多様化した価値観を反映できない行政システムなど、地域は将来に対する不安の中で、21世紀を迎えようとしている。地域の問題もまたグローバルな視点を持たなければ解決できない状況なのである。

宇宙船地球号の一員である日本。いま私たちは世界一豊かな国としての自覚と責任をもって行動する時ではないか。世界は日本の一挙手一投足を見守っている。私たちは小手先の変化でなく、世界に通じる自立した、新しい日本の姿を明確にしていかなければならない。

国の自立——豊かさに対応した新しい国家理念を

日本は米国を抜き世界一豊かな国となった。しかし、日本には貧しさに耐え、清く精神的な豊かさを保つための教えは数多く存在したように思う。だが、豊かな国が何を信じ、行動するかについては誰も知らない。単に政府開発援助(ODA)の総額が世界一だと

誇ってみても、また多額の援助をバラまいてみても、誰も尊敬をしてくれない。これからは、ただ単に開発援助を増額するだけでなく、それにたずさわる担当官を増員し、被援助国の要望と根底にある国民意識を理解する必要がある。また民間援助機関(NGO)に業務委託することも考えられる。しかしそこには、援助というものの明確な目的とその基盤となる国家理念が必要とされる。1990年代には日本が地球社会の一員として賞賛されるような新しい開発援助の提案が求められているのである。そして、それは被援助国が真に自立するための援助でなくてはならない。いま、日本では国の内外を問わず、その豊かさに対応した新しい国家の理念と明確な政策目標が求められている。そこでは日本が地球社会の一員として自立し、積極的な役割を担うことが期待されている。

地域の自立——地域の自立が日本を変える

東京への集中は最も合理的な方法であり、遷都論や分都論はともすれば、片寄った議論になりがちである。世界中の中核都市・東京の経済的な機能を維持しつつ、地域の活性化を模索するのが最善の方法といえよう。

ただし、現状のままでは地域の活性化はあり得ない。私は常々、地域が自立しなければならぬと思っている。中央の政策に盲目的に従い、責任を転嫁するのではなく、住民の民意を反映した地域行政が、中央へ働きかけるようなシステムをつくり上げることが急務である。そのためには税制を改革し、中央と地方の信頼関係を確立しなければならない。現在の細分化された地方自治体の広域合併や、道州制の導入も必要であろう。大切なことは、自らの将来について自主的に決定していこうとい

う自治体の意識であり、自主自尊の自立である。私は、いまこそJCの時代が来た、と確信している。16世紀にあれほど闘争的で冒険心に富んでいた日本人が、19世紀までの間に「従順で自主性に乏しく、常に支配者の指導を求めたがり、上からの命令とあればすべて疑うことなく従うような国民」になってしまった原因を、「江戸幕府の厳しい監視と強力な統制によって維持された2世紀にわたる平和」による、とライシャワー教授は指摘している。すこし寂しいような気がする。民主主義が問われている時代に、自らの権利のみ主張せず、義務を履行する人、自分の周辺の出来事だけでなく、地球規模で起こっている問題について、堂々と意見を開陳できる人のいかに少ないことだろう。いま求められているのは、自ら明快に主張していく人である。

最後に

昭和20年8月6日午前8時15分、エノラ・ゲイ号より投下された原爆の一瞬の閃光により、広島は廃墟となった。そんな廃墟からの復興。「80年は草木も生えない」といわれた広島が、戦後全国で最も成長した都市の一つとなった。平和な日本、豊かな日本、感謝の気持ちで胸が熱くなる。犯してはならないもの、それは無垢な子供の心と人間としての尊厳。決して使ってはならないものは武器。壊してはならないものは自然。1990年代に豊かな日本が決して代償を求めることのない、地球社会の一員として感謝の気持ちで奉仕できることが数多く存在している。

私たち青年は、過去の惰性にとらわれることなく、いまある社会の枠組みを越えて、自らの将来に対して自主的に決定し、大胆に行動していこうではないか。

(要約)

日本青年会議所

- 1 日本JC第39代会頭に藤田公康が就任
日本JCスローガン「時代はJC 自立したひと・まち・ここで日本つくり」
- 1.15 ホルヘ・スンカー JCI会頭来日、日本のメンバーと親睦を深める(18日まで)
- 1 藤田会頭、国土庁の私的機関「首都機能移転問題懇談会」委員に
- 1.25 90年度京都会議が国立京都国際会館で開催
- 1 地球のビジョン作りに参画するJCのスタンスを確認、全国理事長の首長面談が積極化
- 1 しあわせ列島ブロック討議
- 2.19 西村副会頭・王子地球開発室長、JC会館で来日中のアフリカ・トーゴ共和国バゲレ計画大使・ジョンドエ工業大臣と会談
- 2 衆議院選挙にてJC関係者(現役、OB、賛助会員)95名が当選。新内閣にはOBが重要ポストで入閣(外務大臣＝中山太郎、通産大臣＝武藤嘉文、建設大臣＝綿貫民輔)
- 2 地域開発室7委員会が海外ミッションを派遣(西ドイツ・フランス・アメリカ)
- 3 理事会が地区会員大会のあり方を討議、金のかかる式典や懇親会を慎み、広域的政策や課題をテーマとした事業へ移行するよう決議
- 3.4 日ソ交流事前会議をモスクワで開催(8日まで)
- 4.17 第1次KMO訪日団を受け入れ(東京・宮崎)(28日まで)
- 4.18 第3回国際アカデミーが宮崎・広島で開催され、50カ国、94名が参加(24日まで)
- 5.15 APDC使節団、バングラデシュに第1号の簡易井戸を設置
- 5.17 JCIアジア・コンファレンスASPAC'90がチェンマイで開催され、28カ国、4200名が参加(20日まで)
- 5.27 藤田会頭を団長に日本JC42名が訪ソ(31日まで)、モスクワの青年を対象に経営セミナーを開講
- 5 こんな規制いらぬ運動、各地でモデル市民会議開かれる
- 6.1 洋上スクール開校、496名が参加(7日まで)
- 6.3 グローバル・プロジェクト'90が、アメリカ大陸横断(ポートランドからサンパウロまで、延べ3万キロ、8カ国、40都市以上)(15日まで)
- 7 3年ごとの会員意識実態調査を実施
- 7.6 アジア太平洋経済サミット(アベックス'90)が横浜プリンスホテルで開催され、1800名が参加(7日まで)、横浜宣言を採択
- 7.7 TOYP大賞'90表彰式典が横浜プリンスホテルで挙行政され、700名が参加、グランプリにスピードスケートの橋本聖子さん
- 7.19 第2次KMO訪日団を受け入れ(大阪・東京)(20日まで)
- 7.21 青年経済人会議in EXPO'91が初めて大阪で(大阪城ホール、ホテルニューオータニ)開催され、8000名を超える参加者(22日まで)、世界青年サミットが同時開催、日ソ青年共同声明を発表
- 7.23 ちびっ子人形使節団をバルセロナへ派遣(8月2日まで)
- 8.5 第21次北方領土視察団、根室へ派遣
- 10.4 第39回全国会員大会が豊橋で開催され、「ゆゆう人」のテーマのもとに1万8000名を超える参加者(7日まで)、地方分権推進宣言
- 11 開館10周年を迎えたJC会館、改装費5000万円をかけ、新装
- 11 理事会で、「新宣言」の呼称を「JC宣言」と決定
- 11.1 第45回JCI世界会議がプエルトリコのサンファンで開催され、76カ国、3000名が参加(7日まで)、常任副会頭に更家悠介、JCI副会頭に王子英が決定
90年度入会JC＝佐伯(大分)、のど(石川)、総和(茨城)、生駒(奈良)、あきた湖東(秋田)、752JC、6万6430名となる

内外の動き

- 1.11 海部首相、欧州8カ国訪問に出発
- 1.18 89年5月から続いていた中国・北京市の戒厳令、解除
- 1.22 本島長崎市長、天皇の戦争責任発言で、右翼に銃撃され重傷
- 2.18 東京・上野で、東北・上越新幹線のトンネル工事のミスから道路が長さ13メートルにわたって陥没
- ソ連共産党中央委総会、党基本大綱草案を採択、1党独裁体制を放棄
- 2.18 第39回衆議院議員総選挙、自民党安定多数に
- 2.28 第2次海部内閣
電気通信審議会、平成7年度をめどとしたNTT分割案を答申
- 3.11 リトアニア共和国、ソ連邦からの公式の独立宣言を採択
- 3.15 ソ連臨時人民代議員大会で初代大統領にゴルバチョフを選出
- 4.1 国際花と緑の博覧会(花の万博)大阪で開催
中国の李鵬首相、ソ連を訪問
警視庁、千代田ファイナンス前社長を、初のインサイダー取引の容疑で逮捕
第8次選挙制度審議会、「選挙制度及び政治資金制度の改革についての答申」を提出
大蔵省、平成元年度の国際収支の黒字幅前年比30.8%の大幅減少と発表
- 5.24 韓国の盧泰愚大統領が来日、天皇陛下が宮中晩餐会で「不幸な過去」に「痛惜の念を禁じ得ません」と述べられる
ブッシュ大統領、中国に対する最恵国待遇を継続
平成元年に生まれた赤ちゃんは3年連続最低記録を更新、女性の平均出産数も1.57人と史上最低
- 6.10 ヘルシーの大統領に日系2世のアルベルト・フジモリ氏が当選
日米構造会議、最終報告に合意
- 6.29 礼宮様と川嶋紀子様の結婚の儀
- 7.9 第16回サミット、米ヒューストンで開催
景気拡大期間が43カ月に、岩戸景気を抜き、いざなぎ景気に次ぐ戦後2番目の長さになる
NTT株、一時99万6000円まで値を落とす
フィリピン・ルソン島で大地震、死者889人、負傷者3060人、行方不明730人
- 8.2 イラク軍、クウェートに侵攻、ほぼ全土を制圧。国連安保理、イラク軍の即時無条件撤退を要求する決議案を採択
- 8.6 クウェートに侵攻したイラクに対する経済制裁を決定
- 9.30 韓ソの国交樹立
- 10.1 東証株価2万1000円台割れ、4日連続の安値を更新
海部首相、中東を歴訪
国際航業事件で、東京地検、元住友銀行支店長を出資法違反容疑で逮捕
- 10.3 東西両ドイツが統一
- 10.15 ゴルバチョフ大統領にノーベル平和賞
国連平和協力法案廃案に
協和、埼玉銀行が合併
- 11.12 天皇陛下、即位の礼
自民党、小選挙区比例代表並立制導入を中心とする政治改革基本要綱の最終案を了承
- 12.2 TBSの秋山豊寛記者日本人初の宇宙飛行
- 12.7 イラク、全人質の解放を発表
- 12.29 第2次海部内閣発足
東京地検、稲村代議士を脱税で起訴
ソ連のシェワルナゼ外相が辞意



会頭所信

第40代会頭 川島 偉良

岐阜JC 1952年生 88年岐阜理事長 90年副会頭 91年会頭 元・日本ホームिंग(株)副社長 15年逝去

「西暦を横軸にして世界の歴史の中で日本を温故知新してみる」

西暦を横軸にして、温故知新してみる。これが、あなたと一緒に今年始める最初の実践である。そうすることにより、あなたと私は「地球市民」としての共通の概念を持てるはずである。そしてはじめて、地域に、国家に、世界に、創造的変革を提唱できると確信する。そして、「自我作古」である。「自我作古」とは過去の先例、慣習に拘束されることなく、自分自身が歴史の新たな扉を切り開く先人たれ、と説いたという。これからあなたとともに考え、実践していきたいのは、これである。

40周年からの旅立ち……

「創造的変革への挑戦」

ひとつの事業を遂行する時、その目的と手段を明確にして継続していかねばならない。ともすると、数年たった時、その事業が陳腐化されたり足かせになっていることが多いのである。日本JC創立40周年の年に、21世紀の後継者たちのために、創造的に変革していく挑戦者になっていただきたい。それが、この年に生きるわれわれの使命だと考える。

実践1・個人の行動

「素敵な個人主義の時代」

他人が何をしても羨ましく思うことなく、他人の人生も認める「利他の精神」と自らを律する心、それが、私の提唱する「素敵な個人主義」での自立なのである。私の小さな夢は、日本人が一人ひとり真の個人主義を理解して大衆化せずに、それぞれが、一人ひとりの人生を楽しめるような日が早く来ることである。そんな個人が日本という素晴らしい国土で好きな地域でゆったりと暮らせるために、真の民主主義における行政の実現と国民のための開かれた政治の

実現を、JC運動の理念の基本において活動をしていきたいと考えている。

実践2・地域の行動

REGIONAL REVOLUTION 地域主義革命の提唱

地域主義の確立こそが、日本全国金太郎飴的な町づくりから脱皮する方法であると考え。その心と実践について説明しよう。

「町は愛する子供たちへの最大の贈り物」

町には、それぞれの歴史がある。そして、そこには文化と伝統がある。ふと現代人が忘れかけている大自然と人間との戦い、それは、血と汗と尊い人間の犠牲の上に成り立っている、歴史の物語である。

「あなたは自分の町を愛していますか」

その町を訪ねて「この町はどうですか」と聞いた時、その町の人が明るく自慢話を聞かせてくれたなら、旅人はきっと、その町を好きになるに違いない。その子供たちが目を輝かせておじいちゃんから聞いた昔話や、その町の良さを父母の姿を通して話してくれたなら、旅人はきっと、その町に住みたくなるに違いない。いい町とわるい町とは、どれだけ、そこに住む人がその町を語れるかである。

「ILOM1物語運動の提唱」

ビジョンを物語にし、その町に住む人が、町の商品化戦略を掛け算方式で増えさせ続けていく町こそが、これからの地域間に生き残れるだろう。そして、「749通りの物語」が始まり、実践されていけば、日本全体が「顔のある国家」として、世界の中で孤立したり理解されない、というようなことはありえないはずである。地域への権限委譲と、その受け皿の整備。「青年審議会」や「明日の町を考える会」の設置。議会傍聴から始めて陳情・請願・意見書と行政に入り込んでいく。行政の人と一緒に考え悩み、

そして、市民の声を市民アンケートや市民討論会の提言として、市長とも交流を持ちながら進める必要がある。国に弱い行政の性格を認識し、JC議院連盟やそのネットワークを使って、「物語」を日本JCがLOMと一緒に実現することが大事である。

実践3・国の行動

「世界に開かれた顔のある国家創造」

国家JCとしての地方分権の運動は、〈地域主権主義〉の運動と〈国家の世界開放主義〉の運動に分けて、より実践的な創造的変革への挑戦をしていきたい。各省庁の若手官僚との懇談会などを開催し、日本JCの委員会を各省庁に対応させて現実を理解しながら、具体的な政治改革や税制改革を提唱し、国民のコンセンサスを得るための市民公開講演会などを実践していく。そして、心ある政治家・官僚・知事・市長・学者・マスコミの支持者を増やしていく努力が大切である。

また、清潔な選挙や本当の政治を志す議員達が安心して国政に進進できるシステムを、構築する必要がある。そして、優秀な官僚という人材をもっと生かせる、21世紀の省庁システムを構築する必要があると感じる。

実践4・世界開放主義の提唱

(OPEN THE GLOBAL NETWORKING)

地球市民意識の高揚。これこそが、われわれ国家JCとして国へ、またJCIを通じて世界に提唱する、最初の運動であると考え。また、地域においてもこの考えを理解することにより、世界に通用する町づくりの実践ができると確信する。地球市民意識を世界中の人が持つことがワン・ワールドの第一歩と考える。

(要約)

1991

日本青年会議所

- 1 日本JC第40代会頭に川島偉良が就任
日本JCスローガン「素敵な風を あなたから創ろう まちの物語」
JCI会頭にベルギーのレジナルド・ショーマン就任
- 1.20 日本JC国際室国際事業委員会が外務省の招きで来日していた
「中華全国青年連合会訪日団」と国際交流会を開催
日本JC40周年記念映画「15少女漂流記」が始動
日本JCは地球環境問題をテーマにした映画を製作しJCの熱い
メッセージを世界に訴えることになった
- 2.25 川島会頭がソ連のイワン政治局長と会談
ゴルバチョフ大統領の懐刀と世界情勢を語り合う
- 3.10 「15少女漂流記」に出演するオーディション(30,980名応募)で選
ばれた少女たちがJC会館訪問
- 4.20 日ソ友好新時代
ゴルバチョフ大統領訪日を前にソ連報道陣、日本JC訪問。返
還運動の推移・経済援助の問題等、ゴルバチョフ訪日に対する
日本人の関心がどの程度のものか確かめる
- 4.25 湾岸戦争による被災者援助に取り組んでいる湾岸調査救助隊が
ヨルダンのアンマンを中心に行動。難民キャンプの実状をつぶさ
に見てこれからの日本JCが果たす役割の大きさを確信
- 5.16 91年アスパックがセブで開催
マボロ小学校校舎贈呈式やバングラデシュ災害義援金贈呈
- 5.27 日本JCと外国人記者クラブのメンバーの懇親会にて川島会頭が
「次世代を担う日本の若手経済人の考えること」「日本JCの運動
展開」について地球市民活動をアピール
- 6.10 第71回US青年会議所全国大会がミネソタ州ミネアポリス市にて
開催、約2800名の会員が参加
- 7.6 (社)日本青年会議所の5周年TOYP大賞'91「ふるさと地球への
貢献」の授賞式開催。あらゆる分野で地球市民意識を持ち行動し
ている若者10人を選び、その功績と将来性を顕彰し表彰
- 7.20～21 '91青年経済人東京会議、「世界に開かれた顔のある日本の創
造ーリストラ日本」をテーマに開催(東京・新高輪プリンスホテル)
- 7.21 「日本JC 日ソ友好の会」設立総会開催
日本JC・各LOMが培ってきた日ソ交流の経験やノウハウを生か
し、ソ連により広い地球との交流を図っているために設立
- 7.23 日本海サミット開催
日本海を挟んで極東ソ連の交流を深め、政治・経済面まで幅広
い交流の活発化が狙い
- 8.22～24 '91アジア・太平洋経済サミット(APECS'91)、パシフィック横浜で
開催
- 10.3～6 創立40周年記念全国会員大会、東京ドームに3万4000人が集結
全体会議では「地球市民宣言」を採決。1LOM1物語・75LOM
フォーラムなど多彩な催しが開催され史上最大の祭典に!
- 10.4 「アワードセレモニー'91」ではJC活動に対する基本的考え方の
確認、各LOMの活動情報の収集、共有化を基本コンセプトに
審査
'91環境を考える地球市民会議75LOMフォーラムでは全国会員
大会のための大会、感動と共感の大会とするため各LOMが主体
となり「自分たちのため」に積極的に参加できるように企画されたも
ので延べ1万人のメンバーが参加
- 11.2 第46回JCI世界会議がフィンランド・ヘルシンキ市で開催
94年度JCI世界会議が神戸青年会議所に決定

内外の動き

- 1.1 東京の電話の局番が先頭に「3」を加えて4桁に
1.10 岩手靖国訴訟の控訴審で、仙台高裁が公式参
拝・玉ぐし料支出は違憲とする逆転判断
- 1.25 日本政府は湾岸戦争支援策として90億ドルの追加
資金援助協力と自衛隊機派遣を閣議決定
- 1.30 日本と北朝鮮が、国交正常化のための第1回政府
間交渉を平壤で開催
- 2.23 徳仁親王を皇位継承者とする「立太子の礼」が皇
居で執り行なわれる
- 2.25 ワルシャワ条約機構の外相・国防相会議で軍事機
構解体を正式に決定
- 2.26 東海道・山陽新幹線の乗客数が延べ30万人を
突破
- 2.28 湾岸戦争、多国籍軍が戦闘を停止。開戦以来43
日目で湾岸戦争は終結
- 3.9 新都庁舎の落成式
- 3.14 広島市で、建設中の新交通システムの橋げたが道
路に落下して、車の列を直撃して15人が死亡
- 4.1 20歳以上60歳未満(学生を含む)の年金未加入
者を国民年金に加入するよう義務付ける
- 4.23 経団連が、企業活動に関して環境アセスメント(影
響評価)の実施や24項目の行動指針を盛り込んだ
「地球環境憲章」を発表
- 4.24 地価上昇抑制を目的とした地価税法が成立
- 4.26 日本の自衛隊初の海外派遣として、機雷除去を目
的に、ヘルン湾へ掃海艇が出港
- 5.14 滋賀県の信楽高原鉄道の単線区間で、JR西日本
の臨時列車が、対向の信楽高原鉄道の普通列車
と正面衝突、死者42人、重軽傷者478人
- 5.14 横綱千代の富士、引退を発表。1045勝を記録
- 5.18 高速増殖炉の原子炉「もんじゅ」が福井県敦賀市
に完成、試運転を開始
- 5.21 インドのラジブ・ガンジー元首相(Gandhi,Rajiv)
がマドラス近郊で爆弾テロにより暗殺される
- 6.3 雲仙・普賢岳で大規模な火砕流が発生、取材して
いた報道関係者・火山学者たち43人が火砕流に
巻きこまれて焼死
- 6.17 南アフリカが人種登録法を廃止
- 6.19 野村証券が株価急落による大口投資家の損失を補
填していたことが判明。その後日興証券、大和証
券、山一証券の補填も明らかに
- 7.10 エリツインがロシア共和国初代大統領に就任
- 7.23 イトマン事件で、河村前社長ら6人が逮捕
- 8.24 ソ連共産党が崩壊
- 9.28 台風19号のため、青森のりんごが大被害を受け
る。全国で44人が死亡、6人が行方不明となる
- 10.14 ノーベル平和賞に、ミャンマーの反政府運動家の
アウン・サン・スー・チー女史が選ばれる。しかし、
女史は自宅軟禁中
- 10.15 千葉市が12番目の政令指定都市に決定
- 11.5 宮沢喜一内閣が成立
- 12.20 アメリカ最大の玩具チェーンの「トイザラス」1号店
が茨城県に開店
- 12.25 ゴルバチョフ大統領がテレビ演説で辞任を正式に
表明



ちょっと素敵なお時代づくり

第41代会頭 西村 予史男

静岡JC 1953年生 90年静岡理事長 91年法制顧問 92年会頭 現・(株)竹茗堂茶店代表取締役社長

「聞こえませんか、まちの声」

日本青年会議所は、1990年『地方分権』を提唱し、日本全国へ“夢”を語りました。そして1991年『ILOM1物語』を展開し、その“夢”が“ビジョン”となりました。“かたち”は我々の行動によってすぐ得られるところまでできています。

私は、“まちづくり市民財団”の稼働を提唱し、“まちづくりデザイン会議”の設置を提案いたします。

人は、まちを創り、まちは人を育てます。そのまちが、固有の文化を生み、更に文化を育てる人を創ります。まちは、互いに支え合い、競い合って広がっていくのです。

「聞こえませんか、世界の声」

日本が「現在」のように至ったことを悪いとは、決して思いません。むしろ、それは、必然的であったかもしれないと考えます。しかし、明日を見すえたとき、あたかも「借り物」であったような「個人主義のようなもの」から、今こそ、日本の文化の土壌に根づき、日本人の精神的な風土にマッチした「地球市民としての個人主義」を提唱しなければならぬ時期であると考えます。日本人一人ひとりが地球に対する義務と責任を遂行して、はじめて地球市民としての権利が生まれると思います。

自立した地球市民となろうではありませんか。

「聞こえませんか、地球の声」

私達人間は、今まで自然と“秩序ある闘争”を繰り返し、その結果“文明”を生み“文化”を生み、“経済”を發展させて来ました。しかし、近年のめざましい科学技術の発達で、その“秩序ある闘争”に完全に終止符を打とうとし

ています。それは、速度を増し、ついには、自然界の一員である私達の存続、地球の存続まで、問う結果となりました。

地球環境の破壊です。

それは、私には“地球のうめき声”“ふるさとの悲鳴”として聞こえます。

今日、自分の始められるところから一緒に行動をおこしましょう。そして、明日は家族と共に、次の日は、自分の会社で、そしてJCで。地球規模の個人運動として、ライフスタイルの中で取り組めるはず。それが、40周年記念事業である「ふるさと地球運動」の、まず実践なのです。

「聞こえませんか、地球市民の産声」

国家には、国旗があり、国歌があります。会社には、社是・社訓があり、社歌があります。学校には、校訓があり、応援歌があります。家には家訓があり、家紋があります。

このように、私たちが愛し、守ってゆこうとするものには、何か共通の概念があり、それが文章になったり、かたちになったりしているものです。

しかし、私達の“ふるさと地球”には、旗も歌も、もちろん憲章すらありません。私は、地球市民としての自立、地球市民としての道徳心の確立を訴えました。

それは、地球に暮らす市民としての意識に、目覚めてほしいからです。目覚めれば、単なる地球の住民から目的意識をもった市民となります。そして、地球市民が一人、また一人と誕生していけば、地球の共通概念や理念、そしてビジョンが当然必要となってくるのではないのでしょうか。

「聞こえませんか、明日の声」

1990年をもって、“団塊の世代”といわれた人々が全員、青年会議所を卒業されました。テレビっ子世代、ビートルズ世代、ニューファミリー世代と成長してきた過程で、ファッションやライフスタイルだけでなく、社会のすべてに大きな影響力をもってきた人々です。良かれ、悪しかれ、熾烈な受験戦争を巻きおこし、大学では学園紛争が吹き荒れました。とにかく大変なパワーです。

彼らが大学を卒業した後は、無気力、無感動、無関心の世代がキャンパスに溢れました。

そして今、新しい価値観と人生観を持ったメンバーが次々と入会するようになってきた青年会議所も、このままでは同じような問題を生み出してしまう危険性を含んでいます。新世代が何を求めて入会してくるのか、“明日の声”に耳を傾けなければなりません。

個性豊かな、イノベーション型リーダーを養成するためには、私たちが保守的になってはなりません。青年として勇気を持って変革の波を起こし、“明日の声”を素直に聞ける組織をつくらうではありませんか。

人の“こころ”は、ひょっとして地球より大きなものかもしれません。しかし、意識の持ち方によっては、何より小さなものになるかもしれません。

ふるさと、それは一人ひとりの心の中にあるのです。地球をすっぽりと、“こころ”の中に納めてしまう地球市民が、1人でも多くなったら、素敵なお時代が生まれるはず。ちょっと素敵なお時代、それは、地球市民の時代だと思ふのです。

(抜粋)

日本青年会議所

- 1 日本JC第41代会頭に西村予知男が就任
日本JCスローガン「ゆめをかたちにまちづくり 歌おう地球の応援歌」
- 1.23～26 '92年度京都会議開催
西村会頭が高らかに“地球市民時代”の幕開けを宣言
- 1.16 国際協力使節団「タイ・マレーシア」へ出発
- 2.23～29 国境なき奉仕団、インドスタディ・ツアー
あらゆる情報を収集し、それぞれの国情にあった人的支援を行なう
(国境なき奉仕団＝世界の開発途上国及び被災地での人的貢献、物資貢献、技術貢献を目的とする)
- 3.2 西村会頭、活動続く雲仙普賢岳を視察
災害の実態について認識を深め、JCとしての支援方策を探る
- 3.6 東京・経団連ホールにて地球環境フォーラム開催
西村会頭が、地球サミットへの提言を発表
- 4.10～11 東京・日中友好会館ホールにて中国技術研修生、中間報告会開催
- 4.18 「まちづくり応援カー」贈呈式
各地LOMのまちづくり活動に役立てていただきたいと、トヨタ自動車(株)よりワゴン車1台が日本JCに寄贈
- 4.20～26 グローバル・トレーニング・スクール
484名のメンバーが、フィリピンにおいて研修を完遂
- 5.21～24 92年度JCIアジア太平洋会議(ASPAC)開幕
JCI会議史上最大の1万8000余名(海外3000名・国内1万5000名)登録
「地球にハートが生まれる日」をテーマに北九州で開催
- 6.1～6 世界青年環境会議はUNCEDの決議遵守を宣言
地球市民憲章もあわせて採択!(リオ)
- 6.3～14 地球サミット(ブラジル・リオデジャネイロ)
日本JCも公認NGOとして参加。ジャバンデーでは活動報告をするとともにJCIとの共同事業で「世界青年環境会議」を同地で開催
- 7.24 TOYP大賞'92「ふるさと地球運動の実践」
第6回TOYP大賞受賞者は10名・特別賞1名。各々の活動報告にあらゆる分野で希望に燃え、地球市民の一人として素晴らしい活動をしている若者に贈呈
- 7.25～26 92年度青年経済人会議(東京・新高輪プリンスホテル)
「グローバル・スピリットーふみだそう! 自立と貢献への道」をキーワードに青年会議所が各地域から自立した「ひと・まち・くに」へとつくりかえ地球市民としての国際貢献を通して、ちょっと素敵な“ふるさと地球”を創るをテーマで開催
- 7.28～8.9 少女国際使節団(ニュージーランド・オーストラリア)
- 8.1～2 北海道・根室納沙布岬にて、北方四島の住民を招いて第23次北方領土現地視察
- 9.3～10 国境なき奉仕団(8月～3月建設予定)
インドで185カ村の約20村に1校の割合で多目的小学校の建設を開始
- 10.5～8 国づくりデザイン推進会議が北海道地区、防衛庁視察研修
- 10.9 WATER FOR LIFE－命の水－
マニラ首都圏・マンダリオンにあるE・Oドリゲス小学校においてフィリピン・日本両JCの共同事業として設置された井戸の完成を祝う式典が行なわれる
- 10.18 SONGS FOR THE EARTH CONCERT'92
東京・新宿ルミネアクトホールにて「地球の応援歌」コンテストの入賞曲作の23曲が、応募者本人の歌唱及び演奏により披露
- 12.4 ホテルオークラにてJC議員連盟役員予定者、日本JC役員懇親会が催され、OBと現役の枠を超えた交流が広がる

内外の動き

- 1.9 国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)の特別代表に明石康国連事務次長が任命される
- 1.11 大学入試センター試験が始まる
- 1.11 全日本スプリント選手権で、橋本聖子が9年連続総合優勝
- 1.13 南アフリカとの外交関係が復活
- 2.7 EC加盟国が、マーストリヒト条約に正式調印
- 2.16 女子テニスで、アメリカのマルチナ・ナブラチコワが、158勝目のツアー新記録を達成
- 2.19 富士通が、スーパーコンピュータの演算機能を1つにまとめたLSIを世界で初めて開発
- 2.20 NTTが、新電電との競争を促すため、自動車・携帯電話、ポケットベルなどの移動体通信部門を92年夏に分離新設する子会社に移管すると発表
- 2.20 文部省が、2学期から月1回、学校5日制をスタートさせることを決定
- 2.25 中国が、尖閣諸島を中国領と明記した領海法を公布
- 3.14 東海道新幹線「のぞみ」が営業を開始
- 3.26 環境庁が、「絶滅のおそれのある野生動植物の保存法案」をまとめる
- 4.8 ドイツで夫婦別姓が認められる
- 4.25 人気ロック歌手の尾崎豊が泥酔して保護されることが肺水腫で死亡
- 4.29 黒人に暴行した白人警官4人にロサンゼルス郡地裁陪審が無罪評決。これに抗議する黒人らが放火・掠奪を行ない暴動化
- 5.4 ロシア・エリツィン大統領が北方4島から1両年中に軍隊の撤退を表明
- 5.12 運転免許証に「ゴールドカード」の新設
- 6.5 社会党、社会民主連合が欠席のまま投票が行なわれ、PKO法案が衆議院で可決成立
- 7.1 山形新幹線が開業し、東京ー山形間の特急「つばさ」が直通運転を開始
- 8.1 JR山手線の全駅で終日構内禁煙となる
- 8.13 国際保護鳥トキの絶滅が確実に
- 8.18 東証平均株価の終値が大きく反落し、1万4309円41銭となる。バブル景気の終焉
- 10.13 PKO本隊376人がカンボジアに向けて出発
- 10.23 日中国交正常化20周年にあたって、天皇皇后が中国を訪問。天皇が「我が国が中国国民に対し多大の苦難与えた。これは私の深く悲しみとするところ」と述べる
- 11.26 東京佐川急便事件・自民党総裁選時の皇民党の「ほめ殺し」に関連して竹下登元首相の証人喚問
- 12.1 気圧の単位がmb(ミリバール)からhPa(ヘクトパスカル)に。1000mbは1000hPa
- 12.18 予防接種禍集団訴訟で東京高裁が、1家族を除く原告側への国家賠償責任を認め、総額23億1000万円の支払いを命じる判決
- 12.18 韓国大統領選挙が行なわれ、与党民自党の金泳三が金大中を大差で破り当選



輝け！ まちの地球市民

第42代会頭 岡田 伸浩

横浜JC 1953年生 89年横浜理事長 92年副会頭 93年会頭 現・(株)横浜岡田屋代表取締役社長

はじめに——笑顔の運動

笑顔で迎えてくれる友がいる。このまちに、この国に、この星に……素敵なひとがいる。素敵なまちがある。素敵なJC運動がある。

JCは私たちに素晴らしい素晴らしい機会を与えてくれます。より多くの人との出会いは自分を高め、人生を豊かにしてくれます。JC運動は人の心に働きかける運動です。人が感動を覚えたり、感謝の気持ちを持った時、その人の「笑顔」は素敵に輝きます。

私はJCクリードの一節に思いをはせます。

『人生最善の仕事は人類に対する奉仕である』。混迷の時代と言われる現代を解く鍵がここにあります。

「人類に対する奉仕」——私は、JCの永遠のテーマであるこの言葉を、「笑顔をつくる運動」と置き換えてみたいのです。

それぞれのまちに人々の「笑顔」……子供から大人まで、地球上のすべての人々の「笑顔」をつくるために、地球規模で考え・まちで行動し、まちで考え・地球規模で行動する。そして青年らしくさわやかに発言する。

今、この「地球市民」としての運動を、時代が求めています。

ひとを探し ひとを育て ひとから学び ひとをつくる。

全国754のまちで様々な運動が行なわれています。しかし、とすると、事業自体が目的となり、本来の目的を見失いがちになります。

日本JCについても同じことが言えます。

そこで私は、すべての運動や事業に「共通の目的」を置いてみたいと思います。

共通の目的とは「その運動は、その事業は、ひとをつくり、ネットワークを

構築したか」ということです。私は、そこにJCらしさを求めたいと思います。

まちが主役

JCで素晴らしい仲間、素晴らしい運動に出会うことができます。JCは地域の運動が原点。まちが主役です。まちの集合体が地球ならば、一番身近な地球——このまちで私たちが行動を起こさなければ国も世界も変わりません。

大きな地球の問題も、基本的にはまちが主役。こう考えると、JCの、そしてJAYCEE(個人)の役割の重要性を改めて痛感せずにはられません。

まちの元気集団——JCが、まちの人と一緒にそれぞれのまちで、出来ることから始めませんか。

「ふるさと地球」は人類の永遠のテーマです。あえて新しい事業を提唱せず、それぞれのまちの「ふるさと地球」運動をさらに発展させて戴くために、地区やブロックと共に精一杯、応援したいと思います。

それぞれのまちで、それぞれらしい運動に取り組んでいただく一方で、日本JCでは、「地球の絵画・歌・詩」の成果をフォローすると共に、各地の運動を紹介する場づくりに努め、さらに「地球市民」を育成するための教育プログラムを開発したいと思います。

「持続可能な経済発展」をまちで実践するためにも、地球的視野で環境問題に配慮しつつ、まちのデザインを描き、具体的な行動項目を一つひとつ実践していくことこそ大切ではないでしょうか。しかも、JCだけではまちづくりはできません。JCを超えたネットワークづくりが必要です。

日本JCは蓄積された情報をもとに、「まちづくり応援団」に徹し、「役に立つJC」を目指します。

JCIを身近なものに

「JCには国境も民族も宗教もイデオロギーもない。あるのは唯ひとつ、友情のみ。私たちは、その誇りを持ってかつての敵国日本の青年たちを迎えよう……」。1951年、日本JCがJCI(国際青年会議所)に加盟した時のJCI会頭ラモン・デル・ロザリオ元駐日フィリピン大使の「世界友情論」です。

言うまでもなく、JCは日本国内だけの団体ではありません。JCクリードのもと、世界104カ国・41万人の会員一人ひとり(JAYCEE)が会費を出し合って作っている組織JCIに加盟しているから、JCを名乗り、JCマークを旗印にしています。

「地球市民」を育てたり、「地球市民」としての「世界への貢献」や「まちのグローバル化」を実践しようとする時、一番身近な「世界」——JCIをもっと活用し、育てなければ「もったいない」と思います。

NGO元年

民間レベルでの世界との交流がますます重要視され、活発化する中で、広く世界に目を向ける事も重要ですが、あえて、今、私たちはアジアの一員だという事を認識する必要があると思います。まず身近なアジアにおいて、信頼される友達、困った時に助けてくれる仲間としての行動に重点を置くべきではないでしょうか。

世界への貢献もまず足元から……。日本の繁栄の一方で、今、アジアには本当に困っている人たちがいます。「大人になるまで生きていたい」そんなことをつぶやく子供たちに、私たちは何をしてあげられるのでしょうか。

(抜粋)

日本青年会議所

1	日本JC第42代会頭に岡田伸浩が就任
1.21～24	日本JCスローガン「さわやかな汗で笑顔の星づくり 輝けまちの地球市民」 93年度京都会議開催 岡田会頭が「自ら汗する行動」の大切さと「今、わたしたちに何ができるのか?」について真剣に考えてほしいと訴える
2.1～2	岡田会頭、釧路沖地震被災地視察 災害復旧対策に追われる釧路JCメンバーを激励
2.25	地球市民財団発足
3.7～14	リサイクルモデル先進国・ドイツに学べ! リサイクルモデル都市構想委員会が環境問題先進国ドイツの視察を行なう
4.11～17	93年度グローバル・トレーニングスクール フィリピンにて350名の参加者
4.15～20	APDC (アジア太平洋開発協議会)ネパール使節団 日本脳炎ワクチンの供与、現地の衛生・健康管理の実態調査を目的に実施
4.19～27	国境なき奉仕団・ソマリア難民プロジェクト ソマリア難民の緊急援助活動をジブチ共和国で実施
4.20～23	グローバル・フォーラム京都会議'93 国立京都国際会館にて、「価値の転換—地球と人類の未来のために」をテーマにゴルバチョフ元ソ連最高会議議長をはじめとする各国指導者参加のもと開催
4.26	沖縄県石垣島にて、岡田会頭が新空港建設問題に揺れ環境保全か、地域振興かという難問に取り組んでいる八重山JCを激励
4.27～5.2	日本JC・CIS関係委員会、ロシアを視察
5.27～30	ASPAC陽明山開催 中華民国台北市にて、APDC議長に和歌山JC・櫻畑直尚が就任
6.6～13	日本JC・日中関係委員会、訪中ミッション 中国(北京・西安・上海)にて
7.10～19	アジア国際貢献委員会・バツアヌ共和国貢献活動
7.24～25	'93JC東京会議開催 東京新高輪プリンスホテルにて7000名を超えるメンバーが集い、日本JCが地域主権社会実現に向けての行動を提言
7.31～8.1	第24次北方領土現地視察、現地大会 根室、納沙布岬にて北方四島の少年少女びざな訪問団を含め延べ500名が参加
8.17～22	第20回APDCモンゴルミッション モンゴルJCのJCI正式加盟に向けJC啓蒙セミナーを開催し、JC運動の推進を図る
9.29～10.3	第42回日本JC全国会員大会 岡山県で開催されたこの大会は「日本一のおもてなし」に「もったいない」精神が加味され、1万7000名を超える会員が集まり、簡素かつ感動的に行なわれた。褒賞グランプリ—高知JCに!
10.2	第7回TOYP大賞'93 岡山市市民会館にて、グランプリは「小さな行動が大切」を訴える小島あずささんが受賞。初の試みとして一般市民の参加を得た式典として実施された
11.10	日本JC・沖縄地区自衛隊見学
11.21～27	第48回JCI世界会議 香港にて6375名の参加のなか、日本JCは「もったいない運動」をJCIの公認プログラムに承認される 宮崎JC・佐藤嘉信がJCI副会頭に当選

内外の動き

1.1	チェコスロバキア連邦が解体し、チェコ共和国とスロバキア共和国に分離
1.1	12ヵ国、3億5000万人のEC統合市場が発足
1.3	アンゴラで内戦が激化し、100人以上が死亡
1.9	米国第4位のパソコンメーカーのデルコンピュータが、春に日本国内で初めて10万円を切る低価格パソコンを売出すことを発表
1.20	ビル・クリントンがアメリカ第42代大統領に就任
1.21	板橋区の石神井川で、背中に洋弓の矢が刺さったオナガガモのメスが発見される
1.22	アメリカで、中絶規制が撤廃
2.25～26	ニューヨークのマンハッタンにある110階建ての世界貿易センタービルの地下で大規模な爆発が起こり、7人が死亡、600人が負傷
3.27	中国の全国人民代表大会で、楊尚昆の後任の国家主席に江沢民が選出される。これにより江沢民は党・軍・国家のトップを独占
4.12	大阪市内の銀行の両替機や大阪・京都駅の自動券売機などで、ニセ1万円札280枚が見つかる。13日にはさらに213枚が見つかる
4.23	第44回植樹祭に出席のため、天皇・皇后が沖縄を訪問。歴代天皇としては初めての訪沖
5.4	ソマリアでのPKO活動が開始
5.15	日本初のプロサッカーリーグ、Jリーグが開幕。初戦はヴェルディ川崎対横浜マリノス
5.18	アメリカのマイクロソフト社が、パソコン用基本ソフト「Windows3.1」日本語版を発売
5.19	国際航業乗っ取りに絡む株価操作事件で、仕手集団「光進」代表の小谷光治に東京地裁が懲役1年6月、執行猶予3年の判決
5.27	高知県がふるさと創生資金の1億円で制作し6000万円規模のものに作りかえて高知県浦戸城山に展示していた純金製のかつお像が盗まれる
6.4	厚生省の92年人口動態統計が発表され、1年間の離婚が約18万組と過去最高に、1人の女性が産む子供は1.5人と過去最低になっていることが判明
6.9	皇太子と小和田雅子さんの結婚の儀が宮中の賢所で行なわれる
6.18	宮沢内閣不信任案が可決。武村正義ら若手議員11名が離党することを表明し、自民党は分裂
6.23	自民党を離党した44人が新党「新生党」を結成。党首は羽田、代表幹事は小沢一郎
7.12	北海道南西沖地震。22時17分、北海道の奥尻島沖でマグニチュード7.8の大地震。死者202、行方不明29、全壊家屋550
7.16	横浜に、高さ296メートルの「ランドマークタワー」が完成、新宿の東京都庁ビルを抜いて日本一高いビル
7.30	自由民主党の総裁選挙が自民党本部で行なわれ、第16代総裁に河野洋平を選出
8.6	衆議院本会議が開かれ土井たか子社会党元委員長を衆議院議長に選出。初の女性議長
8.9	細川連立内閣が発足
10.2	20年に1度の伊勢神宮の式年遷宮の遷御の儀が行なわれ、御神体・宝物が引っ越す
10.13	細川護熙首相とエリツィン大統領が、日口東京宣言と経済宣言を発表
11.24	アメリカ上院が、銃法規制法案「ブレイディ法案」を可決
12.16	田中角栄元首相が、入院先で、甲状腺機能亢進症に肺炎を併発して没



地球市民が世界を変える

第43代会頭 小原 嘉文

佐賀JC 1954年生 88年佐賀理事長 91年専務 92年副会頭 93年顧問 94年会頭
現・嬉野温泉観光(株)代表取締役社長

はじめに

あなたは、なぜJCに入会しましたか。何をやりたくて入会しましたか。それは実現できましたか。今、JCで何をやっていますか？できない理由は何ですか？

私たちはだれのために、何の目的でJCをやっているのでしょうか。それは、私たちの力でJCが、まちを変え、社会を変え、国家を変え、世界を、地球を変えることができると信じているからにはかなりません。

21世紀はもう目の前です。21世紀をどのような時代にするのか、どんな世界、どんな地球を創造するかは私たちの双肩にかかっています。この大きな変化の中で私たちが考えねばならないこと、行動せねばならぬことは何でしょうか。

地球市民が世界を変える 〈国際貢献〉

今でこそ経済大国といわれる日本ですが、私たちが子供のころはまだ、他国の政府やNGOから様々な形で援助をもらい、助けられていました。それはたった30年ほど前のことです。私たちが他国の人から助けられた経験をもつ日本人の最後の世代になります。そんな体験をもつ世代の日本人として、地球市民としてできること、やらねばならないことはたくさんあります。

日本JCとして本格的に取り組む2年目の国際貢献は、相手の立場に立った、押し付けではなく現地の事情を考慮した、一時的な救援でなく、現地の人々が長期的に自活できるような貢献活動でなければなりません。単に一部の会員だけがやっているのではなく、6万5000人の気持ち、まごころが伝わるようなJCらしい国際貢献を続けましょう。

地球市民が社会を変える 〈環境問題〉

環境問題はJCにとって新しいテーマ

ではなく、長い間私たちは、まちづくりの一環として、川をきれいにする運動やゴミを捨てない運動など様々な形でこの問題に取り組んできました。

この問題は、一企業、一つのまち、一つの国では解決できません。グローバルな解決、取り組みが必要です。JCが先頭にたつて環境問題に取り組むことは、754以上のまちで、6万5000の業種の異なった企業と家庭が一斉に取り組むということであり、社会への影響力や波及効果はたいへん大きいのです。さらに、JCIの組織、全世界に広がるネットワークを生かして、世界中の、38万の企業、家庭が一斉にこの問題に取り組むことは、より大きな効果を生むはずで

3年目を迎える「ふるさと地球運動」では、様々な方法で子供たちに再度、環境問題について真剣に考え、行動してもらいたいと思います。「ふるさと地球運動」が理念であるとするならば、その実践運動は「もったいない運動」です。もったいない運動には全国から大きな反響があり、事例がたくさん集まりました。この二つの運動を車の両輪として環境問題に取り組みたいと思います。

地球市民がまちを変える 〈まちづくり〉

まちづくりについて日本JCがやることは二つあると思います。

その一つは、まちづくりに関する国内外のあらゆる情報、ノウハウを蓄積し、それらの情報をいつでも受発信できるようにする。JC内部はもとより、外部の団体にもこれらの情報が利用できるようにすることです。754LOMの42年間の情報、ノウハウの蓄積はどんな研究所やシンクタンクにも負けない情報量で、これらをきちんと整備すればたいへん役に立つはずで

まちづくりに関する日本JCの二つ目の

役割は、まちづくりを行なってゆく上での様々な障害を取り除くための運動をすることです。

一つの町のJCや市民だけで努力しても、規制や法律の壁を破るのは困難です。そこで全国の会員が、市民と共に、まちづくりを行なってゆく上の障害をなくす運動をしなければなりません。

地球市民がJCを変える 〈JCの自己改革〉

私はJCは、特定の政治、経済、利益団体にかたよらず、常に正面から議論し、多様な青年を巻き込みながら前向きな運動を自らの汗を流して実践する。そして、常に社会に対し創造的な情報を発信できる、そんな新しい日本型の市民運動であるべきで、それを目指して自己改革しなければならないと思います。

家庭や企業や地域社会を大切にしながら、普通の人々が当たり前のことを当たり前にやる、だれでもやれるJCをめざしたいと思います。

今、始めよう。

あらゆる面で今、日本人の、地球市民としての生き方が問われています。21世紀の地球に生きる日本人の生き方、青年のあり方をJC運動を通して創造し発信する、そんな使命を私たちは担っているのです。

地球全体を視野に入れ、グローバルに行動しながらも、私たちの発想、行動の原点はあくまでも自分の家庭、企業、住んでいるまちでなければなりません。なぜならば地球上のすべての人のことを、自分の隣人のことのように思い、地球の裏側の出来事を身近な出来事のように感じ、そして行動する人こそが、地球市民と呼ぶにふさわしいと思うからです。

(抜粋)

1994

日本青年会議所

- 1 日本JC第43代会頭に小原嘉文(佐賀JC)が就任
日本JCスローガン「続けよう発言と行動を 始めよう新しい生き方を
今地球市民が世界を変える」
- 1.1 小原会頭をはじめとする日本JC一行は、ROC新年総会に出席し、
小原会頭は「もったいない運動」をアピール
- 1.16 山本潤副会頭をはじめとする日本JC一行は、香港JC新年総会に
出席し、「MOTTAINAI」、神戸会議をPR
- 1.20～23 94年京都会議が国立京都国際会館にて開催
- 2.2～15 「政治改革関連法」について全国理事長らを対象に緊急プッシュホン
アンケートを実施
- 2.7 小原会頭、第14回「北方領土返還要求全国大会」
- 2.19～26 ジョージ・ラングJCI副会頭(香港JC)日本JCを公式訪問
- 3.2～8 国境なき奉仕団、Bangラディッシュ・スタディツアー
- 3.11～12 日本JCメンバーら75名が、「越谷市エコトピア計画」を視察
- 4.3～7 中国・九州・沖縄グローバルトレーニングスクール(ミャンマー、タイ)
- 4.6～10 北海道・東北・北陸信越グローバルトレーニングスクール(タイ)
- 4.24～28 関東・東海グローバルトレーニングスクール(フィリピン)
- 4.25～29 近畿・四国グローバルトレーニングスクール(フィリピン)
- 5.2～10 CIS・北方領土関係委員会43名は、ロシア共和国・モスクワ及び
カザフスタン共和国を訪問し、ロシアJCのJCI正式加盟を支援、また
カザフスタンJC設立に向け支援
- 5.3～7 森下国際室長を団長とする日本JC一行(総勢31名)は、エリアA
(アフリカ・中近東地域)会議に出席。海外初の「もったいないセミナー」、
「ジャパンホスピタリティールーム」を開催
- 5.3～8 APDC関係委員会がネパールを訪問。カトマンズ周辺の村において
診療活動を行なう
- 5.11～14 富澤善和顧問を名誉団長、森下矢須之国際室長を団長に34名
が、JCIエリアC(北米・ラテンアメリカ地域)会議に出席。また
「もったいないセミナー」の開催や「MOTTAINAI MOVEMENT」、
神戸世界会議をPR
- 5.26～29 JCI-ASPACがシンガポールにて開催。日本JCメンバー2792人
が参加。96年度ASPAC開催地が金沢に決定
- 6 全国一斉「もったいない」強化月間
- 6.12～14 小原会頭をはじめ、海外研修生交流委員会40名が中国・北京を訪問
- 6.21～25 JCIプロジェクト委員会38名がエリアD(ヨーロッパ地域)会議に参加
し、「もったいない運動」をアピール
- 6.23～28 小原会頭をはじめとする日本JCメンバーと全国の北方領土返還要求
運動関係者らが色丹・択捉を訪問
- 7.23～24 青年経済人会議、JC東京会議として行なわれてきた会議が、今年
は「サマーコンファレンス」と名称を変えて、東京にて開催
- 8.2～6 APDC関係委員会はAPDC事務総長、ジョージ・ラングJCI副会
頭らとともに、ベトナムを訪問
- 9.7～10 JCI初のビジネス会議、バリ・ビジネスコンファレンス開催
- 9.28～10.2 日本JC第43回全国会員大会が盛岡で開催
スローガン「地球のやさしさに出会うときー地球市民が銀河を翔ける」
94年度アワードセレモニーにて、古川JCがグランプリ獲得
94年度TOYP大賞式典にて、石川准さんがグランプリ獲得
- 10.7～9 国際交流委員会は、フィリピンJC全国大会で行なわれた「WATER
FOR LIFE PROJECT'94」記念式典に参加
- 11.13～19 第49回JCI世界会議が神戸で開催され、参加者は過去最高の1万
5500名、日本から14年ぶり王子英(横浜JC)がJCI会頭に当選、
JCI副会頭には樋口信治(大阪JC)が当選

内外の動き

- 1.16 Jリーグでヴェルディ川崎が初代チャンピオン
- 1.24 郵便料金が値上げ。はがきは50円、封書は80円
- 2.1 酒税法改正で、地ビールが実質解禁
- 3.3 クリントン大統領が、スーパー301条を復活する大統領令に署名。対日圧力が狙い
- 3.8 米屋の店頭から国産米が消え、消費者が長蛇の列を作る。コメパニックが拡大
- 3.13 1934年に撮られたイギリスのネス湖の怪物ネッシーの写真が、実はオモチャの潜水艦を使った悪ふざけであったことが判明
- 3.21 グリコ・森永事件の発端となったグリコの江崎勝久社長誘拐事件が午前0時に時効成立
- 4.25 細川内閣が総辞職し、首班指名で羽田孜が第80代内閣総理大臣に就任
- 4.26 南アフリカ共和国で、黒人が初めて参政権を行使する国政と各州議会の選挙
- 5.6 イギリスとフランスを結ぶ全長50キロの英仏海峡トンネル(ユーロトンネル)が開通
- 5.9 南アフリカ共和国でネルソン・マンデラが大統領に就任。白人支配に終止符
- 5.10 改正道路交通法により、優良運転者は金色で5年間有効、初心者は黄緑色の免許証
- 5.30 子供に「悪魔」と命名して問題となっていた両親が、「亜駆」と届け出て受理される
- 6.13 クリントン大統領就任後初の国賓として天皇・皇后がホワイトハウスを訪問
- 6.21 ニューヨークの外国為替市場で円高ドル安が急速に進み、戦後初めて一時100円台を突破して1ドル99円90銭を記録
- 6.25 社会党との政策協議が決裂したため羽田首相が記者会見を行ない、羽田内閣は総辞職
- 6.27 松本サリン事件。深夜、松本市北深志の住宅街に謎の刺激性の毒ガスが襲い、7人が死亡し52人が病院に運ばれる
- 6.30 重要閣僚を自民党が占めた村山連立内閣が発足
- 7.1 全国6500箇所の「派出所」の正式名が「交番」に
- 7.20 村山富市首相が、衆議院本会議の代表質問に対する答弁で、自衛隊は合憲であることを明言
- 8.3 猛暑が続き、東京で13時33分、東京としては観測史上最高の39.1度を記録
- 8.5 福徳銀行神戸支店前で現金輸送車が2人組の男に襲われ、5億4100万円入りのジュラルミンケースが奪われる
- 8.8 ラビン首相がイスラエル首脳として初めてヨルダンを訪問
- 8.31 「お立ち台」で一世を風靡したディスコ「ジュリアナ東京」が入場者の激減から閉店
- 8.31 英国の北アイルランド統治に反対してきたカトリック系過激派組織IRAが9月1日午前0時で無期限の停戦を宣言
- 9.20 ミャンマーの軍事政権が、アウン・サン・スーチー女史と初めて対話
- 10.31 若者たちの憧れの「湘南」ナンバーが誕生



新しい地球市民の時代の始まり

第44代会頭 山本 潤

伊丹JC 1955年生 90年伊丹理事長 92年専務 93～94年副会頭 95年会頭
現・(株)日本発破技研代表取締役社長

時は、第二次世界大戦の終戦から50年を迎え、世界が旧秩序の見直しの中で激動しているように、日本にも例にもれず巨大な変革の波に洗われています。そのような動きをいち早く感じ取った日本JCは、1989年に「地球市民の時代」を理念として掲げ、JCIに呼び掛けて、その理念は1992年以降の「JCI最重点テーマ」として採択されました。

あなたのまち、住みやすいですか

この問題に長年取り組んできた私たちJCメンバーは、行政と協力し合いながら「まちづくりの能動者」として、地域社会の発展向上に貢献しなければなりません。地元企業の比率の比較的高い団体としての特徴を生かし、まちの歴史や文化を大切にしながら「輝く伝統の継承者」としての機能を発揮していかねばなりません。

さらに、もうひとつの特徴である全国的・世界的ネットワークをもつ団体として、他の地域や海外の成功事例を活用しながら、地域の発展により一層寄与していきましょう。海のむこうのまちとの「姉妹JCとの交流」の推進・拡大なども、まちづくりのソフトウェアの充実のために役に立つに違いありません。

「まちづくり市民財団」および既存の「JC総研」をより充実整備し、LOMのまちづくりソフトウェアの整理、補完、情報の提供活動を推進していく必要があります。さらに、「まちの応援なんでも相談室」などをいっそう活用し、いきいきとした活力あるまちづくりを実践していこうではありませんか。

緑の地球、大切にしていますか

JCの40周年事業で始まった「ふるさと地球運動」も5年目に入り、家庭、職場、地域において多少なりとも成果をあ

げています。さらに日本JCのみならず、JCIを通じて世界に呼びかけた「グローバル・MOTTAINAI・ムーブメント」も、資源の有効利用を考える地球的な運動として広がっています。

この運動を今後も発展・定着させるよう、JC全体でさらに積極的、かつきめ細やかに展開していこうではありませんか。そして、対外的な活動としては、「グローバル・MOTTAINAI・ムーブメント」の普及以外に、中国や東南アジアなどにおける経済発展に伴う公害問題解決への協力に努力していくつもりです。

世界・人類の未来、考えていますか

JCらしい国際協力を実行性あるものにしていくために、物資や金銭を送るだけといった単純な人道的な発想ではなしに、なぜ、途上国は悪い条件におかれるようになったのか、なぜ、発展できずに苦しんでいるのか、という歴史的な背景を考えていくことも忘れてはなりません。発展を妨げている原因を取り除くための援助については協力を惜しむことなく、現実的立場で取り組んでいく必要があります。援助の大原則は、途上国の人々の自助努力に基づく発展を日本が側面から支援していくことなのです。

この他、これまでも多数のJCメンバーの参加をみている「グローバル・トレーニング・スクール」をより多様化し、ソフトを充実して現場実践発言主義による「国際協力体験者の輪」を全国に広げていきたいと思えます。JCメンバーが地元に戻った際に、額に汗して覚えた個人的体験をLOMメンバーや地域の人々に伝えることになれば、難しい理論を説く以上に「地球市民」意識高揚への手助けになるはずだからです。

「地球市民ジュニア」、育んでいますか

「地球市民ジュニア」として時代をになう子供たちに、何としても教育の機会を与え、彼らの知性・感性・創造力などの才能を開花させねばなりません。国内においては、「子供達に夢を託す運動」を展開するとともに、世界に対しては貧困や虐待にあえぐ子供の悲鳴を地球上からなくすべく、「もったいない」運動を世界中に広げようではありませんか。

JCの自己改革、すすんでいますか

ところで、活力あるJC運動を続けるためには、「自らが入会当時の志を忘れ、マンネリ化した参加者にとどまらないかどうか」もチェックしてみる必要があります。いわゆる「JCくささ」に埋没するのではなく、広い視野と現状改革の勇気を持って常に前向きなJC活動を心掛けましょう。

既存のまちづくり、環境、国際協力、国際などの項目ごとの活動をタテ糸とすると、自己改革運動はこれらすべてにかかるヨコ糸の役割を果たします。そして、タテ糸とヨコ糸をしっかりと編みあげることにより、運動体としてのJCはさらに強化されるのです。JCの自己改革という険しい道程は、まだ始まったばかりです。激しく時代が変化するなか、「JCだけが昔と同じまま」では社会から取り残されて陳腐化してしまいます。設立当初と変わらない、「明るい豊かな社会」実現に燃える青年によって組織されるJCとして、常に時代をリードする能動的姿勢であり続けたいと思えます。自己改革2年目の取り組みにあたっては、21世紀を先取りする真に能動的な運動体となるよう、この運動をさらに加速させようではありませんか。

(抜粋)

日本青年会議所

1	日本JC第44代会頭に山本潤(伊丹JC)が就任 日本JCスローガン「育もう新しい地球市民 進めよう自己改革思 いやる心が未来を創る」
1.2～3	山本会頭ら日本JC一行はROCJCの新年総会に出席
1.17	山本会頭以下、日本JC役員は震災による災害復旧を優先する という観点から、「京都会議」の日程を史上初めて延期し、2月に開 催することを決定 日本JCは、阪神・淡路大震災被災地を支援するために、以下 の事業を行なうことを決定 人的支援活動、「阪神鐘の鳴る丘」プロジェクト、「Buy Made in 阪神」運動
2.7	富澤副会頭、「北方領土返還要求大会」で北方領土早期返還 要求をアピール
2.17～19	95年京都会議を国立京都国際会館にて開催
2.19	「日本青年会議所共済会」設立総会を開催
3.2～8	95年度JCI日本担当副会頭、テレサ・マーガレット・アルベルト (マレーシアJC)が被災地のメンバーの慰問を主たる目的に、日 本を公式訪問
3.2～7	東北地区グローバルトレーニングスクールがタイにて実施される
3.19～25	JCI-SPC(戦略策定委員会)、宮崎にて開催
3.22～26	近畿地区グローバルトレーニングスクール(ネパール)
4	北海道・関東・北陸信越・東海・中国・九州・沖縄各地区の グローバルトレーニングスクールが実施される(北海道-タイ・関 東-フィリピン・北陸信越-タイ・東海-タイ・中国-タイ・九 州-ベトナム・沖縄-ベトナム)
4.3	大震災被災によりダメージを受けた子どもたちの回復への手助けを し、健全な育成をはかる「鐘の鳴る丘」プロジェクトの一環として、 巡回バス「鐘の鳴る丘」号がスタート
4.22	756番目のLOM、射水青年会議所誕生
5.3	エリアC会議、パラグアイの首都アスンシオンにて開催
5.17～20	エリアA会議、セネガルのダカールにて開催
5.10～16	95ロシア・カザフスタンミッション
5.14～18	四国地区グローバルトレーニングスクールがベトナムにて実施される
5.22～27	富澤副会頭を団長に、APDCベトナム使節団派遣
5.31～6.4	JCI-ASPAC、濟州島にて開催
7.22～23	'95「サマーコンファレンス」が横浜国際会議場にて開催され、約 7800名のメンバーが参加
7.29～30	日本JCと根室市の主催による第26次「北方領土現地大会」が開 催
8.2	全国商工会議所青年部連合会(全青連)会長と日本JC会頭との 対談が実現
8.19～22	アメリカ・ニューヨークで開催された国連創設50周年記念会議 GALSに日本JC会頭以下86名が参加
10.3～7	日本JC第44回全国会員大会が大阪府堺にて開催され、1万 6500人のメンバーが参加 テーマ「新しい地球市民が未来を創る-自立と共生をめざして-」 95年度アワードセレモニーにて、小矢部JCがグランプリ獲得 95年度TOYP大賞受賞記念式典にて、國井修さんがグランプリ 獲得
11.5～11	JCI世界会議がイギリスのグラスゴーに約4200名の登録者を得て 開催 96年度JCI副会頭に新田八朗(富山JC)が当選

内外の動き

1.17	淡路島を震源とするマグニチュード7.2の直下型地 震が起こり、「阪神・淡路大震災」と呼ばれ戦後 最大の自然災害となる
1.19	ロシア軍が、チェチェン共和国の首都グロズヌイの 大統領官邸を占拠し、市内をほぼ制圧
2.6	イギリスのダイアナ妃が福祉活動のため来日
2.13	野茂英雄投手が、ロサンゼルス・ドジャースと契約 し、入団発表
2.22	ロッキード事件丸紅ルートの上告審で、有罪判決を 下し、田中元首相の5億円の取崩が確定し、発覚 19年で裁判が終結
2.23	ダイエーが、輸入ビールを1缶100円で売り出す
3.20	地下鉄サリン事件。乗客らのうちこの日だけで6人 が死亡し5500人以上が重軽傷
4.1	すべての国公立学校が、土曜日を休みとする週5日 制を月2回実施する
4.9	統一地方選挙が行なわれ、東京都知事は青島幸 男、大阪府知事は横山ノックが当選
4.10	全国の高速度道路の料金が一律7.2%値上がり
4.10	東京外国為替市場が1ドル=80円15銭を記録
4.10	韓国の前民主党総裁の金大中が、拉致事件以来 22年ぶりに来日
5.7	フランス大統領選挙の決戦投票が行なわれ、シラ クが当選
5.16	麻原彰晃代表(松本智津夫)が、殺人と殺人未 遂容疑で逮捕され、警視庁に移送
5.31	青島都知事が世界都市博覧会について、最終的 に公約通り中止することを決断
7.1	簡易型携帯電話(PHS)のサービスを首都圏と北 海道の主要都市で開始
7.1	製造物責任法(PL法)が施行
7.23	第17回参議院議員選挙。投票率は国政選挙最 低の44%
7.24	日教組が、日の丸・君が代について反対しないこと などの路線転換を決定
7.30	ロシア側とチェチェン側の間で、停戦協定を調印
8.5	ハノイで、ベトナムとアメリカの国交正常化の調印式
8.15	日本武道館で全国戦没者追悼式が天皇・皇后列 席のもとに行なわれる
8.24	アメリカでマイクロソフト社のWindows95が発売
9.5	フランスが国際世論を無視してムルロア環礁で核 実験を行なう
9.28	NTTが、1つの県で1つに限っていた回線網の接 続点を事実上開放することを決定
9.28	イスラエルのラビン首相とPLOのアラファト議長が ホワイトハウスで自治拡大協定書に調印
9.29	伊豆半島東方沖で群発地震が活発化し、この日だ けで有感地震5回を含む1091回の地震を観測
10.22	国連の50周年記念総会で、各国首脳が演説。 村山首相は核実験停止を強く訴える
11.4	イスラエルのラビン首相が、極右ユダヤ人の学生 に銃撃されて死亡
11.15	APEC(アジア太平洋経済協力会議)大阪会議が 開幕
11.22	録音されていたジョン・レノンの歌声を使って新しく レコーディングしたCDが全国一斉に発売
11.23	パソコンソフトWindows95の日本語版が全国一斉 に発売
12.15	文部省が、いじめ問題に関連して緊急に全国の教育 長を招集して「どんなことがあっても絶対に死んではい けないことを十分に教えること」を徹底するよう指導



新人間社会の創造

第45代会頭 檜畑 直尚

和歌山JC 1957年生 89年和歌山理事長 95年副会頭 96年会頭 現・(株)南北取締役会長

新人間社会の創造

「地球市民の時代」は、JCIが定めた1992年から1996年までの最重点テーマです。1996年は最終年度となりますが、このテーマの持つ価値観は、今もって色あせることはありません。今後も、社会的変化により、視点を変えることはあっても、さらに理解をふかめ行動に移していくべきでしょう。

新人間社会の創造とは、そんな「地球市民の時代」というドラマの一章であり、より良い社会の創造をめざす人間の物語りです。

「たすけあい」のあるまちづくり

コミュニティということばがあります。日本語で言えば、生活共同体とでも訳すのでしょうか。それは、助けあい、励ましあい、教えあい、支えあうことのできる単位であり、肌のあたたかさを感じ合うことができるもの。今回の阪神・淡路大震災では、隣近所の住人どうしの助け合いが初期救急活動にどれほど有効か、そして避難所内の不安で不便な共同生活では、励ましあい、教えあい、支えあう人間関係がどれほど重要なかを教えてくれました。

子どもが、おとなになっても、住み続けたいというまち、また、帰ってきて良かったというまち。いまの住民が住み続けたいというまち。あるいは移り住みたいというまち。これは他のまちにはない、まちの絆と個性ある文化が鍵です。

ともあれ、JCの「こんな規則いらない運動」や「しあわせ列島推進運動」など規制緩和や地方分権・地域主権への取り組みは、行政手続き法や地方分権推進法の立法化でようやく現実化への第一歩を踏みだしました。まちの裁量権が増すのです。私たちのまちにつ

いて、私たちのJCができることが確実に増すということでもあります。そこでは、JCだからこそできる、過去にとらわれない自由な発想や、実践的な行動と経験がきつと役に立つはずで

す。まちで生活し、まちを愛し、まちづくりを学び、未来を信じ行動する仲間がいる私たちだからこそ、住民本位のまちづくりに導くことができるのです。

国際協力は「おたがいさま」のところで

1992年から始まったグローバル・トレーニング・スクールは、日本の国際協力の裾野を広げるために力を尽くしてきました。そして、より高度な技術を伴った実践NGOである、国境なき奉仕団の活動も年々充実してきています。このように、私たちJCは、今後も「地球市民」として、熱い人間愛と地域を超えた隣人愛を育み、組織力を生かしていきましょう。一個の人間としてできることを、まちなり国境、宗教、民族、信条を超え、さりげない「おたがいさま」の気持ちをもって、地球規模で実践していきましょう。

ひとづくりは、田畑を耕すがごとく

まちの文化をつくるのは、まちのひとです。

まちで生活しているひとが、田畑を耕すように地道に、根気よく、まちへの理解を深め、郷土愛、人類愛や地球への愛を育む土壌、すなわち、まちの精神性をつくりあげ、自分たちの未来をささえる「ひと」という収穫を得るのです。

日本JCは、ブロックを中心に研修を進めます。これは地域の特性を生かしやすいからにほかなりません。年々多様化する社会と変化に合わせた新プロ

グラム開発、特に経営プログラムなどの充実をはかり、インストラクターの養成にひき続き努力をしていきます。

新しい世界に飛び込む勇氣

1996年は、JCIアスパックが日本の金沢で、JCI世界会議が隣国のプサンで開催されます。ここでは、ミニ国家としてたくさんのNOMが集まります。人類愛と明るい未来を信じ、汗して行動する、私たちの仲間が集まるのです。これを単なるNOM間の行動に終わらせることなくLOMにとって、そして一人ひとりのJCメンバーにとって、新しい絆を発見できる良い機会としてとらえていただきたいと思います。

世界との絆をすっぱりとところにおさめたとき、そこに地球市民の時代が始まるのです。

ともに生きる

企業、まち、家庭、そして個人にできることはたくさんあります。しかし、持続可能な経済発展という観点からも理解できるように、現在の経済・社会システムを極端に減速させることには無理があります。私たちにできること、それは「ふるさと地球」、「地球市民」や「もったいない」の運動で手に入れた共生のこころを胸に、私たちの生活基盤である社会・経済システムに、環境保全という「価値」を加えることです。そして、廃棄物が資源として再活用される「リサイクル社会」実現のために、協力をしていただきたいのです。

日本JCは実践のヒントとなるメニューをそろえ、みんなでともに実践していきます。地球との絆を回復するために、いま、できることから始めましょう。

(抜粋)

日本青年会議所

1	日本JC第45代会頭に榎畑直尚(和歌山JC)が就任 日本JCスローガン「絆を生かし たすけあい 創ろう愛ある 新人間社会」
1.18～21	96年京都会議が国立京都国際会館で開催
2.22	2002サッカーワールドカップ開催国決定100日前カウントダウン ボード除幕式で榎畑会頭日本招致に全面支援を表明
4.4～5	日本JC出向者対象に「Buy Made in 阪神」の一環として、また 中間地点での方向性の確認という意図で「神戸会議」開催 (2100名参加)
5.12～18	モスクワにおいてCISミッションを実施。32名が参加し、ロシア JCの活性化を支援
5.23～26	'96ASPAC金沢、「バランスのとれた未来への発展」をテーマに 開催
6.18～24	第27次北方領土現地大会・北方四島交流訪問が根室市にお いて開催 翌日より榎畑会頭を団長として13名が国後島を訪問
7.22～27	JCI会頭トーマス・クリアが来日、各地LOMを公式訪問
7.27～28	横浜においてサマーコンファレンスが開催される。橋本首相に市 民が主役の「NPO支援セクター」制度を提言
7.28	日本JCホームページ誕生
9.11～14	パリにてユネスコ創立50周年GALS(グローバル・アフェアーズ・ リーダーシップサミット)に参加 日本JCより32名が参加
9.12～15	日本JC、ROC(台湾)全国大会に榎畑会頭の親書を携え参加
9.20	'96TOYP大賞授賞式が開催される。大賞にはAMD(アジア 医師連絡協議会)のメンバーとして数々の災害、難民に対しての 緊急救援医療、長期保健衛生活動を精力的に行なっている鎌 田裕十郎さんが受賞
10.7～9	日本JC、防衛政策懇話会と合同で九州地区の部隊を見学
10.1～5	第45回全国会員大会長野大会が開催(1万5000名参加)、 テーマ「改革の源流は我にありー共生の心で創る新人間社会」
10	第41回衆院総選挙で現役会員議員25名に
10	上尾、浦和、大宮、与野4LOM統合で埼玉中央JC誕生 橋本・伊都、観音寺、大泉名称変更、それぞれ伊都、みと よ、おおうかへ
10.17～20	第7回中国技術研修生終了報告会及び第8回中国技術研修 生受け入れ発足式報告開催
11.9～15	第51回JCI世界会議、韓国釜山にて開催(7000名参加、う ち日本2130名)榎畑会頭、JCI副会頭に選出

内外の動き

1.1	大手スーパー各社が全国で元日営業を実施
1.11	衆議院本会議で橋本龍太郎を第82代総理大臣 に指名
1.30	住専の処理案をめぐる国会の本格論戦がスタート
2.7	この春に高校を卒業する就職希望者のうち内定し た人は81.6%
3.19	NTT、DDIなどの長距離電話料金が値下げ
3.29	エイズ被害訴訟で、東京と大阪の原告と国の間で 正式に和解が成立
5.4	文部省の諮問機関の中教審が、全ての小中学校 にインターネットを取入れることを提言
5.7	麦芽の率を65%から24%に引き下げた節税ビールの 新製品が発表
5.20	台湾で、李登輝総統の就任式
5.31	サッカーの2002年ワールドカップが、日本と韓国 の共同開催で行なわれることが決定
6.14	政府、北朝鮮に対して600万ドルの支援を人道援 助の目的に限って行うことを閣議決定
7.12	チャールズ皇太子とダイアナ妃が離婚に正式合意
7.29	橋本首相が靖国神社に首相就任後初めて参拝し、 「内閣総理大臣」と記帳
8.19	日本貿易振興会(ジェトロ)が、1995年の世界 貿易は前年に比べて19.5%増の4兆9954億ドル になったことを発表
9.17	ドジャースの野茂英雄投手が、無安打無得点試合 (ノーヒット・ノーラン)を達成
9.21	自民党が、現在22ある中央省庁を再編し、11省 庁に半減する行政改革の最終案をまとめる
9.25	IMFが、世界経済見通しで、「日本経済は景気回 復過程に入った」と分析
9.27	アフガニスタンの首都カブールを攻撃していた反政府 勢力タリバンが、政府軍を駆逐し、カブールを制圧
10.21	日本が国連安保理の非常任理事国に当選
11.25	橋本内閣の支持率が53%と判明
12.17	ヘルシーの日本大使公邸占拠事件
12.27	電子メールに乗って感染するマクロウィルスの新型 が日本で初めて発見される



小さなデモクラシーが未来をひらく

第46代会頭 村岡 兼幸

由利本荘JC 1957年生 90年由利本荘理事長 95年専務 96年副会頭 97年会頭
現・村岡建設工業(株)代表取締役社長

はじめに

イギリスの思想家J・Sミルは、個人個人が自分の意見を臆さず述べるのが何より大切だと考え、「自由論(On Liberty)」の中で、「もし一人をのぞく全人類が同じ意見だとしても、その一人を沈黙させることが不当なのは、その一人が権力をもったとして、全人類を沈黙させるのが不当なのと同じである。正しいこと、事実、異なった意見のぶつかりあいによってのみ姿をあらわす」と述べました。

個の尊重、個の自立、自己責任、議論の徹底、つまり個と個が互いに認めあい、個と個とが互いに作用しあうことによってよりよい社会はつくられる。このミルの思想に私の考える小さなデモクラシーの精神があり、新しい時代の扉を開く鍵があると私は信じます。

「意識改革」と「システムの変革」

小さなデモクラシー運動とは、意識を変えるだけで出来るものではなく、また制度やシステムの変革でこと足れりというものでもありません。「意識改革」と「システムの変革」が相互に影響しあいながら両者がスパイラル状にその質をあげてゆくことこそが、私たちがめざす新人間社会創造へのシナリオそのものであり、小さなデモクラシー運動の原理ともいえます。その「システムの変革」とはまさに地域主権型社会の創造です。

「小さなデモクラシー運動」とは個人の、LOM、地域の、国家の、新人間社会の創造へ向けた「意識改革」の運動であり、新人間社会実現への「システムの変革」を目指す運動の総称なのです。

小さなデモクラシーが信頼を環^{つな}ぐ

真のまちづくりとは、行政まかせで

はなく、そこに住む人々が、そこで生活する人々や企業が、自分たちの生活の中から出発し、自分自身で意見を出し、実践していくべきものなのです。これまでの、市民参加の議論は、行政というしっかりとしたものがあって、それに対する参加・参画という意味合いが強かったように思います。今後、超高齢社会を間近に控えて、家族による「たすけあい」が、社会的な「たすけあい」へ発展し、コミュニティが信頼の環で結ばれたとき、「市民の、市民による、市民のための社会づくり」が始まります。

市民参加とは、市民が本来の内発性・自発性というボランティアな意思によって、力を分担することです。けっして市民が行政主導のまちづくりに参加することではありません。市民・行政が対等の立場で、まちづくりに参加することではありません。市民・行政が対等の立場で、まちづくりの協働の領域をつくり、それぞれが役割を担い、住みよい地域づくりを実践していくことなのです。「行政主導・住民参加のまちづくり」から「住民主導・行政参加のまちづくり」へがこれからのまちづくりです。

そして、たすけあいのあるまちづくりとは、その住民一人ひとりの少しずつの善意や行為を大切に、大きな力とするような信頼の環をつくり育てていく運動なのです。

小さなデモクラシーが地球市民のこころを環ぐ

今、私たちは地域のコミュニティだけでなく、世界の人々との新しいコミュニティの可能性を実感しています。それは、ベルリンの壁をも崩壊させた世界的な通信インフラの発達という、革命的な技術進歩のせいかもしれません。地域の壁どころか国境さえも越えた、

個人の自由なコミュニティが世界を形づくる時代になりました。そんな時代に必要なものこそ、互いの歴史や文化を理解しあって社会を築き上げようとする、「地球市民意識」です。

私たちが次代に残すべきものは、地球市民意識によって世界の人々が信頼の下に協力し合うことに幸せを見いだせる、地球規模のデモクラシーの精神にのっとった社会です。それはとりもなおさず、子供たちの多様な個性を生き生きとのばすことのできる、すべての人々に等しくチャンスのある社会であると言ひ換えることができるでしょう。

今この時代において大切なことは、「開発」の意味を、単に自然を切り開き経済を発展させることという発想から、未来の子供達を含む世界中のすべての人々、そして人類を含むすべての生命のための地球益という発想に転換することです。

終わりに ～心に小さなデモクラシー～

JCの自己改革は私たちの行動に、運動の本質とその目的について問いかけます。

そしてそこに発見したのは、社会を構成する私たち一人ひとりの意識が価値観を確立し、未来を創造するということでした。

社会のために何かをしたいと思う意識が行動を起こす、そんな一人ひとりの「小さなデモクラシー」の息づく運動にこそ、私たち青年会議所運動の原点があったのです。

いつの世も、新しい時代の扉を開くのは、青年の英知と勇気と情熱です。確かな歴史観にたった私たちの心に灯る小さなデモクラシーひとつひとつから、新しい社会の創造が始まるでしょう。

(抜粋)

1997

日本青年会議所

1	日本JC第46代会頭に村岡兼幸(由利本荘JC)が就任 日本JCスローガン「おこせ! 小さなデモクラシーの嵐」
1.18~21	96年京都会議が国立京都国際会館で開催
1.21	村岡会頭、橋本首相と会見、行革推進・地域主権について提言する
2	NPOとJCの「第1回情報交流交歓会」
3.15	第2回フランス技術研修生受け入れ発足式開催
4.26	中国技術研修生中間報告会
5.22~25	'97ASPACパタヤ開催(4000名以上参加)
7.25	'97TOYP大賞授賞式開催される。大賞にはプライマリヘルスケア専門家としてラオス政府から表彰を受けるなど医療活動を通しての国際貢献の実績が高く評価された小川寿美子さんが受賞
7.26~27	サマーコンファレンス開催(8500名以上の登録)、テーマ「とどけ! 地域主権ー小さなデモクラシーの旋風にのせてー」
9.24~28	第45回全国会員大会熊本大会開催(1万5000名参加)、テーマ「元気のマグマは環がっとなる!」
10.9	第8回中国技術研修生終了報告会及び第9回中国技術研修生受け入れ発足式報告開催
10.11	韓国・太田で行なわれた韓国青年会議所の全国大会で初めて日本のブースを設置
10	糸魚川JC、奴奈川JCに名称変更。燕JCと三条JC解散し、燕三条JC新設
10.18	村岡会頭、「JCトーク」に出演
10.24	マスコミ各社論説委員と次年度日本JC役員との懇談会開催
11.5	39番目の部会としてアミューズメント部会の認証伝達式
11.16~21	第51回JCI世界会議がハワイ・ホノルルで開催され(5200名参加、うち日本1550名)、松本耕作(金沢JC)、西尾長幸(札幌JC)が日本JCより初めて2人JCI副会頭に選出される 最優秀NOM賞に日本JCが、最優秀VP賞に樺畑JCIVPが選出される 姉妹JC締結、金沢JCとドイツ・フライブルグJC、新湊JCとシンガポール・オーキッドJC、宇都宮JCとアメリカ・ホノルルチャイニーズJC

内外の動き

1.16	ロシアのタンカーの重油流出事故で、三国町沖で座礁したタンカーからの重油を抜き取る作業が本格化
2.17	橋本龍太郎首相と大田昌秀沖縄県知事の会談が行なわれ、大田知事が「5.15メモ」の全面開示を求める
2.19	オレンジ共済組合事件で、東京地検特捜部が、参議院議員の友部達夫を詐欺罪で東京地裁に起訴
3.22	東京ー秋田間が乗り換えなしで3時間49分に
3.28	名古屋市港区のバンダイロジパル名古屋営業所で、たまごっち144個が盗難
4.1	消費税が5%に引き上げ
4.11	沖縄米軍用地の暫定使用を認める駐留軍用地特別措置法が、衆議院本会議で9割の圧倒的多数で可決
4.29	化学兵器禁止条約が発効する。ロシアは未加盟
5.14	NATOとロシアが、冷戦後の両者の協力関係を定める「基本文書」の内容で合意
5.20	参議院が創設50周年
5.27	神戸市で、小学生の切断された頭部が市立の中学校の正門前に置かれているのが見つかる
6.5	与党3党が提案した「市民活動促進法案」(NPO法案)が可決
6.17	臓器移植法が可決、成立
7.1	香港が中国に155年ぶりの返還
7.25	東京ディズニーランドの入園者が、1983年4月のオープン以来、2億人を突破
8.31	ダイアナ元皇太子妃の乗っていた乗用車が激突し、ダイアナは出血多量のため病院で死亡
10.1	証券総合口座解禁
10.1	酒税法が改正され、ウイスキーが減税で値下がりし、焼酎が増税で値上がり
10.27	ニューヨーク株式市場が、東南アジアの経済不安定が引き金となって大暴落。10年前の「ブラックマンデー」を上回る
11.22	山一証券が資金繰りの行き詰りから自主再建を断念し、大蔵省に自主廃業申請の検討
12.20	伊丹十三が、東京都港区麻布台のマンションから飛び降り自殺



心のスタンダードが明日をつくる

第47代会頭 新田 八朗

富山JC 1958年生 92年富山理事長 96年JCI副会頭 97年副会頭 98年会頭
現・富山県知事

心のスタンダードを循環させよう

「われわれは、単なる富める社会、すなわち愚者の楽園のごときものの実現ではなく、高い倫理と厳しい社会的規範にささえられた、国際性のある平和社会を実現しなければならない」

かつて遠山直道先輩（1965年度日本JC会頭、故人）が会頭就任にあたりおっしゃったこの言葉を思い起こすとき、私たちは現在の繁栄を手放して喜ぶ訳にはいかないことを悟るでしょう。バブルの中で浮かれ、またその後遺症に苦しむ日本経済、昨今の金融機関のスキャンダルを例に引くまでもなく、日本はいつの間にか30年以上も前に遠山先輩が看破され警鐘を鳴らされた「愚者の楽園型社会」に陥りつつあるのかもしれない。

経済行為のみならず、一人ひとりの様々な営みがこの社会を形成しているのだとすれば、私たちは今、一人ひとりの行動原理となる「心のスタンダード」を確立しなければならないときだと考えます。平和の実現を願える心、人間を尊重できる心、真実と公平を守れる心、善悪のけじめを守れる心、自立できる心、共存共栄ができる心、自らを律することができる心、公共のことを自分のことと思える心、もったいないと思える心……あまりにあたりまえのことなのかもしれません。しかし、このあたりまえの「心のスタンダード」を一人ひとりが内に宿したとき、そこに永遠の強さが生まれ、新たな夢を持つことができます。まず、私たちJCがこの強さを獲得し、実践することが、全国3500万人の同世代の若者にも勇気を与えるのです。そして、コア世代の私たちが輝くことが、やがて日本を輝かせ、日本の明日をつくることにつながるのだと信じています。

このような「心のスタンダード」の循環をつくりだすために、1997年度に推

進した「小さなデモクラシー運動」の具現化ともいえる、「心のスタンダード」プログラムの開発に取り組みたいと考えます。それは次代を担う子供たち—地球市民ジュニア—にも受け入れられる様な普遍妥当性のあるものでなければならず、世界に向けて発信できるものになりたいと考えます。とても高いハードルを越えなければならないのかもしれませんが、これを私たちJCの使命と捉え、やり遂げたいと思います。

私たちは、先人たちが培ってきた素晴らしい日本の価値観にもとづいた「心のスタンダード」を確立したうえで、アジア的価値をも十分に理解し、それらを調和させることができるような、大きな心を持つ存在でありたいと思います。また、日米パートナーシップ時代の中で、日本は主体性をもって「人・情報・金・もの」を循環させ得る存在でありたいと思います。

「心のスタンダード」で 起業家新時代

1996年度の全国会員実態調査によると、私たち会員の81%はそれぞれの所属企業の代表者・取締役または管理職であり、所属企業の96%が中小企業です。このデータから、JCは中小企業経営者あるいは経営者予備軍が過半を占める団体であることが確認できます。

日本の産業が発展し、雇用を創出してきた歴史の中で、私たち中小企業が担ってきた役割は大きいものでした。中小企業のがんばりが日本経済の成長を支えてきたと言っても過言ではないでしょう。

しかし、最近その中小企業の活力が全般に低下してきています。大企業に比べて景気回復の流れに乗るのが遅れている企業がかなりあるといえるでしょう。また、大企業のリストラの余波を受けている企業もあるようです。さらに、

中小企業の数自体が減っているのです。この6年間、企業の「廃業率」が「開業率」を上回っており、その差は広がる傾向にあります。

こういう状況の中、大企業の国際競争力強化の目的や、行財政改革の進展の影響で、近い将来にかなりの雇用が失われることが予測されています。この失業を吸収する唯一の解決策は、ニュービジネスを開発し、小企業を起こしていくことしかありません。ここにおいて、私たちJCが貢献できることは数多くあると思います。

真に発展できるニュービジネスが求められる今、私たちは「心のスタンダード」を確立し、新しい起業家の時代を創造していく存在でありたいと思います。

コア世代として

「心のスタンダード」を確立しようというのは、辛抱強さが必要なテーマなのかもしれません。それは、歴史・伝統・地域の特色をふまえたうえで、将来に通じる社会のルール、ひいては地球社会のルールを考えるということなのです。これは、単に自由であるということではなく、自己を規制しようということにもなります。

しかし、避けたり先のばしにしたりすることはできないテーマであると考えています。「心のスタンダード」の確立は私たちJCだけで行なうのではなく、同世代の若者たちとともに力を合わせて推進したいと思います。このことは私たちの次の世代である子供たち—地球市民ジュニア—にとっても極めて重要なことだと信じます。

私たち、3500万人のコア世代が「心のスタンダード」を内に宿したとき、「愚者の楽園型社会」は、明るく豊かでより良い地球社会—新人間社会—に変わり始めるのです。

(抜粋)

日本青年会議所

- 1 日本JC第47代会頭に新田八朗(富山JC)が就任
日本JCスローガン「確立しよう『心のスタンダード』! 行動しよう
コア世代!!」
- 1.22～25 97年京都会議が国立京都国際会館にて開催
「心のスタンダード」の確立にむけ、1万人のメンバーが集まる
- 2.10 JCI会頭ベトリ・ニスカネン(フィンランド)が来日、日本JC役員と
親しく懇談する
- 3.25 新田会頭、フォーリー米大使と会談。大使、会談の中でNPO
法案の問題点について日本JCと同様の認識を示す
- 4 「日米地球市民会議 パート1」アメリカにて開催
日本とアメリカの21世紀型パートナーシップを求めて、新田会
頭、サイデル米JC会頭が「ヒューストン宣言」を宣言
- 5.8 日本JCと日本NPOセンターの共催により、「最新NPO法セミ
ナー～必見! NPOのそこが知りたい～」が開催される。行政から
も47都道府県のNPO担当者全員が参加という画期的事態に。
JCのNPOへの取り組みの先行度が改めて強調された
- 5.28 '98ASPAC マカオ大会が開催される(登録者3642名中、日本
JC2340名)
- 7.25～26 サマーコンファレンス開催(9200名以上の登録)、テーマ「立ち
あがれ! 市民の「歴史」が始まる!～「心のスタンダード」を胸にい
ま、行動の時!～」
- 7.26 99年度日本JC会頭に松山政司(福岡JC)、佐藤章治(仙台
JC)の両名が立候補、20年ぶりの会頭選挙となり、松山政司
(福岡JC)が99年度会頭予定者に選出される
- 8.1～2 第29次北方領土返還運動現地大会が開催される。新田会頭
は、同運動を地球市民運動ととらえ、問題解決の日まで返還運
動を継続する決意を表明
- 8.8 全国一斉に「地球市民の日」が開催される。参加者は10万人を
超え、各地の会場はTV会議システムでインタラクティブに結ば
れ、リアルタイムのコミュニケーションが図られた。NHKなど各マ
スコミでも大きく取り上げられ、8月8日は「地球市民の日」という
認識が大きく広まった。また同日、TOYP大賞授賞式が行なわ
れ、大賞には駒ヶ根JC推薦の半田好男さんが選ばれた
- 9.3 茨城ブロック鹿島JC・神栖JC・波崎JCが合併し、「かしま
JC」が誕生
- 9.23～27 第47回全国会員大会が徳島で開催される。初の女性実行委
員長が誕生した。当初の予想を超える1万5000人以上の登録
があり、市内は始まって以来という大渋滞となった
従来、独立された会場で行なわれていた「褒賞アワードセレモ
ニー」が今回は式典の中に組み込まれた。グランプリは矢板JC
(栃木)の「高原山トライアスロンin矢板」
- 12 JCプレス12月号において、新田会頭から10・22写真週刊誌
事件についての緊急報告があった。写真報道と逮捕理由は別
であると釈明。逮捕された会員3名と副議長1名の4名が退会と
いう異常事態に

内外の動き

- 1.30 2兆円の特別減税法が成立
- 1.31 韓国が公務員の5万人削減を発表
- 2.16 金融機関に公的資金を投入する金融安定化2法が
成立
- 2.22 冬季オリンピック長野大会が閉会。日本は金5個を
含む計10個のメダルを獲得
- 2.25 韓国で、金大中大統領の就任式
- 2.27 NTTの番号案内「104」の料金値上げが認可
- 3.3 NPOを支援するための「特定非営利活動促進法
案」が、参院労働・社会政策委員会で全会一致
で可決
- 3.9 日の丸と君が代のある厳粛な入学式と卒業式を行
ないたいとする内田達雄校長と生徒の自主性に基
づいた行事をしたいとする生徒の対立が続いていた
埼玉県立所沢高校の卒業式。卒業生徒420人の
うち約400人が欠席
- 4.5 10年の歳月と5000億円の巨費を投じて建設され
た明石海峡大橋(3911メートル)が開通
- 5.5 社民党の伊藤茂幹事長が、この国会中に閣外協
力を解消し与党を離脱する方針を自民党側に伝える
- 5.12 スポーツ新興投票(サッカーくじ)法が成立
- 5.21 インドネシアのスハルト大統領が辞任し、後任にハ
ビビ副大統領が就任。32年間の独裁体制に幕
- 5.25 天皇・皇后が27年ぶりにイギリスを訪問
- 5.28 パキスタンが、地下核実験
- 6.8 小淵恵三外相が朝鮮半島エネルギー開発機構
(KEDO)が進めている朝鮮民主主義人民共和
国への軽水炉型原発の費用分担について、100
億ドル拠出することを公式に表明
- 6.17 マイクロソフトがウィンドウズ98の製品発表会を東
京国際フォーラムで開催
- 6.17 急速な円安ドル高にプレーキをかけるため、日米の
通貨当局が協調介入にふみきる。この結果、前日
より一気に6円高の円高
- 7.13 橋本龍太郎首相が、参院選の敗北の責任により
正式に自民党総裁を辞任することを表明
- 7.19 コンボ自治州で、「コンボ解放軍(KLA)」が前日
未明からセルビア治安部隊と激しく戦闘
- 7.25 和歌山毒入りカレー事件。64人が病院に運ばれ、
翌日までに砒素中毒で4人が死亡
- 7.30 衆議院と参議院で首班指名が行なわれ、小淵恵
三が総理大臣に
- 8.5 川崎公害訴訟(2～4次)の判決公判が開かれ、
排ガス公害は国・公団に責任があるとして総額1億
4900万円の賠償を命じる
- 8.29 iMacの日本国内販売が開始
- 9.2 最高裁が、参院定数格差について格差4.97倍は
合憲と判断
- 10.1 東京証券取引所の取引が、ニューヨーク株式相場
の急落を受けて続落し、バブル崩壊後の最安値の
1万3112円を記録
- 11.5 大手電機メーカーのボーナス回答が一斉に示される
が、これまでで最も低い水準
- 11.10 65歳以上、臨時給付金を受けている人、15歳未
満の子供に対して1人あたり2万円の商品券を支給
することで合意
- 11.11 大阪府の横山ノック知事が、大阪府の赤字転落を
宣言
- 12.12 政府が、日本債券信用銀行に対して特別公的管
理を発動すること方針を通告



日本は動く

第48代会頭 松山 政司

福岡JC 1959年生 96年福岡理事長 98年副会頭 99年会頭 現・参議院議員

西暦1999年、1000年代の最後となる年。政治、経済、マスコミ報道など、さまざまな場面で21世紀という言葉が飛び交い、その幕開けはもうすぐそこに迫っています。ただ単に時間の流れの通過点でしかないのに、なぜ、これほどまでに21世紀がとりざたされるのでしょうか。おそらく、私たちを取り巻く環境が、山積する問題が、そして構造的な変化が、ぎりぎりのところまできているからではないでしょうか。今、発想の大転換と新たな動きを開始することがどうしても必要なのです。

現状の問題は数多くあり、一朝一夕では解決できないことばかりです。とりわけ、サステナブル(持続可能な)というキーワードが各国・各界で重要視され始めていますが、この言葉は私たち人間すべての、中・長期的な大命題として、事の重大さを示唆するとともに未来の子どもたちに対する責任のあり方を問いただしています。

一人の大人として、 心に目を向ければ、教育は動く

教育は、子どもたちにとって権利であり、大人たちの義務です。それは、私たち大人一人ひとりが、子どもたちの先生になったつもりで考え、接し、何かを伝えていく姿勢をもつことから始められます。たとえば、自分の仕事を通じてのことでも、趣味や特技のことでも、体験してきたことでも、先生になって伝えることができるはず。まず、JCのメンバーが率先して地域教育の場で先生になるべきです。それは結果的に自分自身の成長にもつながります。またJC運動の一環として、そのコミュニティごとに「地域の先生づくり」を実施することも可能です。

実践の第一歩を始めてこそ、 地域主権は動く

地域主権型社会の良いところは、税

金の使い方などを、私たちの生活の場により近いところで決定できることです。もちろん、そのチェックも行ないやすくなるし、私たちの意見も反映させやすくなるはず。しかし、それに伴って他人まかせにしない、自立した地域住民の自己責任が不可欠になり、地域住民の責任として行政に対するチェック機能としてのオンブズマン的な取り組みや、アカウントビリティの充実が重要になってきます。

型にはまらないまちづくりには、マニュアルや設計図はありません。しかし、そのためのシミュレーションやソフト開発など、私たちJCがいっしょになって取り組めることも数多くあるはず。です。

一人ひとりの新しい 生きがいをとって、NPOは動く

この数年来、JCが取り組んできたいわゆるNPO法(特定非営利活動促進法)が98年3月に成立しました。NPOは、私たち市民が自分の暮らしや地域の問題をなんとかしようとしたときに、いろいろな人たちが持っている得意なことや思いをつないで、それらの人たちを地域社会で活かしていくのにとっても有効な仕組みです。また、非営利ということで、お金ではない心の豊かさを、関わっている人たち自身で感じることが出来ます。それというのも、NPOは行政の下請けや人から命令されてやっているのではなく、自分から進んで、独自に行動していける組織だからであり、それゆえに行政や企業と対等なパートナーシップを発揮できます。このパートナーシップを活かしながら、PFI(プライベート・ファイナンス・イニシアチブ)など、地域運営の様々な展開を提案していくことも可能です。

地球益を優先した 地球市民活動で、世界は動く

国際化が進展している産業や経済システムのなかでは、その国際基準という

観点から我が国では「グローバル・スタンダード」がキーワードになってきました。しかし、私たちJCでは、このグローバル・スタンダードという言葉を経済システムの分野だけで考えるのではなく、『地球益』という地球存続を最優先に考えたこれからの暮らし方、生き方の原理原則としてとらえてきました。その『地球益』を私たちにとって身近なものにする実践運動を今すぐ開始したいと考えているのです。さまざまな国際会議などの場でも、この思いを「もったいない運動」とあわせて提言し、訴えていくことが実践として望まれることです。また、次世代を担う地球市民ジュニアの育成に向けて『地球益』の考え方を育む実践などにも取り組んでいきたいと考えています。

750LOMそれぞれの決意から、 JCは動く

日本のJCは、今、750のLOMが全国各地で活動しています。そのメンバーは約6万人にのぼり、JCの卒業生は、経済界や政界でも数多くの人たちが活躍しています。国会議員や地方議員にも、たくさんの先輩や現役メンバーがいます。私たちはこの資産を再認識し、最大限に活用しない手はありません。また、ここ数年来JCシンクネットというかたちで成熟させようとしている問題解決型ネットワークの形成と有効活用も、さらに推進していくべきです。そして、日本JCはこのような資産を、人づくりにおいても、人づくりから生まれるまちづくりにおいても、フルに活用できる態勢を実現することが課題であると考えています。

日本全国750のLOMが、それぞれ自らの方針を明確にし、日本JCは、その750の決意をしっかりと受け止めて、その実現のためのさまざまなバックアップをすることが、果たすべき役割であると考えています。

(抜粋)

1999

日本青年会議所

- 1 日本JC第48代会頭に松山政司(福岡JC)が就任
日本JCスローガン「地球は動く 日本は動く 今こそ動こう
われら地球市民」
- 1.21～24 1999年京都会議を国立京都国際会館にて開催
- 3.14 松山会頭、土屋埼玉県知事と会談
JCのダイオキシン問題への取り組みについて提言
- 4.2～4 日韓新時代に先駆け「日韓ジュニアサッカーフェスティバル」が
開催
日本全国からジュニアチーム10チームが参加
- 5.9～16 日口新時代の民間交流促進をめざして「ロシア・ウズベキミッシ
ョン」が開催される。ロシアとウズベキスタンの2つのミッションに分
かれ、日口新時代に向けての積極的な交流を図る。松山会頭
を団長とするロシアミッションでは、斎藤斗志二氏(衆議院議員
／84年度日本JC会頭)も名誉団長して参加
- 5.20 松山会頭、小淵首相と会見
ロシア訪問の報告を兼ね斎藤氏と首相官邸を訪問
- 6.17～20 第49回ASPACバリ大会が「Creating The Future in Bali」を
テーマに開催
- 7.24～25 横浜においてサマーコンファレンス99が「動き出した日本 市民
が主役の新時代!」をテーマに開催
JCメンバー9000名以上、市民400名超が参加
- 7.24 '99TOYP大賞授賞式がサマーコンファレンスにおいて開催
グランプリはNGO「難民を助ける会」メンバーとしてコソボ紛争に
も赴き、援助の空白地帯となっていたセルビア系難民の支援等
を行なった、長 有紀枝さんが受賞
- 8.8 横浜国際総合競技場を舞台に、日本JC主催により「地球市民
の日」フェスティバルが開催
- 8.28 トルコ大震災に緊急支援調査団を派遣(8月17日午前3時1分
に発生マグニチュード7.4)。松山会頭が出来る限りの協力を
約束
- 9.29 中国・北京市において、中国政府が外国人に贈る最高の栄
誉賞である「友誼賞」の授賞式が行なわれ、日本JC「日中友好
の会」名誉会長であり、日本JC第34代会頭を務めた野津喬氏
(岡山JCOB)が受賞
- 10.6～9 開会式に常陸宮様ご夫妻をお迎えして、第48回全国会員大会
「山形大会」が【動く。「山の向こうのもう一つの日本」をめざして
—爽やかな感動で創り出す持続可能な地球社会—】をテーマに
開催
アワードセレモニーにおいて、褒賞グランプリは川口JC「川口
共生プログラム(3Kプログラム)」が受賞
- 11.4 松山会頭、亀井自民党政調会長と会見
中小企業国会に向け緊急提言書を手渡す
- 11.6～13 第54回JCI世界会議がフランス・コートダジュールのカヌで
開催
アワードセレモニーにおいて松山会頭が「最優秀NOM会頭賞」
を受賞
稲数則光(東京JC)がJCI副会頭に選出される

内外の動き

- 1.1 欧州連合(EU)は1日からの欧州通貨統合で導入
する単一通貨ユーロと各国通貨の交換レートを決定
- 3.1 臓器移植法制定後、初の移植臓器移植法に基づ
く国内初の脳死者からの臓器移植を実施
- 3.2 チャイルドシート着用義務化と自動車走行中の携帯
電話などの使用禁止を盛り込んだ改正案が閣議決定
- 6.25 日産自動車本場で、資本提携した仏ルノーのカル
ロス・ゴーン前副社長らルノー出身の幹部3人を取
締役に選任
- 6.27 山陽新幹線でトンネル壁落下、小倉—博多間にあ
る福岡県久山町の福岡トンネルを走行中、トンネル
側壁のコンクリートがはがれて列車に衝突し、新幹
線の屋根やパンタグラフが大破
- 7.1 海上自衛隊の護衛艦が停泊中に実弾2発を陸地に
発射し、その事実を上部機関に隠していた問題で、
防衛庁は海自16人の処分を発表
- 7.23 ボーイング747型ジャンボ機がハイジャックされ機長
が包丁で刺されて死亡。国内のハイジャック事件
で、死者が出たのは初めて
- 8.9 日の丸を国旗、君が代を国歌とする国旗・国歌法
は9日の参院本会議で賛成多数で可決、成立
- 8.17 トルコ西部でマグニチュード(M)6.8の強い地震
- 9.21 台湾中部でマグニチュード(M)7.6の強い地震
- 9.30 茨城県東海村の原発施設で臨界事故。半径10キ
ロ以内の住民約31万人に屋内待避を呼びかける
- 10.18 裁判官による職業蔑視発言が波紋



若くはつらつとした日本へ、 「力の源」の創造

第49代会頭 上島 一泰

大阪JC 1961年生 97年大阪理事長 99年副会頭 00年会頭 IBAO(株)代表取締役社長

情熱溢れる創造への挑戦…… 「人間力開発」の視点を

私たちのまちづくりのビジョンは市民が自ら参加し、地域社会の中で自己実現をめざしたくなるような「まちづくり」でなければなりません。それは、市民一人ひとりの生活や夢の多様性を実現し、許容していく新しい受け皿としての「まちづくり」を実践することにほかなりません。

2000年代のJC運動の新たな中軸に置かなければならないのは、まさに逞しい人間の創造、つまり人間力開発(Human Development)だと考えます。

「たのもしい人間」づくり

私たちは本年度、一人ひとりの実践が地域を動かし、日本を動かせる勇気を得ています。親として、企業人として、市民として「たのもしい人間」づくりのチャレンジでもあります。今後は、「地域の先生づくり」運動をさらに推進し、幅広く展開していくことにより、学校教育と地域社会の連携を促進させ、個性豊かで創造的で、社会性の大切さを認識した子供たちを育む運動にしていきたいと思ひます。

また、昨年、8月8日を「地球市民の日」とする運動も提唱しています。人を愛し、まちを愛し、地球を愛する心を育てようという運動です。自分のまちのどんな文化を継承し、どんなふるさとを創りあげていきたいのか、子供たちの視点で未来ビジョンを考えるワークショップを開催していきます。そしてこれからは、地域社会において、自立と創造を促す「ジュニアアチーブメント」、グローバルな連携の精神を育む「地球市民ジュニアづくり」、さらに新たな公共心を育てる「子どもたちのまちづくり

協議会」などの新しいプロジェクトも積極的に展開していきます。

「終(つひ)の住みか」の創造

あなたは自分のまちを愛していますか？ このまちで一生暮らしていきたいと思ひていますか。自分たちの住む地域、コミュニティを愛する心を形にできれば、「終(つひ)の住みか」と呼べるまちになっているはずですよ。

「まちづくり」の基本は、市民・企業・行政が共に信頼し合うパートナーシップをもとに、市民も自らの責任において地域づくりを主体的に行なっていくことにあります。全国の750LOMがそれぞれのまちを「終の住みか」とする「まちづくり」運動を共に盛り上げていきたいと思ひます。

例えば、全国で地元の里山の地図をつくらうという活動もスタートしました。市民・企業・行政が協力し合せて地域の里山のフィールド調査をし、消え去ろうとしている雑木林、田んぼ、畑、小川など、その地域の良き風景や人々の心に残る雰囲気や次の世代に残していこうという「終の住みか」づくりです。

新たな連携がつくる

「若くはつらつとした日本」

2001年から導入される1府12省庁の機能を、国に先駆けて、各地区・各ブロックに取り入れて横断的な行政のモデル作りに挑戦します。これまでの産業廃棄物によるダイオキシン問題や教育問題をはじめ、今後課題となる公的介護保険やグローカリズムなど、地域やブロックの枠を超えて意見交換を行ないながら、情報や知恵を共有して取り組んでいくことが大切です。さらにそれぞれの個人や地域から寄せられた政策を立案し・提言し、さらに行動していく「シンクネット」といった新連携のあり方が求められています。

ニューミレニアムに向かう かけがえのない地球

グローバリゼーションとは、世界と共に生きるために、市場経済システムを通じて、世界の共通ルールを数多く受け入れることです。今、日本はこの世界の波を受動的に受け止め、対策に追われています。JCの良いところは、今日の対策に追われるのではなく、明日を良くするにはどうしたら良いか、時代に先駆けた政策を立案し、自ら実践していくことです。

2000年11月には、札幌JC主管のJCI世界会議が開催されます。「地球益」を基軸とし、時代を逞しく創造するために連携する青年の役割を明確にする絶好の機会ととらえ、地域社会や国家のあり方についても学び、また自らも新しい発想やアイデアを発信していきたいと思ひます。さらに2002年仙台ASPACの誘致も成功させ、JCIにおいても日本JCの取り組みが、かけがえのない地球を存続させる運動のきっかけにしていきたいと思ひます。

「JCという主語」で話そう

JC運動は、次代に生きる子どもたちのため、私たちの生活基盤である地域社会のため、日本人としての誇りを守るため、そして地球社会の平和と安寧を維持するための社会開発運動です。10年、5年、いや1年周期で変化する激動の時代だとはいえ、人間の心は不易です。JCメンバーは「自立」「創造」「連携」という力強いエンジンを持って、どんな困難をも克服して前進する「社会起業家」として、自らを信じ、誇りを持って、ニューミレニアムの時代に新しい道を切り開いていこうではありませんか。

(抜粋)

2000

日本青年会議所

1	日本JC第49代会頭に上島一泰(大阪JC)が就任 日本JCスローガン「若くはつらつとした日本へ エトバスノイエス 新しい事を始めよう!!」
1.20～23	2000年京都会議が、【ニューミレニアムへの挑戦、「～つなご う! 夢と友情のネットワーク～」】をテーマに国立京都国際会館で 開催
2.4	日本JC会館に中曽根文部大臣はじめ文部省幹部12名を迎え て日本JCとの懇親を兼ねた意見交換会が開催
2.7	我が国のJC運動の創始者、三輪善兵衛先輩逝去
4.16	沖縄において、「九州・沖縄青年サミット」「九州・沖縄シンポジ ウム」が「21世紀の世界と日本・九州・沖縄」をテーマに開催
5.27～30	第50回ASPC高雄大会が“Attitude Determines Altitude”を テーマに開催
7.22～23	横浜においてサマーコンファレンス2000が、【「創造的破壊」へ の挑戦 ～よみがえれ! 誇りと活力。今我々が「若くはつらつと した日本」を創る】をテーマに開催
7.22～25	沖縄においてJC-G 8サミット(8カ国のNOM会頭)「2000青 年会議所G 8サミットミーティングイン沖縄」が開催
7.13～8.6	山形市蔵王温泉ルーセント高見屋において、第13回「JCI国際 アカデミー」が開催
10.5～8	第49回全国会員大会福山大会が【集え! 力の源よ 創ろう! 新世紀の潮流を -若くはつらつとした日本へ-】をテーマに開催 「2000年代運動指針」採択される アワードセレモニーにおいて、褒賞グランプリは大曲JCが受賞
10.1	北海道・根室市において、「北方領土返還要求国民集会 IN NEMURO」が開催
11.6～11	第55回JCI世界会議、札幌で開催 大会テーマ【Spirit of Collaboration 「共創の心」】 アワードセレモニーにおいて日本青年会議所が「最優秀NOM 賞」、上島会頭が「最優秀NOM会頭賞」等、多数の賞を受賞

内外の動き

2.6	大阪府知事職で、初の女性知事が誕生
3.8	営団地下鉄中目黒で電車脱線、衝突し、4人死亡
3.31	有珠山が23年ぶりの噴火
4.2	小淵恵三首相、体調の不調を訴えて東京都内の 病院に緊急入院
5.3	佐賀発福岡・天神行き西鉄定期高速バスが、福 岡県太宰府市の九州自動車を走行中に、刃物 を持った若い男に乗っ取られる。車内で女性が刺さ れ死亡
6.13	南北朝鮮、初の首脳会談が開かれる。北朝鮮首 脳が異例の歓待姿勢を示したことで、和解と協力 への道を開けるかどうか注目される
6.16	皇太后様ご逝去
6.19	ナスダックジャパンが取引開始
7.12	大手百貨店のそごうが民事再生法を申請。負債総 額は1兆7000億円
7.12	雪印乳業大阪工場の集団食中毒事件で、全国 20カ所(大阪工場を除く)で自主的に操業停止に すると発表
7.18	三菱自動車がリコールを隠蔽、運輸省が立ち入り 検査
7.19	1958年の1万円札以来、42年ぶりの新額面紙 幣となる2000円を発行
7.26	ニューヨーク行きのコンコルド、パリ郊外で離陸直 後に墜落
9.15	オーストラリアのシドニーで、オリンピックが開幕
10.6	鳥取県西部を震源とする地震が起きる。震度6強
10.22	宮城県築館町の上高森(かみたかもり)遺跡で、 調査団長である東北旧石器文化研究所の藤村新 一副理事長の発掘捏造が発覚
11.8	米大統領選、フロリダ州接戦で異例の決着持ちこし
11.8	日本赤軍の重信容疑者が国内で逮捕
11.20	内閣不信任決議案を採決する衆院本会議直前で、 加藤派と山崎派が賛成方針を転換、本会議の欠 席を決めたため、不信任案は否決



2001年JCクロニクル

第50代会頭 土屋 龍一郎

長野JC 1961年生 98年長野理事長 00年副会頭 01年会頭 現・(有)長野外国語センター代表取締役社長

50周年の日本JC

2001年、社団法人日本青年会議所は創立から50年を迎えます。私を取り組む改革は、過去を改め、流れを変えることではありません。過去を否定することを推進力にしていた時代から、過去の資産をステップにして次の高みに移るための強固な地盤創りをする時代だと思います。この50年間の歴史とは、我々が総力を挙げて築いてきた資産です。この資産を日本JCのクロニクルとしてまとめ、51年目からの青年会議所運動のための組織基盤を整備することが私の取り組む改革です。

人間力開発

(Humanity Development = HD) 運動の継承

今の日本に一番必要とされているものは、個々が自らの存在意義を見だし、人間としての尊厳をもって明るい豊かな社会を築いていくことです。そのために、すべての青年会議所運動において自己責任と問題意識を持って取り組むべきだと考えます。独創性を持った個々がさらに人間力を向上させることでまちづくり・くにづくりが効果的に推進されるのです。

教育へのコミットメント

(かかわり方)

青年会議所は、地域教育の重要性を指摘してきました。昔は、リンゴを失敬しようとするれば、気付いた持ち主の大人からげんこつをもらい、叱られるのが当然でした。そんな時に「黙って盗んで食べてもおいしくないだろう」といって、売り物とは別のリンゴをもうあげる、そのような身近な地域の教育が確かに存在しました。よその子供の背景が見えにくく親子の関係が希薄な現代においては、せめてJAYCEEが勇気を持って親に対して、また子供に対してそんな行動を起こしてみませんか。

まちづくりへのコミットメント

日本JCの外郭団体として、財団法人まちづくり市民財団と財団法人地球市民財団が存在します。これらの財団を通じて単年度制の青年会議所では困難な、長期に亘る、あるいは継続的な事業を行なう団体や個人に対して、様々な支援をしていきたいと思っています。

社会起業家としてのコミットメント

日本JCは国連へNGO団体認可の申請をしていますが、最近ではNGO(=非政府組織)という呼称からCSO(Civil Society Organization)と呼ぼうという動きもあります。日本JCは、関係諸団体と「連携」しながら、CSOの一員として社会起業家精神を存分に発揮した運動展開をすべく準備を整えています。

国際ボランティア年

国連は、カンボジアで国連ボランティア中に死亡した中田厚仁君の父上の提唱を受けて、2001年を「国際ボランティア年」とする決議を採択しています。

私は1998年冬季オリンピック長野大会開催期間中に、延べ3000人のJCメンバーと5000人を越えるボランティアとともに表彰式会場の運営一切を担当しました。

それぞれの目的は違いますが、運営に参加した方々全員にボランティアリズムやホスピタリティーといった無形の資産(「心の資産」)ともいうべきものが芽生えています。この「心の資産」を活かして大きなうねりを生む、そんな取り組みが世界から求められているのです。

JCIへのコミットメント

日本JCは、国際的な事業の意義を見つめなおし、民間交流を基本として、ますます重要になってくる世界と日本の関わり方を模索していきたいと思っています。

JCガバナンス

青年会議所の民主主義

連絡調整機能として各地のアイデアを全国に紹介することが日本JCの大きな仕事の一つだと思います。日本JCの中にあり、かつ地域の事情を把握している地区担当常任理事が会長を務める地区協議会は、すべての情報集積地です。

日本JCはいち早くパソコンやインターネットなどを事業や運営に積極的に取り入れています。各種会議のあり方や運営は、こういったIT革命の産物を上手に活用して、会議の専門家集団として会議自体を新しい仕組みに進化させなければなりません。

JCも地域主権型に

日本JCが提唱し全国に発信する運動や事業は、中央集権的なものではありません。その運動が広がることにより、各地において独創性をもった特色あるまちづくりが展開され、地域の発展につながるのです。

2001年 JC ODYSSEY

情熱を胸に 今 新世紀への源流とならん

価値ある50年の歴史と伝統に支えられ、21世紀の夜明けへと旅立つ今、全国5万4000名のJAYCEEと共に、個性と能力の限りを尽くし、共感と感動を分かち合える青年会議所運動を続けた。次なる半世紀をさらなる夢と希望にあふれたものにしたい。

749LOMの理事長とともにある国家青年会議所のPRESIDENTとして。

日本JCに出向する2001年度チームのひとりとして。企業と家庭を力の源とするJAYCEEとして。

今、私は「志を同じうする」全国の仲間と共に新しい進歩、新しいクロニクルを創るために情熱を燃やす21世紀最初の会頭となることを誓う。(抜粋)

2001

日本青年会議所

1	日本JC第50代会頭に土屋龍一郎(長野JC)が就任 日本JCスローガン「新世紀へのCOMMITMENT」今、Jaycee が日本を拓く
1.18～21	2001年京都会議、「日本を拓く源流を いざ 京都から」をテーマに国立京都国際会館にて開催
3.30	21世紀の市町村合併を考える国民協議会、設立総会
3.30	中曽根元首相と土屋会頭が「正論」について対談
4.19	緒方貞子氏と土屋会頭が対談
4.22	(社)日本青年会議所50周年記念フォーラムが開催
5.23～26	韓国にて2001年JCI-ASPACテグ大会が開催
6.7	JC議員ネットワーク会議開催
6.17～20	訪中経済ミッション開催 中国江西省九江地区の青年と共に植樹を行なう
7.5	次年度会頭予定者、松本秀作(枚方JC)に決定
7.21～22	サマーコンファレンス2001が横浜にて開催 「JCアクションプラン21」を機軸とする「人間力」、「社会企業家」というテーマを分かりやすく取り上げ、「個」の確立、「力の源」の発見の場を目的として開催
9.8～15	カクマ難民キャンプ視察 難民キャンプ支援活動のための事前調査を行なうため、ケニア共和国トゥルカナ県カクマ難民キャンプ及びナイロビ市内を視察
9.10～12	9月10日から12日まで行なわれる予定であった国連NGO総会が、アメリカ同時多発テロにより中止。土屋会頭指揮のもと、安全確保と帰国を優先。9月21日に最後のJCメンバーが帰国
9.28	インドネシア「メガワティ大統領」歓迎レセプション
10.11～14	大阪にて、「夢築く半世紀—人間力で彩り 地域から描くこの国の現形—」のテーマのもと、第50回全国会員大会大阪大会が開催 10月11日大阪城公園にて「第50回全国会員大会大阪大会記念植樹」
11.4～9	JCI世界会議がバルセロナにて開催

内外の動き

2.9	ハワイ・オアフ島の沖合で愛媛県の漁業実習船えひめ丸と米海軍の原子力潜水艦グリーンビルが衝突、実習船が沈没、9人が死亡
3.28	地球温暖化防止のための京都議定書について、米国が離脱を表明、発効が絶望的に
4.3	「新しい歴史教科書をつくる会」が主導して編集した教科書が検定で合格
4.26	自民党の小泉純一郎が第87代首相に選出され、小泉内閣が発足
5.11	ハンセン病患者の隔離政策で違憲判決
6.8	大阪教育大学付属池田小学校に男が乱入し、児童に刃物で切りつける。教諭3人を含む29人が刺され、児童6人が死亡、数人が重傷
7.21	兵庫・明石の花火大会で、将棋倒しになった見物客10人が死亡
8.13	小泉首相、靖国参拝を前倒しで実施
8.23	53年の政府の調査開始以来最悪の失業率に
8.31	新宿・歌舞伎町の雑居ビルで火災が起き、41人が死亡
9.10	狂牛病に感染した牛が国内で初めて発見される
9.11	米国で同時多発テロ。NY貿易センタービルに飛行機が突入し、ビルは崩落
10.8	米英両軍によるアフガニスタンへの攻撃開始
10.10	野依良治・名古屋大教授がノーベル化学賞を受賞



混沌からの出発。 今始まる「JC創世記」

第51代会頭 松本 秀作

枚方JC 1962年生 99年枚方理事長 01年副会頭 02年会頭 現・ダイコロ(株)代表取締役社長

一人ひとりが輝いて、 LOMが輝く

全国各地で展開されているJC運動の中で、私たちは何を期待され、何を投げかけ、何をなし得ているのでしょうか。地域、家庭、企業における存在価値や役割を再認識し、その期待に対して前向きに対処しているかを考えてみてください。

JCに所属し、運動する意味や目的は、自分で居場所を見つけ、自らの位置を研ぎ澄まされたものとして存在させる努力をしてこそ得られるものです。LOMを構成するすべてのメンバー一人ひとりが輝いてこそ、本当の意味でLOMが輝くのです。

地域での青年会議所の存在についても同様です。青年会議所各々が輝きを放つことが、日本における青年会議所の評価につながります。

JC運動の力の源は、私たちや子どもたちの住まちなりに夢や希望を持つことにあります。それに向かって努力を惜しまないことこそ、最も基本となる青年会議所の姿勢ではないかと思うのです。

変革のできる強固な組織と人材

2000年代の運動指針を採択し、これをベースとしたアクションプラン21を打ち出したうえで、全国のJCメンバーが実行段階に移すのが、いよいよ2002年度です。そこには、運動指針や行動規範を実行するための柔軟な企画・計画と、遂行する行動力が必要です。

改革や変革を遂行できる人材は、明治維新を成し遂げた人たちが、戦後荒廃の中から立ち上がった先人たちのように、逞しさを持ったたのもしい人たち、すなわち、自助自立の気概をもち、進んで社会を切り開いていくことができる人のことをいうのだと思います。そう

いった改革や変革を実行できる強固な組織と人材の育成が、2002年度の青年会議所に与えられる最初の大命題と考えます。

青少年問題と本気で向き合う

21世紀を迎え、教育改革の動きは新たな展開をみせています。道徳性・社会性の低下や増加する少年犯罪に対する危機意識が背後にあり、2002年度からは完全学校5日制や授業時間数、教育内容の大幅削減、「総合的な学習時間」が導入されます。これは「自ら学び考える力」の育成や学習の統合制を重視したのですが、その反面で学力の低下や二極化が懸念されています。

今後の教育を考えるにあたっては、その根底にある真の意味の「個と公の調和」とは何かを考えていかなければなりません。私はこの議論が全国各地で巻き起こり、その地域に即した答えを模索し、行動を起こすことこそ、今私たちに課せられた使命のような気がします。

オンリーワンのまちづくり

昨今の厳しい経済状況の中で、私たちの生活の基盤や生業を育てているまちの活力が次第に失われています。

従来から青年会議所はボランティアズムをもってまちづくりを推進してきましたが、今後はそれに加え、社会起業家としてもまちづくりに関わっていくことが求められます。その結果、まちの規模や運動のスケールでナンバーワンを競い合うのではなく、活力あふれるオンリーワンの我がまちづくりができるのです。

日本経済の再生についても、青年会議所の特性を活かし、地域に根ざした全国745の青年会議所の意見を集約し、それを基に日本経済の構造改革を提言していきたいと思っています。

国際へのかかわり

グローバル化の真只中にある国際社会においては、各国の役割や立場により「相互依存」関係に発展していきます。

「2002年JCI-ASPAC」では、文化や習慣の違う各国メンバーが仙台の地に集結。また、2002年W杯も韓国と共同開催されます。アジア地域の中で、昨今にもまして日本の位置づけや役割の明確化が迫られる時期がきています。お互いの相違点を認め合い、自らの主張をぶつけ合うことが、これからは今以上に必要ではないでしょうか。また本年度JCIが唱えるアントレプレナーインアクションをもとに、青年会議所のなすべきことを考えていきます。

フラットな組織を目指して

私たちを取り巻く環境の変化はものすごい速さで流れています。そんな時代に一番必要なのは、素早く意志決定し、行動に移し、結果をフィードバックする「スピード」です。

活力ある組織を創り出すためには、トップとボトムの距離が近い「フラットな組織」を目指さなければなりません。私はITをより効果的に使い、全国745の青年会議所の意見を集約・再発信する機能をつくり、全国のメンバーと直接対話できる環境を整えたいと考えています。一人のLOMメンバーとしての視点を忘れず、各地青年会議所のメンバーが日本青年会議所のNOMとしての機能を大胆かつ柔軟に使い、自らが参画してつくりあげる日本青年会議所にしていきたいと思っています。

皆さんと同じ志を抱いて、混沌をおそれず、共に出発しましょう。21世紀新JC創世記に向かって。

(抜粋)

2002

日本青年会議所

1	日本JC第51代会頭に松本秀作(枚方JC)が就任 日本JCスローガン「時代を超えて時代を創る。今始まる『新JC創世記』」
1.23～27	2002年京都会議。「混沌からの出発」をテーマに国立京都国際会館にて開催
3.24	第2回評議員会開催。JCI(エリアB担当)副会頭のヌイ・イン・イン氏が参加
WB5月号	第56代JCI会頭のサルバドール・バトレ・イ・ドメニチ氏と松本会頭が対談
4.24～27	上海経済ミッション開催
5.16～20	第52回JCI-ASPAC仙台大会開催 大会テーマ「Entrepreneurs in Action- 行動する社会起業家」、 大会スローガン「しあわせ、仙台」
6.17～19	第17回訪中ミッション実施
6.23～26	第3回JC-G11サミット開催(カナダ・カルガリー)
6.30	全国「JC / JAYCEE 魅力探しの旅」100LOMを達成
7.5	次年度会頭予定者、揚原安麿(福井JC)に決定
7.27～28	サマーコンファレンス2002が横浜にて開催。スローガン「今年のサマコンは役に立つ!」
8.3～4	第33次北方領土現地大会開催(北海道根室市)
8.16	台湾国際青年商會第50回全国会員代表大会開催
9.8～14	ロシアミッション参加(モスクワ及びサンクトペテルブルク)
9.9～11	第55回国連NGO / DPI総会開催(ニューヨーク国連本部)
9.26～29	第51回全国会員大会旭川大会開催。大会テーマ「新JC創世記 新しいくにつくりにために」、大会スローガン「Jaycees、Be Ambitious!〜抱け、次代への大志〜」
10.18～20	韓国JC50周年式典・第51回全国大会開催(ソウル)。「2002日韓パートナーシップ宣言」調印式
11.18	会頭はじめ5人が総理官邸へ。安倍内閣官房副長官に提言書「愛国のすすめ」を手渡す
11.23～29	第57回JCI世界会議ラスベガス大会開催

内外の動き

1.1	ユーロ圏12ヶ国で欧州単一通貨「ユーロ」が流通開始
1.15	UFJ銀行誕生
1.23	雪印牛肉偽装事件
2.8～	ソルトレークシティー冬季五輪にて、モーグルで里谷多英が銅メダル、男子500mスケートで清水宏保が銀メダルを獲得
3.28	衆議院の辻元清美が秘書給与流用問題の責任を取り議員辞職
4.1	学習指導要領の見直しを図られ、完全学校週5日制のゆとり教育開始 みずほ銀行営業開始 DV防止法が全面施行
4.30	雪印食品が解散
5.20	東ティモール独立
5.31～	日本・韓国共同開催のサッカーW杯で日本はベスト16、韓国はベスト4の成績、優勝国はブラジル
6.19	鈴木宗男 衆議院議員があっせん収賄容疑で逮捕
7.9	アフリカ連合(AU)発足
7.12	中国製のダイエット薬で女性が死亡
7.21	米ワールドコム倒産
7.31	ホームレス自立支援法成立(8.7施行)
8.5	住民基本台帳ネットワークが稼働
8.9	田中真紀子・前外相が議員を辞職
8.11	米USエアウェーが破綻
8.29	東京電力が原発の損傷を隠蔽
9.10	スイスが国連に加盟
9.17	日朝首脳会談
9.27	東ティモールが国連に加盟
10.8	島津製作所・田中耕一所員がノーベル化学賞、東京大学・小柴昌俊名誉教授がノーベル物理学賞を受賞
10.12	バリ島爆弾テロ事件
10.15	日本人拉致被害者5人が北朝鮮から24年ぶりに帰国
12.1	東北新幹線盛岡～八戸間開通 東京臨海高速鉄道りんかい線全通、JRとの直通運転開始



誇り高き、人の時代へ。

第52代会頭 揚原 安磨

福井JC 1963年生 99年福井理事長 03年会頭 現・博恩キャピタル日本(株)代表取締役社長

JCの特性、 「内なる基準」の確立

JCは青年経済人の団体として、いくつかの特性があります。経済力に裏付けられた行動力。各種のスキルを身に付けて、それを活かすチャンス。三信条に基づく「ネットワーク」と「貢献する心」の土壌。

JCに関わる私たちは、この幸運とそれに応える責任を自覚しなければなりません。自分の「貢献する心」を目覚めさせ、各人の「貢献できるかたち」を結集して、大きな目標に挑むのがJCです。

非日常の経験、出会い、感動と喜び、自分を試すチャンス。様々なJCによる究極の学びは、「自分の内なる基準づくり」ではないでしょうか。これが即ち人間力の開発であり、魂の鍛錬なのです。JCメンバーとして培った「内なる基準」は、卒業後の人生でも私たちを「積極的に生きる」ことに導くはずです。

地域で期待されるJC・LOM

JCへの期待が今ほど実質的になってきている時代ありません。行政が市民に近づこうとし、市民がこれまでの無関心を反省しつつある今、地域社会においてその架け橋を担える最前列にいるのがLOMです。「市民主導のまちづくり」「個性ある地域開発事業」「これからの教育」等は、全国共通の課題であり、本来、JCの得意とする分野です。

全国に広がるネットワークをベースとした日本JCは、LOMのJC運動の支援者として、有益な情報とJCらしい手法を整備し、各地展開をしていきます。JC運動の主体はあくまでもLOMであり、各地域に合った取り組みがあるはず。各地の展開を支援しながら、最終的に日本国中での大きな運動として成果を上げることを目指していきます。

頼りになる応援団

LOMの皆さんに最も身近な日本JCはブロック協議会です。各ブロック会長の皆さんには、日本JCの様々なメンバー向け研修をはじめ、運動実践の手法・ツールの蓄積などをLOMからダイレクトに活用いただけるよう、積極的に仕組みの構築をお願いしたいと思います。また、「市町村合併や広域行政」「地域主権の実現方法」など、LOMを越えて取り組むべき重要課題には、広い視野に立った頼りになる応援団として、ブロックの活躍を期待しています。

地区会長の皆さんには、大切な議決権と共に、全国の声をも日本JC理事会に反映いただいております。ブロック会長の相談役として、10地区それぞれの実情にあった地区改新と、日本JCとして対処すべき課題を集約していただきたいと思っています。日本JCの協働のパワーが地域から導かれることを期待しております。

日本の国家アイデンティティ

『汝、自らを知れ』。これはソクラテスの座右の銘です。「あなた自身の存在とは、他人からの評価や所有物、所属によって決まるのではなく、あなたの生き方、価値観、魂である」と説いています。

これからの時代、日本国を担う一人の日本人として、自分を知り、自分を主張し、自分の生き方を誇れる人になりましょう。それが、日本の中で、地域を主張し、地域を大切にすることになります。そして、世界の中で、日本を主張し、誇り高き日本を築くことになるのです。今こそ、個人のアイデンティティの確立を通して、国家アイデンティティの構築を成さねばならぬ時なのです。

研修機能強化「人間力開発」

JC運動に関わり、同世代のメンバーと社会性の高い事業を展開することは多くの学びを与えてくれます。事業や運動の展開で開発された数多くのセミナーで培われた蓄積を、組織的に受け継ぎ、継続的に展開し活用することができたなら、それはJCの大きな資産となります。

この資産の整備と活用のために、日本JCのもつ研修機能をより大幅に充実させたいと考えています。いくつかの委員会が協力し合って内容の整備を図り、運営をする仕組みをつくり、それを各地で実施。最終的にLOMとの接点となるブロック研修センターを各地域向けにアレンジし、よりニーズに合った展開ができる方法を考えていきたいと思っています。

また、研修内容の方向性にも、JCの特質を出していきます。「人間力の開発」は、立場・年齢を問わず大きなテーマですが、それに加えて「社会起業家資質育成」を取り上げます。具体的には『JCビジネスアカデミー』開校を考えています。人として、経済人としてのセンスやスキルに磨きをかけ、一人ひとりが「社会起業家」「NPOオーガナイザー」としての実行力を身に付けることが目標です。このアカデミーでの公共心を伴った経営資質の向上が、短期的な学びを超え、自分の企業発展を含めた生涯を左右する大きな学びに繋がることを期待しています。

* * *

人生を積極的に生きる。目的を持ち、実現に向け、自分を持って、夢を目指して頑張ろう。一人ひとりの“頑張る”気力が、社会を幸せに導く原動力。誇り高き、人の時代へ。

(抜粋)

日本青年会議所

内外の動き

1	日本JC第52代会頭に揚原安麿(福井JC)が就任	1.1	コンビニのローソン約7700店に郵便ポスト設置
	日本JCスローガン「『日本改新』～誇り高さ、人の時代へ～ 新次元へのBreakthrough!」	1.10	北朝鮮が核拡散防止条約(NPT)から脱退
WB1月号	安倍晋三内閣官房副長官と会頭が対談	1.14	小泉首相が、3年連続3回目の靖国神社参拝
1.16～19	2003年京都会議。「誇り高さ、人の時代へ。」をテーマに国立京都国際会館にて開催	1.20	横綱・貴乃花が引退
1.29	第1回会頭記者会見を都道府県会館にて開催	1.29	朝青龍が第68代横綱に昇進(モンゴル人初の横綱誕生)
2.8	CS放送 朝日ニュースターにてJC運動発信会議「JC@TV 青年会議」を放映	2.1	ニース条約発効
2.12	全国縦断「日本改新」会議スタート。日本JCが創立以来初めて全国の都道府県知事を訪問。第1弾対談は国松善次滋賀県知事	2.24	北朝鮮が地对艦ミサイルを日本海に向け発射
3.8～9	JCIビジネス&ITコンファレンス開催(インド・ニューデリー)	3.3	大和銀行とあさひ銀行が合併し、りそな銀行発足
WB6月号	麻生太郎自民政調会長と会頭が対談	3.5	「ロス銃撃事件」の三浦和義被告に最高裁で無罪判決
4.29	「新・戦後」フォーラムIN沖縄～自己決定による真の自立国家を目指して～開催(沖縄県宜野湾市)	3.17	大和銀行とあさひ銀行が合併し、りそな銀行発足
5.11	JCネットコンファレンス開催	3.20	アメリカ・イラク戦争、アメリカ軍がイラクへの攻撃を開始
7.5	次年度会頭予定者、米谷啓和(姫路JC)に決定	3.24	宮崎駿監督「千と千尋の神隠し」がアカデミー賞長編アニメ映画賞を受賞したほか、ベルリン国際映画祭グランプリやアニメ賞なども受賞
7.12～13	第34次北方領土返還要求現地大会開催	3.30	高松自動車道が全線開通
7.19～20	サマーコンファレンス2003が横浜にて開催。テーマ「『日本改新』へのソリューション」	4.1	日本郵政公社が営業開始
8.6～9	第1回JCI-UNリーダーシップサミット開催		サラリーマン本人の医療費と家族の入院費の自己負担割合、2割から3割に引き上げ
8.23	業別フォーラム2003 in KYOKO開催	4.4	さいたま市が政令指定都市に移行
8.27～31	第53回JCI-ASPACセブ大会開催(フィリピン)。大会テーマ「Experience CEBU!(セブですばらしい体験を!)」	4.7	新型肺炎のSARS(重症急性呼吸器症候群)が新感染症に指定され、7月の終息宣言までに32ヶ国で患者774人が死亡
9.8～10	第56回国連DPI/NGO年次総会開催(ニューヨーク国連本部)	4.7	宝塚ファミリーランドが営業終了
9.29	21世紀臨調第2回総会開催。議題は「総選挙を意義あるものとするために」	4.25	六本木ヒルズがグランドオープン
10.2～5	第52回全国会員大会福井大会開催。大会スローガン「超えろ。そして、前へ。—今日とは違う自分に会おう—」	5	健康増進法が施行
年間	JC運動発信会議展開。ミッション①日本JCとしてのパブリシティ戦略の計画と実行 ②会頭定例記者会見の開催によるJC運動発信の計画と実行 ③CSTV放送+ブロードバンドを活用したJC運動発信の計画と実行 ④各大会・会議でのフォーラムを通じた、より実践的なJC運動発信のための政策軸の構築	5.1	酒税引き上げ
11.3～7	第58回JCI世界会議コペンハーゲン大会開催(デンマーク)。大会テーマ「More than a Fairytale(童話の世界よりすばらしい会議)」	5.23	個人情報保護法が成立
WB12月号	「インドの子ベトナム難民へのB型肝炎ワクチン接種事業」ダライ・ラマ14世に謁見	6.6	有事法が成立
		6.26	改定労働者派遣法が成立(2004.3.1施行)
		7.1	たばこ増税
		7.21	世界水泳選手権100m平泳ぎで北島康介が世界新記録で優勝(7月24日、200m平泳ぎでも世界新記録で優勝し2冠達成)
		7.26	イラク復興支援特別措置法が成立(8.1施行)
			「宮城県北部地震」宮城県北部で震度6クラスの地震が3回発生、負傷者700人以上、およそ5000戸の住宅が被害
		8	コニカとミノルタが経営統合
		8.10	沖縄に戦後初の鉄道沖縄都市モノレール(ゆいレール)が開業
		8.25	住民基本台帳ネットワーク本格稼働
		8.28	池田小児童殺傷事件(2001年)で、大阪地裁が死刑判決
		8.29	フランス全土の記録的な猛暑で死者11000人以上
		9.26	自由党と民主党が合併
			家庭用パソコンのリサイクル制度スタート
		10.1	東海道新幹線品川駅が開業
			ジェイフォンがボーダフォンにブランド変更
		10.7	カリフォルニア州知事に俳優・アーノルド・シュワルツェネッガーが当選
		11	保守新党が解党し、自民党に合流
		11.1	JR西日本の近畿圏でICOCAの運用開始
		11.5	横綱・武蔵丸が引退
		11.9	第43回衆院選で連立与党が絶対安定多数の議席を確保し、第2次小泉内閣が発足
		11.29	イラク北部で日本大使館の公用車が襲撃され、外交官2人が死亡
		12.1	地上デジタル放送開始(東京、大阪、名古屋)
		12.9	自衛隊のイラク派遣が決定
		12.14	アメリカ軍がイラクのフセイン元大統領を拘束
		12.26	イラン南東部ケルマン州の古都バムでM6.3大の地震、死者約4万人



「破格」の作法、「創格」の気概

第53代会頭 米谷 啓和

姫路JC 1964年生 02年姫路理事長 03年副会頭 04年会頭
現・米谷紙管製造(株)代表取締役社長 特定非営利活動法人スローソサエティ協会理事長

格に入って格を出でよ

格に入りて格を出でざる時は狭く、また格に入らざる時は邪路にはしる。格に入り、格を出でて、初めて自在を得べし。

江戸時代の俳人、松尾芭蕉が俳諧の心得として述べたことばです。このことばを青年会議所に当てはめてみると、どうなるでしょうか？ 入会、JCIクリード、JC宣言、定款、委員会、理事会といったさまざまな格があります。もし単に人をその中に閉じ込めようとするものなら、これらの格は単なるとらわれにすぎなくなります。かといって格をもたなければ、その活動は混沌の域を脱しないでしょう。

では、青年会議所において「格が出る」とはどういうことなのか？ それによって得られる「自在」とはどのようなものか。ここにこれからの時代の青年会議所活動の秘訣があるとわたしは考えます。それは「破格」、そして「創格」ということです。

JCという名の看板を使いこなせ

JCとは本来、機会と可能性のネットワークの場であり、社会人としても生活者としても、自立した市民としての気付きや目覚めに満ちたフィールドであるはず。そのフィールドで存分に動き回るためには、まず格に入って格を出で、「破格の作法」が必要です。

破格の作法は、自分の夢と希望のために「JCという看板を思う存分使いこなす」姿勢をいいます。そして一度青年会議所という格に入った人間にとっては、自分のやりたいことは社会の公共性に根ざしたものであり、好きなことをやるのが国や社会の利益=公益につながるという幸福な関係を生むはず。です。

公益法人格というパワーをもつJCを看板に、自在にまちづくり、ひとづくりに取り組み、その貢献はまた、自らの事業、地域経済へもかならず還ってくる。こうして地域が自立し、特色をもって輝けば、そこに生きる個人や企業も強くなり輝いてくる。その善循環の原動力となるのが、混沌の時代に青年会議所活動に取り組む意義なのです。

破格のあとにやってくる「創格」

脱近代工業化社会、少子化高齢化社会の到来、インフレ経済の終焉といったパラダイムの大きな転換を矢継ぎ早に迎え、日本社会は苦渋の選択の時代に入っています。価値観や生活様式が多様化・多層化しているにもかかわらず、日本の社会システムが硬直的なところに、多くの課題の根っこが起源しているといえます。

いまその社会の枠組みを変えようと、地方でも中央でも様々な破格、すなわち創造的破壊が進んでいます。いま大切なのは明確なものさしをもつビジョンに沿って、格そのものを新たなものに取り替えること、すなわちつくりかえのための「創格」です。この「破格」と「創格」こそが、いま求められているのです。

破格と創格の時代のJCづくり

古来、日本の持つ、素晴らしさを失わないうちに、今の日本が抱える、根本的な課題に切り込み、これからの日本の、根っこの仕組みを築き始める。これが2003年度の日本青年会議所のメインテーマ「日本改新」の意図するところです。この課題を受け継ぎ、破格と創格のプロセスを経て、さらに先へと進めることが私の使命であると受け止めています。

マイ・マニフェスト2004

2004年度に私が取り組む重点テーマを取り上げます。日本青年会議所版マニフェストとは、いわば検証可能な会頭のコミットメントです。

- 分散型循環社会の構築…小さな循環システム推進の取り組み／スローフード運動の展開
- 全国各地でのまちづくり支援…運動の継続性を高めるグランドデザイン作成／活動を検証、自己評価できる仕組みづくり
- 個人のスキルアップ、資質開発…地域オーガナイザーとしてのスキル習得／人間力開発の支援
- 日本のアイデンティティ再建…日本文化の新たな発信／和のこころを現代に生かす
- 教育基本法の見直しと新たな教育理念の制定／教育の複線化とジェンダー教育への取り組み／地域でできる教育環境の整備
- 多様性を保ちつつ自立できる国家創造のための価値観研究
- 平和を保つ均衡を生み出す国際連携…民間外交を担う青年世代による多元的交流／フェアトレードの推進
- 公益を目的とする機能的組織最適化

創格…まずはじめの一人となって

日本JCは全国の青年会議所活動のフラッグシップです。フラッグシップが旗艦であり続けるために、破格と創格を訴えました。まず隗よりはじめよ、私自身が自分という格から一歩出て、会頭職という新たな格に入ろうとしています。そして予定者段階を経てその格を出でて、素直なところで、自在に、そして4万6000人の衆知を集めて2004年度の青年会議所活動を創格していくべく力を尽くします。

(抜粋)

- 1 日本JC第53代会頭に米谷啓和(姫路JC)が就任
日本JCスローガン「大きな環と小さな環が響き合う『スローソサエティ』の実現へ」
- 1.22～25 2004年京都会議。「大きな環と小さな環が響き合う『スローソサエティ』の実現へ～『破格』の作法、『創格』の気概を胸に～」をテーマに国立京都国際会館にて開催
- 2.1 LOM支援センターによる支援サービス開始
- 3.21 第115回通常総会にて第1回ナチュラル・ステップセミナー、第3回新・国家アイデンティティ確立セミナー開催
- 2.11～13 2004エリアB-NOM会頭会議開催(バングラデシュ・ダッカ)
- 3～順次 マニフェスト型公開討論会が全国各地で開催
- 4.28～5.1 エリアC会議開催(エクアドル・グアヤキル)
- 5.12 政権公約検証・第1回大会開催
- 5.16 特定非営利活動法人 社会起業家ビジネススクールの活動を紹介する「スタートアップセミナー」開催
- 5.22～25 第54回JCI-ASPACペナン大会開催(マレーシア)。大会テーマ「Brand-new Asia!! from japan (新しいアジアは日本から)」
- 5.29～30 日中若手経営者研修交流事業開催
- 5.30～6.1 スローソサエティ実現の方向性を学ぶため、スウェーデンミッションに参加(ストックホルム)
- 6.2～5 エリアD会議開催(スイス・ローザンヌ)
- 6.9～12 エリアA会議開催(アフリカ・セネガル)
- 6.14～16 訪中ミッション実施(北京)
- 6.19～21 イベント「100万人のキャンドルナイト」に参加
- 6.23～24 MYE&JCI本部庁舎落成式開催(アメリカ・セントルイス)
- 7.5 次年度会頭予定者、高竹和明(倉敷JC)に決定
- 7.8～11 第2回JCI-UNリーダーシップサミット開催(ニューヨーク国連本部)
- 7.13 第17回国際アカデミー in名古屋開催。メインテーマ「千里同風」
- 7.17 北方領土返還要求現地視察大会開催(北海道根室市)
- 7.24～25 サマーコンファレンス2004が横浜にて開催。テーマ「FUN to TRY Slow Society!～スローソサエティを楽しもう～」
- 8.13～15 第52回台湾JC全国大会開催
- 9.8～9 「ロシア友好の会」モスクワ訪問
- 9.30～10.3 第53回全国会員大会水戸大会開催。大会テーマ「奏でようスローソサエティ。スローなものさしを胸に」
- 10.15～16 日米地位協定問題及び基地問題沖縄視察ミッション実施
- 11.21～26 第59回JCI世界会議福岡大会開催。大会テーマ「行動する社会起業家」、大会スローガン「We are the BRIDGE.」
- 11.25 JCI世界会議福岡大会開催期間中、世界理事長会議開催

内外の動き

- 1.1 明治生命と安田生命が合併し、「明治安田生命」が誕生
- 小泉首相、靖国神社に元旦参拝、連続4回目
- 1.12 山口県の養鶏場で日本では79年ぶりに鳥インフルエンザが発生
- 1.16 自衛隊がイラクへ派遣
- 1.30 東京地裁が、青色発光ダイオードの発明者に支払われるべき対価として604億円を認定。日亜化学工業に請求額200億円の支払い命令
- 2.11 アメリカでの狂牛病発生に伴う米国産牛肉の輸入停止の影響で、吉野家が牛丼の販売を中止
- 2.24 ソフトバンクBBがヤフーBBの契約者情報400万人の流出を発表
- 3.1 日本で製造業への人材派遣が解禁
- 3.13 九州新幹線新八代駅-鹿児島中央駅間が開業。肥薩おれんじ鉄道開業
- 4.1 東京都の営団地下鉄と成田空港が民営化
- 医師の卒後研修が義務化
- 4.15 イラクで武装グループに拘束されていた日本人3人が解放
- 4.26 東京都の六本木ヒルズで男児が自動回転ドアに頭を挟まれて死亡
- 5.1 欧州連合(EU)に新たに10か国が加盟、合計25か国になる
- 5.21 裁判員の参加する刑事裁判に関する法律(裁判員制度)が成立(2009年施行)
- 5.22 小泉首相が北朝鮮を再訪問、平壤で日朝首脳会談
- 6.5 元アメリカ大統領・ロナルド・レーガンが肺炎のため死去
- 8.13～ アテネ五輪で日本は金16・銀9・銅12のメダルを獲得、柔道・野村宏宏選手が五輪3大会連続で金メダルを獲得
- 9.1 ロシア南部の北オセチア共和国でチェチェン共和国独立を求める武装勢力が学校を占拠、特殊部隊が突入し犯人およそ20人を射殺、人質330人以上が死亡
- 10.4 メジャーリーグでシアトル・マリナーズのイチロー選手がシーズン最多安打記録を84年ぶりに更新、262安打まで記録を伸ばし今季を終了
- 10.13 大手スーパー・ダイエーが産業再生機構に支援要請
- 10.23 「新潟県中越地震」新潟県中越地方で震度6強の地震が3回発生、死者39人、被災者10万人以上。震災後の過労などによる死者が相次いだほか、上越新幹線で開業以来初の脱線事故
- 10.31 イラクで武装グループが日本人男性を人質にとって自衛隊の撤退を要求していた事件で、殺害された男性の遺体が見つかる
- 11.1 一万円札・福沢諭吉、五千円札・樋口一葉、千円札・野口英世を肖像とした新札が発行される
- 11.2 宮城県仙台市を本拠地とする「東北楽天ゴールデンイーグルス」が誕生
- NBAに田臥勇太選手が日本人として初めて出場
- 12.7 北朝鮮が提供した拉致被害者の横田めぐみさんの遺骨が別人のものと鑑定される
- 12.22 国内で鳥インフルエンザの感染が公式に確認
- 12.26 インドネシアのスマトラ島沖のM9.0の地震が発生、津波による被害で日本人32人を含む約29万人が死亡



進化と継承の バランス型信頼社会の創造

第54代会頭 高竹 和明

倉敷JC 1965年生 99年倉敷理事長 02年副会頭 05年会頭 現・芳和技研(株)代表取締役

意気と力あふれる JC New Generation

青年会議所メンバーは、昭和40年生まれ以降で構成する時代に入りました。俗に言う「新人類」世代は、旧態の価値観を身に付けていない新しい感性や価値観を持つ世代です。そしてこの新世代が、変革するものと変えてはならないものを見極める感性を養い、新しい日本を創るのです。子どもに夢を持たせるには、まず私たちが夢を持つ、持つことのできる「意気と力」創りを始めましょう。意気とは「やる気」「気概」、力とは「能力」「力量」です。日本の中でJC New Generationこそが夢を創らなければならないのです。

2000年代運動指針が策定されて2005年は折り返し地点です。個と公の調和、活力と知力、人間力開発、そして2004年度はスロースサエティの実現をビジョンに多様性やつながりを再構築する運動を行ってきました。次はものさしの定義です。ものさしは日本の歴史や文化・文明を基盤とした確固たるものでなければなりません。それをベースに改革をし、新しい日本を開拓するのです。

「変えなければならないもの」

2004年度、日本JCはマニフェスト型国家を提唱してきました。2005年は、市長村再編のピーク年であり、新しい枠組みでの首長選挙が全国で行なわれます。JCが地域の将来像を描き、市民と共に首長に付託する。そんな確かな実のある運動ができる絶好のチャンスです。一步一步着実に変革を進めるためには、私たちの志を多くの皆さんに伝え、節目(ターニングポイント)となる運動(ムーブメント)を巻き起こさねば

なりません。過去の延長でない未来像の議論でまちの将来を選ぶ。そんなマニフェスト対決ができる公開討論会を、全国のLOMの皆さんにも大いに活用していただきたいのです。

また、年金をはじめ社会福祉問題についてもJC New Generationこそが議論し、提案しなければならないと考えます。今後さらに進む少子化などを考えると、抜本的なビジョンが必要です。

憲法改正の議論が盛んになりつつあります。日米同盟を重視しながらも、まず議論しなければならないのが国家としての自立です。日本国は本当に自立しているのか、自立とは何なのか…今こそ真の自立国家を目指さなければなりません。

「経済力」日本の商道徳

日本を訪れる外国人観光客は、年間523万人(2002年度)です。これはフランスの10%で、中国の20%ほど。日本人の海外旅行者数の約30%にすぎません。ここに日本経済の一つの活路を見出せはしないか。多くの国に観光省があるのに対して日本は政策が遅れています。日本の美しい風景、悠久の文化、伝統など世界的に見ても観光資源は豊富です。

2005年3月25日から9月25日の間に開催されるEXPO愛・地球博は、多数の国・国際機関の参加のもと、自然の叡智をテーマとした新しい文化・文明の創造を目指す国家プロジェクトです。日本JCは7月12日より15日間、事業展開。多様な文化・文明のバランスを考え、日本の文化・文明の探求、そして持続可能な21世紀型社会モデルを発信します。日本JCメンバーの叡智を結集する機会にしましょう。

「国際力」文明の衝突

JCI(JC)のマークは国連から認可を受けて使用しています。その日本における国連との関わりも新たな段階に入るべきだと考えます。日本JCはJCIの一員としても積極的に日本の価値を発信します。特に2006年の高松でのASPAC開催を控えています。仙台ASPACより4年ぶり、福岡世界会議の2年後の国内開催です。JCIにおける最大NOMとしての責任と自覚を持って臨みます。

1985年に発足した日本JCの分科団体、日中友好の会は2005年度で20周年を迎えます。今後の日中の民間交流は日本と中国の国家間としてのかかわり方、つながり方そして経済分野でのコラボレートを考えていきます。20周年を機に、日本と中国の新しい価値を発信します。

JCは日本最大の青年の学び舎

2004年の時点で4万6000名のメンバーは最盛期の3分の2です。会員拡大の成功の可否は、その地域でのJCの認知度、要求度と、何よりも739のトップリーダーのJCに対する情熱です。政治、経済、地域において青年会議所こそ最も多くの優れた人材を生み出している団体です。今まさに諸先輩方のつくられた歴史に感謝し、誇りを持って胸を張ってひとりでも多くの青年にJC運動を伝えなければなりません。「JCは日本最大の青年の学び舎」であると伝えましょう。全国的にJCが多様化する中で、全国のメンバーと「変革すること」と「守るべき歴史」を見極め、ともに議論し、会員拡大運動を展開したいと考えます。進化と継承のバランス型信頼社会をともに創造していきましょう。

(抜粋)

日本青年会議所

- 1 日本JC第54代会頭に高竹和明(倉敷JC)が就任
- 日本JCスローガン「“JC New Generation”新たな日本の夢に向かって」
- 1.20～23 2005年京都会議。「“JC New Generation”新たな日本の夢に向かって」をテーマに国立京都国際会館にて開催
- 1.22 第117回通常総会、共済会第21回定時総会開催
- 1.23 ケビン・キュリネンJCI会頭と会頭が特別対談
- WB2月号 中曽根康弘元首相と会頭が対談
- 2.18 第1回JC-JIフォーラム開催。憲法改正を議論
- 3.20 第118回通常総会、共済会第22回定時総会開催
- 4.15 販売を目的とした対外広報向けの新季刊雑誌『JC』創刊
- 5.4～7 エリアC会議開催(ブラジル)
- 5.11～14 エリアA会議開催(ベナン・コトヌー)
- 5.13 第4回JC-JIフォーラム開催。テーマ「選挙と地方分権」
- 5.26～29 第55回JCI-ASPACマカオ大会開催
- 6.20～23 20周年訪中ミッション開催。過去最大希望の総勢387名が参加
- 6.22 業種別部会・石材部会の創立20周年記念式典ならびに記念講演会開催
- 7.14～25 「愛・地球博(2005年日本国際博覧会)」に出展。テーマ「日本のこころ」
- 7.19～23 第18回国際アカデミー in 神戸開催。メインテーマ「誰がために」
- 7.23～24 サマーコンファレンス2005が名古屋にて開催。テーマ「New Generationが日本を変える!」
- 7.24 次年度会頭予定者、サマコン会場内で投票の結果、池田佳隆(名古屋JC)を選出
- 8.11 関係省庁連絡会議開催
- 8.12～14 訪台ミッション実施。JCI Taiwanの全国大会に参加
- 8.15 「終戦六十年国民の集い」(靖国神社)にて、会頭が「終戦60年、日本への提言」として靖国参拝についてスピーチ
- 8.24 衆議院選挙に向けた公開討論会の緊急共同記者会見に参加(総務省記者クラブ)
- 8.26 21世紀臨調主催の「政権公約検証緊急大会」に参加
- 9.16 第6回JC-JIフォーラム開催。テーマ「大激論! 衆議院総選挙を振り返り、今後の国政を考える」
- 9.29～10.2 第54回全国会員大会姫路大会開催。大会テーマ「創造 日本の夢 Jaycee43,000の意気と力で社会を変革する」
- 9.30 日本JCロゴマークの変更(案)。第119回総会で承認
- 10.24～29 第60回JCI世界会議ウィーン大会開催

内外の動き

- 1.8 広島県福山市の特別養護老人ホームでノロウイルスを発症した高齢者6人が死亡。一週間後には全国で死者8人、発症者4100人
- 1.11 アメリカ・カリフォルニア大学の中村修二教授が開発した青色発光ダイオードの特許権の譲渡対価を巡る訴訟で、当時勤務していた日亜化学工業が中村教授に8億4300万円を支払うことで和解が成立
- 1.20 ジョージ・W・ブッシュが2期目のアメリカ合衆国大統領に就任
- 1.25 NHK・海老沢勝二会長が元局員の不祥事などの責任をとり辞任
- 2.16 京都議定書が発効
- 3.16 島根県議会で2月22日を「竹島の日」とする条例が成立、韓国政府が抗議
- 3.25～ 愛知県で愛・地球博が開幕
- 3.29 インドネシアのスマトラ島西方でM8.7の地震発生、ニース島を中心に犠牲者およそ2000人
- 4.25 「JR福知山線脱線事故(JR尼崎脱線事故)」兵庫県尼崎市のJR福知山線で快速電車がスピードの出し過ぎにより脱線し、マンション地下駐車場に衝突、死者107人、負傷者400人以上
- 5.3 iMac G5が発売
- 6.22 改正介護保険法で負担増
- 6.26 茨城県水海道市の養鶏場で鳥インフルエンザの感染が判明、2万5000羽の鶏が処分へ
- 6.30 高齢者らに不要なリフォーム工事契約を結ばせ、全国で115億円を騙し取っていたサムニングループの幹部らが逮捕される
- 7.7 イギリス・ロンドンの地下鉄や路線バスなどでアルカイダ系組織による自爆テロが同時刻に発生、死者50人以上、負傷者700人
- 7.23 エジプト・シャルムエルシェイクのホテルなどでアルカイダ系組織による同時爆弾テロが発生、死者83人、負傷者200人以上
- 7.26 野口聡一宇宙飛行士が搭乗するスペースシャトル「ディスカバリー」が打ち上げに成功
- 8.26 ハリケーン「カトリーナ」が米国フロリダ州、ルイジアナ州ニューオーリンズに上陸。約1,200人の死者。ニューオーリンズでは、取り残された市民により略奪が発生。避難先でも、感染症や衰弱死、性犯罪などが多発
- 9.11 第44回衆議院選挙で自民党率いる与党が326議席を獲得し大勝
- 9.24 ハリケーン「リタ」が米国南部に上陸。石油生産施設などに被害
- 10.1 インドネシア・バリ島で同時爆弾テロ発生
日米社会保障協定発効
- 10.8 パキスタン北東部でM7.6の地震が発生、日本人2人を含む死者1000人以上
- 10.17 小泉首相が、5年連続5回目靖国神社参拝
- 10.24 大西洋北部で史上最低気圧を記録したハリケーン「ウィルマ」が米国フロリダ半島に上陸
- 10.29 インド・ニューデリーで同時爆弾テロ発生
- 11.7 障害者自立支援法が成立(2006年施行)
- 11.17 姉齒建築設計事務所による構造計算書の偽造が発覚(耐震強度偽装事件)
- 11.25 歌舞伎がユネスコの世界無形文化遺産に登録されることが決定
- 12.2 21年を通じて1899年以来初めて死亡数が出生数を上回る



精神ルネッサンス ～「日本の魂」が未来を拓く

第55代会頭 池田 佳隆

名古屋JC 1966年生 04年名古屋理事長 05年副会頭 06年会頭 現・衆議院議員

明治の大革命に視る 「使命感」と「危機感」

今日の日本は物質的には大変豊かになりました。しかし、社会は混迷を極め、心の豊かさはどんどん遠ざかりつつあるように思います。

歴史を振り返ると、明治の維新は世界でも例を見ないほど大胆で、それまでの社会通念や常識を根本的に変革する一大革命でした。この新しい国創りを進める原動力となった国民の意識とは、日本の伝統や文化を守り続けようとする崇高な「使命感」と、欧米列強のアジア進出による日本侵略への強い「危機感」だったのではないのでしょうか。

では、今日の日本に目を移したとき、国民意識の中に国家を守ろうとする「使命感」や将来に対する「危機感」が存在していると言えるでしょうか。国際問題だけを見ても、日本の安全や外交にかかわる多くの未解決問題を抱えている危機的状況にありながら、国家の主権者たる国民が安穏としているのであれば、日本は亡国への道をたどってしまうでしょう。そうならないためにも、JCが率先してこの危機を乗り越えるための社会変革を起こさなければならぬのです。

JCアプローチ 社会変革への道程

社会変革へのアプローチは、次元は異なれど大きく分けて2通りあると思います。それは、法律（ハード）を変える方法と、市民の意識（ソフト）を変える方法です。もちろん、この両輪が相まって真の社会変革が成し遂げられるわけですが、私たちJCが担うべきアプローチは後者です。まずは私たちJCが

民草のリーダーとなって市民に直接訴えかけ、時間がかかろうが信念に従って市民意識を理想のかたちに変えていくという手法です。

私たちJAYCEEが市民に対して強い訴求力を持つためには、常に学ぶ姿勢と国土としての情熱を持ち続け、道徳に基づいた思慮ある行動を率先躬行していくことが大切です。JCアプローチを地道に、そして自信と誇りを持って実践していくことによって、理想社会につながる未来への道が拓かれていくのです。

市民や為政者に対し利害関係を抜きにしてまっすぐな政策を提言し運動展開していける、また、世界の平和を真摯に訴えかける行動力と実現しうる可能性とを併せ持った青年の団体は、このJC以外には存在していないと思うのです。

正しい教育で「日本の魂」を育み 日本の肖像を学ぶ

戦後「日本の魂」が喪失し、我が国が今日混迷を極めている最も大きな原因は、学校、家庭における教育と躰の崩壊であると考えます。

子どもたちに正しい知識や日本人が培ってきた道徳心、価値観を教えることは、健全な自主性を育むばかりか公共心をも醸成します。また、社会起業家としての資質を育て、世界を平和に導く大きな原動力となっていくことでしょう。

日本の肖像をありのままに伝えることも大切です。海に支えられ、深く関わってきた日本に生きる自覚を育むことは、我が国と海でつながっている近隣諸国への理解を深め、その国々と日本とが歩んできた歴史的事実を学ぶことにつながります。平和的な手段で日本を守り、近隣諸国との真の友好を実現

し共に発展していくためにも、私たちJCが日本の真の姿を国民に伝え、海洋政策の必要性を啓蒙していく必要があります。

教育は「国家百年の計」といわれるように、一朝一夕にできるものではありません。教育の成果と同じく、市民の意識を変えるのも、かなりの歳月がかかるものです。誰かがその一步を踏み出さなければならないのならば、私たちJAYCEEが進んでその先駆者となり、ひいては世界平和の礎になろうではありませんか。

美しき日本への回帰

日本青年会議所の活動は、全国727会員会議所の負託と信頼、そして何よりも多大な経済的負担の上に成り立っています。日本の青年会議所のひとつの指標として、全国の会員の学び舎として、そして、国際青年会議所において日本を代表する国家青年会議所として、日本青年会議所はその使命と責任を十分に自覚した上で、世界平和の創造に身を呈して貢献せねばなりません。

日本の青年会議所は、戦後の焼け野原を前に『新日本の建設は我々青年の仕事である』と、憂国の想いを胸に勇猛果敢に掘り起して始まりました。創立以来、常にこの精神に立ち戻り自らを奮い立たせてきたのです。社会変革ツールとしてのJCの機能をフルに活用し、世論を確実に動かすJC運動へとつなげてまいりましょう。それぞれが担う地域を、愛する祖国日本を、そして地球上の全てを、平和で明るい豊かな社会に導こうではありませんか。その第一幕は美しき日本への回帰、精神ルネッサンスから始まるのです。

(抜粋)

日本青年会議所

1	日本JC第55代会頭に池田佳隆(名古屋JC)が就任 日本JCスローガン「“精神ルネッサンス”真の自立国家『美しき日本』の創造に向かって!!」
WB1月号	小泉純一郎内閣総理大臣と会頭が対談
1.19～22	2006年京都会議。「精神ルネッサンス 美しき日本への回帰『日本の魂(こころ)』が未来を拓く」をテーマに国立京都国際会館にて開催
3.19	第121回通常総会、共済会第25回定時総会開催
5.3～6	エリアC会議開催(仏領グアドループ島)
5.20～27	第19回国際アカデミー in松江開催。テーマ「自他共栄」
5.25～28	第56回JCI-ASPAC高松大会開催
6.7～10	エリアA会議開催(チュニジア)
6.14～17	エリアD会議開催(エストニア)
6.19～22	訪中ミッション&姉妹都市相互研修事業実施
7.5	次年度会頭予定者、奥原祥司(呉JC)に決定
7.22～23	サマーコンファレンス2006が横浜にて開催。テーマ「まきおこせ! 市民意識変革のムーブメント～志の波が『美しき日本』を呼び覚ます」
9.17～25	ロシアミッション開催
10.5～8	第55回全国会員大会郡山大会開催。大会テーマ「呼び覚ませ『美しき日本』、大会スローガン「輝け! 魂(こころ)のシンフォニー～そしてひろげよ、美しき礼楽の翼を～」
11.12～17	第61回JCI世界会議ソウル大会開催
11.15	「日韓平和推進共同宣言」に調印
WB12月号	安倍晋三内閣総理大臣と会頭が対談
12.11	小田原JCが日本JCとの協働運動「近現代史プログラム」を開催(横浜国立大学)

内外の動き

1.18	ライブドアに強制捜査、グループ企業の株の売り注文が殺到して東京証券取引所の取引が全面停止に(ライブドアショック)
1.20	米国産牛肉全面禁輸
1.23	証券取引法違反の容疑でライブドアの堀江貴文社長と取締役3人が逮捕(ライブドア事件)
2.6	東横インがホテルの不正改造問題で法令違反の系列ホテルが全国で60軒発覚
2.10～	冬季トリノオリンピック、女子フィギュアスケートの荒川静香選手がアジア勢初の金メダル
2.16	神戸国際空港が開港 マンション耐震強度偽装問題で販売主の株式会社ヒューザーが破産
2.17	フィリピン中部のレイテ島で大規模な地滑りが発生、犠牲者2000人以上
3.18	東武鉄道とJR東日本の日光・鬼怒川方面行き直通特急、「日光」「きぬがわ」が運行開始
3.21	第1回WBC(ワールド・ベースボール・クラシック)で王貞治監督率いる日本が優勝
4.1	電気用品安全法(PSE法)が施行
4.1	障害者自立支援法が施行され、すべての障害者福祉サービスに対し原則1割の利用者負担が開始
4.7	民主党代表に小沢一郎が就任
4.14	消費者金融大手「アイフル」が強引な取り立てを行っていたとして業務停止命令
4.24	在沖縄米海兵隊のグアム移転費用の59%の約7,000億円を日本側が負担することで合意
4.26	耐震強度偽装事件に関与した姉齒秀次元建築士ら8人が逮捕
5.1	在日米軍再編最終合意により、自衛隊は事実上米軍の指揮下にはいり、米軍の一部となる
5.18	耐震強度偽装事件に関与したヒューザーの小嶋進容疑者が詐欺容疑で逮捕
5.27	インドネシア・ジャワ島中部ジョクジャカルタでM6.3の地震が発生、死者5500人以上
6	後期高齢者医療制度強行採決(2008年施行)
6.3	シンドラエレベーター社のエレベーターでプレーキ制御プログラムにミス、東京都港区の高校生が窒息死
6.5	村上ファンドの村上世彰代表がインサイダー取引をしたとして証券取引法違反容疑で逮捕
6.20	イラク南部サマワに派遣していた自衛隊に撤退命令
7.17	インドネシア・ジャワ島南西沖のインド洋を震央とするマグニチュード7.7の地震が発生。津波も発生し、500人以上が死亡
7.22	パロマ工業製ガス瞬間湯沸かし器による一酸化炭素中毒事故で、過去19年間で死者21人
7.25	イラクで人道支援活動を行っていた陸上自衛隊員の最後の280名が日本へ帰国
8.15	小泉首相が終戦記念日に靖国神社参拝を敢行。首相としての参拝は6年連続6回目
9.20	第21代自民党総裁に安倍晋三が就任
9.26	安倍晋三が内閣総理大臣に指名
10.23	福島県の佐藤栄佐久・前知事がダム工事受注に便宜をはかった謝礼9億7千万円を受け取ったとして収賄容疑で逮捕
11.21	2004年10月に起こったイラクでの日本人拉致殺害事件で実行犯のフセイン・ファハミ被告に死刑判決
12.15	新教育基本法成立(12.22施行)
12.20	俳優・作家などとして活躍した青島幸男・元東京都知事が骨髄異形成症候群のため死去
12.30	イラクのサダム・フセイン元大統領の死刑執行



「日本の力」発信!

第56代会頭 奥原 祥司

呉JC 1967年生 02年呉理事長 05年副会頭 06年JCI常任副会頭 07年会頭
現・コトブキ技研工業(株)代表取締役社長

見直そう、日本の美学 「愛国心」と「道徳心」

20世紀半ば、敗戦のショックから立ち直った日本は経済至上主義を掲げ、高度成長時代へと突き進んでいきました。しかし、突然もたらされたアメリカン・イデオロギーに国民は戸惑いもしました。自由を勝手に解釈し、伝統的に受け継がれてきた道徳的美意識や公共心を忘れ、国家を挙げて物質的豊かさを一途に追求したのです。今、改めて社会を見渡せば、地域間格差・所得格差が広がり、バブル崩壊後を脱して景気が回復したといっても、60年間のツケは日本の社会を大きく歪めています。

私たちJAYCEEは、国家と地域社会の明日を拓くための市民のリーダーです。体内に息づいている国と地域を愛する想い、国のために役立つとする意思、日本人としての誇りと美徳である道徳心をもっと多くの市民の意識によみがえらせ、世界平和実現の鍵となる「日本の力」を、もっと自信を持って発信せねばならないと思います。

世界平和の実現のために

JCの究極の目的は、世界平和の実現です。地球上には宗教・民族・政治信条などさまざまな価値観と思想が存在し、JCIに加盟する世界105の国と地域、約20万人の会員の間にも当然のことながら違いはあります。私たちはまずそれらをよく理解し合ったうえで平和の旗を振らなければ、何の説得力もありません。

日本JCはJCIの中でも世界最大の国家青年会議所(NOM)に発展しました。運動提言も数多く行っており、名実ともにリーディングNOMとして位置づけられています。2006年、日本JCと韓国JCは合同委員会を設置しました。JCIでも希なケースです。これを第1歩

とし、お互いを理解して世界平和を実現するべく継続していきたいと思いません。

大志を抱くことは大切ですが、まずは足元をおろそかにせず、私たちが忘れてかけている「日本の力」を呼び覚ましましょう。一人ひとりが気概を持って取り組み、市民意識に問題を提起し、変革へと導くのです。

市民意識を変革する

日本JCでは国の政策に対しても独自に取り組み、憲法改正、皇室典範改正、年金問題、領土問題等々、さまざまな提言を続けてきました。

また、全国のLOMと協働し、2004年から衆議院選挙や各首長選挙で、マニフェスト型公開討論会を開催。今後も全国にこの風を吹き渡らせ、市民の主権行使が確実に担保される公職選挙法改正が行なわれるまでは継続して取り組む必要があります。2007年は参議院選挙が行なわれる年です。公開討論会は主権者である国民が候補者の人柄にふれ、政策を直接聞くことができる格好の場であり、全国719LOMのスケールメリットを生かせる、またとない機会です。

JC組織の強化

LOMとNOMは機能役割は違えども、同じ位置関係にある運動体です。JC運動すなわち市民意識変革運動は、市民との接点が多いLOMが行なうことで効果が生まれます。

そのLOMの活動をサポートし、協働してJC運動を推進するNOMの窓口がブロック協議会です。全国47のブロック協議会は各都道府県に配置されたNOMであり、ブロック協議会会長はまさに日本JCの会頭名代なのです。この組織運営によって、NOMは全国組織

のスケールメリットを生かすことができ、LOMと力を合わせることで全国津々浦々での市民意識の変革運動をスムーズに実践することができます。一方、地区協議会は、ブロック協議会のLOM公式訪問結果を本会に提出し、場合によってはブロック協議会やLOMからの要請を本会理事会に議案上程する役割を担っています。

今まではブロック協議会、地区協議会、本会の組織連携が曖昧になっていたように思います。JCそのものには計り知れない力があります。NOMとLOMが徹底して協調できる組織進化を図ることで、今まで以上の力を集約できると信じています。

「OMOIYARI運動」を 世界平和実現の原動力に

日本JCがJCIにおけるリーディングNOMとして、そして世界平和のムーブメントとして発信していくべきものに「OMOIYARI運動」があります。これは、人を思いやる利他の精神を世界に広げていこうと2005年に立ち上げた運動で、2006年にはJCIに向けた運動展開を大々的に行ないました。世界は広く価値観も多岐にわたるため、全ての地域に浸透させるのはやさしいことではありませんが、2006年度に全てのエリア会議で展開した結果をフィードバックし、より優れた内容にして、世界平和実現の一助としていきます。

世界の人たちの目を「OMOIYARIの心」に向けさせるために、日本JCならではの方法と戦略で有効なプログラムをつくり、実践しなければなりません。「日本の力」をもってOMOIYARIの精神を世界に伝播し、真の世界平和実現に向かって、世界中のすべての人々にアピールしてまいります。

(抜粋)

日本青年会議所

1	日本JC第56代会頭に奥原祥司(呉JC)が就任 日本JCスローガン「『日本の力』発信! 理想国家日本の創造に向けて」
WB1月号	スコット・グリーンリー JCI会頭とエジソン・コダマJCI事務総長が会頭と特別鼎談
1.18～21	2007年京都会議。「OMOIYARIの心あふれる『日本の力』発信!」をテーマに国立京都国際会館にて開催
1.31～2.1	沖縄ミッション開催
2.22～27	エリック・タンJCI日本担当副会頭(JCI香港)による日本公式訪問実施
3.9、16	9日に石橋秀郎副会頭が4月22日に参議院補選が実施される福島で、16日には奥原会頭が東京・総務省記者クラブで記者会見。日本JCがLOMに働きかけ「公開討論会」開催を表明
3～	各地でJC主催の公開討論会を順次開催
3～	「OMOIYARI運動推進ファシリテーター」養成セミナー全国各地で順次開催
3.18	第124回通常総会と日本青年会議所共済会第28回定時総会開催(東京ビッグサイト)
WB5月号	ソン・インソクJCI韓国中央会長(横浜)、トミー・シュ JCI台湾総会長(台湾)、クレメント・ウー JCI香港会頭&エリック・タン JCI副会頭(香港)がそれぞれ奥原会頭と「OMOIYARI運動」をメインテーマに対談
4.27	「特定非営利活動法人・人間開発協会」の設立式典開催(赤坂プリンスホテル)
5.2～5	エリアA会議開催(南アフリカ共和国・ヨハネスブルグ)
5.3	民間憲法臨調主催による公開憲法フォーラム開催(東京・砂防会館)。会頭がJC版憲法草案作成に至る背景と理念について講演
5.15	沖縄復帰35周年記念式典開催(与儀公園)
5.16～19	エリアC会議開催(パラグアイ・アスンシオン)
5.31～6.3	第57回JCI-ASPACチュンリー大会開催(台湾)。日本から国外開催としては近年最大規模の2600名以上が参加し、「OMOIYARI運動」を発信(エリアB会議)
6.13～16	エリアD会議開催(オランダ・マーストリヒト)
6.27～29	第3回JCI-UNリーダーシップサミット開催(ニューヨーク国連本部)
7.5	次年度会頭予定者、小田與之彦(七尾JC)に決定
7.7～14	第20回国際アカデミー inもりおか開催。テーマ「武士道」
7.21～22	サマーコンファレンス2007が横浜にて開催。テーマ「『日本の力』発信!～祖国を愛する心と高潔なる精神で導く 理想国家日本創造に向けて～」
9.13	日本JCロシア友好の会「創立15周年記念式典」開催
9.17～25	ロシアミッション開催
9.27～30	第56回全国会員大会帯広大会開催。大会テーマ「でっかい大地で、未来を拓け!～『仁』の心溢れるおらかな民と共に～」
10.2～5	アジア太平洋地域27カ国の代表が会し、トップリーダーズサミット開催
10.5～7	本年度第2回エリック・タンJCI-VP公式LOM訪問実施
11.5～10	第62回JCI世界会議トルコ・アンタルヤ大会開催。総会において「OMOIYARI運動」が3年間のJCIエンドースプログラムに承認

内外の動き

1.11	大手菓子メーカー「不二家」の泉佐野工場で菓子の消費期限偽表示が発覚
1.20	関西テレビ制作「発掘! あるある大事典II」で捏造された情報が放送されていたことが発覚、スポンサーが降板、番組打ち切り
3.21	インフルエンザ治療薬「タミフル」を服用した患者が異常行動を起こす疑いが問題に
3.26	「NOVA」講師のイギリス人女性の遺体が発見された事件で、市橋達也容疑者が死体遺棄容疑で指名手配
4.8	第16回統一地方選挙。東京都知事選では現職の石原慎太郎が3選
4.17	長崎市の伊藤一長市長が男に拳銃で撃たれ死亡
4.23	ロシアのエリツィン前大統領が死去
4.30	麻生太郎外相、アメリカ合衆国国務省でライス国務長官と会談、北朝鮮が核施設を停止しない場合、追加の経済制裁を行なう認識で一致
5.3	前大阪府知事・横山ノックが咽頭がんのため死去
5.13	山口県に初の民間刑務所「美祿社会復帰促進センター」が開庁
5.15	国民投票法が成立
6.6	虚偽の申請で事業所指定を不正に取得していた問題で、訪問介護企業「コムスン」に厚生労働省が介護事業所の指定打ち切り
6.21	教育改革関連3法が国会で可決、成立。教育免許更新制の導入、30時間以上の更新講習の受講義務化など
6.28	宮沢喜一元首相が老衰のため死去
8.14	北海道の石屋製菓が「白い恋人」の賞味期限を本来の期限の1ヶ月先の日付に改ざんしていたことが発覚
8.25	大阪世界陸上で、女子マラソン土佐礼子選手が銅メダル獲得
9.3	「補助金不正受給問題」の責任をとって遠藤武彦農林水産大臣が辞任
9.12	安倍晋三首相が突然の退陣表明
9.23	福田康夫元官房長官が新総裁に確定
10.1	郵政民営化がスタート
10.10	自殺サイト囁託殺人の容疑で電気工・斉藤一成容疑者が逮捕
10.12	三重県伊勢市の菓子製造元「赤福」が30年間、製造年月日の偽装表示をしていたことが発覚
10.24	北海道苫小牧市の食肉加工販売会社「ミートホープ」の元社長・田中稔容疑者ら4人が不正競争防止法違反(虚偽表示)の容疑で逮捕
10.26	英会話学校「NOVA」が会社更生法申請
12.10	高級料亭吉兆グループの「船場吉兆(大阪市中中央区)」の幹部が商品の産地偽装、消費期限改ざんを認める謝罪会見
12.13	アメリカ大リーグの筋力強化などの禁止薬物使用実態を調査した「ミッチェル・レポート」が発表され、有名選手ら約90人もの薬物使用が報告



「気高き日本」の創造へ向けて

第57代会頭 小田 與之彦

七尾JC 1968年生 03年七尾理事長 05年JCI副会頭 06年副会頭 08年会頭
現・(株)加賀屋取締役社長

失われた日本のアイデンティティ

これまで我が国では、自分の国や自らの民族を前向きに評価し、この国を誇りに思うあるいは「日本を愛している」と声高に主張することがずっと抑制されてきました。この国では、国家権力などという言葉に代表されるように、国家は日本国民と対立する存在、つまり国家は国民から常に何かを奪うもの、国民の権利を蹂躪するものという考え方が主流を占め、国家と国民個人がそれぞれの役割を補完しあって独立した国家を形成するというような考え方は殆ど採られてこなかったように思われます。つまり、国家を悪として一方的に否定する考え方が定着し、国への誇りや愛着心を表明することは、特異で頑迷な考え方を持っていると思われてきました。従って、様々な場面において日本人は自国について語るときは、何らかの恥じらいとためらいを覚えながら論じてきました。

最大の原因は、やはり大東亜戦争にあると思われます。戦争の忌まわしい記憶と、それを国民にもたらした国家に対する不信や反感といったものが一部の国民感情に根づき、現在の国家拒否の土壌となっていると考えられます。これに加え、戦後の連合軍司令部（GHQ）が採った日本固有の価値観や継承されてきた知的伝統を否定する政策も大きな影を落としています。

いま日本人に求められている行動は国民一人ひとりが国家と向き合い、その要素となる日本の歴史や伝統、文化、豊かな精神性、倫理道徳観、自由主義経済や発展した産業、民主主義社会、社会情勢、国際的な地理的環境といったものを自分自身で学び見つけなおすことです。そして自己の国

家観や歴史観、人生観、そして未来像を持ち、それらを基にいかにして国家と国民が関わっていくかを議論し明確な考え方を築き上げることです。その上でこの国のあり方、すなわち国家観や日本人としてあるべき姿、すなわち日本人のアイデンティティを共有し、それを通じて明るい未来と希望が持てる我が国の国家像を明確に描くことであります。

2008年はその実現のために、全国に広がる700以上のネットワーク拠点を活かしつつ国民的議論を市民の視点で展開すると同時に、強い使命感と責任感を持ってこの国を明るい希望に満ち溢れる未来に向けて導いていく志士の集団である日本の青年会議所の存在価値を最大限に発揮していきます。

国民主権の確立へ— 自由と真の民主主義の国へ

日本JCが近年続けている取り組みに、マニフェスト型公開討論会の実施による国民主義の確立があります。各地に定着し実績を上げると共に、2007年の地方統一選挙を前に首長に限りピラという形でマニフェストの配布が可能になるという公職選挙法の改正に結び付けました。これにより国民が政策本意の政治選択が可能になり、住民の政治への関心の高まり、自らが責任をもって自分たちの地域づくりに参画していくという意識の醸成につながり、真の国民主権の確立にむけた着実な歩みが可能になります。また日本JCが、公約として掲げられたマニフェストが実行されているか市民と共に検証し続けることで、マニフェストが政策実現のためのツールとしての真価を発揮出来るようになるのです。

世界との友情を育み 平和への歩みをリードする 自主独立した国家の創造を

現在、顕在化こそしていないものの日本における安全保障や、それと深く関わる領土領海問題は多くの不安定要素を抱えています。にもかかわらず国民的な関心は盛り上がり欠けています。これは、長年「国益」といった観点からわざと目をそらしてきた結果ではないでしょうか。ここでいう「国益」とは、国民生活においてエネルギーや食糧の確保、安全で安寧な生活を将来にわたって担保する権利の確保を意味します。

我が国の現状は、食糧自給率はカロリーベースにおいて四割と主要先進国の中で最低であり、エネルギー自給率も原子力を含んでも約二割と非常に低い数字を示しています。しかも、主要エネルギーである石油は八割を中東からの輸入に頼っており、その輸送経路の安全についても保証の限りではありません。安定した資源を確保する政策を広範囲で総合的に考える必要があります。一方、そのような政策策定を可能にするためには、豊富な海底資源、海洋資源、水産資源を持つとされる排他的経済水域の画定を明確にする必要があります。国の安全保障については、アメリカとのパートナーシップをどう方向付けるかなど繊細な議論を要しますが、まずは日本の立ち位置を示す必要があると思います。国家の政策については政策が進めるものです。しかしながら、それらは国民の力強い世論の後押しを必要とします。JCは市民に対し問題意識を喚起し、国民的な議論を巻き起こしてまいりましょう。

(抜粋)

日本青年会議所

- 1 日本JC第57代会頭に小田與之彦(七尾JC)が就任
- 日本JCスローガン「したたかで、強く、誠実な、『気高き日本』の創造を目指して ローカルコミュニティの復活とJCのコミットメント」
- 1.13 JCI本部(アメリカ・セントルイス)にて行なわれたJBM(JCI理事會)で、「OMOIYARIプログラム」はじめ「2010年JCI世界會議大阪誘致」などをPR
- 1.17～20 2008年京都會議。「高い志と使命感によるローカルコミュニティ復活!『気高き日本』の創造!」をテーマに国立京都國際會館にて開催
- 1.18 第1回理事會、同ブロック會長會議開催
- 1.19 第126回通常總會開催
- 3.23 第127回通常總會開催
- 「地域温暖化防止アクションプラン」決定
- 4.27～29 訪中ミッション実施
- 4.30～5.3 エリアC會議開催(パナマ)
- 5.3 憲法タウンミーティングを各地で開催
- 5.14～17 エリアA會議開催(ブルキナファソ・ワゴドゥー)
- 5.29～6.1 第58回JCI-ASPAC釜山大会開催(韓国)。「OMOIYARI」運動を世界に普及させる、09年ASPAC長野大会のPR、10年JCI世界會議の大阪招致
- 6.4～8 エリアD會議(フィンランド)
- 6.12～18 ブラジル交流ミッション実施(サンパウロ、リオデジャネイロ)
- 6.23～25 JCI中間常任理事會開催(JCI本部)。ASPAC長野大会、世界會議大阪大会など重要案件を審議
- 7.5 次年度會頭予定者、安里繁信(那覇JC)に決定
- 7.7 G8洞爺湖サミットに合わせ、全国300カ所以上で「月ほたる」実施
- 7.14～18 第21回國際アカデミー in 立川開催。テーマ「絆」と「共生～Symbiosis」
- 7.19～20 サマーコンファレンス2008が横浜にて開催。テーマ「『気高き日本』創造へのコミットメント!～市民の活力(ちから)が地域を創る、ローカルコミュニティの復活!～」
- 7.28～29 2008年JCI-UNリーダーシップサミット開催(ニューヨーク国連本部)
- 8.2 第39次北方領土返還要求現地視察大会開催
- 9 ロシアミッション開催
- 10.9～12 第57回全國會員大会浜松大会開催。大会テーマ「やらまいか!日本!～気高きこの国の未来のために～」
- 10.10 第128回通常總會開催
- 11.4～9 第63回JCI世界會議ニューデリー大会開催(インド)。メインテーマ「HELLO AGAIN!～OMOIYARIから始まる世界との友情～」。10年世界會議の大阪開催決定、09年ASPAC長野大会PR
- WB12月号 麻生太郎第92代內閣總理大臣(1978年日本JC會頭)と會頭が対談

内外の動き

- 1.11 新テロ対策特別措置法案が国会で成立
- 薬害肝炎被害者救済特別措置法が国会で成立
- 1.17 NHKの報道局記者ら3人が金融商品取引法違反のインサイダー取引の疑いで証券取引等監視委員會から聴取を受ける
- 1.22 中国製ギョーザ食中毒問題が発生
- 1.28 日本マクドナルドの店長が未払い残業代などの支払いを求め訴訟、東京地裁は主張を認め同社に残業代など約750万円の支払いを命じた
- 2.7 「君が代」斉唱時の不起立を理由に再雇用を拒否された都立高の元教職員13人が東京都に賠償を求めた訴訟で、東京地裁が2,760万円の支払いを命じた
- 2.11 時津風部屋力士傷害致死事件で元時津風親方と同部屋の力士3人が傷害致死容疑で逮捕
- 沖縄県沖縄市で発生したアメリカ海兵隊兵士による14歳の少女に対する強姦事件について、日本の外務省がアメリカ大使館に正式抗議
- 2.19 イージス艦が漁船と衝突
- 東芝、HD DVD市場からの撤退を正式発表
- 2.20 インドネシア・スマトラ島西方のシムル島沖のインド洋で、マグニチュード7.5の地震発生
- 2.23 ロサンゼルス市警が「ロス銃撃事件」の三浦和義氏元被告をサイパン島で逮捕
- 3.14 中国・チベット自治区で、中国政府に対する抗議運動から大規模暴動に発展
- 4.1 後期高齢者医療制度施行
- 5.12 マグニチュード8.0に及ぶ四川大地震の発生、四川省・甘肅省・重慶市・雲南省等で約4万人が死亡
- 6.8 秋葉原無差別殺傷事件で7人が死亡
- 8.8～ 北京オリンピックで、競泳の北島康介が2大会連続2冠
- 9.1 福田康夫首相が就任後1年足らずで辞意を表明
- 9.15 アメリカのリーマン・ブラザーズが経営破綻。米史上最大規模の倒産。メリルリンチは身売り、世界同時株安に(リーマン・ショック)
- 9.24 麻生太郎が日本の第92代首相に就任
- 9.29 アメリカで金融安定化法案が否決。これをきっかけに金融危機が世界的に拡大
- 10.1 松下電器産業が社名を「パナソニック株式会社」に変更
- 10.3 アメリカ合衆国政府、緊急経済安定化法を可決、成立
- 10.11 北朝鮮のテロ支援国家指定を解除
- 11.4 バラク・オバマが第44代アメリカ合衆国大統領に当選
- 12.5 改正労基法が成立。時間外労働の割増賃金を引上げ(2010.4施行)
- 改正国籍法が成立



やさしくあるためにつよくあれ!

第58代会頭 安里 繁信

那覇JC 1969年生 00年那覇理事長 08年副会頭 09年会頭
現・シンパホールディングス(株)代表取締役会長(CEO)

己を律することの大切さを説く

JCは社会の何たるかと若さという無限の可能性を教えてくれた場所です。未熟さゆえ、時として思い上がった行動をたしなめられながらも、「明るい豊かな社会の実現」に心から共感を覚え、情熱を持って、臆せず怯まず青臭いながらも、JAYCEEとして、経営者として、大人として、そして父親として今を精一杯生きてきました。

現在のJCに対する社会的な評価は、心地よいものばかりではありません。真面目に生きている頼もしいメンバーも数多く存在している一方で、残念ながら、必ずしもそうしたメンバーばかりではないのが現状です。「所詮、二代目のボンボン集団が…」などという妬みや批判は以前から承知のことですが、「きみたちに天下国家を語る資格があるのか」「言っている趣旨には賛同するが、皆さんの普段の姿勢は理解しかねる」「誰があなたたちを市民のリーダーって決めたんだ」「地域の未来のことよりも、我が社の明日はどうなるんだ」そんな声が存在していることを我々は真摯に受け止めなければなりません。

大半の批判は、JC運動に対する批判ではなく、その運動を推進している我々自身に対するもの。すなわち、今の我々にとって一番大切なのは、自らを律することなのです。「明るい豊かな社会」を実現しようと決めたのであれば、まずは自分自身の生き方を市民に示す必要があるだろうし、そんな覚悟を示すことで説得力が生まれるのです。

自分の生き方を語るることの大切さ ～愛するわが子への メッセージとして～

我々は子をもつ親世代です。教育はまず親が子にすべきことですが、親が子どもに何かを伝えるとき、そこに実行が伴っていないければ説得力はありません。

我々はきちんと親孝行をしているでしょうか。我々が親に対して敬意を払う姿勢からしか、子どもたちは親孝行のなんたるかを学ぶことは出来なんでしょう。同様に、大人の背中を見てそこに憧れや偉大さを感じなければ、子どもたちは生きることのなんたるか、生きることの目標を見失うに違いありません。人間社会の中での最小限のコミュニティーである家族という単位で育んでいかなければいけない「家族愛」の尊さをはじめ、地域で生きる喜びや「郷土愛」、そして祖国の近現代史を自分の言葉で語れない親であっては、あまりにも悲しすぎる。本来の教育として語り継いでいくべきは、頼もしい親としての生き様こそがすべてです。あなたは大人として、子どもたちに自分の言葉で人生を語れますか。

JCプライドの伝播 ～あなたは、JCが社会を変えられると胸を張って言えますか～

我々は、JCという組織に誇りを持っているでしょうか。JC運動に可能性や価値を感じているでしょうか。自国に誇りを持って生きることの重要性を訴える団体として、まずは帰属する組織にプライドを持たなければ、説得力を持つことは出来なんでしょう。

会員減少がとまらない。その理由をしばしばJC運動が理解されていないと考えているふしがありますが、果たしてそうでしょうか。会員拡大ができないのは、JC運動の趣旨が理解されていないのではなく、そこで活躍する我々の姿勢が理解されていないだけなのです。JC運動を語れる人間であれば、また各々の生き方に自信を持っている人間であれば、自ずと説得力が身に付いているはずで、それに言霊が宿り、情熱を傾けて、ただひたすらに相手を説得すればいい。

「あなたに出会えて本当によかった」理

事長には会員からこう言わしめるだけの責任がある。全国にいる理事長にはそんな魅力のあるカッコいい指導者になっていただきたいと心から願っています。

私の想い

JCは思い出を語る団体ではありません。未来を語る団体なのです。JCとは、人生を生き抜く力を体得する道場であり、JCで過ごした時間は、生涯を通じた成長の糧とされるべきです。自らの言葉で、一度でも経営とは何たるかを語ったのであれば、絶対に会社を潰してはならない。一度でもまちづくりの大切さを口にした人間であれば、死ぬまで地域と真剣に向き合わねばならない。一度でも天下国家を論じたのであれば、現実から目をそむけてはならない。JCという組織にかかわった者として、そんな覚悟でJCと向き合ってほしいと思います。

人生において、何をしたかということも大事ですが、誰に何を残せたかが最も重要なことではないでしょうか。すべての可能性は人から生まれるのです。日本の青年会議所は、その設立以来、社会の至るところで様々な足跡を残してきましたが、JCという組織の本当の素晴らしさは、JCを通じて活躍したJAYCEEが、JCを巣立って、JCという後ろ盾を失ってからも、現役の時と変わらず、いやそれ以上に本気で社会と向き合い、自分の生き様にかけたたくさんの轍を残してきたことにあります。名もなき数多のJAYCEEが、JCで身につけた各々の思想や哲学を、その後の人生で如何なく発揮していることこそ、JCの最も誇るべき価値だと私は確信しています。JAYCEEの皆さん、どうか覚悟をもってJCという組織に向き合ってください。それは、今を生きる者として、各々の人生に真摯に向き合うこと、そのものなのだから。

(抜粋)

日本青年会議所

2009

- 1 日本JC第58代会頭に安里繁信(那覇JC)が就任
日本JCのスローガン「やさしくあるためにつよくあれ! リアリティと説得力を伴う『JCプライド』の実践!」
- 1.22～25 2009年京都会議。「やさしくあるためにつよくあれ! リアリティと説得力を伴う『JCプライド』の実践!」をテーマに国立京都国際会館にて開催
- 1.24 第129回通常総会開催
- 3.21 第130回通常総会開催
「2大政党代表者と日本JC会頭による緊急討論会」開催
- 5.3 全国各地で一斉に国民参加型憲法タウンミーティング開催
- 5.6～9 エリアC会議開催(ブルトリコ・サン・ファン)
- 5.20～23 エリアA会議開催(コートジボワール・ヤムスクロ)
- 6.3～7 第59回JCI-ASPAC長野大会開催。大会テーマ「和～ Making Smiles & Cherishing Harmony」(エリアB会議)
- 6.10～6.13 エリアD会議開催(ハンガリー・ブタペスト)
- 6.25～26 「対馬フォーラム～にっぽんを守る! 『防人の島』の集い～」を開催
- 7.4～11 第22回国際アカデミー in 鹿児島開催。テーマ「誇～ Pride～」
- 7.5 次年度会頭予定者、相澤弥一郎(東京JC)に決定
人間力大賞2009 第23回授賞式典・受賞者発表開催。グランプリは、自らも難病と闘いながら希少難病患者支援をしている中岡亜希氏が受賞
- 7.11～12 第40次北方領土返還要求現地視察大会開催(根室)
- 7.25～26 サマーコンファレンス2009が横浜にて開催。テーマ「『真日本建国』へ舵を切れ! ～開港の地から無限の可能性ある未来に向けて～」
- 7.28～30 2009年JCI-UNリーダーシップサミット開催(スイス・ジュネーブ)
- 10.15～18 第58回全国会員大会沖縄那覇大会開催。大会テーマ「やさしくあるためにつよくあれ!～アドマイヤー型社会の実現こそが『真日本建国』を導く～」、大会スローガン「ゆいまーる～結べ JAYCEEの心、美ら島で奏でる平和への誓い～」
- 10.16 第131回通常総会開催
- 11.16～21 第64回JCI世界会議チュニジア大会開催

内外の動き

- 1.1 日本、ウガンダ、オーストリア、トルコ、メキシコが国際連合安全保障理事会の非常任理事国となる
- 1.2 バラク・オバマが、第44代アメリカ合衆国大統領に就任。黒人の大統領は、アメリカ合衆国史上初めて
- 1.23 世界最初の温室効果ガス観測技術衛星「いぶき」など人工衛星計8基搭載したH-IIAロケット15号機、種子島宇宙センターから打ち上げ成功
- 1.27 日本の漁船「第38吉丸」、日本海でロシア沿岸警備隊に拿捕される
- 1.28 国際通貨基金(IMF)、2009年の世界全体の経済成長率が0.5%と、第二次世界大戦後最悪となる見通しを発表
- 2.22 映画『おくりびと』が第81回アカデミー賞最優秀外国語映画賞に選ばれる。またアカデミー短編アニメ賞に『つみきのいえ』が選ばれ、日本作品がダブル受賞
- 4.5 朝鮮民主主義人民共和国、咸鏡北道舞水端里より日本東方の太平洋上に向けて、ミサイル発射実験を実施。ミサイルは、1段目が秋田県沖の日本海に、2段目は東北地方上空を通過し、太平洋上に落下
- 4.10 今上天皇・皇后夫妻が金婚式を迎え、宮中で祝賀行事等挙行
- 4.24 世界保健機関(WHO)により、アメリカ合衆国とメキシコ合衆国で豚を起源とする新型インフルエンザ感染症が確認され、人間同士によるインフルエンザ感染事例が報告された
- 6.11 世界保健機関(WHO)が新型インフルエンザの警戒水準を現行の「フェーズ5」から最高の「6」へと引き上げ、パンデミック(世界的大流行)を宣言。パンデミック宣言は、1968年の香港かぜ流行以来、41年ぶり
- 6.25 アメリカ合衆国の歌手、マイケル・ジャクソンが逝去
- 7.19 国際宇宙ステーションで日本が担当する実験棟「きぼう」が24年かけて完成
- 7.22 日本各地、中華人民共和国、インド、太平洋の島で皆既日食を観測。21世紀で最も継続時間の長い日食となる
- 7.31 宇宙飛行士の若田光一が初めて日本人として137日におよぶ長期の宇宙生活を終え、スペースシャトル・エンデバーでケネディ宇宙センターに帰還
- 9.16 民主党代表の鳩山由紀夫が第93代内閣総理大臣に任命され、鳩山由紀夫内閣が成立
- 9.29 島根県出雲市の砂原遺跡で、12万年前頃には日本列島に人類が存在したとみられることを示す日本最古の旧石器20点の画期的な発見を調査団が発表
- 10.27 山口県と福岡県の県境に位置する関門海峡で、海上自衛隊の「くらま」と大韓民国船籍貨物船「カリナ・スター」が衝突して双方において火災が発生
- 11.13 バラク・オバマアメリカ合衆国大統領が初来日
- 11.12 天皇陛下即位20周年祝賀式典を内閣府主催国家行事として挙行



価値ある人生を JAYCEEとして生きぬかん!

第59代会頭 相澤 弥一郎

東京JC 1970年生 08年東京理事長 09年副会頭 10年会頭 現・櫻興産(有)代表取締役

陽はまた昇る

1987年12月、父が病に倒れ帰らぬ人となりました。それまで何不自由のない恵まれた環境で過ごしてきた17歳の青年にとって、その現実はありませんにも大きな出来事でした。家族の悲しみや不安を背負いつつも、気丈にふるまう母と落ち込む妹たちを励ましながら、長男としての使命感だけで、昭和の最後を生き抜いていたあの頃。生業は不動産管理業ですが、この後に起こるバブル経済や土地神話の崩壊、失われた90年代と評された絶望に近い時代を、未熟ながら家長として、経営者として、守るべきものの大きさと、時代の荒波と社会からの孤独感と戦いながら、人間不信にさえ陥るような人の欲望の汚さに、辛酸をなめるような歩みだったと今更ながらに思います。そんなとき、縁あって青年会議所に入会しました。社会性の乏しかった私を、この組織はあたたかく迎えてくださり、そして、師と仰げる大きな人間との出会い、多くの親友と呼べる大切な友に恵まれ、家庭までも持てた今、毎日をひたすら感謝の念を抱きながら過ごしています。

そんな私が一つだけ信じて疑わなかったこと、それが必ず陽はまた昇るといふ、将来への希望だったのです。

頼もしい大人の背中あなたから

驚くべきことに、我が国の自殺者は交通事故による死亡者数をはるかに上回っているといえます。その一方で世界に眼を転じれば、3秒に一人の割合で、貧困と飢餓により幼い命さえ奪われているという矛盾をどう理解すれば良いのでしょうか。

おそらく今も命は大切です、と伝えるしか術がない多くの教育現場、教科書的な教え方でつまらなくするよりも、苦しい世の中だけど、大人が前のめりに歩む背中を見せることのほうが余程良

いのではないかと思います。自らの将来に期待や夢を追えなければ、それに続く誰もが未来は夢や希望に溢れていることなど理解などできるはずがありません。ではそんな頼もしい背中を誰が見せるのか…。

それは、私の最も信頼するJAYCEEである「あなた」しかいないのです。

この時代、少なくともJAYCEEは将来を信じることをやめてはならないと思うのです。私たちが理想を語らなければ、希望に満ちた未来など訪れません。空虚に時代の移り変わりを傍観するのではなく、個人の力は小さくとも私たちにできる何かがある筈です。生きることとは、自らの命をどう使うのか、生きとし生けるもの全てに共通する命題なのですから。

青年会議所運動とは何なのか

人生80年以上と言われ、理想を語ることが許される年代、試行錯誤してプロセスを経験することが求められる年代、価値ある人生を生き抜く大切な期間に、互いに高め合う修練の場が青年会議所であり、多くを吸収できる場所であると考えます。青年会議所は役職よりもその現役時代をどのように向き合うかに価値を見出し、卒業することが最低条件にあるのです。そして、現役時代に培った人生の経験を40歳以降の人生で、遺憾なく社会へ還元することこそ最も尊い価値があるのです。今、この年代に謙虚に向き合い、互いに高め合うような団体は他にない。良き指導者にも悪き指導者にも向き合うことは成長する自分にとって全てが糧です。自らにどのように持ち帰るのか、また、どのように活かすのかはあなた次第であり、青年会議所の魅力を高めることもあなた次第なのです。社会を変えようとするよりも、まず己を高めることから始めましょう。自らを変えられないものに社会など変えられるはずもな

ければ、世に説得力を持って訴えることなども出来ないのです。

有事に活かせる 青年会議所のネットワーク

自然災害の多い日本においては、自治体間での相互協定に見られるように、民間初の救援協定を47都道府県に亘るブロック協議会が主体となって互いに助け合うことが出来る仕組みが大切です。有事に弱い縦割り組織ではなく、同じ綱領を有し、我が国に広く横断的に地域活動を行ってきた実績ある青年会議所だからこそ、有事に最も力を発揮してきたことはJCの歴史に見ても分かるとおりで。そのときになって慌てるのではなく、今までの災害支援活動を検証し、各ブロック協議会の特性を活かして、災害支援の種類やメンバーの数などを踏まえて、計画性の高い支援マニュアル作成と相互協定をもって、有事に備えられることは我が国ではブロック協議会において他にありません。各地に点在する地域を守る指導者であるJAYCEEが、地域から本当に頼れる存在であることを証明していきましょう。

新しい時代は己の一步から

私たちは次の10年というドアの前に立ち、まさにドアを開こうと手をかけようとしています。可能性溢れる近未来2020年を大いに描いてみようではありませんか。そして踏み出してみましょう。私たちの目の前の一步から、明日への全てが始まるのです。あなたの一步は世界の平和と安定にさえ貢献しうる、そんな尊い一步として証しを刻んでいくことでしょうか。私は同じ歩幅のあなたの一步に期待しています。

明日の時代、世界平和に貢献しうる我が国日本を、私たち青年でつくっていきましょう。

(抜粋)

日本青年会議所

1	日本JC第59代会頭に相澤弥一郎(東京JC)が就任 日本JCのスローガン「陽はまた昇る」地域を照らす光明たれ!
1.21～24	2010年京都会議。「曇りなき『心の月』で明日を照らす 世界に輝く日本 論ずることに終わるなかれ! 真の民主主義国家の創造」を基本理念に国立京都国際会館にて開催
1.23	第132回通常総会開催
3.21	第133回通常総会開催
4.21～24	エリアC会議開催(アルゼンチン・ロザリオ)
5.3	各地で憲法タウンミーティング開催
5.12～15	エリアA会議開催(ナイジェリア・アブジャ)
5.28～30	地域活性化から市を開催(幕張メッセ「旅フェア」)
6	「OMOIYARI」運動テーマソング決定。Le Couple 藤田恵美さんと提携を交わし、世界平和に向けてOMOIYARIの心を広く伝える非営利活動を共同で行なうことが確認。歌のタイトルは、「OMOIYARIのうた」とその英語バージョン「OMOIYARI SONG」
6.3～6	第60回JCI-ASPACシンガポール大会開催。「Gotong Royong(相互扶助)」の精神のもとアジア・太平洋地域の約30カ国からメンバーが集結(エリアB会議)
6.9～6.12	エリアD会議開催(デンマーク・オーフス)
6.20	政権実権・参院選公約検証大会開催
6.21～23	2010 JCIグローバル パートナーシップサミット開催(アメリカ・ニューヨーク)
7.1	6月24日付けで正式に公益認定を受け、登記を完了した7月1日から「公益社団法人日本青年会議所」としてスタート
7.5	次年度会頭予定者、福井正興(京都JC)に決定
7.16～22	第23回国際アカデミー in つくば開催。テーマ「光明たれ!」
7.24～25	サマーコンファレンス2010が横浜にて開催。テーマ「時代を切り拓く! NEXT STAGEへ」
9.18	人間力大賞2010 第24回授賞式典・受賞者発表開催。グランプリは、バングラデシュでストリートチルドレンの支援をする渡辺大樹氏が受賞。人間力大賞2010ジュニア版U18も加わり式典には444名が参加
9.30～10.2	第59回全国会員大会小田原・箱根大会開催。大会テーマ「禪で繋げ! 報徳の精神(こころ)」
9.30	第134回通常総会開催
11.2～7	第65回JCI世界会議大阪大会開催。大会テーマ「RESPECT ALL ～ As Citizens of One World～」のもと、大阪のまちを舞台にさまざまなプログラムを展開。また、福山JCの原田憲太郎が2011年度JCI会頭に選出
11.26	離島フォーラム2010開催
11.28	公益社団法人日本青年会議所、全国商工会青年部連合会、全国中小企業青年中央会、日本商工会議所青年部の青年団体4団体が、ネットワークを結ぶことに合意し、調印式執行
12.27	領土・領海に関する諸問題解決に向けた「全国一斉100万人署名運動」の署名738,624名分を内閣総理大臣宛に提出

内外の動き

1.1	奈良県で平城遷都1300年祭が開幕
1.12	ハイチの首都ポルトープランス付近でマグニチュード7.0の地震が発生
2.4	石垣島で日本最古となる2万年前の人骨発見
2.12～28	バンクーバー冬季オリンピック開催
2.27	チリコンセプトンにてマグニチュード8.8の地震が発生
3.11	茨城県の航空自衛隊百里飛行場(愛称・茨城空港)が民間共用を開始
4.12～13	第1回核安全サミットがアメリカのワシントンD.C.で開催
4.14	青海地震が発生。中国青海省玉樹チベット族自治州玉樹県でマグニチュード7.1の地震が起こる エイヤフィヤトラヨークトルの噴火が始まる。各国で空港を閉鎖、ヨーロッパを中心に航空機の世界各便が欠航、世界各国の30ヵ国以上の首脳がポーランドの大統領の国葬の出席の辞退を余儀なくされた
5.1	上海国際博覧会の開幕
5.18	宮崎県で流行している家畜伝染病口蹄疫問題で東国原英夫知事が非常事態を宣言
6.2	内閣総理大臣鳩山由紀夫が民主党臨時両院議員総会の席で退陣を表明。また小沢一郎民主党幹事長も同時に辞任を表明した
6.4	鳩山由紀夫内閣が総辞職。菅直人が民主党代表選挙第94代内閣総理大臣に選出される
6.11	アフリカ大陸初のFIFAワールドカップ 南アフリカ大会が開幕
6.13	小惑星探査機はやぶさが地球に帰還
7.29	東京都足立区の111歳とみられる男性のミイラ化した遺体を発見。所在不明高齢者問題に発展した
9.10	障害者団体向け割引郵便制度悪用事件で障害者団体に対し嘘の証明書を発行したとして虚偽有印公文書作成・行使罪に問われていた元・厚生労働省雇用均等・児童家庭局長村木厚子被告に大阪地方裁判所が無罪判決
9.7	尖閣諸島中国漁船衝突事件発生
10.21	東京国際空港の4番目の滑走路であるD滑走路、新国際線ターミナルが供用開始。それに伴い、東京モノレール羽田線に羽田空港国際線ビル駅・京急空港線に羽田空港国際線ターミナル駅が開業
11.13	日本がホスト国となる第18回APEC首脳会議が神奈川県横浜市で開催される ミャンマーの民主化指導者がアウンサンスーチーさんを解放。7年半ぶりに自宅軟禁が解除される
11.23	延坪島砲撃事件が勃発。韓国兵士2人が死亡、4人が重傷
12.4	東北新幹線 八戸駅-新青森駅間が開業し、同線が全通する



新たなる飛躍へ向けて

第60代会頭 福井 正興

京都JC 1971年生 08年京都理事長 09・10年副会頭 11年会頭 現・(株)福寿園取締役社長

確固たる己を確立し革新を続ける

JCに入会し、今までの人生を振り返って、自分が何者なのかと考える機会を与えられたことを心からありがたく思っています。JCという学び舎において、青年といわれる私たちが40歳までの限られた時間を必死に生き抜き、次代のために、子供達のために、ひたむきに歩を進め続けるということは何より尊いことではないでしょうか。そして、JCに入会し出会うことができた仲間がかけがえのない宝であり、この奇跡的な出会いに恵まれ、人と人の深い縁があって巡り合うことができるJCという機会に心から感謝しています。

私はそんな巡り合いの中から、地域で本気になってまちづくり、人づくりに励んでいる志高き青年がたくさんいるということを知りました。商売を続けることができるのも、日々の生活を明るく営み続けることができるのも、地域に甘えることなく、地域とともに果敢に挑む努力を惜しまず、古きものを大切にしつつも常に新たな風を入れ、進取の精神により魅力や刺激を生みつけてきたからなのです。つまり、伝統の灯は革新の追求でともし続けられるのです。

我が国のJC運動

～LOMとともに歩む～

今の時代、私たちの推進するあらゆる運動を、国民の意識を刺激する運動へと見直す時期が目の前にはっきりと迫っていることを認識しなければなりません。ただし、やみ雲に改革を進めるのではなく、守るべきものは守り、変えるべきものは変え、新しい価値を創造することによって、人を惹きつける魅力を常に生み出し続けることが大切です。

110有余の国にJC運動の灯があるなかで日本のJC運動がこれほどまでに光り輝いている理由は、各地域に根ざす

運動と組織、つまりLOMが活発であるからに他なりません。

私は、LOMが元気であるためには、メンバー一人ひとり、それぞれの委員会が明るく元気でなければならないと常に言い続けてきました。何事にもひるまず、自発的に取り組み、決断力を発揮し行動する覚悟があれば、必ずまちは変わります。

地域の問題はそれぞれの地域で解決しなければ、本質の解決には至らないし活性化もされません。そして一人ひとりの成長がまちの成長に繋がる。だからこそ40歳までの血気盛んな青年期をどう過ごすのが大切であり、それを実現してくれる唯一の団体が青年会議所であり、日本JCはLOMとともに歩みLOMのために存在すると、私は確信しています。

徳溢れる心豊かな日本へ

～全ての世代の架け橋として～

我が国では、日本人の高い精神性と自然とが調和して、禅や俳句など独自の美意識を持つ文化や芸術が生み出されてきました。こうした日本文化を背景に、品格と価値観を兼ね備えた教育者が教養を中心に論じていたのが日本の教育でした。これからの教育は、高い精神性や美意識といった日本人の尊い特質をさらに高めていくものであるべきだと思います。教育先進国を目指し観光立国を唱えるのであれば、日本文化は世界に稀な文化であり、どこの国にも見られない精神性や美意識を持ったものであることを世界中の方々にしっかりと知ってもらいたい。私は、現代の魅力あるサブカルチャーだけではなく、その根底にある日本人の精神性や美意識を世界にもっと誇るべきだと思います。「尊敬できる日本」と世界中から言われるように教育にも目を向け、今、必要とされている取り組みを実践してみませんか。

～尊敬される日本へ～

一国一城の主になれる人材を抜擢し、自らは後ろ盾となり盛り立てる。新たな事業を始めるとき、現実をしっかり見据えた確かな見識に基づき、果敢に挑戦する人物を起用することが成功への道だと考える。このように、どの地域・LOMにも、その任にかなう人材は必ずいます。

先んじて新しいことにどんどん挑戦する組織と人材が求められている今、その人材となる条件がふたつあります。ひとつは、過去の体験にとらわれ過ぎないこと。もうひとつは、視野を広げて物事を見ることです。新しいことを考える前に、まず過去から脱することが大事ではないでしょうか。慣習や成功体験にとらわれていては時代から遅れてしまいます。

国際的に自信に満ちた発言や提案をすることもできず、さらには世界中から必ずしも日本が尊敬されていないことを垣間見るとき、けじめのある関係構築を目指さなければならないと思うのです。我は我という、確固たる主体性を持った態度を示しながら、良き関係を構築することが必要です。そして、今の経済危機をも受動的に捉えるのではなく、自己変革のための試練だと考えましょう。

飛躍する方向性を定め準備をしているのが2010年であるならば、その礎を基に大きな飛躍を果たすとき、つまり2010年代運動指針を受けて確たる現実の一步を踏み出す年が2011年です。そして、60周年を節目と考えるのではなく、61年目からを一人ひとりがどう歩むかが大切だということを忘れないでください。考えを行動に移したときから試行錯誤がはじまる。そこから今まで見えなかった新しいことが次々と見えてくるようになる。世界から「尊敬される日本」をつくるのは、常に行動に移し挑戦を続ける私たち青年しかいないと私は確信しています。

(抜粋)

日本青年会議所

1	日本JC第60代会頭に福井正興(京都JC)が就任 日本JCのスローガン「徳溢れる心が未来をつくる ともに歩もう 新たなる飛躍へ!」
WB2月号	災害支援活動推進プログラム2011が始動
1.20～23	2011年京都会議。「徳溢れる心が未来をつくる ともに歩もう 新たなる飛躍へ!」をテーマに国立京都国際会館にて開催
1.21	第135回通常総会開催
3.11	東日本大震災発生。緊急招集
3.12	福井会頭を対策本部長として対策本部を立ち上げる
3.13	50団体からなる「災害ボランティア活動支援プロジェクト会議(支援P会議)」に参加
3.15	全国のLOMから集まった支援物資第1便が被災地に到着
3.18	辻元衆議院議員他民主党議員3名と会談
3.20	第136回通常総会開催
3.27	福井会頭が東北被災地を応援訪問
3.30	東日本大震災支援全国ネットワークの設立総会がJC会館にて開催
5.3～18	憲法アクションDaysが全国各地で開催され、2万5000人を超える参加動員数を達成
5.4～7	エリアC会議開催(ウィレムスタット・キュラソー)
5.11～14	エリアA会議開催(マリ・バマコ)
5.26～29	第61回JCI-ASPACマニラ大会開催。東日本大震災の影響で参加が叶わなかったメンバーの分も、日本から駆けつけた約2千名のメンバーが元気と感謝の気持ちを伝える(エリアB会議)
6.1～4	エリアD会議開催(カタロニア・タラゴナ)
6.20～23	2011 JCIグローバルパートナーシップサミット開催
7.5	次年度会頭予定者、井川直樹(松山JC)に決定
7.1～8	第24回国際アカデミー in 富山開催。テーマ「進取」
7.16～17	サマーコンファレンス2011が横浜にて開催。テーマ「10年先の日本へ ともに歩もう確かなる一歩!～進取の精神とクオリアの追求による『尊敬される日本』の創造～」
9.16	人間力大賞2011 第25回授賞式典・受賞者発表開催。グランプリは、田中千草氏が受賞
9.29～10.2	第60回全国会員大会名古屋大会開催。大会テーマ「尊敬される日本～進取の精神による果敢な挑戦～」
9.30	第137回通常総会開催
10.1	日本JC創立60周年記念式典・祝賀会開催
11.1～5	第66回JCI世界会議ブリュッセル大会開催

内外の動き

1	前年のクリスマスから、児童養護施設に匿名で寄付を行なう「タイガーマスク運動」が全国に広がる
1.2	香港や台湾、中国本土などの華人系の民間団体が、尖閣諸島(釣魚台)の領有権を主張する「世界華人保釣連盟」を設立
1.25	エジプト各地で、チュニジアのジャスミン革命に触発された数万人規模の反体制デモが始まる
1.26	宮崎、鹿児島県境の霧島山・新燃岳が、189年ぶりにマグマ噴火 NASAが、これまで見つかった中で最も古い銀河を発見したと発表
1.31	小沢一郎・民主党元代表が、検察審査会の議決に基づいて強制起訴される。国会議員の強制起訴は初
2.2	NASAが、太陽系外惑星の候補約1,200個を発見し、うち54個には液体の水の存在する可能性があるとして発表
2.3	大相撲八百長問題で、日本相撲協会理事会の事情聴取に対し、力士ら3人が八百長への関与を認める
2.22	ニュージーランド南島のクライストチャーチ付近にてマグニチュード6.3の地震が発生。この地震により、日本の富山県の外国語学校留学生の関係者が多数死亡した
3.11	日本の東北地方太平洋岸沖を震源とする、マグニチュード9.0の地震が発生。この規模は1900年以降4番目。地震で福島第一原子力発電所が被害を受け、それによって大規模な原子力事故が発生した
3.12	九州新幹線 博多～新八代間開業
4.12	東京電力福島第一原発事故の国際評価をレベル7に引き上げ。旧ソ連・チェルノブイリ原発事故と同レベル評価
5.2	国際テロ組織アル・カーイダの最高指導者ウサマ・ビンラディン容疑者が、アメリカ合衆国の諜報機関により、パキスタンのアボッターバードにて銃撃戦の末に殺害された
6.2	内閣総理大臣・菅直人が、民主党代議士会にて「東日本大震災の対応に一定のメドがついた段階」で退陣することを表明
6.24	小笠原諸島がユネスコ世界自然遺産の登録物件に
6.26	平泉の歴史的建造物群が「平泉～仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の名でユネスコ世界文化遺産の登録物件に
7.18	ドイツで2011 FIFA女子ワールドカップが開催され、サッカー日本女子代表が初優勝
7.24	日本のテレビ放送において、東日本大震災で大きな被害を受けた岩手・福島・宮城の3県を除き、地上デジタルテレビ放送へ全面移行
8.29	野田佳彦内閣総理大臣が誕生
9.3	大型の台風12号が紀伊半島を中心に西日本を直撃
10.3	ギリシャ政府が財政赤字削減目標未達となる見通しを発表。欧州金融市場は再び悪化
10.5	米アップルの共同創業者スティーブ・ジョブズ会長が死去
10.7	ノーベル平和賞にリベリア大統領ら女性3人
10.8	タイ、過去50年で最悪の洪水被害。日系工場も水没
10.20	リビアで42年にわたり最高指導者だったカダフィ大佐が殺害される
10.31	世界の人口70億人を突破
11.11	野田首相がTPP交渉参加に向けて関係国と協議に入ると表明
11.13	イタリア・ベルルスコーニ首相がナポリターノ大統領に辞表提出。それを受け、EU欧州委員会のマリオ・モンティ元委員に次期首相として組閣を委任



呼び覚ませ、 日本のプリンシプル!

第61代会頭 井川直樹

JCI松山 1972年生 10年松山理事長 11年副会頭 12年会頭 現・愛媛パッケージ(株)代表取締役社長

日本の青年としての矜持

JCは「青年の学び舎」として真摯に「学ぶ」ことにより、得た知識、経験を知恵に変え、「想像力」を鍛えることで「目的」と「手段」を理解し、如何なる場面においても正しい判断力と力強い行動力を発揮することが出来る「主導力」を涵養する機会である。そして、JC運動が長きにわたり必要とされているのは、私たちの哲学がしっかりと実践されてきたからに他ならないのであって、その原動力は地域で展開されているLOMの精力的な活動である。己を律し行動するJAYCEEの凛然たる姿が市民を魅了すれば、必ず地域は変わっていくのだ。

今まさに、日本は卓越したリーダーを切望している。いつの日からか日本には、和に基づく秩序を履き違えた人びとが多くなり、優れたリーダーシップよりも根回しやコンセンサスを得ることを優先するのが是とされるようになってしまい、卓越したリーダーが生まれにくくなってしまった。卓越したリーダーは、メシア(救世主)のように現れるのではなく、明確なビジョンを持ち、それを実現しようとする情熱とエネルギーを持った凛然たる人物をみんなで発掘し、育て、創り上げていくものなのである。だからこそ、今必要なのは「青年の学び舎」であるJCであり、自らがリーダーたんとする気概を持って行動できる環境と自らの人生をも変えうる学びの機会である。

地域のリーダーである理事長の皆さんには、ぜひ多くのメンバーを積極的に日本JC、地区協議会、ブロック協議会へ出向させていただきたい。そして、国内外で開催される諸大会・事業へも積極的に参加させていただきたい。必ずや得た知識や経験を知恵に変え、「想像力」を持った地域リーダーとなりうる素地を身につけてくれるであろう。

つよい国家のプリンシプル

～教育こそが凛然とした国を創る～

わが国の重要な資源であるはずの人材も、戦後レジームにおける教育制度で育った世代は、歴史や伝統、文化までもが軽んじられるなかで、古来より継承してきた武士道に代表される精神文化、他を慮る心、モラルや道徳心すらも失われつつある。私は、自国の歴史を語れない、自らが住み暮らす国に誇りを持ってない、国家への帰属意識もない、自虐的な意識や思想を持った人びとが、国家の成長戦略となりうる人材として、グローバル社会で通用しうる輝きを放つことなど期待できないと憂慮するのである。

私たち日本JCは青少年育成のための様々なプログラムや全国のLOMが展開している事業などを通して、自国を誇れる歴史観と確かな国家観を醸成する運動を展開するとともに、わが国の未来を切り拓く、リーダーとなりうる人材育成の機会を積極的に創出したい。全国に展開する有機的なネットワークを活用して、卓越した人材を発掘し、磨き上げることでこの国の未来を託す、世界で通用するグローバルリーダーを創り上げていかなければならない時が来たのである。

教育は「国家百年の計」に属するといわれる。国家も組織もしっかりと未来を切り拓く教育を実践していくことが何よりも大切であり、日本が国家として成長し続けるために、そして、グローバル社会において凛然たる国家であるために、教育こそがつよい国家のプリンシプルであり、日本の成長戦略にもなると確信している。

有機的な組織連携が織りなす組織として ～最も頼られ、必要とされる青年の団体～

日本JCは、各地会員会議所が活動する各々の地域において、最も頼られ、

必要とされる青年の団体として確かな歩みを進めるために、ガバナンスを一層強化するとともに、本会、地区協議会、ブロック協議会が有機的な組織連携を図ることにより、一貫性のある情報受発信と組織運営を行っていく必要がある。

そして、地区協議会は、本会と各地会員会議所を有機的に繋ぐコミュニケーターである。国内外で展開されている運動を各地会員会議所にしっかりと提供するとともに、広域的な問題や課題に対してのカウンターパートとして、責任ある運動をとともに進めていきたい。日本JCは、62年にわたる連綿と受け継がれてきた組織であるが、「変わらないために変わる」自己変革を行うことで、いつも各地会員会議所の隣とともに凛然とした歩みを進めていきたい。

結びに

～凛然とした誇りある国日本～

日本は、東日本大震災と原子力発電所事故により多くのものを失った。私たちは今ある現実を正面から受け止め、決して諦めることなく、また一からひとつずつ積み上げていかなければならないのである。今上天皇のお言葉にもあるとおり、私たちは雄々しい国民なのである。困難に直面した時こそ、正面から向き合い、挑み、励まし合い、人のつながりを大切にして、必ず立ち直る国民でありたい。

日本に「四度目の奇跡」を起こす主役は、「変わらないために変わる」行動を起こし、清々しく常に進んで止まざる青年である。全国のメンバーの皆さんとプリンシプルを持って「凛然とした誇りある国」日本を創造しようではないか。

青年、それはあらゆる価値の根源である。そして私たちは青年である。

(抜粋)



全文はこちら→

2012

日本青年会議所

- 1 日本JC第61代会頭に井川直樹(松山JC)が就任
日本JCスローガン「呼び覚ませ 日本のプリンシプル!」
- 1.19～22 2012京都会議が国立京都国際会館にて開催、テーマ「呼び覚ませ 日本のプリンシプル! 新たな奇跡を起こすために『凜然とした誇りある国』日本の創造!」
- 1.19 第138回通常総会開催
- 3.10～11 復興創造フォーラム2012が開催。11日には東日本大震災合同慰霊祭が開催
- 3.10 第139回通常総会開催
- 5.2～5 エリアC会議開催(ブラジル・クリチバ)
- 5.23～26 エリアA会議開催(モロッコ・カサブランカ)
- 6.7～10 第62回JCI-ASPAC香港大会開催。日本からは約2,700名が参加登録(エリアB会議)
- 6.13～16 エリアD会議開催(ドイツ・ブラウンシュベイク)
7,5次年度会頭予定者、小畑宏介(秋田JC)に決定
- 7.7～7.12 第25回国際アカデミー in 札幌開催、テーマ「Activating the Principle ～プリンシプルを持って行動しよう～」
- 7.24～27 2012 JCIグローバルパートナーシップサミット開催(ニューヨーク)
- 7.21～22 サマーコンファレンス2012が横浜にて開催。テーマ「『誇りある国』日本の創造に向けて」。9,200人に及ぶメンバーが参加
- 7.22～28 JCI Japan 少年少女国連大使事業 ニューヨーク研修
- 9.28 人間力大賞2012 第26回受賞式典が開催。グランプリは伊藤文弥氏が受賞
- 10.11～14 第61回全国会員大会北九州大会開催、約1万5000人が集結
- 10.12 第140回通常総会開催
- 10.28～29 硫黄島での島内研修、慰霊祭を開催
- 11.18～23 第67回JCI世界会議 台湾台北大会開催、日本から2,260名のメンバーが参加登録

内外の動き

- 2.29 東京スカイツリーが竣工。高さ634mを誇り、自立式鉄塔としては世界一となる。人工建造物の中ではドバイの超高層ビル、ブルジュ・ハリファ(828m)に次ぎ世界第2位。
- 3.11 東日本大震災から1年、各地では黙祷が捧げられた
- 3.12 国勢調査局の推計で世界人口が70億人を突破する
- 4.11 金正恩が朝鮮労働党の第一書記に就任。13日には国防委員会第一委員長にも就任
- 7.8 アフガン支援国会議で2015年までの4年間で計160億ドル(約1兆2800億円)超を資金拠出するとして「東京宣言」を採択
- 7.27～ ロンドンにて第30回夏季オリンピック開催。日本は過去最多38個のメダルを獲得
- 8.10 大韓民国の李明博大統領が竹島に上陸
- 9.15 中国全土で、尖閣諸島国有化に反発する反日デモが発生
- 10.1 米海兵隊の垂直離着陸輸送機MV22オスプレイ12機が、米軍普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)に配備
- 10.8 山中伸弥教授(京都大学)がノーベル医学生理学賞を受賞
- 10.12 EU欧州連合がノーベル平和賞を受賞
- 10.29 アメリカ東海岸でハリケーン「サンディ」が発生し、ニューヨーク証券取引所が2日間取引停止となる
- 11.15 5年ぶりとなる中国共産党の第18回大会が開催され、中央委員会第1回総会(1中総会)で、習近平国家副主席が総書記に選出
- 12.12 北朝鮮が人工衛星弾道ミサイルを発射
- 12.16 衆議院選挙で自民党が大勝し、3年ぶりに与党に返り咲く(政権交代)
- 12.26 安倍晋三が日本の内閣総理大臣に再就任(2007年以来)。第2次安倍内閣発足



今、再び勇壮なる日本へ。 ～新しい時代への燈火に～

第62代会頭 小畑宏介

JCI秋田 1973年生 09年秋田理事長 12年副会頭 13年会頭 現・(株)友愛ビルサービス専務取締役

はじめに

1999年、私は青年会議所の一員となった。憧れる先輩の背中を追いながら、誰かのために我が身も振り返らず行動し、ともに泣き笑いながら過ごしたこれまでの日々は、私に多くのことを教えてくれた。40歳までという限られた時間の中で毎年、新しい英知を導入し、創始の志を継承しながら創造の精神を掲げ、常に時代の先端で可能性を切り拓いてきた。明日への黎明に向け今日の犠牲を惜しまない、それが我々JAYCEEである。

今、我々がそのバトンを受け継いだ。積み重ねる一年は挑戦のために与えられた一年であり、時には自分の苦手なことを克服しながら、向き合っていくべきものなのである。今日まで、私の中で、そのことは何も変わってはいない。私は、全てのことに真摯に向き合ってきた。青年会議所という舞台で、検証を重ねながら次世代にバトンをつなげなくてはならない。歴史と人と出来事。そして未来。全てはつながっている。青年会議所運動は全てにつながっているのである。

日本を輝かせるのは誰なのか

東日本大震災は単なる災害ではなく、あらゆる意味で存立基盤が脆弱に成り果てていた日本に追い打ちをかけた。震災と原発事故によって突きつけられた東北と日本の復興、国難の時代にあっても政局に明け暮れ決断できない政治への不信、バブル経済崩壊後から「失われた30年」になる可能性すら感じる経済不安、さらには安全保障問題など、わが国は決して先送りをすることのできない多くの問題を抱えている。そして、国家観をもつことを拒絶し、当事者意識の不全に陥った国民は、「戦後」から抜け出せずにいた。日本は今、閉塞感の中でもがき、漂流している。最後のベビーブーム世代である私たち青年の果たすべき責任は重い。転機を迎えた

今、新しい「震災後」の時代が必要なのだ。

時計の針をすすめよう

東日本大震災からの真の復興は今なお遠き道のりであると言わざるを得ない。これは単なる災害ではなく、家族のつながり、故郷の風景、住み暮らす家、学校や会社など、「日常との断絶」を被災者に課した悲惨な事故であった。被災者に心を寄せることが復興の原動力であり、多くの希望が生まれるよう、止まった時計の針をすすめたいと切に願っている。

私たちは全国の仲間と共に、「東日本大震災復興指針」に基づいた支援活動を進めてきた。また、今後起こりうる自然災害に備え、地域の防災・減災力を向上する防災教育を推進するとともに、新しい防災の物資備蓄パッケージであるJC-AIDを普及させた。さらに、既存のJCの災害ネットワークを行政や企業や他団体との連携を図る強固なものに発展させることにも取り組んだ。多くの犠牲の代償として得た学びは、決して忘れることはない。

決断できる日本を創ろう

東日本大震災のあの日から、日本は新しい時代へのスタートを切った。わが国は再び希望を取り戻せたのであろうか。未曾有の惨事は予測できないものであったが、国家としての混迷、停滞は容易に想像できたかもしれない。今の日本は決断をせずに、問題解決を先送りすることが繰り返されている。

私たちは、日常生活のささいなことや人生において、どんなに迷ったとしても進む道を選ばなくてはならず、多くの判断のもと、決断を重ねながら未来に向かって進んでいる。世界を見ても変化が早く、その変化に加速がつく時代。一瞬の判断が取り返しのつかない時代となった。新しい変化は生まれては消え、掴みかけた問題解決への道筋や、

ヒントは瞬く間に過去のものとなる。私たちには、これまで以上に変化を的確に捉える能力が求められている。そして、未来は私たち主権者の決断に基づく行動が創るのだという気概が必要なのだ。私たちの決断の先に日本の未来があるのだ。我々には、身近な社会を変え、国を変えていく無限の可能性があることを私は信じて疑わない。いつの時代も斬新な創意に満ちた青年の力こそがその原動力になったことは歴史に明らかなことである。今、日本は世界のどの国も経験したことのない、手引きのない問題に取り組んでいる。その意味において、私たち青年という責任世代が未来への希望をもって問題解決に向かって決断を積み重ねていくことは、私たちがお手本を創ることになり、日本が世界をリードする国に導ける可能性がある。何も解決策がないのであれば、自分たちで創ればよいのだし、もともと私たちは、そうやって幾多の困難に取り組んできたのだ。乗り越えていく日本の経験を世界に発信することで、国際社会が抱える様々な問題の解決に貢献することができるのではないだろうか。

さあ旅立とう。今日とは違う明日を始めるために。今日を未来へとつなげるために。理想とする新しい日本に向かって。決断できる日本を創ろうではないか。

結び 勇壮なる日本へ

改めて、ここに宣言する。我々は、未来を創る。もう一度真っ白なキャンバスに過去からつながる未来への希望を一本一本書き足していこう。その一本一本は、全てにつながっているのだ。

勇壮なる日本へ。気概と覚悟をもって、我々は人々の燈火となる。

(抜粋)



全文はこちら→

2013

日本青年会議所

- 1 日本JC第62代会頭に小畑宏介(秋田JC)が就任
日本JCスローガン「新しい時代への燈火となれ!」
- 1.17～20 2013京都会議が国立京都国際会館にて開催
- 1.19 第141回通常総会開催
- 3.10～11 復興創造フォーラム2013が開催。11日には東日本大震災
合同追悼式が開催
- 3.10 第142回通常総会開催
- 5.1～4 エリアC会議開催(アメリカ・セントルイス)
- 5.8～11 エリアA会議開催(ボツワナ・ガボロン)
- 5.29～6.1 エリアD会議開催(モナコ・モンテカルロ)
- 7.13～16 第63回JCI-ASPAC韓国 光州大会開催。日本からは約
2,500名が参加、世界中から6,000名を超す参加者が集結
(エリアB会議)
- 7.5 次年度会頭予定者、鈴木和也(岡崎JC)に決定
- 7.7～7.12 第26回国際アカデミー in 福山開催、テーマ「つながり」
- 7.20～21 サマーコンファレンス2013が横浜にて開催。テーマ「新し
い時代への燈火となれ! ～私たちの決断が日本を変える
～」。約1万人に及ぶメンバーが参加
- 7.22～28 JCI Japan 少年少女国連大使事業 ニューヨーク研修
- 7.24～26 2013 JCIグローバルパートナーシップサミット開催(ニュー
ヨーク)
- 7～8 震災で心に傷を負った子を招く青少年育成事業「笑顔デザ
インプロジェクト」が各地で開催
- 9.20 人間力大賞2013 第27回受賞式典が開催。グランプリ
は長屋宏和氏が受賞
- 10.3～6 第62回全国会員大会奈良大会開催、約1万5000人が集
結
- 10.4 第143回通常総会開催
- 11.4～9 第68回JCI世界会議ブラジル リオデジャネイロ大会開催、
日本から1,120名のメンバーが参加登録
- 11.8 世界会議中に開催されたJCIアワード&TOYPセレモニーに
おいて、日本代表の伊藤文弥氏が受賞、「世界の10人の
傑出した若者」と表彰された

内外の動き

- 1.16 アルジェリア南東部イナメナスの天然ガス関連施設をイス
ラム武装勢力が襲撃、日本人を含む多数が人質にされ
た
- 1.20 バラク・オバマ大統領がアメリカ大統領に再選、就任
- 4.4 日銀の黒田東彦総裁が「異次元の金融緩和」を発表。
安倍政権の経済政策「アベノミクス」が本格始動する
- 6.23 米情報機関、国家安全保障局(NSA)が秘密裏に
個人の通信情報を収集していたことを、元米中央情報局
(CIA)職員エドワード・スノーデン容疑者が暴露
- 7.3 民主化運動「アラブの春」を受けて誕生したエジプトの
モルシ政権が、軍による事実上のクーデターで崩壊
- 7.21 第23回参議院議員選挙において、自民党が現行制度
下で最多の65議席を得て圧勝。衆参両院の「ねじれ」
が解消される
- 7.25 環太平洋連携協定(TPP)交渉に7月、日本が12番
目の国として合流
- 8.21 内戦が続くシリアの首都ダマスカス郊外で化学兵器を
使ったとみられる攻撃があり、毒ガスによる症状で1000
人以上が死亡
- 9.7 第125次IOC総会において、2020年夏季オリンピック
の開催都市が東京に決定。東京で夏季オリンピックが
開催されるのは1964年以来、56年振り2回目
- 10.1 現行5%の消費税率を2014年4月から8%に引き上げ
ることが閣議決定される
- 10.16 東京・伊豆大島(大島町)で台風26号に伴う大規模
な土石流災害が発生
- 11.8 フィリピン中部を超大規模の台風30号が直撃し、レイテ、
サマール両島を中心に甚大な被害をもたらした。死者と
行方不明者は合わせて7500人を超え、被災者総数は
1220万人を上回った
- 11.23 中華人民共和国政府が、日本が領有を主張する東シナ
海の尖閣諸島を含む上空を防空識別圏に設定
- 12.6 国家の機密情報を漏らした者に罰則を科す特定秘密保
護法が成立
- 12.19 猪瀬直樹都知事が現金不正授受の発覚により辞職を表
明



「たくましい国」日本を 次世代に引き継ぐために

第63代会頭 鈴木和也

JCI岡崎 1974年生 13年副会頭 14年会頭 現・(株)オーワ代表取締役CEO

おんりえど ごんぐじゆと 厭離穢土 欣求浄土

1560年、今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれた時、今川軍の徳川家康は、命からがら故郷(岡崎市)の大樹寺に逃げこみ、己のふがいなさを悔やむと共に、総崩れとなった今川勢の前途を悲観し、大樹寺にある先祖の墓前で自害しようとする。その時、時の住職、登壇上人に諭された言葉がこの「厭離穢土欣求浄土」です。「武士が私利私欲のために戦うので国土が穢れている。正しい目的をもって住みよい浄土にするのがお前の役割だ。もっと大きな志をもって」と強く諭されました。自身の役割に気づいた19歳の家康はその後、この8文字を旗印に平和な国土の建設に邁進し、天下泰平の世を築き上げました。

人は、人生において幾度も挫折するものです。しかしながら、目指すべき夢が明確ならば、必ず乗り越えることができます。そして、困難を乗り越えられる強靱な精神と情熱をもった人は、自信と誇りに満ちた活力ある人生を手にすることができます。

「人生において最も大切なのは経験である」。これまでの青年会議所の活動、運動を通し、不可能を可能にしてきた場面を何度も体感してきた私自身だから、そう断言できます。特に青年期における経験は、その先の人生を大きく変えてくれます。人生においては、「成功」は約束されていませんが、「成長」だけは約束されています。私たちJAYCEEには、失敗を恐れない積極果敢なチャレンジ精神と行動力が今求められています。それにより、人間的魅力をもった強いリーダーシップを得ることができるのです。世の中の営みはすべて「人」によって成り立っています。この不透明感が漂う現代社会にあっても行動的で意気あふれる人財が育ち、活力に満ちあふれた地域をつくり上げて

いくことが、必ずや「たくましい国」日本を創造していくのです。

この国を牽引する責任と使命

JAYCEEの多くは、中小零細企業で経営に関わるメンバーです。私の出身は地方都市であり、決して大きくはない経済圏において生業を立てています。会社が倒産したら、マネージャーもプレーヤーも行き場を失います。だから皆が自社の経営状態に関心をもち、事業の発展を心から願っています。そして、会社の繁栄の中に自らの幸せがあることを知っています。国や地域の関係も同じです。万が一、国が凋落すれば危険にさらされるのは私たち国民です。国や地域を牽引するのは、決して政治に携わる人たちだけではありません。これからも私は心眼と矜持をもって国や地域に常に関わっていきます。家族を守り、友を助け、地域を愛し、国を想う。この国の一員である私が能動的に変わることから、水面を走る波紋のように社会が変わっていくのです。そんな私の小さな変化から世界を変えられると信じています。自分の立ち位置を確認し何をすべきかを青年会議所で学び、そして行動しましょう。誰よりも明るい未来を望み、日本を牽引するのは責任世代である私たち青年でなければならぬのです。

強固なネットワークを活かして LOMと共鳴する運動

現在、メンバー数の減少、さらなる会員の成長が喫緊の課題となっています。青年会議所は、40歳までという限りある時間を共有し、夢を語って互いに切磋琢磨し、刺激し合いながら、人間としての魅力を高めていく団体です。日本JC本会・各協議会への出向を通して、自己の成長と地域や国や世界の発展のために、多くのメンバーが物事を多

面的な視点で捉えることのできる人財へと成長する機会につなげていただきたい。意気あふれる人財を育成するために、日本JC本会・各協議会は、出向するメンバー一人ひとりが必ず成長する機会となるよう組織を運営していきたい。役職を担うものは、全国各地の次代を担うリーダーを発掘し、育てて欲しい。

そして何より、すべての活動、運営は各地会員会議所やメンバーのためにあることを忘れて欲しい。全国696会員会議所の強固なネットワークを活かした運動をこれまで以上に力強く推し進めたい。35,000人に及ぶ青年経済人の声を背景に、組織力を活かし、社会にインパクトを与える本気の市民意識変革運動を展開していくために、LOMと共鳴していきたいと心から願っています。

結びに

「人は城、人は石垣、人は堀。」

すべてのものごとの始まりは「人」からです。私たち自身の成長こそが、社会を変革する原動力となりえます。一人ひとりの学ぶ姿勢が、国や地域、さらには次世代のために、最高の価値を創り出すことにつながると信じています。

「すべての出会いは偶然ではなく必然的なものであり、必ず意味がある。だから、この一瞬を大切にしたい。二度とないこの一瞬を大切にしたいと願う」。この言葉を胸に、多くの出会いの中で、私はどれだけ成長できたことでしょうか。青年会議所という学び舎において、一つひとつ積み重ねるそのすべては、自分を成長へと導いてくれていることを確信しています。

共に学び、考え、決意し、行動しましょう。美しき日本の輝かしい未来に向けて、羽ばたこうではありませんか。意気あふれ、活気に満ちあふれた「たくましい国」日本を次世代に引き継ぐために。(抜粋)



2014

日本青年会議所

- 1 日本JC第63代会頭に鈴木和也(岡崎JC)が就任
日本JCスローガン「取り戻せ、日本の矜持を!」
- 1.23～26 2014京都会議。「取り戻せ、日本の矜持を!」をテーマに、
国立京都国際会館にて開催
- 1.25 第144回通常総会開催
- 3.8～9 復興創造フォーラム2014が開催。9日には東日本大震災
合同追悼式が開催
- 3.9 第145回通常総会開催
- 4.23～26 エリアC会議開催(コロンビア・メデリン)
- 5.21～24 エリアA会議開催(トーゴ・ロメ)
- 6.4～7 第64回JCI-ASPAC山形大会開催。世界中から1,200
名を越す参加者が集結(エリアB会議)
- 6.11～14 エリアD会議(マルタ・バレッタ)
- 6.21 人間力大賞2014 第28回受賞式典が開催。グランプリ
は安武隆信氏が受賞
- 7.5 次年度会頭予定者、柴田剛介(金沢JC)に決定
- 7.7～7.11 第27回国際アカデミー in 半田開催。テーマは「共鳴」
- 7.19～20 サマーコンファレンス2014が横浜にて開催。テーマ「取り
戻せ、日本の矜持を!」
「たくましい国」日本創造フォーラムにおいて、鈴木会頭が
安倍晋三首相と対談
- 7.22～28 JCI Japan 少年少女国連大使事業 ニューヨーク研修
- 7.23～25 2014 JCIグローバルパートナーシップサミット開催
- 10 電子書籍『新・日本風景論』を刊行
- 10.9～12 第63回全国会員大会松山大会開催。約1万3000人が一
堂に集結した
- 10.10 第146回通常総会開催
- 11.3～8 第69回JCI世界会議ドイツ ライプチヒ大会開催

内外の動き

- 1.28 理化学研究所の小保方晴子氏らが発表した「STAP細胞」論文に捏造や改ざんがあるとして、理研調査委員会
が不正を認定
- 2.18 ウクライナ政府側とユーロマイダンデモ参加者による暴力的
衝突が勃発(ウクライナ危機)。当時のヴィクトル・ヤ
ヌコーヴィチ大統領が失脚
- 4.16 韓国南西部の珍島沖で旅客船「セウォル号」が沈没し、
乗客乗員304人が死亡・行方不明
- 6.29 イスラム過激組織「イラク・シリアのイスラム国」が6月、
イラク第2の都市モスルを制圧し、指導者のバグダディ
容疑者をカリフ(預言者ムハンマドの後継者)とする「イ
スラム国」の樹立を宣言
- 7.1 集団的自衛権の行使を容認する憲法解釈の変更を閣議
決定
- 8.8 世界保健機構(WHO)は、西アフリカ諸国にエボラ出
血熱の感染が拡大していることをうけ、「国際的に懸念さ
れる公衆衛生上の緊急事態」を宣言
- 8.20 広島で土砂災害、住宅流され74人死亡
- 9.27 長野・岐阜県境の御嶽山が噴火。57人が死亡、6人
が行方不明となった
- 9.28 「真の普通選挙」実施を求める学生らが香港中心街の
幹線道路を占拠。デモ隊は一時約10万人に膨れ上が
り、1997年の香港返還以降、最大の政治的混乱と
なった
- 11.18 2015年10月に予定していた消費税率10%への引き上
げを17年4月に1年半延期することを決定
- 12.5 東京外国為替・株式市場では、10月末の日銀による追
加金融緩和を機に円安・株高が急速に進んだ。12月
に円相場は一時1ドル=121円台に下落し、日経平均
株価は取引時間中に1万8000円を回復
- 12.10 ノーベル賞授賞式開催。青色発光ダイオード(LED)
の開発で、赤崎勇名城大教授と天野浩名古屋大教授、
中村修二米カリフォルニア大サンタバーバラ校教授が
ノーベル物理学賞を受賞
- 12.14 第47回衆院選にて自民党が291議席を獲得。公明
党と合わせると、与党で衆院定数の3分の2を上回る
326議席を維持。経済政策「アベノミクス」継続の是
非が争点となった衆院選は、与党が圧勝
- 12.16 パキスタン北西部ベジャワルでイスラム武装勢力「パキス
タン・タリバン運動」(TTP)が軍運営の学校を襲撃し、
生徒ら140人超が死亡
- 12.17 冷戦時代から対立してきた米国とキューバが国交正常化
交渉の開始で合意



美しく先駆けよう！ 底知れぬ 力を持つ日本の再興へ

第64代会頭 柴田剛介

JCI金沢 1975年生 12年金沢理事長 13年副会頭 14年専務理事 15年会頭 現・グランファルマ(株)代表取締役

物事は見えるものだけが本質ではない。「何が起きているのか」核心を明らかにする必要がある。核心を追求し続けるところには、必ず青年がいる。核心を追求する青年は時として時代に風穴を開ける。それは昔も今も同じだ。誰もが経験したことのない難問にぶつかるのは、核心を追求する青年だからであり、JCが先駆者と言われる所以でもあろう。成功、失敗全てを経験する。そして経験を後世のために伝えていく。JCとはそのような組織なのである。一世紀前の一人の青年の志と、今を生きる我々の志は、何一つ変わっていない。

人生のものさしとは

人は物事を評価するとき、組織の規模や経験の長さなど、数値的に判断しがちである。しかし、人生は決して数字では評価できない。人々の幸せにどれだけ貢献できたかが、人生を評価する唯一のものさしだと私は確信している。

「成熟したナショナリズムと民間外交、そして地域経営を通じて、日本の繁栄を願う。」これが日本青年会議所2015年度の普遍的な考え方である。人々の幸せにどれだけ貢献できるのか、この人生のものさしをもって日本の繁栄を目指そうではないか。

東日本大震災から学んだ 成熟したナショナリズム

震災直後、多くの人々は誰の要請もなく被災地に駆けつけた。日本という共同体に暮らす仲間のために、いま自分ができることを考えた行動に世界は称賛を寄せた。何故、多くの人々が支援に動いたか。それは日本が自然に成立した国家だからである。民族、言語、国土、文化、宗教といったナショナリズムの五大要素がほぼ一致し、それが自然に成立した国は世界でも日本くらいであろう。連綿と続く共通の文化や伝統

の中で価値観を共有し、何かあった時は助け合う心があり、絆が存在している。私はそれを成熟したナショナリズムと呼ぶ。その大切さを、人々は震災によって再び気づくこととなる。日本の底知れぬ力を知り、日本人として再び誇りを取り戻すのである。

世界の中の日本を強く意識する 世界に貢献できる国がある その担い手こそ日本の青年だ

1951年にカナダ・モントリオールで開催された第6回JCI世界会議でフィリピン出身のラモン・デル・ロザリオJCI会頭が、JCには国境も民族も関係ないと、かつての敵国だった日本JCをJCIに受け入れたことは有名な話である。この精神と先輩方の国際社会への復帰に対する情熱があったからこそ我々は存在することに感謝しなければならない。JCIのリーディングNOMまで成長した現在の日本青年会議所は、この恩を未来へ送るべく、JCIを通じて国際社会へ貢献していく必要がある。

近年JCIは、国連が掲げる国連ミレニアム開発目標（UN MDGs）に全面的にて協力している。運動の意義や目的を絶やさぬようにしていきたい。併せて日本の小中学生には、国連の施設や国際貢献の活動内容について肌で感じる機会を提供し、国際社会の一員である意識醸成を図ると共に、その彼らの成長を応援する、そんな社会をつくらしていきたい。

世界には罪もない子供たちが笑顔を失っている事実がある。人は不平等な環境にあっても、必ず踏み出すことはできる。温かい心をもって貢献することが国際社会から真の信頼を得ることにつながるのである。

自分たちの地域を見つめ、改革する 地域の文化と現代の文明を組み合わせる

地域再興の先頭に立つのは青年だ

我々は、地方の特色を活かした発展を考えるべきである。国家に頼る中央集権型ではなく、自立自活して発展する地域経営主義で地域再興を目指そう。現在の日本は、国土の均衡ある発展を目指してきた「地域開発」の時代から、自らの智慧と資源を活用することが求められる「地域経営」の時代への過渡期にある。地域特有の文化や自然、伝統や歴史などの「地域資源」を用い、地域を愛する「地域人材」が「地域経営」を行なうということである。地方がこのまま慢性的な不況で、殺伐とした地域と成り下がるか、それとも先駆者として課題を乗り越え、再興を遂げた地域となり脚光を浴びるのか、それは我々青年の肩にかかっているのである。

これからの半生を賭けて絵を描こう JAYCEEの持つ潔さと誠実さで 美しい未来が訪れるように

「人生は栄枯盛衰であり儂く、誰でも必ず衰える時が来る。その時その相手に、優しく手を差し伸べ、歩み寄れる人間こそが、本当の信頼を得ることができる。」そのようなことを教わったことがある。これは人生だけではなく、国や地域に対しても言えることなのかもしれない。

あなたを待つ人は必ずいる。一度しかない人生。リスクヘッジなJCはやめて、もし、あなたが決めたなら、それにすべてを賭けようではないか。この潔い思い切りこそ青年らしい。失敗してもいい。それどころか、どうせ失敗するなら派手に失敗しようではないか。全てが成果であり、だからJCは面白い。そこにJAYCEEがいる限り、底知れぬ力をもつ日本は必ず再興できる。

すべては未来を生きる人のために。先駆けよう、JAYCEE。美しく先駆けよう。
(抜粋)



2015

日本青年会議所

- 1 日本JC第64代会頭に柴田剛介(金沢JC)が就任
日本JCスローガン「美しく先駆けよう! すべては未来を生きる人のために」
- 1.22～25 2015京都會議。「革新の追求 すべては未来を生きる人のために ～文化と文明が生み出す『底知れぬ力』による日本再興～」をテーマに掲げ、国立京都国際会館にて開催
- 1.24 第147回通常総会開催
- 3.22 第148回通常総会開催
- 5.6～9 エリアA会議開催(ガーナ・アクラ)
- 5.20～23 エリアC会議開催(ボリビア・コチャバンバ)
- 5.26～30 日中友好交流30周年 訪中ミッション実施
- 6.3～6 エリアD会議開催(トルコ・イスタンブール)
- 6.10 鹿児島・口永良部島新岳噴火に対する避難者支援
- 6.11～14 第65回JCI-ASPAC マレーシア コタキナバル大会開催。日本JCは「縁」をテーマに参加し、全国から1,876名が登録(エリアB会議)
- 7.3～7.10 第28回国際アカデミー in 東京開催
- 7.5 次年度会頭予定者、山本樹育(大阪JC)に決定
- 7.14～21 日中友好交流30周年招聘事業、記念式典・祝賀会開催
- 7.18～19 サマーコンファレンス2015が横浜にて開催。テーマ「イノベーションを起こす思考 すべては未来を生きる人のために～文化と文明が生み出す『底知れる力』による日本再興」
- 人間力大賞2015 第29回受賞式典が開催。グランプリは丸幸弘氏が受賞
- 7.28～31 2015 JCIグローバルパートナーシップサミット開催
- 9.6～13 ロシアミッション学生交流事業開催
- 9.24～27 第64回全国会員大会広島大会開催。大会テーマ「美しく先駆けよう! すべては未来を生きる人のために～市民先導のまちづくりから日本再興へ～」
- 9.25 第149回通常総会開催
- 11.3～8 第70回JCI世界会議金沢大会開催、テーマは「Feel the Impact of KANAZAWA」。UNSDGs(国連 持続可能な開発目標)達成のための運動を推進する「金沢宣言」を採択

内外の動き

- 1.28 過激派組織「イスラム国」(IS)が邦人人質を殺害
- 4.11 アメリカ合衆国のオバマ大統領とキューバのカストロ国家評議会議長が対談、キューバ革命後の1961年以來、長年国交断絶状態だった両国首脳が直接対談
- 5.17 大阪市を廃止する「大阪都構想」の賛否を問う住民投票が行なわれ、僅差で否決。橋下徹市長は任期満了後の政界引退を表明
- 6.17 選挙権年齢を現在の20歳以上から18歳以上に引き下げる改正公職選挙法が参院本会議で全会一致で可決、成立。1年後の施行が決定した
- 7.21 電機メーカーの東芝で利益を意図的にかさ上げする不正会計が発覚。歴代社長3人が引責辞任する事態に発展
- 8.11 鹿児島県薩摩川内市の川内原発1号機が再稼働、9月に営業運転開始。福島原発事故後、新規制基準に基づく初の原発稼働となる
- 8.14 戦後70年の安倍晋三首相談話を閣議決定
- 9.1 2020年東京五輪・パラリンピックのメイン会場となる新国立競技場の建設計画や大会エンブレムが相次いで白紙に
- 9.19 集団的自衛権の行使を可能にすることや、米軍への後方支援を大幅に拡大することなどを柱とする安全保障関連法が成立
- 10.1 国民個々に付けた番号で個人情報を結びつけるマイナンバー法が施行
- 10.5 日本や米国、オーストラリアなど12カ国による環太平洋連携協定(TPP)交渉が5年半に及ぶ協議の末、大筋合意
- 10.29 米軍普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)の名護市辺野古移設計画で、政府が本体工事に着手
- 12.10 ノーベル賞授賞式が開催。アフリカや中南米の寄生虫病特效薬の開発に貢献した大村智・北里大特別栄誉教授がノーベル医学生理学賞を、素粒子「ニュートリノ」に質量があることを初めて確認した梶田隆章・東京大宇宙線研究所長がノーベル物理学賞をそれぞれ受賞。日本人のノーベル賞受賞者は計24人になった
- 12.1 訪日外国人数が、日本政府観光局の推計で前年同期比47.5%増の1796万4400人に達した。過去最高の数字となり、世間では「爆買い」という言葉が流行



「心」ある国 日本の創造 ～強く 優しく しなやかに あらゆる価値の根源となれ～

第65代会頭 山本樹育

JCI大阪 1977年生 13年大阪理事長 14年副会頭 15年専務理事 16年会頭 現・YAMAKIN (株)代表取締役社長

この時代において私たちが基軸とすべき「心」は、先の大戦の廃墟から立ち上がり諸先輩方が創り上げた経済的成長と発展とも矛盾することなく、守るべきもののために強く、優しく、そして、しなやかでなければなりません。守るべきものとは家族、郷土、祖国です。家族や公との強い紐帯から生まれるこの献身、「守る」という大義を尽くすことが日本人の強さの根底にあります。

いつの時代においても世界を変えてきたのは、突き詰めればこうした一人ひとりの力なのです。独立自尊を貫きながらも公とのつながりの中で個性を響かせあい、いろいろな時と場所で幅広く協調していく、そうした協働する仲間を増やすことができれば、私たちも世界を変えることができます。

わが国は決して閉塞しているわけではありません。「日本はだめだ」と論拠もなくいたずらに自らを卑下し悲観する声は、現場から遠く離れ実体と向き合おうとしない者たちの虚言にすぎません。現場は楽観も悲観もせず、愚直に、だが確実に、ひたすら前に進んでいます。私たちの未来は、現場に腰を据えて現場と向き合っている人の中のみあります。

日本という国が21世紀における新しく鮮やかな「国家、社会のありかた」を率先して示すことが、世界への貢献につながります。見えるものから目に見えないものに価値を見出すパラダイムシフト。「個」と「公」の調和という新たな価値観。成熟した文化による資本主義の進化。次世代の社会にその思想とシステムを、美しい普遍的な価値を持つ目に見えない資産として遺さなければなりません。

新しい資本主義の確立

資本主義に不可欠な要素の一つは経済成長であり、新しい価値を生まな

い経済は、もはや資本主義とはいえません。しかし、成長の目的は元来国民の幸福であるべきで、今後はその幸福の質が問われるのです。これからは質的成長に重点をおいたパラダイムシフトが必要です。資本主義の本質を守りつつ、目に見えない資本を使って、目に見えない価値を生み出す、社会全体が潤う「共感経済社会」というべき新しい資本主義を確立しなければなりません。その新しい資本主義には、従来の資本主義が持っている弊害を抑制する仕組みを組み込むことが求められます。つまり、利益を追求して止まない自利と利他の精神とが調和したものに進化しなければなりません。そのヒントとなるのが、日本人が古くから持つ「心」の価値観であり、日本が持つ見えざる資本が新しい考え方の方向性の柱となるのです。

これまでの資本主義における市場政策は、「規制強化」か「自由競争」かの二項対立に陥りがちでした。この二つをアウフヘーベン（止場）した「企業倫理による自己規制」という第三の軸を中心に、「共感経済社会」にふさわしい市場政策を考えていきます。

すでに世界にはCSR(企業の社会的責任)やCSV(共通価値の創造)という思想が広がっていますが、これからは企業やNPO、消費者、行政などすべての主体者に、社会と向き合った経済活動が必要とされてきます。国民一人ひとりに、この新しい資本主義の考え方を広げていきたい。個人が行うお金の使い方、この国と世界に影響を与えていきたいと思えます。

政策連携による社会実験

世の中を変えることができるのは、志とそれに基づいて生まれる持続性ある仕組みです。そして、私たちのすべての運動は、わが国の未来につなが

っています。2014年から2018年のJCI中長期戦略として、「JCIは持続可能なインパクトを創り出すために、社会の全てのプレイヤーを結束させる、中心的な役割を担う団体となる」と、組織としての方針が示されました。そのためには、すべての主体者と力を合わせて政策的に連携を深めていくべきです。その理想形が、皆が自分たちの属する公であるまちや、遠くの人、未来を想い支え合い行動する、共助型、公助型社会です。

共感者を集めて、人びとを巻き込んだ運動を絶えず創りだしていきましょう。そこに経済的な循環が伴えば、ロールモデルとして日本中、世界中に広まる可能性を秘めています。青年会議所は独立して生計を立てながら公に貢献しようとするプロボノ集団です。プロとしての価値を今こそ発揮し、国家を「私たち自身の生活の場」として取り戻そうではありませんか。

私たちの心の結晶を遺そう

「青年」—それはあらゆる価値の根源です。我々は青年経済人として先人たちと同じく祖国を想い、大義を掲げ「平成の建国」における価値の根源となるべきです。責任世代として、未来にこの国をより良い形で遺していかなければなりません。

私たちは、何も持たずにこの世に生まれ、何も持たずにこの世を去ります。しかし、人びとの心や国に生きた証を刻むことはできます。人生の中で最も輝きを放つ青年期。我々は、青年期にこの時代を生きた証を心の結晶として遺し、今しかできない、今だからこそできることを全うしようではありませんか。守るべきものは何なのかを腹に据え、そのためにこの国を護り、創っていきましょう。(抜粋)



全文はこちら→

日本青年会議所

1	日本JC第65代会頭に山本樹育(大阪JC)が就任 日本JCスローガン「強く 優しく しなやかに あらゆる価値の根源となれ!」
1.21～24	2016京都会議。「パラダイムシフト」をテーマに掲げ、国立京都国際会館にて開催
1.23	第150回通常総会開催
3.26	第151回通常総会開催
4.1～2	JCI金沢会議2016開催、テーマは「アジア地域のさらなる発展と調和のために、UNSDGs(国連 持続可能な開発目標)」
4.14	「平成28年熊本地震」が発生、14日には東京のJC会館に対策本部を設置、24日には山本会頭が被災地を訪問
4.27～30	エリアC会議開催(ウルグアイ・ブエノスアイレス)
5.4～7	エリアA会議開催(南アフリカ共和国・ヨハネスブルグ)
6.2～5	第66回JCI-ASPAC台湾 高雄大会開催。アジア・太平洋エリア各国から日本をはじめ多数のメンバーが集結(エリアB会議)
6.15～18	エリアD会議開催(フィンランド・タンペレ)
6.26～29	日中友好事業 訪中ミッション実施
6.30～7.10	第29回国際アカデミー in水戸開催。テーマ「共感」
7.5	次年度会頭予定者、青木照護(名古屋JC)に決定
7.16～17	サマーコンファレンス2016が横浜にて開催。テーマ「アウフヘーベン」
7.17	日本JCと吉本興業が包括提携協定を結ぶことを発表
7.25～28	2016 JCIグローバルパートナーシップサミット開催
8.17～24	ロシアミッション学生交流事業開催(ロシアから日本への招聘事業)
9.4～10	ロシアミッション学生交流事業開催(日本からロシアへの派遣事業)
9.17	人間力大賞2016 第30回受賞式典が開催。グランプリは川原隆邦氏が受賞
10.6～9	第65回全国会員大会広島大会開催。大会テーマ「強く 優しく しなやかに『心』ある国 日本へ」
10.7	第152回通常総会開催
10.30～11.4	第71回JCI世界会議カナダ・ケベック大会開催。

内外の動き

1.29	日銀は金融政策決定会合で、金融機関が日銀に預ける当座預金の一部について、利子をマイナスにする「マイナス金利政策」の導入を決めた。2月16日にスタートし、マイナス0.1%の金利を適用
4.14	熊本県を震源とする地震が発生、同県益城町で震度7を観測。住宅被害は約17万8000棟に上り、うち約8300棟が全壊。熊本城も天守閣はじめ大きな被害を受けた
5.27	現職の米大統領として初めてオバマ米大統領が被爆地・広島を訪問、平和記念公園の原爆死没者慰霊碑に献花した
6.1	2017年4月に予定していた消費税率10%への引き上げを2019年10月に2年半先送りすることを表明
6.15	舛添要一東京都知事、政治資金の私的流用疑惑などを理由に辞職
6.19	公職選挙法が施行、18歳以上の選挙投票が可能となる
6.25	英国は国民投票を行い、欧州連合(EU)からの離脱を決定
7.1	バングラデシュの首都ダッカで、イスラム国(IS)が関与するとみられる立てこもり事件が発生。日本人を含む人質20名が死亡
7.10	第24回参議院議員通常選挙。自公連立与党は70議席を獲得し勝利
7.26	神奈川県相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が殺害、元職員の男が逮捕される
8.5	第31回夏季オリンピック・リオデジャネイロ大会がブラジルのリオデジャネイロなどで開催。日本は、過去最多だった前回ロンドン大会の38個を上回るメダル41個を獲得
8.8	天皇陛下が、天皇の地位を皇太子さまに譲る意向(お気持ち)を表明
10.13	ミュージシャンのボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞
11.4	地球温暖化対策の新たな国際的枠組み「パリ協定」が発効、途上国を含む全ての条約加盟国が温室効果ガス削減に取り組み、産業革命前からの平均気温の上昇を2度未満に抑える目標を掲げる
11.8	米共和党のドナルド・トランプ氏が大統領選で初勝利
12.26-27	安倍首相は米ハワイ・オアフ島を訪れ、第2次世界大戦で日米開戦の舞台となった真珠湾(パールハーバー)をオバマ米大統領とともに訪問し、犠牲者を慰霊した



教育再生と経済再生による 誰もが夢を描ける日本への回帰

第66代会頭 青木照護

JCI名古屋 1977年生 14年名古屋理事長 15、16年副会頭 17年会頭 現・(株)ノーリツイス代表取締役社長

デフレ脱却

朝鮮戦争特需をきっかけに、日本は完全雇用を実現し超人手不足の中、設備投資、人材投資、技術開発投資、そして高速道路網や東海道新幹線建設などの公共投資によって急速な生産性の向上、つまり高度経済成長を果たした。そして、バブル景気を経験し、バブル崩壊後も経済成長を続けたが、1997年の消費税3%から5%への増税により翌年からデフレに突入、経済成長はマイナスもしくは横ばいを繰り返し、現在に至るまでデフレから完全に脱却することができていない。

デフレは総需要の不足によって生じるため、脱却するためには購買意欲や投資意欲を高めていくことが大前提である。しかし、デフレ期には生産性が低下し、生産者の所得が低下していくため、個人消費や企業の設備投資も減少し、総需要が増々縮小した結果、需要と供給の隔たりであるデフレギャップがさらに拡大し続けるというデフレスパイラルに陥ってしまう。この悪循環から脱しない限り、日本は「新現代」を切り拓くどころか、自国の安全保障を維持することもままならず、グローバリズムの波に呑み込まれていってしまう。

個人消費と企業の設備投資が落ち込む中、総需要を拡大してデフレから脱却するためには、政府支出つまり財政出動を拡大していくことが必要なのは誰にでも分かるはずである。にもかかわらず、政府は十分な財政出動をしないまま、2014年4月には消費税8%への増税に踏み切り、個人消費はさらに落ち込んでしまった。当然の摂理である。現在、アベノミクス新3本の矢が掲げられているが、我々は青年経済人として、これまでの経済政策に対する国民の肌感覚を調査し、デフレ脱却への真の財政政策を政府に提言すると同時に、個人消費と企業の設備投資に向けたアニマルスピリット喚起の運動を全国で展開していかなくてはならない。そのためには、地域か

ら若者が流出している現実を悲観するのではなく、その分競合相手が減ってビジネスチャンスが増えたのだと、意識をポジティブに転換することが必要である。

経済成長

高度経済成長期を振り返れば分かる通り、経済成長は、人手不足における生産性の向上によってのみ達成される。そして今日本は、総人口の減少以上に生産年齢人口の減少が加速しており、外国人労働者を受け入れない限り人手不足になることが確実である。つまり、生産性を向上することができれば、再び高度経済成長を遂げる好機を迎えているのである。

そして、デフレの元凶となっている総需要の不足を解消し、生産性の向上を達成するための秘策は、インフラ整備や技術開発への政府の投資である。特に、インフラ投資は、物流効率という生産性の向上のみならず、阪神淡路大震災、東日本大震災そして熊本地震を経験してきた自然災害大国日本における防災安全保障にとっても必要不可欠である。さらに、防災、減災については、政府だけでなく青年会議所も投資をしておくことが重要である。なぜなら、普段から地区、ブロック協議会の枠を超えた遠隔地のLOMと人的交流を行い、顔の見える関係が構築できていれば、発災直後から互いに助け合い、一人でも多くの命を救うことができるからである。そして、各地会員会議所の災害支援に関する友好関係と、ヒトやモノの往来を活性化するインフラが日本中に張り巡らされたとき、防災大国日本が確立されるのである。そのために我々は、防災、減災という共通目標のもと、各地の人的交流を促進するとともに、被災地の復興を継続的に支援していかなくてはならない。

このように、日本は生産年齢人口の減少という危機を、公共投資、技術開発投資によって好機へと転換していくことが

できるわけであるが、政府が適時に投資を実行していくためには輿論の後押しが必要不可欠である。しかし、現在多くの日本国民は、メディアの偏向報道によって、「国の借金」、「公共投資は悪だ」、「人口減少で日本は衰退する」などといった間違った知識を植え付けられてしまっている。例えば、「国の借金」とは、主に政府の国債発行残高を指しており、正しくは「政府の負債」となる。さらに、一時期話題となったヘリコプターマネー政策の仕組みを紐解いてみれば、国債を買い込んでいる日銀が政府の子会社であることは誰にでも分かるだろう。つまり、政府と日銀が連結決算すると、「政府の負債」は帳消しになってしまうのだ。国債とは一体何なのか。家計の借金とは全く異質なものであるという認識が果たして国民にあるのだろうか。国民が国民経済の仕組みをしっかりと理解し、メディアに騙されない知識を身につけなければ、いつまで経っても政府はデフレ脱却のための財政出動を十分に実行できず、結局、国民は自分で自分の首を絞めることになる。そこで、我々はメディアに対する国民の意識を調査した上で、デフレ脱却に弊害となっているメディアの喧伝を払拭する運動を展開していく必要がある。また、日本のマスメディア(テレビ、新聞)の成り立ちを知り、各々から発信される内容を論理的に読み解くことのできるメディアリテラシー教育を、海外の事例を参考にしつつ確立していきたい。

日本の青年会議所には、地域経済を担う35,000名の青年経済人が全国各地に存在している。我々一人ひとりが、国民経済の仕組みを理解し、未来へ向けて、ヒト、モノ、技術に投資を行っていくれば、国民の正しい輿論が形成され、デフレ脱却を実現することができるはずである。経済再生こそ青年会議所の本領発揮の場である。我々の力で約20年間続いたデフレから完全脱却しているのではないか。

(抜粋)



全文はこちら→

2017

日本青年会議所

- 1 日本JC第66代会頭に青木照護(名古屋JC)が就任
日本JCスローガン「自己成長を求め「日本道」を歩もう『日本を変えるのはオレたちだ!!』」
- 1.19～22 2017京都会議。「日本道」をテーマに掲げ、国立京都国際会館にて開催
- 1.21 第153回通常総会開催
- 2.17～19 JCI金沢会議2017開催、テーマ「金沢で、世界の今を考える」
- 3.25 第154回通常総会、全国理事長サミット開催
- 5.3～6 エリアA会議開催(チュニジア・スース)
- 5.17～20 エリアC会議開催(ドミニカ・プンタカナ)
- 5.9 「全国一斉インフラ投資促進プロジェクト」を発表
- 5.24～27 エリアD会議開催(スイス・バーゼル)
- 6.8～11 第67回JCI-ASPACウランバトル大会開催。アジア・太平洋エリア各国から約3,600名のメンバーが集結
- 7.5 次年度会頭予定者、池田祥護(新潟JC)に決定
- 7.7 日本JCと文部科学省がタイアップ宣言調印式を行ない、障がい者支援のための「みんなのNIPPON共生社会プロジェクト」の事業展開を宣言
- 7.9～13 第30回国際アカデミーin熊本開催。テーマ「Who Changes the World? It's US!!」
- 7.22～23 サマーコンファレンス2017が横浜にて開催。テーマ「日本を変えるのはオレたちだ!!」
- 7.23 サマコン2017「日本再生フォーラム」にて青木会頭と安倍晋三総理が対談
- 7.23 人間力大賞2017 第31回受賞式典が開催。グランプリは川口加奈氏が受賞
- 8.1 農林水産省に、農協改革の維持など諸政策の提言を行なう
- 8.24 国土交通省に、インフラ整備投資整備に向けた署名活動の報告と陳情を行なう
- 9.28～10.1 第66回全国会員大会埼玉中央大会開催。大会テーマ「運命共同体」
- 9.29 第155回通常総会開催
- 11.6～10 第72回JCI世界会議オランダ・アムステルダム大会開催。日本からは1,300名を超すメンバーが現地入りし、世界116ヵ国4,000人が集い議論を重ねる
- 12.26 66代青木会頭、67代池田会頭が安倍晋三首相と会談、政策提言を行なう

内外の動き

- 1.20 既存政治に不信を抱く白人労働者の心を捉え、予想外の勝利を収めた共和党のドナルド・トランプ氏が第45代アメリカ大統領に就任
- 2.13 金正男氏がマレーシアのクアラルンプール国際空港で殺害される
- 3.10 韓国の朴槿恵大統領(当時)の親友、崔順実氏による国政介入事件により朴氏は罷免。文在寅政権が発足
- 6.15 「共謀罪」の構成要件を改め「テロ等準備罪」を新設した改正組織犯罪処罰法が成立
- 6.17 アメリカの歌手、ケイティ・ペリーのTwitterアカウントのフォロワー数が、単一アカウントでは世界初の1億人に到達
- 6.26 中学3年生の最年少将棋棋士、藤井聡太四段(15)プロデビューから負け知らずで30年ぶりに歴代最多連勝記録(28連勝)を塗り替える29連勝を達成
- 7.5-6 台風3号と梅雨前線の影響で「九州北部豪雨」が発生、福岡・大分両県で死者38人、行方不明者3人
- 7.29 カンボジア、アンコール遺跡にてクメール王朝・ジャヤヴァルマン7世時代の病院遺跡から当時の仏像が発見
- 8.14 世界保健機関、4月から拡大しているイエメンでのコレラ感染で、死者2000人近くに上り、約50万人が感染の疑いがあると報告
- 9.3 北朝鮮が6度目の核実験を行ったと日本政府が断定。人工地震とみられる揺れを観測
- 9.9 陸上の男子100メートルで、桐生祥秀(22)が10秒の壁を突破する9秒98を記録
- 10.22 第48回衆議院議員選挙で自民党が大勝。小池百合子東京都知事は希望の党を結成も終盤失速、野党民進党は三分裂した
- 10.25 5年に1度の中国共産党大会が10月に開かれ、習近平総書記(国家主席)の名を冠した指導理念「習近平の新時代の中国の特色ある社会主義思想」が党規約に明記された
- 11.29 北朝鮮はトランプ米政権発足後に核ミサイル開発を加速させ、射程1万3000キロに及ぶとみられる新型ICBM「火星15」を発射し、「米本土全域を攻撃できる」と主張。米国は経済封鎖に加えて軍事的威嚇の強化で対抗した
- 11.30 ニューヨーク株式市場のダウ工業株30種平均の終値が史上初めて2万4000ドルを突破
- 12.8 天皇陛下が退位される日を「2019年4月30日」と定めた政令を閣議決定



「和」の精神性が導く日本の未来 感謝の心を以て、誠を尽くそう

第67代会頭 池田祥護

JCI新潟 1978年生 15年新潟理事長 16年専務理事 17年副会頭 18年会頭 現・(株)NSGホールディングス代表取締役

はじめに

志を立て覚悟をもって挑戦するという
ことを、私は青年会議所という学び舎
で知りました。入会以前の私の挑戦は、
敷かれたレールをただただ歩んでいた
に過ぎません。失敗を恐れ、周囲の評
価を気にかけ、自らを曝け出し物事と
正対することを避けていました。誰より
も自らが己の可能性を閉じ込めていた
のです。類を見ない天災に見舞われ自
身も窮地に立たされているにもかかわらず、
自らの利より地域のため、人のため
に命をかけて行動する同志の姿、侃侃
諤諤と子供たちの未来のために本音で
語り合う同志たち。そこには覚悟があり
ました。私はこの学び舎で自らの理を
知り、そして何より志を立て覚悟をも
って挑戦することを学んだのであります。

平成時代の終焉

我が国は、平成時代の終焉を迎えよ
うとしています。現在の経済状況はとい
うと、バブル経済崩壊以降、低成長の
続くこの30年を指して、「失われた30
年」という人もいるでしょう。思えばこの
30年で日本を取り巻く世界の環境は大
きく変化しました。

まず、グローバリズムの進展。かつ
ての先進国市場は、G7の5億人の市場
でした。東西冷戦終結後、一気にEU
は拡大し中国、ロシアなどの新興国も
経済成長を遂げ、G20の40億人の市
場が誕生しました。一方で、製造業の
生産工程はモジュール化し、それぞ
れのモジュールの世界最適国で生産がな
され、製品化されるようになります。日
本のメーカーは、次々に製品のトップ
シェアを奪われ、苦境に立たされる場
面が増えました。

そして、デジタル化、ICT化の進行
です。情報は世界中を駆け巡り、技術
のキャッチアップも容易となりました。
新たな技術の登場によって短期間に市

場そのものが消滅する時代の到来で
す。経営は常に次の変化を読み、新た
な決断をし続けなければならなくなっ
たのです。こうした大きな経済変化の潮
流の中で、日本と日本人が翻弄されて
きたのが平成の30年間でありました。

憲法輿論喚起とスマートな 防衛のあり方

憲法改正の是非について、これから
改正案の中身の議論へと進みつつあり
ます。我々青年会議所も2005年から憲
法草案をまとめ、世に問うた訳であり
ます。あれから12年余りが経ち、与党が
国会議員の3分の2を超える議席を占
め、憲法改正の発議が可能である今、
改めて発議の争点についての議論を深
め、後世に対し、日本人として誇りをも
てる憲法にしていく必要があるのです。

リベラル・ナショナリズム

「リベラル・ナショナリズム」という政
治哲学の一潮流は1993年にイスラエ
ルの政治哲学者であり、のちに教育相と
なるヤエル＝タミールが最初に用いたと
言われています。この相反する二つの
概念を結合した言葉が、米国における
多文化共生を包含する考え方の一つと
して注目されてきています。リベラリスト
が価値を置く自由や人権、平等といった
ものを現実社会で担保するために、そ
の前提として国家という運命共同体意
識＝ナショナリズムがなければ、実現
し、維持し得ない。この考え方は、こ
れからの日本の保守主義のあり方とし
て、また、日本の国柄である「和」の精
神性と照らし合わせても、我が国と親
和性が高く、価値のある概念だと捉え
られるでしょう。

渋沢栄一と松下幸之助

今から150年前の1868年(明治元
年)11月、フランスから戻った渋沢栄一

は、徳川慶喜のもとに馳せ参じ、日本
で初めての組織的な株式会社の形であ
ると言われる「商法会所」の設立を建
議、翌年1月には設立に漕ぎ着けたと
いいます。その後、渋沢の手掛けた会
社は500社に及び、その著作「論語と
算盤」という名の通り、利益だけを追
求するのではなく、商道徳に適った経
営を行うことを強調したのです。その
後、渋沢は600を超える福祉事業にも
関わることとなりました。

一方、100年前の1918年に自ら大阪
にて起業したのが、松下幸之助です。
日本で初めて週休二日制を取り入れた
り、従業員のために企業内病院を設
置したりと、社員の福利厚生に心を砕き
ました。さらに、全国47都道府県にあ
えて工場を設立し、地域の雇用対策に一
役買っています。

こうした渋沢や松下の行動は、一經
営者や一企業が私利を意図してとら
れたものでは毛頭ありません。彼らは、
他利、あるいは公益を考え、意を決し
リスクを覚悟して行動したのです。我々
青年経済人も、こうした先人に恥じぬ
ように、目に見えるものを大切にす
る株主資本主義ではなく、目に見えないもの
を大切にす公のための資本主義の仕
組みを考え抜き、従業員や取引先、地
域や国家、国際社会のために公益を増
進すべく国内外において運動を展開し
ていくべきと考えます。

結びに

我々は、決して一人で生きているの
ではなく、祖先がいて、両親がいて、そ
して今、我々はこの世に存在していま
す。宇宙の時間軸の中では一瞬とも言
える我々の人生をどのように生きるべきか。
すべての関わる人、すべての機会に感
謝することを忘れず、たった一度きりの
人生を大切に生きようではありませんか。
(抜粋)



全文はこちら→

2018

日本青年会議所

- 1 日本JC第67代会頭に池田祥護(新潟JC)が就任
日本JCスローガン「感謝の心を以て、誠を尽くそう～限りなき可能性を信じて～」
- 1.18～21 2018京都會議。「公に誠を尽くす」をテーマに掲げ、国立
京都国際会館にて開催
- 1.20 第156回通常総会開催
- 2.16～18 JCI金沢会議2018開催、テーマ「Global Goals in Action」
- 3.24 第157回通常総会、全国理事長サミット、地域未来投資
コンテスト開催
- 5.9～12 エリアA会議開催(ベナン・コトフー)
- 5.24～27 第68回JCI-ASPAC鹿児島大会開催。「チェスト! 大胆
に前に進もう!」をテーマに、アジア・太平洋エリア53ヵ国か
ら約8,200名のメンバーが集結(エリアB会議)
- 6.6～9 エリアC会議開催(アメリカ・ニューヨーク)
- 6.19～22 エリアD会議開催(ラトビア・リガ)
- 7.5 次年度会頭予定者、鎌田長明(高松JC)に決定
- 7.8～12 第31回国際アカデミー in 姫路開催。テーマ「SPIRIT OF
HARMONY」
- 7.19～21 日中友好事業(招聘ミッション)
- 7.21～22 サマーコンファレンス2018が横浜にて開催。テーマ「日本
創生への奇跡」
人間力大賞2018 第32回受賞式典が開催。グランプリ
は尾中友哉氏が受賞
- 7.24～27 2018 JCIグローバルパートナーシップサミット開催
- 8.7～8 西日本豪雨 池田会頭が被災地を訪問
- 9.14 日本JCと内閣府で「未来へつなぐ防災プロジェクト」タイアッ
プ宣言を締結
- 10.4～7 第67回全国会員大会宮崎大会開催。大会テーマ「愛と希
望溢れる国 日本へ」
- 10.5 第158回通常総会開催
- 10.30～11.3 第73回JCI世界会議インド ゴア大会開催。大会テーマ
「Jai Ho, BE VICTORIOUS (万歳 勝利をつかもう)」

内外の動き

- 2.9 第23回冬季五輪平昌大会が2月、韓国で開催。日
本選手団はメダル13個(金4、銀5、銅4)を獲得し、
冬季の最多記録を更新
- 3.9 学校法人「森友学園」への国有地売却問題で、財務
省は決裁文書の改ざんや学園側との交渉記録の廃棄を
認め、関係者20人が処分された
- 4.27 韓国の文在寅大統領と北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委
員長は、板門店の韓国側施設「平和の家」で会談し、
朝鮮半島の「完全な非核化実現」を共同の目標に掲げ
た「板門店宣言」に署名
- 5.8 トランプ米大統領が欧米など主要6カ国とイランが締結
した合意からの離脱を表明
- 6.12 トランプ米大統領と北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長
がシンガポールで会談。米朝首脳会談が史上初めて実
現
- 7.6 オウム真理教の元代表松本智津夫(麻原彰晃)元死
刑囚と元幹部6人の刑を一斉に執行
- 7.6 残業時間の上限に罰則付きの規制を導入する「働き方
改革」関連法が公布
- 10.2 サウジアラビアの著名な反体制派記者ジャマル・カショギ
氏が、結婚手続きのため訪れたトルコ・イスタンブールの
サウジ総領事館で殺害される
- 10.22 中央省庁が長年にわたり障害者雇用を水増ししていたこ
とが発覚。28の行政機関が不正を行い、2017年6月
1日時点で3700人を障害者として数えていたことが判明
- 10.29 ドイツで長期安定政権を率いてきたメルケル首相が州議
会選連敗の責任を取り、中道右派与党・キリスト教民主
同盟の党首を辞任すると表明
- 11.14 安倍首相は、シンガポールでロシアのプーチン大統領と
会談し、北方領土問題に関して1956年の日ソ共同宣
言を基礎に平和条約締結交渉を加速させることで一致
- 11.19 日産自動車のカルロス・ゴーン会長が巨額の役員報酬を
隠したとして、金融商品取引法違反(有価証券報告書
の虚偽記載)容疑で東京地検特捜部に逮捕され、会長
を解任される
- 12.30 米国を除く環太平洋連携協定(TPP)参加11カ国が
合意した新協定「TPP11(イレブン)」が発効



誰もが挑戦できる幸せな国 日本の創造へ向けて

第68代会頭 鎌田長明

JCI高松 1980年生 16年高松理事長 18年副会頭 19年会頭 現・鎌長製衡(株)代表取締役社長

はじめに

未来のことは誰もわかりません。しかし、未来が誰の手に委ねられているかは明確です。私たちの未来を明るく豊かにできるのは、私たち自身だけなのです。たとえ、一人ではできなくても、同じ志をもつ仲間がたった数人集まるだけで、未来はきっと変えられます。さあ、青年よ、たとえ今は苦しくとも自ら変化の起点となり、心躍る素晴らしい未来を共に作ろうではありませんか。

平成時代の終わり新しい時代の始まり

時代は大きく変化をし始めています。充実した社会資本を活かし、変化を上手く捉えて社会をより良くできれば、日本の未来は必ず明るくなるはず。そのとき、青年は誰よりも率先して変化を捉えて行動しなければなりません。

社会のつながりが弱まった現代において、強い縦の関係と横の結束がある組織はなくなりつつあります。しかし、まだ日本には青年会議所があります。日本の青年会議所は社会を動かす青年を生み出す存在とならなければなりません。

全員が挑戦し、誰一人取り残さない日本社会を築く

一部の人や集団が社会をリードするだけでは、20年後も日本が明るく豊かで世界に誇れる国となることは難しいでしょう。一方で、個人の置かれる条件は良いものばかりとは限らず、挑戦には成功と失敗が伴います。しかし、条件の悪い人や失敗した人を社会から取り残すならば、挑戦する人はいなくなり社会は暗いものとなります。誰一人取り残さない社会を築くこと、それは私たち全員の責務です。

社会、経済、人材を開発し、組織を進化させる

日本青年会議所は社会の改善、経済の充実、人材の育成に取り組み、組織を進化させます。社会の改善の指標とし

ては、SDGsに注目します。日本社会と日本に関わる国々の社会の改善のために、SDGsの17の項目について私たち自身の目標を定めて推進を行います。経済の充実の指標としては、企業の競争力と持続性の向上と、GDPの中でも特に民間消費、民間投資、輸出の向上に注目します。人材の育成の指標としては、人材の数、広がり、質に注目します。組織の進化の指標としては、地域の青年会議所の数、メンバー数、メンバーの能力、ネットワーク、社会の中での発言力、内部統制に注目します。

5つの戦略

社会を変革するために、日本青年会議所は5つの戦略を実行します。

第1の戦略は、力ある青年を増やすことです。青年を動機付け、より多くの仲間を作り、機動的に決定する会議を通して挑戦をする機会を作り出すことで青年を成長させ、力ある青年を増やします。

第2の戦略は、パートナーシップを築くことです。長期的目的を共有できる個人や団体と対話を進めて信頼関係を醸成し、時に共に行動することで、パートナーシップを築いていきます。

第3の戦略は、社会実験を行うことです。社会実験をパートナーと共に企画し、共に資金を集め、共に発信し、共に実施します。

第4の戦略は、未来に向けた投資を行うことです。継続的に資金を集める仕組みを作り、長期的資産となる情報基盤や有形・無形の資産に投資します。そして、メンバーの拡大と人材の開発に投資し、組織の発信力を高めていきます。

第5の戦略は、政治を動かすことです。同じ志を持つ集団の声を集め、政治家だけでなく利害関係者に対して横串で訴えかけ、政治が動くきっかけを作ります。

社会の各分野をつなぐ

少子高齢化によって日本の各地域が今後急激に変わっていくことが予想される

中で、希望を持って未来を描く青年会議所の政策や事業は各地域をリードする可能性があります。日本青年会議所の各委員会等や各協議会は、行政をはじめとした社会の各分野とのつながりを強め、地域の青年会議所だけでは築くことのできないネットワークを築き、地域の青年会議所につなげていきます。

何を残していくのか

日本青年会議所は1年という限られた時間の中で、可能な限り素早く各地の青年会議所に政策を周知して賛同を集め、パートナーシップを築いて社会実験を実施し、そこから得られた実績や知見を行政やパートナーや各地の青年会議所が実施できる形にして渡すことで、インパクトの持続性と単年度制を両立していかねければなりません。そして、次年度以降に1年間の活動で作りに上げた実績とネットワークと人材を引き渡していくことで、新たな挑戦により大きな力を与えていくのです。

終わりに

私たちは歴史ある日本の青年会議所運動の偉大な「巨人の肩」の上に乗っているのです。私たちはいつまでも青年のままにいることはできませんが、私たち自身が何歳になっても挑戦できる社会の実現は可能です。いまこそ、私たち青年は信念を持ち、国境を越えてつながり、自由な発想で経済活動を行い、社会的公正を重視し、多様性を活かし、社会に貢献しようではありませんか。私たちが共に行動することこそが、日本をもっと偉大な国へと変え、私たち一人ひとりが幸せになるために重要なことなのです。

(抜粋)



全文はこちら→

2019

日本青年会議所

1	日本JC第68代会頭に鎌田長明(高松JC)が就任 日本JCスローガン「共に心躍る未来へ『やりましょう!』」
1.17	日本JCと外務省でSDGs推進におけるタイアップ宣言を締結
1.18～20	2019京都会議。「持続不能」をテーマに掲げ、国立京都国際会館にて開催
1.19	第159回通常総会開催
2.22～24	JCI金沢会議2019開催、テーマ「GLOVAL GOALS IN ACTION-BETTER SOCIETY, BETTER LIFE-」
3.14	日本JCと吉本興業がSDGsを基軸とした「2019年度の包括提携」契約を調印
3.23	第160回通常総会開催
4.10	日中友好事業 日中ビジネス交流会開催
5.1～4	エリアA会議開催(モーリシャス・フリック アン アラック)
5.8～11	エリアD会議開催(フランス・リヨン)
5.15～18	エリアC会議開催(アルゼンチン・メンドーサ) G20YEAサミットが福岡で開催
6.17～20	第69回JCI-ASPAC韓国 済州島大会開催。「Peace in Action!」をテーマに、アジア・太平洋エリア63ヵ国からメンバーが集結(エリアB会議)
7.5	次年度会頭予定者、石田全史(浪江JC)に決定
7.8～12	第32回国際アカデミー in 軽井沢開催。テーマ「Work together!」
7.20～21	サマーコンファレンス2019が横浜にて開催。テーマ「World SDGs Summit」 「JCI JAPAN TOYP2019」(旧人間力大賞)の授賞式が開催、グランプリは永山由高氏が受賞
10.10～13	第68回全国会員大会富山大会開催。大会テーマ「新陳代謝」
10.11	第161回通常総会開催
11.4～8	第74回JCI世界会議エストニア・タリン大会開催。大会テーマ「PURE MAGIC」

内外の動き

2.25	米軍普天間飛行場の辺野古移設の是非を問う県民投票が開催、反対票7割超の民意を受け、玉城デニー知事は辺野古埋め立て工事の中止を訴えるも、政府は工事を続行。
3.21	米大リーグ、マリナーズのイチロー外野手が45歳で現役を引退
3.23	過激派組織「イスラム国」(IS)の最後の拠点とされるシリア東部バグズが制圧され、イラク、シリア内の「領土」はなくなり、疑似国家としてのISは崩壊
4.1	菅義偉官房長官が新元号「令和」を発表
4.15	フランス・パリのノートルダム大聖堂で大規模な火災が発生、屋根の大半と尖塔が焼け落ちた
5.1	天皇陛下が即位され、令和の時代が始まった
6.9	香港で、中国本土への容疑者引き渡しを可能にする逃亡犯条例改正案に反対し大規模デモが勃発。警官隊との衝突が頻発し、負傷者も出るなど未曾有の混乱に陥った
6.30	トランプ米大統領が、朝鮮半島の南北軍事境界線をまたいで北朝鮮に足を踏み入れた。北朝鮮訪問は現職米大統領として史上初となる
7.18	京都市伏見区のアニメ制作会社「京都アニメーション」のスタジオに男が侵入、ガンリンをまいて放火。爆発火災でスタジオは全焼、36人が死亡
8.4	ゴルフの全英女子オープンで渋野日向子選手が優勝
8.29	iPS細胞から作った角膜細胞による世界初の目への移植手術を大阪大学が発表。
9.9	台風15号が千葉県付近に上陸し、最大瞬間風速57.5メートルを観測。約93万戸で停電が発生
9.20-11.2	ラグビー W杯日本大会で列島熱狂、史上初の8強入りを果たした
10.1	消費税が10%に引き上げられる。同時に酒類・外食を除く飲食品や宅配の新聞を8%のまま据え置く軽減税率が導入、キャッシュレス決済でのポイント還元による負担軽減策も初めて導入された
10.31	那覇市の世界遺産、首里城跡に復元された首里城の正殿から出火し、北殿、南殿など6棟が焼失した
11.23	世界に約13億人の信者を抱えるキリスト教最大の教派、ローマ・カトリック教会トップのフランシスコ教皇が来日



真実一路 軌跡を紡ぎ、奇跡を起こそう！

第69代会頭 石田全史

JCI浪江 1980年生 18年専務理事 19年副会頭 20年会頭 現・(株)双葉不動産代表取締役

はじめに

10年後の未来を想像してください。「あなたが暮らす地域の文化は誇りとして受け継がれ、産業は人びとの生活を支える基盤となっている。まちを訪れる人やそこに暮らす人が増え、人びとの所得と幸福度は向上し、地域経済には好循環が起きている。そして地域から日本を支える本来の姿を取り戻している。世界の中の日本は、他国からの圧力に屈せず、自らの力を持って、世界との関係を深化させ、世界の恒久的平和に貢献する国となり、世界からの尊敬と信頼を集めている」。

私は令和という時代に、このような未来を描いています。地域社会の再建が、明るい豊かな国家を築く、そして世界に貢献する日本へ。描くことができる未来は、必ず実現できると確信しています。

厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人ひとりの日本人が明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる。そのような願いが込められ、令和という時代は幕を開けました。

悠久の歴史と薫り高き文化、四季折々の美しい自然、このような日本の国柄を次世代へ紡いでいくために、物心両面において豊かな令和の時代を創っていかなくてはなりません。これこそまさに、我々青年に課せられた使命であります。

国家的な責任の自覚

我が国の国土面積は全世界のたった0.28%ですが、全世界の活火山の7%は日本に存在し、M6以上の地震の20.5%は、日本で発生しています。内閣府が想定する大規模地震には、首都直下地震となる相模トラフ沿いの海溝型地震と中部圏・近畿圏直下地震となる南海トラフ地震があり、30年以内に

どちらも70%の確率で発生すると予測されています。我が国の中枢機能や重要文化財、太平洋ベルトに位置する国を支える産業が、この危険予測地帯に位置しています。これらの地域以外でも大規模な災害が起こる可能性は充分にあり、近年では火山の噴火や豪雨など人びとの生命と財産を脅かす災害は多発しているのです。自然の力の前で人間の力は無力であり、誰にも食い止めることはできません。しかし被害を最小限に食い止める「減災」という考え方も存在します。災害発生時のメカニズムを知り、備え方と発災時の対処を学ぶ「防災と減災」を義務教育化に向けた運動として確立するのです。国民の生命と財産を護るために、経済的価値と防災と減災に関する備えといった両方向の視点を持って、この国のかたちをより良いものへと変えていこうではありませんか。

また、これまで発生した災害に対し、全国の会員が一丸となり被災地への支援を行ってきた実績があります。NPO団体・民間企業・災害医療機関や防災と減災のエキスパートなどパートナーを拡充して、コレクティブ・インパクトを意識したプラットフォームとなり、有事の際に迅速かつ効果的な被災地支援が可能となる組織体制を構築するのです。

東日本大震災から10年を前に

2011年の東日本大震災は、これまで漠然と描いていた未来が崩壊した瞬間でした。広範囲に渡る激震と巨大な津波により、多くの生命や財産が失われました。さらには原子力発電所の放射性物質の飛散により、故郷は消滅の危機に瀕しています。多くの方々が、地震や津波で犠牲となりました。その中には、志半ばで帰らぬ人となった仲間もいます。

「生きる」ということは、当たり前のこ

とではなく、奇跡の連続だと気づかされた。そして故郷は、唯一無二の心の拠り所です。どのような状況においても故郷を護ることができるのは、そこに住み暮らす人びとしかいないのです。これが、震災で得た私の教訓であります。2020年には、あの震災から10年目を迎える。未だ復興は道半ばであります。復興へ一歩一歩と前に進んでいくことが私の生きがいであり、原動力でもあります。

震災後、只々呆然と立ち尽くし、将来に対する希望を失い、絶望感に浸る日々を送っていました。そのような私に、現実を受け止め、未来を切り拓く勇気を与えてくれたのが、この組織で出会った人びとでした。青年会議所どころではないと感じたこともありました。しかし、青年会議所がなくなったら、故郷の未来はどうなるのだろうかと自問自答を繰り返したことを思い出します。

そこで導き出された答えは、夢を語り、希望に満ちた、世界に誇れる故郷の未来を描くことでした。そう決意したら、再び前を向いて歩き出すことができましたのであります。

気付いたら、一緒に活動する仲間が集まってくれていました。

挑戦する前から無理だと決めつける、そのような先入観は捨て、大きな夢を語り、仲間を集めて、未来を創ろう。我々は、努力と挑戦の連続の先に必ずより良い変化を起こすことができると信じています。己の信じた道を突き進む、真実一路が世の中を変える。

先入観を捨て、夢を描き、仲間を信じて、新しい時代を創りだそう。

軌跡を紡ぎ、奇跡を起こそう。
(抜粋)



全文はこちら→

2020

日本青年会議所

1	日本JC第69代会頭に石田全史(JCI浪江)が就任 日本JCスローガン「真実一路 軌跡を紡ぎ、奇跡を起こそう!」
1.17～19	2020京都会議。「アップデート」をテーマに掲げ、国立京都国際会館にて開催
1.18	第162回通常総会開催
2.21～23	JCI金沢会議2020開催、テーマ「NO EARTH NO LIFE」
3.27	新型コロナウイルス感染拡大に関して政府へ緊急政策提言書を提出
3.28	第163回通常総会開催 新型コロナウイルスの影響によりエリアA～D会議が中止に
5.27	「新型コロナウイルス対策に関する緊急提言II」を政府に提出
7.5	次年度会頭予定者、野並晃(横浜JC)に決定
7.24	全国一斉花火プロジェクトはじまりの花火ー開催
8.16	「JCI JAPAN TOYP2020」(旧人間力大賞)の授賞式が開催、グランプリはTATSU氏が受賞
9.19～20	日本アカデミー(第1部)開催
9.24～27	第69回全国会員大会札幌大会開催。大会テーマ「キセキ軌跡×奇跡」
9.26	第164回通常総会開催
10.27～11.1	第33回国際アカデミー in福岡開催
11.3～7	第75回JCI世界会議横浜大会開催。大会テーマ「The Crossroad of Innovation」。また、小嶋隆文(JCI大阪)が2021年度JCI会頭に選出、佐々木隆浩(JCI埼玉中央)が同副会頭に選出
11.5	第165回通常総会開催、JC宣言文改訂の審議が可決。 新たな指針が誕生した

内外の動き

1.8	日産自動車前会長カルロス・ゴーン被告が保釈中に中東レバノンに逃亡
1.31	英国が欧州連合(EU)を離脱
2.3	横浜港沖に到着した大型クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号で新型コロナウイルスの集団感染が発生、感染者は700人を超えた
2.27	安倍晋三首相が全国すべての小中高校・特別支援学校に臨時休校を呼びかける
3.11	新型コロナウイルス感染拡大により、世界保健機関(WHO)はパンデミック(世界的流行)を宣言
3.25	新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受け、7月に開幕を予定していた東京五輪の1年延期が決定
4.7	7都府県を対象に、新型インフルエンザ対策特別措置法に基づく緊急事態宣言を初めて発令、その後対象を全国に拡大した
5.31	米宇宙企業スペースXが開発した有人宇宙船「クルードラゴン」の試験機が国際宇宙ステーションにドッキング。民間宇宙船による初の本格的な有人宇宙飛行に成功
6.6	黒人男性が白人男性に殺害された事件を契機に、「ブラック・ライブズ・マター(黒人の命は大切)」をスローガンに抗議デモが全米各地で相次ぐ
6.30	中国の全国人民代表大会(全人代、国会に相当)常務委員会は、香港の統制を強化する「香港国家安全維持法」の導入を決定、香港政府が即日施行
7.3-8	九州一帯を記録的な豪雨が襲い、多くの河川が氾濫して大規模な水害が発生。熊本県や福岡、鹿児島両県など犠牲者は70人を超えた
8.20	棋士の藤井聡太八段が史上最年少でタイトル二冠を達成
8.28	安倍晋三首相が持病の悪化を理由に退陣を表明
9.14	自民党総裁選で菅義偉官房長官が総裁に選出され、16日の臨時国会で第99代首相に指名された
11.3	米大統領選で、民主党のバイデン前副大統領が共和党の現職トランプ大統領に勝利。史上最多の8000万票以上を獲得
11.15	日本と中国、韓国、東南アジア諸国連合(ASEAN)加盟国など15カ国が地域的な包括的経済連携(RCEP)協定に署名
12.4	『鬼滅の刃』最終巻が発売。コミック・アニメ共に社会現象を巻き起こす



しなやかな復元力の獲得をめざして ～真に持続可能な国へ～

第70代会頭 野並晃

JCI横浜 1981年生 20年副会頭 21年会頭 現・(株)崎陽軒専務取締役

はじめに

新型コロナウイルスを起因とするパンデミックは、人類のあらゆる尊厳を脅かし、世界規模で社会的、経済的、そして政治的危機を引き起こしながら、依然として私たちの生活に甚大な影響を与えています。青年会議所もまた、その活動に大きな影響を受け、日々、生命の安全と経済の再生という難しい選択を突きつけられました。今までの価値観が変容し、新しい時代を迎えざるを得ない時代です。

私は、こんな時代だからこそ、70年前に制定された創始の精神を今一度噛みしめ、改めて青年会議所の本来の姿を明確にして、行動していくことが求められていると信じています。

今、私たちが問われている

戦後の荒廃期、祖国日本の再建は、私たちが成すべきことであるのだという圧倒的な当事者意識の集積が青年会議所を創り、その意志は全国へと伝播されました。様々な時代を背景として、日本における青年の運動は設立から70年にわたって今日まで連綿と流れ続けています。

企業にとっては、継続は1つの命題です。特に我が国においては、江戸時代の商家が暖簾を守ることを使命として、日々の商いに努めていました。仕事に励み、利潤を上げていくことは、生活の維持向上のためでもありましたが、それにも増して営業の基盤を固め、商いの永続性を確立していくことが主人たるものの使命と心得、その使命遂行の責任を持つ故に、従業員に仕事を命じることも協力を要請することもできたということです。

青年会議所にとって、継続とは手段です。拠り所とする価値観を踏み外すことなく、一方で時代に即した形で変わり続けてきたからこそ、今日の青年会

議所が存在するのだと私は解釈をしています。だからこそ、未来へ歩みを進めるために不可欠となる、原点への回帰という作業を確認することで、立脚点を明確にし、その立脚点を前提として、未来への進化を図っていきたいと考えています。

今までの中心が明日には周辺になり、価値観や文化をも覆しかねません。今という時代に光明を見出すのは、私たちの「純粋な正義感と、目的完遂の確固たる実行力」に他ならず、「打開してゆくため採るべき途は国内経済の充実であり、国際経済との密接なる提携」に他ならないのです。

地域の自立を促し、 背中を押すことが、 柔軟な国家の形成につながる

地域に権力や資本を分散させたとしても、国家レベルの課題を地域に担わせることが妥当でないことは言うまでもありません。国防や巨大インフラの整備といった事業を、地域の手に分散して担わせることはできません。

しかし、国家とは地域の延長であり、地域に住み暮らす人々を抜きにして成り立つものではありません。したがって、地域に密着した私たちが、国家的課題を把握し、それを各地域において実践することは重要な意味を持ちます。実践すべきは集積された権力や資本を運用するための戦略ではなく、多様性ある各地域でなし得る地に足の付いたリアルな戦略です。そうした戦略を、国家的戦略の立案・遂行を担う人・団体とパートナーシップを組み、これを継続することによって、よりリアルに実践していくことこそが、新たな時代の日本青年会議所に課せられた担いです。

おわりに

私が生まれ育った横浜のまちは江戸

時代末期、僅か100戸ばかりの小さな漁村でした。今の時代でその人口を評価すれば、消滅可能性都市に組み入れられるでしょう。そのまちが人口376万人を数えるまでに成長できた要因は、変化を積極的に受け入れ、過去の延長線上の対策ではなく、柔軟かつしなやかにリスクに対応するレジリエンスがあったからです。

しなやかな再起力、復元力などの意味を持つレジリエンス。背景には、不確実性の高まりがあります。気候変動の深刻化やAIに象徴される破壊的な技術革新、グローバル化、先進国の高齢化と新興国における人口爆発など、私たちは常に未曾有の変化に直面しています。

これまで数々の想定外の事態が発生し、大きな被害をもたらしました。不確実性の高い将来に備えるためには、過去の延長線上の対策ではなく、柔軟かつしなやかにリスクに対応するレジリエンスが重要なのです。SDGsの中にも、「エンパワーメント」、「インクルージョン」、「レジリエンス」の3つの言葉が繰り返し出てきます。これらを実現せずして、持続可能性の向上は不可能という考え方が根底にあります。

正解のない時代だからこそ、個人としても、地域や国としても、真のレジリエンスが求められているのです。困難や矛盾のある所には、必ず新たな発想の機会があり、それらを克服しようとする向き合う所にイノベーションが生み出されるのです。

あらゆるカウンターパートと手を携え共鳴を起こし、様々な善意や価値の結節点となって新たな価値を共創し、有機的な共感の連鎖の輪を幾重にも描きましょう。

(抜粋)



全文はこちら→

2021

日本青年会議所

- 1 日本JC第70代会頭に野並晃(JCI横浜)が就任
日本JCスローガン「Idea&Action 光を放つ起点となる
う!」
- 1.22～24 2021京都會議。「輝きのはじまり」をテーマに掲げ、国立
京都国際会館にて開催
- 1.23 第166回通常総会開催
- 3.27 第167回通常総会開催
- 6.3～6 エリアC会議開催(web)
- 6.10～13 エリアD会議開催(web)
- 6.30～7.3 エリアA会議開催(web)
- 7.5 次年度会頭予定者、中島士(JCI大分)に決定
- 7.17～18 サマーコンファレンス2021が横浜で開催。テーマ「彩の結
節点」
- 8.19～22 第71回JCI-ASPAC台湾台中大会開催。オンライン開催
のなか、より多くの各国メンバーが気軽に参加できる環境が
整えられ、交流がなされる(エリアB会議)。
- 9.21～25 第34回国際アカデミー in 仙台開催
- 10.7～10 第70回全国会員大会とちぎ宇都宮大会開催。大会テーマ
「アイデアとアクション」
- 11.16～20 第76回JCI世界会議ヨハネスブルグ大会をオンライン開催

内外の動き

- 1.7 新型コロナウイルス感染拡大を受け、埼玉県、千葉県、
東京都及び神奈川県の一部3県において緊急事態宣言
が発令される
- 1.20 米首都ワシントンで大統領就任式が行われ、第46代
アメリカ合衆国大統領にジョー・バイデン氏が就任。カ
マラ・ハリス氏が女性・黒人・アジア系として初の副大
統領となった。トランプ前大統領は就任式を欠席
- 2.1 ミャンマーで国軍によるクーデターが発生、アウン・サ
ン・スー・チー国家顧問らの身柄が拘束される
- 2.12 東京五輪組織委員会の森喜朗会長が辞任。18日、新
会長に橋本聖子会長が就任
- 2.17 新型コロナウイルスワクチンの医療従事者向け接種が開
始
- 3.11 東日本大震災から発生から10年、各地で黙祷が捧げら
れる
- 3.25 福島県・楡葉町から聖火リレーがスタート
- 4.11 ゴルフのマスターズ・トーナメントで松山英樹選手が優
勝、日本人として初のメジャー制覇を果たした
- 4.25 新型コロナウイルス感染拡大を受け、東京都、大阪府、
兵庫県、京都府において3回目の緊急事態宣言が発令
される
- 4.30 東京電力福島第1原発からトリチウムを含む処理水の海
洋放出が決定し、共同声明を発表
- 5.11 イスラエルがパレスチナ自治区ガザを空爆、パレスチナ
情勢が緊迫化
- 6.6 陸上の山縣亮太選手が100m走で9秒95を記録、日
本新記録を樹立
- 6.6 ゴルフの全米女子オープンで笹生優花選手が優勝
- 7.3 関東、東海地区で記録的豪雨、熱海では大規模な土
砂災害が発生
- 7.12 新型コロナウイルス感染拡大を受け、東京都に4回目の
緊急事態宣言が発令される
- 7.13 野球の米メジャーリーグで大谷翔平選手が活躍、オール
スター戦に「二刀流」で出場
- 7.23 感染拡大を受け開催自体が危ぶまれるなか、2020東京
オリンピックが開幕。日本は計58個のメダルを獲得。8
月24日にはパラリンピックも開幕
- 8.15 アフガニスタンにおいて、反政府武装勢力タリバンが首
都カブールを制圧、政権を掌握した
- 9.3 菅義偉首相は党総裁選の出馬を断念、退陣へ
- 9.27 横綱白鵬が現役引退
- 9.29 自民党総裁選で岸田文雄氏が第27代総裁に選出
- 10.4 岸田新内閣が発足
- 10.31 第49回衆議院議員選挙で自民党が単独過半数を超え
る議席を獲得

ダイヤグラムガイド

データ篇

世界地図で見る各国JCI加盟 NOM分布図



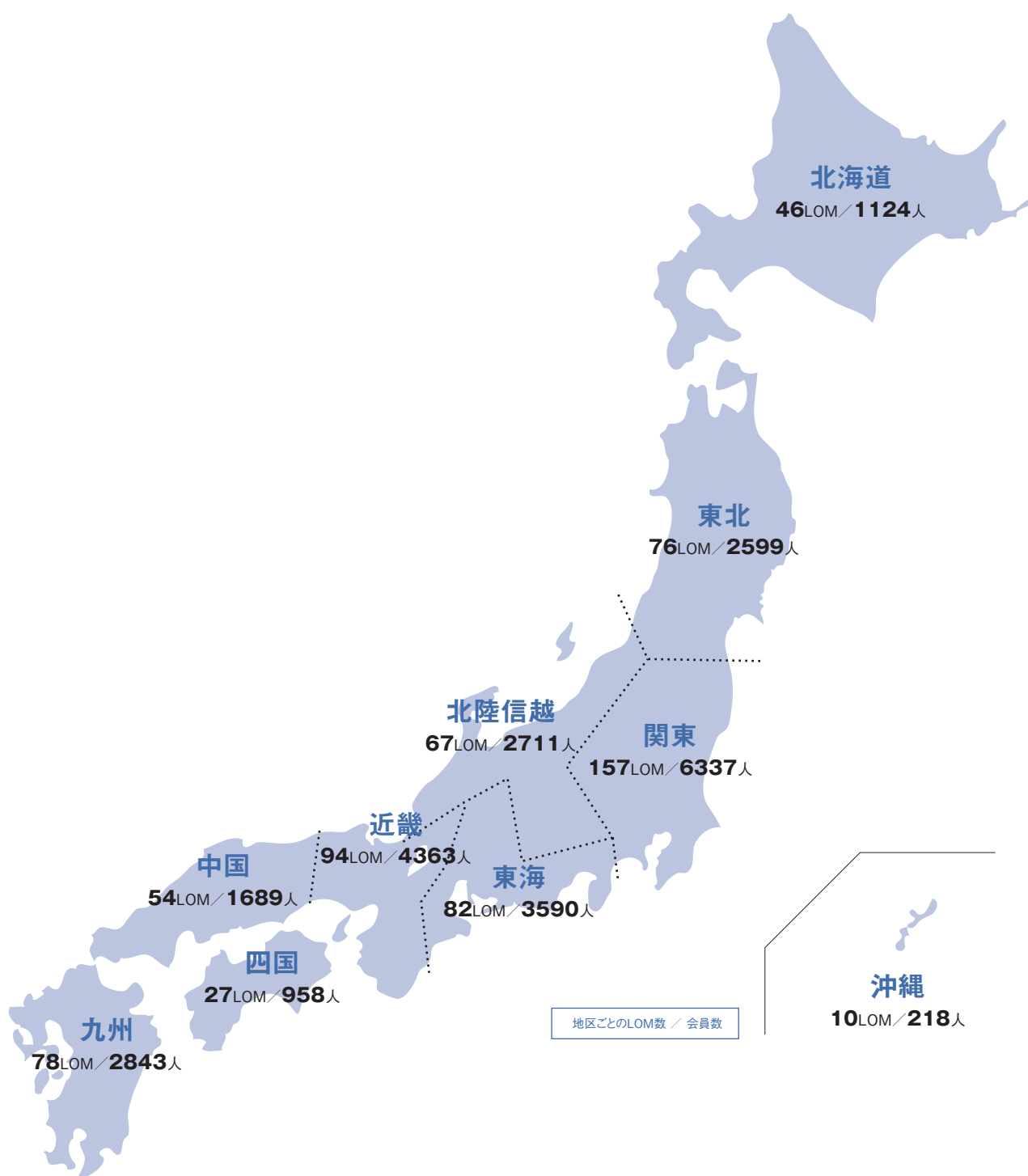


NOM数105ヵ国(2020年12月)

地図で見るJCI日本

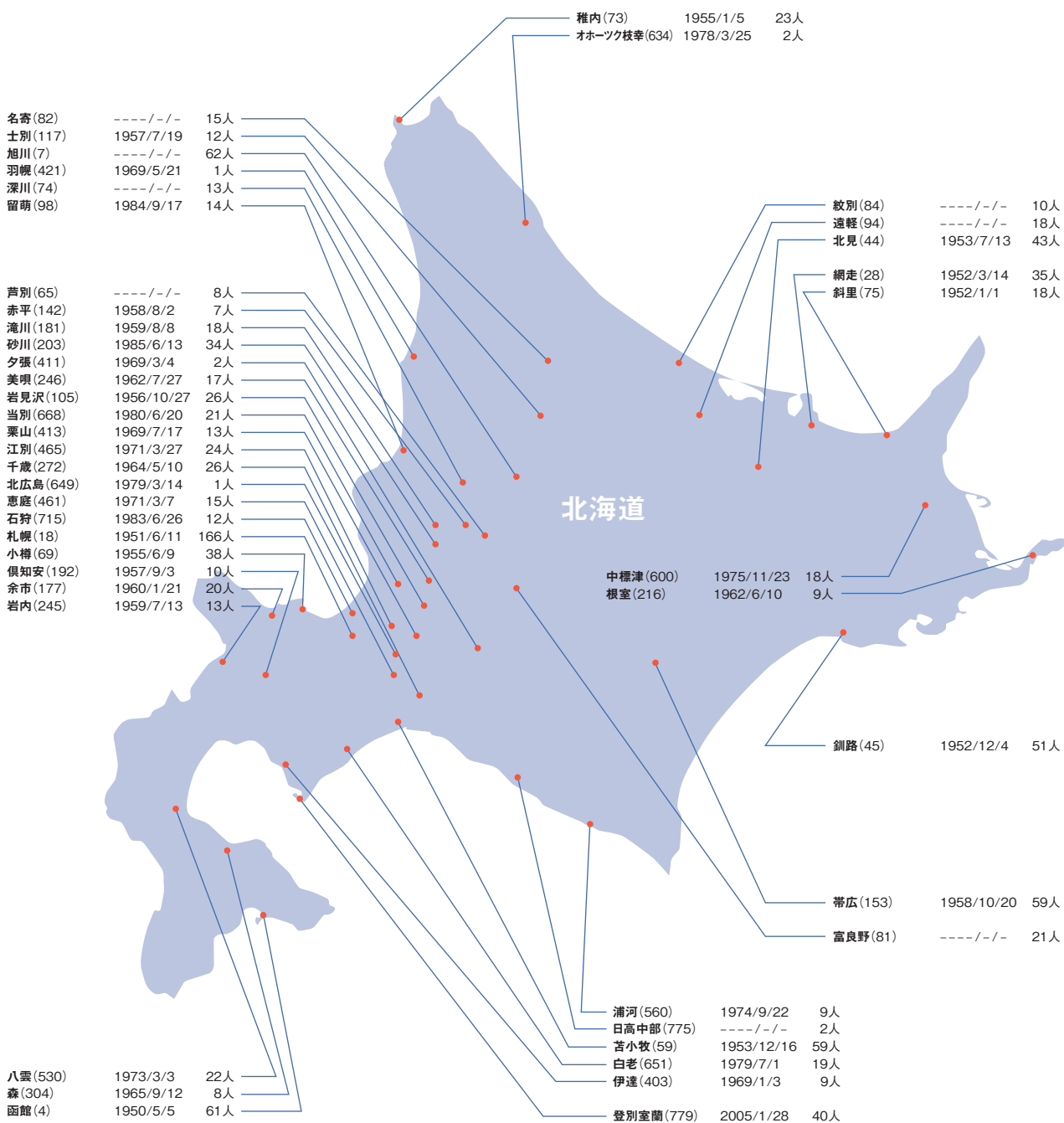
各地区・ブロック・LOMの位置図および
各ブロック・LOMの会員数

地区数 10地区
ブロック数 47ブロック
LOM数 691LOM
(2021年8月)



北海道地区

北海道ブロック 1124名

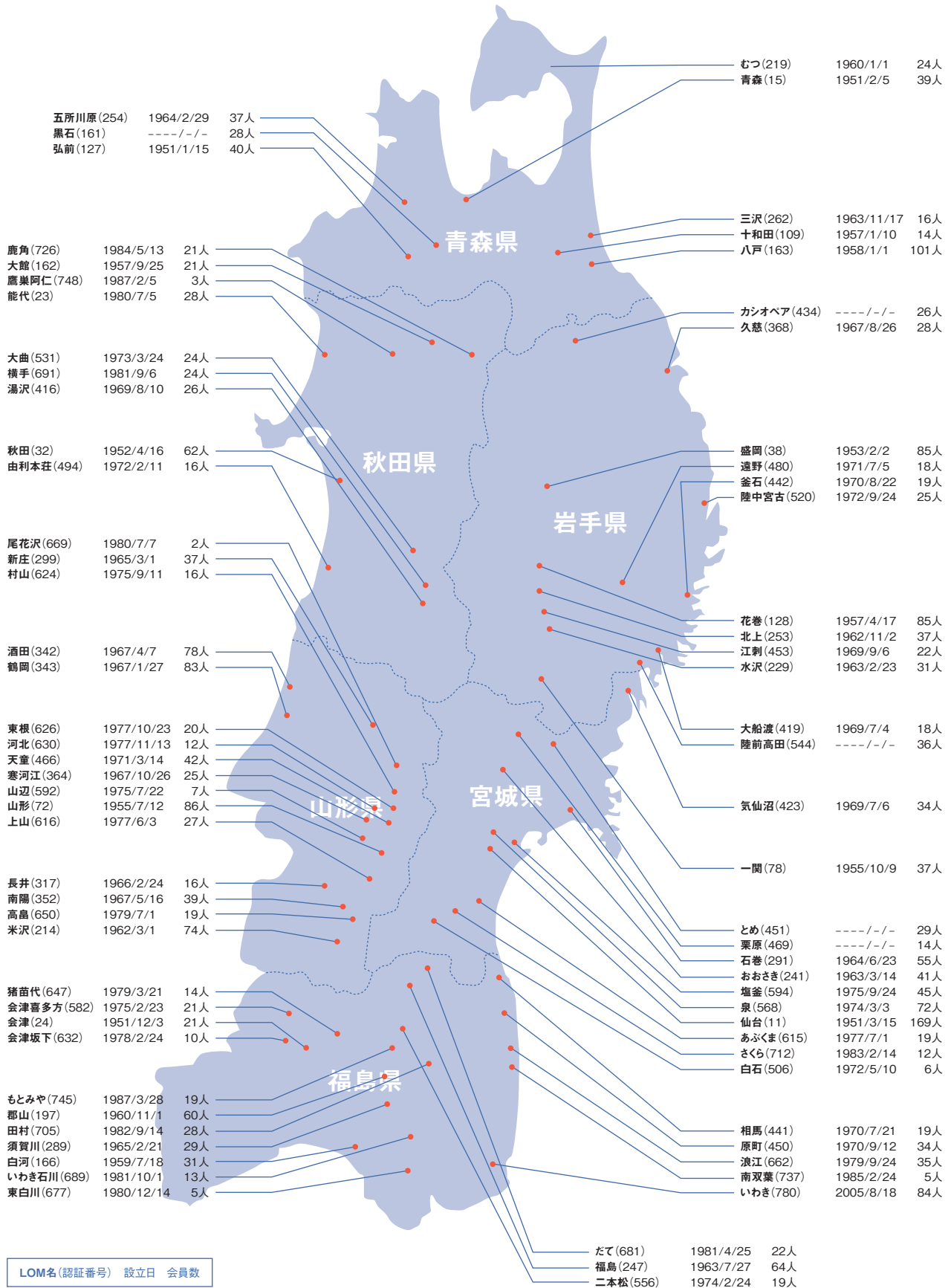


LOM名(認証番号) 設立日 会員数

東北地区

青森ブロック 299名
 岩手ブロック 467名
 宮城ブロック 496名

秋田ブロック 225名
 山形ブロック 583名
 福島ブロック 529名



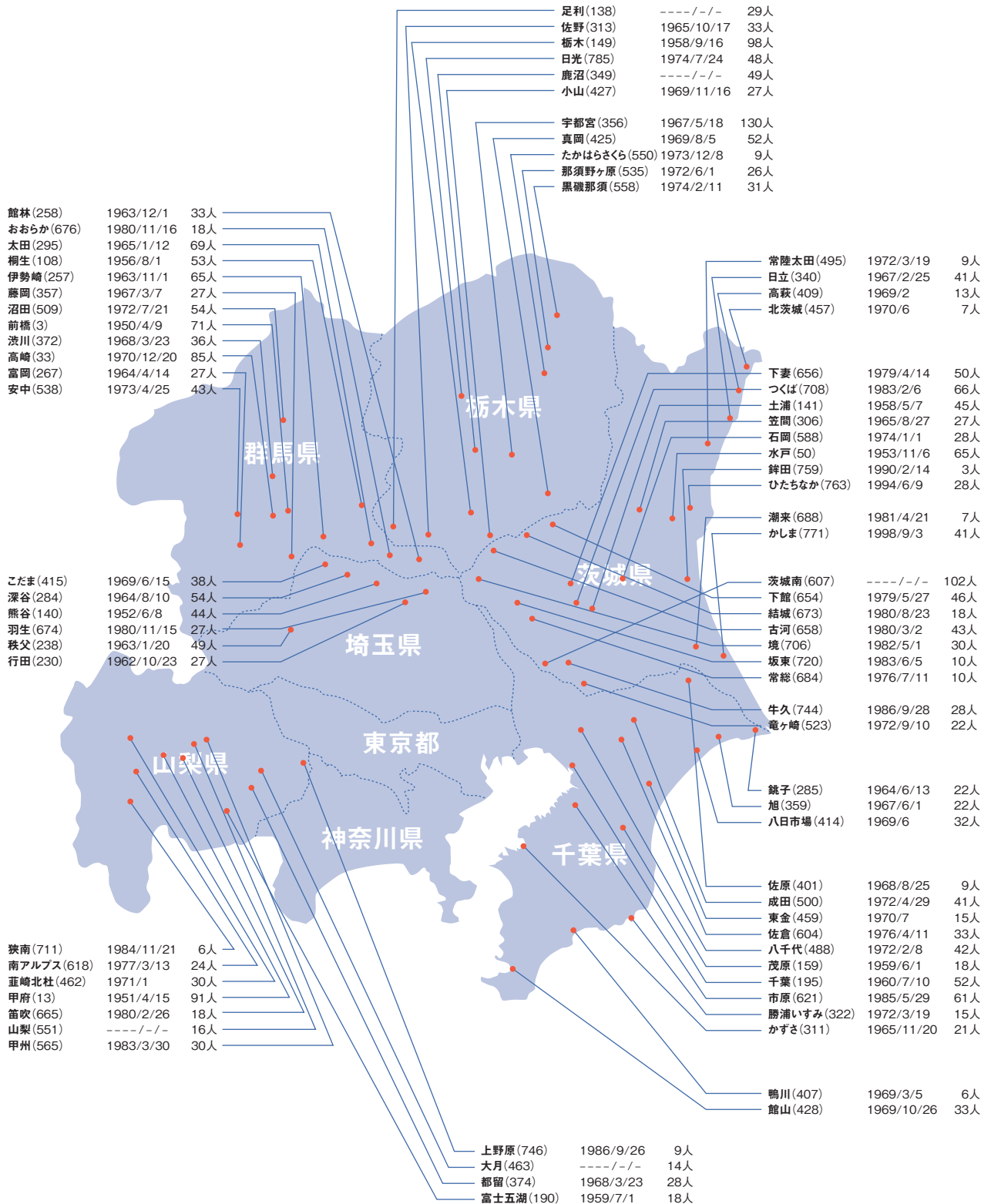
関東地区

茨城ブロック
栃木ブロック

739名
532名

群馬ブロック
山梨ブロック

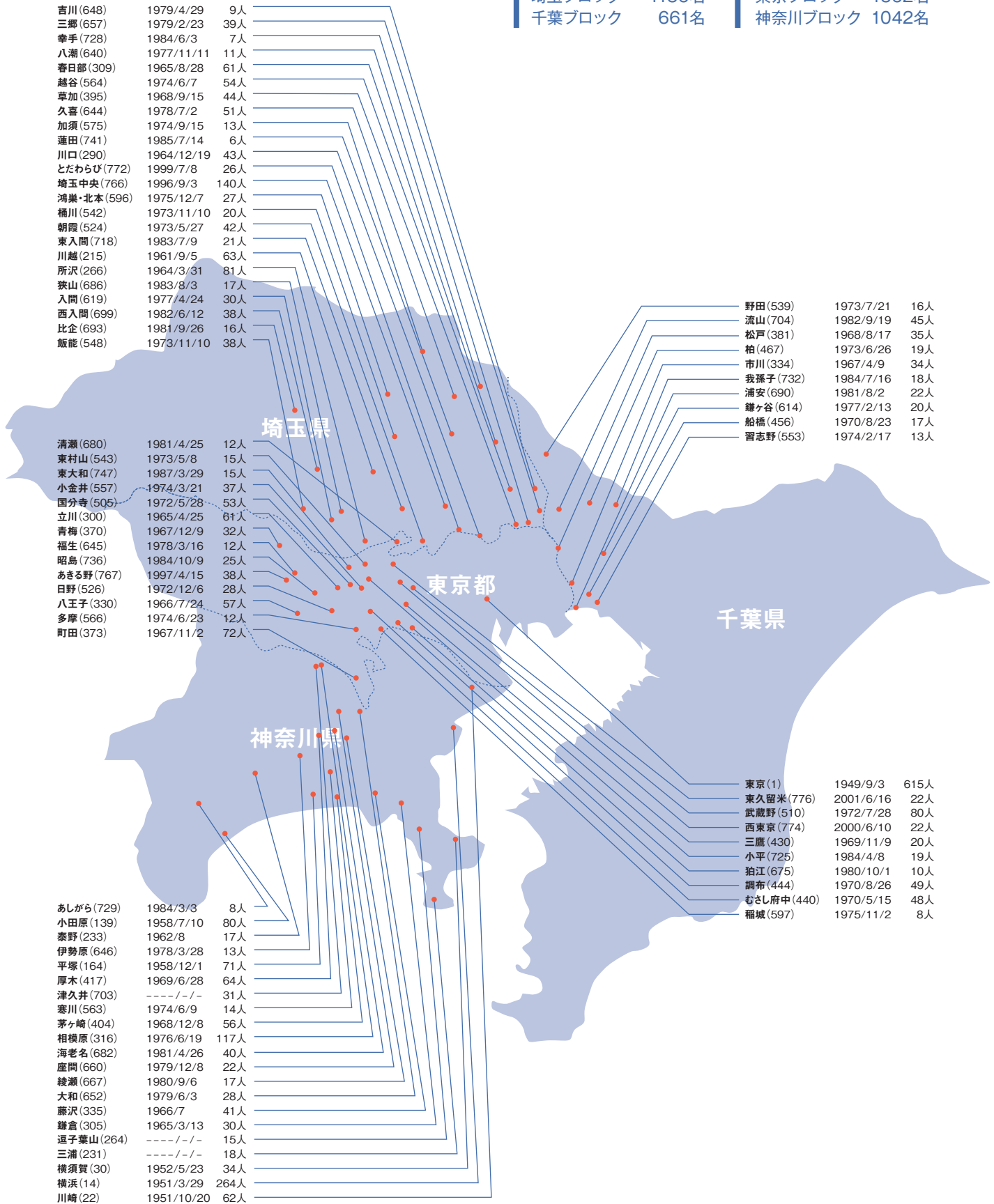
581名
284名



LOM名 (認証番号) 設立日 会員数

関東地区

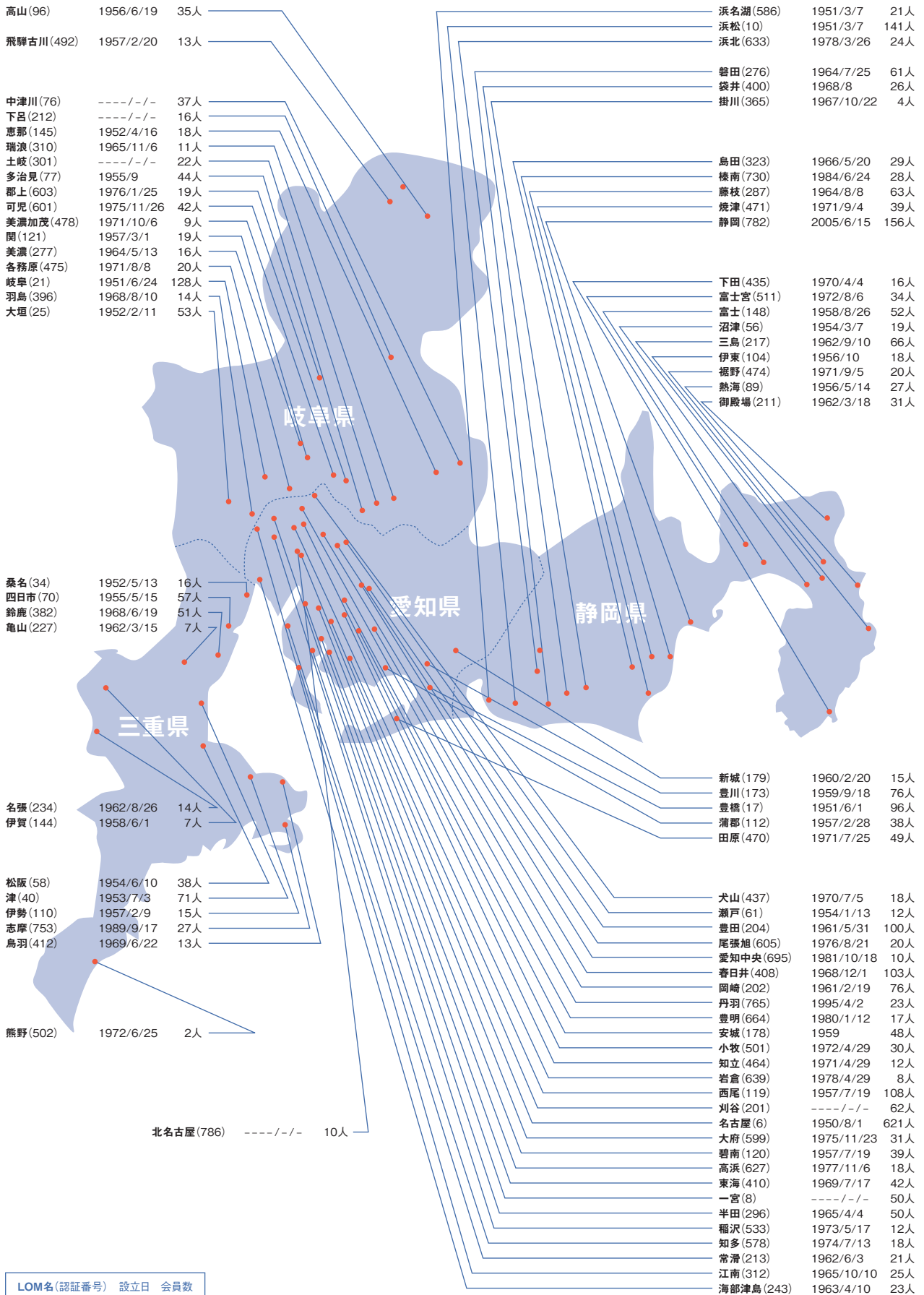
埼玉ブロック 1136名 | 東京ブロック 1362名
千葉ブロック 661名 | 神奈川ブロック 1042名



LOM名(認証番号) 設立日 会員数

東海地区

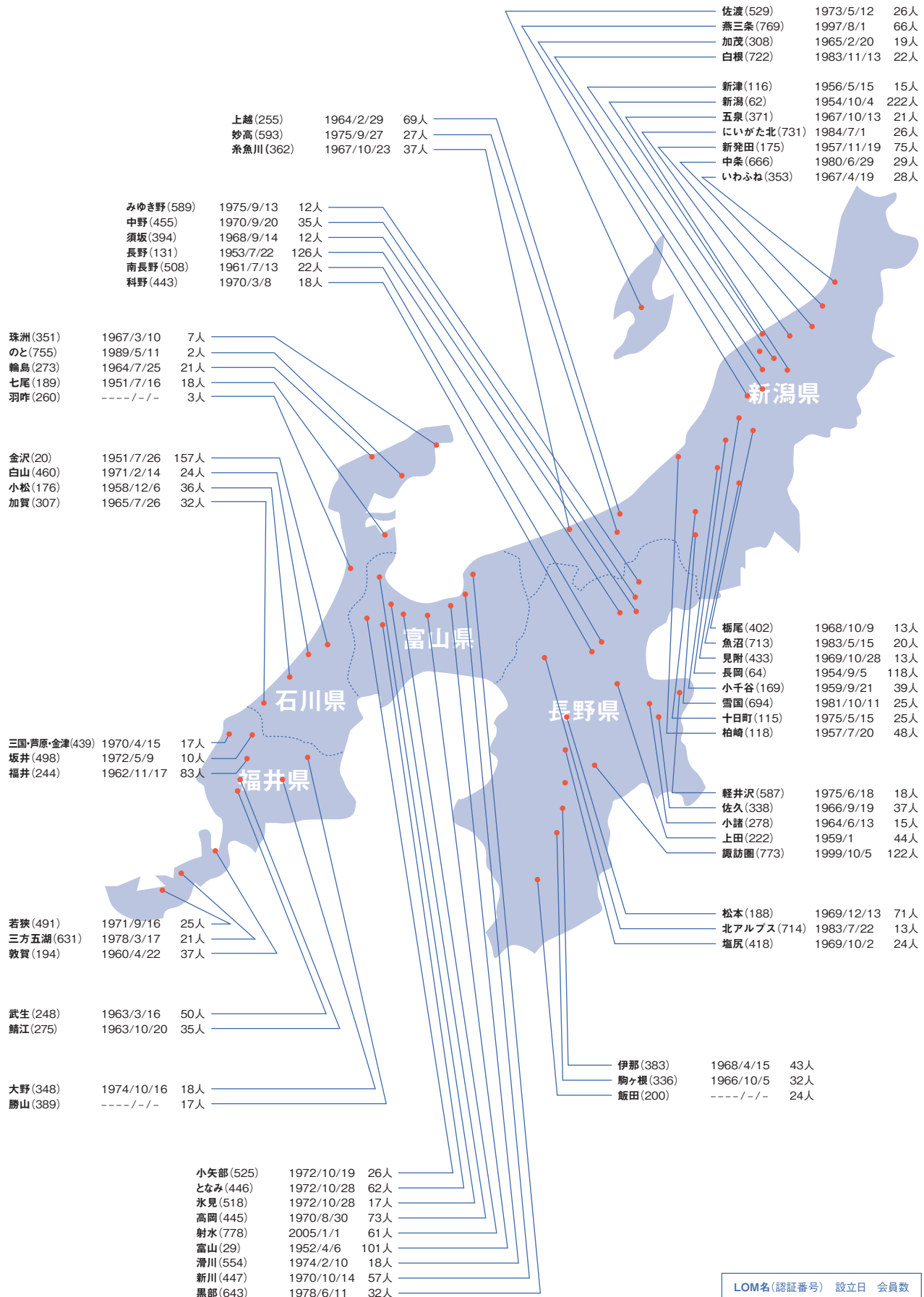
静岡ブロック 875名 | 岐阜ブロック 516名
 愛知ブロック 1881名 | 三重ブロック 318名



北陸信越地区

福井ブロック 313名
石川ブロック 300名
富山ブロック 447名

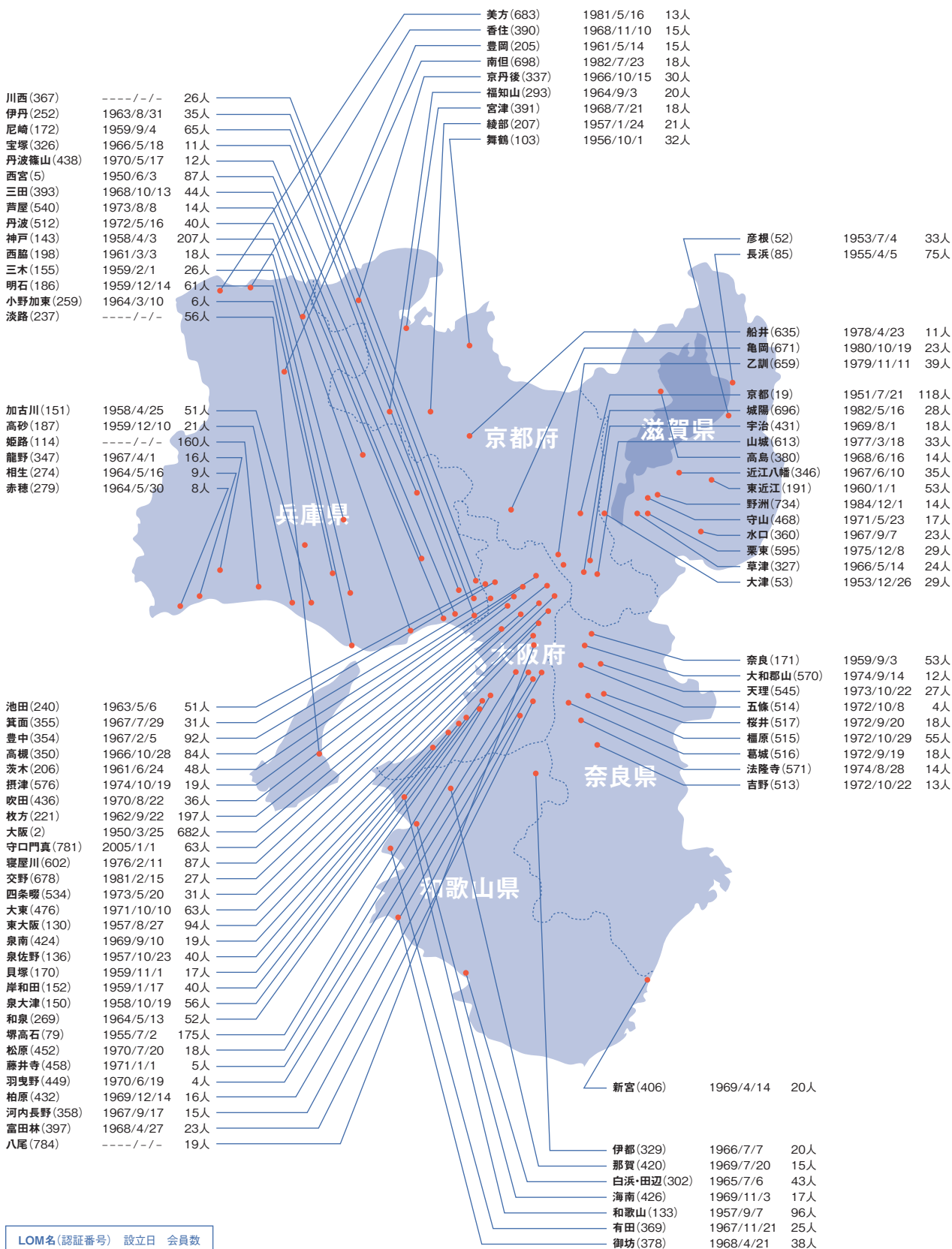
新潟ブロック 983名
長野ブロック 668名



近畿地区

滋賀ブロック 346名
京都ブロック 391名
奈良ブロック 214名

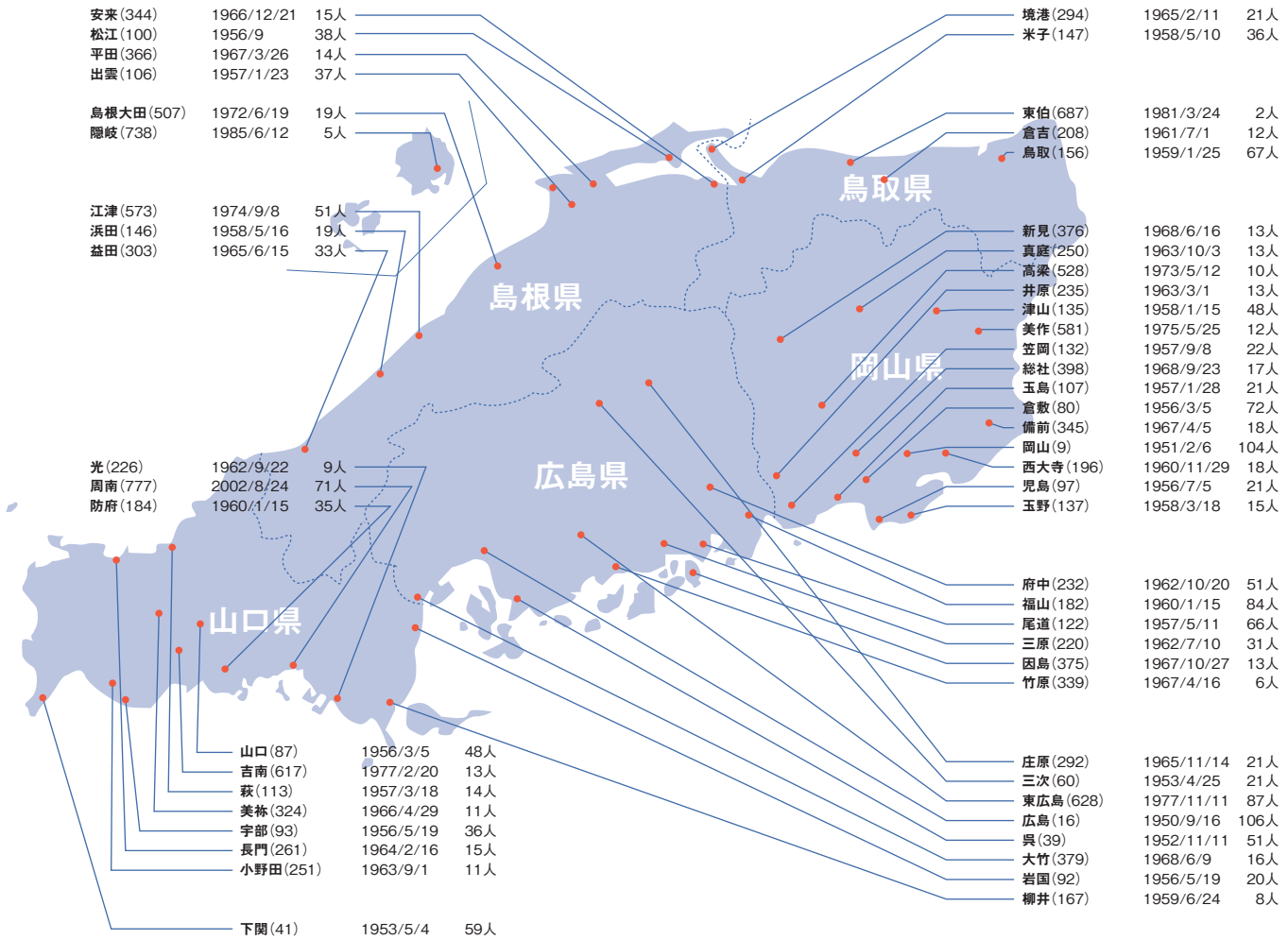
大阪ブロック 2104名
兵庫ブロック 1034名
和歌山ブロック 274名



中国地区

岡山ブロック 417名
 広島ブロック 553名
 山口ブロック 350名

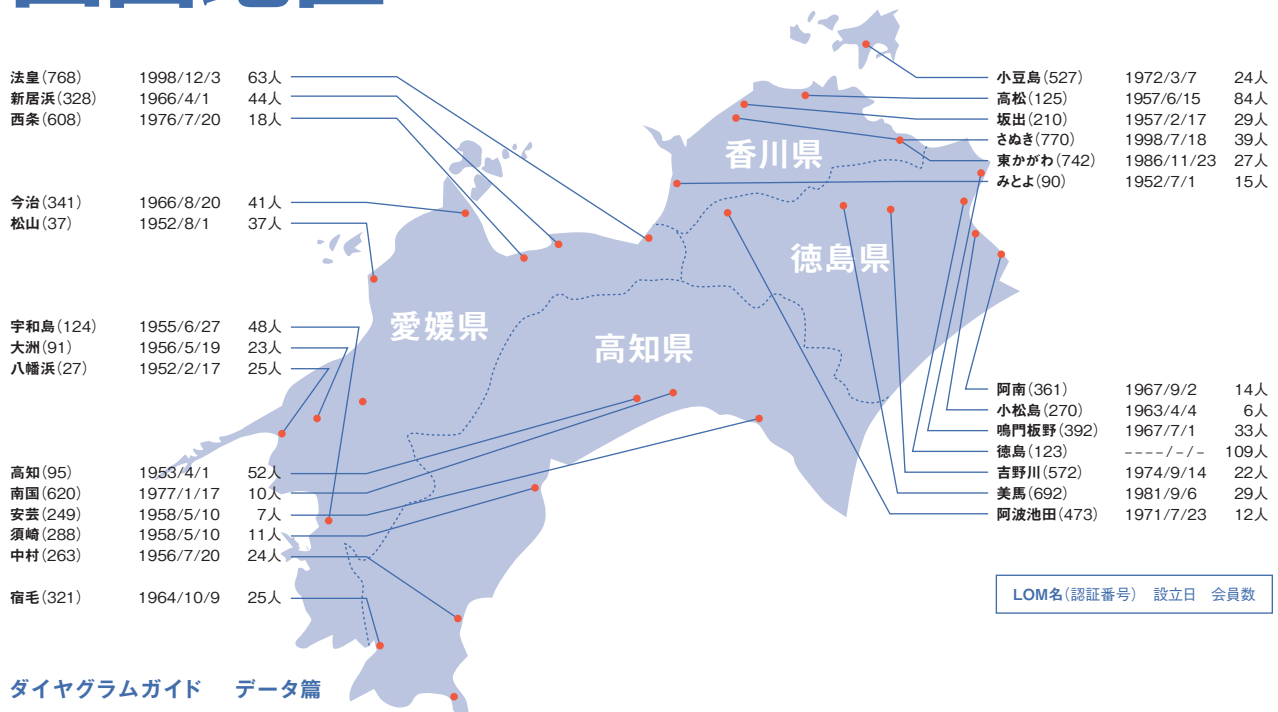
鳥根ブロック 231名
 鳥取ブロック 138名



四国地区

香川ブロック 218名
 愛媛ブロック 386名

徳島ブロック 225名
 高知ブロック 129名

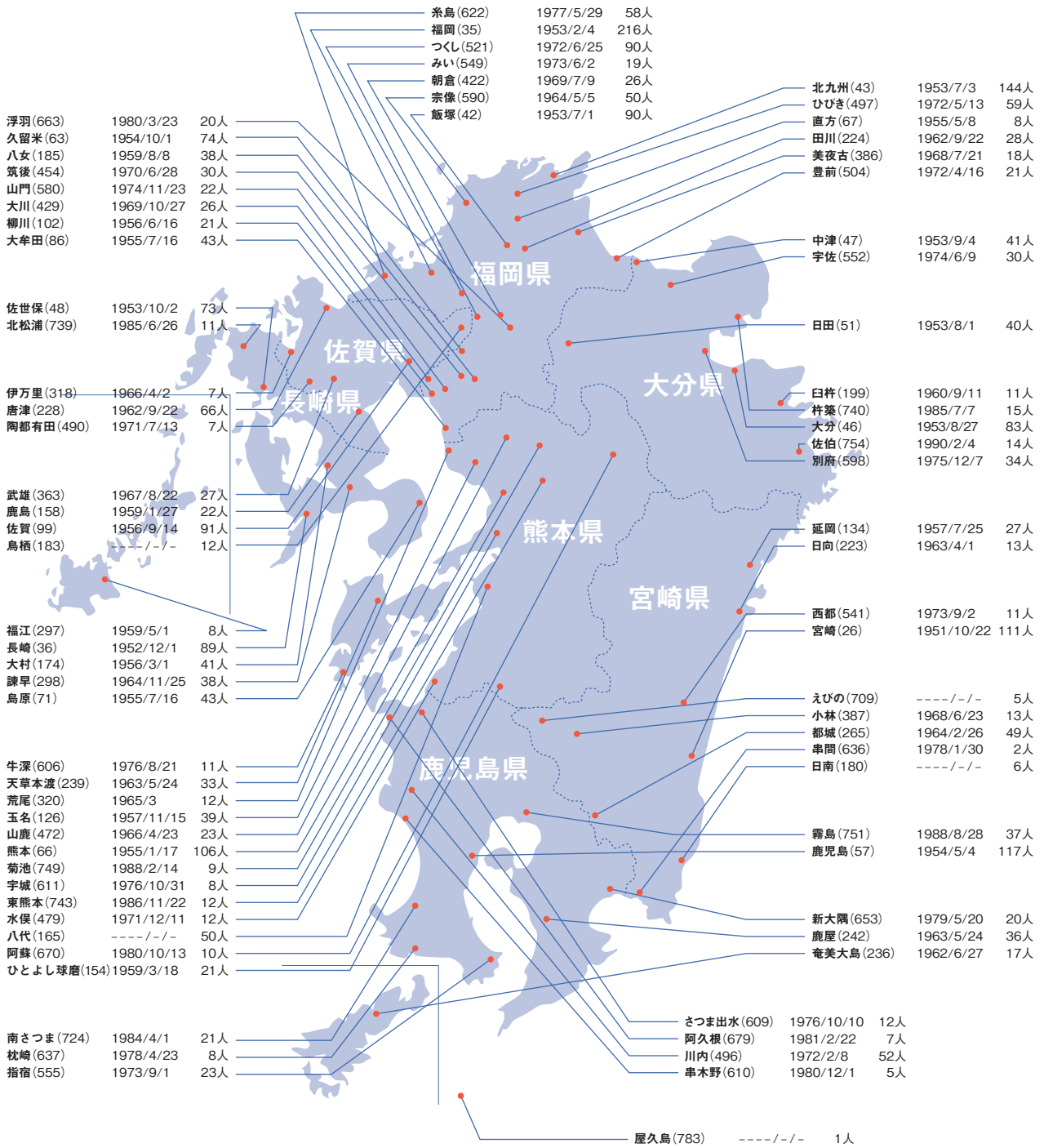


LOM名 (認証番号) 設立日 会員数

九州地区

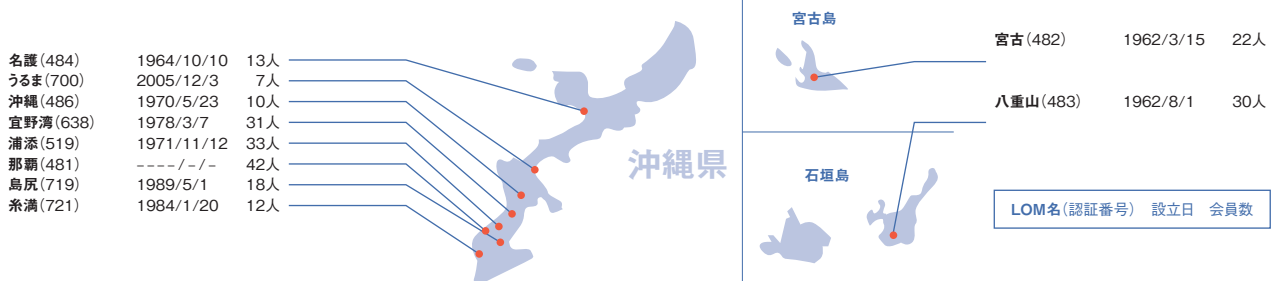
福岡ブロック 1101名
佐賀ブロック 232名
長崎ブロック 303名
熊本ブロック 346名

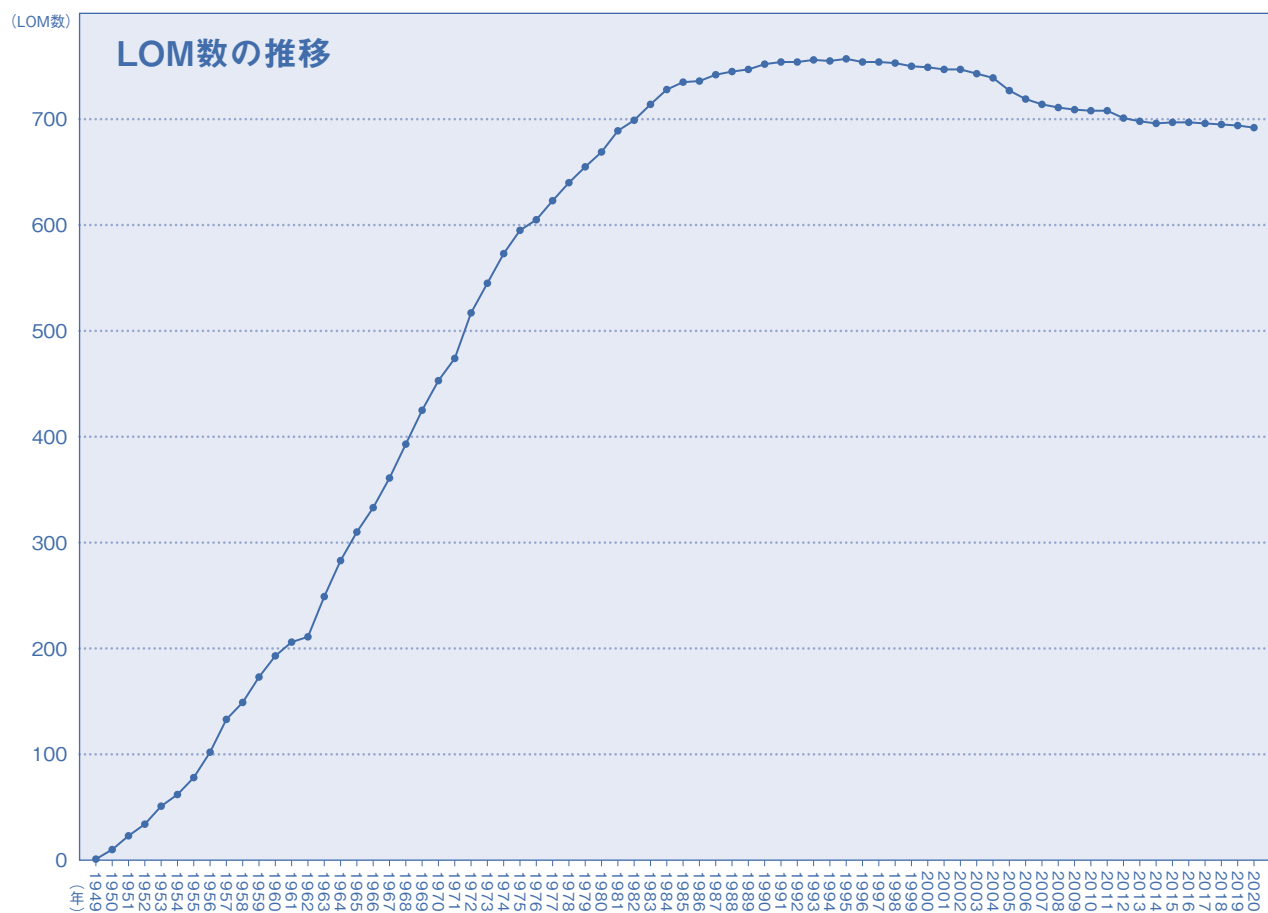
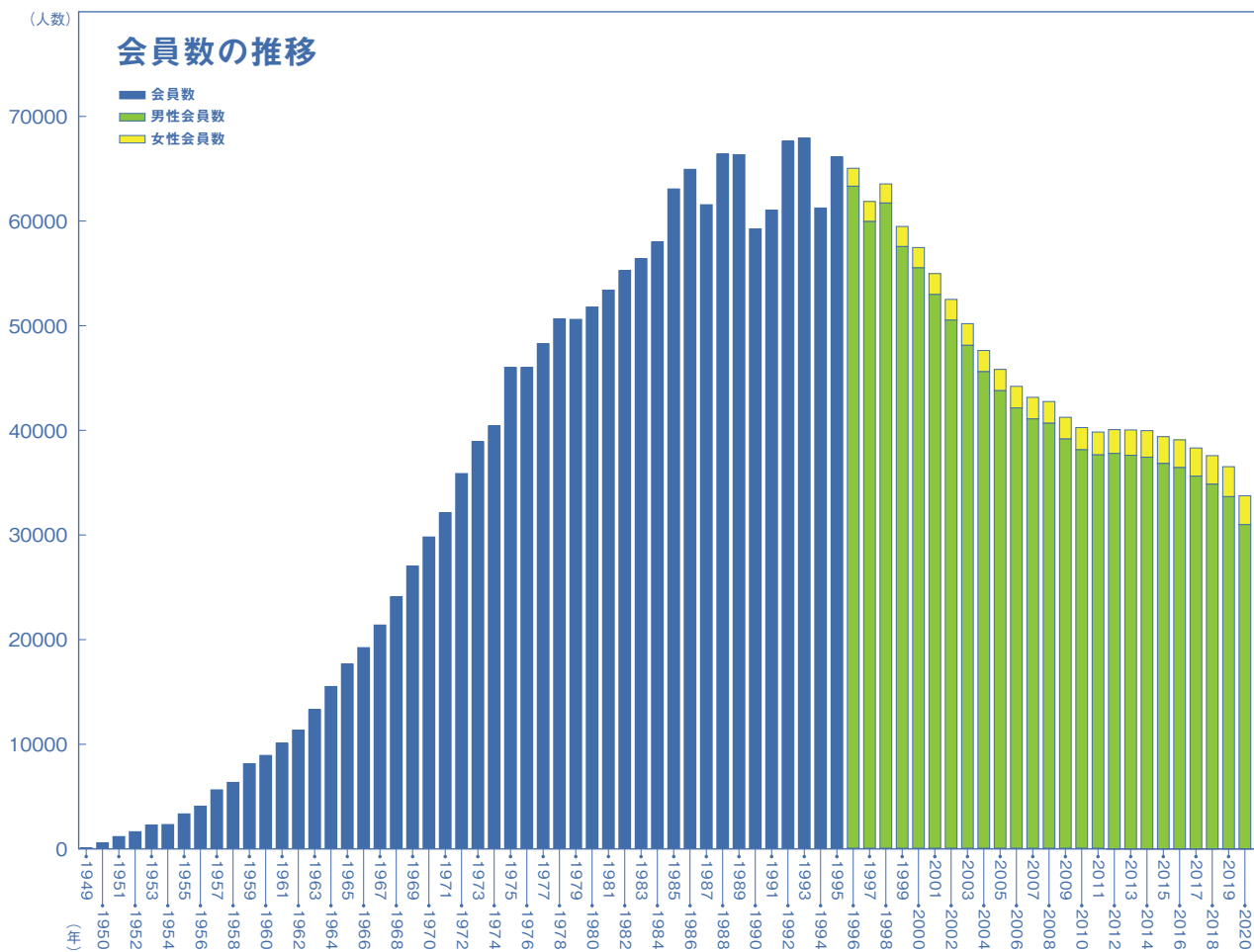
大分ブロック 268名
宮崎ブロック 237名
鹿児島ブロック 356名



沖縄地区

沖縄ブロック 218名





トピックス

SDGsへの 取り組み

そもそもSDGsとは何か？ いかに国際目標となったのか？

「SDGs」(持続可能な開発目標)とは、2015年に国際連合(国連)が掲げた、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標のことで、「貧困をなくそう」「海の豊かさを守ろう」といった**17のゴールと169のターゲット、232の指標**が掲げられています。

SDGsは、国連加盟国**193カ国すべてが全会一致で合意した初めての歴史的な政治宣言**であり、社会課題が拡大複雑化する中で、世界がどのような未来を目指すのかを明確に定めたものです。そこには法的拘束力もなければその実現方法や財源も特定されていませんが、日本政府は2016年、総理大臣を本部長とする「**SDGs推進本部**」を設置、同年12月にはその後の日本の取組の指針となる「SDGs実施指針」を決定しています。また、コカ・コーラ社やインテル社といった名だたるグローバル企業もその実現に向けて早くから動き出しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



日本JCのSDGsへの取り組み ～ 第一歩となった「金沢宣言」について～

日本JCではMDGsの時代から普及・啓発に努めてきましたが、2015年、132の国と地域に存在する119の国家青年会議所の代表が一堂に会したJCI世界会議金沢大会において、SDGsの達成と世界の恒久的平和と安定に向けての宣言文が採択されました。
これを【金沢宣言】と呼びます。

金沢宣言について

2015年9月25日に国連総会にて採択されたUN SDGs(国連 持続可能な開発目標)について、JCIは、国連の経済社会委員会(ECOSOC)におけるGGENERAL STATUS(最高位)の資格を有する国際組織として、132の国と地域に存在する119の国家青年会議所と共に、全面的に協調・そして協力しUN SDGs達成に向け、国際社会に対して貢献していくという意思表示を行った。青年会議所の運動がはじまって100年を迎える記念すべき年である2015年11月7日、金沢の地で開催されたJCI世界会議にて採択されたことから、これを「金沢宣言」と呼ぶ。

日本青年会議所の 具体的に取り組むべき目標と 指標について

- 目標6 すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。
- 指標1 2030年までにすべての人々の安全で安価な飲料水の普遍的かつ平等なアクセスを達成する。

6 安全な水とトイレ
を世界中に



金沢宣言における 公約について

日本青年会議所は2016年度より目標6:「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続的な管理を確保する」を推進することを誓う。この宣言文の協約国である全ての国家青年会議所は、2016年JCI世界会議のホスト国でもある日本青年会議所の例に倣い、自身の国に最も関係がある国際目標を達成するために尽力することを誓う。

2016年以降の 国際協力について

世界中では、約8億人がきれいな水にアクセスできず、1日1,400人の5歳未満の子供たちの命が失われている。日本JCでは、アジア太平洋地域において、きれいな水にアクセスできない3億人に対して、きれいな「水」普及のために、汚染されている水を改良する国際協力を行う。私たちが、国連、行政、民間企業、国内にいる35,000名の会員、さらに、近隣諸国におけるJCIのネットワークを最大限に活用した国際協力によって、世界の恒久的平和と安定に寄与していく。



SDGs達成に向け、外務省と協働推進の ティアップ宣言を締結

2019年1月17日、日本JC(第68代鎌田長明会頭)と外務省は共同記者会見を開き、両者間で『SDGs推進におけるティアップ宣言』が締結されたことを発表しました。外務省代表の辻清人外務大臣政務官は、「日本全国に多くの拠点と幅広いネットワークおよび組織力・行動力をもつ日本JCは、SDGsを中小企業や全国津々浦々のあらゆる世代に浸透させるための強力なパートナーと認識している」と述べ、日本の次世代のSDGs推進プラットフォームとしての日本JCの役割が強調されました。

SDGs推進におけるティアップ宣言 概要

外務省と公益社団法人 日本青年会議所は、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会を実現するために、「SDGs(持続可能な開発目標)」達成に向けた取り組みを協働して推進することをここに宣言します。

両者の蓄積した知見とネットワークを活かし、以下の取り組みを全国で展開していきます。

- 全国各地の青年会議所との連携によるSDGsの全国的な認知度向上および具体的取り組みの推進
- 政府、地方自治体、企業、住民等の多様な主体間のネットワーク強化
- 官民連携によるSDGs推進のための取り組みの対外発信
- 中小企業に対するSDGsの啓発・普及
- 次世代の子供たちに対するSDGsの啓発・普及

上記の取り組みにより、政府、地方自治体、企業、住民等の多様な主体による持続可能で豊かな活力のある社会の実現に向けた能動的行動を後押しし、誰一人取り残さない社会の実現に貢献していきます。

また、日本JCは2019年、「青年会議所が日本一のSDGs推進団体になる」ことを目標に掲げ、**SDGs推進宣言**を京都会議の総会に提案し、全会一致で採択されました。



環境省と「SDGsパートナー宣言」を締結

2020年11月7日、環境省と公益社団法人日本青年会議所は、新型コロナウイルス感染症、気候危機などの人類が直面する世界共通の課題に対し、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会と2050年までのCO2ゼロエミッションと地域活性化の好循環を実現するため、両者の連携方針をとりまとめた「SDGsパートナー宣言」を取り交わしました。

- 一、全国各地の青年会議所との連携によるSDGsの全国的な認知度向上及び「地域循環共生圏」(ローカルSDGs)の創造に向けた具体的取り組みの推進
- 一、政府、地方自治体、企業、住民等の国内外の多様な主体間のネットワーク構築・強化
- 一、中小企業に対する環境に配慮したSDGs、地域における自立分散型エネルギーの導入、企業の脱炭素経営やESG金融の啓発・普及
- 一、次世代への環境に配慮したSDGsの啓発・普及
- 一、気候危機を踏まえた、脱炭素社会への移行及び2050年までのCO2ゼロエミッションと地域活性化の好循環に向けた取り組みの協働推進

各企業とのパートナーシップ強化

○野村総合研究所×JCI日本 パートナーシップ宣言

【目的】SDGsに取り組む中小企業を金融面から支援する仕組みの創設等

【展望】共同で「SDGs取組実態の見える化」を実現。企業の目標設定やSDGs推進等の判断基準の策定を可能に

○豊和銀行×JCI日本 「ほうわSDGs私募債」の発行における寄与贈呈式

【SDGs私募債について】新しいかたちの債券。発行額の一部を学校教育やSDGs達成に取り組む団体へ寄付することで社会貢献できる仕組み

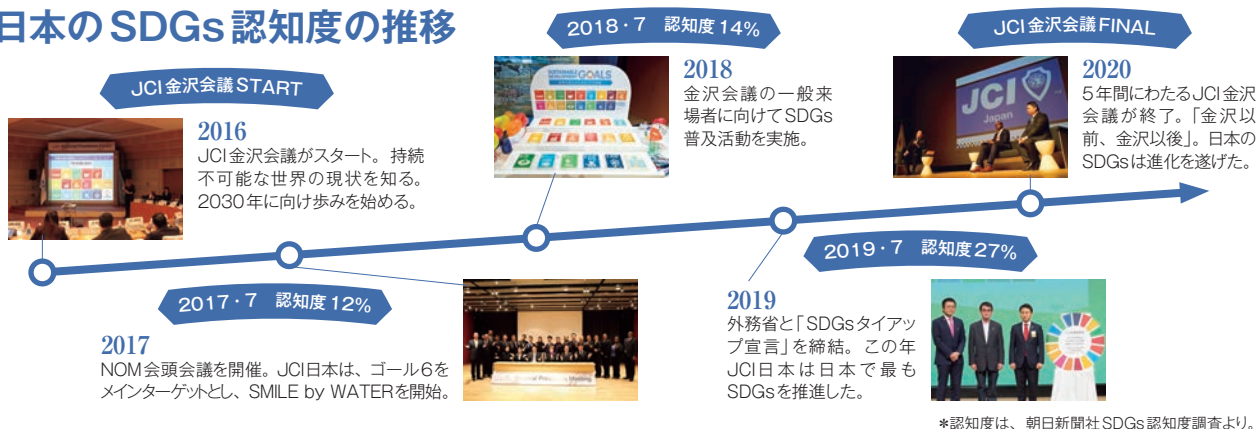
【報告】「SDGs推進連携協力協定」に基づいて株式会社鶴見より私募債の発行があり、寄与贈呈式が行なわれた

○日刊工業新聞社×JCI日本 SDGsパートナー宣言

【目的】メディアの責務としてSDGsを積極推進し、相互連携によりSDGsが地域社会に根付く礎とする

【展望】中小企業と次世代へのSDGs推進を加速させていく

日本のSDGs認知度の推移



誰もが認める「SDGsを強く推進する組織」として、改めてその軸を定かにしたJCI日本ですが、これらはあくまでスタートにすぎません。次の10年、そして「2030アジェンダ」に向け、全国で更なるSDGs推進運動が進み、今後の地域社会に大きな影響を及ぼしていくことが期待されます。

JC宣言文の 改訂について

**JC宣言文は、2020年度に、
2001年以來の改訂がなされた。
改訂に至るまでの経緯と、
新宣言文の詳細について解説する。**

2001年、日本はバブル崩壊後ではあるものの、まだ経済再建への希望を持っていた時代でした。それから約20年、日本経済は衰退に甘んじ、一方で少子高齢化対策は一向に進まず、出生数は100万人を割り、社会保障制度は維持することさえ困難となりつつあります。

いまこの時代、JC宣言文はまだ息をしているのでしょうか？ もはや時代に可能性などなく、自らが価値を生み出していくほかに活路は見出せない状況ではないのでしょうか？ あらためて検証すべき時期が訪れているのではないのでしょうか？

そう決意を新たにした多くのJAYCEEにより、幾度となく行なわれたJC宣言改訂検討会議を経て、2020年11月5日、JCI日本第165回総会にて「新JC宣言文」が決議されました。実に19年振りの改訂となります。書面決議を含め、全692LOMからの賛同を得て、時代に即した新しい青年会議所の一歩が踏み出されました。

JCとJC宣言について

JCは、明るい豊かな社会の実現を同じ理想とし、次代の担い手たる責任感をもった指導者たらんとする青年の団体で、その規模は全世界に及び、日本においては694の地域で、人種、国籍、性別、職業、宗教の区別なく、自由な個人の意思により入会し活動できます。事業目標は、社会と人間の開発であり、その具体的事業としては、市民社会の一員として、市民の共感を求め社会開発計画による日常活動を展開し、自由を基盤とした民主的集団指導能力の開発を進めています。さらに日本の独立と民主主義を守り、自由経済体制の確立による豊かな社会を創り出すため、市民の先頭に立って進む団体、それがJCです。



年度毎にテーマや方針、担当者の変わる単年度制を採用しているJCは、運動指針やJC宣言等によって、5～10年の中長期に渡る進むべき方向性や運動活動の芯となるものの認識を共有してきました。

【JC宣言とは】

日本全国のJCメンバーの目指すべき姿。「JC宣言」は、「綱領」と並ぶ日本のJAYCEEの目指すべき基本として掲げられており、前の宣言の内容は2001年大阪全国大会にて承認されました。

JC宣言 〈2001年10月 第109回通常総会決定〉

日本の青年会議所は
混沌という未知の可能性を切り拓き
個人の自立性と社会の公共性が
生き生きと協和する確かな時代を築くために
率先して行動することを宣言する

JC 宣言改訂検討会議 結果報告 (答申書より抜粋)

JC 宣言改訂検討会議では、議論を重ねた結果、「JC 宣言を改訂すべき」と検証した旨をここに報告する。

■ 理由 1

前回改訂時からおよそ20年が経過し、時代は大きく変化を遂げた。時代の変化とともに「あるべき姿」も、その時代に合ったものにすべきである。

■ 理由 2

国内の人口減少が続く中、会員拡大はさらに大きな課題となる。時代に沿ったJC 宣言にすることで、メンバー一人ひとりの意識を高めて、会員拡大、組織強化にもつなげていく必要がある。

■ 理由 3

全国で唱和され続けてきたJC 宣言ではあるが、会員の平均在籍年数の低下に伴い、本質的な意味合いを理解しないまま唱和されていることがある。新しい時代になった今、新たなJC 宣言を策定することで、今一度メンバー一人ひとりのJC 宣言に対する理解度を深めて、より質の高い社会変革組織となる必要がある。

これまで、日本JCは10年ごとに策定される「〇〇〇年代運動指針」を軸に様々な事業を進めてきた。「2000年代運動指針」をもとに策定された現在のJC 宣言文であるが、時代を重ねる中で、より全国のLOMに浸透しJCの目指す方向性を示してきたその役割は大きい。

しかし、人口の自然減から派生する会員の減少が組織の存続を脅かす時代へと突入した今、より質の高い社会変革運動を興すための組織変革が強く求められている。この社会変革活動は、人口が減少したとしても、仮に組織が小さくなったとしても永続的に続かなければならないことである。つまり、持続可能な明るい豊かな社会を目指す我々にとって「会員拡大」「組織強化」はこれまで以上に大きな課題となるはずである。

2020年代が始まり「2020年中長期戦略ビジョン」の策定が進められている中で、それを包括した形でJCの目指す方向性を時代にあった「新・JC宣言文」として改めて内外へと示すことを強く推奨する。

2020年度 JC 宣言文

**日本の青年会議所は
希望をもたらす変革の起点として
輝く個性が調和する未来を描き
社会の課題を解決することで
持続可能な地域を創ることを誓う**

【2020年度 JC 宣言文解説】

〈1行目〉「日本の青年会議所は」

まず初めに、全国の会員にも外部の方にも、このJC宣言文の主体が誰なのかを明確にし、組織としての責任と役割、そして運動の方向性を再確認することが必要です。

「青年会議所は」と明示することで、この宣言文が会員個人ではなく、「組織」としての宣言であることを示しています。

また、「日本の」とすることで、国内における全ての青年会議所がJC宣言文の主語であることを明示し、志を同じくする全国の会員同士の強い「連帯」も表現しています。

〈2行目〉「希望をもたらす変革の起点として」

青年会議所は、明るい豊かな社会を創るために、社会により良い変化を生み出す「変革」を運動として起こすことに挑戦し続けてきました。

物事のはじまりを意味する「起点」は、青年会議所が「率先して行動する組織(Do-tank)」であるという矜持を表現し、私達から社会変革を生み出していくという意志も表しています。

そして、その運動によって生み出すものの本質は、誰もが、社会と自らの人生をより良くすることができると実感する「希望」であることを示しています。

〈3行目〉「輝く個性が調和する未来を描き」

昨今の潮流の中で、グローバリズムからナショナリズムへ、また利他から利己へと、行き過ぎた国家主義や個人主義が助長され、国家間のみならず地域社会の中においても「分断」や「対立」が生まれており、2020年に発生した新型コロナウイルスの感染拡大によって、それは加速しています。

本来であれば、考え方や生き方の違いは二項対立の構図ではなく、多様性や包括性といった価値観の中で、異なる「個性」として尊ばれるべきものです。

「調和」は、同調を強要し個性を抑圧するものではありません。「人間の個性はこの世の至宝である」と信じる青年会議所は、特定の政治思想にも、また、ナショナリズムや宗教、人種、ジェンダーにも偏らず、あらゆる若者が挑戦できる社会に開かれた組織であるからです。

この様に、広がりつつある「分断」の時代において、様々な個性やアイデンティティの架け橋となる「未来を描く」強い意志を示しています。

〈4行目〉「社会の課題を解決することで」

青年会議所は「社会に対して何をする組織なのか?」という問いに対する明確な答えを表しています。

地域に根差す青年会議所の運動は、社会の幅広い課題を抽出し、自らそれを解決することと位置付けています。

「社会の課題」とは、地域固有の課題だけではなく、経済の再生や少子化、高齢化といった国家的な課題、あるいは気候変動や人権問題といった国際的な課題を含み、およそ青年が取り組むべき様々な課題を包括しています。どの様な社会課題であっても、それは地域だけではなく国家や世界と複雑に関係し合っているからです。

だからこそ、私たちは、多面的な「社会課題」を解決する運動を地域毎に起こし、そして、私たちが持つ組織のネットワークによって全国、あるいは世界的な運動へと拡大させ、より良い社会を創り出すことができることを表しています。

〈5行目〉「持続可能な地域を創ることを誓う」

日本の青年会議所は、1990年に「地方分権推進宣言」を、さらに、2019年には「SDGs推進宣言」を総会で決議しました。

「持続可能」とは、地域の人口や財政、環境を持続可能なものとするに留まらず、そこに住まう全ての人々が笑顔で生きがいを持ち、自ら挑戦し続けることができる社会を意味します。

全国各地の青年会議所が様々な社会課題を解決することで、自らが住まう地域を持続可能なものとし、そしてその総和によって「明るい豊かな社会」を創ることを誓う形で宣言しています。

2020–2024 JCI JAPAN Strategic Plan

Vision Statement

今も社会から取り残されている人がいる。

私たちに何ができるだろう。

私たちに、国を変える、ましてや世界を変えるなんて、
できるのだろうか。

そう思う人がほとんどの中、できると信じる人がいる。

それが私たち Jaycee です。

日本 JC は、1951 年の創立以来、ずっと信じてきたのです。

日本 JC にしかできないこと、

LOM のためにできることがまだまだある。

あなたにしかできないことも、たくさんある。

地域に根ざし、国を想い、世界を変えよう。

戦略計画とは、日本JCがこれからどのように社会をより良くするのかを示す航海図のような役割を果たすためのものである。日本JCは連絡総合調整機関としてLOMを支援するとともに、あらゆるパートナーと協働し、この計画を実行する。

5年間の計画にあたり、その年を縛ることや可能性を失うものであってはならない。本計画は日本JCらしく果敢に挑戦していくための計画であり、その道標となって、その方向性を指し示していくものが戦略マップである。

縦軸

地域・国家・国際

綱領の精神に則り、それぞれのフィールドで分割



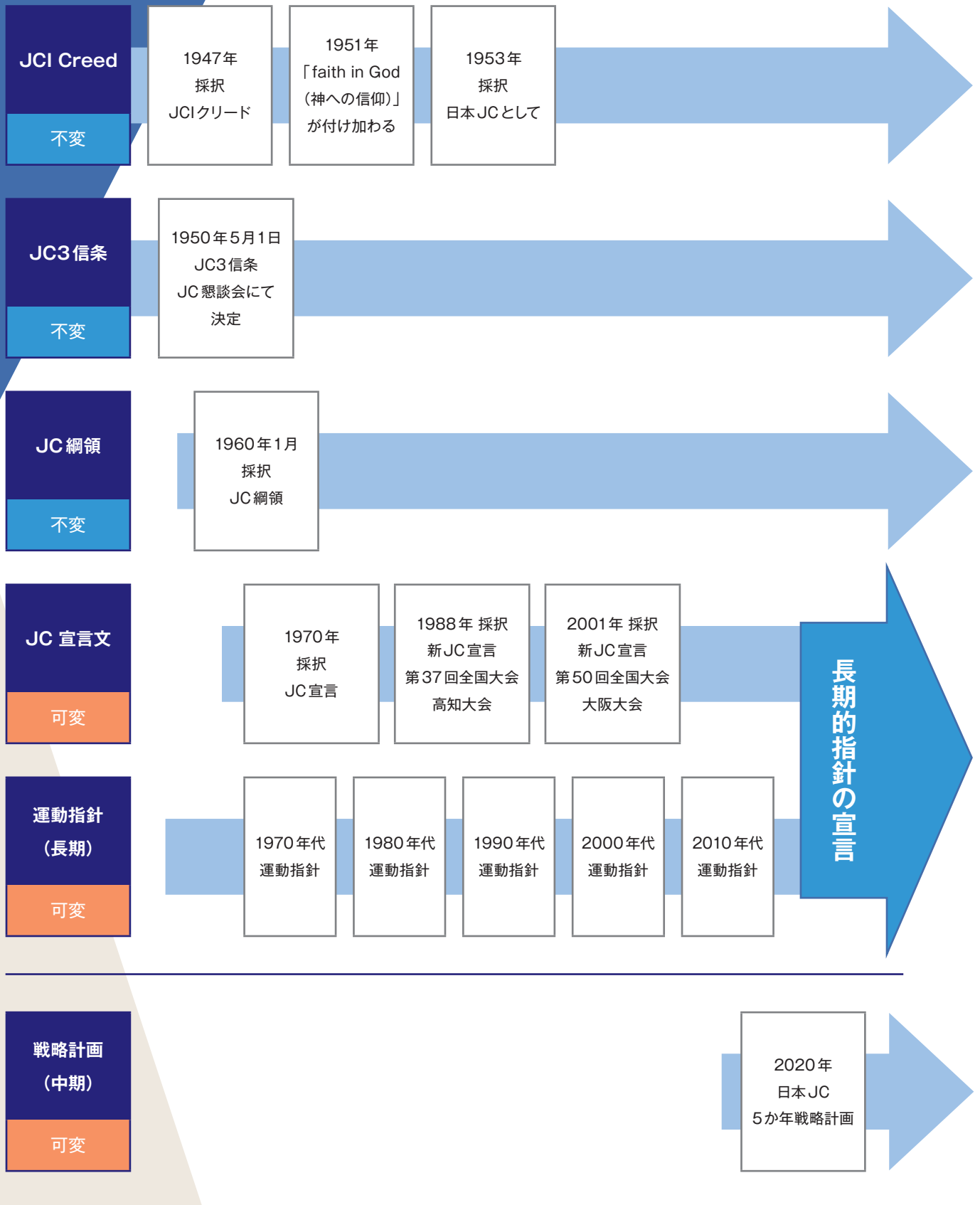
横軸

社会・経済・環境・人材・組織

これからの5年間に取り組んでいくべき課題として分割

なお、この戦略計画策定にあたり、「JCIストラテジックプラン 2019ー2023」「JCIアクティブ・シチズン・フレームワーク」「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を参考文献とした。

JCI Creed JC3信条
JC宣言 綱領について



社会

脅威

東京一極集中によって地域間格差は広がり、超高齢化の進展により、地域で息詰まる若者が東京に進出し、一極集中は更に進むことが考えられる。また、社会保障制度そのものに対する不安や、近隣諸国との安全保障に関する不安も増している。

機会

不安が増す一方で、解決に向けて動き出す層が台頭している。SDGsの認知度も上がりつつあることから、地域課題を自分ごととして捉えるという意識は浸透しつつある。

JCに求められる行動

全国にネットワークがあるJCが、それぞれの地域で課題解決に取り組むことは即ち国の課題を解決しているとも言える。JCであれば、先進的な知識とアイデアをベースにSDGsなどの考えも取り入れながら、運動展開ができる。

経済

脅威

少子化に伴う若年人口の減少は経済に大きな影響を与え、日本は先進国の中で経済成長率が際立って低い国となっている。日本政府は、財政均衡を目指すことから公共投資を削減したことで、インフラに投資ができない状況に陥っている。経済的な観点からはもちろんのこと、防災という視点で見るときにもインフラに投資がなされていない。

機会

人口減少、高齢化という課題が浮き彫りになる一方で、AIや5Gといった先進技術による情報通信革命が始まろうとしており、これらの先進技術によって人口減少や高齢化といった課題を解決することができれば、日本は再び世界を舞台に活躍することができる。急成長を遂げるアジア諸国との連携や、東京オリンピック・パラリンピック等で高いプレゼンスを発揮することが契機となりうる。

JCに求められる行動

国家戦略も地域に落ちてはじめて機能することを考えると、中央で獲得した情報をいち早く地域に展開し、地域から運動を起こすことが重要である。第5次産業革命(Society5.0)など、先進的な考えや技術に関する知識を獲得することでイニシアチブを取る。

環境

脅威

人口増と経済発展により、世界的な資源の枯渇と水やエネルギーの不足が懸念されている。気候変動は災害のリスクを高め、人の住める場所を減らしている。経済活動により、陸や海の生物多様性が脅かされている。

機会

地域資源を活かして自律的な地域発展を促す「環境未来都市」構想を発展させる地方創生の要として、SDGsが推進されている。また、持続可能な調達・操業・投資の実行による組織や地域の差別化、自然資本の活用、環境への負担低減や復元に関するサービスや商品が生まれてきている。

JCに求められる行動

持続可能な社会を築くためには「環境」がすべての土台にあり、環境に関する人々の意識を高め、消費行動を変える。経済活動が環境に良い影響を与える好循環を作り出すために、温室効果ガスの排出や、自然災害に対する弱者のレジリエンスを確保する。

人材

脅威

グローバル人材や技術者の不足がエレクトロニクス分野でのシェア低下や研究開発力の低下、そして国際競争力の低下を招いている。内需の冷え込みや財源の問題によって、人材への投資に資源が回らない状況が続く。この状況を打破すべき責任世代の主権者は現状維持への意識が強く、人材への投資に関する責任を放棄している。

機会

SDGsというグローバルゴールは、世界的な視点を日本にもたらした。その結果、人材においても持続可能な社会を築くための投資が求められるようになってきている。また、地域においても同様で、若い世代から未来を創るリーダーの登場が求められている。

JC に求められる行動

それぞれの地域に根ざし、伝統や文化、習慣を大切にしながらも、世界的に通用する技術や知識、時代に必要とされる能力や精神性を兼ね備えたリーダーを生み出す必要がある。また、ダイバーシティ(多様性)を高め、人々のアイデンティティを確立することで私たちが率先して主権者意識を醸成し、地域にインパクトを与える。

組織

脅威

価値や好み、働き方、ライフスタイルまでが多様化する社会の中で、JCの存在価値を改めて定義しなくてはならない。今後は入会対象者そのものが減少していくことから、状況は更に厳しくなる一方であるが、これからは国家と同じように人数が減少したとしても組織の価値を維持する必要がある。

機会

SNSの普及やAIの発展により、多様な人材が活躍できるダイバーシティ(多様性)という考えの受け皿として、JCほどふさわしい組織はないと思われる。時代に合わせて組織の価値や習慣をアップデートしていくことで、これからもOne and Onlyな組織として存在し続けることができる。

JC に求められる行動

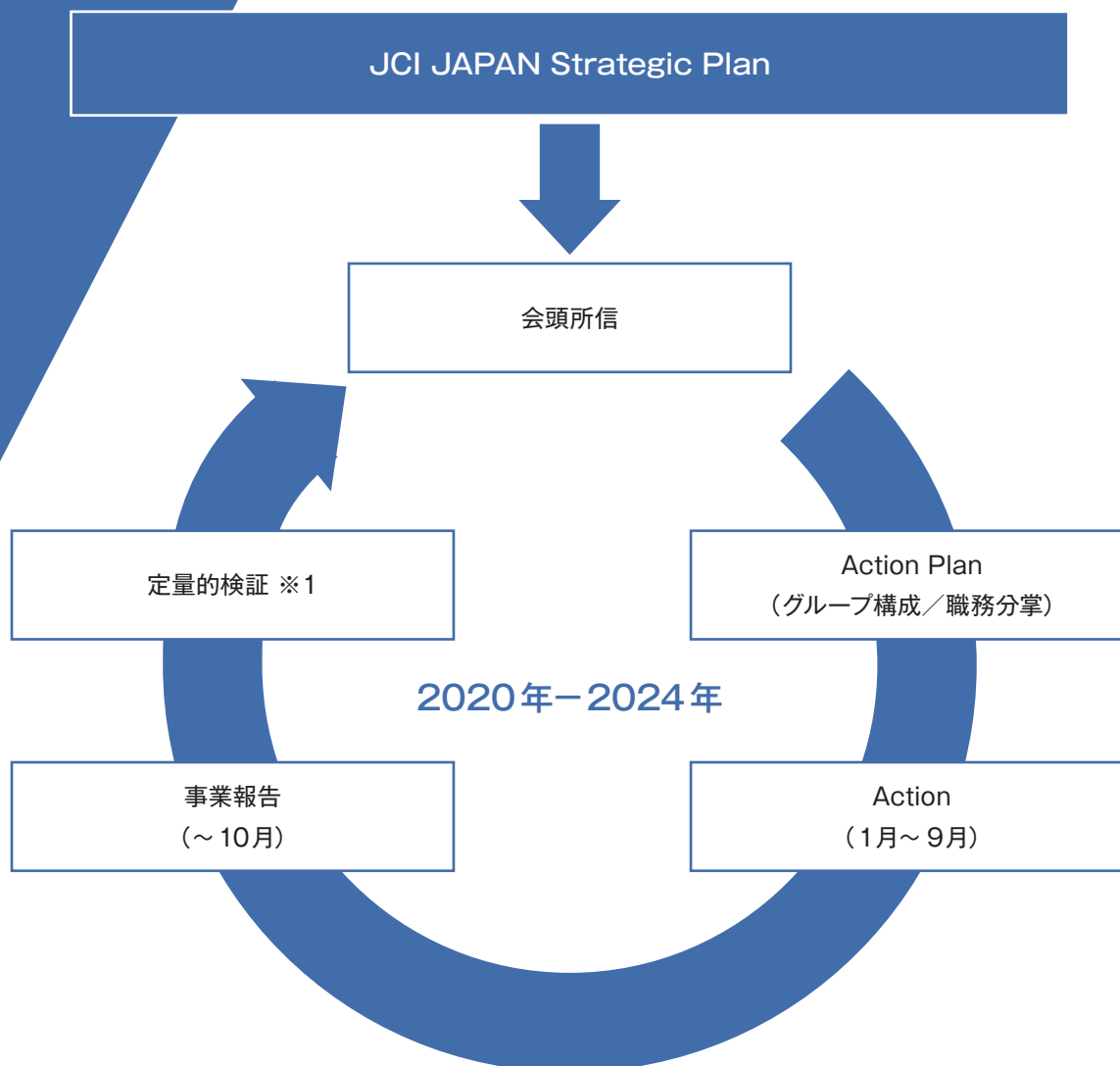
運動を広げ人の意識と行動に変化をもたらすことで共感を得て、賛同者が組織に加入するという理想的なモデルを目指す。そのために、JCIストラテジックプランの5つの戦略「Impact (影響力)」「Motivate (意欲)」「Invest (投資)」「Collaborate (協働)」「Connect (つながり)」を活用する。そして、社会ニーズの変化に合わせて組織を変革し、あらゆるパートナーと協働し、社会への発信持続的な財源を確保することで LOM をリードする。

	社会	経済	
地域	1 地域の魅力を発信	1 人口減少でも暮らせる経済の仕組みづくり	
	2 持続可能まちづくり	2 子育て支援の仕組みづくり	
	3 テクノロジーで課題解決	3 国土計画を策定し、長期的な需要拡大	
	4 子供を増やすための事業	4 インフラ整備に向けたアクション	
	5 交通インフラ整備	5 地域経済を復興させる価値創出	
	6 SDGsの先をゆく事業	6 働き方改革	
国家	1 日本の社会課題解決のためのSDGs推進	1 国家の財政に関する価値観を変化させる	
	2 主権者意識の向上	2 消費税に対する議論を興す	
	3 安全保障問題を改善	3 民間企業投資を活性化	
	4 現行の法律や条約改正へ向けたアクション	4 新技術を学び、実装する取り組み	
	5 子供を増やし、育てやすい国づくり	5 インバウンドの消費拡大	
	6 東京一極集中を是正	6 SDGsを利用して長期的な経済成長を目指す	
国際	1 国際社会の課題解決へのSDGs推進	1 SDGsを軸とした経済活動を推進	
	2 民間の有効ネットワーク構築	2 民間外交事業を促進	
	3 ガラバゴスからの脱却	3 海外企業との協働事業を実施	
	4 日本JCの運動を世界に発信	4 企業の国際化支援	
	5 多様な視点を取り入れた教育	5 国際感覚を持った人材の育成	
	6 国家観の向上	6 日本の魅力を世界に発信	
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS	   	   	
	  		

	環境	人材	組織
	1 SDGsへの取り組みでビジネスチャンス拡大	1 リーダー育成事業	1 ブランディング
	2 子育て支援の仕組みづくり	2 人材育成プログラム	2 あらゆる分野とパートナーに
	3 若者との協働による事業	3 若者を称える事業	3 抜本的な組織改革
	4 地域主体の環境サミット	4 スポーツで青少年育成	4 会員拡大に関する事業
	5 世代を超えた環境保全活動	5 グローバルな人材育成	5 組織改革のロールモデル推進
	6 環境に配慮したまちづくり	6 若者能力開発	6 LOMと直接つながる
	1 環境問題解決のSDGs推進	1 有権者の質を高める教育	1 企業・団体・有識者と連携
	2 メディア連携による環境問題の周知	2 多様性を受け入れられる社会づくり	2 リブランド
	3 カウンターパートとともに環境課題解決	3 情報リテラシーカUP	3 多様な人材の活躍を推進
	4 国内ネットワークによる施策作成／提言	4 建国からの歴史教育	4 根拠に基づく事業実施のための仕組みづくり
	5 環境教育の確立	5 伝統・文化の見識を深める	5 各省庁・政治家との連携
	6 ステークホルダーとの協働	6 道徳教育	6 ジェネレーションZ世代と協働
	1 環境問題解決のためのSDGs推進	1 グローバルリーダーを育成	1 国際的な機会を構築
	2 国連と協働	2 国家間の相互理解	2 多様な人材の活躍
	3 他国と協働で環境事業を実施	3 ダイバーシティの推進	3 国連や他国と協働
	4 他国の環境施策を学ぶ	4 各国との対話を促進	4 各国との国際交流の機会を提供
	5 環境教育事業の実施	5 正しい歴史教育	5 国際会議への参画を促進
	6 他国と災害時の連携を確立	6 国際人教育のため有識者と連携	6 国際ルールを学習



戦略計画の
検証について



※1 定量的検証の参考例

委員会名	SDSs 推進会議
事業名	SDGs 推進事業
事業予算	¥2,051,300
対象者数	3,141 社
SDGs ゴール番号	1 ~ 17
具体的な戦略の番号	5-2-1-①
計画 (KPI)	3,000 社の中小企業が SDGs のゴールを掲げる
結果	全国 3,141 社の中小企業がゴールを掲げた
検証	<p>① KPI は達成したが SDGs を理解せず、SDGs のゴールを掲げる企業が多く見られた 現状も否めません。各企業の理解を深化していくためのフォロー事業の実施など行い、SDGs ウォッシュとにならない実践フローの構築が求められていきます。</p> <p>② この 3,000 社 / 年は引き続き行うとともに、SDGs の取り入れ方と、企業の実践レベルを計る指標作成を推奨します。</p>

LOMでの使い方について

全国の地域で活躍するJCの皆さんにも、
戦略マップを使って地域でインパクトを起こすことができます。

1

5年後のLOMのあるべき姿を設定する。

2

そのあるべき姿を要約しVision Statementを作成する。

3

戦略マップを作成するにあたり、縦軸と横軸を設定する。

4

横軸の脅威、機会、JCに求められる行動を定める。

5

縦軸と横軸が交わる具体的な戦略を設定する。

6

具体的な戦略を要約し、Strategic Mapに落とし込む。

7

アドバイザリーボードを選定し意見を頂く。

8

修正を重ね、Strategic Planを完成する。

JCと災害の関わり

2012-2021

2012年版【東日本大震災復興指針】 4つの柱(2012～2014年度)

I

私たちは3.11を忘れない
「復興創造フォーラム」

III

被災JCの力強い再生へ
JAYCEEの絆 応援団

II

子どもたちの笑顔のために
笑顔デザインプロジェクト

IV

社会的・経済的な「自立」へ
BUY made in TOHOKU 運動

はじめに

2011年3月11日、東日本を直撃したマグニチュード9.0の大地震とそれに伴う巨大津波により、多くの悲しみと絶望的な現実をもたらした東日本大震災。この脅威に対し、日本JCは地震翌日より対策本部を設置し、全国の青年会議所のメンバーと連携し、スピーディーな物資の収集・供給や多くのボランティアによる活動など、地道な復旧・復興支援活動を行なってきました。月日の経過とともに国民の関心は次第に薄れていくなか、私たちはこの運動の歩みを止めることなく、被災地域の方々の自立を目指し、さらに全国においてこの震災の風化を防ぐことを目的とすべく、「東日本大震災復興指針」を策定しました。この指針を基に、国内および世界中にネットワークを持つJCはその強みを活かし「JCによる継続的な支援活動のカタチ」として、「4つの柱」に沿った支援活動を行ないました。

●【新たな東北の再生へ向けた4つの柱】

I 私たちは3.11を忘れない 「復興創造フォーラム」の開催

日本JCは、例年東京の地で開催されていた通常総会を、2012年度より3年間、東北の地で行ない

(2012年岩手、2013年宮城、2014年福島)、併せて「復興創造フォーラム」を開催。全国のメンバーが東北に集まり、復興への想いを再認識することで震災の風化を防ぎ、日本の未来創造へ向けた学びを得られ、さらには被災地域へ経済効果をももたらす場を設けました。

◆復興フォーラム2012 東日本大震災復興への新たな一歩を	◆復興フォーラム2013 決して歩みを止めないもう一度、笑顔あふれる東北へ	◆復興フォーラム2014 志高く未来へ! 震災からの復興が日本の復興 ~全国のつながりを共鳴する輝く未来を描け!!
開催日 2012年3月10日(土)~3月11日(日)	開催日 2013年3月10日(日)~3月11日(月)	開催日 2014年3月8日(土)~3月9日(日)
開催場所 岩手県内 岩手産業文化センター APIO他	開催場所 宮城県内 セビオアリーナ仙台(フォーラム)、セレモニア多賀城 新橋会館(追悼式)	開催場所 福島県内 いわきワシントンホテル他、いわき明星大学
参加者数 4,070名(メンバー:3,480名 一般市民590名)	参加者数 3,364名(メンバー:2,954名 一般市民410名)	参加者数 4,398名(メンバー:3,828名 一般市民570名)
事業費用 11,035,814円(総会開催費用1,357,750円含む)	事業費用 15,581,585円(総会開催費用4,228,000円含む)	事業費用 23,395,969円(総会開催費用2,004,930円含む)

II 子どもたちの笑顔のために「笑顔デザインプロジェクト」実施

東日本大震災は、子どもたちに根深い心の傷を残しました。日本JCでは阪神淡路大震災の際、PTSD(心的外傷後ストレス障害)の症状が懸念される青少年を対象に、全国各地の青少年育成事業へ受け入れるプロジェクト「鐘のなる丘プロジェクト」を実施。この経験に基づき、被災した子どもを全国各地で実施される青少年育成事業に招き、PTSD症状の軽減と発症予防に努め、子ども本来の笑顔や活発な姿をとりもどすべく本事業を行ないました。

◆2012年度笑顔デザインプロジェクト	◆2013年度笑顔デザインプロジェクト	◆2014年度笑顔デザインプロジェクト
対象期間 2012年3月20日(火)~10月31日(水)	対象期間 2013年3月18日(月)~10月31日(木)	対象期間 2013年3月17日(月)~10月31日(金)
開催場所 全国25カ所	開催場所 全国26カ所	開催場所 全国24カ所
参加者総数 2,377名(うち被災地児童673名)	参加者総数 13,177名(うち被災地児童692名)	参加者総数 9,892名(うち被災地児童424名)
日本JC負担上限額 1事業につき50万円	日本JC負担上限額 1事業につき50万円	日本JC負担上限額 1事業につき80万円
日本JC負担分事業費用 11,204,889円	日本JC負担分事業費用 10,757,748円	日本JC負担分事業費用 13,747,102円

III 被災JCの力強い再生へ JAYCEEの絆 応援団

JC内において直接被災を受けた3ブロック・13LOM(2011年12月現在)に対し、被災LOMに対し負担金を免除するとともに、3年間にわたって当該地域の復旧復興へ向けた支援活動及び事業資金助

成を行ないました。

◆ 2012年度 JAYCEEの絆 応援団

対象期間：1 / 1~12 / 31
開催場所：被災地等約20カ所
対象事業数：12
事業資金支援費用総額：5,172,510円

◆ 2013年度 JAYCEEの絆 応援団

対象期間：1 / 1~12 / 31
開催場所：被災地等約30カ所
対象事業数：10
事業資金支援費用総額：4,000,000円

◆ 2014年度 JAYCEEの絆 応援団

対象期間：1 / 1~12 / 31
開催場所：被災地等約23カ所
対象事業数：12
事業資金支援費用総額：3,902,836円

IV 社会的・経済的な「自立」へ BUY made in TOHOKU 運動

被災地域の産品を進んで購入することは、直接的な経済効果のみならず、被災地域の企業に雇用機会も創出しうるもので、社会的・経済的な自立への大きな一歩になります。また、風評被害に苦しむ東北への観光促進も図り、全国のJCメンバーとともに積極的な運動を展開しました。

◆ 2012年度

BUY made in TOHOKU

手法 被災地産品掲載ホームページ並びにカタログ配布による販促活動、ブース出展機会の提供等
事業費用総額 4,878,500円

◆ 2013年度

BUY made in TOHOKU

手法 被災地産品掲載ホームページ並びにチラシ配布による販促活動、ブース出展機会の提供等
事業費用総額 811,650円

◆ 2014年度

BUY made in TOHOKU

手法 被災地産品掲載ホームページ並びにチラシ配布による販促活動、ブース出展機会の提供等
事業費用総額 1,247,700円

● その他の活動

- 被災 LOMの自立支援
- 被災地 LOM会費免除措置
- 支援物資搬送（2011年度からの継続支援活動）
- 東日本大震災日本JC対策本部報告書作成
- 東日本大震災復興指針（2012から2014年）リーフレット作成

● 2014年に実施した支援事業

- 未来へつなぐプロジェクト～音楽のちから～事業（p530参照）
- 東北ブランド発信事業
- JCIアジア太平洋地域会議（ASPAC）「絆コンサート」開催事業
- 被災地仮設住宅・児童館訪問・「花桃花」ジャムプレゼント事業

2015年版【東日本大震災復興指針】 「真の復興へ向けた『未来の地図』」4つの柱 (2015～2017年度)

I 子どもたちの未来のために

III 被災地に心を寄せる

II 私たちは3.11を忘れない

IV まだ見ぬ災害へ備える

はじめに

2012年、被災地域の社会的・経済的自立と真の復興を成し遂げること、震災の風化を防ぐことを目的とし「東日本大震災復興指針」を策定しました。しかし2014年5月時点で未だ26万人以上が避難生活を余儀なくされており、また次の災害に備えるために、震災を教訓とした防災ネットワークを確立し、防災減災に活かさなければなりません。我々は、被災地が自立し、震災後時代として新しい日本を創造し、中長期ビジョンを持って展開される「真の復興」へ向けた運動の必要性がより求められている現実に直面しました。

そこで、この運動をさらに進めるべく、これまでの指針を調査研究し、行政や各種団体と手を取り合った支援体制を構築し、「未来の地図」として指針を改定しました。

この復興指針改定にあたっては、岩手・宮城・福島ブロック協議会内の会員会議所理事長並びに2011年以降の東北地区協議会の会長、歴代ブロック会長との意見交換を重ね、さらに、これまで支援に携わってきた方々とともに、支援内容を掘り下げて検証しました。また外部アドバイザーとして復興庁、東日本大震災支援ネットワークプロジェクト会議（JCN）と意見交換し、復興庁が示す復興へ向けたロードマップと照らし合わせ、青年会議所だからこそできる支援としてまとめました。

この指針を、日本の未来を照らす新たな「道しるべ」として、真の復興へ向けた活動は継続されます。

● 2021年を一つの節目として未来の地図を描く

JCが考える真の復興とは、被災地域に暮らす人々が、社会的・経済的に自立を宣言したことを示しています。そのためには中長期にわたり、被災地域が社会的・経済的に自立できる支援活動を継続する

必要があります。国内および世界中にネットワークを持つ我々JCはその強みを活かし、「JCによる継続的な支援活動のカタチ」として、「4つの柱」に沿った支援活動を行ないました。

2021年は震災から10年目にあたります。被災地が真の復興へ近づくよう、被災地に心を寄せる支援体制を整え、人と人がつながる支援を進め、被災地と日本の輝く「未来の地図」を描きます。

● 新たな東北の再生へ向けた4つの柱

I 子どもたちの未来のために

① 未来へつなぐプロジェクト～音楽のちから～推進計画に基づく展開の実施

「復興のシンボル」として、時代を超えても色褪せることのない音楽の力を用い、次世代へ歌い紡いでいく「未来へつなぐプロジェクト～音楽のちから～」を復興創造フォーラム 2014で発信、合唱曲『未来へつなぐメッセージ』をリリースしました。作詞作曲は音楽プロデューサーの多胡邦夫氏が手がけ、楽曲は実際に被災地を訪れ、「これは自分たちの歌だ」と思ってもらえるよう、子どもたちが発したフレーズを基に制作。主旨に賛同した歌手のMay J.さんも参加する合唱曲を日本語版・英語版と作成しました。楽曲や譜面はすべて無償で利用できる形にしています。



日本青年会議所は継続した復興支援の一つとしてこのプロジェクトを推進していくことで、夢を育み、不可能を可能にしていく未来を描き、希望を持って今を大切に生きていく「夢と希望のちから」を世界中の子どもたちに伝える活動を続けてきました。

II 私たちは3.11を忘れない

① 真の復興に向けて共に歩みを進める

日本JCは2012年度から3年間、東京で開催されていた総会を被災地東北で開催し、合わせて「復興創造フォーラム」を開催。フォーラムは大きな成果をもたらしましたが、真の復興を目指し、この成果をさらに進化させ継続していくことが重要と考え、日本JCは更なる支援継続のため被災地を訪問する機会を創出。2015年度から3年間は、理事会・ブロック会長会議並びに諸会議を被災地で開催し、多くのメンバーが足を運び、被災地の現状を体感できる機会をつくり、真の復興に向けての歩みを進めてきました。

III 被災地に心を寄せる

① BUY made in TOHOKUの継続

② JC運動における被災地へ赴く事業の推進

真の復興には「人の心の復興」が必要です。活力の根源は「人」にあり、人が元気になれば地域に

アルファ米などをパックした、「有事の際、一世帯が2日間生き延びられ、緊急時の物資支援における仕分け作業を要せず迅速に輸送できる」画期的なツールを企画し、全国に普及する活動を続けてきました。

その後、JC-AIDはより一層の普及を促進するべく「ストックAID」と名を改め、「平成28年熊本地震」発生の際には、実際に多くの被災地にて活用されました。

JCの主な災害支援活動報告と、防災への取り組み

● 「平成28年熊本地震」主な支援活動の取り組み

- 2016年4月14日、熊本県熊本地方でマグニチュード6.4、震度7の地震が発生。
- 九州地区協議会、熊本ブロック協議会、各地会員会議所と情報を共有し、翌朝4時59分、山本樹育会頭が哀悼の意とともに熊本への支援を表明。「九州地区熊本ブロック協議会災害対策本部」を設置。
- 「平成28年熊本地震災害支援口座」を開設。
- 16日、震度7の「本震」が発生。強い揺れがより広範囲で起こり被害が拡大。複数のLOMで水や食材をかき集め炊き出しを実施。余震が続く中、地元JCによる果敢な支援が行なわれました。
- 東京のJC会館に「平成28年熊本地震日本JC対策本部」が設置されました。
- 24日、山本会頭が被災地を訪問。被災地LOM、熊本ブロック協議会の災害対策本部などを訪れメンバーを激励しました。
- 2018年3月、熊本の子供たちが震災のショックから立ち直れるようにとの願いを込め、熊本県益城町の広安西小学校に人気漫画「ONE PIECE」のイラストが描かれたスクールバスの贈呈式が開催されました。公募により命名されたラッピングバス「ゴーイングましき号」は児童の笑顔を生み、新たな日常の一步が踏み出されました。



● 「平成30年7月豪雨」（西日本集中豪雨）主な支援活動の取り組み

- 2018年6月28日から7月8日にかけて、西日本を中心とする北海道や中部地方を含む全国的に広い範囲に

において、台風7号および梅雨前線等の影響による集中豪雨が発生。

- 8月7・8日、池田祥護会頭をはじめとする日本JC本会メンバーが現地のボランティア活動に参加。愛媛県宇和島市では、浄水場が流された吉田地区を視察。ボランティア指導員不足などの状況説明を受けました。
- 広島県尾道市に移動、中国地区協議会、広島ブロック協議会、尾道JC、三原JCメンバーと合流し、土砂の掻き出しなどのボランティア活動を行ないました。
- 津山JCメンバーによる岡山県倉敷市での炊き出し、藤枝JCと熱海JCによる岐阜県関市でもボランティア活動、射水JCによる広島県竹原市でのボランティア活動など、各地で支援活動が行なわれました。
- 呉JCは災害翌9日、市役所や呉市社会福祉協議会と協力し、ボランティアセンター設立に尽力。建設関係者ら専門職メンバーの存在を大きな強みに、多団体への支援要請も行ないました。



● 阪神・淡路大震災 発生から四半世紀を経て

- 1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災。その年6月にJCI神戸は「神戸元気復興祭」を開催、フォーラムやコンサートを行ない、市民に生きる勇気と夢を与えました。また翌年には復興への思いを載せた「復興提言書」を神戸市に提出し復興に寄与しました。震災から四半世紀経ち風化が懸念されるなか、JCI神戸は2018年、神戸市社会福祉協議会、そして一般財団法人 大吉財団と「災害時等における協力体制に関する協定」をそれぞれ締結。他団体との連携を強化し、より効果的な支援の展開が期待されます。
- 2020年2月9日、JCI西宮は、創立70周年記念事業の一環として花火の打ち上げを企画。1,146発の花火が西宮の夜空に打ち上げられました。「1,146」は西宮市内の犠牲者の数。震災を風化させないため、防災・減災をテーマにした事業を25年間続けてきたJCI西宮の節目の活動となりました。



● 楽しみながら行なえる防災ゲーム「逃げロゲ!」

- 一般社団法人焼津青年会議所は、2018年6月、リスクコミュニケーションとロゲイニングを組み合わせた防災ゲーム「逃げロゲ!」を開催しました。
- 「逃げロゲ!」とは、避難地形時間地図、通称【逃げ地図】と、地域街歩きイベント【ロゲイニング】を組み合わせた、全く新しい防災プログラム。参加者が自ら考え避難地図をつくり、それを持ってまちを歩く事業を通じて「リスクコミュニケーション」の重要性を知り、楽しみながら地域防災につなげる試みです。
- 地域の関係者が自然災害について理解を深め、そのリスクを共有して意思疎通を図るのが「リスクコミュニケーション」。それを通じ、地域の実態を踏まえた災害リスクが評価でき、災害への備えと災害発生時の行動を決めることができます。



● 地域防災の切り札、「逃げ地図」ワークショップを開催

- 「逃げ地図」とは、東日本大震災の経験と教訓を踏まえて日建設計が考案、山本俊哉明治大学教授らが地域防災用にバージョンアップさせたもの。ハザードマップを下敷きに、自らの手で描く防災地図です。
- 正式名称は「避難地形時間地図」。地域住民が目標避難地点までの避難ルートと所要時間を異なる色で塗り分けることで、危険度の移り変わりを直感的に理解できるようにうながす地図のこと。「災害時にどう逃げたらよいか、最も近い避難場所まで何分かかかるか、自分ごととして認識させる」ことを第一の目的としてつくられたものです。
- 日本JC（国土強靱化委員会）では、内閣府と連携し、この「逃げ地図」づくりのワークショップを全国的に展開。小学生も高齢者も、皆が地図作りに取り組むことで、地域間でのコミュニケーションを円滑にし、地域全体で防災意識を高められることを目的とします。
- 2019年2月27日、ワークショップ第1回目が京都福知山にて開催。福知山JCをはじめ近畿地区のメンバーや行政職員ら約80名が参加しました。



● 内閣府と連携し、JCの強みを発揮する「未来へつなぐ防災プロジェクト」

- 2018年9月14日、内閣府と日本JCの間で「未来へつなぐ防災プロジェクト」タイアップ宣言の調印式が行なわれ、小此木八郎内閣府特命担当大臣と池田祥護JC直前会頭が署名しました。

■ 全国ネットワークを活用した災害支援、防災への積極的姿勢というJCの強みを内外に示すことで、市民の意識啓発を促し、円滑な防災減災体制の構築につなげることが期待されています。

■ 両者は震災の記憶を忘れないよう、これまで青年会議所で推進してきた『未来へつなぐメッセージ』をテーマソングとして同プロジェクトを推し進めることで、防災を自分ごととして考え、多様な災害に備える社会の実現に向け歩みを進めていく構えです。

■ 今後、全国各地で行なわれる防災事業について、内閣府との連携を示す「未来へつなぐ防災プロジェクト」の冠が付けられ実施される予定です。



● 2019年度国土強靱化委員会の主な取り組み

■ 全国JCネットワークの構築

災害時に被災地の状況を素早く把握するために、地区単位で災害対応LINEグループを作成。被害状況報告、注意喚起、他地域での支援状況など情報共有に活用。春には、南海トラフ地震や首都直下型地震を想定した防災訓練を行ない、このLINEグループの機能性や問題点を確認しました。実際の災害が発生した際に、75分で状況報告を行ない、緊急支援金を被災地へ送金することで、一秒でも早く被災地支援ができる体制を整えました。

■ 被災地支援

2019年は大きく4つ（山形県沖地震、九州北部豪雨災害、台風15号、台風19号）の災害対応を実施。現地からの物資支援や人的支援の要望をとりまとめ、全国のJCメンバーへ情報発信・支援要請することで、被災地の同志の仲間と市民の方へ支援を行ないました。

● 2020年度国土強靱化委員会の主な取り組み

① 47ブロックと各県社会福祉協議会との協定締結

② 10地区と各地区社会福祉協議会および地区協議会同士の広域ネットワーク協定締結

③ JCI日本とイオン株式会社との協定締結

④ 災害弱者への対応「インクルーシブ防災」（高齢者・障がい者を含むあらゆる人の命を守る、誰も取り残さない防災）の実現



10年先の この国のかたち

■ プロローグ

新型コロナウイルスを起因とするパンデミックは、人類のあらゆる尊厳を脅かし、世界規模で社会的、経済的、そして政治的危機を引き起こしながら、私たちの生活に甚大な影響を与え、青年会議所もまた、日々、生命の安全と経済の再生という難しい選択を突きつけられました。「昨日までの日常が失われ、混沌とした空気が蔓延し、誰もが不安になる時代」、「今までの価値観が変容し、新しい時代を迎えざるを得ない時代」。こんな時代だからこそ、私たちは70年前に制定された創始の精神を今一度噛みしめ、戦後、新日本建国を旗印に青年会議所運動を立ち上げられた諸先輩方が未来へのビジョンを持って復興に努めてこられたように、未来を描くことで、成すべきことを明確にし、行動していくことが求められていると思います。10年後は2031年であり、それはちょうど国連で定められたSDGsの目標期限の次の年に当たります。それぞれの17のゴールに対し、日本青年会議所はどのように関与でき、どのようなゴールを描いているのでしょうか。そこで、創立70周年を機に、ゴールごとにターゲットとテクノロジーや現在の社会課題を示すキーワードとともに掛け合わせ、日本青年会議所が考える10年先の明るく元気な日本を描いてみました。ぜひ参考にいただき、皆さんもご自身で10年先を描いてみてください。

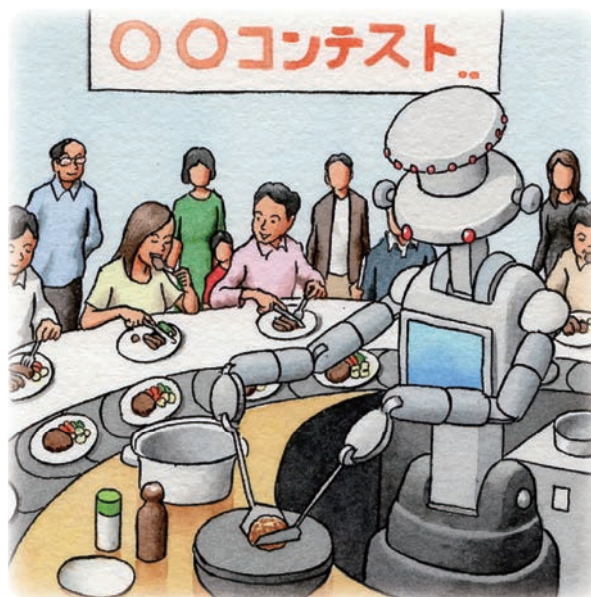
目標1

「貧困」×「コロナ禍による倒産、破産」

- 生活保護をバックアップするセーフティネットの一種として、貧困層を助けるためのマイクロファイナンスサービスの提供をJCが支援することにより、生活保護世帯数が減少している。



イラスト：青山邦彦



目標2

「飢餓」×「フードテック」

- 料理ロボットと人工培養食材の使用による美食コンテストをJCが主催し、その大会で披露されたレシピを人が活用できるように纏めて配布している。





目標3

「保健」×「ヘルステック」 「保健」×「新型コロナウイルス」

- 多くのウェアラブルセンサーが体調や感情を把握し、AIが様々な医療サービスを自動的に提供している。JCは高齢者に向けて、新しい医療サービスについての研修会を開いている。
- JCが有する民間ネットワークを利用して、開発途上国へワクチン及び安価な必須医薬品の流通を支援している。

3 すべての人に健康と福祉を



目標4

「教育」×「地域間の教育格差」

- 首都圏を中心とした都市で展開されている最先端の教育サービスを、JCと教育委員会とのコラボレーションにより、地方へ横展開している。

4 質の高い教育をみんなに



目標5

「ジェンダー」×「JCI日本」

- JCI日本の歴代会頭に女性が名を連ねている。
- JCI日本の女性会員比率が30パーセントまで上昇している。

5 ジェンダー平等を実現しよう



目標6

「水・衛生」× 「SMILE by WATER」

- JCによるSMILE by WATERキャンペーンの継続的な取り組みにより、開発途上国の水へのアクセス状況が改善されている。

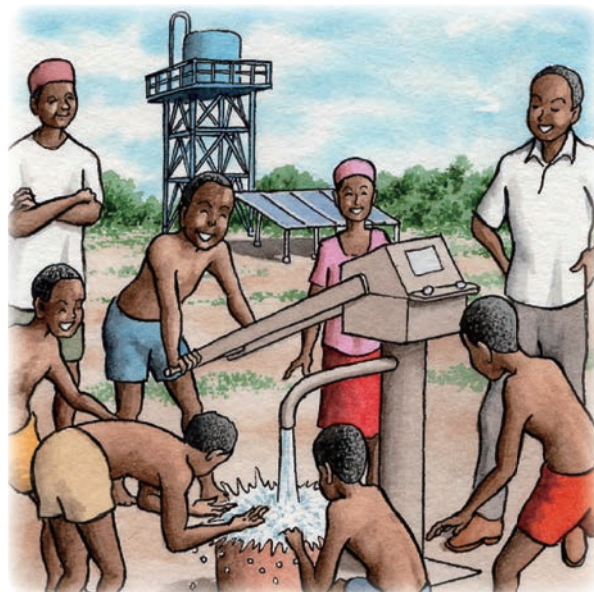
6 安全な水とトイレ
を世界中に

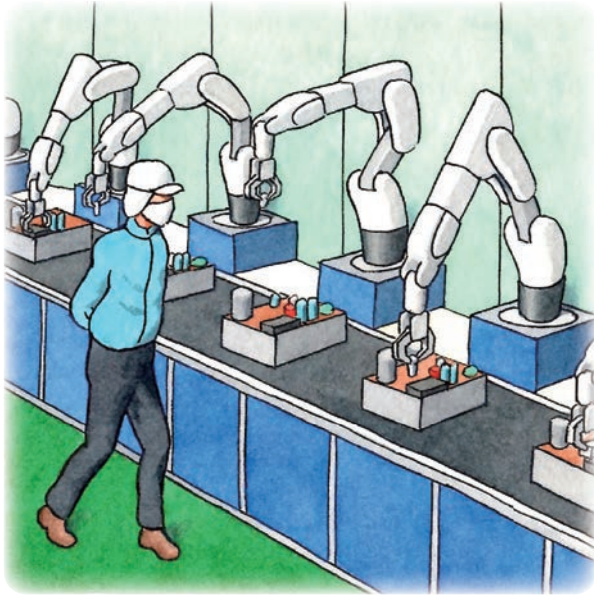


目標7 「エネルギー」×「脱CO₂」 「エネルギー」×「再生可能」

- 洋上風力発電や海流発電からのクリーンエネルギーを世界に先駆けて実用化し、温室効果ガス排出削減の目標を達成している一方で、レガシーとなった原子力発電所の廃炉に向けた協議の場をJCが主催し、まちの人たちを巻き込み課題解決を図っている。
- 蓄積された再生可能エネルギーの活用ノウハウを途上国へ中心に輸出し、世界から尊敬されている。その輸出にはJCの民間外交が大いに役立っている。

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに





目標8

「成長・雇用」×「ロボティクス」

- ロボット産業の発展とその活用により、少子高齢化でも成長、発展できる新たな国家モデルとなり注目されている。国際社会にも飛び出し、JCでの横のつながりも活かしながら各国でリーダーシップを発揮している。

8 働きがいも
経済成長も



目標9

「イノベーション」×「宇宙」

- 宇宙事業の先駆者となっており、JCが超高速輸送を用いたこれからの観光に伴う問題を主導的にあぶり出し、宇宙観光事業の可能性にも追究している。

9 産業と技術革新の
基盤をつくらう



目標10

「不平等」×「地域格差」

- 地方分散化とともにJCによる政治参画教育運動のおかげで、国政による一票の格差や地方議会での議員一人当たりの市民数の格差が是正され、多様な人たちの民意がくみ取られる政治が行なわれている。

10 人や国の不平等
をなくそう



目標11

「都市」×「自動運転」

- 高速道路を中心に自動運転化が進み、物流の多くが無人輸送となっている。都市集中型から地方分散型へ移行が進み、JCが新しい地域公共交通機関のあり方についてシンポジウムを開催し、まちづくりの方向性を主導している。

11 住み続けられるまちづくりを



目標12

「生産・消費」×「サーキュラー」

- JCI日本がSDGsの普及とともに、サーキュラーシンキング（サーキュラー思考）を浸透させるセミナーを展開することで、民間レベルで新たな価値観やエシカル消費のマインドが醸成され、サーキュラーエコノミーが広がっている。

12 つくる責任 つかう責任



目標13

「気候変動」×「人口移住」

- わずかな海面上昇や2度の気温上昇により多くの人々が環境難民に陥り、移住を強いられる可能性があることを具体的にJCが啓蒙していくことで、温室効果ガスの削減を推進し、カーボンニュートラル社会への実現に寄与している。

13 気候変動に具体的な対策を

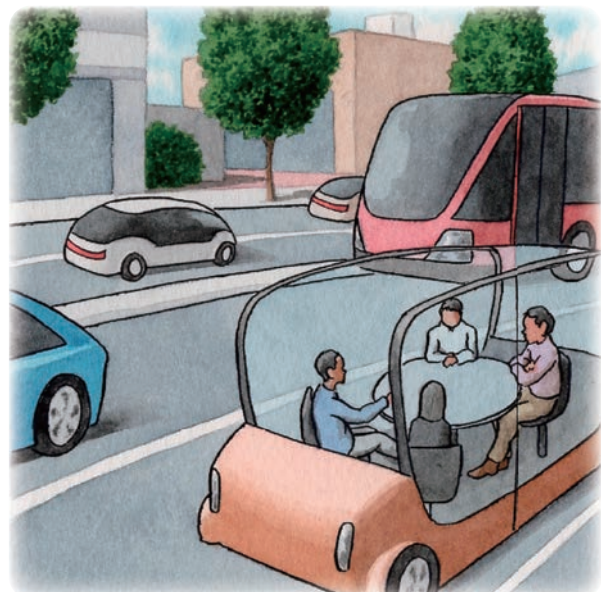


目標14

「海洋資源」×「プラスチック汚染」

- 我々の何気ないプラスチックバッグの利用が、海中のマイクロプラスチック汚染に繋がることを発信し、JCがそれに変わる新しいエシカルな価値を提供していくことで、海洋及び沿岸の生態系の回復へ寄与している。

14 海の豊かさを守ろう





目標15

「陸上資源」×「植林」

- 地道な植林活動事業を各LOMで展開することや、一層のペーパーレス化を促進していくことで森林の減少を抑え、CO₂の吸収を維持させている。

15 陸の豊かさも守ろう



目標16

「平和」×「民間外交」

- 各LOMが姉妹青年会議所関係(シスターJC)の締結を進め、経済、文化等の民間レベルでの国際交流をさらに深めることで、世界への理解と友情に繋げていっている。

16 平和と公正をすべての人に



目標17

「実施手段」×「パートナーシップ」 「実施手段」×「価値デザイン」

- JCI日本及び各LOMがSDGsに関するパートナーシップ協定を様々なステークホルダーと積極的に締結し、日本のSDGs達成に向けてJCが主導的役割を果たし、推進している。
- 社会課題解決のためにJCI日本が創出した新しい価値の中から、SDGsの達成状況を測るGDP以外の尺度を作り出し、提案している。

17 パートナーシップで目標を達成しよう



エピローグ

こんな明るく元気な日本で、皆さんは暮らしてみたいと思いませんか。しかし、これは日本青年会議所が提案する10年先の日本です。皆さんは皆さんの未来を描いてください。一人ひとりが未来を描き、行動に移すことで明るく元気な日本が実現されるのです。たった10年先の日本です。さあ、描いてみよう、あなた自身の明るく元気な日本の未来を。

JC用語・キーワード解説

あ

明るい豊かな社会

綱領に制定するJC運動の目標とする理想の社会。

アクティブ・シチズン Active citizens — 008, 518

行動する市民と訳することができ、JCI日本の会員のJC活動こそがJAYCEEとしてあるべき姿と考えられて、JCI日本のメンバーのことを示すともいわれている。

アジア・太平洋地域会議

国際青年会議所は世界をアフリカ・中近東地域(旧エリアA)、アジア・オセアニア地域(旧エリアB)、南北アメリカ地域(旧エリアC)、ヨーロッパ地域(旧エリアD)の4つの地域に分類しており、年1回5月から6月に各地域で行われる国際会議をエリアコンファレンスと呼び、アジア・太平洋地域のエリアコンファレンスは、ASPAC(アジア太平洋地域会議 - ASIA PACIFIC AREA CONFERENCE)という名で親しまれている。

運動指針 — 519

1970年代から2010年代まで10年毎に策定されてきた長期的指針。

か

金沢会議

JCI金沢会議は、アジア太平洋地域の各国青年会議所の代表が一同に参加する国際会議。国連が掲げた持続可能な開発目標「UN SDGs」の達成に向けた活動の推進を目的として、金沢宣言が採択された金沢市で2016年から2020年まで毎年開催された。

金沢宣言 — 258, 507

2015年11月に開催されたJCI世界会議金沢大会の総会において、JCIが国連の持続可能な開発目標「UN SDGs」の達成に向けて積極的に取り組むことを採択し、この宣言は金沢の地で行われたことから「金沢宣言」と呼ばれている。

がんばろうNIPPON — 216-218, 316

東日本大震災では「がんばろうNIPPON 確かな一歩を踏み出そう」の言葉のもと、全国のJCメンバーがJCI旗のもとに会員の心を一つにして、早期の復旧、復興に向けて様々な支援活動を行った。

義捐金 — 214

東日本大震災翌日に「東日本大震災」日本JC対策本部立ち上げと並行して多くのLOMでは理事長を中心に募金活動を開始し、LOMメンバー・シニアへの募金協力も要請された。3月14日には義捐金口座が開設され、直接的あるいは間接的な金銭支援が開始。この口座はLOMだけでなく、シニア団体や一般企業からの募金も受け入れた。震災支援活動に携わる団体や、本年度のJC活動が困難であると見なされた被災地の12LOMについては、見舞金を拠出。なお、被災LOMに関しては日本JC本会での判断が難しいため、各ブロック協議会会長に調査してもらい、その情報をもとに決定した。

京都会議

1966年11月、JCI世界会議が日本で2番目の地として京都で開催された。日本で最初の国立の会議施設である京都国際会館が完成したのもこの年の5月であった。翌1967年に社団法人日本青年会議所(当時)の通常総会が京都で開催され、その開催以来、日本青年会議所の新年度のスタートとなる諸会議及び各委員会が京都で開催されるようになり、やがて一年の新たなスタートを切る場として定着し、この会議を総称して「京都会議」と呼称するようになった。その後、全LOMメンバーも多数集う場にもなったことから、フォーラムやセミナーが開催されるようになり、学びの機会も設けられた。また、公益社団法人に移行してからは、公益性の観点も鑑みて、各種セミナーやフォーラムへの一般市民の参加も促進されている。

国家青年会議所 — 004

JCIに同じ。

さ

三信条 — 018

JCの行動綱領として1950年5月1日に採択された三信条。JC運動とは若い人々が集まって自己啓発・修練を行う場であり、培われた力を用いて地域社会にサービス(奉仕)することであると示された。

指導力開発

お互いを動機づけ、刺激し合う中から切磋琢磨し、各自の隠された

能力を開発し、人間形成をしていくこと。

社会開発

まちづくり(CD=Community Development)とは単なる空間の創造や機構の設立だけでなく、社会・経済・文化・環境といった生活の根につながるものを構成するあらゆるファクターをも含めた、まちの住民の暮らしそのものの創造のこと。

社会課題解決 — 515

地域に根ざすJCの運動は、社会の幅広い課題を抽出し、自らそれを解決することと位置づけている。「社会の課題」とは、地域固有の課題だけではなく、経済の再生や少子化、高齢化といった国家的な課題、あるいは気候変動や人権問題といった国際的な課題を含み、およそ青年が取り組むべき様々な課題を包括している。どのような社会課題であっても、それは地域だけではなく国家や世界と複雑に関連し合っており、だからこそ、私たちは、多面的な「社会課題」を解決する運動を地域毎に起こし、そして、私たちが持つ組織ネットワークによって全国、あるいは世界的な運動へと拡大させ、より良い社会を創り出すことができることをJC宣言にて表明している。

シスター JC

国際青年会議所に加盟している国家青年会議所に所属する青年会議所の相互間の親善と友好のために、相互の交流を行う締結関係を結んだ青年会議所のこと、姉妹JCともいう。

出向者

各LOMより国際青年会議所・JCI日本・地区協議会・ブロック協議会へ役員や委員として出ていくメンバーのこと。

ストラテジックプラン Strategic Plan — 516

2020-2024 JCI JAPAN Strategic Planは、JCI日本がこれからのように社会をより良く示す航海図のような役割を果たすためのものであり、JCI日本は連絡総合調整機関としてLOMを支援するとともに、あらゆるパートナーと協働し、2020年から2024年の5年間の計画を実行するものとして定められている。

全国大会

全国大会は「青年会議所運動に関する意識の昂揚を図ること」を目的として、1953年より途切れることなく開催され、開催都市の新たな魅力と発展、参加したメンバーの意識の昂揚に寄与してきた。

世界会議

国際青年会議所が主催する年1回開催される世界会議のことで、国際青年会議所の事業計画・予算の決定・役員選出・褒賞の授与・翌年度の開催地の決定などが行われるJCIの最高の意志決定機関である。開催地は毎年異なるが、開催中には総会・理事会・常任理事会・分科会・視察ナショナルパーティー・アワードバンケットなどがプログラムされている。第1回JCI世界会議は1946年パナマで開催された。

セネター制度

JC終身名誉会員制度のことで、JCI運動に多大なる貢献をしたメンバーをLOMが承認・推薦し、NOM及びJCIの承認を得てその資格(終身番号)が与えられる。与えられた終身番号は、会員の死後も永久に残るといふ名誉ある資格である。

た

地区協議会

JCI日本としての事業計画・方針などを各ブロック及び各LOMに伝達浸透させ、また一方では、各LOMの事業活動・意見などをJCI日本に報告や連絡するための機関である。現在、JCI日本は10区分されており、10の地区会員会議所があり、主な事業としては、各地区委員大会の主催がある。

な

日本JCシニア・クラブ

日本JCシニア・クラブは、JC卒業生同窓会として相互の親睦を図るとともに、現役活動を陰ながら援助しようという目的で1960年に設立された。JC卒業生なら誰でも入会できる。

人間力大賞

TOYPを参照。

は

復興指針 — 526

東日本大震災に対しJCI日本は地震翌日より対策本部を設置し、全国の青年会議所のメンバーと連携し、スピーディーな物資の収集・供給

や多くのボランティアによる活動など、地道な復旧・復興支援活動を行ってきた。月日の経過とともに国民の関心は次第に薄れていく中、私たちはこの運動の歩みを止めることなく、被災地域の方々の自立を目指し、さらに全国においてこの震災の風化を防ぐことを目的とすべく、「東日本大震災復興指針」を策定した。この指針を基に、国内および世界中にネットワークを持つJCはその強みを活かし「JCによる継続的な支援活動のカタチ」として、「4つの柱」に沿った支援活動を行った。

ブロック協議会

JCI日本及び地区協議会としての事業計画・方針などを各LOMに伝達浸透させ、また一方では各LOMの事業活動・意見などを、JCI日本及び地区協議会に報告連絡するための機関である。現在、JCI日本には47ブロック協議会があり、主な事業としては、各ブロック会員大会の主催がある。

プロボノ

ラテン語のPro Bono Publico(良い公共のために)を略した言葉。JCにおいては「公共の利益のためのスキル提供による無料奉仕」と定義し、社会人が仕事を通じて培った専門的知識やスキル・経験やノウハウなどを活かして社会貢献することを意味する。

褒賞 — 346

JC運動を通じて地域に貢献した会員会議所を称え、その荣誉を全国に発信するとともに、各LOMがこれらの事業を参考として新たな気づきや学びを得る機会とし、関わるすべての人に自信や誇りを与え、メンバーのモチベーションや未来のJC運動の発展に資することを目的に褒賞制度を設けている。

ら

理念共感拡大グランドデザイン — 313, 314

理念共感拡大グランドデザインは、2021年10月09日第70回全国大会とちぎ宇都宮大会「70周年記念大会式典」にて、創立70周年を記念し、設立当初の「理念が浸透していた状態」へと原点回帰を果たすべく宣言された。重点目標①: 理念教育システムの再構築、重点目標②: 行動化のための良質な情報、重点目標③: 多様性のある組織の確立、という3つの重点項目が発信され、これらを柱とした理念共感拡大グランドデザインのもとに新しい始まりとして、地域とLOMの中で抱える多くの問題に対し、今一度改めて向き合い、未来のためIdea&Actionを起こしていくことが高らかに宣言された。

ロバート議事法

ロバート・ルールズ・オブ・オーダー。「多数者の権利」「少数者の権利」「個人の権利」「不在者の権利」の4つの権利と、「一時一件の原則」「一時不再議の原則」「多数決の原則」「定足数の原則」の4つの原則を基本的なルールとして行う会議運営の方法。これは国連をはじめ、世界各国で採用され、JCでも正式に採用されている。

A

AOY

アクセント・オン・ユースの略で、青少年開発のこと。その地域社会に住む青年を参加させて、地域社会の開発のためにより良き道を見出すよう青年達を助ける方法を提供するプログラムである。1970年にダブリン世界会議でJCI恒久プログラムに採択された。

ASPAC

アジア・太平洋地域会議を参照。

C

CD

コミュニティー・ディベロップメントの略で、社会開発のこと。

H

HD

ヒューマン・ディベロップメントの略で、人間力開発のこと。

J

JAYCEE

JCメンバー個々人のこと。

JC

JUNIOR CHAMBERの頭文字をとったもので、組織としてのJCの意。

JCI

JUNIOR CHAMBER INTERNATIONALの頭文字をとったもので、国際青年会議所の意。各NOMの連絡・統合・調整機関であり、本部はアメリカ合衆国・ミズーリ州セントルイスにある。

JCI クリード

JCIクリードは、JCIの定款に示されている条項の一つで、6節で構成される我々JAYCEEの行動の最も基本的な理念。

JCI Mission

JCIが定める、世界で共有しJC運動を展開していくための使命。

JCI Vision

JCIが定める、世界で共有しJC運動を展開していくためのビジョン。

JCデー

日本において最初に青年会議所運動が開始された1949年9月3日を記念して、毎年9月3日をJCデーと称している。

L

LD

リーダーシップ・ディベロップメントの略で指導力開発のこと。

LIA

リーダーシップ・イン・アクションの略で、LDが発展拡大したものである。個人と団体の指導力を開発するプログラムで、実践指導力開発と邦訳されている。1968年のマルデルプラタ世界会議でJCI恒久プログラムに採択された。

LOM

LOCAL ORGANIZATION MEMBERの頭文字をとったもので、国家青年会議所の中に属する各地会員会議所の意。現在、日本青年会議所の中には691LOM(各地会員会議所)がある(2021年1月)。

M

MD

マネージメント・ディベロップメントの略で経営開発のこと。

N

NOM

NATIONAL ORGANIZATION MEMBERの頭文字をとったもので、国家青年会議所の意。例えば、日本青年会議所は、国際青年会議所の中のINOM(国際青年会議所)である。

S

SDGs — 506

持続可能な開発目標(SDGs)とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標(MDGs)の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標のこと。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル(普遍的)なものであり、日本としても積極的に取り組んでおり、公益社団法人日本青年会議所は、日本で最もSDGsに取り組む団体を目指している。

T

TOYP — 347,348

1938年に米国青年会議所によって始まったTOYM(Ten Outstanding Young Men=10人の傑出した(アメリカの)若者たち)が起源。国際青年会議所(JCI)では1983年からTOYP(Ten Outstanding Young Persons=10人の傑出した若者たち)が主要事業として始まり、現在ではTOYP(The Outstanding Young Persons=傑出した若者たち)として継承されている。公益社団法人日本青年会議所では1987年から「TOYP大賞」として事業を開始し、2001年から名称を「人間力大賞(青年版国民栄誉賞)」と変更していたが、2019年に改めて「JCI JAPAN TOYP」へ名称を変え、継続して行ってきた。同賞は、青年版国民栄誉賞としての位置づけを残しつつ、環境、医療、経済、政治、科学技術、文化・芸術、スポーツなどのあらゆる分野において、社会に持続的なインパクトを与えることのできる可能性を秘めた「傑出した若者(=地域に好循環を起こす若者)」を発掘し、さらなる活躍を期待して国民全体で応援する機運を広げる。そして、私たちJCメンバーとともに未来を担う20歳から40歳までの地域に好循環を起こす若者たちを、JCI TOYPの日本代表として世界に向けて発信することで、日本のみならず世界をより良く変えていける人財へと導き、ひいては活力ある地域、国づくりへとつなげることを目的とし、受賞者の中から各年度の日本代表候補者としてJCI TOYPに申請をしている。

W

We Believe

JCI日本は、対外的・対内的な広報活動の強化と、拡充を図るために、月刊誌「We Believe」(毎月1回15日発行、A4判)を全メンバーに配布している。

あとがき

公益社団法人日本青年会議所創立70周年の記念すべき年に、名誉ある職務を仰せつかったことに改めて深く感謝を申し上げます。

日本青年会議所は昨11月、19年ぶりにJC宣言文の改訂を行い、今後ますます社会課題の解決のために運動する団体として活動し、持続可能な地域を創り出す団体を目指さなければなりません。その決意の証として記念誌『明日への黎明』を皆様にお届けできることを、心より嬉しく思っております。

70年前の1951年、日本青年会議所は第二次世界大戦からの復興を目指して、のちに日本のオピニオンリーダーとなられる先輩諸賢の皆様が夢を抱いて立ち上げられました。その英知と勇気と情熱は脈々と受け継がれ、そしていま、私たち現役メンバーの志となり、OBの方々とともに大きな輪となって、未来の日本を支えるために広がり続けています。

昨年からの新型コロナウイルス感染症の発生により、私たちの社会は一変を遂げました。しかし、私たちはできない理由を探すのではなく、どうしたらできるのかを考え、行動に移してまいりました。日本の青年会議所の力を再確認でき、また、記念すべき70周年を迎えるにあたり組織の強固さを社会に示すことができました。これからもJAYCEEの持つ可能性は脈々と受け継がれ、注がれる期待は、より一層高まっていくと確信しております。

71年目となる2022年からの公益社団法人日本青年会議所の新たなスタートに向けて、本記念誌は記録にとどまるのではなく、世界平和のため、日本の輝かしい未来のため、明るい豊かな社会の実現のために、いつの時代にも役立つよう編集しております。迷い、悩んだとき、一步を踏み出せなくなったときに、先輩諸賢の輝かしい軌跡を読み返し、当時に想いを馳せていただければ幸いです。希望に満ちた明日への夜明け—黎明—は先達の築いた道の先にあるのです。

最後に、本記念誌の制作にあたり、激務の中ご尽力してくださった全ての皆様とJC運動確立会議メンバーにこの場をお借りして感謝の意を表します。

公益社団法人日本青年会議所
2021年度 JC運動確立会議

議長 林泰三

公益社団法人 日本青年会議所

JC運動確立会議

議長 林泰三(JCI金沢)
副議長 四宮圭(JCI大阪)
角田尚大(JCI京都)
鈴木求(JCI宇都宮)
齋藤伸弥(JCI名古屋)
総括幹事 寺純輝(JCI金沢)
運営幹事 向坂里美(JCI神戸)
会計幹事 分藤大樹(JCI横浜)
小幹事 島田礼(JCI大阪)
松村雄哉(JCI京都)
飯塚正好(JCI宇都宮)
伊藤貴哉(JCI名古屋)

委員(総務幹事) 中田大介(JCI金沢) 石橋智晴(JCI金沢)

委員 月江正太郎(JCI黒磯那須) 長田政哉(JCIとどろき) 山中喬介(JCI京都)
青柳正寛(JCI宇都宮) 木谷沙耶香(JCI七尾) 石川弘毅(JCI大阪)
阿部央康(JCI宇都宮) 岩上陽介(JCI金沢) 石川雅也(JCI大阪)
海老原輝(JCI宇都宮) 河崎智洋(JCI金沢) 川崎雄也(JCI大阪)
岡本源二郎(JCI宇都宮) 柴田翔太(JCI金沢) 羽原功峻(JCI大阪)
町田全功(JCI宇都宮) 田中瑞規(JCI金沢) 一瀬直(JCI神戸)
渡邊泰行(JCI宇都宮) 鶴山秀二(JCI金沢) 河村卓(JCI神戸)
湯澤真人(JCI鹿沼) 米田早織(JCI金沢) 中島圭一(JCI神戸)
田邊和英(JCI福生) 蒲生佳大(JCI名古屋) 長谷川皓一(JCI神戸)
田中一人(JCI八王子) 河本和寛(JCI名古屋) 平栗有紀(JCI神戸)
山下和哉(JCI八王子) 横山和宏(JCI名古屋) 佐渡哲洋(JCI東広島)
漁野隆太(JCI八王子) 泉慎平(JCI京都) 竹下元気(JCI東広島)
新井望(JCI横浜) 一ノ宮健輔(JCI京都) 牧野圭亮(JCI東広島)
勝亦周平(JCI横浜) 小川雄次(JCI京都)
中川めぐみ(JCI横浜) 毛利秀宣(JCI京都)

公益社団法人 日本青年会議所

明日への黎明 創立70周年記念誌

発行 2021年12月16日
発行所 公益社団法人 日本青年会議所
東京都千代田区平河町2丁目14番地3号
〒102-0093 電話番号 03 (3234) 5601
編集協力 株式会社 淡交社
デザイン・DTP製作 株式会社明昌堂
印刷・製本 シナノ書籍印刷株式会社